昭和九年七月一日印刷
昭和九年七月五日發行

（普及版古事類苑 全六十冊）

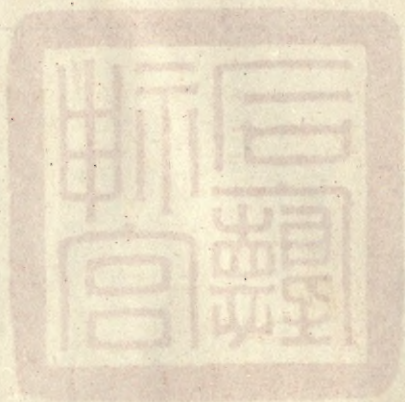
發行者 後藤亮一

東京市芝區金杉新濱町十二番地
發行者 川俣馨一

印刷者 和田助一

發行所
東京市小石川區竹早町三十二番地
內外書籍株式會社內
古事類苑刊行會
振替東京三一七〇〇番

發賣所
東京市小石川區竹早町三十二番地
內外書籍株式會社
振替口座東京 八九六〇番
電話小石川(85) 一〇五四番 三二六九番

單式印刷株式會社印刷

（白石製本所 製本）

嘉暦元年丙寅三月廿九日、工藤右衛門尉祐貞爲蝦夷征罰使進發、七月廿六日、祐貞虜季長、〇安藤歸參、

〔武家名目抄職名二十七下〕蝦夷管領又稱二蝦夷代官一

按、鎌倉右大將家、いまだ武家を興されざりしほどは、鎭守府將軍、及秋田城介たるもの、奥羽の邊界を守りて蝦夷鎭撫の職たりしが、右大將兵權をとられし後は、鎭守府の官職を廢せられて、夷狄の叛亂に備ふるつかさとてはなかりけるを、北條義時武家の執權たりし時に、安藤氏を津輕の夷地に居らしめて、奥羽及渡島の蝦夷に備へ、夷人を管領せられしより、其子孫相傳へて蝦夷鎭衛の代官をうけ給はれり、志かるに北條高時執權の時に至りて、奥羽の蝦夷叛亂の事ありしに、鎭衛安藤季長これを制する事能はざるによりて、高時かれが職をとゞめ、季長が一門季久を以て津輕の守護とせり、其處置正しからざるによつて、果には安藤一家の闘爭に及びしかば、鎌倉より征討使を遣して、一たびは平定せし如くなりけれど、いくほどなく北條の門族亡びはてしかば、此職永く絶しなり、

〔保曆間記下〕元亨二年ノ春、奥州ニ安藤五郎三郎、同又太郎ト云者アリ、彼等ガ先祖安藤五郎ト云者、東夷ノ堅メニ、義時ガ代官トシテ津輕ニ置タリケルガ末也、此兩人相論スル事アリ、高資〇長崎數賄賂ヲ兩方ヨリ取リテ兩方ヘ下知ヲナス、彼等ガ方人ノ夷等合戰ヲス、是ニ依テ關東ヨリ打手ヲ度々下ス、多クノ軍勢亡ビケレドモ、年ヲ重テ事行ズ、

〔異本伯耆卷〕奥州津輕ノ住人安東又太郎季長、同郎從季兼ト同又三郎ト云者、所領ノ事ヲ論ズル子細アリ、兩方訴ヘケルニ、高資〇長崎賄賂ニフケリ、理アルヲ非トシテ惡ザマニ下知シケレバ、兩方下知ヲ背、及二合戰一コトアリ、此安東ト云ハ、義時〇北條ガ代ニ、夷島ノ押トシテ安藤ガ二男ヲ津輕ニ置ケル、彼等ガ末葉也、

〔北條九代記下〕元亨二年壬戌、今年出羽蝦夷蜂起、度々及二合戰一、自二去元應二年一蜂起云々、

正中二年乙丑六月六日、依二蝦夷蜂起事一、被レ改二安藤又太郎一、以二五郎三郎一補二代官職一訖、

蝦夷管領

〔吾妻鏡 四十六〕建長八年〇康元元年六月二日辛酉、奥大道夜討强盜蜂起、成往反旅人之煩、仍此間度々有其沙汰、可致警固之旨、今日被仰付于彼路次地頭等、所謂、〇中略

壹岐六郎左衛門尉 同七郎左衛門尉 出羽四郎左衛門尉 陸奥留守兵衛尉〇中略

御教書云 奥大道夜討强盜事、近年爲蜂起之由有其聞、是偏地頭沙汰人等、無沙汰之所致也、早所領内宿々、居置宿直人、可警固、只有如然之輩者、不嫌自他領、不可見隱之由、被召住人等起請文、可被致其沙汰、若尚背下知之旨、令緩怠者、殊可有御沙汰之状、依仰執達如件、

建長八年〇康元元年六月二日

某殿

〔諏訪大明神繪詞〕元亨正中の頃より、嘉暦年中に至るまで、東夷蜂起して奥州騷亂する事ありき、〇中略根本は酋長もなかりしを、武家其濫吹を鎭護せんために、安藤太と云者を蝦夷管領とす、此は上古に安倍氏惡事の高丸と云ける勇士の後胤なり、其子孫に五郎三郎季久、又太郎季長と云は從父兄弟也、嫡庶相論の事ありて、合戰數年に及間、兩人を關東に召て理非を裁決之處、彼等が留守の士卒數千、夷賊を催集之、外濱内末部西濱折曾關城郭を構て相爭ふ、兩の城嶮岨によりて洪河を隔て雌雄互に決しがたし、因玆武將大軍を遣て征伐すといへども、凶徒彌盛にして、討手宇都宮の家人紀淸兩黨の輩、多以命を隕、漸深雪の頃に及びぬ、貞任追討の昔の如く、年序をや累んと、衆人怖畏をいたす所に、〇中略爰に季長が從人忽に城郭を破却して、甲をぬぎ弓の弦をはづして、官軍の陣に降す、三軍萬歲を稱して、則關東に歸りける、

〔地藏靈驗記〕往日鎌倉ニ安藤五郎トテ、武藝ニ名ヲ得タル人アリケリ、公命ニヨリテ夷島ニ發向シ、容易夷敵ヲ亡、其貢ヲソナヘサセケレバ、日本ノ將軍トゾ申ケル、サレバ夷ドモ年毎ニ貢ヲゾ奉リ來、

兩奉行とはなれるなり、留守職といふは、元國の下司にして、一國の公務をすぶるつかさなるを、爰に至りて又武家の命令を施行し、勢威いにしへに越たり、此兩家の子孫世々職をかさねて其事をうけ給はれり、

〔吾妻鏡十〕文治六年(建久元年)十月五日丙戌、於關下邊、陸奥目代解狀到來、〇中略

下　陸奥國諸郡鄕新地頭等所

可早從留守幷在廳下知先例有限國事致其勤事〇中略

以前條々、背此狀致不當之輩者、可改定地頭職也、且御目代不下向之間、隨留守家景幷在廳之下知可致沙汰、但留守家景可同先例於在廳也、國司者、自公家被補任、在廳者國司鏡也、於先例沙汰來之事者、不憚人無偏頗可致沙汰、兼又國可興複之、只在勸農之沙汰所仰付家景也、而不隨國務所々家景自身罷向、見知實否可加下知也、猶不承引之所可注申、但依人成憚、有偏頗不申上濫行之輩者、仰家景可處奇怪之狀如件、以下、

建久元年十月五日

〔吾妻鏡十四〕建久五年六月廿五日甲寅、獄囚數輩、自京都被召下其身、可流遣奥州之由、被仰左近將監家景眼代之、是强盜之類云云、

〔吾妻鏡十五〕建久六年九月廿九日庚戌、故秀衡入道後家、于今存生、殊可加憐愍之由、被仰付葛西兵衛尉清重、伊澤左近將監等云云、兩人者、依爲奥州總奉行也、

〔吾妻鏡四十〕建長二年十一月廿八日己丑、放遊浮浪之士、寄事於雙六、好四一半博奕爲事、就中陸奥、常陸、下總、此三箇國之間、殊此態盛也、隨有風聞之說、今日有驚御沙汰、於自今以後者、圍碁之外、至博奕者、一向可停止之由所被仰出也、陸奥國留守所兵衛尉、常陸國宍戸壹岐前司、下總國千葉介等、可加制禁之由各含仰旨云云、

奥州總奉行

可差遣子息之由被仰下畢、早催具安藝國地頭御家人、并本所一圓主地住人等、可令警固長門國之狀、依仰執達如件、

建治二年八月廿四日　武藏守在判

相摸守在判

武田五郎次郎殿

〔武家名目抄職名二十七上〕按、長門國警固番役は、蒙古襲來の不虞に備へんが爲に、建治の初より、中國なる地頭御家人に課せて勤役せしむる所なり、〇中略此番役北條氏の世を終るまで設置れしにや、又は其前に廢せられしにや、たしかに見る所なしと雖、ながく探題を置て警備せしを思へば、番役は元弘迄停廢のことなかりしなるべし、

〔吾妻鏡九〕文治五年九月廿二日己卯、陸奥國御家人事、葛西三郎清重可奉行、參仕之輩者、屬清重可啓子細之旨、被仰下云云、　廿四日辛巳、平泉郡内撿非違使所事可管領之旨、葛西三郎清重賜御下文、於郡内諸人停止濫行、可糺斷罪科之由云云、凡清重今度勳功、殊拔群之間、匪奉此等重職、剩伊澤磐井、牡鹿等郡已下、拜領數箇所云云、

〔吾妻鏡十〕文治六年〇建久元年三月十五日己巳、左近將監家景號伊澤可爲陸奥國留守職之由被定、住彼國聞民庶之愁訴、可申達之旨所被仰付也、

〔武家名目抄職名二十七下〕奥州總奉行

文治中に、藤原泰衡を誅して、奥州を平定ありし後、其地を割て有功の諸將士を封せられ警備となされし中に、葛西清重には、氣仙、膽澤、磐井、牡鹿、江刺等の諸郡をあたへて、奥州の總奉行となされ、擧國の諸事を沙汰せしめ、又伊澤家景は、もとより陸奥の留守職なりけるを、右大將家〇源賴朝の命によりて、尙其舊職を守るのうへに、清重とともに國内の大小事を奉行せるゆへに、

長門ノ探題遠江守時直、京都ノ合戰難儀ノ由ヲ聞テ、六波羅ニ力ヲ勠セント大船百餘艘ニ取乘テ海上ヲ上ケルガ、阿波ノ鳴渡ニテ、京モ鎌倉モ早皆源氏ノ爲ニ被滅テ、天下悉王化ニ順ヌト聞ヘケレバ、鳴渡ヨリ舟ヲ漕モドシテ、九州ノ探題ト一所ニ成ント心ヅクシヘゾ赴キケル、赤間ガ關ニ著テ、九州ノ樣ヲ伺ヒ聞給ヘバ、筑紫ノ探題英時モ、昨日早少貳大伴ガ爲ニ被亡テ、九國二島、悉公家ノタスケト成ヌト云ケレバ、一旦催促ニ依テ此マデ屬順タル兵共モ、イツシカ頓テ心替シテ、己ガ樣々ニ落行ケル間、時直僅ニ五十餘人ニ成テ、柳浦ノ浪ニ漂泊ス、彼ノ浦ニ帆ヲ下サントスレバ、敵鏃ヲ支テ待懸タリ、○中略且ク命ヲ延ン爲ニ、郎等ヲ一人舟ヨリアゲテ、少貳島津ガ許ヘ降人ニ可成由ヲゾ傳ヘケル、○中略不日ニ飛脚ヲ以テ此由ヲ奏聞アリケレバ、則勅免有テ、懸命ノ地ヲゾ安堵セラレケル、

〔東寺百合古文書 ヨノ一至十二〕長門國警固事、御家人不足之由、信乃判官入道行一令言上之間、所被寄周防安藝也、異賊襲來時者、早三箇國相共可令禦戰之狀、依仰執達如件、

建治元年五月十二日　　武藏守在判
　　　　　　　　　　　相模守在判

武田五郎次郎殿

〔東寺百合古文書 ゐノ四十一至五十一〕長門國警固事、無勢之由被聞食之間、所被寄周防安藝備後也、且四箇國結番警固要害之地、且異賊襲來者、相共可令防戰之狀、依仰執達如件、

建治元年五月廿日　　武藏守在判
　　　　　　　　　　相模守在判

武田五郎次郎殿

〔東寺百合古文書 八〕異國用心事、以山陽南海道勢可被警固長門國也、於地頭補任之地者、來十月中、

後二月〇正慶二年四日、伊豫國ヨリ早馬ヲ立テ、土居二郎〇通增得能彌三郎〇通綱宮方ニ成テ旆ヲアゲ、當國ノ勢ヲ相付テ土佐國ヘ打越處ニ、去月十二日、長門ノ探題上野介時直、兵船三百餘艘ニテ當國ヘ推渡リ、星岡ニシテ合戰ヲ致ス處ニ、長門周防ノ勢一戰ニ打負テ、手負死人其數ヲ不知、剩時直父子行方ヲ不知云々、

〔參考太平記七〕上野介〇北條時直、本文及天正本、或作遠江守、北條家譜作上總介、下倣之、越後守實村子、時政六世孫也、

〔正慶亂雜志〕正慶二年三月十六日、長門ヨリ早馬到來云、閏二月十一日、上野殿〇長門探題北條時直伊豫國ニ御渡之處ニ、船津ニ兵粮米ヲ上置御向アル處ニ、河野土居九郎通益只一騎打出申樣、此ニ御向悅入候、只ノ大將ニテ御座ハ心地アシク存候ハンズルニ、御一門ニテ御座ハ心地能候、又我身モ河野ニテ候ヘバ、敵ニハヨモ嫌給ハジ、今日ハ日モクレ候ヌ、明日可入見參ト申テ引退畢、上野殿御方ニハ明日ハ勢モ可集、今夜可寄トテ、一千五百餘騎ニテ土居九郎ノ城墎ヲ構タル處ニ被寄、其夜上州御方ニハ勢ヲ所々ニ陣ヲ取リテ被居之處、厚東以下少々心ガワリシテ、ウシロヤヲ可射之由聞ヘケル間、豐田ガ再三申ニヨテ、即落サセ給畢、馬鞍以下兵粮米皆悉被捨間、土居九郎取之、爰長門周防御家人百騎計申云、我等ハ重代者也、上州ノ御共シテ落ヌル物ナラバ、浮名ヲ流ベシトテ留テ打死ス

〔忽那文書乾〕一長門周防探題上野前司時直引率兩國軍勢等發向當國、燒拂在々所々、構城墎於星岡山之間押寄、三月十二日申刻件城致散々合戰、時直以下責落軍勢等畢、

右度々軍忠云、被疵條々御存知之上者、爲後證可賜御一見書之由相存候、恐々謹言、

元弘三年三月廿八日　　藤原重清花押、

承候花押

〔太平記十一〕長門探題降參事

〔武家名目抄〕職名二十七上長門探題又稱中國探題

按、長門探題は、もと長門守護といひて、其一國の事のみを預りきゝて、守護代一人を置れたるが、中國の事を總て訴訟撿斷土貢のことより、或は鎭西異賊防禦の備迄も預りきくに及びて、守護代の外に、吏務に長せるものを擧て、代官として其事を攝せしむるに至れるより、守護の名を改めて探題とせられしなり、その事の慥にものに見えたるは、伯耆卷、太平記等はじめなれども、建治中、北條宗頼、此國に下著の後、代官を設け置しは、中國の事をはやく沙汰せし故なるべきが上に、九州探題を永仁中に置れしなどをおもへば、建治後弘安永仁比、此職の名目に改められしなるべし、

〔長門國守護職次第〕十一、佐々木太郎判官貞綱、守護代甥播次公久

十四、天野和泉守政景、貞應元給之、代官小田村左衞門尉、

〔一代要記〕後宇多弘安二年六月十日、鎭西守護修理亮宗頼死去之由、飛脚到來、

〔長門國守護職次第〕十八、越後守殿、兼時、弘安三六五、御代官長井出羽太郎、其後岡田次郎左衞門入道淨蓮、

十九、武藏守殿、師時、御代官駿河三郎殿、弘安四閏七晦日下國、又代官平内左衞門尉、

廿、萬壽殿、武藏守殿御子息、武藏十郎申、御代官嵐野五郎左衞門家盛、後弘安五八廿四著府、

〔帝王編年記〕二十六後宇多九州探題

前上總介實政越後守實時三男、建治元年十一月爲異賊征伐下向鎭西、十七歲、(中略)同(弘安六年)十月遷長門國警固、二十五、

〔長門國守護職次第〕廿一、上總介殿、眞政、弘安七正十七下國、守護代平岡二郎左衞門尉爲時、

廿二、左京權大夫殿、時村、御代官左近大夫將監、永仁六八十一著府、任近江守、又尾張守守護代吉頁殿、又小笠原入道連念下國、

廿三、上野殿、守護代横溝小三郎淸村

〔太平記七〕河野謀叛事

一異國降人等事、各令預置給分、沙汰未斷之間、津泊往來船、不論晝夜、不論大小、毎度加撿見、如然之輩、輙浮海上、不可出國、云海人漁船、云陸地分內、可有其用意矣、

一從他國始來入異國人等事、可加禁止矣、

一要害修固幷番役事、如日來無懈怠可致勤仕候矣、

條々及緩怠之儀者、定後悔候歟、仍執達如件、

弘安四年九月十六日　　左近將監花押

野上太郎殿

〔諸家文書纂五島津〕宮崎警固番役事、自今年正月一日至四月晦日、以代官致勤仕候畢、仍執達如件、

弘安八年五月一日　　忠意在判

滿家院比志島入道殿

〔龍造寺記〕弘安年中ニ蒙古襲來ス、龍造寺秀時、壹岐島瀬戸瀬ニ於テ合戰有功、家臣秀友相共ニ勤博多警固番、

〔歷代鎭西要略三〕永仁二年甲午、探題兼時、令九州諸士代番勉博多警衞、蓋是異賊鎭、全武備故也、

〔集古文書五十譲狀〕大友貞親譲狀肥後家臣志賀太郎助藏

ゆづりわたす、せんくま丸がところ、

ぶんごのくに、なはかりがうのうちに、くしたはんぶむ、大くまのむら付くぼたのむら事、やうしとして、ゆづりあたふるところ也、關東御くうし公事いげ、いこくけいごの事、嫡家大友まご太郎さだむねが、めいにまたがひて、きんしすべきまやう如件、

延慶三年六月五日　　貞親花押

〔長門國守護職次第〕十七、相摸修理亮殿、宗頼、建治二年正月十一日當國下著、御代官太郎殿、頼茂、

文永九年卯月廿三日　　藤原景泰在判

野上太郎殿〇直資

〔北條九代記下〕建治元年乙亥

今年四月十五日、大元使著長門國室津浦、八月、件牒使五人被召下關東、九月七日、於龍口刎首、〇中略其後警固事有沙汰、鎮西撰補守護人器用、被遣海邊國々、止京都大番役、〇中略皆是爲軍旅用意也、

〔志賀文書〕大友殿御下知案

蒙古人用心番、就總名志賀太郎可被勤仕由事、可存其旨候、仍執達如件、

建治元年五月十二日　　前出羽守

〔島津文書〕箱崎役所築地事、滿家院内比志島、西俣、河田、前田、以上四箇名分、伍丈壹尺肆寸被勤仕候了、仍之狀如件、

建治三年正月廿七日　　久時在判

比志島太郎殿

〔歴代鎮西要略三〕弘安三年九月十二日、少貳經資在判牒曰、異國警固、石築地、袖濱内貳丈五尺被築終之條承畢、又曰、異國警固博多番役事、自八月廿七日至九月十二日被勤仕畢、　六年癸未五月十一日、肥前國住人岸川次郎兵衞、平野左近入道、定樂三郎左衞門入道、多久彌太郎、島田三郎、笠寺三郎入道等、依有肥前執行於保四郎種宗之下知不相勤博多警固、石垣築地以下之役、今日於奉行所遂列糺明之、及嚴重沙汰云々、

〔野上文書〕條々

一賊船事、雖令退散、任自由不可有上洛遠行、若有殊急用者、申子細可被隨左右矣、

自評定被勘返沙汰事、不日加談議、後日覆勘申事、
頭人幷開闔仁、退座沙汰事、
可渡他方引付事
諸人代官除退座分限、可令停止事、
對問時、一方人數兩三外、堅可禁制事、
京下幷無足訴人、及經年序沙汰事、
急速可申沙汰事
一淸書仁令書上御下知者頭人封裏直事、下訴人事、條々法事、所被書違事、早守此旨、可被成敗之狀、
依仰執達如件、

正安二年七月五日　陸奧守判
相模守判

鎭西守護人

上總前司殿○九州探題北條實政

〔島津文書〕蒙古人可襲來之由有其聞之間、所下遣御家人等於鎭西也、早速差下器用代官於薩摩國阿多北方、相伴守護人、且令致異國之防禦、且可鎭領內之惡黨者、依仰執達如件、

文永八年九月十三日　相模守在判
左京權大夫在判

阿多北方地頭殿

〔野上文書〕肥前筑前兩國要害堅固事、幷豐後國中惡黨沙汰事、今年三月廿五日守護所御書下如此、子細被載狀候畢、且守狀、且無左右不可令弃件要害役所給候、仍爲其沙汰景泰令下向候也、恐々謹言、

道　下總權守入道　島津上總入道　安藝杢助入道　戶次左近藏人入道

〔新御式目〕評定衆、殊可致忠勤之所、多以不參云々、甚無其謂、於如然輩者、嚴密可致注進之狀、依仰執達如件、

正安二七七

陸奥守（〇北條宣時）判
相摸守（〇北條貞時）判

上總前司殿

〔鎭西引付記（〇舊典類纂十三所引）〕一鎭西引付　永仁七年四月十日　金澤上總前司（〇北條實時）代

一番　越後九郎（〇以下九人略）　二番　武藤筑後前司（〇以下九人略）　三番　大友左近藏人（〇以下九人略）

鎭西引付　阿蘇遠江守隨時代

一番　上野前司（〇以下九人略）　二番　大宰少貳（〇以下九人略）　三番　大友左近將監（〇以下八人略）

鎭西引付　武藏修理亮英時代

一番　上野前司（〇以下九人略）　二番　大宰少貳（〇以下八人略）　三番　大友左近將監（〇以下九人略）

鎭西引付　同代

一番　參河前司（〇以下八人略）　二番　大宰筑後入道（〇以下八人略）　三番　大友近江入道（〇以下八人略）

〔新御式目〕條々　正安二七十九　但馬前司渡之

召文事、止問狀、御使催促共、可爲三ヶ度事、
召文事、停止國雜色、可被仰當國守護、幷近隣地頭御家人等事、
於引付可有御下知取捨事、
評定事書、頭付幷繼目封事、當日可令申沙汰事、
急事外、於引付座不可書御敎書以下事、

鎭西評定衆

忠功之由、先度被仰下畢、而被定鎭西奉行人等之間、若不從守護之命之族出來歟、如然之輩、縱雖致合戰、不可有其賞、可被處不忠也、早存此旨、可令相觸薩摩國中之狀、依仰執達如件、

弘安九年十二月卅日　陸奥守在判

相模守在判

島津三郎左衛門尉殿

〔大友系圖〕親時 或親言、次郎、從五位上、藏人、左近將監、式部大輔、因幡守、法名道徹、鎭西奉行、母築井左衛門尉親茂女也、永仁三乙未年九月廿三日逝去、六十歲、

貞親 太郎、從四位下、新藏人、左近將監、出羽守、聽二內昇殿一、法名玉山正豐、號二萬壽寺一、鎭西奉行、(中略)應長元辛亥年七月十九日逝去、

貞宗 從五位下、左近將監、孫太郎、左衛門尉、近江守、法名直菴具簡、號二顯孝寺一、鎭西奉行、

〔大友系圖〕貞直 童名千熊丸、太郎左衛門尉、法名玄照、元弘三年四月四日逝去、○中略

鎌倉殿御敎書云、越後九郎、豐前前司、○武藤政氏 澀谷河內權守重鄕、伊勢民部大夫、戶次太郎左衛門尉、可爲鎭西評定衆者、依仰執達如件、

永仁七年正月廿七日　相模守貞時判

〔武家名目抄 職名二十七上〕按、鎭西の評定衆引付衆は、永仁中に始めて置れし所なり、前にもいへるごとく、鎭西探題は、もとは全く異賊防禦の長官なりしが、兼時以後には、九州二島の機務、すべて預りきくこととなりしゆへ、御家人等の訴訟裁判の事よりはじめて、土貢以下のつとめ、悉くこゝにて沙汰すべき由に定められしかば、鎭西なる御家人の內、さるべき名家の輩をもて、此兩衆を設け置き、博多の府に在勤せしめて職務をたすけられしなり、其つかさどる所は、六波羅の兩衆に准じて意るべし、

〔鎭西引付記 舊典類聚十三所引〕鎭西評定　泉藤次　嘉曆二年

參河前司　武藏四郎　大宰筑後入道　大友近江入道　澀谷河內權守入道　戶次豐前前司入

鎮西奉行人　內舍人藤原朝臣遠景（號天野藤內、左兵衛尉、）

〔古今著聞集 九武勇〕右大將〇源賴朝高麗國を責し時の追討使に、あま野の式部大夫遠景むかひけり、大將家のきり物にて、次官藤內といはれし藤內は是也、西國九國を知行の間、そのいきほひいかめし、

〔武藤系圖〕資賴（號筑後守、法名覺佛、(中略)建久二年ニ被充賜大宰府守護、岩門少卿種直跡、三千七百町拜領了、嘉祿元年ニ、宇佐八幡宮ノ依遷宮任大宰少貳、始ハ武藤小次郎ト號畢、）

〔尊卑分脈 十藤原〕賴平――資賴（筑前守、少貳、鎮西守護、法名覺佛、）

〔百錬抄 十三後堀河〕安貞元年七月廿一日、於關白直廬有議定事、左大臣已下參入、去年對馬國惡徒等、向高麗國全羅州、奪取人物、侵陵住民事、可報由緒之由牒送、大宰少貳資賴不經上奏、於高麗國使前、捕惡徒九十人斬首、偷送返牒云云、我朝之恥也、牒狀無禮云々、

〔吾妻鏡 二十八〕寬喜四年〇貞永元年八月十三日、筑後前司資賴入道（法名是佛、）辭鎮西奉行事、彼狀去比到着、今日有其沙汰、以石見左衛門尉資能被補其替云云、

〔大友系圖〕能直（童名一法師丸、從五位上、左近將監、左衛門權少尉、鎮非違使、豐前守、(中略)爲鎮西奉行、建久四癸丑年賜豐前豐後兩國、同七丙辰年六月十一日始下著於豐後云々、貞應二癸未年十一月廿七日、於豐大野庄藤北逝去、五十二歲、）

親秀（次郎、或號利根、從五位上、大炊助、法名寂季、號出雲路、鎮西奉行、寶治二戊申年十月廿四日逝去、五十六歲、）――賴泰（初名泰直、童名藥師丸、太郎、從四位下、大炊助、兵庫頭、式部大輔、丹後守、出羽守、法名道忍、號常樂寺、聽內昇殿、鎮西奉行、正安二庚子年九月十七日逝去、七十九、）

〔吾妻鏡 三十五〕寬元二年二月十六日丁亥、今日有評定、條々被定其法、〇中略

一西國守護奉行事

於鎮西者、任大將家例、可致沙汰、必不可依式目、其外西國者、任被定置旨、可致沙汰之由可被仰遣六波羅、

〔島津文書〕異賊防禦事、鎮西地頭御家人、幷本所一圓地輩、從守護之催、且令加警固用意、且可抽防戰

鎮西奉行

〔帝王編年記二十七後伏見〕九州探題

前上總介實政（正安三年九月日出家）　上總介政顯（實政男、正安三年十一月二日、鎮西奉行、三十三、）

〔北條系圖〕政顯（上總介、住鎮西探題、法名顯道、）

〔歷代鎮西要略三〕乾元二年癸卯、改元嘉元、（七月改元、）探題遠江守隨時、糺異賊防禁之神祇、以有奉幣之勅使、横岳大應奉詔赴京師、

〔北條系圖〕政顯――種時（左近將監、修理亮、英時トモ云、九州下向、元弘三年亡、）

〔太平記十一〕筑紫合戰事

京都鎌倉ハ、已ニ高氏、義貞ノ武功ニ依テ靜謐シヌ、今ハ筑紫ヘ討手ヲ被下テ、九國ノ探題英時ヲ可責トテ、二條大納言師基卿ヲ太宰帥ニ被成テ、既ニ下シ奉ラントセラレケル處ニ、（○下略）

〔吾妻鏡六〕文治二年十二月十日癸未、今日藤原遠景爲鎮西九國奉行人、又給所々地頭職等云云、

〔武家名目抄職名四十七〕按、鎮西奉行は、九國の成敗を司どる奉行にして、鎮西守護とも稱せり、此職鎌倉殿の頃命せられしより、少貳大友の兩氏代々此事をつかさどれり、（或は他家にも命ぜられて、少貳大友と共にあづかり聞しことも見ゆれど、それは臨時の所職にて、定りたる事にはあらず、）

〔沙汰未練書〕一鎮西九國成敗事　管領頭人奉行、如六波羅在之、

〔吾妻鏡七〕文治三年九月廿二日庚申、所衆信房（號宇都宮所）爲御使下向鎮西、是天野藤内遠景相共、可追討貴海島之旨依含嚴命也、件島者、古來無飛船帆之者、（○中略）今度同意豫州（○源義經）之輩、隱居歟之由依有御疑貽、有此儀、又去年河邊平太通綱、到件島之由聞食之間、殊所思召企給也云云、遠景元來在鎮西云云、十一月五日壬寅、鎮西守護人天野藤内遠景申云、浴恩澤當所住人等事、任御下文旨、去八月十八日加施行畢云云、

〔吾妻鏡十一〕建久二年正月十五日甲子、被行政所吉書始、（○中略）

上總前司殿〇實政

〔新御式目〕一西國堺相論之事

任弘安八年御教書、可致其沙汰、且案所被寫下也、

一讓所領妻女事　任式目、可有沙汰事

一七十以後讓事　不可有其難矣

一肥後國臼間野道山次郎惟房、與野依越前房總信相論賄賂事、　任式目、可令成敗矣、

一肥前國五島內盛島前住食圣謀書事　有所職迄者可被改替、無所職者、可被罪科之由、可申入公家之旨相觸六波羅矣、

一構不實致濫訴輩事

右詐僞罪名不輕之處、近年致濫惡之輩、動企謀計、爲世人不可不誡、然則訴訟之趣、甚姧曲者可被沒收所領所帶者、可處流刑、至郎從以下者、可召禁其身、但隨事之體可有輕重歟、〇中略

正安二七七　陸奥守御判
相摸守御判

上總前司殿

〔新御式目〕朦使來者、著時在所、幷問答法事、

任先例、可令斟酌矣、異賊防禁條々、以大藏五郎入道惠廣、依田五郎左衞門尉行盛、所仰遣也者、依仰執達如件、

正安二年七月十日　陸奥守判
相摸守判

上總前司殿

島津下野三郞左衞門尉殿

〔太平記　一〕後醍醐天皇御治世事附武家繁昌事
永仁元年ヨリ鎭西ニ一人探題ヲ下シ、九州ノ成敗ヲ司シメ、異賊襲來守ヲ堅ス、

〔帝王編年記　伏見二十七〕九州探題
越後守兼時（永仁元年三月七日下向、同三年四月參關東、）

〔歷代鎭西要略　三〕永仁元年癸巳、北條越後守兼時、任鎭西探題、下筑前姪濱、（或曰博多、又島飼、）是探題之始也、

〔北條系圖〕宗頴━━兼時（越後守、六波羅南方、鎭西ニ行、永仁三年九月八日卒、卅二歲、）

〔帝王編年記　伏見二十七〕九州探題
兵庫頭時家（尾張守公時男、永仁元年七月廿四日下向、同三年四月參關東、）

〔北條系圖〕定宗（修理亮、永仁三年八月十九日、於鎭西死、）

〔帝王編年記　伏見二十七〕九州探題
前上總介實政（永仁四年、亦遷鎭西、四十八、御家人等沙汰、止注進、可成敗之由被仰畢、）

〔歷代鎭西要略　三〕正安元年七月、將軍家書令曰、探題上總介實政、勉異賊防禁事、幷可沙汰西國堺論等之事云々、

〔新御式目〕一西國境相論事
以弘安八年六月十一日被仰六波羅條々內、於領家一人之所有地頭相論事者、任舊儀可令沙汰、次關東御一門御領、與京都御領堺事、可爲聖斷條不可違式目之文云々條々法事所被書遣也、早守法可被成敗之狀、依仰執達如件、

正安二七五

陸奥守（〇北條貞時）
相模守（〇北條宣時）

テ庄家ニシスヘシト云々ニ、四十八箇所篝、幷ニ在京人ヲ催サルヽ由ヲ被披露、是ハ謀叛ノ輩ヲ落サジガ爲謀也、

〔帝王編年記 二十六後宇多〕九州探題

前上總介實政 越後守實時三男、建治元年十一月、爲異賊征伐下向鎭西、十七歲、弘安六年九月八日、任上總介、同十月、運長門國警固、二十五、

〔貞丈雜記 四役名〕一探題と云は、九州ならば九州總様を奉行する人也、訴訟かた〴〵此人に付て申出る也、探題の人も國持也、

○按ズルニ、九州探題ハ永仁元年ニ初メテ置ク處ナルコト、太平記ニ見エタレバ、帝王編年記ニ北條實政ヲ探題トセルハ、恐クハ追書ナルベシ、

〔武家名目抄 職名二十七上〕按、九州探題は、異賊防禦のために、鎭西に下向して警固せしつかさなり、玄かるに後に至りては、二島九國の機務、すべてあづかりきく事となりぬ、其職名の起源を考るに、太平記に、永仁元年より鎭西に一人の探題を下し、九州の成敗を司どらしむとみえ、又帝王編年記に、九州探題越後守兼時、永仁元年下向とあれば、當時より此職を置れしと見えたり、○中略 其後探題北條英時に至り、元弘の亂に、官軍の爲に亡されし後、一色仁木等を以て其任とせしかど、菊池武光と戰ひ敗走せしにより、又尾張左京大夫氏經を九州の探題となして下され、相繼て今川澀川などこの職を司どれり、

〔島津文書〕爲異賊警固所下遣兼時時家於鎭西也、防戰事加評定、一味同心可運籌策、且合戰之進退、宜隨兼時之計、次地頭御家人、幷寺社領本所一圓地輩事、背守護人之催促、不一揆者可注申、殊可有其沙汰之由、可相觸薩摩國中之狀、依仰執達如件、

正應六年 ○永仁元年 三月廿一日

陸奥守 在判○北條宣時

相摸守 在判○北條貞時

〇中略其後警固事有沙汰、鎭西撰補守護人器用、發遣海邊國々、止京都大番役、被差置在京人、〇中略皆是爲軍旅用意也、

〔太田康有記〕建治三年十月廿五日、御寄合、山內殿　相大守〇北條時宗　康有　業連　賴綱

京都本所領家等被申、兵粮料所、幷在京武士拜領、所々可被返付之由事有御沙汰、〇中略之中書

十二月十九日、御寄合、山內殿　相大守　城務　康有　被召御前、奧州〇北條時村被申六波羅政務條々、〇中略

在京人等事　背六波羅下知者、可注申交名也、

廿七日評定、者

早旦被召之間、自夜前爲方違入御賴綱山內屋形、馳參之處、山門事院宣、只今到來、〇中略評定云、合戰事、云根元、云下手、尋究實犯、可召出其身、且於張本者、御使歸參之時、可召具之、於與黨者、預在京人等可分配流也、

〔新御式目〕弘安七五廿

在京人幷四方發遣人々進物、一向可被停止也、其外人々進物可被止過分事、〇中略

在京人幷四方發遣人所領年貢可有御免事、

〔光明寺殘篇〕元弘元年十月□日、先帝〇後醍醐於六波羅南方、評定衆以下、在京人奉警固之、

〔梅松論上〕將軍〇足利尊氏已に君〇後醍醐に賴まれ奉り給て、近日洛中へ攻入給ふよし金剛山へ聞えければ、諸人おどろき騷事斜ならず、かゝるに付ても、關東に忠を存ずる在京人、幷四國西國の輩、彌思ひ切たる事の體誠にあはれにぞおぼえし、

〔太平記一〕賴員回忠事

其比攝津國葛葉ト云處ニ、地下人、代官ヲ背テ合戰ニ及事アリ、彼本所ノ雜掌ヲ六波羅沙汰トシ

〔侍所沙汰篇(追加)〕就天福元年八月十五日六波羅御注進十七箇條被加關東押紙内、(○中略)

一大番衆令逃失召人事

右召人出來之時、令預大番衆又在京輩處、令逃失畢、然而其科怠輕重依難定申候、于今不致沙汰候之間、或強盜、或殺害人、大略十之七八令逃失候也、爲自今以後、尤可被定下候歟、

押紙云、可令修造清水寺橋也、

〔新編追加(神社)〕神司法度條

一諸社神人等付在京武士宿所、或振神寶、或致狼藉事、動有其聞、事實者、尤不便也、於理訴者、雖不濫惡、何無其沙汰、至無道寄沙汰者、永爲懲傍輩、可被召下張本於關東也、存此旨可被申沙汰之狀如件、

延應元年四月十三日

前武藏守(○北條泰時)判

修理權大夫(○北條時房)判

相模守殿(○北條重時)

越後守殿(○北條時盛)

〔吾妻鏡三十五〕仁治四年(○寛元元年)十一月十日壬子、在京御家人等、大番役勤仕免否事有其沙汰、縱令就西國所領下向其所、於時々指出者不可免、唯不退在京奉公、不退祗候六波羅者、尤爲奉公可免其役云云、

〔武家名目抄(職名二十六下)〕石見文書云、六波羅無人數之間、所被差上人々也、早爲其内可令在京者、依仰執達如件、弘長二年三月十七日、庄四郎入道殿、武藏守判、相模守判、

〔北條九代記(下)〕建治元年乙亥

今年四月十五日、大元使著長門國室津浦、　八月、件牒使五人被召下關東、　九月七日、於龍口刎首、

るものなり、此輩は大番役幷鎌倉祗候をゆるされ、ひたすらに在京して、六波羅の指揮に從ひ、非常のことある時役せらるゝを其つとめとせり、(但ゑばく下圖するものは、番役をゆるされざるよしは吾妻鏡にみえたるが如し、弘安に異賊警衞の爲に、西國の地頭御家人を西邊の番役にあてられし頃は、在京人をもて大番役の代りをつとめしめし事あり、)初めは其國々の守護、在京して其輩を指揮せしこともありしが、南六波羅を置れし後は、畿內西邊のことは、悉く六波羅の處置に任せられしかば、在京人も其管する所となれり、この職掌、鎌倉右大將家の時に始りて、北條家滅亡するまで絶ることなかりしなり、

〔吾妻鏡五〕文治元年十二月一日庚戌、前中將時實去夏雖含配流宣下、不向配所、今度同意義經、赴西海之由風聞、仍是彼早尋取之、可召預在京御家人之由、今日被仰遣北條殿、(時政)去月廿五日入洛云々

〔吾妻鏡八〕文治四年十月十七日己卯、叡岳惡僧中有俊章者、年來與豫州(〇源義經)成斷金契約、仍今度牢籠之間、數日令隱容之、又至赴奧州之時者、相率伴黨等送長途、歸洛之後、企謀叛之由有其聞、仍內々窺彼左右、可召進其身之旨、被仰在京御家人等云云、

〔吾妻鏡十六〕建久十年(〇正治元年)三月十二日甲辰、姬君追日憔悴御、依之爲爭加療治、被召針博士丹波時長之處、頻固辭敢不應仰、(〇中略)今日被差上專使、猶以令申障者、可奏達子細於仙洞之旨、被仰在京御家人等云云、

〔吾妻鏡二十一〕建曆三年(〇建保元年)五月九日己酉、爲廣元朝臣奉行、被送御教書於在京御家人之中、(〇中略)是在京武士不可參向於關東者、令靜謐畢、早可守護院御所、又謀叛之輩廻西海之由有其聞、可致用意之由旨、被仰佐々木左衛門尉廣綱云云、

〔吾妻鏡二十二〕建保三年四月十八日丁未、京御家人等洛中守護不法事、殊有其沙汰、就忠否可有賞罰之旨、今日被遣御書云云、親廣奉行之、

〔吾妻鏡二十八〕寬喜四年(〇貞永元年)十二月廿九日、在京御家人者、大番不能勤仕之由被定、

在京人

にまいる、御殿どものかうしひきかなぐりてみだれ入に、かなはじと思ひて、夜のおとゞの御まとねのうへにて、あさはら自害しぬ、

〔太平記 四〕笠置囚人死罪流刑事附藤房卿事
殿法印良忠ヲバ、大炊御門油小路篝、小串五郎兵衛尉秀信召捕テ六波羅へ出シタリシカバ、〇中略五條京極篝、加賀前司ニ預ラレテ禁籠シ、重テ關東ヘゾ被注進ケル、

〔太平記 六〕楠出張天王寺事附隅田高橋并宇都宮事
隅田高橋ヲ兩六波羅ノ軍奉行トシテ、四十八箇所ノ篝、并ニ在京人、畿内近國ノ勢ヲ合セテ天王寺へ被指向、

〔太平記 八〕摩耶合戰事附酒部瀨河合戰事
攝津國摩耶ノ城へ推寄テ、赤松ヲ可退治トテ、佐々木判官時信、常陸前司時知ニ、四十八箇所ノ篝火、在京人、并三井寺法師三百餘人ヲ相副テ、以上五千餘騎ヲ摩耶ノ城へゾ被向ケル、

禁裏仙洞御修法事附山崎合戰事
兩六波羅聞之、赤松一人ニ洛中ヲ被悩テ、今士卒ヲ苦ル事コソ安カラネ、〇中略所詮於今度ハ、官軍進テ敵陣ニ押寄セ、八幡山崎ノ兩陣ヲ責落シ、賊徒ヲ河ニ追ハメ、其首ヲ取テ六條河原ニ可曝ト被下知ケレバ、四十八箇所ノ篝并在京人、其勢五千餘騎、五條河原ニ勢汰シテ、三月十五日ノ卯剋ニ山崎へトゾ向ヒケル、

〔沙汰未練書〕在京人トハ、洛中警固武士也、

〔武家名目抄 職名二十六下〕按、在京人は、もとより職掌の名にはあらず畿内關西、すべて都に近き國々なる地頭御家人等の内、京師に在住して、警備の役に從ふものをよべる稱呼なり、さて篝屋武士大番衆など、大かた同じ品秩なれど、各其差別ありて、をのづから一門の黨をなさ

御家人等云云、以此趣可被仰遣六波羅云云、　二年九月十一日丙申、洛中警衛事及嚴密沙汰、可懸篝於辻々、續松料物用途、毎年一所別千疋被付之、於被用途辨償者、可停止關東公事、并守護入部之由云云、

〔葉黃記〕寬元四年十月十三日戊戌、自關東時賴使安藤左衛門光成上洛、關東申次可爲相國之由是定云々、可被行德政之由又申入院云々、依故泰時朝臣之計、此八九年、洛中要害所々、有守護武士終夜擧篝火、萬人高枕了、而皆停止云々、不知是非、

〔太田康有記〕建治三年十二月廿五日、評定、〇中略

一番役幷篝屋事　奥州、〇北條時村　越後左近大夫將監、〇北條時國　兩人差代官可令奉行、

〔管見記〕弘安六年七月一日癸丑、昨日東使御問答次第關東令申之趣、可注付曆記之由、自家君注賜、仍續左、〇中略

使者申詞

一前座主最源治山之間、山門衆徒等奉振上神輿於中堂及大訴候之處、〇中略罪科難遁候、〇中略

一神輿入洛之時、不及防禦之沙汰剩及狼藉之條、併武家緩怠之故候歟、京都之守護、頗以無其詮候、然者云六波羅云門々幷篝屋守護之武士、不可遁其科候、〇下略

〔增鏡十一今日の日蔭〕三年〇正應三月四日五日のころ、〇中略右衛門の陣よりおそろしげなるもの、ふ三四人、馬にのりながら九重の中へはせ入て、〇中略御門はいづくに御よるぞとゝふ、〇中略このおとこをば、あさはらのなにがしとかいひけり、からくして夜のおとゞへたづねまいりたれども、大かた人もなし、中宮の御かたのさふらひの長かげまさといふもの、名のりまはりて、いみじくたゝかひをきければ、きずかうふりなどしてひしめく、かく程に、二條京極のかゞりやみこの守とかや、五十餘騎にて馳參て時をつくるに、あはすることゑわづかにきこえければ、心やすくて內

然しに（〇同じ、）然に時頼執權の時にいたり、寛元四年、一たびこの事を停止せしが、とかく靜謐なりがたかりしにや再びこれを復せり、京畿の武士、各篝屋一所を預り、其門族家人を率ひて守護を勤め、非常の事あれば直に事に從へり、

〔沙汰未練書〕篝屋トハ、在京人役所也、

〔山城名勝志〕（五洛陽）洛中守護篝屋

古文書云、爲京中守護可被懸篝於辻々料松事、以美濃國日野村、伊豫國周敷北條地頭得分內、辻一所松用途錢拾貫文、寄合多賀江兵衞尉、隨分限毎年可致沙汰也、不可煩百姓也、且關東御公事、幷守護人使入部者、一向可被止之狀、依仰執達如件、

嘉禎四年（〇曆仁元年）六月廿日

左京權大夫（〇北條泰時）

修理權大夫（〇北條時房）

たかへの二郎入道殿

〔島津家本吾妻鏡〕仁治元年十一月廿三日壬子、爲淸左衞門尉奉行、洛中未作篝屋等事有議定、被省充其用途於御家人等、而本新補地頭不被用御下知者、可被召所領之旨、先日雖被載式目、被召所領者、就之所々訴訟無盡期歟、仍可被召篝屋用途也、假令五十町可召錢五十貫文之由被定、但地頭得分也、不可成土民煩云云、　廿八日丁巳、京都大番勤否事被經沙汰、是有遲參不法輩之由依有其聞也、假令一箇月令遲參者、被召過怠用途千疋、可被充未作篝屋料云云、　卅九日戊午、洛中群盜蜂起之由依有風聞說、篝屋守護者、幷在地人等、有懈緩御疑間、今日於前武州（〇北條泰時）御亭評定、右馬權頭、（〇北條政村）攝津前司、（〇中原師員）佐渡前司、（〇藤原基綱）秋田城介、（〇義景）出羽前司、（〇行義）大宰少貳、（〇爲佐）加賀民部大夫（〇康持）等參入、各意見雖區分、所詮每篝辻置大鼓、於事出來之時隨發其聲、每在家令用意續松、不經時剋可指出松明之由、保官人可申沙汰、於不相從下知之在家者、可被處罪科、於大鼓者、可被充京畿

篝屋守護

十九番　天野和泉前司跡　廿番　信濃民部大夫入道　廿一番　宇都宮下野前司
廿二番　甲斐前司

〔薩藩舊記前集四〕國分氏文書
京都大番事、催具薩摩國御家人等、自明年七月一日到同十二月晦日、可令勤仕之狀、依仰執達如件、
弘長二年七月十日　武藏守御判〇北條長時
相模守御判〇北條政村
島津大隅前司入道殿

〔和田文書〕和泉國御家人和田修理亮入道性蓮大番役事、於院御所万里小路面棟門、自七月一日至十月一日、鹿子明盛盛家相共、以代官頴言被勤仕之、仍執達如件、
弘安八年十月七日　兵庫助花押
左衛門尉花押

京都大番事、自正月一日至于六月晦日、內裏棟門役所、爲和泉國御家人役、被勤仕之狀如件、
正安三年七月二日　良意花押
和田修理亮殿〇道清

〔吾妻鏡三十二〕嘉禎四年〇曆仁元年六月十九日壬戌、爲洛中警衞、出辻々可燃篝之由被定、仍被充催役於御家人等云云、

〔武家名目抄職名二十六下〕按、北條泰時執權たりし時、京洛なる惡徒等の橫行を鎭めんが爲に、曆仁元年、始めて京中の街衢に四十八ヶ所の番屋を構へ、京畿の武士、京都警衞の役に從ふ輩に配當して非常を守らしむ、これを篝屋守護人とも篝屋武士ともよべり、さるは夜中をいましむる爲なれば、終夜篝を燃て警衞をつとむるが故にこの名ありしなり、古衞士の禁裏の警固を役せし時、篝を

〔承久軍物語〕二〕御一もんをはじめとして、その名きこふるさふらひたちを二位どの〇源頼朝妻北條政子の御まへにめして、〇中略いかに侍どもたしかにきけ、につほんこくのさふらひは、むかしは三とせの大ばんとて、ていとをしゆごする事、一どの大じき思ひ、いへのこらうどうまではれらかに出たちてのぼるといへども、三とせのざいきやうにちからつき、くに丶くだる時はかちはだしにてかへりしを、故う大しやう殿〇源頼朝これをあはれませ給ひ、三とせを六月につゞめ、ぶんにしたがひ、人のたつせるやうにしはいし給へば、よろこぶ事かぎりなし、〇下略

〔北條九代記〕上〕文暦元年甲午
京都大番御教書云、爲京都大番人、自明年以六箇月定一巡、被結十二番畢、早爲一番、自明年正月至六月、可被在京状、依仰執達如件、

文暦元年正月日　　右京權大夫
　　　　　　　　　修理權大夫

某殿

〔吾妻鏡〕三十八〕寛元五年〇寶治元年十二月廿九日丁未、京都大番勤仕事、結番之、各面々限三箇月、可令致在洛警巡之旨被定下之云云、

一番　小山大夫判官　　二番　遠山前大藏少輔　　三番　島津大隅前司
四番　葛西伯耆前司　　五番　中條藤次左衛門尉　　六番　隱岐出羽前司
七番　上野大藏權少輔　　八番　千葉介　　九番　宍戸壹岐前司
十番　足立右衛門尉跡　　十一番　後藤佐渡前司　　十二番　伊東大和前司
十三番　佐々木隱岐前司　　十四番　三浦介　　十五番　名越尾張前司
十六番　秋田城介　　十七番　大友豐前前司跡　　十八番　足立左馬頭入道

此條存外之申狀也、其故者、關東六波羅殿御下知狀者、可守護新院御所殿上口之由、被仰下歟、其外可宛段別課役子細所不見也、且平均御下知狀云、西國京都大番役事、新地頭等宛段別課役之條不可然、於自今以後者、如前々、夫役雜事之外、一向可被停止云々、而就大番勤仕、宛催段別雜事之條傍例也云々、傍例者何傍例哉、尤以不審、若狹國中大番勤仕之例、人夫召仕之外、一向無其煩之條、委細令申先段畢、仍不及重申、所詮早任當國之例、人夫役之外於別煩者、可令停止之旨欲被仰下矣、以前兩條、就地頭陳狀、重言上如件、

文永六年八月二日

〔北條九代記　下〕建治元年乙亥、今年四月十五日、大元使著長門國室津浦、　九月七日、於龍口刎首、〇中略其後警固事有沙汰、鎭西撰補守護人器用、發遣海邊國々、止京都大番役、被差置在京人、公家武家減省公事、行儉約休民庶、皆是爲軍旅用意也、

〔六波羅御下知〕如二月十三日、不記年號越後禪門狀者、丹波國波波伯部保下司盛經折紙如此、於官兵幷大番者、任先例可令勤仕云々　如寬喜四年二月十九日守護代眞眞部左衞門尉施行者、官兵幷大番役者、任先例勤仕之由御敎書十五日所下給也云々、

〔沙石集　二〕藥師觀音ノ依利益命ヲ全クスル事

世ニ有侘タル少キ女房有ケリ、清水ヘ常ニ詣ケルガ、〇中略離テ下向スル程ニ、五條ノ橋ニ大番衆トヲボシキ武士、勢々トシテ行逢ヌ、何ナル人ゾ、只一人御座スト云ヘバ、物詣ノ下向ノ由答、イザサセ給ヘ、井中ヘ具シマイラセント、ナヲザリニイヽ掛ケレバ、便リナキ身ニテ侍レバ、御哀アルベクハイヅクヘモ參ント云ヲ誠ニヤトトヘバ、マメヤカニト云ケリ、〇中略サテハトテ、ヤガテ引馬ニ打乘テ下ヌ、〇中略奧州ノナニトカ、ヤト云所ニ有ケリ、サテ十年計過テ、次ノ大番ニ此ノ女房ヲ相具シテ上ケリ、

〔東寺百合古文書六十七〕東寺御領若狹國太良庄雜掌重言上

地頭若狹四郎入道、號大番役用途、切宛段別錢二百五十文、致苛法責問、先例不勤仕由令訴申處、彼代官忠類、構百曲陳狀、無謂子細事、

副進

一通　段別宛錢注文案

一通　關東平均御下知狀案（四國京都大番段別課役停止事、建長六年十月五箇條御下知內、）

謹返上地頭請文（副陳狀）

彼代官忠類狀云、當雖不勤先例、始自關東六波羅殿可令勤仕彼役之由於被仰下者、云雜掌、云地頭、何可令違背哉云々、此條先例不勤仕大番役之條、已以炳焉也、其上以新儀張行之條、太無道也、彼役不勤仕之例委可申之、當地頭親父若狹次郞兵衞尉忠季、建久六年補任當國守護、正治二年、遠敷郡三方郡被補二郡總地頭、其時大番勤仕之、雖然人夫召仕之外無別煩、建仁三年、出羽前司家長、遠敷郡內給九箇所地頭、（太良庄、此內也、）十七箇年雖令知行無其煩、承久二年、次郞兵衞入道（忠季）時、守護地頭共以返給之、其時當地頭舍兄兵衞尉忠時大番勤仕之、是又人夫召仕之外無煩、三代之例如此、其上關東度々御下知狀云、承久兵亂以前本地頭者、有所務之先例、更不可有新儀、兵亂以後新地頭者、被定遵率法畢、何背彼狀哉云々、而當地頭（定蓮）請繼親父之跡、經往年畢、而違背彼例、而恣付數多使、煩百姓等安堵御計也、而違背彼御下知狀、任雅意切宛段別二百五十文、致苛法責之條、爭可無其咎哉、併仰上裁者也、

同狀云、關東六波羅殿於御下知者、爲雜掌之身何輙可被停止哉、自由之企、諸事仰御遺迹者也、凡者就大番勤仕、宛催段別雜事之條傍例也、所詮早被止雜掌非分之濫訴、於大番雜事等者、任傍例可致沙汰之由欲蒙御裁許云々、

正元二年三月十五日　源頼長　永長　源有長　嫡子源隆長

〔吾妻鏡四十九〕正元二年〇文應元年二月三日辛丑、依山門蜂起、園城寺定有火災歟、可警固彼寺之由、可相觸大番衆之旨、被仰遣六波羅云云、

〔薩藩舊記前集四〕忠時公御譜中

京都大番勤仕事、御教書案文遣之、早任被仰下之旨、可被參勤候、但寄事於老耄出家、被立代官事、御誡候也、可被存其旨之狀如件、

弘長二年八月十一日　沙彌在判

薩摩平十郎殿

〔集古文書五十〕風早禪尼深妙讓狀大友能直室、豐後國大友家臣志賀太郎助藏、

讓與　豐後國大野庄志賀村内近地名地頭職幷同村内筑紫尼寺事

右於彼名彼寺者、限永代所讓與孫子師房禰季也、更不可有向後之妨、〇中略但於關東御公事幷大番役等者、任名本公田員數寺總領之配分、可致其沙汰、〇中略

弘長三年七月二日　尼深妙花押

藤原泰朝判

〔東寺百合古文書六十七〕若狹次郎兵衛入道跡大番役事、可令參勤役所新院御所殿上口之由、被載關東御注文了、而寄事於走湯造營、難被口子細、不及六波羅沙汰歟、所詮任被仰下之旨、不日企上洛、可被勤仕也、仍執達如件、

文永六年二月廿四日　散位在判

陸奥守在判

若狹四郎入道殿

相模守殿〇北條重時

〔吾妻鏡三十五〕寛元二年六月十七日戊戌、新田太郎、爲令勤仕大番在京、是爲上野國役之故也、而稱所勞俄遂出家、但不相觸事由於六波羅、幷番頭城九郎泰盛等之由依有注進狀、今日評定之次、被經沙汰、任被定置之旨、可被召放所領之由被定云云、

〔新編追加雑務〕西國鎮西條

一西國京都大番役事

新補地頭等、被充段別課役之條不可然、長門國大峯庄條々下知、可充彼用途之由被載之上者、縱雖有如然下知、於自今以後者、如先々夫役雑事之外、一向所停止也、以此趣可加下知也、〇中略

寛元三年五月九日　　　　武藏守〇北條經時判

相模守殿〇北條重時

〔吾妻鏡四十〕建長二年十月七日己亥、京都大番、間事有其沙汰、諸御家人等、或稱總領、或背守護人之間、屬其方可令勤仕之由近年頻望申、縡已濫吹之基也、於向後者、若隨守護之催、若屬一門上首可勤之、任雅意事不可有免許之由云云、

〔諸家文書纂九高瀨〕讓渡　平井鄕屋敷名田事

後家分屋敷一所、名田一町、　坪付總日記狀在之　　　　花押

右件田畠者、源頼長相傳所帶也、然而後家分、限永代讓渡所實正也、但正嘉貳年八月日子息等始、後家分之讓狀畢、件讓之時、後家所分者、一期之由雖載之、くひかへして、正元二年三月十五日、彼田畠限永代讓了、於所役者、京都大番役、錢壹貫五百文、畠役色々合錢三百八拾七文、四ヶ年一度、掄注役者如先々、鎌倉大番免除畢、このたやうおそむいて、いらんさまたげいたし候はん、頼長之子息等者、各の讓狀のするところの田畠にあたるべからず、仍爲後日證文後判讓如件、

〔侍所沙汰篇追加〕就天福元年八月十五日、六波羅御注進十七箇條、被加關東押紙内、〇中略

一大番衆令逃失召人事

右召人出來之時、令預大番衆又在京輩處、令逃失畢、然而其科怠輕重依難定申候、于今不致沙汰候之間、或强盗、或殺害人、大略十之七八、令逃失候也、爲自今以後、尤可被定下候歟、

押紙云、可令脩造清水寺橋也、

〔新編追加雜務〕西國鎭西條

一西國御家人中、於所領知行之輩者、隨守護所催可勤仕京都大番之處、致自由對捍、空渉日月之族有其聞、於自今以後者、就守護人注申、爲償其過怠、隨彼分限可令召付清水寺橋修理給之狀、依仰執達如件、

文曆二年〇嘉禎元年正月廿六日　武藏守〇北條泰時判

相模守〇北條時房判

〔御成敗式目追加〕一京都大番事、被定月宛之處、替番衆遲々之間、前衆勤越之條、尤不便也、一月令遲參之輩者、二箇月可勤入也、守此率法、可令精好給之狀、依仰執達如件、

文曆二年〇嘉禎元年七月廿三日　武藏守〇北條泰時判

相模守〇北條時房判

駿河守殿〇北條重時

掃部助殿〇北條時盛

一京都大番衆事、道有限之役、寄事於左右、懈怠之輩者、假令一箇月令遲參者、爲其過怠可被宛未作奔用途錢十貫文、其以下日數者、以之可被仰宛之狀、依仰執達如件、

仁治三年十一月廿八日　前武藏守〇北條泰時判

もなくて、さもあらずあたらしき事いふ大番かな、南圓堂のより人の、陣口物はきて出仕をばえ
らざりけるか、大番をうけたまはる程のものにて、いかでかはわが氏をば作せさりけるといひ
て、こさゝもせざりければ、主人の武士やそれ〳〵南圓堂の寄人は、物はきてとをるくるしから
ぬ事、それとゞまれとなまりごえにて高聲にをきてければ、はしりたちてとゞめけるもの歸に
けり、

〔吾妻鏡二十七〕安貞三年(○寛喜元年)九月十日、駿河次郎泰村、相具妻室(武州御息女)上洛、是爲大番勤仕也、

〔吾妻鏡二十八〕寛喜四年(○貞永元年)四月四日、京都大番事、有其沙汰、國中地頭中、雖令居住他國、於先々勤來之輩者、催加代官可令勤之由被仰守護人等云云、　十二月廿九日、在京御家人者、大番不能勤仕之由被定、又於禁中節會之時、大番衆下人等、爲見物參入之間、嗷々狼藉之由依有其聞、可停止之、

〔御成敗式目〕一諸國守護人奉行事

右右大將家(○源賴朝)御時、所被定置者、大番催促、謀叛殺害人(付夜討、強盜、山賊、海賊、)等事也、(○下略)

〔新編追加(雜務)〕西國鎮西條

一西國御家人所領事

右西國御家人者、自右大將家御時、守護人等注交名、雖令催勤大番以下課役、給關東御下文、令領知所職之輩者不幾、依爲重代之所帶、隨便宜、或給本家領家之下知、或以寺社總官之下文、令相傳歟、而今就式目多違亂出來云云、(○中略)抑雖假名於下司職、非御家人列者、守護人更不可令催促大番役、若充催其役者、可爲本所之欝訴之故也、以此旨可致沙汰之狀、依仰執達如件、

天福元年五月一日　　武藏守(○北條泰時)判
　　　　　　　　　　相模守(○北條時房)判

駿河守殿(○北條重時)

右各守注文之旨、明春三月中令參上、令見知役所給也、且於鎌倉殿仰旨如此、早可被存其旨之狀如件、

建久八年十二月廿四日　左衛門尉在判

薩摩國地頭御家人御中

〔吾妻鏡十六〕正治元年九月十七日丙午、京都大番役、依有懈緩之聞、可加催促之旨被仰諸國守護人等云云、廣元朝臣幷景時等奉行之、　十二月二十九日丁亥、以小山左衛門尉朝政補播磨國守護職畢、住國家人等、相從朝政勤仕內裏大番、總可致忠節也、朝政可沙汰事許者、謀叛殺害人事也、相交國務不可成敗人民訴訟、凡觸事不可煩國中住人之旨被仰含云云、

〔吾妻鏡十七〕正治三年（○建仁元年）二月三日甲申、未剋掃部入道（○中略）佐々木左衛門尉定綱、小山左衛門尉朝政、（爲大番勤仕在京）朝覲行幸仙洞、（○中略）（二條殿）爰越後國住人城四郎平長茂、（城四郎助國四男）引率軍兵圍朝政三條東洞院宿盧、朝政供奉行幸留守程也、所殘留之郎從等禦戰之間、長茂引退、

〔古今著聞集十六興言利口〕順德院御くらゐの時、あるところの格勤者よりあひて雜談しけるに、內裏の番かはり、此たびは、以の外にきびしくてなどいふを、ひとりが云やう、いかにきびしくとも、我は高あしだはきてとをりてん、すこしもさゝめらるまじといひければ、のこりのともがら、なりかゝりておこづきけり、さらばあらがひ給へかし、たゞ今に見えんずる事をといふを、興有事なりとて、みなのともがら一はうにて、此ぬし一人にかゝりて、あらがひかためてけり、わきまへのあるべきやう、引出物の程らひなどさだめて、さらばをの〳〵陣ぐちへいざなへとて引ぐしていぬ、人々目をすましたるに、此主ことにたかきあしだはきて、二條あぶらのこうじを南へとをるに、あんのごとく大ばんのもの、あの男のあしだはなどいふを、すこしもきゝ入ぬやうにて、にらみまはしてなを行を、大番の者はしり出てとらへんとする時、此ぬし、きゑよくかはりたる事

是爲被鎭洛中群盜等也、

前右大將家政所下　美濃國家人等可早從相摸守惟義催促事

右當國内庄之地頭中、於存家人儀輩者、從惟義之催、可致勤節也、就中近日洛中强賊之犯有其聞、爲禁遏彼黨類、各企上洛、可勤仕大番役、而其中者不可家人之由、在々早可申子細、但於公領者不可加催、兼又重隆佐渡前司郞從等催召、可令勤其役、於隱居輩者、可注進交名之狀、所仰如件、

建久三年六月廿日（○署名略）

十一月廿五日甲午、早旦熊谷次郞直實與久下權守直光、於御前遂一決、是武藏國熊谷久下境相論事也、○中略直光者、直實姨母夫也、就其好、直實先年爲直光代官、令勤仕京都大番之時、武藏國傍輩等、勤同役在洛、此間各以人々代官、對直實現無禮、直實爲散其鬱憤、屬于新中納言（知盛）、遂多年畢、○下略

（古文書類纂將軍家下文上）後鳥羽天皇建久七年源賴朝下文（鹿兒島和田中太所藏）

前右大將家政所下　和泉國御家人等

可早隨左衞門尉平義連催促、勤仕大内大番事

右御家人等隨彼義連之催促、無懈怠可勤仕大内大番役之狀、所仰如件、以下、

建久七年十一月七日　案主淸原□　知家事中原□

令大藏丞藤原（判）　別當兵庫頭中原朝臣（判）　散位藤原朝臣（判）

（薩藩舊記前集一江田氏藏書）内裏大番之事、被仰下旨可令參勤人、

川邊平二郞　別府五郞　鹿兒島郡司　頴娃平太　伊作平四郞　薩摩太郞　知覽郡司　登山太郞　高城郡司　在國司　手木太郞　江田四郞　英禰郡司　山門郡司　給黎郡司　指宿五郞　南鄕万揚房　小野太郞　市來郡司　滿家郡司　宮里八郞　萩崎三郞　伊集院郡司　和泉太郞

とし、其後三ヶ月を限とせしことは吾妻鏡に見えたり、いづれも本文にひけり、さて又鎌倉の府にも頼經將軍下向の後大番役を設けて、諸國の武士、京都と同じく番役をつとむるごとくなりぬ、これひとへに京師の風をまなびて置れしなるべし、

〔吾妻鏡一〕治承四年六月廿七日戊申、三浦次郎義澄、義明二男千葉六郎大夫胤頼、常胤六男等參向北條、○中略日來依番役所在京也、武衛○源賴朝對面件兩人給、

〔源平盛衰記四十六〕頼朝義經中違事

此昌俊ト云ハ、本大和國住人ナルウヘ奈良法師也、當國ニ針庄トテ、西金堂ノ御油料所アリ、不慮ノ沙汰出來テ、當庄代官小河四郎遠忠ト云者ガ西金堂衆ニ敵シテ、興福寺ノ上綱ニ、侍從律師快尊ヲ相語テ、年貢所當ヲ打止間、堂衆又昌俊ヲ語ヒテ大勢ヲ引率シ、針庄ニ推寄テ遠忠ヲ夜討ニス、○中略大衆憤深シテ就經天奏、昌俊ヲ召ケレドモ敢テ不從勅、依之衆徒之訴訟彌鬱深、兩方ノ理非未聞召開、急企參洛被申道理者、可有聖斷之由被有仰下ケレバ、昌俊即上洛、可召誡之旨仰別當兼忠、昌俊ヲ召捕テ、大番衆土肥次郎實平ニ被預ケリ、

〔平家物語十二〕とさばうきられの事

とさばう一たんのがいをのがれんがために、ゐながら七まいのきしやうをかき、あるひはやいてのみ、あるいはやしろのほうでんにこめなどして、ゆりてかへり、大ばんしゆの者共もよほしあつめて、其夜やがてよせんとす、判官○源義經はいそのせんじといふ白びやうしがむすめ、しづかといふ女をてうあひせられけり、○中略しづか申けるは、大路はみなむしやで侍ふなる、御うちよりもよほしのなからんに、是程まで大番衆の者共がさはぐべき事やさふらふべき、いかさまにも是はひるのきしやうほうしがしはざと覺えさふらふ、○下略

〔吾妻鏡十二〕建久三年六月廿日庚申、美濃國御家人等、可從守護相摸守惟義下知之由被仰下云云、

〔沙汰未練書〕一大番トハ、諸國地頭御家人等内裏警固番役也、

〔御成敗式目諺解〕一〕大番トハ、諸國武士、關東ノ下知ヲ帶テ、番ニヲリテ在洛シテ、帝都ノ警固ヲ申ス事也、此號賴朝ノ御時ヨリ始ル歟、平家追討以後ノ事也、九州ノ侍ハ、大番役ヲ御免也、異國ヨリ襲來ラン時ニ防シメンタメ也、大番ノ事、關東ニモ亦有此事、

〔武家名目抄〕職名二十六下〕按、大番の稱は、何れの世よりとなへそめしにや、由來たしかならす、されど古き世よりいひしと見えて、小右記に、天元中、中宮の大番侍といふを置れし事あり、小右記天元五年三月十一日の記に云、今日以二女御從四位上遵子一立二皇后一云々、(中略)十五日丁未、參二中宮一、大夫同被レ參、被レ定二所々別當預、下部等一、又定二女房侍者、大番侍者一とあり、○中略、これ大番といふ稱のものに見えたる始なり、これは中宮の番衆なれば、禁裏警衞の者にあらざるは勿論なれど、元公家に其稱あるによりて、中宮にも設られしものとみゆれば、猶はやくより大番といふとなへはありしなるべし、○註略、思ふに此番役は、古の軍團のながれなるべし、凡諸國の軍團の兵士は、くさ〴〵の番役ある中に、先京都守護の爲に上番して、一年の間宿直をつとむるをば衞士といふ、次に筑紫の鎭に赴くをば防人といへり、又其國内にありても上番の役あり、すべてこれを番役といふならひなり、其中にも京師の上番は、禁闕守護の爲なれば、ことに大事の番役なる意にて、私には大番役といひけんが、やがて常のとなへとなりて、おほやけにも大番衆とよばゝるゝことゝ成しなるべし、○註略、さて鎌倉殿天下の兵權をとられ、諸國の武士悉く御家人となりて、大番役勤仕のことも武家より指揮せらるゝ事となりしかば、諸國の守護、各國の地頭御家人を催促して、其役に從はしむるが常のならひとはなりぬ、尤所領の多少に准じて勤役の等差あり、其中にさるべき權勢の人を以て頭人とし、番役の輩を統領せしむ、これを番頭と稱せり、もと軍團の上番は一年を限とせしが、いつの頃よりか三年の間上番することになれるを、鎌倉殿六ケ月に改定せられし由は、承久記及北條記にみえたるがご

六波羅ノ北方越後守也、仲時事ノ體ヲ見ルニ、何樣坐ナガラ敵ヲ京都ニテ相待ン事ハ、武略ノ足ザルニ似タリ、洛外ニ馳向テ可防トテ、兩擒斷隅田高橋ニ、在京ノ武士二萬餘騎ヲ相副テ、今在家作道、西ノ朱雀、西八條邊ヘ被差向、

六波羅祗候人

〔吾妻鏡三十五〕仁治四年(○寛元元年)十一月十日壬子、在京御家人等、大番役勤仕免否事有其沙汰、縦令就西國所領下向其所、於時々指出者不可免、唯不退在京奉公、不退祗候六波羅者、尤爲奉公可免其役云云、又大谷中務入道不候六波羅下向所領、早可令勤仕番役之由、今日被仰下云云、

〔吾妻鏡五十一〕弘長三年十月十日丁巳、被行評定、六波羅擒斷等事有其沙汰、令召出彼祗候人佐治入道、(爲使節參向)○下略

〔武家名目抄職名二十六中〕按、六波羅祗候人は、もと定まれる職掌とてはなかりしものと思はるれど、常に六波羅亭に候らひて雜事を辨ずる御家人なれば、折にふれては政事に從ひしこともありしならん、おほかた寄人などのたぐひなり、おもふに兩擒斷の輩は、この祗候人の内などより命せられしものなるべし、

大番

〔平家物語四〕のぶつらかつせんの事

平家の侍共、あつはれがうの者や、これらをこそ一人當千の兵とも云べけれと口々に申ければ、其中に或人の申けるは、あれが高名は、今にはじめぬ事ぞかし、先年所に有し時、大ばん衆の者共のとゞめかねたりしがうとう六人に、只一人おつかゝり、二條ほり川なる所にて四人きりふせ、二人いけ取て、其時なされたりし長兵衞のせう(○信連)ぞかし、

〔平家物語五〕てうてきぞろへの事

はたけ山の庄じ重能、小山田の別當有しげ、うつの宮のさへもんともつな、是らは大番役にて、おりふし在京したりけるが、○下略

〔文保三年記〕文保三年正月十八日、申刻東大寺八幡宮御入洛、依兵庫關違亂也、十九日、寅剋御京著、於衆徒者、自法性寺邊逃去畢、神人等頂戴神輿進發之處、於七條河原、武士（澁屋一黨、被斷率行誅、）最前馳向奉防禦、

〔太平記二〕僧徒六波羅召捕事附爲明詠歌事
二條中將爲明卿ハ、〇中略指タル嫌疑ノ人ニテハ無リシカドモ、叡慮ノ趣ヲ尋問ン爲ニ召捕レテ、齋藤某ニ是ヲ預ラル、〇中略先京都ニテ尋沙汰有テ、白狀有バ關東ヘ注進スベシトテ、撿斷ニ仰テ、已ニ嗷問ノ沙汰ニ及ントス、六波羅北ノ坪ニ炭ヲヲコス事、鑊湯爐壇ノ如ニシテ、其上ニ靑竹ヲ破リテ敷雙ヘ、少シ隙ヲアケヽレバ、猛火炎ヲ吐テ烈々タリ、朝夕雜色左右ニ立雙テ、兩方ノ手ヲ引張テ、其上ヲ步セ奉ントス支度シタル有樣ハ、〇下略

〔太平記三〕笠置軍事附陶山小見山夜討事
九月〇元弘元年一日、六波羅兩撿斷糟谷三郎宗秋、隅田次郎左衞門、五百餘騎ニテ宇治平等院ヘ打出テ、軍勢ノ著到ヲ著ルニ、催促ヲモ不待、諸國ノ軍勢、夜晝引モ不切馳集テ十萬餘騎ニ及ベリ、
主上御沒落笠置事
同〇元弘元年十月八日、兩撿斷高橋刑部左衞門、糟谷三郎宗秋、六波羅ニ參テ、今度被生虜給シ人々ヲ一人ヅヽ大名ニ被預、

〔太平記六〕楠出張天王寺事附隅田高橋幷宇都宮事
兩六波羅ニハ、畿內近國ノ勢、如雲霞馳集テ、楠今ヤ責上ルト待ケレ共、敢テ其義モナケレバ、聞ニモ不似、楠小勢ニテゾ有覽、此方ヨリ押寄テ打散セトテ、隅田高橋ヲ兩六波羅ノ軍奉行トシテ、四十八箇所ノ篝、幷ニ在京人、畿內近國ノ勢ヲ合セテ天王寺ヘ被指向、

〔太平記八〕三月〇元弘三年十二日合戰事

官は、大かた文官に居もの、かぬれば、巡察決罰等をば兩檢斷に委任せしにや、事あるときは必兩檢斷在京の兵士を率ひて其役に從ひ、軍陣に臨みては、軍奉行となりて軍兵の着到を注す、これ皆侍所の職掌なり、〈○中略〉此職も承久巳後に置れしものなるべし、それよりさきには絶て聞ゆることなし、

○按ズルニ、六波羅侍所ノコト史冊ニ所見ナシ、恐ラクハ侍所ノ稱ヲ避ケ檢斷ヲ以テ之ニ充テシナラン、武家名目抄ニ六波羅檢斷ヲ六波羅侍所ノ佐職ナリト云ヘルハ非ナルベシ、

〔吾妻鏡五十一〕弘長三年十月十日丁巳、被行評定、六波羅檢斷等事有其沙汰、令召出彼祗候人佐治入道、〈爲使節上洛〉於當座被仰云、強盜人事、無地頭權門領以下所々自守護所隨相觸可被召出之、不然者可被追放彼所、無其儀者可補地頭之由衆可被申本所

〔太田康有記〕建治三年十二月十九日、御寄合、〈山内殿〉　相大守〈○北條時宗〉　城務　康有　被召御前、奥州〈○北條時村〉被申六波羅政務條々、〈○中略〉

一檢斷事　出羽大夫判官〈○二階堂賴平〉可奉行

〔元徳二年三月日吉社幷叡山行幸記〕正和三年二月廿日、大宮事始、四月廿六日に遷宮なる、延慶以來闕如の祭禮、當年適可被行迚、依有其沙汰、左方の馬上役は點七條室町成佛法師之家、駒形神人と號して、差符の榊を新日吉社に送り捨るあいだ、件の榊をかへしいれんがため、同五月一日、神人宮仕等、彼社に群集し侍る所に、六波羅檢斷向山刑部左衛門尉敎利、富谷掃部左衛門尉秀高、大道をば經ずして、社檀の後より俄に馳來間、宮仕法師等これに驚て、方々にげかくれける剋、狼藉出來して、敎利以下の童疵を蒙りけり、

〔北條九代記下〕正和三年五月一日、於京都新日吉神人、與六波羅北方使向山刑部左衛門尉、致鬪亂云々、

りけるに、相論の事有て、六波羅にて問注すべきに定りにけり、其日に成て出ぬ、此ぬしはまうにおこがましき者成ければ、いか成事かし出んずらんと神主思ひゐたるに、晩頭にこの權守、神主が家のまへをとをりけり、神主よび入て、いかに問注はしなしたるぞ、おぼつかなくて待居たるに、なざよそには過侍ぞといひければ、權守ゐなをりて、過失なげなるけしきにて、なじかは仕損じ候べき、是程に道理顯然の事なれば、一々につまびらかに申て候へば、敵口をとぢて申むねなく候、○下略

〔近江國番場宿蓮華寺過去帳〕元弘三稔癸酉五月九日、於近江國馬場宿米山麓一向堂前合戰、討死自害交名荒々注文事、○中略問注所信濃少輔外記清近、二十七歲

〔吾妻鏡四十四〕建長六年十月十二日辛巳、自公家被仰下六波羅撿斷事有其沙汰、今日被遣御敎書、其狀云、

被差遣武士於所々事

御成敗之後、不用御下知、於致狼藉者不及子細、未斷之時無是非被差遣者、尤申上子細可重仰者、又人倫賣買事、守延應宣下狀、一向可停止之由云云、

〔武家名目抄職名二十六中〕六波羅侍所　六波羅撿斷

按、侍所の職掌は、○中略非違を撿察し、不虞を戒め、罪人を決罰する等の事、すべて其うけ給はる所なり、○中略さて其佐職に撿斷といへるあり、是はむねと撿察巡行をつとめしとみゆ、これいはゆる兩六波羅撿斷なり、彼是を合せ考れば、長官○侍所は一人にて、撿斷をのみ兩所に置れしなるべしこの撿斷をたま〳〵には所司代とも唱へしと見えて、庭訓往來に、撿斷所司代と注せり、これ元より撿斷と所司代との兩職にはあらぬを、かく二稱をかさね記せしは、同條に、右筆とのみ云ても聞ゆべきを、右筆奉行人とかさね注せしにおなじこゝろなり、○註略こゝの長

然我等ガ先祖ヲイヘバ、利仁將軍ノ氏族トシテ、武略累葉ノ家業也、今某ト七代ノ末孫ニ、齋藤伊豫房玄基ト云者也、

〔杉原系圖〕行政 佐渡守、六波羅奉行、

〔杉原系圖〕恒清 玄蕃允、六波羅評定衆奉行、

〔近江國番場宿蓮華寺過去帳〕元弘三癸酉五月九日、於近江國馬場宿米山麓一向堂前合戰、討死自害交名荒々注文事、〇中略 六波羅奉行人 齋藤宮內丞教親 五十七歲

六波羅問注奉行

〔吾妻鏡 三十四〕仁治二年十二月十三日丙寅、六波羅御沙汰之間、問注奉行人、緩怠遲參之由、依有其聞、定時剋令著到之、每月可進關東之旨、被仰相州〇北條重時之許云云、

〔葉黃記〕寬元五年〇寶治元年正月廿六日庚辰、未剋參院、院評定事今日評定式日也、早被始也、予即參御前、〇中略定詞予書了、總四ケ條也、

一高野山領名手庄、與粉河寺領丹生屋村相論堺事、

於武家〇六波羅遂對決、以問注記送關東、而於堺事者、可爲公家御成敗、相論之間猥藉出來了、於此事者、就被仰下可致沙汰之由、時賴申上之、仍有評定、〇下略

〔武家名目抄 職名二十六中〕六波羅問注所　六波羅問注所寄人

按、問注所執事を常に問注所とのみいへり、是評定衆たる輩の帶する職掌なり、訴訟を沙汰し、財貨紛失等のことをも統攝せり、凡訴訟の事は、引付衆の內よりそれ〳〵に奉行人を定めて、數多の訴を分配し、各預り沙汰せしむることなるが、問注所執事は、問注所の長官なれば、なべての訴訟にあづかり、當所に祗候する奉行人を指揮すれば、最重き職掌なり、此職も承久に置れしものなるべし、寄人といふは、即當所に祗候の奉行人なり、

〔古今著聞集 十六興言利口〕松尾神主賴安がもとに、たつみの權守といふ翁有けり、わづかに田をもた

六波羅奉行人・

行頭人ナンド被ㇾ云テ、肥脹レタル者共ガ、馬ニ昇乘テ四五百騎馳集リタレ共、皆只アキルヽ、計ニテ、差タル義勢モ無リケリ、

〔遠藤系圖〕俊全備前房、六波羅奉行人、

〔東寺文書〕數十之十三 六波羅施行弓削島 施行奉行但馬前司

東寺領伊與國弓削島雜掌榮實、與地頭代佐房相論所務條々事、

右任去閏四月廿三日關東御下知、可ㇾ致沙汰之狀如ㇾ件、

嘉元元年九月十八日　左馬助平朝臣基時花押○

中務大輔平朝臣貞顯花押○

〔太平記 一〕賴員回忠事

謀叛人ノ與黨土岐左近藏人賴員ハ、六波羅奉行齋藤太郎左衞門尉利行ガ女ト嫁シテ最愛シタリケルガ、○下略

〔武家名目抄 職名二十六中〕六波羅奉行人

按、六波羅にて奉行人といひしは、大かた引付衆をいへるなれど、鎌倉に准じて思へば、いまだ其衆にかはらぬ寄人、又は問注所に祗候の輩もありしなるべし、凡引付衆は、評定衆を補助する職なれば、探題及頭人の旨をうけて公務を沙汰し、訴訟爭論等の事を裁斷奉行する職にて、後には評定衆に加はるべき族なり、猶くさ〴〵の職掌ありしは鎌倉に准じて志るべし、此衆も亦承久に新に置れしつかさなり、

〔太平記 九〕六波羅攻事

爰ニ六波羅ノ勢ノ中ヨリ、年ノ程五十計ナル老武者、○中略高聲ニ名乘ケルハ、其身雖ㇾ愚蒙、多年奉行ノ數ニ加ハテ、末席ヲ汚ス家ナレバ、人ハ定テ筆トリナンド侮テ、アハヌ敵トゾ思ヒ給フ覽、雖

は鎌倉にのみ置れて京師にはなかりけるを、承久の亂後、北條時房、泰時、六波羅の兩探題となるに及びて、關東の政所に准じ、評定衆引付衆の門族の內、さるべき器量の輩を鎌倉より上洛せしめ、六波羅にも評定、引付の兩衆、及諸奉行を定置れしなり、其職掌は鎌倉に准じてしるべし、

〔遠藤系圖〕俊全備前房、六波羅奉行人、――女子六波羅評定衆島田越中權守妻

〔尊卑分脈藤原十〕仲能亀谷、評定衆、刑部大輔、――重輔水谷、淡路守、――清有水谷、六波羅評定衆、刑部大輔、――秀有六波羅評定衆、宮内權大夫、

〔光明寺殘篇〕元弘元年十月口日、先帝〇後醍醐於六波羅南方、評定衆以下在京人奉警固之、

〔近江國番場宿蓮華寺過去帳〕元弘三稔癸酉五月九日、於近江國馬場宿米山麓一向堂前合戰、討死自害交名荒々注文事、〇中略六波羅評定衆備後民部大輔康世、四十七歲

〔尊卑分脈藤原十〕基政――基頼使、六波羅引付頭、筑後守、從五上、母葛西伯耆守平清親女、法名寂基、

〔尊卑分脈藤原六〕知宗六波羅頭人、伊賀守、――時知六波羅頭人、和泉守、常陸介、從四下、――貞知六波羅頭人、二郎、筑後守、近江守、

〔尊卑分脈藤原十〕光政六波羅越訴頭、山城守、――兼光土佐守、引付頭、圖書頭、

〔武家名目抄職名二十六中〕六波羅引付頭

按、引付頭は、卽引付衆の頭人なり、常には頭人とのみもいふ、評定衆の帶する所職にして、諸奉行を指揮し、訴訟以下の公事を成敗する重職なり、此つかさも承久以後の所置にて、職掌は鎌倉の頭人におなじ、

〔太平記八〕三月〇元弘三年十二日合戰事

西國ノ勢、已ニ三方ヨリ寄タリトテ、京中上ヲ下ヘ返シテ騷動ス、兩六波羅驚ヒテ、地藏堂ノ鐘ヲ鳴シ、洛中ノ勢ヲ被集ケレドモ、宗徒ノ勢ハ摩耶ノ城ヨリ被追立、右往左往ニ逃隱レヌ、其外ハ奉

六波羅評定衆

○今本篇ニ揭グル所ノ六波羅探題ノ略系ヲ作ルコト左ノ如シ、

- 北條時政
  - 義時
    - 泰時（北一）
      - 時氏（北二）
        - 時頼
          - 時輔（南三）
          - 宗頼
            - 兼時（南五、北八）
            - 宗方（北十）
    - 重時（北三）
      - 長時（北四）
        - 義宗（北六）
          - 久時（北九）
      - 時茂（北五）
        - 時範（北十二）
          - 範貞（北十五）
      - 義政
        - 時國（南四）
      - 業時
        - 時兼
          - 基時（北十一）
            - 仲時（北十六）
    - 政村
      - 時村（北七）
      - 政長
        - 時敦（南十、北十四）
          - 時益（南十三）
    - 實泰
      - 實時
        - 實村
          - 顕時
            - 貞顕（南八、北十三）
              - 貞將（南十二）
  - 時房（南一）
    - 時盛（南二）
      - 政氏
        - 盛房（南六）
    - 朝直
      - 宣時
        - 宗宣（南七）
          - 維貞（南十一）
        - 貞房（南九）

〔尊卑分脈十藤原〕基綱使、佐藤守、主書頭、從五上、

- 基政　使、六波羅評定衆、壹岐守、從五上、母大夫尉大江能範女、
- 基隆　使、六波羅評定衆、伊勢守、從五上、

〔吾妻鏡五十一〕弘長三年六月二日庚戌、壹岐前司基政、丹波守頼景、爲在京上洛、

〔武家名目抄職名二十六中〕六波羅評定衆

按、評定衆は、政務の席に列し、探題と共に萬事を裁判する重任なり、宿老の輩これに補せらる、されば問注所執事引付頭人等のごとき、職務にあづかれる諸職、皆此衆の攝する所なり、もと

〔花園院御記〕正和三年五月七日庚申、今日山門衆徒與貞顯(六波羅北方也)爲合戰可押寄之由風聞、仍京中騷動、武士多馳向六波羅云々、

〔北條九代記　下〕延慶三年庚戌

貞顯(于時前越後守、後右馬權頭、北方十三、)　延慶三年六月廿五日重上洛

時敦(從五位下、越後守、南方十、後爲北方十四、)　駿河守政長男、母備前守時秀女、(○中略)同七月廿五日爲六波羅、同八月十三日任越後守、維貞上洛後移北方、

正和四年乙卯

維貞(陸奧守、南方、)　正和四年九月二日爲六波羅

元亨元年辛酉

範貞(正五位下、駿河守、北方、)　遠江守時範男、(○中略)元亨元年十一月爲六波羅上洛、

〔將軍執權次第〕正中元年甲子

貞將(越後守貞顯一男、十一月一日立鎌倉、十六日入洛住南方、)

〔北條九代記　下〕正中元年甲子

貞將(前越後守、南方、)　正中元年八月廿九日爲六波羅上洛

〔將軍執權次第〕元德二年庚午

仲時(基時一男、十二月日立鎌倉、住北方、)　時益(左近將監時敦一男、七月廿一日立鎌倉、住南方、)

〔北條九代記　下〕元德二年庚午

時益(左近將監、從五位上、南方、)　仲時(越後守、從五位上、北方、)

〔異本伯耆卷〕元德二年七月廿一日、左近將監時益六波羅ニ被補、上洛シテ越前守貞將ニ替ル、同十一月越後守仲時上洛シテ、駿河守範貞ニ代ツテ京都成敗ヲツカサドル、

宗方（左近大夫將監、從五位下、宗頼次男、六月廿三日立二鎌倉一、七月六日入洛、住二北方一、先祖二付大友屋形一、）

〔北條九代記　下〕永仁五年丁酉

宗方（北方十、）　永仁五年六月廿三日爲二六波羅一、

〔將軍執權次第〕永仁五年（丁酉）

宗宣（前上野介、宣時一男、七月十日立二鎌倉一、同廿七日入洛、住二南方一、先祖二付掃部助貞重屋形一、）

〔北條九代記　下〕永仁五年丁酉

宗宣（上野介、南方七、）　永仁五年七月十日爲二六波羅一、

〔元徳二年三月日吉社幷叡山行幸記〕永仁七年四月廿五日に改元をこなはれて正安元年になる、六波羅にして、一山の衆徒と妙法院の門徒と合戰の先發、放火の下手ともに糺明の沙汰侍けれども、とみに事ゆかず、于時六波羅管領は、上野介宗宣朝臣成けるに、いかなるものかよみたりけむ、五條のはしに立たりける、

かうづけとうへのとひとつ心にてそむけうとするむね（）ふしぎさ

〔北條九代記　下〕正安三年辛丑

基時（于時右馬頭、北方十一、）　正安三年六月七日爲二六波羅一、

乾元元年壬寅

貞顯（于時中務大輔、南方、）　乾元元年七月爲二六波羅一、

嘉元元年癸卯

時範（遠江守、正五位下、北方十二、）　陸奥守時茂男、母左京大夫政村女、○中略　嘉元元年十二月十四日爲二六波羅一、

延慶元戊申

貞房（越前守、從五位上、南方九、）　同十二月爲二六波羅一、

時國從五位下、左近將監、南方、越後守時盛孫、五郞時兼男、建治元年十二月十三日、上洛爲六波羅奉行、

〔將軍執權次第〕弘安元年戊寅二月廿九日改元

時村陸奧守、從五位下、政村二男、元時遠、去年十二月廿三日立鎌倉上洛、今年正月十日入洛、住北方、二月廿一日御沙汰始之、弘長二年正月十九日左近將監、同日敍留、

〔北條九代記 下〕建治三年丁丑

時村于時陸奧守、北方七番、建治三年十二月廿一日上洛

〔將軍執權次第〕弘安七年甲申

兼時修理亮、宗頼一男、自播州上洛、住南方、十二月三日入洛、

正應元年戊子四月廿八日改元

兼時越後守、月日越後守盛房上洛之時移北方、

〔北條九代記 下〕弘安七年甲申

兼時越後守、從五位上、初南方五、後北方八、時村下向後爲北方

〔將軍執權次第〕正應元年戊子四月廿八日改元

時房――時盛――政氏――盛房左近將監、二月四日、立鎌倉上洛住南方、同廿八日任左近將監、

〔北條九代記 下〕正應元年戊子

盛房從五位下、丹波守、南方六、越後守時盛孫、三郞政氏男、○中略正應元年二月爲六波羅、

〔將軍執權次第〕永仁元年癸巳八月五日改元

久時刑部少輔、義宗一男、三月廿三日立鎌倉、四月四日京著、住北方、

〔北條九代記 下〕永仁元年癸巳

久時于時越後守、北方九、永仁元年三月、爲六波羅守護、

〔將軍執權次第〕永仁五年丁酉

〔北條九代記上〕寶治元年丁未

長時(右近將監、北方四番、)　寶治元年七月、爲六波羅北方、上洛替重時、

〔吾妻鏡四十六〕建長八年(〇康元元年)三月廿七日戊午、左近大夫將監長時朝臣自京都下著、去廿日、辭六波羅耆務出京云云、　四月十三日甲戌、陸奧彌四郎時茂主、(年十七)爲候六波羅上洛、　廿七日戊子、今日陸奧彌四郎入洛、著六波羅北亭云云、

〔將軍執權次第〕康元元年(丙辰)十月五日改元

時茂(重時三男、號陸奧孫四郎、子時十六、六月日入洛住北方、)

〔北條九代記上〕康元元年丙辰

時茂(陸奧守、從五位下、北方五番、)　母同長時、(〇平時親女)康元元年爲六波羅北方、

〔將軍執權次第〕文永元年(甲子)二月廿八日改元

時輔(時頼一男、立次男、十一月九日入洛住南方、)

〔北條九代記下〕文永元年甲子

時輔(相模次郎、式部大夫、南方、)　最明寺入道時頼(〇北條)男、母將軍家讃岐、文永元年十月爲六波羅南方、

〔將軍執權次第〕文永八年(辛未)

義宗(左近將監、長時一男、十一月廿七日、立鎌倉上洛住北方、)

〔北條九代記下〕文永八年辛未

義宗(從五位下、駿河守、北方六番、)　文永五年十二月十六日任左近將監、同日敍爵、同八年十二月上洛爲六波羅、

〔將軍執權次第〕建治三年(丁丑)

時國(左近將監、從五位下、十二月入洛住南方、十月十六日左近將監、同日敍爵、義政二男、)

〔北條九代記下〕建治元年乙亥

人共就世上巷說、雖稱可在鎌倉之由、相州〇時房武州〇泰時被相談云、世不靜之時者、京畿人意、尤以可疑、早可警衛洛中者、仍各首途、

〔北條九代記　上〕元仁元年甲申

時氏修理亮、北方二番、　母駿河守泰時〇泰時恐義村誤女、元仁元年六月爲六波羅北方、

時盛越後守、正五位下、南方二番、　元仁元年六月爲六波羅南方、

〔吾妻鏡　二十七〕寛喜二年二月十九日、將軍家〇藤原頼經令出由比濱給、是駿河守重時爲京都守護、近日依可令上洛、御餞之故也、相州武州等被參、有六十匹犬追物、　三月十一日、駿河守重時朝臣、爲候六波羅上洛、

〔北條九代記　上〕寛喜二年庚寅

重時于時駿河守、從五位下、後相模守、北方三番　寛喜二年三月二日、爲六波羅北方上洛替時氏、

〔若狹國守護職次第〕一陸奥守重時朝臣六波羅北殿、〇號極樂寺殿、

〔帝王編年記　二十五後堀河〕六波羅　駿河守重時、仁治三年巳後、一人管領、

〔葉黄記〕寶治元年七月三日甲寅、祈雨孔雀經法今日滿五箇日有結願、〇中略不慮鬪亂非無其恐、仍武士等守護之、〇中略相模守重時朝臣下向關東、當時無京都守護之棟梁歟、　七日戊午、今日可有御幸之由日來有沙汰、而關東兵亂以後、重時朝臣令下向、當時無洛中守護之棟梁、

〔御成敗式目追加〕六波羅奉行

入道陸奥守平重時于時駿河守

入道越後守平時盛于時掃部助

〔將軍執權次第〕寶治元年丁未二月廿八日改元

長時右近將監、從五位下、重時二男、七月日立鎌倉上洛、住北方、寛元三年十二月廿九日左近將監、同日敍留、

補任

一番役幷篝屋事　奥州、越後左近大夫將監兩人、差代官可令奉行、
一沙汰日之目錄孔子等事　周防左衞門尉可令勤仕
此外條々者、先度注文不可有相違也、
〔北條九代記下〕今上〇後醍醐元應元年己未
今年五月五日、取六波羅施行六箇國以孔子被定、政所分、三河、伊勢、志摩、問注所、尾張、美濃、加賀、
二年九月二日、評定六箇國被返六波羅、
〔異本伯耆卷〕先帝〇後醍醐自船上起ラセ給テ、關西ノ宮方京都ヲ攻ルノ由、六波羅ノ探題仲時時益、頻ニ關東ヘ此事ヲ告テ、脚力ヲ馳テ加勢ヲ乞ケル、
〔梅松論上〕兩六波羅の北の方は越後守仲時、南の方は越後親衞時益相議して云、〇下略
〔太平記三十三〕公家武家榮枯易地事
前代相摸守〇北條高時ノ天下ヲ成敗セシ時、諸國ノ守護、大犯三箇條ノ撿斷ノ外ハ綺フ事無リシニ、今ハ大小ノ事、共ニ只守護ノ計ヒニテ、一國ノ成敗、雅意ニ任ズレバ、地頭御家人ヲ郎從ノ如クニ召仕ヒ、寺社本所ノ所領ヲ兵粮料所トテ押ヘテ管領ス、其權威、只古ノ六波羅、九州ノ探題ノ如シ、
〔將軍執權次第〕承久三年辛巳
泰時六波羅始也、武藏守、從五位上、號常樂寺殿、　義時一男、六月十四日入洛住北方、
時房號大佛殿、相摸守、從五位上、　時政三男、元時連、六月十四日入洛住南方、
〔北條九代記上〕廢帝〇仲恭三年〇承久辛巳
泰時武藏守　承久三年六月爲六波羅北方
時房相摸守　承久三年六月爲六波羅南方、自是京都北南兩六波羅創立、
〔吾妻鏡二十六〕貞應三年〇元仁元年六月廿九日、掃部助時盛、相州一男、武藏太郎時氏、武州一男、等上洛、去廿七日出門、兩

一越訴事　下野前司、山城前司、可奉行、
一御倉事　甲斐三郎左衞門尉可奉行、
一雜人事　配分初條之人數可令奉行、
以前之沙汰等有緩怠之聞者、陸奧守、越後左近大夫將監、相共可加催促也、
此外
內裏守護事　追可有御計、
大樓宿直事　當時者、如前々兩人可致沙汰也、追可有御計、
在京人等事　背六波羅下知者、可注申交名也、
仙洞御使幷貴所使者來臨事　可被申旨、但隨事體可有問答歟、
可書渡此事書於奧州之處、仰了
一奧州上洛事、爲京都守護被差上之由、可申入西園寺殿○藤原實兼也、
御敎書案ノ草進了、付島田六郎、
一越後左近大夫將監、時國奧州相共、被六波羅雜務、可加署判之由可被仰也、
當座書之、申御判、
退出之後、調御事書御敎書等、及夜陰付城務了、
廿一日、奧州明日進發云々、
廿五日、評定、老評定以後、城務康有、賴綱、眞性、被召御前有御寄合、
一院宣、諸院宮令旨、殿下御敎書、　因幡守可奉行、
一諸亭事　先度因幡守可奉行之由、雖被仰、改其儀下野前司可奉行、
一宿次事　先度下野前司可奉行之由、雖被仰、改其儀備後民部大夫可令奉行、

陸奥左近大夫將監殿

〔吾妻鏡五十一〕弘長三年八月廿五日壬申、今日春日部左衞門三郎泰實、被召放美濃國揖深庄地頭職、是當庄沙汰人地頭、有非法之由就訴申六波羅、雖下召文泰實不應之、仍註進其趣之間及此儀、卽所被仰遣陸奥左近大夫將監許也、　十二月十六日壬戌、六波羅陸奥左近大夫將監時茂朝臣歸洛、依最明寺殿〇北條時賴御事參向、而不可綏御物沙汰由被仰出候間揚鞭云云、

〔太田康有記〕建治三年十二月十九日、御寄合、山内殿　相大守〇北條時宗　城務　康有　被召御前、奥州〇北條時村　被申六波羅政務條々、

一人數事

因幡守　美作守　筑後守　下野守　山城前司　駿河二郎　備後民部大夫　出羽大夫判官

小笠原十郞入道　甲斐三郎左衞門尉　小笠原孫二郎入道　加賀二郎右衞門尉　式部二郎

右衞門尉　出雲二郎左衞門尉

一寺社事

一關東御教書事

一問狀事

一差符事

一下知符案事書開闔事

五ケ條、備後民部大夫可奉行

一諸亭事　因幡守可奉行

一撿斷事　出羽大夫判官可奉行

一宿次過書事　下野前司可奉行

〔吾妻鏡 五十〕文應二年〇弘長元年二月廿五日丁巳、海道驛馬、御物送夫事、御使上下向、每度依犯定數、爲土民及旅人愁之由、頻達上聽之間、今日所被仰六波羅也、其狀云、

早馬事

宿々被定置二疋之處、雖非急事、近年連々下向之輩、或三四疋、或四五疋、申被著帳煩役所、於路次致狼藉之由有其聞、尤不便、自今以後、非殊卒爾事之外、可任先例之狀、依仰執達如件、

文應二年二月廿五日　武藏守〇北條長時
相模守〇北條政村

陸奥左近大夫將監殿〇北條時茂

京下御物送夫事

京下御物送夫、任雜掌申請、無左右依令下知、人夫多々之間、民之煩尤不便、自今以後、申請人夫之時、令見知御物多少、定人數可被載長帳也、且於私物送夫者、一向可令停止也、兼又夫役寄事於左右、於路次不可致狼藉之由、可被加下知之狀、依仰執達如件、

文應二年二月廿五日　武藏守
相模守

陸奥左近大夫將監殿

六月廿五日乙卯、良賢事、被仰遣六波羅、爲鎭都鄙騷動也、其御教書云、

大夫律師良賢若狹前司泰村舍弟依有謀叛之企、被召取其身訖、指無與力之輩候也、依此事在京幷西國御家人等令參向者、如先々可被止置也、隨無殊事之由、面々可被相觸者、依仰執達如件、

弘長元年六月廿五日　武藏守
相模守

〔吾妻鏡三十八〕寛元五年〇寶治元年七月十八日己巳、六波羅成敗事、以相摸左近大夫將監長村〇村恐時誤
所被任也、於可祗候于彼第分者、兼日被仰巳訖云云、
〔吾妻鏡四十〕建長二年二月五日辛丑、諸國守護地頭御家人等、背六波羅召符由事、有其沙汰、向後於
如此之輩者、可被處罪科之由、被仰出云云、
〔吾妻鏡四十二〕建長四年三月五日己丑、辰剋京都飛脚參著于關東、是先日上洛使節和泉前司行方、
武藤左衛門尉景頼就奏聞、就宮御下向事、自去一日、於仙洞連々有其沙汰、殿下〇藤原兼經每度參給、但
三歲宮后腹十三歲宮大納言二品腹〇宗尊親王兩所之間、何御方可有御下向哉事、依被尋仰下之、兩六波羅所馳
申也、奧州〇北條重時相州〇北條時賴等會合、被經群議、十三歲宮可有御下向之旨被申之、仍及同日申剋飛
脚歸洛、　六日庚寅、藤次左衛門尉泰經、爲御使上洛、行程七箇日云云、是宮御下向之間、條々事依被
仰遣六波羅大夫將監長時朝臣也、彼朝臣幷可然在京人等、可令供奉之由云云、　十八日壬寅、今日
殿下被遣御馬於六波羅左親衛〇北條長時、御使下總前司行經云云、是爲親王御共、依可被下向關東也、
　十九日癸卯、今晚三品親王關東御下向也、自仙洞入御六波羅、八葉御車〇中略　辰一點令起六波羅給、
四月一日甲寅、寅一點、親王自關東御出、未一剋、出御固瀨宿、御迎人々參會此處、〇中略
自京供奉人々　波多野出雲前司義重　佐々木加賀守親淸相坐　長井左衛門大夫泰重　左近
大夫將監長時已上狩裝束、後騎濟々、
五日戊午、六波羅留守飛脚小林兵衛尉到著、是所持參將軍宣旨案文也、
〔吾妻鏡四十三〕建長五年四月廿五日壬申、西國守護地頭御家人、背六波羅命者、就令注進、殊可有御
沙汰之由、被仰遣云云、
〔吾妻鏡四十四〕建長六年十月二日辛未、西國堺相論事、有其沙汰、一向可爲本所御成敗之間、雖有訴
訟、不及召決、其中一向關東御領事者、可有其沙汰之由、所被仰遣六波羅也、

〔新編追加雜務〕守護人檢斷條

鈴鹿山幷大江山惡賊事、爲近邊地頭之沙汰、可令相鎭也、若雖停止者改補其仁、可有靜謐計也、以此趣相觸便宜地頭等、可被申散狀者、依仰執達如件、

延應元年七月廿六日　前武藏守泰時判

修理權大夫時房判

相摸守殿〇六波羅探題北條重時

越後守殿〇六波羅探題北條時盛

〔吾妻鏡三十三〕延應二年〇仁治元年三月十八日壬午、御家人郎等任官事、向後所被停止也、依之關東家人之由稱申者、糺明主人、及相觸重時、可被申任之趣、兼日可被示置宮藏人方以下公事奉行之旨、被仰遣六波羅、　十二月十六日乙亥、今日於御所有評定、〇中略御家人任官功錢事有其沙汰、隨納或百貫或五十貫、令進上官庫、可取進返抄之由可被仰六波羅云云

〔吾妻鏡三十四〕仁治二年六月十八日甲戌、近年西國諸社神人、權門寄人、好寄沙汰致狼藉、令煩甲乙人之由依有其聞、今日被經評議、於如然之輩者、相觸本所召出其身、無所遁者、可召進關東之旨可被仰遣六波羅云云、

〔吾妻鏡三十五〕寬元二年二月十六日丁亥、今日有評定、條々被定其法、〇中略

一西國守護奉行事

於鎭西者、任大將家例可致沙汰、必不可依式目、其外西國者、任被定置旨可致沙汰之由、可被仰遣六波羅、

〔吾妻鏡三十六〕寬元三年二月十六日辛巳、諸國守護人沙汰事有其定、西國守護奉行事、於鎭西者依爲遠國不相鎭狼藉之間、任右大將家御時之例可致沙汰之由、可被仰遣六波羅云云、

〔新編追加 侍所〕犯人糺斷條

一於渡邊、或稱入海、號負累、點定諸方運上物、令致煩費事、近多有其聞、甚不穩便、早可被加制止也、但彼邊爲宗御家人中、定有不知之族歟、被仰付彼等、互爲顧其短不可致阿容也、兼又彼人々京都警固事、幷如然之沙汰令觸催時、若違背之仁出來者、可被注申交名、凡不可限渡邊、於運上物點定輩者、隨聞及可令停止給之狀、依仰執達如件、

文曆二年○嘉禎元年五月廿三日　武藏守○北條泰時判
相摸守○北條時房判

駿河守殿○六波羅北條重時探
掃部助殿○六波羅北條時盛探

〔吾妻鏡 二十九〕文曆二年○嘉禎元年七月廿三日、被仰六波羅條々事、先京都刃傷殺害人事、爲武士輩於相交者、可爲使廳沙汰、犯過斷罪事、爲夜討强盜張本、所犯無所遁者可被斷罪、枝葉輩者召進關東、可被遣夷島也、次大番事、被定次第之處、替番衆遲々之間、前番衆勤仕超一兩月、令遲參輩者、二箇月可勤入也者、又都鄙之間、有急事之時、相互所立之飛脚、爲早速取路次往反馬騎用之條、人之所愁也、向後可構乘馬以下事於驛々之由今日被定云云、

〔吾妻鏡 三十一〕嘉禎二年十月二日丙戌、六波羅飛脚參著、申云、自去月中旬之比、南都蜂起、構城郭巧合戰、六波羅遣使者雖相宥、彌倍增云云、　五日己丑、被經評議、爲鎭南都騷動、暫大和國置守護人、沒收衆徒知行庄園、悉被補地頭畢、又相催畿內近國御家人等、塞南都道路、可止人之出入之由有議定、被撰遣印東八郎佐原七郎以下、殊勝勇敢壯力之輩、衆徒若猶成敵對之儀者、更不可有優恕之思、悉可令討亡云云、且各可欲致死之由、於東士者直被仰含、至京畿者、被仰其趣於六波羅、　六日庚寅、大和國守護職等御下文被遣六波羅云云、

職掌

〔山城名勝志十五愛宕郡〕六波羅入道相國亭殿號泉（六波羅亭、平正盛、忠盛、清盛重代地也、長門本六波羅ガ末、賀茂川一町ヲ隔云々、清盛公ニ至テハ、其地廣大ニ爲ケン、今建仁寺町四、五條南、北御門ト云所アリ、是彼亭北門遺名歟、（中略）太平記所六波羅亭モ、大槪此邊ナルベシ、）

〔吾妻鏡二十五〕承久三年六月十六日己巳、相州（時房○北條）武州（泰時○北條）兩刺史、移住六波羅館、如右京兆（義時○北條）爪牙耳目、廻治國之要計、求武家之安全、　十七日庚午、於六波羅、勇士等勳功事、糺明其淺深、（中略）廿四日丁丑、相州武州等任申請之旨、合戰張本公卿等被渡六波羅、（中略）今日寅剋、安東新左衛門尉光成、帶昨日事書、出關東上洛、於京都可有沙汰條々、右京兆直示含光成云云、　廿九日壬午、子剋安東新左衛門尉光成著于六波羅、洛中城外謀叛之輩、可被斷罪條々、具申之、　七月一日癸未、合戰張本棄公卿以下人々、可斷罪之由宣下間、武州早相具之、可下向于關東之旨、下知面々預人等云云、　九月十六日丁酉、可守護高陽院殿之由、下知畿內家人等、今日於六波羅定結番云云、　十月十三日癸亥、京中警固、幷餘黨人等刑法次第有沙汰、召六波羅使於當座示合云云、

〔吾妻鏡二十八〕寛喜三年四月廿一日、被仰遣六波羅條々、先洛中諸社祭、非職輩好武勇事可停止、次強盜殺害人事、於張本者被行斷罪、至與黨者付鎭西御家人在京輩幷守護人可下遣、兼又盜犯人中、假令錢百文若二百文之程罪科事、如此小過者、以一倍可致其辨、於重科輩者、雖召取其身、至于不同心緣者親類者、不可及致煩費云云、　五月十三日、今日有被定下條々、（中略）守護地頭有領家訴訟之時、不應六波羅召之由依有其聞、二箇度者可相觸、及三箇度者、可注申關東之由先度被仰之處、成優恕之儀不申之歟、自今以後、無隱容可言上之旨重可被仰遣、　四年（○貞永元年）九月一日、畿內近國幷西國境相論事、共以爲公領者、尤可爲國司成敗、於庄園者、爲領家沙汰、經奏聞可爲聖斷之由被定、且以此趣被仰六波羅云云、　十一日、武州以五十箇條式條、相副和字御書被送遣于六波羅、駿河原左衛門尉爲使者、　十一月廿九日、今日六波羅成敗法、十六箇條被仰下之云云、

る、ことなし、爰を以て諸家これを崇敬し、常には其職號をいはずして六波羅殿とのみ稱し、太平記にみゆ或は北殿南殿などもいへり、若狹國守護職次第にみゆまた評定引付の兩奏、及其他の諸奉行をも備へてその佐職とせしかば、職員もまた鎌倉に類せり、されど臨時に裁斷すべき事ある時は、必關東の沙汰を經るならはしなり、此職もとより分掌のつかさにあらざれば、其統領する諸國の政事、一ッとしてあづかり聞ざるはなし、或はこれを六波羅管領とも、よびしは、當時管領といへるが長官の稱なりければなり、(中略)たまく此探題を六波羅奉行といひしこともきこゆれど、それは將軍家の命をうけたまはり沙汰するこゝろよりいへるなれば、なべての奉行、人とはことかはれり、常にいふ奉行人も、もと君命をうけ給はるいはれにはあれど、中頃よりこなたには、探題の指揮をうくる奉行人ともいふごとくになれり、

〔江家次第五二月〕法華會　後奏事

探題著座、打堅義鐘、次講師下高座、堅義者起座出坤戶外、都維那從儀師、起座打磬、召堅義者名、進立机下、請益探題、探題目許開櫃、次復座、堅義者進佛前、禮佛三度、畢還到机下、目探題、探題目揖、堅義者開櫃、取短冊讀揚、畢登高座、次從儀師進取短冊、置探題前、堅義者表白、此間探題給短冊於從儀師、令分問者、一問五重、畢從儀師注記、畢問得不、探題精義、畢判得略、二問二重、不精義之略第、名畢從儀師申舉十條短冊得不、畢堅義者下高座、列得略、得題是精義也、略題是不精義也、

〔長門本平家物語十四〕六はらとてのゝしりし所は、故刑部卿忠盛の世に出し吉所也、南は六はら、加茂河一町をへだてゝ、もとは方一町なりしを、此相國〇平清盛の時造作あり、これも家數百七十餘字におよべり、是のみならず、北の鞍馬路よりはじめて、ひがしの大道をへだてゝ、辰巳の角小松殿まで廿餘町におよぶまで造作したりし、一ぞくゑんるいの殿原、乃至郎等けんぞくの住所、こまかにこれをかぞふれば、五千二百餘字の家々、所々にけぶりとのぼりし事、おびたゞしなどいふばかりなし、

六波羅探題

らひ申さるゝこと、はなれるなるべし、

〔太平記　一〕後醍醐天皇御治世事附武家繁昌事

頼朝卿ノ舅、遠江守平時政子息、前陸奥守義時、自然執天下權柄、勢漸欲覆四海、〇中略同〇承久三年ニ、始テ洛中ニ兩人ノ一族ヲ居テ、兩六波羅ト號シテ、西國ノ沙汰ヲトリ行セ、京都ノ警衞ニ備ラル、

〔沙汰未練書〕一六波羅トハ、洛中警固幷西國成敗御事也、

〔沙汰未練書〕一御下知被成事、〇中略探題、探題ハ六波羅殿ヲ云、關東兩所、京都

〔運歩色葉集　多〕探題（タンダイ）

〔御成敗式目諺解　序〕先代〇北條氏ニモ六波羅ヲ置ケリ、〇中略時房泰時ヲ始トシテ、年少時ハ在洛シテ、六波羅ニ在テ西國ノ事マデ成敗ス、年長テハ鎌倉ニ下向シテ、後見ノ事ヲ存知ス、治承ノ末ヨリ元弘ノ半バマデ百五十餘年、先代ノ成敗也、

〔武家名目抄　職名二十六中〕按、鎌倉殿の時に、執權及六波羅の管領たる人を探題と稱せしは、もと釋家の探題よりうつりしとなへなり、釋家にて探題といへるは、なべて僧たるものに、課試及第をなさしむる時に、宣旨を蒙りて其可否を辨ずる職掌なり、其受試の者の得失にしたがひて、及第落第の定あることなれば、碩學の僧ならざれば其任に堪ざるなり、さて武家にて政務を裁決することの、かの探題たるもの、課試を判斷するに似たるが故に、をのづから探題の稱、此重職の名にうつれるなり、抑六波羅探題は、もと洛中守護といへるものにひとしきつかさにて、庶姓の人其職をつかさどり、又長官も一人にて、下司もそなはらざりしに、承久の亂不意に起りしかば、北條義時なを後難あらんことを恐れ、おもては内裏警衞の職と稱し、實は向後の變に備へんとの思はかりにて時房泰時の二將をして、六波羅南北の兩亭に分居せしめ、京師はもとより畿内近國及關西諸國の政務を攝せしめしより、〇註略其任殊に重くなりて、殆關東の執權に類するいきほひとなりぬ、これより後には、北條一家の所職となりければ、他門の人、假にも補せら

大内夜行番

〔吾妻鏡十四〕建久五年四月七日戊戌、源藏人大夫頼兼使者、自京都參著、獻書狀、大内守護之間、去月廿八日、於仁壽殿前搦獲犯人、推問之處、欲燒大内云云、此上不及子細、則梟首之由載之云云、度々顯勳功、於武勇頗不恥父祖之旨、將軍家殊感給云云、

〔吾妻鏡二十四〕建保七年〈〇承久元年〉七月廿五日戊午、酉剋伊賀太郎左衞門尉光季〈〇京都守護〉使者、自京都到著、申云、去十三日未剋、誅右馬權頭頼茂朝臣、并子息下野守頼氏訖、〈〇中略〉頼氏依背叡慮、遣官軍於彼在所昭陽舍、〈頼茂爲大内守護住此所〉合戰、頼茂幷伴類〈〇中略〉入籠仁壽殿自殺、〈〇下略〉

〔承久記上〕源三位頼政ガ孫左馬權頭頼持トテ、大内守護ニ候ケルヲ、是モ多田滿仲ガスヘナレバトテ、一院〈〇後鳥羽〉ヨリ西表ノ輩ヲ差遣シ勢汰セシカバ、是モ難遁トテ、腹掻切テゾ失ニケル、

〔太田康有記〕建治三年十二月十九日、御寄合、〈山内殿〉　相大守〈〇北條時宗〉　城務　康有　被召御前、奥州〈〇北條時村〉被申、六波羅政務條々、〈〇中略〉
内裏守護事　追可有御計、

〔吾妻鏡七〕文治三年九月十三日辛亥、攝津國在廳以下、并御室御領間事、被定其法、今日爲北條殿奉、可得其意之由、所被仰遣三條左衞門尉之許也、其狀云、
攝津國爲平家追討跡、無安堵之輩云云、總諸國在廳、庄園下司、總押領使、可爲御進退之由被下宣旨畢者、縱領主雖爲權門、於庄公下司等國在廳者、一向可爲御進退候也、速就在廳官人被召國中庄公下司押領使之住人、可被充催内裏守護以下關東御役、〈〇下略〉

〔吾妻鏡八〕文治四年五月廿日丙辰、八田右衞門尉朝家郎從庄司太郎、被遣大内夜行番之處、懈緩之由依令風聞、早可召進其身於使廳之趣、今日被仰定綱、此上可遣鎌倉中道路之旨、被仰朝家云云、

〔武家名目抄職名二十六下〕按、大内夜行番は、夜ごとに禁内を巡行して非常を警むる司なり、これもと衞府の職掌なれど、中頃にいたりては、其つとめに堪ずなりしによりて、武家よりはか

兼己が一家の所從のみにては、大內守護のつとめに堪ざる由なげき申ければ、北國の御家人等をもて賴兼につけられしかども猶堪ざりければ、他の大名をも結番せしめて賴兼の副となされしかば、禁裏守護番などいふこともありしなり、承久に賴兼誅せられしが、いくほどなく世の亂いできて、北條の家族、兩六波羅に居をしめ、畿內西海の警衞をすべつとむるごとくなりしかば、さらに大內守護をば置れざりしなるべし、

〔愚管抄五〕賴兼は賴政が跡をつぎて、猶大內の守護せさせられき、久くもなくて、え思ふやうならでうせにき、それが子とて賴茂と云者、又つぎて大內に候ける、

〔吾妻鏡八〕文治四年六月四日戊辰、所々地頭沙汰之間事、注條々令付帥中納言経房給之處、御返報今日到著、於勅答之趣者、爲讓子細所副獻權右中辨定長朝臣奉書也、○中略

大內守護事

賴兼申狀尤不便、他人結番、可被守護歟、只可被申攝政殿、○藤原兼實

〔吾妻鏡十〕文治六年○建久元年六月廿六日己酉、大內守護事、日者相副北國御家人等於散位賴兼、可令勤仕之由二品○源賴朝被定申訖、而以彼國許不可叶之旨賴兼申之間、被奏聞其趣云云、

〔吾妻鏡十一〕建久二年五月二日己酉、遠江守義定朝臣飛脚參申云、當時禁裏守護番也、去月廿六日神輿○日吉入洛之時、家人等仍相禦、不可發鬪戰之由頻有別當宣之間謹愼處、家人四人、同所從三人、忽爲山徒被刃傷、依仰朝威怖神慮、已如忘勇士之道、可殆招人之嘲歟云云、此事有其沙汰、善信、行政、俊兼、盛時等依召參上之云云、　三日庚戌、被付奏書於高三位○泰經卿○中略其狀云、○中略

追言上

遠江守義定、依奉大內守護差置郎從等、而衆徒亂入之時、爲官兵被召付歟、依勅定仰神威、不懸手於衆徒之處、濫行之餘、乘勝刃傷彼郎等四人、同所從三人之由、依義定申狀所承也、○下略

大内守護

〔吾妻鏡三十一〕嘉禎二年七月廿四日己卯、南都騷動之間、在京人幷近國之輩、催具一族、可抽警衞忠之旨被仰下、先訖、一類不相從之由、近日自諸家依其訴出來、向後大番以下如此役、早可相從一門家督之旨、今日重被定之、　三年三月廿一日壬申、京都警衞事、自去々年正月、更被結番之處、猶不法之輩依相交、匠作、（○北條時房）左京兆、（○北條泰時）殊令沙汰之給、被催御家人等云云、

〔尊卑分脈四〕滿仲――――頼光（藏）（冷泉院判官代、大内守護）（中略）

〔平家物語四〕ぬえの事

抑此源三位入道頼政は、（○中略）保元の合戰の時も御かたにて先をかけたりしか共、させるしやうにもあづからず、又平治のげきらんにも、すでにしんるいをすて丶參じたりしかども、をんしやうこれおろそかなりき、大内しゆごにて年久しう有しか共、昇殿をばゆるされず

〔尊卑分脈四〕頼政（藏）（備後守、大内守護）――頼兼（藏）（從五下、大内守護）

〔武家名目抄職名二十六下〕按、大内守護は、もと公家の命せられしつかさなり、但し其起源をたしかに記せるものなければ、何れの御世にはじまれりといふ事知がたし、今當時のさまに依て推考るに、大かた天曆以後の制にて、近衞兵衞などいふ警備の職たる輩、やうやく柔弱になりて、其所職に堪ずなりにし後置れしにやあらん、さて其名目のものに見えしは、源頼光其はじめなりける、（頼光の大内守護をうけ給はりしことは、尊卑分脈に見ゆ、）思ふに頼光の父滿仲は、殊に武勇の器にあたり家人も多かりければ、公家にも爪牙の臣とたのませ給へり、されば此人はじめて其所職にはあたれるならむ、これ元より定まりたる司にあらざれば、たゞ禁内を守護しまつるべき由の仰ごとなどありしのみなるべければ、その名目も傳はらざりしなるべし、（○中略）頼光も武勇の器たりしかば、やがて父の業をつぎて大内守護をうけ給はりしより、源家の家業となりて、頼政頼兼等にいたるまで其役に從ひしなるべし、（○中略）鎌倉右大將家國權をとらるゝに及びて、頼

下向するに及びて、能保もと武備の器にあらざれば、北條時定を京師に留られ、常陸房昌明以下の輩と共に警備の役に從はしむ、是京都守護に文武の職をわけられし始なるべし、〇中略其他の諸士もかはる〲其事を勤めし者、多くは其采地西邊にある人等なり、この輩武備を專務とする事なれど、守護たる人、或は鎌倉に下り、又は故ありて事に從はざるなどの折には、武事に限らず、いかなる事をもうけ給はりしなり、

〔吾妻鏡十三〕建久四年二月廿五日壬戌、平六左衞門尉於京都卒、北條殿〇時政腹心也、且爲眼代、且爲御使、在京多施勳功訖、人々令惜也、　廿八日乙丑、京都警衞勤厚御家人等者、其賞可超過關東近士之趣被仰下云云、

〔吾妻鏡十六〕正治二年七月廿七日辛巳、六波羅書狀等到來、佐々木中務丞經高、乍爲帝都警衞人數、奉輕朝威條々也、是於洛中稱生虜强盜人、以其次追捕近隣民居等、〇中略去九日、催聚淡路、阿波、土佐等國軍勢、各著甲冑令馳騷、依奉驚天聽、〇中略早可達關東之旨及勅命云云、　八月二日乙酉、佐々木中務丞經高蒙御氣色、淡路、阿波、土佐、以上三箇國守護職以下所帶等被召放之、以其趣所被申京都也、是日來聊依罪科雖被經沙汰、勳功異他之間、暫相宥之處、爲洛中警衞之士令驚京都、背叡慮之條、難及私寬宥之旨再往被經沙汰如此云云、

〔吾妻鏡二十一〕建曆三年〇建保元年五月廿二日壬戌、關東飛脚等自京都歸參、初使節者、八日戌剋入洛、因茲京中浮說非一、自院〇後鳥羽有御禁制、亦在京士卒、雖申可參向之由、有天氣爲警固洛中被留之、佐々木左衞門尉廣綱得私飛脚、相伴五條大夫判官有範廣綱各自坊門殿給馬、已擬進發之處、御教書到著之間留訖、

〔吾妻鏡二十二〕建保三年四月十八日丁未、京御家人等、洛中守護不法事、殊有其沙汰、就忠否可有賞罰之旨、今日被遣御書云云、親廣奉行之、

洛中警衛

〇北條時村被申六波羅政務條々、〇中略

一奥州上洛事、爲京都守護被差上之由、可申入西園寺殿也、

〔吾妻鏡六〕文治二年三月廿四日壬寅、北條殿〇時政近日依可被歸參關東、公家殊被惜思食之由、帥中納言被傳勅旨、是則亦公平忘私之故也、且其身雖令下向、差置穩便代官、可令執沙汰地頭等雜事之旨、度々被仰下之處、敢無其仁、重一旦勅定、差置非器代官等、若有現不當之事者、還可有其恐歟之由固辭及再三、但洛中警衛事者、示付平六時定、內々二品仰也云云、　廿七日乙巳、北條殿已欲進發關東、仍爲警衛洛中、撰定勇士被差置之、其交名注載折紙、所付進帥中納言也、

注進　京留人々

合

平六傔仗時定　梓の新大夫　野太の平二　やし原の十郎　桑原の二郎　肥前の江次　坂尾四郎　同八郎　內藤四郎　原彌次　常陸房　平五の二郎　中八　中太　上原の九郎　田尻の太郎　岩名の太郎　同二郎　同平三　八幡の六郎　のいよの五郎太郎　同三郎　同五郎　志村の平三　との岡の八郎　廣澤の次郎　同彌四郎　同五郎　同六郎　かうなひ大方十郎　平一の三郎　伊賀の平太　同四郎　同五郎　已上三十五人

三月二十七日　平判

〔武家名目抄職名二十六上〕按、洛中警衛は、將軍家の御家人たる輩、京師にありて洛中洛外の非常をいましむるものにして、京都守護の佐職なり、凡京都守護たる人は、武術にはさばかり長せずとも、人望もあり政理にも通ずる人等うけ給はりけれど、此洛中警衛の諸士は、武藝をむねとする所職なれば、各其家人等を率ゐて、永く洛邊のまもりをつとめしなり、はじめ義經時政等の京都守護たりしほどは、文武の職をふさねしかども、能保守護をうけ給はり、時政東國

判官メセトテ被召タレバ、畏テ承ハリヌ、無左右可參候ヘドモ、京中ニ何トヤラン、ノヽシル事ノ候、光季ハ未不承候、カタノ樣ニ候ヘドモ、關東ノ御代官トシテカタテ候ニ、如何ナル御事ニテ候共、先承候ハントコソ存候ニ、今始テ勅定ニアヅカリ候ヘバ、參ルマジキニテ候トゾ申ケル、押返シ別ノ儀ニ非ズ、直ニ可被仰下旨アリ、急ギ參レト被仰ケレバ、子細ヲ承テ一方ヘモ罷向ハン、御所ヘハ、無左右參リガタフ候ト申セバ、サテハ此事ハヤ知テケリ、胤義ガ申狀不違、サラバウテトテ討手ヲ被向、承久三年五月十四日ノ事也、今日ハ日暮ヌトテ被留ヌ、深行程ニ、判官ノ郎從等一所ニヨリアフテ、軍ノ僉議評定シケルガ申ケルハ、御身ニ無誤シテ、大勢ニ被取籠テ被討サセ給候ハンハ、念ナキ事ニテ候ハズヤ、夜ノ中ニ都ヲ出サセ給ヒテ、美濃尾張迄ハ馳給ヒ候ハンズ覽、サリトモ鎌倉ヘハ、三四日ニハツカセ給フベシ、左候ハズバ、北陸道ヘカヽラセ給テ、〇中略鎌倉ヘツカセ給候カ、是等ノ儀ヲ御計ヒ可有トゾ申ケル、判官其コソエアルマジキニテアレ、鎌倉殿モ思召樣有テコソ、都ノ守護ニモ差置セ給ツラメ、一天ノ君、〇後鳥羽日本一ノ御大事ヲ、思召立セ給程ニ、テハ、アカラサマノ御計ヒニヤアルベキ、今ハ定テ道々モ關々モ、サヽヘテゾアルランニ、一マドモ、ノガレヌモノ故ニ、カタキニ背ヲ見セタリナンド鎌倉ヘ聞ヘン事コソ口惜カルベケレ、能コソアレ、一天ノ君ヲカタキニウケ進ラセテ、我身ニアヤマリナクテ、王城ニ尸ヲサラシ、名ヲ萬代ノ譽ニ揚ン事、願フ所ノ幸ナリ、一引モ引マジキモノヲト云ヘバ、其後郎從等意見ニモ不及、深行儘ニ一人落二人落、次第々々ニ落行テ、〇中略一人當千ノ輩廿七人ゾ殘ケル、〇中略判官ノ宿所ハ高辻子、京極高辻子ヨリハ北、京極ヨリハ西、京極面ハ棟門平門ニテ大門也、高辻子面ハ、土門ニテ小門也、

〔尊卑分脈十藤原〕顯平――宗平京都守護

〔太田康有記〕建治三年十二月十九日、御寄合、山内殿　相大守〇北條時宗　城務　康有　被召御前、奧州

元久二年七月以後

〔吾妻鏡十六〕正治元年六月廿五日乙酉、掃部頭親能依姫君御事、自京都參著、於洛中沙汰重事等、經頭之間、于今遲參云云、

〔吾妻鏡十八〕建仁三年十月三日戊戌、武藏守朝政爲京都警固上洛、西國有所領之輩、爲伴黨可令在京之旨被廻御書云云、

〔帝王編年記二十三順德〕六波羅

駿河守季時元久二年七月以後、建保七年正月辭退、　伊賀判官光季建保七年二月十三日、爲六波羅、承久三年五月十五日以官軍被誅、

〔北條九代記上〕元久二年乙丑

季時駿河守　親能一男、自元久二年十月至建保七年○承久元年正月爲京都守護、

〔吾妻鏡十八〕元久二年十月十日癸亥、駿河前司季時爲京都守護上洛、

〔大友系圖〕親能正五位下、齋院次官、式部大夫、掃部頭、美濃權守、法名寂忍、母正四位下、大外記中原廣季朝臣女也、初爲外祖父廣季養子、後依右大將賴朝命、復本姓藤原、以此忠等或藤原、或中原、相交稱之、屬右大將家、始爲武家勤軍事、行政務、補任六波羅等之重職、承元二戊辰年十二月十八日逝去、六十六歲、

季時從五位下、駿河守、三河守、號淵名、姓藤原、補六波羅職、

〔尊卑分脈藤原十〕朝光――光季使、左衞門尉、京守護、

〔吾妻鏡二十四〕建保七年○承久元年二月十四日、卯剋伊賀太郎左衞門光季爲京都警固上洛、　廿九日、武藏守親廣入道、爲京都守護上洛、

〔承久記上〕平九郎判官胤義ヲ被召テ、親廣法師、伊賀判官○光季是等ヲバ可如何ト被仰ケレバ、胤義申ケルハ、親廣ハ被召バ參候ハンズ、光季ハ權大夫○北條義時ニ緣者ニテ候ヘバ、被召共參リ候ハジ、如何樣ニモ先兩人ヲメサレ候テ、參リ候ハズバ、其時コソ討手ヲモ被差遣候ヘト計ラヒ申セバ、尤可然トテ、少輔入道ノ許ヘ御使ヲ被遣、郎五十騎計ノ勢ヲ相具シテ參ケルガ、○中略ヤガテ伊賀

乙人致濫妨狼藉之間、琳猷上人參訴右武衞、(能保)仍可停止濫吹之由被加下知訖、彼上人雖可參訴關東、行程隔遠路之條、武衞爲二品御耳目在京之間如此云云、　八月十二日庚辰、右武衞(能保)消息到來、當時京中、强盜亂入所々、尊卑爲之莫不消魂、(○中略)差勇士等、殊可警衞給之由有天氣云云、　十九日丁亥、洛中狼藉事、連々被下院宣之間、且尋問子細、且爲相鎭之、千葉介常胤、下河邊庄司行平、可上洛之旨被仰付訖、各申領狀之間、今日被召御前、(○中略)承條々仰云云、

御消息

洛中群盜蜂起、并散在武士狼藉事、度々被仰下候之趣、殊驚歎思給候、時政下向之時、東國武士少少差置候訖、其外も或爲兵粮米沙汰、或爲大番勤仕、武士等在京事多候歟、彼輩不鎭狼藉還疲計路、若如此事をもや企候覽、人口難塞候、然者偏可爲賴朝耻辱候、當時親能廣元雖在京候、元自非武器候、只閑院殿修造事致沙汰候計也、如此事全不可爲彼等不覺候歟、仍常胤行平を差進候、於東國有勢者候之相憑勇士候也、自餘事は知候はす、於武士等中狼藉は、此兩人輒可相鎭候、見器量計進候、能々可被仰付候、條々以別紙言上候、且此趣可令洩披露給候、賴朝恐々謹言、

八月十九日　賴朝

進上　帥中納言殿

〔吾妻鏡十〕文治六年(○建久元年)十二月十日庚寅、六波羅御留守事、今日被定之、左武衞(○能保)實息(○下略)高能可被坐彼御亭云云、

〔吾妻鏡十一〕建久二年正月十五日甲子、被行政所吉書始、(○中略)

京都守護　右兵衞督(能保卿)

〔帝王編年記二十三土御門〕六波羅

右衞門佐兼武藏守朝政(正治元年以後、元久二年閏七月廿七日、於六角東洞院被誅畢、)　里見判官代義直(建仁元年以後)　駿河守季時

によるべしとひろうせらる、京中の上下、あん内は知たり、けんえやうかうふらんとて、たづねもとむることそうたてけれ、

〔吾妻鏡 六〕文治二年二月廿七日乙亥、安達新三郎爲飛脚上洛、○中略北條殿○時政早可被歸參之由被仰遣、於關東事可有御談合事有歟、洛中守護者、已可被仰左典厩○藤原能保之故也、　三月廿三日辛丑、北條殿可歸關東之由奏聞訖、○中略仍洛中事可示付何人哉之由有勅問、付帥中納言○藤原經房被奏御返事云云、

鎌倉御返事、謹給預候畢、早可令進候也、時政下向事、自鎌倉殿度々被仰下候之際、廿五日一定之由所令存候也、云天王寺御幸、云京中之守護、可差留武士等候事、左馬頭殿○能保御在京候、不可御不審候、且此兩條可令申含給候歟、以此旨可令申上給候、時政恐惶謹言、

五月十三日庚寅、紀伊刑部丞爲頼、爲飛脚自京都到着、所持參院宣也、以夜繼日可進之旨、帥中納言被觸仰之由云云、北條殿被歸關東之後、洛中之狼藉不可勝計、去月廿九日夜、上下七箇所群盜亂入云云、

世上嗷々事、定以令聞及給歟、○中略時政在京、旁依穩便思食、於他武士者、縱雖召下、於彼男者、勤仕洛中守護可宜之由、度々被仰遣之上、直被仰含畢、然而猶以下向之間、如此事等出來歟、義經行家等在洛中之由風聞事、若實者天譴已至歟、何不被尋出哉、或說叡山衆徒之中、有同意之輩云云、○中略奉爲君無由事ノミ出來バ、旁驚思食者也、○中略院宣如此、仍執啓如件、

五月六日　　經房

謹上　源二位殿

十五日壬辰、北條殿雜色自京都參著、○中略典厩被申云、可鎭世上嗷々之由、去七日蒙院宣云云、

〔吾妻鏡 七〕文治三年正月十九日辛酉、文治元年所被寄附于希義主墳墓之土佐國津崎在家等、爲甲

中の守衞たりしより、時政、能保、親能、朝雅、季時、光季、親廣に至るまですべて七人、洛中守護の首領たりしが、爰にいたりて北條氏兩六波羅にありて、畿內西國の成敗をつかさどれるより、長き例とは成しなり、

〔義經記四〕義經平家の討手に上り給ふ事

鎌倉には、二位殿〇源賴朝河ごえの太郎を召て、九郎〇源義經が院〇後白河の御氣色よきまゝに、世をみださんと內々たくむなり、西國の侍共つかぬさきに、腰越にはせ向候へと仰られければ、川越申されけるは、〇中略娘にて候ものを判官殿の召おかれて候間、身に取てはいたはしく候、他人に仰付られ候へと申捨てぞたゝれける、ことはりなれば重ても仰出されず、又畠山を召て、〇中略御邊打向給ひ候べし、吉例なり、さも候はゞ、伊豆駿河兩國を奉らんと仰られければ、畠山、よろづにはゞからぬ人にて申されけるは、〇中略かれ〇梶原景時が讒言により、年來の忠と申、御兄弟の御中と申、縱御恨候共、九國にても參らさせ給ひて、見參とて、しげたゞに給候はんずる伊豆駿河兩國を、げんしやうの引出物に參らせ給ひ、京都の守護におき參らせ給ひ候て、御うしろをまもらせ給ひて候はん程の御心やすき事は何事か候べきと、はゞかる所なく申捨て立れける、

腰越の申狀の事

判官〇源義經は、都にゐんの御氣色よくて、京都の守護には、義經に過たる者あらじとの御きしよくなり、

〔平家物語十二〕六代の事

去程に、北でうの四郎時政は、かまくら殿〇源賴朝の御代官に都の守ごして候はれけるが、平家の子そんといはん人、なんしにをゐては、一人ももらさず尋出したらんともがらには、所もうはこふ

落せしかば、鎌倉殿より北條時政を京都守護としてのぼせられ、京畿の成敗をつかさどらしめたり、然るに藤原能保は鎌倉殿の妹聟として、是より先京師に在ながら、禁内の消息、洛邊の形勢を推察して密に鎌倉に通じ、其餘何事によらず、京都の大小事を媒介せしかば、鎌倉殿にも頼思はれしまゝ、關東下向のおり、全く京都守護の任に定られ、程なく時政をば召下されぬ、建久元年、鎌倉殿六波羅亭をもて、京畿の政所に定められしおり、能保の男高能を六波羅の留守に置れ、政事をば元の如く能保に委ねられしなり、○註略もと能保は、搢紳の家に成長せし人なる故に、武事には心もとなかりけるをもて、時政下向の時、代官として北條時定を殘し置、武備をたすけられ、其外にも佐々木大内の輩など、京畿の警備をつとむることにてはありしなり、○註略さて又藤原親能は、文治中、大江廣元と共に殿閣修造の奉行となりて上洛せしが、もとより鎌倉の家令にて、國政を奉る輩なれば、在洛の間は、をのづから京都の成敗にもあづかりて、能保のさしつぎの如くなりしが、能保逝去ありし後は、親能ひとり政務を沙汰し、六波羅の長官として西國の乃貢勘定の事をさへふさねたり、もと刀筆の吏より起れる人なれば、これも武備には長せざる故にや、佐々木の一門等、むねと警固の事を補けたりしが、親能年たくるに及びて、いよ〱武事に不便なりければにや、北條時政の聟平賀朝雅、京都守護の長官として上洛しけるに、此人は武事にもかしこく、いきほひある人なりければ、文武ともにかね沙汰せしかば、親能は其副職となりて、ひとへに尋常の政務をのみ奉行せり、○註略朝雅事ありて後、親能の男季時、守護を奉りて上洛し、父子事を執たりしが、親能は卒去し、季時は右大臣家○源實朝薨去のおり、薙髮して職を辭しけるまゝ、伊賀光季、毛利親廣上洛し、相ならびて事務を攝し京師を警衛せり、然るに承久の亂起るに及て、伊賀光季は官兵に誅せられ、親廣は官軍に屬して失にしかば、其後は北條の一族貮人、六波羅の探題になりて在洛することゝなれり、初義經洛

鋪ハ、四十八所ニ設クルヲ以テ、四十八箇所ノ篝ト云フ、

九州探題ハ、元寇ノ役後、西海二島ノ邊防ノ爲ニ置ク所ニシテ、北條氏一門ノ人ヲ以テ之ニ補ス、此下ニ評定引付等ノ諸職アリ、

鎭西奉行ハ、頼朝ノ時ニ、天野遠景ガ之ニ補セラレシヲ以テ始トス、此職ハ專ラ鎭西ノ庶政ヲ行フモノニテ、大友少貳ノ二氏、世々之ニ當レリ、

長門探題ハ、初メ守護ト稱セシガ、後ニ或ハ探題ト稱セリ、其地邊要ニ屬スルヲ以テ、常ニ北條氏ノ一族ヲシテ之ニ臨マシメ、以テ海防ニ備ヘ、兼テ山陰山陽兩道ノ事ヲ掌ラシム、故ニ又中國探題ト稱ス、

奧州總奉行ハ、頼朝ガ陸奧ヲ平定セシ後ニ葛西清重ヲ留メテ、當國ノ庶政ヲ掌ラシメ、又伊澤家景ヲ以テ留守職ト爲シ、並ニ稱シテ奧州總奉行ト稱ス、而シテ其衙署ヲ留守所ト云フ、

蝦夷管領ハ、北條義時、執權タリシ時ニ、安倍貞任ノ後裔ナル安藤氏ヲ以テ津輕ニ居ラシメテ蝦夷ニ備ヘシメシヨリ、子孫相傳ヘテ其職ヲ世々ニス、

京都守護

〔帝王編年記 二十三 後鳥羽〕六波羅

參議高能 一條二位能保卿長子、母左馬頭義朝女、壽永二年以後、　掃部頭親能 文治二年以後、同四年辭退、　入道中納言能保 頼朝卿妹聟、一條二位、文治四年以後、　土肥次郎實平 文治五年以後　杉四郎國親 建久三年以後　三條左衞門尉有範 建久五年以後　掃部頭親能 建久七年還補

〔武家名目抄 職名 二十六 上〕按、壽永元暦の際、平家西海に深ひし頃は、武家いとまなかりければ、京都警衞の任をも定められず、不虞の備なかりければ、公家に詮議ありしに依て、鎌倉殿 ○源頼朝 にも評定ありしかど、○註略 さばしは其人を定めざる程に、平家滅びて義經入洛したりければ、そのづから警衞の任にあたりて、洛中は元より近畿までを守護せしに、是も程なく京都を沒

古事類苑

官位部三十九

鎌倉職員四

遠國職

鎌倉幕府ノ遠國職ニハ、京都守護、洛中警衛、大内守護、六波羅探題、大番、篝屋守護、九州探題、鎮西奉行、長門探題、長門警固番、奥州總奉行、蝦夷管領等アリ、

京都守護、洛中警衛ハ、幕府創立ノ初ニ定ムル所ニシテ、守護ハ長官、警衛ハ其佐職ナリ、大内守護ハ、特ニ大内ヲ守衛スルモノニテ、幕府創立以前ヨリ之アリ、

六波羅探題ハ二人アリ、承久ノ亂後始テ之ヲ置ク、其衙署ノ京都六波羅南北ノ地ニ分在スルヲ以テ、合稱シテ兩六波羅ト云ヒ、分稱シテ南六波羅北六波羅、或ハ南方北方、又ハ南殿北殿ト云フ、而シテ探題ノ稱ハ、足利氏ノ時ノ書ニ初テ見エタリ、此職ハ京都守護、洛中警衛ニ繼ギテ起リ、且ツ其權限ヲ擴大ニセルモノニテ、畿内近國、及ビ關西諸國ノ政務ヲ攝ス、而シテ執權ノ近親ヲ以テ之ニ補スルモノニテ、入リテ執權ト爲リ、連署ト爲ルモノ多シ、其下ニ評定引付問注等ノ諸職備ハリテ、殆ド鎌倉ノ職制ノ如シ、

大番ノ稱ハ、鎌倉幕府ノ以前ニ起リシカド、鎌倉ノ時ニハ、諸國ノ守護ヲシテ其地ノ武士ヲ督促シテ京ニ上ラシメ、以テ大内ヲ守衛セシムルモノニテ、古ノ衛士ノ如シ、其大番ト稱スルハ、年月ノ期限アリテ交替スルガ故ナリ、

篝屋トハ、火ヲ篝ニ燃ヤシ、京中ニ行夜シテ、守衛スルモノニテ、屋トハ助舗ヲ云フナリ、其助

ヲ歩セ奉ント支度シタル有樣ハ、只四重五逆ノ罪人ノ燋熱大燋熱ノ炎ニ身ヲ焦シ、牛頭馬頭ノ呵責ニ逢ランモ、角社有メト覺テ、見ニモ肝ハ消ヌベシ、

晝夜雜色

〔吾妻鏡十八〕建仁四年〇元久元年三月廿九日壬辰、伊賀伊勢兩國平氏謀叛事、其後不申左右之間、頗非無御不審、仍今日被遣晝夜雜色、隨武藏守朝政下知可發向之旨、重被仰京畿御家人之中云云、廣元朝臣奉行之、

雜色

〔吾妻鏡五十〕弘長三年八月九日丙辰、將軍家〇宗尊親王御上洛事有其沙汰、來十月三日御進發必然之間、路次供奉人已下事被定之、〇中略

御路次間方々奉行人事〇中略

一朝夕　雜色　小侍〇中略

一國雜色　加賀前司行賴

日被仰下云云、

〔吾妻鏡 六〕文治二年正月八日丁亥、爲止寺領狼藉、被差遣雜色云云、

下 紀伊國高野山御庄々

可早令停止狼藉幷地頭等事

右件御庄々、被御山所仰下也、仍爲令致其制止、雜色守清所下遣也、自今以後者、可令停止旁狼藉也、且御庄々折紙遣之、敢勿違失、故下、

文治二年正月九日

十月十六日己丑、丑剋雜色鶴次郎爲御使上洛、是木工頭範季朝臣同意伊豫守義行事、殊可訴申之旨被仰北條兵衞尉、行程所被定三箇日也、

〔吾妻鏡 十〕文治六年（○建久元年）二月五日己丑、被遣雜色眞近、常清、利定等於奥州、是於三方依可遂合戰、爲其撿見也、

朝夕雜色番頭

〔吾妻鏡 四十〕建長二年十二月廿一日壬子、明春正月、御弓始射手事、今日召整進奉有其沙汰、可參的調之人數及用捨、於治定分者、早可相觸之由、所被仰付于朝夕雜色番頭湯淺次郎國弘、本田太郎宗高、和海三郎家眞等也、

朝夕雜色

〔吾妻鏡 四十三〕建長五年正月二日辛巳、明日依可有御行始于相州（○北條時賴）御亭、今夕被催供奉人、是以元日著庭衆所被撰也、小侍所司平岡左衞門尉實俊、令朝夕雜色等廻其散狀云云、

〔太平記 二〕僧徒六波羅召捕事附爲明詠歌事

爲明卿（○二條）ノ事ニ於テハ、先京都ニテ尋沙汰有テ、白狀有バ關東ヘ註進スベシトテ、撿斷ニ仰テ已ニ嗷問沙汰ニ及ントス、六波羅北ノ坪ニ炭ヲヲコス事、鑊湯爐壇ノ如ニシテ、其上ニ青竹ヲ破テ敷雙、少隙ヲアケヽレバ、猛火炎ヲ吐テ烈々タリ、朝夕雜色左右ニ立雙テ、兩方手ヲ引張テ、其上

胤信給、十八日甲戌、還御鎌倉、（〇中略）乘燭之程、入御營中、役、仰千葉四郎胤信、召篠山丹三、可候﨟。勤。之由、被仰含、是昨日所爲御感之餘也、

〔吾妻鏡二十三〕建保六年九月十四日壬午、以金窪兵衛尉行親、爲御使、被糺明、其夜宮寺（〇鶴岡八幡宮）狼藉事、是三浦左衞門尉義村子息駒若丸（光村是也）爲張本云云、謂件宿直人者、右大將家（〇源頼朝）御時、敬神之餘、以﨟。勤。（號小侍）等結番之、每夜所被警固宮中也、其儀于今不怠之處、逢耻辱之間、向後可停止此事之由被定下、於駒若丸者、被止出仕云云、

〔吾妻鏡二十七〕寛喜二年五月六日、武州（〇北條泰時）未退出給、去夜盜人事、殊被驚憤之故也、於侍召集自去夜參候之輩、被糺彈、其中﨟。勤。一人、美女一人、有疑殆分、仍參籠于鶴岡八幡宮、可書進起請文之由被仰含畢、

〔吾妻鏡四十九〕正元二年（〇文應元年）四月十八日乙卯、小臺所﨟。勤。侍。五人、可令著到之由云云、工藤三郎左衞門尉光泰、平岡左衞門尉實俊等奉行之、和泉前司行方、武藤少卿景頼、依傳仰也、

﨟勤　村岡藤五太郎　同藤四郎　村岡彌五郎　龜谷源次郎　入野平太

〔吾妻鏡五十一〕弘長三年八月九日丙辰、將軍家（〇宗尊親王）御上洛事有其沙汰、來十月三日御進發必然之間、路次供奉人已下事被定之、（〇中略）

御路次間方々奉行人事（〇中略）

一﨟勤侍　小野寺左近大夫入道光蓮

雑色長

〔吾妻鏡一〕治承四年十二月廿八日丙午、出雲時澤可爲雑色長之旨被仰、朝夕祗候雑色等雖有數、征伐之際、時澤之功異他故、被補彼職云云、

雑色

〔吾妻鏡二〕治承五年（〇養和元年）三月廿七日癸卯、片岡次郎常春、依有謀叛之聞、遣雑色於彼領所下總國、被召之處、稱亂入領内、乃御使面縛云云、仍罪科重疊之間、被召放所帶等之上、早可進件雑色之由、今

〔源氏物語 三十藤袴〕よしながゐし侍らんも、すさまじきほどなり、やう〳〵らうつもりてこそは、かくごんをもさて、たち給ふ、

〔湖月抄 三十藤袴〕かくごんをも 呼聞 かくごんと云たる心如何、一點 奉公する人をいふ、今も力者かくごなど常に云事也、

〔源平盛衰記 〕鹿谷酒宴靜憲止御幸事
故少納言入道信西モトニ、師光成景ト云者アリ、成景ハ京ノ者、小舍人童太郎丸ト云ケリ、師光ハ阿波國ノ者、種根田舍人也ケリ、〇中略 烏帽子ヲタビ、格勤者ナンドニ仕ケルガ、兩人靫負尉ニナサル、

〔保元物語 三〕義朝幼少弟悉被失事
乙若ハ、〇中略 疾々トテ三人ノ死骸ノ中ヘ分入テ、西ニ向ヒ念佛三十返計被申ケレバ、頸ハ前ヘゾ落ニケル、〇中略 恪勤ノ二人有ケルモ、幼ク御座シカ共、情深ク坐ツル物ヲ、今ハ誰ヲカ主ト可憑トテ指違ヘテ、二人ナガラ死ニケリ、

〔武家名目抄 職名附錄十下〕按、格勤は、すなはち宿直勤仕の人をいへり、常に番衆といふがごとし、然れどもこの格勤と稱する輩は、庶士の尤下等なるものなれば、番衆といはずして格勤を以て名とせり、後に名を改て御末衆といへるも、又その末席にあるを以て也、鎌倉御所にて中居殿原とよばるゝも、後世にいふ中小姓歩行衆などいふは、卽この格勤なり、

〔吾妻鏡 九〕文治五年十一月十七日癸酉、二品〇源賴朝爲歷覽鷹場出大庭邊給、野徑催興之間、令申澁谷庄司給、及昏黑狐一疋、御馬前數十騎相逢於左右、二品令插鏑給、爰千葉四郎胤信郞從號篠山丹三者、弓箭達者也、引弓合鐙進寄於御駕右、此間與御矢同時發之處、御矢不中之、丹三之箭中狐之腰、二品乍知食被發御聲、于時篠山一瞬之程下馬、取替御箭於己矢、立狐提之持參、二品則令問彼名字於

間、就御所近々、東小侍可著到之由、御下向之始被定上者、不及子細、但西侍無人之條、似背古例乎、仍相州〇北條時房以下可然人々者、著進名代、門々如警固之事、連日夙夜可令致其勤也、遠江以下十五箇國御家人等、十二箇月依彼分限多少、而可著宛、雖爲自身出仕之日、可進名代於西侍〇號之大番之由議定畢、是右大將軍〇源頼朝之御時、稱當番、或亘兩月、限一月、長日毎夜令伺候之人也、

〔吾妻鏡二十七〕寛喜二年五月五日、子剋盜人推參常御所、盜給御劍御衣等、不知行方、武州〇北條泰時依令聞此事給、則被參、仰金窪左衞門尉行親、平三郎左衞門尉盛綱等、令大番衆警固四方、被止人之出入云云、

走衆

〔吾妻鏡四十〕建長二年十二月十一日壬寅、幕府南庭、連夜狐吟、今夜大番衆中、筑後左衞門次郎知定代官男以引目射之、仍走出於東唐門、吟聲到于比企谷方云云、

〔吾妻鏡三十二〕嘉禎四年〇曆仁元年二月十七日癸巳、子剋御入洛、〇將軍藤原頼經著于六波羅御所此間新造給、

行列〇中略

步走カチバシリ被召人郎等三十人

〔吾妻鏡四十二〕建長四年七月廿日壬寅、又有御方違供奉人者、無違先度之儀、步行衆之中、上野七郎左衞門尉、出羽三郎左衞門尉等申障、越中四郎左衞門尉、始者進奉、後又申障之間、臨出御之時被召具加藤三郎云云、

恪勤

〔伊呂波字類抄加疊字〕恪勤

〔運歩色葉集賀〕恪勤カウゴン

〔國語周語一〕我先王不窋、用失其官、而自竄於戎翟之間、不敢怠業、時序其德、纂修其緒、修其訓典、朝夕恪勤、守以惇篤、奉以忠信、奕世載德、不忝前人、

〔令義解四考課〕恪勤匪懈謂恪、敬也、盡力曰勤、假如馮豹奏事、通宵伏閤、巫馬從政、戴星居官之類、恪勤也者、爲一善、

凡帳內及資人、毎年本主、量其行能功過、立三等考第、恪勤不懈、清廉稱主、爲上、

（〇北條實時）仍令平岡左衞門尉、工藤三郎右衞門尉、申沙汰之、

出居衆

〔吾妻鏡　三十六〕寬元三年正月廿一日丁巳、今日大納言家（〇前將軍賴經）可駐進父祖代々奉公次第之旨被仰、令廣御出居衆云云、

〔吾妻鏡　三十七〕寬元四年四月八日丁卯、入道大納言家、於御持佛堂被始供花、自常御所至御持佛堂廣庇被構階、爲其蹈、女房幷庇御出居番衆等、隨結番各備花云云、

〔吾妻鏡　三十七〕寬元四年十二月廿八日癸丑、今追入之者、逃參幕府臺所、敵人追付之、內參入、于時松田彌三郎常基、晝番祗候之間、兩方共搦取之、仍上下騷動、

晝番

〔吾妻鏡　四十九〕正元二年（〇文應元年）正月廿日戊子、今日於御所中被定早晝番衆、其內於壯士者、歌道、蹴鞠、管絃、右筆、弓馬、郢曲以下、都以堪一藝之輩、於時依可有御要被結番定、去比御要之時無人之間、殊以此御沙汰出來、仍仰小侍、況於藝能tre目六、度々被仰合相州禪門（〇北條時賴）治定云云、工藤三郎右衞門尉光泰奉行之、城四郎左衞門尉爲淸書、

定　晝番事、次第不同、

一番　子午　相模太郎（〇北條時宗、以下十二名略、）　二番　丑未　越前前司時廣（〇以下十二名略）

三番　寅申　陸奧左近大夫將監義政（〇以下十二名略）　四番　卯酉　新相摸三郎時村（〇以下十二名略）

五番　辰戌　刑部少輔敎時（〇以下十二名略）　六番　巳亥　越後守實時（〇以下十二名略）

右守次第、各可令參勤之狀、依仰所定如件、

正元二年正月日

鎌倉大番

〔吾妻鏡　五十〕文應二年（〇弘長元年）五月十三日甲戌、今日晝番之間、於廣御所佐々木壹岐前司泰綱與澁谷太郎左衞門尉武重及口論、是泰綱以武重有稱爲大名之由事、武重咎之云、已亘嘲哢之詞也、（〇下略）

〔吾妻鏡脫漏〕元仁二年（〇嘉祿元年）十二月廿一日丁未、東西侍御簡衆事有其沙汰、若君（〇藤原賴經）御幼稚之

イルトヨム、其人々ヲ組合スルヲ結番ト云、如此ニテアラン歟、

〔吾妻鏡 四十七〕康元二年〇正嘉元年十二月廿四日甲辰、次問〇本書作伺、今據上下文改、見參結番事、雖被定置之、此一兩年、其衆自然解緩之間、今日更被撰勤厚族被定之云云、〇中略

定　問見參結番事

一番 子午　城四郎左衛門尉　周防五郎左衛門尉　鹽谷周防四郎兵衛尉

二番 丑未　隱岐三郎左衛門尉　上總太郎左衛門尉　大宰肥後三郎　式部左衛門尉 追加

三番 寅申　小山七郎左衛門尉　押立藏人大夫　土肥四郎

四番 卯酉　城六郎　式部太郎左衛門尉　薩摩七郎

五番 辰戌　後藤壹岐左衛門尉　武藤左衛門尉　狩野左衛門四郎

六番 巳亥　幸島小二郎左衛門尉　加地五郎左衛門尉　牧左衛門二郎　波多野兵衛二郎

右守結番次第、無懈怠可勤仕之狀、依仰所定如件、

正嘉元年十二月日

申次番

〔新御式目〕弘安七五廿

一被定申次番衆、諸人參上之時、急可申入、可然人々可有御對面、其外可有御返事、

御簡衆

〔吾妻鏡 四十二〕建長四年十一月十二日壬辰、被定御簡衆、於小侍者、未被造畢之間、可著到于御厩侍、著到者可爲二通、一通者、每夜於常御所簀子讀申之後、可進覽御前、一通者可獻相州〇北條時賴御方云云、

〔吾妻鏡 三十二〕嘉禎四年五月廿日甲午、今日以將軍御家人左衛門少尉藤原時朝號笠間、藤原朝村號上野十郎、等、被加前右大臣家〇普光園二條良實御簡衆、於朝村者、依感射藝給及御所望云云、

〔吾妻鏡 四十九〕正元二年〇文應元年二月二日庚子、今日小侍御簡、有新加衆、和泉前司行方傳仰於越州、

問見參番

正嘉元年十二月日

〔吾妻鏡五十一〕文應二年（○弘長元年）九月十九日戊寅、御息所爲御服藥、（明日依可有出御于山內亭、供奉人事被廻散狀、供奉人皆可著直垂、御輿寄役人者可用立烏帽子云云、散狀有三通、一通騎馬、一通步行、一通御座于山內殿之程令祗候、可勤仕御格子役以下之人數也、

〔吾妻鏡五十二〕文永二年五月廿三日庚申、高柳彌次郞幹盛與縫殿頭文元、就所領有相論事、幹盛確執之餘、訴申云、文元乍爲陰陽師、其子息等帶大刀等、偏如武士、早可爲本道威儀之由可被仰下云云、仍今日有評議、彼子息大藏少輔文親、大炊助文幸等、雖爲陰陽師子孫、相兼右筆之上、七條入道大納言家御時、致幕府宮仕、或勤宿直、或爲格子上下役、武州前史禪室（○北條泰時）最明寺禪室（○北條時賴）二代、如此作法可令奉公之由被仰、今更難改之、（○下略）

〔吾妻鏡四十二〕建長四年十一月十二日壬辰、被定御簡衆、（○中略）又問見參結番、同被定下、掃部助實時主奉行之、

定　問見參結番事

一番（卯酉）　梶原右衞門尉　中山左衞門尉　彌次郞左衞門尉

二番（辰戌）　城次郞　肥後次郞左衞門尉　信濃四郞左衞門尉　澁谷左衞門尉

三番（巳亥）　和泉五郞左衞門尉　武田五郞三郞　小山七郞

四番（子午）　大曾禰次郞左衞門尉　押垂藏人　遠藤右衞門尉

五番（丑未）　後藤壹岐守　同五郞左衞門尉　式部兵衞太郞　平岡左衞門尉

六番（寅申）　伊賀次郞左衞門尉　薩摩七郞左衞門尉　武藤七郞

〔東鑑不審問答〕一卷四十二（建長四十二）丁　問見參結番之事　右問見參如何

未詳、若問トハ誰カアルト問ナルベシ、其時答ヘテ出テ御用ヲ承ルハ見參ナリ、アラハレマ

將監兼頼　狩野五郎左衛門尉爲廣　加藤左衛門三郎景經　相馬次郎兵衛尉胤繼

四番　遠江六郎敎時　武藤太郎朝房　長井太郎時秀　肥後前司爲定　出羽次郎左衛門尉行有　安藝右近藏人重親　小山七郎宗光　彌次郎左衛門尉親盛　筑前三郎行實　常陸次郎兵衛尉行雄　土屋太郎左衛門尉忠宗　武藤次郎兵衛尉頼泰

五番　三河前司頼氏　城九郎泰盛　相摸八郎時隆　上總三郎滿氏　長井藏人泰元　隱岐三郎左衛門尉行氏　出雲六郎左衛門尉宣時　伊賀次郎左衛門尉光房　薩摩七郎左衛門尉祐能　大須賀次郎左衛門尉胤氏　豐後三郎左衛門尉忠直　山内新左衛門尉成通

六番　越後右馬助時親　壹岐前司基政　同五郎左衛門尉基隆　大友式部大夫頼泰　上野五郎兵衛尉重光　伊東六郎左衛門尉頼平　小野寺四郎左衛門尉通時　長雅樂左衛門尉朝遠　平賀新三郎惟時　鎌田兵衛三郎義長

右守結番次第、無懈怠可參勤、但上格子者、日出以前各令參上、於晴向者、無左右可奉之、至御寢所近々者、可相待御定、下格子者、可爲秉燭之剋限、於翌朝者、當番衆參上之後可退出、當番衆、若悉有故障之時者、雖何箇日、先番衆可令參勤、至無故不參之輩者、殊可有其沙汰也者、依仰所定如件、

建長四年四月日

〔吾妻鏡四十七〕康元二年〇正嘉元年十二月廿九日己酉、今日被結番御格子番云云、

定　御格子上下結番事次第不同

一番　刑部少輔敎時〇以下九名略　二番　相摸式部大夫時廣〇以下九名略

三番　尾張左近大夫將監公時〇以下九名略　四番　遠江右馬助淸時〇以下九名略

五番　越後右馬助時親〇以下九名略　六番　陸奧六郎義政〇以下九名略

右守次第、各無懈怠可參勤之狀、依仰所定如件、

仕之由嚴密被觸廻之云云、彼番帳中、山城前司進時所加清書也、

定 結番事次第不同

一番子午 備前前司〇以下十五名略　二番丑未 遠江守〇以下十五名略

三番寅申 相摸左近大夫將監〇以下十五名略　四番卯酉 宮内少輔〇以下十五名略

五番辰戌 北條六郎〇以下十五名略　六番巳亥 陸奥掃部助〇以下十五名略

右守結番次第、一日夜無懈怠可令勤仕之狀、依仰所定如件、

建長二年十二月 日 相摸守 陸奥守

〔吾妻鏡 三十四〕仁治二年十二月廿九日壬午、被定若君〇藤原頼嗣御前御方祇候人數、結六番、御撫物御使、幷御格子上下役、悉被分置之、所被摸將軍〇頼嗣父頼經御方之體也、陸奥掃部助奉行之、

〔吾妻鏡 四十二〕建長四年四月三日丙辰、御格子上下事、被定人數云云、其番帳、和泉前司行方令清書之、

定 御格子番事次第不同

一番 陸奥彌四郎時茂 越後五郎時員 足利次郎顯氏 大藏權少輔朝廣 下野七郎經綱 那波右近大夫政茂 城次郎頼景 武藤左衛門尉景頼 筑前次郎左衛門尉行頼 和泉五郎左衛門尉政泰 足立三郎左衛門尉光氏 伊豆太郎左衛門尉兼保

二番 北條六郎時定 伊賀前司時家 城五郎重景 駿河新大夫俊定 遠江次郎左衛門尉光盛 大曾禰次郎左衛門尉盛經 土肥三郎左衛門尉維平 和泉次郎左衛門尉行章 出羽三郎行資 佐々木四郎兵衛尉泰信 河内三郎祐氏 肥後四郎兵衛尉行定

三番 相摸式部大夫時弘 遠江太郎淸時 大隅前司忠時 梶原右衛門尉景俊 能登右近藏人仲時 信濃四郎左衛門尉行胤 肥後次郎左衛門尉爲時 式部兵衛太郎元政 武藤右近

〔禮記註疏十七月令〕仲冬之月、〇中略省婦事、毋得淫、雖有貴戚近習、毋有不禁、註、省婦事、所以靜陰類也、淫、謂女功奢僞怪好物也、貴戚謂姑姊妹之屬、近習天子所親幸者、

〔吾妻鏡二十六〕貞應二年十月十三日、爲駿河守奉行、撰可祗候近々之仁、被結番、號之近習番、

一番　駿河守　結城七郎兵衛尉　三浦駿河三郎

二番　陸奥四郎　伊賀四郎左衛門尉　宇佐美三郎兵衛尉

三番　陸奥五郎　伊賀六郎右衛門尉　佐々木八郎

四番　陸奥六郎　佐々木右衛門尉三郎　信濃二郎兵衛尉

五番　三浦駿河二郎　同四郎　加藤六郎兵衛尉

六番　後藤左衛門尉　島津三郎兵衛尉　伊藤六郎兵衛尉

〔吾妻鏡三十一〕嘉禎三年三月八日己未、今日爲主計頭師員奉行、被定近習番、幷御身固陰陽師員、

一番　遠江式部丞　周防前司　前民部權少輔　隱岐式部大夫　上野彌四郎　平賀三郎兵衛尉

二番　壹岐守　攝津民部大夫　武藤左衛門尉　後藤佐渡左衛門尉　伊賀六郎左衛門尉　伊佐右衛門尉

三番　相模六郎　佐原太郎左衛門尉　江右衛門尉　齋藤左衛門尉　本間式部丞　飯富源内

〔吾妻鏡三十七〕寛元四年九月十二日丁卯、被結番近習人々、六番其番帳者、左親衛〇北條時賴被染自筆、無故不參及三箇度者、可被處罪科之由、所載于右狀也、

〔吾妻鏡三十九〕寶治二年三月十一日己未、以堪一藝之輩、可候幕府近習之旨被仰出、殊可令好和漢才給之由、近日有其沙汰云云、

〔吾妻鏡四十〕建長二年十二月廿七日戊午、近習結番事治定、自今已後、至不事輩者削名字、永可止出

五番自二廿一日一至二廿五日一　中御門新少將　民部權大輔　遠江七郎　足利上總三郎　新田參河前司　兵衞判官代　式部太郎左衞門尉　大隅修理亮　筑前三郎左衞門尉　美作兵衞藏人　壹岐三郎左衞門尉　大泉九郎

六番自二廿六日一至二晦日一　二條少將　刑部少輔　遠江右馬助　越後四郎　木工權頭　圖書頭　城六郎　周防五郎左衞門尉　加藤左衞門尉　甲斐三郎左衞門尉　上總三郎左衞門尉　土肥四郎

右守二結番次第一五箇日夜、無二懈怠一可レ令二勤仕一之狀、所レ定如レ件、

正元二年二月日

中御所番

〔吾妻鏡四十九〕正元二年文應元年七月廿九日乙未、中御所番衆者、可レ著二到于廂御所一之旨、和泉前司行方奉行、相二觸工藤三郎右衞門尉光泰、平岡左衞門尉實俊一云云、

學問所番

〔吾妻鏡二十一〕建暦三年建保元年二月二日癸酉、昵近祗候人中、撰二藝能之輩一被レ結レ番、號二之學問所番一各當番日者、不レ去二御學問所一令二參候一、面々隨レ時御要、又和漢古事、可レ語申之由云云、武州北條時房被レ奉二行之一、

一番　修理亮　伊賀左近藏人　安達左衞門尉　島津左衞門尉　江兵衞尉　松葉次郎

二番　美作左近大夫　三條左近藏人　後藤左衞門尉　和田新兵衞尉　山城兵衞尉　中山四郎

三番　安藝權守　結城左衞門尉　伊賀次郎兵衞尉　波多野次郎　內藤馬允　佐々木八郎

〔花園院御記〕正中二年閏正月十六日丁卯、自二今日一置二學問所結番一、是親王稽古之料也、予殊致二沙汰一也、今日番衆或故障、仍進二代官一也、

近習番

〔吾妻鏡十八〕建仁三年十月八日癸卯、今日將軍家源實朝年十二御元服也、戌剋於二遠州北條時政名越亭一有二其儀一、中略渡二御休所一後、進二御前物一、江間親廣爲二陪膳一、役送結城七郎朝光、和田兵衞尉常盛、同三郎重茂、東太郎重胤、波多野次郎經朝、櫻井次郎光高等也、各近習小官中被レ撰二父母見存輩一召レ之云云、

六番巳亥　刑部少輔　武藏左近大夫將監　遠江七郎　秋田城介　上野太郎左衛門尉　伊勢次郎左衛門尉　肥後三郎左衛門尉　駿河藏人次郎　下野四郎　大曾禰左衛門太郎

右守結番次第、一日一夜無懈怠、可勤仕之狀、依仰所定如件、

正嘉元年十二月日

〔吾妻鏡四十八〕正嘉二年十二月十九日甲午、諸方番帳等被加淸書、依爲歲末也、於廂御簡者、隨例仰秋田城介泰盛〇藤原於御所令淸書之、

〔吾妻鏡四十九〕正元二年〇文應元年二月廿日戊午、廂御所結番、更被書改、行方書之、

定　廂御所結番事

一番自一日至五日　一條中將　越後守　尾張左近大夫將監　新相模三郎　武藏八郎　武藤少卿　佐渡五郎左衛門尉　出羽三郎左衛門尉　小野寺新左衛門尉　上總太郎左衛門尉　鎌田三郎左衛門尉　一宮次郎左衛門尉

二番自六日至十日　阿野少將　治部權大輔　武藏左近大夫將監　備前三郎　和泉前司　駿河左近大夫　下野四郎左衛門尉　常陸次郎左衛門尉　城五郎左衛門尉　後藤壹岐左衛門尉　信濃判官次郎左衛門尉　平賀三郎左衛門尉

三番自十一日至十五日　中御門少將　宮內權大輔　陸奧左近大夫將監　越前前司　秋田城介　駿河次郎　武藤右近將監　薩摩七郎左衛門尉　出羽七郎左衛門尉　伊勢四郎左衛門尉　城彌九郎　大曾禰太郎左衛門尉

四番自十六日至廿日　讃岐守　彈正少弼　相模三郎　武藤五郎　後藤壹岐前司　出羽大夫判官　城四郎左衛門尉　信濃次郎左衛門尉　武藤左近將監　和泉三郎左衛門尉　鎌田次郎左衛門尉　狩野四郎左衛門尉

鎌倉大番ハ、營中ノ警衞ニ從事スルモノニテ京師大番ノ如シ、賴朝將軍タリシ時ハ、之ヲ當番ト稱シ、其役ハ一月或ハ二月ニ亘リシガ、嘉祿元年、遠江國以下十五國ノ家人ニ命ジ、十二ケ月ヲ以テ期ト爲サシム、

〔吾妻鏡　四十七〕康元二年〇正嘉元年十二月廿四日甲辰、當參人數之中、或可然之仁、或撰要樞之輩、始被結番廂衆、此事以仙洞之儀、被摸關東之條、頗可有其憚歟之由、被仰合于相州禪室〇北條時賴就被咨申之篇、以內藏權頭親家、遠江十郎左衞門尉賴連等、爲御使、內々被窺叡慮之處有勅許、亦侍之參昇可爲何樣哉之趣、同申之、於其境至被嫌思食侍者、人數定不足歟之旨被仰下之云云、緈巳嚴重之間、以近衞將以下等、爲番頭、故染御宸筆令書御簡御料紙、所被用唐紙也、此間有珍事、賴連爲使節、可被載名字於番頭脇、不然者無所望由、頻訴申之、有沙汰被聞之、〇中略

定　廂御所一日一夜結番事

一番子午　一條少將〇能清　相摸式部大夫　上野三郎　大隅修理亮　陸奧六郎　備前三郎

出羽次郎左衞門尉　筑前三郎左衞門尉　壹岐三郎右衞門尉　城五郎

二番丑未　阿野少將　相摸三郎　武藏五郎　後藤壹岐前司　薩摩七郎左衞門尉　式部太郎

左衞門尉　小野寺新左衞門尉　城四郎左衞門尉　鎌田三郎左衞門尉　一宮次郎左衞門尉

三番寅申　中御門少將　尾張左近大夫將監　遠江七郎　新田三河前司　刑部權大輔　出羽

三郎左衞門尉　和泉三郎左衞門尉　常陸兵衞尉　出羽七郎　平賀新三郎

四番卯酉　冷泉少將　越後右馬助　新相摸三郎　武藏八郎　足利三郎　佐渡五郎左衞門尉

壹岐新左衞門尉　加藤右衞門尉　城六郎　大泉九郎

五番辰戌　二條侍從〇雅有　陸奧七郎　內藏權頭　前采女正　武藏左衞門尉　隱岐二郎左衞

門尉　周防五郎左衞門尉　上總三郎右衞門尉　武藤左近將監　土肥四郎

ば建久弘長兩度の上洛にも、進物の奉行と贈物の奉行とをばこゝに別ち置れしなり、

番衆

番衆ハ、營中ニ交番宿直シテ雜務及ビ營ノ内外ノ警衞ヲ掌ル者ノ總稱ナリ、廂番ハ、營中ノ廂御所ト稱スル處ニ更直ス、卽チ將軍ニ近侍スル職ナリ、此職ハ正嘉元年將軍宗尊親王ノ時ニ、仙洞ノ制ニ倣ヒ、勅許ヲ得テ置ク所ニシテ、一月ノ結番ヲ六番トシ、毎番十人ヲ以テシ、其中一人ヲ番頭トス、番頭ハ近衞中少將侍從等ノ官ヲ以テ之ニ任ズ、文應元年ニハ一番ノ人員ヲ增シテ各〻十二人トス、

學問所番ハ、建保元年、將軍源實朝ノ置ク所ニシテ、藝能アル者ヲ撰ビ、結番セシメテ三番トシ、當番ノ者ヲシテ和漢ノ故事ヲ談話セシム、

近習番ハ、將軍ニ昵近スル職ニテ、建仁三年、將軍實朝元服ノ時ニ其稱始テ見エタリ、而シテ貞應二年結番セシメテ六番トシ、毎番三人ヲ以テ定員トセリ、嘉禎三年、將軍賴經之ヲ改メテ三番トシ、毎番六人トス、建長二年、將軍賴嗣之ヲ六番ニ改メ、毎番ノ員ヲ十六人トシ、勤務ノ日數ヲ五日トス、

格子番ハ、將軍居所ノ格子ノ開閉ヲ掌ル、將軍ノ外世子アル時ハ別ニ之ヲ設ク、建長四年、將軍賴嗣ハ六番ニ結番セシメ、毎番十二人トシ、正嘉元年、將軍宗尊親王ハ之ヲ改メテ毎番十人トス、

晝番ハ、文武遊藝ノ中ニ於テ、其一ニ堪能ナル者ヲ以テ之ヲ命ズ、文應元年、將軍宗尊親王ハ結番セシメテ六番トシ、毎番十三人トス、

御京上間奉行事〇中略

一御中持事　堀藤次親家〇下略

〔吾妻鏡五十一〕弘長三年八月九日丙辰、將軍家〇宗尊親王御上洛事有其沙汰、〇中略御路次間方々奉行人事〇中略

一御中持　木工權頭親家　進三郎左衛門尉宗長　長次郎左衛門尉義連

〔武家名目抄職名十七〕按、御物中持奉行は、古くは中持奉行とよび、後には御物奉行といへるぞ大方のならひにはありける、凡御物とよべるは、將軍家服御の物をすべいへる言葉にて、衣冠の類より刀劍等迄にかゝれる名なり、〇中略さて此奉行をうけ給はるものは、幕下御出行の時、御物を納めし唐櫃をあづかりて事を辨ずべき職掌なり、鎌倉殿の頃は、ひとへに中持奉行と稱して、御物といふことばをばそへられず、

〔吾妻鏡十一〕文治六年〇建久元年九月十五日丙寅、來月依可有御上洛、〇中略御路次間事、諸事被定奉行人、〇中略

御京上間奉行事

一貫金以下進物事　民部丞行政　法橋昌寛〇中略

一六波羅御亭事幷諸方贈物事　掃部頭親能

右依仰所定如件

建久元年九月日

〔武家名目抄職名十七〕按、今の世進物といふは、貴賤の等差なく、他方に贈るべき物の通稱のごとくなれど、いにしへはしからず、鎌倉殿の時には、内裏仙洞、もしくは親王大臣家などへすゝむべきものを進物といひ、同等已下へ贈るべき物をば、打つけて贈物といふならひなりされ

國の寺社など造營の時は、其國の守護大名等の內、さるべき輩に命じて總奉行とせらるゝことなり、弘長三年、小田氏の鹿島造營總奉行となりし是なり、

〔吾妻鏡二〕治承五年〇養和元年五月十三日戊子、爲鶴岳若宮營作、材木事有其沙汰、土肥次郎實平、大庭平太景能等爲奉行、

材木奉行

〔吾妻鏡十一〕建久二年閏十二月九日癸丑、東大寺柱四十八本、明年中可引進之由被仰、畿內西海地頭等、佐々木四郎左衞門尉高綱可爲奉行云云、

〔武家名目抄職名二十上〕按、材木奉行は、柳營及寺社堂塔を作らるべき料の材木を切とるより運送までのことをば、すべてあづかりしるつかさなり、鎌倉殿の時は、作事奉行たるもの、材木の沙汰をも乘うけ給はり、又其材を出せる地のほとりに所領などありて、事に便なる輩などに此奉行を命せられしこともまゝあり、

御出奉行

〔吾妻鏡十八〕元久三年〇建永元年十一月廿日丁酉、佐々木五郎義清可令奉行御出事由、承之云云、

〔吾妻鏡五十一〕弘長三年八月九日丙辰、將軍家〇宗尊親王御上洛事有其沙汰、來十月三日、御進發必然之間、路次供奉人已下事被定之、其記縫殿頭師連持參御所、召範元於御前、被淸書、是爲被進京都也、〇中略

御路次間方々奉行人事、

一御出奉行　和泉前司行方　武藤少卿景賴

〔武家名目抄職名十四〕按、御出奉行は、もと御所奉行たる者の兼帶せる職にて、幕下御出行のことあれば、供奉人の交名を定め、路次の行列を整へ、及其他御出行の事につきては、何事もうけたまはる職掌なり、

〇中略

中持奉行

〔吾妻鏡十〕文治六年〇建久元年九月十五日丙寅、來月依可有御上洛、〇中略御路次間事、諸事被定、奉行人、

〔新編追加佛舍〕堂舍造營條

一鎌倉中諸堂修理幷寄進所領事弘安七十一廿七

五方引付可申沙汰之由、先日被仰下之處、無沙汰云々、修理事者、頭人加見知嚴密可注申、小破所々爲別當之沙汰可修理之由、可相觸、○下略

〔鶴岡社務記〕正和四乙卯三月八日丙辰、子剋炎上、八幡宮上下大小社以下、社務坊供僧房等無所殘、六月廿七日癸卯、若宮事始、大奉行攝津刑部大輔親鑒、布衣執筆奉行齋藤右近將監基行、豐前介實顯、各布衣社家少別當勝木左衛門入道、民部大夫等出仕、

〔宗像文書〕宇佐彌勒寺造使孝幸申、宗像社領課役事、如執進宗像社司等所進、右大將家四月十日不記年號御教書、嘉祿元年十一月二日御教書、六波羅正嘉元年六月一日奉書、宇佐宮造營奉行人等七月十日付正嘉元年狀等者、宗像社領不可充課宇佐宮造營役之由所見也、○中略然則於當社領者、不可充催彌勒寺造營役之狀、依仰執達如件、

元德元年十月廿五日　相模守花押

武藏修理亮殿

〔武家名目抄職名二十上〕按、造營といふは、宮殿堂閣の差別なく、大儀なる作事をさしていふことばなりければ、鎌倉殿の始の頃は、神宮佛院の修理はもとより、殿舍亭宅の造作をもなべては造營とよびたりしに、いつとなく造營は寺社に限りたるとなへのごとくなり、幕府の御所、諸家の亭宅の修造をば、作事造作などいひならはせしより、足利殿の世にいたりては、またかいふべき格のごとくになれり、すべて寺社修造のをりには、奉行人の内より其事にあづからしむ、これを造營奉行といへり、又頭人ほどの輩を統領に定められ、これを造營總奉行といへり、但鎌倉の始には、名目も正しく定まれることなかりければ、總奉行のことを、なべて奉行とのみいひしこともみゆ、又ないくの修造には、總奉行をば置れざりしなり、○中略又遠

之旨被仰含、 七月三日丁卯、小栗十郎重成郎從馳參、以梶原景時申云、重成今年爲鹿島造營行事之處、自去比所勞太危急、見其體非直也事、頗可謂物狂歟、稱神託常吐無窮詞云云、

〔吾妻鏡十五〕建久六年十月廿一日癸酉、御持佛堂造營有事始、而左近將監能直、左京進仲業等奉行之、將軍家令監臨給云云、

〔吾妻鏡十七〕建仁三年二月十一日庚戌、鶴岳宮塔地曳始之、去建久三年炎上之後無其沙汰、今日被興舊跡、〇中略 大夫屬入道爲總奉行也、

〔吾妻鏡十九〕承元二年四月廿五日乙丑、鶴岳宮之傍、始可被建神宮寺之由有沙汰、今日被曳其地、大夫屬入道善信爲總奉行、盛時仲業等所被相副也、 七月五日壬寅、神宮寺上棟、相州、武州、前大膳大夫等監臨之、又總奉行善信朝光、同以參向、 四年二月十日己巳、紀伊國安氐川庄地頭職者、故右大將軍御時、爲高野大塔造營奉行賞、賜高雄文覺房訖、

〔吾妻鏡二十七〕安貞三年〇寬喜元年二月十一日、於武州〇北條泰時亭、走湯山造營事有其沙汰、當山管領之仁、淨蓮房參上、召陰陽師被定日次、三月五日、可爲事始之由、親職朝臣已下四人撰申之、盛綱爲奉行、

〔吾妻鏡二十八〕寬喜四年〇貞永元年二月廿四日、武藏國六所宮拜殿破壞、有修造之儀、武藤左衞門尉資賴奉行之、

〔吾妻鏡四十〕建長二年五月一日丙寅、鶴岡上宮破損、修理事有其沙汰、召宮寺番匠等重々所被定仰也、筑前前司、〇奉行 清左衞門尉、〇滿定 深澤山城前司等爲奉行、

〔吾妻鏡四十一〕建長三年閏九月一日戊子、園城寺之事、日來有其沙汰、及御助成、幾內散々御領乃貢爲彼料足也、北院坊舍幷鎭守社等被造營云云、清左衞門尉奉行云云、

〔吾妻鏡五十一〕弘長三年七月十三日辛卯、今日供奉人條々有其沙汰、〇中略 小田左衞門尉、造鹿島社總奉行也、雖供奉有限、就餘社事奔勞、似緩彼神事、可爲何樣哉之由也、

行方爲奉行、 五月五日戊子、於相州御方、爲出羽前司行義奉行、御所造營、將軍家〇宗尊親王御方違事、有其沙汰、陰陽道六人參入、被尋仰之、 六月二日甲寅、巳剋御所事始也、前佐渡守基綱、前出羽守行義等奉行之、

〔吾妻鏡五十一〕弘長三年〇文永元年三月廿一日辛丑、今日東御方里亭、有造作沙汰、對馬前司氏信爲總奉行、

〔武家名目抄職名二十上〕按、作事奉行は、殿舍の修造より始めて、土木のことは何事に限らずすべふさぬるつかさなれば、其方にてはむねとの所職なり、治承養和の際、大庭景義、梶原景時等が營作の事を沙汰せしは、もとこれ當國の古老にて、山林竹木等の事に便ありし故と見えたり、〇註略又法橋昌寛、成尋等のこれを奉行せしは、各其能によりしなるべし、夫より後には土木の事あるごとに、大方奉行人の内にてうけ給はり沙汰することゝはなりぬ、

〔吾妻鏡二〕治承五年〇養和元年七月廿一日乙未、遣遠藤武者於稻瀨河邊、被仰曰、景時者、若宮造營之奉行也、早可令歸參、〇下略

〔吾妻鏡十一〕建久二年二月十五日甲午、及晚幕下〇源賴朝歷覽大倉山邊給、爲建立精舍、得其靈地給之故也、〇中略善信、行政、俊兼等可奉行之云云、 三月八日丙辰、若宮假寶殿造營事始也、行政、賴平奉行之、幕下監臨給云云、 四月廿六日癸卯、鶴岳若宮上之地、始爲奉勸請八幡宮、被營作寶殿、今日上棟也、奉行行政云云、

〔吾妻鏡十三〕建久四年二月廿七日甲子、鶴岡宮寺舞殿、此間新造、今日被立之、行政爲奉行、將軍家監臨給云云、 五月一日丙寅、常陸國鹿島社者、廿年一度、必有造替遷宮、去安元二年造畢之後、去年所滿廿箇年也、而依多氣太郎義幹已下、社領知行輩等懈緩、造營頗遲引、將軍家殊驚歎給、仍造營奉行伊佐爲宗、小栗重成等、御氣色甚不快、被差八田右衛門尉知家、來七月十日祭以前、早可終成風之功

作事、不論庄公別納之地、今明日内、可召進工匠之旨被仰遣安房國在廳等之中云云、昌寛奉行之、

七月三日丁丑、若宮營作事有其沙汰、而於鎌倉中無可然之工匠、乃可召進武藏國淺草大工字郷司之旨被下御書於彼所沙汰人等中、昌寛奉行之、

養和二年〇壽永元年九月廿六日甲午、點鶴岳西麓被建宮寺別當坊、今日卽立柱棟上、大庭平太景義奉行之、武衞〇源賴朝監臨給、

〔吾妻鏡十〕文治六年〇建久元年七月十二日甲子、法橋昌寛爲使節上洛、是來十月可有御上洛之間、於六波羅當時可被新造御亭、仍爲奉行也云云、

廿七日己卯、京都宿所地事、度々雖令申給、其所未治定之上、今年依可有御上洛、殊被驚申之、於作事奉行人者、如材木爲用意兼以上洛、

〔吾妻鏡十一〕建久二年六月七日甲申、被建幕府南門、武藏守〇平賀義信沙汰也、成尋法橋奉行之、幕下〇源賴朝渡御、令覽造營次第給、

十七日甲午、被建大御厩、三浦介奉行之、

〔吾妻鏡二十一〕建曆三年〇建保元年七月廿三日壬戌、新造御所事有其沙汰、今日於御前指圖少々有被改之所々、今度可被立中門之由云云、江左衞門尉、藤民部大夫等奉行之、

〔吾妻鏡二十八〕寛喜四年〇貞永元年二月廿六日、武藏國榑沼堤大破之旨、可令修固之由可被仰便宜地頭之旨被定、左近入道道然、石原源八經景等爲奉行下向彼國、諸人領内百姓、不漏一人可催具、在家別俵二可充、自二月五日始之、自身行向其所可致沙汰之旨含命云云、

〔吾妻鏡三十三〕延應二年〇仁治元年十月十日庚子、於前武州〇北條泰時御亭、可被造山内道路之由有其沙汰、安東藤内左衞門尉奉行之、

〔吾妻鏡三十五〕仁治四年〇寛元元年十月七日庚辰、今日小御所作事等事始也、佐渡前司〇基綱出羽前司〇行義等爲奉行、

〔吾妻鏡四十二〕建長四年四月廿一日甲戌、今日御所造營事有評議、被召陰陽道勘文、〇中略和泉前司

の内にて此職を帯せる例となりし故に、足利殿の時に至ても其准據にて、世家の奉行人この職を奉はれる事也、

〔吾妻鏡十〕文治六年〇建久元年九月十五日丙寅、來月依可有御上洛、御出立間事等被經沙汰、〇中略御京上間奉行事

厩奉行

一御厩事　八田右衛門尉知家　千葉四郎胤信

〔吾妻鏡十九〕承元五年〇建暦元年五月十九日庚午、小笠原御牧牧士、與奉行人三浦平六兵衛尉義村代官有喧嘩事、今日被經沙汰、對如此地下職人稱奉行、恣令張行之間、動及喧嘩、偏忘公平之所致也、早可改義村奉行之由被仰出、被付佐原太郎兵衛尉云云、

〔吾妻鏡二十一〕建暦三年〇建保元年九月十二日己酉、於幕府有駒御覽、修理亮泰時所被進也、三浦平六左衛門尉義村御厩別當爲奉行、

〔吾妻鏡五十一〕弘長三年八月九日丙辰、將軍家〇宗尊親王御上洛事有其沙汰、〇中略御路次間方々奉行人事、〇中略

一御厩　薩摩七郎左衛門尉祐能

〔武家名目抄職名十四〕按、厩奉行は、常にいふ厩別當の事なり、されど鎌倉殿武家草創の始には制度も定まらぬこと多ければ、建久の上洛に、八田千葉の兩士厩の事をうけたまはりしは、當時正しく別當にてありしとも定め難ければ、その後に厩奉行と見えしは、大かた別當をいひしなり、

作事奉行

〔吾妻鏡一〕治承四年十月九日戊子、爲大庭平太景義奉行、被始御亭作事、但依難致合期沙汰、暫點知家事兼道山内宅、被移建立之、此屋正暦年中建立之後、未遇回祿之災、晴明朝臣押鎭宅符之故也、

〔吾妻鏡二〕治承五年〇養和元年五月廿三日戊戌、御亭之傍可被建姫君御方幷御厩、且土用以前爲被始

御所奉行

迎堂、三重塔、鐘樓等、悉被加修理、莊嚴之美、殆軼古跡、〇中略當日會場行事參河前司教隆眞人、布衣下括、刑部權少輔政茂東帶等、未明參寺門奉行之、〇中略公卿殿上人經筵道著堂前、座前之近衞司所從等亂位階、可在諸大夫上之由論之、而今日可任位次之由、近衞將等自稱、是則政茂爲奉行之間、於法會不可成違亂之故歟、

〔吾妻鏡五十〕文應二年〇弘長元年二月廿日壬子、今日於鶴岡八幡宮被行仁王會、講讀宮寺別當僧正隆辨、讀師辨法印審範、當社學頭請僧百口、〇中略安藝左近大夫親綱、左所役伊達右衞門藏人右所役等取布施、宗民部十郎、矢部次郎太郎等爲手長、中山城前司盛時奉行之、

〔吾妻鏡十八〕建仁三年十二月廿二日丙辰、營中雜事、北條五郎可令奉行之由被仰付云云、

建永二年〇承元元年八月十五日戊午、鶴岳宮放生會、將軍家〇源實朝既欲有御參宮之處、隨兵已下臨期有申障之輩、被召別人之程、數剋被扣御出、尤爲神事違亂、是則御出等事無奉行人之故也、仍召民部大夫行光、向後供奉人散狀已下御所中可然事、於時無闕如之樣、可計沙汰之旨被仰含之云云、

〔吾妻鏡四十九〕正元二年〇文應元年十一月十一日甲戌、二所御參詣事、來十九日可被始之、仍供奉人間事、可被催促之趣、和泉前司行方奉仰、觸申越州〇北條實時幷相摸太郎殿、而卿相雲客事者、就爲御所奉行沙汰、任例可令行方催促之處、加于小侍奉行事、申可被催由之條、聊宿德氣也、已背兩人所存之間、忽被返遣彼公卿等散狀於行方云云、

〔吾妻鏡五十一〕弘長三年七月五日癸未、今日依和泉前司行方孫子卒去事、縫殿頭師連可奉行御所中雜事云云、

〔武家名目抄職名十四〕按、御所奉行は、營中の諸事を攝する司にして、其よせ輕からず、此職連綿の職となりしは二階堂行光に始りしかど、猶これより先建仁中に、北條時房營中雜事を奉行すべき命をうけしを思へば、必しも其職掌なかりしにはあらず、行光より後は、評定衆引付衆

(供僧也)

導師御布施、

綾被物二重　裹物五　行光役之

御馬一匹(置鞍)　三浦左衞門尉義村、大須賀太郎道信、一匹(栗)　筑後左衞門尉朝重、同六郎知尙等

引之、

加布施　沙金五十兩　仲章朝臣持參之、

請僧分口別　裹物二　靑鳧千匹　被遣宿坊、大夫判官行村、結城左衞門尉朝光奉行之、

〔吾妻鏡二十五〕承久三年正月廿七日壬子、今朝於法華堂、修故右大臣(○源實朝)第三年追善、二品(○實朝母政子)

沙汰也、(○中略)秋田城介景盛入道、隱岐守行村入道等今日奉行、

〔吾妻鏡三十一〕嘉禎三年七月十一日庚申、二位家(○源賴朝妻北條政子)十三年御忌景也、於南小御堂被修御

佛事、導師東北院僧正圓玄、將軍家(○藤原賴經)無出御、匠作(○北條時房)京兆(○北條泰時)參給、大夫判官景朝、(平讀、茶染

衣、持)爲奉行、候御堂西大床、

〔吾妻鏡三十四〕仁治二年八月廿五日庚辰、午剋被遂北斗堂供養、將軍家(○藤原賴經御束帶御車)御參堂、曼茶羅

供之儀也、大阿闍梨卿僧正快雅執蓋、肥前太郎左衞門尉胤家、兵庫頭家員、江石見前司能行執其綱、

讃衆八人也、前隼人正光重奉行會場事、

〔吾妻鏡三十五〕仁治四年(○寬元元年)二月廿三日庚午、依將軍家御願、被奉桑絲與綿等於二所、是爲被施

神主社僧等也、伊豆山御使左衞門尉忠行、筥根御使駿河五郎左衞門尉也、攝津前司(○中原師員)奉行之、

云云、

〔吾妻鏡三十六〕寬元二年六月二日辛未、被始不動御念誦、僧廿口奉仕之、供米口別可下行一石之由

被仰政所、師員朝臣奉行之、又可修祈雨法之旨依被仰鶴岡、供米十石事同被仰下政所云云、

〔吾妻鏡四十七〕康元二年(○正嘉元年)十月一日壬午、今日大慈寺供養也、當寺本堂、丈六堂、新阿彌陀堂、釋

一方頭（百僧之從）　密藏房寶　奉行　左近將監能直　前武者所家經
一方頭（百僧之從）　阿闍梨行寶　奉行　藤判官代（○一本無代字）邦通　九郎藤次
一方頭（百僧之從）　阿闍梨義慶　奉行　比企藤内朝宗　玄蕃助成長
一方頭（百僧之從）　阿闍梨求佛　奉行　足立左衞門尉遠元　法橋成尋
一方頭（百僧之從）　阿闍梨尊光　奉行　善隼人佑康清　前右馬允家長

〔吾妻鏡十四〕建久五年閏八月八日乙丑、御臺所御佛事結願也、今日爲志水冠者追福、有副供養佛經、（○中略）
布施　導師　被物三重、裹物二、五衣一、（加布施供米三石）　請僧（口別）　被物一重、裹物一、供米一石、
皇后宮大進爲宗、修理亮義盛、安房判官代高重、藤判官代邦通、新田藏人義兼等取之、圖書允清定奉行之、　九月二日己丑、東大寺供養御布施用途被進京都、仲業行政等爲奉行、下送文於御使雜色時澤清常云云、　十一月廿日丁未、御堂供養間、導師以下施物等、自京都到著、前掃部頭親能、奉行所調進也、

〔吾妻鏡十六〕正治二年閏二月二日戊子、彼岸初日也、爲尼御臺所御願、於故將軍（○源頼朝）法華堂被始行法華懺法、永福寺供僧等爲其衆、民部丞行光奉行之、

〔吾妻鏡十九〕承元二年三月二日辛未、尼御臺所（○源頼朝妻北條政子）以雜調法服三十具、被下鶴岳宮供僧、民部大夫行光奉行之、

〔吾妻鏡二十〕建暦二年十一月十三日乙卯、將軍家（○源實朝）令參法華堂給、供僧等參入、以國絹被施之、行光爲奉行、

〔吾妻鏡二十二〕建保三年十二月廿日甲辰、施絹布等於善光寺僧徒給、布施右衞門尉（○景盛）奉行之、
四年正月廿八日壬午、始安置御本尊於御持佛堂、即有供養之儀、導師莊嚴房律師行勇、請僧七口、[illegible]

〔吾妻鏡五〕文治元年十月廿四日癸酉、今日南御堂（號勝長壽院）被遂供養、寅剋御家人等中、差殊健士警固辻々、宮内大輔重頼、奉行會場以下、堂左右構假屋、左方二品（○源頼朝）御座、右方御臺所（○政子）幷左典厩（○頼朝父義朝）室家等御聽聞所也、以御堂前簀子爲布施取（廿人）座、山本又有北條殿室、幷可然御家人等妻聽聞所、巳剋二品御出、（○中略）次左馬頭能保、（直衣、具諸大夫一人、府一人、）前少將時家、侍從公佐、光盛、前上野介範信、前對馬守親光、宮内大輔重頼等、著座堂前、武州（○平賀義信）已下著其傍、次導師公顯、率伴僧廿口參堂、演供養之儀、事終被引布施、

〔吾妻鏡八〕文治四年正月八日甲午、心經會也、導師若宮供僧義慶房、請僧五口、二品（○源頼朝）出御、事訖賜御布施、導師分、被物二重、馬一疋、請僧口別、裹物一、主計允行政奉行之、

〔吾妻鏡十〕文治六年（○建久元年）十二月四日甲申、前右大將家、（○源頼朝）以絹布等令施入京中可然神社佛寺給云云、親能、行政、昌寛等奉行之、

〔吾妻鏡十一〕建久二年九月三日己酉、奉爲先考、（○源頼朝父義朝）於南御堂有御佛事、被供養頓寫法華經一部、慈眼房爲御導師、御布施被物二重、大夫屬入道（○三善康信）奉行之、

〔吾妻鏡十三〕建久四年三月十三日庚辰、迎舊院（○後白河）御一廻忌辰、被修御佛事、千僧供養也、御布施口別布二端、藍摺一端、麞牙一袋也、武藏守義信爲行事、其儀被定宿老僧十人、所爲頭也、仍各相具百人、點便宜道場、爲沙汰饗祿等、毎百口被相副二人奉行云云、

一方頭（百僧從之）　若宮別當法眼　奉行　大和守重廣　大夫屬入道善信

一方頭（百僧從之）　法橋行慈　奉行　主計允行政　堀藤太

一方頭（百僧從之）　法眼慈仁　奉行　筑後守俊兼　廣田二郎

一方頭（百僧從之）　法橋嚴耀　奉行　法橋昌寬　中四郎惟重

一方頭（百僧從之）　法橋宣豪　奉行　民部丞盛時　小中太光家

神事奉行

下泰平、關東靜謐之處、旱魃一事、已亘人庶愁歎、殊可被祈請之旨令懇望給云云、　七月六日戊子、去月廿三日、甘雨以後、炎旱又及數日、仍祈雨事被仰勝長壽院、永福寺、明王院等、行方景賴奉行之云云、　十日壬辰、自初夜甚雨如沃、近國旱魃之間、靑苗悉黃枯、民庶莫不愁之、仍今日爲秋田城介奉行、重可抽丹祈之旨被仰鶴岡別當法印隆弁、卽申領狀、　八月六日戊午、今日又依可有御方違、供奉人々參進、〇中略欲有御出之處、御惱之間延引、仍被行御祈禱、泰山府君晴茂、鬼氣爲親、靈所七瀨晴元、文元、晴長、晴秀、以平、國高、重氏、土公時秀等云云、凡此御不豫事、自去月上旬之比、時々令發給、於今者不被聞食御膳、衆人驚騷、歎息之外無他事、仍今日御祈療事、於御所及評議、〇中略前和泉守行方、武藤左衞門尉景賴奉行之、以淸左衞門尉滿定爲之使、召入鶴岡別當法印隆弁於廟御所、城介傳群議之趣於法印云、此君、〇將軍宗尊親王仙洞御鍾愛之一宮也、〇中略今度安全事、同可被凝一身之懇丹之旨議定訖者、法印申領狀云云、

〔吾妻鏡四十八〕正嘉二年正月廿七日丁丑、殊御祈被奉御劒於二所大神宮、豐前彈正忠奉行之、

〔吾妻鏡五十〕文應二年〇弘長元年正月五日丁卯、將軍家〇宗尊親王御祈禱始、和泉前司行方奉行之、

〔吾妻鏡五十二〕文永三年二月廿日甲申、寅刻於御所被行變異等御祈、主殿助業昌、大學助晴長、修理亮晴秀、晴憲、大藏權大輔泰房、晴平、大膳權亮仲光等列座南庭、勤七座泰山府君祭、將軍家〇宗尊親王出御、縫殿頭師連奉行之、

〔吾妻鏡三十八〕寬元五年〇寶治元年七月二日癸丑、鶴岡八幡宮九月九日神事、可爲式日否事有其沙汰、遂行放生會以後可被行由治定訖、淸左衞門尉奉行之云云、

〔武家名目抄職名十九ノ四〕按、神事奉行といへる名は、幕府には聞えざれど、鎌倉殿の世にも、足利家の時にも、八幡宮は家の祖神なれば、殊に崇敬せられしかば、毎年放生會のをり、家司の内にて當日の事を奉行するものを定めらる、これいはゆる神事奉行の職掌なるべし、

〔武家名目抄職名十九ノ三〕按、鎌倉殿の世には、將軍家幷若君御臺所など、患災のいのり、また水旱疾病等のをりに、陰陽家及佛家に命じて祈請をいたさしむる事あれば、評定衆引付衆の内にてその奉行をうけ給はり沙汰するならひなり、元より臨時の職掌にて、常に設置れし奉行にはあらず、

〔吾妻鏡十六〕正治二年閏二月八日甲午、羽林〇源頼家爲狩獵渡御伊豆國藍澤原、〇中略御進發之後、爲播部入道奉行、御往還之間、無魔障之樣可致祈請之由、相觸于鶴岡供僧等、仍群集廻廊、讀誦不斷觀音經、

〔吾妻鏡二十一〕建暦三年〇建保元年八月廿二日庚寅、未剋鶴岡上宮寶殿、黃蝶大小群集、人奇之、廿八日丙申、去廿二日、鶴岡奇異事、爲兵革兆之由依有申入之輩、被行御占之處、可有御愼之旨勘申之間、於八幡宮被行百怪祭、奉行遠江守親廣、　十月十三日己酉、入夜雷鳴、同時御所南庭狐鳴及度々云云、　十四日庚戌、依去夜變異、可致御祈禱之由、爲廣元朝臣奉行、被仰付鶴岡、勝長壽院、永福寺等供僧、幷陰陽道之輩云云、

〔吾妻鏡二十五〕承久三年五月廿日癸卯、可抽世上無爲懇祈之旨、示付莊嚴房律師、幷鶴岡別當法印定豪等、亦行三萬六千神祭、民部大夫康俊、左衞門尉清定奉行之云云、　廿六日己酉、始行世上無爲祈禱、於鶴岡有仁王百講、〇關東始例中略康俊清定等奉行之、

〔吾妻鏡三十三〕延應二年〇仁治元年四月十日甲辰、若君御方被定御祈衆、岡崎僧正成源助僧正嚴海助法印珍譽陰陽師一番泰貞、二番晴賢、三番國繼等也、兵庫頭定員爲奉行、令結番之、

〔吾妻鏡四十二〕建長四年六月十九日辛未、祈雨事被仰鶴岡別當法印隆辨、清左衞門尉滿定帶其御敎書、爲御使行向彼雪下本坊、仍申領狀、及申剋、於八幡宮東廊始行北斗法、晚天聊陰云云、是去十日、爲和泉前司行方奉行、雖被仰下固辭、昨日十八日、相州〇北條時賴有御對面、親王家〇宗尊御下向之後、天

も奉幣使といへり、皆臨時に差當らるゝ所役にて、大かた名家の權うけ給はる事なり、

〔吾妻鏡十四〕建久五年正月四日丙寅、甘縄宮、御靈社御奉幣、知家爲御使、　四月三日甲午、鶴岳臨時祭、將軍家(○源頼朝)無御參、右京進季時、爲奉幣御使參宮、流鏑馬以下如例云云、　四日乙未、同宮神事如昨日、里見冠者爲奉幣御使云云、　十一月十八日乙巳、江間殿爲奉幣御使、被參伊豆國三島社、今朝進發云云、

〔吾妻鏡十六〕建久十年(○正治元年)八月十五日乙亥、鶴岡八幡宮放生會、中將家(○源頼家)無御參宮、兵庫頭廣元朝臣束帶、爲御使神拜、家子二人、郎等廿人在共、路次步儀也、中將家小舍人等前行云云、

〔吾妻鏡二十七〕安貞三年(○寛喜元年)十一月十日、依去四日雷電、爲世上御祈、近國一宮被立奉幣御使、相摸國駿河守(○北條重時)武藏國武州(○北條泰時)御使、上野國相摸五郎時直、安房國駿河前司義村、上總國足利五郎長氏等也、各被進神馬御劔等、

〔吾妻鏡三十三〕曆仁二年(○延應元年)八月十五日壬子、鶴岡放生會、將軍家依御憚無御出、匠作(○北條時房)爲御使、令奉幣給、賢息武藏守朝直、式部大夫時直、右近大夫將監時定被扈從、

〔吾妻鏡三十九〕寶治二年三月三日辛亥、鶴岡八幡宮一切經會也、將軍家(○藤原頼嗣)無御參宮、備前守時長朝臣爲奉幣御使、　九月九日癸丑、鶴岡八幡宮寺神事如例、尾張前司時章朝臣(束帶)勤奉幣御使、云云、

〔吾妻鏡五十一〕弘長三年正月廿五日丙午、二所(○伊豆箱根兩社)御參詣事延引、於今度者、先可被用奉幣御使也、

祈禱奉行

〔吾妻鏡五〕文治元年十二月廿八日丁丑、御臺所御方祗候女房下野局、夢號景政之老翁來、申二品云、讃岐院(○崇德)於天下令成祟給、吾雖制止申不叶、可被申若宮別當者、夢覺畢、翌朝申事由、(○中略)仍專可被致國土無爲御祈之由、被申若宮別當法眼坊、加之以小袖長絹等給供僧職掌、邦通奉行之、

〔新編追加 雜務〕神社佛寺條

一近國諸社、修理、御祈禱、訴訟、御寄進所領等、於引付可申沙汰事、弘安七八二

一番、伊豆、宇都宮、　二番、三島、熱田、六所宮、　三番、鶴岳、鹿島、香取、　四番、諏訪上下、　五番、筥根、日光、

右寺社奉行人可尋下、有子細者、守此旨可賦引付也、既有沙汰之分者、本引付可申沙汰、

〔北條九代記 下〕永仁元年癸巳

時連　永仁四年爲寺社奉行

〔二階堂系圖〕貞雄、因幡守、寺社奉行、

〔吾妻鏡 二〕養和二年○壽永元年二月八日己酉、被奉御願書於伊勢大神宮、大夫屬入道善信獻草案、是爲四海泰平萬民豐樂也云云、生倫著衣冠參營中賜之、則進發、中四郎維重被相副之、長江太郎義景爲神寶奉行、同首途、

神寶奉行

〔武家名目抄 職名十九ノ三〕神寶奉行といへるは、奉幣使と共に其所に赴き、奉獻すべき神寶のことを沙汰する奉行をいへり、されど鎌倉に近き神社へ奉幣の時は、此奉行を設けられたりしにや、いまだ其證をえず、

奉幣使

〔吾妻鏡 二〕養和二年○壽永元年八月十一日己酉、及晩御臺所有御産氣、武衞渡御、諸人群集、又依此御事、在國御家人等、近日多以參上、爲御祈禱被立奉幣御使於伊豆筥根兩所權現幷近國宮社、所謂、

伊豆山 土肥彌太郎　筥根 佐野太郎　相摸一山 梶山平次　三浦十二天 佐原十郎　武藏六所宮 葛西三郎　常陸鹿島 小栗十郎　上總一宮 小權介眞胤　下總香取社 千葉小太郎　安房東條庤 三浦平六　同國洲崎社 安西三郎

〔武家名目抄 職名十九ノ三〕按、鎌倉殿の時には、恒例臨時ともに、鶴岡にても其他の社にても、幣帛を奉らるゝ時の使、またみづから參詣あるべきおりに、障有て代官として遣はさるゝ人を

せられしが、親王將軍家の頃は、鶴岡をもなべて寺社奉行たるもの、管領する事となれり、

〔吾妻鏡十八〕建仁三年十一月十五日己卯、鎌倉中寺社奉行事、更被定之、仲業清定爲執筆記之、

鶴岡八幡宮　江間四郎　和田左衞門尉　清圖書允
勝長壽院　前大膳大夫　小山左衞門尉　宗掃部允
永福寺　畠山次郎　三浦兵衞尉　善進士
阿彌陀堂　北條五郎　大和前司　足立左衞門尉
藥師堂　源左近大夫將監　千葉兵衞尉　藤民部丞
右大將家法華堂　安達右衞門尉　結城七郎　中條右衞門尉

四年〇元久元年八月三日癸巳、今日鎌倉中寺社領等事有其沙汰、左京進仲業補永福寺公文職、且令奉行寺中沙汰、且可明寺領年貢進未之由被仰付云云、

〔吾妻鏡二十八〕寛喜三年十月十六日、二階堂內可建立五大尊堂之地者、本堂地池上也、可糺彼方角之由被仰下之間、周防前司親實、式部大夫入道光西、〇御家〇奉行藤內左衞門尉定員等、相伴陰陽師晴賢已下、攀上本堂後山、按量方角、〇下略

〔吾妻鏡五十二〕文永二年十一月廿日甲寅、信濃國善光寺事、且爲被鎭寺辻惡黨、且爲警固、被定置奉行人、所謂和田石見入道佛阿、原宮內左衞門入道西蓮、窪寺左衞門入道光阿、諏方部四郎左衞門入道定心等也、而相交員外雜務、致不調沙汰之由、訴訟出來之間、今日及評議、自今以後、可令停止彼奉行人等之旨被仰出、且此子細所被觸仰當國守護人陸奥孫四郎也、

〔太田康有記〕建治三年十二月十九日、御寄合、山內殿、相太守〇北條時宗、城務　康有　被召御前、奥州被申六波羅政務條々、〇中略

一寺社事〇中略五箇條、備後民部大夫可奉行、

行人に兩樣ありしを玄るべし、○中略其後鎌倉のみならず、坂東諸國にも大寺大社には、追々に奉行をつけらるゝ事となれりと、諸國なるは大かた其國々の守護地頭などうけ給はり沙汰せしなり、其中にも伊豆箱根などは、鎌倉近き所といひ、將軍家にもことさら崇敬ありし神社なれば、鎌倉の奉行人あづかり沙汰せしなるべし、親王將軍の頃、北條時連、二階堂貞雄等、寺社奉行に補せられしは、三代將軍の制にはやゝかはりて、訴訟已下何事によらず、此一職にてつかねうけ給はりしとみゆ、故に打任せて寺社奉行と稱せられしなるべし、○中略其頃は兩六波羅にも寺社奉行一員を定めて、畿內近國なる寺社の事を沙汰することいできたり、これ亦關東の制に准せしものなり、

〔吾妻鏡十四〕建久五年五月四日甲子、右京進季時、可レ執二申寺社訴事一之由被二仰付一云云、　十二月二日戊午、御願寺社被レ定二置奉行人一訖、而今日重有二其沙汰一被レ加二人數一、

鶴岡八幡宮上下　大庭平太景能　藤九郎盛長　右京進季時　圖書允淸定
勝長壽院　因幡前司廣元　梶原平三景時　前右京進仲業　豐前介實景
永福寺　三浦介義澄　畠山次郎重忠　義勝房成尋
同阿彌陀堂　前掃部頭親能　民部丞行政　武藤大藏丞賴平
同藥師堂今新造　豐後守季光　隼人佑康淸　平民部丞盛時

〔武家名目抄職名十九ノ二〕按、石淸水八幡宮は、公家武家の祖廟にして、伊勢神宮にさしつぎたる神祠なれば、公武の崇敬、自餘の及ぶ所にあらず、されば鎌倉右大將家幕府を東關にひらかれし時、先祖賴義朝臣の草創せる鶴岡八幡宮を石淸水の神廟に擬し、其趾を改めて莊嚴をつくされ、頓て奉行をもつけられしなり、○中略但はじめの程は、奉行人の內にて假そめにうけ給はる事なりしを、文治に至りて、初めて鶴岡奉行を定められしより以來、相つぎて此奉行を補

寺社奉行

周防國在廳船所五郎正利、依レ爲二當國舟船奉行一、獻二數十艘一之間、義經朝臣與二書於正利一、可レ爲二鎌倉殿御家人一之由云云、

〔武家名目抄 職名二十五〕按、船奉行は、船頭水手等を指揮して舟路のことを沙汰する長官なり、この職はもと世職にて、さるべき津々浦々に居住せしものとみゆ、抑船奉行の名目、源平闘戰の始にみえたるのみにて、中頃絶て聞ゆる事なし、さるは其職掌をのづから國々に絶しにはあらず、將軍洋海を渡り遠征すべきことなかりしかば、此職を設けられざりしなるべし、

〔平家物語 十一〕さかろ

判官〇源義經舟共のしゆりして、〇中略船どう仕れと宣へば、〇中略二百よ艘が中よりも、只五そう出てぞはしりける、五そうの舟と申は、まづはうぐわんの舟、次に田代のくわんじやの舟、後藤兵衛ふし、金子兄弟、よどのがうないたゞとしとて、舟奉行の乘たる船なりけり、

〔吾妻鏡 六〕文治二年五月廿九日丙午、神社佛寺興行事、二品日來思食立之由、且所レ被レ申二京都一也、且於二東海道一者、仰二守護人等一、被レ注二其國總社幷國分寺破壞、及同尼寺顚倒事等一、是重被レ經二奏聞一、隨二事體一爲レ被レ加二修造一也、爲二善信、俊兼、邦通、行政、盛時等奉行一、今日面々被レ下二御書一云云、

〔武家名目抄 職名十九ノ一〕按、鎌倉右大將家の初政には、寺社の奉行とて定まれる職掌はなく、なべての奉行人の内より沙汰し來りしに、建久五年にいたりて、始めて藤原季時に命じて常日に寺社訴訟のことを沙汰せしめ、又鶴岡八幡宮、及鎌倉中御願所の寺院には、各奉行人を定め置れたり、これは數人して其ところ〴〵を分ち預る職掌なりければ、人毎によばるゝ時には、八幡宮奉行、勝長壽院奉行など、各其預れる神社佛事の名を負せて稱とし、數人を合せよべる時には寺社奉行といひけるなり、此寺社の奉行は、常日預れる所々の雜事を沙汰して、訴訟の裁判などにはあづからざりしとみゆ、されば訴訟を沙汰する奉行とは各別にて、寺社の奉

能倘等、自京都參著云云、藤民部大夫行光爲申次入見參、是爲西國御領乃貢納下奉行、令在洛者也、

〔太田康有記〕建治三年十二月十九日、御寄合、山内殿、相大守○北條時宗、　城務　康有　被召御前、奥州被申、六波羅政務條々、○中略

一御倉事　甲斐三郎左衛門尉可奉行

〔武家名目抄〕職名十六下按、倉奉行は、何にもあれ國々のみつぎを藏むる倉庫をあづかれるつかさなり、今の世には、米穀の倉庫をあづかるものを藏奉行といひ、金銀をつかさどるものをば金奉行とよべるが常のならひなれど、いにしへは金銀米穀の分別なく、すべてみつぎををさむる倉の奉行たるもの、その納下をうけ給はりしことなり、○註略　但鎌倉殿の世に、全く倉奉行となへしこと、たしかに見る所なしといへども、豐前前司尙友西國のみつぎ納下のことを承りて、乃貢納下奉行などいひしをもて、古くその職掌ありしをしるべし、又建治中、甲斐三郎右衛門、六波羅の御倉の事を奉行すべき由を命せられたり、六波羅は關西諸州の總攝府なれば、此倉も西國の乃貢ををさめしものにて、其職掌尙友のつかさどりし所と全く同じかるべし、さて六波羅にすら、かくのごとく代々この奉行を置れしを見れば、鎌倉にそのつかさありしことは推してしるべきなり、

納殿奉行

〔吾妻鏡〕八文治四年七月十日甲辰、若公萬壽公、七歳、始令著御甲之給、於南面有其儀、○中略　甲已下解脫、親家御物具御馬、入御厩納殿等、

〔吾妻鏡脫漏〕嘉祿三年○安貞元年六月十七日甲子、御所乾角可被立納殿之由有其沙汰、　七月廿二日己亥、今日納殿立柱打足堅桁、　八月十日丙辰、納殿造畢之後、今日始而御物等被納之、後藤左衛門尉基綱爲奉行云云、

船奉行

〔吾妻鏡〕四元曆二年○文治元年三月廿一日甲辰、甚雨、廷尉○源義經爲攻平氏、欲發向壇浦之處、依雨延引、爰

〔太田康有記〕建治三年十二月十九日、御寄合、（山内殿）相大守（○北條時宗）城務康有被召御前、奧州（○北條時村）被申、六波羅政務條々、（○中略）
一宿次過書事　下野前司可奉行

〔武家名目抄（職名十四）〕按、宿次は驛路の意にして、過書は古の過所なり、所と書と音同じきが故に、俗誤て過書に作りしと見ゆ、此奉行は、すべて路次往還の事をつかさどり、過書を下せる有司なり、鎌倉殿の時、初めのほどは定まれる奉行といふもなく、たゞ奉行人の内にて、臨時に其事をうけ給はりしが、後には常にこの事をうけ給はる奉行人を定め置るゝことゝなれり、

勘定奉行

〔吾妻鏡（十三）〕建久四年十月廿一日甲寅、諸御領乃貢結解勘定事、奉行人等、於私宅遂其節之由有風聞之間、甚不可然、至今日以後者、於政所可致沙汰之旨被仰云云、

〔吾妻鏡（十八）〕建仁四年（○元久元年）三月廿二日乙酉、鎮西乃貢事、掃部頭入道寂忍、可令勘定之由被仰遣云云、

〔新編追加（政所）〕沽却商買條
一政所納物幷年貢結解事（正慶三廿八）
為勘定、問注所器量公人兩輩、可被撰申歟、

〔武家名目抄（職名十六上）〕按、鎌倉殿の時には、勘定奉行とて、別に設置れし事はなかりしかど、公事奉行人の内にて、諸國より奉れる年貢の結解勘定をうけ給はり沙汰せる輩を、勘定の奉行人などいひし事はありしとみゆ、藤原親能京都の職務を攝せし時に、兩國の乃貢勘定をつかさどりしより、關西の乃貢は、專らかしこにてつかさどる事と成にければ、六波羅の兩探題を置れし後は、六波羅奉行人たる者これをふさねしなるべし、

倉奉行

〔吾妻鏡（二十一）〕建暦三年（○建保元年）九月八日乙巳、豐前前司尙友參御所、相具子息內藏允尙光、兵衞尉

過書奉行

四年二月十日甲子、鎌倉中狹小路之事、無永之旨被畳馬常後立之事、飛脚不慮出來之時、於田舍立之事、此條々殊誡及御沙汰、保々奉行人等被仰付處也、

〔吾妻鏡四十二〕建長四年九月卅日辛亥、鎌倉中所々、可禁制沽酒之由、仰保々奉行人等、仍於鎌倉中所々民家所註之酒壺三萬七千二百七十四口云云、

〔吾妻鏡四十三〕建長五年十月十一日丙辰、被定利賣直法、其上押買事、同被固制禁、小野澤左近大夫入道、内島左近將監盛經入道等爲奉行、

〔吾妻鏡四十四〕建長六年十月十日己加、鎌倉中保々奉行條々事、殊不可有緩怠之儀之旨被定之、又政所下部、侍所小舍人等、可止鎌倉中騎馬事、同被仰出云云、次押買以下事、可停止事、被仰萬年九郎兵衞尉云云、後藤壹岐前司基政、小野澤左近大夫入道光蓮等爲奉行、

〔吾妻鏡五十二〕文永二年三月五日甲戌、鎌倉中被止散在町屋等、被免九箇所、又堀上家前大路造屋、同被停止之、且可相觸保々之旨、今日所被仰付于地奉行人小野澤左近大夫入道也、

町御免所之事

一所大町　一所小町　一所魚町　一所穀町　一所武藏大路下　一所須地賀江橋　一所大倉辻

〔新編追加侍所〕放火勾引條

一可禁斷勾引人幷人賣事

件輩任本條可被斷罪、且人商人、鎌倉中幷諸國市間、多以在之云々、自今以後、鎌倉者仰保奉行人、隨注申交名、可被追放、至諸國者、仰守護人可令科斷、

〔吾妻鏡十五〕建久六年正月十六日壬寅、眞如院僧正眞圓被歸洛、宿次傳馬送夫等事、爲三浦介義澄、民部丞盛時等奉行支配云云、

右以前五箇條、仰保々奉行可被禁制也、且相觸之後七日於立之者、相具保奉行人等使者可被破却之狀、依仰執達如件、

寛元三年四月廿二日　武藏守

佐渡前司殿

〔吾妻鏡三十八〕寛元五年〇寶治元年六月四日乙酉、若狹前司〇三浦泰村并一族等之郎從眷屬彼是、自諸國領所來集彼西阿〇毛利宿所、着甲冑士卒相列而成墻壁、又總御家人、及左親衛〇北條時賴祇候人同群參、追日增數之間、充滿于鎌倉中門々戶々、不可令差別自他軍勢云云、縡已可及重事之形勢也、依之今日可退散之由、可相觸之旨被仰保々奉行人之、諏方兵衛入道、萬年馬入道等、爲御使直加嚴制云云、

〔吾妻鏡三十九〕寶治二年四月七日甲申、今夜盜人推參幕府、盜取御厨子以下重寶、依此事保檢斷奉行人等可被處緩怠罪之旨及沙汰云云、

〔吾妻鏡四十〕建長二年三月十六日壬午、仰鎌倉中保々奉行人等、注無益輩等之交名、追遣田舍、宜隨農作勤之由云云、　四月廿日乙卯、仰保檢斷奉行人及地奉行、凡卑之輩、大刀幷諸人夜行之時帶弓箭事、可令停止之由云云、明石左近將監兼綱、傳仰於諸方云云、

〔吾妻鏡四十一〕建長三年十二月三日戊午、鎌倉中在々處々、小町屋及賣買設之事、可加制禁之由日來有其沙汰、今日被置被所所、此外一向可被停止之旨、嚴密觸之被仰之處也、佐渡大夫判官基政、小野澤左近大夫入道光蓮等奉行之云云、鎌倉中小町屋之事被定置處々、

大町　小町　米町　龜谷辻　和賀江　大倉辻　氣飛和坂山上

不可繫牛於小路事

小路可致掃除事

建長三年十二月三日

地奉行
保奉行

付也、八月五日評定（者）　上野國雜人奉行事、可被仰付駿州（○北條義宗）云々、卽書御書下申御判了、

〔吾妻鏡 二十〕建曆二年三月十六日癸亥、前濱邊爲屋地分賜御家人等、所謂土屋大學助、和田新左衞門尉、境平次兵衞尉、波多野次郎、牧小太郎、長江四郎、松葉次郎等也、淸圖書允奉行之、

〔吾妻鏡 三十三〕延應二年（○仁治元年）十一月廿一日庚戌、今日爲鎌倉中警固、辻々可燒篝之由被定、省充保內在家等、定結番可勤仕之旨、被觸仰保々奉行人等云云、以此趣可被仰遣六波羅云云、

〔武家名目抄 職名十五〕按、保とは戶令に、戶皆五家相保、一人爲長、若保內之人、有所行詐諂同保知といへる保の意にて、今の俗にいへる組合の類なり、然るに鎌倉右大將殿、武家を草創せられし頃は、旣に五家一保の制はみだりになりて、十家廿家の限りもなく、人家の一むれに部隷せし所をば、ひたすら保と云事となれり、其諸保をすべては保々といひ、同保相呼ては保內といへり、猶今の世に町々と稱し、町內といふが如し、偖鎌倉殿の中頃より、政所寄人の內、さるべき輩を以て保檢斷奉行と地奉行との兩職に補せられ、互に相助けて、府下の保々の雜務を沙汰せしむる事いできたり、（○中略）世常の辭に、保々の奉行人などいひしは、卽此兩奉行の事をつかねよべるなり、但其專務とするところをわかちいへば、檢斷奉行は市中を巡察して非違を檢し、是非を斷ずるつかさにして、ひとへに檢非違使の職の如し、地奉行は、道路屋舍賣買等の事をむねとするものにて、いはゆる市正の職に類せり、されども互に相助けて事を行ひし故に、一對によばれしなるべし、此兩職の所職を合すれば、全く今の世の中の町奉行の職に相當れり、

〔吾妻鏡 三十六〕寬元三年四月廿二日丙戌、鎌倉中保々奉行人等、令存知可致沙汰條々今日被定、佐渡前司基綱爲奉行、

保司奉行人可存知條々

一不作道事　一差出宅檐於路事　一作町屋漸々狹路事　一造懸小家於溝上事　一不夜行事

國奉行

〔源平盛衰記二十八〕頼朝義仲中惡事
十郎藏人行家ハ、兵衞佐〇源頼朝ニハ伯父也ケレバ、大場三郎景親ガ平家ノ儲ニ造タル、松田亭ニ御座ケルガ、兵衞佐ニ被レ申ケルハ、行家平家ト八箇度合戰シテ、二度ハ勝チ、六度ハ負、家子郎等多ク被レ討ヌ、彼等ガ孝養ヲモ營マン、何ニテモ一箇國相計給ヘト、佐殿返事ニハ、頼朝ハ十箇國ヲナビカス、木曾ハ信濃上野ノ勢ヲ以テ北陸道五箇國ヲ靡シ侍リ、御邊モ何レノ國ニテモ打靡テ、院内ヘ被レ申テ、打取ノ國也トテ知行シ給ヘカシ、當時頼朝ガ國奉行ハ、不レ思寄ト被レ申タリ、

〔武家名目抄職名十五〕按、國奉行は、鎌倉右大將家の時より設けられし所職といへども、始の程は關東にのみ置れたりけんを、文治以後にいたりて、諸國にも同じく此奉行を設けて、國々を分配せられしなるべし、もとより諸國には守護人ありて國中の撿斷をつかさどるといへども、守護の職は、もと軍旅のことを專務とするがゆゑに、別に國奉行を定置て、其身は鎌倉に有ながら諸國の治否を察し、國人の雜訴犯過已下を沙汰せしめしなり、依てこれを雜人奉行、雜務奉行ともよびしと見えたり、

〔吾妻鏡三〕壽永三年〇元暦元年七月十六日壬寅、澀谷次郎高重者、勇敢之器、頗不レ耻二父祖一之由度々預二御感一、凡於レ事快然之餘、彼領掌之所、於二上野國黑河郷一止二國衙使入部一、可レ爲二別納一之由賜二御下文一、仍今日被レ仰二含其由於國奉行藤九郎盛長一云云、

〔吾妻鏡十八〕元久二年十二月廿四日丙子、黑柄次郎入道、去十日、於二上總國一致レ追二捕狼藉一之由、依レ有二公文名主之訴一、及二其沙汰一、光行行村爲二奉行一、行村今日爲二上總國奉行一云云、

〔吾妻鏡二十〕建暦二年八月廿七日庚子、安達左衞門尉申、上野國奉行辭退事、今日有二其沙汰一、無二恩許一、殊可レ行二撿斷一之由云云、

〔太田康有記〕建治三年四月廿日、常陸國雜人奉行事、越後左近大夫將監〇北條時國出仕之上者、可レ被レ返

時藤（備中守、法名道存、安堵、越訴、）

貞藤（使出羽守、道鑑被誅了、越訴）

〔北條九代記 下〕嘉元三年乙巳

宗宣（從四位下、陸奥守、）　永仁四年十月爲寄合衆、同爲京下奉行、

〔新御式目〕可渡他方引付事

一京下幷無足訴人及經年序沙汰事〇中略

正安二年七月五日　　陸奥守御判

　　　　　　　　　　相模守御判

上總前司殿

〔武家名目抄 職名十二下〕按、京下奉行といへるは、鎌倉の季世に至りて、永仁の頃、あらたに設たる所職なれど、隨分の重職たりしと見えて、大かた北條家の門族これに補せられたり、但其職掌に至ては、いまだ明證を得ざれば、詳にすべからずといへども、當時の俗諺に、上洛のことを京上といひ、京師より他方へ趣くを京下といひしによりて考るに、此奉行は、京都の官人訴訟の事にて下向せるか、又鎌倉より呼下したるたぐひの訴論を沙汰する所職なるべし、畢竟官家の人は、尊卑の論なく公家奉公の輩なれば、裁判の遲滯なからんが爲に、殊更此奉行を設られしと見えたり、

〔北條九代記 下〕永仁元年癸巳

時連　正安元年爲京下執筆

〔北條九代記 下〕應長元年辛亥

熙時（正五位下、相模守、本名貞泰、）　嘉元三年爲京下奉行

殿の世に、この奉行を越訴頭とも稱せしは、引付頭人たるもの、これを帶せし時の事なり、

〔關東評定傳 二〕文永四年丁卯

評定衆

越後守平實時（越訴奉行、四月辭越訴奉行、〇中略）　安達秋田城介藤原泰盛（越訴奉行、四月辭越訴奉行、）

〔新御式目〕弘安七五廿　卅八箇條

一越訴事、可定奉行人事、

〔北條九代記 下〕嘉元三年乙巳

宗宣（從四位下、陸奥守、）　永仁元年五月爲越訴奉行

〔北條九代記 下〕永仁五年九月廿九日評定、違歷越訴事、爲奉行人出仕引付可沙汰之由被仰出之、

六年二月越訴頭　道嚴　行藤（替瑜蓮）

〔北條九代記 下〕弘安八年乙酉

道嚴（攝津入道、俗名親致、）　永仁六年二月廿八日爲越訴奉行

永仁元年癸巳

行藤（前出羽守）　永仁六年二月廿八日爲越訴奉行

〔北條九代記 下〕永仁五年丁酉

宗方（北方、十）　正安三年八月廿五日爲越訴頭

〔北條九代記 下〕嘉元三年乙巳

宗宣（從四位下、陸奥守、）　嘉元元年八月廿七日復爲越訴奉行

〔尊卑分脈 四 中原〕親鑒（刑部大輔、隼人正、正五下、評定衆、越訴頭、）

〔諸家系圖纂 二十八 二階堂〕行藤

被ㇾ仰㆓下問注所㆒歟、

一問注難澁輩事

右於㆓遠國者㆒被㆑下㆓召文㆒、其後無㆑故至㆓于五ヶ月㆒百五十日不㆓參決㆒者、就㆓訴人申狀㆒可㆑有㆓其沙汰㆒、至㆓近國㆒者、召文日限可㆑有㆓沙汰㆒也、次兩方參對之後、遁㆓避問注㆒空過㆓二ヶ月㆒六十日者、雖㆑不㆑遂㆓其節㆒、直可㆑有㆓御成敗㆒也者、依㆑仰下知如㆑件、

建長七年辰十二月廿九日　相模守

陸奧守

越訴奉行

〔關東評定傳 二〕文永元年甲子

評定衆

越後守平實時 三番引付頭、六月十六日爲㆓二番頭㆒、十月廿五日爲㆓越訴奉行㆒、○中略　秋田城介藤原泰盛 六月十六日爲㆓三番引付頭㆒、十月廿五日爲㆓越訴奉行㆒、

〔北條九代記 下〕文永元年十月廿五日越訴頭　實時　泰盛

〔武家名目抄 職名十二下〕按、越訴奉行は、本奉行の沙汰、或は遲滯し、或は偏頗の事ある時、訴訟人越訴をいたすべき爲に設られしつかさにして、偏に奉行人等の私曲緩怠を防ぐべき職掌なれば、鎌倉殿の初政には置れしことなし、これ併當時の諸奉行、皆其職にかなへるが故なり、やや衰政の時にいたりて、奉行の職ひたすら家々の世職となり、其任に堪ざる凡庸の輩も任用せらるゝ事となりし故に、非法の沙汰まゝこれあるを以て、北條時宗執權の初、はじめて評定衆二人を以て此職に補せられ、奉行人の私曲を壓せられしなり、されば殊に其任を重くし、評定衆の中にても、多くは北條家の親戚たる輩擧用せられたり、其他長井攝津二階堂の輩も、たまたま補任せられしことあるは、且は評定の世家といひ、且は其才によれるなるべし、もと常日設置べきつかさにあらざれば、時宜に隨ひて、たま〳〵中絶のこともありしなり、○中略 鎌倉

一所詮、

〔武家名目抄 職名十二上〕按、問注奉行は、訴論の旨趣を問尋して、申詞を注記するつかさなれば、其職掌輕からず、鎌倉右大將家武家中興のはじめ、三善康信をして其職に定充られ、更にさるべき輩兩三人を隷して問注の事を奉行せしむ、康信元より吏才ありて、其任に堪たるが故なり、建久の初、有司の職員を定むるに及びて、康信卽問注所執事に補せられ、別に隷屬せし被管の輩寄人となり、更に其職に從事す、これ卽問注奉行なり、其後人數を加補せられし由は往々舊記にみゆ、

〔吾妻鏡 三十四〕仁治三年十二月十三日丙寅、六波羅御沙汰之間、問注奉行人、緩怠遲參之由依レ有二其聞一、定二時刻一、令レ著二到之一、毎月可レ進二關東一之旨、被レ仰二相州〇北條重時之許一云云、

〔吾妻鏡 三十六〕寬元三年三月卅日乙丑、諸人問注事、被レ差二奉行人一之處、一方遁避之由間依レ有二其聞一、自今以後、相二觸奉行人一、可レ註二交名一、就二彼狀一、可レ有二誡沙汰一之由、被二仰出一、加賀民部大夫〇三善康持奉二行之一、十二月廿五日丙戌、松浦執行源授、被レ召二籠其身一、上野入道日阿所領守護也、是與二鶴田五郎源馴一、就二肥前國松浦庄西郷内佐里村、壹岐泊牛牧等相論事一、授二非據之餘一、以レ馴令二惡口一問注奉行人越前兵庫助政宗一之由、構二申無實一之間、被レ尋二證人一之處、太田太郎兵衞尉康宗、志村太郎入道寂圓進二誓文一、不レ令二惡口一政宗之由也、仍於二馴領所一者、任二當知行一不レ可二相違一之旨、被二仰出一云云、中山城前司盛時奉二行之一、

〔吾妻鏡 三十九〕寶治二年十一月廿三日丙寅、問注奉行人等、閣二雜務一、稽古酒宴、放遊爲レ事、不レ面二謁訴人一、不レ見二究證文理非一之間、臨二評定座一之時、預二下問事等一、所レ答申頗令二停滯一、於二如レ然輩一者、不レ可レ召二仕之由、皆可相二觸之一趣、今日被レ仰二付太田民部大夫〇三善康連、信濃民部大夫入道行然等一云云、

〔新御式目〕一故武藏入道沙汰之時有二御成敗一事　寬元二二十八、條々評定事書、

内訴人、不レ進二懸物之押書一者、縱可レ遂二問注一由雖レ有二書下一、今更不レ及二召決一之旨、偏可レ相二觸奉行人等一之由、可

銘を加へ、さて五方引付に賦してこれを沙汰せしむ、故に賦別奉行、賦奉行等の稱あり、(銘を加ふとは、年月日と奉行の姓名を、狀の裏に略書するをいふ、)凡訴訟の沙汰は、問注所引付方、恩賞方、安堵方等、(引付以下は、皆所の被管なり、)政各分掌ありといへども、問注所はこれを以て主職とするが故に、何れの訴訟にもあづからざるはなし、故に當所の奉行を以て、賦をつかさどらしむる定格となりしなり、○註略かく分配の奉行を定置るゝ事は、ひとへに裁判の奉行をして、私曲の沙汰なからしめん爲の備と見えたり、

〔新御式目〕一諸人訴訟問狀事

訴狀爲非據者、不可賦之由可被仰問注所歟、尋明可成御敎書之旨、可被仰五方引付奉行人歟、

〔新編追加雜務〕庶子分領條

一宛給總領跡混領庶子分事

總領主有罪科之時、以別人令改補之處、庶子等稱不給御下文、無尋究知行實否、頃年被付總領之條、甚爲不便之儀歟、各別領知證據分明者、縱雖不帶安堵御下文、於本引付重有其沙汰、可返付之由被仰下之後、三方引付奉行人被結改畢、然者雖非本引付、於奉行人現在之方可申沙汰、但無奉行人事、於一二番分者、頭人依無相違、猶於本引付以他奉行人可糺明、於三番者被改頭人、至四番五番者、止其方々畢、彼三方分者、自問注所可賦出引付方也、

〔庭訓往來〕讓狀謀實、越境相論、未分甲乙之次第、譜代相傳之重書等者、於引付方可被遂御沙汰、頭人、上衆、闔閣、右筆、奉行人等、爲終日御評定、雖有窮屈、更無御休息、被勘判之、就問注所賦、(闔閣重賦之、)執筆書與問狀奉書於訴人之時、及兩度無音、仰使節被下召符、就違背赦狀者、直被下知于訴人、令召進之時者、被封下訴狀、番三問三答訴陳、於御前遂對決、任雌雄是非、奉行人令取捨事書、於引付與御評定異見所令成敗也、

〔吾妻鏡三十四〕仁治二年五月十日丁酉、江民部大夫以康、問注奉行之間、就有非勘之咎、被召放所領

賦奉行

〔史記八十二田單〕田單者、齊諸田疏屬也、〇中略田單又收民金得千溢、令卽墨富豪遣燕將曰、卽墨卽降、願無虜掠吾族家妻妾、令安堵、燕將大喜許之、

〔太田康有記〕建治三年二月廿九日、備中前司行有被仰安堵奉行云云、

〔北條九代記下〕弘安八年乙酉

道嚴攝津入道、俗名親致、　永仁四年爲案堵奉行

〔新編追加雜務〕未處分財條

一未所分跡御下文事正應二三五

外題安堵事

遺領配分之後、被返遺安堵奉行人之條不可然、自今以後引付奉行人可成御下文歟、

〔諸家系圖纂二十八藤堂〕行政

行政
├行光─行綱─┬盛綱使安堵奉行、攝津守、
│　　　　　　└政雄安堵奉行、評定衆、能登守、
└行村─行義─行有─行藤─時藤備中守、法名道存、安堵、越訴、

〔沙汰未練書〕一賦奉行トハ、最初本解狀ヲ奉ル奉行所也、關東六波羅有之、

〔沙汰未練書〕所務沙汰トハ、所領ノ田畠下地相論事也、於關東六波羅引付有其沙汰、所務相論事出來者、先調訴狀具書、所務賦可上之、賦奉行請取之、賦雙紙ニ沙汰之篇目ヲ書付テ、訴狀ニ加銘、追次第、五方引付ニ賦之、其手の開闔請取之、於引付御座以孔子定奉行人、奉行人治定之後、御敎書ヲ成也、以之爲訴訟之初、

〔武家名目抄職名十二上〕按、賦別奉行は、問注所の奉行人たる輩うけ給はる所職なり、賦は分附配當の意にして、此奉行たる者は、吏民訴訟の事ありて、訴狀を奉るの時これを受とり、其狀に

事也、〇中略左親衞〇北條時頼數返披覽之、知定已述獲麟一句、何無其沙汰哉、仰勳功奉行人等究淵源之後、可披露評定次之由、直令示付諏方兵衞入道給云云、

〔武家名目抄職名十二上〕按、恩澤奉行、或は勳功奉行ともいふ、此職は勳功の大小を考へて、恩賞の厚薄を定め、さて新恩の地を分付するつかさなれば、其職掌輕きにあらず、故に鎌倉殿の初政には、政所別當令、及問注所執事等の如き、宿老の輩其事をふさねて、別に奉行人をば定めざりしなり、後嘉祿中、評定衆を置るゝに及て、後藤基綱はじめて此職を命せられてより以來、評定衆の內にてこれをうけ給はることゝなれり、畢竟引付衆を以て任用せられざりしは、其職掌を重くせられし故なるべし、

〔新編追加雜務〕未處分財條

一未處分所領相論配分事延應四三十六

云相論之是非、云得分之多少、始終於引付可有其沙汰、其訴狀等者、安堵奉行人可賦之、同御下文施行事、以配分狀可付安堵奉行人、御下文被成下者、安堵奉行可下于給人、

〔武家名目抄職名十二上〕按、安堵とは、本領の地に安堵するいはれにして、たとへば、時世の轉變にあへるも、猶古の如く父祖の所領を知行するをいへり、或は久しく中絕せし舊領にても、故ありて返賜はるをば本領安堵といふ、〇註略すべて公家武家何れも本領安堵の時は、其證驗として、御教書もしくは下文奉書等をなし賜はる流例にして、後には其文書を直に安堵ともいひ、安堵下文、安堵御判などゝも稱す、又寺社領の地は、將軍家代始の度每に、判物を申たまはる事にて、これも亦安堵といふ、上件の事は、皆安堵奉行の主職として奉行するならひなり、

〔史記八高祖本紀〕漢元年十月、沛公兵、遂先諸侯至霸上、〇中略與父老約法三章耳、殺人者死、傷人及盜抵罪、餘悉除去秦法、諸吏人皆案堵如故、應劭曰、案、次第、堵、牆堵也、

癸巳、人々浴恩澤、因幡前司廣元、民部大夫行政、大藏丞頼平等奉行之云云、

〔吾妻鏡十五〕建久六年九月廿三日甲辰、御家人多以浴新恩、廣元行政頼平奉行之云云、

〔吾妻鏡十八〕建仁四年〇元久元年五月十日壬申、伊勢平氏等追討賞事有其沙汰、廣元朝臣、問注所入道〇善信等奉行之、

〔吾妻鏡三十〕文暦二年〇嘉禎元年九月十日庚午、長尾三郎兵衛尉光景、雖致度々勳功、未預恩賞事、駿河前司義村、幷同次郎泰村、屬恩澤奉行後藤大夫判官基綱、頻執申之、仍有沙汰、可有勸賞之旨被仰付基綱云云、

〔吾妻鏡三十一〕嘉禎二年八月卅日甲寅、於新造御所有恩澤沙汰、大膳權大夫師員奉行之、

〔吾妻鏡三十二〕嘉禎四年〇暦仁元年十二月十四日丁巳、今日評定、〇中略匠作〇北條時房前武州〇北條泰時被參御所、有恩澤沙汰、基綱奉行之、

〔吾妻鏡三十四〕仁治二年九月三日戊子、信濃國住人奈古又太郎者、承久三年大亂之時、乍施勳功、漏其賞、由頻雖愁申之、依無便宜之地、空送年序訖、但猶雖有如此不幸之類、於奈古軍忠者、勝其中之間、相構可被行賞由、故匠作〇北條時氏遺命也、仍左親衞〇北條經時爲不違其趣、今日執彼欵狀、加別御詞、被仰遣恩澤奉行人師員朝臣之許、師員申御返事云、奈古又太郎申勳功賞事、折紙給預候畢、早可申入候、恐恐謹言、

師員

北條大夫將監殿御返事

七日壬辰、有臨時評定、爲出羽前司行義奉行、細工所輩恩澤事有沙汰、野世五郎拜領相摸國横山五郎跡新田垣内等、是細工故日向房實圓本給地也、女子頻雖申子細、付藝能充給訖、今又爲御用人分勿論云云、

〔吾妻鏡三十八〕寛元五年〇寶治元年九月十一日辛酉、筑後左衞門次郎知定捧和字欵狀、是愁漏合戰賞

訴者、不足爲例之間、輒亘難許容之旨被仰出、又臨時內給事、於三分官等者、依事體可被申請之、至國司以上者、可被停止其競望之由云云、

〔吾妻鏡四十四〕建長六年十二月廿日戊子、今日評定之間、御家人官途事、就別仰及其沙汰、是於近習要須輩等事、非指朝要顯職者、每度雖不付成功、可被申請臨時內々〇々恐訴字給云云、但依人可有御斟酌歟云云、淸左衛門尉奉行之、

〔北條九代記下〕弘安八年乙酉

道嚴攝津入道、俗名親致、永仁三年爲官途奉行

〔北條九代記下〕嘉元三年乙巳

宗宣從四位下、陸奧守、乾元元年八月爲官途奉行

〔北條九代記下〕永仁元年癸巳

久時于時越後守、北方九、嘉元二年三月六日爲寄合衆、爲官途奉行、

〔武家名目抄職名十三〕按、官途奉行は、御家人たる輩、官爵任敍の事をうけ給はり沙汰する所職なり、〇中略但鎌倉殿の初政には、定日定まれるつかさをば置れず、奉行人の內にて、臨時にこれをうけたまはりしに、時々異論いできしかば、建長の頃にいたりては、既に其所職を定めしと見えて、多くは淸原滿定この事を奉行せり、又其後弘安の頃より、評定衆を以て此奉行に定めらるゝならひとなりぬ、これはたその所職を重くし、異論を壓せられしなるべし、

〔南齊書四十二王晏〕王晏、〇中略下詔曰、晏闒闠凡伍、少無特操、階緣人乏、班齒官途、〇下略

〔吾妻鏡九〕文治五年十月五日辛卯、有手越平太家綱之者、征伐之間候御共、竭其功、可被行賞之由言上、〇中略仍任申請之旨被仰下、爲散位親能奉行、早可充行之趣、下知內屋沙汰人等云云、

〔吾妻鏡十三〕建久四年正月廿七日乙未、安房平太以下輩浴新恩、廣元行政奉行云云、 十一月卅日

官途奉行

端座　相摸守　秋田城介義景　民部大夫康連　前尾張守時章　對馬守倫長　清左衞門尉滿定

〔御成敗式目追加〕一他人和與領事文永九十二十一評
以御恩之地、和與他人之條、兩方同心之趣非無不審、所詮被尋究其由緒之時、或爲報累年之芳心、或爲謝當時之懇志、兼日契約之條無其隱者不及子細、若親昵之儀無所據者、可被召和與地也、且存此趣、可申沙汰之由、可相觸五方引付頭人之旨、可被仰城介歟、

〔本田康有記〕建治三年四月十九日、明日可被始行御評定之由、爲城務奉行被仰下、　十二月十九日、御寄合、山内殿　相大守〇北條時宗　城務　康有　被召御前、奥州被申、六波羅政務條々、

一人數事　因幡守　美作守　筑後守　下野前司　山城前司　駿川二郎　備後民部大夫　出羽大夫判官　小笠原十郎入道　甲斐三郎左衞門尉　小笠原孫二郎入道　加賀二郎右衞門尉　式部二郎右衞門尉　出雲二郎左衞門尉

〔吾妻鏡　二十二〕建保二年十二月十二日壬寅、諸人官爵事者、家督之仁、存知其宮仕勞、可執申之、於直進款狀者、奉行人不可及披露之由被仰定之、廣元朝臣奉行、普相觸之云云、

〔吾妻鏡　三十二〕嘉禎四年〇暦仁元年九月廿七日己亥、御家人任官事、所望之輩、可令減納成功之由相議之旨、就有其聞、今日被經沙汰可停止云云、凡成功之官職之外、不可有御擧之趣被定云云、御在洛之次、望申官位族多之、又有御吹擧、仍爲固向後之法、及此評定、所詮勾勘者、相摸三郎入道眞昭也、

〔吾妻鏡　四十〕建長二年四月廿五日庚申、諸御家人任官之間、無本官之輩、直可任左右衞門尉之由望申之、向後可停止之被仰出、清左衞門尉〇滿定爲奉行、　十二月九日庚子、野本次郎行時、名國司所望事、父時員任能登守之時、不付成功、直令解除之上者、如被例可爲臨時内給之由申之、爲清左衞門尉奉行、今日有沙汰、其父時員、屬越後入道勝圓在京之時、被内擧自然令任歟、被堅法之後法之〇法之二字恐

定

御物沙汰日結番事

一番（三日、九日、十三日、十七日、廿三日、）攝津前司（○中原師員）　若狹前司（○北條泰村）　下野前司（○藤原泰綱）　對馬前司（○三善倫重）

太田民部大夫（○三善康連）

二番（四日、八日、廿四日、廿八日、）佐渡前司（○藤原基綱）　大宰少貳（○藤原爲佐）　出羽前司（○藤原行義）　清左衞門尉（○清原滿定）

三番（六日、十四日、十九日、廿六日、廿九日、）信濃民部大夫入道（○藤原行盛）　甲斐前司（○大江泰秀）　秋田城介（○藤原義景）　加賀

民部大夫（○三善康時）

右守次第、無懈怠可被參懃之狀如件、

仁治四年二月日

評定奉行

〔吾妻鏡四十一〕建長三年六月五日甲午、有評定、（○中略）畫政隨一云云、次五方引付、更被結番之、爲六方、秋田城介義景、輕服之後始出仕、奉行此事云云、

〔武家名目抄（職名十三）〕按、評定奉行は、評定衆の內、長老たる輩のうけたまはるつかさにして、評定衆の進退を指揮する職掌なれば引付頭を兼ざるものは補せらるゝ事なし、評定もしくは寄合の席に於ても、管領の次、問注所執事の上に著して、席中の事を攝す、評定の時、著到の次第を定むるは、元よりそのつかさどる所なり、其重職たる事推てしるべし、（但北條家の一門は、引付頭を兼るものといへども、除かれて補任せられず、これかの門族は年臈なくして評定衆となり、引付頭をもかぬるが故なり、）

〔吾妻鏡四十二〕建長四年四月十四日丁卯、辰剋爲秋田城介義景奉行、故可有政所始之由被仰下之、仍兩國司（布衣○北條時賴、北條重時、）被參政所、各著座、（○中略）次可有評定始之旨被仰出、秋田城介奉行云云、奧州以下參上、各著座、

奧座　陸奧守　右馬權頭政村　武藏守朝直　前出羽守行義、

公事奉行

〔吾妻鏡十一〕建久二年正月十五日甲子、被㆑行㆓政所吉書始㆒、○中略

公事奉行人　前掃部頭藤原朝臣親能　筑後權守同朝臣俊兼　前隼人佑三善朝臣康清　文章生同朝臣宣衡　民部丞平朝臣盛時　左京進中原朝臣仲業　前豐前介清原眞人實俊

〔武家名目抄職名十二上〕按、鎌倉右大將家、武家草創のはじめ、府を關東にひらき、政所、問注所、侍所等の諸司を置て、治務を施行せしむ、○中略此時また更に公事奉行人を置く、これ政所問注所の所司と共に、政理をたすけ命令を奉行するものなり、是時に當て、麾下の諸侍は、悉く武藝を專とし、汗馬の功少からずといへども、素より文事にならはずして、治務を行ふに便ならざるを以て、中原、清原、三善、藤原等の諸氏、明經明法の道に通じ、或は算筆の術に熟せる輩を京師より招き、祿をあたへて家人に列し、府務を施行せしむ、政所、問注所、公事奉行人の輩皆是なり、○中略凡そ公事奉行人のつかさどる所一事にとゞまらざるが故に、廣く公事を以て稱せるなり、然れども正しき職名ならざるに依て、常にはひとへに奉行人とのみいへり、後評定引付の兩衆を設け、政所問注所の兩寄人を置るゝに及て、其輩ひとしく公事を奉行す故に奉行の員倍増せり、其内より諸事の奉行に定めらるゝ時、或は恩澤奉行、又は安堵奉行、問注奉行等の稱あり、其以下の諸奉行皆是なり、諸奉行の内、常日其職を掌するもあり、又臨時に命ぜらるゝもありて一樣ならず、○中略或はこの輩を御物沙汰衆とも稱す、御物は公事の意に通じ、近世御用といへる辭、大かたこれに類せり、沙汰は奉行の義にかよへばなり、

御物沙汰衆

〔吾妻鏡二十〕建曆二年九月廿六日己巳、御物沙汰衆、就㆓奉公勤厚㆒、賜㆓祿物㆒、是月迫宜式也、而去年事延引云云、

〔吾妻鏡三十五〕仁治四年○寛元元年二月廿六日癸酉、諸人訴論事、爲㆑無㆓成敗懈緩㆒、今日於㆓左親衞○北條經時御亭㆒、有㆓其沙汰㆒、且被㆑點㆓其日々㆒、且被㆑結㆓人數㆒、

〔新御式目〕一庭中事

被召先事書幷本奉行、當日可有御沙汰、論人令當參、可陳申之由者可被聞召歟、

〔新御式目〕一越訴事永仁五三六

右自今以後、可停止之、但有評定、令落居、於餘殘事者、本奉行人可申沙汰、

〔御成敗式目追加〕一鎮西爲宗神領事、甲乙人等、稱沽却質券之地、猥管領之由有其聞、尋明子細、如舊爲被返付、所差遣明石民部大夫行宗、長田左衞門尉敎經、兵庫助三郎政行也、大友兵庫頭賴泰法師、越前守盛宗、大宰少貳經資法師、可爲合奉行、或帶康元前後之下知、或雖經知行年序、爲沽却質券之地之成條無異議者、可沙汰付之云々、

〔太田康有記〕建治三年八月廿九日、自山内殿被召之間馳參之處、召御前被仰云、○中略 山名二郎太郎直康、飯泉兵衞二郎祐光、岩間左衞門太郎行重、可勤合奉行役之由可召仰云々、 九月六日、五番執筆合奉行交名付城務、○秋田城介安達泰盛 十二月十四日、豐後新左衞門尉、被召加于合奉行之由、爲城務奉被仰下、

〔武家名目抄職名十二下〕按本奉行、合奉行は、もと一事沙汰の上にてよべる稱呼なれば、全く定まりたる職名にはあらず、鎌倉殿武家中興の初、訴訟の事あるに臨みて、家司の内より專當の奉行を定め其沙汰を致さしむ、これいはゆる本奉行なり、又政所寄人の内より一人を以て其副たらしむ、これを合奉行といふ、さればいづれも常日の所職にてはなかりしを、引付衆を置れし後、其衆を以て本奉行に定むる事は臨時の職掌にて、初の格に失ならざりけれど、合奉行に至ては、寄人の内より常に定置るゝ例となりて、おのづから職名の如くなりしなり、○註略 但訴訟、沙汰の外、事ありて定めらるゝ兩奉行は必此例に准せず、事の大小に從て人數の多少もあり、又門地階級にもかゝはらずして命せらるればなり、

〔新御式目〕弘安七五廿七評

引付衆幷奉行事

右引付衆殊專清潔可勵參、奉行人、爲廉直致忠勤者、尤可被賞翫、挿奸心現私曲者、永不可召仕、仍引付忠否、奉行曲直、頭人不憚于人、不存緩怠、連々可注申也、引付外奉行人、政所問注所執事可申沙汰矣、

〔新御式目〕弘安七五廿　卅八箇條

依諸人沙汰事、殿中人不可遣使者於奉行人許事、

〔東寺文書〕武家名目抄職名七上所引〕常陸國信太庄雜掌定祐申、初崎鄕年貢事、正中二年以來、對捍之由就訴申、度々尋下之上、去八月八日以奉行人等使者、雖相觸、無音難澀之條、無理之所致歟、未遂結解、可令究濟之狀、依仰執達如件、

元德二年九月十九日　　右馬權頭在判

相模守在判

遠江修理亮殿

〔太平記三十五〕北野通夜物語事附青砥左衛門事

或時德宗領ニ沙汰出來テ、地下ノ公文ト、相模守時頼〇北條ト訴陳ニ番事アリ、理非懸隔シテ、公文ガ申處道理ナリケレドモ、奉行、頭人、評定衆、皆德宗領ニ憚テ、公文ヲ負シケルヲ、青砥左衛門只一人、權門ニモ不恐、理ノ當ル處ヲ具ニ申立テ、遂ニ相模守ヲゾ負シケル、

〔御成敗式目〕一閣本奉行人付別人企訴訟事

右閣本奉行人、更付別人、内々企訴訟之間、參差之沙汰、不慮而出來歟、仍於訴人者、暫可被抑裁許、至執申人者、可有御禁制、奉行人若令緩怠、空經廿箇日者、於庭中可申之、

ふ中にも、各階級はありながら、いづれも政務の席に列なりて訴訟を沙汰し、國用を辨ずる重職なれば引付衆兩寄人等にも、必評定衆に至るべき家族の輩を以て補せらるゝ事なり、但北條一家の輩に限りて、補任の次第、此例にかゝはらざるもの、まゝ聞ゆ、其他武弁の家に生れし者も、たま〳〵任用せられし輩あれど、これは其身によれるものにて、おのづから一例になり、又評定衆にいたるべからざる家族も、兩寄人にはまれに補任せられし事あれど、爰には其大概をいへり、

〔吾妻鏡六〕文治二年七月廿八日癸卯、帥中納言奉書到來、新日吉領武藏國河肥庄地頭、對捍去々年乃貢事、并同領長門國向津奧庄、武士狼藉事、取庄家解狀被下之、早可令尋成敗給之由被載之、○中略河肥事者、請所也、但領主幼少之間、如請料事、殊有不法事歟、差別奉行人可令致嚴密辨之旨、被遣御書於武藏守之許云云、俊兼爲奉行云云、

〔吾妻鏡十五〕建久六年十月一日壬子、武藏國以下、御分國所課、本所乃貢事、可致不日沙汰之旨有嚴密仰、而今年土民等愁申損亡事等間、定難有合期進濟歟之由、奉行人右衞門尉能員、散位行政等申之云云、

〔吾妻鏡脫漏〕元仁二年○嘉祿元年九月廿日戊寅、武州○北條泰時召集奉行人等令對面給、有被仰含事、各賢不肖付而、可被加賞罰之由云云、

〔吾妻鏡二十九〕天福二年○文曆元年七月六日、仰家司等召起請、是奉行事、不謂親疎、不論貴賤、各存正儀、可致沙汰之趣也、其衆十七人、

前山城守藤原秀朝　前山城守中原盛長　散位大江以康　散位三善康持　民部大丞三善康連　中務丞大江俊行　彈正忠大江以基　大膳進大江盛行　左衞門尉惟宗　同重通　兵庫允三善倫忠　藤原賴俊　沙彌行忍　惟宗行通　三善康政政ニ康宗

○按ズルニ、コノ内三善康連ハ評定衆ナリ、其餘ノ十六人ハ、評定傳ニ見エズ、思フニ政所寄人ニテ、建長以後ニ謂ユル引付衆ナルベシ、

總載

ノ衣服什器ヲ出納スルコトヲ掌ル、

寺社奉行ハ、神社佛寺ノ事ヲ管掌ス、祈禱奉幣ニ關シテハ、神寶奉行、奉幣使、祈禱奉行、神事奉行、佛事奉行等アリ、並ニ臨時ノ職ナリ、

作事奉行ハ、殿舍ノ修造ヨリ始メ、一切土木ノ事ヲ掌リ、又一寺社ノ造營ニハ、特ニ造營奉行ヲ設ク、此他、奉行多シト雖モ今皆贅セズ、

〔倭訓栞前編二十六〕ぶぎやう　吏學指南に、符到奉行とは、唐總章中、裴行儉等定詮注之法、令主者受旨奉行、各給以符と見えたる是也、今いふ奉行役此より出、

〔玉葉和歌集雜十七〕後白川院かくれさせ給にける後の御事を、經房卿に奉行すべきよし仰おかれたりけるを聞て申つかはしける、　寂蓮法師〇歌略

〔辨內侍日記上〕寛元四年七月七日、きかうてむの夜、頭中將まさいへ事ども奉行す、あさかれゐにて、こう當の內侍ことぢたてられて、ちとかきならしていだされしこそいとおもしろかりしか、頭中將奉行がらにや、今宵の雨もしめやかにふるなど人々おほせらるれば、少將內侍、

しめ〴〵と今宵の雨のふるまひにぶぎやうの人のけしきをぞしる

〔武家名目抄職名七上〕按、鎌倉殿の時、いまだ評定引付の兩衆を置れざりし程は、家司として命令を奉行するものを公事奉行人と稱し、常には奉行人とのみもとなへしなり、これはた定まれる職號にもあらざればなるべし、もとより文官の長たるが故に、大かた文筆に堪ぬる京家の官人を招きて此職に充られ、さてその職を世々にせり、嘉祿に評定衆を置れ、建長に引付衆を設くるに及びて、みな奉行人に補すべき門族を以て其衆に定められしかば、評定衆の內にも、政所問注所の執事引付頭人など帶せざる輩は、もとの稱呼にならひて奉行人とも稱せしかば、殊更引付衆政所問注所の兩寄人等は、なべて奉行人とよばれたり、されば同奉行人とい

古事類苑

官位部三十八

鎌倉職員三

諸奉行

鎌倉幕府ノ奉行ハ、政務ニ參與シ、公事ヲ奉行スルモノニシテ、或ハ特ニ公事奉行ト云フアリ、又御物沙汰衆ト云フ、而シテ主トシテ其事ニ當ルモノヲ本奉行ト云ヒ、本奉行ニ副タルモノヲ合奉行ト云フ、又常置ノモノアリ、臨時ノモノアリ、幕府創業ノ際ニ置キタルアリ、其末路ニ置キタルアリ、或ハ中途ニシテ廢セラレタルアリ、

評定奉行ハ、評定衆ノ中ヨリ擇ビテ之ヲ補スルモノニテ、政所評定ノ事ヲ總ベ、評定衆ノ進退ヲ掌ル、官途奉行ハ、幕府家人ノ任官敍爵ヲ掌リ、恩澤奉行ハ、一ニ勳功奉行トモ云フ、將士ノ勳功ヲ論ジテ恩賞ヲ行フ事ヲ掌ル、安堵奉行ハ、父祖ノ領地ヲ傳領スルニ就キテ、其處置ヲ爲スヲ職トシ、賦奉行ハ、訴狀ヲ受ケテ、之ヲ所管ノ人ニ分賦スル職ニシテ、問注奉行、越訴奉行、京下奉行モ共ニ訴訟ノ事ヲ管掌ス、

國奉行ハ、其身鎌倉ニ在リテ諸國ヲ分掌シ、其治否ヲ監察シ、雜訴犯過等ヲ糺判スルモノニテ、評定衆引付衆ヲ以テ之ニ充ツ、或ハ某國奉行トモ云フ、保奉行ハ、保ノ檢斷ヲ掌ルモノニテ、又保檢斷奉行トモ云フ、地奉行ハ、其地ノ市街道路屋舍等ノ事ニ從フ、然レドモ此兩職ハ、互ニ相通ジテ行フモノナリ、過書奉行ハ、驛路ノ事ヲ掌ルモノニテ、過所ヲ下スモノナリ、勘定奉行ハ、年貢ノ結解勘定ヲ掌リ、倉奉行ハ、租稅ヲ出納スルコトヲ管シ、納殿奉行ハ、將軍

郎被召加小侍番帳、武藤少卿景頼傳仰云云、　十一月八日辛未、深栖兵庫助孫、平嶋藏人太郎重頼入小侍番帳、和泉前司行方奉仰、加小侍云云、　十二月十七日庚戌、梶原上野六郎被加小侍番帳、武藤少卿景頼傳仰於小侍所云云、

〔吾妻鏡五十〕文應二年〇弘長元年十一月廿二日庚辰、押垂齋藤次郎被召加小侍所番帳、武藤少卿景頼申沙汰之云云、

〔吾妻鏡五十一〕弘長三年四月十六日乙丑、河野四郎通行子息九郎經通、入小侍番帳云云、和泉前司〇藤原行方傳仰於小侍云云、

番帳

的始射手以下事等有其沙汰、射手有故障等、不可有免許由及群議云云、相摸左近大夫將監、彈正少弼(○北條業時)等奉行之、

〔吾妻鏡 三十四〕仁治二年十二月八日辛酉、小侍所番帳、更被改之、每番堪諸事藝能之者一人、必被加之、手跡、弓馬、蹴鞠、管絃、郢曲以下事云云、諸人隨其志可始如此一藝之由被仰下、是於時依可有御要也、陸奧掃部助被相觸此趣於人々云云、

〔吾妻鏡 四十三〕建長五年六月廿五日丁丑、狩野新左衛門尉、入小侍番帳、武藤左衛門尉景賴傳仰於奉行人云云、

〔吾妻鏡 四十六〕建長八年(○康元元年)四月十八日己卯、駿河藏人次郎入小侍番帳、二番云云、　七月五日癸巳、尾張右衛門太郎、同子息五郎、可入小侍番帳之由、景賴申沙汰之、達小侍云云、　十二月廿五日壬午、小侍所番帳事有其沙汰、於廂等近々事者、於御前直宜有御計、小侍所者、本所也、爲總人數事之間、殊可糺父祖之經歷、三代不列其人數者、雖爲勤役公事之御家人、輙不可有御許容之旨被定之云云、

〔吾妻鏡 四十七〕康元二年(○正嘉元年)五月廿二日丙子、安房又太郎加小侍番帳、日來者爲非番所令著到也、

〔吾妻鏡 四十九〕正元二年(○文應元年)七月廿三日己丑、小侍番帳、更淸書之、雖被仰中山城前司盛時、依申所勞之由、佐藤民部大夫行幹、又奉仰所染筆也、是以和泉三郎左衛門尉行章、被下廂御簡於小侍所、廂與小侍、每其番(自一番至六番)不參差、爲同日之樣令結番之、可書改之由依被仰下如此云云、且淸書仁、以前兩人可然之旨、爲相州禪室(○北條時賴)御計云云、　廿五日辛卯、小侍番帳事有其沙汰、於書樣雖爲次第不同之儀、何無所思哉、聊立次第、可書改之由被仰下云云、和泉前司行方、武藤少卿景賴等爲奉行也、是日來結番之體、不云官位、不論嫡庶、且依宿老、且隨勤否被書云云、　十月八日壬寅、小早河殿三

明春正月朔、可有御行始、供奉人事可相催之由、武藤少卿傳仰於小侍所、而為垸飯出仕人々、於御所庭上、兼取座籍所差並札也、仍光泰實俊、行向其所、就札所見註交名進上、申下御點相觸其旨云云、

〔吾妻鏡五十〕文應二年〇弘長元年四月廿四日乙卯、將軍家(宗尊)御騎馬入御于奧州禪門〇北條重時極樂寺新造山庄、〇中略明日依可有御笠懸、射手事、太郎殿〇北條時宗祗候人、幷可然諸家家人等可被催具之由、行方、景頼、奉仰觸申小侍所云云、　六月十二日壬寅、來八月放生會御參宮供奉人事、自小侍所任例注交名、為申下御點、被付武藤少卿景頼云云、　七月廿九日己丑、武藏前司、筑前入道行善、常陸入道行日等、放生會之時、可參候于廻廊之由、可相觸之旨被仰下云云、隨兵之中、在國輩四人、進辭退請文、昨日自小侍所、付武藤少卿景頼之間、今日披露、此外條々有其沙汰云云、〇中略

官人事　足利大夫判官家氏　隱岐大夫判官行氏　出羽大夫判官行有　上野大夫判官廣綱

以上三〇三恐四誤人、被催促之處、行有行氏者、已辭職訖、蒙在國恩許之由捧請文、廣綱者申領狀、家氏者、當時在國之間、可被催否、去廿七日、於相州禪室御所有沙汰、可申評定之由治定、仍今日實俊光泰等披露之處、早可相催者、則被成下御敎書云云、　卅日庚寅、鎌田次郎左衛門尉、春六郎左衛門尉等、居木工權頭親家、望申放生會供奉、親家內々取御氣色、觸申小侍所之間、依可令披露、付景頼云云、　八月二日壬辰、伊勢入道行願觸申小侍所云、愚息頼綱三郎左衛門尉當時在國之處、被加放生會供奉人訖、先立鹿食事云云、可有免許歟云云、

〔吾妻鏡五十一〕弘長三年六月廿六日甲戌、來八月放生會御參宮、供奉總人數記、為申下御點、自小侍所被付和泉前司行方云云、　廿八日丙子、放生會御參宮供奉人散狀有御點、左點布衣、右隨兵、左點端者、直垂著云云、被下小侍之間光泰實俊等廻之云云、

〔吾妻鏡五十二〕文永二年閏四月廿日戊子、御所無人之由依有其聞、先可註進當番不參衆、可被處罪科之旨、左典厩〇北條時宗今日被遣御使於小侍云云、　十二月十八日壬午、今日於小侍所、明年正月御

家之禮訖、可謂比興、然者弓馬藝者、追可試會、先於當座被召決相撲勝負、可有威否御沙汰之由云云、將軍家殊有御入興、爰或逐電、或令固辭、爲陸奥掃部助奉行、於遁避之輩者、永不可被召仕之旨、再三依仰含、十餘輩愁及手合、不撤衣裳、長田兵衞太郎被召出、候砌判申勝負是非、依爲譜代相撲也、 十一日壬子、奉公諸人面々、可爲弓馬藝事之由被仰出、今日爲陸奥掃部助、和泉前司行方、武藤少卿景賴等奉行、於御所中被觸廻之、相州內々令申行給之故也、於馬場殿連日可有遠笠懸小笠懸、御所內內可令射給之由云云、

〔吾妻鏡四十七〕康元二年〇正嘉元年十二月十六日丙申、評定、明春三嶋伊豆宮根御參詣事有沙汰、仍任例爲供奉注總人數可進覽之旨、被仰小侍所、和泉前司行方傳仰云云、 十八日戊戌、二所御參詣供奉、總人數記、陸奥掃部助付和泉前司行方令進覽之處、件人數者、悉可加催促之由云云、仍以之用散狀所被仰也、先々就御點催其衆、今度儀、似被始例云云、

〔吾妻鏡四十八〕正嘉二年正月二日壬子、爲御行始供奉、仰小侍所、書注昨日著庭人數、申下御點、和泉前司行方奉行之、 六月一日己卯、和泉前司行方進勝長壽院供養日供奉人散狀於武州、武州被奉御所之處、猶可催加人數之由被仰下之間、被相觸其旨於越後守〇北條實時云云、 十七日乙未、來八月鶴岡放生會御參宮供奉人事、爲申下御點、昨日自小侍所如例注總人數、被付武藤少卿景賴之處稱所勞返遣之間、今日被付進武州、早可申沙汰之旨領狀云云、 十八日丙申、武州申下供奉人御點被遣越後守之許、牧野太郎兵衞尉爲中使云云、 右御點布衣、左長點隨兵、短點帶劒云云、

〔吾妻鏡四十九〕正元二年〇文應元年十一月十八日辛巳、二所〇伊豆箱根御參詣精進事、明日者延引、可爲廿一日之由給定、仍武州被觸仰其趣於小侍所、周東兵衞五郎爲御使、 十二月十六日己酉、明年正月御弓始射手等事、被差定之處、稱所勞申障之輩、相交之間、今日於小侍所、相摸太郎殿〇北條時宗越後守〇北條實時等經談合、自由對捍不可然、內調之時企參上、可申子細之旨被下御教書云云、 廿九日壬戌、

上洛事、有評議、爲康俊奉行御路次間條々事、悉被召付奉行人等、諸人不可漏供奉、於信濃式部大夫入道行然者可候御留主云云、

〔吾妻鏡三十五〕仁治四年〇寛元元年七月十七日壬辰、臨時御出、供奉人事、依不知其參否、每度相催之條、且遲引基也、且奉行人煩也、兼令存知之、聞御出期者、不論晝夜、爲令應御要、可結番之旨、被仰陸奥掃部助之間、以當時不祗候人數、令結番之、前大藏少輔行方、於小侍加清書、所押臺所之上也、又就在國等雖不知此人數、於時隨令參上、可被召具之、雖爲此衆、若有數輩同時故障者、可催加他番人之由被仰出云云、

〔吾妻鏡四十〕建長二年十二月廿日辛亥、御所中頗無人、自小侍所頻雖被加催促、似無其詮、仍同申相州〇北條時賴間、可令披露之旨就令返答給、今日有其沙汰、於不法輩者被止出仕、加年〇年上下恐有脱字勤厚人於其闕、始可令結番之由被定之、清左衞門尉讀申彼事書云云、

〔吾妻鏡四十一〕建長四年正月十四日己亥、有御弓始、然多賀谷五郎景茂被加清撰記、今日欲加射手之處、今朝以相州〇北條時賴安東左衞門光成爲御使、而可然依不在射手、可被止之由、被仰小侍所、仍被止之間、合手海野四郎助氏同被止之、所殘之十人、射二五度云云、

〔吾妻鏡四十二〕建長四年七月四日丙戌、今日小侍所式條被定之云云、

〔吾妻鏡四十三〕建長五年七月八日甲申、來月鶴岡八幡宮放生會、將軍家依可有御參宮、於小侍所書整供奉人交名等、所謂可著布衣之人、有可著直垂帶劍之壯士、又有可爲隨兵者、今日先廻布衣散狀、其中於宿老之可然者、可參候宮寺廻廊之由云云、

〔吾妻鏡四十四〕建長六年三月廿日癸巳、小侍所事、可令陸奥彌四郎時茂奉行之由被仰下之、陸奥掃部助重服之程也、　閏五月一日壬寅、相州〇北條時賴隨身下若等參御所給、將軍家出御廣御所、御酒宴及數獻、近習人々被召出之各乘醉、于時相州被申云、近年武藝廢而、自他門共好非職才藝事、已忘吾

所司

職掌

維貞（従四位下、修理大夫、本名貞宗、）嘉元三年五月六日爲小侍奉行、

〔北條九代記 下〕正和五年丙辰

高時（正五位下相模守）應長元年正月十七日爲小侍奉行、（九）

〔吾妻鏡 四十三〕建長五年正月二日辛巳、明日依可有御行始于相州（○北條時頼）御亭、今夕被催供奉人、是以元日著庭衆所被撰也、小侍所司、平岡左衛門尉實俊、令朝夕雜色等廻其散狀云云、

〔吾妻鏡 四十六〕建長八年（○康元元年）七月十七日乙巳、將軍家（○藤原頼嗣）御參山内最明寺、此精舍建立之後、始御禮佛也、相州（○北條時頼）可被遂御素懷之由、内々有其沙汰、依思食彼餘波歟、殊被刷今日御出行列、先隨兵十二人、（騎馬○中略）

次小侍所司　平岡左衛門尉實俊

〔吾妻鏡 四十八〕正嘉二年三月一日辛亥、辰剋將軍家（○宗尊親王）二所御進發、（初度）著淨衣、人々行列、和泉前司行方爲奉行、隨兵行列、平三郎左衛門尉盛時奉行之、（○中略）

次小侍所司　平岡左衛門尉實俊　次　武藏守長時　相模太郎（相並）　次侍所司　平三郎左衛門尉盛時

〔吾妻鏡 五十〕文應二年（○弘長元年）六月廿七日丁巳、新相模三郎時村、辭放生會隨兵、是去廿三日、兄阿闍梨入滅輕服故也、依之小侍所司平岡左衛門尉實俊、相觸和泉前司行方、間有沙汰、兄弟輕服日數爲五十日、八月十五日者、猶日數内也、可有憚否、可尋問宮寺者、行方相尋先規於鶴岡別當僧正隆辨之處、於隨兵者、候廟庭外之間、先例不憚之由報申、仍無殊奇、　九月十九日戊寅、小侍所司工藤三郎左衛門尉光泰、二所參詣之間、著到等事、暫可令小野澤次郎時仲奉行之由被定云云、

〔吾妻鏡 三十二〕嘉禎四年（○暦仁元年）正月十八日乙丑、匠作（○北條時房）左京兆（○北條泰時）被候小侍所、主計頭師員、毛利藏人大夫入道西阿、玄蕃頭基綱、隱岐入道行西、加賀前司康俊等、依召參進、將軍家（○藤原頼經）御

〔吾妻鏡四十一〕建長三年十二月七日壬戌、宮内少輔泰氏、自申出家之過、依之所領下總國埴生庄被召離之、陸奥播部助實時給之、是不諧之上、小侍別當勞依危也、〇下略

〔吾妻鏡四十三〕建長五年正月十六日乙未、來廿一日、依可有御參于鶴岡八幡宮、被催促供奉人、〇中略自西門出御若宮大路、〇中略供奉人事、就御點交名、依可催促參上之處、佐々木壹岐前司、足立左衞門尉、而播部助實時、爲小侍別當、不知之、於供奉路次、各承引令參歟之由尋問之處、無分明返答云云、

〔北條九代記下〕文永元年甲子二月廿八日改元

時宗相摸守、正五位下、法光寺、　文應元年二月爲小侍

〇按ズルニ、小侍ハ卽チ小侍所別當ナラン、

〔吾妻鏡五十一〕弘長三年三月十三日癸巳、武藤少卿遣奉書於小侍所別當云、二所御精進、自來月廿一日可被始也、御共幷參籠人々、如先度有御催促、可被駐進、且鳥食自今月廿日之頃可有憚、兼日可被相觸云云、　八月九日丙辰、將軍家〇宗尊親王御上洛事有其沙汰、來十月三日御進發必然之間、路次供奉人巳下事被定之、

〔北條九代記下〕正安三年辛丑

師時相摸守、從四位下、武藏四郎、　弘安七年七月爲小侍所

嘉元三年乙巳

宗宣從四位下、陸奥守、　永仁元年七月爲小侍奉行

〇按ズルニ、小侍奉行トハ、小侍別當ノ事ヲ云フナラン、

〔北條九代記下〕應長元年辛亥四月廿八日改元

熙時正五位下、相摸守、本名貞泰、　永仁六年十二月九日爲小侍

嘉暦元年丙寅四月廿九日改元

〔吾妻鏡二十七〕寛喜二年三月二日、駿河守(○北條重時)依可候六波羅、辭小侍別當間、今日以陸奥五郎實泰、爲其替云云、

〔吾妻鏡二十九〕天福二年(○文暦元年)六月卅日、陸奥五郎依病痾辭小侍所別當、而此事爲重職、子息太郎實時年少之間、難讓補之由、雖有其沙汰、武州(○北條泰時)雖重役、雖年少、可加扶持之由、依令申請給、所被仰付也云云、八月一日、北條彌四郎經時被補小侍所別當、是陸奥太郎實時依令奉行竹御所(○將軍賴經室、此年七月二十七日死、)御後事、有憚、暫不可出仕之故也云云、

〔吾妻鏡三十一〕嘉禎二年十二月廿六日己酉、今日北條彌四郎被辭申小侍所別當云云、

〔吾妻鏡三十二〕嘉禎四年(○曆仁元年)正月廿日丁卯、御弓始也、今年依可爲御物忌、不可有此儀之由、窮冬雖被定、故被遂之、射手事、昨夕俄於御前被仰合于如始、義村爲催促、被下日記於陸奥太郎云云、廿八日乙亥、將軍家(○藤原賴經)御上洛、二月七日癸未、著御橋本驛、先之人々點定家々間、陸奥太郎實時主、宿于舞澤松原、及戌剋、京兆(○北條泰時)令聞彼野宿事給、被仰曰、實時者小侍別當、重職異他、尤可候于御所邊之仁也、而依無其所、止宿驛上者、予騷座於里家之條有其恐云云、仍令到于陸奥太郎野宿之間、宮内少輔泰氏、駿河前司義村以下人々、多以辭申旅宿、參件松原、還爲諸人之煩、早可令入本所給之由各申之、又遠山大和守辭旅店、(御所近々)招請陸奥太郎之間、京兆憚人々禮、令歸本宿給、太郎主施面目、宿于和州本所云云、十六日壬辰、今日將軍家御逗留野路驛、明日御入洛之間、依被定隨兵已下行列也、小侍所別當陸奥太郎實時、注供奉人被持參之、匠作(○北條時房)京兆於御前令定左右給之後、被返奉行人云云、所被載將軍家御判於件散狀端也、

〔吾妻鏡三十六〕寛元三年十一月四日乙酉、入道大納言家(○藤原賴經)明春可有御上洛事、被經御沙汰、供奉人數五十三人被定之、既被下其散狀於侍(○侍上恐脱小字)所別當陸奥掃部助(實時)、其上所被差副別奉行々人、能登前司、信濃民部大夫入道等也、

雜載

侍所ニ渡シテ、水火責ヲゾ致ケル、

〔吾妻鏡十四〕建久五年五月廿四日甲申、侍所著到等事、義盛〇和田景時〇梶原故障之時者、可致沙汰之由、被仰付大友左近將監能直云云、

〔吾妻鏡三十三〕延應二年〇仁治元年十二月十二日辛未、洛中辻々篝松用途事、被定侍所處、對捍之由、依有其聞、隨多少可令充造篝屋、只可註申交名之由、今日被仰六波羅云云、

小侍所

小侍所ハ、承久元年創設ス、諸士ノ宿衞扈從等ノ事ヲ掌ル所ニシテ、其制大約侍所ノ所職ヲ分掌スルニ過ギザルガ如シ、而シテ此ニ更直スル者ハ、將軍ニ昵近スルニ由リ、三世勤仕ノ者ノ子弟ヲ擇ビ、又手跡、弓馬、蹴鞠、管絃、郢曲等ノ事ヲ學習セシメタリ、

本所ノ職員ニ別當アリ、所司アリ、別當ハ北條重時始テ之ニ補ス、以後北條氏一族專補ノ職タリ、所司ハ侍所所司ト同ジク本所別當ノ補佐ナリ、

名稱

〔撮壤集下武職〕小侍所

初置小侍所別當

〔吾妻鏡二十四〕承久元年七月廿八日辛酉、有宿侍等定、於前代者、可然輩、皆雖著到于西侍、當時郭内不及手廣之間、無侍、仍各候小侍、可令昵近守護由云云、則今日所始補小侍別當也、陸奧三郎重時、年廿二云云

〔武家名目抄職名十上〕承久に至りて、更に小侍別當を設け、平日諸侍の進退をまかせしかば、侍所の職掌、兩所に分れたるが如くなれり、

職員 別當

〔吾妻鏡二十四〕承久元年七月廿八日辛酉、今日所始補小侍別當也、陸奧三郎重時、年廿二云云

城大夫判官行村、三浦左衛門義村等、可奉行御家人事、次江判官能範者、可申沙汰御出已下、御所中雜事、次伊賀次郎兵衛尉光家者、可催促御家人供奉所役以下事云云、武州奉仰各被觸廻云云、

〔武家名目抄〕職名十上按、こゝに侍所司といへるは、別當已下なべて其所の司にかゝれる名なり、

〔鹿島大禰宜文書〕武家名目抄職名部所引鹿島社權禰宜則朝、與同大禰宜則長代長意相論、常陸國大窪鄕并鹽濱事、右訴陳之趣雖區、所詮彼所者、右大將家〇源賴朝御時、元曆元年被寄進當社以降、至則長傳領無相違、〇中略然則於當鄕下地并鹽濱者、停止則朝押領、任正應三年御下知狀、實則跡之輩可令領知矣、次則朝令夜討實則否事、於侍所有其沙汰之上、不及引付勘錄、次押領咎事、可依彼左右者、依鎌倉殿仰、下知如件、

正安元年十二月廿七日、陸奧守平朝臣花押　相摸守平朝臣花押

〔新御式目〕侍所方乾元二六十二評定

一殺害刃傷打擲事　被載式目之上者不及子細、至凡下之輩者、殺害者、被處斬罪、刃傷者、被遣伊豆大島、打擲者、禁獄可爲六十日歟、

〔太平記〕一資朝俊基關東下向事附御告文事

東使兩人、資朝俊基ヲ具足シ奉テ鎌倉ヘ下著ス、此人々ハ殊更謀叛張本ナレバ、驗テ誅セラレヌト覺シカドモ、倶ニ朝廷ノ近臣トシテ、才覺優長ノ人タリシカバ、世譏君御憤ヲ憚テ、嗷問ノ沙汰ニモ不及、只尋常ノ放召人ノ如ニテ、侍所ニゾ預置レケル、

〔太平記〕二三人僧徒關東下向事

圓觀上人ヲバ佐介越前守、文觀僧正ヲバ佐介遠江守、忠圓僧正ヲバ足利讃岐守ニゾ預ラル、兩使歸參シテ、彼僧達ノ本尊ノ形、爐壇樣、畫圖ニ寫シテ註進ス、俗人見知ベキ事ナラネバ、佐々目賴禪僧正ヲ請ジ奉テ是ヲ被見ニ、子細ナキ調伏ノ法也ト申サレケレバ、去バ此僧達ヲ嗷問セヨトテ、

の殄滅を致すに及べり、爰に至て北條義時、自此職を攝せしより已來、北條一家の長者、執權たる者の兼職となれり、これ偏に權勢の他家に移らん事を恐るゝが故なるべし、○略 註 建保中、泰時別當に補せられし時、更に所司四人を加補して、各其職務を分掌せしむ、後には北條の家令長崎氏、侍所司を世職とす、其由は次條にいへり、元よりこの別當所司は、諸侍の統領なるが故に、常は宿衞、供奉人、射手等の事を奉行せり、然るに承久中、小侍所別當を設けられしより、それらのことは大かた小侍の職掌に移りて、侍所は非常を警衞し、罪人を決罰する等のことをむねとせり、然れども大事に至ては、小侍所と共に諸侍を進退することゝ、はじめに異なる事なし、

〔吾妻鏡十五〕建久六年二月十日丙寅、御上洛路次供奉人事、可爲畠山次郎重忠先陣、和田左衞門尉義盛、可令奉行先陣隨兵事、梶原平三景時、可令奉行後陣事、行列次第以下事、不可違先年御上洛禮之旨被仰下云云、　三月十二日丁酉、今日東大寺供養也、○中略 寅一點、和田左衞門尉義盛、梶原平三景時、催具數萬騎壯士、警固寺四面近郷、日出以後、將軍家○源賴朝 御參堂、○中略 但義盛景時等者、依爲侍所司、令下知警固事之後、自路次更騎馬、各爲最前最末隨兵云云、

〔吾妻鏡二十〕建暦二年二月十九日丙申、京都大番懈緩國々事、就被尋聞召之、今日有其沙汰、於向後者、一箇月無故令不參者、三箇月可勤加之由、被仰諸國守護人等、義盛、義村、盛時奉行之、

〔武家名目抄職名十上〕按、梶原景時伏誅の後、三浦義村、平盛時等、義盛の佐職となりて、侍所の事務を沙汰せしと見ゆ、これ即所司の職掌なり、

〔吾妻鏡二十一〕建暦二年六月七日辛巳、丑剋於御所侍所、宿直田舍侍、起鬪亂、即時死者二人、刃傷者二人也、鎌倉中鼓騷、御家人等馳參、佐々木五郎搦進之、和田左衞門尉率數輩子孫僕從等令參入、搜求與黨之輩、糺斷其罪違也、

〔吾妻鏡二十三〕建保六年七月廿二日辛卯、被定侍所司五人、所謂式部大夫泰時朝臣爲別當、相具山

沙汰之由仰侍所司、普可被相觸云云、

〔吾妻鏡四十四〕建長六年十二月廿三日辛卯、評定衆、幷可然大名外之輩者、云出仕、云私出行、不可具騎馬共人、凡非晴儀者、僮僕之員可減定之旨、普可相觸之由、所被仰付侍所司等也、

〔吾妻鏡四十八〕正嘉二年三月一日辛亥、辰剋將軍家二所〇伊豆箱根御進發、初度著淨衣、人々行列、和泉前司行方爲奉行、隨兵行列、平三郎左衞門尉盛時奉行之、

行列〇中略　次侍所司　平三郎左衞門尉盛時

小舍人下部

〔庭訓往來〕侍所者、〇中略所司代賦訴狀於右筆之時、以小舍人或下部等、召出犯人於侍所、

〔庭訓往來具注鈔〕小舍人下部は、今の與力同心の下司、

職掌

〔新編追加〕侍所篇

謀叛殺害條　盜賊惡黨條　放火勾引條　惡口狼藉條　犯人糺斷條　博奕幷賭條

〔武政軌範侍所沙汰編〕一撿斷條目事

謀叛　夜討　强盜　竊盜　山賊　海賊　殺害　刃傷　放火　打擲　蹂躙　追落　刈田

刈畠　路次狼藉　路邊捕女或爲博戲論、或切牛馬尾、如斯等事、又斬罪、絞罪、流刑、禁獄、拷訊、著鈦、以下刑法、皆以爲當所之沙汰者也、

〔沙汰未練書〕一侍所者　關東撿斷沙汰所也、關東有之、六波羅無之、

〔庭訓往來〕侍所者、謀叛、殺害、山海兩賊、强竊二盜、放火、刃傷、打擲、蹂躙、勾引、路次狼藉、鬪諍喧嘩等也、

〔武家名目抄職名十上〕按侍所とは、〇中略非違撿斷、罪人決罰等の事、其常日の職掌なり、又對陣に臨みては、軍奉行となりて軍務を統攝す、爰を以て軍國の機密、あづかり聞ざる事なし、威權の重き、人望の歸する、執權の人といへども、これを壓すること能はず、正治に、所司景時〇梶原害せられしのち、義盛〇和田ひとり侍所の長官として威權を專にし、遂に北條家と確執を生じ、門族

侍所には所司數人を置る、事はやめられ、執權の家令長崎氏、ひとり所司の職をうけ給はる格となりて、陪臣ながら此職を世々にせり、爰に至りて別當と所司とは主從のごとく成しかども、所司の威權を專にすることは、猶はじめに滅せずして、殆國命を取に至れり、これ併執權の家務を攝するが故なるべし、北條家の世を終るまで、又此制を改めず、

〔吾妻鏡十一〕建久二年正月十五日甲子、被行政所吉書始、〇中略

侍所　所司　平景時梶原平三

〔義經記六〕關東よりくはんじゆばうをめさる、事

梶原平三、八か國の侍のおよしなりければ、景時父子がめいにしたがふ者、風に草木のなびくふせいなれば、鎌倉殿〇源賴朝も御心に任せたまはず、

〔吾妻鏡二十一〕建曆三年〇建保元年五月六日丙午、今日相州〇北條義時以左衞門尉行親、被定侍所司云云、

〔遠藤系圖〕爲俊補官左近將監、右衞門尉、關東將軍二位家〔源賴朝〕御代、承侍所之司、勤仕之、

爲景補官童名星王丸、右衞門三郎、父爲俊、關東二位家御代、承侍所之司、勤仕之時爲代官、長日奢到付之記、

〔承久記下〕武藏守〇北條泰時此軍ノ有樣ヲ見ルニ、屹ト勝負可有共不見、存旨アリ、暫ク軍ヲトヾメント思也ト宣ケレバ、安東兵衞尉、橋ノ爪ニ走寄靜メケレ共不靜、〇中略平三郎兵衞盛綱、〇中略橋ノ際迄進テ、各軍ヲ仕テハ、誰ヨリケンシヤウヲ取ントテ、大將軍ノ思召樣有テ、靜メサセ給フニ、誰々進ンデカケラレ候ゾ、注シ申セトテ、盛綱奉テ候也ト憖ニ申ケレバ、其時侍所司ニテハアリ、人ニ多被見知、一二人キカヌ程コソアレ、次第ニ呼リケレバ、河端橋ノ上、大刀サシ矢ヲ弛テ靜リニケリ、

〔吾妻鏡三十四〕仁治二年六月十六日壬申、諸人預置謀反人之時令逃失者、依爲重科、可召放所領、以其所持物等、可被付寺社修理之由有議定、但逃脫之後、三箇月者可延引、過其期者、隨事體、殊可有其

當は、執權職たるもの、兼職にてありしを、宗方のみ其職ならで補任せられし故にしか記せしと見ゆ、前に引たる吾妻鏡に、長時家嫡ならずして、執權幷侍所別當を讓られしを、家督幼稚程之眼代なりと記せしをも思ふべし、殊に宗方は侍所をのみ持たれば、其權勢のくだりし事も亦推てしるべし、これ代官と記さるゝいはれなり、

〔吾妻鏡四〕元曆二年〇文治元年四月廿一日甲戌、梶原平三景時飛脚、自鎭西參着、差進親類獻上書狀、始申合戰次第、縡訴廷尉〇源義經不義事、〇中略凡和田小太郞義盛與梶原平三景時者、侍別當所司也、仍被發遣舍弟兩將〇源範賴、義經、賴朝弟於西海之時、軍士等事爲令奉行、被付義盛於參州、〇範賴源被付景時於廷尉之處、參州者本自依不乖武衛之仰、大少事示合于常胤義盛等、廷尉者插自專之慮、曾不守御旨、偏任雅意、致自由張行之間、人之成恨不限景時云云、

〔御成敗式目諺解六〕所司ハ別當ノ下也、所司代ト云ハ、所司ガ下ニテ讎ヲモツク也、

〔武家名目抄職名十上〕按、侍所所司は、別當に相ならびて、諸侍を進退するものなれば、其職掌は准じて知るべし、鎌倉右大將家の時、はじめて梶原景時を以て所司に補せられ、別當和田義盛と共に事に從はしむ、若事務の繁き時には、其子姪に命じて所職を助けしこともあり、建保の初、執權北條義時、別當職を攝するに及びても、當所司を置れたり、但其員を詳にせず、後いく程なく、義時これを男泰時に傳へし時、更に所司三人を加補して其職掌を分配せらる、此頃に至りて、所司の權勢やゝ降りて、和田梶原と相ならびし時のいきほひにあらず、これ別當は執權兼補の職となりて、威權殊にすぐれたるが故なり、承久に至りて、更に小侍別當を設け、平日諸侍の進退をまかせしかば、侍所の職掌、兩所に分れたるが如くなれり、されども事に臨みては、侍所、小侍所と共に諸侍の進退をつかさどることいにしへに異ならず、かく職掌の兩所に分れしより、

〔吾妻鏡二十一〕建曆三年〇建保元年五月五日乙巳、義盛時兼以下謀叛之輩所領、美作淡路等國守護職、横山庄以下爲宗之所々、先以收公之、可被充勳功之賞云云、相州〇北條義時大官令〇廣元被申沙汰之、次侍別當事、以義盛之闕、被仰相州云云、　六月廿五日甲午、廣澤左衞門尉實高、自備後國歸參、是令海陸賊徒蜂起之間、相鎮之、去々年爲使節下向彼國、而通志於義盛、令用意征箭尻百腰、送遣之由讒訴出來、被仰在京之士、可誅其身之趣及御沙汰、實高不知之、今日已所令參著也、彼朋友等密告、則波多野中務次郎經朝以下一族、相共列參御所、屬廣元朝臣陳申云、於征箭事者、全不備彼賄、義盛爲侍別當、稱別仰相催之間、存別忠之由遣之訖、且義盛狀分明、早被召決讒人、此外若有用意證據者、實高難被免刑歟、不然者、讒者之過而被默止哉云云、義盛書狀及御覽、載仰字之上、不能左右、實高多年昵近奉公之間、兼知食無貳之由、訖今又陳謝之趣有其理、如元可候近之旨、直被仰含云云、

〔吾妻鏡二十三〕建保六年七月廿二日辛卯、被定侍所司五人、所謂式部大夫泰時朝臣、爲別當、相具山城大夫判官行村、三浦左衞門義村等、可奉行御家人事、

〔吾妻鏡四十三〕建長八年〇康元元年十一月廿二日己酉、相州〇北條時賴赤痢病事減氣云云、今日被讓執權於武州、長時又武藏國務、侍別當幷鎌倉第內、同被預申之、但家督宗〇時幼稚程之眼代也、

〔北條九代記下〕永仁五年丁酉

宗方十北方　嘉元二年十二月七日爲侍所、同三年五月四日於相州館被誅、廿八

〔保曆間記下〕嘉元三年春ノ比、駿河守平宗方ト申スハ、是モ貞時ノ從弟也、時賴孫、修理亮宗賴子也、師時ニ超越セラル、事ヲ無念ニシテ、本ヨリ心武ク憍心ノ有ケレバ、師時ヲ亡サント巧ミケリ、貞時ガ內ノ執權ヲシ、侍所ノ代官ナンドヲシテ、大方天下ノ事ヲ行ケリ、

〔武家名目抄職名十上〕按、宗方正しく侍所別當となりし由は、北條記にて分明なるを、本書に侍所の代官と記せしこと、其疑なきにあらずといへども、今これを推考するに、義時以來、侍所別

テ君ノ御代ニナシ參セ、庄園ヲ給リ、國ヲ知行セン事ヲ評定シ給フベシ、食ヲ願ハヾ器ト云下說ノ喩アリ君モトク〳〵國々庄々ヲ分ケ給リ候ベシ、中ニモ義盛ニハ、日本國ノ侍ノ別當ヲ給リ候ヘ、上總守忠淸ガ、平家ヨリ八箇國ノ侍ノ奉行ヲ給テ、翫シカシヅカレテ氣色セシガ、餘ニ羨シカリシカバ、兼テ申入也、他人ノ競望アルベカラズトゾ申ケル、佐殿〇賴朝ハ、世ニアラバ左右ニヤ及ブベキ、去共早シトテ笑給ケリ、

〔吾妻鏡一〕治承四年十一月十七日乙丑、令レ還二著鎌倉一給、〇中略和田小太郞義盛、補二侍所別當一、是去八月石橋合戰之後、令レ赴二安房國一給之時、御安否未定之處、義盛望二申此職一之間有二御許諾一、仍今聞二上首一被レ仰云云、

〔吾妻鏡十一〕建久二年正月十五日甲子、被レ行二政所吉書始一、〇中略

侍所　別當　左衞門少尉平朝臣義盛治承四年十一月補二此職一

〔吾妻鏡十六〕正治二年二月五日辛酉、和田左衞門尉、還二補侍所別當一、義盛、治承四年、關東最初補二此職一之處、至二建久三年一、景時一日、可レ假二其號一之由懇望之間、義盛以二服暇之次一、白地被レ補レ之、而景時廻二奸謀一、于レ今居二此職一也、景時元者爲二所司一云云、

〔保曆間記下〕建仁三年九月廿七日、實朝十二歲ニシテ征夷將軍ノ宣旨ヲ蒙リ、〇中略二位殿〇實朝母北條政子ノ御計ニテ、義時ヲ時政ニ替テ將軍ノ執權トス、相摸守トゾ申ケル、〇中略爾ル程ニ、其比三浦和田左衞門平義盛ト申者有リ、賴朝ノ時ハ侍所ナンドシテ、サルベキ仁躰也ケルガ、義時ニ權ヲ取レテ今ハ主從ノ如シ、物憂ク思ヒテ指モ不レ出、義盛ガ子、朝印南三郞義秀、和田四郞義胤、同平太胤長、澀谷六郞、上總介次郞、薗田七郞、澀川六郞、泉小次郞等、謀反ヲ發テ、賴家將軍ノ二男、千壽丸ヲ取立テ謀反ヲ起ス、和田左衞門モ同意シテ、建曆二年五月三日、既ニ及二合戰一、無レ程打負テ、義盛以下所所ニテ打レ畢ヌ、語處ノ土屋兵衞、中山四郞、横山、澀谷ナンド被レ誅畢ヌ、是モ分ニ隨ハデ驕ル故也、

侍所初見

職員　別當

〔下學集 上官位〕侍所（サブラヒドコロ）

〔撮壤集 下武職〕侍所　開闔　所司　代

〔拾芥抄 中末院司〕關白家（大臣家大略同、攝關、但辨、別當、文殿、藏人所等無之、近衞大將同之、）侍所（別當　職事）

〔西宮記 臨時九〕一世源氏元服

冠者下（於下侍改衣、着衣）拜舞、〇中略 天皇御侍倚子（王卿已下候、有御遊盃酒、〇下略）

〔源氏物語 一桐壺〕さふらひにまかで給て、人々おほみきなどまいるほど、〇下略

〔倭訓栞 前編十佐〕さふらひ　殿上をさして、さふらひといへる事、源氏に見えたり、侍所の義也、禁秘抄にも殿上の次に下侍と出したまへり、侍所は東鑑に、侍所別當、庭訓に、侍所奉書など見えたり、

〔貞丈雜記 十四家作〕一侍所小侍所と云も何れも役所の名也、此所を支配する人を侍所別當、小侍所別當と云、

〔吾妻鏡 一〕治承四年十二月十二日庚寅、亥刻前武衞將軍、〇源頼朝 新造御亭有御移徙之儀、〇中略 時剋自上總權介廣常之宅、入御新亭、〇中略 入御于寢殿之後、御共輩參侍所、〇十八箇間 二行對座、義盛〇和田 候其中央、著到云云、

〔武家名目抄 職名十上〕按、侍所とは、御家人たるものゝ宿直侍衞すべき居所をいふ、さぶらひといへるも、もと祗候の意なればなり、治承中に、はじめて所司二員を置れて諸侍を指揮せしむ、長を別當とし、次をばたゞ所司といふ、和田義盛、梶原景時の二士、其任に當れり、幕府に於て、侍所の職を補せらるゝもの、是よりさきなるはなし、（但侍所といふ名は古くよりこれあり、小右記に、天元五年三月十一日、女御藤原遵子立后の時、侍所別當を補し、侍所長、進侍者、大番侍者などを定められしことみえたり、これ皆中宮に祗候の輩なり、）

〔源平盛衰記 二十三〕佐殿漕會三浦事

和田小太郎申ケルハ、〇中略 君〇源頼朝 カクテ御坐セバ、今ハ眞ニ一入思ヒ入テ平家ヲ亡シ、本意ヲ遂

〔吾妻鏡十九〕承元二年正月十六日丙戌、午剋問注所入道名越家燒亡、而於彼家後面之山際構文庫、將軍家御文籍雜務文書幷散位倫兼日記已下、累代文書等納置之處、悉以爲灰燼、善信聞之愁歎之餘、落淚數行、心神爲惘然、仍人訪之云云、

〔吾妻鏡三十九〕寶治二年十一月廿三日丙寅、問注奉行人等、閣雜務稽古酒宴、放遊爲事、不面謁訴人、不見究證文理非之間、臨評定座之時、預下問事等、所答申頗令停滯、於如然輩者、不可召仕之由、普可相觸之趣、今日被仰村大田民部大夫、信濃民部大夫入道行然等云云、

〔吾妻鏡四十〕建長二年四月廿九日甲子、雜人訴訟事、諸國者、可帶在所地頭擧狀、鎌倉中者、就地主吹擧、可申子細、無其儀者、不可有直訴之由、今日被仰遣問注所政所、是爲被禁直訴之族也、

侍所

侍所ハ、サブラヒドコロト云フ、諸士ノ常ニ宿直侍衞スル所ナリ、治承四年、和田義盛ヲ以テ始テ侍所別當ニ補シ、梶原景時ヲ以テ所司トス、承久元年、更ニ小侍所ヲ置キ、宿衞等ノ事ヲ分掌セシムルニ及ビ、本所ハ專ラ非常ヲ警衞シ、罪人ヲ決罰ス、

別當ハ、建保元年、和田氏一門戰亡ノ後ハ、執權北條義時之ヲ兼務シテヨリ以來、毎ニ執權ノ兼職トナレリ、其間建保六年、北條泰時ガ執權ナラズシテ別當トナリ、嘉元年中、北條宗方許定衆ヲ以テ之ヲ兼務セシガ如キハ特ニ異例トス、所司ハ別當ノ輔佐ナヌ、梶原景時始テ之ニ補ス、北條泰時別當タルニ及ビテ、行村、義村、能範、光家ノ四人ヲ以テ所司トセリ、然レドモ小侍所ヲ置クニ至リテ、獨リ北條氏ノ家令長崎氏ノ世職トナレリ、

〔庭訓往來〕侍所之奉書者規模也

名、同可被處其咎云云、

〔吾妻鏡 四十一〕建長三年九月十七日戊戌、出擧利錢之事、所領於入流者、被下御敎書之由、其外相論者、可有一向問注所之沙汰之由被定云云、

〔吾妻鏡 四十四〕建長六年五月一日壬申、人質事、有沙汰被定其法、今日被施行云云、所謂御制以前、雖入流質劵、御制以後、至經訴訟者、可致一倍辨、質事不可及沙汰、凡御制以後質人事、一向可停止之由云云、如此可申沙汰之由、自相州〇北條時賴被仰問注所云云、

〔吾妻鏡 五十二〕文永三年三月六日己亥、諸人訴論事、被止引付沙汰、問注所召整訴陳狀、可勘申是非也、前々被記申詞之間、爲被賦九人評定衆所被結番也、〇中略

政所、問注所、及執事、每日可令參也、且自問注所每日可差進文士二人也、

〔關東評定傳 二〕文永三年三月六日、止三方引付、重事直聽斷、細事被付問注所、

〔新御式目〕弘安七五廿七評

引付衆幷奉行事

右〇中略引付忠否、奉行曲直、頭人不憚于人、不及緩怠遲々可注申也、引付外奉行人、政所問注所執事可申沙汰矣、

〔新御式目〕諸人訴訟問狀事　訴狀爲非據者、不可賦之由可被仰問注所歟、尋明可成御敎書之旨、可被仰五方引付奉行人歟、

〔武家名目抄 職名九〕按、訴訟問狀とは、訴人ある時、問注所の賦奉行より訴狀を引付方に賦し、引付頭人より奉書を訴人にあたへ、論人をして返答を致さしむる奉書の事なり、但訴訟の旨趣、道理にかなはざるものは、問狀をあたへずして、沙汰に及ばれざるの御敎書を訴人にたまふべしとなり、

〔問註所家譜〕一淨藏貴所後裔町野中宮大夫爲散位從五位下三善朝臣康信入道善信、初仕平相國清盛、後仕鎌倉右大將賴朝賴家實朝三朝、爲問注所執事職、問注所者諸執事訴論對決之所也、

〔吾妻鏡二十〕建暦二年九月十七日庚申、就關東御寄進石淸水、住吉、廣田等御領訴訟事、社解令到來者、不經宿、可申沙汰之由、被仰問注所云云、

〔吾妻鏡三十五〕仁治四年〇寬元元年二月十五日壬戌、御沙汰間、詮句勸錄事、大事二箇月、中事者一箇月、小事廿日、此日數可令勸進之由可相觸之旨、被仰含于問注所執事加賀民部大夫云云、　七月十日己酉、諸人訴論事、兩方證文分明之時者、雖不遂對決、可有成敗之由被仰問注所云云、　八月廿六日己亥、三嶋御神事也、以放生會流鏑馬射手以下役人所被遂行之也、爲殊御宿願云云、今日武州經時被遣御書於問注所、是武州禪門〇北條泰時時有成敗事、訴人不進懸物押書者、縱可遂問答之由、雖爲御書下、不可被召決云云、執事加賀民部大夫獻請文云云、　九月廿五日戊辰、諸人訴論事、有評定、事書入見參、可施行之由、被仰下之御處、成敗遲々、尤以不便、自今以後、付奉行人、註事書、早々可成御下知、又御下知與事書、於問註所、可令勘合、事云無相違者、可下之由、依仰加賀民部大夫、

〔新御式目〕故武藏入道〇經時沙汰之時、有御成敗事、寬元二二十八條々評定事書內、訴人不進懸物之押書者、縱可遂問注由雖有書下、今更不及召決之旨、遍可相觸奉行人等之由、可被仰下問注所歟、

〔吾妻鏡三十六〕寬元三年三月卅日乙丑、諸人問注事、被差奉行人之處、一方遁避之由、間依有其聞、自今以後、相觸奉行人可註交名、就彼狀可有誡沙汰之由被仰出、加賀民部大夫奉行之、　五月三日丙申、今日諸人訴訟事、被定其法、所謂被仰下問注所之處、寄事於左右、當參之輩令難澀之條、奉行人催促、過五箇度者、慥隨被註進交名、可被處罪科也、亦奉行人訴人參對之時、令不參、記申詞者、可註申交

し、

寄人

〔吾妻鏡十九〕承元四年十二月廿一日乙亥、今日爲伊賀二郎宗光之奉、中民部大夫仲業可相兼問注所寄人之由被仰含云云、是掃部頭能親入道家人也、依右筆藝被召仕云云、

〔武家名目抄職名九〕按、問注所寄人は、執事の命をうけて、問注の事を奉行するものなり、その職掌、大かた政所寄人に准じてしるべし、凡此衆の内、引付衆にいたるべき輩もあり、又なり得ざるすぢもあり、これおのづから家族の等差あればなり、鎌倉殿の時、常に此輩をよびて問注奉行といふ、或は又問注所公人ともいへるは、問注所衆といふ意にて、政所寄人を政所公人といひしに同じ、

〔清原氏系圖〕滿定左衛門少尉、弘長三年十一月二日卒、年六十九、―重定清式部大輔、問注所寄人、

〔太田康有記〕建治三年八月廿九日、自山内殿〇北條時宗被召之間、馳參之處、召御前被仰云、〇中略問注所公人不足云々、先日所擧申之富來十郎光行、山名彌太郎行佐、藤田左衛門四郎行盛、清式部四郎職定、皆吉四郎文盛、可召加寄人、　九月六日、一番引付注文進武州、　五番執筆、合奉行交名付城務、當所新參寄人等與書下了、

〔吾妻鏡十九〕承元五年〇建暦元年正月十日甲午、政所、問注所、吉書始也、行光善信各參行之、今日橘三歳人、被加問注所衆、

職掌

〔沙汰未練書〕一問注所者　關東諸方沙汰所也、關東ニ有之、六波羅ニ無之、

〔庭訓往來〕問注所者、永代沽券、安堵年記放券、奴婢雜人券契、和與状、負累證文等謀實糺明之、管領寄人、右筆、奉行人等評判也、奉行人得差符方之與奪、當參仁者成書下、下國之時者下奉書、而無音之時者下使節召文、調訴陳状、相對當所執事、年々管領奉行人等、可致問答披露沙汰、就探題之異見所加下知也、

引付衆

太田民部大夫三善康宗四月加、九月晦日爲二問注所執事一、

弘長二年壬戌

評定衆

太田民部大夫三善康宗問注所執事、三月依二中風一籠居、太田民部大夫康連法師男、○中略

太田七郎三善康有六月五日勧奉、去三月廿八日爲二問注所執事一、同七月任二勘解由判官一、年三十四、

〔關東評定傳 二〕弘安五年壬午

評定衆

美作守三善康有問注所執事、十二月依レ病籠居、太田民部大夫康連男、

〔中原氏系圖〕師員大外記、(中略)鎌倉評定衆、貞永式目連署、　師連少外記、(中略)關東評定衆、

親致攝津守、從五下、右將監叙留、改二藤氏一、關東評定衆問注所、

〔天文本太平記 四〕奉レ流宮々事

同〇弘元二年正月十日、東使問注所信濃入道道太上洛シテ、去年笠置城没落ノ刻ニ、被二召取一給人々之國々配所ノ事定而、一宮中務卿親王者、土佐ノ畑ニ奉レ流テ有井三郎左衛門尉ガ館ノ傍ニ一室ヲ構テ奉レ置、

〔吾妻鏡 十四〕建久五年十月一日戊午、大舍人允三善行倫可レ記二訴論人問注詞一之由被二仰出一之、日來父大夫屬入道善信、奉行職也、依二他事計會一、擧二申行倫一云云、

〔武家名目抄 職名九〕按、問注所執事代は、常に稱して問注所代といふ、當時執事をよびて問注所とのみいひし故なり、此職は常日必設置るべき有司にあらず、執事故障の時、又は所役に合期し難き節など設らるゝものなり、建久中、三善康信、男行倫を擧て代官とせしを其始といふべ

執事代

職員 執事

猥耤之基、於他所可行此儀歟之由、內々有評議之處、熊谷與久下境相論事、對決之日、直實於西侍除髻髮之後、永被停止御所中之儀、以善信家爲其所、今又被新造別郭云云、

〔吾妻鏡 十一〕建久二年正月十五日甲子、被行政所吉書始、〇中略

問注所執事　中宮大夫屬三善康信法師（法名善信）

〔吾妻鏡 二十五〕承久三年八月六日丁巳、大夫屬入道善信、老病危急、露命不知旦暮、仍辭退問注所執事之間、以男民部大夫康俊補其替云云、

〔關東評定傳 一〕嘉祿元年乙酉

評定衆

（町野）民部大夫三善康俊（問注所執事）

〔吾妻鏡 三十二〕嘉禎四年（〇暦仁元年）六月十日癸丑、加賀前司康俊依所勞危急、辭申問注所執事之間、以子息民部大夫康持、可爲其替之旨被仰下云云、

〔關東評定傳 一〕暦仁元年戊戌

評定衆

（加賀）民部大夫三善康持（〻加、六月以後爲問注所執事、）

〔吾妻鏡 三十七〕寬元四年六月七日甲午、前佐渡守基綱、前大宰少貳爲佐、上總權介秀胤、前加賀守康持等、有事被除評定衆、康持被止問注所執事云云、　八月一日丁亥、太田民部大夫康連爲問注所執事、加賀前司康持替也、

〔吾妻鏡 四十六〕建長八年（〇康元元年）九月卅日丁巳、民部大夫康連依病痾危急、辭問注所執事、子息康宗補其闕、

〔關東評定傳 一〕康元元年丙辰

移問注所

申沙汰之由、被仰大夫入道善信云云、仍就御亭東面廂二箇間爲其所、號問注所、打額云云、

〔武家名目抄　職名九〕按、問注所は、政所の別廳にて、ともに政事を沙汰する中にも、訴訟の裁判を本務とする所なり、問注とは、彼是の詞を推問して、其趣を注記するいはれなり、凡鎌倉殿の時、天下の機務、悉く關東に決せざる事なしといへども、畿內と西邊とは、人情頗東方に異なる所あるを以て、制度も亦其國法にならふ事なきにあらざるが故に、京師と鎭西とに別府を設けて、畿內及關西の諸國を管領せしむ、たゞ大事にいたつては、關東の成敗に隨ふ、さて東北の諸國をば、政所と問注所とに分配して、各國の訴訟を聽斷せしむ、政所問注所、各內評定といふ事ありて、奉行等會合し、政務を議するはこの故なり、爰に於て、訴人あれば、兩所の內、各其預りの所に就て事を訴ふ、其時問注所奉行人の內、賦別奉行たるもの、訴狀を五方引付に分配して是を沙汰せしむ、畢竟訴訟の事は、當府の專務なればなり、されば天下の衆訴、悉くこゝに預らざるなしといへども、又兩府の分掌あるを以て、問注所の主務とする所は、財貨借貸の事、領地の爭論、又盜賊に逢て失財せし等の訴訟にして、是らの事は、引付へ賦するに及ばず、當府の奉行人等これを沙汰する定格なり、雜訴決斷等の事は、侍所の職掌なれば、問注所引付方にては、預る所なし、始右大將家、源賴朝三善康信を當所の執事に補せられしより、其子孫たる者の世職となりて、評定衆の內、町野、太田の兩家、互に是をうけ給はるならびなり、當には其人をさして、只問注所とのみもいへり、なべて衆務の內、訴訟の成敗を急務とするが故に、當所の執事は、政所執事に相ならべる重職にて、只訴訟の沙汰のみならず、政務評定の席には臨まざる事なし、又寄人の進退を管領して問注をなさしめ、その成敗を致す事は、もとより其つかさどる所にして、かたがた武家の要職たり、

〔吾妻鏡　十六〕建久十年〇正治元年四月一日壬戌、被建問注所於郭外、以大夫屬入道善信爲執事、今日始有其沙汰、是故將軍源賴朝御時、營中就一所被召決訴論人之間、諸人群集成鼓騷、現無禮之條、頗爲

或ハ引付衆之ヲ兼ヌ、執事代ハ、執事事故アル時之ニ代ル、蓋シ臨時ノ職ニシテ、常設ノモノニアラズ、寄人ハ、問注所公人、問注所衆等ノ別稱アリ、元暦元年、藤原俊兼、平盛時二人ヲ執事三善康信ニ屬セシメテ訴人ノ辭ヲ注セシメシコトアリ、當時未ダ別ニ其名ヲ設ケズト雖モ、是蓋シ寄人ノ始ナラン、

名稱

〔撮壤集 下 武職〕問注所

〔饅頭屋節用集 毛 人〕問註所(モンチウシヨ)

〔倭訓栞 前編 三十三 毛〕もんちう　朝野群載に問註と書り、訴訟對決の意にいへり、問註所は源頼朝卿の始て置る、よし東鑑に見え、北條の時、執事あり、又引付とならべ置り、

〔庭訓往來〕引付問注所、上裁勸判之體、異見議定之趣、評定衆以下、可注給之御沙汰之法、所務之規式、雜務之流例、下知成敗、傍例、納法、律令、武家相違存知仕度候、

〔庭訓往來具注鈔〕問注所は、公事を聽く役所也、

〔朝野群載 六 太政官〕官廳　勘問申詞記

應德二年四月十四日、問注大宰府貢物使田口爲友幷藤井國方等申詞記、○中略

申　田口爲友　藤井國方

問注　右史生上野則元

〔問註所町野氏家譜〕傳云、○中略 問注所受辭訟之所也、問ハ彼是之言、注ハ記取決之謂也、○中略 問注所執事掌之也、

〔貞丈雜記 十四 家作〕一問注所は紛失物を詮儀し、盗賊を糺明する役所也、公私輸書に紛失方問注所也云云、

初置問注所

〔吾妻鏡 三〕壽永三年○元暦元年十月廿日乙亥、諸人訴論對決事、相具俊兼盛時等、召決之、且令注其詞、可

〔吾妻鏡四十六〕建長八年〇康元元年正月十六日戊申、越前兵庫助政宗卒、年五十四 二番引付右筆也、

〔武家名目抄職名五下〕按、引付右筆は、五方引付の番ごとに置る、つかさにて、政所寄人の帯せる所職なり、人數は大かた二三人もありしにや、たしかならず、政務裁許の席に祗候して、むねと書記をつかさどるが故に、右筆とも執筆ともいへり、其等級は引付衆より一きはさがりたるものなるが、なべての寄人の内にては、かしらだちたるものなり、

〔吾妻鏡五十二〕文永二年六月十一日丁丑、引付新加衆、〇中略 高水右近三郎、執。筆。三番

〔太田康有記〕建治三年九月六日、一番引付注文進武州、 五番執。筆。合奉行交名付城務、當所新參寄人等與書下了、

問注所

問注所ハ、政所ト同ジク政事ヲ掌ルト雖モ、就中訴訟ヲ問注シテ聽斷スルヲ以テ主トス、問注トハ、訴人論人ヲ推問シテ、其辭ヲ注記スルヲ云フナリ、元暦元年十月營中ノ東廂ニ始テ問注所ヲ設ケ、諸人ノ訴論ヲ對決セシメ、三善康信ヲ以テ之ガ總管ト爲ス、正治元年四月、新ニ問注所ヲ郭外ニ建ツ、寛元元年、裁決勘進ノ期ヲ定メ、大中小ノ三種ニ分チ、大事ハ二ケ月、中事ハ一ケ月、小事ハ二十日ヲ限ラシメ、又證文分明ナルモノハ對決ヲ要セザラシム、建長二年、鎌倉及ビ諸國ノ訴人ノ訴狀受理ノ方法ヲ定ム、

本所ノ職員ニ、執事、執事代、寄人アリ、執事ハ、本所ノ長官ニシテ、建久二年正月、三善康信ヲ以テ之ヲ補ス、爾後其嫡子康俊ノ子孫世襲シテ町野氏ト稱ス、寛元三年、康俊ノ弟康連亦之ニ補ス、之ニ太田氏ト稱ス、是ヨリ町野太田ノ兩氏、世々問注所執事タリ、而シテ執事ハ、評定衆

二階堂出羽左衛門尉藤原行頼加六月　上總左衛門尉藤原宗長加六月　町野備後左衛門尉三善宗康加六月

〔北條九代記〕下嘉元三年乙巳

宗宣從四位下、陸奥守、　弘安九年六月、爲引付衆、

〔北條九代記〕下正應元年戊子四月廿八日改元

盛房從五位下、丹波守、南方六、　弘安九年六月六日、爲引付衆、

〔北條九代記〕下弘安六年癸未

時連勘解由判官　弘安九年十二月廿七日、加引付衆、

嘉元元年癸卯八月五日改元

時範遠江守、正五位下、北方十二、　弘安十年正月、爲引付衆、

延慶元年戊申十月十日改元

貞房越前守、從五位上、南方九、　正應三年八月廿三日、爲引付衆、

應長元年辛亥四月廿八日改元

煕時正五位下、相摸守、本名貞泰、　永仁三年、爲引付衆、

嘉暦元年丙寅四月廿九日改元

維貞從四位下、修理大夫、本名貞宗、　嘉元二年七月十日、爲引付衆、

〔北條九代記〕下延慶三年庚戌

時敦從五位下、越後守、南方十、後爲北方十四、　德治元年八月十日、爲引付衆、

元亨元年辛酉二月廿三日改元

範貞正五位下、駿河守、北方、　正和四年七月廿六日、爲引付衆、

〔中原氏系圖〕高親引付衆、宮内左近大夫、

〔關東評定傳　二〕文永十年癸酉

引付衆

刑部少輔平時基 六月廿一日加

〔太田康有記〕建治三、九月四日、依召參山内殿之處、以平金吾被召御前、任仰以安富民部三郎入道、嶋田七郎、齋藤七郎兵衛尉、長田新左衛門尉 已上政所公人 富來十郎 元合奉行 飽田三郎左衛門入道、注入引付衆了、

〔關東評定傳　二〕弘安元年戊寅

引付衆

式部大夫平政長 相摸 三月十六日加　右馬助平宗房 相摸 三月十六日加　丹後守藤原行宗 二階堂 十一月加　左衛門尉藤原長景 城 十一月加

弘安四年辛巳

引付衆

城九郎藤原宗景 二月加、于時廿三歲、父例〔泰盛〕云々、　右近大夫將監平忠時 陸奥 十月十一日加　前能登守源宗綱 佐々木 十一月十一日加

弘安五年壬午

引付衆

備前太郎大江宗秀 長井 四月廿六日加、十月廿九日任宮内權大輔、　左衛門尉藤原行藤 二階堂備中 四月廿六日加、十一月七日蒙使宣旨、　左衛門少尉 城 藤原時景 十一月加

弘安六年癸未

引付衆

引付衆

前越前守平時廣十一月十五日加

〔吾妻鏡五十二〕文永二年六月十一日丁丑、引付新加衆、左近大夫將監平義政、彈正少弼平業時、左近大夫將監平公時、已上二番備中守藤原行有、前對馬守源氏信、左衛門尉藤原行實、已上三番高水右近三郎、執筆三番是壹岐五郎左衛門尉爲忠辭退之替、所被召加也、

〔關東評定傳二〕文永六年己巳

引付衆四月廿七日始之

左近大夫將監平時村　左近大夫將監平公時　彈正少弼兼左馬權助平業時　武藏守平宣時

左近大夫將監平顯時　備中守藤原行有　宇都宮下野守藤原景綱　伊賀山城守藤原光政　二階堂信濃守藤原行實政所執事、七月卒、〇中略

二階堂常陸左衛門尉藤原行清　城左兵衛尉藤原顯盛　後藤左衛門尉藤原基賴　上總左衛門尉藤原長經町野備後

民部大夫三善政康　玄蕃允三善倫經

文永七年庚午

引付衆

二階堂左衛門尉藤原行章加五月　同左衛門尉藤原行佐加五月

文永八年辛未

引付衆

攝津左近將監藤原親致加四月　少貳左衛門尉藤原景泰加九月

〔北條九代記下〕弘安八年乙酉

道嚴攝津入道、俗名親致、十二月廿七日補之、文永八年四月加引付衆左近將監

〔關東評定傳 一〕建長四年壬子

引付衆

陸奥掃部助平實時四月加、　前佐渡守藤原基綱四月加　前備前守三善康持四月加　前參河守清原教隆四月加

建長五年癸丑

引付衆

城九郎藤原泰盛〃加　城次郎藤原賴景〃加　前大宰少貳藤原爲佐〃加

建長六年甲寅

引付衆

那波左近大夫將監大江政茂〃加　攝津縫殿頭中原師連〃加　長井太郎大江時秀〃加

康元元年丙辰

引付衆

刑部少輔平教時四月加

正嘉元年丁巳

引付衆

前壹岐守藤原基政四月日加　二階堂左衞門尉藤原行忠法師法名行一、四月一日加、

弘長三年癸亥

引付衆

齋藤左衞門尉藤原清時〃加

〔關東評定傳 二〕文永元年甲子

德治二年正月廿八日、引付頭、　熈時一、國時二、基時三、時高四、維貞五、顯實六、道雄七、

嘉曆元年丙寅四月廿九日改元

維貞從四位下、修理大夫、本名貞宗、　德治二年十二月六日、爲引付頭、

〔北條九代記下〕延慶二年三月十五日、引付頭、　熈時一、國時二、貞顯三、基時四、齊時五、維貞六、顯實七、

八月、止熈時頭、

三年二月十八日、引付頭、　熈時一、國時二、基時三、齊時四、維貞五、顯實六、

應長元年十月廿五日、引付頭、　國時一、基時二、齊時三、維貞四、顯實五、

正和二年七月廿六日、引付頭、　守時一、齊時二、顯實三、貞宣四、時顯五、

〔北條九代記下〕嘉曆元年丙寅

守時相摸守、從四位下、　正和四年七月廿六日、爲引付一番頭、

文保元年十二月廿七日、引付頭、　貞規一、守時二、顯實三、貞宣四、時顯五、

二年十二月、引付頭、　貞規一、守時二、顯實三、貞宣四、貞時五、時顯六、

元應元年閏七月十三日、引付頭、　守時一、顯實二、貞宣三、貞時四、時顯五、

元亨二年七月十二日、引付頭、　守時一、顯實二、時春三、貞直四、時顯五、

嘉曆元年五月十三日、引付頭、　茂時一、顯實二、道順三、貞直四、延明五、

二年四月十七日、引付頭、　茂時一、道順二、貞直三、延明四、道準五、

元德二年正月廿四日、引付頭、　茂時一、道順二、貞直三、道準四、道蘊五、　七月廿四日、引付頭、　貞將一、道順二、貞直三、道準四、道蘊五、

元弘元年十二月二日、引付頭、　貞將一、貞直二、範貞三、道準四、道蘊五、　正月廿三日引付頭、　貞將一、貞直二、範貞三、俊時四、高景五、

〔北條九代記〕下 永仁元年癸巳 八月五日改元
行藤 出羽守 正安元年四月一日、爲二五番引付頭一、
時連 信濃守 正安二年、爲二引付頭一、
永仁五年丁酉
宗方 北方十 正安三年正月廿日、爲二引付頭四番一、
〔北條九代記〕下 永仁元年癸巳 八月五日改元
久時 越後守、于時北方九、 正安三年八月廿三日、爲二一番引付頭一、
應長元年辛亥 四月廿八日改元
熙時 正五位下、相模守、本名貞泰、 正安三年八月廿五日、爲二引付頭一、
〔北條九代記〕下 乾元元年二月十八日、引付頭、 宗宣一、久時二、宗泰三、熙時四、道雄五、 九月十一日引付頭、 宗宣一、久時二、宗泰三、宗方四、時家五、熙時六、道雄七、道嚴八、
嘉元三年乙巳
宗宣 從四位下、陸奥守、 乾元元年二月十八日、爲二一番引付頭一、
〔北條九代記〕下 弘安八年乙酉
道嚴 攝津入道、俗名親致、 乾元元年九月十一日、爲二八番引付頭一、
嘉元元年四月十一日、引付頭、 宗宣一、久時二、宗泰三、宗方四、時家五、熙時六、時高七、道雄八、
二年九月廿五日、引付頭、 宗宣一、久時二、宗泰三、宗方四、熙時五、時高六、道雄七、 十二月七日、引付頭、 宗宣一、久時二、宗泰三、熙時四、時高五、
三年八月一日、引付頭、 久時一、宗泰二、熙時三、時高四、道雄五、 同廿二日、引付頭、 久時一、熙時二、基時三、時高四、道雄五、

番一也、越州者元一番也、其衆相共可遷三番、可相觸其旨云々、

〔關東評定傳 二〕弘安四年辛巳

評定衆

武藏守平宗政(一番引付頭、八月卒、)　前尾張守平公時(四番引付頭、十月爲三番頭、)　駿河守平業時(三番引付頭、十月爲一番頭、)　前武藏守平宣時(二番引付頭)　越後守平顯時(十月爲四番引付頭、○中略)　秋田城介藤原泰盛(五番引付頭)

弘安六年癸未

評定衆

前尾張守平公時(三番引付頭、四月爲二番頭、)　駿河守平業時(一番引付頭、四月遁世、)　前武藏守平宣時(二番引付頭、四月爲一番頭、)

越後守平顯時(四番引付頭)　遠江守平時基(四月爲三番引付頭、)　陸奥守藤原泰盛(五番引付頭)

弘安七年甲申

評定衆

秋田城介藤原宗景(五月爲五番引付頭、)

〔北條九代記 下〕弘安九年六月引付頭　宣時一、道鑒二、道西三、時業四、政長五、

十年十二月廿四日引付頭　時村一、道鑒二、道西三、時業四、政長五、

正安三年辛丑

師時(相模守、從四位下、武藏四郎、)　正應六年(○永仁元年)六月、爲引付頭三番、

嘉元三年乙巳

宗宣(從四位下、陸奥守、)　永仁四年正月、爲引付頭四番、

〔北條九代記 下〕永仁六年戊戌

四月九日引付頭　時村一、師時二、道西三、宗泰四、宗秀五、(正月十三日爲頭人、)

三番引付頭、越訴奉行、三月止レ頭、

文永六年己巳

評定衆

前尾張守平時章法師（法名見西、四月爲二一番引付頭一、）越後守平實時（四月爲二二番引付頭一）前越前守平時廣（四月爲二四番引付頭一、○中略）

左近大夫將監平義政（四月爲二三番引付頭一）秋田城介藤原泰盛（四月爲二五番引付頭一）

文永十年癸酉

評定衆

越後守平實時（二番引付頭、六月廿五日爲二一番頭一、）前越前守平時廣（四番引付頭）駿河守平義政（三番引付頭、六月遁世、）陸奥守

平時村（六月廿五日爲二二番引付頭一）相模左近大夫將監平宗政（六月廿五日爲二三番引付頭一）秋田城介藤原泰盛（五番引付頭）

建治元年乙亥

評定衆

前越前守平時廣（四番引付頭、六月卒、○中略）尾張守平公時（七月六日爲二四番引付頭一、）

建治三年丁丑

評定衆

陸奥守平時村（二番引付頭、八月止二引付頭一、）相模左近大夫將監平宗政（三番引付頭、六月任二武藏守一、八月廿九日爲二一番引付頭一、）前尾張守平公

時（四番引付頭）彈正少弼平業時（五月任二越後守一、八月廿九日爲二三番引付頭一、）前武藏守平宣時（八月廿九日爲二二番引付頭一）秋田城介

藤原泰盛（五番引付頭）

〔太田康有記〕建治三年八月廿九日、自二山内殿一被レ召之間、馳參之處、召二御前一被レ仰云、武藏守（○北條宗政）可レ爲二一番引付頭、武藏前司（○北條宣時）可レ爲二二番頭、越後守（○北條業時）可レ爲二三番頭、早以二此旨一可レ觸二仰彼人々一、九月四日、武州一番頭、前武州二番頭領狀に言上之處、仰云、武州者元三番頭也、相二率三番衆一可レ轉二一

〔關東評定傳 一〕康元元年丙辰

評定衆

前右馬權頭平政村朝臣 一番引付頭、三月遁世、 武藏守平朝直 二番引付頭、四月爲二一番頭一、七月廿日辭二武藏守一、 前尾張守平時章 三番引付頭、四月爲二二番頭一、 陸奥掃部助平實時 去年十二月任二越後守一、四月爲二三番頭一、

引付衆

前和泉守藤原行方 四番引付頭 前筑前守藤原行泰 五番引付頭、政所執事、四月止二引付頭一、○中略 秋田城介藤原泰盛 四月爲二五番引付頭一、六月加二評定衆一、

〔吾妻鏡 四十六〕建長八年○康元元年 四月廿九日庚寅、三番引付頭人等事有二其沙汰一、今日被レ定レ之、所謂武藏守朝直、爲二一番引付頭一、前尾張守時章爲二二番頭一、越後守實時三番頭、

〔關東評定傳 一〕弘長二年壬戌

評定衆

前武藏守平朝直 一番引付頭 前尾張守平時章 二番引付頭 越後守平實時 三番引付頭○中略 前和泉守藤原行方 四番引付頭、六月廿九日止レ頭、○中略 秋田城介藤原泰盛 五番引付頭、六月廿九日止レ頭、

〔關東評定傳 二〕文永元年甲子

評定衆

前武藏守平朝直 一番引付頭、五月三日卒、 前尾張守平時章法師 法名見西、二番引付頭、六月十六日爲二一番頭一、 越後守平實時 三番引付頭、六月十六日爲二二番頭一、○中略 秋田城介藤原泰盛 六月十六日爲二三番引付頭一、

文永三年丙寅

評定衆

前尾張守平時章法師 法名見西、一番引付頭、三月止レ頭、 越後守平實時 二番引付頭、越訴奉行、三月止レ頭、○中略 安達秋田城介藤原泰盛

人光政　明石左近大夫兼綱　對馬左衛門次郎
三番(三日十三日)　越後守實時　刑部少輔政時　上總前司長泰　太田民部大夫康宗　江民部大夫
以基　長田左衛門尉廣雅　佐藤民部次郎業連
四番(七日廿二日)　和泉前司行方　前大宰權少貳入道連佐　對馬前司倫長　刑部權少輔政茂　壹
岐前司基政　山城前司俊平　山名中務大夫俊行　雜賀太郎尙持
五番(十二日廿七日)　秋田城介泰盛　大宰權少貳景頼　伊賀前司時家　信濃判官入道行一　隱岐大
夫判官行氏　中山城前司盛時　佐藤民部大夫行幹　山名進次郎行直　齋藤次朝俊

〔北條九代記上〕康元元年丙辰(十月五日改元)
政村(陸奥四郎、右京權大夫、正四位下、)　建長元年十一月十三日、爲引付頭、

〔關東評定傳一〕建長二年庚戌
評定衆
前右馬權頭平政村朝臣(一番引付頭)　武藏守平朝直(二番引付頭)　相模三郎平資時法師(法名眞昭、三番引付頭、)

〔北條九代記上〕建長三年六月五日引付頭　政村一、朝直二、時章三、師員四、光西五、行然六、同廿日、止師員光西行然、

〔關東評定傳一〕建長四年壬子
評定衆
前右馬權頭平政村朝臣(一番引付頭)　武藏守平朝直(二番引付頭)　前尾張守平時章(三番引付頭○中略)　(信濃)民部大夫藤原行盛法師(法名行然、政所執事、四月廿日、爲四番引付頭、○中略)　秋田城介藤原義景(四月廿日、爲五番引付頭、)

〔吾妻鏡四十三〕建長五年十二月廿二日丙寅、前和泉守藤原行方爲四番引付頭人(行盛入道之替)、前筑前守藤原行泰補五番引付頭(義景入道之替)

大夫將監（新加〇大江政胤）　深澤山城前司　甲斐前司　山名中務丞　雜賀太郎（新加）
五番　筑前前司（〇二階堂行泰）　參河前司（〇清原敎隆）　太田民部大夫　長井太郎（新加〇大江時秀）　明石左近將
監　進士次郎藏人　善刑部丞　越前四郎　對馬左衞門次郎

〔吾妻鏡四十七〕康元二年（〇正嘉元年）閏三月二日丁巳、今日評議之時、更被結番引付人數、自來月朔日、以
此衆可行之由被定下云云、
一番（二日十二日）　武藏前司朝直　出羽前司行義　縫殿頭師連　淸左衞門尉滿定　對馬左衞門尉
仲康　皆吉大炊助文章　水原兵衞尉孝宣
二番（七日廿六日）　尾張前司時章　筑前前司行泰　參河前司敎隆　丹後守賴景　長井太郎時秀
明石左近大夫兼綱　進士次郎藏人　對馬左衞門二郎
三番（十二日廿七日）　越後守實時　刑部少輔敎時　常陸入道行日　上總介長泰　太田民部大夫康宗
江民部大夫弘基　長田兵衞太郎廣雅　大藏四郎則忠
四番（二日廿二日）　和泉前司行方　前大宰少貳爲佐　那波左近大夫將監政茂　對馬前司倫長　山
城前司俊平　甲斐前司家國　山名中務大夫俊長　雜賀太郎尙持
五番（七日廿七日）　秋田城介泰盛　伊勢入道行願　武藤少卿景賴　信濃判官入道行一　中山城前
司盛時　佐藤右京進　山名進二郎行忠　齋頭二朝俊

〔吾妻鏡五十〕文應二年（〇弘長元年）三月廿日壬午、引付衆等進別紙起請、亦新制事、今日始施行之、引付結
（〇結一本作鏁）番被改之、
一番（三日廿二日）　武藏前司朝直　出羽前司入道道空　縫殿頭師連　伊勢前司入道行願　淸左衞
門尉滿定　式部太郎左衞門尉光政　皆吉大炊助文幸　嶋田五郎左衞門尉親茂
二番（七日廿七日）　尾張前司時章　筑前前司入道行善　直講敎隆　宮內權大輔時秀　進士次郎藏

引付

一番　前右馬權頭政村　佐渡前司基綱　備後前司康持　伊勢前司行綱　城九郎泰盛初加　中山城前司盛時　內記兵庫允祐村　山名進次郎

二番　武藏守朝直　出羽前司行義　伊賀式部大夫入道光西　淸左衛門尉滿定　越前兵庫助政宗　皆吉大炊助文幸　對馬左衛門尉仲康

三番　尾張前司時章　陸奥掃部助實時　常陸入道行日　城次郎頼景　大曾禰左衛門尉長泰　新江式部大夫　太田太郎兵衛尉　長江兵衛太郎

四番　前大宰少貳爲佐今日加二頭人一　和泉前司行方　對馬前司倫長　武藤左衛門尉景頼　深澤山城前司　甲斐前司　山名中務丞

五番　筑前前司行泰　參河前司敎隆　太田民部大夫　進士次郎藏人　明石左近將監　越前四郎

〔吾妻鏡四十四〕建長六年十二月一日己巳、五方引付、更被結番之、

引付

一番　前右馬權頭〇北條政村　佐渡前司〇後藤基綱　備後前司〇三善康持　伊勢前司〇二階堂行綱　城九郎〇泰盛　中山城前司〇頼資　內記兵庫允〇祐村　山名進次郎　佐渡右京進新加

二番　武藏守〇北條朝直　出羽前司〇行義　伊賀式部大夫入道〇光宗　縫殿頭新加〇中原師連　淸左衛門尉〇淸原滿定　對馬左衛門尉〇仲康

三番　尾張前司〇北條時章　掃部助〇北條實時　常陸入道〇行久　大曾禰左衛門尉〇長泰　城次郎〇頼景　江民部大夫〇三善康連　太田太郎兵衛尉　長田兵衛太郎

四番　和泉前司〇二階堂行方　武藤左衛門尉〇景頼　對馬前司〇三善倫長　前大宰少貳〇爲佐　那波左近

五番　伊賀式部大夫入道光西　秋田城介義景　伊豆前司行方　明石左近將監兼綱　內記兵庫亮祐村

六番　信濃民部大夫入道行然　筑前前司行泰　甲斐前司泰秀　越前兵庫助政宗　太田太郎兵衞尉康宗

廿日己酉、引付之事、雖被結番之、重々被歷其左右、縮六方、欲爲（欲恐誤）三方、○下略

〔吾妻鏡四十二〕建長四年四月廿日癸酉、可被改引付番文之旨有其沙汰、今日以評議之次、被加人數、秋田城介、太田民部大夫康連等奉行之、　卅日癸未、引付加二方爲五方、以民部大夫藤原行盛法師爲四番頭、秋田城介藤原義景被定五番頭、一二番頭人如元云云、

引付

一番二日　前右馬權頭政村　佐渡前司基綱　備後前司康持　伊勢前司行綱　中山城前司盛時　內記兵庫允祐村　山名次郎行直

二番七日　武藏守朝直　出羽前司行義　伊賀式部入道光西　清左衞門尉滿定　越前兵庫助政宗　皆吉大炊助文幸　對馬左衞門尉仲康

三番十二日　尾張前司時章　陸奧掃部助實時　常陸入道行日　大曾禰左衞門尉長泰　新江民部大夫以基　太田太郎兵衞尉康守　長田兵衞太郎廣雅

四番廿三日　信濃民部大夫入道行然　和泉前司行方　對馬前司倫長　武藤左衞門尉景頼　深津山城前司俊平　甲斐前司宗圖　山名中務丞俊行

五番廿七日　秋田城介義景　筑前前司行泰　三河前司教隆　太田民部大夫康連　進士次郎藏人　明石左近將監兼綱　越前四郎經朝

〔吾妻鏡四十三〕建長五年十二月廿二日丙寅、前和泉守藤原行方、爲四番引付頭人、（行盛入道之替）○中略

結番

不用、迎ニ遣キ田舍マデ、持送セテゾ返シケル、

〔武家名目抄 職名五下〕按、靑砥左衞門、引付衆たること、評定傳に見えず、思ふに寄人になされて、公事を奉行せしなるべし、ことに評定衆引付衆は、定まれる家々ありて、靑砥氏などは其筋ならねば、正しく引付衆になるべきいはれなきことなり、

〔新御式目〕條々

正安二三七十九 ○二以下恐有衍字　但馬前司渡之 ○中略

一於引付可有御下知取捨事 ○中略

一急事外、於引付座不可書御教書以下事、○中略

可渡他方引付事

一諸人代官除、退座分限可令停止事、

一對問時、一方人數兩三外、堅可禁制事、

一京下幷無足訴人、及經年序沙汰事、

〔吾妻鏡 四十一〕建長三年六月五日甲午、有評定、○中略　次五方引付、更被結番之、爲六方、秋田城介義景輕服之後、始出仕奉行此事云云、其番文云、

一方　前右馬權頭政村　常陸入道行日　大曾禰右衞門尉長泰　山城前司俊平　新江民部大夫以基

二番　武藏守朝直　太田民部大夫康連　武藤右衞門尉景賴　中山城前司盛時　山名進二郞行直

三番　尾張前司時章　對馬守倫長　淸左衞門尉滿定　長田兵衞太郞廣雅　越前四郞經成

四番　攝津前司師員　出羽前司行義　伊勢前司行綱　山名中務俊行　皆吉大炊助文幸

訴狀爲非據者、不可賦之由可被仰問注所歟、卽時可成御敎書之旨、可被仰五方引付奉行人歟、

〔新編追加 雜務〕神社佛寺條

一神社佛寺訴訟事 正慶三

早速可有沙汰之由、可被仰五方引付歟、

〔新編追加 雜務〕庶子分領條

一充給總領跡混領庶子分事

總領主有罪科之時、以別人令改補之處、庶子等稱不給御下文、無尋究知行實否、頃年被付總領之條、甚爲不便之儀歟、各別領知證據分明者、縱雖不帶安堵御下文、於本引付重有其沙汰、可返付之由被仰下之後、三方引付奉行人、被結改畢、然者雖非本引付、於奉行人現在之方可申沙汰、但無奉行人事、於一二番分者、頭人依無相違、猶於本引付、以他奉行人可糺明、於三番者、被改頭人、至四番五番者、止其方々畢、彼三方分者、自問注所可賦出引付方也、

〔太平記 三十五〕北野通夜物語事附靑砥左衞門事

報光寺(○北條時宗)最勝園寺(○北條貞時)二代ノ相州ニ仕ヘテ、引付ノ人數ニ列リケル靑砥左衞門ト云者アリ、(○中略)或時德宗領ニ沙汰出來テ、地下ノ公文ト、相摸守ト訴陳ニ番事アリ、理非懸隔シテ、公文ガ申處道理ナリケレドモ、奉行、頭人、評定衆、皆德宗領ニ憚テ公文ヲ負シケルヲ、靑砥左衞門只一人、權門ニモ不恐、理ノ當ル處ヲ具ニ申立テ、遂ニ相摸守ヲゾ負シケル、公文不慮ニ得利シテ、所帶ニ安堵シタリケルガ、其恩ヲ報ゼントヤ思ケン、錢ヲ三百貫俵ニ裹テ、後ロノ山ヨリ、潛ニ靑砥左衞門ガ坪ノ內ヘゾ入レタリケル、靑砥左衞門是ヲ見テ大ニ忿リ、沙汰ノ理非ヲ申ツルハ、相摸殿ヲ奉思故也、全地下ノ公文ヲ引ニ非ズ、若シ引出物ヲ取ベクハ、上ノ御惡名ヲ申留ヌレバ、相摸殿ヨリコソ悅ヲバシ給フベケレ、沙汰ニ勝タル公文ガ、引出物ヲスベキ樣ナシトテ、一錢ヲモ遂ニ

一鎌倉中諸堂供料事文永元
寺用未下之間、多致無供之勤云々、寺務幷雜掌、共以不法也、於引付札明子細、早速可令尋沙汰、
〔吾妻鏡五十二〕文永三年三月六日己亥、諸人訴論事、被止引付沙汰、問注所召整訴陳狀、可勘申是非
也、
〔新御式目〕弘安七五廿七評
一召文問狀事　引付頭人可下奉書○中略
一引付衆幷奉行事　右引付衆、殊專淸潔可勵參、奉行人、爲廉直致忠勤者、尤可致賞翫、插奸心、現私
曲者、永不可召仕、仍引付忠否、奉行曲直、頭人不憚于人、不及緩怠遲々可注申也、引付外奉行人、致
所問注所執事、可申沙汰矣、
〔新編追加佛舍〕堂舍造營條
一鎌倉中諸堂修理幷寄進所領事弘安七十一廿七
五方引付、可申沙汰之由、先日被仰下之處無沙汰云々、修理事者、頭人加見知、嚴密可注申、小破所々、
爲別當之沙汰可修理之由、可相觸所領事、急速可申沙汰、次法花堂事、爲五番引付頭人奉行、修造營
之功、間於五番可有沙汰、次新釋迦堂事同前、大慈寺者、可爲三番引付、
〔新編追加雜務〕神社佛寺條
一近國諸社修理御祈禱訴訟御寄進所領等於引付可申沙汰事弘安七八二
一番、伊豆、宇都宮、　二番、三島社、熱田六所宮、　三番、鶴岡、鹿島、香取、　四番、諏方上下、　五番、筥根、日
光、
右寺社奉行人、可尋下有子細者、守此旨可賦引付也、既有沙汰之分者、本引付可申沙汰、
〔新御式目〕一諸人訴訟問狀事

方也、

〔吾妻鏡 四十四〕建長六年四月廿九日壬申、評定、西國庄公地頭等所務事、有其沙汰、是本地頭所務者、可依往昔之由緒、故追先規之例、可令止新儀非法也、新地頭者、被定率法之上者、其外全可停止濫吹也者、存此趣、可加下知之由、即被相觸五方引付云云、

〔吾妻鏡 四十六〕建長八年〈○康元元年〉六月五日甲子、於御教書違背之咎者、爲令召可注進所領之由可下知之旨、所被相觸五方引付也、

〔吾妻鏡 四十八〕正嘉二年五月十日己未、鎌倉中幷國々訴人沙汰事被定法、是可仰付主人幷在所地頭事也、其事書樣、

一鎌倉中幷國々訴人沙汰事

奉行人奉書三箇度不被用者、可被成御教書、又彼狀雖及三箇度、不事行者、於引付尋明子細、事實者可注申所領之由、可被成御教書、又難治事同於引付可有其沙汰矣、

〔新御式目〕條々

一引付記錄當日可書事〈○中略〉

正嘉三年〈○正元元年〉二月九日　武藏守

相摸守

駿河守殿

〔吾妻鏡 五十一〕文應二年〈○弘長元年〉三月五日丁卯、引付沙汰、不事行之由、訴人等愁訴之趣達上聞之間、今日有評議、向後無懈緩之儀、早速可申沙汰也、於徒拘持奉行人等者、頭人就注申、可被處重科之旨、被觸仰引付云云、

〔新編追加 佛寺法會條〕

職掌

置せらる、同五年、引付衆二階堂行方、同行泰二人をもて、頭人の闕に補す、凡引付衆たるもの頭を帶せるは、此二人の外絶てある事なし、(足利殿の時にも、評定衆ならずして、頭人に補せられしこと聞えず、)同六年に、引付衆を加增せられて十四人となる、是より後は十人にくだる事なし、弘長二年、四五の貳番をとゞめて、更に三番となさる、文永三年に至て、引付の沙汰を止められしかば、頭人はなべての評定衆となり、引付衆は寄人に還れり、同六年、引付の沙汰を復されて、更に頭五人、衆十餘人を補せらる、正應三年にいたりて、更に貳番を止め、三番とせられたりしが、永仁元年、又引付の執務をとゞめ、特に執奏の職を設けて、訴訟裁判の沙汰をいたさしむ、同三年、又引付を復して五番を置かる、其職掌に於ても亦初に異なることなし、既にして乾元元年、更に其員を增加せられ八番となる、それより後、嘉元、德治、應長、文保の際、しば〱增減あり、或は五番六番となり、或は七番八番にいたる事あり、數年の間、すべて一定あることなし、思ふに、此頃北條家衰弊の時いたりて、政事漸く頽廢し、法制規模とする所なかりし故なるべし、然るに元應元年、ふたゝび五番に復せられしより元弘に及ぶまで、十餘年の間、亦此制を改めざりしなり、○中略 凡此頭人は、鎌倉の世には、北條一家の內、評定衆たるものをもてなさるゝを常例とす、されども其闕に補せらるべき人なき時には、他姓の人も、まゝ補せられしかど、一番より三番にいたりて、三方は必北條一家に限りて、他姓を補せざるならひなり、(他姓にて三番の頭人となりしは、安達泰盛一人に限りて、其前後あることなし、)

〔吾妻鏡 四十〕建長二年四月二日丁酉、諸人訴論事、於引付勘決文書理非之間、加了見之處、旨趣爲分明者、任先規不能對決、又引付事、巳剋以前、可始行之、云頭人、云奉行人、莫及遲參、且可進覽時付著到之由、被觸仰三方引付云云、秋田城介爲奉行云云、　九月十日癸酉、諸人訴論御成敗事、專守式條、不可參差之由、今日被觸仰引付幷問註所政所云云、　十二月七日戊戌、召文違背、罪科事、有其沙汰、三箇度不敍用者、以御使可催促之、猶於令難澀者、隨注申之、可有罪科左右之旨、所被觸三番引付以下

沿革

し、古例等を書留るを云、總じて引付と云は、其時々の日記也、引は後日の證據に引用る爲に書留る也、付とは記し付る也、評定の次第を帳面に書留め置く役を引付衆と云なり、

〔關東評定傳一〕建長元年十二月始引付、諸人訴訟不事行故也、

評定衆

前右馬權頭平政村朝臣十二月九日一番引付頭　武藏守平朝直十二月九日二番引付頭　相摸三郎平資時法師法名眞昭、十二月九日三番引付頭、〇中略

引付衆十二月十三日始之

二階堂前和泉守藤原行方　二階堂前筑前守藤原行泰　二階堂前伊勢守藤原行綱　左衞門尉藤原長泰　左衞門尉藤原景頼

〔吾妻鏡四十二〕建長四年四月卅日癸未、引付加二方、爲五方、

弘長二年六月廿九日、引付、止五方、爲三方、

〔吾妻鏡五十二〕文永三年三月六日己亥、諸人訴論事、被止引付沙汰、問注所召訴陳狀、可勘申是非也、

〔關東評定傳二〕文永六年四月廿七日、止問注所沙汰、被始五方引付、

〔北條九代記下〕永仁元年六月引付頭　時村一、道鑒二、師時三、十月止引付、置執奏、時村、道鑒、師時、惠日、宗宣、連瑜、宗秀等也、〇中略十月又置引付頭人、　時村一、道鑒二、道西三、惠日四、連瑜五、

三年十月廿四日始五方引付、於重事者、停直聽斷、

〔武家名目抄職名五下〕按、〇中略建長元年に至て、始て引付三番を置れし時、評定衆の内、北條政村、同朝直、同資時、三人を頭人に兼補せしめ、寄人の内五人をもて引付衆とせり、此時にも引付衆に補せられざる輩は、元のごとく寄人として、これも引付衆につぎて諸事を奉行する事なりき、同四年に、貳番をまして五番とし、頭貳人、衆四人を加

〔庭訓往來具註鈔〕引付沙汰とは、先代より定まれる例を以て、今其事々に引合せて沙汰する也、

〔撮壤集 下 武職〕頭人 引付開闔 神宮

〔成氏年中行事〕一引付之衆ト云ハ、評定衆ノ下司ヲ云也、

〔右文故事 二 御本日記附註中〕引付トハ、諸公事目安ノコトナリ、ソレヲ掌ドルヲ引付衆ト云、

〔武家名目抄 職名五下〕按引付衆は、評定衆補助の職にして、訴訟はさらなり、其餘の公事、なべてうけ給はり沙汰せる重職なれば、評定衆にさしつぎて、諸奉行の職を帶せるならひなり、これを公家の官職に比するに、參議もしくは左右辨官の職掌に當れり、もと引付といへるは、記錄の名よりいでし名目なり、すべて引付といふ記錄にさま〴〵あり、政所にては訴訟の顛末を注記し、其訴を沙汰せる奉行人の姓名を傍書したる記錄をなづけて賦銘引付といふ、鎌倉殿の時の引付は、今傳はらず、足利家のは世に存せるがまゝあり、題して政所賦銘引付といふ、また營中常日の規格をしるせし記をも引付といへり、〇註略其他何事にもあれ、後證となすべき事を記錄せしものをば、しか云しと見ゆ、當家御家人たる輩、恩米を給はるもの、其員數をしるせし簿を引付と稱せるも、亦其一なり、但引付の名は、武家に限りたるにあらず、神社佛寺にても、先例又は會議などの始末を記せし文をば引付と云しなり、引は導引の意にて、事の手引となすべきいはれあり、序引などいふも、このこゝろなり、付は著識の儀にして、當世物を記したるを書付といへるに同じ、さてこの輩は、政所に祗候して、訴訟以下の公務を沙汰するを本務とし、文官の宰たるが故に、記錄所祗候の意を以て、引付衆と稱せるなり、諸國の記錄の內に、政所の引付より上たるもののなし、故に其稱を專にせしなるべし、いまだ引付を置れざりし程は、此衆を政所寄人といへり、

〔倭訓栞 中編二十一〕ひきつけ　庭訓往來に御引付沙汰と見ゆ、先例を記し置て、其事を引合て沙汰するをいへり、又鎌倉北條の時、評定引付兩職を置て、軍政を執しむる也、

〔貞丈雜記 四 役名〕一引付方奉行とは引付衆の事也、評定衆の下司なり、政所へ出て時々の日記を記

〔北條九代記 下〕嘉元三年乙巳
宗宣 従四位下、陸奥守、 永仁四年十月爲寄合衆、同爲京下奉行、
〔北條九代記 下〕永仁元年癸巳
久時 北方九、時範子、越後守、 嘉元二年三月六日爲寄合衆、爲官途奉行、
應長元年辛亥
熙時 正五位下、相摸守、本名貞泰、 延慶二年四月九日爲寄合衆、應長元年十月三日爲連署、

名稱

引付衆

引付衆ハ、評定衆ノ輔助ニシテ、訴訟及ビ庶務ヲ掌ル、其引付ヲ以テ名トスルモノハ、引付ハ當時記錄ノ稱ニシテ、此職詞訟ヲ記錄スルガ故ナラン、
建長元年十二月、始テ引付三番ヲ置ク、之ヲ三方引付ト云フ、評定衆北條政村、北條資時ヲ以テ引付頭人トシ、二階堂行方、行泰、行綱、大曾根長泰、武藤景頼等ヲ以テ引付衆トス、爾後增減廢置一ナラズ、蓋シ政務ノ繁簡ニ隨ヒテ臨機ノ處分ニ出シナラン、
引付頭人ハ、評定衆ノ兼補トス、或ハ引付衆ニシテ頭人ヲ兼ヌル者アリ、蓋シ異數ナリトス、而シテ其一番ヨリ三番ニ至ル三方ノ頭人ハ、必ズ北條氏一家ニ限リテ、他姓ヲ補セズト云フ、引付衆ハ、多ク名家ノ子弟ヲ以テ之ニ補ス、是先ヅ此職ニ補シテ事務ヲ練習シ、以テ他日評定衆ニ陞ルベキ階梯ト爲スナリ、引付右筆ハ、書記ヲ掌ル、故ニ執筆トモ稱ス、政所寄人ノ兼補スル所ナリ、

〔庭訓往來〕御引付沙汰

〔北條九代記〕下〕正安三年辛丑、
時村従四位下、左京権大夫、　正應二年五月爲寄合衆、

〔吾妻鏡〕三十八〕寛元五年〇寶治元年六月廿二日癸卯、去五日合戰、亡帥以下交名、爲宗分日來注之、今日於御寄合座、及披露云云、　廿六日丁未、今日內々有御寄合事、公家御事、殊可被奉尊敬之由、有其沙汰云云、

〔武家名目抄〕職名五上〕按、寄合衆といへるは、執權及評定衆と共に國政を評議せるつかさにて、北條一家の內、其任にあたれる人、たまさかに補任せらるゝ所なり、もとより連綿の職ならざれば、其職に居りし人も亦多からず、鎌倉殿の初政には、宿老たる輩は、定まれる職掌なきものといへども、まゝ政務にあづかれる事ありしが、評定引付の職掌いできし後は、其つかさにあらざるは參議することと絕たり、さて後に、この寄合衆といふがいできたり、但此名目、北條記の外には見る所なけれども、今推考もて思ふに、大方北條貞時執權のほどに設けし所なるべし、さるは北條家久しく國命をとりて、やゝ衰政の時に至り、外寇の憂などありければ、かく名稱の異なる所司を設けて、執權と評定衆との間に居らしめ、國務をたすけられしと見ゆ、其重職たるは、引付頭、六波羅探題などよりも、これに補せられ、又此職より直に連署に至るをもて志るべきなり、內々のさまは、連署の衆に差つぎしほどの大任にて有しなるべし、なべて政務の事は、評定の席にて議せるが舊式にはありけれど、年をふるにしたがひて、評定の席上には、さまざま禮式のこと多くなりけるまゝ、ひたすら政務を議すべきために寄合といふことを始め、評定衆の內、さるべき輩、執權の亭に會合して、專要務を沙汰することいで來れり、〇註略さて此職を寄合衆といへるにつきて考ふるに、例式なる評定の席にはのぞますして、寄合の席につらなり、內議論定するつかさなりしと見ゆ、

雜載

相州〇北條時房武州〇北條泰時爲理非決斷職、猶令加署判於此起請給云云、

〔吾妻鏡五十〕文應二年〇弘長元年三月廿日壬午、今日評定衆召連署起請、常陸介入道行日、依不加判可離其衆、

〔北條九代記下〕延慶三年七月、被召兩國司〇相模守師時、陸奧守宗宣、幷評定衆以下自筆起請文、元亨二年八月十日、被召評定衆自筆起請、

〔新御式目〕一政務事正應六五廿五評　任先例可被召評定引付衆、幷奉行人等起請文、且不可取賄賂之由、可被召奉行人誓狀、於無足之輩者、可有御恩、至廉直之仁、可致賞翫歟、

〔吾妻鏡三十三〕延應二年〇仁治元年十二月廿一日庚辰、今朝前武州〇北條泰時相具評定衆等、令參右大將家法華堂、被修佛事、莊嚴房僧都行勇爲導師、是依爲故隱岐次郎左衞門入道行阿初七日忌景也、凡向後於評定以下携公事輩之沒後者、必可勵追善之由及衆談云云、

〔吾妻鏡四十一〕建長三年八月廿三日辛亥、評定衆中、所勞於不參勤之輩、不可乘著到之由有其沙汰、不令辭其衆之程者、不可書乘之旨被仰出云云、

〔新御式目〕正安二七七

一評定衆殊可致忠勤之處、多以不參云々、甚無其謂、於如然輩者、嚴密可致注進之狀、依仰執達如件、

正安二七七

陸奧守〇北條宣時判
相模守〇北條貞時判

上總前司殿

〔吾妻鏡四十四〕建長六年十二月廿三日辛卯、評定衆、幷可然大名外之輩者、云出仕、云私出行、不可具騎馬共人、凡非晴儀者、僮僕之員、可減定之旨、皆可相觸之由、所被仰付侍所司等也、

〇

著座次第

蓮、伊賀入道道圓、對馬前司倫長、勘解由判官康有等候、其座、佐藤民部次郎業連、執筆事書等儀畢、泰盛、心蓮持參之、上覽之後召使者於評議座、被下御返事、卽時使令歸洛畢、　十二日壬午、今日被行評定始、去六日者、臨時儀也、仍就吉日、故被始之、師連、泰盛持參事書云云、

〔吾妻鏡三十八〕寬元五年〈○寶治元年〉六月廿七日戊申、合戰之後、今日所被始評定也、神社佛寺吉事、有其沙汰云云、

著座次第

一方　左親衛〈○北條時頼〉　武藏守〈○北條朝直〉　甲斐前司〈○大江泰秀〉　下野前司〈○泰綱〉　信濃民部大夫入道〈○行盛〉　清左衛門尉〈○清原滿定〉

一方　前右馬權頭〈○北條政村〉　相摸三郎入道〈○北條資時〉　出羽前司〈○二階堂行義〉　秋田城介〈○安達義景〉　太田民部大夫〈○康連〉

〔吾妻鏡三十九〕寶治二年正月七日丙辰、於御出居、被定評定衆老若著座次第、

老座　相州〈○重時〉　相摸三郎入道〈○資時〉　攝津前司〈○師員〉　伊賀式部入道〈○光家〉　信濃民部大夫入道〈○行盛〉　太田民部大夫〈○康連〉　清左衛門尉〈○滿定〉

若座　左親衛〈○時頼〉　前右馬權頭〈○政村〉　武藏守〈○朝直〉　尾張前司〈○時章〉　甲斐前司〈○泰秀〉　秋田城介〈○義景〉　出羽前司〈○行義〉　下野前司〈○泰綱〉　天野外記大夫〈○倫長〉

以上依仰所定如斯、但城介與出羽前司者、一日者上、一日下、各相替可著座者、

評定衆起請

〔吾妻鏡二十八〕寬喜四年〈○貞永元年〉七月十日、爲表政道無私、召評定衆連署起請文、其衆爲十一人、

攝津守中原師員　前駿河守平義村　沙彌行西〈隱岐守〉　前出羽守藤原家長　加賀守三善康俊　沙彌行然〈民部大夫〉　左衛門少尉藤原基綱　大和守三善倫重　玄蕃允同康連　相摸大掾藤原業時　沙彌淨圓〈左兵衛尉〉

免職

〔中原氏系圖〕親政 攝津守 從五下
　├親鑒 正五下、刑部大、評定衆、
　└親秀 掃部頭 評定衆 ― 貞高 左近少將監 ― 能直 從四下、掃部頭、評定衆、 ― 能秀 掃部頭 評定衆 ― 滿親 從四下、左馬頭、問注所評定奉行、

〔吾妻鏡 三十四〕仁治二年五月廿日丁未、今日佐藤民部大夫業時、依有其科被除評定衆、是落書以下現奇恠云云、

〔吾妻鏡 三十七〕寛元四年六月七日甲午、前佐渡守基綱、前大宰少貳爲佐、上總權介秀胤、前加賀守康持等、有事被除評定衆、

〔吾妻鏡 三十八〕寛元五年〇寶治元年六月十一日壬辰、前刑部少輔忠成朝臣被除評定衆、依同意毛利入道西阿之過也、

評定始

〔吾妻鏡 三十一〕嘉禎二年八月五日己丑、匠作、武州被參、於新造評定所有評議始、其衆皆參、但出羽前司家長、依所勞不參、先被定之御勤仕之輩云云、

〔吾妻鏡 三十三〕延應二年〇仁治元年正月十五日庚辰、評定始也、先々正月以後雖行之、依鬪星事及此儀云云、　前武州被參
評定衆　右馬權頭〇北條政村　武藏守〇北條朝直　攝津前司〇中原師員　佐渡前司〇後藤基綱　出羽前司〇二階堂行義　秋田城介〇安達義景　大宰少貳〇二階堂爲佐　對馬前司〇矢野倫重　加賀民部大夫〇町野康持　太田民部大夫〇康連　淸右衛門大夫〇淸原季氏　佐藤民部大夫〇業時

〔吾妻鏡 五十二〕文永二年正月六日丙子、依山門園城寺騷動事、去夜六波羅使者、持參經任朝臣奉書幷註進狀、御使伊勢入道行願依使節、自去年在京、書狀等、可有披露、而今年雖評定始以前、爲急事之間、不及日次沙汰、有今日評定、但人々不著布衣、又無盃酌、是非評定始之禮歟、近年無如此例云云、相州〇北條政村令出仕給、尾張入道見西、越後守實時、出羽入道道空、秋田城介泰盛、縫殿頭師連、大宰權少貳入道心

［北條九代記］下正應元年戊子
盛房（從五位下、丹波守、南方六、）　弘安十年十月爲評定衆
正安三年辛丑
師時（相摸守、從四位下、武藏四郎、）　正應六年五月卅日爲評定衆
［北條九代記］下弘安六年癸未
時連（勘解由判官）　永仁元年十二月三日加評定衆
七年甲申
兼時（越後守、從五位上、初南方五、後北方八、）　永仁三年五月十一日爲評定衆
永仁元年癸巳
久時（于時越後守、北方九、）　永仁六年四月九日爲評定衆
五年丁酉
宗方（北方十）　正安二年十二月廿八日爲評定衆
嘉暦元年丙寅
維貞（從四位下、修理大夫、本名貞宗、）　德治元年八月四日爲評定衆、〇中略元亨四年十月卅日、復加評定、
［北條九代記］下延慶元年戊申
貞房（越前守、從五位上、南方九、）　德治二年十二月十三日爲評定衆
嘉暦元年丙寅
守時（相摸守、從四位下、）　應長元年六月五日爲評定衆（不經引付）
［北條九代記］下元亨元年辛酉
範貞（正五位下、駿河守、北方、）　元應二年十二月加評定衆

定衆也、可書進御教書云々、

〔北條九代記　下〕文永八年辛未

義宗従五位下、駿河守、北方六番、　建治三年六月十七日爲評定衆、同日任駿河守、

〔關東評定傳　二〕弘安元年戊寅

引付衆

越後左近大夫將監平顯時二月加評定　刑部少輔平時基三月加評定、〇中略　城加賀守藤原顯盛二月加評定、〇中略　攝津左近將監藤原親致二月加評定、五月任攝津守、

〔北條九代記　下〕弘安八年乙酉

道嚴攝津入道、俗名親致、　弘安元年二月加評定衆

〔關東評定傳　二〕弘安五年壬午

引付衆

二階堂前下總守藤原顯綱政所執事、二月加評定、〇中略　城九郎藤原宗景二月加評定

弘安六年癸未

引付衆

佐々木前隱岐守源時淸六月加評定

弘安七年甲申

引付衆

相摸式部大夫平政長正月加評定

〔北條九代記　下〕嘉元三年乙巳

宗宣従四位下、陸奥守、　弘安十年十月爲評定衆

佐々木
前對馬守源氏信十二月加評定衆
文永七年庚午
引付衆
左近大夫將監平時村十月加評定衆、〇中略　前備中守藤原行有十月加評定衆
文永九年壬申
評定衆
左近大夫將監平宗政十月加、不經引付
文永十年癸酉
引付衆
尾張
左近大夫將監平公時六月加評定衆、〇中略　武藏守平宣時七月一日辭武藏守、九月加評定衆、〇中略　前下野守藤原景綱六月
加評定衆
建治二年丙子
評定衆
中務丞藤原業連四月加、不經引付
引付衆
彈正少弼兼左馬權助平業時三月加評定〇中略　玄番允三善倫經四月加評定
建治三年丁丑
評定衆
先代一族
駿河守平義宗六月十七日加、不經引付、八月卒
〔太田康有記〕建治三年六月十七日、爲諏訪左衛門入道奉、被仰云、陸奥左近大夫將監宗〇義所被加評

引付衆

秋田城介藤原泰盛四月爲五番引付頭、六月加評定衆、

正嘉二年戊午

引付衆

太田民部大夫三善康宗問注所執事、〻加評定衆、

正元元年己未

引付衆

前和泉守藤原行方四番引付頭、九月加評定衆、　前筑前守藤原行泰法師法名行善、政所執事、〻加評定衆、〇中略　大宰權少貳藤原景賴九月加評定衆、

〔關東評定傳〕二文永元年甲子

引付衆

縫殿頭中原師連十一月加評定衆、〇中略　前伊賀守藤原時家法師十一月加評定衆、　前伊勢守藤原行綱法師四月加評定衆、〇中略　左衛門少尉藤原行忠法師四月加評定衆、

文永二年乙丑

引付衆

前越前守平時廣六月加評定衆、　中務權大輔平敎時六月加評定衆、　宮內權大輔大江時秀六月加評定衆、

〔吾妻鏡〕五十二文永二年六月十一日丁丑、評定衆被新加、所謂前越前守平時廣、中務權大輔平敎時、宮內權大輔大江時秀、

〔關東評定傳〕二文永三年丙寅

引付衆

宇都宮前下野守藤原泰綱〻加

寛元二年甲辰

評定衆

伊賀式部大夫藤原光宗法師〻法名光西、加　前能登守平光村〻加　千葉上總權介平秀胤〻加　對馬外記大夫三

善倫長十二月二日加

寶治元年丁未

評定衆

前尾張守平時章七月加

建長元年己酉

評定衆

二階堂常陸介藤原行久法師法名行日、七月加、

建長五年癸丑

引付衆

播部助平實時二月加評定衆一

康元元年丙辰

評定衆

陸奥左近大夫將監平長時六月廿三日加、不經引付、七月廿日任武藏守、十一月執權、

〔北條九代記上〕康元元年丙辰

長時武藏守、從五位上、　康元元年六月廿三日加評定、不經引付、

〔關東評定傳一〕康元元年丙辰

十一日壬辰、入道相摸三郎資時主、法名眞佛被加評定衆云云、

〔吾妻鏡三十二〕嘉禎四年〇暦仁元年四月二日丁未、三浦若狹守泰村、二階堂出羽守行義等、被召加評定衆之由被仰下、各領狀云云、

〔關東評定傳一〕暦仁元年戊戌

評定衆

若狹守平泰村ミ加　加賀民部大夫三善康時ミ加

〇按ズルニ、泰村ハ再任セシナリ、

〔關東評定傳一〕延應元年己亥

評定衆

武藏守平朝直ミ加　右馬權頭平政村ミ加　秋田城介藤原義景ミ加　左衞門尉清原滿定ミ加

左衞門尉藤原基行法師ミ加

〔北條九代記上〕康元元年丙辰

政村陸奥四郎、右京權大夫、正四位下、　延應元年爲評定衆

〔島津家本吾妻鏡〕延應二年〇仁治元年正月廿二日丁亥、清左衞門尉滿定加評定衆云云、

〔關東評定傳一〕仁治二年辛丑

評定衆

駿河守平有時ミ加　左近大夫將監平經時先代家督、最明寺元、六月加　前甲斐守大江泰秀長井、六月加

〔島津家本吾妻鏡〕仁治二年六月廿八日甲申、北條左親衞〇經時幷甲斐前司泰秀等加評定衆云云、

〔關東評定傳一〕寬元元年癸卯

評定衆〇中略

攝津守中原師員　前右馬權頭平政村　駿河守平有時(今年以後無出仕)　武藏守平朝直(七月任遠江守)　相摸三郎平資時法師(法名眞昭)　前攝津守中原師員朝臣　藏人大夫大江季光法師(法名西阿)　民部大夫藤原行盛法師(法名行然、政所執事、)　前甲斐守大江泰秀　前若狹守平泰村　前佐渡守藤原基綱　前出羽守藤原行義　秋田城介藤原義景　(三浦)前駿河守平義村　(二階堂)隱岐守藤原行村法師(法名行西)　(中原)前出羽守藤原家長　(町野)加賀守三善康俊(問注所執事)　(信濃)民部大夫藤原行盛法師(法名行然、政所執事、)　(後藤)左衞門少尉藤原基綱　(矢野)外記大夫三善倫重(正月廿日任大和守)　(太田)玄蕃允三善康連　(佐藤)相摸守(○守恐大誤)掾藤原業時(閏九月廿七日任民部少丞、十二月轉大丞、)　(齋藤)左兵衞尉藤原長定法師(法名淨圓)

天福元年癸巳

評定衆

(毛利)藏人大夫大江季光法師(法名淨阿、ゝ加家長上、)

〔吾妻鏡二十九〕天福二年(○文曆元年)六月十九日、左衞門少尉爲光被召加評定衆、

〔關東評定傳一〕文曆元年甲午

評定衆

(佐々木)前近江守源信綱(ゝ加、七月出家、法名虛假、)　(攝津)左衞門尉藤原爲光(ゝ加)　(土屋)左衞門尉平宗光(ゝ加)

〔吾妻鏡三十一〕文曆二年(○嘉禎元年)五月廿二日甲寅、上野介藤原朝光(○結城)加評定衆云云、　閏六月三日甲午、上野入道(○結城朝光)辭申評定衆、是短慮迷易不辨是非之間、無所于欲獻意見云云、武州(○北條泰時)被仰云、五月初參、今月辭退、物忩事歟云云、上州重申云、初參之日、卽遂可辭申之、爲貽眉目於子葉然懸其號、渉一兩月訖、於今者難參勤云云、此上有許容、

〔吾妻鏡三十一〕嘉禎二年九月五日己未、今日近江入道虛假辭評定衆、俄以上洛、是潜有遁世之企云云、　十日甲子、遠江守朝時朝臣加評定衆、其後初出仕、此事不庶幾之由、內々難澀云云、　三年四月

結番

補任

結城、宇都宮、小田、佐々木等の如き、武門の名家も、まゝ補せらるゝ事あり、（此外にも補任せられし輩あれど、評定傳にゆづりて、こゝにもらせり、）されどこれは、もと文筆の家にあらざれば、父子其職を襲ねし事は多からず、三浦、千葉等の諸家は、文筆の家にあらざるのみならず、一門も廣く、所領も多き輩なれば、北條家にいまるゝことありて、政務の職を世々にせざりしなるべし、すべて其人數十五六人にこえしことは稀なり、建長年中、始めて引付衆を置るゝに及びて、評定衆たるものゝ子弟、先引付衆となり、後この衆に轉ずることゝなりぬ、世家の輩といへども、引付を經ずして、直に補せらるゝものあるは邂逅の例にて、尋常の事にあらず、

〔吾妻鏡五十二〕文永三年三月六日己亥、諸人訴論事、被止引付沙汰、問註所召整訴陳狀、可勘申是非也、前々被記申詞之間、爲被賦九人評定衆、所被結番也、

御評定日々奏事結番（次第不同）

一番（三日廿三日）十三日　尾張入道見西（○北條時章）　越前前司時廣　宮内權大輔時秀（○大江）　伊賀入道

道圓（○小田時家）　和泉入道行空（○行方）

二番（六日廿六日）十六日　越後守實時　中務權大輔教時　出羽入道道空（○二階堂行義）　信濃判官入道行

一（○二階堂行忠）　對馬前司倫長（○三善）

三番（十日晦日）廿日　秋田城介泰盛　縫殿頭師連　少卿入道心蓮（○少貳景頼）　伊勢入道行願（○二階堂行綱）

一番衆（一日十五日）　二番衆（五日廿一日）　三番衆（十一日廿五日）

政所問註所兩執事、毎日可令參也、且自問註所、毎日可差進文士二人也、

〔武家名目抄職名五上〕按、本文には被賦九人評定衆云々とありて、結番交名には、十四人を載たり、思ふに番毎に三人は其主職にて、自餘は佐職につけられしなるべし、

〔關東評定傳一〕貞永元年壬辰

評定衆

檜皮之由、被仰付云云、

〔吾妻鏡二十九〕貞永二年(○天福元年)八月十八日、早旦武州(○北條泰時)爲奉幣于江嶋明神出給之處、前濱有死人、是被殺害者也、不遂神拜、直參御所給、卽召評定衆被經沙汰、先令御家人等武藏大路、西濱、名越坂、大倉橫大路已下固方々途路、有犯科者否、可搜求其內家々由、被仰下之間、諸人奔走、而名越邊或男洗直垂袖、其濁血也、成佐、岩手左衞門尉生虜之、相具參御所、推問之剋、所犯之條無所遁、是博奕人也、仍殊可停止其業之由下知云云、

〔太平記二〕長崎新左衞門尉意見事附阿新殿事

持明院殿(○後伏見)ヨリ、內々關東へ御使ヲ下サレ、當今御謀叛ノ企、近日事已ニ急ナリ、武家速ニ糺明ノ沙汰ナクバ、天下ノ亂、近ニ有ベシト仰ラレタリケレバ、相模入道(○北條高時)ゲニモト驚テ、宗徒ノ一門、幷頭人評定衆ヲ集テ、此事如何有ベキト、各所存ヲ問ル、

〔太平記三十五〕北野通夜物語事附青砥左衞門事

日野僧正賴意、偸ニ吉野ノ山中ヲ出テ、聊宿願ノ事有ケレバ、靈驗ノ新タナル事ヲ憑奉リ、北野ノ聖廟ニ通夜シ侍リシニ、(○中略)是モ秋ノ哀ニ被催テ、月ニ心ノアコガレタル人ヨト覺クテ、南殿ノ高欄ニ寄懸テ、三人並居タル人アリ、如何ナル人ヤラント見レバ、一人ハ古ヘ關東ノ頭人評定衆ナミニ列テ、武家ノ世ノ治リタリシ事、昔ヲモサゾ忍覽ト覺テ、坂東聲ナルガ、年ノ程六十計ナル遁世者也、

〔武家名目抄職名五上〕按、評定衆は、執權と共に政所の席に列なり、政務を評議し、萬事を進退せる重職なり、或は政所執事、問注所執事等を攝し、又は引付頭人を帶す、公家の官職に准するに、納言以上のつかさに配して、尤文官の冠たり、此故に北條家の一門、もしくは大江、清原、中原、三善等の諸氏、及二階堂、齋藤などの如き、文筆に堪たる諸士、此職を世々にせり、又三浦、千葉、安達、

評定所

職掌

善康俊(問注所執事)　民部大夫藤原(二階堂)行盛(政所執事)　民部大夫三善倫重　左衛門尉藤原基綱　玄蕃允三善康連　相模大掾藤原業時　左兵衛尉藤原長定法師(法名淨圓)

〔吾妻鏡二十八〕寛喜三年十月廿七日、相州(〇北條時房)武州(〇北條泰時)參評定所給、

〔吾妻鏡二十九〕貞永二年(〇天福元年)十一月十日、今日有評儀、及晩事訖、武州(〇北條泰時)令遷御亭給之後、招大和守倫重(〇矢野)玄蕃允康連(〇太田)民部丞業時(〇佐藤)等、賜盃酒、公事之間、致勤厚、殊神妙之由、褒美給云云、是近日雑訴等事、相積之間、連々有評儀、毎度武州早參給、人々面々、欲倒衣奉先立之、仍此三人令談合、日夜中參候于評定所、至翌朝、奉待彼御參、事既及五六箇度之間預此御感云云、

〇按ズルニ、矢野倫重、太田康連、佐藤業時ハ共ニ評定衆ナリ、

〔吾妻鏡三十八〕寛元五年(〇寶治元年)十一月十四日癸亥、相州(〇北條重時)新造花亭、有移徙之儀、評定所、并訴訟人等著座屋、東小侍等、今度始所造加也、

〔太田康有記〕建治三年七月廿七日、評定延引、信州入(〇信濃判官入道行一)相共於御所評定所問答、

〔北條九代記下〕正安元年己亥、今年造御評定所於將軍(〇久明親王)御所、被行御評定、

〔吾妻鏡二十八〕寛喜三年十月廿七日、相州(〇北條時房)武州(〇北條泰時)參評定所給、攝津守師員、駿河前司義村、隱岐入道行西、出羽前司家長、民部大夫入道行然、加賀守康俊、玄蕃允康連等出仕、式部大夫入道光西、相模大掾業時執申、法華堂并本尊災事、縦雖爲理運火災、於關東尤可怖畏思食之由、各進意見、同造營事、被經評定處、如師員、行西、康連、墳墓堂等炎上之時、無再興例之由依申之、有御助成可仰寺家之旨議定云云、

〔吾妻鏡三十三〕暦仁二年(〇延應元年)三月廿九日己亥、匠作、前武州著評定所給、評定衆等參進、宮根山別當與實、與智藏三郎法橋良實、遂對決、是當山二月經會之時、與實構棧敷於職衆座前、職衆躊躇之、以良實爲張本、打止彼大會之故也、兩方依難遁其過、與實者可亘花河戸橋、良實者可葺廻廊廿二箇間

齋院次官中原親能、主計允藤原行政、足立右馬允藤内遠元、甲斐四郎、大中臣秋家、藤判官代邦通等、爲二寄人一參上、邦通先書二吉書一、廣元披二覽御前一、次相摸國中神領佛物等事沙汰之、其後行二垸飯一、武衛〇源賴朝出御、千葉介經營、公私有二引出物一、上分御馬一疋、下各野劒一柄云云、

〇政所始ノ事ハ、政治部吉書始篇政所吉書始條、新所吉書始條等ニ詳ナリ、

評定衆 寄合衆 併入

評定衆ハ、政所ニ出仕シ、執權ト共ニ政務ヲ評議ス、嘉祿元年、始テ之ヲ置キ、中原師員、二階堂行村、三浦義村、及ビ問注所執事三善康俊、政所執事二階堂行盛等十一人ヲ以テ之ニ補ス、爾後評定衆ハ、北條氏ノ一族、及ビ大江、清原、中原、三善、二階堂、齋藤諸氏ノ文筆ニ勝ヘタル者ノ世職トシテ、他家ノ人ノ補セラルヽハ稀ナリ、建長元年引付衆ヲ置クニ至リテ、評定衆ハ引付衆ヨリ轉補セラルヽヲ以テ例トスルガ如シト雖モ、或ハ引付ヲ經ズシテ直ニ補セラルルコトモナキニアラズ、而シテ其人員ハ定數ナク、多キハ十五六人ニ及ビシコトアリ、文永三年、始テ評定衆ノ結番ノ法ヲ定ム、蓋シ此時引付ヲ廢セラレタルニヨリテ、訴訟ノ澀滯センコトヲ恐レテナルベシ、

寄合衆ハ、執權及ビ評定衆ト國務ヲ評議ス、正應二年、始テ之ヲ置キ、北條時村ヲ以テ之ニ任ズ、蓋シ常設ノ職ニアラザラン、

〔關東評定傳〕一嘉祿元年七月十一日、二位家〇源賴朝妻北條政子薨逝年六十九以後、被レ始二評定一、年紀不二分明一、〇中略

評定衆

助教中原師員　駿河前司平義村　二階堂隱岐守藤原行村法師法名行西　中條出羽守藤原家長　町野民部大夫三

寄人

〔吾妻鏡 三〕壽永三年(○元暦元年)十月六日辛酉、未剋新造公文所吉書始也、(○中略)齋院次官中原親能、主計允藤原行政、足立右馬允、藤内遠元、甲斐四郎、大中臣秋家、藤判官代邦通等爲寄人參上、

〔吾妻鏡 十四〕建久五年三月九日庚午、掃部允藤原行光加政所寄人云云、

〔武家名目抄 職名八下〕按、鎌倉殿(○源頼朝)はじめて、公文所を建られし時、別當寄人を置れ、後公文所を改て政所となさるゝに及びて、寄人の内、事に堪たる者を以て政所執事とし、自餘の寄人は、公文所に候せし時のごとく、政所に直して公事を奉行せり、嘉祿中、評定衆を設らるゝに及びて、寄人の内、宿老の輩をぬきて其衆に充られ、其後建長にいたりて引付衆を定められし時、寄人をば大かた引付衆になされしかど、いまだ壯年なる者、又門地のくだれる輩をば、もとのごとく寄人と稱して、引付衆の副とし、共に公事を奉行せしめたり、(門地のくだれる輩といふは、評定衆、引付衆に補せらるまじき族なり、)此輩を政所公人ともいへるは、猶政所衆といふが如し、

〔吾妻鏡 四十七〕康元二年(○正嘉元年)二月二日戊午、將軍家(○宗尊親王)御參鶴岡八幡宮、(○中略)次御參上宮、御經供養有御聽聞、導師、前驅人々取御布施、(政所沙汰)政所寄人等爲手長也、

〔太田康有記〕建治三年九月四日、依召參山内殿之處、以平金吾被召御前、任仰以安富民部三郎入道、島田七郎、齋藤七郎兵衞尉、長田新左衞門尉、(○已上政所公人)富來十郎(元合奉行)飽田三郎左衞門入道、注入引付衆了、

〔武家名目抄 職名八下〕按、こゝに公人といへるは寄人の事なり、

下部

〔吾妻鏡 十四〕建久五年五月五日乙丑、御所中屋舍葺菖蒲事、可爲檜皮葺所役之由被仰、分年々政所下部等沙汰之云云、

〔吾妻鏡 四十四〕建長六年十月十日己卯、政所下部、侍所小舍人等、可止鎌倉中騎馬事、同被仰出云云、

政所始

〔吾妻鏡 三〕壽永三年(○元暦元年)十月六日辛酉、未剋新造公文所吉書始也、安藝介中原廣元、爲別當著座、

執事代

〔尊卑分脈藤原八〕行盛――行綱（執事、從五下、伊與守、左衛門尉、康元元五、出家、行願、弘安四六七卒、六十六、）

〔關東評定傳二〕弘安四年辛巳

引付衆　二階堂前下總守藤原頼綱（七月以後、爲政所執事、）

弘安六年癸未

評定衆　二階堂信乃左衛門少尉藤原行忠法師（法名行一、十二月十八日爲政所執事、）

〔尊卑分脈藤原八〕行盛――行綱――頼綱

└行忠（二階堂、執事、從五下、彈正忠、四郎左衛門尉、康元元十一廿三出家、行一、正應三十一廿一卒、七十一、號信乃判官入道、）

〔新御式目〕弘安七五廿七評

引付衆并奉行事　右引付衆殊專清潔可勵參、〇中略　引付外奉行人、政所問注所執事、可申沙汰矣、

〔武家名目抄職名八下〕按、引付外奉行人とは、政所問注所の寄人のことをいふ、

〔將軍執權次第〕建武元年三月九日、本間澀谷一族、各打入鎌倉、於聖福寺合戰、〇中略　政所執事三河入道行證、自此合戰場逐電、不知行方云々、

〔吾妻鏡四十二〕建長四年四月十四日丁卯、辰剋爲秋田城介義景奉行、被可有政所始之由被仰下之、仍兩國司（布衣）被參政所、各著座（奥州奥座、相州端座、）當所執事前伊勢守行綱儲盃酒、有三獻之儀、次進御引出物、（御馬、御劍、）先獻奥州、次進相州云云、次兩國司自政所令歸參給、次人々著庭上座、將軍家（御直衣）出御寢殿南面、土御門宰相中將（顯方卿、直衣、）自西方參進、揚御座間并左右二間御簾、次奥州被參御前簀子、伊勢前司行綱持參吉書、（納覽筥蓋、）奥州取之被置御前、御覽之後給之、令歸著本座給、次奉兵具、〇下略

〔武家名目抄職名八下〕按、是月宗尊親王、征夷大將軍に拜任ありし故に、吉書始を行なはれしなり、當時政所執事は、行綱の父、民部大夫行盛入道行然にて、行綱は引付衆たり、父法體たるに依て、行綱これに代て今日の所役に從ひしと見ゆ、これ即執事代の職掌なり、

然〇二階堂行盛法名奉行之、

〔關東評定傳〕建長五年癸丑

評定衆　信濃民部大夫藤原行盛法師法名行然、四番引付頭、政所執事、十二月卒、

引付衆　前筑前守藤原行泰十二月爲政所執事、爲五番引付頭、

〔吾妻鏡四十三〕建長五年十二月八日壬子、今日筑前守行泰爲政所執事云云、

〔尊卑分脈藤原八〕行盛━行泰執事、筑前守、民部丞、從五下、加賀守、康元元十一出家、行善、文永二十二卒、五十七、

〔關東評定傳一〕弘長元年辛酉

評定衆　前筑前守藤原行泰法師法名行善、政所執事、

弘長二年壬戌

引付衆　二階堂前加賀守藤原行頼十二月十日、加政所執事、

〔尊卑分脈藤原八〕行泰━行頼執事、從五下、加賀守、弘長三十一十卒、三十四歲、

〔吾妻鏡五十一〕弘長三年十一月九日丙戌、加賀前司行頼、所勞危急之間、政所執事、筑前三郎左衛門尉行實、可致沙汰之由被仰付云云、

〔尊卑分脈藤原八〕行泰━行頼
　　　　　　　　　行實執事、從五下、信乃守、左衛門尉、文永六七十三卒、三十四、

〔關東評定傳二〕文永六年己巳

評定衆　前伊勢守藤原行綱法師法名行願、七月以後、爲政所執事、

引付衆　二階堂信濃守藤原行實政所執事、七月卒、

文永七年庚午

評定衆　前伊勢守藤原行綱法師法名行願、政所執事、六月卒、

も候ぬべからんを御下向候て、それを將軍になしまいらせて、もちまいらせられ候へ、將軍が跡の武士、いまは在つきて數百候が、主人をうしなひ候て、一定やう〳〵の心も出來候ぬべしとてこそのごまり候はめど申たりけり、

〔吾妻鏡二十四〕建保七年〇承久元年九月六日戊戌、伊賀次郎左衛門尉光宗、補政所執事、信濃前司行光、依病痾危急、辭退替云云、

〔武家名目抄職名八下〕按、光宗は、行光が妹の生む所なり、外戚の緣にて執事に補せしごみゆ、

〔吾妻鏡二十六〕貞應三年〇元仁元年閏七月廿九日、伊賀式部丞光宗坐事、改政所執事職、被召放所領五十二箇所、〇中略藤民部大夫行盛補政所執事、

〔尊卑分脈藤原八〕行光――行盛執事、從五下、紀伊權守、左衛門尉、民部丞、法諱元七十一出家、行然、依二位事、建長五十二八、

〔保暦間記下〕爰ニ元仁元年六月十三日、于時六十三歲左京大夫義時、思ノ外ニ近習ニ召仕ケル小侍ニツキ害サレケリ、〇中略其比義時嫡子武藏守泰時、彼ノ伯父相摸守時房、折節六波羅ニテ在京シタリケリ、此事ヲ聞テ馳下ル、爰ニ伊賀式部丞藤原光宗、光季ノ舍弟義時後室ニハ兄弟也、此腹ノ義時ガ子息左京大夫政村、于時式部丞彼ノ母儀ノ後室、幷光宗、宰相中將實雅義時聟、茂時次男、彼等ガ計トシテ、泰時ヲ討テ、舍弟政村後室腹子、光宗甥、ヲ將軍家ノ執權ヲサセント計ケリ、是ニ依テ鎌倉靜ナラズ、泰時且ク伊豆國ニ逗留シテ、時房先鎌倉へ下テ、隱謀ノ族ヲ尋沙汰シテ後、同廿六日、泰時鎌倉へ入、時房隨分ノ忠ヲ致シケリ、二位家ノ御計トシテ、泰時モ義時ノ跡ヲ繼テ、將軍家ノ執權ス、同閏七月廿三日、實雅卿、越前國へ流サル、同廿九日、光宗政所ノ執事ヲ改メテ、所領五十二ヶ所召離サレテ、信濃國へ流罪セラル、舍弟朝行、光重等、鎭西へ被流、政村ハ無子細ケリ、彼母儀ハ義時ノ後室、トモへ女房二位殿ノ御計トシテ、伊豆北條へ流サル、是ハ光宗ガ驕ノ餘リトゾ聞エシ、

〔吾妻鏡脫漏〕嘉祿三年〇安貞元年十二月廿六日辛未、於政所而被行改元吉書也、信濃民部大夫入道行

執事

令左衞門少尉藤原　別當武藏守平朝臣時村花押○　相摸守平朝臣師時花押○

〔島津文書一〕將軍家政所下

可レ令下早島津上總介貞久法師法名道鑑領中知周防國揚井庄領家職妙法院宮御跡上事、○中略

正慶元年元弘二年○十二月一日　案主菅野知家事

別當相摸守平朝臣守時花押○　右馬權頭平朝臣茂時花押○　令左衞門少尉藤原

〔尊卑分脈藤原八〕行政大將家政所執事、從五下、山城守、出雲權守、民部丞、主計允、　行光信濃、執事、從五下、信濃守、民部丞、兵衞尉、承久元九六、辭二執事一、同八日卒、

〔武家名目抄職名八上〕按、鎌倉草創の時、二階堂行政はじめて政所執事に補せられ、別當と同じく政務を沙汰せしより、子孫かはる〴〵此職に居る、執權連署の外は、これを以て文官の長とす、政所の密議あづかり聞ざることなし、別當を長官とし、執事を次官のごとし、いはゆる主職と佐職とのごとし、又國用を辨じ、雜費を給すること、此職のつかさどる所なれば、內外につきてことなる權職なり、○中略嘉祿に評定衆を置れ、建長に引付衆を定められし後も、兩衆の內、行政の子孫たる者、相互にこれに補せらる、

〔北條九代記上〕建曆元年辛未三月九日改元

師俊書博士　爲政所執事連署

〔吾妻鏡二十三〕建保六年十二月廿日戊午、去二日、將軍家源實朝令レ任二右大臣一給、仍今日有二政所始一、右京兆、北條義時○幷當所執事信濃守行光、○中略著二布衣一列座、淸定爲二執筆一書二吉書一、

〔愚管抄六〕さて鎌倉は、將軍源實朝があとをば、母堂の二位尼、北條政子○總領して、猶せうとの義時右京權大夫、さたしして有べしと議定したるよし聞えけり、○中略かゝりける程に、尼二位つかひをまいらす、行光とて年比政所の事。。。。。。沙汰せさせて、いみじき者とつかひけり、成功まいらせて信濃守になりたる者なり、二品の熊野詣も奉行して上りたりけるものをまいらせて、院の宮この中に、さ

〔武家名目抄職名八上〕按、知家事は、此比より闕職せしと見ゆ、

〔集古文書十三下文〕將軍久明親王下文所藏不詳

將軍家政所下　左衛門尉通茂法師法名導專

可令早領知遠江國飯田庄上郷内笞島西俣加保村、因幡國日置郷内下村、備後國津田敷名兩郷等地頭職事、

右任親父是通法師法名專光弘安〇和四年十一月三日讓狀、爲彼職、守先例可致沙汰之狀、所仰如件、以下、

弘安四年十二月廿八日　案主菅野　知家事

令左衛門尉藤原判　別當相摸守平朝臣判〇北條時宗

〔蓬齋舊記前集七〕池端文書

將軍家政所下

可令早領知大隅國南俣内用松名并下直村地頭職事〇中略

正應四年十月十六日　案主菅野　知家事

令左衛門少尉藤原　別當相摸守平朝臣〇北條貞時御判　陸奥守平朝臣〇北條宣時御判

〔本郷文書武家名目抄職名部所引〕將軍家政所下、可令早源隆泰領知若狹國本郷、美濃國鍋倉庄地頭職事、〇中略

永仁三年十二月廿一日、別當相摸守平朝臣判〇貞時、陸奥守平朝臣判、〇宣時令前出羽守藤原朝臣〇行藤案主菅野、知家事、

〔鹿島文書〕將軍家政所下

可令早鹿島社權禰宜中臣能親領知常陸國府郡橘郷、行方郡大賀村當社名田畠事〇中略

乾元二年〇嘉元元年二月三日　案主菅野　知家事

可レ令下早領二知伊豫國忽那島内西浦總追捕使職幷名田畠一（名字等載二譲狀一）事
右任二親父左衛門尉通重、建長五年二月廿九日契狀一、可レ令二領掌一之狀、所レ仰如レ件、以下、
建長八年七月九日　案主清原　知家事清原
令左衛門少尉藤原　別當陸奥守平朝臣（花押○北條政村）　相摸守平朝臣（花押○北條時賴）

〔諸家文書纂（十一野上）〕將軍家政所下
豐後國玖珠郡飯田郷内野上村住人
可レ令三早清原金伽羅丸爲二地頭職一事（○中略）
正元元年十二月九日　案主清原　知家事清原
令左衛門少尉藤原　別當相摸守平朝臣（花押○長時）　武藏守平朝臣（花押○政村）

〔集古文書（十三下文）〕將軍宗尊親王下文（肥後志賀太郎助藏）
將軍家政所下　藤原泰朝
可レ令三早領二知豐後國大野庄内志賀村半分地頭職一（除二舍弟分一）事
右任二祖母尼深妙（前豐後守能直後家）弘長二年八月六日譲狀一、可レ令二領掌一之狀、所レ仰如レ件、以下、
文永元年三月廿二日　案主菅野　知家事清原
令左衛門少尉藤原　別當相摸守平朝臣（花押○北條政村）　武藏守平朝臣（花押○北條長時）

〔薩藩舊記（前集五）〕將軍家政所下
可レ令三早大隅修理亮久時領二知薩摩國伊作庄日置庄地頭職等一事
右人、爲二彼職一、守二先例一、可レ致二沙汰一之狀、所レ仰如レ件、以下、
建治二年八月廿七日　案主菅野　知家事
令左衛門少尉藤原　別當相摸守平朝臣（花押○時宗）　武藏守平朝臣（○義政）

仁治三年二月廿二日　案主左近將曹菅野　知家事彈正忠清原

令左衛門少尉藤原(○時朝)　別當前武藏守平朝臣(○泰時)　前攝津守中原朝臣(○師員)　前陸奥守源朝臣(○義氏)　前美濃守藤原(○親實)　前甲斐守大江朝臣(○泰秀)　武藏守平朝臣(○朝直)　散位藤原朝臣(○義景)

〔武家名目抄(職名八上)〕按、師員、泰秀、朝直、義景は、評定衆なり、義氏、親實は、評定傳にのせず、思ふに此二人は評定衆に加はらずして、政務の席に列せしと見ゆ、大方後にいふ寄合衆の類なるべし、猶彼條を參考すべし、義氏は北條時政の外孫にて、いはゆる足利右馬頭なり、

〔武家古證文(武家名目抄職名部所引)〕將軍家政所下、藤原實時、可令早領知石見國長野莊美能村內地頭職事、(○中略)仁治三年十月廿三日、別當前攝津守中原朝臣(○師員)　前美濃守藤原朝臣(○親實)　前甲斐守大江朝臣(○泰秀)　武藏守平朝臣(○朝直)　左近衛將監平朝臣(○經時)　散位藤原朝臣(○義景)　令左衛門少尉清原(○滿定)　案主左近將曹菅野、知家事彈正忠清原、

〔諏訪部文書(武家名目抄職名部所引)〕將軍家政所下、可令早領知出雲國三刀屋鄕內自河北、幷越後國佐味庄上條內赤澤村、內下村地頭職事、(○中略)寬元元年六月十一日、別當前攝津守中原朝臣(○師員)　前美濃守藤原朝臣(○親實)　前甲斐守大江朝臣(○泰秀)　武藏守平朝臣(○朝直)　左近將監平朝臣(○經時)　散位藤原朝臣(○義景)　令左衛門少尉清原(○滿定)　案主左近將曹菅野、知家事彈正忠清原、

〔薩藩舊記(前集四)〕將軍家政所下、氏(佐汰進士親高五女字地藏)、

可令早領知大隅國禰寢院佐汰村內田漆段薗壹所事、(○中略)

建長五年十二月廿八日　案主清原　知家事清原

令左衛門尉藤原　別當陸奥守平朝臣在判(○北條重時)　相模守平朝臣在判(○北條時頼)

〔忽那家古文書〕將軍家(○宗尊)政所下　藤原於龜丸

建保四年八月十七日　案主菅野　知家事惟宗

令圖書少允清原花押　別當陸奥守大江朝臣花押　大學頭源朝臣　相摸守平朝臣花押○北條義時

右馬權頭源朝臣　左衛門權少尉源朝臣　民部權少輔大江朝臣　武藏守平朝臣花押○北條時房　書

博士中原朝臣花押　信濃守藤原朝臣花押

〔吾妻鏡三十〕文暦二年○嘉禎元年七月七日戊辰、近江入道虚假、所賜之承久宇治河先登賞、被付神社等之間、今日有其替沙汰、被成御下文、依爲殊勳功、被載其詞、

將軍家政所下　尾張國長岡庄住人補任地頭職事○中略

文暦二年七月七日　案主左近將曹菅原　知家事内舍人清原

令左衛門少尉藤原○基綱　別當相摸守平朝臣○時房　武藏守平朝臣○泰時

〔福山農家所藏文書武家名目抄職名部所引〕將軍家政所下、備後國高洲庄住人、補任地頭職事、山鹿遠忠、○中略延應元年九月廿六日、別當前武藏守平朝臣、○泰時修理權大夫平朝臣、○時房令左衛門少尉藤原、案主左近將曹菅野、知家事彈正忠清原、

〔鹿島文書〕將軍家政所下　常陸國府郡橘郷除倉員村住人

可令早鹿嶋社大禰宜中臣頼親爲地頭職事

右人、任亡父政親、嘉祿三年十月十二日讓狀、爲彼職、可領知之狀、所仰如件、以下、

仁治元年十二月七日　案主左近將曹菅野花押　知家事彈正忠清原花押

令右衛門少尉藤原花押　別當前武藏守平朝臣花押○泰時

〔薩藩舊記前集三〕將軍家政所下　和泉國和田郷住人

補任地頭職事　前大隅守惟宗忠時

右人、越前國生部庄之替所充給也者、爲彼職、可令領知之狀、所仰如件、以下、

〔帝王編年記順德二十三〕鎌倉執權
別。當。相模守平朝臣義時（遠江守時政長子、自元久二年至建保三年、）　別。當。陸奥守大江朝臣廣元（自建保四年、至閏六年、）
別。當。右京權大夫兼陸奥守平朝臣義時（承久元年以後）
〔北條九代記上〕正治二年庚申
行光（信乃守、從五位下、左衛門尉、）　正治二年十一月以後爲。令。別當廣元、承久元年九月九日死、
〔薩藩舊記前集二〕將軍家政所下　島津庄內薩摩方住人
補任地頭職事
左衛門尉惟宗忠久
右人如本爲彼職、任先例可令致沙汰之狀、所仰如件、以下、
建曆三年（○建保元年）七月十日　案主菅野在判　知家事惟宗
令圖書少允清原在判　別當相模守平朝臣御判（○北條義時）　遠江守源朝臣御判（○邦業）　武藏守平朝
臣御判（○北條時房）　書博士中原朝臣（○師俊）
〔集古文書十三下文〕源實朝公下文（備前國御野郡金山寺藏）
將軍家政所下　備前國金山觀音寺僧徒等可令早停止寺領四至內甲乙輩狩獵幷伐枯樹林事（○中略）
略
建保二年九月廿六日　案主菅野花押　知家事惟宗花押
令圖書少允清原花押　別當相模守平朝臣花押（○北條義時）　遠江守源朝臣花押（○邦業）　武藏守平朝臣花押
（○北條時房）　書博士中原朝臣花押　散位藤原朝臣花押
〔壬生家文書一〕將軍家政所下　若狹國國富庄
仰拾陸箇條（○中略）

職員　別當　令　案主　知家事

〔吾妻鏡二十三〕建保六年正月十五日丁亥、於政所尼御臺所南山御參詣事、有其沙汰、相州〇北條時房可被扈從云云、

〔島津家本吾妻鏡〕安貞二年十二月廿九日戊辰、將軍家〇藤原賴經明年二所御參詣之事、有其沙汰、供奉人散狀幷御神物員數註文及披覽、助教師員奉行之、御物註文者政所被下之、早可令施行、云云、

〔吾妻鏡三十五〕仁治四年〇寬元元年四月十日丙辰、大嘗會用途未濟所々、可相催之由被仰政所、卽施行云云、

〔吾妻鏡四十四〕建長六年四月廿七日庚午、鎌倉中雜人幷非御家人之輩、不從奉行人成敗事、殊可有誡沙汰事、被定其法、被仰政所云云、

〔吾妻鏡三〕壽永三年〇元曆元年十月六日辛酉、未剋新造公文所吉書始也、安藝介中原廣元爲別當著座、

〔吾妻鏡十二〕建久三年六月廿日庚申、美濃國御家人等、可從守護相模守惟義下知之由被仰下云云、是爲被鎭洛中群盜等也、

前右大將家政所下　美濃國家人等可早從相模守惟義催促事〇中略

建久三年六月廿日　案主藤井〇俊長　知家事中原〇光家

令民部少丞藤原〇行政　別當前因幡守中原〇廣元　前下總守源朝臣〇邦業　散位中原朝臣〇前掃部頭親能

〔吾妻鏡〕治承四年十月九日戊子、爲大庭平太景義奉行、被始御亭作事、但依難致合期沙汰、暫點知家事兼道山內宅、被移建立之、此屋正曆年中建立之後、未遇回祿之災、晴明朝臣押鎭宅符之故也、

〔帝王編年記二十三後鳥羽〕鎌倉執權

別當前因幡守中原朝臣廣元

聞之間、甚不可然、至今日以後者、於政所可致沙汰之旨被仰云云、

〔古文書類纂將軍家下文上〕後鳥羽天皇建久七年源賴朝下文(鹿兒島和田中太所藏)

前右大將家政所下　和泉國御家人等

可早隨左衛門尉平義連催促勤仕大內大番事

右御家人等、隨彼義連之催促、無懈怠可勤仕大內大番役之狀、所仰如件、以下、

建久七年十一月七日　案主清原　知家事中原

令大藏丞藤原判　別當兵庫頭中原朝臣判〇廣元　散位藤原朝臣判

〔薩藩舊記前集一〕前右大將家政所下　左兵衛尉惟宗忠久

可早爲大隅薩摩兩國家人奉行人致沙汰條々事

一可令催勤內裏大番事

右催彼國家人等可勤仕矣

一可令停止賣買人事

右件條可禁遏之由、宣下稠疊、而邊境之輩、違犯之由有其聞、早可停止、若有違背之輩者、可處重科矣、

一可令停止殺害已下狼籍事

右殺害狼籍禁制殊甚、宜守護國中可令停止矣、

以前條々所仰如件、抑忠久寄事於左右、不冤凌無咎之輩、而又家人等誇優恕之餘、不可對捍奉行人之下知、總不慮事出來之時、各可致勤節矣、以下、

建久八年十二月三日　案主清原　知家事中原

令大藏丞藤原花押　別當前因幡守中原朝臣廣元　散位藤原朝臣花押

職掌

べき別曹となりければ、別に此所の有司を補するに及ばず、政所よりこれを管領し、たま／＼公文所に於て奉行すべき事あれば、右筆奉行人等、其所に就てこれを沙汰する格となれり、

〔新編追加〕目錄

政所篇　沽却商買條　年紀本錢返條　負物出擧條　質劵質物條　賣人質人條

〔問註所町野氏家譜〕傳云、善信ハ京都ヨリ來テ仕二賴朝公一、興隆之象誰能過レ之、其曹有二政所問注所之署一、政所ハ號令賞罰之所出、○中略政所別當有レ令有二寄人一、

〔吾妻鏡五〕文治元年九月五日乙酉、小山太郎有高、押二妨威光寺領一之由、寺僧捧二解狀一、仍令レ停二止其妨一、任レ例可レ經二寺用一、若有二由緒一者、令レ參二上政所一、可レ言二上子細一之旨被二仰下一、惟宗孝尙、橘判官代以廣、藤判官代邦通等奉二行之一、前因幡守廣元、主計允行政、大中臣秋家、右馬允遠元等加二署判一、新藤次俊長、小中太光家等、爲二使節一相二觸有高一云云、

〔吾妻鏡十二〕建久三年九月十二日辛巳、小山左衛門尉朝政、先年募二勳功一浴二恩澤一、常陸國村田下庄也、而今日賜二政所御下文一、其狀云、

将軍家政所下　常陸國村田下庄下妻宮等補二任地頭職一事

左衛門尉藤原朝政

右去壽永二年、三郎先生義廣、發二謀叛一企二鬪亂一、爰朝政、偏仰二朝威一、獨欲二相禦一、即待二具官軍一、同年二月廿三日、於二下野國野木宮邊一合戰之剋、抽二軍功一畢、仍彼時所レ補二任地頭職一也、庄官宜二承知一、不レ可二違失一之狀所レ仰如レ件、以下、

建久三年九月十二日　案主藤井俊長○　知家事中原光家○

令民部少丞藤原行政○　別當前因幡守中原朝臣廣元○　下總守源朝臣邦業○

〔吾妻鏡十三〕建久四年十月廿一日甲寅、諸御領乃貢結解勘定事、奉行人等、於二私宅一遂二其節一之由、有二風

日定其員云云、

〔吾妻鏡十一〕建久二年十一月廿二日丁卯、多好方等、欲歸洛之間、自政所賜餞物、行政、仲業、家光等奉行之、其上有別祿馬十二疋云云、〇中略公文所送文云、〇中略下

〔吾妻鏡七〕文治三年十月廿九日丙申、常陸國鹿嶋社者、御歸敬異他社、而每月御膳料事、被充于當國奥郡、今日令加下知給云云、

政所下　常陸奥郡　可令早下行鹿嶋每月御上日料籾佰二拾石事、〇中略

右件籾、每年無懈怠、可下行之狀如件、

文治三年十月廿九日　中原〇光家　藤原〇邦道　大中臣〇秋家　主計允〇行政　前因幡守中原〇廣元

〔武家名目抄職名八上〕按、この時正しく政所といへる稱號はなくて、詞にのみとなへ、又は文書の上にて稱せしと見ゆ、この故に加署する所の有司も、官名を署せしのみにて、別當、令、案主、知家事等の次第をば注せざりしなるべし、

〔吾妻鏡十一〕建久二年正月十五日甲子、被行政所吉書始、前々諸家人、浴恩澤之時、或被載御判、或被用奉書、而今令備羽林上將給之間、有沙汰、召返彼狀、可被成改于家御下文旨被定云云、

政所　別當　前因幡守平朝臣廣元　令　主計允藤原朝臣行政　案主　藤井俊長鎌田新藤次

家知事　中原光家岩手小中太

〔武家名目抄職名八上〕按、〇中略鎌倉殿〇源賴朝右大將に拜せらるゝに及びて、全く公卿の式に准じ、公文所の名を改めて政所と稱し、公文所別當寄人を以て、政所別當執事寄人とす、又更に政所の郭內に於て、纔に公文所を建らる、是より先、號令賞罰等の事務、皆公文所にて攝行せしに、爰に至て、斯の如き大事、悉く政所の職務となりて、公文所は、文書にかゝれる一事をのみ沙汰す

下文に連署せる定格となりて、元弘の世に至るまで、其法を改むる事なし、かく下文の體裁、時世に從ひ一樣ならざるを以て、別當令等の職號は、常に呼れざる名目となりたるを知べし、〈建久に政所を始置れてより、數年の間は、常にも別當令等の稱謂ありしこと、吾妻鏡の記す所、由來正しけれど、年を經るに從ひ、其法漸く亂れて、下文にのみ件の職名を載する如くなりしなり、帝王編年記に、時政義時までは別當と注し、泰時時房より以後は、別當の字なく、又關東評定傳に、別當令等の名目を載ざるを以て、此二員の職名、下文に限りて載する稱となりしを知べし、いかでかく常日の稱謂には絶て、下文にのみ殘れるぞといふに、政所の職員及下文の體裁は、何れも皆攝關家の舊制にならひて設けられし所にて、もとより武家の云ならはざる事なれば、初の程こそ、別當、令などとなへ居たれ、年を經るに從ひ、常日の辭に、御後見、加判、連判、奉行人など云ならへるが、平常の稱謂となりて、下文の上にのみ、二員の職名をば注せられし故なり、されども正しく其名稱を停められしにはあらざれば、をりにふれては、下文の上ならずとも其稱ありしと見えて、吾妻鏡に、重時爲二將軍家別當連署一と記したり、これはた書記のおもてにも注せしものなれば、全く常日の稱謂とはいふべからず、〉又案主、知家事の兩職は、鎌倉草創の時、藤井俊長、中原光家、これをうけ給はりしが、泰時執權のころより、菅野、清原兩氏の世職となりて、他姓の人これに補せられし事なし、〈此比清原氏は、時宗執權の比に其職を失ひしこと見えて、建治以後の下文には、知家事の職名を載たるのみにて、姓氏を載られず、〉

〔先進繡像玉石雜誌 六〕北條相模守平高時朝臣肖像幷傳

義時卒して後、泰時その遺跡を相續すといへども、性質恭儉にして天下を私せず、叔父相模守時房〈泰時に長ずること七年なり〉を擧て加判せしむ、〈將軍執權次第に、泰時父の讓にまかせて御後見に補し、時房御後見に列を加合せしむべき由の仰をうけ玉はるとある、是なり、〉これより後は例として、御後見と加合判と、かならず二人して、將軍家政所に別當たりしなり、〈東鑑に、建久三年八月五日、將軍家政所始ありし時に、家司、別當は前因幡守中原廣元、前下總守源邦業、令は民部少丞藤原行政、案主は藤井俊長、知家事は中原光家とあり、其後文曆二年、鹿島朝秀に賜はる御下文に、將軍家政所下二平朝秀一云々、別當相模守平朝臣判、武藏守平朝臣判とあり、時房泰時の二人なり、然る時は執權とは世人の名付し所にして、將軍家政所別當と稱せしが實の職名にてありしなり、又は御後見とも稱せしなり、〉泰時また弟の朝時、重時、政村等にも、器量に任せて、別當加合判を讓補せしむべし、もし老からば嫡流いつも別當を私すべからず、さらば別當たらぬ時の堪忍分にとて、督總領と云領所を、別に嫡流に傳えしなり、

〔吾妻鏡 三〕壽永三年〈○元曆元年〉十二月廿四日己卯、於二公文所一被レ置二雜仕女三人一、爲二因幡守〈○大江廣元〉沙汰、今

義時執權となり、政所別當を帶たりしが、建保の初、太ばらく職をさり、廣元ひとり別當たる事、建久の時の如し、此間も義時權柄をとりし事は、時政別當職たらずして、政務を掌握せし例に同じ、同六年、廣元病に依て出家し、義時更に別當に補せらる、廣元も病本復の後、又公務に預りけれど、公文には義時當人署名して、廣元をば加へられず、これ法體たるの故なり、義時卒逝の後、男泰時、家嫡を以て執權をうけ給はりし時、叔父時房、連署の命を蒙り、共に政務を統攝す、此時に至りて、常には別當と稱する事なく、下文に署する時にのみ、執權連署共に別當と注せしなり、此頃より後、常日には執權連署の事を、御後見加判連判などいひて、別當と稱することはなき如くなりゆきしなり、さて公文に題署する次第は、位階の尊卑に從ふならひなれば、常は泰時を以て上首とすれど、公文には時房をもつて上とせしなり、時房卒して後は、泰時ひとり下文に署するに別當の稱を用ふ、仁治の末、泰時暮齡に至り、やゝ病痾を發するに及びて、政務專評定衆に裁決しける故にや、下文を出さるゝ時は、執權評定衆の別なく、位階の次第に任せて、すべて別當の列に連署せり、此時は人數の定數なく、評定衆たる輩は、すべて別當の内に連署することなり、但法體の人は、政所執事を攝する者といへども、除きて署せしめず、かく評定衆なるも、なべて別當の内に加へられじを以て、此頃は執權の事を別當といはざりし一證とすべし、既にして泰時卒去し、嫡孫經時、執權の職を繼といへども、いまだ年若くして攝務に堪べき齡ならざりければ、評定の輩、猶下文に連署せり、數年を經ずして經時世を早くし、舍弟時賴家業をつぐ、これ亦年若かりけれども、重時連署に補せられ、共に政務を攝するを以て、下文の體裁舊に復して、評定衆を除き、執權連署二人のみ列署せり、これより後、鎌倉の世を終るまで、又其例を改めず、又令は二階堂行政、政所執事を以て其職に充られしより、數年の間、下文を出さるゝ每に、必行政を以て令と署せしむ、建久の末に至りて、武藤賴平、やゝ政務に預り、たまく令の職に充られしことあり、○略 註これより後は、執事を以て令に充らるゝ事は停められ、下文を出さるゝ時に臨みて、評定衆、もしくは奉行人の內、一人を以て假の令とす、爰に至て、常日令の職名は絶なる如くなりて、下文のおもてにのみ令といふ署名を題するならひとなりぬ、さて建長中に引付衆を設置れし後は、其衆の內、一人假の令となり、

沿革

正中二年乙丑

今年正月三日、相州館、幷政所以下燒失、火元西御門、

〔吾妻鏡　三〕壽永三年〇元曆元年八月廿四日庚辰、被新造公文所、今日立柱上棟、大夫屬入道、〇三善康信主計允〇二階堂行政等奉行也、廿八日甲申、新造公文所被立門、安藝介、〇中原廣元大夫屬入道、足立右馬允〇遠元筑前三郎等參集、大庭平太景能、經營勸盃酒於此衆、

〔武家名目抄　職名八上〕按、元曆のはじめ、鎌倉の營中に公文所を設け、家司を定置れて、うち〳〵には、公文所を政所とも稱せしかど、正しき稱謂にてはなかりしを、建久元年の冬、幕下〇源賴朝右大將に兼任ありしかば、明年の春に至りて、全く搢紳家の式に准じ、公文所を改めて政所と號し、大江廣元を以て別當とし、是より先、公文所別當なり、藤原行政を令とし、藤井俊長を案主とし、中原光家を知家事に補せらる、行政以下三人、もと公文所寄人なり、就中行政は、二階堂氏の始祖にて、政所のことに專當するを以て、常に稱して政所執事といふ、終に永世の職名となる、其由は次條に詳なり、これより以後、政所下文には、此四員の有司、必官職姓名を連署して、公裁の證驗とす、〇註略源邦業も、しばらく別當に加補せられければ、これも亦廣元と共に連署せり、帝王編年記に邦業を脱せしは、在職久しからざる故なるべし、又建久三年六月の下文に、別當散位中原業と署し、同八年十二月の下文に、別當散位藤原業と載たるは、前にもいひしごとく、前掃部頭親能のことゝ見ゆれど、これは臨時に連署せしにて、ひたすら別當職たりしにはあるべからず、抑此四員の內、別當、令の二員は、長官次官にして、政府の長者なれば、武家の成敗、乃至財用の事に至るまで、悉く統攝せざるはなし、帝王編年記に、政所別當を以て執權と記せしは此故なり、又案主、知家事の二員は、其下司にして、分掌の職なれば、階級殊に下れるものにて、權勢ある有司にあらず、されども政府の職員なれば、下文には連署せるなり、廣元もとより政理に熟し、文事に便なるを以て、久しく別當たりしに、建仁中、賴家將軍職をさり、實朝將軍家業を繼れし時、北條時政、外戚の權に因て、始て政所別當に補せられ、廣元の上に列して下文に連署す、爰に於て內外の機務、悉く北條一家の進退に歸せり、〇註略元久中、時政退隱の後、男

廳舍

右主税濟事造進、請留如件、

天永元年十二月廿日　學生惟宗在判

山城國公文所

注進、主計寮方所々返抄渡目錄事、〇中略

已上貳拾壹枚　長治三年正月廿二日

〔源平盛衰記十三〕入道信殿島幷垂迹事

治承四年四月廿二日、新帝〇安德御即位アリ、此御事大極殿ニテ被行事ナレドモ、去シ治承元年ニ燒ニシカバ、後三條院、延久ノ例ニ任テ、官廳ニテ有ベカリシヲ、右ノ大臣兼實計申サセ給ケルハ、官廳ハ凡人ニ取バ、公。文。所。也、大極殿ナカラン上ハ、紫宸殿ニテ可被行ト被仰ケルニ依テ、即其ニテゾ有ケル、

〔書言字考節用集一乾坤〕公文所クモンジヨ源賴朝置此舍、準京都記錄所、

〔吾妻鏡二十四〕建保七年〇承久元年二月十四日、丑剋將軍家政所燒亡、失火郭內不殘一宇者也云云、

〔吾妻鏡三十三〕延應二年〇仁治元年三月九日癸酉、政所造畢之間、今日有吉書始儀、前武州布衣以下同之參給、評定衆前攝津守師員、藏人大夫入道西阿〇二階堂行村以下參上、

〔吾妻鏡五十〕文應二年〇弘長元年三月十三日乙亥、未剋政所之郭內失火、廳屋、公文所、問注屋炎上、御倉等者免災、

十一月十二日甲戌、政所廳屋等上棟、

〔太田康有記〕建治三年二月七日、夜半許、公文所炎上云々、

〔北條九代記下〕正和四年乙卯

今年三月八日夜、自和賀江火出來、八幡宮上下、典厩相州館以下、政所、問注所、若宮別當坊、建長寺塔等燒失訖、

ス、元暦元年、公文所ニ寄人ヲ置キ、中原親能、二階堂行政、足立遠元、大中臣秋家、藤原邦通ノ五人ヲ以テ之ニ補ス、評定、引付ノ兩衆ヲ置クニ及ビ、寄人ノ中ニ就キテ、門地高クシテ年勞ヲ積ミ、典故ニ熟シタル者ヲ擇ビテ擧用セリ、

名稱

〔運歩色葉集 滿〕政所

〔撮壤集 下 武職〕政所(マトコロ)

〔庭訓往來〕政所

〔職原抄參考 五〕政所者、掌ニ一家政務ニ所也、禁中曰ニ太政官ニ、院曰ニ院廳ニ、執柄曰ニ政所ニ、其職則有ニ高下ニ、而其意則一也、

〔庭訓往來具注鈔〕政所は廳なり、政事を聽く所、今の決斷所なり、

〔東大寺正倉院文書 五〕政所。　牒石山院 ○中略

天平寶字六年七月九日卯時　主典阿刀連酒主

〔續修東大寺正倉院文書 三十八〕石山院牒　寫經司政所。○中略

天平寶字六年閏十二月二日酉時　少鎭兼寺主僧神勇

〔拾芥抄 中末 院司〕關白家 大臣家大略同ニ攝關ニ、但辨別當、文殿、藏人所等無レ之、近衞大將同レ之、　政所 別當、家司、下家司、

〔貞丈雜記 十四 家作〕一政所は公事訴訟を取さばく役所也、奉行評定衆有レ之、

〔沙汰未練書〕一公文所者　相摸守殿御内沙汰所也 關東有レ之、六波羅無レ之、

〔庭訓往來〕公文所

〔庭訓往來具注鈔〕公文所は、公事法度を沙汰し、文書を司る所、

〔朝野群載 二十七 諸國公文〕美濃國公文所

請ニ留ニ進官帳參拾卷ニ事

古事類苑

官位部三十七

鎌倉職員二、

政所

政所ハマドコロト云ヒ、又マンドコロト云フ、幕府ノ政務ヲ總攝スル所ニシテ、猶ホ太政官ノ天下ノ大政ニ於ケルガ如シ、

源頼朝、幕府ヲ鎌倉ニ定ムルヤ、元暦元年八月、府中ニ公文所ヲ設ケ、別當、寄人等ノ職ヲ置キ、吏務ニ老錬ナル者ヲ擧ゲテ事ヲ執ラシム、是幕府ニ執政ノ衙署ヲ設ケシ始ナリ、其後或ハ公文所ヲ以テ政所ト稱セシガ、終ニ政所ヲ以テ定稱ト爲セリ、而シテ幕府ヨリ下ス所ノ公文ニハ、必ズ別當、令、案主、知家事ノ連署ヲ以テス、政所ニハ此外ニ執事寄人等ノ職アリ、別當ハ初メ大江廣元ヲ以テ之ニ任ズ、建仁三年、頼朝ノ子實朝、兄頼家ニ繼ギテ其職ヲ襲ヒシ時、北條時政ヲ以テ政所別當ニ補シ、廣元ト共ニ庶政ヲ執行セシム、令ハ別當ノ佐職ナリ、建久二年、二階堂行政、政所執事ヲ以テ此職ヲ兼ヌ、案主ハ記錄文案ヲ掌ル、建久二年、藤井俊長ヲ以テ此職ニ補ス、後菅野氏ノ世職トナル、知家事ハ將軍家ノ雜務ヲ掌ル、此職ハ未ダ公文所ヲ設ケザル以前ヨリ見エタリ、建久二年、中原光家之ニ補セラレシガ、後清原氏ノ世職トナル、而シテ別當ヨリ知家事ニ至ル四職ヲ通ジテ家司ト總稱ス、執事ハ政所ノ機務ニ參預ス、建久二年、二階堂行政ヲ以テ之ニ補ス、後其子孫之ヲ世襲ス、凡ソ執事ハ評定衆ヲ以テ之ヲ兼ヌルアリ、或ハ引付衆ヲ以テ兼ヌルアリ、而シテ又執事代アリ、寄人モ亦政務ニ參預

〔梅松論 上〕高時の執權は、正和五年より正中二年に至まで十ヶ年なり、同正中二年の夏、病により て落髮せられしかば、嘉暦元年より守時、維貞を以連署なり、是より關東の政道、漸く非義のきこえ多かりけり、

〔將軍執權次第〕嘉暦元年丙寅

維貞 修理大夫、四月廿四日加判、事被仰下、

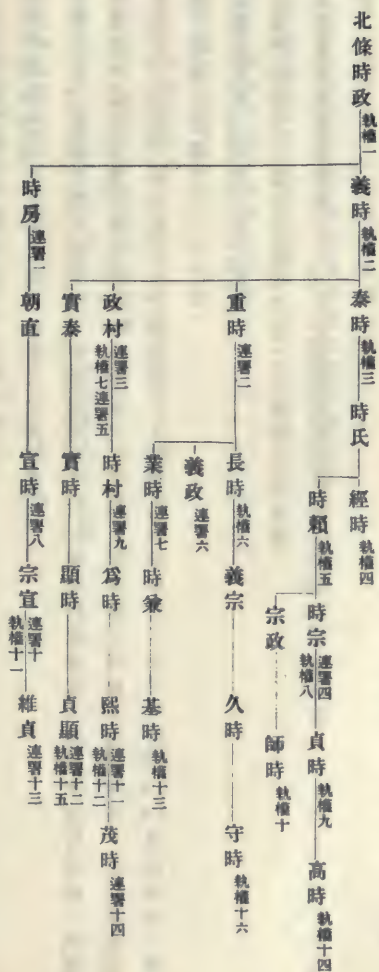
〔北條九代記 下〕嘉暦元年丙寅

維貞 從四位下、修理大夫、本名貞宗、 正中三年四月廿四日爲連署、

〔將軍執權次第〕元德二年庚午

茂時 左馬權頭、煕時一男、七月九日加判、事被仰下、評定始、

○本篇ニ掲グル北條氏ノ執權連署ノ世次ヲ示サンガ爲ニ、略系ヲ作レルコト左ノ如シ、

- 北條時政 執權一
  - 義時 執權二
    - 泰時 執權三
      - 時氏
        - 經時 執權四
        - 時頼 執權五
          - 時宗 連署四 執權八 ― 貞時 執權九 ― 高時 執權十四
          - 宗政 ― 師時 執權十
    - 重時 連署二
      - 長時 執權六 ― 義宗 ― 久時 ― 守時 執權十六
      - 義政 連署六
      - 業時 連署七 ― 時兼 ― 基時 執權十三
    - 政村 連署三 執權七 連署五 ― 時村 連署九 ― 爲時 ― 煕時 連署十一 執權十二 ― 茂時 連署十四
    - 實泰 ― 實時 ― 顯時 ― 貞顯 連署十二 執權十五
  - 時房 連署一
    - 朝直 ― 宣時 連署八 ― 宗宣 連署十 執權十一 ― 維貞 連署十三

〔北條九代記下〕正安三年辛丑

時村左京權大夫、從四位下、　正安三年八月廿三日爲連署、六十四

〔保暦間記下〕正安三年八月廿三日、貞時出家シテ法名崇演、號最勝園寺也、入道嫡男高時未生ノ間、將軍家、執權ヲ從弟相模守師時子時右馬權頭、ニ申付タリ、時頼ノ孫、武藏守宗政子也、彼師時ハ貞時聟也、其上師時ヲバ時宗ガ爲子也ケレバ、如此計ケリ、○中略其比左京權大夫平時村義時孫、政村子、師時相合テ、將軍家ノ執權ノ連署ス、

〔北條九代記下〕嘉元三年乙巳

宗宣從四位下、陸奥守、　嘉元三年七月廿二日爲將軍家連署

〔異本伯耆卷〕高時若年ナレバトテ、其間大佛宗宣、熙時等、加。判。シテ執權ノ司ニ代テ、天下ノ下知ヲ成ス、

〔將軍執權次第〕應長元年辛亥

熙時相模守時村孫、爲時子也、十月十三日加判事被仰下、

〔北條九代記下〕應長元年辛亥

凞時正五位下、相摸守、本名貞泰、　應長元年十月三日爲連署

〔武家名目抄職名四之二〕按、正和元年五月、宗宣出家するを以て、熙時これにかはりしなり、これより同四年に至るまで四年の間、凞時一人執權して、連署の職中絶せり、

〔將軍執權次第〕正和四年乙卯

貞顯武藏守、七月十一日合判事被仰下、

〔北條九代記下〕正和四年乙卯

貞顯修理權大夫、從四位下、　正和四年八月十二日爲連署

〔北條九代記 下〕文永十年癸酉

義政 武藏守、従五位下、 文永十年六月八日爲連署

〔帝王編年記 二十六後宇多〕鎌倉執權

陸奥守平朝臣業時 重時三男、弘安六年四月十四日爲連署、

〔關東評定傳 二〕弘安六年癸未

執權　駿河守平業時 四月十六日連署

〔北條九代記 下〕弘安六年癸未

業時 陸奥守、正五位下、 弘安六年四月十六日爲連署

○按ズルニ、是ヨリ先、建治三年四月義政出家ス、而シテ弘安六年四月業時職ヲ繼グニ至ルマデ、六年一ヶ月ノ間、連署ニ居リシ者ナシ、

〔帝王編年記 二十六後宇多〕鎌倉執權

武藏守平朝臣宣時 時房孫、朝直三男、弘安十年八月十九日爲連署、業時替、

〔將軍執權次第〕弘安十年 丁亥

宣時 前武藏守、正五位下、(中略)弘安八年八月十九日、連判事被仰出、同日評定始、同廿三日加判形云々、

〔北條九代記 下〕弘安十年丁亥

宣時 陸奥守、従四位下、永恩寺、 弘安十年八月十九日爲連署

〔帝王編年記 二十七後伏見〕鎌倉執權

武藏守平朝臣時村 左京權大夫政村長男、正安三年八月廿三日爲連署、宣時替、六十、

〔將軍執權次第〕正安三年 辛丑

時村 武藏守政村長男、八月廿二日合判事被仰下、今日評定始、十月廿五日政所始、

〔武家名目抄職名六上〕按、本書○將軍執權次第連署を以て、御後見と記せしは爰に止る、これより後は、執權をのみ御後見と注し、連署をば、ひとへに合判連判加判などのせたり、

〔帝王編年記龜山二十六〕鎌倉執權
執權連署左馬權頭兼相摸守平朝臣時宗最明寺長子、母重時女、文永元年八月十日爲連署、十四、長時出家替、

〔將軍執權次第〕文永元年甲子
時宗長時卒之後事、十二月廿一日從四位上、左馬權頭、從五位下、時賴三男、八月十一日以後、令加連判、年十五歲、同五年三月五日以後御後見、號法光寺殿、

〔關東評定傳二〕文永元年甲子
執權　相摸守平政村朝臣　連署八月十一日執權　右馬權頭平時宗八月十一日連署

〔北條九代記下〕文永元年甲子
時宗相摸守、正五位下、法光寺、文永元年八月十日爲連署十四

〔帝王編年記龜山二十六〕鎌倉執權
執權連署左京權大夫平朝臣政村文永五年三月五日爲連署、

〔將軍執權次第〕文永五年戊辰
政村左京權大夫、三月五日、時宗出仕之間、渡執權又連署、

〔帝王編年記龜山二十六〕鎌倉執權
武藏守平朝臣義政重時四男、文永十年八月八日爲連署、政村替、

〔將軍執權次第〕文永十年癸酉
義政武藏守、從五位下、重時四男、(中略)文永十年六月十七日加判、同七月一日遷武藏守、同三日著座政所、

〔關東評定傳二〕文永十年癸酉
執權　駿河守平義政六月日連署、同十七日始參評定、七月一日任武藏守、同月日著政所、

〔讀史餘論 七〕北條代々天下の權を司る事

七月〇寶治元年 北條相摸守重時義時が三男、泰時が弟、京都より下向、時賴が招しに依て也、是より兩執權たり、重時は陸奧守になり、時賴、相摸守に任ず、

〔將軍執權次第〕寶治元年丁未

重時相摸守、從四位上、泰二御後見一加二合判一、

〔關東評定傳 一〕寶治元年丁未

執權　相摸守平重時朝臣七月下二向關東一、連署、

〔北條九代記 上〕寶治元年丁未

重時陸奧守、從四位上、　寶治元年七月下向、爲二連署一、五十

〇按ズルニ、將軍執權次第ニ據ルニ、時房ノ死セシハ仁治元年正月ニシテ、重時ノ連署トナリシハ寶治元年七月ナレバ、此間七年六ヶ月空職ナリ、

〔吾妻鏡 四十六〕建長八年〇康元元年 三月卅日辛酉、今日前右馬權頭〇北條政村 爲二奧州〇北條重時 出家替一連署、

八月廿日戊寅、新奧州〇元前右馬權頭北條政村 奉二執權事一之後、將軍家〇宗尊親王 始可レ有二入御于彼御常葉別業一之由、日來有二其沙汰一、〇下略

〔關東評定傳 一〕康元元年丙辰

執權　前右馬權守平政村朝臣三月卅日連署、四月五日任二陸奧守一、

〔北條九代記 上〕康元元年丙辰

政村陸奧四郎、右京權大夫、正四位下、　建長八年三月卅日、爲二將軍家連署一、五十二

〔將軍執權次第〕康元元年丙辰

政村陸奧守、義時四男、建長八年四月五日任二陸奧守一、同七月日爲二御後見一加二合判一、

しことありしと見ゆ、此外建久の間、源邦業、藤原親能など、下文に連署せしことあり、賴行、賴茂は、全く其たぐひなるべし、

〔帝王編年記 二十四後堀河〕鎌倉執權
相摸守平朝臣時房 義時舍弟、元仁元年六月、爲將軍家連署、

〔武家名目抄 職名四之二〕抑此職 連署○ は元仁中、北條泰時、執權をうけ給はりし時、叔父時房連署たりしに始り、元弘中、茂時一門と共に滅亡せしに終る、其間北條一家の輩、かはる〳〵これに補せられ、或は執權に進む者あり、當時幾に中絕の事ありといへども、實にたまさかの例なり、

〔梅松論 上〕承久元年二月廿九日、攝政道家公の三男賴經、御母大政大臣公經の御女なり、二歲にして關東に御下向、嘉祿二年十二月廿九日、賴經八歲にて御元服あり、武藏守平泰時加冠たり、去程に武藏守泰時、相摸守時房連署として政務をとり行の處に、○下略

〔將軍執權次第〕元仁元年 甲申
時房 相摸守、奉御後見、加合判、

〔關東評定傳 一〕貞永元年壬辰
執權　相摸守平時房　連署

〔北條九代記 上〕元仁元年甲申
時房 修理權大夫、正四位下、北條五郎、　元仁元年六月下向關東、爲將軍家連署、

〔帝王編年記 二十五後深草〕鎌倉執權
陸奥守平朝臣重時 寶治元年七月爲連署、于時相摸守、從四位上、

〔吾妻鏡 三十八〕寛元五年 ○寶治元年 七月廿七日戊寅、相州重時爲將軍家 ○藤原賴嗣 別當連署、秋田城介義景、傳仰於彼國司、卽被申領狀云云、

アリ、北條氏ノ一族ニアラザレバ之ニ補スルヲ得ズ、或ハ此ヨリ陞リテ執權トナリシモノアリ、而シテ時房、義政、熙時ノ後、各數年ノ間、或ハ此職ヲ缺キシコトアリト雖モ、其餘ハ都テ絕エタルコトナシ、

名稱

〔運步色葉集禮〕連署シヨ

〔下學集下態藝〕連署レンシヨ即連書之義也

〔武家名目抄職名四之二〕按、連署は執權を補助せる大任にて、政務を聽斷し、理非を裁判することと長官に異ならざれば、執權連署を倂せて、兩執權、兩執事、又は兩後見、兩探題ともいへり、常には、連判、合判、加判等の稱あり、されども連署の號を以て本義とす、もとこれらの稱謂あるは、執權と共に政事を判斷し署判を公文に加ふるが故なり、

連署始見

〔將軍執權次第〕元仁元年甲申

時房相摸守、奉ニ御後見ニ加ニ合判ニ、

弘安六年癸未

業時駿河守、正五位下、二月十四日連判事被ニ仰出ニ、御使城介宗景、同廿五日評定時、始加ニ合判ニ、六月廿八日著ニ座政所ニ、

應長元年辛亥

熙時相摸守時村孫、爲時子也、十月十三日加判事被ニ仰下ニ、

〔尊卑分脈四源氏〕仲政―頼政―頼兼―頼茂政所家司連署人衆、昇殿、右馬權頭、正五下、
仲政―頼行―宗頼將軍家政所御下文家司連署人衆、兵庫頭、

〔武家名目抄職名四之二〕按、頼行は三位入道頼政の弟也、

按、頼兼は頼政の子なり、以上二條は、元仁以後、北條氏、執權連署と相ならびて、ひたすら政事を攝せし類にはあらず、たゞ源家の近親たるを以て、鎌倉にありし時、政席に列し、公文に連署せ

家の遺跡絶てより以來、故頼朝卿後室二位禪尼〇北條政子のはからひとして、公家より將軍を申下て、北條遠江守時政が子孫等を執權として、關東に於て天下を沙汰せしなり、

〔讀史餘論七〕北條代々天下の權を司る事

按するに、北條九代とは、時政、義時、泰時、時氏、經時、其弟時頼、時宗、貞時、高時をいふ也、されどもし執權の世次を以ていはゞ、時氏父に先て死したり、九代にはあらず、もし血統をもていはゞ、經時、時頼兄弟なり、共にこれ一世にして九代にあらず、實は八代なりしを、いかで九代とは申すにや、

〔吾妻鏡三十四〕仁治二年十一月卅日癸丑、駿河四郎、式部大夫家村、上野十郎朝村、被止出仕、昨日喧嘩、職而起自彼等武勇云云、凡就此事預勘發之輩多之、雖非指親昵、只稱所縁、相分兩方、與本人等同、令確執之故也、又北條左親衞〇經時者、令祗候人帶兵具、被遣若狹前司方、〇三浦泰村同武衞〇時頼者不及彼訪、兩方子細、依之前武州〇北條泰時御諷詞云、各將來御後見之器也、對諸御家人事、爭存惡乎、親衞所爲太輕骨也、暫不可來、前武衞斟酌頗似大儀、追可有優賞云云、

連署

〇連署ハ執權ヲ佐ケ、政務ヲ總領シ、共ニ公文ニ連署スルヲ以テ此名アリ、又加判、連判、合判等ノ稱アリ、或ハ執權ト併稱シテ、兩後見職ト稱ス、

初メ源宗頼、源頼茂等、頼朝ノ近親タルヲ以テ、家司トシテ公文ニ連署シ、因テ連署人衆ト稱ス、連署ノ名初テ此ニ見ユ、然レドモ是ハ一時政席ニ列シ、公文ニ連署セシノミニテ、後世北條氏ノ一族、執權連署ト相並ビテ政權ヲ執リ、權勢アリシガ類ニハアラザルベシ、然ルニ元仁元年ニ至リ、北條泰時執權トナリ、叔父時房ヲ擧ゲテ連署トス、是ヨリ連署ノ職甚ダ威權

兼侍所別當

〔梅松論上〕高時の執權は、正和五年より正中二年に至まで十ヶ年なり、同正中二年の夏、病により
て落髮せられしかば、嘉曆元年より守時維貞を以連署なり、
〔武家名目抄職名四之二〕按、正和五年十月、基時職を辭し、高時を以て執權とす、これ正嫡たるを
以てなり、又本書〇梅松論に貞顯執權の事をのせざるは、しばらくにして職をさりし故なり、
〔北條九代記下〕正和四年乙卯
貞顯修理權大夫、從四位下、　正中三年〇嘉曆元年三月十六日爲執權
〔將軍執權次第〕嘉曆元年丙寅
守時相摸守、久時一男、四月廿四日奉御後見、
〔北條九代記下〕嘉曆元年丙寅
守時相摸守、從四位下、　正中三年四月廿四日爲執權
〔異本伯耆卷〕一家ノ宿老、其仁ニ當ヲケレバトテ、金澤修理大夫貞顯ヲ執權ノ職ニ居テ、政道ヲ司
ル、カヽリケル所ニ、高時ノ舍弟左近大夫將監泰家、サリトモト思ヒシニ貞顯ニ超ラレ、述懷シテ
怨ニ出家ス、貞顯モ是ヲ聞テ、苦々布ヤ思ケン、是モ無程執權ヲ辭退シテ出家ス、此上ハ力不及シ
テ、同四月廿四日、赤橋相摸守守時ト修理權大夫惟貞ト兩人ヲ撰出シテ、兩人加判シテ守時ヲ、シ
バラク執權ノ職ニ居ランケリ、
〔吾妻鏡二十一〕建曆三年〇建保元年五月五日乙巳、侍所別當事、以義盛〇和田之闕被仰相州〇北條義時云云、
〔武家名目抄職名四之一〕按、此月侍所別當和田義盛兵を起して敗死す、故に義時執權の職に在
ながら、侍所別當に兼補せられしなり、これより後侍所別當は、必執權たる者の兼職となりて、
又他家にうつることなし、

兼職

〔梅松論上〕爰に先代といふは、元弘年中に滅亡せし、相摸守高時入道のことなり、承久元年より、武

〔北條九代記〕正和五年丙辰

高時（正五位下、相摸守、）正和五年七月十日爲執權、（十四）〇中略 正中三年三月十三日出家、

〔保曆間記〕正和五年、高時（時十四歲）將軍家ノ執權ス、文保元年三月任相摸守、頗亡氣ノ體ニテ、將軍家ノ執權モ難叶カリケリ、サレ共武藏前司泰時ノ時ヨリ、代々政道正直、家直ニ行ヒ置タリケレバ、彼ノ內官領長崎入道圓喜ト申スハ、正應ニ打レシ平左衛門入道ガ甥、（光綱子）又高時ガ舅、秋田城介時顯、彼ハ弘安ニ打レシ泰盛入道覺眞ガ舍弟、加賀守顯盛ガ孫也、彼等二人ニ貞時世事申置タリケレバ、申談ジテ如形、無子細テ年月送リケリ、〇中略 爰ニ高時管領長崎入道老耄ニ依テ、子息長崎左衛門尉高資ニ彼ノ管領ヲ申付、高資政道モ心ヨカラザリケルニヤ、高時正體ナキ儘、高資心ニ任セテ天下ノ事ヲ行フ、人ノ歎キ積リケレバ、關東ノ侍ドモニモ深ク疎レニキ、世上ニ果敢々々シカラジナド申ケリ、〇中略 嘉曆元年三月十三日、高時依所勞出家ス、法名宗鑑、舍弟左近大夫將監泰家、宜執權ヲモ相繼グベカリケルヲ、高資修理權大夫貞顯ニ語テ、貞顯ヲ執權トス、（貞顯ハ、義時子ニ五郎實泰ガ彥越後守實時ガ孫、金澤越後守顯時子ナリ、）爰ニ泰家、高時母儀（貞時朝臣後家、城大室太郎左衛門女、）是ヲ憤リ、泰家ヲ同十六日出家セサス、〇中略 此事泰家モサスガ無念ニ思ヒ、母儀モ憤リ深キニ依テ、貞顯被誅ナント聞エケル程ニ、貞顯評定ノ出仕一兩度シテ出家畢、同四月廿四日、相摸守守時、（武藏守久時男、于時武藏守、）修理大夫維貞、彼兩人ヲモ將軍ノ執權ス、是モ高資ガ僻事シタリトゾ申ケル、〇中略 上野國ニ高氏一族新田義貞ト云者アリ、早鎌倉へ發向ス、〇中略 鎌倉へ馳上テ、高時ノ一族等ヲ責、尊氏ガ息男、同族ヲ上、高時ガ一族家人馳向テ、去元弘三年五月中旬ヨリ、毎日所々合戰ヲス、諸國ノ侍、皆高資ガ無道ノ振舞、高時ガ亡氣ノ、穎ナサニ、鎌倉ヲ恨ミタリ、〇中略 終ニ五月廿二日、高時一族共悉ク滅ス、昨日迄ハ天下ノ政ヲセシカバ、誰カ背カント云者ハ有ジ、私ノ恩ヲ蒙ル諸人モ、忽ニ替テ敵ト成ニシ事、浮世ノ習ト云ナガラ、口惜カリシ事也、

〈將軍執權次第〉正安三年辛丑

師時右馬權頭、時賴孫宗政子也、八月廿三日、卒、御後見、

〈北條九代記下〉正安三年辛丑

師時相摸守、從四位下、　正安三年八月廿二日爲執權、○中略應長元年九月廿二日出家、同日酉刻卒、三十七

〈保暦間記下〉正安三年八月廿三日、貞時○北條出家シテ法名崇演號最勝園寺也、入道嫡男高時、未生ノ間、將軍家執權ヲ從弟相摸守師時于ㇾ時右馬權頭申付タリ、時賴ノ孫武藏守宗政子也、彼師時ハ貞時聟也、其上師時ヲバ時宗ガ爲ㇾ子也ケレバ、如ㇾ此計ケリ、○中略嘉元元年、高時朝臣生ヌ、○中略應長元年十月廿六日、最勝園寺入道死去、息男高時、于ㇾ時左馬權頭彼跡ヲ繼、今年九歲也ケル、宗宣、熙時等、將軍家ノ執權ヲシケリ、

〈北條九代記下〉嘉元三年乙巳

宗宣從四位下、陸奧守、　應長元年十月三日轉執權、

應長元年辛亥

熙時正五位下、相摸守、本名貞泰、　正和元年六月二日爲執權、○時高時十歲同四年八月十二日出家、道常同十月九日寅刻卒、卅七

〈將軍執權次第〉正和四年乙卯

基時讃岐守、七月十一日、御後見事被ㇾ仰下、○時高時十三同十二日評定始、同十九日可ㇾ任相摸守之由、蒙御免、

〈北條九代記下〉正和四年乙卯

基時相摸守、正五位下、普恩寺、　正和四年八月十二日爲執權、

〈將軍執權次第〉正和五年丙辰

高時左馬權頭、七月十日任執事、

〔帝王編年記二十六龜山〕鎌倉執權

執權連署左馬權頭兼相摸守平朝臣時宗文永五年三月五日轉二執權一

〔將軍執權次第〕文永元年甲子

時宗文永五年三月五日以後御後見、號二法光寺殿一、

文永五年戊辰

時宗相摸守、三月五日始爲二執權一云々、　政村左京權大夫、三月五日、時宗出仕之間、讓二執權一又連署、

〔關東評定傳二〕文永五年戊辰

執權　左京權大夫平政村朝臣三月五日以後連署　左馬權頭兼相摸守平時宗正月辭二左馬權頭一、三月五日始評定出仕、

〔北條九代記下〕永文元年甲子

時宗相摸守、正五位下、法光寺、　文永五年三月五日、爲二執權一、十八

〔帝王編年記二十六後宇多〕鎌倉執權

相摸守兼左馬權守平朝臣貞時弘安七年七月七日爲二執權一、父時宗替、

〔將軍執權次第〕弘安七年甲申

貞時左馬權頭、從五位下、時宗一男、母城介義景女、七月以後加二判形一、

〔關東評定傳二〕弘安七年甲申

執權　相摸守平時宗四月卒　左馬權頭平貞時七月七日執權

〔北條九代記下〕弘安七年甲申

貞時相摸守、從四位上、最勝園寺、　弘安七年七月七日爲二執權一

〔帝王編年記二十七後伏見〕鎌倉執權

相摸守平朝臣師時正安三年八月廿二日爲二執權一、貞時替、二十七

〔旅宿問答〕最明寺殿ハ、此頼嗣將軍ノ御後見、最明寺ハ、平時政二男ニ義時、義時一男武藏守泰時、泰時嫡子修理亮時氏二男也、舍兄ノ經時ニ被讓跡成御後見、俗人ニテハ、相摸守時頼ト申セシ也、天下ニ無隱廉直ノ人也、

〔吾妻鏡四十六〕建長八年〇康元元年十一月廿二日己酉、相州〇北條時頼赤痢病事減氣云云、今日被讓執權於武州、長時又武藏國務、侍別當、幷鎌倉第內、同被豫申之、但家督〇時頼子時宗幼稚程〇時宗六歳之眼代也、廿四日辛亥、武州奉執權事之後、始被參政所、奧州幷評定衆等各布衣參會、

〔帝王編年記二十五後深草〕鎌倉執權
執權
武藏守平朝臣長時重時長子、康元元年十月廿二日爲執權、時頼替、

〔將軍執權次第〕康元元年丙辰
長時武藏守、從五位下、七月廿日任武藏守、元左近將監、十月二日、同廿四日、著座政所、但時宗年少之間、爲被代官所加列形也、

〔關東評定傳一〕康元元年丙辰
執權　相摸守平時頼十一月出家　武藏守平長時十一月執權

〔北條九代記上〕康元元年丙辰
長時武藏守、從五位上、　康元元年十一月、爲將軍家執權、

〔帝王編年記二十六龜山〕鎌倉執權
執權連署
左京權大夫平朝臣政村文永元年八月五日爲執權〇此月十一日時宗爲連署、時年十四、

〔關東評定傳二〕文永元年甲子
執權　相摸守平政村朝臣　連署八月十一日執權

〔北條九代記上〕康元元年丙辰
〔政村陸奥四郎、右京權大夫、正四位下、〕文永元年八月五日爲執權

〔關東評定傳 一〕仁治三年壬寅

執權　前武藏守平泰時朝臣 五月出家、法名觀阿　左近大夫將監平經時 六月執權、十八歲也、

〔吾妻鏡 三十七〕寬元四年三月廿三日壬子、於武州 ○北條經時 御方、有深秘御沙汰等云云、其後被奉讓執權於舍弟大夫將監時頼朝臣、是存命無其恃之上、兩息未幼稚之間、爲止始終牢籠、可爲上御計之由、眞實趣出御意云云、左親衞卽被申領狀云云、　廿六日癸卯、左親衞依爲執權、今日令始行評定給、

四月十九日庚申、武州御不例事、危急之上、執權既及讓補儀之間、今日被落飾畢、法名安樂　大藏卿法印良信爲戒師云云、

〔帝王編年記 二十五後深草〕鎌倉執權

執權　相摸守平朝臣時頼 建長元年六月十四日任相摸守、康元元年十一月廿三日出家、三十、法名道崇、弘長三年十一月廿二日卒、三十七、號最明寺、

〔將軍執權次第〕寬元四年 丙午

時頼 寬元四年閏四月一日、讓得舍兄經時跡、爲御後見、

〔關東評定傳 一〕寬元四年丙午

執權　武藏守平經時 四月出家、法名安樂　左近大夫將監平時頼 閏四月執權

〔北條九代記 上〕寬元四年丙午

時頼 相摸守、正五位下、　寬元四年四月、爲將軍家執權、年二十

〔增鏡 五內野の雪〕わか君 ○藤原頼嗣 は、その日やがて將軍のせんじくだされ、少將になり給ふ、よりつぐとなのりたまふべし、泰時朝臣も、をとゝし入道して、むまごの時よりの朝臣に世をばゆづりにしかば、この比はあめのしたの御うしろみ、此さがみのかみ時よりの朝臣つかまつる、いみじうかしこきものなれば、めでたき聞えのみありて、つはものもなびきしたがひ、おほかた世もしづかにおさまりすましたり、

吾妻鏡等の諸書絕て見る所なし、思ふに建保三年、父時政卒去せるに依て、義時あからさまに別當の職を服解し、其後尙權柄をば取ながら別當には還補せずして、三年を經たるなるべし、さて承久元年にいたりて、更に別當の職を辭せしと見ゆ、本書○帝王編年記と北條記とを合考すれば、その趣おのづから分明なるが如し、

〔吾妻鏡十八〕元久二年閏七月十九日甲辰、牧御方○北條時政妻廻奸謀、以於朝雅○時政女婿爲關東將軍、可奉謀當將軍家于時遠州(時政)亭御座、○源實朝之由有其聞、仍尼御臺所、遣長沼五郞宗政、結城七郞朝光、三浦兵衞尉義村、同九郞胤義、天野六郞政景等、被奉迎羽林、卽入御相州○北條義時亭之間、遠州所被召聚之勇士、悉以參入彼所、奉守護將軍家、同日丑剋、遠州俄以令落飾給、年六十八同時出家之輩不可勝計、廿日乙巳、辰剋遠州禪室下向伊豆北條郡給、今日相州令奉執權事給云云、

〔帝王編年記二十四後堀河〕鎌倉執權
武藏守平朝臣泰時義時長男、元仁元年六月、爲將軍家執權、

〔將軍執權次第〕元仁元年甲申
泰時武藏守、十二月十七日、任父讓補御後見、

〔北條九代記上〕元仁元年甲申
泰時前武藏守正四位下　元仁元年六月、下向關東、爲將軍家執權、四十二

〔保曆間記下〕泰時、天下ノ事ヲ行ニ、此人賢人無雙ニシテ年久シ、武家ノ政道ニ、五十一箇條ノ憲法ヲ貞永元年七月始テ定メ行フ、嘉祿元年ヨリ仁治三年ニ至ルマデ、十八ケ年執權ス、目出度カリシ世也、懸シ故ニヤ、末七代、天下ノ政事ヲ行フ、人皆知事ナレバ不及委注、○中略五月○仁治三年九日依所勞泰時出家ス、法名觀阿同六月十七日、泰時六十二ニシテ死去畢、天下惜ヌ人ゾナカリケル、嫡孫武藏守經時、于時左近大夫修理亮時氏子也、泰時ガ跡ヲ繼テ、將軍ノ執權ス、

執權トシテ、天下ノ事執行フ、賴家猶謀反ノ聞エ有ケレバ、次年(元久元年七月十九日)廿三歲ニシテ、浴室ノ内ニテ打レ給フ、扨時政權ヲ取ル間、彼ノ妻女牧ノ女房ト申人、心武ク驕レル人ナリケリ、元久二年六月廿二日、畠山次郎重忠、四十二歲ニテ誅セラレタリ、其故ハ重忠時政ノ聟也、武藏左衛門佐源朝雅朝臣モ(平賀四郎義信子也)時政ノ聟也ケリ、朝雅ハ牧ノ女房ノ一腹ノ聟也、重忠ハ二位殿(尼御臺所、賴朝後家、)義時以下ノ前ノ妻子ノ一腹ノ聟也、中惡クシテ不思議ノ讒言有ケルニヤ、又牧ノ女房思立事モ有ケルニヤ、〇中略加樣ニ萬思ヒノ儘也ケル程ニ、彼女房思ヒケルハ、我聟ノ左衛門佐朝雅、當時京都ニ上テ、時政ガ代官トシテ指置昇殿シケリ、是モ伊豫入道賴義朝臣六代ノ末ナレバ、將軍ニ成ンニ、何ノ子細カ有ベキト云テ、當將軍ヲ失ヒ奉ラントテ、時政ノ家ヘ、同七月廿日奉レ請テ、湯殿ニテ失ヒ奉ラントシケルヲ、二位殿聞食テ、式部丞義時(時政嫡子)ヲ召テ、懸ル不思議有ト仰ラル、義時急ギ馳向テ見奉ルニ、ハヤ湯殿ヘ入リ賜ハントシケルヲ懷キ奉テ御所ヘ入奉リケリ、コハ何事ゾト仰ラル、二位殿シカジカノ事申サセ給フ、サテハ義時トテモ心免スベカラズト被レ仰ケルニ、義時事ノ由ヲ申延タリケレバ、サラバ時政ヲ打テ進セヨト有タレバ、左ニ候、子細候ハジトテ、則打テ候トテ、伊豆國ノ奥山ナル所ニ押籠ツ、牧ノ女房ヲモ同國ヘ則流サルヽト聞エシガ、後ハ不レ知、朝雅ヲバ京都ニテ同廿七日被レ打ケリ、時政此事爭カ知ザルベキナレドモ、女性ノ計ニ付ケルカ、老耄ノ至カ、不思議也シ事也、二位殿ノ御計ニテ義時ヲ時政ニ替テ、將軍ノ執權トス、相摸守トゾ申ケル、

〔帝王編年記〕二十三(順德)鎌倉執權

別當相摸守平朝臣義時(遠江守時政長子、自二元久二年一至二建保三年一、)　別當陸奥守大江朝臣廣元(自二建保四年一至二同六年一)

別當右京權大夫兼陸奥守平朝臣義時(承久元年以後、元仁元年六月十三日卒、)

〔武家名目抄〕(職名四之二)按、義時建保四年より同六年にいたりて三年の間、執權を辭せしこと、

に權柄をとることゝなりしと見ゆ、されはこそ仁治寛治の際は、執權連署の外、評定衆をも別當の中に列して、下文に連署する例もいできしなれ、

〔吾妻鏡十八〕建仁三年十月九日甲辰、今日將軍家〇源實朝政所所始也、午剋別當遠州〇北條時政廣元朝臣已下家司各布衣等著政所、民部丞行光書吉書、令圖書允淸定成返抄、遠州持參吉書於御前給之、後有垸飯盃酒之儀、

〔武家名目抄職名四之一〕按、本書〇吾妻鏡及帝王編年記、保暦間記等を合考するに、今年〇建仁三年賴家將軍職をさり、實朝將軍家督を相續せらるゝに及びて、時政政所別當に加補せられ、執權の職を攝せしなり、但時政は、治承四年、右大將家擧義の初より、內外の機務に預り、武家興立の功尤多かりしかど、政所別當たらざるを以て、公文に加署することなかりしを、爰に至て別當に加はり、內外の權勢を全くせしなり、將軍次第、將軍執權次第、梅松論等の諸書に、時政治承以來、武家の執權たる由を記せしは、當初別當たらずといへども、內に在て權柄を掌握せし故なり、

〔保暦間記下〕建仁三年七月廿一日、賴家左衞門督、時二十二、病ヲ受ケキ、此人多ク死靈故ニヤ、大方人望ニモ背ケルガ、病氣次第ニ難儀ノ間、八月廿七日、遺跡ヲ長子一萬御前讓、坂ヨリ西三十八ケ國、舍弟千萬御前被讓畢、爰ニ比企判官藤原能員、一萬御前外祖遠江守時政千萬御前外祖ヲ打、天下ノ政務ヲ一人シ而相計ラハントスル、此事聞エテ九月二日、能員ヲ時政ノ宿所ヘタバカリ寄テ、能員ヲ差殺畢、同六日、一萬御前幷能員子息宗朝以下、小御所ニ籠テ合戰ス、義時、義村、朝雅等ヲ以テ大將トシテ、數萬騎ノ軍勢ヲ差遣シテ、能員一族悉打畢、剩一萬御前サヘ、御所ニ火ヲ懸ケレバ燒死シ給フ、是ヲ小御所ノ戰ト申ス、同七日、賴家出家セラル、同十七日、千萬御前元服セラル、〇實朝、中略同廿七日、實朝十二歲ニシテ征夷將軍ノ宣旨ヲ蒙リ、爰ニ賴家少減ヲ得、能員ヲコソ打レヌ目前ニテ一萬ヲサヘ打ヌル事、無念也トテ、時政ヲ可誅トテ、諸人ヲ召處ニ、同廿九日、伊豆國修善寺ヘ移シ奉リヌ、然ル間、時政將軍ノ

貞顯（嘉暦元年、同四年四月十六日出家、號金澤殿、）　高時（治十一年、自正和五年至嘉暦元年、）
貞顯　維貞（治二年、自嘉暦元年至同二年、）
高時（相模守）
守時（治八年、自嘉暦元年至元弘三年、）
守時（相模守、武藏守、號赤橋殿、）　守時
茂時（治四年、自元德二年至元弘三年、）

○按ズルニ、本書ニ載スル所ハ、執權ト連署トヲ合記セシモノナリ、

〔帝王編年記 二十三後鳥羽〕鎌倉執權
別當前因幡守中原朝臣廣元

〔武家名目抄 職名四之一〕鎌倉草創の時、大江廣元、政所別當として政事を攝行しければ、當時稱して執權といへり、これ當職の權輿なり、

〔帝王編年記 二十三土御門〕鎌倉執權
別當大膳大夫中原朝臣廣元
別當遠江守平朝臣時政（自建仁五年至元久三年、）　北條四郞時方男、母伊豆掾伴爲房女也、正治二年四月一日任遠江守、元久二年閏七月廿日出家、六十八、法名明盛、建保三年正月六日死、年七十八、

〔武家名目抄 職名八上〕按、時政は、右大將家（○源賴朝）鎌倉草創の時より權柄を握りたれど、全く政所別當に補せられ、廣元と共に公文に加署せしは、建仁三年、賴家將軍職をさり、實朝將軍家督となりし時よりの事なれば、本書には建仁以後の由に記せしなり、又按、本書各署名の上に、別當の字を被らしむるは義時にとゞまり、時房泰時以後は、すべて二人の署名のごとく別當の字を加るものなし、思ふにこの比より後の執權連署は、全く政所別當に補するといふ定なく、直

補任

〔吾妻鏡一〕關東執權次第

時政 治二十六年、自治承四年、至元久二年、七十八歳、

義時 治二十年、自元久二年、至元仁元年、六十二歳、

泰時 治十九年、自元仁元年、至仁治三年、六十歳、

時房 治十七年、自元仁元年、至仁治元年、六十六歳、

泰時 前武藏守

經時 治五年、自仁治三年、至寛元四年、二十二歳、

時頼 正五位下相模守、時氏二男、建長八年十一月廿三日落髮、年三十歳、號最明寺入道、法名道崇、又號覺了房、弘安三年十一月廿二日卒、年三十七歳、

時頼 治十一年、自寛元四年、至康元元年、

重時 治九年、自寶治元年、至康元元年、建長八年三月十一日落髮、法名觀覺、六十四歳、

政村 治十八年、自康元元年、至文永元年、六十九歳、

長時 治九年、自康元元年、至文永十年、三十五歳、

時宗 治廿一年、自文永元年、至弘安七年、三十四歳、

政村 右京權大夫

時宗

義政 治五年、自文永十年、至建治三年、

時宗 相模守號寶光寺殿

時宗

業時 治五年、自弘安六年、至同十年、

業時

貞時 治十八年、自弘安七年、至正安三年、

貞時 相模守號最勝閣寺殿

貞時

宣時 治十五年、自弘安十年、至正安三年、

師時 治十一年、自正安三年、至應長元年、

時村 治五年、自正安三年、至嘉元三年、四月廿三夜被誅、

師時 相摸守

宗宣 陸奥守、治八年、自嘉元三年、至正和元年、

宗宣

熙時 治五年、自應長元年、至正和四年、

熙時 正和元年六月宗宣卒、依之自二年、〇自二年、一本无、

基時 正和四年七月十一日御後見事被仰下、同十九日任相摸守、

〔保暦間記下〕康元元年十一月廿二日、時賴、將軍家ノ執權ヲ政村長時（義時孫、陸奥守重時二子、）等ニ申付テ出家ス、出家ノ後モ、凡世ノ事ヲバ執行ハレケリ、

〔梅松論上〕治承四年より元弘三年に至まで、百九（〇九恐五誤）十四年之間、關東將軍家、幷執權の次第は、賴朝、賴家、實朝、以上三代武家也、又賴經、賴嗣、以上二代は攝政家なり、亦宗尊、惟康、久明、守邦、以上四代は親王なり、總而九代也、次に執權の次第は、遠江守時政、義時、泰時、時氏、經時、時賴、時宗、貞時、高時、以上九代、皆以將軍家の御後見として、政務を申行ひ、天下を治め、武藏相摸兩國の守をもて職として、一族の中の器用を撰び署して、御下文下知等を將軍の仰らるゝに依て申沙汰しける、元三之垸飯、弓場始、庭の座、貢馬、隨兵以下の所役の輩、諸侍どもに對しては傍輩の儀を存す、昇進にをいては、家督を德崇と號す、從四品下を以先途として、遂に過分の振廻なくして、政道を專にして、佛神を尊敬し、萬民をあはれみ育みしかば、吹風の草木をなびかすがごとくに從ひつきしほどに、天下悉治りて、代々目出度ぞ有ける、然るに高時の執權は、正和五年より正中二年に至まで十ケ年なり、（〇中略）是より關東の政道、漸く非義のきこえ多かりけり、

〔太平記一〕後醍醐天皇御治世事附武家繁昌事

賴朝卿ノ舅遠江守平時政子息前陸奥守義時、自然執天下權柄、勢漸欲覆四海、此時太上天皇ハ後鳥羽院也、武威振下、朝憲廢上事ヲ歎思召テ、義時ヲ亡サントシ給シニ、承久ノ亂出來テ、天下暫モ靜ナラズ、遂ニ旌旗日ヲ掠テ、宇治勢多ニシテ相戰フ、其戰未終一日、官軍忽ニ敗北セシカバ、後鳥羽院ハ隱岐國ヘ遷サレサセ給テ、義時彌八荒ヲ掌ニ握ル、其ヨリ後、武藏守泰時、修理亮時氏、武藏守經時、相摸守時賴、左馬權頭時宗、相摸守貞時、相續テ七代、政武家ヨリ出デ、德窮民ヲ撫スルニ足リ、威萬人ノ上ニ被ルトイヘ共、位四品ノ際ヲ不越、謙ニ居テ仁恩ヲ施シ、己ヲ責テ禮義ヲ正ス、是ヲ以テ高シト云ドモ危カラズ、盈リト云ドモ溢レズ、（〇下略）

いふ事なし、

〔吾妻鏡二十六〕貞應三年〇元仁元年六月十三日、前奥州〇北條義時病痾、〇中略巳刻遂以御卒去、〇年六十二中略午刻被遣飛脚於京都　廿六日、今日未刻武州〇北條泰時自京都下著、〇中略又相州〇一本作二十九日出京〇北條時房〔十六日〕幷陸奥守義氏等同下著云云、　廿八日、武州始被参二位殿〇北條政子御方、觸穢無御憚云々、相州武州爲軍營御後見、可執行武家事之旨、有被仰云云、而先々爲楚忽歟之由、被仰合前大膳大夫入道覺阿〇大江廣元覺阿申云、延及今日、猶可謂遲引、世之安危、人之可疑時也、可治定事也、早可有其沙汰云云、前奥州禪室卒去之後、世上巷說縱橫、武州者爲討亡弟等出京都、令下向之由依有兼日風聞、四郎政村之邊物忩、伊賀式部丞光宗兄弟、以謂政村主外家、內々憤執權事、奥州後室〇伊賀守朝光女亦擧聟宰相中將實雅卿立關東將軍、以子息政村用御後見、可任武家成敗於光宗兄弟之由潜思企、巳成和談、有一同之輩等、于時人々所志相分云々、武州御方人々粗伺聞之、雖告申武州、稱爲不實歟之由、敢不驚騷給、剩要人之外、不可参入之旨被加制止之間、平三郎左衛門尉、尾藤左近將監、關左近大夫將監、安東左衛門尉、萬年右馬允、南條七郎等計經廻、太寂莫云云、　廿九日、掃部助時盛〇相州一男武藏太郎時氏〇武州一男等上洛、〇去廿七日出門兩人共就世上巷說、雖稱可在鎌倉之由、相州武州被相談云、世不靜之時者、京畿人意尤以可疑、早可警衛洛中者、仍各首途、相州當時、於事不被背武州命云云、　八月一日、秉燭之程、相州時房出仕政所、此國司幷武州被奉執事之後、于今無此儀、　廿八日、武州泰時於政所吉書始云云、　九月五日、故奥州禪室御遺跡庄園、配分于男女賢息之注文、武州自二品賜之、廻覽方々、各々有所存者可被申子細、不然者可申成御下文之旨被相觸、皆歡喜之上、曾無異儀歟、此事武州下向最前內々支配之、潜披見二品之處、御覽畢後、仰曰、大概神妙歟、但嫡子分頗不足、何樣事哉者、武州被申云、奉執權之身、於領所等事爭强有競望哉、只可省舍弟之由存之者、二品頻降御感淚云云、仍今日爲被御計之由及披露云云、

敎書ヲ被成相摸守ニゾ被移ケル、貞將ハ一家ノ滅亡、日ノ中ヲ不過ト被思ケレ共、多年ノ所望、氏族ノ規模トスル職ナレバ、今ハ冥途ノ思出ニモナレカシト、彼御敎書ヲ請取テ、又戰場ヘ打出給ケルガ、其御敎書ノ裏ニ、棄我百年命報公一日恩ト大文字ニ書テ、是ヲ鎧ノ引合ニ入テ、大勢ノ中ヘ懸入、終ニ討死シ給ケレバ、當家モ他家モ推雙テ感ゼヌ者モ無リケリ、

○案ズルニ、兩探題職トハ、卽チ執權連署ノ兩職ヲサスコト、猶ホ吾妻鏡ニ、兩御後見トアルガ如シ、

〔元亨釋書十七王臣〕副元帥平時賴〈○北條〉者、家世將種、初右將軍源賴朝、文治之間、領天下兵馬之權、時賴之祖爲其元佐、而居姻婭、爾來世主兵權、皇考王父、皆居副帥之任、

〔日蓮聖人註畫讃一〕造安國論第五

重而到駿州入大藏、勘諸經論、指掌知之、記立正安國論一卷、正嘉元年始之、文應元年庚申勘畢、三十九歲、同年七月十六日辰剋、属鎌倉奉行宿谷左衛門入道〈法名西信〉呈于副元帥平時賴、對宿谷諫曰、〈○中略〉當時世歸關東、人貴士風之上、時賴領天下兵馬之權、故此論見相摸守、〈○下略〉

〔日蓮聖人註畫讃四〕赦免狀第二十五

此年〈○文永十一年〉二月十四日之赦免狀到來焉、副元帥之豪族等雖不甘免許、但以時宗一人之嚴命所寬宥也、

〔武家名目抄職名四之一〕實朝將軍、武職を相續あるに及びて、外戚の祖父北條時政、政所別當に加はり、執權の職に居て、威權內外を兼たり、〈是より先、時政、政務に預りしことは、本文の按中に述たるがごとし、然れどもいまだ別當に補せざる間なれば、全く執權とはよばれざりしと見えたり、〉後これを男義時に傳ふ、旣にして和田義盛滅亡の後、義時又侍所別當に兼補せられ、警衛決斷の兩職、併その一身に歸す、これより子孫此兩職を以て世職とし、文武の權、永く北條一家の有となれり、就中承久以來は、公家の成敗、武將の廢置、悉くその進退にかゝらずさ

の分限ほど少取き、ケ様にては何としてか御後見をもすべきとて、二位家よりも諫られしかども、今までは聊も不足とおもふ事もなし、

〔吾妻鏡三十八〕寛元五年〇寶治元年八月一日辛巳、恒例贈物事可停止之由被觸諸人、令進將軍家之條、猶爾御後見〇北條時頼、同重時、之外者、禁制云々、

〔式目抄序〕自頼朝至守邦親王代々ノ後見廿四人也、自平時政至平茂時頼朝卿ノ時ハ平時政後見タリ、此時分マデハ武家トシテ天下ヲ自專セズ、時政ガ子義時ガ時分ヨリ、天下ヲ恣ニシテ、王位ヲモ官位ヲモ、先代トシテハカラヘリ、義時ハ取分テ武威ヲ振テ、上ニ將軍マシマセドモ、只後見ノマヽ也、〇中略此時分ハ後見ト云、中比ハ執權ト云、後ニハ管領ト號スル事ハ近キ事也、

〔武家名目抄職名六上〕按、後見は輔佐の義なり、この故に鎌倉殿の時は、執權の人をよびて御後見といへり、連署の職を置れし後は、これをも併せて兩御後見と稱せらる、但將軍執權次第の記す所を見るに、時頼政村までは執權連署、いづれも御後見と有て、それより後は執權をのみ御後見と記し、連署の人をば合判加判などと注して、後見の稱をのせられず、因て思ふに、時頼政村の頃より後、打まかせて御後見と呼るゝは、執權に限れる如くなりしと見えたり、これはた世をふるまゝに、執權の威權いやましければ、連署は等級を降さるゝ勢になりて、おのづから後見といふ名稱の重くなれる故なるべし、

〔吾妻鏡二十八〕寛喜四年〇貞永元年七月十日、爲表政道無私、召評定衆連署起請文、其衆爲十一人、〇中略相州〇北條時房、義時弟武州〇北條泰時、義時子爲理非決斷職、猶令加署判於此起請給云云、

〔太平記十〕大佛貞直并金澤貞將討死事

金澤武藏守貞將モ、山内ノ合戰ニ相從フ兵八百餘人被打散、我身モ七箇所マデ疵ヲ蒙テ、相摸入道〇北條高時ノ御坐ス、東勝寺へ打歸リ給タリケレバ、入道不斜感謝シテ、軈テ兩探題職ニ可被居御

今者、不及擇日次、早可令參、此關世上不靜、人之所思多其疑歟、被行如然式者、可爲落居基之由、二品○源頼朝室北條政子頻被勸仰云云、

〔武家名目抄 職名四之二〕按、執權執事、共に政務を攝する者の稱謂にして、元よりさばかりの輕重なしといへども、執權の稱は重きに限り、執事の名は輕き方にもわたりて聞ゆれば、鎌倉の世には、幕府の執政をば執權と稱し、諸家の老臣をば執事といふこと、大かたのならひにてありしなり、

〔運歩色葉集 古〕後見。

〔今昔物語 二十二〕淡海公繼四家語第二

二郎○不比等子房前ノ大臣ノ御流ハ、氏ノ長者ヲ繼テ于今攝政關白トシテ榮エ給フ、世ヲ恣ニシテ天皇ノ御後見トシテ政ゴチ給フ、只此ノ御流也、

〔倭訓栞 中編三〕うしろみ　後見の義、音をもてもよべり、人の後を監守する意にいへり、よて阿衡をも徒然草にみかどの御うしろみと見ゆ、

〔將軍次第〕前右大將源朝臣頼朝卿　治廿年自治承四年至正治元年後見時政、○北條
右大臣源朝臣實朝公　治十七年、自建仁三年九月至建保七年正月後見時政、後義時、○時政子

〔澀柿〕明惠上人傳

義時朝臣逝去の時、頓死にてありしかば、讓狀の沙汰にも及ばざりし程に、二位家○北條政子の命にて、泰時嫡子たる上は、分限少くてはいかにとしてか天下の御後見をもすべきなれば、皆を管領して、舍弟共には分に隨て少宛わけあたふべきよし承しかども、つら〳〵父義時の心をおもふに、我よりもはるかに此舍弟どもをば寵愛せられしぞかし、然ば父の心にはかやうにこそとらせたく思ひ給ひけんと推量りて、朝時重時以下に宗と多く分與て、泰時が分には三四番の末子

之間、終不隨平家之威權兮、送廿餘年訖、適逢御執權之秋、可開愁眉之處、還爲在京之東士等、稱兵粮、號番役、譴責之條、太以難堪、

〔吾妻鏡 十五〕建久六年三月廿九日癸丑、將軍家〇源賴朝招請尼丹後二品宣陽門院(後白河皇女覲子內親王)御母儀、舊院執權女房也、〇高階榮子於六波羅御亭給、御臺所、姬君等對面給、

〔沙汰未練書〕一兩國司者　武藏相摸兩國之國司御名也、將軍家執權御事、執權者、政務御代官也、又兩所トモ申、但武藏守、相摸守者、依御官爵不定、

〔武家名目抄 職名四之一〕按、執權は君主を補佐し、政務を統領せる重職にて、公家の職掌に比すれば、攝關大臣の任に當れり、依て或は理非決斷の職と稱し、吾妻鏡に見ゆ又は判斷の職といふ、太平記に見ゆ又常には後見の職、探題の職ともよべり、將軍執權次第、太平記等の諸書に見えたり、鎌倉草創の時、大江廣元、政所別當として政事を攝行しければ、當時稱して執權といへり、これ當職の權輿なり、〇中略當時或執權を呼て執事といふ、然れども執權の稱を以て本義とするが故に、大名諸家にはこれを避て、其家々の老臣をば必執事とのみとなへしなり、

〔通議 一〕論權上。

鎌倉始置政所、專任別當、後改曰評定衆、以親信十餘人分領之、然其最親者、常主計議、而其權移於北條氏、北條氏簒國、自稱執權、固其所也、而其號令天下、獨因源氏之舊、連署行事、如後世曰加判列者、內管領、乃其私家宰、如後世曰公用人者、非專領大政也、鎌倉之制、可謂密矣、

〔庭訓往來〕將軍家之御敎書、執事之施行、

〔庭訓往來具注鈔〕執事は將軍家の長臣大老をいふ、後見、執權、管領いづれも同じ

〔吾妻鏡 二十六〕貞應三年〇元仁元年八月一日、秉燭之程、相州時房〇北條出仕政所、此國司并武州〇北條泰時被奉執事之後、于今無此儀、而奧州禪室〇泰時父義時、此年六月十三日卒、五旬中者所憚申、誠可謂理、去月又閏也、於

古事類苑

官位部三十六

鎌倉職員一

執權

執權ハ又執事ト云フ、將軍ヲ輔佐シ、政務ヲ統領スルコトヲ掌ル、其輔佐タルヲ以テ又後見職ト稱シ、或ハ爭訟ノ曲直ヲ裁決スルヲ以テ理非決斷職トモ稱シ、又探題職トモ稱ス、執權ハ鎌倉幕府草創ノ初、大江廣元ヲ政所別當ニ補シテ、政務ヲ執行セシメ、廣元ヲ呼ビテ執權ト稱セシニ權輿シ、建仁三年、源實朝、將軍ノ職ヲ襲グニ及ビテ、外祖父北條時政、廣元ト相並ビテ政所別當タリ、時政ノ子義時、職ヲ襲ギテヨリ北條氏ノ世襲スル所トナリ、其宗家ノ嫡子タル者之ニ補ス、故ニ時賴ガ經時ノ弟ヲ以テ其嗣ト爲リ、兼テ其職ヲ襲ギタル外、長時、政村、宗宣、熙時ガ如キ支流ヲ以テ、此職ニ居ルモノアリト雖モ、皆宗家ノ主ノ幼弱ナリシ故ナリ、

執權ニシテ侍所別當ヲ兼務スルコトハ、建保元年、侍所別當和田義盛ノ敗死スルニ及ビ、北條義時之ヲ兼務セシニ起因シ、爾後永ク執權職ノ兼補スル所トナレリ、

名稱

〔運步色葉集〕志 執權

〔書言字考節用集〕四 人倫 執權シッケン 武家家長

〔吾妻鏡〕四 元曆二年四月廿八日辛巳、今日近江國住人前出羽守重遠參上、是累代御家人也、齡八旬云云、武衞〇源賴朝 哀其志召御前、舍弟十郎并僧蓮仁等加扶持、重遠申云、平治合戰之後、存譜代好

將軍妻

正嘉二年三月廿八(〇八日恐衍)　武藏守
　　　　　　　　　　　　　　相摸守
某殿

八月廿八日甲辰、今日評定、將軍家御上洛延引云云、是依諸國損亡、民間有愁之故也、

〔吾妻鏡 二十三〕建保六年四月廿九日庚午、申剋尼御臺所(〇源頼朝妻北條政子)御還向南山、御奉幣無爲、御在京之間、有珍事等、(〇中略)同十四日、可令敍從三位之由宣下、上卿三條中納言、(參陣)卽以淸範朝臣被下件位記於三品御亭、此事儀定及細碎歟、出家人敍位事、道鏡之外無之、女敍位者、於准后者、有此例、所謂安德天皇御外祖母也、亦知足院殿御母儀、准后事適出家以後也、仍以彼準據被敍之云云、　十月廿六日乙丑、京都使者參、去十三日、禪定三品(〇北條政子)令敍從二位給云云、

〔吾妻鏡 十八〕建仁四年(〇元久元年)十月十四日癸卯、坊門前大納言(信淸)息女、爲將軍家(〇源實朝)御臺所、依可令下向給、爲御迎人々上洛、　十二月十日戊戌、御臺所御下著云云、

〔吾妻鏡 二十七〕寬喜二年十二月九日丙寅、將軍家(藤原頼經御年十三)御嫁娶事内々有其沙汰、(〇中略)亥剋竹御所(源頼家女御年廿八)入御于營中、是御嫁娶之儀也、

〔吾妻鏡 三十六〕寬元三年七月廿六日戊午、今夜武州(〇北條經時)御妹、(號檜皮姬公、御年十六、)爲將軍家(〇藤原頼嗣)御臺所參御給、

〔吾妻鏡 四十九〕正元二年(〇文應元年)二月五日癸卯、酉剋故岡屋禪定殿下兼經公御息女、(御年二十)爲最明寺禪家(〇北條時頼)御猶子御下著、則入御山内亭、是可令備御息所(〇宗尊親王妃)給云云、

上洛

〇鎌倉將軍表

次第	幼名	父	母	配偶	就職	去職	薨年	年齢
源頼朝	鬼武者	義朝三子	藤原氏熱田大宮司季範女	平政子北條時政女	建久三年七月十二日		正治元年正月十三日	五十三
源頼家	一萬又万壽	頼朝長子	平政子	比企氏女能員	建仁二年七月廿二日	建仁三年九月七日	元久元年七月十八日	二十三
源實朝	千幡	頼朝次子	頼家同母	藤原氏女坊門信清	建仁三年九月十日		承久元年正月廿七日	二十八
藤原頼經	三寅	道家三子	倫子藤原公經女	竹御所源頼家女	嘉祿二年正月廿七日	寛元二年四月廿八日	建長八年八月十一日	三十九
藤原頼嗣		頼經長子	二棟御方藤原親能女	檜皮姫君北條時氏女	寛元二年四月廿八日	建長四年二月廿日	康元元年九月廿四日	十八
宗尊親王		後嵯峨帝二子	棟子平棟基女	宰子北條時頼猶子、實近衞兼經女	建長四年四月一日	文永三年七月	文永三年七月廿九日	三十三
惟康親王		宗尊親王	藤原宰子	不詳	文永三年七月廿四日	正應二年九月	嘉曆元年十月卅日	六十三
久明親王		後深草帝二子	房子藤原公親女	惟康親王女	正應二年十月九日	延慶元年七月	嘉曆三年十月十四日	五十三
守邦親王		久明親王長子	惟康親王女	不詳	延慶元年八月廿七日	元弘三年五月	元弘三年八月十六日	三十二

〔吾妻鏡十五〕建久六年二月十四日庚午、巳剋將軍家〇源頼朝自鎌倉御上洛、御臺所幷男女御息等進發給、是南都東大寺供養之間、依可有御結緣也、　三月四日己丑、秉燭之程、入御六波羅御亭、　廿七日辛亥、有御參內、　卅日甲寅、將軍家御參內、　六月廿五日戊寅、將軍家關東御下向也、

〔吾妻鏡三十二〕嘉禎四年〇曆仁元年正月廿八日乙亥、將軍家〇藤原頼經御上洛、　二月十七日癸巳、子刻御入洛、著于六波羅御所、此間新造、　廿三日己亥、今日將軍家御參內、　十月十三日甲寅、寅一點、將軍家關東御下向御進發也、

〔吾妻鏡四十八〕正嘉二年三月廿日庚午、有評定、將軍家〇宗尊親王明年依可有御上洛、供奉人以下事、被經群議、且致用意、且爲令相觸子細於御家人等、所被下御教書於諸國守護人也、其書樣、

明年正月、可有御上洛、存其旨、可被相觸其國御家人等、且土民依此段不可逃散、若有其企者、早可令礼返狀、依仰執達如件、

勅答申サセ給ケルハ、今四海一時ニ定テ、萬民誇無事化、依陛下休明徳、由微臣籌策功矣、而ニ足利治部大輔高氏、僅ニ以一戰功、欲立其志於萬人之上、今若乘其勢微不討之、取高時法師逆惡、加高氏威勢上ニ者ナルベシ、是故ニ擧兵備武、全非臣罪、次剃髮事兆前ニ不塞機者定テ舌ヲ翻サン歟、〇中略今ノ世也、我若歸剃髮染衣體、捨虎賁猛將威、於武全朝家人誰哉、〇中略抑我栖台嶺幽溪、擁守一門跡、居幕府上將、遠靜一天下、國家ノ用何レヲカ爲吉此兩篇速ニ被下勅許樣ニ、可經奏聞被仰、則清忠ヲゾ被返ケル、清忠卿歸參シテ、此由ヲ奏聞シケレバ、主上具ニ被聞召、居大樹位全武備守、ゲニモ爲朝家似忘人嘲、高氏誅罰ノ事、彼不忠何事ゾ乎、太平ノ後天下ノ士卒、猶抱恐懼心、若無罪行罰、諸卒豈成安堵思哉、然バ於大樹任不可有子細、至高氏誅罰事、堅ク可留其企有聖斷、被成征夷將軍宣旨、依之宮ノ御憤モ散ジケルニヤ、六月十七日、志貴ヲ御立有テ、八幡ニ七日御逗留有テ、同二十三日御入洛アリ、

〔神皇正統記後醍醐〕同〇元弘元年十二月、左馬頭源直義の朝臣相模守を兼じて下向す、是も四品上野の太守成。良。親。王。をともなひ奉る、此親王、後にしばらく征夷大將軍を兼せさせ給ふ、

〔太平記十三〕中前代蜂起事

今天下一統ニ歸シテ、寰中雖無事、朝敵ノ餘黨、猶東國ニ在ヌベケレバ、鎌倉ニ探題ヲ一人ヲカデハ、惡カリヌベシトテ、當今第八ノ宮〇後醍醐皇子成良ヲ、征夷將軍ニナシ奉テ鎌倉ニゾ置進ゼラレケル、

〔太平記三十四〕銀嵩軍事附曹娥精衞事

此比吉。野。ノ。將。軍。ノ。宮。〇興良ト申ハ、故兵部卿ノ親王〇護良、ノ御子、御母ハ北畠准后〇親房ノ御妹ニテゾ御座ケル、御幼稚ノ時ヨリ、文武二道何レモ達シテ見ヘサセ給ヒシカバ、此宮ゾ誠ニ四海ノ逆浪ヲモ靜メラレテ、舊主先帝ノ御追念ヲモ休メ進ラセラルベキ御器量ニテ御座トテ、吉野ノ新帝〇後村上登極ノ後、則被宣下征夷將軍ニ成シ進ラセラル、

令₋敍₋三品₋給、九日、三品久明親王爲₋征夷大將軍₋、十日、將軍自₋仙洞常磐井殿₋行₋啓六波羅₋、今日御₋下₋向關東₋、

〔將軍執權次第〕正應二年己丑

久明親王三品　正應二年十月一日立₋親王₋、同六日御元服、同十日、自₋仙洞₋渡₋御六波羅北方₋、同日御出京、同廿五日入₋鎌倉₋、卽日吉書始、評定始、十一月九日爲₋將軍₋、

永仁五年丁酉

久明親王二品　十二月十七日、式部卿、

嘉曆三年十月十四日、前將軍久明親王薨、

〔大日本史百八十三將軍列傳〕久明親王、〇中略嘉曆三年十月薨、年五十三、據₋將軍執權次第建治二年生、及歷代皇紀正應二年年十三之文₋、

〔保曆間記下〕同月、〇延慶元年八月當將軍久明親王御上洛アリ、同廿七日、彼ノ親王ノ御子守〇〇國、御母惟康親王御女征夷將軍ニ成給ケリ、

〔皇胤紹運錄〕後深草院――久明親王……守邦親王二品征夷大將軍、左大將、中納言中將、元弘三五廿二出家、關東滅亡故也、

〔將軍執權次第〕元弘三年癸酉

守邦親王　五月廿二日御出家、八月十六日薨、廿二

〔太平記十二〕公家一統政道事

同年〇元弘二年ノ六月三日、大塔宮〇〇〇後醍醐皇子護良志貴ノ毘沙門堂ニ御座有ト聞ヘシカバ、畿內近國ノ勢ハ不₋及₋申、京中遠國ノ兵マデモ、人ヨリ先ニト馳參ケル間、其勢頗盡₋天下大半₋ヌラント夥シ、〇中略主上、右大辨宰相清忠ヲ勅使ニテ被₋仰ケルハ、天下已ニ鎭テ偃₋七德之餘威₋成₋九功之大化₋處ニ、猶動₋干戈₋被₋集₋士卒₋之條、其要何事乎、次四海騷亂ノ程ハ爲₋遁₋敵難₋、一旦其容ヲ雖₋被₋替₋俗體₋、世已ニ靜謐ノ上ハ、急歸₋剃髮染衣姿₋、門跡相承ノ業ヲ事トシ給ベシトゾ被₋仰ケル、宮、清忠ヲ御前近ク被₋召、

事之遺奇近、被仰之、大辨起座於床子仰大夫史秀氏、次召內記（少內記家弘）被仰叙品事、次頭辨又宣下云、二品惟康親王宣令聽帶劔、上卿召大外記師顯被下知之、

〔增鏡十一今日の日陰〕さても岩清水のながれをわけて、せきのひがしにも若宮ときこゆる社おはしますに、八月（○正應二年）十五日宮この放生會をまねびておこなふ、そのありさままことにめでたし、將軍（○惟康）もまうで給ふ、（○中略）そののち、いくほどなく、かまくらうちさはがしき事出きて、みな人きもをつぶしさゞめくといふ程こそあれ、將軍宮こへながされ給ふとぞきこゆる、めづらしきことの葉なりかし、（○中略）文永三年よりことしまで廿四年將軍にて、天下のかためといつかれ給へれば、日の本の兵をしたがへておはしましつるに、けふはかれらにくつがへされて、かくいとあさましき御ありさまにてのぼり給ふ、いといとをしうあはれなり、

〔常樂記〕正中三年（○嘉曆元年）十月卅日、土御門將軍入道殿（○惟康親王）薨御之由早打、十一月七日下着、

〔大日本史百八十三將軍列傳〕惟康親王、（○中略）嘉曆元年十月薨、（常樂記）年六十三、（據增鏡爲將軍年三歲之文）

〔勘仲記〕正應二年十月九日乙卯、親王。（○後深草皇子久明）今夜被宣下征夷大將軍事、頭中將冬季朝臣奉行、上卿內大臣殿令奉行給、坊門中納言、冷泉宰相、左大辨宰相參陣云々、　十日丙申、今日將軍御下向關東、

〔增鏡十一今日の日陰〕このかはり（○惟康將軍）には、一院の御子、（○後深草皇子久明）三條內大臣公親の御むすめ、御匣殿とてさぶらひ給ひし御腹なり、（○中略）つはもの、すぐれたる七人、御むかへにのぼる中に、（○中略）みこは、十月三日御元服し給ふ、久明の親王ときこゆ、おなじき十日、院よりやがて六はらの北、さきざきも宮のわたり給ひし所へおはして、それよりぞあづまにおもむかせ給ふ、同廿五日かまくらへつかせ給ふにも、御關むかへとて、ゆゝしき武士どもうちつれてまいる、

〔帝王編年記二十七伏見〕正應二年十月一日、親王宣下、（一院（後深草）皇子久明）　六日、久明親王、於仙洞有御元服事、

〔增鏡七北野の雪〕又の年三文永あづまに心よからぬ事出來て、中務の御子、○後嵯峨皇子宗尊みやさへのぼらせ給ふ、なにとなくあはたゞしきやうなり、御うしろ見はなを時賴朝臣なれば、れいの心かしこうきたゝめ直してければ、聞えしほどのおそろしき事などはなけれど、宮は御子の惟康の親王に將軍をゆづりて、文永三年七月八日のぼらせ給ひぬ、

〔將軍執權次第〕文永三年丙寅

宗尊親王一品中務卿　七月八日御上洛、○中略　十一年七月廿九日薨、廿三

〔公卿補任龜山〕文永七年庚午

非參議從三位源惟康。。。

文永三年七月廿四日、任征夷大將軍、同日敍從四位下、同七年十二月廿日、賜源朝臣姓、

〔將軍執權次第〕文永三年丙寅

惟康　宗尊親王御子、○中略　文永三年七月廿四日從四位下、卽爲將軍、三歲

〔皇胤紹運錄〕後嵯峨

宗尊親王一品中務卿征夷大將軍、文永九二三十出家、法名覺惠、同十一七廿九薨、三十二○三十二、略次第作三十三、

惟康親王始賜源姓、從二位、左近中將、權中納言、右大將、征夷大將軍、

〔公卿補任後宇多〕弘安十年丁亥

中納言正二位源惟康六月五日任、元左中將、征夷大將軍、同日兼右大將、十月四日、爲二品親王、

〔勘仲記〕弘安十年六月五日甲子、今夕被行小除目、頭左京大夫信輔朝臣奉行、關東征夷大將軍、○惟康親王令任中納言幷右大將給、通基卿所職被召之、今日被遣冷泉宰相於久我里第、有御問答子細云々、於納言者、自元有其闕之故也、上卿別當公衡卿、參議右大辨爲方卿、　十月四日辛酉、諸卿著座、土御門大納言定實、藤中納言兼仲、別當、吉田中納言、右大辨宰相、頭辨於軾宣下云、中納言源朝臣○惟康、爲親王、令敍二品、云々、上卿召大辨、座

紫文也、正文來十一日可被請取、官使權少允、已可進發云云、奥州、相州被參會、令被見之給、而彼官使下向要緣事、尋先例、可有其沙汰之由、被經評議之處、建久記不分明之由、出羽前司行義民部大夫康連等申之云云、宣旨狀云、

三品宗○○○親王

右被左大臣宣偁、件親王宜爲征夷大將軍、

建長四年四月一日　　大外記中原朝臣師兼奉

〔增鏡五內野の雪〕院の第一の御子は、○後嵯峨皇子宗尊右中辨平のむねのりのぬしの女、四條の院に兵衛内侍とてさふらひしが、御覽につきてわたりまいれりしを、志のび〱御らんじけるほどに、その御はらにいでものし給へりしかど、當代○後深草むまれさせ給ひし後は、をしけたれておはしますに、又建長元年后腹に二宮○龜山さへさしつゞきひかりいで給へれば、いよ〱いまは思ひたえぬる御契のほどを、わたくし物にいとあはれと思ひ聞えさせ給ふ、源氏にやなしたてまつらましなどおぼすに、なをあかねばたゞ御子にて、あづまのあるじになしきこえてんとおぼして、建長四年正月八日、院の御前にて御かうぶりし給ふ、○中略御とし十一なるべし、なかづかさのきやう宗尊親王と申めり、おなじ二月十九日、みやこをいで給ふ、其日志やうぐんのせんじかうぶり給ふ、かゝるためしはいまだ侍らぬにや、上下めづらしくおもしろき事にいひさはぐべし、御むかへにあづまのぶしどもあまたのぼり、六はらよりも名あるもの十人、御をくりにくだる、○中略かゝればもとの將軍頼嗣三位中將は、その四月に都へのぼり給ひぬ、いとをしげにぞ見え給ひける、

〔將軍執權次第〕文永二年乙丑

宗尊親王一品中務卿　九月十七日、任中務卿、叙一品、

賴經前大納言　四月廿四日、以將軍讓二男賴嗣、○中略建長八年八月十一日薨、卅九

〔吾妻鏡三十五〕寬元二年五月五日甲辰、平新左衛門尉盛時、自京都歸著、持參去月廿八日宣下狀除書等、冠者殿○藤原賴嗣蒙征夷大將軍宣旨任右近衛少將、令敍從五位上給云云、武州○北條經時相具之令參御所給、前大納言家有御對面、直被召覽彼狀等、又故有祝著之儀、盛時被召出賜御劍、但馬前司定員傳之、

〔將軍執權次第〕寬元二年甲辰

賴嗣　四月廿四日爲將軍、同日從五位上、卽任右少將、

〔保曆間記下〕寬元二年四月廿一日、將軍ノ若君元服シ給ヒ、賴嗣ト申ス、同月廿八日征夷將軍、同日任左少將、同三年七月五日、賴經將軍出家シ給ヒケル、此ヲ入道將軍ト申ス、賴嗣幼稚ノ間、出家ノ後モ政ヲバ聞給ヒケリ、

〔百練抄十五後嵯峨〕寬元四年七月廿七日癸未、關東前將軍入道大納言賴經、被上洛、依謀反事被追上云々、

〔將軍執權次第〕建長四年壬子

賴嗣從三位左中將　四月三日立鎌倉、同十一日入洛、

〔吾妻鏡四十六〕建長八年○康元元年十月二日己未、六波羅飛脚參著、○中略廿四日、○九月前將軍三位中將家○藤原賴嗣御早世之由申云云、

〔吾妻鏡四十一〕建長四年二月廿日甲戌、和泉前司行方、武藤左衛門尉景賴爲使節上洛、是奧州○北條重時相州○北條時賴當將軍○藤原賴嗣被辭執權、申上皇○後嵯峨第一三宮之間、可有御下向之由依申請也、其狀、相州自染筆、奧州被加判處也、他人不知之云云、

〔吾妻鏡四十二〕建長四年四月五日戊午、及晚六波羅留守飛脚小林兵衛尉到著、是所持參將軍宣旨

申、歲九ニテ關東ヘ下テ、世ヲ治メ給ケリ、入道將軍トハ是事也、

〔保曆間記下〕三代將軍ノ跡、サテ有ベキニモナケレバ、二位殿(賴朝後家時政女、號政子、)幷義時關東ノ侍ドモ申語ヒテ、將軍ノ定アリ、其比、光明峯寺入道關白ノ三男(于時號三寅御前、〇賴經)ト申ハ、聊先將軍ノ緣類ニテ御座ケレバ、此人ヲ將軍ニ定テ、公家ヘ申ス、同六月廿五日、請ジ下シ奉ル、後ハ大納言入道將軍トゾ申ケル、凡關東ノ事行ヒ下知セラレケレドモ、萬ヅ義時一人ガ計ニ成リキ、(〇中略)嘉祿元年七月十一日、二位家六十九ニテ薨ゼラレケリ、(〇中略)同年十一月十九日、賴經將軍元服シ給ヘリ、同二年正月廿七日、正五位下兼征夷將軍、貞永二年正月廿八日任中納言、

〔將軍執權次第〕承久元年(己卯)

平政子(遠江守平時政女) 建保六年四月十四日、敍從三位、同十一月十三日敍從二位、賴家實朝母儀也、

但不蒙將軍宣旨、賴經卿年少之間、爲彼代官所成敗也、

〔吾妻鏡三十二〕嘉禎四年(〇曆仁元年)二月廿三日己亥、入夜被行小除目、將軍家(〇藤原賴經)任權中納言、令兼右衞門督給、 廿六日壬寅、將軍家令補檢非違使別當給、 三月七日壬午、將軍家令任權大納言給、

〔公卿補任後嵯峨〕寬元二年(甲辰)

前權大納言正二位藤賴經(四月廿八日、讓征夷大將軍於息右少將賴嗣、)

〔帝王編年記二十四仲恭〕征夷大將軍藤原朝臣賴經(正二位大納言、光明峯寺攝政道家公三男) 承久元年六月廿五日出京、同七月十九日下著關東、嘉祿二年正月廿七日爲征夷大將軍、寬元二年四月廿八日、讓征夷大將軍於男右少將賴嗣、同三年七月五日出家、(廿八、法名行智、)

〔吾妻鏡四十六〕建長八年(〇康元元年)八月十五日癸酉、六波羅飛脚參著、前將軍入道前大納言家(〇藤原賴經)去十一日依御痢病薨御之由申之、

〔將軍執權次第〕寬元二年(甲辰)

してさだめ給ひぬ、そのとしの六月にあづまにゐてたてまつる、七月十九日におはしましつきぬ、むつきの中の御ありさまは、たゞかたしろなどを、いはひたらんやうにて、よろづの事、さながら右京權大夫義時朝臣こゝろのまゝなれど、一の人の御子の將軍になり給へるは、これぞはじめなるべき、

○按ズルニ、頼朝ノ妹夫藤原能保ノ女、藤原公經ノ妻トナリ、其所生ノ女藤原道家ニ適ク、頼經ノ母ナリ、故ニ頼經ハ公經ノ外孫ナリ、

〔源平盛衰記十七〕源中納言侍夢事

源中納言雅頼卿ノ侍、夢ニ見ケル事ハ、イヅコトハ慥ニ其所ヲバ知ラズ、大内ノ神祇官カト覺シキ所ニ、衣冠タヾシキ人ノ、ユヽシク氣高キガアマタ並居タリケル、座上ノ人ノ赤衣ノ官人ヲ召テ仰ケルハ、下野守源義朝ニ被預置御劒、イサヽカ朝家ニ背ク心アリシカバ、召返シテ清盛法師ニ被預給タレ共、朝政ヲ忽諸シ、天命ヲ惱亂ス、滅亡ノ期既ニ至レリ、子孫相續事難シ、彼御劒ヲ召返ナリ、汝行テ劒ヲ取テ、故義朝ガ子息前右兵衛權佐頼朝ニ預置ベシト有ケレバ、官人仰ニ隨テ、赤衣ニ矢負テ、滋籐弓脇ニ挾ミ、御前ヲ罷立ケルガ、無程錦ノ袋ニ裹タル太刀ヲ持テ參テ、座上ヘ進上スル處ニ、中座ノ程ニ有ケル上臈ノ、頼朝一期ノ後ハ、吾子孫ニタビ候ヘト被申ケルニ、○中略夢ノ中ニソバナル人ニ問テ云、座上ノ人ハ誰人ゾ、アレコソ天津國ノ御主伊勢天照大神ヨ、サテ吾子孫ニタベト仰ラヽルハ誰ゾ、天津兒屋根尊春日大明神ヨ、○中略ト答ト見テ覺ヌ、○中略高野ノ宰相入道成頼、此夢ノ事聞給テ、○中略春日大明神トテ、我子孫ニ預給ヘト被仰ケルハ不審也、ソモ又末ノ代ニ源平共ニ絶果テ、一ノ人ノ御中ニ、將軍ノ宣旨ヲ蒙テ、天下ヲ治給ベキニモヤ有ラント宣ヒケルガ、ゲニモ源氏三代將軍ノ後、知足院ノ入道殿ノ御子ニ、太政大臣忠通公、三代ノ孫、道家公ヲバ光明峯寺殿ト申、其末ノ御子ニ、寅ノ歳寅ノ日寅ノ時ニ生給ヒタリケレバ、三寅御前ト

元暦年中ニ鎌倉ノ右大將頼朝卿、追討平家而有其功之時、後白河院叡感之餘ニ、被補六十六箇國之總追捕使、從是武家始テ諸國ニ守護ヲ立、庄園ニ地頭ヲ置、彼頼朝ノ長男左衞門督頼家、次男右大臣實朝公、相續テ皆征夷將軍ノ武將ニ備ル、是ヲ號三代將軍、然ヲ頼家卿ハ爲實朝討レ、實朝ハ頼家ノ子爲惡禪師公曉討レテ、父子三代僅ニ四十二年而盡ヌ、

〔公卿補任後堀河〕寛喜四年壬辰〇貞永元年

非參議從三位藤。頼。經。

嘉祿二正廿七正五下、同日任右少將、爲征夷大將軍、

〔吾妻鏡二十四〕建保七年〇承久元年二月十三日、信濃守行光上洛、是六條宮、〇後鳥羽皇子雅成冷泉宮、〇後鳥羽皇子頼仁兩所之間、爲關東將軍可令下向御也、禪定二位家〇平政子令申之給使節也、宿老御家人、又捧連署奏狀望此事云云、　七月十九日壬子、左大臣道家公賢息歳二、母公經卿女、建保六年正月六日實朝誕生、下向關東、是故前右大將後室禪尼重將軍舊好之故、爲繼其後嗣、依申請之、去月三日可有下向之由宣下、同九日參社春日、乘車、殿上人一人、諸大夫三人、侍十人在共云云、　同十四日、於左府有魚味之儀、同十七日、院參、賜御馬御劍等云云　同廿五日、自一條之亭渡六波羅、則進發云云、今日午剋入鎌倉、著于右京權大夫義時朝臣大倉亭郭内南方、此間構新造屋、

〔吾妻鏡脱漏〕嘉祿二年二月十三日戊戌、佐々木四郎左衞門尉信綱自京都歸參、正月廿七日有將軍宣下、又任右近衞少將、令敍正五位下給、是下名除目之次也云云、其除書等持參之、

〔増鏡二新島もり〕故おとゞの母北のかた二位殿政子といふ人、ふたりの子をもうしなひて、涙ほすまもなく、おほれすぐすをぞ將軍にもちゐける、かくてもさのみはいかゞにて、君だち一ところ、くだし聞えて、將軍になしたてまつらせ給へと、公經のおとゞに申のぼせければ、あへなんとおぼす所に、九條右大臣道家どの、うへは、このおとゞの御むすめなり、その御はらのわか君〇頼經の二になり給ふをくだしきこえんと、九條どののたまへば、御むまごならむもおなじ事とおぼ

而定之、

〔公卿補任土御門〕承元三年己巳

非參議從三位源實朝

建仁三年九月七日、敍從五位下、任征夷大將軍、

〔吾妻鏡十七〕建仁三年九月十日乙亥、吹擧千幡君、〇源實朝被奉立將軍之間有沙汰、若君今日自尼御臺所、渡御遠州〇北條時政御亭、被用御輿、女房阿波局參同輿、江馬太郞殿、三浦兵衞尉義村等候御輿寄、

〔吾妻鏡十八〕建仁三年九月十五日庚辰、幕下大將軍二男若君、字千幡君爲關東長者、七日被下從五位下位記幷征夷大將軍宣旨、其狀、今日到著于鎌倉云云、

〔吾妻鏡二十三〕建保六年正月廿一日癸巳、京都使者參著、去十三日、將軍家〇源實朝令任權大納言給之由申之、　二月十日壬子、廣元朝臣奉仰、發使者於京都、是將軍家依大將御所望事也、　三月十六日丁亥、波多野次郞朝定自京都歸著、持參去六日除書、將軍家令兼任左近大將給、御使入洛之時、任故右大將軍〇源頼朝之例、可被任右、仍右幕下擬被辭申之剋、朝定上洛之間、亦改先篇、有其沙汰、御使往反于博陸御亭、數箇度云云、　十八日己丑、權少外記中原重繼爲勅使下著、是去六日、將軍家可爲左馬寮御監之旨被宣下、仍所持參件宣旨狀也、　十月十九日戊午、佐々木判官廣綱飛脚參著、申云、〇中略九日有任大臣等、將軍家任內大臣給、仍持參彼除書、太政大臣公房內大臣、實朝、大將如元、大納言定通、中納言實氏云云、　十二月廿日戊午、去二日將軍家令任右大臣給、

〔吾妻鏡二十四〕建保七年〇承久元年正月廿七日戊子、今日將軍家〇源實朝右大臣爲拜賀、御參鶴岳八幡宮、〇中略及夜陰神拜事終、漸令退出御之處、當宮別當阿闍梨公曉、窺來于石階之際、取劍奉侵丞相、其後隨兵等、雖馳駕于宮中、武田五郎信光進先登無所覺讎敵、

〔太平記一〕後醍醐天皇御治世事附武家繁昌事

〔將軍執權次第〕建久三年壬子
頼朝前右大將　七月十二日、爲征夷大將軍、
〔公卿補任土御門〕建久十年己未○正治元年
前權大納言正二位源頼朝征夷大將軍、正月十一日依病出家、同十三日薨于相摸國鎌倉館、
〔吾妻鏡十七〕建仁二年八月二日癸酉、京都使者參、去月廿二日、左金吾○源頼家敍從二位、補征夷大將軍、給之由申之、
〔將軍執權次第〕建仁元年辛酉
頼家左衞門督　正月廿三日正三位、七月廿三日從二位、同日任征夷大將軍、
〔吾妻鏡十六〕建久十年○正治元年二月六日戊辰、羽林殿下、○源頼家去月廿日轉左中將給、同廿六日宣下云、續前征夷將軍源朝臣○頼朝遺跡、宜令彼家人郎從等、如舊奉行諸國守護者、彼狀到著之間、今日有吉書始、淸大夫撰申日時云云、北條殿、兵庫頭廣元朝臣、三浦介義澄、前大和守光行、中宮大夫屬入道善信、八田右衞門尉知家、和田左衞門尉義盛、比企右衞門尉能員、梶原平三景時、藤民部丞行光、平民部丞盛時、右京進仲業、文章生宣衡等、到著政所、善信草吉書、武藏國海月郡事云云、仲業加淸書、廣元朝臣持參之、羽林、於寢殿被覽之給、此事、故將軍○源頼朝薨御之後、雖未經廿箇日、綸旨嚴密之間、重々有其沙汰、以內々儀、先被遂行之云云、
〔吾妻鏡十七〕建仁三年九月七日壬申、亥剋將軍家○源頼家令落飾給、御病惱之上、治家門給事、始終尤危之故、尼御臺所○平政子依被計仰不意如此、
〔吾妻鏡十八〕建仁四年○元久元年七月十九日己卯、酉剋伊豆國飛脚參著、昨日十八日左金吾禪閤、(源頼家)年廿三於當國修禪寺薨給之由申之云云、
〔大日本史百八十一將軍列傳〕源頼家、○中略年二十三、東鑑、帝王編年記、按保暦間記傳三十三、蓋承東鑑元久元年書年廿三之誤也、今據東鑑壽永元年八月生文推

〔公卿補任後鳥羽〕建久三年（壬子）

前權大納言正二位源○○○賴朝（七月十二日爲征夷大將軍）

〔吾妻鏡三〕壽永三年（○元暦元年）四月十日戊寅、源九郎使者自京都參著、去月廿七日有除目、武衞敍正四位下給之由申之、是義仲追罸賞也、持參彼聞書、此事藤原秀鄕朝臣、天慶三年三月九日、自六位昇從下四位也、武衞御本位者、從下五位也、被准彼例、亦依忠文（宇治民部卿）之例、可有征夷將軍宣下歟之由、有其沙汰、而越階事者、彼時准據可然、於軍事者、賜節刀、被任軍監軍曹之時、被行除目歟、被載今度除目之條、似始置其官、無左右難被宣下之由、依有諸卿群議、先敍位云云、

〔吾妻鏡四〕元暦二年（○文治元年）五月十一日癸巳、依被召進前內府（○平宗盛）之賞、武衞（○源賴朝）去月廿七日、敍從二位給、除書今日到著、左典厩（能保）所被執進也、近日可參向之由被申送云云、

〔吾妻鏡九〕文治五年正月十三日甲辰、及晚右武衞使者（小舍人、號寬四郎、）到著、所被送進、去五日敍位除書也、二品（○源賴朝）令敍正二位給云云、

〔吾妻鏡十〕文治六年（○建久元年）十一月廿二日壬申、大納言家（○是月九日、源賴朝任權大納言、）可被任大將之由、院宣（經房奉）到來、而御請文之趣、不慮之外、雖任大納言、顧涯分之處、重又被任大將、不及申左右云云、就之以經房卿被申合殿下、但無左右可被任付之由思食云云、殿下覽彼御請文、不可有異議之由被申云云、

廿四日甲戌、右丞相（兼雅公）被上右大將辭狀、今夜亞相可被任右大將事、被下院宣、（經房奉）御請文趣、辭退之志者多之、所望之儀者無之、何樣可令奏哉云云、入夜被行除目、藏人右少辨家實宣下、右近衞大將源賴朝

上卿別當、（通親卿）執筆右宰相中將、（公時卿）幕下外無任人云云、十二月三日癸未、右大將家令上兩職辭狀（納言不審之）給、右少將保家爲使、頭中將請取之、奏院被留申云云、

〔吾妻鏡十二〕建久三年七月廿日庚寅、大理（○藤原能保）飛脚參著、去十二日任征夷大將軍給、

補任

宣使下向に及ばず

一久明親王の時の事

仙洞にて將軍宣下ありて、後に鎌倉へ御下向あり、按ずるに、京にて將軍宣下の初例也、

一守邦親王の時の事

官使下向に及ばず　右を親王將軍といふ也

以上すべて鎌倉九代將軍といふ

一護良(大塔宮の御事)成良兩親王の時の事

兩親王共に、京にて將軍宣下あり、〇下略

〔職原抄下〕征夷使

大將軍一人

征夷者、始於日本武尊、毎有兵事、遣將帥也、粗見舊記、未置鎮守已往、東征人或爲按察使、或爲鎮守將軍、文屋綿丸以來、有征夷將軍之號云々、愚案於鎮府者、已有鎮將、依之重遣將帥之日、臨時加征夷號歟、坂上田村丸者、稱征東將軍、平將門叛亂時、參議右衞門督藤原忠文朝臣、任征東大將軍、其弟仲舒、源經基爲副將軍發向、其後征夷號久以中絶、源義仲朝臣、京上暫執兵權之日、任征夷將軍云々、其後又權大納言右近大將源頼朝卿、辭兩職歸東國之後、有勅被任征夷大將軍、爾來連綿、頼家朝臣自少將之時兼之、又實朝公自兵衞佐之時至大臣兼之、彼流斷絶之後、藤原頼經卿下向、元服已後卽任之、其子頼嗣卿又任之、中務卿宗尊親王下向以後、四代親王任之、元弘一統之初、兵部卿護良親王暫任之、其後上野太守成良親王令兼之給、建武三年二月被止其號畢、凡頼朝卿補之後、依重征夷之任、不並任鎮府、元弘以來被並任畢、建久以來未任副將軍、於軍監軍曹者時々請任云云、

隨テ行向、兵衞佐ノ館ヲ見候シカバ、外侍内侍共二十六間、外侍ニハ諸國大名膝ヲ組テ並居タリ、内侍ニハ一姓ノ源氏共並居テ、末座ニ古老郎等共ヲ居タリ、少引却テ紫緣ノ疊ヲ敷康定ヲ居、良久シテ兵衞佐ノ命ニ隨ツテ罷向、簾ヲ揚テ寢殿ニ高麗緣ノタヽミ一帖敷テ、兵衞佐被坐タリ、軒ニ紫緣ノ疊一帖敷テ康定ヲ居、兵衞佐ハ布衣ニ葛袴ヲ著セリ、指出タルヲ見候シカバ、少御座セシ時ニハ似給ハズ、顔大ニシテ長ヒキク、容貌花美ニシテ景體優美也、言語分明ニシテ子細ヲ一時宣タリ、○中略聞人ゴトニ兵衞佐ノ作法如見ニゾ被思ケル、

〔將軍宣下三十一度儀不同次第〕一頼朝卿の時の事

是武家の初例也、○中略東鑑には、建久三年七月廿五日、頼朝東帶勅使廳官肥後守中原景良、同康定等を、兩人東帶鶴岡にむかへられ、義澄をして宣旨を請取らる、○中略

一頼家實朝兩將軍の時の事

官使下向に及ばず、宣旨をば六波羅の留守に下され、六波羅より使して、關東にまいらせしと見えたり、　右を三代將軍といふ也

一頼經頼嗣兩代の事

頼家實朝の時の例のごとし　右を攝家將軍といふ也

一宗尊親王の時の事

東鑑に見えし所、先將軍宣旨案文を、六波羅の留守に下され、正文をば官使權少允をして、關東へ下さるべきにて、留守より使を下して、其案文をまいらす、鎌倉の執權等、舊例を尋られしに、頼朝の例分明ならずと云々、　按ずるに、東鑑此條の下に、官使下向の事見えず、鎌倉の執權等申とゞめしにや、

一惟康親王の時の事

佐ニ奉院宣、對面シテ勅定之趣ヲ申含、賴朝ノ返事承テ、同廿五日ニ康定上洛ス、院御所法住寺殿ニ參ス、御坪ニ被召居テ鎌倉ノ形勢兵衛佐ノ問答ヲ委ク被聞召、公卿殿上人參集リ、簾中御簾ヲツイハリ、庭上鳴ヲ止テ是ヲ聞、康定畏テ、兵衛佐被申シハ、賴朝勅勘ヲ蒙トイヘ共、既ニ朝敵ヲ退ケ、武勇ノ名譽依繼先祖、忝征夷將軍ノ宣旨ヲ下賜ル、都ニ不罷上私宅ニ乍居宣旨ヲ奉請取事、天命有其恐、若宮社ニテ可奉請取ト被申之間、康定八幡若宮へ參向ス、彼若宮ハ鶴岡ト申所ニ、八幡大菩薩ヲ奉移祝、地形如石清水也、四面ノ廻廊アリ、造道十餘町ヲ見下テ內外ニ鳥居ヲ立タリ、南ハ海上漫々ト見渡シテ眺望コトニ勝タリ、サテ宣旨ヲバ誰ソカ可奉請取ト評定アリ、三浦介義澄ト被定、彼義澄ハ東八箇國第一ノ弓取ニ、三浦平太郎高繼ニ末葉ナル上、父三浦大介義明ガ君ノ御爲ニ、兵衛佐謀叛ヲ發初ケル時、衣笠城ニテ敵ヲ禦、命ヲ捨タルニ依テ、父ガ黃泉ノ闇ヲ照サンガ爲ト承キ、義澄宣旨請取奉ラントテ八幡宮へ參向ス、郎等十人家子二人ヲ相具ス、郎等十人ヲバ大名一人ヅヽ承テ出立タリ、家子二人ガ內、一人ハ比企藤四郎能定、一人ハ和田三郎宗眞、家子郎等都合十二人、彼モ此モ共ニ直甲ニテ、今日ヲ晴ト上下心モ及ズ出立タリ、義澄ハ赤威鎧ニ甲ヲバ不著、右ノ膝ヲ突、左ノ膝ヲ立テ葉、葛箱ニ奉入處ノ宣旨袋ヲ請取奉ラント、左右ノ手サヽグル時、康定兼テ三浦介トハ承テ侍ドモ、抑御使ハ誰人ニテ御座ルゾト尋候シカバ、三浦介トハ不名乘シテ、三浦荒次郎義澄ト名乘儘ニ、宣旨奉請取、良久有テ覽箱ノ蓋ニ、沙金十兩入テ返、拜殿ニ紫緣ノ疊二帖敷テ、康定ヲ居、高盃ニ肴二種シテ酒ヲ勸ム、齋院次官親義、陪膳仕テ肴ニ馬ヲ引、大宮侍ノ一﨟工藤左衛門尉祐經一人シテ是ヲ引、其日ハ兵衛佐ノ館ヘハ向ハズ、五間ノ萱屋ヲ理テ垸飯ユタカニ、厚絹二兩、小袖十重、長櫃ニ入テ傍ニ置、其外宿所へ十三匹ノ馬ヲ送、其中ニ二匹ハ鞍ヲ置、十一匹ハ裸馬也、彼馬共ハ八箇國ノ大名ニ選宛ラレタリト、內々承シニ合テ實ニ有難逸物共也キ、又上品ノ絹百匹、白布百端、紺藍摺各百端積メリ、明日兵衛佐ヨリ康定ヲ請ズ、請ニ

征夷使

　大將軍源賴朝

從五位下源信友

左衞門督通親參陣、參議兼忠卿書之、

將軍事、本自雖被懸御意、于今不令達之給、而法皇〇後白河崩御之後、朝政初度殊有沙汰、被任之間、故以及勅使云云、又爲知家沙汰、點武藏守〇平賀義信亭、招勅使、經營云云、　廿七日丁酉、將軍家令招請兩勅使於幕府給、於寢殿南面御對面有獻盃、加賀守俊隆、大和守重弘、小山七郎朝光等從所役、前少將、參河守、相摸守、伊豆守等候其座、及退出期、各給鞍馬、鹿毛、葦毛、左衞門尉祐經朝重等引之、兩客降庭上請取之、一拜之後退出云云、　廿八日戊戌、爲北條殿御沙汰、令送垸飯於勅使給、又小山左衞門尉、千葉介、畠山次郎以下、調進彼贈物、爲善信、俊兼等奉行、召聚之、　廿九日己亥、景良、康定歸洛、先從將軍家馬十三疋、桑絲百十疋、越布千端、紺藍摺布百端、令餞送之給云云、朝光爲使節、

〔源平盛衰記三十三〕賴朝征夷將軍宣附康定關東下向

去程ニ兵衞佐賴朝上洛不輒トテ、鎌倉ニ居ナガラ、征夷大將軍ノ宣旨ヲ被下、其狀ニ云、

左辨官下五畿内東海東山北陸山陰山陽南海西海已上諸國

　早賴朝朝臣可令爲征夷大將軍事

　使左史生中原康定右史生中原景家

右左大臣藤原朝臣兼實宣、奉勅從四位下行前右兵衞權佐源賴朝朝臣、可令爲征夷大將軍者、宜令承知依宣行之、

　壽永二年八月日　　左大史小槻宿禰奉

左大辨藤原朝臣　在判トゾ被書下クル、左史生康定、此院宣ヲ賜テ、九月四日關東ニ下著、兵衞

右漢家本朝上古之儀、遷移多之、不追羅縷、迄于季世依有煩擾移徙不容易乎、就中鎌倉郡者、文治右幕下始構武館、承久義時朝臣幷呑天下於武家尤可謂吉土哉、爰蘇多權重極驕恣欲積惡不改、果令滅亡、畢縱雖爲他所、不改近代覆車之轍者、傾危可有何疑乎、夫周秦共宅崤函也、秦二世而滅、周閱八百之祚、隋唐同居長安也、隋二代而亡、唐興三百之業矣、然者居所之興廢可依政道之善惡、是人凶非宅凶之謂也、但諸人若欲遷移者、可隨衆人之情歟、

〔羅山文集七十題跋〕將軍稱柳營、本于周亞夫細柳營、又稱幕下、稱幕府、本于韜略所云大將之軍幕、且在漢書李廣傳、而莫府莫大也、又云、莫幕同字云云、唐詩、靑油幕下白雲邊、又稱戲下、稱麾下者、史記項羽傳戲下戲地名、一云麾也、尙書武王麾白旄、是白旌旗幟也、

〔吾妻鏡十二〕建久三年七月廿日庚寅、大理(〇藤原能保)飛脚參著、去十二日任征夷大將軍給、其除書差勅使欲被進之由被申送云云、　廿五日丙申、勅使廳官肥後介中原景良、同康定等參著、所持參征夷大將軍除書也、兩人(各著衣冠)任例列立于鶴岳廟庭、以使者可進除書之由申之、被遣三浦義澄、義澄相具比企左衞門尉能員、和田三郞宗實、幷郞從十八人(各甲冑)詣宮寺、請取彼狀、景良等問名字之處、介除書未到之間、三浦次郞之由名謁畢則歸參、幕下(御束帶)豫出御西廊、義澄捧持除書膝行而進之、千萬人中義澄應此役、面目絕妙也、亡父義明獻命於將軍訖、其勳功雖剪鬢難酬、于沒後仍被抽賞子葉云云、除書云、

右少史三善仲康　內舍人橘實俊　中宮權少進平知家　宮內少丞藤原定頼　大膳進源兼元

大和守大中臣宣長　河內守小槻廣房(元左大史)　尾張守藤原忠明(元伯耆)　遠江守藤原朝房(元陸奥)

近江守平棟範　陸奥守源師信　伯耆守藤原宗信(元近江)　加賀守源雅家　若狹守藤原保家(元安房)

石見守藤原經成　長門守藤原信定　對馬守源高行　左近將監源俊實　左衞門少志惟宗景弘　右馬允宮道式俊

建久三年七月十二日

柳營　周亞夫細柳營に陣す、故此號あり、

〔隋書四十一高類〕頻每坐朝堂北槐樹下以聽事、其樹不依行列、有司將伐之、上特命勿去以示後人、其見重如此、

〔易林本節用集官位〕幕下バクカ大將軍

〔書言字考節用集三官位〕幕府バクフ將軍之稱　幕下バクカ上同

〔拾芥抄中本官位唐名〕近衞司幕府、羽林、親衞、

〔三內口決〕一幕事

禁中左右近之陣有幕、大將ヲ號幕下事者、此子細ニ候、

〔室町家御內書案上〕一北野天滿宮社僧等、每日祈禱可令勤行條々、○中略

爰幕府左兵衞督尊氏、幷左馬頭直義、依被院宣可令誅伐逆惡之奸臣義貞之黨類也、○中略

建武三年八月十八日　左馬頭源朝臣判

〔道照愚草〕一幕下トハ、大樹ノ御事、大樹トハ將軍ノ御事ナリ、バッカトニゴルナリ、

〔下學集上人倫〕柳營リウエイ指將軍家也、起於漢周亞夫故事、

〔漢書四十周勃〕文帝後六年、匈奴大入邊、以宗正劉禮爲將軍軍霸上、祝茲侯徐厲爲將軍軍棘門、以河內守亞夫爲將軍軍細柳、以備胡、上自勞軍、至霸上及棘門軍直馳入、將以下騎出入送迎、已而之細柳軍、軍士吏被甲銳兵刃、彀弓弩持滿、

〔吾妻鏡十五〕建久六年十一月十九日庚子、相模國大庭御厨俣野鄕內有大日堂、今日寄進田畠、限未來際、被宛佛聖燈油料、○中略本尊又云御衣木之濫觴云、當伽藍之由緒、誠任檀那誓約、令專柳營。護持給歟之由、有御沙汰、師及御奉加云云、

〔建武式目〕鎌倉如元可爲柳營歟、可爲他所否事、

古事類苑

官位部三十五

鎌倉將軍

名稱

征夷大將軍ハ、陸奧ノ蝦夷ヲ鎭撫スルノ職ニシテ、事アレバ任ジ、事定マレバ罷メシガ、後鳥羽天皇ノ建久二年ニ、源頼朝此職ニ補セラレ、天下ノ兵馬ノ權ヲ掌握スルニ至リ、其威力往昔ノ征夷將軍ノ比ニアラズ、朝廷モ亦之ヲ重ジ、別ニ鎭守府將軍ヲ任ゼズ、海内ノ鎭護一ニ征夷大將軍ニ委ヌ、是ヨリ常置ノ職トナレリ、頼朝、頼家、實朝、父子三代此職ヲ襲ヒ、實朝歿後、藤原頼經、其子頼嗣ノ二代、及ビ宗尊、惟康、久明、守邦ノ四親王相繼テ將軍トナレリ、而シテ頼經ヨリ以下皆北條氏ノ奏請ニ據リテ、立テタルヲ以テ、其實權陪臣ノ手ニ歸シ、將軍ハ僅ニ虛器ヲ擁スルノミ、後醍醐天皇元弘中興ノ後ニハ、護良、成良、興良三親王相繼テ此職ニ補セラル、

〔書言字考節用集 三官位〕征夷大將軍(セイイタイシヤウグン) 頼朝以來、爲武家重任、

〔拾芥抄 中本官位唐名〕將軍 幕府 柳營 大樹 虎賁

〔後漢書 十七馮異傳〕異爲人謙退不伐、行與諸將相逢、輒引車避道、進止皆有表識、軍中號爲整齊、毎所止舍、諸將並坐論功、異常獨屛樹下、軍中號曰大樹將軍、及破邯鄲、乃更部分諸將、各有配隷、軍士皆言、願屬大樹將軍、光武以此多之、

〔百寮訓要抄〕大樹　征夷大將軍唐の名也、隋高熲大將軍として、槐下にて事をきく、此木をきらず、後代のしるし也、召伯が甘棠のごとし、大樹將軍といふ、

に列すべき衆といへる意にて、なべて式評定衆とかける故なるべし、別に評定衆といふもの丶なきも其一證なり、

五大院兵衞太郎　安威彌太郎　合奉行相原七郎入道
二番　三河前司　常陸前司　伊賀左衞門二郎　薩摩掃部大夫入道　肥前法橋　丹後四郎
合豐前孫五郎
三番　山城左衞門大夫　伊達左近藏人　武石二郎左衞門尉　安威左衞門尉　下山修理亮
飯尾次郎　合齋藤五郎

諸奉行

政所執事　山城左衞門大夫　評定奉行　信濃入道
寺社奉行　安威左衞門入道　薩摩掃部大夫入道
安堵奉行　肥前法橋　飯尾左衞門二郎
侍所　薩摩刑部左衞門入道（以子息五郎左衞門尉親宗勤之）

〔武家名目抄職名入下〕按此一條は、建武一統の時、鎭守府將軍顯家、補助のために、鎭府に置かれたる有司なり、

〔武家名目抄職名五上〕按式評定衆は、なべての評定衆の列にありながら引付頭、政所問注所の執事及評定奉行等を帶することなくして、要職をば攝せざるものなり、されば例式の評定にのみあづかる意にて、式字を加へられしなり、此名目鎌倉殿の時には絕て見る所なく、建武記に始て出たり、されど鎌倉の世にも、別に統職なき評定衆を、常の辭には玄か呼れしこと有し成べし、かの建武一統の御世に、陸奥の鎭府に、評定引付等の衆を置れしも、全く鎌倉の例にならひし處なれば、其稱呼をも追れざるいはれなければなり、（此時兩衆に擧用せられし輩、多くは鎌倉の奉行人の門族なり、これらをも思合すべし、）然れども元は辭にのみとなへ來りけむを、正しく式字をそへて職名となせしは、この時ぞ始なるべき、（但建武記には、引付頭及其他要職を帶せる人をも、すべて式評定衆の内に加へたり、これは其攝職を別にかゝげ記せし故に、初にはたゞ常日の評定

二番　兵部大輔經家　藏人憲顯　出羽權守信重　若狹判官時明　丹後三郎左衞門尉盛高　三河四郎左衞門尉行冬
三番　宮內大輔貞家　長井甲斐前司泰廣　那波左近大夫將監政家　讃岐權守長義　山城左衞門大夫高貞　前隼人正致顯　相馬小次郎高胤
四番　右馬權助賴行　豐前前司淸忠　宇佐美三河前司祐淸　天野三河守貞村　小野寺遠江權守道親　因幡三郎左衞門尉高憲　遠江七郎左衞門尉時長
五番　丹波左近將監範家　尾張守長藤　伊東重左衞門尉祐持　後藤壹岐五郎左衞門尉　美作次郎左衞門尉高衡　丹後四郎政衡
六番　中務大輔滿儀　藏人伊豆守重能　下野判官高元　高太郎左衞門尉師顯　加藤左衞門尉　下總四郎高家
右守結番次第、無懈怠可令勤仕之狀、依仰所定如件、
元弘次〇次恐クハ亖字ノ誤、亖ハ四ノ古文、年

〔武家名目抄職名附錄三〕按此一條は成良親王征夷將軍となりて、鎌倉に居給ひし時の廂番なり、

奧州將府諸職

〔建武年間記〕奧州
式評定衆
冷泉源少將家房　式部少輔英房　內藏權頭入道元覺　結城上野入道　信濃入道行珍　三
河前司親脩　山城左衞門大夫顯行　伊達左近藏人行朝
引付
一番　信濃入道　長井左衞門大夫貞宗　近江二郎左衞門入道　安威左衞門入道

於總領、若無總領者可辨其郡催促之役人、

一所領數ヶ所相傳事

懸命之所者自身可勤仕、自餘所々者可進代官、

一町別錢貨人夫傳馬事

稱先例致懸百姓之條不可然、向後以撫民之儀可爲領主之所役、

一鎧直垂已下武具事

各存儉約可止過差之儀、所詮於直垂者、蜀錦呉綾金紗金襴紅紫之類、不可著用、可爲布、又金銀裝束太刀唐皮尻鞘、同可停止之、可用疎品、

一番渡次第事

云奉行人云役人、等正員參役所、可致嚴密之沙汰、

〔薩藩舊記前集十二比志島氏文書〕内裏大番自三月一日可致勤仕薩摩國地頭御家人交名事、次第不同、但當參分、鎧直垂てうつかけ有べし、

大隅次郎三郎　式部孫五郎入道　周防藏人三郎　澁谷小四郎入道　澁谷新平二入道

澁谷彌次郎　矢神左衞門二郎　知覽四郎　澁谷彥三郎入道　光富又五郎入道

指宿郡司入道　朝岳強三郎　比志島彥太郎

建武二年二月三十日

〔建武年間記〕關東廂番

關東廂番

定廂結番事、次第不同、

一番　刑部大輔義季　長井大膳權大夫廣秀　左京亮　仁木四郎義長　武田孫五郎

時風　河越次郎高重　丹後次郎時景

一諸國一二宮事
本家幷領家職事、可停止其號之由、以前治定了、於社敷地幷神職收公地頭跡者、被尋究可被停止之、至神領地頭職者、隨事之躰、追可有其沙汰矣、
一同國分寺事
於料所者、任格制可致沙汰、至所職田地者、被尋究可有其沙汰矣、
建武元年五月七日

窪所

〔梅松論上〕元弘三年の今は天下一統に成しこそめづらしけれ、〇中略窪所〇窪所本作俸所と號して、土佐守秉光、太田大夫判官親光、富部大舍人頭參河守師直等を衆中として、御出有て聞召、〇下略

〔建武年間記〕定窪所番事
一番　道光　義高　廣榮　平保平
二番　重如　正季　大江貞重
三番　光貞　信連　藤原重朝
四番　菊夜叉丸　康政　源知義
右番守次第無懈怠可令勤仕、番衆之外、無左右不可參當所之狀如件、
建武三年二月日

大番

〔建武年間記〕大番條々建武二三一
一寺社一圓領事
先々被免許之所々者、今更不能駈催、近年御寄附之地者、任舊規可勤仕、
一本所進止地幷領家預所職事
於所務之地者、准地頭職平均可相觸、至請所者不及充課、
一就田數可支配事
遠國三十町、中國二十町、近國十町別一人分面々可參勤、當知行之地不足之輩者可沙汰渡課役

四番 卯酉
長井大膳權大夫 廣秀　長井周防右近大夫將監 高廣　宮部大舍人頭 信連　足立安藝前司 遠宣　町野民部大夫 信顯
島津修理亮 貞佐　小串下總權守 秀信　梶原尾張權守 景直　山田藏人 源重光　廣澤安藝彈正左衞門尉 藤原高實
庄四郎左衞門尉 藤原宗家

五番 辰戌
新田式部大夫 義治　河內大夫判官 正成　隼人正 光貞　駿河權守 時總　三河守 成藤
中條因幡左近將監 貞茂　沼濱左衞門藏人 藤原廣譽　橘正遠　高田六郎左衞門尉 源知方　布志邦二郎 源光清
熊谷二郞兵衞尉 平貞宗

六番 巳亥
武田大膳大夫 信貞　伯耆守 長年　河內左近大夫 知行　宇佐美攝津前司 貞祐　武藤備中權守 資時
大見能登守 家致　金持大和權守 廣榮　山田肥後權守 俊資　春日部瀧口左衞門尉 紀重行　本間孫四郎左衞門尉 源忠秀

右番守次第、一夜日無懈怠可令勤仕之狀如件、

延元元年四月日

〔建武年間記〕武者所輩可存知條々

一五位以上、可用衣冠、於散所著鷹衣者可用布、
一六位同可爲衣冠、但准有官瀧口著鷹衣者、同可用布、
一內々宿直之時、可用布水干葛袴、
一鎧直垂、蜀錦吳綾、金紗金襴、紅紫之類、細々警固之時、不可著用、
一精好大口一切停止之、可用練大口、
一小袖、織物綾練貫之類、細々不可用、
一金銀裝束、太刀刀鞘、細々不可用、
一唐皮尻鞘切付等同斷
一總鞦常不可用、細々警固之時、正員一人之外停止之、

改上卿トテ、萬里小路中納言藤房卿ヲ被成上卿、申狀ヲ被付渡、藤房請取之、糺忠否、分淺深、各申與ントシ給ヒケル處ニ、依内奏秘計、只今マデハ朝敵ナリツル者モ安堵ヲ賜リ、更ニ無忠輩モ五箇所十箇所ノ所領ヲ給ケル間、藤房諫言ヲ納カチテ、稱病被辭奉行、角テ非可默止トテ、九條民部卿ヲ上卿ニ定テ、御沙汰有ケル間、光經卿諸大將ニ、其手ノ忠否ヲ委細尋究テ、申與ントシ給ケル處ニ、相摸入道ノ一跡ヲバ、内裏ノ供御料所ニ被置、舍弟四郎左近大夫入道ノ跡ヲバ、兵部卿親王へ被進、大佛陸奧守ノ跡ヲバ、准后ノ御領ニナサル、此外相州ノ一族、關東家風ノ輩ガ所領ヲバ、無指事郢曲妓女ノ輩、蹴鞠伎藝ノ者共、乃至衞府諸司官女官僧マデ、一跡二跡ヲ合テ、内奏ヨリ申給リケレバ、今ハ六十六箇國ノ内ニハ、立錐ノ地モ、軍勢ニ可行闕所ハ無リケリ、斯ケレバ光經卿モ、心計ハ無偏ノ恩化ヲ、申沙汰セント欲シ給ケレ共、叶ハデ年月ヲゾ被送ケル、

〔梅松論上〕元弘三年の今は天下一統に成しこそめづらしけれ、○中略むかしのごとく武者所ををかる、新田の人々を以頭人にして、諸家の輩を詰番せらる、

〔建武年間記〕武者所結番事

一番 子午
新田越後守 義顯
新田大藏大輔 貞政
熱田攝津守 昌能
長井因幡守 貞泰
南部甲斐守 時長
大友式部大夫 直世
長井掃部助 大江貞匡
長沼判官 藤原秀行
小山五郎左衞門尉 藤原政秀
楠木帶刀 橘正景
三浦備三郎 平長泰

二番 丑未
新田左馬權頭 貞義
宇都宮右馬權頭 泰藤
小笠原周防權守 賴清
仁科左近大夫 盛宗
高梨左近大夫 義繁
讚岐權守 親藤
三浦安藝二郎左衞門尉 平時續
小早川民部丞 平賴平
三浦源兵衞尉 平氏時

三番 寅申
新田兵部少輔 行義
長井前治部少輔 賴秀
千葉上總介 胤重
狩野介 貞長
伯耆大夫判官 義高
土岐三河權守 國行
豐後權守 光顯
狩野遠江權守 明光
瀧瀨下野權守 宗光
和泉民部丞 藤原行持
町野加賀三郎 三善信榮

恩賞方

山城國葛原庄事〈在評定文〉

右任今月一日評定文、止方々妨、可全領掌之狀、下知如件、

建武二年六月十六日　權少外記兼左衞門少尉清原判

從一位藤原〈今出川〇兼季〉　造東大寺次官主殿頭兼左大史小槻宿禰判

中納言兼左衞門督藤原朝臣判　圖書頭兼頭大藏少輔土佐守藤原朝臣

從二位藤原朝臣　修理左宮城使左中辨春宮亮藤原朝臣

式部權大輔藤原朝臣判　大膳大夫藤原朝臣

〔建武年間記〕恩賞方番文

一番〈子辰申〉　東海道　東山道

吉田一位〈定房卿〉　經季朝臣〈頭宮內卿〉　良定朝臣〈中院中將〉　兼光〈土佐守〉　親光〈吉田判官〉

二番〈丑巳酉〉　北陸道

民部卿〈光經卿〉　藤長〈藏人右少辨〉　職政〈兵部大夫判官〉　季清〈佐渡大夫判官〉

三番〈寅午戌〉　畿內　山陽道　山陰道

別當〈藤房卿〉　宗兼朝臣〈頭中將〉　長年〈伯耆守〉　正成〈河內大夫判官〉

四番〈卯未亥〉　南海道　西海道

四條中納言〈隆資卿〉　範國〈左衞門權佐〉　顯元〈五條大外記〉　清原康基〈六位史〉

〔太平記十二〕公家一統政道事

同〈元弘〇二年〉八月三日ヨリ、可有軍勢恩賞沙汰トテ、洞院左衞門督實世卿ヲ被定上卿、依之諸國ノ軍勢、立軍忠支證捧申狀、望恩賞輩、何千萬人ト云數ヲ不知、實ニ有忠者ハ憑功不諛、無忠者媚奧求竈、掠上聞間、數月ノ內ニ僅ニ二十餘人ノ恩賞ヲ被沙汰タリケレ共、事非正路、軈被召返ケリ、サラバ

正三位藤原朝臣　左少辨藤原朝臣

東寺百合古文書四十一雑訴決斷所

建武元年六月一日評定

多聞丸、幷多聞丸、松夜叉丸、與快乘、道行等相論、山城國葛原庄幷菊末貞宗事、

件相論事、多聞丸者捧元弘三年七月三日綸旨、同十一月廿七日勅裁、左馬寮施行、同度々下知狀、前寮務今出川前左大臣家季〇兼下文等、菊末、貞宗兩名者、多聞丸管領無相違之處、號葛原新庄領主、快乘、道行致押領、構城郭、令抑留年貢之由訴申之處、又號多聞丸得地下沙汰人道行之語、有契狀幷請取狀、業秀、滿壽丸等構出無體多聞丸之名字、成敵對之旨爭申之剋、松夜叉丸訴申云、葛原庄事、任貞應寄附、永仁勅裁、正中記錄所勘狀、可被弃捐快乘道行領知云々、爰快乘、道行、備嘉曆三年十一月一日綸旨、嘉元院宣、貞應、嘉祿、寬喜、嘉禎關東六波羅下知等、去嘉曆重々有其沙汰、預聖斷之後、無他妨之處、多聞丸以不知行之地、號當知行、屬左馬寮掠賜安堵綸旨、及謀訴之剋又號多聞丸支申之處、松夜叉丸方之及濫妨之上者、任嘉曆勅裁、可被弃置之旨申之間、就致四方之相論、可遂一決之對問之旨、度々出廻文畢、而兩人之多聞丸幷松夜叉丸爲訴人難澁之間、雖立使者、猶以遁避之條、依無盡期、以違背之篇、可被裁許道行、快乘等之旨、有其沙汰之處、多聞丸二人申狀具書同筆也、拵出內通表裏之謀訴、以不知行之地、掠賜安堵綸旨、剩作出無體之多聞丸、致自問自答之相論、姧曲露顯之間、恐自科不出對、難澁之上者匪啻被弃置謀訴、尋捜多聞丸幷業秀等之在所、召捕其身、可被處罪科也、次松夜叉丸難澁之上、前々被弃捐畢、旁非沙汰之限、然者快乘、道行等、帶度々勅裁以下文契上者、止方々之妨、可全領掌之旨、可致裁許哉、

章有　正成　信連　康基　覺民　道□

雑訴決斷所下　快乘道行等所

右近隣惡黨幷土民等令押領云々、早可沙汰居性秀代官者、以牒、

建武元年四月七日　明法博士中原朝臣判花押

左少辨藤原朝臣判花押

〔東寺百合古文書三十〕雜訴決斷所牒　若狹國守護國方同前

當國太良庄雜掌申、若狹次郎入道直阿濫妨事、副訴狀具書

牒、止濫妨、可沙汰居雜掌之由、被下先度當所牒訖、而猶濫妨云々、重沙汰居雜掌於當保、可被注進散狀者、以牒、

建武二年四月十五日　采女正中原判

民部卿藤原　大外記中原朝臣判

右京大夫藤原朝臣判　前伊勢守小槻宿禰判

正三位藤原朝臣判　右少辨藤原朝臣判

〔古文書類纂〕雜訴決斷所下文後醍醐天皇建武二年雜訴決斷所下文(筑前國糸島郡雷山村大悲王院所藏)

雜訴決斷所下　島津上總入道道鑑所

筑前國雷山千如寺衆徒等申、當寺造營用途事、

右件造營用途事、任去二月廿九日當所評定目錄、可致沙汰之旨被仰下之處、于今無沙汰云々、太不可然、所詮來六月中宜令究濟之狀、下知如件、

建武二年五月十九日　前筑後守藤原朝臣花押

中納言兼大藏卿左京大夫大判事侍從藤原朝臣公明花押　〇　明法博士兼左衞門權少尉左京大進中原朝臣花押

修理大夫藤原朝臣〇藤原經實　左衞門權佐兼少納言侍從藤原朝臣

八番西海道筑前、筑後、豐前、豐後、肥前、肥後、日向、大隅、薩摩、壹岐、對馬、
十日、十一日、十九日、凶中廿日、廿一日、廿九日、
侍從中納言公明卿　四條前中納言實○隆　堀河前宰相光繼卿
藏人右(右一本作左)衞門佐範國崎○闕　近衞大夫判官職政
高倉大夫判官章緒　左大(大一本作少)史高階俊春　小田筑後前司貞知
佐々木佐渡大夫判官道譽　明石民部大夫行連　飯尾兵部右衞門尉顯連
引田妙玄

〔建武年間記〕於決斷所可有沙汰條々
一所務濫妨之事
一領家地頭所務相論、幷年貢難濟以下之事、
一下職以下開發餘流幷帶代々上裁輩訴之事、自餘者可爲本所成敗、
一本領安堵事、當所幷記錄所可任訴人之心、
一諸國國司守護注進事
一關東十ヶ國成敗事
一所務相論、幷年貢以下沙汰、一向可有成敗事、
一所領幷遺跡相論、異重事者、執整訴諫可爲注進事、
一訴論人或在京、或在國者、就訴人之在所可有沙汰事、
已上被押決斷所也

〔建武年間記〕雜訴決斷所暴
安藝國衙
松田平內左衞門入道性秀申志道村事

六日、七日、十五日、庭中十二日、十七日、

萬里小路一位宣房卿　坊城大貳經顯卿　前宮內卿〇平範高卿
葉室新宰相長光朝臣　右中辨正經〇藤原　攝大外記師治〇中原
博士大夫判官則成　勢多大夫判官章兼　眞惠是圓舍(舍一本作房)弟
道要　越中權守成藤　伯耆守長年〇名和
雅樂左近將監藤原信重　雜賀隼人佐入道西阿

六番山陽道播磨、美作、備前、備中、備後、安藝、周防、長門、

七日、八日、九日、庭中十七日、十八日、廿六日、廿七日、廿八日、總評隔月

葉室前大納言長隆卿　押小路大藏卿〇平惟繼卿　六條前平宰相宗經卿
式部權大輔在登〇壬生坊城　章香〇勢多　三條前大炊頭師香
高倉新大夫判官章顯　前大史安倍成定盛宣　信濃入道道大
大田加賀大夫判官親光〇結城　津戶出羽權守入道道元　宇波太郞大江貞重
門眞寂書左衞門入道寂意

七番南海道紀伊、淡路、阿波、讃岐、伊豫、土佐、

九日、十日、十一日、庭中十九日、廿日、廿八日、

九條民部卿光經卿　中御門前宰相經宣卿　吉田前宰相資房卿
高倉左少辨光守朝臣　大判事明清〇姉小路　泰尙
權大外記隼人正藤原康綱　佐々木備中大夫判官時信　長井丹波前司宗衞
行圓　對馬民部大夫行重　三須雅樂倫篤
圓年

久我前右大臣（長通公）　洞院左衛門督（實世卿）　右大辨宰相（清忠卿、○坊門）
左中辨宣明朝臣（○中御門）　藏人民部大輔定親（○藤原）　官長者四位大夫冬直宿禰（○小槻）
大外記師利（奉行、○中原）　四條坊門大夫判官章世　是圓房道昭
常陸前司時知（奉行、○小田）　上杉兵庫入道道勤　町野加賀前司信宗
㊀庄左衛門尉藤原長家　布施彥三郎入道道乘
三番東山道（近江、美濃、飛驒、信濃、上野、下野、陸奧、出羽、）
三日、四日、八日、庭中十三日、十四日、廿三日、廿四日、廿五日、（越訴隔月）
洞院內大臣（公賢公）　堀河大納言（具親卿）　中御門前中納言（冬定卿）
左大辨宰相（實治卿、○九條）　頭中將宗兼朝臣（○藤原）　壬生大夫史匡遠
冷泉大夫判官章興　藤原宗成　㊁長井左近大夫將監高廣
佐々木佐渡入道如覺　高參河權守師直　齋藤四郎左衛門尉藤原基夏
㊁諏訪大進房圓忠
四番北陸道（若狹、越前、加賀、能登、越中、越後、佐渡、）
四日、五日、六日、庭中十四日、十五日、十六日、廿四日、廿五日、（越訴隔月）
吉田儀同三司（定房卿）　前藤中納言（實任卿、○三條）　日野前宰相（資明卿）
甘露寺右少辨藤長　藏人判官藤原清藤　主稅頭算博士言春
三條大外記師右　大宮大夫判官章方　二階堂外記中原重尙
二階堂出羽入道道蘊　佐々木信濃判官高貞　飯尾左衛門大夫貞兼
海老名五郎左衛門尉藤原經則　飯河播磨房光瑜
五番山陰道（丹波、丹後、但馬、因幡、伯耆、出雲、隱岐、石見、）

雜訴決斷所

クス、

〔梅松論上〕いつしか諸國に國司守護を定、〇中略御聖斷の趣、五畿七道八。番。にわけられ、卿相を以頭人として、決斷所〇一本作二斷決所一と號て、新に造らる、是は先代〇北條氏引付の沙汰のたつ所也、大議にをいては、記錄所にをいて裁許あり、

〔太平記十二〕公家一統政道事

雜訴ノ沙汰ノ爲ニトテ、郁芳門ノ左右ノ脇ニ、決斷所ヲ被レ造、其議定ノ人數ニハ、才學優長ノ卿相雲客、紀傳明法外記官人ヲ、三番ニ分テ、一月ニ六箇度ノ沙汰ノ日ヲゾ被レ定ケル、凡事ノ體嚴重ニ見ヘテ、堂々タリ、去ドモ是尙理世安國ノ政ニ非リケリ、或ハ自二内奏一訴人蒙二勅許一ヲ、決斷所ニテ論人ニ理ヲ被レ付、又決斷所ニテ本主給二安堵一、内奏ヨリ其地ヲ別人ノ恩賞ニ被レ行、如此互ニ錯亂セシ間、所領一所ニ四五人ノ給主付テ、國々ノ動亂更ニ無二休時一、

〔雜訴決斷所結番交名〕建武元八

一番五畿内山城、大和、河内、和泉、攝津、

一日、二日、五日、庭中十一日、十二日、十三日、廿二日、廿五日、雜訴隔月

今出河前右大臣兼季公　別當藤房卿　前源宰相國資卿
顯宮內卿經季朝臣〇中御門　五條大外記頼元　正親町大夫判官章有
佐渡大夫判官秀清　三條少外記淸原康基　宇津宮兵部少輔公綱
土佐守兼光　當部大舍人頭信連　河內大夫判官正成楠木
飯尾彥六左衞門入道覺民　三宮孫四郎入道道守

二番東海道伊賀、伊勢、志摩、尾張、三河、遠江、駿河、伊豆、甲斐、相摸、武藏、安房、上總、下總、常陸、

一日、庭中二日、三日、十二日、十三日、十六日、廿二日、廿三日、雜訴隔月

村長

○按ズルニ、右ノ三里ハ、東大寺正倉院文書卷二十ニ收ムル所ノ養老五年ノ戸籍ニ據ルニ、下總國葛飾郡大島郷ニ屬セリ、

〔續日本紀二十稱德〕天平寳字元年七月戊午、是日御南院、追集諸司幷京畿内百姓村長以上、而詔曰、○下略

〔類聚國史百九十風俗〕大同二年三月丁酉、制、夷俘之位、必加有功、而陸奥國司遞出夷俘、或授位階、或補村長、寔繁有徒、其費無極、自今以後、不得輙授、若有功効灼然、酬賞無已者、按察使處分、然後敍補、不得國司輙行、

村刀禰

〔嚴島文書〕上勝永友解　申沽渡進所領田事

合參段　字三栗原充直參石小總東坪段別一石守(以下虫食)

右件所領田、依在要用、見直於多治近恒限永年所領田與進也、仍爲後日進券文以解、

寛治二年四月十一日　上勝花押

件沽田法買所見實也　郷頭　安部

仍村刀禰加證署、　橘

郷目代太秦

建武中興官職

建武中興ノ時、官職ハ舊制ニ因リ、又記錄所ノ如キ、廢絶シタルヲ興シ、更ニ雜訴決斷所、恩賞方、武者所、窪所、大番等ヲ置キ、鎌倉ニハ關東廂番、陸奥鎮守府ニハ式評定衆引付等ノ職ヲ置

郷目代

〔嚴島文書〕日熊光末謹辭　沽渡進古作田事

合貳段佰貳拾歩（加二又貳佰肆拾歩一已上參段　光直貳石伍斗）

在二三田郷　草佐村　字鷹邊一者

四至（東限二長側一　南限二公田一　西限レ河　北限二末曾一）

右古作田、光末相傳所領古作田也、依レ在二大急要事一、本劵新劵共書生丹治近恒に放手所レ沽與進一如レ件、

仍爲二後日一劵文如レ解、

永長二年八月二日　　日熊（花押）

郷目代大秦（花押）

郷刀禰

〔嚴島文書〕秦永光解　申沽渡常地田事

合伍段者（字三□原）（限直參斛濟事須澤村々）

右件田依レ有二直物要用一、限二丹治部近恒永年一所二沽渡實一也、仍爲二後日一作二劵文一以解、

嘉保二年三月十四日　　秦（花押）

郷刀禰等加二證署一

郷目代秦

書生藤井（花押）

書生凡（花押）

書生橘（花押）

里正

〔續續修東大寺正倉院文（第三十五帙第五卷背）〕甲和里戸肆拾肆（○中略）　里正孔王部荒馬

仲村里戸肆拾肆（○中略）　里正孔王部鹽

嶋俣里戸肆拾貳（○中略）　里正孔王部小刀良

貞觀三年十月十九日

墾田主依知秦公福万
相賣依知秦公福貞
依知秦公貞成
保證人正八位下依知秦公貞宗
秦忌寸家繼
從八位上依知秦公長吉
依知秦公又男
徴部正八位下依知秦公千門
税領大初位下依知秦公
大初位下依知秦公
鄕長若湯坐連

〔嚴島文書〕高田郡司解申注進先祖相傳所領畠立券事

合風早鄕口垣村○中略

右件畠先祖相傳之所領也、而故權守守遠宿禰無指子息之間、死去之後、万々牢籠、然而賴方爲彼末葉之上、以譜代之理令執行郡務之處、盍領知彼所領畠乎、抑前郡司賴如不治第一也、或以相傳郡司所知沽與他人、或朝來暮往之氏、以郡司所領地沽却所住百姓、甚不知其理者、依立券之旨、爲被裁判、注進如件、

應德二年三月十六日　散位藤原賴方

件畠下知鄕令立券之次、已無相違者、早任相傳之理可領掌之、

大介從四位下行源朝臣花押

常土、用稻壹佰貳拾束、充價直、賣與右京六條二坊戸主臺忌寸家繼戸口淸江宿禰貞成、既訖、望請依法欲立劵文者、郡依申狀、檢圖劵、所陳有實、仍勒賣買兩人署名、申送、以解、

墾田主大藏秦公　廣吉女

男若湯坐　連繼人

若湯坐連關手
若湯坐連子吉

戸主從八位上若湯坐連成繼

保。子。從六位下依知秦公繼成

從八位上依知秦公家持

大藏秦公　魚主

依知秦前秋麻呂

鄕。長。依　智　禰　丞

擬主帳外初位上平群丞長

天長二年十月三日

轉擬大領外從七位下依知秦公吉繼

副擬大領外正七位下依知秦公名手

擬少領從八位上依知秦公○下略

〔貞觀三年近江國愛智郡大國鄕田劵〕愛智郡大國鄕戸主依智秦公福　解申依正稅常土賣買墾田

立劵文事

十三條十一里一川原田壹段佰捌拾步　四方直稻陸拾束

右件墾田正稅稻陸拾束充價直、限永年、辛沽□□藥師安麿既訖、望請依式立劵文、如件、仍勒賣買兩人署名、以解、

保○子○眞野戸雪麿
從八位上秦前繼麿
私部
領秦人　乙麿
調首　淨以
丁事調首　大野
秦人福足
鄉○長○服直
判之
擬大領外正七位下依知秦公名守
擬少領從八位上依知秦公吉繼
監无位秦公吉繼　主帳外少初位下曰佐首勝繼

〔類聚三代格 五〕太政官謹奏
割越前國江沼加賀二郡爲加賀國事〔准中國 ○中略〕
郡司鄉○長○任意侵漁民懷冤屈、〔○中略〕伏請別建一件國名曰加賀國者、〔○中略〕
弘仁十四年二月三日

〔古文書類纂 中解〕淳和天皇天長二年近江國愛智郡司解
愛智郡司解　申百姓賣買墾田立券文事
合參段佰貳拾步　直稻壹佰貳拾束
十二條九里六新治田者〔今壹二一段二百步〕
右得管大國鄉○長○依智　福益解狀偁、戸主若湯坐連成繼戸口大藏秦公廣吉女申云、已墾田矣、限

〔延喜式主計二十五〕凡勘大帳者、皆據去年帳勘其出入、○中略其依符所免爲符損、八位庶子(中略)領長、坊鄕牧長帳、驛長、

〔日本書紀孝德二十五〕大化二年正月甲子朔、宣改新之詔曰、○中略其三曰、○中略凡五十戸爲里、每里置長一人、掌按撿戸口、課殖農桑、禁察非違、催驅賦役、

白雉三年四月、是月造戸籍、凡五十戸爲里、每里長一人、

〔續日本紀元明六〕和銅七年二月辛卯、詔曰、人足衣食、共知禮節、身苦貧窮、競爲奸詐、宜今輸絁絲綿布調國等、調庸以外、每人儲絲一斤、綿二斤、布六段、次丁二年十五以上、六十五以下者、以資產業、无使苦乏、國郡能加監察、務依斂儲者、加考一等、或里長者免當年調、若以虛妄、顯稱國郡司卽解見任、里長徵調止掌、

〔東大寺正倉院文書二十〕下總國葛飾郡大嶋鄕戸籍

養老五年○中略

戸鄕長孔王部志己夫、年伍拾捌歲、

〔出雲風土記上〕右件鄕字者、依靈龜元年式、改里爲鄕、

〔弘仁十一年近江國愛智郡蚊野鄕田券〕蚊野鄕戸主從八位下依知秦公成人解申依正稅稻賣買墾田券文事

十二條八長田里廿七廣田口切田壹段

右件墾田用正稅稻柒拾貳束充價直、切常土與吏大國鄕戸主勳九等依知秦公万歲麻呂既訖、望請依式立券文、如前、仍注事狀以解、

弘仁十一年十二月五日

墾田主依知秦公富吉女右手

戸主從八位下依知秦公成人

弟依知秦公魚成

保長從八位下秦人圓行

金剛寺住僧等解申請鎌倉殿御裁定事、

請被特蒙慈恩停止古庄郷司近藤太致非例濫行苛法難堪子細狀、○中略

治承六年○壽永元年五月日　金剛寺住僧等

郷長

〔令義解二戸〕凡戸以五十戸爲里、謂若満六十戸者、割十戸立一里、置長一人、其不満十家者、隷入大村、不須別置也、每里置長一人、掌按検戸口、課殖農桑、禁察非違、催駈賦役、若山谷阻險、地遠人稀之處、謂縦山谷阻險、而人居稠密、或雖人居稀疎、而地理平坦者、並不在此限也、随便量置、謂若満十戸者、依上法立別里、若不満者令伍相保、附於大村也、

〔令義解二戸〕凡坊令○中略里長坊長、並取白丁清正強幹者充、若當里當坊無人、聽於比里比坊簡用、若八位以下情願者聽、

〔通典三食貨〕大唐令、諸戸以百戸爲里、五里爲郷、四家爲鄰、五家爲保、每里置正一人、若山谷阻險、地遠人稀之處、聽隨便量置、掌按比戸口、課植農桑、檢察非違、催駈賦役、在邑居者爲坊、別置正一人、掌坊門管鑰督察姦非、並免其課役、在田野者爲村、別置村正一人、其村満百家、增置一人、掌同坊正、其村居如満十家者、隷入大村、不須別置村正、○中略諸里正縣司選勲官六品以下、白丁清平強幹者充、其次爲坊正、若當里無人、聽於比鄰里簡用、其村正取白丁充、無人處里正等並通取十八以上中男殘疾等充、

〔萬葉集五〕貧窮問答歌一首幷短歌○中略

伊等乃伎提、短物乎、端伎流等、云之如、楚取、五十戸良我許惠波、寢屋度麻低、來立呼比奴、可久婆可里、須部奈伎物能可、世間乃道、

〔萬葉集略解五〕貧窮問答歌一首幷短歌○中略

五十戸良、此良は長の字の誤也、戸令云、凡戸以五十戸爲里、每里置長一人といへるをもてさとをさとよめり、又いへをさとも訓べし、

〔令義解三賦役〕凡○中略里長○中略免徭役、

〔續日本紀十一聖武〕天平五年六月丁酉、多。褹。嶋。熊。毛。郡。大。領。外從七位下安志託等十一人、賜多褹後國造姓、益救郡大領外從六位下加理伽等一百三十六人、多褹直能滿郡少領外從八位上粟麻呂等九百六十九人因居賜直姓、

鄉司

大寶令ノ制、五十戶ヲ一里ト爲シ、里每ニ里長一人アリ、靈龜元年、里ヲ改メテ鄉ト爲ス、是ニ於テ鄉長又鄉令トモ云フト稱ス、其人ハ白丁ヲ取リ、其職ハ郡司ノ下ニ居リテ、戶口ヲ撿按シ、賦役ヲ催驅スルニ在リ、此他鄉ニハ鄉刀禰アリ、鄉目代アリ、總稱シテ鄉司ト云フ、又村ニハ村長アリ、村刀禰アリ、保ニ保司アルコトハ、既ニ左右京職篇ニ言ヘリ

〔今昔物語十一〕德道聖人始建長谷寺語第卅一
今昔、世ノ中ニ大水出タリケル時、近江國高島ノ郡ノ前ニ大ナル木流テ出寄タリケリ、鄉ノ人有テ、其木ノ端ヲ伐取タルニ、人ノ家燒ヌ、○中略然ル間ニ、○中略大和國葛木ノ下ノ郡ノ當麻ノ鄉ニ曳付ツ、然レドモ心ノ內ノ願ヲ不遂シテ、其木ヲ久ク置タル間ニ其人死ヌ、然レバ此ノ木亦其所ニシテ徒ニ八十餘年ヲ經タリ、其程其鄉ニ病發テ、首ヲ擧テ病ミ痛ム者多カリ、是ニ依テ亦此ノ木ノ故也ト云テ、郡司。鄉司。等集テ云ク、故某ガ无由キ木ヲ他國ヨリ曳來テ、其ニ依テ病發レル也、然レバ其子宮丸ヲ召出テ勘責スト云ヘドモ、宮丸一人シテ此木ヲ難取棄シ、更ニ可爲キ樣ナケレバ、○下略

〔吾妻鏡二〕養和二年○壽永元年五月廿五日甲午、相模國金剛寺住侶等捧解狀、參營中、是所訴申古庄近藤太非法也、彼狀被召出御前、相鹿大夫先生讀申之、

タリケル也ケリト心得テ可咲ク思ヘドモ、可云キ人モ无カリケレバ、供養シ畢テ、山ニ登テ、勇タル小僧共ノ中ニ、田樂ノ事ヲ語レバ、トヨミテ咲ケル事无限シ、供奉本ヨリ物云ノ上手ナリケレバ、何カニ可咲ク語リケム、賤ノ田舍人ナレドモ、皆然樣ノ事ハ知タル者ヲ、彼ノ郡司ハ无下也ケル奴カナトゾ、此レヲ聞ク人、皆謗リ咲ケルトナム語リ傳ヘタルトヤ、

〔古事談三僧行〕慈惠大僧正ハ、近江國淺井郡人也、叡山戒壇ヲ依不合期、人夫エツカレザリケル比、淺井郡司ハ相親之上、師壇ニテ、修佛事之間、此僧正ヲ奉請、僧膳キコエムトテ、前ニテ大豆ヲイリテ酢ヲ掛ケルヲ、僧正ナニシニ酢ヲバ懸哉ト被問ケレバ、郡司云、煖付懸酢ツレバ、酢ムツカリトテ、ニガミテヨクハサマレ候也、不然ハスベリテハサマレヌ也云々、僧正イカナリトモナジカハハサマヌ樣ハアルベキ、投遣トモハサミ食テムトアリケレバ、爭デサル事侍ベキトテ、アラガヒニケリ、僧正勝申ナバ、不可有他事、戒壇ヲ築テ給ヘト有ケレバ、安事トテ、イリマメヲ、投遣々々、一間許ノキテ居給テ、一度モ不落ハサミヨソヒケリ、見物アサマズト云事ナシ、柚ノサチノ只今シボリイダシタルヲ取寄テ、投遣タリケルヲゾハサミスベラカシ給タリケレド、オトシモハテズ、又ハサミトヾメ給テケリ、郡司一家廣者ナリケレバ、引卒人數不日戒壇ヲ築テケリ、

〔今昔物語三十一〕中務大輔娘成近江郡司婢語第四

今昔、中務ノ大輔□ノ□ト云フ人有ケリ、男子ハ无クテ、娘只獨ノミゾ有ケル、○中略男遂ニ去ニケリ、然レバ女獨リニテ彌ヨ哀レニ心細キ事无限シ、○中略然レバ樣惡ク壞タル寢殿ノ片角ニ幽ニテゾ獨リ居タリケル、其ノ寢殿ノ片端ニ、年老タル尼ノ宿テ住ケルガ、○中略此ノ尼ノ許ニ、近江國ヨリ、長宿直ト云フ事ニ當テ、郡司ノ子ナル若キ男ノ上リタリケルガ宿テ、○中略其ノ後男馴睦ビテ不見習ヌ心ニ難去ク思テ、近江ヘ將下ケレバ、女モ今ハ何カハセムト思テ、具シテ下ニケリ、

〔貞信公記〕承平二年十二月十日、有內印、左大辨來定、今日可被行悠紀主基國郡司祿事、即仰、

ナル法師二人、亦馬ニ乘セテ前ニ打立タルニ、今十餘疋許ノ馬ニ、此ノ白裝束シタル男共ハラハラト乘ヌ、此男共ハ迎ヘニ遣セタル也ケリト、其ノ時ニナム心得ケル、日ノ高ク成ヌレバ、馬ヲ早メテ急ギ行クニ、此ノ白裝束ノ男共ノ馬ニ乘タル、或ハヒタ黑ナル田樂ヲ腹ニ結付テ、袪ヨリ肱ヲ取出シテ、左右ノ手ニ桴ヲ持タリ、或ハ笛ヲ吹キ高拍子ヲ突口ヲ突キ朳ヲ差テ、樣々ノ田樂ヲ二ッ物三ッ物ニ儲テ打喤リ吹キツレツヽ狂フ事无限シ、供奉此レヲ見テ、此ハ何カニ爲ル事ニカ有ラムト思ヘドモ、口テ否不聞ズ、而ル間、此ノ田樂ノ奴原、或ハ馬ノ前ニ打立チ、或ハ馬ノ後ニ有リ、或ハ喬手ニ立テ打行ク、然レバ供奉今日此ノ郷ノ御靈會ニヤ有ラムト思ヘバ、極カリケル折ニシモ來リ會テ、此ル奴原ノ中ニ具シテ行クハ物狂ハシキ態カナ、不意ニ知リタル人ヤ會ハムト思ヘバ、袖ヲ以テ顏ヲツプト隱シテ行クニ、郡司ガ家漸ク近ク見ユ、家ノ門ノ前ニ百千ノ人立舉テ見ル、疾ク急テ行カムト爲ルニ、此ノ田樂ノ奴原、供奉ニ向合テ、鼓ヲ打テ向ヒ口ヲ笠ノ鋲ニ突懸ケ朳ヲ捧テ頭ノ上ニ招キ、此シツヽ行モ不遣セズ、腹立シキ事无限シ、辛クシテ郡司ガ門ノ許ニ行着テ、馬ヨリ下ムトスル程ニ、郡司祖子出來テ、左右ノ馬ノ口ヲ取テ、乘セ乍ラ家ノ内ニ傳キ入ルレバ、供奉此ナ爲ソ、只其ニテ下セト云ヘドモ、穴忝ナヤト云テ、耳ニモ不聞入ズ、然テ此ノ田樂ノ奴原ハ、馬ノ左右ニ烈シツヽ、次キテ遊ビテ入ル、郡司吉ク仕レ己等ト云ヘド、鼓打ツ者三人馬ノ前ニ向テ、乙乙仰張リテ極ク打行ケバ、供奉侘テ疾ク下シテハ吉カルベキニ、此ク狂ヒ行ケバ、馬ヲモ不歩セズシテ、ノト〱ト馬ヲ歩スル程ニ、家ノ内市ヲ成シテ喤ル、辛クシテ廊ノ有ル妻ニ馬ヲ押寄セタレバ、喜ビ乍ラ下ヌ、口タル所ニ居ヱツ、先ヅ心モ不得ヌ事ナレバ、供奉、郡司ニ彼ノ郡司ノ主聞給ヘ、此ノ田樂ハ何ノ料ニテ爲サセ給フゾト問ヘバ、郡司ガ云ク、西塔ニ參タリシニ、懃ニ爲ル功德ニハ、樂ヲナム爲ルゾト被仰シカバ、儲テ候フ也、其レニ講師ヲバ樂ヲシテナム迎ヘ可奉キト、人ノ申セバ、參ラセテ候ヒツル也ト、供奉其折ニゾ、此奴ハ田樂ヲ以テ樂トハ知

其ノ郡ノ大領宮道ノ彌益トナム云ヒケル、

〔今昔物語二十八〕近江國矢馳郡司堂供養田樂語第七

今昔、比叡ノ山ノ西塔ニ住ケル敎圓座主ト云フ學生有ケリ、物可咲ク云テ人咲ハスル說經敎化ヲナムシケル、其レガ未ダ若クシテ供奉ト云テ西塔ニ有ケル時ニ、近江國□□ノ郡ニ矢馳ト云フ所ニ有ケル郡司ノ男、年來極ク此ノ人ニ志有テ、山ノ不合ノ事共ナド常ニ訪ケレバ、敎圓若キ程ニテ貧キ身ナレバ、喜ク思テ過ケル程ニ、彼ノ郡司ノ男態ト來タリ、何事ニ來ツルゾト問、郡司ノ男ノ云ク、年來ノ願ニ依テ、佛堂ヲナム造リ奉リテ候フヲ、此レ懃ニ吉ク供養シ奉ラムトナム思ヒ給ウル、年來ノ睦ニ御マシナムヤ、何ニ亦懃ニ可仕カラム事共ヲモ被仰レムニ隨テ構可候キ也、年罷老テ候ヘバ、偏ニ後世ノ爲ニト思テナム候フト云ヘバ、敎圓諧テム事ハ糸安キ事也、其ノ日ノ未ダ朝メテ三津ノ邊ニ迎ヘノ船ヲ遣セ給ヘ、亦矢馳ノ津ニ馬二三疋ニ鞍置テ遣セ可給也、然ラバ功德懃ニ爲ルニハ、舞樂ヲ以テコソハ供養スレ、此ハ皆極樂天上ノ樣也、但シ其レハ樂人ナド呼ビ下スハ大事ナレバ、否呼ビ不給ジナド云ヘバ、郡司ガ云ク、樂人ハ己ガ住候フ津ニ、皆候ヘバ、樂仕ラム事ハ事ニモ不候ズ、安キ事ニ候フ、然レバ樂ヲ可仕キニコソ候フナレト云ヘバ、敎圓供奉ノ云ク、然ダニアラバ極タル功德ニ成ナム、疾々ク返テ其ノ日ノ曉ニ、三津ノ邊ニ行テ船ヲ可待キ也ト云ヘバ、郡司喜テ承ハリヌ、御船ヲ疾ク參セムト云テ去ヌ、其ノ日ニ成テ曉ニ未ダ暗キニ、西塔ヨリ忩ギ下テ三津ノ邊ニ白々ラト明ル程ニ行タレバ、船ハ兼テヨリ儲タリケレバ乘テ行ケルニ、矢馳ニ渡ル程一時許ノ渡リナレバ、巳ノ時許ニゾ津ニ渡リ着タリケル、見レバ、前ニハ鞍置タル馬三疋ト云ヒシカド、十餘疋許引立タリ、亦白裝束シタル男共十餘人許立並タリ、凡ソ樣々ノ下人共四五十人許村々ニ立テリ、供奉此レハ物見ル者共ニヤ有ラム、何ヲ見ゾト思テ、東西ヲ見廻セバ露可見キ物モ只今不見エズ、船寄セツレバ、下テ引キ寄セタル馬ニ乘ヌ、其

ノ才極テ賢ク御ケレドモ、御年若クシテ失給ヒニケリ、其ノ御子數御ケリ、兄ヲバ長良ノ中納言ト申ケリ、次ヲバ良房ノ太政大臣ト申ケリ、次ヲバ良相ノ左大臣ト申ケリ、次ヲバ内舍人良門ト申ケリ、昔ハ此ク止事无キ人モ、初官ニハ内舍人ニゾ成ケル、而ルニ其ノ良門ノ内舍人ノ御子ニ高藤ト申ス人御ケリ、幼ク御ケル時ヨリ鷹ヲナム好ミ給ケル、父ノ内舍人モ鷹ヲ好ミ給ヒケレバ、此君モ傳ヘテ好ミ給ヘルナルベシ、而ル間年十五六歳許ノ程ニ、九月許ノ比、此ノ君鷹狩ニ出給ヒニケリ、南山階ト云フ所渚ノ山ノ程ヲ仕ヒ行キ給ケルニ、申時許ニ、俄ニ掻暗ガリテ、雲降リ、大キニ風吹キ、雷電霹靂シケレバ、共ノ者共モ各馳散テ、行キ分レテ、雨宿ヲセムト、皆ナ向タル方ニ行ヌ、主ノ君ハ、西ノ山邊ニ人ノ家ノ有ケルト見付テ、馬ヲ走セテ行ク、○中略而ル間日モ漸ク暮ヌ、何ニセムト心細ク怖シク思シテ居給ヘルニ、家ノ後ノ方ヨリ、青鈍ノ狩衣袴着タル男ノ年卌餘許ナル出來テ云ク、○中略雨ノ降ラム程ハ此ニコソ御マサメトテ、馬飼男ノ居タル所ニ寄テ、此ハ誰ガ御スゾト問ヘバ、然々ノ人ノ御マス也ト、舍人ノ男答フレバ、家主ノ男此ヲ聞騒テ、家ノ内ニ入テ、家ヲ□ヒ火燈シナドシテ、暫許リ有テ出來テ云ク、賤ノ樣ニ候フ所ナレドモ、此テハ何テカ御サム、雨ノ止ムラム程ハ内ニコソ御サメ、亦御衣モ痛ク濡サセ御マシタリ、炮干ナドシテコソ奉ラメ、御馬モ草食セ候ハム、彼ノ後ノ方ニ引入レ候ハムト申セバ、賤ノ下衆ノ家ナレドモ、故故シクシテ可咲見レバ檜遣餘ヲ以テ天井ニシタリ、廻ニハ遣餘屛風ヲ立タリ、淨氣ナル高麗端ノ疊三四帖許敷タリ、苦シケレバ裝束解テ寄臥給タルニ、家主ノ男來テ、御狩衣指貫ナド炮干サムト云テ取テ入ヌ、暫許有テ、臥乍ラ見給ヘバ、庇ノ方ヨリ、遣戸ヲ開テ、年十三四許有ル若キ女ノ、薄色ノ衣一重濃キ袴着タルガ、扇ヲ指隱シテ、片手ニ高坏ヲ取テ出來タリ、恥ラヒテ、遠ク喬ミテ居タレバ、君此寄ト宣フ、和ラ居ザリ寄タルヲ見レバ、頭ツキ細ヤカニ、額ツキ髮ノ懸リ、此樣ノ者ノ子ト不見ズ、極メテ美麗ニ見ユ、○中略此ノ家主ノ男、何者ニカ有ラムト思テ、尋子問給ヒケレバ、

年來相憑侍リツル郡司某、依國勘被追國內之間、悲歎之至、極不便也、又非強罪科者、此法師ニ愚免候乎云々、亞相云、凡不及左右、左樣ニテ御座候ケレバ、率可思知之者ニコソ侍ナレトテ、ヤガテ被免之上、添給國恩之由成廳宣被奉了、先是ヲ令見テ悅バセ候ハシトテ、白地氣ニテ被立出テ、相具郡司入近邊小屋、脫袈裟衣等タヽミテ、其上ニ廳宣ヲ置テキト出ル體ニテ、晦跡了、郡司心中殊哉、大納言モ委被尋聞ケリ、是モ玄賓僧都ノシワザニナン侍ケル、此大納言トハ殊師壇ニテ被座ケリ、

〔宇治拾遺物語 一〕これもいまはむかし、伴大納言善男は、佐渡國郡司が從者なり、彼國にて善男夢にみるやう、西大寺と東大寺とをまたげてたちたりと見て、妻の女にこのよしをかたる、めのいはく、そこのまたこそさかれんずらめとあはするに、善男おどろきてよしなきことをかたりてけるかなとおそれおもひて、主うの郡司が家へ行むかふ所に、郡司きはめたる相人也けるが、日來はさもせぬに、ことのほかに饗應して、わらふたとりいでむかひてめしのぼせければ、善男あやしみをなして我をすかしのぼせて、妻のいひつるやうにまたなどさかんずるやらむとおそれ思ほどに、郡司がいはく、汝やんごとなき高相の夢見てけり、それによしなき人にかたりてけり、かならず大位にはいたるとも、ことゆできてつみをかうぶらんぞといふ、主かるあひだ善男縁につきて上京して大納言にいたる、されども犯罪をかうぶる、郡司が詞にたがはず、

○按ズルニ、公卿補任承和十五年ノ下ニ、參議從四位下伴善男ハ、正四位下古麿曾孫、從五下守左少辨繼人孫、故參木右大辨從四上行勘解由長官、陸奧出羽按察使國道五男トアレバ、宇治拾遺ノ說ハ誤ナルガ如シ、

〔今昔物語 二十二〕高藤內大臣語第七
今昔、閑院ノ右大臣ト申ス人御マシケリ、御名ヲバ冬嗣トナム申ケル、世ノ思エ糸止事无シテ、身

不治之由、如聞國司者无道爲宗、郡司者正理爲力、其由何者、縱郡司武芝、年來恪勤公務、有譽无謗、苟武芝治郡之名、頗聽國內、撫育之方、普在民家、代々國宰、不求郡中之欠負、往々刺史、更无違期之譴責、而件權守正任未到之間、推擬入部者、武芝檢案內、此國爲承前之例、正任以前輙不入部之色者、國司偏稱郡司之无禮、恣發兵仗、押而入部矣、武芝爲恐公事、暫匿山野、如案襲來武芝之所々舍宅緣邊之民家、掃底搜取、所遺之舍宅、檢封弃去也、凡見件守介行事、主則挾仲和之行、(花陽國志曰、仲和者爲太守、重賦貪財、漁國內者也、)從則懷草竊之心、如箸之主、合眼而成破骨出膏之計、如蟻之從、分手而勵盜財隱運之思、粗見國內凋弊、平民可損、仍國書生等、尋越後國之風、新造不治悔過一卷、落於廳前事、皆分明於此國郡也、武芝已雖帶郡司之職、本自無公損之聆、所被虜掠之私物、可返請之由、屢令覺事、而曾无辨糺之政、頻致合戰之構、

〔古事談 三 僧行〕伊賀國郡司之許ニ、賤流浪法師一人出來被仕ケリ、苅草飼馬經兩三年之間、郡司不慮蒙國勘被追却國中、緣者境界集訪、悲歎無比類、相傳之所領所從モ有其數、忽打弃テ赴人國事、實不可疎(○不可疎、一本作可淋泣、)妻子眷屬悲哀啼泣、爰ニ此草苅法師、雖問事之子細、而依不人數、無返答之人、狂戀切成不審之間、或下女一人愁語事之子細、諸聞了、法師云、雖不及己等之歟、只今不可及御出立歟、不叶マデモ先有御上京、何ケ度モ被陳申子細、其後不叶時コソ候ハメ、國司御邊ニハオロオロ事之緣侍リ、可申試云々、郡司此事ヲ憑トシハナケレドモ、依無心之置所、相具法師、忽上洛、其時此國ハ大納言ト申ケル人ノ給ニテゾアリケル、件邊近ク成テ、法師云、人ヲ尋ト思、此スガタニテハアヤシカリヌベシ、袈裟衣一ツ可被借出哉、卽借テ着セタリケレバ、(○卽以下、一本作郡司ヤガテ借テ出シケレバ卽打キテ、)大納言御許ヘ歩入之間、侍所ニ並居タル輩、暫ハアヤシゲニ思テ、能見知之後、皆下跪于庭上、郡司ハ門外ニ留テ淺猿ト見居、亭主聞此由、涌躍請入、對面有、先年來ハ何所ニ何樣ニテ御座候ヒクルゾヤ、公ヨリ始奉テ無不奉惜人ナド被示之間、如此事ハ今閑ニ可令申、先有可申事所參入也、伊賀國ニ

待遇

〔延喜式十八式部〕凡畿内郡司、六年成選、

〔令集解十七選敍〕釋云、慶雲三年格、選郡司軍團、皆以八考爲限、

〔令義解三賦役〕凡〇中略主政主帳、〇中略免徭役、

〔令義解六儀制〕凡郡司遇本國司者、皆下馬、〇義解略唯五位非同位以上者不下、謂揖同位者、不論正從上下、共初位國司遇五位郡司者、不下、無位史生亦同也、

〔類聚三代格七〕勅、諸國郡司五位以上相逢當國主典以上者、不問貴賤皆悉下馬、如有官人於本部逢國司者、同位以下必須下馬、不然者相揖而過、其有故犯者、内外五位以上錄名奏聞、六位以下決杖六十、不得蔭贖、

神龜五年三月廿八日〇令集解作廿六日

郡司家口

〔延喜式二十二民部〕凡郡司戸者、不得編附他口、其子弟非可別籍者、撿實聽之、

〔續日本紀二十三淳仁〕天平寶字五年三月丙戌朔、乾政官奏曰、外六位已下不在蔭親之限、由此諸國郡司承家者、已無官路、潛抱憂嗟、朝議平章、別許少領已上嫡子出身、遂使堂構無墜、永世繼宗、但貫兵衛者、更不得重奏可、

〔續日本紀三十二光仁〕寶龜三年十月辛酉、先是天平寶字五年三月十日格、別聽諸國郡司少領已上嫡子出身、〇中略至是並停此制、

雜載

〔三代實錄一清和〕天安二年十二月八日乙未、太政官論奏曰、對馬島下縣郡擬大領外少初位下直氏成、上縣郡擬少領無位直仁德等、率郡内百姓首從十七人、發兵射殺守正七位下立野連正岑及從者榎本成岑等、罪皆當斬、詔減死一等、處之遠流、須去十月十日以前依式奏獻、而奉葬文德天皇未滿三十日、亦皇太子未即位、故延而行之、非稽也、

〔將門記〕然間以去承平八年春二月中、武藏守興世王、介源經基、與足立郡司判官代武藏武芝共各爭

考限

清謹勤公、勘當明審爲上、居官不怠、執事無私爲中、不勤其職、數有愆犯爲下、背公向私、貪濁有狀爲下下、每年對定、具簿上省、其考下下者解所任、

〔延喜式民部二十三〕凡京職諸國郡司功過帳、主計主稅勘定送省、畿內十月二日、外國十一月二日申官、

〔延喜式式部十八〕凡郡司補任之後、二年頻不附考帳者解任、

〔續日本紀五元明〕和銅五年五月甲申、太政官奏偁、郡司有能、繁殖戶口、增益調庸、勸課農桑、人少匱乏、禁斷逋逃、肅清盜賊、籍帳皆實、戶口無遺、割斷合理、獄訟無寃、在職匪懈、立身清愼、其一居官貪濁、處事不平、職用旣闕、公務不擧、侵沒百姓、請託公施、肆行奸猾、以求名官、田疇不開、減闕租調、籍帳多虛、口丁無實、逋逃在境、畋遊無度、其二又百姓精務農桑、產業日長、助養窮乏、存活獨惸、孝悌聞閭、材識堪幹、其三若有郡司及百姓准上三條、有合三句以上者、國司具狀、附朝集使擧聞、奏可之、

〔類聚三代格七〕太政官謹奏

郡司初擬三年後乃預銓例事

右中納言從三位兼行春宮太夫左衞門督陸奧出羽按察使良峰朝臣安世解偁、謹案太政官去弘仁三年八月五日符偁、自今以後、銓擬郡司、一依國定、若選非其人、政績无驗、則署帳之官、咸解見任、永不敍用、以懲將來者、知人之難、古人猶病、吏非其人、何無謬擧、若據行此格、自陷刑罰、若懼罪不選、徒失人功、望請先申初擬、歷試雜務、得可底績、銓擬言上、仍於所司計會功過、始預見任、然則國宰免濫選之責、郡司絕僥倖之望、但先盡譜第、後及藝業、仍前詔者、政無膠柱、事有沿革、觀物裁成、守株不可、臣等商量、所申合宜、伏聽天裁、謹以申聞、謹奏、聞、

弘仁十三年十二月十八日

〔令義解四選敍〕凡敍郡司軍團、皆以十考爲限、十考中進一階、五考上五考中進二階、十考上進三階敍、禀有上考下考者准折並同八考例、

〔令義解（四 選敍）〕凡郡司取性識清廉堪時務者、爲大領少領、強幹聰敏工書計者、爲主政主帳、其大領外從八位上、少領外從八位下敍之、（其大領少領、才用同者、先取國造、）

〔延喜式（十八 式部）〕凡敍位郡領之日、丞讀名簿、授外記、外記執之進大臣、

〔續日本紀（十 聖武）〕天平元年四月乙丑、筑前國宗形郡大領外從七位上宗形朝臣鳥麻呂、奏可供奉神齋之狀、授外從五位下、賜物有數、

〔類聚三代格（七）〕勅諸國郡司、主政已下初任之日、敍位一級、自今已後爲恆例、

天平神護三年五月廿一日

〔續日本紀（四十 桓武）〕延曆九年十二月庚戌、授常陸國信太郡大領外從五位下物部志太連大成外從五位上、新治郡大領外正六位上新治直大直外從五位下、播磨國明石郡大領外正八位上葛江我孫馬養、下總國猨島郡主帳正八位上孔王部山麻呂、並外正六位上、是四人或居官不怠、頗著効績、或以私物、賑恤所部貧乏之徒、因而得濟、故有此授焉、

〔類聚國史（九十九 職官）〕天長四年正月甲申、詔曰、天皇（我）詔旨（眞止末）勅大命（乎）、衆聞食（閉止）宣、巡察使（乃）撿（氏）奏賜（閉流）國々（乃）郡司等中（爾）、其仕奉狀（乃）隨（爾）勤（美）譽（志美奈毛）冠位上賜（比）治賜（波久止）勅天皇（我）大命（乎）、衆聞食（閉止）宣、授正六位上高向史公守（〇中略）外從五位下、

〔令義解（四 考課）〕凡國司、毎年量郡司行能功過、立四等考第、清謹勤公、勘當明審之類（謂郡司所行、合居上第者、非唯此事、觸類繁多、故曰之類、若條餘行、雖得上第、取此八字、以爲最名也、）爲上、居官不怠、執事無私之類爲中、不勤其職、數有愆犯之類爲下、背公向私、貪濁有狀之類（謂二事不相須、有一者即爲下々也、）爲下々、（〇中略）毎年國司皆考、對定訖具記附朝集使送省、其下々考者當年校定即解、（謂依上條、待符報即解、此條亦同、此文承於送省之下、即知二省校定申官、即解之也、）

〔唐六典（二 吏部）〕考功郎中之職掌（〇中略）其流外官、本司量其行能功過、立四等考第而勉進之、

解任

叙任　初任叙位　賞功叙位

〔類聚三代格 七〕太政官符

右奉勅、諸國郡司不善、不得在終身之任、

天平十一年七月十五日

〔延喜式 十八式部〕凡郡司（○中略）其病患年老及致仕者、國司解却、具狀申官、更不責手實、

〔朝野群載 二十二諸國雜事〕國務條々事

一不可輙解任郡司雜色人事

若有雜怠、重可召勘、兼加諷諫、但至于重犯、不在此限、

〔續日本紀 八元正〕養老二年四月癸酉、太政官處分、凡主政主帳者、官之判補、出身灼然、而以理解任、更從白丁、前勞徒廢、後苦實多、於義商量、其違道理、宜依出身之法、雖解見任、猶上國府、令續其勞、內外散位、仍免雜徭、

〔令集解 十七選敍〕養老四年、官處分郡司少領以上病患幷年老及致仕等、國司解任申送者、別取手書幷狀申送之、

〔延喜式 十八式部〕凡郡司遭父母喪者、服闋之後、申官復任、若三年以上不申復任、便補其替、權任之輩、亦得復任、

凡畿內郡司患解、服解、侍解等、聽復任本職、

〔類聚三代格 七〕勅、服解郡司理須復任、不可停前人擬他人、但被百姓訴、及受財枉法、如此之類不得復任、其主政主帳、身才衰劣、意涉奸僞、縱非被百姓訴、及受財枉法、不得復任、

寶龜六年四月廿三日（○廿三日、令集解作廿二日、）

〔日本書紀 三十持統〕八年三月甲午、詔曰、凡以無位人任郡司者、以進廣貳授大領、以進大參授少領、

任限

太政官符參河國司 内印

八名郡主帳外從八位上若竿部首統忠 外少初位下參河吉種孝解替

右去年二月十三日補任如件、國宜承知依例任用、符到奉行、

辨　　史

永延二年七月廿三日

太政官符尾張國司

丹羽郡大領外正六位上椋橋宿禰惟清

右去年十二月卅日補任如件、國宜承知依例任用、符到奉行、

正四位下行左中辨藤原朝臣　　正五位下行左大史兼主計權助小槻宿禰

長元四年二月廿三日

〔朝野群載 二十二 諸國雜事〕太政官符　伊豫國司

濃滿郡大領正六位上中原朝臣弘忠

右去年十二月廿八日補任如件、國宜承知依例任用、符到奉行、

修理右宮城使從四位上左中辨源朝臣

修理左宮城判官正五位下行主計頭兼左大史竿博士備後介小槻宿禰

康和二年二月廿六日

〔續日本紀 六 元明〕和銅六年五月己巳、制、夫郡司大少領以終身爲限、非遷代之任、而不善國司情有愛憎、以非爲是、强云致仕、奪理解却、自今以後、不得更然、若齒及縱心、氣力尫弱、筋骨衰耗、神識迷亂、又久沈重病、起居不〇不下恐有脫字漸發狂言、無益時務、如此之類、披訴心素、歸田養命、於理合聽、宜具得手書、陳牒所司、待報處分、擇替補、

二萬人、天皇大悅、名二此邑一曰二二萬鄕一、後改曰二邇磨一、其後天皇崩二於筑紫行宮一、終不レ遣二此軍一、然則二萬兵士、彌可二蕃息一、而天平神護年中、右大臣吉備朝臣、以二大臣一兼二本郡大領一、試計二此鄕戶口一、纔有二課丁千九百餘人一、○中略

延喜十四年四月廿八日、從四位上行式部大輔臣三善朝臣淸行上二封事一、

〔十訓抄 十〕小一條左大將濟時卿の六代にあたりて、宗綱○宗綱、古事談作二宗形一、宮內卿師綱と云人ありけり、白川院に仕へけるがさせる才幹はなかりけれ共、偏に奉公さきとして私をかへりみぬ忠臣なるによりて、近く召つかはれけり、其ゑるしにや有けん、陸奧守になされにければ、彼國に下て撿注を行ひけるに、信夫の郡司にて、大庄司季春と云者是を妨けゝり、國司宣旨を帶して、をさへて遂んとするほどに、季春ふせぎとゞめんがために、試に兵むかふる間、合戰に及て、國司方に人あまた打れにけり、國司大にいかりをなして、事由を在國司基衡にふれけり、

〔古事談 四勇士〕宗形宮內卿入道師綱陸奧守ニテ下向之時、基衡押二領一國一、如レ无二國司威一、仍奏二聞事由一、下二宣旨一、擬レ撿二注國中公田一之處、忍郡者基衡藏テ先々不レ入二國使一、而今度任二宣旨一擬二撿注一之間、基衡件。郡。地頭大庄司季春ニ合レ心テ禦レ之、國司猶帶二宣旨一推入之間、已放レ矢及二合戰一了、

以郡司爲年給

〔北山抄 六〕諸國大少領事

一分代申レ之、副レ銓二擬國解一、所レ申也、令レ勘二一分給不一、後給二式部一、有下超二次例一云々、可レ給二他色宣旨一、

任符

〔類聚符宣抄 七〕太政官符伊豆國司　內　他同レ之

田方郡少領外從七位上伊豆直厚正

右去五月九日補任如レ件、國宜二承知依レ例任用一、符到奉行、

辨　史

永延二年閏五月十九日

應以衞府舍人任主政主帳事

右被右大臣宣偁、奉勅、衞府舍人係望軍毅、今廢兵士、其望已絕、若有巧書竿者、宜用主政主帳、

延曆十四年五月九日

〔類聚三代格七〕太政官符

應解却郡司所帶左右近衞門部兵衞等事

右百里之任、委務所繫、而或郡司偏稱宿衞、有妨公事、准之政途、理不可然者、中納言兼右近衞大將從三位行春宮大夫藤原朝臣時平宣、奉勅、宜不論異能無才、且解却且言上、但擬用之輩、隨國司申、登時解退、會不停滯、適令分憂之吏、頗得施治之便、

寛平六年十一月十一日

〔類聚三代格七〕太政官符

應停筑前國宗像郡大領兼帶宗像神主事

右得大宰府解偁、當郡大領補任之日、例兼神主、即叙五位、而今准去延曆十七年三月十六日勅、諸第之選、永從停廢、擢用才能、具有條目、大領兼神主外從五位下宗像朝臣池作、十七年二月廿四日卒去、自爾以來、頻闕供祭、歷試才能、未得其人、又案神祇官去延曆七年二月廿二日符偁、自今以後、簡擇彼氏之中、潔淸廉貞堪祭事者、補任神主、限以六年相替者、然則神主之任、既有其限、假使有才堪理郡兼帶神主、居終身之職、兼六年之任、事不穩便、謹請官裁者、右大臣宣偁、奉勅、郡司神主職掌各別、莫令郡司兼帶神主、

延曆十九年十二月四日

〔本朝文粹二〕意見封事、意見十二箇條　善相公淸行

天智天皇爲皇太子攝政、從行路宿下道郡、○備中見一鄉戶邑甚盛、天皇下詔、試徵此鄉軍士、即得勝兵

〔三代實錄三十三陽成〕元慶二年五月七日壬寅、公卿於太政官曹司廳任諸國銓擬郡司、策命如常、

〔貞信公記〕延喜十一年七月十七日、郡司召、　十四年六月廿九日、任郡司、　十九年六月廿八日、郡司召定、

延長五年七月廿八日郡司召、

〔日本紀略三村上〕天暦二年八月廿五日辛丑、請印郡司位記、　廿七日癸卯、郡司召、

擇人假任

〔類聚三代格七〕太政官符

應擇諸郡司中恪勤者令興治惠奈郡事

右得美濃國解偁、惠奈郡坂本驛與信濃國阿智驛相去七十四里、雲山疊重、路遠坂高、戴星早發、犯夜遲到、一驛之程、猶倍數驛、驛子負荷、常困遞送、寒節之中、道死者衆、朝廷悲之、殊降恩貸、永免件驛子租調、又去承和十一年、奉郡給三年之復、頻雖施無限之恩、徒費公家、曾無所息、前任良宰、雖展治方、猶難興復、況後任愚吏、更施何術、今撿彼郡課丁、總二百九十六人也、就中二百十五人爲驛子、八十一人輸調庸、比之諸郡、衰弊尤甚、望請擇諸郡司之中、富豪恪勤者、募以五位、期三年內、令治件郡、謹請官裁者、右大臣宣、奉勅依請、與奪之事、一准去天長元年八月廿日格、

齊衡二年正月廿八日

兼職

〔延喜式十八式部〕凡左右近衛長上十五年、番上廿年爲限、每年各二人、左右兵衛各一人、左右衛門隔年各一人、任諸國史生、其任郡領者、左右近衛各二人、左右近衛各一人、待本府移、勘錄譜第、奏擬文之日、副奏文進、諸衛同之但左右兵衛、通任郡領及主政帳、左右衛門若有移送、府別郡領一人、隔三年補之、並以佐已上共署文任之、

〔延喜式十八式部〕凡諸衛之人、銓擬郡司、向省之日、勿脫兵仗、

〔類聚三代格七〕太政官符

郡司召例

出、次外記式并召名簿入函、入自同戶、跪上卿後、奉召名於上卿、式置前案、即上卿取宣命給外記、外記入函退出、授宣命大夫、于時上卿喚召使二聲、召使三四許人列立廳角壇下、(南面立上)同音稱唯、一人着靴經西廳後、入自南屛西頭、就上版位、(南儀用西廳東庇砌)上卿宣、召式部省、召使磬折稱唯、出南門、召之、輔稱唯、丞一人參入、就上版位、上宣召(須)、丞稱唯、昇西面小階、經南庇砌上、入自西第三間、趨進上卿前、賜召名簿、退下同階、經西廳前、退出南門外、召計郡司了、即輔率丞錄參入、着東廳堂上座、次省掌率郡司等參入、列立南屛北頭了、丞錄下南面小階、列立東廳西面一階南端、(北面東上)次輔下自中階、立同南頭、(西面)次參議已上下正廳、降階時還向北各揖、階南面列立如常、(中納言參議用西階、大納言用中階、大臣東階)立定之後、宣命大夫徵行、就版位、宣制一段、(進退曲折、皆如常)郡司再拜、又宣制、郡司再拜舞踏、宣命大夫還本處、次上卿以下復本座、還昇度爲先上臈、次掃部寮立位記案、次式部史生一人捧位記函、置案上、錄出自本列、就案下、披筥取位記、召賜郡司、郡司稱唯進跪、錄賜位記、跪一拜退出、訖錄復函、還立本列、次史生參入、取函退出、次掃部寮撤案了、輔召錄、錄取之還着本座、須臾輿曰、召々、錄起座稱唯、下自南面小階、進版位、次省掌進立、錄後、錄依國次召之、每召省掌稱唯、召名了、錄還着本座、次省掌稱罷出、次錄以上并上卿以下退出、弁少納言外記史召使等、奉仕御前如常、

〔延喜式十九式部〕敍任主政帳

三月卅日以前、比校對試、亦同上例、訖聚其狀書、判其等第、造簿申卿、取決、即勘籍書位記請印、訖專當錄自書除目、錄史生抄歷名、預擇吉日、宣示雜掌、其日平旦、卿以下就座、錄召省掌授歷名、即於門外召計、訖輔命丞、丞命錄、令召省掌、如常儀、省掌稱唯就版位、丞命曰、率候郡司等參來、省掌稱唯退出、引郡司入屯、立屛前、輔命錄曰唱之、錄稱唯依次唱之、郡司稱唯、進就版位、每滿十人、省掌稱直立、如前儀唱畢、郡司以次退出、其位記者、亦令省掌分付、

〔日本紀略淳和〕天長九年五月甲午、中納言已下、參議已上、會太政官廳事、任郡司少領已上、

使就版宣制、郡司再拜舞踏、宣命使復本所、上卿以下輔以上、次第復座、掃部寮立案、史生置位記筥、錄就案下、召賜郡司畢、省掌率郡司退出、錄復本列、史生撤筥、掃部寮撤案、丞錄着座、輔召錄名、稱唯進立輔後、授召名、錄復本座、輔仰云、召錄起座就標下、省掌入立錄後、錄依次召郡司名、省掌稱唯、訖錄着本座、省掌退出、丞錄退出、次輔退出、次辨大夫退出、次上卿以下起座着侍從所、

承平十年六月十六日、依無式部輔幷代、唯有例務、停郡司召、

同月廿九日、外記惟直奉式幷召名、便取宣命入筥退出、須擎筥候、上卿入之、上卿幷外記共失也、

天慶二年內記不參、依舊例外記就內記所書宣命、加入式筥奉之云々、近例插文杖先奉之、此日有辨一人行歟、

同四年十月十六日、兩儀、丞於正廳砌上承召、年來省稱舊例、准他事者可謂違失、外記日記注失禮也、天暦元年、天德二年、同四年、立西廳、

同九年九條記、召名、河內國志紀郡大領淸內稻積、去十月依國司申犯過由、給追捕官符畢、仍召外記仰云、外記立上欄後云々、事依倉卒無便、返給召名、令除之、雖載召名、不可召立之由、可仰省宣命使少納言就西廳座、件座立右辨官座北邊、

天暦八年六月廿五日、大丞忠淳就下版、前例就上版云々、外記　承平五年私記云、就上版失也、或云、雖六位上座召者就上版云々、可尋之、式部式上、位記式云、召使就版位云々、少納言辨就前版、外記史就後版云云、案之前版是正版位也、五位就時六位就後版也、至于獨參可就前版歟、仍件日或召使幷丞只就版位云云、

〔九條年中行事四月〕廿日任郡司事補之郡司召、

先外記申一上、定日仰所司、文式云、補任郡司者、六月卅日爲限、當日上卿先着辨官廳東廊床子座、相待剋限、所司代官於此座申、臨剋限就西廊、此間式部丞一人任郡司召名簿副笏參入、於廳北屏西頭授外記、兩儀用西中門掖頭、文式云、當日未申政之前、除目簿進外記者、而近年必不早進、或政間未來、或丞催進之、了內記狹宣命文刺入廳後西第一戸、跪上卿後而奉之、捧空文刺退

録降立標、(去標西上)掃部寮同廊西廂立輔丞録床子、(輔床子立中階北間、丞録床子立南階南間也、)當日早旦、掃部寮設輔已下座於南門之內、(録已上座設門內東、史生座西方、)輔已下省掌已上、就座而候、辨官未申政之前、丞執除目簿、至廳事北屏下、付外記令執、進大臣、辨官申政了、內記以宣命文自西戸進大臣退去、次外記進儀式文、大臣以宣命文賜外記、外記受之退出、授宣命大夫、次大臣喚召使二聲、召使稱唯、出就版、大臣宣喚式部省、(辨官申政了時、)(輔已下於南階列立、北面西上、)召使稱唯退出、北向高音喚式部省、輔稱唯、丞代之參入就版、大臣宣喚之、丞稱唯、升自西側階、受簿退立本列、史生進丞後、受簿授輔、復本列、録賚名簿、喚省掌名、省掌稱唯、自列前磬折而立、於録前、受取簿、復本列、録命曰唱計、省掌稱唯、喚計訖、輔以下録已上參入、自屏東頭就東堂座、(輔升自中階、丞録升自南側階、)訖省掌率國郡司等入、自屏西頭列立、立定(國司郡司後列)丞録降立(北面東上)次輔降立、次辨大夫降立、(東面北上、中辨下自中階、少辨下自南階、)次參議已上降立、(南面東上、大臣用東階、大納言中階、參議已上西階、)訖辨大夫一人就宣命位、省掌率朝集使就版、(省掌立使東、使等東上列立、)宣命云々、國郡司共稱唯再拜、訖宣制拜舞如常、訖宣命大夫復本列、次參議已上依次復座、次辨大夫、次輔、訖掃部寮執机入、自屏東頭立位記標下退出、次式部史生捧位記筥(盛以四枚)入自同方置机上退出、訖録一人進立机下、披筥取位記唱賜、(雖位記多數、而四枚爲限、)郡司稱唯、就録後、受位記、一拜復本列、賜了録覆筥不復本列、史生入執筥退出、訖掃部寮入、取机退出、丞録升就座、喚録名、稱唯而進(自前進退)輔後、受除目簿、復本座、輔令唱之、録稱唯降就唱名標下、磬折而立、隨道次唱之、郡司稱唯就版(若不參者朝集使代之稱唯、若使不在、省掌代之稱唯、)每足十人、省掌曰直立、郡司稱唯、當西廊南階北頭列立、唱訖録復本座、省掌稱唯退出、國郡司不稱唯、自上而退出、録次丞、次輔、次辨大夫、次參議已上、

〔北山抄七〕任郡司事(讀奏後、先請印位記、然後行之、而寛弘七年給白紙位記云云、奇異事也、)

尋常政畢、內記奉宣命、外記奉式、辨召名簿即給宣命使、宣命使着西廳座、上卿喚召使二音、稱唯參入、上宣、或省召稱唯退出召之、丞一人參入就版、上宣召稱唯參上、賜召名退出、(丞昇階間上、歸取召名、)輔丞録參入着東廳座、次省掌郡司等參入列立屏下、次丞録下立、次輔、次宣命使、次參議以上下立、如召給儀、宣命

郡司召式

宣大命乎、衆聞食止與宣、今國々乃郡司任賜人等賀、冠位上賜比治賜波久止宣御命乎諸聞食止與宣、

〔三代實錄清和六〕貞觀四年五月十四日辛巳、式部省奏諸國銓擬郡司擬文、天皇不御前殿、大臣奉勅於近仗下點定覆奏焉、　廿日丁亥、公卿就太政官曹司廳任諸國銓擬郡司、

〔三代實錄清和七〕貞觀五年四月廿一日癸丑、式部省奏諸國郡司擬文、天皇不御前殿、公卿奉詔於仗下令式部省輔開簿讀之、　五月八日庚午、公卿就太政官曹司廳、任銓擬郡司、宣制如常、

〔三代實錄清和十〕貞觀七年四月廿五日乙亥、是日式部省奏諸國銓擬郡司擬文、天皇不御前殿、右大臣奉勅於仗下令少輔從五位上平朝臣實雄開簿讀之、大臣點定覆奏、

〔三代實錄陽成三十三〕元慶二年四月廿五日庚寅、式部省奏諸國銓擬郡司簿、大納言正三位兼行左近衛大將陸奧出羽按察使源朝臣多、奉勅於宜陽殿西廂喚式部少輔兼文章博士菅原朝臣道眞讀之、　五月七日壬寅、公卿於太政官曹司廳任諸國銓擬郡司、策命如常、

〔三代實錄光孝四十五〕元慶八年四月廿三日癸丑、天皇御紫宸殿、式部省奏諸國銓擬郡司擬文、式部卿本康親王、太政大臣左右大臣、及諸公卿侍、參議正四位下行左大辨兼播磨守藤原朝臣山陰奉勅讀奏、此儀經久停絶、是日尋擒舊儀而行之、

〔貞信公記〕延喜二十年十月廿二日、郡司讀奏、左金吾定令、

〔日本紀略村上三〕天曆元年十一月五日乙卯、有郡司讀奏事、天皇不御南殿、　廿六日丙子、任郡司、

〔日本紀略冷泉五〕安和元年十二月九日丁巳、郡司讀奏、依式部丞不參延引、無用代官之例故也、

〔儀式九〕太政官曹司廳敍任郡領儀

前一日錄率史生省掌等置版位、幷立標、自尋常版進北四尺置宣命版、自此南去一丈五尺立位記机標、南去一丈五尺、東折一丈、置朝集使版、五位之使不參入、自位記机標南去七尺、西折一丈五尺、立唱名錄標、自位記机標南去二丈五尺、置郡司版、當東廳中階南柱去壇五尺立輔降立標、當同廳南階南柱立丞

讀奏例

把筆定之、至有難者不給定、讀申了、讀奏書不卷返奏之輔退出、次丞一人參入、取在上卿前書函退、立軒廊南方、上卿起座、向御所、丞相從之、上卿取丞持書付藏人、令奏、奏聞之後返給上卿、上卿給式部丞、還就本座、(但相從丞揖入奏、自出日花門外、)又丞一人參入、給硯筥退出、掃部寮撤輔座疊退出、

〔延喜式十一太政官〕凡諸國銓擬言上郡司大少領者、式部對試造簿、先申大臣、即奏聞、訖式部書位記請印、其後於太政官、式部先授位記、次唱任人名、如除目儀、(事見儀式)

〔延喜式十九式部〕敍任諸國郡司大少領

對試才能、計會功過、訖三月廿日以前輔若丞自成奏案、令史生寫、四月廿日以前、令外記申可奏之狀於大臣、當日輔以下令持文簿、候於內裏、大臣引奏、御定已訖、即勘籍書位記、申太政官請印、專當丞自書除目、錄抄歷名、六月卅日以前申太政官補任之、前一日錄率史生省掌、置版位、幷植置位記筥案標如常、(事見儀式)

〔延喜式三十八掃部〕奏銓擬郡領日、紫宸殿設參議已上幷式部輔以上座、(大臣及省官前各立机)

〔本朝月令〕四月廿日奏郡司擬文事、(見內裏式) 弘仁官式云、凡諸國銓擬言上郡司大少領者、式部對試造簿、先申大臣、即奏聞、訖式部書位記、請印於太政官、敍位、弘仁式部式云、凡諸國郡司補任之後、皆移民部省、其銓擬郡司、正月卅日以前令集省、若二月以後參者隨返却、但擬文者以四月廿日以前爲限、貞觀式部式云、凡郡司者、不得併用同姓云々、今案除同門外聽任、同式云、前式、凡畿內郡司以理解任之後聽直散位寮、今案患解服解侍解、復任本職、○中略 凡補任郡司者、六月卅日爲限、○中略 凡銓擬郡司、緣失錯返却之類、明年重被銓擬者、不可更令入京、凡敍任郡領之日、丞讀名簿、授外記、外記執之進大臣、

〔三代實錄二清和〕貞觀元年四月廿八日癸丑、是月二十日以前有讀奏諸國銓擬郡司擬文之儀例也、而史漏而不書、故今闕焉、　五月十日乙丑、公卿就太政官曹司廳、任銓擬郡司、策文云、天皇(我)詔旨(萬止)

料幷卿料文立階下、(大少輔取之置)勅權大輔令讀、(大輔唯着奏座披文讀給)大少輔執筥退出、撤大納言卿料筥、如初、兩輔執勘文降、奏料留御前、(○前一本作所)

(讀奏)或人云、丞所作文、稱斷入意如何、答奏料、上卿等料讀奏文皆書入丞所作之文、輔所持讀奏切續丞所作文、仍稱斷入云々、

國擬幷今擬者共ニクニアテマウセルト可讀云々、國解ニハ今擬ト注セリ、而省作讀奏之時、奏料、幷卿料、如國擬今擬止注、上卿並輔料ニハ國擬止注、總テ同事也、仍所讀云々、

無譜者止ハ、非譜代者依才能任者也、

勞効者止ハ、非郡司譜代依勞任來者也、

違例越擬者止ハ、不經少領一度擬大領者也、

傍親譜代者止ハ、譜代郡司近親也、

天曆四年十月廿八日九記云、左大臣被行讀奏事、予(○藤原師輔)不着座、而大臣着例、無所見故也、

〔九條年中行事(四月)〕廿日以前、奏銓擬郡領之儀、(謂之郡司讀奏)

先外記申一上、定日之後仰所司、當日先於陣座令藏人奏讀奏候之由、奉仰後着宜陽殿、上卿就宜陽殿座、召外記仰云、召式部省、外記稱唯退出、召錄仰丞持奏可參之由、即丞一人入奏卷於筥蓋捧之入自日華門、進置函文於上卿前、退當軒廊東第二間、去南一許丈、(北面、)次上卿見之、(只見一兩枚、不盡枚數、)納函頗推出、于時式部丞進取函退立本所、次上卿起座、進御所取丞所賚奏付藏人令奏之、(件奏留御所不返給、但明日自藏人所返給、)還就本座、(東面、)丞相從退還、次丞二人(一人持書筥、一人持硯筥、)入自日華門立軒廊南、(相去丈許、)立定後持書筥丞進置筥於上卿右傍、退歸之間、持硯筥丞行替置硯於同傍、以硯筥推遣書筥於上卿左方、自然爲左右、見持硯丞還立本所之程、置文筥、丞引還、此間外記誡掃部寮、蒙上仰令敷疊一枚於上卿後壇上、上卿召仰云、召式部省、即外記召之、(輔向程誡候敷政門外、)輔一人取副可讀合奏一卷於笏、入敷政門就座讀申、上卿

西宮記四月一郡司讀奏外記誡式部、定日令儀、

上卿着陣、省官在日華門外、上卿令藏人令奏讀奏候由、依例行、或聞食、仰辨若史令敷座、上卿以下着宜陽殿、上卿以外記名式部丞捧奏筥參入、着靴入自日華門進、立軒廊南北面、當廊東一間南去一丈、來以筥置上卿前、歸立本所、直可進、上卿少許見了、[illegible]丞進來取筥立本所、兩日立宜陽殿西壇上三間云々、上卿就御所令奏、起座出廊中間、渡階下、丞相從、到射庭令奏、進退歸、若有藏人丞者、便付奏、兩日自南殿後往還、無藏人丞者、於恭禮門下以藏人令奏之、上卿着座、丞相從上卿着座之間、暫立階下、上卿着之比、自初道出了、次丞置擬文筥、入自日華門、置上卿前、自座左置筥、把笏左廻退、初丞到宜陽殿南一間之比、次丞取硯筥置上卿前、[illegible]或文硯自古置之、舊例相並進立之、今停、敷輔座、掃部取疊一枚、入自宣仁門、敷上卿座前、上卿北面、輔座東面、撤疎突可敷之、輔參入、仰外記召之、或不待召、輔取擬文、副笏、自宣仁門入着座、上卿披文、作入筥披之、入夜者可左右也、上卿目輔令讀、先讀畿内七道六十國銓擬大少領數、次讀道名、東海道ヒガシノウミノミチ又ウミヘツミチ、ウヘツミチ、東山道ヒガシノヤマノミチ又ヤマノミチ、又東ノミチ、北陸道クガノミチ又キタノミチ、タルマノミチ、山陰道ソトモノミチ、又カゲトモノミチ、山陽道カゲトモノミチ、又ソトモノミチ、南海道ミナミノミチ、又ミナミノウミノミチ、西海道ニシノミチ、又ニシノウミノミチ、次讀國名、次朝集使名、次大少領姓名、大領古保乃ミヤツコ少領スケノミヤツコ、又スナイミヤツコ、次國擬位姓名タニアテマウセリ、又タニノアテ申セル、

次讀斷入有無譜者、令續擬文、上卿云擬文

上卿見文儀、見合注郡上氏、與今擬者姓、先祖姓等可一同、又見注端朝集使位姓名與在擬文朝集使、次見斷入文、有違例越擬者、斷入必可有降擬文、有無臨同門等者、又可有其勾、無譜者、勞効譜第者、不注祖列、上注立郡譜第姓、譜第氏一郡或有二三人、又有勞効、傍親一譜第無譲者、上卿以朱筆國擬上注定字、違例越擬者注定少[illegible]字、[illegible]可不經少領、一度越擬者上注違例、越擬、仍斷入文、必可有降擬文、有損不給定字、後日以舊勘文奏聞、入給定之例、[illegible]上輔持文退出、[illegible]掃部寮撤座、丞如初來取擬文、不卷返給、取筥立初立所、上卿就御所奏聞、了返給、上卿着座、丞捧筥到宜陽殿南二間、次丞相代取硯退出、或以丞一人行、上卿以下起座出、

南殿儀在式寛平日記

天皇出御、内侍出、公卿參上、南廂設大臣座、前立机、參議已上北面、大納言能有以下昇、大輔爲參議者着公卿座、前立机、少輔座西面、前立机、式部卿着座、座在東廂、親王爲卿之時、南行東二柱北邊二尺敷座、輔執奏筥立階下、長谷雄入自日華門、卿迎階上執之進御前、大少輔置臣料筥硯等、大輔權藏、執奏筥、少輔長谷雄執硯入日華門、置机上退了復座、丞有王恩執勘文、副笏覽輔料入立階下、參議權大輔取之、次丞連松有與二人取大納言

參上、就殿上座、次卿就座、少輔執奏筥、入自日華門、（下皆效此）至階下、磬折而立、卿起座、迎階上、執進御前、（自上御座東南階、膝行、奉置御前机上、）復座、大輔執讀奏筥、（若參議任大輔者、丞執奏筥、至階下、磬折而立、大輔起座迎、階上執、）少輔執硯筥、相連進、置讀奏人座前机上、（奏筥置北頭、硯筥置南頭、）退降、（若參議任輔者、便復座、見丞執勘文、至階下、起座迎執、）各執勘文、參上侍座、二丞執大臣并卿料勘文筥、至階下、磬折而立、大少輔傳執、置大臣及卿前机上、（大輔置大臣前、少輔置卿前、若親王任卿者、大輔置卿前、少輔置大臣前、若參議任大輔者、不須、少輔搢行、）復座、于時有勅曰、其讀之、被命者稱唯、就讀奏座、披搢讀之、隨讀大臣奉勅且點、其定不、訖讀奏人復座、大少輔進執讀奏并硯筥、退降、（若參議任大輔者、於階上授丞、復座、）次執大臣并卿筥、如初儀、訖兩輔執勘文、退下、（若參議任大輔者、丞進至階下受之、授訖復座、）次大臣以下以次退、（若親王任卿者先退、）唯正奏者留御所、後日就藏人所返受其筥、

〔儀式九〕奏銓擬郡領儀

式部省預前對試才能、計會功過、三月廿日以前、輔若丞成案、令史生寫并造勘文四卷、訖申可奏之狀於太政官、外記申大臣、定四月廿日以前吉日仰之、前一日儲備筥四合、（一合納奏料、一合納硯料、二合納文料、）當日早旦、近衞次將一人率掃部寮設座、其儀、御座東南階前設讀奏者座、用床子、前立机、南廂設大臣座、其前立机、（若大臣有故、參議以上行事、）次參議已上座、並北面東廂設卿座、（若親王任卿者、南行東第一柱北邊二許尺設之、）次南大輔座、（若參議任大輔、就參議座、其前立机、）次南少輔座前立机、並西面、辰刻輔已下令持文簿、候內裏、巳午之間、內侍臨東檻喚大臣、稱唯、參議已上共升就座、次卿升就座、少輔執奏筥、入自日華門、（下皆倣此）至階下、磬折而立、卿起座迎、階上執進御前、（當御座之東南、膝行、奉置御前机上、）復座、大輔降執奏筥、（若參議任大輔者、丞執奏筥、至階下、磬折立、大輔起迎、階上執、）少輔執硯筥、相連進、置讀奏人座前机上、（奏筥置北頭、硯筥置南頭、）退降、（若參議任大輔者、便復座、見丞執勘文、至階下、起座迎執、）各執勘文、升就座、丞二人執大臣并卿料勘文筥、至階下、磬折而立、大少輔傳執、置大臣及卿前机、（大輔置大臣前、少輔置卿前、若親王任卿者、大輔置卿前、少輔置大臣前、若參議任大輔、少輔搢行、）復座于座、大少輔進執讀奏、時有勅曰、某讀之、被命者稱唯、就讀奏座、披搢讀之、隨讀大臣奉勅且點、其。。。。。。。。。。。定不、訖讀奏者復座、大少輔進執讀奏并硯、執勘文、退、（若參議任大輔者、丞進至階下受也、大輔授訖復座、）次大臣以下以次退、（若親王任卿者先退、）正奏留御所、後日就藏人所返受其筥、

餘親疎、待國解以處分、至貞觀十七年符、雖父子之間、非國司言上、不聽相讓、自爾以來、諸國依託此符、多相讓之銓、本欲遏巧僞之濫、還爲申請之媒、遂使調俻役民頓昇八位之級、外散位輩多滿諸國之中、歷年稍多、不啻致課丁之欠、一宗傳讓、或已忘代遞之格、稍於政途、甚非公益、自今而後、宜依件停止、

以前被右大臣宣偁、奉勅、宜令依件遵行、

元慶七年十二月廿五日（又見三代實錄）

○按ズルニ、右本文ニ代遞之格トアルハ、類聚三代格第七弘仁五年三月二十九日ノ官符ニ、聽以同姓人補主政主帳事、右撿天平七年五月廿二日格偁、終身之任、理可代遞、宜一郡不得并用同姓、トアルヲ指セルモノナリ、

〔類聚三代格七〕太政官符

應令諸國郡司譜圖牒一紀一進事

右得式部省解偁、撿案内、件圖牒、經數十年一進、或五六年間頻進、因茲短祚早死者、子孫懷漏圖之憂、數好改換者、官司有勘會之煩、望請下知諸道、令進件圖牒、以一紀爲限、務存實錄、不致假濫、但依去弘仁二年二月廿日詔書、應進譜圖之狀、三年九月四日下知諸國訖、而諸國所進圖牒零疊、年限不同、如此之國、始進圖年、計其程限、謹請官裁者、右大臣宣、依請、

天長元年八月五日

〔内裏式中〕奏銓擬郡領式

當日朝儀後、近衛次將一人率掃部寮設座、其儀、御座東南階前置讀奏人座、（用七寸黄端両面草墪）前立机、南廂設大臣座、其前立机、（若大臣有故、参議已上行事、）次参議已上座、並北面、東廂設卿座、（若親王任卿者、南行東第二柱北邊二許尺設座、）次南大輔座、（若参議任大輔者、就参議座、但前立机、）次南少輔座、並西面、前立机、巳午間、内侍臨檻喚大臣、大臣稱唯、参議已上共

〔類聚三代格七〕太政官符

應任郡司事

右大納言正三位兼行皇太子傅民部卿勳五等藤原朝臣園人奏狀偁、夫量能授職、邦教攸先、訓俗宜風、郡司是寄、故任當其器、則庶績咸康、委失其才、則政治自亂、加以譜第之事、既復舊例、奕世相繼、義在象賢、是以國司簡定、銓擬言上、無頼之徒、不預銓擬之例、或身在京、爭第相申、抑退國選、遂奪其位、一民之志、未有推服、百里之任、何能可堪、臨事面墻、操刀傷錦、其之爲弊、古今一揆、望請自今以後、銓擬郡司、一依國定、若選非其人、政績无驗、則署帳之官、咸解見任、永不敍用、以懲將來者、右大臣宣、奉勅依奏、但主政主帳不在此限、

弘仁三年八月五日〇又見日本後紀、選敍令集解、

〔類聚三代格七〕太政官符

應停勞効郡司預譜第事

右得式部省解偁、撿案內、太政官去天平十年四月十九日符偁、奉勅、郡司緣身勞効被任一世者、不得取譜第之限者、因茲省家所行、勞効二世已上既爲譜第、方今功勞之輩、追年不絕、一郡之譜、隨代重積、遂使頑庸之徒叨一割功、得職之後無底恥操、是則子民之情、允非蕃績、苟是之心、唯在繼譜、望請無譜之人、蒙採擇者、自今以後、雖積功二世已上、不預譜第、然則涇渭別流、蘭艾殊畝、但既往二世已上者爲第、猶隨前例、望請官裁者、中納言兼左近衛大將從三位行民部卿淸原眞人夏野宣、奉勅依請、

天長四年五月廿一日

太政官符

一應停郡司讓職事

右職無尊卑、理須上命、何以公官、私得相讓、頃年之例、往々有讓件職者、父子之間、有宣旨以裁許、自

敍用、以懲將來、天恩垂愍、儻允臣請、則今年擬帳、悉從返却、一定改張、明春始行、庶令理治之舉、起於當年、富庶之謠、流於後代、不任犬馬懷主之懇、謹奉表冒死以聞、詔可、

〔類聚三代格七〕太政官符

應聽以同姓人補主政主帳事

右撿天平七年五月廿二（○廿二、選敍令集解作廿一、）日格、偁、終身之任、理可代遍、宜一郡不得幷用同姓、如於他姓中无人可用者、僅得用於少領已上、以外悉停任、但神郡國造、陸奧之近夷郡、多褹島郡等聽依先例者、今被右大臣宣偁、奉勅、一郡之人、同姓尤多、或身有勞效、或才堪時務、而被拘格旨、不蒙選擢、人之爲憂、莫甚於此、宜改斯例依件令補、不得因此任譜第人、自今以後永爲恒例、

弘仁五年三月廿九日（○又見選敍令集解）

〔類聚國史十九神祇〕延暦十七年三月丙申（○十六日）、詔曰、昔難波朝廷（○孝德）始置諸郡、仍擇有勞、補於郡領、子孫相襲、永任其官云々、宜其譜第之選、永從停廢、取藝業著聞堪理郡者爲之云々、其國造兵衞同亦停止云々、

〔類聚三代格七〕太政官符

應任出雲國意宇郡大領事

右被大納言從三位神王宣偁、奉勅、昔者國造、郡領、職員有別、各守其任、不敢違越、慶雲三年以來、令國造帶郡領、寄言神事、動廢公務、雖則有闕怠、而不加刑罰、乃有私門日益、不利公家、民之父母、還爲巨蠹、自今以後、宜改舊例、國造郡領分職任之、

延暦十七年三月廿九日（○又見類聚國史）

〔日本後紀八桓武〕延暦十八年五月庚午、勅、撫俗宣風、任屬郡司、今停譜第、妙簡才能、而宿衞之人、番上之輩、久經驅馳、頗効才能、宜不經本國、令式部省簡試焉、

七縣人夫歸化、詔賜高市郡檜前村而居焉、凡高市郡內者、檜前忌寸及十七縣人夫滿地而居、他姓者十而一二焉、是以天平元年十一月十五日、從五位上民忌寸袁志比等申、其所由、天平三年以內藏少屬從八位上藏垣忌寸家麻呂任少領、天平十一年家麻呂轉大領、以從八位下蚊屋忌寸子虫任少領、神護元年以外正七位上文山口忌寸公麻呂任大領、今此人等被任郡司、不必傳子孫、而三腹遞任、四世于今、奉勅宜莫勘譜第聽任郡司、

〔類聚三代格七〕郡司事

詔、應變設教、爲政之要樞、商時制宜、濟民之本務、故有堯舜異道、而天下歸仁、湯武殊治、而蒼生欣賴、朕還淳返朴之風、未覃下土、興滅繼絕之思、常切中襟、夫郡領者、難波朝庭〇孝德始置其職、有勞之人、世序其官、逮于延曆年中、偏取才良、永廢譜第、今省大納言正三位藤原朝臣園人奏云、有勞之胤、奕世相承、郡中百姓、長幼託心、臨事成務、實異他人、而偏取藝業、永絕譜第、用庸材之賤下、處門地之勞上、爲政則物情不從、聽訟則決斷无伏、於公難濟、於私多愁、望請郡司之擇、先盡譜第、遂无其人、後及藝業者、實得其理、宜依來奏、主者施行、

弘仁二年二月廿日〇日本後紀係二月己卯、十四日也、

〔日本後紀二十二嵯峨〕弘仁三年六月壬子、大納言正三位兼皇太子傅民部卿勳五等藤原朝臣園人上表曰、臣昔歲不獲庸菲、頻歷外任、自西及東、總十有八年、黎民疾苦、政治得失、耳聞目見、頗無相錯、夫銜綸出宰、概持綱紀、親民撿察、良在郡領、今依去年二月十四日詔旨、譜第之事、已復舊例、況乎終身之任、得其人、則遷替之吏、高枕而治、奕世之胤、非其器、則見任之司、還招罪責、是以精選堪務、沙汰言上、而在京他人、爭鶩競甲、抑退國選、越奪被任、試之政事、未克宣風、訪之民間、誰有推服、國吏月數不覺、郡內年弊而無興、不治之責、遷及牧宰、外官之歎、前後不殊、方今仁風遠覃、德政屢降、然彫殘之餘、百姓猶困、實由撫養之失人也、伏請自今已後、銓擬郡司、一依言上、若還非其人、政績無驗、則署擬之官、咸解見任、永不

下皆就座、省掌置版位、又預設國司座、訖輔命丞、丞命錄、錄命史生、令召省掌、省掌稱唯就版位、丞命曰、率候郡司等參來、省掌稱唯退出、先引東海道一國朝集使及郡司等、入屯立庭中、省掌就版傍、錄披簿先唱國司、國司稱唯就版位、（五位先入、隨召就座、錄唱起座稱唯、）次唱郡司、依次稱唯進立使傍、唱了、丞命侍座、國司稱唯就座、輔命省掌令申譜第、省掌稱唯傳命、郡司俱稱唯依次申訖、丞命候之、國郡司俱偁唯、省掌引退出、更引次國入、唱申如前、六道（除西海道）勘訖、更定日以申、輔預命國郡司令參集、其日平旦、省掌設郡司座幷硯於版左右庭、（多少隨人數）卿以下就座、史生盛簿四筥、以次進置於輔以上前及丞座傍、（親王任輔者、錄置輔前、）各有常儀、卿命丞曰、令郡司等參入、丞稱唯、令喚省掌、如常儀、省掌稱唯就版位、丞命率候郡司等參來、省掌唯退出、引一道國郡司進屯屏下、立定卿命召之、錄稱唯、省掌進立版左、錄披簿唱畢、丞命國司侍座、卿命省掌令申譜第、（若親王任輔者、大輔命之、）省掌傳告、郡司俱稱唯依次申、並如前儀、訖丞命國司曰候之、稱唯退出、乃命省掌令郡司侍座、省掌傳告、郡司俱稱唯就座、省掌退出、訖他省掌執筥就丞後、受問頭、降就郡司傍授之、訖置筥於西階上復座、郡司執筆各答其問、隨了且進納筥退出、每一道訖、他省掌還引進如前儀、諸道已訖、省掌進執盛試狀筥、置丞座傍退出、聚其狀書、卿自臨判等第、隨狀黜陟、（陸奧出羽西海道等郡司不在集限、）（依府國解定其等第）但主政主帳者、卿以下唱試其身、不召國司、

〔續日本紀十七聖武〕天平勝寶元年二月壬戌、勅曰、頃年之間補任郡領、國司先檢譜第優劣、身才能不、舅甥之列、長幼之序、擬申於省、式部更問口狀、比挍勝否、然後選任、或譜第雖輕、以勞薦之、或家門雖重、以拙却之、是以其緒非一、其族多門、苗裔尙繁、濫訴無次、各迷所欲、不顧禮義、孝悌之道既衰、風俗之化漸薄、朕竊思量、理不可然、自今已後、宜改前例、簡定立郡以來譜第重大之家、嫡々相繼、莫用傍親、終塞爭訟之源、永息窺窬之望、若嫡子有罪疾、及不堪時務者、立替如令、

〔續日本紀三十二光仁〕寶龜三年四月庚子、正四位下近衛員外中將兼安藝守勳二等坂上大忌寸苅田麻呂等言、以檜前忌寸任大和國高市郡司、元由者、先祖阿智使主、輕嶋豐明宮馭宇天皇（○應神）御世、率十

貞元二年六月廿五日　正六位上行大目物部宿禰

正五位下行民部權少甫兼權介源朝臣

式部省

散位正六位上伴良田連定信

望讚岐國多度郡大領伴良田連宗定死闕替（副國解文）

右去年厨家料一分代、以件定信越次可被補任之狀、所請如件、

貞元三年三月廿七日　少錄　奉

大丞橘濟信

正三位行權中納言藤原朝臣濟時宣、奉勅、省去年厨家料一分未補代、以散位伴定信、越次宜補任讚岐國多度郡大領伴宗貞死闕之替、

同年九月七日　大丞橘［　　］奉

規求郡司

〔續日本紀三十二光仁〕寶龜四年八月庚午、諸國郡司燒官物者、主帳已上皆解見任、其從政入京、及讒放火之賊、功効可稱者量事處分、又譜第之徒情挾覬覦、事渉故燒者、一切勿得銓擬、乃簡郡中明廉清直堪時務者、悉令任用、當國軍毅不救火者、亦准郡司解却、

〔續日本紀三十九桓武〕延曆五年八月甲子、勅曰、正倉被燒、未必由神、何者譜第之徒、害傍人而相燒、監主之司避虛納以放火、自今以後、不問神災人火、宜令當時國郡司塡備之、仍勿解見任、絕譜第矣、

試驗

〔延喜式十九式部〕試諸國郡司主帳以上、

諸國銓擬申上大少領并主政帳等、每年正月卅日以前集於省、預差丞錄史生省掌、專當其事、訖設輔以下座於省內便處、令史生勸造其簿、具顯功過、寫其名簿、以授省掌、每日召計、習其申詞、案成之後、更寫四通、（主政帳一通）以擬丞以上披覽、二月廿日以前勘寫已訖、省掌預命諸國朝集使參集、其日平旦、輔以

從四位上行左中辨源朝臣保光傳宣、左大臣宣、奉勅、以前出羽權大目各務利宗、宜依國解文越次補任美濃國各務郡大領秦良實死闕之替、左少史坂合部以方御

紀伊國司解　申請官裁事

請被以從七位上紀宿禰時忠補任名草郡少領職狀

右得名草郡少領紀今樹去五月十三日解狀偁、今樹爲繼祖業、勤仕當職、而前司藤原爲光朝臣、被申補内膳司御厨別當職之日、無被免郡司之職、謹按事情、御厨司不論晝夜、備進供御、非可逃他事、而彙役國務之間、勤致闕怠、因茲本司之責、逐日不絶、郡務之督、時而無休、兩役之勤、一身何堪、望請國裁、以弟時忠、被申補件少領職、令勤郡務、至于今樹之職、被免徐勤仕供御事者、言上如件、望請官裁、以件時忠被補少領之職、將從郡務、令勤事狀、謹解、

康保五年六月廿九日　　正六位上行大目文宿禰

守從五位下紀朝臣

右大臣宣、奉勅、以紀時忠依國解文、宜補任紀伊國名草郡少領紀今樹辭退替、

同年七月廿一日　　少丞藤原雅頼奉

讃岐國司解　申言上銓擬郡司事

請被以散位正六位上伴良田連定信、越次補任管多度郡大領外從七位上伴良田連宗定死闕替狀

右件郡大領宗定、今年四月十二日、其身死去、爰郡務繁多、從事人少、國宰之煩、莫不由斯、就中件郡、部内廣遠、官物巨多、若大領非其人、恐難務擁滯、今件定信、擬任年久、撫育有方、推其才幹、尤足郡領、謹案格條、銓擬郡司、一依國定者、望請以件定信被越次補任大領宗定死闕之替、將勤郡務、仍錄事狀、謹解、

右謹検案内、件郡大領常村其身死去、爰郡務繁多、従事人少、國宰之煩、莫不因斯、就中件郡部内廣遠、輸貢多數、誠雖有少領尾張惟平、而天性尫弱、不堪貢領、若大領非其人、恐致彫弊歟、今件是種、譜第正胤、奕代門地、仍頃年之間、試用擬任、性識清廉、民庶推服、不擧若人、何勵後輩、謹案格條、郡司之選、一依國定者、重検故實、諸國主典已上散位之輩、越次一度補任大領之職、蹤跡已存、望請官裁、以件是種、越次被補任大領常村死闕之替、將令勤郡務、仍注事状謹解、

應和三年八月廿二日　　正六位上行大目氷朝臣

從五位上行守藤原朝臣守平

從二位行大納言源朝臣高明宣、奉勅、以散位尾張是種、越次宜補任尾張國海部郡大領尾張常村死闕替、

同年十二月廿七日　　藤原雅材奉

美濃國司解　申請官裁事

請被以前出羽權大目正六位上各務勝利宗、越次補任管各務郡大領秦良實死闕替状

右謹検案内、件郡大領良實、以去月十一日其身死去、方今件郡調庸租税、多勝他郡、辨濟輸貢、常有事煩、少領雖存、其身受性尫弱、臨事面墻、衰老殊甚、已拙公務、若大領非其人者、恐致雜務之擁滯、今件利宗、譜第正胤、累代門地、爰身雖任他國之主典、猶有廻塔之志、爲百姓之父母、仍年來之間、試用擬任、天性清廉、民庶推服、郡領之任、尤在件人、謹按格條、郡司之選、一依國定者、譜第之輩、并任諸國主典已上之後、依國解文、越次補任大領之例、不可勝計、望請官裁因准傍例、以件利宗越次被補任大領良實死闕之替、欲令濟郡務、仍錄事状、謹解、

康保二年二月十七日　　正六位上行大目上毛朝臣公光

正五位下行守高階眞人良臣

望當郡大領小田逐津考解之替

右去延喜廿一年造省料一分代、以桑原直生、去天慶三年五月申補出雲弩師、而不給任符、秩滿、仍停
彼宣旨、以件豐卿改所請如件、

天暦八年七月廿三日

權中納言從三位源朝臣兼明宣、奉勅停去延喜廿一年造省料一分代出雲弩師桑原直生宣旨、宜以
小田豐卿改任備中國小田郡大領小田逐津考解替、

同年十二月廿九日　大丞藤原懷忠奉

攝津國司解　申重請官裁事

請被以前鎮守府軍曹正六位上津守宿禰茂連、補任管住吉郡大領死闕狀

右件茂連越次被補件貫茂死闕之狀言上早了、而未蒙裁許、郡務多擁、今件茂連譜第正胤奕世門地、
試用擬任、性識淸廉、足爲郡領、謹案格條、詮擬郡司、一依國定者、重望請官裁、以件茂連、越次被補任件
郡大領職、將令勤郡務、仍錄事狀、謹請官裁、謹解、

天德三年四月五日　從七位上行（○行下恐脱大目二字）六人部宿禰是與

守從五位下藤原朝臣安親

正三位行中納言藤原朝臣師尹宣、奉勅前鎮守府軍曹津守茂連、依國解文、宜越次補任攝津國住吉
郡大領津守貫茂死闕之替、

同年十一月十四日　大丞大江齊光奉

尾張國司解　申請官裁事

請被以散位正六位上尾張宿禰是種、越次補任管海部郡大領外從八位上尾張宿禰常村死闕替
狀

望郡司

〔延喜式式部十八〕凡郡領之民、不得任主政主帳、

〔東大寺正倉院文書四十四〕謹解　申請海上郡大領司仕奉事

中宮舍人左京七條人從八位下海上國造他田日奉部直神護我、下總國海上郡大領司尒仕奉止申

故波、神護我祖父小乙下忍、難波朝庭〇孝德少領司尒仕奉支、父追廣肆宮麻呂、飛鳥朝庭〇天武少領司

尒仕奉支、又外正八位上給氏藤原朝庭尒〇持統大領司尒仕奉支、兄外從六位下勳十二等國足奈良朝

庭〇元明大領司尒仕奉支、神護我仕奉狀故兵部卿從三位藤原卿位分資人始養老二年至神龜五年

十一月、中宮舍人始天平元年至今廿年、合卅一歲、是以祖父父兄良我仕奉祁留次尒在故尒海上郡

大領司尒仕奉止申、

〔類聚符宣抄七〕從八位下刑部宿禰福秀但馬國美含郡人

望當郡少領刑部福保補任之後經年不附考帳替

右辨官給之政帳廿一人內、維則任官史之時、去承平六七兩年給、高晴同七年給三合之代、以件福秀

所請如件、兼被免無譜之責、謹言、

天慶二年五月廿二日　大外記坂上高晴

大隅守善道朝臣維則

中納言從三位藤原朝臣師輔宣、奉勅、大隅守善道朝臣維則任官史之時、去承平六七兩年辨官給、大

外記坂上高晴同七年給未補之代、三合以刑部福秀宜補任但馬國美含郡少領刑部福保補任之後、

經年不附考帳替兼免無譜之責、

天慶二年十二月廿七日　少丞[　]時奉

式部省

白丁小田臣豐卿備中國小田郡人

後擬文者、四月廿日以前奏聞、但陸奥出羽及大宰管內唯進歷名、若以白丁銓擬副勘籍簿、其病患年老及致仕者、國司解却、具狀申官、更不責手實、

〔貞信公記〕延長九年（○承平元年）九月十日、郡司勘籍、依年來例可行之狀可仰式民兩省事、仰久永宿禰、又可告左金吾、

〔延喜式〕（十八式部）凡郡司幷禰宜祝及夷俘等五位歷名帳、別卷每年進之、

〔延喜式〕（十八式部）凡大領闕處以少領轉任、以今擬者爲少領、其大少領並闕、先擬少領、

凡銓擬郡司、緣失錯返却之類、明年重被銓擬者、不可更入京、但返却之後、若經一年重無言上、乃以爲闕、

凡諸國擬任郡司名簿每年附朝集使令進、若不進者、拘朝集返抄、

〔延喜式〕（十八式部）凡諸國郡司、補任之後、皆移民部省、

凡諸國郡司補任帳、每年正月一日、與諸司諸國史生已上補任帳、共進太政官、

〔續日本紀〕（五元明）和銅五年四月丁巳、詔、先是郡司主政主帳者、國司便任、申送名帳、隨而處分、事有率法、自今以後、宜見其正身、准式試練、然後補任、應請官裁、

〔續日本紀〕（十四聖武）天平十四年五月庚午、制、凡擬郡司少領以上者、國司史生已上共知簡定、必取當郡推服、比郡知聞者、每司依員貢擧、如有顧回濫擧者、當時國司、隨事科決、

〔類聚三代格〕（七）勅、式部銓擬諸國郡司、課試多人、總申補任、爲此之故待日度年、非但勞民、亦妨諸務、朕每念此、意猶納隍、自今以後、宜革斯弊、且試且任、隨終隨遣、然則官无滯政、人无廢業、宜下口所司永爲恒例、主者施行、

天平神護二年（○令集解作三、二）四月廿八日

〔延喜式〕（十八式部）凡主政帳廿一人、每年充太政官、待所下名簿乃補之、

補任

ト答フレバ、守イデ然ラバ讀メト云フニ、翁程モ无クワナヽキ音ヲ捧テ、此ナムト云、

トシヲヘテカシラノ雪ハツモレドモシモトミルコソ身ハヒエニケレ

ト、守此レヲ聞テ、極ク感ジ哀テ、免シ遣シケル、然レバ、云フ甲斐无キ下臈ノ田舍人ノ中ニモ、此ク歌讀ム者モ有ル也ケリ、努々不可蔑トナム語リ傳ヘタルトヤ、

〔拾遺和歌集雜九〕大隅守さくらじまの忠信がくにゝ侍ける時、こほりのつかさに、かしらしろきおきなの侍けるをめしかんがへんとし侍にける時、おきなのよみ侍ける、

老はてゝ雪の山をばいたゞけどしもとみるにぞ身はひえにける

〔延喜式十八式部〕凡年七十已上廿四已下、及帳内、職分、位分資人、不得銓擬郡司、但有主許牒者聽之、

〔續日本紀十一聖武〕天平六年四月丁巳、禁斷以年七十已上人、新擬郡司、

〔續日本紀六元明〕和銅六年三月壬午、詔曰、任郡司少領以上者、性識淸廉、堪時務、而蓄錢乏少、不滿六貫、自今以後、不得遷任、

○按ズルニ、右ハ新錢和銅開珍ノ行ハレザルヨリ、其通用ヲ奬勵センガ爲メ、郡司ヲ擇ブニ其蓄錢ノ額ヲ定メシモノナリ、泉貨部ヲ參照スベシ、

〔延喜式十八式部〕凡郡司者、一郡不得併用同姓、若他姓中无人可用者、雖同姓除同門之外聽任、

〔續日本紀三文武〕大寶三年三月丁丑、下制曰、○中略又有才堪郡司、若當郡有三等已上親者、聽任比郡、

〔續日本紀二十孝謙〕天平寶字元年正月甲寅、詔曰、比者郡領軍毅、任用白丁、由此民習居家求官、未識仕君得祿、移孝之忠漸衰、勵人之道實難、自今已後、宜令所司除有位人以外、不得入簡試例、

〔延喜式十八式部〕凡縁銓擬郡司事、須奉大臣宣、莫奉内侍宣、

〔延喜式十八式部〕凡補任郡司者、六月卅日以前爲限、

〔延喜式十八式部〕凡郡司有闕、國司銓擬、歷名附朝集使申上、其身正月内集省、若二月以後參者、隨返却、厥

〔類聚三代格 七〕太政官符

一應贖郡司罪事

右撰格所起請偁、太政官天長三年五月三日下河内國符偁、別當正三位行中納言兼右近衞大將春宮大夫良峰朝臣安世奏狀偁、前年之間、水旱相仍、百姓凋瘵、或合門流移、或絶戸死亡、風俗由厥長衰、郡吏以之逃散、所以頃年以諸司主典任用郡司、至有闕怠、必加刑罰、雖各據時格、以望爵級、而不忍彼恥、遂致逃遁、凡決罰郡司、法家不聽、格式無有、伏請主典以上被補郡司、若有罪過、依法令贖、然則不去其職、必致經遠之圖、但自餘郡司不改前例者、中納言從三位兼行左兵衞督清原眞人夏野宣、奉勅依奏者、如今此格只下一國、未施諸國、伏望下知五畿内及七道諸國、令知鴻恩者、中納言兼左近衞大將從三位藤原朝臣基經宣、奉勅依請、

貞觀十年六月廿八日

〔今昔物語 二十四〕大隅國郡司讀和歌語第五十五

今昔、大隅ノ守□□ト云者有ケリ、其ノ國ニ下テ政始メ行ケル間、郡ノ司四度ケ无キ事共有ケレバ、遠ニ召シニ遣テ誡メムト云テ使ヲ遣ツ、前々此樣ニ四度ケ无キ事有ル時ニハ、罪ノ輕重ニ隨テ誡ムル事常ノ例也、其レニ一度ニモ非ズ、度々四度ケ无キ事有ケレバ、此レハ重ク誡メムトテ召也ケリ、郎チ將參タル由使云ケレバ、前々誡ムル樣ニゾ一〇一作ニサ一、一本作ツ一、臥セテ尻頭ニ上リ可居キ人可打キ樣ナド儲テ待ツニ、人二人シテ引張テ將來タリ、見レバ年老タル翁ノ頭ニハ、黑キ髮モ交ズ、皆白髮ナリ、此レヲ見ルニ、打セム事ノ糸惜ク思ユレバ、忽ニ情ノ心出來テ、何ナル事ニ付テ、此レヲ免シテムト思フニ、可事付キ方モ无シ、過共ヲ片端ヨリ問ニ、只老ヲ高家ニシテ答ヘ居タリ、守此レヲ見ルニ、打セムガ糸惜ケレバ、此レ何ニシテ免サムト思ヒテ思ヒ廻スニ、无ケレバ、守思様テ云ク、汝ハ極キ盗人カナ、但シ汝ヂ和歌ハ讀テムヤト問ニ、翁墓々シクハ非ズトモ仕テム

戒防決罰

二大山田東圭八段（本田二段、付圖新開八段、）
池後田一段七十二步（本田八段二百八十八步、付圖新開一段七十二步、）
牒、件治田、寺家劵文所載肆拾肆町壹佰餘步之內地也、而頃年依有水便治開爲田、望蒙郡○判○爲後代公驗歟、乞也衙察狀、勘合本公劵欲被判許、以牒、
延喜十五年九月十一日
別當大法師　小學頭僧
大法師　小學頭僧
大學頭大法師　小學頭僧
大法師
郡判依寺家被送牒、幷本公驗撿圖帳、件新開寺庄領地內庄事明白也、
撿挍大領　主政桑原
撿挍日置　擬主政
撿挍多紀　擬主政
撿挍日置
郡權大領紀

〔續日本紀（一文武）〕二年三月庚午、任諸國郡司、因詔、諸國司等銓擬郡司、勿有偏黨、郡司居任、必須如法、自今以後、不違越、

〔續日本紀（三十九桓武）〕延曆五年六月乙未朔、勅、撫育百姓、糺察部內、國郡官司同職掌也、然則國郡功過、共所預知、而頃年有燒正倉、獨罪郡司、不坐國守、事稍乖理、豈合法意、自今以後、宜奪國司等公廨、總塡燒失官物、其郡司者不在會赦之限、

職掌
郡符

〔續日本紀文武一〕二年三月己巳、詔、筑前國宗形、出雲國意宇、二郡司、宜〻聽〻連〻任三等已上親〻、　四年二月乙酉、上總國司請、安房郡大少領連〻任父子兄弟〻、許〻之、

〔續日本紀三文武〕慶雲元年正月戊申、伊勢國多氣度會二郡少領已上者、聽〻連〻任三等已上親〻、

〔令集解撰敍十六〕養老七年十一月十六日、太政官處分、伊勢國渡相郡竹郡、安房國安房郡、出雲國意宇郡、筑前國宗形郡、常陸國鹿島郡、下總國香取郡、紀伊國名草郡、合八神郡、聽〻連〻任三等以上親〻也、

〔續日本紀九元正〕養老七年十一月丁丑、下總國香取郡、常陸國鹿島郡、紀伊國名草郡等少領已上、聽〻連〻任三等已上親〻、

〔類聚三代格一〕太政官符

應〻加〻決〻罰神郡司〻事

右得伊勢國解〻偁、調庸租稅、依〻例勸徵、而多氣度會二郡司獨賴〻神事〻、數致〻闕怠〻、望請神界之外、將〻加〻決〻罪〻者、右大臣宣、奉〻勅依〻請、

延曆廿年十月十九日〇又見二類聚國史一

郡判

〔東寺百合古文書二ノ八十自百八至二百一〕若進文書紛失日以〻此定案〻詞〻後代可〻尋〻申〻川合庄依〻沙汰〻進〻官文書目錄等事略〇中

一承和二年四月十九日、從二位大納言兼皇太子傳藤原朝臣守〇三宣、奉〻勅、官符、同十五日民部省符、同廿五日國到來、國司從五位上丹墀眞人淸貞相傳廳宣、郡司同廿六日郡符顯然也、

〇按ズルニ、郡司ノ職掌ノ事ハ、職員ノ條ニ令義解ヲ引ケリ、

〔東寺百合古文書四十五〕東寺傳法供家牒、丹波國多紀郡衙可〻蒙〻郡判〻爲〻治田庄地壹町陸段漆拾貳步狀

一條三大山里南行一大山田東圭七段本田三段、付圖新開七段、

外國不可同日也、而今件人等未出身前、相競如林、既得考後、好稱詐病、非啻闕弃郡務、誠是欺犯朝章、伏望自今以後、有斯類者、國司勘實、一從還本、若或有國司受彼請託、輙解却者、准狀科附、不從寛典、庶遏姧源、以勵後進者、中納言從三位兼行民部卿藤原朝臣葛野麻呂宣、奉勅依請、

弘仁八年正月廿四日

〔類聚三代格七〕太政官符

應諸郡司病損之後不預他色依舊復任及還本事

右得式部省解偁、撿案內、太政官去弘仁八年正月廿四日符偁、今月廿三日下五畿內諸國符偁、右大臣奏狀偁、依太政官去延暦十八年四月廿八日符、五國郡司一居內考、率由近接都下、駈策殊甚、准於外國、不可同日、今件人等、未出身前、相競如林、既得考後、好稱詐病、非啻闕弃郡務、誠是欺犯朝章、伏望自今以後、有斯類者、國司勘實、一從還本、若有國司受彼請託、輙解却者、准狀科附、不從寛典、庶遏姧源、以勵後進者、中納言正三位兼行民部卿藤原朝臣葛野麻呂宣、奉勅依奏者、然則詐病還本、格意明白、實病得痊、處置未的、又貪濁有狀、無故不上者、省例還本、事卽無疑、但或服解後、不堪復任、或雖居職不堪時務、如此解任、理在難抑、然而人情詭濫、眞僞叵信、推尋事迹、非無疑涉、槪由叨內考之榮、還足致濫僞之源、如聞件郡司等遁職之日、巧稱病患、解却之後、仍稱病痊、規去本職、求入他選、仍勘格出之後解却之人七十二人、望請實病之人者、國司硏實、每得痊瘉、更用復任、不堪釐務者、省家閲帳、爲欺朝章、將從還本、其實病得痊待闕之間、從於抑退、不預他考、然則人皆懲愼、姧迹自絕、謹請官裁者、左大臣宣、奉勅依請、

天長二年閏七月廿六日

神郡司

〔延喜式十八式部〕凡郡司者、一郡不得併用同姓、若他姓中无人可用者、雖同姓、除同門外聽任、神郡陸奧縁邊郡大隅薩摩等郡者、不在制限、（謂伊勢國飯野、度會、多氣、安房國安房、下總國香取、常陸國鹿島、出雲國意宇、紀伊國名草、筑前國宗形等郡、爲神郡、）

秋友成地主哉、但窪地者爲治田高地者、爲後代之明鏡、仍注子細以解、

天長六年二月十日　在地刀禰與判　日根秋友〇中略

郡判　依有在地刀禰等證署明白與判

總郡攝使散位中原朝臣花押

攝使大判官代紀花押

高志花押

廳判　依有在地幷郡判明白與判

總大判官代散位中原朝臣花押

中原朝臣花押

大判官代田所散位橘朝臣花押

大判官代介散位池邊朝臣花押

〔帝王編年記十四清和〕貞觀八年、攝州勝尾寺勝如上人證道上人弟子年八十六、〇中略廻向二親、父攝津國郡攝使左衞門府生時原佐通、母出羽國總大判官代藤原榮家女

〔日本後紀八桓武〕延曆十八年四月壬寅二十八日、〇公卿奏曰、大和國守從四位下藤原朝臣園人解偁、郡司之任、所掌不輕、而外考之官、不得貽謀、准於諸國、亦無潤身、是以擬用之日、各競辭退、郡務闕怠、率由於此、伏請居之內考、將勸後輩者、臣等商量、夫高爵以之彰勳、厚賞以之酬勞、所以勸勵士庶、任用得人者也、而畿內諸國、近接都下、驅策之勞尤是殊甚、准於外國、不可同日、如今所申穩便、誠合進昇、伏望五國郡司、一居內考、許之、

〔類聚三代格七〕太政官符

應降聽郡司稱病不上事

右太政官、今月廿三日下五畿內諸國符偁、右大臣從二位行皇太子傅勳五等藤原朝臣奏狀偁、依太政官去延曆十八年四月十三日〇十三日恐當作二十八日符、五國郡司、一居內考、率由近接都下、驅策殊甚、准於

郡擬使

以前墾田賣買人依法式立券者如件、仍具錄狀申送以解、

天平勝寶元年十一月廿一日

鄉長　桃尾臣井麻呂

田主　敢臣安万呂 左手食指

證人　壬生少梗同姓

　　　石部石村

　　　印代万呂

筆取　壬生淨足

稅長　石部果安麻呂

〔日本後紀嵯峨二十二〕弘仁三年八月辛丑、勅、撿承前格、有燒亡官物、以國司公廨塡、事乖弘恕、自今以後、必據法推決、以懲將來、俾夫監臨之官、勤肅所部、守掌之人、愼其防衞者、而頃者國司不勤肅淸、屢致失火、爲避其責、恒稱神災、官物之損、不可勝計、救弊之道、事資改張、自今以後、宜依前格、不問神災人火、令國郡司及稅長等依數塡備、其被差使出境之官不在此限、但國司者以任中公廨塡之、若當遷替年有失火者、只奪其年料塡之、

〔類聚國史八十四政理〕弘仁七年八月丙辰、公卿奏言、○中略案延曆五年八月七日格、不問神災人火、令當時國司郡司及稅長等、已上依數塡備、

〔古文書類纂中〕淳和天皇天長六年日根秋友申請常荒地解

日根秋友解　申請常荒地事

合陸拾町者在糸郡之内、捺田島壹所

四至限東下居　限南大川

　　限西世山川前　限北四津谷井葛木峰

右件常荒地者、去天長二年、秋友開發、經三四箇年間、无指其主、而秋友請當土之刀禰、郡內所司證判、

四至
西限拾玖條參里壹坪戌亥角　北限貳拾條參里壹坪□□□〇中略

右任去七月十三日官符并廳宣之旨、打牓示注坪付、所立券進如件、謹解、

寛治四年十月九日

傍吏少領忌寸部近光

郡司大領播磨經成

田所書生大判官代佐伯爲任

税所書生總大判官代宗武部致任使

左大主息長吉定

郡公文

〔嚴島文書〕立券本紙正副二張アリ

言上一御社御領志道原御庄御倉敷牓示內畠在家撿注帳事

合

畠貳町陸段〇中略　在家拾陸宇〇中略

右御倉敷佐東郡內伊福郷堀立江上牓示一所打定如件、以解、

仁安元年十一月十七日

郡公文佐伯末利花押

使權介藤原忠信花押

税長

〔享祿本類聚三代格六〕太政官符

應給食偁丁事〇中略

税長　正倉官舍〇院別三人中略

右〇中略所定如件〇中略

弘仁十三年閏九月廿日

〔觀古雜帖一〕栢殖郷長解　申常地賣買墾田立券事〇中略

廳宣　高田郡

補二任郡司職一事

總大判官代藤原朝臣賴方

右依下爲二先祖相傳所領一補中任郡職上補任如レ件、

天喜元年二月五日　　大介藤原朝臣花押

郡收納

〔今昔物語二十四〕播磨國郡司家女讀二和歌一語第五十六

今昔、高階ノ爲家朝臣ノ播磨守ニテ有ケル時、指セル事无キ侍有ケリ、名ハ不レ知ラ、字ヲバ佐太トゾ云ケル、守モ名ヲバ不レ呼テ佐太トゾ呼ビ仕ヒケル、サシタルコトハ无カリケレドモ、年來□ラ、ナ被レ仕ケレバ、賤ノ郡ノ收納ト云事ニ充テ有ケレバ、喜ビテ其郡ニ行テ、郡司ガ宿ニ宿テ可レ成キ物ノ沙汰ナドシテ、四五日許有テ館ニ返ニケリ、略○下

郡書生
郡案主

〔享祿本類聚三代格六〕太政官符

應レ給二食傜丁一事略○中

郡書生大郡八人　上郡六人　中郡四人　下郡三人　每郡案主二人略○中

右略○中所レ定如レ件、略○中

弘仁十三年閏九月廿日

〔古文書類纂中〕堀河天皇寛治四年賀茂神社坪付劵

郡司解　申立劵進賀茂別雷神□□□

合

在管三津鄉

東限二貳拾條肆里拾玖坪辰巳角一　南限拾玖條肆里拾貳坪未□□

墾田主大藏秦公廣吉女〇以下署名七人略

郷長依智禰益

擬主帳外初位上平群益長

天長二年十月三日

轉。擬。大領外從七位下依知秦公吉繼

副擬大領外正七位下依知秦公名手

擬少領從八位上依知秦公

（東大寺小櫃文書下）東大寺越前國庄庄券〇中略

天平神護三年二月廿二日　今主生江廣成

相知戶主生江子公

郡。目。代。生江臣長濱

生江臣息嶋

知外少初位上生江臣村人

郡目代
郡小目代

（東寺百合古文書み之自三十至四十八）仁和寺宮廳申、當國圓城寺領事、決斷所牒幷國宣如此、早任被仰下之間、可被致沙汰之狀如件、

十二月十九日〇建武元年　　左衛門尉判

近江國愛智郡小目代殿

郡代職

（東寺百合古文書イ之自七十至九十七）愛宕郡々代職事、與重可致執沙汰之由候、〇中略若違候得ば、當所務之事可支申候、恐々謹言、

九月七日　　杉兵庫助
與重

郡司職

（集古文書十四廳宣）天喜元年廳宣安藝國佐伯郡嚴島社藏

以解、

仁壽四年十月廿五日　　墾田主依知秦秋男〇中略

頭領依知秦

依知秦公永吉

擬主帳播守連

判之

擬大領正七位上依知秦成登

副擬少領從八位上調忌寸

擬少領大初位下依知□公

〔類聚三代格七〕太政官符（應依延暦十九年二月廿六日符見任主帳轉擬主政及復任等人、同准前格停勞入京、）

停止轉擬郡司向京事

右得武藏國解偁、案神龜五年四月廿三日格云、銓擬郡司、自今以後轉任少領、擬大領闕者、待有堪用新人、然後一時轉擬者、因玆轉擬、新擬、相共參朝、而收納正税、貢上調庸、此尤盛時、望請新擬少領依期貢上、轉擬大領留國預務、然則各得其處、雜務易濟者、被大納言從三位神王宣偁、奉勅依請、諸國亦准此、

延暦十六年十一月廿七日

〔古文書類纂中解〕淳和天皇天長二年近江國愛智郡司解

愛智郡司解　申百姓賣買墾田立劵文事

合參段佰貳拾步　直稻壹佰貳拾束

十二條九里六新治田者（今益一段二百步）

右〇中略所陳有實、仍勒賣買兩人署名、申送以解、

副擬任

主政外小初位上勳業林臣

擬主政無位出雲臣

〔續日本紀十二聖武〕天平七年五月丙子制、畿內七道諸國○諸國下恐脫郡司二字宜除國擬外別簡難波朝廷○孝德以還譜第重大四五人副之、如有雖无譜第而身才絕倫幷勞勤聞衆者、別狀亦副、並附朝集使申送、其身限十二月一日集式部省、

〔東大寺小櫃文書上〕香山藥師寺鎭三綱牒　攝津職東生郡務所

賣買庄地立劵事○中略

神護景雲三年九月十一日○中略

擬大領正七位下難破忌寸○中略

副擬少領无位日下部忌寸諸前

〔類聚三代格七〕太政官符

應禁斷副擬郡司事

右被大納言從三位神王宣偁、奉勅、郡司之員明具令條、而諸國司等一員有闕、便擬數人、正員之外、更置副擬、無益公務、已潤私門、使漁百姓、莫過斯甚、自今以後、簡堪時務者擬用闕處、正任之外、不得復副、

延曆十七年二月十五日

〔仁壽四年近江國愛智郡大國鄉田劵〕大國鄉戶主依知秦公秋男解申依正稅常主賣買墾田立劵文事

合壹段佰貳拾步　直稻肆拾伍束

十三條九里卅一佁出田一段佰貳拾步

右件墾田正稅稻肆拾伍束充價直功常主與賣同鄉戶主依知秦公福行既畢、望請依式立劵文如件、

主帳无位高向毗登眞立

〔類聚三代格七〕太政官符

應陸奧出羽兩國正員之外擬任郡司軍毅事

右中納言征夷大將軍從三位兼行中衛大將陸奧出羽按察使陸奧守勳二等坂上大宿禰田村麻呂起請偁、郡司之任、職員有限、而邊要之事、頗異中國、望請擬任幹了勇敢之人、宜爲防守警備之儲者、右大臣宜、奉勅依請、

大同元年十月十二（〇二一本作一）日

〔三代實錄清和一〕天安二年十二月八日乙未、太政官論奏曰、對馬嶋下縣郡擬大領外少初位下直氏成、上縣郡擬少領無位直仁徳等率郡內百姓首從十七人、發兵射殺守、〇下略

〔類聚三代格七〕太政官符

應停止諸國擬任郡司遷拜他色事

右得近江國解偁、郡中百姓、雖有其數、堪郡司者、不過一兩、仍撰定其人、差充調庸租稅等預、或爲舊年調庸綱領、未究預事、或爲當時租稅專當、多有所負、而稱任諸國之吏、號拜親王家司、不勤公事、專利私門、非唯規避一身之宿債、抑亦驅勸部內之百姓、若不立斷制、則彌紊風敎、望請擬任郡司停止任內外官幷補家令已下職、謹請官裁者、右大臣宜、奉勅依請、自今以後、擬任郡司、隱匿其職、被拜除者、隨國司請、即從解却、諸國准此、

寛平五年十一月廿一日

〔出雲風土記意宇郡〕通國東堺手間剗四十一里一百八十步、〇中略前件一郡入海之南、此則國務也、

郡司主帳（無位海臣、無位出雲臣）

少領從七位上勳業出雲臣

外大初位上佐伯豐石兵七十人來歸官軍、又豐前國百姓豐國秋山等殺逆賊三田塩籠、又上毛郡擬大領紀宇麻呂等三人共謀斬賊徒首四級、

〔續日本紀十四聖武〕天平十四年八月丁酉、詔、○中略其三嶋擬郡司幷成選人等身留當島、名附筑前國、申上、仕丁國別點三人、皆悉進京、

〔東大寺小櫃文書上〕十市郡司解　申立賣買地劵事○中略

天平寶字五年十一月廿七日○中略

郡司擬大領外正七位下忍海連法麿

擬主帳无位大伴大田

〔東大寺小櫃文書上〕東大寺三綱牒　攝津職○中略

東西二郡司勘知已訖

東生郡擬大領正八位上難破忌寸濱勝

擬少領少初位下日下部忌寸主守

西生郡擬大領從八位上吉志船人

擬少領少初位下三宅忌寸廣種

擬主政正八位下津守連白麿

天平寶字五年三月七日

〔東大寺小櫃文書上〕香山藥師寺鎭三綱牒　攝津職東生郡務所

賣買庄地立劵事○中略

都維那傳燈住位僧春幸○中略

神護景雲三年九月十一日

郡依寺家牒勘察知實

擬大領正七位下難破忌寸

擬少領无位日下部忌寸人綱

副擬少領无位日下部忌寸諸前

權任

天慶二年三月十八日〇又見選敍令集解

〔延喜式 二十二 民部〕凡權任郡司、不給職田、但大宰府書生帶郡司者、不在此例、

〔類聚三代格 七〕太政官符

應直府書生權任郡司事

右得大宰府解偁、府所總管九國二嶋、政迹之體、內外相兼、雜務出納、觸色紛繁、監典等早朝就衙、午後分行、多事少人、僅擡大略、唯熟事書生得辨細碎、因茲承前選擇書生、每所配充、永置不替、求得經按、繫名郡司、壹其勤卓、而依太政官去弘仁三年八月四日符、郡司之選一依國定、書生等競就本國、無心留府、雖加捉搦、免而無恥、弘仁七年以來雜公文、至今未進、職斯之由、望請直府書生、隨其才權任主帳以上、總數莫過十人、名繫郡司身留府衙、以繼譜之慶、肅奔躁之心者、右大臣宣、奉勅依請、

天長二年八月十四日

〔續日本後紀 三 仁明〕承和元年十二月己巳、佐渡國言、國例每郡郡司一人專當貢賦、冬中勤備、夏日上道、而或遭風波、留連海上、或供相撲節、不得早歸、此際無人充用、郡政擁滯、請正員外每郡置權任員、支配雜務、許之、

〔續日本後紀 八 仁明〕承和六年三月丙申、停給內外權任郡司職田、

〔三代實錄 十二 淸和〕貞觀八年五月八日辛亥、椿戶門主、〇中略自修解文偁、親父宮成任久慈郡權。主。政。、貞觀六年死、弟妹多數、無人育養、望請返附本貫、以繼家業、詔許之、

〔三代實錄 四十九 光孝〕仁和二年十二月廿八日壬申、令讚岐國諸郡大少領主政主帳、正員之外每色各任權員一人、

擬任

〔續日本紀 十三 聖武〕天平十二年九月己酉、大將軍東人等言、豐前國京都郡大領外從七位上楉田勢麻呂將兵五百騎、仲津郡擬少領无位膳東人兵八十人、下毛郡擬少領无位勇山伎美麻呂、筑城郡擬少領

循彼例、置大少領者、國司覆審、所申有實、望請官裁、准彼兩郡、新置少領、爲大少員者、右大臣宣、奉勅依請、

元慶八年十月十七日

太政官符

應置新居郡主政事

右得伊豫國解偁、彼郡解偁、此郡郷戸雖少、部内曠遠、出擧收納、往還多劇、而郡司員少、勤致闕怠、望請始置主政之職者、國司覆審所申有實、望請官裁者、右大臣宣、奉勅依請、

仁和二年十月〇十月、三代實錄作十一月、廿三日

太政官符

應省名東郡主帳一員置名西郡事

右得阿波國解偁、名西郡司解偁、名東名西二箇郡元爲一郡之時、置件職二員、而依太政官去寬平八年九月五日符旨、分爲兩郡、七箇郷爲名東郡、四箇郷爲名西郡、而未置此職、已違令條、望請官裁、省彼一人、爲此郡員者、國加覆覈、所申有道〇道一本作實、謹請官裁者、大納言正三位兼行左近衞大將藤原朝臣時平宣、奉勅依請、

昌泰元年七月十七日

員外

〔續日本紀 三十三光仁〕寶龜六年四月壬申、授川部酒麻呂外從五位下、酒麻呂〇中略爲入唐使第四船柁師、〇中略以功授十階、補當郡員外主帳、至是授五位、

〔續日本紀 三十六桓武〕天應元年六月戊子朔、詔曰、〇中略宜內外文武官員外之任、一皆解却、但郡司、軍毅不在此限、

〔類聚三代格 七〕勅、諸國郡司主帳已上、員外之職、遭喪解任、更莫復任、自今以後、永爲恒例、權任亦同、

六月十三日申官分置件郡、卽管郷六、戸二百九十七、課丁二千三百六、備進調庸出擧官稻、郡司少員、濟事乏人、望請因循御野郡被置件員、令濟郡務、謹請官裁者、從二位行大納言兼左近衞大將源朝臣多宣、奉勅依請、

元慶四年十一月五日

〔類聚三代格七〕太政官符

應置久米郡大少領事

右得伊豫國解偁、彼郡司解偁撿案內、桑村久米兩郡管鄕各三、人數共同、輸貢之物亦無增減、而桑村郡有大少領、至于此郡只有領職、望請准彼郡置大少領者、國司覆審所申有實、謹請官裁者、正三位行中納言兼民部卿藤原朝臣冬緒宣、奉勅依請、

元慶五年十月九日

太政官符

應置赤坂郡主政一員事

右得備前國解偁、件郡鄕六、戸二百九十三、課丁千七百卅六、調庸租稅各有其數、與御野磐梨郡賦稅殆等、望請准彼兩郡加任主政者、正三位行中納言兼右近衞大將皇太后宮大夫陸奥出羽按察使藤原朝臣良世宣、奉勅依請、

元慶五年十一月三日

〔類聚三代格七〕太政官符

應置喜多郡少領事

右得伊豫國解偁、彼郡解偁、桑村久米兩郡管鄕各三、課丁或七百廿五、或七百二、皆有大少領、今此郡鄕數既同、課丁三千二百八、輸貢調庸多倍彼郡、而只有領一人、主帳一人、辨濟雜務、動致綏怠、望請因

〔三代實錄八清和〕貞觀六年四月十日丙寅、阿波國勝浦郡加置少領一員、

〔三代實錄十清和〕貞觀七年五月廿五日乙巳、讃岐國三野郡置主政一員、

〔三代實錄十三清和〕貞觀八年十月廿三日甲午、伊豫國浮穴郡置少領一員、　十一月廿五日丙寅、勅、阿波國名方郡加置主政、主帳各一人、

〔三代實錄十四清和〕貞觀九年八月十四日庚辰、加置美作國苫東郡大領一員、苫西郡少領一員、

〔類聚三代格七〕太政官符

應宇和郡爲下郡置大少領事

右得伊豫國解偁、件郡元三鄕、今戶口增益新加一鄕、而有領一員、郡務難濟、望請依令爲下郡置大少領、謹請官裁者、右大臣宣、奉勅依請、

貞觀十六年閏四月十九日

太政官符

應加置那珂郡主政主帳各一員事

右得讃岐國解偁、彼郡解偁、新立一郡、所管稍多、而郡司少員、事多闕怠、撿案內、山田郡十鄕餘戶、課口一千七百六十、既置主政二員主帳二員、而此郡十鄕、課口二千八十、只置主政一員主帳一員、望請因准彼郡、加置件職各一員、以濟雜務者、國加覆審、所申有實、謹請官裁者、從二位行大納言兼左近衞大將源朝臣多、宣、奉勅依請、

元慶四年三月廿六日

〔類聚三代格七〕太政官符

應加置磐梨郡主政一員事

右得備前國解偁、撿案內、件郡元與和氣郡爲一郡、而其間有一大川、吏民往還有煩、仍以去延曆七年

〔令義解〕二戸凡郡以廿里以下十六里以上爲大郡、謂郡不得過千戸、若餘五十戸以上者、隷入比郡、若隷入比郡地勢不便、或不讓己而應分者、別錄申官、其定國大小、可有別式、十二里以上爲上郡、八里以上爲中郡、四里以上爲下郡、二里以上爲小郡、

○按ズルニ、日本書紀大化二年改新ノ詔ニハ、凡郡以四十里爲大郡、三十里以下四里以上爲中郡、三里爲小郡トアリ、

〔續日本紀〕五元明和銅四年四月甲申、大倭國芳野郡、始置大少領各一人、主政二人、主帳一人、

〔續日本紀〕十聖武天平元年四月壬戌、播磨國賀茂郡加主政主帳各一人、

〔續日本紀〕十三聖武天平十一年五月甲寅、詔曰、諸國郡司、徒多員數、無益任用、侵損百姓、爲蠹實深、仍省舊員、改定大郡大領、少領、主政各一人、主帳二人、上郡大領、少領、主政、主帳各一人、中郡大領、少領、主帳各一人、下郡亦同、小郡領、主帳各一人、

〔日本後紀〕二十一嵯峨弘仁二年八月乙丑、上總國海上郡加置主政一員、

〔續日本後紀〕十三仁明承和十年五月丙申、石見國美濃郡分割爲兩郡、本郡依舊爲美濃郡、新郡取邑號爲鹿足郡、其職員者准小郡、析元四員、分取一人、更加一員、總置二員、本郡則准下郡、置三員、武藏國那珂郡元來小郡、官員約小、而今戸口增益、結定四鄕、政多職少、不堪頒行、據准令條、誠將下郡、改小爲下、更增一員、又讃岐國大內郡小郡、只有領帳、領則領調入京、帳猶留國韰務、非常移病、无人從公、加之鄕戸田數既堪下郡、改小爲下、加領一員焉、

〔續日本後紀〕十六仁明承和十三年四月己丑、依大宰府解、置大隅國桑原郡主政一員、○本條據一本

〔三代實錄〕四清和貞觀二年十月三日己卯、安藝國佐伯郡始置主政一員、

〔三代實錄〕六清和貞觀四年三月十六日甲申、美作國久米郡始置主政一員、　七月廿七日甲午、安藝國○安藝國三字、據一本補、安藝郡始置主政一員、

〔三代實錄〕七清和貞觀五年六月廿一日壬子、安藝國佐伯郡加置主政、主帳各一員、

永昌元年己丑四月、飛鳥淨御原大宮〈○天武〉那須國造追大壹那須直韋提、評督被賜、〈○中略〉碑在下野國那須郡湯津上村、俗稱笠石、舊在荊棘中、〈○中略〉蒙齋曰、永昌元年當作朱鳥四年、蓋係洗者改作、今審觀之、字樣不類、其說似可信、〈○中略〉評督官名、猶後世郡領也、

〔古京遺文〕妙心寺鐘

戊戌年四月十三日壬寅、收糟屋評造舂米連廣國鑄鐘、

戊戌、文武天皇二年也、〈○中略〉糟屋筑前國郡名、〈○中略〉評造、猶云郡領、古時郡縣用評字、大神宮儀式帳云、難波朝廷天下立評給時、續日本紀天平寶字八年紀載、紀寺奴益人等訴云、本國氷高評人內原直牟羅、其郡司亦稱評督、或稱評督領、文武天皇四年紀、有衣評督衣君縣、又神護景雲元年紀載、阿波國百姓上言曰、評督凡直麻呂、那須直韋提碑云、評督被賜、大神宮儀式帳云、小乙下〈○中略〉久米勝麻呂評督領仕奉是也、〈繼體天皇紀、韓地名有背評、傍訓遠己富里、本注云、背評地名、亦名能備己富里、新羅其邑在內曰啄評、則知古時郡縣用評字、又訓己富里、並韓國方語也、〉

〔續日本紀 一 文武〕四年六月庚辰、薩末比賣、久賣、波豆、衣評督衣君縣、助督衣君弖自美、〈○中略〉持兵剽劫覓國使刑部眞木等、

〔續日本紀考證 一 文武〕衣評督〈(中略)評督蓋郡大領、下助督乃少領也、案韓方言謂郡爲評、〉

〔令義解 一 職員〕大郡　大領一人、〈掌撫養所部、檢察郡事、餘領准此、〉少領一人、〈掌同大領、〉主政三人、〈掌糺判郡內、審署文案、勾稽失、察非違、餘主政准之、〉主帳三人、〈掌受事上抄、勘署文案、檢出稽失、讀申公文、餘主帳准此、〉

上郡　大領一人、少領一人、主政二人、主帳二人、

中郡　大領一人、少領一人、主政一人、主帳一人、

下郡　大領一人、少領一人、主帳一人、

小郡　領一人、主帳一人、

郡司初見

姓、共率親族、永不闕貢、並許之、

〔日本紀略醍醐一〕延喜十年七月一日戊子、大和國言、管城上郡六月廿一日、午時許郡。院。西路河邊棄靈異物、

○按ズルニ、郡院ハ郡家ナリ、

〔日本書紀天武二十九〕十三年十月壬辰、逮于人定、大地震擧國男女叫唱、不知東西、則山崩河漏、諸國郡官舍、○中略破壞之類、不可勝數、

〔日本書紀孝德二十五〕大化元年八月庚子、拜東國等國司、仍詔國司等曰、○中略上京之時、不得多從百姓於己、唯得使從國造郡領、　二年正月甲子朔、宣改新之詔、○中略其二曰、○中略凡郡以四十里爲大郡、三十里以下四里以上爲中郡、三里爲小郡、其郡司並取國造性識清廉堪時務者、爲大領(コホリノミヤツコ)小領(スケノミヤツコ)、強幹聰敏工書筭者、爲主政(マツリゴトヒト)主帳(フミヒト)、

〔常陸風土記多珂郡〕至難波長柄豐前大宮臨軒天皇孝德之世、癸丑年、多珂國造石城直美夜部、石城評。造。部志許赤等、請申總領高向大夫、以所部遠隔、往來不便、分置多珂石城二郡、

○按ズルニ、評造ハ郡領ナリ、下ニ引ケル古京遺文ニ見ユ、

〔皇大神宮儀式帳〕難波朝廷孝德天下立評給時仁、以十鄕分氏度會乃山田原立屯倉氏新家連阿久多督。領。、礒連牟良助。督。仕奉支、以十鄕分竹村立屯倉、麻績連廣背督。領。礒部直夜手助。督。仕奉支、○中略近江大津朝廷天命開別天皇天智御代仁、以甲子年小乙中久米勝麻呂仁、多氣郡四箇鄕申割氏、立飯野高宮村屯倉氏評。督。領。仕奉支、卽爲公郡之、

○按ズルニ、評ハ郡ナリ、督領助督ハ大領少領ナリ、

〔日本書紀天武二十八〕元年六月甲申、天皇入東國、○中略還伊賀中山、而當國郡司等、率數百衆歸焉、

〔古京遺文〕那須直韋提碑

郡家 郡院

〔日本書紀 三十 持統〕八年三月甲午、詔曰、凡以無位人任郡司者、以進廣貳授大領(コホノミヤツコ)、以進大參授小領(スケ)、

〔延喜式 十八 式部〕凡喚主政帳知勝船事、並用音、

〔西宮記 四月〕郡司讀奏

大領 古保乃ミヤツコ 少領 スケノミヤツコ、又スナイミヤツコ、

〔北山抄 三 拾遺雜抄〕讀奏事

大領 古本乃ミヤツ古、又大古本乃ミヤツ古、少領 須介乃ミヤツ古、哉 領 古本乃ミヤツ古、或説大領、於本以ミヤツ古、今領ミヤツコ、説尺上、是式部例歟、○中略 擬大小領 加利乃

〔口遊 官職〕大領　少領　主政　主帳 謂之郡

〔拾芥抄 中本 官位唐名〕郡司 縣令 大領 縣令 少領 縣丞 主政 縣主簿 主帳 縣錄事

〔倭名類聚抄 九 國郡〕郡家 久字

〔常陸風土記〕古老曰、難波長柄豐前大宮馭宇天皇 ○孝德 之世、癸丑年、茨城國造小乙下壬生連麿、那珂國造大建壬生直夫子等、請總領高向大夫中臣幡織田大夫等、割茨城地八里、那珂地七里 ○那珂地七里 五字、標註古風土記據吉田令世説所補、合七百餘戸、別置郡家、所以稱行方郡者、

〔日本書紀 二十八 天武〕元年六月壬午、運湯沐之米、伊勢國駄五十匹、遇於菟田郡家頭(コホリノミヤケノホトリ)、○中略 從駕者衣裳濕、以不堪寒、及到三重郡家、焚屋一間、而令熅寒者、　丙戌、天皇宿于桑名郡家、

〔出雲風土記 意宇郡〕屋代郷、郡家正東卅九里一百二十歩、

○按ズルニ、本書ニハ郡家甚ダ多シ、今其一ヲ掲グルノミ、

〔續日本紀 七 元正〕靈龜元年十月丁丑、陸奥蝦夷第三等邑良志別君宇蘇彌奈等言、親族死亡、子孫數人、常恐被狄徒抄略乎、請於香阿村造建郡家、爲編戸民、永保安堵、又蝦夷須賀君古麻比留等言、先祖以來、貢獻昆布、常採此地、年時不闕、今國府郭下相去道遠、往還累旬、甚多辛苦、請於閇村便建郡家、同百

ヲ得、

郡司ヲ補任スルニハ、國司ニテ先ヅ其人ヲ選拔シ、之ヲ朝集使ニ附シテ、其歷名ヲ式部省ニ進メ、其身ハ正月ニ至リ省ニ集マル、省ニテハ其簿ヲ勘造シ、具ニ功過ヲ顯ス、二月ニ至リ、銓擬ノ人ハ又省ニ集リ、輔ノ前ニテ自ラ譜第ヲ唱フ、後日又省ニ向ヒ、試驗ニ應ズ、卿自ラ等第ヲ判シ、之ヲ黜陟ス、四月ニ至リ、御前ニ於テ讀奏ノ儀アリ、讀奏者ハ銓擬者ノ數、及ビ七道ノ名、國ノ名、銓擬者ノ姓名、譜第ノ有無、勞效、越擬等ノ事ヲ讀奏シ、大臣一々其定不ヲ點シ、五六月ニ至リ、太政官ニ於テ宣命ヲ以テ之ヲ任ジ、幷ニ位階ヲ賜フ、是ヲ郡司召ト云フ、郡司召ノ後、任符ヲ其國ニ下スナリ、其任叙セラルヽ人ニハ、新ニ少領大領トナルアリ、少領ヨリ大領ニ進ムアリ、而シテ主政主帳ノ試ニハ、朝集使ヲ召サズ、此郡司召ノ制ハ、平安奠都ノ後ニ起リシモノニテ、村上天皇ノ比マデ行ハレシナラム、

名稱

〔伊呂波字類抄〕久官職郡司

〔日本書紀〕六垂仁二年(中略)一云、初都怒我阿羅斯等有レ國之時(中略)黃牛忽失、則尋レ迹覓之跡留二一郡家中一、時有二一老夫一曰、汝所レ求牛者入二於此郡家中一、然郡公等曰、由二牛所一レ負物一而推レ之必設二殺食一、

〔日本書紀〕十四雄略二十三年八月丙子、天皇疾彌甚、○中略遺二詔於大伴室屋大連與二東漢掬直一曰、○中略國司郡司、隨レ時朝集、何不下罄二竭心府一、誡勅慇懃上、

○按ズルニ、類聚三代格弘仁二年ノ詔ニ、郡領者難波朝廷○孝德始置二其職一トアリ、此ニ云フ所ノ郡司ハ當時ノ稱ニアラザルヲ知ルベシ、

〔日本書紀〕二十六齊明五年三月、是月遣二阿倍臣一闕名率二船師一百八十艘一討二蝦夷國一、阿倍臣○中略遂囧二郡領一而歸、授二道奥與二越國司位各二階、郡領與二主政一各一階一、

〔日本書紀〕二十八天武元年六月壬午、當國郡司等率二數百衆一歸焉、會明至二刺萩野一、

官位部三十四

令制官職三十

郡司

郡司ハ國司ニ隷シ、一郡ヲ統治スルモノニシテ、長次官ヲ大領、少領ト云ヒ、判官主典ヲ主政、主帳ト云フ、郡領ハ或ハコホノミヤツコト云ヒ、其國ノ人ヲ取リ、特ニ譜第ヲ擇ブ、而シテ主政、主帳ハ、郡領ノ民ヲ取ルヲ得ズ、其稱ハ之ヲ音讀ス、然レドモ此四等ノ官ハ、郡ノ大小ニ從ヒテ必シモ備ハラズ、並ニ終身官トス、

孝德天皇大化改新ノ時、封建ノ制ヲ廢シ、郡縣トナシ、始テ郡司ヲ置ケリ、是ヨリ先キ、史冊ニ郡司ノ名ナキニアラザレドモ、其實ハ此ニ昉レルナリ、

譜第ノ選モ久シキヲ經テ弊ヲ生ゼシニ由リ、桓武天皇ノ延曆十七年ニハ之ヲ廢止シテ、專ラ才藝ヲ取リ、之ヲ矯正セントセシカドモ、實際猶ホ行ハレザリシニヤ、嵯峨天皇ノ弘仁二年ニ至リ、復先ヅ譜第ヲ取リテ、次ニ藝業ニ及ボスノ制ヲ立テラレタリ、

郡司ノ中ニテ稍ゝ定制ニ異ナルモノハ、畿內郡司ト神郡司トナリ、畿內郡司ハ畿外ノ郡司ニ比スレバ、勞多ク利寡キヲ以テ、擬用ノ日、各ゝ競ヒテ辭退シ、就職ヲ肯ンゼザルガ爲メ、延曆十八年ニ、特ニ內考ニ預ラシメテ、之ヲ奬勵セリ、郡司ハ總テ外考ニシテ、其考限極メテ長ケレバナリ、又神郡司ハ三等以上ノ親ヲ連任シ、一郡同姓ヲ併用スルコトヲ得ルナリ、是皆他ノ郡司ニ在リテハ禁ズル所ナリ、其同姓ヲ併用スルコトハ、邊要ノ郡司モ亦此制ニ循フコト

吉備總領などの類なり、この中に筑紫坂東は邊陲の地なれば、異域の警備其の外數ヶ國の政務をもふさねて、國郡の有司等を管領せしめんとなるべし、周防は殊方の船舶往來の要津なれば、これをおかれしならん、吉備も周防にならひて南海にそひたる所なれば、こゝにも總領をおかれしと見ゆ、其の後筑紫總領は大宰帥に改められ、其の外の總領も廢せられて、國司各其の國の庶務を攝することゝなりぬ、こゝに於て總領の司は絕えしかども、其の稱呼は猶世に殘りしと見ゆ、

罪已下、

○按ズルニ、二監ハ芳野和泉ナリ、

〔續日本紀(十三聖武)〕天平十二年八月甲戌、和泉監幷河內國焉、

〔日本書紀(二十九天武)〕十四年十一月甲辰、儲用鐵一萬斤、送於周芳摠令所、

〔日本書紀通證(三十四天武)〕摠令所(持統紀有伊豫摠領、宋史職官志、總領所便用儲積錢、時丞民篤註外則總領諸侯、)

〔宋史(百六十七職官)〕總領四人、掌措置移運應辦諸軍錢糧、以朝臣充、仍帶幹階戶部等官、朝廷科撥州軍上供錢米則以時拘催、歲較諸州所納之盈虧、以聞于上、而賞罰之、初建炎間、張浚出便川陝、用趙開總領四川財賦、置所繫銜、總領名官自此始、

〔日本書紀(三十持統)〕三年八月辛丑、詔伊豫摠領田中朝臣法麻呂等曰、讃吉國御城郡所獲白鷰、宜放養焉、

〔續日本紀(一文武)〕四年六月庚辰、薩末比賣、久賣、波豆(○中略)持兵剽劫竟國使刑部眞木等、於是勅竺志總領准犯決罰、　十月己未、以直大壹石上朝臣麻呂為筑紫總領、直廣參小野朝臣毛野為大貳、直廣參波多朝臣牟後閉為周防總領、直廣參上野朝臣小足為吉備總領、

〔常陸風土記〕常陸國司解　申古老相傳舊聞事

至難波長柄豐前大宮臨軒天皇(○孝德)之世、遣高向臣中臣幡織田連等、總領自坂以東之國、于時我姫(アヅマ)之道、分然為八國、常陸國居其一矣、

〔常陸風土記(行方郡)〕古老曰、難波長柄豐前大宮馭宇天皇之世、癸丑年、(○白雉四年)茨城國造小乙下壬生連麻呂、那珂國造大津壬生直夫子等、請總領高向大夫、中臣幡織田大夫等、割茨城地八里、那珂地七里(○那珂地七里五字、標註古風土記據吉田令世說所補、)合七百餘戶、別置郡家、所以稱行方郡、

〔播磨風土記(揖保郡)〕廣山里(○中略)石川王為總領之時、改為廣山里、

〔武家名目抄(職名三十)〕按、總領の稱は古くより見ゆ、いはゆる筑紫總領、坂東總領、又は周防總領、

和泉監

〔續日本紀考證五聖武〕芳野監未詳置在何時

〔續日本紀十二聖武〕天平八年七月丁亥、詔賜芳野監及側近百姓物、十一月甲午、詔免京四畿內及二監國今年田租、以秋稼頗損也、

〔續日本紀十三聖武〕天平十年十月丁卯、免京畿內芳野和泉監今年田租、

〔續日本紀七元正〕靈龜二年五月癸卯、充儈綱及和泉監印、六月丁卯、始置和泉監史生三人、

〔續日本紀十一聖武〕天平四年九月辛丑朔、賑給和泉監佰姓、

〔東大寺正倉院文書十三〕和泉監天平九年正稅帳〇中略

動用　東第貳板倉(中略)天平六年佰從八位上土師宿禰比夏夫收納者、〇中略

已上大鳥郡

〔東大寺正倉院文書十四〕日根郡天平八年稅帳遺定稻穀伍仟漆伯貳拾捌斛陸升捌勺壁撮〇中略

監月料稻壹伯捌拾壹束、故令史將從二人、起天平九年正月一日迄七月四日、合一百八十一日、日別一束、〇中略

監巡行部內單參伯參拾陸人官人一百十二人、從二百廿四人、食稻壹伯壹拾貳束、一百十二人、別四把、二百廿四人、別三把、酒壹斛三升捌合七十一人、別八合、卌一人、別一升、料稻壹拾捌束壹把陸分〻之伍、

祭幣帛幷大祓使從七位下村國連廣田　將從貳人　從監史生壹人　將從壹人經壹箇日、

食稻壹束漆把　酒壹升捌合

祭幣帛使位子无位丸連羣麿　將從壹人　從監正將從參人　經壹箇日、　食稻貳束　酒貳升

修理池、史生壹人　將從壹人　經貳拾箇日、　食稻壹拾肆束　酒壹斗陸升

出擧正稅、正令史、史生壹人、將從陸人、貳度、經壹拾壹箇日、食稻參拾參束、酒三斗捌合、

〔續日本紀十一聖武〕天平四年十一月丙寅、又曲赦京及畿內二監天平四年十一月二十七日昧爽已前徒

目代をさして、國をおさめしかば、いかでか亂國とならざらん、いはんや文治のはじめ、國に守護職を補し、庄園郷保には地頭をおかれしより此かたは、更に古へのすがたと云ことなし、

○

攝津職

〔日本書紀天武二十九〕六年十月癸卯、内大錦下丹比公麻呂爲攝津職大夫、

〔令義解職員一〕攝津職帶津國

大夫一人、掌祠社、謂、祠者、祭百神也、社者、拔諸社也、凡稱祠社者、皆准此例、戸口、簿帳、字養百姓、勸課農桑、糺察所部、貢擧、孝義、田宅、良賤、訴訟、市廛、度量輕重、倉廩、租調、雜徭、兵士、器仗、道橋、津濟、過所、上下公使、郵驛、傳馬、闌遺雜物、検校舟具、及寺、僧尼名籍事、亮一人、大進一人、少進二人、大屬一人、少屬二人、史生三人、使部卅人、直丁二人、

〔令義解官位一〕正五位上階〇攝津大夫　從五位下階〇攝津亮　從六位下階〇攝津大進　正七位上階〇攝津少進　正八位下階〇攝津大屬　從八位上階〇攝津少屬

〔續日本紀光仁三十二〕寶龜三年十一月丁丑朔、從五位下大中臣朝臣繼麻呂爲攝津亮、

〔續日本紀桓武四十〕延暦八年十一月壬午、停攝津職勘過公私之使、

〔日本紀略桓武〕延暦十二年三月丁亥、改攝津職爲國、

〔令集解公式三十四〕凡在京諸司爲京官、（中略）朱云、攝津職可爲京官、但參朝事者、可同外官者、未明、穴云、問攝津職者爲京官哉、答然也、又問下符攝津者捺内印哉、答預百姓事者捺也、預攝津事者捺外印耳、

河内職

〔續日本紀稱徳三十〕神護景雲三年十月甲子、詔以由義宮爲西京、河内國爲河内職、〇中略從四位上藤原朝臣雄田麻呂爲河内大夫、本官如故、從五位上紀朝臣廣庭爲亮、法王宮大進外從五位下河内連三立麻呂爲兼大進、外從五位下高安忌寸伊賀麻呂爲少進、

芳野監

〔續日本紀聖武十一〕天平五年正月丙寅、芳野監讃岐淡路等國、去年不登、百姓飢饉、勅賑貸之、

〔御成敗式目諺解 二〕一國司領家成敗不レ及二關東御口入一事
國司領家ノ人ニイロハレズシテ、昔ヨリ成敗シキタレル事ヲ、其領中ノ神社佛寺トシテ、甚下知ヲ背キ、關東ヨリ、國司領家ヘ御口入ヲ成サレテト申ス事也、此儀ハナニト懇望申ス共、關東ヨリ御口入アルベカラズ、本寺ヲ末寺ノ背キ、檀那ヲ寺ヨリ背キ、宗領ヲ庶子ヨリ背キ、主君ヲ臣下ノ背キ、本所ヲ名主百姓ノ背クヲバ、權家ヲ相語テウシロダテニシテ、シソコナハヾ、口入ニセント思フヨリシテ、起ル事也、國司ハ年限ヲ以テナル也、任限過レバ、前キノナンノ守ト稱スルカ、ナンノ前司ト號スルカ、二ツニ一ツ也、今任限過タル人ノ理運ニナンノ守ト書クハ無故實也、昔ハ國司ニ成レバ、卽チ其國ヘ下ッテ、三年ノ間其國ヲモチテ、其國ノ名ヲ稱スル也、大和守トモ、山城守トモ稱スル也、三年過レバ、其國ニ限テ前ノ大和守トモ、前ノ山城守トモヨブ也、若シ國司ノヨク國ヲ治ル事アレバ、任ヲ延ベテ今三年モモッ也、當時ノ受領ハ、其國ヲバ不レ持シテ、タヾ國ノ守ニナレバ是ヲバ未。公。文。ノ。受。領。ト云、未公文ノ受領モ任限スギバ、前ノ字カ前司ノ字カヲ加ベキ也、歌ノ懷紙ナドニモ、此ヲ分別シテ書クベキ事也、昔ノ國司ト云フナリ、領家ハ領主ヲ云、家ハ公卿ノ美稱也、未公文ヲミクモントヨムベシ、

〔神皇正統記 後醍醐〕昔は〇中略そのこと、なく不輸の地を立らるゝ事のなかりしにこそ、國に守有、郡に領あり、一國の內みな國命の下にておさめしゆへに、法にそむく民なし、かくて國司の行迹をかんがへて賞罰ありしかば、天下の事掌をさしておこなひやすかりき、其中に諸院諸宮に御封あり、親王大臣又かくのごとく、其外官田職田とてあるも、みな官符を給りて、其所の正税をうくるばかりにて、國は皆國司の吏務なるべし、〇中略中古となりて、庄園おほく立られ、不輸のところいできしより、亂國とはなれり、〇中略白河鳥羽の御時より、新立の地いよ〳〵おほくなりて、國司のえる所百分が一に成ぬ、のちさまには國司任におもむく事さへなくて、其人にもあらぬ

然カ候フ事也、手便ニ候ハム物ヲバ、何カ取セ不給ハザラム、誰ニ候フトモ不取テ可候キニ非ズ、本ヨリ御心賢ク御マス人ハ、此ル可死キ極ニモ御心ヲ不騒サズシテ、萬ノ事ヲ皆只ナル時ノ如ク用ヒ仕ハセ給フ事ヲ云候ヘバ、不騒此ク取ラセ給ヒタル也、然レバ國ノ政ヲモ息コヘ、物ヲモ吉ク納メサセ給テ、御思ノ如クニテ上ラセ給ヘバ、國ノ人ハ父母ノ様ニ戀惜ミ奉ツル也、然レバ末ニモ萬歳千秋可御マスベキ也ナド云テゾ忍テ己等ガドチ咲ヒケル、此レヲ思フニ、然許ノ事ニ値テ肝心ヲ不迷ハサズシテ、先ヅ平茸ヲ取テ上ケム心コソ、糸ムク付ケレ、増シテ便宜有ラム物ナド取ケム事コソ思ヒ被遣ルレ、此レヲ聞ケム人、爭ヒ悪ミ咲ケルトナム語リ傳ヘタルトヤ、

〔今昔物語三十一〕大藏史生宗岡高助傅娘語第五
今昔、大藏ノ最下ノ史生ニ宗岡ノ高助ト云フ者有キ、〇中略上日ノ者、宮ノ侍、可然キ諸司ノ尉ノ子ナド聟ニ成ラムト云セケレドモ、高助目ザマシガリテ、交ヲダニ不取入サセザリケリ、只賤クトモ前追ハム人ヲコソ出シ入レテ見メ、極カラム近江。播磨。ノ守。ノ子也トモ、前追ザラム人ヲバ、我ガ御前達ノ御當リニハ、何デカ寄セムナンド云テ、聟取モ不爲ザリケル程ニ、〇下略

〔三代實錄五十仁和〕仁和三年六月八日庚戌、從四位下行信濃守橘朝臣良基卒、良基者左京人、參議從四位下常主孫、而攝津守安吉雄之子也、〇中略卒時六十三、良基雅素清貧、家无守儲、中納言在原朝臣行平賻以絹布、乃得殯葬焉、良基經歷五國受祿之吏、每任罷歸、不載貲、教子孫以潔身、有子男十一人、第六子在公、嘗問治國之道、良基答曰、雖有百術不如一淸、其率性淸白如此矣、

〔古今著聞集神祇一〕一條院御時、上總守時重といふ人有、千部の法花經讀誦の願心中にふかゝりけれ共、身まづしくして僧一人かたらふべきはからひなし、思ひかねて、日吉のやしろに詣で、二心なく祈申けるに、神感有て、はからざるに、上總守に成にけり、任國の最前のごとくぶんをもて、千部の經を始てけり、

ニキリメク程ニ、遙ノ底ニ叫ブ音髣ニ聞ユ、守ノ殿ハ御マシケリナド云テ、待叫ビ爲ルニ、守ノ叫テ物云フ音遙ニ遠ク聞ユレバ、其ノ物ハ宣フナルハ、穴鎌、何事ヲ宣フゾ、聞々ケト云ヘバ、旅籠ニ縄ヲ長ク付テ下セト宣フナド、然レバ守ハ生テ物ニ留リテ御スル也ケリト知テ、旅籠ニ多ノ人ノ差縄共ヲ取リ集メテ結テ結繼テ、ソレ〳〵ト下シツ、縄ノ尻モ无ク下シタル程ニ、縄留リテ不引テバ、今ハ下着ニタルナメリト思テ有ルニ、底ニ今ハ引上ゲヨト云フ音聞ユレバ、其ハ引ケト有ナルハト云テ、然上ルニ極ク輕クテ上レバ、此ノ旅籠コソ輕ケレ、守ノ殿ノ乘リ給ヘラバ、重クコソ可有ケレバト云ヘバ、亦或ル者ハ、木ノ枝ナドヲ取リスガリ給ヒタレバ、輕キニコソ有メレナド云テ、集テ引ク程ニ、旅籠ヲ引上タルヲ見レバ、平茸ノ限リ一旅籠入タリ、然レバ心モ不得テ、互ニ顔共ヲ護テ、此ハ何カニト云フ程ニ、亦聞ケバ底ニ音有テ、然テ亦下セト叫ブナリ、此レヲ聞テ、然ハ亦下セト云テ、旅籠ヲシ下シツ、亦引ケト云フ音有レバ、音ニ隨テ引クニ、此ノ度ハ極ク重シ、數ノ人懸リテ絡上タルヲ見レバ、守旅籠ニ乘テ被絡上タリ、守片手ニハ縄ヲ捕ヘ給ヘリ、今片手ニハ平茸ヲ三總許持テ上給ヘリ、引上ツレバ、懸橋ノ上ニ居エテ、郎等共喜合テ、抑モ此ハ何ゾノ平茸ニカ候ゾト問ヘバ、守答フル樣、落入ツル時ニ、馬ハ疾ク底ニ落入ツルニ、我レハ送レテソメキ落行ツル程ニ、木ノ枝ノ滋ク指合タル上ニ、不意ニ落懸リツレバ、其ノ木ノ枝ヲ捕ヘテ下ツルニ、下ニ大キナル木ノ枝ノ障ツレバ、其レヲ踏ヘテ大キナル胯ノ枝ニ取付テ、其レヲ抱カヘテ留リタリツルニ、其ノ木ニ平茸ノ多ク生タリツレバ、難見棄クテ、先ヅ手ノ及ビツル限リ取テ、旅籠ニ入レテ上ツル也、未ダ殘リヤ有ツラム、云ハム方无ク多カリツル物カナ、極キ損ヲ取ツル物カナ、極キ損ヲ取ツル心地コソスレト云ヘバ、郎等共、現ニ御損ニ候ナド云テ、其ノ時ニゾ集テ散ト咲ヒニケリ、守僻事ナ不云ソ、汝等ヨ、寶ノ山ニ入テ手ヲ空クシテ返タラム心地ゾスル、受領ハ倒ル所ニ土ヲ爴メトコソ云ヘト云ヘバ、長立タル御目代、心ノ内ニハ極ク惡シト思ヘドモ、現ニ

とて、則字をもかへ給ひ、赤尾駿河守教政と改る、我身は淺井備前守亮政と改る、此備前守を近江にては故備前守殿と申、其故は、淺井三代目備前守長政と申有之に付、故の字を加へて申けり、三男淺井新助政信を大和守に改、大橋善次郎を安藝守利爲とぞ申ける、如此名替有て、御内外樣の者共まで召集め、一日の酒宴幾千代までとの祝言目出たかりける事どもなり、

〔尾張國郡司百姓等解文〕尾張國郡司百姓等解　申請官裁事〇中略

一請被裁斷守元命朝臣自京下向、毎度引率有官散位從類同不善輩事、

五位一人天文權博士　惟宗是邦　内舍人二人橘理信　藤原重規　同孝廉　同朝佐　大原弘春　良岑松林　伴兼正

右五位以上、諸司官人以下、輙出畿外、禁過已重、而嗜今日之溫潤、竊屬當任之國吏、各無歸京、而皆有留國、在京之日、揚名於上官、追承之時、交情於下列、亂入如雲、騷動同風、晤求方術、地搜土產、如此間、人物共失、猶難期將來、

〔今昔物語〕二十八信濃守藤原陳忠落入御坂語第卅八

今昔、信濃ノ守藤原ノ陳忠ト云フ人有ケリ、任國ニ下テ國ヲ治テ、任畢ニケレバ上ケルニ、御坂ヲ越ル間ニ、多ノ馬共ニ荷ヲ懸ケ、人ノ乘タル馬員不知ズ、次キテ行ケル程ニ、多ノ人ノ乘タル中ニ、守ノ乘タリケル馬シモ、懸橋ノ鉉ノ木ヲ後足ヲ以テ踏折テ、守逆樣ニ馬ニ乘乍ラ落入ヌ、底何ラ許トモ不知ヌ深ナレバ、守生テ可有クモ无シ、廿尋ノ檜榾ノ木ノ下ヨリ生出タル木、末遙ナル底ニ被見遣ルレバ、下ノ遠サハ、自然被知ヌ、其レニ守此ク落入ヌレバ、身聊モ全クテ可有キ者トモ不思エズ、然レバ多ノ郎等共ハ、皆馬ヨリ下テ、懸橋ノ鉉ニ居並テ、底ヲ見下セドモ、可爲キ方无ケレバ、更ニ甲斐无シ、可下キ所ノ有ラバコソハ、下テ守ノ御有樣ヲモ見進ラメ、今一日ナド行テコソハ、淺キ方ヨリ廻リモ尋ネメ、只今ハ底ヘ可下キ樣モ敢テ无ケレバ、何カセムト爲ルナド、口々

茂等、爲宣旨、且放諸國之除目、下野守叙舍弟平朝臣將頼、上野守叙常羽御厩別當多治經明、常陸介叙藤原玄茂、上總介叙武藏權守興世王、安房守叙文屋好立、相模守叙平將文、伊豆守叙平將武、下總守叙平將爲、且諸國受領點定、

〔大館常興書札抄〕一受領事

武藏守　相模守　陸奥守　此三ヶ國は、四職大夫程の用なり、四職大夫とは、修理大夫、左京大夫、右京大夫、大膳大夫事なり、

讃岐守　伊豫守　阿波守　この三ヶ國は、是は左衞門佐、右衞門佐など程事也、

尾張守　安房守　上總介　淡路守　播磨守　伊勢守　攝津守　此七ヶ國は、八省輔ほどの御用なり、八しやうのふと云は、中務大輔、少輔、式部大輔、少輔、治部大輔、少輔、民部大輔、少輔、兵部大輔、少輔の事なり、まへにも大かた雖注之、猶以具書載者也、

此外の受領の事は、諸侍諸家被官人に至るまで任候間、御用捨左衞門尉右衞門尉兵庫助以下おなじ事也、

〔淺井三代記〕五〕淺井新三郎私に備前守となる事

去程に淺井一家會合して申けるは、今度京極殿數千の御勢を以て被取圍候處に、亮政手立宜き故、悉追拂ひ、剰歴々の旗頭共討取候事、弓矢取ての面目なり、其上此功近國他國まで傳り候べきに、其大將の新三郎などゝ名乘給はん事、あまりかる〳〵しく存候間、何れの御國名成とも、下にて私に御受領被成可然存候旨申ければ、新三郎聞給ひ、上より御ゆるしも不受して、受領などゝいふ事は、天のとがめも恐あり、先新三郎にて可有之旨を宣へば、大野木三田村重て申けるは、仰御尤には候へども、下にて國名を付たる其例多く御座候、追付國治りなば、其時參內被成候て、御ゆるしを申下し給ふべし、是非ともにと申ければ、さあらば先舍兄新次郎敎政の名を改むべし

雜載

〔小右記〕寬弘九年〇長和元年五月十七日甲申、參皇太后宮朝講後也、左大臣、右大臣、內大臣、大納言四人、道余、齊公、中納言五人、俊賢、賴通、隆家、行成、忠輔、參議七人、懷平、兼隆、正光、經房、實成、通任、賴定、三位三人、教通、賴宗、憲定、皆先着饗、洗巡下着、此間、左右近官人、幷相府隨身等、舁如舞臺物、正當御殿南階立、搆高欄、曳帽額、不異舞臺、〇中略以五位六位五六人、令置卿相棒物於舞臺、亦令置宮御棒物於同臺、〇中略伊豫守廣業調請僧廿一口裝束、各裹之、廣業不忘舊恩、殊所奉仕云々、但不見衣袈裟、

〔殿曆〕嘉承元年正月廿四日丁巳、今日無指事、今夜予侍宿、去比播磨守基經獻御新物萬石、

〔基量卿記〕延寶五年閏十二月十六日、

美濃國司解申進上廣絹事

合拾疋

右當年御服內進上如件、以解、

延寶五年後十二月十六日

出納中原朝臣職正

守從五位下藤原朝臣行廣

〔復辟次第〕讚岐國司解申進上年料之事

合佰斛

右當年料進上如件、謹解、

元祿二年三月廿七日

正四位上行守源朝臣安枝

直盧吉書

〔將門記〕新皇〇將門勅曰、能才依人爲憐、就人爲喜、口出此言、不及駟馬、所以出言无遂哉、略敗議汝曹无心甚也者、員經卷舌鉗口、默而閑居、昔如秦皇燒書埋儒、敢不可諫矣、唯武藏權守與世王、爲時宰人玄

國司獻物

〔大外記師遠記〕大治二年六月一日、仰河○白云、召遣法橋信縁、可被仰此旨、早出、今者可退出給、其後拭汗退出了、爲後代記之、但物モ不覺之孫曾孫、鼻ヲ爲反古カミ付歟、名人之後、不敵不覺之者出來定事也、況師遠略○中者下愚也、父祖雖神妙、我身不覺、子孫大根死ニ成ル定事也、近代田夫野叟之黨、振觴白日登青天、富佯王室、官列公卿、如師遠者、三代之大外記、三代之二寮頭、二代之大儒、此許雖繼父祖之跡、敢不及萬之一、祖。父。安。藝。守。○中原師任毎年所得米萬石、大孩二艘、榑十万寸、雜穀八千石云云、故。殿。淡。路。守。○平師米毎年六千石、鹽五百餘石云云、此外彼國無別所出、次土。佐。守。○平師無故重任、米毎年三萬石、輕物卅萬疋、油百石、糯三百石、白布三千端、此外不可勝計、次任肥。後。守。○平師下向之時、收始ハ所納之輕物先十萬疋云云、此外二寮頭大炊大儒、其利潤不可計盡、家中男女房蒙恩之輩及百人、車馬闐門、美物盈棚、師遠者待チ待天、所任最亡攝州也、所徵庶米一年不及十石、必託官中樂、又マレマレ雖可出來、或作降魔相盜取、或忘恥穿取、雖二寮長官、受領不濟公文間、絹一疋紙一枚、敢無與人、主殿頭毎月小東薪五束之外無所得、如正方額成、足駄一足、萬壽斷雖責催、兩人相論、小足駄一足ダニ不進上、圖書頭扇紙五枚之外無所得、及數十紙之時、面々捧名簿引取了、是又貪報之然也、期受領事、雖早苗之待霖澤、未任ゼズ尻許闕越中目代、又劣致連百萬里、此間多物ヲ令貯上云々、師遠ハ計所得之時ハ、雖多所持來、米三合和布一帖也、是非人之惡、只貪報之令然也、爲後代所書置也、可令納御前手筥給、淸書可進上也、

〔今昔物語三十一〕大和國人得人娘語第六

今昔、□ノ守□ノ□ト云フ人有ケリ、此ノ人家高キ君達ニテ有ケレドモ、何ナル事ニテカ有ケム、受領ニテ有ケレバ、家豐ニシテ、萬ヅ叶ヒテナム有ケル、

〔續日本後紀十九仁明〕嘉祥二年八月壬辰、參河國守從五位下安倍朝臣氏主獻白馬四十匹、牛四十頭、支子四十斛、爲是奉賀天皇寶算滿于四十也、

成其功、若依職役承恩、則誰人亦超其勤、功勞是一、採擇何殊、今對應揚之人、各翫鵁退之身、大陽之暉、不照何處、厚載之德、不長何物、幸逢堯年、當受比屋之封、久趨舜日、獨抱積薪之歎、臣等聞鶏聲闕、行步鎮踏春冰之薄、待月歸家、鬢髮皆梳秋霜之職、老者少遺日、弱者有餘年、懸車不幾、看形骸而揮涙、携杖左近、計年曆以銷魂、望請特蒙天恩、以有勞諸司、被遷任每年臨時之闕國、各盡奉公之節者、依被擧狀、縫殿頭橘朝臣忠信任加賀守、掃部頭橘朝臣高臣任阿波守已畢、其後時代推移、恩賞無定、就中年來新敍之者、拜任牧宰之輩、暫歷顯要之官、一二年之間、或依他勞、或依氏擧、不待年限、早被敍者、偏假名於當職、同成其望、亦當其選、或自一官一職、頻有被拜除者、何況諸國受領、稱其功者、馬鞍未解、早鞭重山之雲、舟檝未乾、急棹疊浪之岸、以如此之輩、被拜每度之闕、有勞諸司、爭得抽其身、既而富財者成造作之功、少年早飛隼旟之翼、治國者立功課之理、舊吏頻受竹符之任、何世無造作之人、何時無功課之吏、陸沈之歎、諸司未休、兼盛等全節奉公、曉夕無懈、或疲稽古多年之苦、或老勤王累日之功、暴風雷雨之朝、遠近從事、寒雪嚴霜之節、夙夜在公、無家無財、所仰者則明王慈惠之德、不田不桑、所憑者則恩忠苦節之勤、而採擇無期、一生將盡、望請特蒙天恩、以有勞格勤諸司、被遷任件國闕、彌勵勤王之節矣、兼盛等誠惶誠恐謹言、

天元二年七月廿二日　　從五位上行大監物平朝臣兼盛等（在連署）

〔續本朝往生傳〕但馬守源章任朝臣者、近江守高雅朝臣之第二子也、母從三位藤原基子、後一條院御乳母也、自少年時、盛會風雲、補夕郎、預榮爵、歷近衞少將右馬頭、吏於四箇國、（美作丹波伊與但馬）家大豪富、財貨盈藏、米穀敷地、庄園家地、布滿天下、本朝之陶朱猗頓也、

〔おちくぼ物語　一〕御むことりし給ひて、三日のまうけしたまふがまめやかにいかでたいめんもがない、と戀しくなん、何事も猶のたまへ、時の受領者世にとく有ものといへば、たゞ今其はとなめれば、つかうまつらんと、いとたのもしげに侍り、

來之事者不憚人、無偏頗可致沙汰、兼又國司興復之、只在勸農之沙汰、所仰付家景也、而不隨國務所々、家景自身罷向、見知實否、可加下知也、猶不承引之所、可注申、但依人成憚、有偏頗、不申上濫行之輩者、仰家景可處奇怪之狀如件、以下、

建久元年十月五日

〔延喜式雜五十〕凡國司等各不得置資養郡、

〔續日本紀聖武十五〕天平十五年五月丙寅、禁斷諸國司等不住舊館、更作新舍、又到任一度須給鋪設、而毎經年更亦不給之、又各置養郡、勿令煩資養、

〔長秋記〕天永二年七月廿九日、仰云、出羽守光國上洛自任國、留居美濃國所領、可被追下歟、將可任替歟、〇中略左大辨定申云、拋任國上道如何云云者、有訴之由風聞、一端尋子細、可被補替歟、

〔續日本紀光仁三十三〕寶龜六年八月庚辰、太政官奏曰、伏奉去七月二十七日勅、如聞、京官祿薄、不免飢寒之苦、國司利厚、自衣食之饒、因玆庶僚咸望外任、多士曾無廉恥、朕君臨區宇、志在平分、思欲割諸國之公廨、加在京之俸祿、卿等宜詳議奏聞者、臣聞三代弛張、百王沿革、隨時損益、事在利人、〇中略臣等商量、毎國割取公廨四分一、以益在京俸祿、奏可、

〔本朝文粹六奏狀〕請被特蒙天恩以有勞格勤諸司遷任遠江駿河等國守闕狀　平兼盛

右去康保四年二月、村上先帝臨政之日、有勞諸司、逆署申請舉狀、倂謹撿案內、有勞諸司、遷任受領之例、其來尙矣、而頃年之間、拜除如忘、蹤跡已絕、徒積日月之光陰、久濡雨露之渥澤、藏人、外記、官史、式部、民部、大藏丞、織部正、檢非違使等、皆有年限、拜任受領、爰諸司積歲、採用無期、身逐年而老、家隨日而貧、偏憑奉公之節、空忘顧私之慮、妻子漸倦裁縫之苦、僮僕長厭奔走之役、方今或弱冠承恩、或壯年蒙賞、父子同並專城之任、兄弟俱居分憂之職、拜一國者、其樂有餘、金帛滿藏、酒肉堆案、況轉任數國乎、老諸司者、其愁無盡、荆棘生庭、煙火絕爐、況窮苦多年乎、見樂以增悲、對榮以歎悴、若以功勞蒙賞、則諸司皆

右被大納言從三位神王宣、係重喪解職、古今恒典、若有隱匿、卽處嚴科、比聞或貪榮匿服、遂待秩滿、同
條阿容、都無言上、或沒故之狀、預聞遠近、國解遲到、不得解替、此而可恕、焉用法令、自今以後、莫令更然、
若致淹遲、所由之人、除行程之外、計日科罪、

延曆十七年五月十一日

〔類聚三代格七〕太政官符

應顯立科條令懲肅諸國司娶部內女子事

右撰格所起請偁、天平十六年十月十四日格偁、比年國司多娶所部女子爲妻妾、自今以後、悉皆禁斷、
國雖隔越、不得輙娶、若嫁娶與郡司者解却見任、百姓者准解見任罪論之、但家妻聽自將去者、今案格旨、
嫁與郡司殊處重法、躬娶國司不見科責、伏望不論妻妾同解任者、中納言兼左近衞大將從三位藤原
朝臣基經宣、奉勅依請、

貞觀十年六月廿八日

〔中右記〕保延元年八月廿四日、凡近代七道諸國之吏、不濟公事、天下之大私也、○中略以前條々事等、依
有其尋、大略注進、更以此趣可被奏達之狀如件、

八月　　內大臣

謹上　藏人辨殿

〔吾妻鏡十一〕文治六年○建久元年十月五日丙戌、於關下遠陸奥目代解狀到來、仍彼國地頭所務間、有被定
事等、雖爲路驛、猶及此御沙汰、繁務不失寸陰之故也、○中略

一國司御厩佃事

以前條々、背此狀致不當之輩者、可改定地頭職也、且御目代不下向之間、隨留守家景幷在廳之下
知、可致沙汰、但留守家景可同先例於在廳也、國司者自公家被補任、在廳者國司舘也、於先例沙汰

非官長、不肯撿知、遂乃遠至終任、近二三年規避欠負、巧遁罪累、並是在官之日、徒貪俸料、去任之後巧訴解由、既乖憲法、深合懲革、今須此等國司、任中所有欠負未納、並合同預、若不改悛、猶事規避、量情科罪、更不寛宥、

以前勘解由使奏偁、諸國司等違犯多端、不設條例、何以懲粛、謹錄事狀、伏聽天裁者、右大臣宣、奉勅依奏者、諸國承知、立爲恒例、

延暦十九年九月十二日

〔類聚國史八十七刑法〕弘仁三年八月庚寅、上野國介從五位下息長眞人家成、大掾正六位上酒人眞人人上等免、以令郡司私役百姓也、

〔類聚三代格七〕太政官符

應禁制國司任意造館事

右太政官去四月廿六日、下五畿内諸國符偁、撿天平十年五月廿八日格偁、國司任意改造館舍、儻有一人病死、諱惡不肯居住、自今以後、不得除載國圖進上之外、輙擅移造、但隨壞修理耳者、而諸國之吏、未有循行、或妄稱祟咎、避遷無定、或輙隨情願、改造彌繁、百姓勞擾、莫不由此、今被右大臣宣偁、奉勅、宜更下知令愼將來、自今以後、國司之館、附官舍帳、每年令進、隨破修理、一依先格、若有廢其本館、更營他處、及増構屋字、令致民患者、科違勅罪、官僚知而不糺、並與同罪、

弘仁五年六月廿三日

〔日本紀略十四後一條〕長元三年四月廿三日乙巳、伏議諸國吏居處不可過四分一宅、近來多造營一町家、不濟公事、又六位以下築垣并檜皮葺宅可停止者、

〔類聚三代格十二〕太政官符

應勘當匿服國司及容許者事

戒飭

〔貞信公記〕天慶三年正月廿五日、有除目、左太口會集、逃亡國司之代議定、

〔貞信公記〕承平二年正月廿七日、除目、筑後守雅文、過期不向任國事、令諸卿定申、左右衞門督、左大辨等申云、雅文所申雖不憾、代々宇佐使有遷宮處、此度殊免給、宜就私事、不可准申此例者免給、

〔中右記〕天永二年六月五日、出羽守光國不赴本國、又不歸京都、在途中美濃國送年月、早其沙汰可有事也、　十五日、出羽守光國、不赴任國事奏了、依此沙汰、三ヶ度往返、　七月廿九日庚寅、頭辨以詞仰下云、出羽守光國棄任國、在途中美乃國、已送二ヶ年、何樣可被行哉、人々被申云、或可被成改、左大辨以上五六人許、猶先可被尋問由定申、予同之、早被問子細、後隨申狀可被重行由申了、〇中略　爰頭辨來仰云、出羽守光國、先可被問之由、先度定申了、而何樣可被問哉、重可定申者、人々被申云、早遣使召上京都、可被問子細者、付頭辨被奏僉議旨、　十月十日、又出羽光國、去年上道事、被尋問陳狀事、人々被定申云、陳申之旨、非無理致、然者差副官使、重可被追下歟、但内大臣民部卿可被成替之由被定申、左大辨皆書定文、　十一月十九日、頭辨以詞仰下云、出羽守光國、任國亂之由遲言也、罪已會赦、於今者可下遣哉如何、可定申者、人々多可下遣由被定申、但予申云、本國亂逆、幷不言上罪、共會赦、任限不滿、人々如被定申、早可下遣也、猶差副官使可被下歟、左兵衞督内大臣定申云、件事勅定者、以詞欲被奏之處、頭辨參院了、仍令新宰相書給官人、被退出了、〇中略　往頃而頭辨歸來、下罪名勘文等於民部卿云、任勘文可行者、

〔令義解十〕凡外任官人、不得將親屬賓客往任所、謂其公式令唯爲子孫弟姪、此令廣據宗族賓客、情義不同、故設二條、其家口者、亦在禁限也、及請占田宅、謂空閑地者、自依常例、與百姓爭利、

〔延暦交替式〕大政官符〇中略

一應科責國司規避不知官物事

右國司上下、相共勘知、監守官物、誡在格律、理須遵行法意、無有遺漏、而或好求事使、無預出納、或稱

不赴任

〔續日本紀 光仁 三十五〕寶龜十年閏五月丙申、太政官奏曰、謹撿令條、國無大小、毎國置史生三人、博士、醫師各一人、神龜五年八月九日(〇九日、原作五日、據一本改、)格、諸國史生、大國四人、上國三人、中下國各二人、但博士者惣三四國一人、醫師毎國一人、又天平神護二年四月廿六日格云、博士惣國一依前格、醫師兼任更建新例、其史生者、博士、醫師兼任之國、國別格外加置二人、而今望者既多、官員猶少、因茲國無定准、任用淆亂、臣等商量、隨國大小、增減員數、大國五人、上國四人、中國三人、下國二人、其遷代法一依天平寶字二年十月二十五日勅、以四歲爲限、其博士、醫師兼國者、學生勞於齋粮、病人困於救療、望請毎國各置一人、並以六考遷替、自今以後立爲恒式、謹錄奏聞、伏聽天裁者、奏可之、

〔三代實錄 光孝 四十九〕仁和二年二月三日癸丑、左右大臣奉勅、於左仗下、召問拜除之後未赴任吏、攝津守從五位上多治眞人藤善、伊勢守從五位上藤原朝臣繼蔭、甲斐守從五位下藤原朝臣當興、安房守正六位上當麻眞人安氏、上總介從五位上小野朝臣國梁、隱岐守正六位上伴宿禰有世、紀伊守從五位下伴宿禰春雄、肥後守正五位下藤原朝臣時長、豐後守從五位下橘朝臣長茂、對馬守正六位上紀朝臣經業等、不進發之狀、或誤發期、或謝依病淹留之由、　五月十八日丙申、是日勅、肥後守正五位下藤原朝臣時長、攝津守從五位上多治眞人藤善、豐後守從五位下橘朝臣長茂、甲斐守從五位下藤原朝臣當興等、四人、並降一階、下知左右京職追其告身、時長等拜官經年、不赴任國、仍有此勅斷也、

〔北山抄 吏途指南 十〕國司下向早晚事
拜除之後、擇日下向、若過裝束期、久不下向者、非無解却之例、仍有申請事等、可延息者、勅、依病若親病、假文進官矣、嫌請依病假、若及不上期、又可解却、此事天曆以往、多被定行、是則依官撰人、古代不依人之品秩、以可堪其職之者任、雖治亡廢之國、依非所望、早不下向之間、任國雜事、多以擁滯、因之任其替、不被敍用也、或令申赴任由之時、先被尋問違期之旨、隨狀被裁許之、若强辭遁、途不下向者、先四ヶ年間、不被敍用、同國秩滿之年、又被任之、近代之間、依人撰官、古先帝之遺風、廢而不厲者也、

之刺史也、當仁之人、不可多得、伏望令一良守兼帶諸國、小大之政、從其所請、一兩僚屬、亦依請任之、又祿不厚則人不勸、人不勸則治不立、伏望其公廨者、攝國之中、擇其殷阜、以二守分給者、宜試於一國、明知治否、然後令兼之、○中略

以前意見奏狀、依今月八日詔書、頒下如件、

天長元年八月廿日

〔享祿本類聚三代格六〕太政官符

應國司兼兩國、其公廨從多處給事

右撿格所起請偁、天長元年六月廿日、正三位行中納言兼右近衛大將春宮大夫陸奧出羽按察使良峯朝臣安世奏狀偁、令一良守兼帶數國、其公廨者、攝國之中擇殷阜、以二守分給者、今按祿令、一人帶數官者、祿從多處給、又式部○部下恐脫式字云、一人帶數官、若高官上日不足、而卑官上日滿限者、祿從多給者、據此見之、一身帶數官、猶從一官給、而或國宰兼二國、同費其俸、論之法式、甚乖公平、伏望停食兩處公廨、一從多處給、其不給公廨、混合正稅、至有損之年、不必拘多處、但陸奧國守兼任中國者、特優其身不在此限者、中納言兼左近衛大將從三位藤原朝臣基經宣、奉勅依請、

貞觀十年六月廿八日

〔續日本紀二十七稱德〕天平神護二年五月乙丑、太政官奏曰、准令、諸國史生、博士、醫師、國無大小、一立定數、但據神龜五年八月九日格、史生之員、隨國大小、各有等差、其博士者、摠三四國一人、醫師者每國一人、今經術之道、成業者寡、空設職員、擢取乏人、繕寫之才、堪任者衆、人多官少、莫能遍用、朝議平章、博士摠國一依前格、醫師兼任更建新例、職田、事力、公廨之類、并給正國、不給兼處、有料之國名、爲正任、無料之國名、爲兼任、其史生者、博士醫師兼任之國、國別格外加置二人、庶令經術之士、周遍宜揚、功勞之人、普蒙霑潤、奏可、

薄﨑嶬之峯、嗟乎歷六代兮競陰、功積輕尺璧於多年、向七旬兮養序、齡衰待寸祿於幾日、縱隔青紫於夏侯之詞、偷思錦繡於買臣之衣、無一於斯、學而何益、望請天恩、依式部丞巡第一、被兼任件國守、戴恩喚於寒谷、灑皇澤於枯池、某誠惶誠恐謹言、

大治五年正月日　從四位上式部大輔藤原朝臣

〔薩戒記〕應永卅二年正月卅日辛丑、大政官謹奏、(宿紙也、予(藤原定親)書之、別紙也、)

近江國　權守從三位藤原朝臣清房兼

備中國　權守從三位藤原朝臣永藤兼

應永卅二年正月卅日

三十三年三月廿九日癸亥、式部奏任、別紙予書之、帋屋紙也、

大政官謹奏

越前國、權守從三位藤原朝臣隆盛兼

出雲國　權守正三位藤原朝臣雅世兼

讚岐國　權守正四位上藤原朝臣秀光兼○中略

伊豫國　權守正三位藤原朝臣實熙兼

豐前國　權守正三位菅原朝臣在直兼

應永三十三年三月廿九日

〔續日本紀(七元正)〕靈龜二年六月甲子、美濃守從四位下笠朝臣麻呂爲兼尾張守、

〔類聚三代格(七)〕太政官符○中略

一擇國守事

右檢正三位行中納言兼右近衞大將春宮大夫陸奧出羽按察使良岑朝臣安世奏狀偁、國守者古

兼攝數國

請殊蒙天恩依式部丞巡第一幷儒學奉公勞被兼任紀伊國守闕狀

式部大輔兼任受領吏例

大江匡衡朝臣（寛弘六年正月任尾張守、同七年二月任式部大輔、同年三月兼丹波守、）

藤原廣業卿（寛弘八年二月任伊豫守、長和五年二月任播磨守、）

同資業卿（寛仁四年正月任丹波守、治安三年十月兼式部大輔、萬壽五年正月兼播磨守、長曆三年正月兼伊豫守、）

同國成朝臣（永承六年十二月任式部大輔、同七年正月兼丹波守、天喜元年正月兼美作守、康平六年正月兼式部大輔、治曆三年二月兼伊豫守、承保三年正月任備中守、）

已上、匡衡朝臣等所兼任受領吏皆是熟國也、至于紀伊國者、既爲武城下邑之境、誰爲過分非據之任哉、

右某謹撿案內、依式部丞巡、每年拜任受領吏者、朝家不易之恒典也、爰某者儒林之孤枝、詞苑之凡卉也、唯嗜文學而爲立身之計、將抽忠勤而表事君之誠、研精無倦、久垂董生之帷、諷讀不休、自入崔儦室、白河院御宇之時、優其鑽仰功、給以學問料、堀河院曆錄之間、被擧茂才、對策及第、聊有螢雪之志、已無吹噓之人、當于彼時、柱史之官、如無其人、忽拜式部丞、尋任大內記、製作之勤旁深、起居之勞匪懈、帶式部少輔兼文章博士、太上天皇（鳥羽）○受圖之始、猶任內史、嘉承多日、草御卽位之宣命、天承春朝、作御元服之恩詔、況行幸節會之供奉、神社山陵之告文、詔勅宣命、不違記錄、遂遷大學頭、拜式部大輔、當御誕生浴殿之間、四位博士某讀御注孝經、五位博士實光朝臣讀五帝本紀、師遠讀毛詩禮記、皆是致君於堯舜、祝壽於老彭、新當登極之時、各爲在藩之舊、而實光朝臣、早聽殿上、被從上、增正四位下、爲御侍讀、師遠明經博士兼主殿頭、某徒及八年、未關一賞、我君守文馭寓內焉、早鍾一千年之聖運、以孝治天下矣、專崇十八章之微言、道之將興、豈非此時哉、而某空墜龍元之跡、獨抱介子之愁、稱讀書功、望昇殿、依嫌窮老之陋質、無聽昇殿、蒙大輔勞申加階、依漏外記勘文、無預加階、當吏部郎巡期受領、則闕國少而二年無補任、列射山仙籍致拜趍、亦功臣多而十人有超越、長吟低屋、宿露滋蓬蒿之徑、暮傾殘涯、斜日

同得業生兼國例

正六位上中原朝臣友道　天永四年正月補得業生〇中略

右年々補任帳所注如件、仍勘申、

永久四年正月廿九日　修理左宮城判官主計頭兼大外記助教但馬權守中原朝臣師道（勘中）

〔除目大成抄五〕正四位下行主稅頭兼侍醫丹波朝臣雅忠誠惶誠恐謹言

請特蒙天恩依醫道勞被轉任權守闕狀

右雅忠謹撿案內、自祖父重雅朝臣至于雅忠、彼國〇丹波權守介、每有闕常所兼帶之官也、雅忠去永保二年拜任介、權守闕于今無拜除之人矣、望請天恩、被轉任件官闕者、將知奉公之節、雅忠誠惶誠恐謹言、

應德二年正月廿三日　正四位下行主稅頭兼侍醫丹波介丹波朝臣雅忠

〔朝野群載二十二諸國雜事〕從五位上行主稅權助兼筭博士三善朝臣雅仲誠惶誠恐謹言

請特蒙天恩因准先例依儒勞被兼任越前越中國介狀

博士帶助者兼國例

親父爲長朝臣（康平三年兼土左介、助勞、治曆二年兼備前權介、博士勞、）歷七年勞、

身勞（寬治八年兼土左權介、助勞、）歷七年、

右雅仲謹撿案內、博士居助之職、隨其年限兼諸國介者、古今之通規也、其例不遠、只追親父之蹤、其仁在近、已當今年之運、自餘之例、不遑勝言、望請天恩因准先例、依儒勞被兼任件等國介、將知奉公之不空矣、雅仲誠惶誠恐謹言、

康和二年三月廿六日　從五位下行主稅權助兼筭博士三善朝臣

〔本朝續文粹六〕從四位上行式部大輔藤原朝臣敦光誠惶誠恐謹言

文章博士重兼國例

從四位下藤原朝臣敦光　嘉承二年正月任文章博士、同三年正月兼越中介、天永三年秩滿○中略

直講兼國例

從五位下中原朝臣師安　歷五年　天永三年十二月任○中略

算博士重兼國例

正五位下小槻宿禰盛仲　秩滿後五年　康和三年四月任算博士、嘉承二年正月兼土左權介、天永三年秩滿○中略

主稅頭兼國例

從四位上賀茂朝臣光平　歷三年　永久五年三月任○中略

主計助兼國例

從五位上中原朝臣宗政　歷四年　永久元年九月任○中略

醫道人重兼國例

從四位上丹波朝臣雅康　秩滿後五年　嘉承三年正月兼越前介、天永三年秩滿○中略

左右近中將兼國例

正四位下源朝臣雅定　永久三年八月任右近權中將○中略

同少將兼國例

正五位下藤原朝臣成通　歷二年　永久三年八月任右近權少將○中略

明法博士兼國例

正六位上中原朝臣明兼　天永四年正月任○中略

大納言御拜任已後、受領御兼帶事、不打任間、如補歷不被申之上者、被略御位署之條、不可有子細候哉、但上古大中納言被帶受領事間有之哉、

四月十七日　　大外記師茂

殿下御

大納言已上受領を兼候事は、先例候はぬやらんどおぼしめし、故將軍〇足利尊氏も大納言ののちは、國司をばさゝられて候とおぼしめしきと志るしてまいらせられ候べく候、〇中略

家君請文おほせ下され候むね畏候てうけ給候ぬ、さて大納言以上受領を兼帶の事不打任事候、且藤原小黑麿、延曆六年二月日兼美作守、〇時中納言、同九年二月九日任大納言、〇中務卿、皇后宮大夫、美作守如故、所見如此、此外今間不勘得候、中納言例、古今少々存之候、故將軍大納言後武藏守兼帶儀なく候、〇下略

〔公卿補任　桓武〕延曆六年丁卯

中納言正三位藤原小黑麿　正月十一日兼美作守、

延曆九年庚午

大納言正三位小黑麿　二月廿七日（廿七日一本作九日）任、元中納言、中務卿、皇后宮大夫、美作守如元、

〔除目大成抄　五〕公卿任受領例

長元元年　　伊與守從三位藤資平　兼

〔除目大成抄　五〕勘申兼國例事

參議兼國例

正四位下藤原朝臣通季　　歷二年　　永久三年四月任〇中略

陰陽頭兼國例

從四位下安倍朝臣泰長　　歷三年　　永久二年十二月任〇中略

〔本朝文粹 六奏狀〕請殊蒙天恩被遷山城守兼任近江權介〇介、慶仁本作守狀　小野道風 官三品作

右道風謹撿近代拜除之例、自當寮頭登四品之榮爵者、不改年所、預一國之烹鮮焉、藤原朝臣兼三任奥州、橘朝臣惟風任伊州等是也、道風從加爵級、數移星灰、每見除書、頻霑恩渥、輸忠貞於奉國、積夙夜之勤公、春秋一十二歳之時、初奉龍顏之聖主、勞績五十四年之日、已爲鶴髮之衰翁、少藝少能、非神非妙、然而紫震殿之皇居、七廻書賢聖之障子、大嘗會之寶祚、兩度點畫圖之屛風、臨時奉勅、不可勝計、方今徵功之下、日月彌深、薄効之中、恩慕未至、覩三朝之德化、身猶雖沉本朝、隔萬里之波濤、名是得播唐國、望雲謝遠聞於吳會、就日仰洪施於堯天、伏乞乾臨殊降雨露、非與山城分憂之秩、將浴江府兼任之恩、道風誠惶誠恐謹言、

天德二年正月十一日　木工頭正五位下〇慶仁本、作從四位下行木工頭、　小野朝臣道風

〔師守記〕貞治三年四月十六日庚戌、

折紙、願文位署之事

一納言以上者、不可有兼國之由、普被申候之處、大樹〇足利義詮去年大納言拜任之後、自儒中少々被書載事候、可爲何樣候哉、

一納言以後被辭退兼國之者、不可載之條勿論候歟、而於武藏國者、武家永任國司之間、雖被書載之無其難候哉、

一或說大臣以上までも被載兼國之先規、間々見及之由令申之族候、如何此條々可注預候、恐々謹言、

四月十七日　座祐

人々御中

御願文位署可被載武藏守哉否事

兼國

涯將、盡、惠澤難、期、至于陸奧守者既爲邊要之國、誰謂過分之國、若浴兼帶之殊恩、將慰心緒之不絶、抑故人有言、曰、飡其食者不毀其器、蔭其樹者不折其枝、某若有用其藝者、何棄其身乎、若有棄其身者、何用其藝乎、是非之間、只任時議而已、望請天恩、依爲當省丞巡第一、被兼任彼國守闕、依儒學并奉公勞、被兼任件兩職闕、將戴聖日於白首之上、某誠惶誠恐謹言、

保延元年六月日　　正四位下行式部大輔藤原朝臣

〔有職問答一〕一諸官に受領を兼任事

參議より以下は兼國號、上古以來（當時此分候）拜任あるよしを被仰出候畢、大中納言兼任（希有ノ事候）例なき由に候、平家氏族大中納言たるべき人多く受領ヲ兼シ候、（其時分ハ他家ニモ其類少々候キ、件比諸國ノ吏務ヲ公家自專ノ時分ニテ候間）其ハ時代權門によりて左樣に吏務ヲ專に任（國ノ守ヲ執シ候ツルにて候）シ候由被仰下候き、猶被注下度候、

〔續日本紀三文武〕大寶三年六月乙丑、從五位上引田朝臣廣目、爲齋宮頭兼伊勢守、

〔續日本紀二十二淳仁〕天平寶字三年十一月丁卯、右衛士督從四位下上道朝臣正道爲兼備前守、

〔續日本紀二十四淳仁〕天平寶字六年四月庚戌朔、右大辨從四位下石河朝臣豐成爲兼尾張守、

〔公卿補任光仁〕弘仁七年（丙申）

參議從四位下藤三守

延曆四年六月八日從五下、任內藏助、十二月日任美作權介、兼

弘仁十年（己亥）

參議從四位下安倍寬麻呂

弘仁五年二月戊子、齋宮頭、七月十日兼伊勢權介、

〔續日本後紀十四仁明〕承和十一年二月辛酉、從五位下並山王爲齋宮頭、正五位下長岑宿禰高名爲兼權頭、伊勢守如故、

〔本朝續文粹奏狀六〕正四位下行式部大輔藤原朝臣某誠惶誠恐謹言、請特蒙天恩依爲當省丞第一被兼任陸奧守闕狀、

一敦光身勞

嘉保元年獻策勞四十一年　承德二年任式部丞勞三十八年

大治三年爲新敍第一、

始自彼年至于今年八箇年、不任州吏之間、藏人、民部、撿非違使、外記、史任中、管國拜刺史之者、逐年不絕、況於別功者、不可勝計、彼間、成業者、或當巡年、或超上臈、抽任之者、十有餘輩、皆是獻策以來、數年之後進、且又儒官之間、薦擧之生徒也、

一京官人兼任陸奧守例

藤原佐世　寬平三年正月任陸奧守、兼大藏少輔、

藤原實方　長德元年正月任同守、兼左近衞中將、

源信雅　大治三年正月任同守、兼皇后宮亮、

右某謹案禮典、有虞氏養國老於上庠、養庶老於下庠、夏后氏養國老於東序、養庶老於西序、殷人養國老於右學、養庶老於左學、周人養國老於東膠、養庶老於虞庠、又五十養於鄕、六十養於國、七十養於學、旁見優老之禮、先用養學之儀、便知老與學兼之者、世所重也、君所賞也、是以周文王之崇呂尙父也、旁致庶民之子來、漢武帝之抽公孫弘也、久保八旬之仙算、典籍所載、率由舊章、方今伏見去四月廿七日詔書、或驚乾坤變動之異、或憐黎民荒飢之愁、老人百歲以下、七十以上、給穀有差、是則降養老之恩、爲攘災之計也、爰某學疲三餘、縱雖爲鄙儒、齒近八十、孰不稱國老、況復當春官之巡八年、竹符運晚、隔夕郎之望萬里、蓬壺路遙、擧山崔嵬、變玄黃於陟岵之馬、窮巷寂寞、失進退於觸藩之羊、仰問蒼天、遼々之色難答、俯權丹地、寸々之腸空廻、曉水冷於顏瓢、身衰則何美其飮、暮爐絕於墨突、氣餒亦不堪其憂、生

高階眞人全秀、正六位上行左近衞將監兼權掾藤原朝臣房雄爲首、○此下恐脱杖七十之四字合全秀身帶七位、例減一等、合杖六十贖銅六斤、房雄遙授不預其事、合免其罪、從五位下行介藤原有年爲第二從、減四等合杖六十、身帶五位、請減一等、合笞五十贖銅五斤、參議正四位下行右衞門督兼守藤原朝臣良縄、從四位上行皇太后宮大夫兼權守藤原朝臣良世、爲第三從、亦是遙授、合免其罪、正六位上行大目秦忌寸安統、正七位上行少目阿波奈臣安繼爲第四從、減六等、合笞四十、身帶七位以上、例減一等、合笞三十贖銅三斤、

○按ズルニ、當時讃岐國司ノ四等官ハ、正官五人、權官三人、合セテ十人ニシテ、其中三人ハ遙授ナリ、自餘諸國ノ遙任ノ狀モ准ジテ知ルベシ、

〔類聚符宣抄七〕左近衞權將監正六位上石野連善根誠恐誠惶謹言、請特蒙天恩准傍例被下宣旨、如本兼任備前史生狀

右謹撿案内、善根爲將曹之間、依恪勤之勞、以去應和二年十二月兼任件國史生、以同三年二月給官符也、爰以今年三月廿七日轉任權將監、方今謹案傍例、爲將曹府生之間、兼任諸國史生之輩、轉任將監將曹之後、皆被下宣旨、如本兼任、蹤跡無絶、望請特蒙天恩、被下宣旨、如本兼任、將知奉公之貴彌盡忠節之誠、善根誠恐誠惶謹言、

康保元年九月十五日　左近衞權將監正六位石野連善根

從二位行大納言源朝臣高明宣、奉勅、左近衞權將監石野善根兼任備前史生、宜如本兼任、

康保元年十二月四日　大丞紀奉

〔春記〕永承七年四月廿五日庚子、雜色成友自伊與國上道、去正月爲請遙授物下遣彼國也、

○按ズルニ、本書ノ記者藤原資房ハ、永承三年正月參議ニテ伊豫權守ヲ兼ネ、七年二月參議資綱代リ兼伊豫權守ト爲ル、

〔延喜式二十二民部〕凡參議及左右大辨八省卿彈正尹、遙授國司者不得差使、

〔續日本紀三十二光仁〕寶龜三年七月辛丑、上總國獻馬前二蹄似牛、以爲祥瑞、視之人巧之所刻也、國司介從五位下巨勢朝臣馬主等已下五人並坐解任、其本主天羽郡人宗我部虫麻呂決杖八十、

○按ズルニ、當時當國ノ守ハ、桑原王ナリ、遙任ニシテ府務ニ關セザルヲ以テ、解任セザルナリ、

〔享祿本類聚三代格寫本〕太政官符

不可遙附公文事

右被大納言正三位紀朝臣古佐美宣偁、奉勅、參議已上左右大辨八省卿者、任典群寮、所掌亦重、而今所帶諸國遙附公文、參對諸司、觸事不便、自今以後宜停遙附、

延曆十六年正月廿三日○又見日本後紀

〔日本後紀二十二嵯峨〕弘仁二年正月丙辰、參議從三位宮內卿兼常陸守菅野朝臣眞道上表致仕曰、○中略但臣歷事三朝、齒登七十、猶隨年積、志與身衰、雖疾聯懇款、非無顧戀之心、而漏盡夜行、恐乖止足之誠、伏願歸骸舊里、收迹蓬廬、養疾以存餘生、杜門而待終日、無任懷戀之至、謹詣闕奉表以聞、許之、但常陸守如故、

〔續日本後紀九仁明〕承和七年五月丁丑、勅、內外之吏、無祿之人、夙夜服事、身乏衣食、因玆或兼牧宰、猶直本任、或拜外吏、留身京華、皆將潤以俸料、令得代耕、而諸國背忘舊貫、便附遙授人、諸使遂使公文惑於失錯、貢物煩於麁惡、非唯一身兩官、復失辨成雜務、宜下知五畿內七道諸國播殖黍稷稗麥大小豆及胡麻等類、爲救民急、

〔續日本後紀十八仁明〕承和十五年正月甲戌、外從五位下秦忌寸福代爲兼土佐大目、一品葛原親王家令如故、

〔三代實錄十三淸和〕貞觀八年十月廿五日丙申、太政官論奏曰、○中略判斷之失、既由判官、仍正七位下行掾

任用

〔延喜交替式〕凡任用之人、國司除裝束行程之後六十日、京官除目之後卅日之內、依牒勘知、若有欠損、傍官共署、限內言上、解由與不之狀亦同、但受領任用同時去任者、交替畢後、相共言上、

〔延喜式十八式部〕凡諸司諸國進解由者、諸司長官六十日、次官以下及史生卅日爲限、諸國長官百廿日、任用六十日爲限、但長官任用同時解任者、交替了後與長官共言上其與不之狀、

〔尾張國郡司百姓等解文〕尾張國郡司百姓等解　申請官裁事〇中略

一請被裁定三分以下品官已上國司等公廨俸料稻不下行事

右任用國司等、或附藝業而拜除、或運勞賄以補任、然而不充月俸料、空過日限、旋踵之計易絕、留身之思難期、衣食之祿、進退惟谷、飢寒之甚、世路如山、咸歸城則把笏尤貴、忽廻國則不預公廨、仍挙公之始、開熙怡之脣、任限之中、彈喟然之爪、天下之恐懼、國內之亡殘、只依此事、望請裁斷、將召問其旨、令償數年之公廨、

〔朝野群載二十六諸國公文〕飛驒國司解　申請官裁事

請被因准先例令書生分付官物狀

右謹撿案內、守從五位下橘朝臣惟通、萬壽三年十月廿六日任、同四年九月廿五日着任、受撿交替使去年十二月十四日被定遣了、方今交替之政、以任用之吏勤行、是諸國例也、而此國代々无有任用、僅所在書生一兩也、然則交替使下向之日、以誰人將行此政、望請官裁、因准先例、早被裁下、將勤行交替之政、謹解、

長元二年二月廿三日

從五位下行守橘朝臣

遙任

〔延喜交替式〕凡遙授國司、不給公廨田并事力、亦被任之後、留京者同停給、但殊被徵召、未經一年歸國者、不在此限、

大辨從四位上兼行勘解由長官左近衞中將藤原朝臣良繩爲二近江守一、餘官如レ故ナド、錄セルハ、兼官ナレバ、遙授ナル事明ナリ、如此ク受領遙授各アレドモ、國史ニハ六位以下ノ人ノ任官ヲ載ザレバ、掾目ノ事見エズシテ、ム國ノ四等ノ中、幾人受領ニテ、幾人遙授ナルト云事其例知リ難シ、只貞觀八年十月二十五日ノ記ニ、讚岐國司斷罪ヲ失セル罪ヲ論ゼル所ノ文ニ、〇中略身帶二七位以上一例減二一等一、合レ當二三十一、贖銅三斤トアリ、此文ヲ見ニ、此時讚岐國守權守權掾ノ三人遙授ニシテ、介、掾、大目、少目ノ四人受領ナルト見エタリ、自餘ノ國モ此類ナルベシ、是ヨリ後、官職秘抄ナドニ見エタルモ、多クハ正ノ守ハ受領ニシテ、權ノ守介ハ遙授ナリ、掾ニハ受領遙授相交ハリ、目ニハ遙授ハ見エテ、受領ハ明ナラズ、本ヨリ一概ニハ云ベカラズ、只イヅレノ國ニモ、四等ノ中、受領遙授相交ハリテ有ベシ、夫除目ニ任ズル所モ、所々ノ奏、所々ノ舉ナドハ、中古以前ハ、多分受領ニシテ、國ニ往ナルベシ、只人給ニハ、或ハ僞名サヘアレバ、任國ニ往ニハ非ズ、然レドモ僞名ニ非ザル分ハ、人ノ給トテモ、必任國ニ往カズトハ定メ難シ、イヅレニモ一偏ニ遙授耳ナル國ハアル可ラズ、然レバ國用辨濟スベキカ、

〔羽倉考一〕除目名目略解　受領　國司ニ任ジ、其國ニ下リテ、國事ヲ知ルヲ云、

遙授　國司ニ任ジテモ、其任國ニ下ラズシテ、在京シ、或ハ京官ヲ勤メテ兼帶スル等ヲ云、又ハ遙任トモ云、

〔公卿補任 一條〕寛和三年丁亥〇永延元年

參議正四位上藤安親 天祿三正廿四任二伊勢守一、受領、

〔辨官補任 後一條〕長元二年己巳

權左中辨從四位上藤章信 正月廿四日伊豫權守、受領、

〔尊卑分脈 藤原七〕知章 近江、加賀、筑前、伊與權守、
　章信 辨、藏人、三事、宮内卿、正四上、伊與、和泉、但馬權守、母同二章輔一

タルナメリト心得テ、長シキ侍一人ヲ呼テ、夫二人ヲ召サセテ、此ノ唐櫃只今祇薗ニ持參テ誦經ニシテ來レト云テ、立文ヲ持セテ、唐櫃ヲ掻出シテ侍ニ取セツレバ、侍夫ニ差荷ハセテ出テ行ヌ、

〔羽倉考〕諸國司受領遙授不可一偏之事

諸國ノ國司ニ、在京シテ遙授スル者アリ、又年給ニ給フ所ノ掾以下ニハ、或ハ其名ヲ設ケタル而已ニテ、其人ナキ者アリ、如是ニテハ、其國事若クハ辨濟セザラン疑アル由、案ズルニ、國司ハ大國ニ守、權守、介、權介、大掾、權大掾、少掾、權少掾、大目、少目アリ、上國ニ守、權守、介、權介、掾、權掾、大目、少目アリ、中國ニ守、介、掾、目アリ、下國ニ守、掾、目アリ、各其下ニ史生、權史生アリテ、官員多シ、且管郡ゴトニ郡司アレバ、國司其國ニ數人居ルニハ及ブ可ラズ、故ニ或ハ在京ニテ遙授シ、或ハ京官ニテ兼帶シ、或ハ年給ニ其名バカリニテ任ズレドモ、一國ノ中、守ヨリ史生マデ、悉遙授年給等ノミナル國ハアル可ラズ、假令ヘバ大宰府ノ如キ、親王ヲ以帥ニ任ズレバ、權帥若クハ大貳必在府シテ公務ヲ知ル、又上總、常陸、上野ノ國ノ如キ、親王ヲ以太守ニ任ズレバ、介必ズ受領タル例ナレバ、諸國トテモ此ニ准ジ、正權ノ守介ノ中ニ一人受領アラバ、餘ハ遙授ニテモ可ナルベシ、掾目モ亦同ジ、蓋一國ニ兩人以上モ受領ノ人アラバ、其餘ハ必シモ受領タルニハ及ブ可ラズ、國史ヲ考フルニ、天平勝寶以前ハ、單官兼官ノ差別イマダ書記ニ分明ナラズ、天平寶字三年ノ紀ニ、從五位上大伴宿禰御依爲遠江守、正五位上藤原朝臣魚名爲上總守ナド、錄セルハ、單官ナレバ、受領ト見エタリ、右衛門督從四位下上道朝臣正道爲兼備前守ト錄シ、同六年ノ紀ニ、右大辨從四位下石川朝臣豐成爲兼尾張守ナド、錄セルハ、兼官ナレバ、遙授ナル事明ナリ、三代實錄ノ比ニ至リテハ、天安二年ノ紀ニ、備後守從五位下藤原朝臣有年爲近江介、從五位上守右近衛少將兼主殿頭行美濃權介紀朝臣全吉爲備前權守ナド、錄セルハ、遷任ナレバ、受領ト見エタリ、從五位上行文章博士兼備前權守菅原朝臣是善爲播磨權守、文章博士如故、參議右

之人、以遙授兼任等、其身在京而不赴國、惟懸其官者若不稱受領也、所謂備前權守多受領者、正是遙授、權下其國、自知政務、若備前、率是權之所下任國、故云爾歟、

〔源氏物語十四澪標〕かの院〇二條東院のつくりざま、中々みどころおほく、今めいたり、よしあるずりやうなどをえりて、あて〳〵にもよほし給、

〔源氏物語十八松風〕さらに都にかへりて、ふるずらうのしづめるたぐひにて、まづしき家のよもぎむぐらもとの有樣あらたむることもなき物から、おほやけわたくしにをこがましき名をひろめて、〇下略

〔今昔物語二十四〕藤原資業作詩義忠難語第廿九

今昔、藤原資業ト云博士有ケリ、鷹司殿ノ御屛風ノ色紙形ニ可被書キ詩ヲ、其道ニ達セル博士共ニ仰セ給テ、詩ヲ作ケルニ、彼ノ資業朝臣ノ詩、數ニ入ニケリ、其比齊信ノ民部卿大納言ト云人有リ、身ノ才有テ、文章ニ達ルニ依テ、仰ヲ承テ、此詩共ヲ撰ビ被定ケルニ、資業ガ詩數入タリケルヲ、其時ニ藤原義忠ト云博士有テ、此レヲ嫉ハシク思ケルニヤ、宇治殿ノ□ニテ御座ケルニ、義忠申ケル樣、此ノ資業朝臣ノ作レル詩ハ、極テ異樣ノ詩共也、他聲ニシテ平聲ニ非ザル字共有リ、難專ラ多シ、然ドモ此資業ガ當職ノ受領ナルニ依テ、大納言其ノ饗應有テ被入タル也ト、其時ニ資業ハ□〇空格恐伊豫守ニテ有ケル也、

〔今昔物語二十八〕祇薗別當戒秀被行誦經語第十一

今昔、或ル長受領ノ家ニ、祇薗ノ別當ニ戒秀ト云ケル定額忍テ通ヒケリ、此ノ事ヲ擬知タリケレドモ、不知ズ顏ニテ過シケル程ニ、守出タリケル間ニ、戒秀入リ替テ入リ居テ、シタリ顏ニ翔ケル程ニ、守返リ來タリケルニ、怪ク主モ女房共モスヽロビタル氣色見ケレバ、守思フニ、然コソハ有ラメト思テ、奧ノ方ニ入テ見レバ、唐櫃ノ有ルニ、不例ズ鏁差シタリ、定メテ此レニ入レテ鏁ヲ差

宣任備後守

藏人頭内藏頭源季貫奉

〔朽木文書乾〕上卿　洞院中納言

永和二年正月廿二日　宣旨

從五位下源氏秀

宜任出羽守

藏人頭右近衞權中將藤原隆廣奉

〔長祿二年以來申次記〕申次人數之事　長祿年中以來略○中

伊勢備前守盛定（前には備中守云々、然瑞英軒（伊勢貞藤）任備中守之時拜任備前守云々、○中略）

御方御所樣一申次始而被仰付人數事　文明九年十一月卅日略○中

伊勢八郎左衞門尉盛種（任代々備前守、）

〔類例略要集〕諸國受領差別略○中

關東諸大夫方今被憚分

三河　御嫡流のみ被任　越後守他家不任之　武藏　松平武藏守利隆以後相止　陸奥　慶長比迄は嶋津に而も被任　薩摩　元祿年中迄諸士任之、土屋氏以後相止、尾張　寛永以後任名不承之

受領

〔江家次第四正月〕除目

任受領（備前權守多受領云々、凡國司○○○○○○○○○○等、守爲遙授、則權守必受領也、主稅式云、凡諸國一分已上遙授兼任之輩、遷任他國並京官者、未得受用公廨、若停任官符未到之前、處分已畢、有坊改補者、便加國儲、民部式云、凡遙授國司不給公廨田並事力、又云、凡參議及左右大辨八省卿彈正尹遙授國司者、不得差使四度使也、）

〔日本諸手船官位十一〕釋詁、今俗以爲受領者、被任守及權守之稱、謂據斯文似不然者、假令被任守及權守

〔太平記十七〕義貞北國落事

武士ニハ新田左中將義貞子息越後守義顯脇屋右衛門佐義助、○中略其外山徒少々相雜テ、都合其勢七千餘騎、

〔太平記十五〕正月○建武二年二十七日合戰事

公家ニハ洞院左衛門督實世、持明院右衛門督入道、信濃國司堀河中納言、園中將基隆、二條少將爲次、○中略都合其勢二萬餘騎、正月廿日ノ晩景ニ東坂本ニゾ着ニケル、

〔太平記十六〕新田左中將被責赤松事

赤松入道圓心、小寺藤兵衛尉ヲ以テ新田殿ヘ被申ケルハ、圓心不肖ノ身ヲ以テ、元弘ノ初、大敵ニ當リ、逆徒ヲ責却候シ事、恐ハ第一ノ忠節トコソ存候シニ、恩賞ノ地、降參不儀ノ者ヨリモ猶賤ク候シ間、一旦ノ恨ニ依テ、多日ノ大功ヲ捨候キ、乍去兵部卿親王ノ御恩、生々世々難忘存候ヘバ、全ク御敵ニ屬シ候事、本意トハ不存候、所詮當國ノ守護職ヲダニ綸旨ニ御辭狀ヲ副テ下シ給リ候ハヾ、如元御方ニ參テ、忠節ヲ可致ニテ候ト申タリケレバ、義貞是ヲ聞給テ、此事ナラバ子細アラジトテ、被仰テ、頓テ京都ヘ飛脚ヲ立、守護職補任ノ綸旨ヲゾ申成レケル、其使節往反ノ間、已ニ十餘日ヲ過ケル間ニ、圓心城ヲ拵スマシテ、當國ノ守護國司ヲバ、將軍ヨリ給テ候間、手ノ裏ヲ返ス樣ナル綸旨ヲバ、何カハ仕候ベキト、嘲哢シテコソ返サレケレ、

〔大日本史職官四〕建武中興、略倣鎌倉之制、用武人爲守護、大者或至兼數國、其用公卿號曰國司、〔中略〕

謹摘太平記、關城書、眞書、諸書大意、

〔小早川什書一〕上卿左兵衛督

建武四年三月十二日　宣旨

從五位下平朝臣貞平

(遷任美作也)伯耆守從四位下藤原朝臣基輔兼
美作守從四位下藤原朝臣公守兼
筑前守從五位上平朝臣貞俊
豐後守從五位下藤原朝臣宗長

重任　播磨守從五位下平朝臣行盛兼
重任　紀伊守從五位下平朝臣爲盛(從上也、而書從下失也、)
外記　筑後守從五位下大江朝臣廣賢
式部　壹岐守正四位下源朝臣俊光

次奏事由、卷大間、(不加禮紙、不封之、)

〔吾妻鏡三〕壽永三年(○元暦元年)五月廿一日戊申、武衛(○源頼朝)被遣御書於泰經朝臣、是池前大納言同息男可被還任本官事、並御一族源氏之中、範頼、廣綱、義信等、可被聽一州國司事、内々可被計奏聞之趣也、大夫屬入道書此御書、付雜色鶴太郎云云、

〔源平盛衰記四十五〕源氏等受領附義經任伊豫守事
同(○元暦二年)八月十四日ニ、被行除目、源氏六人受領ス、平氏追討賞トゾ聞エシ、志田三郎先生義憲任伊豆守、大内冠者維義越中守、上總太郎義兼上總介、加々美次郎遠光信濃守、遠江守義宗ガ男兵衛尉義助越後守、九郎大夫判官伊豫守ニ任ジケリ、鎌倉源二位擧申ニ依也、大夫判官ハ伊豫守ヲ賜ハル、上院御厩ノ別當ニ成テ、京ノ守護ニ候ヘトテ、侍十人付ラレタリ、

〔勘仲記〕弘安十一年(○正應元年)十月十八日庚午、參陣被行除目、(○中略)國司(○○○○)一人、(以光、任淡路國司、)此外大略官藏人方功人等也、

〔公卿補任光嚴〕正慶二年(癸酉○元弘三年)
非參議從三位源尊氏(八月五日兼武藏守、)(○○○○)

〔公卿補任光明〕康永三年(甲申)
非參議從三位源直義
元弘三十一月八、相摸守、

由內々聞ヘケレバ、既ニ可被誅ナド風聞有ケルニヤ、失面目ノミナラズ、身體危カリシカバ、尾張ヘ逃ゲ下ケリ、其朝、宿ニ狂歌ヲ讀テ捨ケリ、

落行ケハ命計ハ壹岐守其ヲハリコソ聞マホシケレ

〔尊卑分脈 四平氏〕桓武天皇〇中略

時政 北條四郎、遠江守〇中略
　義時 右京大夫、相摸、陸奥權守、〇中略
　　泰時 太郎、正四位、武藏守〇中略
　　　時氏〇中略
　　　　經時 太郎、從四下、相摸、武藏權守、〇中略
　　　　時賴 相摸守、正四下、

〔源平盛衰記 一〕清盛捕化鳥并一族官位昇進附秀童并王莽事

平治元年信賴卿謀叛之時、勳功アリテ、同年十二月廿七日ニ、〇中略重盛伊豫守、〇中略世ニハ不敵ノ者モ有ケリ、入道ノ宿所六波羅ノ門前ニ、札ヲ書テ立タリケルハ、

伊豫讃岐左右ノ大將カキコメテ欲ノ方ニハ一ノ人哉

〔玉海〕治承四年正月廿八日辛巳、次余〇藤原兼實仰左大將〇藤原實定云、受領擧、先氣色于執柄、如常、各起座畢、此間取出大間禮紙、書受領案、重任國皆悉載案、先書國號畢、更書入任人、拔置硯上、〇中略次任草書、移入大間畢、任折紙付象字、隆職任伊賀而無象字、仍余申鶯付之、一兩未任畢之間、人々復座、次第進擧冊、〇中略

民部　山城守從五位下紀朝臣久季
大尉大夫　河內守從五位上源朝臣康綱
藏人　和泉守從五位下高階朝臣仲基
一管國　攝津守從五位下橘朝臣以政
大史大夫　伊賀守正五位下小槻宿禰隆職兼
重　安房守正五位下藤原朝臣定長
同　下野守從五位下藤原朝臣範光
功　陸奧守從五位下藤原朝臣實雅
功先和泉　出羽守正五位下平朝臣信業
重任　越中守從五位下平朝臣業家

宰府藤原經忠 大治三年正月廿四日
筑前藤原公章 大治二年三月廿四日肥後相博
筑後藤原爲宗 大治元年二月廿四日民部
肥前藤原爲眞 保安五年正月廿二日新院分
肥後高階泰重 大治三年正月廿四日藏人
豐前藤原資康 大治三年正月廿四日民部
豐後中原良兼 天治二年正月廿八日文章生、上﨟三人、
日向惟宗基言 大治三年正月廿四日外記
大隅中原信俊 大治三年正月廿四日史
薩摩久屋相忠 保安五年正月廿二日外記辭退替
壹岐晉部明兼 大治元年二月廿四日史
對馬藤原經義 保安五年正月廿二日

〔永昌記〕保安五年〇天治元年四月二日己酉、太政官謹奏、略〇中

但馬國

權守從四位上藤原朝臣敦光兼去二年春就外記勘文被任加賀介、而頻成訴訟、申請辭伊與權守任、仰今任但馬權守也、略〇中

保安五年四月二日

〔中右記〕大治四年八月廿八日、除目敍位、略〇 註 左大辨持參、披見之處、

大政官謹奏略〇中

石見國

守從五位下卜部宿禰兼仲御新功萬人驚

大治四年八月廿八日略〇中

裏書云、兼仲ハ女院侍所所司、先年被成民部丞、世間大驚也、不經程給爵了、後一兩年後、拜任石見、萬人驚見、可謂大幸人歟、

〔平治物語〕三忠宗尾州逃下事

去程ニ、永暦元年正月廿三日除目被行テ、長田四郎忠宗ハ、壹岐守ニナリ、先生景宗ハ兵衛尉ニ被成ケルヲ、父子トモニ嫌申ス、略〇中ソレヲ不足ニ存トモ、許容ナセソト宜ケリ、重盛モニクマルヽ

北陸七

若狹藤原信輔　大治二年正月十九日、元淡路守、

越前藤原顯能　大治二年十二月廿日、備前相博、

加賀藤原家成　大治二年正月十九日、元若狹、

能登藤原季兼　大治元年二月廿四日

越中藤原公能　大治元年二月廿四日、功、

越後藤原政敎　保安四年正月廿四日、功、

佐渡三善信貞　天治二年正月廿八日、大藏大輔、大判事、明法博士、

山陰八

丹波藤原公道　大治二年正月十九日、功、

丹後源資賢　保安五年正月廿二日

但馬藤原敦兼　大治元年十二月五日、備中相博、

因幡藤原通基　大治二年十二月七日、元武藏守、

伯耆藤原顯盛　保安元年十一月廿五日、相二博越前一、

出雲藤原經隆　大治三年十二月、周防相博、

石見藤原尹經　大治三年十二月、安藝相博、

隱岐藤原資定　大治元年十二月廿四日、功、

山陽八

播磨藤原家保　保安二年六月廿六日

美作藤原顯廣　大治二年正月十九日、功、

備前平忠盛　大治二年十二月廿日、相二博越前一、

備中藤原忠隆　大治元年十一月五日、但馬相博、

備後藤原時通　大治二年十二月七日、元因幡、

安藝藤原資盛　大治二年十二月

周防藤原憲方　大治三年十二月、出雲相博、

長門高階經敏　大治元年三月廿四日、能登遷任、

南海六

紀伊藤原顯長　天治二年正月廿八日、新院分、

淡路平實親　天治二年正月十九日、元右衛門權佐、左少辨、藏人、

阿波藤原有賢　天治二年二月十五日、元參川守、

讚岐藤原清隆　保安四年四月五日、丹波守、

伊豫藤原基隆　保安四年正月廿二日

土左藤原家長　天治元年十二月廿八日、美乃相博、

西海十一

〇按ズルニ、玉海文治元年六月十日ノ條ニ、小兒ヲ國司ニ補スルコトアリ、全文賜國ノ條下ニ引ケリ、

〔二中歷十當任〕畿内五〇畿内五、一本作五畿内、

山城藤原親忠　大治二年正月十九日
大和藤原景實　大治三年正月廿四日任中飛驒守
河内大江行重　大治二年四月三日使
和泉源盛季　大治三年正月廿四日使
攝津藤原光房　天治二年正月廿八日藏人

東海十五

伊賀源憲明　天治二年正月廿八日民部權大輔
伊勢藤原佐實　大治□年二月廿四日使
志摩高橋經保　大治二年正月十九日
尾張藤原長説　大治二年正月十九日重任
參河藤原爲忠　天治二年正月十五日元安藝守
遠江高階宗章　保安二年二月廿九日若狹相替
駿河平宗實　保安五年正月廿二日使、右衞尉、
伊豆源盛雅　保安五年五月廿二日
甲斐藤原範隆　大治三年正月廿四日相博和泉
相模源重時　大治二年十二月廿日信濃相博
武藏藤原公信　大治二年十二月七日功
安房藤原隆仲　天治二年三月廿八日石見任中
上總藤原親隆　天治二年三月廿八日藏人
下總藤原茂明　大治二年正月十九日藏人
常陸藤原盛輔　大治二年正月十九日式部

東山八

近江藤原宗兼　保安五年正月廿二日元和泉守
美濃藤原顯保　天治元年十二月廿八日土佐相博
飛驒藤原盛賢　天治二年正月廿八日功
信濃藤原盛重　天治二年正月廿八日功
上野高階敎政　大治元年二月廿四日藏人
下野藤原親通　大治二年正月十九日前山城守任中
陸奥藤原良兼　大治元年二月廿四日和泉任中
出羽紀宗兼　保安五年正月廿二日民部

相半、各補五人、將均勞逸、抑國有大少、亦有興亡、功有優劣、亦有先後、隨國論功、依次加賞、則苟成其功者、待次第、而不愁不歎、適趣其任者、慕循良以盡節、盡忠外彌扇襲黃之風、內何憂閑素之日乎、伏錄事狀、倫事等誠惶誠恐謹言、

天延二年十二月十七日（○十七日一本作二十日）

散位源朝臣順　藤原朝臣爲雅　橘朝臣伊輔　散位藤原朝臣倫事

〔本朝文粹十二落書〕櫻島忠信落書（○依此落書拜任大隅守云云）

今春詔勅多哀樂　半盡開眉半叩頭　官爵專非功課賞　公私寄致賄勞求

除書久待貢書致　直物遲期獻物收　右大閤賢歸衆望　左丞相佞損皇猷

初逢魚水恩波濁　共見駿河感淚流　不勤和風櫻獨冷　被濕暖露橘先抽

內臣貪欲世間歎　外吏沈淪天下愁　招集金銀千萬兩　沽亡山海十二州

〔古事談一王道后宮〕一條院御宇、源國盛任越前守、其時藤原爲時附於女房獻書、其狀云、苦學寒夜、紅淚霑袖、除目春朝、蒼天在眼云々、天皇覽之、敢不羞御膳、入夜御帳涕泣而臥給、左相府參入、知其如此、忽召國盛令進辭書、以爲時令任越前守、國盛家中上下啼泣、國盛自此受病、及秋雖任播磨守、猶依此病遂以逝去云々、（○又見今昔物語）

〔古事談一王道后宮〕或說云、長德四年八月廿五日、以外記巡佐伯公行任播磨守云云、件ノ公行、元播磨國書生云云、

〔中右記〕天永二年十月廿五日、予（○藤原宗忠）依仰著陣座、左大辨修理權大夫門直座、及深更有小除目、（○中略）木工頭雅兼兼加賀守顯輔、越後守敦兼、（已上相博）丹波守忠隆、（○中略）抑忠隆者、伊與守基隆朝臣二男、院判官代也、但年十歲、幼少無極、加之無受領本官、又無成功、只依殊寵偏浴大恩也、十歲之人、初任丹波、古今未有此例、人々以目、敢不出口也、

者、二箇年間不給事力、

〔本朝文粹二意見封事〕太政官符

一擇良吏事 六箇條之一○公卿意見

右撿右大臣奏狀偁、臣聞登賢委任、爲化之大方、審官授才、經國之要務、今諸國牧宰、或欲崇修治化、樹之風聲、則拘於法律、不得馳騖、邦國殄瘁、職此之由、伏望妙簡淸公美才、以任諸國守介、其新除守介、則特賜引見、親喩治方、因加賞物、既而政績有著、加增寵爵、公卿有闕、隨即擢用、又反經制宜、勳不爲己者、將從寬恕、無拘文法者、依奏、

〔本朝文粹六奏狀〕請特蒙天恩諸國受領吏秩滿幷臨時闕舊吏新敍相半被拜任狀　藤原倫寧

右倫寧等、謹撿舊史、比聖明於日月、以無所不照也、喩皇恩於雨露、以無所不潤也、上能施均一之德、下必盡無貳之節、而七八年來、正月敍位之外、頻有踐祚大嘗會等臨時之敍位、新敍已積、舊吏自滯、其舊吏之中、昇沈不一、或殊功不聞、早有蒙抽賞者、或愚忠徒疲、久有被棄置者、車前盡態而悅者少、釜中生魚而愁者多、若明恩之無偏、何以遣此愁乎、謹撿故實、敍位之年、卽任分憂者、藏人、式部、民部丞、外記、官史等也、此五人者、非唯劇務要職、其本或諸道成業、或諸司積勞、雖敍位停止之年、而殊被敍用、其來尙矣、至于大藏丞、織部正、撿非違使者、其賜爵各有年限、又新敍之後、未必早拜國、而年來暫居其職、一二年間或依佗勞、或依氏擧、不得年限、早被敍者、偏假名於本官本職、與彼五人同被拜除、或拘一職、累拜兩國、比肩繼踵、荷恩戴德、爰新敍之輩、望此職者八人、去任之吏、彌被抑遏、若每年先盡新敍、其餘纔及舊吏、則雖叶格濟事、有功無過之輩、而逐年可入積薪之底、何春再期散木之榮、當于斯時、朝野皆以爲、受領者一生一度之官榮也、興國案民之治迹、不用盡撰穢蒲之政弊、何益、豈如不塵編戶之苦、長廻潤屋之謀矣、如此則恐朝少廉恥之臣、國多貪婪之吏、國弊民散、興復難期、非敢塞賢路、爭吏途、只令天下之耳目知聖德之平均也、望請天恩、殊垂矜照、諸國受領之吏、秩滿臨時之闕、若可補十人者、舊吏新敍

〔八代集抄後撰十三〕あはぢのまつりごとびと　淡路掾也、掾をまつりごとびとゝよむ也、

〔北山抄吏途指南十〕給官事　外官除目受領之擧、先可入介與復任國之者、合期勘公文、成間別功之者、次々可入之、式部民部等巡給、縱未有成功者、猶擧一勞為善、但近年之間、有新起請、其間又可斟酌、

〔官職秘抄下〕諸國（有大上中下國）　守　舊吏新敍（藏人、式部民部外記、史、檢非違使、）院宮坊官別進成功之輩、隨國隨人任之、不次拜任之者、不足為例、但伊豫播磨四位上﨟任之、又近江丹波備中近代為卜食國、撰其人任之、凡卑輩不任之、山城大和非侍職、近代不然、志摩以高橋氏任之、上總常陸上野太守為親王、介為受領、仍歷外記史輩不任之、與親王不可相並之由、二條關白被執之、然而其例多、又近代不及此儀歟、志摩飛驒隱岐佐渡壹岐對馬六位任之、又五位任之、西海道幷邊要國外、依可獻五節舞姬、以藏人五位已上者任之、陸奥守以可然人任之、依兼鎭守府也、近代又必不然、參議兼任例（守義保平）兼兩國例（貫頁）　權守（中下國無權守）　近江越前丹波播磨美作備前備中備後周防伊豫讚岐為參議兼國、此外或為宿官、為他人兼國、又以別進成功者任之、　介（大上國有權）　中下國無之、但至能登丹後石見長門土佐日向者任之、上總常陸上野為受領、外記史檢非違使宿官也、又為兼國、又臨時內給、院宮臨時給任之、　掾（大國有大少權、上國有權）（無大少）　志摩無之、內給臨時內給、院宮給、諸臣二合四所籍（內豎、校書殿、大舍人、進物所、）內舍人文章生藏人所出納作物所畫所瀧口北堂明經勸學院弉學院、每年任之、於竿明法者隔年任之、內舍人任坂東、騎弓馬之故也、文章生任北陸西海、練文法為蕃客也、得業生同之、但不任西海、又近衞將監以左任近江、右任播磨、又諸道得業生任之、

目（大國有大少）　內給臨時內給、院宮親王給、諸臣給、內侍司二合籍、太政官左右辨官史生、召使、內記史生勞滿十年者、上召使、御廚子所、御書所、大歌所、作物所、畫所、三省史生、六府番長任之、但上召使者任五畿、志摩、伊豆、飛驒、佐渡、隱岐、淡路等也、

〔三代實錄十二清和〕貞觀八年閏三月五日庚戌、加賀國司言、居住國內之輩、便任國司幷士民為博士醫師

去任

儒也、然者以件人被充歟、

〔中右記〕天仁元年十二月卅日、陸奧守基頼蒙重任宣旨也、殊近代不見、但橘爲仲延任云云、此外不見、歟、就中基頼去年秋上道了、今有此恩可謂不次之賞歟、

〔吾妻鏡七〕文治三年八月廿六日甲午、可令遠江守義定修造稲荷社之由、爲權黃門經房卿奉被仰下所被募重任之功也、稲荷祇園兩社破壞之間、皆付成功可被終修治之功、　十一月二十八日乙丑、閑院修造勸賞事可辭申之旨、兼以被仰遣廣元之許畢、廣元得其趣遮依辭申無其沙汰者、來十三日以遷幸之次、相摸武藏兩國可爲重任之由被仰之許也、仍被下御感院宣、今夕到來、其詞偁、　閑院修造事、雖爲大厦之功、已爲不月之營、可有勸賞之由思食、內々依有聞食之旨、于今所有御猶豫也者、　院宣如此、仍執達如件、

十一月十六日　　大宰權帥藤原經房奉

謹上　源二位殿

〔吾妻鏡十〕文治六年二月十日甲子、遠江守義定去月廿五日被遷任下總守訖、是外雖給替國內有背叡慮事等之故也云云、遠州者重任既多年之上、殊執思之處、今此事出來、愁歎尤難休之由申二品之間、可令執奏歟之趣、被副御書於義定狀差飛脚令進上給、行程被定五箇日云云、

〔延暦交替式〕太政官符、撿和銅五年五月十六日格云、遷代官人、給夫幷馬者、今有在任一二〇二、政事要略五十九、元、年而得替者、若爲處分者不論年數、替者令給、

天平八年四月七日

〔後撰和歌集雜一十五〕あはぢのまつりごとびとの任はてゝのぼりまうできてのころ、かねすけの朝臣のあはだのいへにて、　　みつね

ひきうへし人はむべこそ老にけれ松のこだかくなりにけるかな

漢ノ才智ヲキハメサセ給フノミニアラズ、天下ノ政ヲヨク〳〵キヽオカセ給テ、御卽位ノ後、サマザマノ善政ヲオコナハレケルナカニ、諸國ノ重任ノ功ト云事、長ク停止セラレケル時、興福寺ノ南圓堂ヲツクレリケルニ、國ノ重任ヲ關白大二條殿〔○敎通〕マゲテ申サセ給ケルニ、事カタクシテ、タビ〳〵ニナリケレバ、主上逆鱗ニオヨビテ仰ラレテ云ク、關白攝政ノオモクオソロシキ事ハ、帝ノ外祖ナドナルコソアレ、我ハナニトオモハムゾトテ、御ヒゲヲイカラカシテ、事ノ外ニ御ムツガリアリケレバ、殿、座ヲタチテイデサセ給トテ、大聲ヲハナチテノ給ハク、藤氏ノ上達部ミナマカリタチテ、春日大明神ノ御威ハケフウセハテヌルゾトイヒカケテ出給ケレバ、氏ノ公卿マコトニモ一人モ殘ラズ皆座ヲタチテ、殿ノ御トモニ出ケレバ、事ガラオビタヾシクゾアリケル、主上是ヲキヽコシ食テ、關白殿幷ニ藤氏ノ諸卿ヲメシカヘシテ、南圓堂ノ成功ヲユルサレニケリ、殿ノ御威モ君ノ御心バヘモアラハレテ、時ニトリテイミジキ事ニテナンアリケル、

〔扶桑略記〕〔三十白河〕應德三年十月廿日甲辰、公家近來九條以南鳥羽山莊新建後院、凡卜百餘町焉、近習卿相侍臣地下雜人等、各賜家地、營造舍屋、宛如都遷、讃岐守高階泰仲依作御所、已蒙重任宣旨、備前守藤原季綱同以重任、獻山莊賞也、五畿七道六十餘州皆共課役、堀池築山、自去七月至于今月、其功未了、洛陽營々、无過於此矣、

〔神皇正統記〕〔白河〕白河に法勝寺を立て、九重の塔婆などもむかしの御願の寺々にも超たためしなきほどにぞ作りさせ給ひける、此後代ごとに打つゞき御願寺をたてられしを、造寺熾盛のそしりありき、造作のために諸國の重任など云事おほくなりて、受領の功課もたゞしからず、封戸莊園あまたよせをかれて、まことに國の費さこそなり侍りにし、

〔中右記〕寛治八年〔○嘉保元年〕二月廿二日甲子、除目入眼、酉時許事始、〔○中略〕中宮大夫奉功課定、及曉更事了、淸書、上卿左兵衛督、受領十三ヶ國中、無文章生、但安藝守藤有俊朝臣重任已載除目、彼人大業名

〔小右記〕寛弘二年十二月廿一日乙未、播磨守重任宣旨下了、

〔本朝續文粹六奏狀〕正四位下行伊豫守源朝臣賴義誠惶誠恐謹言、

請特蒙天恩依征夷功被下重任宣旨興復任國勤斷公事狀

右賴義、謹撿案內、依勳功蒙恩賞之者、本朝異域、軌躅多存、或起於徒隷、以昇金紫之高位、或出於卒伍、以至相將之崇班、賴義爲功臣之末葉、持奉公之忠節、爰奥州之中、東夷蜂起、領郡縣以爲胡地、驅人民以爲蠻虜、數十年之間、六箇郡之內、不從國務、如忘皇威、就中近古以來、暴惡爲宗、仍去永承六年、忽以賴義、爲令征罰、被任彼國、天喜元年兼鎭守府將軍、賴義啣鳳凰之詔、向虎狼之俗、紆甲冑以赴千里之路、交矢石以忘萬死之命、運籌於氈帳之中、決勝於烏塞之外、爲其魁首者、安倍貞任、同重任、散位藤原經清等、適依兵略、皆伏誅戮、或傳首於京師、或聚馘於隴道、其餘醜虜、安倍致任等五人、束手歸降、夷狄之居、已爲公地、叛逆之輩、皆爲王民、依其功績、去康平六年被任伊豫守矣、明聖之恩、尤足欽仰、賴義其年爲平餘類、逗留奥州、去年二月適以入華、須剖虎符、早赴豫州、而征戰之間、有軍功之者十餘人、可被抽賞之由雖經言上、未有裁許、仍相待綸言、難赴任國、况去年九月被賜任符、下向遲引、自然如是、然間四年之任、二稔空過、彼國官物、不能徵納、然而封家納官、其責如雲、仍以私物且勵進濟、方今彼國雜掌申云、頻遇旱損、稻粱不秀、境無秋實、民有菜色、須廻興復之計、且致辨濟之勤者、重撿傍例、或尋莅境之年限以計歷、或依擧國之亡弊、以重任之者、古今之間、寔繁有徒、况致希代之大功、何無殊常之厚賞、昔班超之平西域也、早封千戸之侯、今賴義之征東夷也、盍賜重任之賞、彼送三十年以彰功、此歷十三年以立勳、遲速之間、已有優劣、採擇之處、何無哀矜、望請天恩、依征夷功、被下重任宣旨、且廻興復之計、且致進濟之勤矣、賴義誠惶誠恐謹言、

年　月　日

〔續古事談一王道后宮〕後三條院ハ、春宮ニテ廿五年マデオハシマシテ、心シヅカニ御學問アリテ、和

延任
重任

承和二年七月三日

○按ズルニ、國司任限ノコトハ、政治部任限篇ニ、辭見、先使、新司宣、赴任、秩滿交替料等ノ事ハ、同交替篇ニ詳ナリ、

〔北山抄 十吏途指南〕延任、重任事、
延任之人、以不召替人可知之、但重任之人、可載除目歟、件等之事、可尋舊例、紀伊守量理延任之時、注大間云、二ヶ年延任、是非必先例乎、延喜之間、肥後守良氏數年不召其替、彼時大間无所見也、計之不可注載歟、若有年限以詞可示仰歟、伊豫守遠古重任時例可勘之、至于掾目等、更任皆載除目畢、抑興復亡國、辨濟不懈、或及任終、逢官舍燒亡等之輩、邂逅可有延任之恩、須勘任中所濟、然後許之、至于重任可在非常之功勳歟、

〔官職難儀〕延任とは　一任四ヶ年を又四ヶ年任ずるをば重任と云、四ヶ年のうちを一年にても、又二ヶ年三ヶ年にてものべてなさるゝをば延任と申すなり、

〔官職難儀〕重任とは　諸國守以下重任と申は、一任はてゝ又いま一任其まゝなさるゝを申也、一任とは四ヶ年を申也、但陸奥出羽西海道等は遠路たる間、往還不便のゆへ、一年延て、一任五年也、重任と讀也、重任と讀は別の事也、てうにんと云は、此官は重職にて重きと云心也、是を或人の何をも重任とよむべきよし申侍る、文字のやうはさにてあれども、有職の口傳の六借はかやうの事にて侍り、何にてもてうにんと讀て心ゆかず、此類多ある也、清濁につきてのよみくせこそ、日本のならひにて侍るよし、古人も申侍る也、

〔日本紀略 一九條〕永延元年七月廿六日丁亥、是日也、美濃國百姓數百人、於陽明門申請守源遠資延任之由、

〔日本紀略 一十條〕寛弘元年閏九月五日丙辰、今日、丹波守業遠重任、依造羅城門也、

交替任限

姓農桑地、如有違犯者、收獲之實、墾闢之田、並皆沒官、卽解見任、科違勅罪、夫同僚幷郡司等、相知容隱、亦與同罪、若有人糺告者、以其苗字與糺告人者、今被右大臣宣偁、奉勅出仕之徒、各有田家、或任當處、還廢生業、宜自今以後、依件耕作、若假托宰務、侵妨民要者、沒官科罪、如先符、

大同二年七月二十四日

〔享祿本類聚三代格六〕太政官符

應國司停作田給事力事

右得河內國解偁、撿案內、太政官去延曆三年十一月三日下諸國符偁、國司等多營田園、妨民農業、凋弊之源、職斯之由、宜加禁制、不得使然者、而至于大同二年七月廿四日、下符畿內、特聽作田、不給事力、在今商量、營田之煩、觸事多妨、望請准據舊例、停止作田、被給事力、但以裕均使、不損貢賦、謹請官裁者、左大臣宣、奉勅依請、四畿內同准此、

天長二年潤七月廿二日

〔類聚三代格五〕太政官謹奏

諸國守介四季爲歷事

右謹撿選敍令、初位已上長上官選代、皆以六考爲限、慶雲三年二月十六日改定四年、大同二年十月十九日更據令文、弘仁六年七月十七日復慶雲格、天長元年八月廿日、守介以上別處六年之秩、夫吏者、民之所歸、民者吏之所本、頃年良吏之風希聞、窮民之憂不息、臣等以爲、善人三年尙可勝殘、四凶九載難復致功、然則治之能否、非年遠近、代之淸濁、賢將不肖、伏望國司之歷、因循慶雲、一用四年、但陸奧出羽大宰府等、僻在千里、去來多煩、實緣十一、弘仁七兩年格、事近便宜、不可改、至如廉節可稱、無心顧私之徒、不制年限、殊待明詔、事貴變通、施期弛張、隨時之義大矣、臣等商量、具件如前、伏聽天裁、謹以申聞、謹奏、聞、

供給給粮

免徭役

國司耕田

右謹撿案內、當國西作遠江國榛原郡、東承相摸國足柄關、況復國內帶淸見橫走兩關、坂東暴戾之類、得地往反、隣國奸猾之徒、占境栖集、侵害屢聞、奪擊自發、百姓不安、境內无靜、國宰守官符旨、勤糺奸犯之輩、不帶弓箭、無便追捕、近則管益頭郡司伴成正、判官代永原忠藤等、去天曆八年被殺害、介橘朝臣忠幹、去年被殺害也、是或拒捍公事、或忽結私怨、往々所侵也、重撿傍例、甲斐信濃等國、雖云不置關門、去承平天慶之間、任國申請、已被裁許、此國已帶兩關、何不申請、加以可捕糺私帶兵仗之輩、及勤行警固之狀、官符重疊、若無弓矢之儲、何禦非常之危、望請官裁、准諸國例、被裁許件帶劒、將爲不虞之備、仍錄事狀、謹請官裁、謹解、

天曆十年六月廿一日

件帶劒事、同年十月廿一日、中納言師尹宣、奉勅依請、

〔續日本紀 十一 聖武〕天平四年五月乙丑、對馬島司例給年粮、秩滿之日、頓停常粮、比還本貫、食粮交絕、又薩摩國司停止季祿、衣服乏少、並依請給之、

〔續日本紀 二十三 淳仁〕天平寶字四年八月甲子、勅曰、〈略〇中〉又勅、大隅、薩摩、壹岐、對馬、多褹等司、身居邊要、稍苦飢寒、出擧乏稻、曾不得利、欲運私物、路險難通、於理商量、良須矜愍、宜割大宰所管諸國地子各給守一萬束、掾七千五百束、目五千束、史生二千五百束、以資遠戍、稍慰羈情、

〔續日本紀 三十二 光仁〕寶龜三年三月丙申、始免出羽國司戶徭、

〔令義解 三 賦役〕凡〈略〇中〉國學博士、醫師、〈略〇中〉並免徭役、

〔類聚三代格 十五〕太政官符

應聽畿內國司作田事

守十町〈和泉國守八町〉　介八町　掾六町　目四町　史生二町

右太政官去延曆三年十一月三日符偁、國司等不得公廨田外更營水田陸田、又不得私貪墾闢侵百

帶劍

〔朝野群載諸國雜事二十二〕國符赤穗郡司

應免除太皇太后宮大夫家御領有年庄司寄人等臨時雜役事

司捌人略○中

寄人肆拾壹人略○中

右彼家去十月十五日牒、今月十三日到來偁、件庄代々相傳之處也、而本公驗等、去四月十三日、右○右一本作左衛門督三條家燒亡之次、紛失已了、仍如本立券、免除司寄人等臨時雜役者、所仰如件、郡宜承知、依件免除、不可違失、符到奉行、

大介藤原朝臣説孝　權大掾大和宿禰　大掾播磨宿禰　佐伯朝臣　權大掾播磨　大目刑部

小目刑部

長和四年十一月十六日

〔延喜式兵部二十八〕凡大宰府官并品官、史生、使部、得考書生、及所部國島、武藏、安房、上總、下總、常陸、上野、下野、陸奧、出羽、越後、佐渡、因幡、伯耆、出雲、石見、隱岐、長門等國郡司書生等、並聽帶仗、

〔都氏文集狀四〕□□爲丹州淸刺史請官裁狀

請國郡司等帶劍以備不虞狀

右此國所治危嶮、直臨北海、新羅狗竊、天霽遙見、謹撿案內、去貞觀五年、新羅東別島細羅國人五十餘口、舟行遭風、漂著部下竹野郡松原村、言上先行、又故老申云、海浦小民、或得風濤漂來衣履器皿等、皆殊方之詭物、非中國之所有、以此驗之、異賊拜城、相去不遠、恐有凶類一旦來窺、已無武備、何以承之、望請帶劍、以禦非常、謹解、

〔朝野群載諸國雜事二十二〕駿河國司解　申請官裁事

請因准諸國例、被令國司幷郡司雜任帶劍狀

國符

年月日　　主典位姓名牒

守姓名

右守在治部、牒入部內、介以下、或若守入部內、牒在治部介以下云、撿調物所牒國衙頭介以下、報云、國衙頭牒上撿調物所案典等若長官不在者、以介准守、餘官不在、節級相准亦同、年月日下、典史生署之、

撿調物使　牒上國衙頭

某事

牒云云、具錄事狀謹請進止、謹牒、

年月日　　主典位姓名牒

介姓名

右介入部內、牒在治部守、或掾以下、署如介、

〔東大寺正倉院文書二十八〕越前國天平四年郡稻帳○中略

賁太政官遞送符壹拾道從若狹國到來、使壹拾人、留當國符五道、更於能登國遞送符五道、

接續題越前國郡稻帳天平五年潤三月六日、史生大初位下阿刀造佐美麻呂

〔東寺百合古文書イノ自二十五至四十五〕紀伊郡司解　申請國符事

合壹枚

被載應宛除圓融寺御願法華三昧堂佛供常燈六僧供養并雜用料田貳拾捌町參段貳百漆拾陸步狀○中略

天元四年三月廿五日

總行事紀判

行事秦

國司牒

〔南部文書一〕花押○北畠顯家

信濃前司入道行珍申、久慈郡事、申狀如㆑此、子細見㆑狀、早可㆑被㆑沙㆓汰居代官於彼郡㆒之由、國宣候也、仍執達如㆑件、

元弘四年二月十八日　　大藏權少輔淸高

南部又次郎殿○師行

〔東寺百合古文書三十〕綸旨施行國宣案

若狹國太良庄雜掌申、直阿以下輩濫妨狼藉事、決斷所牒副㆓具書㆒如㆑此、任㆑牒之旨、可㆑令㆓下知㆒給㆑之由、被㆑仰下候也、仍執達如㆑件、

建武元四月十一日　　隼人正　康綱

若狹御目代殿

〔諸家文書纂十二〕進上

御奉行所

此所高武藏守師直判形有

能登國氣多本宮所之日供僧神官等、違㆓背國分㆒之間、被㆑經㆓上裁㆒之處、爲㆓永代領㆒之間、可㆑停㆓止國衙之煩㆒之旨、先度被㆑成㆓國宣㆒了、任㆓彼證狀㆒向後可㆑止㆓其綺㆒之由、被㆑仰㆑下之旨、國宣候也、仍執達如㆑件、

貞和五年八月八日　　前肥後守忠隆奉

院主御房

〔延喜式五十雜〕國司上下相牒式

某事

牒云云、今以㆑狀牒、牒至准㆑狀、故牒、

留守所符様第二十六

留守所下　佐用郷

可令早急調進御年貢油未進事

右油來何日可令運上之狀如件、更不可遲引、以下、

年號其月ム日ミミミ

〔朝野群載二十二諸國雜事〕第二度廳宣　在廳官人等

仰下條事

一可令注進官物率法事、

右色々率徴、一々可注進之、

一可同令注進、一所目代幷郡司別符司等事、

右爲令尋沙汰、早可注申之、

一可同令注進當年田數幷國内起請田農料之事、

右國中之政、農料爲先、官物爲宗、早注委細可令進上、兼可致用意之故也、

一可參上在廳官人等兩三人事

右爲召問先例國事、爲宗之輩、早可參上之、

以前條事所宣如件、在廳官人等宜承知依件行之、

元永元年十二月九日

右兵衛權佐兼大介藤原朝臣

○按ズルニ、初度ノ廳宣ハ、卽チ新司ノ宜ニシテ、國司赴任ノ際ニ發スルモノニテ、第二度以下ノ廳宣ハ、國司赴任後、國務ヲ行フ爲ニ發スルモノナリ、

國宣

所由國司、不細勘知、妄卽放狀、奸計之興亦在所由、此等之色、尤宜禁制者、諸國承知、不得更然、自今以後、如有此類者、本部及所由國司與郡司同罪、若有要應相替者、先具事由申送、推勘之旨、令有指的、

延曆十五年六月八日

〔官職難儀〕國宣とは國守の吾國中へ下知するを云、司の宣と申心なり、

〔雜筆要集〕國宣樣第二十三

被國宣偁、來何日宇佐勅使出京云々、任例明石驛雜事、無對捍可令勤仕、毎年訴訟不絕之條、不穩便、今年者相勵可致丁寧之由所候也、仍執達如件、

其月ム日　姓某甲奉

明石鄕司殿

同請文樣第二十四

謹請　國宣事

右去何日國宣、今日到來、件驛雜事、皆任先日國宣之旨、無懈怠可令勤仕之由、急令下知刀禰等候了、今重有此宣、何存疎略乎、仍謹所請如件、

其月ム日　明石鄕司平ム請文

廳宣樣第二十五

廳宣　留守所

應令早任先例引募左近衞相撲人縣馮免田浪人事

右馮依爲最手、免田八十町、浪人八十人、任先例可令引募之狀、如件、留守所宜承知、依宣用之、以宣、

年號其月ム日　安主::

守藤原朝臣ム判

輸納

指出ニタリ、然レバ付タリツル從者共ハ、此リケル人ニ我等ガ付テ此ル目ヲ見事トテ、罵リ覆シテ皆棄去ニケリ、難去キ從者共ゾ四五人許殘テ、何ニマレ御セム所ニ遣リ着テコソハ、何デモ罷ラメト云テ、己ガドチツラ〳〵ト歎キ居タリ、主此ヲ見ニ、可爲方覺エザリケレバ、底ハ白砂ニテ淺キ小河ノ流タリケルニ下立テ、鞭ノ崎ヲ以テ、水ノ底ノ砂ヲ此彼搔立リケレバ、鞭ノ崎ニ黄ナル物ノ有ケルヲ、何ゾト思テ搔廻スニ、圓ナル物ニテ、鞭ノ被廻ケレバ、和ラ砂ヲ搔去テ促レテ見ニ、小瓶ノ口ニ見成シツ、瓶ニコソ有ケレ、人ノ骨ナドヲ入テ埋ミタリケルニカト、氣六借ク思エケレドモ、搆テ携開テ瓶ノ內ヲ見ニ、金ヲ一瓶入テ埋ミケルヲ見付テケレバ、侘シト思ツル心モ忽ニ晴テ、思フ樣國ニ下着テ、道ノ程ノ樣ニ被用テ任ヲ通シタリトモ、金此許儲ケン事不可有ト思テ、從者共ノ居タルニ立塞テ、此瓶ヲ和ラ拔出テ、極テ重キヲ念シテ、懷ニ引入テ、衣ノ袖ヲ絕、腹ニ結付、〇中略京ニテモ、金ヲシ多ク持タリケレバ、便々シクテ□程ニ、內舍人ニ成ニケリ、然テ公ニ仕リケル程ニ、代替リテ不破ノ關ノ□ト云事ニ成テ、彼關ニ下テ、關固メテ居タリケル程ニ、彼陸奧ノ守ノ中上リト云事シテ、此ノ方娘ナド上セケルガ、此關固メテ居タル所ニ來懸タリケルヲ、公ニハ可仕者ニコソ有ケレト云テ、通ラントシケルヲ、通サンヤハ、□爲ルモ不通サ、返ラント爲ヲモ不返シテ、追迷ハシテ、關ニ置テ□ケレバ、〇下略

〔延喜式二十三民部〕凡官物運京、應差綱領者、米三百石已上、差國司史生已上勝任者充、不滿此數、差郡司及子弟幷百姓殷富家口重大者、

〔類聚三代格七〕太政官符

應禁國司使綱領郡司任意相替事

右、右大臣宣、奉勅、如聞、諸國綱領郡司等、任意相替、正身不參、至于入罪、競行囑託、因此本部國司等更進解狀云、郡司等應替之由、先既申訖、漏不申上、過在國司者、如此隱欺虛實難悉、加以在路稱故、申牒

甚、風雪無隙、無往還之者、動失前途、難企早參、因茲遲怠於今者、相待明春可參洛也、凡於近都可言上事、寔繁區分、今時不奏達者、定有不忠之咎哉、陰愧神道、顯畏王化、就中七旬慈父、旦暮難知、每思此事、長大息耳、然則且仰堯日之新光、且拜嚴親之頽齡、望請官裁、早被裁許者、左大臣宣、奉勅、言上之旨、知有勤節、遊鎭之事、不可默止、宜仰彼國、生虜之輩、討伐之符、須待後仰隨身參上者、國宜承知、依宣行之、

延久三年五月五日　　大史小槻宿禰

權中辨藤原朝臣

〔今昔物語二十六〕付陸奧守人見付金得富語第十四

今昔、陸奧ノ守□ト云人有ケリ、亦其時ニ□ト云者有ケリ、互ニ若カリケル時ニ、守心ヨリ外ニ頗ル妬シト思ヒ置タル事ノ有ケルヲ不知シテ、□守ニ付タリケルヲ、守艶ス發應シケレバ、喜ト思テ有ケルニ、陸奧ノ國ニハ、厩ノ別當ヲ以テ一願ニ爲ニゾ、京ニシテハ然樣ノ事共ヲモ未ダ定メ不ドモ、自然ラ出來ケル馬ノ事共ヲバ、此人ニ沙汰セサセナドシテ、厩ノ別當ニ可仕樣ニ持成ケレバ、人皆此人コソ一ノ人也ケレト思テ、下衆共モ數付ニケリ、然テ守國ヘ具シテ下ルニ、京出ヨリ始テ此人ヨリ外ニ物云ヒ不合ケレバ、道ノ程從者多ク被仕テ鑭メクモ理也、然レバ肩ヲ並ブル人无テ下ル程ニ、既ニ國ニ下着ヌ、其ニ昔ハ白河ノ關ト云所ニテ、守ノ其關ヲ入ニ、供ノ人ヲ書立テ、次第ニ關ヲ入テ、入レ畢テ後ニゾ木戶ヲ閉ケル、然レバ此守共ノ書立ヲ目代ニ預ケテ、守ハ入ヌレバ、此樣ノ事ノ沙汰モ我ニゾ行ハセンズラムト思ケルニ、然モ无キ異人ノ沙汰ニテ、關ノ者共並ビ立テ、何主ノ人入レ彼主ノ人入レト呼デ、主從者次第ニ入ルニ、先我ヲ呼立テンズラムト聞ニ、四五人マデ不呼上ケレバ、我ヲ尻卷ニ入ンズルナメリト思テ、從者共引將テ待立ル程ニ、皆人入畢テ後、我入ンズラムト思フニ、木戶ヲ急ト閉テ、乘テ入ヌレバ、奇異ク云甲斐无テ、返ランズルニモ、霞ニ立テ秋風吹際ニ成ニタリ、音无クトモ國ニ暫モ可有ニハ被

〔類聚三代格七〕太政官符

應聽諸國官長任中一度入京事

右撰格所起請偁、天長元年八月廿日、參議左近衞中將從四位上兼行近江權守淸原眞人夏野奏狀偁、國中之政、朝集使可申、而或附史生、至于問政、譬猶面墻、伏望差官長副史生一人、其國滯政於玉階之前令面陳言、然後罷却、便留史生令成遺政者、依奏、但有可奏於玉階前者、雖非朝集使聽入京、無可奏之事者、雖朝集使而不聽之者、今案此奏事乖時宜、施有支梧、何者凡國宰所申、應經奏者、先申太政官、官卽商量、擇其可者奏之、然則直進玉階、應口陳事、未審其旨、今諸國長官、爲申雜務、請暇入京、就官申政、官云非可奏玉階前之事、何輙入京、責過狀從追却、求之政途、理不穩便、伏望任中一聽入京、令申擁政、若留連京下、久不歸者、隨狀勘責、但陸奥出羽大宰管內諸國島、不在此限者、中納言兼左近衞大將從三位藤原朝臣基經宣、奉勅、依請、

貞觀十年六月廿八日

〔三代實錄陽成三十七〕元慶四年六月七日己丑、勅曰、○中略令筑後豐後兩國長官、先經府司、後聽入京、若無府解、不得輙發、緣大貳安倍朝臣貞行申請也、

〔朝野群載延附十一〕追討人隨後仰可參上　宣旨

左辨官下　陸奥國

應隨後仰參上守源朝臣賴俊事

右得彼國去十二月廿六日解狀偁、謹撿案內、當國多年之間、諸公事之輩、雖有其數、始自散位基道、至于其次々、尋訪梟惡之者、悉令追討既了、又荒夷發兵、黎民騷擾、然而或追籠本所、或斬取其首、或乍生搦得、於今者當國一爲無事也、加之筆端有限、存略之間、胡城雲隔、非無疑殆、件荒夷等首、幷生獲者、以使令參、定爲後代之謗哉、然則守賴俊隨身件首幷生獲輩、早可參上也、而當國爲體、十月以後、寒氣殊

應聽管內諸國次官已下主典已上官人入京事

右得大宰府解偁、豐前國解偁、撿太政官天長五年四月八日下大宰府符偁、得豐前守從五位下伴宿禰枝嗣解狀偁、撿太政官去大同元年六月日符偁、得山陽道觀察使正四位下藤原朝臣園人解偁、西海道年中上都雜使、其數繁多、而此道疲弊、殊於他堺、撿察其由、牽緣迎送無息、無不得顧私、望請西海道五位已上、自非秩滿解任者、不聽輙入京者、右大臣宣、奉勅、依請者、而太政官去天長元年八月廿日下七道諸國符偁、撿參議左近衞中將從四位上兼行近江權守淸原眞人夏野奏狀偁、國中之政、朝集使可申、而或附史生、至于問政、譬如面墻、伏望、差官長〇官長一本作長官副史生一人、其國濫政、於玉階之前、令面陳言、然後罷却、便留史生、令成遺政者、依奏、但有可奏於玉階前者、雖非朝集使、聽入京、無可奏之事者、雖朝集使而不聽者、爰六道諸國、既依符旨、被陳經遠之圖、省廢承前之煩、而西海道獨守前格、未遵後符、四度之政、轉大宰府、踰年涉月、乃被裁下、以有限之秩、待無期之報、諸務雜事、積年擁滯、由斯前司空經年序、被拘解由、後任偏爲疑端、不肯受領、望請因准諸道、被聽入京者、左近衞大將從三位兼守權大納言行民部卿淸原眞人夏野宣、奉勅、依請者、府宜承知、先勘定可申之事實、所請有理、任中一二度聽入京、依此不得輙用公乘、自餘諸國宜亦准此者、謹案件等符、大同之格、能省路次之勞、天長之符、遐絕公乘之弊、而今此國從大同四年以來迄承和十一年、勘出色目稟二百萬束、誠雖前司之怠慢、抑非後任之煩乎、頃年依符進國雜掌一人、未必其人、況懷土之民、有心早歸、無勤覆申、多受勘出、不得細辨、國宰覆申、往還之程、殆三千里、報下之間、稍過任秩、遷代之人、由此多愁、勘出之物、以之猥積、又諸道國吏、或使或假、便申雜政、兼省國煩、而管內國吏、不得上都、凡未得解由之輩、多積管內者、職此之由也、望請長官、若次官一人、任中一二度、取海路被聽入京、辨濟雜務者、府司覆審、所陳有理、謹請官裁者、右大臣宣、奉勅、依請、但任用之官、堪辨濟者入京、自餘諸國、亦宜准此、

嘉祥二年三月八日〇又見續日本後紀

〔中右記〕保安元年九月廿九日、從京下人來云、四位少將成道之妻俄卒去、年十九云々件人尾張守敦兼朝臣長女也、近日夭亡人多有其聞、世間無常、不可記盡歟、○尾張守近日依神拜下向任國也、

長承四年○保延元年五月六日、殿下給御消息云、大和國司重時、下向欲神拜處、山階寺大衆聞此事、欲濫行、年來大和國司、全不神拜、暗知大和國司、欲直國中歟、大衆所企不穩便、可制止之由、遣長者宣了者、申云、尤可然旨申了、但年來無此事、强國司張行、定不叶歟、

奉使

〔壬生家文書〕一 建仁三年十月、國宗宿禰引遣馬於範時朝臣許、是爲神拜、來月十日依下向淡路國也、存受領望之輩、必可引云々、

〔薩藩舊記前集十二〕執印文書

綸旨

薩摩國八幡新田宮所司神官等申、初任神拜廳宣事、任例不日可致其沙汰之由被仰國司候畢、可令存知給之旨、天氣所候也、仍執啓如件、

六月○元弘三年四日　　兵部卿

謹上　右衛門督殿

〔政事要略五十七〕四度使者、正税帳使、大帳使、貢調使、朝集使也、

○國司奉使ノ事ハ、政治部國使篇ニアリ、

任中上京

〔朝野群載二十二諸國雜事〕國務條々事

一隨身不與狀幷勘畢税帳事

不與狀者、語勘解由主典、清書之、勘畢税帳者、就主税寮得意、判官屬書寫之、是皆密々所寫取也、但以件帳等爲後任勘濟公文也、

〔類聚三代格七〕太政官符

神拜

〔令義解五軍防〕凡國司、每年孟冬簡閱戎具、謂戎具者、國内百姓隨身弓箭刀劍等之類也、

○按ズルニ、國司巡行ノコトハ、政治部功過篇ニ詳ナリ、

〔更科日記〕東より人きたる、神。拜。といふわざして、國のうちありきしに、水おかしくながれたる野のはる〴〵とあるに、もりのあるおかしき所かな、見せてとまづ思ひいでゝ、こゝはいづことかいふとゝへば、こしのひのもりとなん申とこたへたりしか、身によそへられて、いみじくかなしかりしかば、馬よりおりて、そこにふた時なんながめられし、

とめおきて我ごと物やおもひけんみるに悲しきこしのひのもり

となむおぼえしとあるをみる心ちいへばさらなり、返ことに、

こしのひを聞につけても留をきしちゝぶの山のつらき東路

〔今昔物語十九〕陸奥國神報守平維敍恩語第卅二

今昔陸奥守トシテ平維敍ト云者有ケリ、貞盛朝臣ノ子也、任國ニ始テ下テ神拜ト云フ事ストテ、國ノ内ヲ所々ノ社ニ參リ行キケルニ、［　］ノ郡ニ道邊ニ木三四本許有ル所ニ、小サキ仁祠有リ、人ノ寄著タル氣无シ、守此ヲ見テ、其ニ有ル國ノ人々ニ、此ニハ神ノ御スルカト問ケルニ、國ノ人ノ中ニ、年老テ舊キ事ナド思ユラムカシト見ユル廳官ノ云フ、此ニハ止事无キ神ノ御マシケルヲ、昔シ田村將軍ノ此ノ國守ニテ在シケル時ニ、社ノ禰宜祝ノ中ヨリ思ヒ不懸ヌ事出來テ、事大ニ罷成テ公ケニ被奏ナドシテ、神拜モ浮カシ朝幣ナドモ被止テ後、社モ倒レ失テ、人參ル事モ絕テ久ク罷成タル也ト、祖父ニ侍シ者ノ八十計ニテ侍シガ、然ナム聞シト申シ侍シ也、此ヲ思フニ、二百年計ニ罷成タル事ニコソ侍メレト語レバ、守此ヲ聞テ極メテ不便也ケル事カナ、神ノ御錯ニハ非ジ物ヲ、此ノ神本ノ如ク崇メ奉ラムト云テ、其ニ暫ク留テ數切リ揮ハセナドシテ、其ノ郡ニ仰テ、忽ニ社ヲ大ニ造ラセテ、朝幣ヲ參リ、神名帳ニ入奉リナドシケリ、

前右兵衞督殿

右長岡郡本山鄕吾橋山長德寺藏、今按宜明中御門也、右兵衞督未詳、

〔後愚昧記〕應安五年正月廿二日、今夜流人宜下也、○中略

太政官符伊○豆○國○司○

流人路峯常

使左衞門府生安部時滿　從二人

門部貳人　從各二人

右爲領送流人峯常、差件等人發遣如件、國宜承知依例行之、路次之國亦宜給食漆具馬參疋、符到奉行、

權右少辨藤原朝臣　　　左大史小槻宿禰

應安五年正月廿二日

〔令義解 二 戸〕凡國守毎年一巡行屬郡、觀風俗、問百年、録囚徒、理寃枉、謂問百年者、問其安不也、録囚徒者、省録之、知其情狀有寃滯與不也、理寃枉者、理、治也、寃、屈也、枉、曲也、此言囚徒之外別被抑屈、假如財物訴訟、及良賤相爭之類、判斷違理也、詳察政刑得失、知百姓所患苦、謂政、政教也、刑、刑罰也、假如差科賦役違法之類、是政失也、判斷獄訟乖理之類、是刑失也、知百姓所患苦者、寃枉之外、有所患苦、假如爲河伯娶婦女之類、是患苦也、敦喩五教、勸務農功、謂五教者、五常之教、則父義、母慈、兄友、弟恭、子孝是也、勸務農功者、文稱農功、故知巡行必以春時、更傳所謂太守行春、勸人農桑是也、部内有好學篤道、孝悌忠信、○註略 清白異行、○註略 發聞於鄕閭者、舉而進之、○註略 有不孝悌悖禮亂常、不率法令者、○註略 糾而繩之、

〔唐六典 三十 三府督護〕京兆河南太原牧、及都督刺史、掌清肅邦畿、考覈官吏、宣布德化、撫和齊人、勸課農桑、敦論五教、毎歳一巡屬縣、觀風俗、問百姓、○舊唐書姓作年 録囚徒、恤鰥寡、閲丁口、務知百姓之疾苦、○下略

〔令義解 二 戸〕凡國郡司、須向所部檢挍者、不得受百姓迎送、妨廢產業、及受供給、謂國司向所部有所檢挍、郡司里長及百姓等不得輙拜赴迎送、至于境上、皆於常所祇承而過之、即郡司入部、里長百姓亦依此例也、供給者、百姓供給也、依律受供饋者勿論、今此令條、向所部特立條禁、縱不至煩擾、不得輙受供給也、致令煩擾、

〔延喜式 二十六 主税〕凡大宰及國司、巡行部内者、帥傔從十人、○中略 國介以上三人、掾以下二人、史生如前、

不成ザリケレバ、守何シテ此レヲ責取テムト思フニ、无下ノ田舍人ナドニモ非ズ、諸司勞ノ五位ニテ、京ニ爲行ク者ナレバ、聽ナドニモ可下キニモ非ズ、然ドモ緩ベテ有レバ、盜人ノ心有奴ニテ、此彼云テ出シモ不遣ズ、何ガセマシト思ヒ廻シテ、思ヒ得テ居タル程ニ、清廉守ノ許ニ來ヌ、〇中略守ノ云ク、大和ノ任ハ漸ク畢ヌ、只今年許也、其レニ何ニ官物ノ沙汰ヲバ今マデ沙汰シ不遣ヌゾト、何ニ思フ事ゾト、清廉〇中略伊賀ノ國ノ東大寺ノ庄ノ內ニ入居ナムニハ、極カラム守ノ主也トモ、否ヤ責メ不給ザラム、何ナル狛ノ者ノ大和ノ國ノ官物ヲバ辨ヘケルゾ、前ニモ天ノ分、地ノ分ニ云成シテ止ヌル物ゾ、此ノ主ノシタリ顏ニ、此ク催ニ取ラムト宣フ、嗚呼ノ事也カシ、大和ノ守ニ成給フニテ思エノ程ハ見エヌ、可咲キ事也カシト思ヘドモ、現ニハ極ク畏マリテ、手ヲ摺ツヽ云居タルヲ、〇中略守其ノ道戶ヲ開テ、此チ入レヨト云ヘバ、遣戶ヲ開ルヲ、清廉見遣レバ、灰毛斑ナル猫ノ長一尺餘許ナルガ、眼ハ赤クテ虎珀ヲ磨キ入タル樣ニテ、大音ヲ放テ鳴ク、只同樣ナル猫五ツ次ギテ入ル、〇中略清廉、只我ガ君我ガ君、然テハ清廉ハ暫クモ生テハ候ヒナムヤト云テ、手ヲ摺テ、宇陀ノ郡ノ家ニ有ル稻米籾三種ノ物ヲ、五百ガ方ニ下文ヲ書テ守ニ取ラセツ、

〔吾妻鏡三十三〕曆仁二年〇延應元年十一月九日甲戌、信濃國司初任檢註事、諏方大祝信重捧請文、當社五月會御山以下頭役人等、申國檢事、依相當頭番、不限其被免一任間事、爲先例之由載之、仍重御沙汰之趣不及異儀、

〇按ズルニ、國司檢注ノ事、台記天養元年九月二十五日ノ條ニモ見ユ、後文賜國ノ條下ニ引ケリ、

〔土佐國蠧簡集一〕土佐國地頭御家人等安堵事、奏聞之處、爲國司早可被書下、但於本所進止下知者、不可及其沙汰之旨天氣所候也、以此旨可被申入給、仍執達如件、

元弘三八月廿五日　左少辨宣明

一應慥搦進陸海盗賊放火輩事

右同宣、奉勅、近年盗賊之類結黨成群、充滿都鄙、殺害人民、放火家宅、就中近日所犯、連夜不絶、宜下知諸國、隣里與力、搦進其身者、

一應同搦進諸社神人諸寺惡僧往反國中致濫行事

右同宣、奉勅、近年諸社神人、諸寺惡僧、或横行京中、決斷訴訟、或發向諸國、侵奪田地、就中延曆興福兩寺惡僧、熊野山先達、日吉社神人等、殊以蜂起、同下知諸國、慥令搦進其身者、

一應停止諸國人民以私領寄與神人惡僧等事

右同宣、奉勅、諸國人民、以公田稱私領、寄與神人惡僧等云云、國之滅亡無大於斯、宜任先符悉令停止者、

一應搦禁勾引諸人奴婢賣買要人輩事

右同宣、奉勅、如聞、勾引諸人之奴婢、賣買要人之輩、充滿京畿云云、結搆之旨、罪科不輕、宜令諸國搦禁件輩者、

以前條事如件、諸國承知、依宣行之、符到奉行、

正四位下行左中辨兼紀伊權守藤原朝臣花押　修理左宮城判官正五位下行左大史兼播磨介小槻宿禰花押

治承二年七月十八日

〔今昔物語二十八〕大藏大夫藤原清廉怖猫語第卅一

今昔、大藏ノ丞ヨリ冠リ給ハリテ、藤原ノ清廉ト云フ者有キ、大藏ノ大夫トナム云ヒシ、其レガ前世ニ鼠ニテヤ有ケン、極ク猫ニナム恐ケル、○中略然テ此ノ清廉、山城、大和、伊賀三箇國ニ田ヲ多ク作テ、器量ノ德人ニテ有ルニ、藤原ノ輔公ノ朝臣、大和ノ守ニテ有ル時ニ、其ノ國ノ官物ヲ、清廉露

君臣之道、與天地共久、累世之政、與日月爭明之御願也、而時口澆季、人少信心、施供之物、毎色不法、嚴重大會、何致疎漏乎、自今以後、行事官等先會一月、下知諸司、任式勤修者、

一應停止諸節櫛棚金銀風流幷瀧口送物過差事

右同宣、奉勅、禁驕節儉者、明王之善政也、件等過差悉可停止者、

一應禁制六齋日殺生事

右同宣、奉勅、禁斷殺生、嚴制重疊、違犯之科、格條已明、而今如聞、遊手浮食之輩、多當彼日、殊成此犯云云、內破佛戒、外忘皇憲、重加下知、慥令禁斷者、

一應令營築鴨河堤事

右同宣、奉勅、防河事、置可行之官、定可勤之國、而近年各無其勤、殆失基趾云云、慥令催行者、

一應停止諸國濟物壹年中令責催一任所當事

右同宣、奉勅、諸國調庸、參期有限、而諸司猥寄少分公用、責催數百之納物、計一年之所當、過四廻之租調、口國之衰弊、尤在此事、任久安保元符、下知諸司、早令停止、

一應同停止私出擧利過一倍事

右同宣、奉勅、出擧私物、格制殊重、況於非法利乎、而貧弊之民、被責窮困、竊以借用返償之間、悉盡資貯云云、如斯之類、縱出契狀、雖經多年、一倍之外、可停止非法者、

一應令有封社司幷諸寺別當修造本社本寺事

右保元二年十月八日符云、修造之勤、載在格條、隨破且修、何致大損、而諸司社寺官長徒貪所領田園之利潤、不顧本所舍屋之破壞、頹毀之後、初經奏聞、申請別功、致其造營、論之朝章、理不可然也、慥令本社本寺本司等勤其修造、若背符旨、尙致懈緩、解却見任、永不敍用、其中顚倒無實、及大破等、私力難及者、各勤在狀、不日言上者、同宣、奉勅、任彼符、慥令遵行者、

之輩、令勵忠勤、況乎採用舊人、誰敢敵對乎、

〔類聚三代格 七〕太政官符

應停止任用之吏恣決郡司及書生國掌等事

右得豐後守從五位下藤原朝臣智泉解狀偁、凡一國興廢、唯繫官長、庶務理亂、非由佐職、又郡司之罪、法立科條、有降考第、且沒職田、事不獲已、爲加見決、其尤重者、至于解却、而任用之吏、不必其人、寄事於公、報怨在私、或信僕從之言、枉決郡司、或逆官長之意、强罪書生、因茲堪事之人、皆耻出仕、無頼之輩、僅以從職、假令循良之宰、有施政術、郡司既非其人、無所辨濟、況亦吏民不和、部内騷動、不改舊轍、何期新治、望請任用之官、不聽見決、若有雜任致愆、必可見決者、官長者判過狀而後行之、然則朝威彌嚴、出仕自衆、謹請官裁者、大納言正三位兼行右近衛大將陸奧出羽按察使源朝臣多宣、奉勅、依請、但五位介不在此限、然與奪之官、職務稍重、莫令雜任以致不遜、立爲恒例、諸國准此、

元慶三年九月四日

〔壬生家文書 二〕太政官符山陰道諸國司、

雜事十二箇條

一應任式條令勤行年中諸祭事

右左大臣宣、奉勅、國之大事、莫過祭祀、因茲諸國調庸貢進之日、總計年中祭物之數、可納別藏、勤其事狀、載延長四年五月廿七日符、而近年緣事所司、積習常例、每事怠慢、禮奠之庭、專背如在、供祭之物、多非本色、敬神之道、可其然乎、就中新年祭者、京官外國相分、所奠之神三千餘座也、事繁日迫、令闕神供云云、自今以後、先祭卅箇日、下知諸司、任式勤行者、

一應如法勤修年中諸佛事等事

右同宣、奉勅、年中佛事、皆是往聖之洪化也、後代明王、承成此願、乾坤致福云云、就中八省御齋會者、

一不可輙狎近部内浪人幷郡司雜任事、

百姓狎近、必瞻賢愚、内表庭胡、外放狎昵、仍於公私務、自有忽諸、但隨國體耳、○中略

一不可國司无殊病故、輙服宍五辛事、

國務之中、必有无止佛神事、仍不淨之間、動致懈怠、无殊病故、輙不可服之、

一愼火事

火事是尤可愼、外土之人、不顧後災、偏結行時之恐、動企放火之心、

一可仰諸郡令捕進無符宜稱館人闌入部内、好濫惡類事、

新任之吏、臨境之後、奸徒應響、多稱館人、宛陵人民、掠奪人物、如然之輩、可捕進其身之由、早致符宜、

一不可令晉屬家子、幷無止郎等事、

自思无止、動成惡言、雖加其諫、一切無愼、進稱不行非法之由、退致晉鼠誹謗之詞、此事漸積、爲民嘲哢、凡率公之責、是爲我身也、縱雖最愛子息幷郎等、若不憚制止、早以追却、不濟公事、得不治名之時、何子息郎等、相扶我者乎、一任空暮、各以分散、朝夕無從、更有何益乎、

一就内房事、不可一切與判事、

愁左道事之輩、動屬託内房、令出申文、就彼事與判之時、不治之名、普聞國内、仍不論理非、一切停止、

又不可用内房讒言、

一不可用讒言事

相從受領之輩、必有勝他之心、爲傕傍人、動致讒言、若用之時、開假常表人短、其事漸積、遂成人害、不用之時、一切無爲、是殊勝千萬也、

一不可分別舊人新人事

雖舊人有無益之者、雖新人有可用之者、若賞不用之舊人、則採用之、新人不致忠勤、只以當時採用

失理、當寘法律、以明勸、但無偏無黨、清風肅俗、拔自常班、處以榮秩、宜告所司知朕意焉、又口勅十三條具在別勅、又勅曰、爲檢天下諸國政績治不、今差巡察使、分道發遣、但比年以來、所任使人、訪察不精、雖陟有濫、吏民由是未肅風化所以尙權改令、具定事條、仰令巡檢、唯恐官人不練明科、多犯罪愆、遁陷法網、仍垂非常之恩、特開自訴之路、其國郡官司雖犯謀反大逆常赦所不免、咸悉除免、一切勿論、但情懷訐僞、不肯吐實、使人存意、再三喩示、若是固執猶不首伏者、依法科罪、普天率土、宜知朕懷焉、又口勅五條、語具別記、

〔朝野群載 二十二 諸國雜事〕國務條々事〇中略

一可旬納七日事

八月上中旬少徵、下旬、九月上旬少增、中下旬、十月上中下旬多徵、隨旬上下、下起請符、若有其勤之郡者、抽加恩賞、勞之、至于不勤者、可處譴責、但隨國古風土俗之例可行、無公私損之法、

一可以信馭民事

馭民之術、以信爲先、民若知之、則所仰之事、指掌易成、若以矯飾馭之、則人多疑心、

一爲政之處、必具官人事、

被置四等官、皆是爲政也、必可具其人、

一定政之後、不可輙改事、

爲政之道、以嚴爲本、仍議定之後、輙不可改定、若有改定、則百姓彌輕之而已、

一不可輙解任郡司雜色人事

若有雜怠、重可召勘、兼加諷諫、但至于重犯、不在此限、

一可知郡司雜任等清濁勤惰事

勤仕公事之輩、以清廉者爲首、仍爲明清濁、必可知勤惰也、抱忠節之者、抽加恩賞、是勵傍輩之故也、

言上、

〔延喜交替式〕凡國郡官司、親自巡覩、脩固池堰、催勸科農、若有田不耕、無力不營、以救急義倉等料廩給之、猶有不足、量佽營料、令勸耕蒔、秋收之日、先納所佽、其雖有田疇、而无人可治、亦以公力營種、所獲稻者、全納官倉、

〔類聚三代格七〕按察使訪察事條事

在職公平、立身清愼、在職公平、必須察吏推伏、立身清愼、合國郡共知、與隨萌諸輩稱多小、並抑指陳、

剖斷理合、獄訟無冤、剖斷合理、自然無冤、若有國移郡斷、省中雪國冤、如此之徒、即非合理、斷既乖錯、入國(國恐因)有冤、

籍帳皆實、戸口無遺、國郡官人、能知撿括、籍帳戸口、無所隱漏、

繁殖戸口、增益調庸、國郡官司、撫育有方、戸口增益、調庸多進、此謂分成、

勸課農桑、國阜家給、國郡長官、字養无倦、誘導有方、人務農業、家赴桑事、

在官貪濁、處事不平、國郡官司、貪濁不平者、具言其狀、

容縱子弟、請託公行、子弟親識、縱容所部、與民爭利、衆力抑奪之類、

嗜酒沈湎、敖遊無度、耽酒凶醟、廢闕公務、及招携惡少年、少劣(少劣二字一本无)犯暴田苗之類、

逋逃在境、淹滯不歸、容止外界逋逃、其數多少不覺、及有寬容者、

肆行姦猾、以求名官、謟事長官、逢毀直善、自求功考、百端逃譽、而無實事者、

右按察使巡歷管國、訪察事條如前、○中略

養老三年七月十九日

〔續日本紀十五聖武〕天平十六年九月丙戌、勅、頒三十二條於巡察使、事具別勅、因勅曰、凡頃聞、諸國郡官人等不行法令、空置卷中、無畏憲章、擅求利潤、公民歲弊、私門日增、朕之股肱、豈合如此、自今以後、宜依頒條、每四考終、必加訪察、奏聞、即隨善惡、黜陟其人、遂令涇渭殊流、賢愚得所、若有巡察使諂曲爲心、昇降

古事類苑　官位部三十三

令制官職二十九

國司下　攝津職　河内職　和泉監　總領併入　吉野監

〔令義解 一職員〕大國

守一人、掌祠社、戸口、簿帳、字養百姓、勸課農桑、糺察所部、貢擧、孝義、田宅、良賤、訴訟、租調、倉廩、徭役、兵士、器仗、鼓吹、郵驛、傳馬、烽候、城牧、過所、公私馬牛、闌遺雜物、及寺、僧尼名籍事、餘守准此、其陸奥出羽越後等國、兼知饗給、謂饗食幷給祿也、征討、斥候、謂斥逐也、言候望敵對馬日向薩摩大隅等國、惣知鎭捍、謂捍衞也、言鎭衞寇賊也、防守、及蕃客歸化、三關國、又掌關剗、謂依律關者檢判之處、剗者塹柵之所是、及關契事、介一人、掌同守、餘介准此、大掾一人、掌糺判國内、審署文案、勾稽失、察非違、餘掾准此、少掾一人、掌同大掾、大目一人、掌受事上抄、勘署文案、撿出稽失、讀申公文、餘目准此、少目一人、掌同大目、史生三人、

〔延喜式 五十雜〕凡美濃國互差掾若目一人、令撿校土岐惠奈兩郡雜事、幷驛家遞送事、

〔令義解 四考課〕强濟諸事、肅清所部、謂盜賊不起之類也、縱令盜賊已起、限内捕獲、尙亦須附其最也、爲國司之最、謂介以上、

无有愛憎、供承善成、謂大宰監亦得此最也、爲國掾之最、

〔續日本紀 七元正〕靈龜二年四月乙丑、詔曰、凡貢調脚夫入京之日、所司親臨、察其備儲、若有國司勸課、能合上制、則與字育和惠、肅清所部之最、不存數險、事有闕乏、則居撫養乖方、境内荒蕪之科、依其功過、必從黜陟、又比年計帳、具言如功、推勸物數、足以掩身、然入京人夫、衣服破弊、菜色猶多、空著公帳、徒延聲譽、務爲欺誕、以邀其課、國郡司如此、朕將何任、自今以去、宜恤民隱、以制所委、仍錄部内豐儉、農桑增益、

國歟、有疑短慮難決、應司前博陸邊說、山城美作近江等爲其說之由被稱歟、但決定彼邊所存、兼不伺定、尤後悔者也、然而當座非可默止、就一說任山城介、(見國官寄物之處、當國正介闕無之、)是揚名不赴任之儀、若叶理歟之由粗廻愚慮之故也、而退吏途指南聊有所見、後勘蒙竊惑焉、兼又就當時之闕任權介之處、後光明照院關白(道平)〇二條任山城之條雖爲一說、權介不可然之由有難之由、後日聞之、就此難其後度々申談後園光院前關白(冬教)〇鷹司所詮猶無一決之儀、向後可樣可辨哉、猶廣可勘決矣、粗見蹤跡者、忠信(或經字)任因幡介、維光者任常陸權介、共雖年紀參差、有所見、自今以後、可任此兩國歟、但有諸國揚名詞之上、常陸因幡所任例不一巡、然者任山城之條非無一說者、不可有巨難歟之旨存之處、去貞和二年二月七日縣召除目、執筆右大臣(頁)被勤仕、件公卿被上揚名介申文之由風聞、翌朝披除書之處、山城權介藤原良清(頁基朝時申)此事先考博陸所難、權介忽被任多、若先年所難被存謬難之由歟、將又先考所存委不被存知歟、

〔政事要略六十七〕問、人之僕從不可著履、但諸國揚名掾目等、爲車馬從之日、依列僕從猶可制哉、爲帶掾目不可制哉、

之所注難注進之由申畢、又請文少々注進了者、此事又大内記爲清朝臣後日談曰、上皇就揚名介事被尋仰少納言入道常宗、(眞覺)常宗注進五箇國、其時被撒御不審云云、此事若以如源氏物語之說可定一國之由思召歟、今度申文望諸國揚名介云云、依是御不審出來歟云云、

又云、或古人物語云、圓明寺關白○(藤原家經)見物賀茂祭之時、山城介渡之由、人々稱之、圓明寺殿被仰云、揚名介渡否被仰、人々聞之、其後諸使等渡大路之時、又同揚名介渡ニト被仰了、揚名介ハ秘事也、而無左右山城使渡之時被仰出、忽覺悟爲令隱揚名介事、後々每度被仰云々、此時已來人々皆揚名介者知爲山城介事云々、

〔揚名問答〕寛治記、(後圓光院)誠非揚名介もや候らむと覺候故、入道所存者、揚名介之由存たりげに候、如此注置候、或說山城介、或說近江介、康保淸愼公、寛治爲房卿等記、揚名字載之有所存之躰也、九條相國申文士代雖載二通申文、揚名可尋云々、是頗不一決之趣也、彼鈔第八卷目六揚名部雖載之、諸本此本闕、非無不審、凡說々雖多之、康保幷寛治記要抄申文卷等之外、皆以非愜所見、以兩記幷寛治申文案其躰不赴任假其名之介歟、康保揚名關白寛治稱無其人之故也、定其國否未了見、其故者、寛弘申文載諸國字、寛治記有美作之詞也、此外說々不足信用、稱山城介者不赴任之躰也、號近江介者通近衛之讀之故歟、如此注置候也、

正六位上賀茂朝臣國久

望揚名介

元德三年正月十一日

件年執筆內大臣公賢也

元德三年正月縣召除目有此申文、(康平內給)此事年來雖聞置未辨定可任之子細、先其國定否如何、寛弘兩通士代內、維光申文者、望諸國揚名介云々、不定其國之條分明也、忠信申文者、無諸國字、定其

為房卿記 後圓光院攝

寛治元年正月廿三日丙子、攝政御直廬被始除目、內給所依無所望人、注上揚名之者、先朝御時、匡房爲五位藏人奉仕、雖任美作、尚以沙汰、後三條院御時、顯綱沙汰例云々、此外五藏人沙汰事歟、

或說云、寛治六年○寛治六年恐寛弘二年誤因幡介賀茂忠信、東三條院名替御申文云々、

此年任人、件名字不見、但春宮御給、因幡權介、藤原忠信、有不審、

〔園大曆〕貞和二年二月廿三日、右相府○藤原實基被送消息、除目事也、○中略

除目無爲、就公私喜悅候、大夫殿御一級目出候、除書御覽候哉、定多紕繆候歟、一分代已下有與事等候き、仍彌散々事候、揚。名。介。比與所爲候、任國又相似守一隅候歟、流布除書少々相違大間之本見及事候き、奇異事候哉、爲之如何、違失等必可示承候、且自他舊規候者也、他事期後信、恐々謹言、

二月廿三日　二條殿攝政于時右府實基公判

洞院殿

揚名介名字、聊存問候者也、沙汰候、黃門二合、

廿四日、昨日委細貴報敬承候畢、除書一本進覽候、抑平中納言二合事、頗一失候歟、但參議二合猶避返例勘出候、如何、揚。名。事。成文無御存知候けり、無念候、任符返上申、又相副任符候き、而任符與申文姓相違已難書候歟、然而避返申文折留候條、無念之間、乍存許任了、他事猶可承紕繆候也、恐々謹言、

二月廿四日　判

洞院殿

〔薩戒記〕應永三十三年三月廿九日癸亥

一揚名介事、覺夜自院○後小松以葉室中納言被尋下云、揚名介、先例任國、幷請文等可注進者、此事迷惑、凡任國者、山城、上野、上總、常陸、近江等之由見抄物、然而何年誰人以何國被任之由無所見、以抄物

宇治殿(藤原頼通)仰云、揚名關白有何詮云々、近來執政爲御虛名之由御述懷云々、

昔東三條院(法興院殿御女、圓融院后、)被擧申揚名介之時、御堂殿被申任因幡介了、旁以有子細者也、

以前兩條簡要也、以之可加了見、秘義略之、

〔河海抄(二夕顏)〕やうめいのすけなる人の家になん

伊行尺云、諸國介也、源氏の人なる官也、權記云、藤原常直申揚名介云々、然(注也)者不限源氏人也、奥入云、此事源氏第一難義也、非可勘知事、抑往古除目ニ揚名介あるべしと見へたり、其家にゐるべき道理なし、此事家々所構蘭菊、各々不究淵源、當流兩家深奥之説、依爲殊秘事存口傳焉、

〔有職問答(四)〕一源氏物語の揚名の介の介の字の事、(無別之儀候)其替各別之由申、受領の介には(替ベカラズ候)替り候哉、

〔揚名問答〕揚名介事

應保二年閏二月十二日己卯、賴業私記云、九條太相國(藤原伊通)談給曰、揚名介事、案之、諸國正介歟、吉所案也、御堂(藤原道長)御申文二度有此事云々、故信西入道(藤原通憲)云、揚名介ハ正權之外介也、不預公廨云々(若有所見歟、在任之外如何、)

元久二年二月十五日癸卯、良業記云、參殿下(藤原良經)召御前、被仰雜掌揚名介事、寬弘二年正月除目、賀茂忠經、藤原維光、望申諸國揚名介、兩人申文二通有之、賀茂忠經任因幡介、除目注忠信、若經字似信、書誤歟、可勘申局本云々、

長保四年二月卅日除目　因幡介淸原諸明

同五年正月卅日除目　因幡介藤原淸胤

同年十二月廿日京官除目　因幡介三宅文政

同六年正月廿四日除目(七月廿日爲寬弘元年)　因幡介藤原兼茂(前東三條院申)

寬弘二年正月廿七日除目　因幡介賀茂忠經(中略)

〔源氏物語四夕顏〕されど、このあふぎのたづぬべきゆへありてみゆるを、なを此あたりの心しれらんものをめしてとへとの給へば、いりて、このやどもりなるおのこをよびてとひきく、やうめいのすけなる人の家になん侍りける、おとこはゐ中にまかりて、女なんわかくてことこのみてはらからなど宮づかへ人にてきかよふと申す、

〔源語秘訣〕夕顏卷云

やうめいのすけなる人

清愼公記云、康保四年七月廿二日、宰相中將來言雜事、次言主上〇冷泉追日本病發給之由、左兵衞佐佐理云、高聲歌給田中之井戸、或法用云々、左衞門督又來云、今日候殿上邊之渡殿、放歌御聲甚高、其御歌者子奈良波云々、近衞官人皆承御聲、頗以不便、明日可有除目云々、如此之間何被行公事乎云々、往代聞武猛暴惡之主、未聞狂亂之君、如此之間、外戚不善之輩、競成昇進之望、左衞門督云、藤納言〇伊尹望大納言云々、入夜後右少將爲光朝臣來云、明日除目、一昨右大將〇藤原師尹與藤大納言議定畢之由傳承云々、揚名關白早可被停止之者也、

今案、冷泉天皇ハ民部卿元方の怨靈によりて、狂亂におはしましける時、外戚の人々〇九條殿一族也官位昇進等の事を議定せしかば、小野宮殿〇實賴此時關白にありながら、見處し給ひし故に述懷し侍りて、揚名關白はやくやめらるべしと記せられ侍る、

李部王記云、天曆四年九月五日、一分除目令一勞書生讓件揚名書生云々、

〔原中最秘抄上〕夕顏

一やうめいのすけの事

一云諸國介也、又云無所望之仁、除目に作名擧也、吉野春風、三輪車持之類也、又信西云、正權之外介也、不預公廨云々、或云山城介也、

ラン、三長記建仁二年七月ノ記ニ、日吉神人訴申能登目代濫行事、仰可問能登國司近江國司申春宮御封事仰可相催清閑寺領美作國久米莊司與國司相論大井郷事、仰於院廳可問注之由、可仰資兼ナド、アリ、此外安藝尾張加賀常陸山城等ノ國司、各其國ノ事ニ附テ申ス事見エタリ、如此クナレドモ、官家日ニ衰ヘテ、國司ハ次第ニ無實ニ成行キ、今ノ如ク成タルナルベシ、其有實ノ國司、一向ニ絶タリト見ユル年限ハ、イマダ考ヘズ、又中古以前ニ、受領ト云ハ、必任國ニ向フヲ云、故ニ除目ノ時モ、兼官ト受領トハ各別ニ任ズ、然ルヲ明應大永ノ比ノ記錄ニモ、除目ノ時、受領ノ擧トテ、兼官トハ別ニ任ズ、是ハ只古ヲ擧ビテ名目耳ノ事ニシテ、實ノ受領ニハ非ザル事知ベシ、但國太曆貞和三年三月ノ記ニ、從七位下海宿禰浦道望安房掾、右去曆應二年內給、同正月以中原職泰任件國大掾之處、依有病身不能着任之間、康永元年十二月以藤井清友雖改任、稱不本望不受籤符、仍同二年正月、以春正繁任之處、有不意事、不赴任之間云々、又從七位下藤井宿禰重國望播磨少目、右去曆應五年內給、同三月以件重國任同國大目之處、依煩病不赴任國云々、是ヨリ外阿波少目池邊慶風稱非本望不能着任、伊豫少目山邊高松依有不意事不赴任國ナド、云ル申文アリ、此文ヲ見レバ曆應貞和ノ比モ、任國ニ向フ者アルガ如シ、然レドモ其時世ヲ察スルニ、然アル可ラズ、且春正繁、池邊慶風、山邊高松ナド云名ハ、例ノ年給ノ僞名ト見エタレバ、若クハ虛辭ヲ綴リテ、如此クノ申文ヲ出ス習ナラン歟、急ニ考ヘ難シ、且當時トテモ、加賀ニ加賀ノ守アリ、薩摩ニ薩摩ノ守アリ、陸奧ニ陸奧ノ守アリ、肥後、筑前、安藝、長門、阿波、土佐、讚岐、對馬モ亦然リ、此例ヲ以思フニ、加賀ノ守ニ任ゼルヲ以、加賀ヲ知ルニハ非ズシテ、加賀ヲ領セル人、加賀ノ守ヲ申シ、薩摩ノ守タルヲ以、薩摩ヲ治ムルニハ非ズシテ、薩摩ヲ有テル人、薩摩ノ守ニ任ズル類アルベケレバ、有實ノ國司、此時ヨリ一向ニ絶却スト云事、今ヨリハ考ヘ難カルベシ、

荷田在滿奉

秋庭殿御宿所

〔小早川什書三〕上卿日野中納言

文明十四年八月十一日宣旨

掃部助平元平

宜任美作守

藏人左少辨藤原俊名奉

○按ズルニ、以上文安六年平熙平、幷ニ文明十四年平元平ノ國守ハ共ニ名國司ナリ、

〔羽倉考〕國司有名無實之事

古ノ國司ニハ、受領ト遙授ト有テ、受領ハ直ニ其任國ニ向ヒ、遙授ハ在京スレドモ、猶一切ニ其國事ヲ知ラザルニハ非ズ、今ノ國司ハ官名耳ナリ、此事イツヨリ如此クナルヤト考フルニ、其境イマダ分明ナラズ、抑六十三四世冷泉圓融院ノ比マデハ、朝廷ノ隆盛ナル、日本國ノウチ、天子ノ叡慮ニ任セズト云事ナク、毎國國司ヲ任ジテ、各其國ヲ掌ル事明ナリ、六十五六世華山一條ノ院ノ比ヨリ、攝家ノ富最甚シク、七十七八世後白河二條ノ院ノ比ヨリ、平氏ノ威特ニ强シ、此比ニ至リテハ、六十餘州、一統ニ天子ノ手ニ在トモ見エズ、然レドモ東鑑養和壽永ノ間ニ、來秋之比被任國司可宜、又ハ可被聽一州國司、又ハ越後守資永駈催當國軍士等ナド、云ル類ノ文數多見エタレバ、一統ニハ非ザレドモ、猶有實ノ國司アル事明ナリ、文治ニ、賴朝卿ヲ以、六十六箇國ノ總追捕使ニ補セラレテヨリ、武家ヨリ守護ヲ諸國ニ置カルト云リ、東鑑ヲ見ルニ、守護ノ名ハ治承ヨリ見エタレドモ、文治以後、諸國ニ在ル歟、其外、此比ハ、本家、領家、地頭、地主、國奉行、沙汰人、目代、代官、郷司、莊司、又ハ大名ナド云者アリテ、其差別ハ分明ナラザレドモイヅレモ其所ヲ知ル者ト見エタリ、然ドモ猶受領ノ國司ノアル國アリテ、一向無實ナルニハ非ザルヤ

前上野介平朝臣判

〔豫章記〕此年後光嚴院御治世ニテ、改元シテ文和元壬辰歳也、對馬六郎賜名國司、寶篋院殿義詮御書云、

名國司所望事、所擧申公家也、可令存知之狀如件、

文和三年（正平九年也）八月廿日　義詮御判

河野對馬六郎殿

〔小早川什書四〕名國司所望事、被擧申公家訖、宜被存知之由所被仰下也、仍執達如件、

寶德二年九月二日　（畠山左衛門督德本）妙彌判

小早川中務少輔殿

〔古文書類纂〕足利晴氏官途推擧狀

名國司之事申上候、可有御意得候、謹言、

三月七日　花押（○足利晴氏）

石川駿河守殿

〔小早川什書二〕上卿日野中納言

文安六年四月廿九日　宣旨

掃部助平熈平

宜任備後守

藏人右兵衛佐藤原綱光奉

小早川殿受領之事、披露被申候處、御心得之由被仰出候、目出候、此由可有御披露由入道申候、恐々謹言、

（文安六）卯月廿九日　經繁花押

名國司　揚名官

輩等任先例全雜掌所務、可全執進請取使節、不可有緩怠之狀、依仰執達如件、

應安三年十一月十四日　沙彌在判

嚴嶋下野四郎殿

〔大田康有記〕建治三年六月十六日、越中六郎左衞門尉蒙廷尉御免云々、諸人官途事、自今以後、罷許定之儀、准御恩沙汰、直被聞食、內々可有御計之由被定了、且前々名國司御免之時、諸大夫者不及成功沙汰、侍者進成功之條、御沙汰之趣不一准歟、爲被全公益、向後者不論諸大夫侍、平均可被召功要之由、同被定了、

○按ズルニ、玉海文治二年四月十三日ノ條ニ、假名之國司、建久四年四月十日ノ條ニ、名代國司ト云フコトアリ、政治部賜國篇ニ詳ナリ、

〔勘仲記〕弘安七年八月八日癸丑、今夕被行小除目、頭大藏卿奉行、關東申請名國司等可被任云々、頭卿書聞持參目六、可奏聞之由被仰下了、參院、及晩歸參、進入御書、被加御點於目六、予奉行、住吉社御裝束功人無沙汰之由、頭卿相語之間、伺申之處、其趣可書進狀、被仰小折紙、可被申禪林寺殿之由、被○龜山法皇仰下之間、令書進了、深更御返事到來、可被書入之由被申之、大略被書入了、此後退出、除目上卿吉田中納言、清書辨俊定朝臣、聞書云、

駿河守平政長　下總守藤原宣光　陸奧守平業時　加賀守藤原範顯

〔六波羅御下知〕感神院領丹波國波々伯部保下司氏澄代良盛與雜掌親圓相論下司職、名田畠幷刃傷狼藉等事、

右訴陳之趣雖多子細、所詮、○中略此外所進之狀等者、近年私狀歟、○中略次氏澄父盛澄任名國司事、非御家人之上、子細同前、仍下知如件、

正安元年十二月廿三日　右近將監平朝臣判

云馳參正覺寺陣、云越中國供奉、忠節之條、爲勳功之賞、所宛行也、早吉見右馬頭義隆領掌不可有相違之狀如件、

明應四年七月廿八日

〔東寺百合古文書七ノ自一至二十〕東寺雜掌賴憲重言上、欲早被經嚴密御沙汰、仰兩御使、被成下御奉書、被沙汰付雜掌於國衙方、全當寺修造要脚安藝國國務職事、

副進

二通　御教書案　應安元年十月七日　同二年六月十二日

二通　御奉書案　應安三年十一月十四日

一通　御奉書案　應安六年潤十月廿四日

右件吏務職者、爲當寺修造料所、重而異于他之地也、而諸鄉保地頭幷先守護被官輩等、寄事於動亂、令押領之間、歎□雖被成御教書、送多年不事行之條、歎而有餘者哉、隨而於當守護方者、被座鎭西之間、不能遵行之、就中不置守護代、無催促期之條、宜仰賢察者哉、所詮仰兩御使嚴嶋、下野四郎幷阿曾沼下野次郎等重被成下御奉書、被沙汰付雜掌於國衙方、爲全修造要脚、言上如件、

永和二年五月　日

〔熊野新宮衆徒神官指上ル古文書〕熊野山新宮申造營料所遠江國吏務職事　狀謝官書

如此子細見狀上、可尋沙汰由可被仰遣武家之旨天氣所候也、仍言上如件、行知誠恐頓首謹言、

十月十八日　右中辨

進上　右大將殿

○按ズルニ、遠江吏務職ノ所得ヲ以テ熊野新宮造營料ニ充テシナリ、

〔東寺百合古文書七ノ自一至二十〕東寺雜掌賴憲申安藝國吏務職事、重申狀如此、爲當寺修造料國之處、寄蘚於物忩諸鄉保地頭以下于今押領之條、頗招其科歟、早阿曾沼下野次郎相共莅彼所々、退違亂之

國衙職
國務職
吏務職

〔香取舊大禰宜家所藏文書〕注進　香取社諸神官總領庶子死亡逃亡跡田畠屋敷已下目錄
一行事禰宜庶子死亡跡〇中略
一登戸判官代分　二反ヒラタ九日鹿嶋神田胤幹
一堀口神主分　田二反ムマウチ胤幹大寺ノコシ同人
一爐判官代分　小ニヘ總神ノマヘ胤幹〇中略
一正判官代分　中平次ノ跡ツエトリ田一反中村三郎左衛門屋敷一所西殿トマキ〇中略
嘉慶二年十二月二日　案主在判
田所同
錄司代

〔嚴島文書〕橘頼時解申注渡進所領田事
合參段者在三田郷小宅村字角田、者、充直陸拾束、
右件古作田一倍稻爲辨濟、高田郡司藤原朝臣限永年所沽渡進如件、仍爲後日進劵文以解、
承徳二年三月廿八日　大帳所判官代橘在判

〔熊野新宮衆徒神官指上ル古文書〕安房國國衙職事、就關白家雜掌申、雖成内書口召之、所寄熊野山新宮神寶要脚也、然早彼遷宮之間、先可被沙汰付社家雜掌之狀如件、
八月廿八日　義持
左兵衛督殿

〔小早川什書三〕御判
備中國國衙廣橋家本役有之田村越後入道跡、倉光次郎跡、越前國志都部郷、長井太郎知行〇中略相原三郎左衛門跡等事、

〔東寺百合古文書 二〕太郎庄馬上免下文案

在廳下　藥師寺住僧　可早開發無主荒野壹町五段、引募當寺佛聖灯油料田事、

右件料田、東西兩鄕之間、開發便宜之荒野、且又爲馬上免、可引募狀如件、事既功德也、更以不可違失、故下、

文治二年二月廿日　總判官代散位藤原朝臣在判　散位中原朝臣在判　總大判官代散位柿本宿禰在判　散位中原朝臣在判　目代右衞門少尉大江在判

〔吾妻鏡 七〕文治三年四月廿九日丙申、三日公卿勅使、驛家雜事、伊勢國地頭御家人等多以對捍之間、召在廳等注進狀被下之、仍今日二品覽被目錄、仰不法之輩可被誡向後懈緩之由、及嚴密御沙汰云云、件目錄云、

文治三年三月卅日

公卿勅使伊勢國驛家雜事勤否散狀事、合、〇中略、

一不勤仕庄

晝生庄 預所大官親能、代官氏部大夫能重、〇中略

已上皆無沙汰

介大鹿俊光

散位大鹿兼重

總大判官代散位大鹿國忠

〔吾妻鏡 一〕治承四年九月十四日癸亥、下總國千田庄領家判官代親政者、刑部卿忠盛朝臣聟也、平相國禪閤通其志之間、聞目代被誅之由、率軍兵欲襲常胤、依之常胤孫子小太郎成胤相戰、遂生虜親政訖、

〔嚴島文書〕大帳總大判官代橘頼時解申沽渡進相傳所領田劵事

合陸段半　在三田鄕佐々比村松田者坪東

四至東限沼西限槿田　南限永恒田北限神田

宛直實籾肆斛伍斗

右件田依有現直要用、永放手所沽渡進如件、仍爲後日進劵文、以解、

寛治三年四月五日

使　平花押

總大判官代橘花押

仕人壬生

鄕目代大秦花押

判官代藤井

〔嚴島文書〕○首缺

栗原村○高田郡三田鄕

壹處伍段田常荒亡○中略

右任院廳御下文幷國司廳宣之狀、令撿注四至内荒熟打定牓示立劵言上如件、以解、

仁平肆年拾月拾壹日

圖師和泉花押

散位源朝臣花押

散位藤原朝臣花押

國使大判官代散位藤原朝臣花押

大判官代散位橘朝臣花押

御使公文主税小允佐伯花押

治郡之名、頗聽國內撫育之方、昔在民家、代々國宰、不求郡中之欠負、往々刺史更无違期之譴責、而件權守、正任未到之間、推擬入部者、武芝撿案內、此國爲承前之例、正任以前輙不入部之色者、國司偏稱郡司之无禮、恣發兵仗、押而入部矣、

〔東寺百合古文書七十一〕大島庄新劵案文并本劵目錄謹解申賣買家地立劵文事

合家地貳町〇中略

右件地、弟子僧頼昭、以先年日向國下向之時、可備具大日經疏二十卷、護摩要書十餘卷、并法服一具、又可備預出擧物等之代、所令賣渡候也、年來領掌、更以無妨、而今爲宛造佛造作料、以絹參佰疋宛價直、常地賣與興福寺僧慶義既畢、仍勒賣買兩人并保證刀禰郡署名立劵文如件、以解、

永保二年五月七日

專賣人僧在判

買人僧在判

一通承保年中立劵〇中略

右依宣旨狀并廳宣之旨、注進如件、

康和四年七月十五日

文屋花押

山田花押

丹以花押

山田花押

山田花押

下司判官代若山部花押

鄕司總判官代大秦花押

書生總判官清原花押

ツル事トナム答ヘケル、館ノ者共ハ、此ノ目代ノ立走テ乙ケルヲ見テハ、傀儡子共ノ此ク吹キ詠ヒ遊カ誰サニ不堪シテ立テ乙ルナルベシ、然レバ然様ノ物興シ可爲キ氣色モ無カリツル人ノナド思ヒケル程ニ、傀儡子共ノ此ク云フヲ聞テナム、然バ此ノ人ハ本傀儡子ニテ有ケリトハ知ケル、其ノ後ハ館ノ人モ國ノ人モ傀儡子目代トナム付テ咲ケル、少シ思エ下ニケレドモ、守不惜カリテ尚仕ヒケリ、然レバ一國ノ目代ニ成テ思ヒ忘タル事ナレドモ、尚其ノ心不失シテ然カ有ケム、其レハ傀儡神ト云フ物ノ狂カシケルナメリトゾ人云ケルトナム語リ傳ヘタルトヤ、

〔兵範記〕久壽三年三月十三日甲寅、今日被發遣伊豫先使也、○中略陰陽頭憲榮朝臣同座、先成日時勘文、○中略次召民部大夫盛致朝臣於廣庇、(衣冠)令書廳宣、○註略次入覽宮、進國司、國司見了加判、○註略返給、次目。代。入文宮結中注銘、(新司宣三字也)

〔神皇正統記後醍醐〕のちさまには、國司任におもむくことさへなくて、其人もにあらぬ眼。代。(○眼代、一本作目代)をさして國をおさめしかば、いかでか亂國とならざらん、

國務奉行人

〔越智古系與州新居系圖〕吉景裏書

清原大夫吉景ハ、播磨國御家人志婆三郎大夫惟宗守衆之子也、播磨國司三位基隆伊與國司兼帶之時、國。務。奉。行。人。トシテ、當國住人曾禰□□□院本主畠中儕還之聟ニ成テ留住シテ吉景ヲ生ズ、本姓ハ惟宗を筑紫人清原□ニ被養、(天)清原氏ニ改姓ス、其後當國案主大夫へ被養、越智ト改姓、越智氏ニ改姓之間、在廳トシテ着案主所座、

判官代

〔大神宮諸雜事記一光仁〕寶龜四年十月十三日、志摩守目代三河介伴良雄、與彼國書。生。惣。判。官。代。酒見文正、伊雜神戸撿田程、爲狩(志天)、伊雜宮之近邊射伏猪鹿已了、愛宮人等雖加制止、專不承諾、○下略

〔將門記〕以去承平八年春二月中、武藏守興世王、介源經基、與足立郡司判官代武藏武芝、共各爭不治之由、如聞國司者无道爲宗、郡司者正理爲力、其由何者、縱郡司武芝、年來恪懃、公務有譽无謗、苟武芝

ハ无ケレドモ、筆輕クテ目代手ノ程ニテ有リ、辨ヘハ何カ有ラムト思テ、擾亂シタル事ノ沙汰文ヲ取テ、此ノ物何ラカ入タルト沙汰セヨト云ヘバ、此ノ男文ヲ取テ引披テ打見テ、算取出シテ糸輒ク打置テ程モ无ク、何ラナム候ケルト云ヘバ、守心ハ不知ズ、先ヅ辨ヘハ極キ者也ケリト喜ビ思テ、其ノ後國ノ目代トシテ萬ノ事ヲ知セテ引付テ仕ケルニ、二三年許ニ成ヌレドモ、露守ノ氣色ニ違ヌル心バヘ不見エズ、只萬ノ事ヲ直ク定メテ居タリケリ、人ノ遲ク沙汰セシ事共ヲモ、即チ疾ク沙汰シテ、常ニ暇ヲ有セテナム有ケル、此ク萬ニ賢ケレバ、守便ヲモ付カシド思テ、國ノ内ニ可然キ所共ヲ數知セケレドモ、指セル德付タリトモ不見ズ、然レバ館ノ人ニモ國ノ人ニモ極ク被受テ、重キ者ニ被用テナム有ケル、然レバ隣ノ國マデ賢キ者トナム聞エタリケル、然ル間此ノ目代守ノ前ニ居テ、文書共多ク取散シテ、亦下文共ヲ書セ、其レニ印指スル程ニ、傀儡子ノ者共多ク館ニ來テ、守ノ前ニ並居テ、歌ヲ詠ヒ笛ヲ吹キ謎ク遊ブニ、守モ此レヲ聞クニ、我ガ心地ニモ極クスヾロハシク謎ク思エケルニ、此ノ目代ノ印ヲ指スヲ見レバ、前ニハ糸吉ク指ツル者ノ此ノ傀儡子共ノ吹キ詠フ拍子ニ隨テ、三度拍子ニ印ヲ指ス、守此レヲ見ルニ恠シト思テ護ル程ニ、目代獸宿德氣ナル肩ヲ亦三度拍子ニ指ス、傀儡子共其ノ氣色ヲ見テ、詠ヒ吹キ叩キ增テ急ニ詠ヒ早ス、其ノ時ニ此ノ目代太ク辛ピタル音ヲ打出シテ、傀儡子ノ歌ニ加ヘテ詠フ、守奇異ク此ハ何ニト思フ程ニ、目代印ヲ指々ス昔ノ事ノ難忘リト云テ、俄ニ立走テ乙（カナヅ）ケレバ、傀儡子共彌ヨ詠ヒ早シケリ、館ノ者共此レヲ見テ興シ咲テ喤ケル程ニ、目代耻テ印ヲ投棄テ立走テ逃ヌレバ、守此ノ事ヲ怪カリテ、傀儡子共ニ此ハ何ナル事ゾト問ケレバ、傀儡子共ノ云ク、此ノ人ハ古ヘ若ク侍リシ時、傀儡子ヲナム仕リ候ヒシ、其レガ手ナドヲ書キ、文ヲ讀テ今ハ傀儡子ヲモ不仕テ、此ノ樣ニ罷成テ、此ノ國ノ御目代ニテナム候フト承ハリテ、若シ昔ノ心バヘ不失ズモヤ候フト思給テ、實ニハ御前ニ罷出テハ早シ候ヒツル也ト云ケレバ、守實ニ印ヲ指シ肩ヲ指ツル氣色然カ見

〔吾妻鏡十一〕建久二年閏十二月廿五日己巳、梶原刑部丞朝景申云、去十六日夜、左府禪閤實定公薨給、年五十三云云、幕下殊歎息給、關東有由緒、日來所被重之也、梶原者又朝景景時共以浴彼恩澤云云、景時者依幕下御吹擧、先年爲美作國目代云云、

〔吾妻鏡十四〕建久五年五月廿日庚辰、宇都宮左衛門尉朝綱法師、掠領公田百餘町之由、下野國司行房經奏聞之上、差進目代訴申之、將軍家殊所驚聞食也、目代所申有其實者可行重科之旨被召仰之云云、

〔朝野群載二十二諸國雜事〕國務條々事

一擇吉日始行交替政事

神拜之後、擇吉日可始行之由、牒送前司、隨則送分配目代於新司許行之、至于勘公文目代者更不可論貴賤用達其道之者耳、○中略

一可以公文優長人爲目代事

諸國公文目代必少優長、然則不論貴賤、唯以堪能人可爲目代、公文未練之者、勘濟公文之時、并前後司分付之間、極以不便也、事畢之後、搔首無益、

〔今昔物語二十八〕伊豆守小野五友目代語第廿七

今昔、小野ノ五友ト云フ者有ケリ、外記ノ巡ニテ伊豆ノ守ニ成タリケリ、其レガ伊豆ノ守ニテ國ニ有ケル間、目代ノ無カリケレバ、東西ニ目代ニ可仕キ者ヤ有ルト求サセケルニ、人有テ云ク、駿河ノ國ニナム才賢ク辨ヘ有テ、手ナド吉ク書ク者ハ有ト告ケレバ、守此レヲ聞テ、糸吉キ事ナヽリト云テ、態ト使ヲ遣テ迎ヘ將來タリケリ、守見レバ、年六十許ノ男ノ大キニ太リテ宿德氣也、打咲タル氣モ無クテ、氣惡氣ナル顏シタレバ、守此レヲ見ルニ、先ヅ心ハ不知ズ、見目ハ吉キ目代形ナメリ、人物云ヒ惡氣ナル氣色シタリト思テ、手ハ何カ書クトテ書セテ見レバ、手ノ書樣微妙ク

氣色殊快然、就中三郎先生義廣謀叛之時、常陸國住人等、小栗十郎重成之外、或與被逆心、或逐電奥州、政義自最初依令候御前、以當國南郡、充賜政義之處、此一兩年國役連續之間、於事不諧之由、属筑後權守俊兼愁申之、仍可隨芳志之由、被遣慇懃御書於常陸目代、常陸國務之間事、三郎先生謀叛之時、當國住人除小栗十郎重成之外、併被勧誘彼反逆、奉射御方、或逃入奥州、如此之間、以當國南郡充給下河邊四郎政義畢、

〔吾妻鏡七〕文治三年七月廿八日丁卯、善光寺造營間事、令下知信濃國御家人給之上、被仰當國目代、云云、其奉書云、

善光寺造營之間、國中さう／＼、○中略

七月廿八日　僧

信濃御目代殿

〔吾妻鏡九〕文治五年二月廿二日甲午、

一按察大納言朝方卿左少將宗長、出雲侍從朝經、出雲目代兵衛尉政綱、前兵衛尉爲孝、此輩依同意義顯之科、可被解却見任事、

〔吾妻鏡十〕文治六年四月四日丁亥、召使則國申、

爲美濃國菊松公文末支犬丸公文延末被陵礫則國身由事

件兩公文等之所行、何遁罪科候哉、早以御使被召末支延末、可被罪科候也、いかにも可有御裁定候、於尼公地頭職者、不日令停廢、以他人令改補候畢、返々其恐不少候事也、彼尼公不當第一、奇怪に候、於今者任法可追出候、兼重隆佐渡前司御分國居住、而公領方致妨不當候はんに於は、賴朝可懸候はす、罪科候者被仰付御目代候て、流罪にも被行、いかにも御沙汰候はむを、今不可支申候也、國間事猥雜なる事共候を、自然賴朝不知候輩事を、一定訴罷負候歟、依其恐候、度々所令言上候也云云、

國。目。代。從七位上凡河內忌寸正茂　大領從七位下三島宿禰
權大領從八位下檜前首　少領從八位下三島宿禰
天曆五年十月十七日
〔殿曆〕永久五年四月廿六日甲申、裏書尾張目代男盛良上洛、國中事委尋聞
〔知信朝臣記〕大治四年九月十四日己未、前陸奧守源義親拜任對馬守之後、於彼國成濫行、有國府訴、被召上其身配流隱岐國、又渡出雲國殺目代、仍以故平正盛爲追討使、斬其首渡京師給獄了、
〔百練抄八高倉〕治承元年三月廿八日、院武者所藤原師經加賀國目代、國司緣者也、配流備後國、依天台訴也、
〔平家物語一〕御こしぶりの事
去程に山門には、國司かゞの守師高をるざいにㄜよせられ、目代こんどう判官師經○師高弟をきんごくせらるべきよし奏聞度々に及ぶといへ共、御さいきよなかりければ○下略
〔吾妻鏡一〕治承四年九月十三日壬戌、今日千葉介常胤相具子息親類欲參于源家、爰東六郎大夫胤頼談父云、當國○下總目代者、平家方人也、吾等一族悉出境參源家、定可插凶害、先可誅之歟云云、常胤早行向可追討之旨加下知、仍胤頼幷甥小太郎成頼相具郎從等襲彼所、目代元自有勢者也、令數千許輩防戰、于時北風頻扇之間、成胤廻僕從等於館後令放火、家屋燒亡、目代爲遁火難、已忘防戰、此間胤頼獲其首、
〔源平盛衰記十三〕高倉宮廻宣、附源氏汰事
源平何モ勝劣ナカリキ、而當時ハ雲泥ノ交ヲ隔テ、主從ノ禮ヨリモ猶異也、僅ニ甲斐ナキ命バカリ生タレ共、國々ノ民百姓ト成テ、所々ニ隱居テ侍ルカ、國ニハ目。代。ニ隨ヒ、庄ニハ預所ニ仕テ、公事雜役ニ駈立ラレ、夜モ晝モ安事ナシ、
〔吾妻鏡三〕壽永三年○元曆元年四月廿三日辛卯、下河邊四郎政義者、臨戰場竭軍忠、於殿中積勞効、仍御

ら此名武家にうつりて、守護代地頭代などのたぐひを目代といふことといできたりしなり、又目附の職を目代と記せしものも見ゆれど、これは其本意にたがへり、何となれば、もと目代といへるは、主人の耳目に代りて事を行ふを要とし、目附は己が耳目をもて監察をなすつかさなればなり、其所職の同異輕重ある事准じて考ふべし、猶眼代の條を合せ考ふべし、

〔朝野群載二十二諸國雜事〕定遣國目代

廳宣　在廳官人等

定遣目代事

散位中原朝臣某

右人爲令執行一事已上、所定遣如件、宜承知依件行之、以宣、

年　月　日

守

廳宣　在廳官人等

散位源朝臣清基

右件人爲令執行國務補目代職、發遣如件、在廳官人等宜承知、一事已上可從所勘、不可違失、故宣、

年　月　日

〔大神宮諸雜事記一光仁〕寶龜四年十月十三日、志摩守目代三河介伴良雄、與彼國書生總判官代酒見文正伊雜神戸撿田程爲狩天志伊雜宮之近邊射伏猪鹿已了、○下略

〔朝野群載二十一雜文〕田地賣買劵

攝津國島上郡兒屋郷長解申立賣買常地劵文事○中略

郡判

九國ノ人民可隨院宣者、一味同心ニ可追討平家、若忠アラン者ハ、勸賞ハ追テ可有聖斷由、子息賴經ノ許ヘ云下給タリケレバ、賴經以此趣當國住人緒方三郎惟義ヲ召テ被下知タリ、

〔公卿補任安德〕養和二年壬寅〇壽永元年

非參議從三位藤賴輔

永曆元年正月廿一日任豐後守、任中 永萬二年二月一日辭豐後守、以男賴經任壹岐守、國務、猶豐後國也、

〔常陸國總社文書〕常陸國留守所下文

可令早停止石河兵衞入道朝日非分競望、且任院宣國宣旨、且依重代相傳理、以淸原師行爲當社神主職、神事以下社役任先例勤仕事、

右〇中略 師行爲社務職、令□以下御神領進退領掌御神事以下社役、無緩急可令勤仕之狀者、國宜承知、勿違失、以下、

弘安九年二月　日

〇〇國司代左近大夫將監橘朝臣花押

目代 眼代

〔沙汰未練書〕目代者　國司代官也

〔武家名目抄職名三十一上〕按、目代といふ名稱は、もと人の耳目に代るの意なり、いにしへ公家政務のほどは、常に目代とのみいへば、大かた國司の代官をいふ事なりき、其職には、我子姪にもあれ、家子郎等にもあれ、國司たるもの丶意に任せて定め置事にて、おほやけにはいろはぬならひなり、但佛寺にも目代僧といふがあり、これも寺領以下の雜務など攝するものなり、鎌倉殿守護地頭を置れし後も、諸國の國司は猶もとのごとく國務を行ひければ、目代をも置たり、されば武家には其名にまがふべしとて、代官の事をばすべて眼代と云へり、足利殿の世にも、始の程は猶眼代の稱殘りしかど、此時にいたりては、國司は皆揚名の官となりて、治務を行ふ事無しより、目代を置事のなくなりしまゝに、おのづか

國司代散位阿閉朝臣在判

國判

大介藤原朝臣在判　　目高橋

〔東大寺小櫃文書下〕阿拜郡司解、申言上立劵橋貞子名庄幷山地等事、○中略

天祿二年五月廿二日

郡判　　以永承肆年十一月廿五日、一男紀貺、覩御處分已了、在判

行事阿閉朝臣在判

國司代阿閉朝臣在判

阿閉朝臣在判

國目代阿閉朝臣在判

阿閉朝臣在判　　掾在判

小領阿閉朝臣在判　　權掾在判

國判

介藤原朝臣在判　　目在判

〔源平盛衰記三十三〕大神宮勅使附緒方三郎責平家事

壽永二年九月二日、平家追討ノ御祈ノ爲ニ、院○後白河ヨリ公卿ノ勅使ヲ伊勢大神宮ニ立ラル、○中略豐後ノ國ハ刑部卿三位賴輔ノ知行ニテ、其子賴經國司。代。ニテ在國ノ間、三位追テ云下給ケルハ、平家惡行年積テ、宿運忽ニ盡ヌ、佛神ニモ放レ、君ニモ捨ラレヌ、故ニ花洛ヲ出テ西海ニ漂フ、夫ニ九國輩請取依翫、國ニハ正稅官物抑留シ、庄ニハ年貢所當ヲ不辨、其條已奉背朝家、件逆惡咎アリ、返々不思議所行也、自餘ハ不知、於當國ハ、宍賢不可入平家、コレ非私之計、一院御定也、但不限當國、

虎狼、自非常之事、必以要須也、可尙優國人、又无憚者也、

一可隨身驗者幷智僧侶一兩人事

人之在世不能無爲、爲國致祈禱、爲我作護持、

國使

〔東寺百合古文書 七ノ自一至二十〕弓削御庄住人等解　申進申文事

請殊蒙恩裁重被申返爲國使被押取御年貢鹽佰貳拾籠子細狀

右謹撿案內國使寄事於役夫工致多損亡、幷押取年貢鹽等○以下十二三字蟲蝕又可免除之○以下三字蟲蝕下御廳宣先畢、以件狀觸國衙之處、恣取籠御廳宣不糺返押取之鹽、然則免除之御判有名无實也、只非爲年貢懈怠之計、兼欲貽國役勤仕之例、當御庄誠□中第一之少□□仰田鹽濱□□□□餘也、□田堵住人僅廿餘人歟、而押入之使三ケ度、祇候之費幾千萬、若重非被申返者、更難辨年貢之由所訴申也、望請恩裁被申返件御廳宣幷年貢等者、且脩將來之證文、且□□貢之□□□□□□□□□□

久安六年十一月廿二日　弓削御庄住人等 平重道 名○以下署名四人略

下司平助道

國司代

〔東大寺小櫃文書 丁〕蔭子橘元實敬白　奉施入賣與平時光玉瀧杣內除留墓所杣事○中略

天德二年十二月十日　蔭子正六位上橘朝臣 在判 ○中略

阿拜郡　依寺家御牒加署印

勘濟使散位阿閉朝臣 在判

郡攝使散位阿閉朝臣 在判

國司代散位阿閉朝臣 在判

國司代散位阿閉朝臣 在判

國司代茨田連

謹上　藏（人脱カ）

〔熊野新宮衆徒神官指上ル古文書〕熊野山新宮造營料所遠江國事解狀、副具書、如此子細見狀、任去年十一月六日綸旨沙汰、居雜掌、可令全國務之狀如件、

文和四年八月廿九日

今河入道殿

國雜色

〔尾張國郡司百姓等解文〕尾張國郡司百姓等解　申請官裁事○中略

一請被裁斷非舊例國雜色人幷部內人民等差負夫馬、京都朝妻兩所令運送雜物事○下略

〔吾妻鏡二十六〕貞應二年九月五日、橫町邊下女生三子云云、女人生三子、自官庫賜衣食養三月、是被載國史之由有職申也、仍二品着國雜色三人、各可養育之旨被仰含、其上母衣食同可被下行云云、

〔吾妻鏡三十九〕寶治二年五月廿日丁卯、就雜務等事、有被定下之篇目、雜人訴訟事、雖下度々奉書、論人不設用、自今以後、召文三箇度之後者、今度令違背者、可有後悔之由差日數、以國雜色可被下遣召文也、

國司郞等隨身

〔朝野群載二十二諸國雜事〕國務條々事

一不可用五位以上郞等事

五位有官郞等、是不治之根本也、雖張行惡事、依爲有位之者、强不能抑屈、內播首、外難强制、適雖令諫知、能無信受、縱雖近親、一切停止、此中有可顧之人者、別給土產物耳、

一可隨身能書者二三人事

能書之者爲受領要須也、其用太多、不得忘却、

一可隨身堪能武者一兩人事

時勢之躰、弓箭不覺之者、皆號新武者、暫雖張武威、遂有何益乎、抑良吏之治、雖不可用武者、人心如

國雑掌

紀伊郡司解　申請　國符事

合壹枚

被裁應宛除圓融本御願法華三昧堂佛常燈六僧供養幷雜用料田貳拾捌町參段貳百漆拾陸

歩狀〇中略

太政官去年十月廿一日給民部省符偁、去月十五日寺家奏狀偁、謹撿所々法華三昧料之料、以正稅

被宛給、而國掌。。運濟數年料、然則有限之用難叶其期、望請以畿內勅旨田被裁件御三昧料、全納地利

宛年料用者、注山城國紀伊郡官田見熟、無損坪々、始從今年永爲不輸租稅田、可被宛給之狀所請如

件者、〇中略

天元四年三月廿五日

撿行事紀判

行事秦

〔朝野群載二十七諸國公文〕加。賀。國。雜。掌。江沼成安解　申進上四度公文帳事

合參拾卷

大帳陸卷　康和五、長治元、二、嘉承元、二、天仁元、　調庸帳陸卷　同上

正稅帳陸卷　同上　租帳陸卷　同上　出擧帳陸卷　同上

右件四度公文帳、六ヶ年分料爲被成下官外題、依例進上如件、謹言、

天仁二年八月　日　加。賀。國。雜。掌。江沼成安

〔熊野新宮彙徒神官指上ル古文書〕熊野新宮山造營料所、安。房。國。雜。掌。申、國衙間事解狀、具副書等、如此子

細見狀候歟、急被仰武家候之樣可令申沙汰給候由、恐々、

十月十石見

案主

〔雜筆要集〕廳宣樣第二十五

廳宣　留守所

應早任先例引募左近衞相撲人縣潟免田浪人事

右潟依爲最手、免田八十町、浪人八十人、任先例可令引募之狀如件、留守所宜承知、依宣用之、以宣

年號某月ム日　　案主ゝゝ

守藤原朝臣ム判

國掌

〔三代實錄 十六清和〕貞觀十一年十二月廿二日乙巳、置出羽國國掌二員、

〔三代實錄 十七清和〕貞觀十二年二月十九日辛丑、因幡國始置國掌二員把笏、

〔三代實錄 十八清和〕貞觀十二年七月十七日丁卯、置播磨國國掌二員把笏、　十九日己巳、置大和國國掌二員把笏、　十月二日庚辰、美作國置國掌二人把笏、　十一月四日壬子、河内伯耆兩國置國掌各二員把笏、　廿三日辛未、讃岐國置國掌二人把笏、　十二月廿九日丙午、上總國置國掌二員把笏、

〔日本紀略 清和〕貞觀十八年七月十日乙酉、加賀國國掌二員把笏、以入色者爲之、

〔三代實錄 三十四陽成〕元慶二年九月十三日乙巳、詔佐渡國置國掌二員把笏、

〔類聚符宣抄 七〕太政官符備前國司　外

應補國掌從七位上村上連吉里事

右得彼國去年正月十九日解偁、謹撿案内、件吉里才操越倫、通傳致禮、因茲擬補國掌職者、中納言從三位兼行左衞門督源朝臣高明宣、依請者、國宜承知、依宣行之、符到奉行、

左少辨　　左大史

年　月　日

〔東寺百合古文書 六〕天元官符案 自眞乘院出之 觀應二 五 八

張セツ、郎等ハ調度ヲ負テ箭ヲ差番テ立ケレバ、書生此ハ何カニセサセ給フゾト問ケレバ、郎等極ク糸惜クハ思ヒ進レドモ、主ノ仰セナレバ難辭申クテナムト云ヘバ、書生然ニコソハ候フナレ、但シ何コニテカ殺サセ給ハムズルト問ヘバ、郎等可然カラム隱レニ將行テ忍ヤカニコソハト云ヘバ、書生仰セニ依テ此モ彼モシテ給ハムニ、事ハ可申キ様モ无シ、但シ年來見奉リツ己ガ申ナム事ヲバ聞給テムヤト云ケレバ、郎等何事ゾト問フニ、書生年八十ナル母ナム家ニ置テ、年來養ヒ候ツル、亦十歳計ナル小童一人候フ、彼等ガ顔ヲナム今一度見ムト思給ウルヲ、彼ノ家ノ前ヲバ將渡シ給テムヤ、然ラバ彼等ヲ呼出テ顔ヲ見候ハムト云ヘバ、郎等糸安キ事也、然計ノコトハ何トカ无カラムト云テ、其方様ニ將行クニ、書生ヲバ、馬ニ乘セテ、人二人シテ馬ノ口ヲ取テ病人ナム將行ク様ニ、然ル氣无シニテナム將行ケル、郎等ハ其ノ後ニ調度ヲ負テ馬ニ乘テナム行ケル、然テ家ノ前ヲ將渡ル程ニ、書生人ヲ入レテ、母ニ然々ト云遣タリケレバ、母人ニ懸リテ門ノ前ニ出來タリ、實ニ見レバ、髮ハ燈心ヲ栽タル様ニテ、口シ氣ニ老タル嫗ナリケリ、子ノ童ハ十歳計ナルヲ妻ナム抱テ出來タリケル、馬ヲ留メテ近ク呼寄セテ、母ニ云ク、露錯タル事モナケレドモ、前ノ世ノ宿世ニテ、既ニ命ヲ召シツ、痛ク不歎給ヘ〇ヘ恐シ誤テ御マセ、此ノ童ニ至テハ、自然ラ人ノ子ニ成テモ有ナム、嫗共何カニシ給ハムズラムト思フナム、被殺ル難堪サヨリモ増リ悲キ、今ハ早ウ入給ヒネ、今一度御顔ヲ見奉ムトテ參ツル也ト云ケルヲ、此ノ郎等聞テ泣ケリ、馬ノ口ニ付タル者共モ泣ニケリ、母ハ此レヲ聞テ迷ヒケル程ニ、死入タリケリ、而ル間郎等此テ可有キ事ニ非ネバ、永事ナ不云ソト云テ、引持行ヌ、然テ栗林ノ在ケル中ニ入テ、射殺シテ頭取テ返ニケリ、此レヲ思フニ、日向ノ守何ナル罪ヲ得ケム、詐リ文ヲ書スルソラ尚シ罪深シ、況ヤ書タル者ヲ咎无クシテ殺サム可思遣シ、此レ重キ盗犯ニ不異ズトゾ、聞ク人憾ケルトナム語リ傳ヘタルトヤ、

立爲恒例、五畿內七道諸國亦宜准此、

大同二年四月十五日〇又見類聚國史

〔尾張國郡司百姓等解文〕尾張國郡司百姓等解　申請官裁事〇中略

一請被裁糺不下行書生幷雜色人等每日食料事

右書生雜色人等、或儒轍之人、棄私奉公、或繼跡之者、離宅順國、斯中書生。是勾勘之職、凌寒燠以疊老、雜色諸人亦遐邇之使、走都鄙以積年、防如此之飢寒、唯懸於酒食、而守元命朝臣奪留其飲食、以顧己之郎從、能治之化、無始無終、兇濫之政、繼日繼夜、仍部內窮民、悅任限之早往、府邊雜人、愁秩滿之晚來、望請裁定、以將令知皇恩之貴矣、

〔今昔物語〕二十九日向守□殺書生語第廿六

今昔、日向ノ守□ノ□ト云ケル者有ケリ、國ニ有テ任畢ニケレバ、新司ヲ待ケル程、國ノ可渡キ文書共搆ヘ書セケル間ニ、書生中ニ極ク辨ヘ賢クテ、手吉ク書ケル者一人ヲ呼籠テ、舊キ事ヲバ直シナドシテ書ケルニ、此ノ書生ノ思ケル樣、此レ搆ヘタル事共ヲ書セテハ、新司ニヤ語リヤ爲ムズラムト、守ハ疑ハシカルラムカシ、氣シカラヌ心バヘ有ヌレバ、定メテ惡キ事モコソ有レト思エケレバ、何カデ逃ナムト思フ心付ニケレドモ、强ナル者ヲ四五人付テ夜ル晝護セケレバ、白地ニ可立出キ樣モナカリケリ、此ク書居タル間、廿日計ニモ成ニケレバ、文共皆書キ拈テケリ、其ノ時ニ守ノ云ク、一人シテ多ノ文ヲ此ク書ツルコト、糸喜キ事也、京ニ上ヌトモ、吾レヲ憑テ不忘テアレナントト云テ、絹四疋ヲナム祿ニ取ラセタリケル、然レドモ書生祿得ル空モ无ク、心ハ騷ギテゾ有ケル、祿ヲ得テ立ムト爲ル程ニ、守親ク仕ケル郎等ヲ呼テ私語ヲ久クシケレバ、書生此レヲ見ルニ、胸□テ靜心不思エズ、郎等私語畢テ出テ行クトテ、彼ノ書生ノ主御セ、忍タル所ニテ物申サムト呼放チケレバ、書生我レニモ非テ寄テ聞カムト爲ルニ、忽チ人二人ヲ以テ書生ヲ引

弩師

譯語

國書生

寛平三年七月廿日

〔三代實錄 十六 清和〕貞觀十一年三月七日乙丑、勅、廢隱岐國史生一員、置弩師一員、　十二月二日乙酉、省長門國史生一員、置弩師一員、

〔三代實錄 十八 清和〕貞觀十二年五月十九日庚午、勅出雲國、廢史生一員、置弩師一員、永以爲例、卽以權史生從八位下屬高宿禰松尾、爲弩師、以善作弩也、

〔類聚三代格 五〕太政官符

應停對馬島史生一員置新羅譯語一人事

右得大宰府解偁、新羅之船、來著件島、言語不通、來由難審、彼此相疑、濫加殺害、望請減史生一人、置件譯語者、右大臣宣、奉勅依請、

弘仁四(〇四恐六誤)年九(〇九恐正誤)月廿九日

〔日本後紀 二十四 嵯峨〕弘仁六年正月壬寅(〇三十日)、停對馬史生一員、置新羅譯語、

〔延喜式 十八 式部〕凡五畿內國別書生二人預勘籍、但擇用京畿之人、外國人不在此限、

〔類聚三代格 八〕太政官符

應借貸正稅諸國書生等事

大國一萬束　上國八千束　中國六千束　下國四千束

右得山陽道觀察使正四位下守皇太弟傅兼行宮內卿勳五等藤原朝臣園人解偁、備前國解偁、書生等申、己等白丁課役之民、而長直公事、不顧私業、或久經京下、永妨農業、或巡行部內、私費人馬、身勞不異郡司、粢祿還無所賴、伏望特被申官、借貸正稅、各以救之者、國司勘之、事有可矜、仍請使裁者、使等商量、賞則招人、餌則聚魚、若不加優矜、則部內公文、將託誰人、望請當道諸國隨國大小、正稅一萬二千束已下、八千束已上、每年借貸、令自勸勉、謹請處分者、右大臣宣、奉勅宜作差給之、若有未納、令國司塡之

右得中務省解偁、陰陽寮解偁、武藏權史生屋代直行欵狀偁、謹撿案內、出羽武藏等國、元來無陰陽師、而依國解狀、以陰陽生始置件職、出羽號陰陽師、武藏稱權史生、靜尋事意、理不可然、望請准出羽國號陰陽師者、寮依欵狀申送者、省依解狀謹請官裁者、從三位守大納言兼左近衞大將行陸奥出羽按察使藤原朝臣基經宣、奉勅依請、

貞觀十四年五月二日

太政官符

應減史生一員置陰陽師事

右得下總國解偁、此國接近邊要、安不忘危、不虞之戒、非占難決、望請減史生員置陰陽師、謹請官裁者、右大臣宣、奉勅依請、

貞觀十八年七月廿一日

〔類聚三代格五〕太政官符

應置鎭守府陰陽師事

右得陸奥國解偁、鎭守府牒偁、軍團之用、卜筮尤要、漏剋之調、亦在其人、而自昔此府無陰陽師、每有恠異、向國令占、往還十日、僅決吉凶、若有機急、何知物變、請被言上、將置件職者、國加覆擬、事誠可然、望請始置其員、令備占決、謹請官裁者、大納言正三位兼行民部卿藤原朝臣冬緒宣、奉勅依請、

元慶六年九月廿九日

太政官符

應停史生一員置陰陽師事

右得常陸國解偁、決疑之要、必用占筮、望請准武藏下總等國之例、減史生員、置陰陽師、謹請官裁者、右大臣宣、奉勅依請、

陰陽師

〔日本後紀十二桓武〕延暦廿四年五月己卯、加山城大和河内攝津等四國史生一員、

〔續日本後紀九仁明〕承和七年六月甲子、擇諸司史生高年者七人、其歷名賜式部省、令除近江播磨備前等國權史生、恤耆也、

〔續日本後紀十仁明〕承和八年閏九月乙巳、擇諸司史生及長上年七十巳上者四人、補外國權史生、矜耆老也、

〔續日本後紀十八仁明〕承和十五年○嘉祥元年十二月丁酉、勅、權任國司幷史生博士醫師秩滿、不待下符直令去任、唯獨爲長官者待受領之人、

〔三代實錄十三清和〕貞觀八年十月八日己卯、是日勅、諸國浪人土民便任當國史生巳上及博士醫師者、停給交替、

〔三代實錄十五清和〕貞觀十年十二月廿六日乙酉、勅、令式部省年終移諸國權任國司幷史生博士醫師名簿於民部省、永以爲例、

〔三代實錄十八清和〕貞觀十二年十二月廿五日壬寅、勅、○中略諸衞府官人、舍人、兼任諸國史生者、令式部省移兵部省、

〔三代實錄三十六陽成〕元慶三年六月廿六日乙酉、正五位下守右中辨兼行出羽守藤原朝臣保則飛驛奏言、○中略下野國前權少掾從七位上雀部朝臣茂世、權醫師大初位下下毛野朝臣御安等、各押領國兵、來從軍旅、

〔文德實錄一〕嘉祥三年六月甲戌、出羽國奏言、境接夷落、動爲風塵、至有嫌疑、必資占驗、請省史生一員、置陰陽師一員、許之、

〔類聚三代格五〕太政官符

應改權史生爲陰陽師事

史生
權史生
國博士
國醫師

〔公卿補任正親町〕永祿九年丙寅
前參議從三位藤嗣賴在飛州

〔秀吉事記〕四國御發向幷北國御動座事
閏八月十日〇天正十三年朔日、陳替宮野、〇中略四月五日靜一國中〇中略定掟、〇中略將又飛驒國司姉小路左京大夫自綱父子無爲殿下、剩成不思儀働、依之遣金森五郎八、彼一類切腹取首備實撿、兩國一篇六日還御也、

〔令義解一職員〕凡國博士醫師、國別各一人、

〔令義解四選敍〕凡國博士醫師者、並於部內取用、謂國司簡擇才術之可用者、申太政官、即式部判補也、若无者、得於傍國通取、考限敍法及准折並同郡司、〇義解略補任之後、並无故不得輒解、

〔延喜式十八式部〕凡諸國史生者、大國五人、上國四人、中國三人、下國二人、但遠江美濃讚岐等國准大國、甲斐出羽安藝周防紀伊等國准中國、土佐國准上國、若狹佐渡等國准下國、並不得任當國人、
凡新補諸國史生、皆先身自向省申本色位姓名、然後比挍考帳知實申官、
凡權任國司幷史生博士醫師等、一任之內遷任他國者、通計前後歷、秩滿之由、年終申太政官、
凡諸國司及史生博士醫師等、若特被許相讓者、令覺前人遺歷、

〔續日本紀十聖武〕神龜五年八月壬申、太政官議奏、改定諸國史生博士醫師員幷考選敍限、史生大國四人、上國三人、中下國二人、以六考成選、滿即與替、博士醫師以八考成選、但補博士者總三四國而一人、醫師每國補焉、選滿與替同於史生、語並在格、
天平元年五月庚戌、太政官處分、准令諸國史生及傔仗等、式部判補、赴任之日、例下省符、符內仍偁、關司勘過、自非辨官、不合此語、自今以後、補任已訖、具注交名申送辨官、更造符乃下諸國、

〔續日本紀三十三光仁〕寶龜六年六月癸亥朔、解却畿內員外史生已上、

ナルベシ、

〔飛驒國司姉小路系圖〕頼基—家綱參議、飛驒國司、從三位、—師言宰相從三位、應永二十四年三月廿六日敍從三位、去年上階之節任飛驒國司、

頼時初尹綱、同國司、應永十八年七月廿八日生害、

持言號古川、左中將飛驒國司、左中將、號小島、又向殿共云、—勝言飛驒國司、正四位下、左中將、—熙綱同國司、左衛門權佐、文明七年十二月十一日

敍從五位下、同八年七月五日、時熙夜打入被害、

宗熙童名千夜叉丸、號向小島殿、永正十六年十月十六日從五位下、飛驒國司、—貞熙天文七年四月十三日任

從五位下、飛驒國司、十五歲、同廿三日任左兵衛佐、同日聽昇殿、同廿三年九月五日正五位下、同九日左中將、—良頼非參議、飛驒國司、從四位下、永祿三年二月十六日敍四品、號

能(能恐衍)古川國司、同五年二月十一日敍從三位、公方依執奏、如是希代之例也、改名號嗣頼、法名雲山、—自綱初光頼、天正三年二月十六日從五位下左衛門佐、飛驒國司、同六

年三月十二日任侍從、越前朝倉甲州武田卜申通公方、爲御味方、與信長合戰數ヶ年也、(中略)天正十年五月死去、四十八、法名休安、—親綱同國司、左京大夫、元龜三年四月七日從

五位下、改宣綱、于時十歲、天正四年十二月八日元服、天正十四年十月二日正五位下侍從、同七日於攝州爲信長生害、

〔武家名目抄職名附錄二十二上〕三國司

按するに、良頼は飛驒國人三木大和守直頼が子なるを、國司姉小路の家衰微の期にいたりて、良熙に請て其子に准じ、三木を改めて姉小路と稱し、遂に國司の稱をもつぎたり、本書に希代の例なりとかけるも、實は直頼の子なる故なり、

〔御湯殿の上の日記〕永祿二年七月九日、ぶけへ、ひだのみつき、三國司の內へ入たきよし申さる、御心へ候との御かへり事あり、八月八日、くわんぱくより、ひだの光頼、三國司のうちへの事申文申いださるゝ、

〔公卿補任正親町〕永祿五年壬戌

非參議從三位藤嗣頼二月十日敍、元飛驒守、

弘治四正十敍爵、同日任飛驒守、

頭書云、飛驒守護三木、依武家御執奏直任三木、稱古川國司、姉小路事也、希代例也、

醐天皇南朝ニ皇居ノ時、當州ノ國司ニ定メ給フ、四代目ニシテ參議藤原尹親朝臣ハ、小島〇小島原作二小島一今改、下同、ガ城ニ居タリ、此國司一國ヲ治テ繁榮ナレドモ、南朝ノ宮方日々ニ衰テ、足利尊氏天下ヲ奪フ、然レドモイマダ一統セズ、依之暫クハ無事ナリシトイヘドモ、義滿ノ時ニ至テ、飛驒征代アルベシト、朝倉左衛門佐、甲斐小太郎兩大將ニテ大野郡ヨリ發向ス、郡上穴間ヲ經テ、京極近江守越中笹津ヨリ小笠原信濃守持氏討入シカバ、尹親國中ノ武士ヲ催シフセギタヽカフトイヘドモ、終ニ運命盡テ、應永十八年八月十三日、小島落城シテ、國司尹親ヲバ朝倉ノ家人井上新兵衛討之、凡國司四代、年數八十三年也、

按ズルニ、飛驒國司姉小路顯親南朝ヨリ補任國司トアレドモ、顯親幷ニ四代目尹親トモニ、姉小路家系ニナシ、不審ナリ、〇中略

武田勢飛州攻入之事

天下猶亦亂レテ、信長尾陽ニ起リ、謙信越後ニ働キ、信玄ハ甲斐ニ覇タリ、飛州其間ニハサマレテ、所々在々ニ鉾ヲ爭ヒ、合戰止ム事ヲ得ズ、其頃益田郡櫻洞ノ城主、江州佐々木ノスヘタルト云其子孫ニ、三木大和守直賴、其子右兵衛督良賴入道雲山、其子右京大夫自綱入道休菴、代々當國ヲ傾ス、〇中略

三木上洛之事

斯テ三木休菴、國中ニ威ヲ振ヒ、國司ノ一跡ヲ奪ヒ、上洛シテ國司號ヲ給リ、歸國ノ節、右兵衛督良賴ノ望ニヨッテ、先祖累代ノ江州宇多源氏ヲ捨テ、先國司ノ家名ヲ繼ギ、姉小路大納言藤原ノ自綱入道久安ト號ス、舍弟右〇右上恐有二誤脫一松倉ニ籠ラセ、三男元賴ハ小島時光ノ家ヲ繼テ、杉崎ノ城ニアリ、國中三木ガ大刀影ニ伏セズト云所ナシ、

按ズルニ、三木休菴、先國司ノ家名ヲ繼ギ、大納言ニ任ズト云事、未解、後人猥リニ說ヲナスモノ

數年對陣す、是によつて、地下人は云に及ばず、公卿殿上人、住家もなく、諸國運漕留りければ、朝夕の貯乏しく、都の住居成がたく、公家衆、心々に國々へ下り給ふ、一條關白敎房公、御子房家公、同道にて、文明二年の春、西國へと思召立、故ありて兵庫津まで下り滯留なり、爰に土左國平田の鄕の地頭佐渡守といふもの、細川がたに在陣せしが、暇あきて歸國すとて、兵庫の津まで下り、春雨長ふり、數日滯留す、敎房公、彼佐渡守を招き、我も西國へ思ひ立なり、土佐國へ下りてはいかゞあらん汝に賴むべしと仰也、佐渡守申は、身不肖に候へば、早速御請仕りがたし、歸國の後、一族國人誘ひ、かさねて御左右可ㇾ申と云、左からばまづ房家を同道候へ、我は一左右待べしとなり、房家公十七歲、無雙の美男なれば、佐渡守やさしきこゝろあり、己が舟に乘せ參らせ下り、平田村に御所を建、一族國人をかたらひ尊敬す、山名細川の亂靜て後、將軍義政公の執持にて、房家公、土佐の國司となり、中村の宮田といふ所に御所を建、移り給ふ、智慧厚く、慈悲深く、禮義正しく、民を惠み給ふ故、諸人父母の如く尊敬して、仰を背くものなかりし、天文八年八十六歲にて薨じ給ふ、中村の倉谷に送葬す、蓮華殿と申也、御子房道公、京の一條家を繼、二男房冬公、土左國司を繼、其子房基公、其子兼定公、相續の國司たり、御一門の公家衆と申は、東小路殿、西小路殿、白川殿、飛鳥井殿、追々下り給ふ衆なり、御所は平地なれば、要害のため、近邊の城々には、御一門幷家老の面々を置給ふ、加持ノ城に飛鳥井殿、鍋島ノ城に白川殿、中山城に爲松若狹守、鳥首城に安並左京進、不破に土居左近、小塚に入江住居なり、東小路殿、西小路殿は、明城なく、宮田の南に屋形あり、如ㇾ此有て、百有餘年手ざすものなく、能治りける所に、兼定公、若氣にて、行儀あしく、背もの多かりければ、天正年中、元親、才覺を以追出しぬ、

〔飛州軍覽記〕飛驒國司滅亡之事

國司姉小路賴綱朝臣ハ、小應利ノ城主也、先祖代々公家ヨリ出テ、當國ノ國司タリ、建武年中、後醍

山が三瀨と云所に隱居して、信長二番目の子息お茶筌と云を、國司の聟にして、國司と名乘、伊勢の國司は、日本三國司の內、二番の家高き國司なり、四國伊豫、伊勢、奧州三國司と聞及候、

〔勢州四家記〕伊勢國司ハ、日本三國司ノ內ニテ、二番ノ家高キ國司也、四國伊豫、奧州三國司ト也、サテ伊勢ノ國司ハ、御前方近江佐々木殿息女也、此腹ニ男子一人アリ、殊之外フトリタル人ニテ、身ノハタヲキモナラザルニツキ、フトリノ御所ト名ヅク、然モウツケニテマシマス、サレドモ、ヲ茶筌ヲフトリ御所ノ妹聟ニシテ、國司ヲユヅリタマヘバ、三瀨ノ御所ヲバ大御所、フトリノ御所ヲバ中ノ御所、ヲチヤセンヲ本御所ト申テ、是本ノ國司也、御本所ヲバ多藝ニヲカズシテ、伊勢ノ府內ト云所ニ置キタマフ、

〔勢州四家記〕一伊勢の國司は村上の源氏北畠家なり、元來は一家なれども、武之家也、先祖北畠權大納言源親房卿、後醍醐天皇に味方せられしより、勢州南方幷和州宇陀郡を守護し、一志郡多藝に屋形あり、代々多藝の御所といへり、人數侍地下人共に軍兵一萬の大將たり、南伊勢におひて北畠の一族三大將といふは、多氣郡田丸御所、飯高郡大河內御所、同郡坂內御所也、各侍地下人共軍兵千之大將也、其外一族は一志郡波瀨の御所、同郡岩內の御所、同郡藤方御所、此等は各五百の大將也、一族勢與力合五千人、此人々は皆國司被官也、北畠家之幕之紋は割菱也、又和州宇陀三人衆といふは、澤、秋山、芳野也、昔は國司の與力、後には被官となれり、彼等何も大名なり、幷一志郡木造の御所は、國司の與力にて、是も千の大將也、油小路殿といへり、

〔公卿補任正親町〕永祿九年丙寅

前權中納言正三位源具教在勢州

〔南國中古物語〕土佐國一條殿傳記附御所古跡の事

應仁年中より、山名細川の鬪爭に、洛中洛外出火のために、過半燒失し、剩へ西陣東陣とて、京中に

三國司

繆氣、靜喚主殿司、取寄冠、攊砂著之云、左道ニイマスル公達哉云々、主上自小部御覽ジテ、行成ハ召仕フベキ者也ケリトテ、被補藏人頭、于時備前介前兵衞佐也實方ヲバ歌枕ミテマキレトテ、被任陸奧守云々、於任國逝去云々、行成補職事、任辨官、多以失禮、漸尋知之後、勝傍倫、已携文書之所致也、

〔續日本紀稱德二十六〕天平神護元年正月戊戌、大宰大貳從四位上佐伯宿禰毛人坐逆黨、左遷多褹島守、○原無守字、依一本、

〔續日本紀稱德三十〕寶龜元年八月庚戌、皇太子令旨、如聞道鏡法師竊挾砥粳之心、爲日久矣、中略故任造下野國藥師寺別當發遣、宜知之、即日中略以從五位下中臣習宜朝臣阿曾麻呂爲多褹島守、

〔續日本紀淳仁二十二〕天平寶字四年五月戊戌、右大舍人大允正六位下大伴宿禰上足、坐記災事十條傳行人間、左遷多褹島掾、告人上足弟矢代任但馬目、

〔續日本紀桓武三十九〕延曆六年閏五月丁巳、陸奧鎮守將軍正五位上百濟王俊哲、坐事左降日向權介、

〔續日本紀桓武四十〕延曆九年三月庚子、日向權介正五位上勳四等百濟王俊哲、免其罪令入京、

○按ズルニ、國司左遷ノ事ハ、法律部左遷篇貶爲國司條ニ詳ナリ、宜シク參看スベシ、

〔運歩色葉集佐〕三國司阿波一宮、伊勢北畠殿、飛驒姉小路殿、

〔足利季世記七義秋公方記〕伊勢ノ長野之事

其比、伊勢ニ國司、長野トテ兩大將アリ、國司ハ昔後醍醐院ニ執權アリシ北畠源大納言入道親房ノ子孫也、今マデ三國司ト申テ、其家不絶シテ、公家ノ大名也、三國司トハ、飛驒國司姉小路殿、土佐國司一條殿武家權ヲ取ルトイヘドモ、此三家ハ、昔ノ如ク公家ノ威勢ニシテ繁昌也、國司ハ南伊勢ヲ領シ、長野若狹守ハ北伊勢ヲ領シケル、此長野殿ハ、國司ヨリハ所領モ多シ、長野城ニ在城ス、是ハ昔鎌倉ノ工藤左衞門尉祐經ノ子孫也、

〔甲陽軍鑑八品第十七〕又右伊勢の國司、信長と扱の濟様は、國司はむかしのたけいをやめ、伊勢の内

借官

左遷爲國司

家門認得弊箕裘、最喜先君任此州、月俸皆因舍哺餽、泉途更欲計恩酬、無勞北陸行殘雪、只望西成過大秋、腰底三龜知意否、仁風爲我漲春流、(予先祖參議、二官重參州任、恩澤無極、士林榮之、)

〔續日本紀淳仁二十二〕天平寶字三年七月丁卯、鎭國衛次將從五位下田中朝臣多太麻呂爲上總員外介、四年二月辛亥、從五位上當麻眞人廣名爲遠江員外介、

〔續日本紀光仁三十二〕寶龜三年四月庚午、從五位下安倍朝臣淨目爲武藏介、從五位下佐伯宿禰藤麻呂爲員外介、○中略從五位下粟田朝臣鷹主爲陸奧員外介、內禮正從五位下廣川王爲丹波員外介、○中略外從五位下英保首代作爲周防員外掾、

〔續日本紀光仁三十六〕寶龜十一年四月辛亥、造酒正從五位下中臣丸朝臣馬主爲上總員外介、

〔續日本紀孝謙二十〕天平寶字二年四月(○四月原作三月今改)己巳、內藥司佑兼出雲國員外掾正六位上難波藥師奈良等一十一人言、○下略

〔續日本紀稱德三十〕寶龜元年五月壬申、先是伊豫國員外掾從六位上笠朝臣雄宗獻白鹿、

〔續日本紀稱德二十六〕天平神護元年七月甲辰、左京人甲斐員外目丸部臣宗人等二人賜姓宿禰、

〔續日本紀淳仁二十四〕天平寶字七年十二月丁酉、酒波長歲授從八位下、任近江史生、中臣眞麻伎從七位下、但馬員外史生、

〔類聚國史殊俗百九十四〕天長二年十二月乙巳、大內記正六位上布瑠宿禰高庭定領客使、借出雲國介、不稱領客使、

〔扶桑略記後朱雀二十八〕長久五年(○寬德元年)八月七日丙申、前大隅守中原長國任但馬介、民部少丞藤原生行任掾、爲介存問太宋國商客張守隆漂著彼國岸也、而國司源朝臣章任不經案內、先以存問、仍停務、不赴任所、

〔古事談二臣節〕一條院御時、實方與行成於殿上口論之間、實方取行成之冠投棄小庭退散云々、行成無

員外官

〔源平盛衰記 四十五〕女院御徙然附大臣賴朝問答事
内大臣〇平宗盛ヲバ、讃岐權守ト改名シテ、九郎判官ニ被返預ケリ、

〔除目大成抄 五〕參河權守從五位下藤原朝臣尹範
散位從五位下藤原朝臣尹範誠惶誠恐謹言、
請殊蒙天恩因准先例被拜任參河相模越中等國權守闕狀
右尹範謹考舊貫、經侍中極臈任員外刺史者、古今不易之通規也、訪之竹帛、不遑羅縷、望請天恩、因准先例被拜任件國等權守闕者、將知前規之不墜、尹範誠惶誠恐謹言、
安元二年正月廿五日　散位從五位下藤原朝臣尹範

〔日本後紀 嵯峨 二十二〕弘仁三年八月辛亥、從五位下藤原朝臣濱主爲近江權介、

〔日本後紀 嵯峨 二十四〕弘仁五年七月乙卯、從五位下藤原朝臣濱主爲兼右京亮、近江介如故、

〔永昌記〕保安五年〇天治元年四月二日己酉、太政官謹奏、
山城國　權介正六位上中原朝臣廣定 去年任史、今年任之、近代例也、

〔續日本紀 桓武 四十〕延曆八年三月辛酉、從五位下清海宿禰惟岳爲美作權掾、

〔三代實錄 清和 四〕貞觀二年閏十月十二日戊午、大宰府言、管豐後國權掾正六位上越智宿禰廣成乞骸骨曰、廣成齡及八十、筋力衰耗、空妨官職、無益公家、請罷官歸鄕以待終、許之、

〔日本後紀 嵯峨 二十二〕弘仁三年三月己卯、外從五位下雁高宿禰氏成爲近江權大目、

〔續日本紀 淳仁 二十五〕天平寶字八年十月丙寅、從五位上佐伯宿禰美濃麻呂爲出羽員外守、

〔續日本紀 光仁 三十六〕寶龜十一年四月辛酉、以從五位上上毛野朝臣稻人爲越後員外守、

〔續日本紀 稱德 二十七〕天平神護二年十月丙戌、員外國司赴任者一切禁之、

〔菅家文草 詩二〕喜被遷兼賀州員外刺史、

參議正四位上文室眞人綿麿
延暦十四年三月乙巳、授諸朝臣綿麿從五位下、〇中略廿年閏正月己丑、出羽權守、
〔享祿本類聚三代格十七〕太政官符
應權任國司幷史生博士醫師夾名年終移民部省事
右得安藝國解偁、撿案内、權官到任之後、依例充行公廨田事力等、即修別解申上官、官下所司、勘會簿帳、而或遺漏不申、或紛失不下、因茲所司勘出、連年不絶、國務細碎、觸類多煩、望請年中所任權任國司以下、年終令式部省移民部省、即下二寮、以備勘據、然則國吏省煩、所司除疑、謹請官裁者、大納言正三位藤原朝臣氏宗宣、宜早下知、依件令行、自餘諸國、亦復准此、
貞觀十年十二月廿六日
太政官符
應改權任國司幷品官夾名移民部省期事
右得民部省解偁、主稅寮解偁、撿案内、式部省依貞觀十年十二月廿六日格、錄年中所任權官夾名、以年終移省、省判下寮、以此勘會租帳、徵免其公廨田、而此移未遂、何者或一任之内、遷任數國、只注新任之國、不顯本任之國、或依宣旨而延任、或計先歷而秩滿、或遭喪解任、中間身亡、如是之色、理須爲改移、而一移之後、無有改移、至勘料田、未能分明、加以租帳者、是貢調使之所進也、至請覆勘、各競年内、而件移論年乃到、未移之間、尙煩勘出、凡四月卅日以前到任之者、預公廨田、以外無給、望請除遙授之外、改年終之移、六月令移、以備勘會、然則徵免據實、國宰省煩者、省依解狀、謹請官裁者、右大臣宣、奉勅、依請、
貞觀十八年六月廿日
〔權記〕長保四年三月十日丙午、但馬守道順朝臣來示、明日下向、即與去年大和國申返不行權守位祿、改給、但馬國新委不動穀官符一道、正四位下爲令下行共代也、

大掾職

○按ズルニ、右ハ足利義材防州ニ入ル時ノ事ナリ、

〔常陸國總社文書〕鎌倉幕府執權執達狀　寫

常陸大掾朝幹申狀折紙遣之、件大掾職者、始祖相承之上、父資幹帶故大將殿御下文、令相傳于朝幹歟、而知重爲國司令競望之條、事若實者、新儀之企頗無謂、且停止非分之望、且可令申子細給之狀、依鎌倉殿仰執達如件、

安貞元年十二月廿六日

武藏守（御判○北條泰時）

相摸守（御判○北條時房）

常陸前司殿

〔諸家系圖纂（十二下平氏）〕常陸大掾系圖

桓武天皇（○註略）　葛原親王（一品式部卿）　高見王　高望王　良望（上總介、鎮守府將軍、後改常陸大掾國香）　貞盛（平將軍、陸奧守）

維幹（常陸大掾、多氣大夫、亦水漏大夫、平將軍）

○按ズルニ、常陸大掾家ハ足利氏ノ季世マデ存在セリ、

權官

〔職原抄（下）〕諸國

權守者、近代多是遙授之官也、參議二三位中將少納言等必兼之、又殿上六位藏人敍位之時預爵者、即任權守、又例也、納言以上貶謫之時、任諸國權守也、仍常儀參議兼國任納言之日即止之、

〔有職問答（二）〕一權守事

正守は在京にて在國の守護を可稱之由被仰出候畢、（任國ニ赴トテ、吏務ヲ沙汰候、權守ハ多ク在京ノ人任之、是ハ遙授也）親王受領國々には以介守とす、（介任國シテ知吏務、知守ハ國ノ守ヲ警固シ候武士分候、御說不當此分候）權官有間敷由被仰出候き、太守と申國、何も此分たるべく候哉、又可依任國候哉（上總上野常陸三ヶ國也）被注下度候、

〔續日本紀（二十八稱德）〕神護景雲元年八月戊戌、從五位下藤原朝臣雄依爲備前權守、

〔公卿補任（嵯峨）〕大同五年（庚寅○弘仁元年）

大內介

星切之御太刀、是者曾我五郎所持之太刀也、其外被集置たる御道具、三國之重寶盡員、尾州濃州共に、被成御與奪、

〔貞丈雜記官位四〕一八介と云事、出羽國に秋田城介、(鎮守府又ハ按察使ヲ兼ル重キ官也)相摸國に三浦介、下總國に千葉介、上總國に上總介、(古三助ト號ス)伊豆國に狩野介、加賀國に富樫介、周防國に大內介、遠江國に井伊介、是を八介と云、侍の面目とする官也、(上總介、秋田城介ハ古代ノ正名也、其餘ハ武家ノ俗ニ云習シタルナリ、)

〔吾妻鏡十二〕建久三年正月十九日壬辰、重源上人使者參訴云、於周防國引東大寺柱之間、大內介弘成聊所成違亂也、可被糺行歟者、有沙汰、被仰使者云、偏非關東所勘之職、早可被奏聞云云、

〔東寺百合古文書(自七至十二)〕東寺雜掌賴憲申安藝國國衙事、申狀如此、爲當寺修造料所、度々勅裁分明之處、延年寄緈於物忩、或守護人或國人等、任雅意押領云云、不可然歟、當寺造營事、別而所有嚴密之沙汰也、且任去十三日綸旨、止方々違亂沙汰、居國務於雜掌、可令執進請取使節、不可有緩怠之狀、依仰執達如件、

應安元年十月七日　武藏守判

大內介殿

〔小早川什書二〕大內新介政弘治罰事、相催一族親類等、不日令發向、可被致忠節之由、所被仰下也、仍執達如件、

寬正六年十月廿六日　尾張守花押

小早川備後守殿

〔小早川什書三〕就大內權介義興御退治之儀、被仰出之通、別紙令啓候、(中略)恐々謹言、

八月廿日(明應九年)　秋庭備中守元重判

小早川又太郎(平扶)殿 御宿所

秋田城介

之、

（續日本紀桓武三十九）延暦七年八月戊子、對馬島守正六位上穴咋呰麻呂賜姓秦忌寸、以誤從母姓也、

（扶桑略記宇多二十二）寛平六年九月五日、對馬島司言新羅賊徒船四十五艘到著之由、大宰府同九日進上飛驛使、同十七日記曰、同日卯時、守文室善友召集郡司士卒等仰云、汝等若箭立背者、以軍法將科罪、立額者可被賞之由言上者、仰訖卽率列郡司士卒、以前守田村高良令反問、卽島分寺上座僧面均、上縣郡副大領下今主爲押領使、

（職原抄下）秋田城介（爲出羽介者兼之、除目不任之、被宣下也、）

（類聚國史災異百七十一）天長七年正月癸卯、出羽國驛傳奏云、鎭秋田城國司正六位上行介藤原朝臣行則、今月三日酉時朦朧、〇下略

（類聚符宣抄八）太政官符出羽國司

應令介從五位下平朝臣兼忠勤行秋田城務事

右從二位行大納言兼陸奥出羽按察使藤原朝臣爲光宣、奉勅、宜差遣彼城勤行警固、若闕防禦有所請者、隨狀處分、寄事鎭衛、勿簡國務者、國宜承知、依宣行之、符到奉行、

左中弁　　　右大史

天元三年七月廿三日

（吾妻鏡四十二）建長四年四月三十日癸未、引付加二方爲五方、以民部大夫藤原行盛法師爲四番頭、秋田城介藤原義景被定五番頭、

（信長公記八）天正三年乙亥霜月廿四日、岐阜に至て御歸陣、今般菅九郎（〇織田信忠）無比類御働に付て、かけまくも忝從天帝蒙御院宣を被任秋田城介、御冥加之至也、十一月廿八日、信長御家督、秋田城介（江）被渡進、誠に信長卅年被置御粉骨御屋形作鍵金銀

〔吾妻鏡四〕元暦二年正月廿六日庚戌、進渡之輩、

北條小四郎 ○中略 千葉介常胤　同平次常秀

〔太平記十二〕安鎭國家法事附諸大將恩賞事

南庭ノ陣ニハ、右ハ三浦介、左ハ千葉大介貞胤ヲゾ被召ケル、此兩人兼テハ可隨其役由ヲ領狀申タリケルガ、臨其期千葉ハ三浦ガ相手ニ成ン事ヲ嫌ヒ、三浦ハ千葉ガ右ニ立ン事ヲ忿テ、共ニ出仕ヲ留ケレバ、天魔ノ障礙、法會ノ違亂トゾ成ニケル、

〔吾妻鏡四十〕建長二年十二月廿八日己未、下野國大介職者、伊勢守藤成朝臣以來、至小山出羽前司長村、十六代相傳、敢無中絶之處、依大神宮雜掌訴所被改補也、於彼訴訟事者、以來銅以下贖介解謝訖、被行二罪之條殊含愁訴之由、長村連々言上之間、可被返之旨及評議云云、

〔尾張國妙興寺文書七〕所領讓渡坪付注文

讓渡　所領注文事

合

尾張國大介職

一所　中嶋屋敷幷近邊 ○中略

右坪付注文如件

元應二年四月三日　沙彌承念在判

〔續日本紀二文武〕大寶元年八月丁未、先是遣大倭國忍海郡人三田首五瀬於對馬島、冶成黃金、至是詔 ○中略 對馬島司及郡司主典已上進位一階、　二年八月丙申、薩摩、多褹隔化逆命、於是發兵征討、遂校戸置吏焉、

〔續日本紀九元正〕養老六年四月丙戌、始制、大宰管內、大隅、薩摩、多褹、壹岐、對馬等司有闕、選府官人權補

大介職

〔源平盛衰記十五〕南都騷動始事

上總守忠清相國禪門ニ申ケルハ、今度合戰ノ高名足利太郎忠綱ガ宇治川ノ先陣ノ故也、向後ノ爲ニ速ニ勸賞候ベシト細々申ケレバ、入道大ニ感ジテ忠綱ヲメシ、宇治川ノ先陣返々神妙、勸賞乞ニ依ベシト宣フ、忠綱畏テ靫負尉撿非違使受領ヲモ申ベク候ヘ共、父足利太郎俊綱ガ上野十六郡ノ大。介。ト、新田庄ヲ屋敷所ニ申候シガ、其事空ク候キ、御恩ニハ同ハ父ガ本意ヲモトゲ、身ノ面目ニモソナヘン爲ニ、彼兩條ヲユルシ給リ候ハント申、入道當座ニ被下知タリ、忠綱大ニ悅、眉ヲ開テ宿所ニ歸ル、足利ガ一門此事ヲ聞テ、十六人連署シテ訴訟ス、宇治河ヲ渡ス事、忠綱一人ガ高名ニ非ズ、一門不與バ忠綱爭カ渡スベキ、サレバ勸賞ハ十六人ニ配分候ベシ、忠綱ガ大介ヲ不召返バ、向後ノ御大事ニハ、忠綱一人ヲ召レ候ベシト、一時ニ三度マデ申タリケレバ、入道力及給ハデ、巳時ニ給タリケル御教書ヲ未剋ニ被召返ケリ、午時計ゾ有ケレバ、京童部ガ、足利又太郎ガ上野ノ大介ハ午介トゾ笑ケル、

〔吾妻鏡一〕治承四年八月廿七日丁未、辰剋三。浦。介。義明、年八十九爲河越太郎重頼、江戸太郎重長等被討取、齡八旬餘、依無人于扶持也、義澄等者赴安房國、　十月廿三日壬寅、著于相摸國府給、始被行勳功賞、北條殿及信義、○中略以下、或安堵本領、或令浴新恩、亦義澄爲三浦介、行平如元可爲下河邊庄司之由被仰云云、

〔吾妻鏡十六〕正治二年正月廿三日庚戌、三浦介平朝臣義澄卒、年七十四三。浦。大。介。義明男、

〔有職問答三〕一大介

三浦大介と稱之、辭退前官の心候哉、

此事更不得才覺候、推量候ニハ、御堂殿ヲバ大入道殿ト申候、是賞翫シテ奉稱之歟、サレバ清家大外記賴業眞人ヲバ、子孫執シテ大外記トテ今申習候、是モ三浦家ニテ一段執シテ大ノ字ヲ加候ケルガ、又子息ナド己當國之介ニ拜任之後、如此家ニテ稱候ケルカ、可為兩端候哉、

〔辨官補任 三條〕長和元年壬子

左大辨正四位下藤說孝（八月十一日任播磨守、卅六、）

〔三島神社文書〕一崇德院御時、保延二年丙辰六月十九日、大宮御造營、此時國司（○伊豫）大膳大夫兼大。介。藤原忠隆、

〔公卿補任 近衞〕久安四年戊辰

非參議從三位藤原忠隆

天承元十二十四伊與守、保延五十二卅播万守、（相傳）

〔兵範記〕久壽三年三月十三日甲寅、今日被發遣伊豫先使也、（○中略）

裏書

新司宣　伊豫國在廳官人等（○中略）

以前三ヶ條所宣如件（○中略）

久壽三年三月十三日

春宮亮兼大。介。藤原朝臣

〔公卿補任 後白河〕保元三年戊寅

非參議從三位藤親隆

久壽二九廿三兼春宮亮、同三。三。六。任。伊。與。守。（元尾張前司、未得解由去尾張、經數日任之、）

〔鹿島社文書 六〕廳宣　大枝鄉（○常陸國南郡）

可令早以前大禰宜政親子息鬼三郎丸爲給主勤行有限神事事、（○中略）

貞應二年六月　日

大。介。藤原朝臣

〔扶桑略記二十五 朱雀〕承平六年六月、南海道賊船千餘艘浮於海上、强取官物、殺害人命、仍上下往來人物不通、勅以從四位下紀朝臣淑仁、補賊地伊與國大介、令兼行海賊追捕事、

〔日本紀略二 朱雀〕承平六年六月某日、以紀淑人任伊豫守、

〔本朝文粹十三 願文〕於尾張國熱田神社供養大般若願文　江匡衡

國守正四位下行式部權大輔兼東宮學士大江朝臣匡衡、稽首禮足、白佛法僧言、當國守代々奉爲鎭主熱田宮、奉書大般若經一部六百卷、已爲恒例之事、其中若有神明不享之吏、不能供養此經、亦不能遂任秩、當國之事、莫先於大般若會、匡衡幸出顏巷之雪窓、謬莅尾州之風俗、若不奉待讀於我后、何必質朴之愚者得爲州刺史、○中略今白衣弟子、從日本長保三年八月、至寬弘元年十月、首尾四年書之、○中略我願已滿、任限亦滿、欲歸故鄕之期今不幾、神明顧賜靈睨、匡衡敬白、

寬弘元年十月十四日　　正四位下行式部大輔兼東宮學士江朝臣匡衡敬白

〔中古歌仙三十六人傳〕大江匡衡

長德三年三月九日兼東宮學士、四年正月七日敍從四位下、同廿五日轉式部權大輔、十月廿三日昇殿、長保三年正月廿四日、兼尾張權守、

〔朝野群載二十二 諸國雜事〕國符 赤穗郡司

應免除太皇太后宮大夫家御領有年庄司寄人等臨時雜役事○中略

右彼家去十月十五日牒、今月十三日到來偁、件庄、代々相傳之處也、而本公驗等、去四月十三日、右○右一本作左衛門督三條家燒亡之次紛失已了、仍如本立劵、免除司、寄人等臨時雜役者、所仰如件、郡宜承知、依件免除、不可違失、符到奉行、

大介藤原朝臣說孝、以下署名六人略

長和四年十一月十六日

大介

見古來之兼國之勸文、更親王御兼國事不得所見候、○中略近年後醍醐院御代などには、親王御兼國有之歟、其後未得所見、然者可申不快、強非御吉例歟、先此春除目御兼國事御無沙汰分ニテ被閣者、可然之由存候旨、局務外史申候、此分可得御意之由申上之、少將經秀○綾小路歸出、仰云、御親王兼國事局務申分被聞食了、可有御意得之由被仰下了、

〔叡岳要記〕下弘仁四年正月上旬、金光明會後七日御修法可始行官符偁、

入唐大乘宗阿闍梨最澄住滋賀郡比叡山、

右○中略寺家宜承知依件施行、符到奉行、

從五位上守近江大介笠朝臣在判　從六位下少錄□在判

○按ズルニ、笠朝臣ハ其諱タルヲ詳ニセズ、而シテ此國當時ノ守介以下ノ名ヲ、日本後紀幷ニ公卿補任等ニ據リテ調査スルニ、守ハ藤原緒嗣、介ハ朝野鹿取、權介ハ藤原濱主、權大目ハ雁高氏成ナレバ、此大介ハ蓋シ或ハ權守ニテモアルベシ、權守ヲ大介ト云ヒシ事、後文ニ例アリ、

〔新編常陸國誌〕四十八官職大介　此職ハ中世置カル丶所ニテ、上古ヨリノ官ニアラズ、○中略朝廷衰微シ、豪族富ヲナスニ及テ、親王攝家ノ家ニハ、莊園ノ數ヲ加ヘ、萬事闕ル事ナシト雖ドモ、ナミナミノ公卿殿上人ハ、莊園モ少ナク、勤仕ノ料ニ給スルコト能ハズ、朝廷マタ之ヲ援フノ力ナシ、是ニ於テ受領ノ闕アル時ハ、公卿雲客モ其國ヲ申給ハリテ知行スル事出來タリ、コレミヅカラ大介ト稱ス、守ニアラズ、介ニアラズシテ、其國ヲ受領スルガ故ナリ、其身ハ京都ニアリテ遙ニ國事ヲ攝ス、其司ドル事、守ニ異ナラズ、故ニ國司ト稱ス、有位ノ人ヲ以テ代官トシ、國ニ下テ庶務ヲ行ハシム、コレヲ國司代ト云フ、蓋シ目代ト稱セザルモノハ、守ノ代官ト其稱ヲ異ニスルナリ、此時ニ至テ、大介ヲ補スル國アリ、又受領ヲ任ズル國アリ、思フニ此大介ヲ置事ハ、白河法皇ノ叡慮ニ出テ、堀河帝ノ初政ニ始マリシモノナルベシ、

別倉、支无品親王之要、伏聽天裁者、正三位行中納言兼右近衛大將春宮大夫良峯朝臣安世宣、奉勅依奏、但件等國守官位卑下、宜改定正四位下官、以爲勅任、號稱太守、限以一代、不可永例、

天長三年九月六日

〔帝王編年紀十三淳和〕天長三年丙午九月、仲野親王(桓武皇子)始爲上總太守、賀陽親王(同皇子)爲常陸太守、葛井親王(同皇子)爲上野太守、親王任國自此始之、

〔官職秘抄下〕諸國

守　上總常陸上野太守、爲親王、介爲受領、仍歷外記史輩不任之、與親王不可相並之由、二條關白(○藤原師道)被執之、然而其例多、又近代不及此儀歟、

〔職原抄下〕諸國

又太守者、爲親王置之、親王任時不知吏務、仍件國以介爲守、乃令知吏務也、

〔源氏物語五十東屋〕つくば山(○在常陸國)をわけみまほしき御こゝろは有ながら、は山のしげりまであながちに思ひいらんも、いと人ぎゝかろ〴〵しう、かたはらいたかるべき程なれば、おぼしはゞかりて、御せうそこをだにえつたへさせ給はず、(○中略)かみのこどもは母なくなりにけるなどあまた、このはらにも姫君とつけてかしづくあり、

〔河海抄十九東屋〕かみのこどもは　守子共、是は常陸介也、守は親王諸王任之、太守といふ、仍介守代として國務をこなふゆへに介を守といふ歟、

〔神皇正統記後醍醐〕かくて親王(○義良)元服したまひ、直に三品に敍し、陸奧太守に任じまします、このくにの太守ははじめたる事なれど、便りありとてぞ任じ給ふ、

〔康富記〕文安五年正月廿六日癸丑、親王御方御兼國事兼日被仰下局務、何樣申哉御不審云々、予申云、其事候、上野者御斟酌候也、常陸上總之間可計申沙汰之旨、兼以仰之旨令申局務之處、此間擧引

儀參議兼國任納言之日卽止之、介權介者、辨官近衞中少將等兼之、

〔有職問答〕一受領に大守事

諸國大守號おほく候、親王受領めさるべき國にて候、但上總上野の外は親王任じまします事（時ハ）（必大守タルベク候）（常陸也）介吏務チツカサドリ候、如此子細職原抄ニ見エ申候、は希有のよし被仰出候、大守の國によりて其吏務をめさるゝ事は常に御座候、親王直になにがしの大守と申すは、右兩國のみに候よし被仰出候キ、常陸宮などの號を稱し候は、各別之儀候哉如何、

〔野宮問答〕介

上野、上總、常陸等之介をかみと可稱など申候か、其通にて可然候か、

答

此國々の介を守と申事無之候、此三ヶ國は親王之任國にて候、仍太守と太之字を加へ申候、親王之義は遙授に候故に、介掌吏務候、さるに依て、かの國々の介は、守とも申べく候由、其說も候へども、本儀には不叶候、但源氏物語東屋之卷に、常陸介を守と申事有之候、是は宿木之卷に、常陸前司と出候故に、ふと守と呼候かと存候、是を以て押て介を守と申べき事無其謂事にて候

〔類聚三代格五〕太政官符

應親王任國守事

上總國　常陸國　上野國

右撿中納言從三位兼行左兵衞督淸原眞人夏野奏狀偁、設置八省、職寮相隷、百官守職、庶務俱成、一事有闕、萬事皆緩、今親王任八省卿、此人地望素高、不得就職、無知碎務、仍官事自擁、政迹日蕪、非是庸愚之所致、因地勢使之然也、凡官人遷代、必署解由、至有欠物、不免償物、居此之費、見其如此、望請點定數國、爲親王國、迭任彼國、身留京都、意欲居京官者、一兩人將聽、若有守闕者、不補他人、其料物者、約置

所濟功十二箇條

以前條功等、謹甄錄如右、抑件淡路國、名雖一國、實纔二郡、外位從下之輩、古今所任來也、順苟治小國、適成大功、又忝上階、須期後賞、然而籠鳥思出、豈擇遠近之林、轍魚悲枯、只求斗升之水、望請殊蒙天恩、被補件國、展翅於仁風、霑鰓於惠澤、將令天下彌知明時之不棄前功舊勞矣、順誠恐謹言、

天延四年正月二十八日　散位從五位上源朝臣順誠惶誠恐謹言

〔拾芥抄中本官位相當〕正四位下（上總、常陸、上野太守）　從五位下（上國守、任官例云、志摩、飛驒、隱岐、佐渡、壹岐、對馬、六位任之、五位又任之）

〔令義解官位一〕從五位（上階）大國守　上國守（下階）　正六位（下階）大國介　中國守　從六位（上階）上國介　下國守（下階）　正七位（下階）大國大掾　從七位（上階）大國少掾　上國掾　正八位（上階）中國掾　從八位（上階）大國大目　大國少目　上國目（下階）（大國少目以下從八位下階）　大初位（下階）中國目　少初位（上階）下國目

〔職原抄下〕諸國

大國守、（有權守、相當從五位上、）介、（有權介、相當正六位下、）掾、（大相當正七位下、少相當從七位上、）目、（大相當從八位上、少相當從八位下、）上國守、（有權守、相當從五位下、）介、（有權介、相當從六位上、）掾、（有權掾、相當從七位上、）目、（相當從八位下、）大上國守相當五位也、依之其身雖六位、除目之時、執筆之人押以書從五位下、不待勅處分者也、　中國守、（相當正六位下、）介、（官位令中國無介、）掾、（相當正八位下、）目、（相當大初位下、）下國守、（相當從六位下、）掾、（相當從八位下、）目、（相當少初位下、）

唐名　守、（唐名刺史、使君、宰吏、牧宰、國宰、大守、）介（長史、別駕）掾（司馬）目（主簿中略）○

凡國司者、相當五位以下也、然而雖四位已上、或隨其望、或應其撰、古來之例也、或說歷七箇國受領、合格之吏勘公文了、拜參議云云、白河院仰、但可依其才云云、又大守者爲親王詮之、親王任時不知吏務、仍件國以介爲守、乃令知吏務也、權守者近代多是遙授之官也、參議二三位中將少納言等必兼之、又殿上六位藏人敍位之時預爵者、即任權守、又例也、納言以上貶謫之時、任諸國權守也、仍常

應加置陸奥國少掾一員事

右得彼國守從五位下藤原朝臣興世解偁、此國所部多道、有司少員、春奉秋收、事難兼濟、望請加掾一人、以濟庶務者、右大臣宣、奉勅、依請、

仁壽四年八月一日〇又見文德實錄

〔文德實錄六〕齊衡元年八月癸丑朔、加置陸奥國少掾一員、

〔類聚三代格五〕太政官符

應加置下野國掾一員事

右右大臣宣、奉勅、如聞、此國地勢曠遠、人居疎闊、至于巡撿、官員數少、宜加置件員、爲大少掾、

天安二年四月十四日〇又見文德實錄

太政官謹奏

置加諸國介掾事

甲斐國　周防國　右上國今置介

能登國　丹後國　石見國　長門國　土左國　日向國　右中國今置介

飛驒國　右下國今置掾

以前謹案令條、上國有介、中國無介、下國無掾、今件等國、或前爲上國、未備介職、或國務稍繁、官員猶少、或長官有故、主典執印、論之政途、事非穩便、伏請甲斐周防新備介職、自餘中國同置介、下國又置掾、以適變通、但至于安房、若狹、佐渡、大隅、薩摩、志摩等國、雖有中下之名、不足備介掾職、仍不入此例、臣等商量、具件如前、伏聽天裁、謹以申聞謹奏、聞、

貞觀七年三月十九日〇三代實錄此歲五月十六日條載之、而十九日作九日、

〔本朝文粹六奏狀〕請殊蒙天恩因准前例依和泉國功補淡路守闕狀　源順

天長七年閏十二月廿六日

太政官符

應加置周防國目一員事

右彼國守從五位下丹墀眞人弟梶解偁、此國與阿波國共上國、而彼國有大少目、此國只有一員、望請置大少目、相濟公務、謹請官裁者、右大臣宣、奉勅依請、

嘉祥二年三月廿八日

太政官符

應加置甲斐國目一員事

右得彼國守從五位下小野朝臣貞樹解偁、周防阿波等上國皆有大少目、而至此國唯置一員、衆務斯多、從事人少、望請准彼兩國、加件官員、謹請官裁者、右大臣宣、奉勅依請、

仁壽二年二月廿二日〇又見文德實錄

〔類聚三代格五〕太政官謹奏

加增駿河安藝紀伊三箇國目各一員事

元一員今加一員

右案令條、大國大少目各一人、上國目一人、而撿案內尾張參河豐前豐後等總廿七箇國、並居上國、有大少目、是則時々議奏所加置也、而今件三箇國猶依舊無加、國掌執申、散用不足、因茲計校田疇編戶、與彼諸國無別、伏望依件加置、以令齊同、雖設官分職、實有前規、而隨時制宜、豈闕當代、臣等商量、所定如件、伏聽天裁、謹以申聞謹奏、聞、

仁壽三年六月八日〇或本係承和三年

〔類聚三代格五〕太政官符

大同四年二月十九日（〇又見日本後紀）

〔日本紀略 嵯峨〕弘仁二年二月庚辰、上野國元上國今改爲大國、

〔類聚三代格 五〕太政官謹奏

割越前國江沼加賀二郡爲加賀國事（〇准中國）

守一人　掾一人　大目一人　少目一人　史生三人　博士一人　醫師一人

右〇中略伏聽天裁、謹以申聞謹奏、聞、

弘仁十四年二月三日

太政官符

加賀國定上國事

右太政官去弘仁十四年三月一日下式部省符偁、依太政官去二月三日論奏、割越前國江沼加賀二郡爲加賀國、又定中國者、今件國准諸上國、課丁田疇、其數差益、被右大臣宣偁、奉勅宜改爲上國、

天長二年正月十日

太政官謹奏

增加出羽國官員事

大少目各一員（元員一人今加一人）

史生四員（元員三人今加一人）

右得彼國守從五位上勳六等小野朝臣宗成等解偁、此國頃年、戸口增益、倉庫充實、積于遂初、寔爲殷繁、又雄勝秋田等城、及國府、戎卒未息、關門猶閉、配此數處國司少員、方今雖干戈不動、邊城靜謐、而豺狼野心、不可不愼、望請准人數、增加官員者、聖人垂教、沿革在於適時、元后臨民、法令貴於便物、然則雖設職分官、既煥乎舊典、而權宜改易、事歸乎財成、臣等商量所定如右、伏聽天裁、謹以申聞謹奏、聞、

少目員、

〔享祿本類聚三代格 四〕太政官謹奏

民部主計及越前肥後二國增官員事

右謹案令條、官員有限、緣事繁閑、應有增減、而民部省、及主計寮、計納雜物、勘勾用度、諸司之中、尤是忩劇、越前肥後二國、元來殷盛、勾察事多、准於餘國、官員猶少、伏請民部省加大丞一人、主計寮少允少屬各一人、越前肥後二國各掾一人、自今已後、永爲恒式、庶得各分其職、公事早濟、謹錄事狀、伏聽天裁、謹以申聞、謹奏、

延暦九年二月廿五日〇原本有誤脫、據續日本紀、令集解補正、

〔類聚三代格 五〕太政官謹奏

定陸奥國官員事

按察使一人　記事一人　守一人　介一人　大掾一人　少掾一人

大目一人　少目二人　博士一人　醫師一人　史生五人　守傔仗二人

右上件官員、臣等商量、所定如右、伏聽天裁、謹以申聞謹奏、聞、

延暦十七年六月廿八日

〔日本紀略 桓武〕延暦二十三年六月癸丑、定越中國爲上國、

〔類聚三代格 五〕太政官謹奏

佐渡國今置掾一員、

隱岐國今置掾一員、

右件兩國、僻在邊遠、官員乏少、居上之人、若有事故者、則典代之掌印、求之道理、良不穩便、伏乞更置件員、以備職務、謹錄事狀、伏聽天裁、謹以申聞謹奏、聞、

野國上　陸奥國大　出羽國上　右爲遠國　越
北陸道　若狹國中　右爲近國　越前國大　加賀國上　能登國中　越中國上　右爲中國　越
後國上　佐渡國中　右爲遠國
山陰道　丹波國上　丹後國中　但馬國上　因幡國上　右爲近國　伯耆國上　出雲國上　右
爲中國　石見國中　隱岐國下　右爲遠國
山陽道　播磨國大　美作國上　備前國上　右爲近國　備中國上　備後國上　右爲中國　安
藝國上　周防國上　長門國中　右爲遠國
南海道　紀伊國上　淡路國下　右爲近國　阿波國上　讃岐國上　右爲中國　伊豫國上　土
佐國中　右爲遠國
西海道　筑前國上　筑後國上　豐前國上　豐後國上　肥前國上　肥後國大　日向國中　大
隅國中　薩摩國中　壹岐島下　對馬島下　右爲遠國

〔拾芥抄中本百官〕諸國司　守　介　掾　目　史生　國掌　郡司
大國十二　上國卅五　中國十一　下國九

〔二中歷官名七〕國司
今按、和泉、伊賀、志摩、伊豆、安房、若狹、淡路、（無權守介、以高橋氏爲守、但志摩國爲例、）上野、上總、常陸、（以親王爲太守、以介爲受領、）丹後、伯耆、石見、（無權守、）飛驒、佐渡、隱岐、（無權守介、以六位爲國司、）日向、（無權守、）大隅、薩摩、壹岐、對馬、（無權守介、）

〔續日本紀二十孝謙〕天平寶字元年五月乙卯、勅曰、（中略）○但馬肥前加介一人、出雲讃岐加目一人、

〔續日本紀三十三光仁〕寶龜六年三月乙未、始置伊勢少目二員、參河大少目員、遠江少目二員、駿河大少目員、武藏下總少目二員、常陸少掾二員、少目二員、美濃少目二員、下野大少目員、陸奥越前少目二員、越中但馬因幡伯耆大少目員、播磨少目二員、美作備中阿波伊豫土左大少目員、肥後少目二員、豐前大

職員 國司等級

得取他貨賂、令致民於貧苦、上京之時、不得多從百姓於己、唯得使從國造郡領、但以公事往來之時、得騎部內之馬、得飡部內之飯、介以上、奉法必須褒賞、違法當降爵位、判官以下、取他貨賂、二倍徵之、遂以輕重科罪、其長官從者九人、次官從者七人、主典從者五人、若違限外將者、主與所從之人、並當科罪、

〔日本書紀齊明二十六〕四年是歲越國守河部引田臣比羅夫討肅愼、

〔日本書紀天武二十八〕元年六月甲申、將入東、〇中略是日發途入東國、事急不待駕而行之、〇中略越大山至伊勢鈴鹿、爰國司守三宅連石床、介三輪君子首〇中略等、參遇于鈴鹿郡、

〔日本書紀天武二十九〕五年正月甲子、詔曰、凡任國司者除畿內及陸奧長門國以外、皆任大山位以下人、五月庚午、宣進調過期限國司等之犯狀、

〔日本書紀天武二十九〕朱鳥元年二月乙亥、勅撰諸國司有功者九人、授勤位、九月丙午、天皇病遂不差、崩于正宮、丙寅、直廣肆穗積朝臣虫麻呂、誄諸國司事、

〔令義解職員一〕大國　守一人、〇中略介一人〇註略大掾一人〇註略小掾一人〇註略大目一人〇註略小目一人〇註略史生三人

上國　守一人、介一人、掾一人、目一人、史生三人、

中國　守一人、掾一人、目一人、史生三人、

下國　守一人、目一人、史生三人、

〔延喜式民部二十二〕畿內　山城國上　大和國大　河內國大　和泉國下　攝津國上

東海道　伊賀國下　伊勢國大　志摩國下　尾張國上　參河國上　右爲近國　遠江國上　駿
河國上　伊豆國下　甲斐國上　右爲中國　相摸國上　武藏國大　安房國中　上總國大　下
總國大　常陸國大　右爲遠國

東山道　近江國大　美濃國上　右爲近國　飛驒國下　信濃國上　右爲中國　上野國大　下

國司初見

〔三代實錄四清和〕貞觀二年四月廿五日乙巳、新鑄印一面、賜尾張國、前印刓也、

〔三代實錄十六清和〕貞觀十一年三月十六日甲戌、新鑄銅印一面、賜陸奥國、前印刓也、

〔三代實錄二十四清和〕貞觀十五年九月廿五日丁亥、新鑄銅印一面、賜伊勢國、舊印文字刓滅也、

〔三代實錄二十五清和〕貞觀十六年三月七日丙寅、新鑄銅印一面、賜武藏國、以舊印文刓盡也、

〔三代實錄三十四陽成〕元慶二年九月八日庚子、改鑄銅印一面、賜安藝國、以前印文刓滅也、

〔三代實錄三十六陽成〕元慶三年十月十五日辛未、勅令中務省鑄充肥後國銅印一、以舊印刓也、

〔三代實錄四十二陽成〕元慶六年十月十日己酉、新鑄銅印一面、賜土佐國、以前印文字刓盡也、

〔三代實錄五十光孝〕仁安三年六月五日丁未、先是出羽守從五位下坂上大宿禰義樹上言、國印刓落、不堪行用、請被改鑄、由是命所司新鑄賜之、

〔令義解七公式〕凡諸國給鈴者、（謂其剋數者、依式處分也、）大宰府廿口、（謂管內諸國亦國別皆給也、）三關及陸奥國各四口、大上國三口、中下國二口、其三關國各給關契（謂其作契之形制者、須有別式、即下條隨身符亦准此也、）二枚、並長官執、无次官執、（謂有鈴與契、是以稱並、其）（長官次官並不在者、主典以上亦得執掌、）

〔日本書紀十一仁德〕六十二年五月、遠江國司表上言、有大樹自大井河流之、停于河曲、

○按ズルニ、國司ノ稱、始テ此ニ見エタリ、然レドモ其行政ノ狀ハ、孝德天皇以來ノ國司ト、大ニ異ナル所アルベシ、

〔日本書紀十四雄略〕二十三年八月丙子、天皇疾彌甚、○中略遺詔於大伴室屋大連與東漢掬直曰、○中略臣連伴造毎日朝參、國司郡司、隨時朝集、何不罄竭心府、誡勅慇懃、

〔日本書紀十五清寧〕二年十一月、依大嘗供奉之料、遣於播磨國司山部連先祖伊與來目部小楯、於赤石郡縮見屯倉首忍海部造細目新室、見市邊押磐皇子子億計弘計、

〔日本書紀二十五孝德〕大化元年八月庚子、拜東國等國司、仍詔國司等曰、○中略又國司等、在國不得判罪、不

印鎰關契

今昔、伯耆ノ守橘ノ經國ト云フ人有ケリ、其人ノ伯耆ノ守ニテ有ケル時、世ノ中極ク辛クテ、食物无キ年有ケリ、其レニ國府ノ傍ニ院ト云フ藏共有リ、藏ノ物共ハ皆下シ畢テ物モ无カリケル時ニ、人ノ藏ノ邊ヲ過ケルニ、藏ノ内ニ叩ク者有リ、何ノ叩クゾト聞ケレバ、藏ノ内ニシテ云ク、盜人ニ侍リ、此ノ由疾ク申シ上給ヘ、此ノ藏ニ鎰ノ有シヲ見テ、少シ取テ命ヲ助ケムト思テ、藏ノ上ニ登テ、屋上ヲ穿テ鎰ニ落掛ラムトシテ、手ヲ放テ落入タレバ、鎰モ无クテ空ケレバ、此ノ四五日返リ可上キ方モ无クテ、既ニ餓死侍ナムトス、出テコソ死侍ラメト、人此レヲ聞テ、奇異ト思テ、守ニ此ノ由ヲ申ケレバ、忽ニ在廳ノ官人ヲ召テ、藏ヲ開サセテ見レバ、年卅計ナル男ノ糸鑭ラカナルガ水旱裝束直クシタルガ、色モ无キヲ引出タリ、人々有テ、此レヲ見テ云フ甲斐无シ、遂ニ被追放ヨト云ケレドモ、何デカ後ノ聞エモ有リト云テ、藏ノ傍ニ幡物結テ張懸テケリ、然ルハ痛ウ云タル奴ナレバ、可免放キニ、口惜キ態シタリトナム人云ヒ謗ケル、此ノ男ノ顏見知タル人更ニ无クテナム止ニケルトナム語リ傳ヘタルトヤ、

〔令義解七公式〕諸國印、方二寸、上京公文及案調物即印、

〔延喜式十七内匠〕諸國印一面料、熟銅大十二兩、白鑞大一兩一分、鑞大一兩一分、調布二尺、炭二斗、和炭二斗、長功五人鑄工一人、鑄二人、磨二人、中功六人大半、短功七人小半、

〔扶桑略記五文武〕大寶二年二月乙丑日、諸國司等始賜印鎰、

〔續日本紀三文武〕慶雲元年四月甲子、令鍛冶司鑄諸國印、

〔續日本後紀十九仁明〕嘉祥二年三月甲子、伊賀國言、國印文歷年代文字刓失、行用不明者、勅宜鑄造充之、

〔三代實錄一清和〕天安二年十月七日甲午、新鑄銅印一面賜讃岐國、先是彼國司言、所在銅印久經年代文字刓滅、仍賜之、

〔三代實錄三清和〕貞觀元年八月甲申朔、新鑄印一面賜美作國、以國司申請、舊印文字訛滅、不堪行用也、

州宮城郡高森城守護之、聽士民之訟、而言上于鎌倉也、

御下文

下　陸奧國諸郡鄕新地頭所

可早從留守幷在廳下知、先例有限國事致其勤事

一國司御厩舍人等給田畠事

右件舍人等居住郡鄕、募來彼田畠在家等者也、早任先例、可令引募、且隨作否之多少可充行也、

一國司御厩佃事

右件佃、本自定置之郡鄕、宮城、名取、柴田、黑河、志太、遠田、長世、大谷、竹城是也、早任先例、可致沙汰、縱所雖損亡、隨作否、可充行沙汰也、

以前條々、背此狀、致不當之輩者、可改定地頭職也、且御目代不下向之間、隨留守幷在廳之下知、可致沙汰、但留守家景、可同先例於在廳也、國司者、自公家被補任、在廳者國司鏡也、於先例沙汰來之事者不憚人、無偏頗、可致沙汰、兼又國司興復之、只在勸農之沙汰、所仰付家景也、而不隨國務、所々、家景自身罷向、見知實否、可加下知也、猶不承引之所、可注申、但依人成憚、有偏頗、不申上濫行輩者、仰家景可處奇怪之狀如件、以下、

建久元年十月五日　　前右兵衞佐源朝臣〇又見吾妻鏡

〔續世繼十敷島の打きゝ〕陸奧守橘爲仲と申、かの國にまかりくだりて、五月四日、たちに廳官とかいふものとしおいたる出來て、あやめふかするを見ければ、例の菖蒲にはあらぬくさをふきけるをみて、けふはあやめをこそふく日にてあるに、これはいかなるものをふくぞと問はせければ、〇下略

〔今昔物語二十九〕伯耆國府藏入盜人被殺語第十

〔壬生家文書四〕廳宣　留守所

可早以良田郷內見作田參町宛置善通寺御影堂修理用途料事

右善通寺者、弘法大師降誕之地、秘密上乘、流布之庭也、○中略宜爲善通寺之管領、永支御影堂之修理、可以傳三會之期、可以成二世之願、家門繁昌、國邑豐饒者、留守所宜承知、依件行之、以宣、

嘉祿元年四月　日

大介源朝臣

〔吾妻鏡二十八〕寛喜三年四月廿日、河越三郎重員本職四個條事、去二日被尋下留守所、自秩父權守重綱之時、至于畠山二郎重忠奉行來之條、符合于重員申狀之由、在廳散位日奉實直、同弘持、物部宗光等、去十四日勘狀、留守代歸寂、同十五日副狀等到來、仍無相違可致沙汰之由云云、

〔常陸國總社文書〕常陸國留守所下文

留守所　下

清原師貞

右以人所被補任五位職也、仍任先例可令勤仕其役之狀如件、

貞和三年十一月　日

税所平花押

大掾平

目代

〔留守系譜乾〕藤原姓留守氏家景系譜

大織冠鎌足○註略—二代淡海公不比等○中略—十七代家景伊澤四郎、左近將監、母畠山庄司平重能女、○中略

文治六年三月十五日、被召家景於鎌倉、補奥州留守職、自是後改伊澤氏、以留守爲氏號、居住于奥

右件作田漆町餘除米光保之外官物、可令展納庄家之、國方責早可停止、

康和四年九月六日

大介高階朝臣 花押

〔吾妻鏡 八〕文治四年十一月二十二日辛亥

下隱岐國在廳等

可早令犬來幷宇賀牧外宮內大輔重頼知行所々國衙進止事

右件所々、依爲平家領、以重頼補預所職候畢、而犬來宇賀牧外非平家領之由、在廳等截誓狀訴國司、國司又依經奏聞、自院所被仰下也、早彼兩牧外停止重頼之沙汰、可爲國衙進止之由如件、以下、

文治四年十一月廿三日

下隱岐國在廳資忠

可早遂上洛、遵行國司下知事

右件資忠者、爲在廳之身、可專國務之處、背國司之命、不上洛、動難濟所當課役之由、依有其訴、自院所被仰下也、資忠所爲、甚以不當也、早遂不日之上洛、可遵行國務之狀如件、以下、

文治四年十一月廿二日

〔吾妻鏡 九〕文治五年十月廿四日庚戌、可遂出羽國地撿之由、被仰置留守所、御進發之後、地頭等憖申云、地撿之間可顛聞田之旨、留守張行之由云云、仍今日可停止件事趣所被遣御書也、

〔吾妻鏡 十〕文治六年〇建久元年二月六日庚寅、辰剋、奧州飛脚參著、申云、去月廿三日出彼國訖、其日未無下著之軍兵、爰兼任等逆賊群集如蜂云云、〇中略次新留守所、本留守、共有兼任同意之罪科、無左右雖可被誅、暫被預葛西三郎清重、可召甲二百領之過料云云、本留守者年齡已七旬、雖不被處斬罪、取終之條無程事歟云云、

留守所

守　陸奧守以可然人任之、依兼鎭守府也、近代又必不然、

〔類聚三代格　五〕太政官符

應延陸奧國史生幷弩師歷事

右按察使正四位下藤原朝臣緖嗣奏偁、謹撿案內、太政官去大同二年十一月二日符偁、初位已上長上官、遷代皆以六考爲限、又同年十一月廿三日符偁、史生不在此例者、而此國去京眇遠、公廨數少、在國殊營防戎、歸家旣乏路粮、臣請此一國改史生歷六年爲限者、右大臣宣、奉勅、准西海道諸國五年爲限、弩師准此、

大同五年三月一日

〔延喜式　十八式部〕凡陸奧出羽大宰管內諸國蔭子孫位子、雖不向省聽預出身、

〔令義解　五軍防〕凡置關應守固者、○義解略　並置配兵士、分番上下、其三關者（謂伊勢鈴鹿、美濃不破、越前愛發等是也、）設鼓吹軍器、國司分當守固、（謂目以上也、言三關者國司別當守固、其餘差配兵士、）所配兵士之數依別式、

〔文德實錄　九〕天安元年四月庚寅、始置近江國相坂、大石、龍花等三處之關剗、分配國司健兒等鎭守之、唯相坂、是古昔之舊關也、時屬聖運、不閉門鍵、出入無禁、年代久矣、而今國守正五位下紀朝臣今守上請加二處關而更始置之也、

〔沙汰未練書〕一留守所者　國々府國衙沙汰所也

〔東寺百合古文書　ホノ自五十六至七十〕廳宣　留守所

仰下大山庄訴申二ヶ條事

一可早令停止撿田使事

右件庄以國使專不可撿田、早可令停止、

一可早令辨進被立劵本庄外作田所當地利事

應停攝津職爲國司事

右被右大臣宣偁、奉勅、難波大宮既停、宜改職名爲國、其二季祿及月料、並從停止、

延暦十二年三月九日

〔類聚國史職官百七〕弘仁九年三月庚寅、改長門國司爲鑄錢使、定長官一員、次官一員、判官二員、主典三員、鑄錢師二員、造錢型師一員、史生五員、

〔類聚三代格五〕太政官謹奏

停多褹島隷大隅國事

右參議大宰大貳從四位下小野朝臣峯守等解偁、謹撿案内、太政官去二月十一日符偁、件島南居海中、人兵乏弱、在於國家良非扞城、又島司一年給物、准稻三萬六千餘束、其島貢調鹿皮一百餘領、更無別物、可謂有名無實多損少益、右大臣宣、奉勅、宜勘利害言上者、南溟淼々、無國無敵、有損無益、一如符旨、須停島隷大隅國、計其課口不足一郷、量其土地有餘一郡、能滿合於馭謨益救合於熊毛四郡爲二、於事得便者、聖帝登極、事期濟世、明王布政、理貴適時、臣等商量、昔漢元帝納賈捐之言、罷珠崖郡、前史以爲美談、後世稱其英烈、雖建國置島非無分野、而恤民救急、猶棄州郡、況溟海之外、費損如此、加以往還之吏、漂亡者多、運送之民、蕩沒不少、守無益之地、損有用之物、求之政典、深迂物議、伏望依件停隷、以省邊弊、伏聽天裁、謹以申聞謹奏、聞、

天長元年九月三日

○筑前國ヲ廢置セシコトハ、大宰府沿革條ニアリ、

邊要國幷三關國

〔延喜式民部二十二〕陸奧國　出羽國　佐渡國　隱岐國　壹岐嶋　對馬嶋

右四國二嶋爲邊要、

〔官職秘抄下〕諸國

廢置

因幡國國府在法美郡、行程上十一日、下六日、　伯耆國國府在久米郡、行程上十三日、下七日、　出雲國國府在意宇郡、行程上十五日、下九日、　石見國國府在那賀郡、行程上二十九日、下十五日、　隱岐國國府在周吉郡、行程上三十五日、下十八日、

山陽郡

播磨國國府在飾磨郡、行程上五日、下三日、　美作國國府在苫東郡、行程上七日、下四日、　備前國國府在御野郡、行程上八日、下四日、　備中國國府在賀夜郡、行程上九日、下五日、　備後國國府在葦田郡、行程上十一日、下六日、　安藝國國府在安藝郡、行程上十四日、下七日、　周防國國府在佐波郡、行程上十九日、下十日、　長門國國府在豐浦郡、行程上二十一日、下十一日、

南海郡

紀伊國國府在名草郡、行程上四日、下二日、　淡路國國府在三原郡、行程上四日、下二日、　阿波國國府在名東郡、行程上九日、下五日、　讃岐國國府在阿野郡、行程上十二日、下六日、　伊豫國國府在越智郡、行程上十六日、下八日、　土佐國國府在長岡郡、行程上三十日、下十八日、

西海郡

筑前國大宰府並國府在御笠郡　筑後國國府在御井郡　肥前國　小城國府　肥後國　益城國府　豐前國國府在京都郡　豐後國國府在大分郡　日向國　兒湯國府　大隅國　桑原國府　薩摩國○脫國府所在　壹岐島　石田國府　對馬島下縣國府○節略

〔妙興寺文書〕國衙公事錢納付狀

納。國。衙。御。實。公。事

合貳拾八貫三百文七拾四文者

右爲妙興寺分辨且所納如件

應永廿五年十一月十三日　　山井入道　花押

〔類聚三代格五〕太政官符

妨農務、用其舊材、勿勞新採、官舍之數、不得增減、勅、宜依官裁早令行之、

〔倭名類聚抄 五國郡〕畿內郡

山城國 源唱朝臣爲守之時、奏聞、以河陽離宮爲國府、　大和國 國府在高市郡、行程一日、　河內國 國府在志紀郡、行程一日、　和泉國 國府在和泉郡、行程上二日、下一日、靈龜二年、割河內國大鳥、日根兩郡、置此國、　攝津國 延曆十三年、停職爲國、

東海郡

伊賀國 國府在阿拜郡、行程上二日、下一日、　伊勢國 國府在鈴鹿郡、行程上四日、下二日、　志摩國 國府在英虞郡、行程上六日、下三日、　尾張國 國府在中島郡、行程上七日、下四日、　參河國 上國府在寶飯郡、行程上十一日、下六日、　遠江國 上國府在豐田郡、行程上十五日、下八日、　駿河國 國府在安部郡、行程上十八日、下九日、　伊豆國 國府在田方郡、行程上二十三日、下十一日、　甲斐國 國府在八代郡、行程上二十五日、下十三日、　相模國 上國府在大住郡、行程上二十五日、下十三日、　武藏國 國府在多磨郡、行程上二十九日、下十五日、　安房國 國府在平群郡、行程上四十四日、下十七日、養老二年、割上總國四郡、置此國、　上總國 國府在市原郡、行程上三十日、下十五日、　下總國 上國府在葛飾郡、行程上三十日、下十五日、　常陸國 上國府在茨城郡、行程上三十日、下十五日、

東山郡

近江國 國府在栗本郡、行程上一日、下半日、　美濃國 國府在不破郡、行程上四日、下二日、　飛驒國 上國府在大野郡、行程上十四日、下七日、　信濃國 國府在筑摩郡、行程上二十一日、下十日、　上野國 國府在群馬郡、行程上二十九日、下十四日、　下野國 國府在都賀郡、行程上三十四日、下十七日、　陸奧國 國府在宮城郡、行程上五十日、下二十五日、　出羽國 國府在平鹿郡、行程上四十七日、下二十四日、

北陸郡

若狹國 國府在遠敷郡、行程上三日、下二日、　越前國 國府在丹生郡、行程上七日、下四日、　加賀國 國府在能美郡、行程上十八日、下九日、弘仁十四年、割越前國加賀、江沼二郡、置此國、　能登國 國府在能登郡、行程上十八日、下九日、養老二年、割越中國四郡、置此國、　越中國 上國府在射水郡、行程上十八日、下八日、　越後國 國府在頸城郡、行程上二十四日、下十七日、　佐渡國 國府在雜太郡、行程上二十四日、下十七日、

山陰郡

丹波國 國府在桑田郡、行程上一日、下半日、　丹後國 國府在加佐郡、行程上七日、下四日、和銅六年、割丹波國五郡、置此國、　但馬國 國府在氣多郡、行程上七日、下四日、

趾を國衙島といへり、

〔貞丈雜記 官位四〕一國司と云は、○中略諸國に右の役人の居る役屋敷あり、其處を國府と云也、

〔出雲風土記 島根郡〕朝酌渡、廣八十歩許、自國廳通海邊道矣、

〔續日本後紀 十三仁明〕承和十年十二月庚午、山城國正月吉祥悔過、自弘仁十三年依官符旨於國廳修焉、始自是歲復舊令修於國分寺、

〔日本紀略 桓武〕延曆十六年八月戊寅、遷任山城國治於長岡京南以葛野郡地勢狹隘也、

〔三代實錄 五清和〕貞觀三年六月七日庚戌、山城國奏言、河陽離宮、久不行幸、稍致破壞、請爲國司行政處、但不廢舊宮名、行幸之日、加掃除許之、

〔三代實錄 五十光孝〕仁和三年五月廿日癸巳、先是出羽守從五位下坂上大宿禰茂樹上言、國府在出羽郡井口地、即是去延曆年中、陸奧守從五位上小野朝臣岑守、據大將軍從三位坂上大宿禰田村麻呂論奏所建也、去嘉祥三年、地大震動、形勢變改、既成窪泥、加之海水漲移、迫府六里所、大川崩壞、去湟一町餘、兩端受害、無力隄塞、湮沒之期、在於旦暮、請望遷建最上郡大山郷保寶士野、據其險固、避彼危殆者、太政大臣、右大臣中納言兼左衞門督源朝臣能有、參議左大辨兼行勘解由長官文章博士橘朝臣廣相於左仗頭、召民部大輔惟良宿禰高尙、大膳大夫小野朝臣春風、左京亮藤原朝臣高松等、問彼國遷府之利害、所言參差、同異難定、更召伊豫守藤原朝臣保則、以高尙等詞問之、保則言、國司所請非无理致、保則高久等元任彼國吏、應知土地之形勢、故召問之、太政官因國宰解狀、討覈事情曰、避水遷府之議、雖得其宜、去中出外之國見其便、何者最上郡地在國南邊、有山而隔、自河而通、夏水浮舟纔有運漕之利、寒風結凍曾无向路之期、況復秋田雄勝城相去已遙、烽候不接、又舉納秋獲國司上下必有分頭、入部率衆、若赴沼水而後泝水而還者、徵發之煩、更倍於尋常運送之費、將加於黎庶、憂然无時之時、縦能兼濟警急、不虞之日、何得周旋、以此論之、南遷之事、難可聽許、須擇舊府近側高敞之地、閑月遷造、不

國衙

乃國司之名、後改云守也、凡國司之撰、和漢重之、此云烹鮮之職、又云分憂之官、漢宣帝常稱曰、與我共治者、唯良二千石乎云云、誠是當一方之重寄、察百姓之寒苦、非庸才之所可企望、故昔時因設格制、以勘治否、合格者蒙賞、違格者被黜、是所以擇良吏也、

〔大館常興書札抄〕一受領唐名

大和守和州	山城守城州	陸奥守奥州	武藏守武州	相摸守相州
伊豫守豫州	讃岐守讃州	尾張守尾州	安房守房州	阿波守阿州
上總介總州	播磨守播州	淡路守淡州	伊豆守豆州	伊勢守勢州
攝津守攝州	出羽守羽州	越後守越州	因幡守因州	丹波守丹州
丹後守丹州	備前守備州	備中守備州	備後守備州	伯耆守伯州
出雲守雲州	但馬守但州	河內守河州	美作守作州	近江守近州
美濃守濃州	飛驒守飛州	隱岐守隱州	常陸介常州	上野介上州
下野守野州	伊賀守伊州	加賀守加州	甲斐守甲州	紀伊守紀州
下總守總州	土佐守土州	佐渡守佐州	和泉守泉州	若狹守若州
信濃守信州	參河守參州	遠江守遠州	駿河守駿州	壹岐守壹州
安藝守藝州	石見守石州	能登守能州	越前守越州	越中守越州
周防守防州	長門守長州	筑前守筑州	筑後守筑州	豐前守豐州
豐後守豐州	大隅守隅州	日向守向州	薩摩守薩州	對馬守對州
志摩守摩州				

〔下學集上天地〕國衙ゴクガ諸國之府、謂之衙、

〔倭訓栞中編八古〕こくが　國衙と書り、國司の政を行ふ所也、今尾張中島郡に國衙庄ありて、司館の

任那國司(ミマナノクニノミコトモチ)などあり、さて古は後世の如く、國毎に常に必置れたりとは見えず、國別に必置て後世の如くに定められたるは、孝徳天皇の御世よりの事と見えたり、孝徳紀の記しざましどけなき故に、慥には聞えざれど、大かた然聞ゆるなり、大化元年八月に拜東國等國司、仍詔國司等曰云々、これ東國とあれども、畿内七道諸國の國司に詔ありし趣と聞ゆるなり、天武紀に、詔曰、凡任國司者、除畿内陸奥長門國、以外皆任大山位以下人、などあり、さて後世の書どもに、或は國造と國司とを同じことと云、或は皇極天皇の御時に、國造を國司と云、或は國造と國司とを並べ置るなど云る、みな古のさまを委くも考へずして、みだりに云るひがことなり、凡て後世の書どもに、古の事を云るは、何事も皆此類にて、いとうひ〱しきことのみなり、そも〱國造の事は、上に委く云る如くにて、代々傳へて其處に在て動くことなき物なり、國司は時々に人をえりて朝廷より任たまふ物にて、もとより國造とは甚く異なる物なり、職員令に、大國守一人云々、介一人云々、大掾一人云々、少掾一人云々、大目一人云々、少目一人云々、史生三人、上國云々、中國云々、下國云々、これ國司(クニノミコトモチ)なり、

〔拾芥抄中本官位唐名〕國守、刺史使君今號太守介別駕長史、掾司馬錄事參軍事目、錄事、又云主簿、

受領、刺史宰吏國宰循良牧宰或虎符竹符朱輪熊軾隼旗專城分憂官蒲鞭葦杖五馬部公杜母三刀夢五袴騎

〔唐六典三十三府督護〕上州

刺史一人、從三品、

秦置御史監郡、漢初省之、丞相遣史、分刺諸州、亦不常置、至武帝元光三〇元光三元封五之誤年、初置部刺史十三人、掌奉詔條、察諸州、秋冬入奏、居無常所、後漢則皆有定所、居官有別駕治中主簿功曹從事諸曹掾等員、皆自辟除、以刺衆官及萬人非違、故謂之刺史、自漢魏已來、或爲牧或爲刺史、皆管郡、隋初上州有刺史、長史司馬、錄事、參軍、功曹、戸曹、兵曹等、參軍事、法曹、士曹等行參軍、典籤州郡、

〔職原抄下〕諸國

神武天皇卽位之初、繼神代之蹤、都日向國宮崎宮、此時天下草昧、封域未定、東征之後、初平中洲、定都於大和國橿原宮、備來闕四門、朝八方、歷代因准、漸開諸道、第十代崇神天皇十年、遣使於四方、所向皆以臣伏、同年十月、更命四道將軍進發云々、第十三代成務天皇四年、始定國造、同六年始分國境、國造

賜國ノ制行ハルヽニ至リ、名國司、名代國司ト云フモノヲ生ゼリ、卽チ掲名守ナリ、ナホ國司ノ事ハ、政治部ニ關係スルモノ少カラズ、彼ニ詳ニシテ此ニ略セルモノ多シ、宜シク參看スベシ、

後世　文書ニ、總大判官代、總判官代、大判官代、判官代、正判官代、大帳所判官代等ノ名アリ、國衙庄園共ニ置ク所ニシテ、其職掌ハ專ラ田政ニ關係スルモノニ似タリ、

奈良朝ノ頃、攝津職、河內職、芳野監、和泉監アリ、蓋シ離宮ノ爲ニ設ケタルモノニテ、其地ノ政ヲ掌リシナリ、

上古ニ總領ノ官アリ、蓋シ數國ヲ統攝スルコト、大宰府ノ如キモノナラン、

名稱

〔伊呂波字類抄　古官職〕國司

〔和訓栞　中編古八〕こくし　國司は孝德天皇の時より始る、國造の事とするにはあらず、年限ありて其國政を執れり、

〔運歩色葉集　久〕國守（唐名太守、刺史、）

〔古事記　下清寧〕爾山部連小楯、任針間國之宰時、

〔釋日本紀　十一述義〕宰　私記曰、師說令持天皇御言之人也、故稱美古止毛知、

〔古事記傳　四十三〕宰は美許登母知と訓り、御命持にて、天皇の大命を承賜はり持て往て、其國の政を執行ふよしの名なり、萬葉二十四丁に、君之御言乎、持而加欲波久、（これは宰のことにはあらねど、言は同じ、）五十三丁一に、勅旨戴持弖、唐能、遠境爾都加播佐禮、（これは遣唐使の事なり、）十七四十二丁に、須賣呂伎能、乎須久爾奈禮婆、美許登母知、多知和可禮奈婆、（これは宰の事なるを、みこともちを用言に云り、又同卷に、於保伎美乃、美許等可之古美、乎須久爾能、許等登里毛知弖、これは御命を持てと云には非れども、事は同じ、）などあるが如し、さて宰の始は詳ならず、上代より有しものなるが如し、書紀神功卷に、新羅宰、應神卷に、海人之宰などあり、國司と云も是なり、仁德卷に、遠江國司、雄略卷に、

國司新ニ補任セラルレバ、太政官之ヲ其國衙ノ吏ニ通知ス、之ヲ任符、罷符、又ハ鐵符ト云フ、國司ハ赴任スルニ先チテ、先使(オーツカヒ)ヲ發シ、國衙ノ吏ニ令シテ、祭祀以下ノ事ニ從フベキコトヲ以テス、之ヲ新司ノ宣ト云フ、其發途スルニ臨ミテハ、辭見ノ式アリ、既ニ任地ニ到レバ、國內ノ社ヲ巡拜スルノ式アリ、之ヲ神拜ト云フ、

國司交替ノ時ハ、前司ハ其事務幷ニ國內ノ官物ヲ新司ニ交付シ、租賦ノ未納ナキコトヲ證スレバ、新司其差誤ナキコトヲ保シテ解由ヲ與フ、若シ解由ヲ與ヘザルトキニハ、太政官ヨリ檢交替使ヲ派遣シテ、勘解由使ノ勘判ヲ經ルモノトス、

國司ノ制度ハ、屢、變遷ヲ經テ、權官漸ク滋シ、權官ニハ受領アリ、遙任アリ、又遷謫セラレテ國司トナルアリ、遷謫セラルヽモノハ、多クハ權官ニシテ、僅ニ公廨ヲ給セラレテ、政務ニ關與スルコトヲ得ズ、權官ハ卽チ員外官ナリ、故ニ光仁天皇ノ朝ニハ、之ヲ員外某官ト稱シキ、受領トハ、前人ヨリ政務ノ交付ヲ受領セルモノニテ、正官、權官、長官、次官ヲ擇バズ、親ラ事ニ莅ムモノナリ、受領ノ下ニ在リテ事ヲ取ルモノヲ任用ト云フ、後世ニ國司ヲ汎稱シテ受領ト爲スハ、言ノ轉ジタルナリ、遙任ハ任地ニ赴カザルノ謂ニシテ、亦遙授ト云フ、京官ノ兼官ニシテ、多クハ其祿ニ霑フニ過ギズ、又大介ト云フアリ、弘仁中既ニ其名アリ、今其任人ヲ檢スルニ、或ハ正守アリ、或ハ權守アリ、而シテ後ニハ又之ヲ世襲スル如キモノサヘアリ、

中世以降、賜封ノ制弛ミテ、國ヲ賜フ例ヲ開ケリ、蓋シ大臣、納言ハ、當時國守ヲ兼ヌルヲ得ザレバ、權リニ此制ヲ設ク、其人ヲシテ別ニ人ヲ薦擧セシメ、其俸祿ノミヲ得シムルナラン、是ヨリ先キ、揭名介アリ、揭名掾目アリ、亦年官ヨリ起リシナラン、年官トハ高官高位ノ人等ガ、介掾等ノ官ヲ賜ヒテ、以テ人ニ付與スルヲ云フ、而シテ其付與ヲ受ケテ職ニ莅マザルヲ揭名ノ介掾ト云フ、卽チ有名無實ノ謂ナリ、然レドモ國守ヲ以テ付與スルコトハナカリシヲ、

古事類苑

官位部三十二

令制官職二十八

國司上

國司ニハ守、介、掾、目ノ四等官アリ、史生等之ニ屬ス、大寶ノ制、諸國ヲ大、上、中、小ノ四等ニ分チ、介以下ノ吏員ニ增減ノ差アリ、又陸奧出羽、佐渡、隱岐、壹岐、對馬ノ四國二島ヲ邊要ノ國ト稱シ、伊勢、美濃、越前ノ三國ハ、各、關門アルヲ以テ之ヲ三關國ト稱シテ、共ニ吏員諸國ト同ジカラザルモノアリ、又上總、常陸、上野ノ三國ハ、天長三年以降定メテ親王ノ任國ト爲シ、其親王ハ特ニ大守ト稱シ、介ヲ或ハ守ト稱ス、建武中興ノ時、義良親王ヲ以テ陸奧大守ト爲シヽハ、蓋シ其遺制ナラン、又三國司ト云フコトアリ、其國ハ阿波、伊勢、飛驒ナリトモ云ヒ、又ハ伊豫、伊勢、奧州ナリトモ云フ、但シコハ足利氏ノ頃ニ一時之ヲ稱セシニ過ギズ、

國司ノ名ノ史上ニ見エタルハ、仁德天皇六十二年ニ在リト雖モ、其制度上ニ現ハレシモノハ、孝德天皇大化新政ノ時ニシテ、其元年八月、東國ノ國司ヲ拜セシヲ始トスベシ、

國司ハ大寶令ノ制ニテハ、六年ヲ以テ任限トセシガ、慶雲三年ニ四年ト爲シ、天平寶字二年復タ六年トシ、其八年ニ四年ト爲シ、大同二年ニ六年ト爲シ、其翌年ニ五年ニ改メ、弘仁六年復タ四年ト爲シ、其七年ニ五年ニ改メ、承和二年ニ邊要國ヲ除キ、其餘ヲ四年ト爲シ、爾後永ク渝ルコトナシ、而シテ任限滿チテ後、仍ホ職ニ居ルヲ延任ト云ヒ、任限滿チテ後、更ニ其國ノ司ト爲ルヲ重任ト云フ、

尋蹤跡、早速剪除、重致懈緩、國有常刑、

〔類聚符宣抄七〕太政官符大宰府、―外―實奉―勅、

右近衞從七位上川邊宿禰忠保

右權大納言正三位兼行右近衞大將春宮大夫藤原朝臣師尹宣、前最手佐伯豐與之替、定件忠保者、府宜承知依宣行之、路次之國、亦宜准此、符到奉行、

從四位上行左中辨兼內藏頭藤原朝臣　　左大史

應和二年八月廿二日

○

〔續日本紀十五聖武〕天平十五年十二月辛卯、始置筑紫鎭西府、以從四位下石川朝臣加美爲將軍、外從五位下大伴宿禰百世爲副將軍、判官二人、主典二人、　十六年正月戊午、太政官奏、鎭西府將軍准從五位官、判官准從六位官、主典准從七位官、倍給二季祿及月料、並留應入京調庸物相折、通融隨時便給、又特賜公廨田、將軍十町、副將八町、判官六町、主典四町、奏可之、　辛酉、給鎭西府印一面、　九月己丑、給鎭西府驛鈴二口、

工人
綾師
染生

雜載

〔續日本紀三十稱德〕神護景雲三年八月丙辰、始置大宰府綾師、

〔延喜式十八式部〕大宰府染生一人、並預勘籍例、

〔續日本紀九元正〕養老六年四月丙戌、始制、大宰管內、大隅、薩摩、多褹、壹岐、對馬等司、有闕、選府官人、擬補之、

〔文德實錄四〕仁壽二年二月乙巳、參議正四位下兼行宮內卿相摸守滋野朝臣貞主卒、貞主者、右京人也、○中略承和九年遷式部大輔、○中略其秋拜參議、○中略嘉祥二年春兼尾張守、于時大宰府吏多不良、○中略上表曰、夫大宰府者、西極之大壤、中國之領袖也、東以長門爲關、西以新羅爲拒、加以九國二嶋郡縣闊遠、自古于今以爲重鎭、夫謀事以就祖、發致占古語、因撿舊記、大唐、高麗、新羅、百濟、任那等、悉託此境、乃得入朝、或緣貢獻之事、或懷歸化之心、可謂諸蕃之輻湊、中外之關門者也、因玆有德爲帥貳、才良爲監典、若無其人、選取辨官式部、頃年以來絕而不行、近得飛語云、彼吏或鄣目閉口、似避時之人、或忘恥貪財、爲聚歛之吏、府司國宰莫不悲傷、若如此不變、恐噬臍不及、臣聞此語、心神罔措、雖此之飛語、有何信據、而臣子之理、何不預憂、又聞少貳從五位下小野朝臣恒柯、筑前守從五位下紀朝臣今守、有意執論、無力矯枉、未審虛實、唯得耳剽、臣不勝血誠、伏觸逆鱗、言詞切直、默止不省、

〔三代實錄四十四陽成〕元慶七年七月十九日癸未、先是大宰府六月六日解偁、管筑後國解偁、今月三日夜、群盜百許人圍守從五位上都朝臣御酉館、射殺御酉、掠奪財物、傍吏聞入叫聲、俄發兵仗、赴集之間、群賊逃散、夜暗兵寡、不獲追捕者、府依解狀、差遣少監正六位上中原與人長城等、率將兵卒發遣搜索、仍且言上者、是日太政官符、譴責大宰府司曰、牧宰之官、委寄任重、而肆行殺戮、何惡之甚、筑後國去大宰府往還半日、縱三日之夜、夜暗兵少、則四日五日何不益兵追討、殆是傍吏愞弱之所致也、且管部之亂、鎭在府司、虎兕出柙、是誰之過、又發向長城等之後、既積月餘日、擒獲之狀、于今無聞、蓋是長城有致逗撓歟、抑亦府司無心惡惡歟、都督之任、豈合如此、又事出非常、理須馳驛、而修解付脚力、既以稽遲宜窮

太政官符

應統領一人選士卅人甲冑卅具遷置鴻臚館事

右大宰權少貳從五位上坂上大宿禰瀧守解狀偁、所以置選士設甲冑者、本爲備警急護不虞、而今檢案內、博多是隣國輻湊之津、警固武衛之要也、而埒與鴻臚相去二驛、若有客兵出於不意、何以應於急速、望請依件遷置以備禦侮者、大納言正三位兼行皇太子傅藤原朝臣氏宗宣、奉勅依請、

貞觀十一年十二月廿八日

主厨

〔令義解一職員〕大宰府

主厨一人

〔類聚三代格五〕太政官謹奏

廢品官一員〇中略

主厨一員正八位上官

右制令之日、肇置主厨、所掌之職、最在蕃客、加以供御之儲、不可闕之、而依同前論奏、既從停止、伏望依彼府解、更置件職、〇中略

臣等商量、廢置如右、伏聽天裁、謹以申聞、謹奏、聞、

承和七年八〇八一本作九月廿三日

譯語

〔延喜式二十三民部〕凡大宰府充仕丁者、〇中略大唐通事四人、史生新羅譯語弩師傔仗各三人、

〔拾芥抄中本百官〕大唐通事

天智天皇十年十一月、遣使於筑紫大宰府、〇下略

〔三代實錄九清和〕貞觀六年八月十三日丁卯、先是大宰府言、大唐通事張友信泛海之後、未知歸程、唐人來往、亦無定期、請友信未歸之間、留唐僧法惠、令住觀音寺、以備通事、太政官處分依請、

鼓吹丁

外交客館

應太宰府省史生置弩師事

右得府解偁、去延暦十六年、此府弩師永從停廢、不虞之備、不可不儲、望請除史生一員、永置弩師一員者、右大臣宣、奉勅依請、

弘仁五年五月廿一日

太政官符

應停史生一員加置弩師事

右得大宰府解偁、謹撿案内、格條去弘仁五年五月廿一日、除史生一人、置弩師一人、若有病故、詮補其闕、望請重減史生、加置弩師、謹請官裁者、大納言正三位兼行左近衛大將皇太子傅陸奥出羽按察使源朝臣能有宣、奉勅依請、

寛平六年九月十三日

〔延喜式民部二十二〕凡大宰府鼓吹丁、筑前肥後各七十二人、筑後肥前各五十四人、豐前豐後各卅六人、並免其徭役、

〔延喜式民部二十三〕凡大宰府充仕丁者、〇中略守客館一人、

〔延喜式兵部二十八〕凡大宰府定額兵馬二十疋之中、十疋牧馬、十疋並分置鴻臚館、備急速之儲、

〔享祿本類聚三代格十八〕太政官符

應例番外加役他番統領二人選士百人事

右大宰權少貳從五位上坂上大宿禰瀧守解狀偁、撿案内、選士百人、每月番上、而今以平常之員、備不意之儲、恐機急難支、後悔無及、望請例番之外、更加件員、置之鴻臚館、爲不虞之備者、大納言正三位兼行皇太子傅藤原朝臣氏宗宣、奉勅依請、

貞觀十一年十二月廿八日〇又見三代實錄

督師

无遵行、其故何者、兵士之賤无異奴僕、一人被點、一戶隨亡、軍毅主帳、校尉、旅帥各爲虎狼、更相徵索、唯求苟不合、乘勢生疵、當有違闕、責庸倍多、唯利惟視、無憚憲章、因斯强士恥名、儒夫畏責、無告之人、猶不得免、裸身蓬頭、知用鎌鋒、弱臂瘦肩何任弩弓、無粮而來、尋即逃去、寬其窮困、競習生常、依法爲罪、追捕滿獄、由役求食、甘之山野、他役雖禁、率斯之漸也、臣等商量、解却兵士、停廢軍毅、更擇富饒遊手之兒、名曰選士、免庸黍賜中男三人、在番時給日粮一升五合鹽二勺、護府之兵、往還□□□□供承之勞劇於在國、調庸並免、賜傜丁二人、此間民俗甚遠弓馬、但豐後國大野直入兩郡出騎獵之兒、於兵爲要、向府之程、單行五日、別須給傜丁四人、均平勞逸、假令氣體强壯、衣冠整鮮、雖暴惡之吏、不能關負擔之役、然則田園歸耒耜之夫、城府來弓馬之士、

選士統領卅二人　府八人番別二人〇番以下四字原缺、今據政事要略補、　六國各四人番別壹人　三國二嶋各二人番別更上

右同前奏狀偁、隊伍之整必資領帥、今商量依件置之、號曰統領、准陸奧國軍毅、各賜職田二町幷傜丁三人、在戍之時、給日粮二升、護府之兵、往還多苦、用傜之數、一倍給之、還敍把笏、一同軍毅、

衞卒二百人

右同前奏狀偁、此府者九國二島之所輻湊、夷民往來、盜賊無時、追捕拷掠、可有其備、加以兵馬廿疋、飼丁草丁、貢上染物所、作紙所、大野城修理等、舊例皆以兵士充、今商量置此二百人、充件雜役、以年相替、免調庸、及給粮鹽資丁、一同仕丁、

以前正二位行中納言兼右近衞大將春宮大夫良岑朝臣安世宣、奉勅、依奏廢置、唯統領者准軍毅府銓擬其人言上、卽令兵部省補任、

天長三年十一月三日

〔續日本紀二十四淳仁〕天平寶字六年四月辛未、始置大宰督師、

〔類聚三代格五〕太政官符

統領
選士

一員、但官位爲正八位上官、

雜品官二員（〇中略）

主船一員（正八位下官）

右創法之時、置主船吏、而依同前論奏、既從停廢、如今得彼府解、偁、案警固式云、簡練舟檝、備於不虞者、加以年中例貢綿絹并御贄別貢等每年有數、仍常雇民船、多費正稅、又遣唐廻使所乘之新羅船、授於府衙、令傳彼樣、是尤主船之所掌者也、其大唐通事有職無掌、望請更置主船、停兼通事、卽充傜人、令護其舟、然則公家無損、職掌有愁者、伏望更置件官、令攝兩職、

以前大宰大貳從四位上南淵朝臣永河等所請如件、夫觀時革制、爲政之要樞、論代立規、濟民之本務、是以明王馭俗、術非一途、哲后治邦、豈拘膠柱、臣等商量、廢置如右、伏聽天裁、謹以申聞、謹奏聞、

承和七年八（〇一本作九）月廿三日（〇又見續日本後紀、而係九月二十日、）

〔三代實錄 三十二 陽成〕元慶元年十二月廿七日癸巳、大宰府言、以主工、主城、主船等品官、差年貢雜物使、太政官處分、依請焉、

〔伊呂波字類抄 登 官職〕統領（在大宰府）

〔延喜式 二十八 兵部〕凡大宰府統領者、待府銓擬補之、其遭喪復任者亦依府解、

〔享祿本類聚三代格 十八〕太政官符

應廢兵士置選士衛卒事

選士一千七百廿人（分爲四番、番別役卅日、年役□□十日、）

府四百人（先依官符置）

九國二嶋一千三百廿人

右得大宰府奏狀偁、兵士名備防禦、實是役夫、其窮困之體、令人憂煩、歷下嚴勅禁制他役、時代既久、忖

主船
主城

〔日本書紀 二十七 天智〕十年十一月癸卯、對馬國司、遣使於筑紫大宰府言、月生二日、沙門道文、筑紫君薩野馬、韓島勝娑々布師首磐四人、從唐來曰、唐國使人郭務悰等六百人、送使沙宅孫登等一千四百人、總合二千人乘船四十七隻、倶泊於比智島、相謂之曰、今吾輩人船數衆、忽然到彼、恐彼防人驚駭射戰、乃遣道文等、豫稍披陳來朝之意、

○按ズルニ、本文ニ據ルニ、當時已ニ本府ニ防人アリシモノナルベシ、

〔日本書紀 三十 持統〕三年二月丙申、詔、筑紫防人滿年限者替、

〔續日本紀 二十 孝謙〕天平寶字元年閏八月壬申、勅曰、大宰府防人、頃年差坂東諸國兵士發遣、由是路次之國皆苦供給、防人產業、亦難辨濟、自今已後、宜差西海道七國兵士合一千人充防人司、依式鎭戍、集府之日、便習五教、事具別式、

〔續日本紀 二十七 稱德〕天平神護二年四月壬辰、大宰府言、防賊戍邊、本資東國之軍、持衆宣威、非是筑紫之兵、今割筑前等六國兵士、以爲防人、以其所遺、分番上下、人非勇健、防守難濟、望請東國防人、依舊配戍、勅、修理陸奧城柵、多興東國力役、事須彼此通融各得其宜、今聞、東國防人、多留筑紫、宜加撿括、且以配戍、即隨其數、簡卻六國所點防人、具狀奏來、計其所欠、差點東人、以塡三千、斯乃東國勞輕、西邊兵足、

〔令義解 一 職員〕大宰府

防人正一人、〇中略令史一人、主船一人、掌修理舟檝、謂大工職掌云、舟檝此部匠新造者、故此司唯掌修理也、

〔類聚三代格 五〕太政官謹奏

廢品官一員

大。主。城。一員 正七位上官

右撿案內、依去弘仁十四年正月廿九日論奏、停主厨主船、始置主城二員、而今得大宰府解稱、自停主厨以來、例貢御贄幷諸供具事、觸類多闕、望請省主城置主厨、令各得其所者、伏望、省大主城永定

於職原抄、郎博士以下亦不錄、謂博士算師大唐通事等古任之、自中古其任輒絶、據此文、乃如主船主厨、已先博士等而廢可知矣、

〔唐律疏議擅興十六〕疏議曰、依軍防令、防人番代皆十月一日交代、如官司違限不遣、若準程稽違、不早遣者、一日杖一百、三日加一等、罪止徒二年郎代、

〔唐律疏議雜二十六〕諸丁匠在役、及防人在防、若官戶奴婢疾病、主司不為請給醫藥救療者笞四十、以故致死者徒一年、

疏議曰、丁匠在作役之所、防人在鎮守之處、若官戶奴婢在本司上者而有疾病、所管主司不為請、雖請而主醫藥官司不給、闕於救療者笞四十、以故致死者、謂不請給醫藥救療、以故致死者、各徒一年、

〔唐律疏議捕亡二十八〕諸防人向防、及在防未滿而亡者、鎮人亦同、一日杖八十、三日加一等、

疏議曰、防人向防、謂上道訖逃走、及在防年限未滿而亡者、鎮人亦同、一日杖八十、三日加一等、既無罪止之文、加至流三千里、亡日未到罪止、鎮防日已滿者、計應還之日、同在家亡法、累併為罪、

〔令義解考課四〕防人調習、戎裝充備、為防司之最、謂佑以上、

〔令義解軍防五〕凡兵士向京者名衛士、〇義解略、守邊者名防人、

凡兵士以上、皆造歷名簿、〇中略、某衛士防人還鄉之日、並免國內上番、〇義解略、衛士一年、防人三年、

凡防人向防、各賫私粮、自津發日、隨給公粮、

凡防人欲至所在官司預為部分、謂官司者、防人司也、預為部分者、防人未至之前、依舊差配、預為分日、送於大宰、防人至郎相替也、防人至後一日郎共舊人、分付交替使訖、謂主當之處、有器仗等類、故云分付也、守當之處、每季更代、使苦樂均平、謂營種之所亦同也、

〔日本書紀孝德二十五〕大化二年正月甲子朔、賀正禮畢、郎宣改新之詔曰、〇中略、其二曰、初修京師、置畿內國司郡司、關塞、斥候、防人、

三面帶海、諸蕃是待、而自罷東國防人、邊戍日以荒散、如不慮之表萬一有變、何以應卒、何以示威、不安二也、管內防人、一停作城、勤赴武藝、習其戰陳、而大貳吉備朝臣眞備論曰、且耕且戰、古人稱善、乞五十日敎習而十日役于築城、所請雖可行、府僚或不同、不安三也、天平四年八月廿二日有勅、所有兵士、全免調庸、其白丁者、免調輸庸、當時民息兵强、可謂邊鎭、今管內百姓乏絕者衆、不有優復、無以自贍、不安四也、勅、船者宜給公糧、以雜徭造、東國防人者衆議不允、仍不依請、管內防人十日役者、依眞備之議、優復者政得其理、民自富强、宜勉所職以副朝委、

戎具

〔續日本紀 二 文武〕大寶二年二月己未、歌斐國獻梓弓五百張以充大宰府、　三月甲午、信濃國獻梓弓一千二十張以充大宰府、

〔續日本紀 二十三 淳仁〕天平寶字五年七月甲申、西海道巡察使式部少輔從五位下紀朝臣牛養等言、戎器之設、諸國所同、今西海諸國、不造年料器仗、既曰邊要、當備不虞、於是仰筑前、筑後、肥前、肥後、豐前、豐後、日向等國、造備甲刀弓箭、各有數、每年送其樣於大宰府、

〔續日本紀 四十 桓武〕延曆九年四月辛丑、仰大宰府、令造鐵冑二千九百餘枚、

〔續日本後紀 四 仁明〕承和二年三月丁巳、仰大宰府綿甲一百領、冑一百口、袴四百腰、充遣唐船不虞之備、

〔三代實錄 十七 淸和〕貞觀十二年正月十五日戊辰、勅命大宰府、遷置甲冑百十具於鴻臚館、

防人司

〔令義解 一 職員〕大宰府

防人正一人、（掌防人名帳、戎具、敎閱、及食料田事、）佑一人、（掌同正、）

〔職官志 五〕據此文、○延喜民部式文、不見防人司、但存主船主厨、則司已廢、而二官直隸于府歟、類聚三代格天長二年五月定大宰府明法博士爲從七位下官、時其府解云、去延曆十八年所初置、又弘仁四年九月以新羅船到對馬、而語言不通、疑及相害、省其史生一員、置新羅譯語、其餘未詳置何世、自王綱之弛、而諸官日忘職、相尋就廢、百官略備、僅載博士醫師主船主厨大唐通事、而主工陰陽師不及焉、而

元年三月十一日ニアリテ、天仁元年ハ正ニ第二回ノ補任ヨリ三年ニ當レリ、是ヨリ前第一回（幡宮）
就任ノ時ハ親シク任地ニ下リシモノト見エテ、康和二年八月安樂寺ニ詣ヅルノ詩アレド
（ノ條ニ引ケリ）第二回ニハ赴任セザリシナラン、

警固

〔三代實錄十二清和〕貞觀八年四月十七日辛卯、下知大宰府曰、迺者京師頻視佐異、陰陽寮言、隣國兵可來窺、安不忘危、宜勤警固、　五月廿一日甲子、唐人任仲元非有過所、輙入京城、令加譴詰逐大宰府、重下知長門大宰府、嚴關門之禁焉、

〔三代實錄十六清和〕貞觀十一年六月十五日辛丑、大宰府言、去月廿二日夜、新羅海賊乘艦二艘、來博多津、掠奪豐前國年貢絹綿、卽時逃竄、發兵追、遂不獲賊、　七月二日戊午、是日勅譴責大宰府司、

〔三代實錄三十四陽成〕元慶二年七月十三日丙午、詔令大宰權少貳從五位下藤原朝臣仲直攝行警固事、

〔三代實錄三十五陽成〕元慶三年正月十五日乙巳、勅遣從五位上守左近衞權少將兼行大宰少貳藤原朝臣房雄於大宰府、警固之事、准坂上大宿禰瀧守例、令左近衞五人右近衞三人隨身、並乘傳而發焉、

〔三代實錄三十七陽成〕元慶四年六月七日己丑、從四位上行大宰大貳安倍朝臣貞行、詣闕辭見、賜御衣一襲、〇中略勅曰、前令大宰少貳藤原朝臣房雄行警固事、今房雄遷任肥後守、無人勾當、更致解體、其器仗烽候、是長官之職、然則警固有例、何必別配勾當、宜停少貳勾當、府司隨宜處置、

城堡

〔續日本紀文武〕二年五月甲申、令大宰府繕治大野基肄鞠智三城、　三年十二月甲申、令大宰府修三野稻積二城、

烽火

〔延喜式二十八兵部〕凡大宰所部國放烽者、明知使船不問客主舉烽一炬、若知賊者放兩炬、二百艘已上放三炬、

兵船

〔續日本紀二十二淳仁〕天平寶字三年三月庚寅、大宰府言、府官所見方有不安者四、據警固式、於博多大津及壹岐對馬等要害之處、可置船一百隻以上、以備不虞、而今無船可用、交闕機要、不安一也、大宰府者、

停任

不赴任

正三位行大貳藤原朝臣惟憲

右右大臣宣、奉勅、件人宜遣召者、府宜承知、給食貳拾具、馬貳拾疋進上、路次之國、亦宜准此、符到奉行、

造大安寺長官正四位下行右大辨兼內藏頭中宮亮源朝臣　正五位下行左大史兼主計助小槻宿禰、

長元二年五月四日

○按ズルニ、公卿補任ニ據ルニ、藤原國章ハ、天元四年ノ下ニハ大宰大貳ト註シテ、翌五年ノ條ニハ其事ナク、藤原惟憲モ、長元二年ノ下ニハ大宰大貳ト註シテ、翌三年ノ條ニハ其事ナク、藤原佐理ハ、長德元年十月十八日大貳ヲ止ムル事見エタレバ、右ハ何レモ任終リテ還京スルモノナリ、

〔扶桑略記〕二十七一條 長保六年〇寬弘元年 十二月廿八日丁亥、大宰帥平朝臣惟仲停任、去四月廿八日、宇佐宮司氏人等參上、愁訴帥平惟仲令封宇佐宮寶殿事等、仍遣推問使、事既審實、由之被解職也、其替左兵衛督藤原高遠任大貳、

〔三代實錄〕五十光孝 仁和三年六月八日庚戌、從四位下行信濃守橘朝臣良基卒、良基者左京人、參議從四位下常主孫、而攝津守安吉雄之子也、〇中略 天安之初、大宰大貳正躬王、妙選僚属、請良基及巨勢夏井爲少監、良基以非其好、稱々不得志、不肯之任、文德天皇發盛怒、解却其官、

〔中右記〕嘉承三年〇天仁元年 七月廿三日、大宰府解狀十餘通被僉議、但帥匡房卿、此三ヶ年不下向間、府內相亂或放火、或殺害、如此濫惡、不可勝計、仍議定之處、早被催帥卿下向、可令沙汰件濫行之由、人々被申也、凡帥卿所爲、已不穩便事歟、受領猶遲下向時、被追下例也、何況於宰府帥大貳乎、一任之間、不下向、暗企執申、誠忘朝憲、可謂奇怪歟、

○按ズルニ、大江匡房大宰權帥ニ任ゼラルヽハ、第一回ハ承德元年三月ニアリ、第二回ハ嘉承

去任之京

保安四年十二月廿七日　從三位行修理大夫兼都督藤原朝臣長實〇大貳

〔類聚符宣抄八〕太政官符、大宰府、

召前大貳從四位上勳六等朝野宿禰鹿取

右被右大臣宣偁、奉勅、宜召遣者、府宜承知、充馬十二疋、夫十二人、食十二具、令得入京、路次之國、亦宜准此、符到奉行、

從五位上守左少辨勳七等伴宿禰氏上　　右大史正六位上出雲宿禰全嗣

天長十年正月廿二日

太政官符、大宰府、

從三位行大貳藤原朝臣國章

右左大臣宣、奉勅、件人宜遣召者、府宜承知、給食廿具、馬廿疋進上、路次之國、亦宜准此、符到奉行、

右少辨正五位下藤原朝臣懷遠　　從五位上行左大史大春日朝臣良辰

天元四年三月廿二日

太政官符、大宰府、

前大貳正三位行皇后宮權大夫藤原朝臣佐理

右右大臣宣、奉勅、件人宜遣召者、府宜承知、給食廿具、馬廿疋進上、路次之國、亦宜准此、符到奉行、

參議正四位下行右大辨兼中宮權大夫美作守源朝臣扶　　正五位下行左大史兼和泉守多米朝臣國平

長德元年十月廿五日

太政官符、大宰府、

六とせにぞ君はきまさん住吉のまつべき身こそいたく老ぬれ　津守國基

〔玄玄集〕有國卿大貳　任はて丶京にのぼるとき、香椎社にて、

五とせはまるしの杉につかへてき今年は梅の花のみやこへ

着任

〔小右記〕寛弘二年七月十日丙辰、大貳高遠〇去月十六日書、今日到來云、六月十四日巳剋着二水城一、請二取印鎰一、午剋着二府廳宿所一、先令レ事レ行二任符一之後、着二廳座一、定二神寶行事官人一幷請二取諸司鎰等一、自餘事不レ遑レ記事、

〔金葉和歌集九雜〕隆家卿、大宰帥に二たびなりて後のたび香椎御社にまいりたりけるに、神主ことのもとと杉の葉をおりて、帥のかうぶりにさすとてよめる、　神主大膳武忠

千はやぶるかしゐの宮の杉のはを二たびかざすわが君ぞきみ

府宣

〔朝野群載二十大宰府〕帥大貳最初府宣

大府宣　大宰府在廳官人等

仰下　三箇條事

一神寶勤文事

右任二代々例一、可レ勤二進之一、

一可レ勤二行神事一、

右任二恒例一、殊可レ致二謹愼之勤一矣、

一可レ修二造官舍一、

右都府之例、爲レ先二官舍一矣、官舍之要、既在二修造一、宜下二知諸國司等一、早任二恒例一、令レ致二修造之勤一矣、

以二前條事一、所レ宣如レ件、在廳官人等、宜レ承知將以行レ之、以宣、

任限

於中宮御方有餞、次帥參左府、又有餞事、又皇太后宮有餞云々、三箇所事不見、左府和歌間歸參於內、又中宮餞間參左府、仍所不見者、〇中略入夜帥納言立過、只暫清談退去、問昨餞事、公家如賓平談、皇太后宮裝束、扇二十枚、置大明濱、中宮女裝束、左相府裝束、砂金五十兩納銀水角、馬三匹、一匹置螺鈿鞍、

〔文德實錄七〕齊衡二年五月癸丑、大宰大貳正躬王將赴任、詣闕拜辭、殊賜恩餞、絲竹間奏、

〔日本紀略三村上〕天曆元年正月九日乙未、公家餞大宰大貳小野好古赴任、

〔金葉和歌集六別離〕こげまさ帥になりてくだり侍るに、人々むまのはなむけし侍りける時よめる、

堀河右大臣

かへるべき旅の別となぐさむること、ろにたがふなみだなりけり

〔類聚三代格五〕太政官謹奏

加增府官及管內諸國司相替年限事

右筑紫大宰遠居邊要、常警不虞、兼待蕃客、所有執掌殊異諸道、而官人相替限以四年、送故迎新相望道路、府國困弊職此之由、加以所給厨物、其數過多、每守舊例、充給或闕、蕃客之儲、於事商量、甚不穩便、臣等望請、且停交替料、兼官人歷任增爲五年、然則百姓有息肩之娛、庖厨無懸罄之乏、謹具錄狀伏聽天裁、謹以申聞、謹奏聞、

寶龜十一年八月廿八日〇又見續日本紀、令義解、

〔日本後紀十七平城〕大同三年六月己未、增大宰府幷管內諸國官人歷、以爲五年、停賜交替料、〇又見日本紀略、令集解二十八、

〔延喜式十八式部〕凡諸國非業博士、醫師、以四年爲秩限、但出羽大宰管內諸國五年爲限、

〔詞花和歌集六別〕大納言經信、大宰帥にてくだりけるに、かはじりにまかりあひてよめる、

獻、納言出自殿上執之、五位執瓶子、放盡後經實子敷復座、次三獻次公卿執瓶子同上、之、次主上目給、或三獻以前被仰、延久三年例也、納言稱唯、音微、經實子敷、自第四間入候長押下逼南柱下、勅語云云、隨時不同、多是可愼不虞、與復管內、隨勤可賞由歟、或此次有恩賞、被敍一階云云、納言復座、目帥、帥頽膝行進、即傳示勅語、畢、次藏人頭執祿物給之、御半臂、下襲、表御袴、內藏寮白大褂一領也、或加給御袙、或加給麴塵御衣、皇國人有殊常之恩歟、其路入自鬼間障子、經母屋第二間庇第一間、出御屛風北妻、自帥後方下孫庇轉頭、自殿上退出、次大貳下殿徒跣拜舞、其路下自長押四第一間、經長橋中東行、經同東井石階進出、於河竹臺東北去臺五尺許舞踏、但於仙華門邊唯留御半臂於頸、留自餘御衣等子族取之、此間引御馬、近衞府生一人引御馬入自瀧口戶、當吳竹臺西南悄留立、引返之後、給大貳傔若有從共人、永保二年例、御馬一疋以府生爲傳、不可然歟、大貳拜畢、自仙華門退出、於仙華門外著履、自月華門退出、

御物忌時例

天祿三年源國光朝臣、於弓場殿被餞、以右近陣臺盤兩三脚立、召掃部寮帖敷之、東上對座、大貳南頭以下北、內藏辨備酒肴、自披陣下、主殿司幷小舍人役送、侍臣一兩巡以勸杯、兩三巡後、藏人違度應召參御前、取御衣一襲、青色御衣御半臂、下襲表袴、向弓場傳宣綸旨、次賜御衣、國光朝臣即從座下於東庭拜舞退出、弓場殿座前北、

〔朝野群載二十大宰府〕帥大貳初任時申請雜事

權帥源基綱卿申廿一箇條奏狀　永久四年月日

今案、前代之都督、或申請十九箇條、而前大貳顯季卿之時、始申請廿一箇條也、

〔小右記〕長和四年四月廿二日辛未、資平中略今朝來云、中略去夕帥中納言隆家令奏赴任之由、藏人頭兼綱奏殿上卿設酒肴、主上出御晝御座、兼綱召上達部、大納言賴通、中納言俊賢、參議道方、朝經、候御前、預敷疊次召帥、預鋪菅圓座次給衡重、先帥一獻勸盃兼綱、勸帥二獻大納言、巡行了後近召賴通、被傳仰帥云云、其後藏人頭資平執祿、御下襲袙表御袴幷白褂出自母屋御障子給云、此間給御馬、左寮御馬匠二人牽之、左相府定、帥進御前拜舞、卿相從御前退出、覺候殿上、資平奉勅傳仰、權大納言以正二位階可加帥納言之由、帥即以資平令奏慶賀、件事左府所被定申也、於御前便可被仰者、而思食忘、退所被仰也、殊給砂金百兩於帥、只被仰藏人

間數疊西面北上、侍臣給肴、公卿侍臣遞行酒、五六巡之後、令中將元輔給御衣云々、〇中略

同日、〇天慶五年閏三月十九日參議大宰大貳清平朝臣令奏赴任之由、右大將藤原朝臣依召參上、候御前、次清平朝臣依召同候御前、藤原朝臣奉仰傳仰清平朝臣、次賜酒肴云云、藏人頭相職朝臣奉仰追身屋南一間障子取御衣賜之、清平下殿出御前、拜舞出、

延喜五年八月一日、帥友于朝臣令奏赴府狀、仰聽昇殿、又召殿上、左大臣奉勅宣云々、給酒祿云々、御裝束一襲、掛一領、

天曆八年九月九日、大貳元名朝臣令申赴任之由、召御前、參上南廊小板敷、令大納言藤原朝臣傳仰旨、次給御掛一重、支子染襖、依心喪之間給喪衣、元名拜舞退、

天德四年九月廿八日、大貳好古朝臣申赴任之由、即召東庇侍所、令延光朝臣仰之云々、依旅所不召御前給祿云々、

〔江家次第 二十〕帥若大貳赴任事此次第可在他卷歟、依公事也、

定其日觸頭藏人、藏人奉仰催近習公卿兩三人許、或一人或四人、先例不定、但近例多三人之內、納言一人必可召之、帥之上臈可宜、當日殿上臺盤居酒肴、不居小臺盤、無飯、是內藏寮所儲耳、孫庇南第一二間鋪緣端帖二枚、爲垣下公卿座、帥裝束或服中之後依勅奉仕之云云、同座西長押下中央鋪圓座一枚、爲帥若大貳座、帥者鋪第二間、或當第二柱、大貳鋪第一間、非參議大貳者、雖可候長押下、猶庇第一間南退鋪之、佐忠經平等時例也、但元名朝臣候南廊小板敷云云、若臨暗者、御座左右幷公卿座上立燈臺、長元七年記、立公卿座上下云云、垣下公卿等參入候殿上、帥參入、未昇殿之人、先是被聽之、於無名門外付頭若五位藏人令奏其日赴任由、被仰暫可候殿上由、帥暫候殿上、夏暮登自小板敷待召、間居小臺盤前、可尋之、此間往年有盃酌、近例殊不見、主上出御御直衣、召人頭參入、先藏人候小板敷、奉仰出殿上召公卿幷帥、此事先例不定、或先召帥勅語後復座、次召公卿、或先召公卿、次又召帥、或一度被仰可參入由、或曰、帥者先召、被仰勅語參入、大貳者後召、令納言傳仰勅語云云、此說雖以有所據、先例又不定歟、康保三年非參議大貳佐忠先被召之故也、公卿經簀子着座、帥自廣廂南方着座、先居年中行事障子下、後進、若疑先勅語之由歟、殿上五位居衝重、先帥前居座北、次公卿前居四並、昇自庇南方役之、不經簀子敷、次一獻藏人頭勸盃、六位藏人執瓶子、諸卿初、帥南勸之、或五位執瓶子擬垣下公卿、於次二

交替赴任賜祿

將謫愚之身、謬居都督之任、名非楊公、獨隔關西之衆、賂異李將、難振隴頭之威、慙懼之懷、且又春然之間、任秩已滿、病痾相侵、不如辭西海、以訪上地之方、向蓬宮以抽棘路之節、伏望玄鑒、曲照丹祈、停卅九縣管攝之職、授彼群賢入跡之人、不耐懇欵屏營之至、謹陳讓以聞、某誠惶誠恐頓首頓首死罪謹言、

天喜二年十一月日　參議正三位行大宰大貳臣源朝臣資通上狀

〔中右記〕天永二年正月廿三日丙戌、修理大夫顯季兼任大貳事、又如何、出納諸司長官兼大貳、頗不穩便歟、但故良基相公任大貳日、兼春宮權大夫、若彼例歟、然而頗不似此例歟、

〔詞花和歌集別六〕修理大夫顯季、大宰大貳にてくだらんとし侍けるに、馬にぐしてつかはしける、

權僧正永縁

立別はるかにいきの松なれば戀しかるべき千世のかげかな

〔神皇正統記後白河〕保元の賞には、義朝、左馬頭に轉じ、清盛大宰大貳。。。に任ず、此外受領撿非違使になれるもあり、此時にやすでにみだりがはしきはじめと成にけり、

〔武藤系圖〕資頼號筑後守、法名覺佛、窮弓箭之奥儀(中略)建久二年被充賜大宰府守護、岩門少貳、種直跡三千七百町拜領了、嘉祿元年宇佐八幡宮依遷宮任大宰少貳、

資能號前少貳、豐前守、法名覺惠、　經資號大宰少貳、法名淨惠、　盛經大宰少貳、筑後守、於鎌倉御隱、

〔西宮記臨時八〕大宰帥大貳赴任事

藏人奏聞、依仰召御前、自青璅門參上、給祿酒、給御衣一襲、諸卿參上、勸盃、諸卿座西面、孫庇南三間、帥大貳座北面、官座圖、給祿後下拜舞、出自仙華門、或別召之、有勅語、

延喜二年十八、大貳與範朝臣申罷由、於射殿賜酒盃、頭菅根朝臣、依仰召自青璅門參上、勅語之後賜御衣幷掛、拜舞退出、

延喜七十一四、大宰府言上、帥友于朝臣任符不注分付字、依請、

康保三年十月廿日大貳佐忠申赴任之由、召前仰云々、畢仰卿座、東又庇南一間、書圖座、一又令召公卿座一間前、南一二、

〔公卿補任 三條〕長和三年甲寅

中納言從二位藤隆家 按察使、十一月日兼二大宰權帥一、

〔公卿補任 後朱雀〕長曆二年戊寅

前中納言正二位藤隆家 月日兼二大宰權帥一、補任次第云、長曆三年十月兼任之云々、

〔大鏡 六 內大臣道隆〕此中納言〇藤原隆家、中略、御目のそこなはれ給ひにしこそ、いと／＼あたらしかりしか、よろづにつくろはせ給ひしかども、やませ給ひて御まじらひたえ給へるころ、大貳の闕いできて、人々のぞみのゝしりしに、唐人の目つくろふがあるなるにみせんとおぼして、こゝろみにならばやと申給ひければ、三條院の御時にて、又いとをしくもやおぼしめしけん、ふたことゝなくならせ給ひてしぞかし、〇中略、政よくし給ふとて、筑紫人さながらしたがひ申たりけり、例の大貳十年がほどにてのぼり給へりとこそ申しか、彼國におはしましゝ程、刀夷國のもの、俄にこの國をうちとらんとや思ひけん、こえきたりけるに、筑紫にはかねての用意もなくて、大貳殿弓矢の本すゑをもしり給はねば、いかゞとおぼしけれど、やまとごゝろかしこくおはする人にて、筑後肥前肥後九國の人をおこさせ給ふをば、さることにて、府の內につかうまつる人をさへをしとりて、たゝかはしめ給ひければ、かやつが方のものどもいとおほくしにけるに、さはいへど家たかくおはしますけに、いみじかりし事、たひらげ給へりし殿ぞかし、

〇按ズルニ、本文ニ藤原隆家ヲ大宰大貳トスレド、權帥ノ誤ナリ、

〔公卿補任 後冷泉〕永承五年庚寅

參議從三位源資通 中略、九月十七日任二大宰大貳一、去二右大辨一、

〔朝野群載 七 公家〕請レ罷二大宰大貳職一狀 藤明衡作

右大宰大貳者、文武兼備、智謀克諧之者、殊當二朝選一所二拜除一也、所三以地近二異域一、俗接二遠戎一、故欵、爰資通猥

〔標注職原抄下本〕承和嘉祥の比より、正帥は親王のみの官となれり、故に權帥下國して府務を掌れり、但まれ〳〵には人臣を以て正帥になして、府務を掌らしむる事もなきにあらず、或又任ν正依ニ時宜一歟とはこれをいふなり、

○按ズルニ、專ラ親王ヲ以テ正帥ニ任ズルニ至リシハ、弘仁十四年、葛原親王ノ例ヲ以テ初トス、サルハ其後府ノ一秩五年ヲ經テ、天長五年正月己巳、三品萬多親王ヲ帥ニ任ジ、後二年ヲ經テ、七年八月乙巳、四品仲野親王ヲ帥ニ任ゼシコト、日本紀略ニ見エ、後又五年ヲ經テ、仁明天皇承和二年正月丁巳、三品秀良親王ヲ帥ニ任ゼシコト、續日本後紀ニ見エタレバナリ、承和二年以後ニモ仍ホ親王ヲ以テ帥ニ任ゼシコトハ、標注職原抄ニ云フ所ノ如シ、又人臣ヲ以テ正帥ニ任ゼシ例ハ、一條天皇長保三年正月二十四日、中納言平惟仲ヲ以テ兼任セシメタル外、史ニ所見ナシ、

〔續日本紀十六聖武〕天平十七年六月辛卯、復ニ置大宰府一、以ニ從四位下石川朝臣加美一爲ニ大貳一、從五位上多治比眞人牛養外從五位下大伴宿禰三中並爲ニ少貳一、

〔百錬抄四一條〕長德元年十月十八日、停ニ大宰大貳佐理一、以ニ藤原有國一任ν之、依ニ宇佐宮訴一、遣ニ推問使一之處、無ニ辨申旨一故也、

〔榮花物語五浦々の別〕内大臣○藤原伊周、中略、いまはつくしにおはしつくきはに、そのおりの大貳は有國朝臣なり、かくと聞て御まうけいみじうつかうまつる、中略、御せうそこ、我子のよしなりして申させたり、思がけぬかたにおはしましたるに、京のこともおぼつかなくおどろきながら參りさぶらふべきに、九國の守にてさぶらふ身なれば、さすがに思のさまにえまかりありかぬになむ今まで聞えぬ、中略、さま〳〵のものどもひつどもにかずしらず參らせたれど、これにつけても、すゞろはしくおぼされて、きゝすぐさせ給ふ、

之、中古以來斷絕、仍略之、

〔大槐秘抄〕帥大貳に武勇の人なりぬれば、かならず異國おこると申候けり、小野好古が大貳の時、隆家が帥の時、とり分て異國の人おこりて候なり、かれらはたゞわが心どもの武をこのみけるに候、今平清盛大貳にまかりなりて候、いかゞと思ひ給ふるに、高麗に事ありと聞候、高麗は神功皇后のみづから行むかひてうちとらせ給たるくに丶候、千よ年にや成候ぬらむ、

〔續日本紀三文武〕慶雲二年十一月甲辰、以大納言從三位大伴宿禰安麻呂、爲兼大宰帥、

〔公卿補任文武〕慶雲二年乙巳

大納言從三位大伴宿禰安麿八月一日任、十一月十四日兼大宰帥、

〔續日本紀三十稱德〕寶龜元年八月辛亥、參議從三位兵部卿兼造法華寺長官藤原朝臣宿奈麻呂爲大宰帥、

〔萬葉集十七〕天平二年庚午冬十一月、大宰帥大伴卿被任大納言兼帥如舊、上京之時、陪從人等、別取海路入京、於是悲傷羇旅、各陳所心作歌十首、

和我勢兒乎、安我松原欲、見度婆、安麻乎等女登母、多麻藻可流美由、

右一首、三野連石守作、

〔續日本紀十六聖武〕天平十八年四月丙戌、以左大臣從一位橘宿禰諸兄、爲兼大宰帥、

○按ズルニ、大臣ヲ以テ大宰帥ヲ兼ヌルモノ前後其例ナシ、而シテコハ遙任ナリ、

〔日本紀略嵯峨〕弘仁三年正月丙寅、是日任官式部卿三品葛原親王爲兼大宰帥、

〔公卿補任嵯峨〕弘仁十一年庚子

參議從四位下多治比今麿十二月從三位、任大宰帥、

〔日本紀略淳和〕弘仁十四年九月己卯、二品葛原親王、爲中務卿兼大宰帥、

補任

他堺、撿察其由、率緣迎送無息、不得順私、望請西海道五位已上、自今以後、自非秩滿解任者、不聽輒入京者、右大臣宣、奉勅依請、

大同元年六月一日

〔中右記〕寛治八年（○嘉保元年）六月九日、今日有陣定、前大貳長房卿入洛之間、少貳未被成、而印鎰何人分付哉、而可有否事、已會赦者、

〔官職秘抄 下〕大宰府　帥　親王任之　權帥　大中納言任之、以經大辨爲最、北山抄云、爲替親王爲大宰帥正、惟仲帥之時、以彼親王任他官、此事無謂、可任權帥也、何以正帥任他官哉、　大貳（無權官）　參議散三位任之、其中以大辨爲最、或四位殿上人之中、御侍讀、合格良吏任之、但故人難之云々、權帥在任之時不任之、權帥大貳間一人爲吏務故也、　少貳（無權官）　管國受領中選人任之、或別任之、　監（大少）　典（大少）　已上依帥大貳請任之、或臨時內給、

〔職原抄 下〕大宰府（帶筑前國、唐名大都督府、）　聖武天皇天平十五年始置筑紫鎭西府、先是有大宰府號云々、天平寶字二年勅諸國司以四箇年爲任限、寶龜十一年勅大宰任限、爲五箇年云々、凡當府都管九國二島、別帶筑前也、

帥（唐名都督、相當從三位）　勅任官也、多是以有品親王任之、親王任之者、權帥若大貳知府務而已、　權帥　納言以上（若前官）　任之、中古以來例、於正帥者、擬親王官、承府務人任權也、或又任正、依時宜歟、爲大臣之人左遷之時任權帥、然而不可知府務也、凡於帥者令條所定、已爲高官、仍重其仁、雖華族又任之、　大貳（無權官、唐名都督大卿、相當從四位下）　近代例多以參議散二三位等任之、非參議四位、又有其例、有權帥者、不任大貳、任大貳者、不任權帥、雖無其謂、已爲流例、多是以名家人任之、　少貳（有權官、唐名都督少卿、相當從五位下）　殊撰其人任之、　監（大相當正六位下、少相當從六位上、唐名都督郎中）　六位侍任之、　典（大相當正七位上、少相當正八位上、唐名都督錄事）　監典者、公卿給時、間雖請任之、多是府中有緣之輩任之、稱府官是也、此外博士筭師、大唐通事等上古任

考課

戒防

十七日下傳使大宰大監正六位上阿部朝臣子島、將從三人、合四人、四日食稻五束二把、酒四升、鹽三合二勺、

同日下船傳防人部領使大宰少判事從七位下錦部連定麿、將從二人、合三人、四日食稻四束、酒四升、鹽二合四勺、〇中略

七月廿四日下傳使大宰故大貳從四位下小野朝臣骨送使、對馬島史生從八位下白氏子虫、將從三人、合四人、四日食稻五束二把、酒三升二合、鹽三合二勺、

閏七月五日向京從大宰府進上銅竈部領使筑前國樣從六位上建部君豐足、將從三人、合四人、往來八日、食稻十束四把、酒八升、鹽六合四勺、

十六日向京從大宰府進上法華經部領使大典從六位上椿原造東人、將從三人、合四人、四日食稻五束二把、酒四升、鹽三合二勺、

八月廿九日下傳使周防國史生正八位下赤染麻呂、將從二人、合三人、三日食稻三束、酒二升四合、鹽一合八勺、

九月二日下船傳使大宰史生正八位下出雲臣君麻呂、將從二人、合三人、四日食稻四束、酒三升二合、鹽二合四勺、〇中略

十月四日向京從大宰進上御鷹部領使筑後國介從六位上日下部宿禰古麻呂、將從三人、持鷹廿人、合廿四人、往來八日、食稻七十四束四把、酒一斛三斗六升、鹽三升八合四勺、御犬壹拾頭、食稻捌束、

六日下傳使大宰史生從八位上川邊朝臣白足、將從三人、合四人、四日食稻五束二把、酒三升二合、鹽三合二勺、〇中略

十月廿一日下船傳使大宰史生大初位下檜前舍人連馬養、將從二人、合三人、四日食稻四束、酒三升二合、鹽二合四勺、〇中略

十一月三日從大宰府向京傳使僧法義、童子三人、合四人、四日食稻五束二把、酒四升、鹽三合二勺、

十五日下傳使大宰少典從七位上朝明史老人、將從三人、合四人、四日食稻五束二把、酒四升、鹽三合二勺、

十九日向京大宰故大貳正四位下紀朝臣骨送使音博士大初位上山背連靺鞨、將從十九人、合廿人、四日食稻廿四束四把、酒四升、鹽一升六合、

〔令義解 四考課〕禮儀興行、戎具充備、謂、此唯爲大宰府及筑前國、其管內諸國者非也、爲大宰之最、謂、少貳以上、

〔續日本紀 十二聖武〕天平八年五月丙申、先是有勅、〇中略府官人者、〇中略一任之內不得交關所部、但買衣食者聽之、

〔類聚三代格 七〕太政官符

禁制大宰府少貳已上及所管五位已上就使入京事

右得山陽道觀察使正四位下藤原朝臣園人解偁、西海道年中上都雜使、其數繁多、而此道疲弊殊於

奏神事

諸使

對馬、曰三島、〇註略夫多褹特在南海中、隣薩摩大隅、而南控掖玖、〇註略度感、〇註略奄美、〇註略信覺、〇註略玖美〇註略之諸島、輸方物、掖玖卽今之所謂琉球國也、〇註略始來貢于我、自推古之世、〇註略而多褹卽其舶之所由也、多褹人亦尋自天武之世、而來屬于我、〇註略故朝廷遣使於多褹、取地圖、〇註略乃南島如奄美度感、厥後相尋並來貢、〇註略然多褹以大寶二年、與薩摩隼人等方王命、隔南海之化、乃遣兵伐而平之、遂校戶置吏、及和銅、而南海諸島無不咸服、〇註略故天平七年、大宰大貳小野老遣高階牛養於南島、而立牌焉、以表地里矣、自天平勝寶六年、詔大宰府、重修建其牌、而南島從此不復書於史、蓋不納其人於京師、直令受其貢于府廷、〇註略故略其文也、延喜式大宰府別貢、有南島方物、不知是時而有定制歟、意多褹其與南島之事不復如其舊、且人乏兵寡、調物亦少、天長元年、以故罷島司、併四郡爲二、以隸之於大隅國、

〔續日本紀二文武〕大寶二年三月丁酉、聽大宰府專銓擬所部國掾已下及郡司等、

〔續日本紀十一聖武〕天平三年十二月乙酉、令大宰府始補壹岐對馬醫師、

〔文德實錄九〕天安元年十一月戊戌、右京大夫兼加賀守正四位下藤原朝臣衞卒、〇中略九年〇承和春正月遷爲大宰大貳、〇中略先是所管九國二島醫師博士、總府所自任也、名實不副、天俸有費、因上奏云、博士執經授業之職、醫師合藥療治之最也、雖道自有優劣、然事非無緩急、何者一夕之命、得方則存其生理、百年之身、失術則墜其天年、彼飛島之茸草、流香之反魂、言於世路、是甚急者、而今府所任選醫師等、未必其人、假名居位、五藥非其和、十療無一驗、遂使病門失望、豈是皇度本意乎、請至件一色、殊依朝選書奏、時議容之、自此始擢典藥生受業練道者、以爲彼管內醫師、

〔延喜式五十雜式〕凡大宰府應奏神事者、帥獨署、若帥有故者、少貳以上一人署奏、

〔東大寺正倉院文書三十五〕周防國天平十年正稅帳

六月十五日下船傳防人部領使大宰史生從八位上中臣東人、從一人、合二人、四日食稻二束八把、酒三升二合、鹽一合六勺、

使部

〔三代實錄清和二十二〕貞觀十四年十月廿六日癸亥、勅、大宰府檢貢綿、以穢惡特甚、宜降新典更肅將來、仍須其穢惡絹百疋及綿萬屯滿、彼府藏司別、并使、監、典、並解却見任、

〔延喜式民部二十三〕凡大宰府充仕丁者、〇中略藏司二人、〇中略藥司一人、匠司一人、

〔類聚三代格五〕太政官符

應選白丁補大宰府使部事

右撿案內、太政官去寶龜四年八月十六日符偁、大宰府使部自今以後宜取外散位補之、若有不堪驅使者、選用白丁、不得過廿人者、今被大納言從三位神王宣偁、奉勅、改前員定卅人、

延曆十六年四月十三日

職掌管國

〔類聚三代格七〕太政官符

應徵責管內國司不隨府召事

右得大宰府解偁、承前之例、諸國司等、能守管攝之理、深畏府司之威、就事徵召、應響參赴、而頃年國宰疎慢殊甚、違命者衆、應召者寡、或娵出國境、廻避不來、或雖到府頭、拒捍徒歸、彌有積習、竹无悛悔、庶政稽擁、莫不由斯、非設條例、何以懲肅、望請如斯之輩、若遣使撿察、事迹分明者、五位已上奪其位祿、六位已下沒其公廨三分之一、然則府司之威風更起、國吏之政浪自休、謹請處分者、右大臣宣、奉勅依請、但奪人俸祿事何容易、宜勤實覈莫致虛誣、

齊衡二年二月十七日

〔名目抄諸公事官職〕管國クワンコク西海道ヲ云歟

〔職原抄下〕諸國

西海道十一箇國、然而云九國二島、〇中略　筑前上　雖爲部督所帶、守已下官如例、

〔職官志五〕大宰府　且聞之、府之所管者、古有多褹之島焉、〇略註　置島司、以領四郡、〇略註　並稱於壹岐

屬兼之、至于遷宛改任他屬、事頻移變、政且擁滯、宜助以下、竿師以上之中、撰選其人、永令兼任、

昌泰元年十二月廿一日

史生

〔令義解一職員〕大宰府　史生廿人

〔續日本紀三文武〕大寶三年二月癸卯、大宰史生更加十員、

府掌

〔延喜式二十二民部〕凡陸奧鎭守大宰等府、府掌各二人、每人給職田二町、

書生

〔延喜式十八式部〕凡大宰府書生帶郡司者、莫責同門一從、

〔類聚三代格八〕大政官符

應給府使部書生等借貸稻事

右得大宰府解偁、撿例帳偁、直府使部二百人散仕一百人、四月上旬使部九十許人、書生十許人、量其官仕、分爲三等、正稅稻給借貸、人別五百束以下、百束以上者、府准例給之、其來尙矣、今加覆審、借貸官物、非法所聽、覺擧停止、但件使部書生等、不顧產業、遠直府下、頗賜貸借、濟其家途、雖然務劇賞薄、進少退多、今依法意、已從停止、人望已絕、物情難勸、望請依舊貸賜者、右大臣宣、奉勅依請、

大同二年正月十三日

藏司　藥司　匠司

〔類聚三代格八〕太政官符

應責大宰府貢物麁惡事○中略

又聞管內浮浪之輩、或屬府司、上交易之直、或賂國宰、輸調庸之物、實非土民營設之實、利歸浮手姧僞之徒、濫穢所以難遏、麁惡由其彌倍、不督之愆、雖歸府國、容隱之責、專在藏司、右大臣宣、奉勅、有法不行、何期懲革、宜降霜典、更肅將來、仍須麁惡之物絹及一百疋、綿滿一萬屯、藏司勾當、監典幷使等解却見任、不曾寬宥、自餘雜事、一如前格、

貞觀十三年八月十日

應永三十三年三月廿九日

書了、如元置筆、

主神

〔續日本紀 三十 稱德〕神護景雲三年九月己丑、始大宰主神習宜阿曾麻呂希旨、方媚事道鏡、因矯八幡神敎、言、令道鏡卽皇位、天下太平、道鏡聞之、深喜自負、

明法博士

〔類聚三代格 五〕太政官符

定大宰府明法博士官位事

右得彼府解偁、去延暦十八年始置件官、而未定官位、謹請官裁者、左大臣宣、奉勅、宜爲從七位下官、

天長二年五月廿五日

算師

〔類聚三代格 五〕太政官符

更加大宰府筭師一員事

右得府解偁、管內公文、觸類繁多、見任一人、專勞勘會、入都之使、遂差他官、至被勘出、不堪辨申、望請蒙天裁、勞加一人、前件官員、每年相換、將令向京者、右大臣宣、奉勅、宜依請、

弘仁五年正月十三日

〔政事要略 五十六 交替雜事〕延式格云、應令主計主税兩寮助以下筭師以上兼任大宰筭師事、

右得彼府解偁、謹撿太政官去弘仁五年正月廿三日格偁、得府解偁、管內公文、觸類繁多、見任一人、專勞勘會、入都之使、遂差他官、至被勘出、不堪辨申、望請被加件官員、每年相換、將令向京者、左〈〇左、類聚三代格作右〉大臣宣、奉勅、依請者、府須全守格旨、令辨申管內九國二嶋公文、而代々府吏、無心勘濟、管內國文簿、積年未勘、元置一員勘申無怠、今加一人、猶致懈緩、徒費公俸、空無所濟、望請停件一員、令兼任主計主税屬等、勘濟管國四度公文、然則辨申無滯、用幾易知、況路次省煩、遞送脫苦、但停留使糧、運送俸料、謹請官裁者、大納言正三位兼行左近衞大將藤原朝臣時平宣、奉勅、依請、唯二寮官人轉任有例、假令或

權中納言從二位江匡房 三月日兼大宰權帥、勅授、

〔本朝續文粹 雜詩一〕古調詩

參安樂寺　江都督以自筆寫之

康和二年秋、淸凉八月時、秋詣安樂寺、寺在東北隂、出府七八里、先望彼門楣、題額鐫金字、下乘當路岐、地隆尤顯敞、道遠方逶蛇、門外及廟前、往々有三池、其水潔如珍、看之高自涯、似展靑翡翠、○下略

〔公卿補任 堀河〕長治三年 丙戌○嘉承元年

權中納言正二位江匡房 三月十一日遷任大宰權帥、第二度、去納言、

〔康資王母集〕まさふさの帥のふたゝびなりたるよろこびに、

かくしあらば千年のかずもそひぬらん二たびみつる箱崎の松

かへし

はこ崎の松に千年のまるけれはふたゝびのみか三たびこそみめ

〔吾妻鏡 八〕文治四年十一月十八日己酉、今日帥中納言奉書到來、

〔公卿補任 後鳥羽〕文治四年 戊申

權中納言正三位藤經房 正月六日從二位、[illegible][illegible]權帥、

〔薩戒記〕應永三十三年三月廿九日癸亥、大間 ○中略 自牛許、以左手引分置隆相公前、以大宰府所當予 ○藤原定親 前、開置之、今日勅任權帥許也、仍予先可書也、予取黃紙 在硯筥、不續、七八枚重帖也、一枚於座前卷之、取副笏、氣色、大納言揖許之後、置笏於本所、取筆書之、

勅

大宰府

權帥正三位藤原朝臣藤光 兼

官位相當

〔類聚國史六十六人〕天長三年。九月庚午、伊豫守從四位上安倍朝臣直勝卒、大。宰。大。監。正六位上三綱之子也、延暦年中敍從五位下、任陰陽頭、弘仁十一年、敍從四位下、任神祇伯、歷甲斐伊豫守、天資質樸不好祇媚、學老莊、能口自讀如流、不精義理、所歷之職、頗稱寬靜、卒時七十三、

〔令義解一官位〕親王三品四品大宰帥　諸王諸臣從三位大宰帥　正五位○上階大宰大貳　從五位下○階大宰少貳　正六位○下階大宰大監　從六位○上階大宰少監　大宰大判事○下階正七位○上階大宰大工　大宰少判事　大宰大典　防人正　正七位○下階大宰主神　從七位○下階大宰博士　正八位○上階大宰少典　大宰陰陽師　大宰醫師　大宰少工　大宰筭師　防人佑　大宰主船　大宰主廚　大初位○上階大宰判事大令史　大宰判事少令史　防人令史○大宰判事少令史以下下階

〔拾芥抄中本官位相當〕少初位下大宰綠領、令不見、

権官員外官

〔類聚三代格五〕太政官符

應改大宰大貳官位事

右被右大臣宣偁、奉勅准令大宰大貳是正五位上官、自今以後、宜改爲從四位下官、

延暦廿五年二月十三日○又見日本後紀

〔續日本紀二十四淳仁〕天平寶字七年正月壬子、以從五位下紀朝臣廣純爲大宰員。外。少。貳。

〔續日本紀二十九稱德〕神護景雲三年三月戊寅、外從五位下高市連豐足爲大宰員。外。大。典。

〔續日本後紀九仁明〕承和七年四月廿三日戊辰、參議左大辨從三位藤原朝臣常嗣薨、去延暦廿年遣唐持節大使中納言正三位葛野麿第七子也、○中略承和元年改兼近江權守、○中略四年兼大。宰。權。帥。

〔公卿補任堀河〕嘉保二年乙亥

大納言正二位源經信大宰權帥、七月日下向、

永長二年丁丑○承德元年

大判事、大令史一人、掌抄謄判文、少令史一人、掌同大令史、大工一人、掌城隍、舟檝、戎器、諸營作事、少工二人、掌同大工、博士一人、掌教授經業、謂教授管國學生、其醫師不稱教者文略也、課試學生、陰陽師一人、掌占筮相地、醫師二人、掌診候療病、筭師一人、掌勘計物數、防人正一人、掌防人名帳、戎具、教閲、及食料田事、佑一人、掌同正、令史一人、主船一人、掌修理舟檝、謂大工職掌云舟檝、此即所造者、故此司唯掌修理也、主厨一人、掌醯醢、葅、謂醯者、醋也、醢者、凡醤所和也、即調和醬鹽醋蒜薑之類是也、葅、醬豉、鮭魚也、謂鮭乾等事、史生廿人、

〔拾芥抄中官位唐名〕大宰帥大宰府都督　大都督府都督尹　大貳都督長史　都督大卿　少貳都督司馬　都督小卿　監都督參軍事　都督郎中　典都督錄事　都督主簿

○按ズルニ、大宰大貳ヲ都督ト云フコトハ、後文補任條及ビ府宣條ノ下ニ引ク朝野群載ニモアリ、參看スベシ、

〔菅家文草詩二〕喜田少府罷官歸京

山驛水驛思紛々、一種風光兩處分、西望五年空送日、暮來千里乍披雲、情悲倍自初離去、涙落多於便附聞、若不相忘曾入室、慇懃存慰我家君、門人雖多、用意異昔、故囑之、

〔三代實錄陽成三十四〕元慶二年十二月十一日壬申、是日大宰少貳從五位下島田朝臣忠臣等奏言、樻日宮有詑宣云、○下略

〔吾妻鏡四十四〕建長六年閏五月十一日壬子、奉行諸人面々可爲弓馬藝事之由被仰出、今日爲陸奥掃部助、和泉前司行方、武藤少卿景頼等奉行、於御所中被觸廻之、

〔吾妻鏡五十〕文應二年○弘長元年三月廿日壬午、引付衆等進別紙起請、亦新制事今日始施行之、引付結番被改之、○中略

五番十二日廿七日　秋田城介泰盛　大宰權少貳景頼

〔日本後紀十四平城〕大同元年六月己亥、公卿奏言、量事制宜、聖皇茂典、隨時分職、哲后良規、頃年令大宰府帶筑前國、兼廢品官、庶存簡要、而今管攝多事、充用少人、伏望增置官員、得濟繁劇者、勅增加大少監大少典各一員、

公田八百五十餘町

府營。固。田十八町

府濟物幷辨國官物定田二百五十六町

豐後國庄公幷領主等之事、可委細注進言上由、今年二月廿日雖被成御教書候、德政之御使依下向、去正月以來直人相共罷向博多候間、未尋究處、御使參洛候、其後依兩社造營延引候、此程令歸國、雖致其沙汰、不能巨細候歟、雖然若急速御用候者、可違期候之間、直人等粗令注進狀一卷、內々爲御存知、令進上候、但此狀者無四度計候、追進之時可被替取候、恐々謹言、

弘安八年九月晦日　　沙彌道忍裏判

謹上　信濃判官入道殿

府儲

〔延喜式民部二十三〕凡大宰府蕃客儲米三千八百卅石、若經年致損、便充公用、廻舊收新供事、其修理府中館舍料稻四萬束、毎年出擧六國、取其息利充用、若利滿一萬束者停擧、

〔日本書紀天武二十九〕十四年十一月甲辰、筑。紫。大。宰。、請儲用物、絁一百匹、絲一百斤、布三百端、庸布四百常、鐵一萬斤、箭竹二千連、送下於筑紫、

〔續日本紀元正八〕養老三年正月庚寅朔、以舶二艘獨底船十艘、充大宰府、

職員

〔令義解職員一〕大宰府帶筑前國

主神一人、掌諸祭祠事、帥一人、掌祠社、戸口、簿帳、字養百姓、勸課農桑、糺察所部、貢擧、孝義、田宅、良賤、訴訟、租調、倉廩、徭役、兵士、器仗、鼓吹、郵驛、傳馬、烽候、城牧、過所、公私馬牛、闌遺雜物、及寺、僧尼名籍、蕃客、歸化、謂遠方之人、欽化內歸也饗讌事、大貳一人、掌同帥、少貳二人、掌同大貳、大監二人、掌糺判府內、審署文案、勾稽失、察非違、謂巡察所部非違、其諸國判官察非違、亦同此義也少監二人、掌同大監、大典二人、掌受事上抄、勘署文案、檢出稽失、讀申公文、少典二人、掌同大典、大判事一人、掌案覆犯狀、謂案覆管國所申犯狀也斷定刑名、判諸爭訟、少判事一人、掌同

用途
警固田
府儲田

右少辨正五位下藤原朝臣　修理東大寺大佛長官正五位上行左大史小槻宿禰

建久四年十一月八日

熟銅貳斤（近例二斤也）下大藏　白鑞參兩直　荒炭貳斛直　油貳合直　膠陸兩直　細布伍尺

伊與砥半顆下大藏

右大宰府印壹面料、内匠寮所請如件、

建久四年十一月廿八日　右少辨藤原朝臣本

權中納言平朝臣親宗宣、宜充之、

應令大藏書博士勘申大宰府印字樣事

右少辨藤原朝臣資實傳宣、權中納言平朝臣親宗宣、奉勅、件字樣宜令彼書博士勘申者、

建久四年十一月廿八日　左少史三善本

〔三代實錄二十四清和〕貞觀十五年十二月十七日戊申、大宰府言、○中略又府之備隣敵、其來自遠代、而去貞觀十一年、新羅海賊竊窺間隙、掠奪貢綿、自斯遷運甲冑、安置鴻臚、差發俘囚、分番鎮戍、重復分置、統領選士、備之警守、今所用糧米毎國有數、出納之事、非無勾當、加以朝夕資給、米鹽多煩、仍差置書生驅仕等、計口給貧、結番宿直、自餘之色、觸類猥雜、件國割女子口分置公營田、所遺之由猶倍他國、須分置一百町、名警固田、如其耕營收、所輸之地子、充年中之雜用、但租穀割地子内准例進納、又府儲料稻總三萬束、凡使粮幷水脚賃及厨家雜用、凡百庶事、總在其中、諸國所備各有色數、而或致違期、或置未進、府中之用、常苦闕乏、須割置田二百町、名府儲田、收其地子、以充府用、但租穀同上、依請許之、

〔豐後國圖田帳〕弘安八年十月十六日、自國府被立脚力畢、豐後國田代之事、國中神社佛寺領等幷權門勢家庄園國領公田領家領所地頭辨濟使等交名之事、

宇佐宮領千六百餘町○中略

時月、其事重者、竟歳始還、客宿於府倉之下、賃寄於閭閻之間、若至疾病纏身、手足不随、官司督察、非養病之處、主家爭趁出、皆忌死之人、遂使露臥道路、暴死風霜、縦有時得痊癒、亦以飢寒死者十而七八矣、見其如此、心深救恤、聊建斯處、以擬飢病、有志無力、庶幾万一、地隔人遠、執撿難周、轉以属人、更増疎廢、若遂不因公力、恨心願之徒已、伏望令府監或典一人及觀音寺講師勾當其事、相替之日、一事已上、皆依實勘付、若不加修理、令致破損、及非法費用等之類、並以官法論、仍請處分者、右大臣宣、奉勅、思撫黎甿、不忘分多、(○分多、續日本後紀作黎庶、)字縣負遠、無聞控告、見此弊納、爰知忠懇、宜速令所司俾充所請者、宜勾當之官、遷替之日與奪解由、一准國司事緣綸旨、不得違莫、

承和二年十二月三日

諸官舍

〔延喜式 二十三 民部〕凡大宰府充仕丁者、(○中略)學校二人、厩司二人、税倉二人、薬司一人、匠司一人、修理器仗所一人、守客館一人、守辰六人、守驛館一人、

印鎰頭契

〔續日本紀 三 文武〕慶雲二年四月辛未、給大宰府飛驛鈴八口、傳符十枚、

〔續日本紀 十六 聖武〕天平十七年八月己丑、給大宰府管内諸司印十二面、

〔續左丞抄 一〕太政官符中務省

應鑄充印壹面事

右得正二位行大宰權帥藤原朝臣光隆今月十九日奏狀偁、得在廳官使去十月十三日解狀偁、謹撿案内、印者奉安置府院内、鎰者一府官所受領也、而去壽永二年亂逆之時、軍兵等最先依亂入府院、於印者奉取、至于鎰者、受領府官逃入山林之間、奉懸頸、希有所不奉失也、國符其後謂奏書謂府符、不能捺印、宰府陵遲尤在斯事、就中八幡宇佐宮遷御之日、令貢進着耕六通之例也、不捺者定以可謂違例歟、望請府裁、速奏聞公家、奉鑄下府印、被遂行希代神事勤、依言上如件者、任在廳官人等申狀、欲被鑄下件印者、正三位行權中納言平朝臣親宗宣、奉勅、任先例令鑄下者、省宜承知依宣行之、符到奉行、

奏聞、

大同三年五月十四日〇又見令集解六

〔日本後紀十七平城〕大同三年五月乙未、是日、置筑前國守介掾大少目各一員、先是令府官攝行國政、彼此相讓、口非專一、事多廢闕、因茲改焉、

府城

〔類聚國史百七十三災異〕養老五年七月庚午、大宰府城門災、

〔續日本後紀十二仁明〕承和九年八月丙子、大宰大貳從四位上藤原朝臣衞上奏四條起請、〇中略　三曰、府多官舍、破損不少、例用浪人、常勤修理、而比年多依官符、被充他用、望請一切不寄他所、將役府國修理、依請許之、

〔百練抄六崇德〕保延六年六月廿日、諸卿定申大宰帥顯賴卿訴申、去月五日、九國所々大衆神人燒拂宰府已下屋舍數十家事、此中大山、香椎、宮崎爲孤本、

府庫

〔延喜交替式〕凡大宰府庫、幷大野城器仗、前後司交替檢定之日、破損之物修理、其修理、前司修理之物、後司交替之次、便卽撿納新司應修理之料、細還尤損之物下充、

〔續日本紀三十稱德〕神護景雲三年十月甲辰、大宰府言、此府人物殷繁、天下之一都會也、子弟之徒、學者稍衆、而府庫但蓄五經、未有三史正本、涉獵之人、其道不廣、伏乞列代諸史、各給一本、傳習管內、以興學業、詔賜史記、漢書、後漢書、三國志、晉書各一部、

續命院

〔伊呂波字類抄諸寺〕續命院（中略）在大宰府南郭、見貞觀格、

〔類聚三代格七〕太政官符

續命院一處在大宰府南郭

檜皮葺屋七宇一宇□□　墾田百十四町國郡條理坪若在別卷

右參議刑部卿從四位上小野朝臣岑守解偁、府管九國二嶋之民、或公或私、往來相續、其求輕者、悕經

總領、准犯決罰、　十月己未、以直大壹石上朝臣麻呂爲筑紫總領、

〔職官志 五〕按、○中略帥或改名爲總領、而有筑紫周防吉備總領並拜、

〔續日本紀考證 文武一〕竺志總領 竺俗笠字、見龍龕手鑑、竺志卽筑紫、古事記舊異記作竺紫、蒲生氏曰、當時國司宰大國、兼知數國、爲總領、持統紀有伊豫周芳總領所、本書下文亦有周防大宰吉備總領、筑紫總領卽所謂大宰帥是也、

〔續日本紀 文武一〕四年十月己未、直廣參小野朝臣毛野爲大貳、

〔令義解 職員一〕大宰府 帶筑前國、

〔續日本紀 聖武十四〕天平十四年正月辛亥、廢大宰府、遣右大辨從四位下紀朝臣飯麻呂等四人、以廢府官物付筑前國司、

○按ズルニ、天平十二年大宰少貳藤原廣嗣大宰府ニ據テ反セリ、本府ヲ廢スルハ蓋シ此ニ本ヅケルナルベシ、

〔續日本紀 聖武十六〕天平十七年六月辛卯、復置大宰府、

〔續日本紀 光仁三十一〕寶龜二年十二月己未、罷筑前國官員、隸大宰府、

〔類聚三代格 五〕太政官謹奏

省大宰府監典各二員、置筑前國司事

守一員　介一員　掾一員　大少目各一員

右謹案令條、大宰府帶筑前國、自爾已來、或別或隸、至延曆十六年又廢國隸府、今得府解偁、臨交替事、細加撿挍、未進調庸、幷闕失正稅器仗戎具等類、每物有數、此是攝行之日、彼此相讓無心國政之所致也、望請分置官人、以爲別當、專一其心、令濟國務、然則帶國之名、不乖令條、欠負之煩、絕於國內者、臣等商量、承前府帶之時、或下官符而定別當、或府司相量分置其人、同僚之官、兼預國務、勘責雜怠、不同比國、望請省大同元年所增監典、便充補國司、庶令所守有別、各濟繁劇、謹錄事狀、伏聽天裁、謹以申聞、謹

〔職官志五〕按、筑紫邊西海、有戎狄非常之虞、故置大宰府以爲鎭焉、蓋其來久矣、但未詳創之在何世、○中略 ○註略 更考之、王人奉使治韓地、謂之宰、○註略 其居謂之府、○中略 欽明卽位之初、勅百濟以復興任那、○中略 至二十三年卒爲新羅所滅也、○中略 於是乎建其府於筑紫、是爲筑紫大宰府、蓋在崇峻推古之世、○中略 命其長爲帥、○註略 稱號筑紫帥、○註略 昔時不唯筑紫有大宰、吉備亦有之、○註略 帥或改名爲總領、而有筑紫周防吉備總領並拜、○註略 及大寶制令、筑紫獨置大宰府、故直稱大宰、不復言其地、

〔日本書紀二十五孝德〕大化五年三月戊辰、蘇我臣日向、日向字身刺 譖倉山田大臣於皇太子曰、僕之異母兄麻呂、伺皇太子遊於海濱、而將害之、將反其不久、皇太子信之、○中略 己巳、蘇我大臣旣與三男一女、俱自經死、○中略 是月、遣使者、收山田大臣資財、資財之中、於好書上題皇太子書、於重寶上題皇太子物、使者還申所收之狀、皇太子始知大臣心猶貞淨、追生悔恥、哀歎難休、卽拜日向臣於筑紫大宰帥、世人相謂之曰、是隱流乎、

〔玉勝間三〕大宰帥の帥字のよみ
帥字には二の音ありて、其意かはれり、帥某とひきうの時は、所律反にてしゆつ、そつの音也、將帥主帥元帥など、その主とある人をいふときは、所類反にてすゐの音なり、さて大宰帥はかの府の長官なれば、すゐの音なるべきことなるに、古より所律反の方の音を用ひて、そつと唱へ來つるは、いかなる故にか、古かばかりの事誤るべきにはあらぬを、ゆゑあることなるべし、

〔干祿字書去聲〕師帥並上通、下正、

〔五經文字中巾〕帥山出反、從巾、或從市者訛、又色類反、並與率同、

〔日本書紀二十七天智〕七年七月、以栗前王拜筑紫率、

〔荀子六富國〕將率不能則兵弱率與帥同

〔續日本紀一文武〕四年六月庚辰、薩末比賣、久賣、波豆、○中略 等持兵剽劫覓國使刑部眞木等、於是勅竺志

府署所在

沿革

始改爲上中下都督府、

〔古文書類纂大宰府宣上〕大府宣大宰府廳官人等

可早任廳宣雷山神領筑前國夜須郡赤阪村參町地〈號小地頭職〉事、〈○中略〉

天文六年十二月十四日

○按ズルニ、後文府宣ノ條ニ引ケル朝野群載ニモ、大宰府宣ヲ大府宣ト稱セリ、本朝文粹卷九ニ載スル所ノ、源順ノ祿綿ヲ賀スル詩ノ序ニ、昔侍重陽宴者、皆賜大府之綿ト云ヘルモ亦大宰府ノ綿ヲ稱セルナラン、

〔倭名類聚抄五國郡〕筑前國〈大宰府在御笠郡〉(中略)

〔筑前國續風土記六御笠郡〕大宰府舊址、國分村の東觀世音寺の西に、つき山といふ小山あり、其西の田の中ニ大なる礎石多く殘れり、是即大宰府の址なり、此里を御笠の里といふ、貞享年中ニ至て、觀世音寺を再興せし時、多く其礎石を取用たり、されども猶餘多石あり、南に大門の跡、北に都府樓の趾有て、其間大厦のありし跡礎石多、其舊跡さだかに見えたり、其礎は皆方六尺餘有て、柱を立し所は平かにして徑り貳尺一寸、或五寸あり、鎭西府と云しも即此所なり、古歌にしづむる西の都とよめり、又都督府とも西の都ともいへり、凡此大宰府は、何れの時より置れしにや、其始を詳にせず、

〔日本書紀二十二推古〕十七年四月庚子、筑紫大宰(オホミコトモチ)奏上言、百濟僧道欣、惠彌、爲首一十人、俗人七十五人、泊于肥後國葦北津、是時遣難波吉士德摩呂、船史龍、以問之曰、何來也、對曰、百濟王命以遣於吳國、其國有亂、不得入、更返於本鄕、忽逢暴風、漂蕩海中、然有大幸、而泊于聖帝之邊境、是以歡喜、　五月壬午、德摩呂等復奏之、則返德摩呂龍二人而副百濟人等、送本國、至于對馬、以道人等一十皆請之欲留、乃上表而留之、因令住元興寺、

島初ハ壹岐、對馬ノ二島ノ外ニ、多褹ノ一島アリ、ノ政事ヲ掌リ、其國島ノ司之ニ隷ス、四等官ノ上ニ主神アリテ、專ラ祭祀ヲ掌リ、四等官ノ外ニ判事アリテ、聽訟ヲ掌リ大少工、博士、醫師等ノ員アリテ、各其職ニ從フ、

此府ハ支那三韓ト相近キヲ以テ、防人ヲ置キ、司ヲシテ之ヲ掌ラシメ、又兵船兵馬ノ備アリ、統領弩師ノ役アリ、城堡、烽火アリ、又外國人ヲ接待スルガ爲ニ客館アリ、譯語アリ、天平十四年府ヲ廢シテ、翌年筑紫鎭西府ヲ立テ、將軍、副將軍、判官、主典ヲ置キシガ、尋テ舊ニ復セリ、蓋シ鎭西府ハ、陸奥鎭守府ノ如ク、專ラ鎭捍ノ爲ニシタルモノニテ、九國ヲ統治セシニハアラザラン、又九國ノ中ニテ筑前ノミハ國司ヲ置カズシテ、府ニテ直ニ之ヲ治メシガ、大同三年ニ、別ニ國司ヲ設ケタリ、

帥ハ弘仁十四年ヨリハ、多ク親王ヲ以テ之ニ任ジ、權帥若シクハ大貳府務ヲ視ルノ例トナレリ、而シテ古來大臣以下朝廷ノ顯職ニ在リシモノヲ左遷スルニハ、員外帥ヲ以テセシコト屢ニシテ、公廨ヲ給シテ政務ニ預ラシメズ、府ニモ入ルコトヲ得ザラシム、事ハ法律部左遷篇、貶爲大宰帥條ニアリ、

名稱

〔倭名類聚抄五官名〕府　職員令云、○中略大宰府、於保美古止毛知乃司、

〔日本書紀天智二十七〕六年十一月乙丑、百濟鎭將劉仁願、遣熊津都督府、熊山縣令、上柱國、司馬法聰等、送太山下境部連石積等、於筑紫都督府、オホミコトモチノツカサ

〔職原抄下〕大宰府　當唐大都督府

〔唐六典三十三府督護〕大都督府、都督一人、從二品、

魏黃初二年、始置都督諸州軍事、或領鎭戎總夷校尉、三年、上軍大將軍曹眞都督中外諸軍事、司馬宣王征蜀、加號大都督、自此之後、歷代皆有、至隋改爲總管府、皇朝武德四年、又改爲都督府、貞觀中

凡囚獄司物部者、通取負名氏幷他氏白丁、補十人、帶兵仗、其東西市各亦取負名氏入色十人、白丁十人、若不足者、通取他氏白丁、

凡諸司使部者、○中略東西市司各六人、

〔定家朝臣記〕康平五年十一月二日、若宮御五十日也、○中略辰剋、民部卿親任家司右衞門府生成任家知事、向東市、買餅、以絹一疋米一石爲其直、御市刀禰等令用意、

補任

〔官職秘抄上〕諸司正

東西市　六位官也、但五位又多任之、一道者諸道得業生、文章生成功輩、若經外記史五位等任之、或諸道擧任之、中原貞俊、小槻政重、或撿非違使尉兼任之、藤原眞淵、在原相安、已上東、藤原高堪、佐波部高仁、已上西、　同佑○中略　東西市　已上諸道得業生、諸道擧問者、生、成功、臨時內給等任之、或以本司奏任之、○中略　同令史○中略　東西市　已上以本司奏任之、或臨時內給、

〔職原抄下〕東市司唐名市署、掌市事、

正一人　諸道五位六位、及院主典代、藏人所出納等任之、　佑　令史　常不任之

西市司　同東

用途

〔拾芥抄中末宮城〕諸司廚町

市領十一町、內町三町、七條坊門南、七條北、大宮東、猪熊西、已上二町、外町八町、

大宰府　鎭西府倂入

大宰府ハ筑前國御笠郡ニ在リ、其創置ヲ詳ニセズ、推古天皇ノ朝ニ、筑紫大宰ガ事ヲ奏上セシヲ以テ、史ニ見エタル始トス、大寶令ノ制、帥、大少貳、大少監、大少典ノ四等官アリテ、九國二

一年四月式、件等色物兩市共可興販、不可更度、今百姓悉還於東、交易件物、仍市廛既空、公事闕怠者、去承和二年彼此中折施行既訖、而承和七年四月、班式之日、遺漏不改、勅宜依前格、不可據式、

〔詠百寮和歌〕市正

やよやまて眞僞き丶わけん遠近人の交の市

〔東寺百合古文書七十二〕首闕

元弘三年癸酉十一月日　慈快花押〇中略

件券契等紛失事、傍輩證判分明之間、加愚署而已、

西市正兼左衞門權少尉中原朝臣花押

〔康富記〕文安六年四月廿六日丙子、官務令語給云、童名字通音梅千代丸爲大藏大輔賴胤之養子、申任東市正、云々、〇中略

上卿北畠大納言　文安六年四月廿六日宣旨

小槻宿禰通音、宜任東市正、

藏人右兵衞佐藤原綱光奉

〔續日本紀稱德三十〕寶龜元年三月癸酉、以西市員外令史正八位下民使毗登曰理權任會賀市司、

〔廣義門院御產記〕延慶四年四月十四日丙辰、今日姬宮御五十日儀也、當五十二日、昨日依關白被申、延及今日也、〇中略今朝早旦遣買市餠、其儀院廳官一人衣冠、紀康世、向東市上十五日者東市、下十五日者西市、買餠、兼日下行料米、新院廳務資重沙汰料米□石、御五十日ハ五斗也、然而近例一石云々、御賦同沙汰給之云々、於祝餠□□不給之云々、御幣於市令史令用意之、於市姬社申祝渡廳官、

〔續日本紀元明五〕和銅五年閏十二月己酉、東西二市始置史生各二員、

〔日本後紀平城十七〕大同四年三月己未、始置左右兵庫史生各二員、〇中略減東西市司各一員、

〔延喜式式部十八〕凡諸司史生者、〇中略東西市司各二人、

少属衣縫連人君

〔東大寺正倉院文書四〕謹解　申所盗物事

合壹拾參種

麻朝服一領　葛布半臂一領　帛襌一要　麻糸拔一箇　帛被一蓋　紵帳一張　調布帳一帳

被莒一合　緑裳一要　青裳一要　斜一面（枝纖所管作口左方珀、右方於往疵、枝纖所於中嚢可挾入穴、）　赤染眞弓一枝（小々）

（刷、黒漆端、）　幌二具

右等物、六條二坊安拜常麻呂之家、以去八月廿八日夜所盗、注狀以解、

天平七年閏十一月五日　　中宮職舍人少初位上中臣酒人宿禰久治良

左大舍人寮少属大初位下安拜朝臣常麻呂

職符　東市司

件所盗物文、以去八月廿八日申送如前

大進大津連船人

少属衣縫連人君

職符　東市司

琉璃玉四口（徑二寸若無者壹一十許口）

右平章其價、便付遣使坊令御母石勝、進送舍人親王葬裝束所、符到奉行、

大進大津連船人

十一月廿日　　大属四比元孫

〔續日本後紀十二仁明〕承和九年十月庚辰、西市司言、依承和二年九月符旨、錦綾絹、調布絲、綿紵、染物、縫衣、續麻、針櫛、染革、帶幡、油、土器、絹冠、牛廛等類、與販於西市、而東市司論之、撿承和七年四月符、依弘仁十

〔令義解考課四〕市廛不擾、姧濫不行、(謂男女別貨、良賤區分、是爲市廛不擾也、姧盗及行濫之徒、不得其情、是爲姧濫不行也、)爲市司之最、(謂佑以上、)

〔令義解關市九〕凡市、毎肆立標、題行名、(謂肆者、市中陳物處也、題行名者、假如題標牓云絹肆布肆之類也、)市司准貨物時價、爲三等、(謂准貨物時價者、凡物各有上中下三品、即其價直亦物別各有上中下三等、故總有九等沽價、即下條云、准中沽價、是准中物中沽價、文云准貨物時價、即知據市廛交關之價、官不別立沽價法也、爲三等者、假如一旬沽價、上布一端直錢三百、或三百五十、或四百、即依中沽三百五十、立沽價法、其餘中下二品亦依中沽爲定、故云爲三等也、)十日爲一簿、在市案記、季別各申本司、(謂官家交關及懸評贓物、皆據中沽價、故立此案記、本司者京職及國司、)

〔延喜式東西市四十二〕凡市皆毎廛立牓題號、各依其廛、隨色交關、不得彼此就便違越、

〔令義解關市九〕凡以行濫之物交易者沒官、短狹不如法者還主、

〔延喜式東西市四十二〕凡市人籍帳、毎年造進、

〔延喜式東西市四十二〕凡毎月勘造沽價帳三通送職、職押署、即以職印印之、一通進官、一通留職、一通付司、

凡賣買不和較固者、市司追捉勘當、

凡商賈之輩、沽價之外、若有妄增物直者、不論蔭贖、登時見決、

凡市裏有淩奪之輩者、奏任已上准狀散禁請裁、判任已下杻禁、隨犯決罰、

凡市町准市裏、本司加勘糺、隨犯科責、

凡居住市町之輩、除市籍人、令進地子、即以充市司廻四面泥塗道橋、及當堀河等造料、其用帳年終申送、

〔延喜式彈正四十一〕凡市人集時、入市召市司、令市廊靜定、毎肆巡行、糺彈非違、

〔東大寺正倉院文書四〕職符　東市司

錢二百文

右爲正倉內室押釘用、以件錢、隨使工上市易進上、其委曲狀有使口、符到奉行、

少進春日藏首大市

天平七年十一月十一日

市樓

〔東寺百合古文書二十一〕寬正七年文正元年〇十一月三日連署除之、〇中略一右京職大嘗會段錢事、寺家分幷諸坊中分等引合爲惣寺貳百疋、以一獻分佗事落居了、仍各々下地配分云々、此外左京職、左馬寮、右馬寮、圖書寮等段錢、各懸之、半分等佗事可懸之云々、

〔延喜式東西市四十二〕凡決罰罪人者、官人與使相對樓前罪之、

〔西宮記臨時十〕撿非違使雜事　與奪事

勘問、式云、與奪儀、略〇註　左右佐以下着帷幄下如常、至于天曆之比、着市樓下行此政、是則相對樓前、決之、當下十五日之時、於西市行之、是亦喚集市人、示衆人之情歟、今樓已顚倒、人衆不集、仍偏向東市樓所立、縦行之、當上十五日之時、於東市行之歟、又件政

市藏

〔今昔物語二十九〕西ノ市ノ藏入盜人語第一

今昔［　］天皇ノ御代ニ、西ノ市ノ藏ニ盜人入ニケリ、〇下略

司印

〔續日本後紀仁明十八〕嘉祥元年七月己未、勅准西市司、賜東市印一面、

〔三代實錄清和五〕貞觀三年三月七日辛巳、新鑄銅印一面、賜東市司、

初見

〔日本書紀孝德二十五〕大化二年三月甲申、罷市司要路津濟渡子之調賦、給與田地、

〔書紀集解孝德二十五〕按、先是市及要路、皆有調賦、今除其調賦、給以田地、充其資用、

〔日本書紀齊明二十六〕五年七月庚寅、高麗使人、持羆皮一枚、稱其價曰、綿六十斤、市司咲而避去、高麗畫師子麻呂、設同姓賓於私家、日借官羆皮七十枚而爲賓席、客羞怪而退、

職員職掌

〔令義解職員〕東市司西市司准此

正一人、掌財貨、交易、器物眞僞、度量輕重、賣買估價、禁察非違事、佑一人、令史一人、價長五人、物部廿人、使部十人、直丁一人、

〔令義解官位一〕正六位上〇階　東西市正　從七位下〇階　東西市佑　大初位上〇階　東西市令史

〔拾芥抄官位唐名中末〕東西市正兩市令　佑兩市市作事　令史兩市錄事

名稱
所在

東西市司

東市司ハ左京職ニ屬シ、西市司ハ右京職ニ屬シ、並ニ市易估價ノ事ヲ掌リ、市廛ヲシテ擾レズ、姦濫ヲシテ行ハレザラシムルヲ以テ職トス、

古昔ハ市ニ於テ罪人ヲ行決スルニ由リ、此兩司ニハ囚獄司ト同ジク物部ヲ置キシガ、西市ノ早ク亡ビシ後ハ、東市ニテノミ之ヲ行ヘリ、

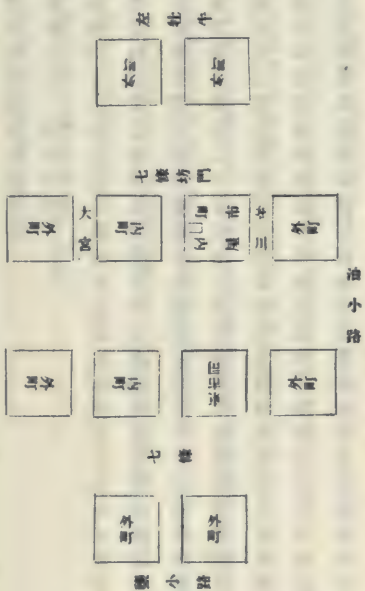
〔倭名類聚抄五官名〕司　職員令云、○中略東市司(比牟加之乃以知乃官、)西市司(爾之乃以知乃豆加佐、)

〔拾芥抄中末宮城〕諸司厨町　東市屋(七條坊門南猪熊東)

○按ズルニ、京城圖ニヨルニ、西市司モ亦右京七條坊門南猪熊ノ東ニアリ、然ルニ右京ハ早ク廢滅ニ歸シタルヲ以テ、蓋シ拾芥抄之ヲ載セザルナリ、

〔大内裏圖考證二十七左右京職〕古本拾芥抄、東市司及市町圖(此餘諸圖見二都城一)

油小路

外町　外町

應令依結保帳督察姧猾事

制帳二卷（一卷左京料 一卷右京料）

右去貞觀四年三月十五日格偁、左京職解偁、謹案戸令云、凡戸皆五家相保、一人爲長、以相撿察、勿造非違者、然則結保之興、爲糺姧濫、司存之理、必可遵行、而皇親之居、街衢相交、卿相之家、坊里錯雜、若非蒙官符、直施此制、不救之漸、輒無承引、望請親王及公卿職事三位以上、以家司爲保長、无品親王以六位別當爲保長、散位已下五位以上以事業爲保長、然則皇憲通行、隣保相保、姧猾永絶、道橋自全、謹請官裁者、右大臣宣、宜早仰下申明舊章、右京職准此者、左大臣宣、奉勅出格之後、年祀稍積、有司忍而如忘、姧濫行以爲害、是則徒設條例、未立罪科之所致也、宜重下知、依件保結、諸院諸司以六位院司官人爲保長、蕭清保内、糺察姧非、但無長之保者、隣近保長各得兼督、若保長本主遷任外吏以赴任國、及貢却本宅、移住他保者、京職擇保内之堪事者、差替令行、自餘事條一如前格、若有下制之後保長不勤督察、及保人不肯承引保長所仰者、皆不論蔭贖、科違勅罪、曾不寛宥、

昌泰二年六月四日

○保長、保子ノ事ハ、鄕村吏篇鄕長條ニモ散見セリ、參看スベシ、

用途

〔拾芥抄 中末 宮城〕諸司厨町

左京町 姉小路北 坊城西

〔類聚國史 百七 職官〕天長六年六月辛亥、停授京職絶戸田、爲絶姧盜也、

〔延喜式 四十二 左右京〕凡兵士幷坊長等不仕料物、充職中用、

左京職神

〔三代實錄 七 清和〕貞觀五年十二月三日辛酉、左京職正六位上戊亥隅神授從五位下、

雜載

〔續日本紀 九 聖武〕神龜三年九月丁丑、令京官史生及坊令、始著朝服把笏、

〔類聚國史 八十 政理〕延暦廿年二月辛丑、令左右京職官人准諸國貢解由也、

保長

常陸光方

右件光方、已三代刀禰者、早補ニ任保刀禰職一、令レ知ニ行保內一、故下、

應德二年四月十七日　左衞門大尉藤原朝臣

〔小右記〕長元四年正月廿三日辛未、夜此保夜行者搦ニ捕嫌疑者二人一、卽刀禰等付ニ檢非違使守良一、是因幡國夫云々、此間春日小道南邊室町西邊十人宅、屋上裏、火置、燃出之間所ニ捕也、召ニ彼保刀禰一召仰能勤ニ夜行事之由一、彌爲レ令レ勵ニ事勤一給、去夜夜行者六人給ニ信濃布一、

〔令義解二戸〕凡戸皆五家相保、一人爲レ長、以相檢察、勿レ造ニ非違一、如有ニ遠客來過止宿一、及保內之人有レ所ニ行詣一、並語ニ同保一知、

凡戸逃走者、令ニ五保追訪一、（謂、此五保職掌、故其追訪之人、不レ在ニ折傷限一也、）三周不レ獲除レ帳、（謂、三年之後、至ニ四年計帳一而除レ帳、卽其地者、除帳之年還レ公、不レ待ニ班田之日一也、）其地還レ公、未レ還之間、五保及三等以上親、均分佃食、租調代輸、（謂、若无レ地者、不レ可ニ代輸一、其傜役者、縱有レ地、不レ可ニ代役一、无ニ其身一故也、）三等以上親、謂ニ同里居住者一、戸內口逃者、同戸代輸、六年不レ獲亦除レ帳、地准ニ上法一、

〔類聚三代格十六〕太政官符

應レ令三結レ保督ニ察奸猾一及親守ニ道橋一事

右得ニ左京職解一偁、謹案ニ戸令一、凡戸皆五家相保、一人爲レ長、以相檢察、勿レ造ニ非違一者、然則結保之興、爲レ糺ニ姦濫一、司存之理、必可ニ遵行一、而皇親之居、街衢相交、卿相之家、坊里猥雜、若非レ蒙ニ官符一、何施ニ此制一、不敎之漸、恆无ニ承引一、望請親王及公卿職事三位已上、以ニ家司一爲ニ保長一、无品親王以ニ六位別當一爲ニ保長一、散位三位以下五位以上以ニ事業一爲ニ保長一、然則皇憲通行、隣伍相保、奸猾永絶、道橋自全、謹請ニ官裁一者、右大臣宣、宜下早仰下申ニ明舊章一、右京職亦准レ此、

貞觀四年三月十五日　○又見ニ三代實錄一

〔類聚三代格十二〕太政官符

刀禰

延暦十七年四月五日

〔東大寺正倉院文書九〕右京計帳

右京三條三坊

戸主出庭徳麻呂戸手實〇中略

天平五年六月九日　坊令大初位下尾張連牛養

〔類聚三代格十二〕太政官符

應禁斷京畿百姓出弃病人事

右右大臣奏偁、念舊酬勞、賢哲遺訓、重生愛命、貴賤無殊、今天下之人、各有僕隷、平生之日、既役其身、病患之時、即出路邊、無人看養、遂致餓死、此之爲弊、不可勝言、伏望仰告京畿、早從停止、〇中略臺及職國知而不糺、及條令坊長、郡司隣保、相隱不告、並與同罪、自今以後、永加禁斷、仍牒示要路、分明告知、

弘仁四年六月一日〇又見類聚國史

〔政事要略七十糺彈雜事〕出棄病人及小兒事

貞觀九年三月七日、右少史大春日安永仰云、右少辨藤原朝臣千乘傳宣、右大臣宣、京中諸人、捨男兒於道路頭、遂爲犬鳥見害歟、是即職吏之不治、人民之不仁、宜撿非違使毎見此事、召當條領幷町長等重加勘當、俾送居施藥院、唯其狀必申官者

〔延喜式二十五主計〕凡勘大帳者、皆據去年帳、勘其出入、〇中略其依符所免爲符損、八位監子(中略)假長、坊〇鄉牧長、

〔朝野群載二十一雜文〕右京職符　九條二坊二保　常澄重方

右人補任刀禰職已畢、保内宜承知令執行之狀如件、故符、

康和五年二月十三日　少進紀大夫源朝臣

〔朝野群載十一延尉〕撿非違使廳下　九條二坊　刀禰職事

天長二年閏七月十日

〔享祿本類聚三代格四〕太政官符

應停止諸勘籍人未經一選遷補坊令事

右被右大臣宣偁、奉勅、頃者諸司雜色人等、未經一選遷補件職、論之政途、實非正理、宜自今以後、一切停止、

貞觀三年七月廿八日

〔三代實錄五清和〕貞觀三年七月廿八日庚子制、諸司雜色人未經一選、不得輙任左右京職條令、

〔類聚三代格十二〕太政官符

應勘決坊令事

右得右京職解偁、謹案令條、坊令是職事之官、若有怠過、須據贖法、而承前之例、屢經改張、或彈正勘決、或當職科罰、今依太政官去天長五年十二月十一日符、責過狀滿三度、則彈正移刑部令決、自爾以來、奔波勤事、不遑寧處、雖然所管條中、怠慢難絕、何者有勢之家、不遵催課、無主之地、經年不掃、巡撿之責、靡月不獲、方今進臺過狀、三度已滿、罪非自犯、受罰市獄、今令等或稱病不上、或通去未皈、因玆京坊遂蕪、道橋不修、有職無人、何以懲肅、夫直決之科、自昔不免、但送省令決、事乖穩便、望請停送刑部、依太政官去弘仁十年十一月五日符、職司勘決者、右大臣宣、奉勅依請、左京職亦准此、

天長九年十一月廿九日

〔類聚三代格五〕太政官謹奏

應以坊令准初位官事

右謹案令條、左右京職每條置令一人、督察所部、惟人是憑、而任居要籍、秩无微俸、至于除補、競事辭遁、伏望准少初位下官給祿、優恤其身、令勤職掌、臣等商量如前、伏聽天裁、謹以申聞、謹奏聞、

〔職官志四〕依戸令、四坊置一令、而拾芥抄、四坊爲條、京師總爲九條、一條二條夾宮城而東西各三坊雙列、合東西六坊同名、一云桃花、二云銅駝、令二人、其餘四坊同名、以別東西、東三條云教業、四云永昌、五云宣風、六云淳風、七云安衆、八云恭仁、九云開建、西三條云豐財、四云永寧、五云宣義、六云光德、七云毓財、八云延嘉、九云陶坊、令東西各七人、都應十六人、而今左京坊令十二人、右京坊令十二人、集解、朱云、此知爲十二條、若令有如大宮等者、雖不能四坊、猶置令、然歟、是亦臆說也、蓋文武藤原之京、其營或嘗爲十二條、而未成之也、及遷都于寧樂平安、並爲九條、斯其所改營焉、職員令猶仍其舊、故左右坊令各十二人、

〔標注令義解三戸〕京兆圖云、一條之內有四坊、一坊之內有十六町、十六町之內有四保、一町之內有四行、一行之內有八門、一戸主長十丈廣五丈、是を以て考れば、一行に八戸、一町に卅二戸、一保は四町なる故、保內の戸百二十八家、四保を合て坊といふ、坊內に五百十二戸、是に長一人を置、四坊にて二千四十八戸、これに令一人を置く、

〔延喜式四十二左右京〕坊長卅五人（條別四人、但一二條各三人、北邊坊一人、）

〔令義解二戸〕凡坊令、取正八位以下（謂內外並同、下文准此也、稱以下者、無位亦同也、案軍防令、雖主六位不可補替也、）明廉強直、堪時務者充、里長、坊長、並取白丁清正強幹者充、若當里當坊無人、聽於比里比坊簡用、（右八位以下、情願者聽、）

〔享祿本類聚三代格四〕太政官符

應以京畿入色人通用坊令事

右得右京職解偁、戸令云、坊令取正八位以下明廉強直堪時務者充、若當坊無人、聽於比坊簡用者、而延曆年中以降、通取在京畿內人充用、行來日久、因循爲例、仍可補之狀、簡定申送、而事乖法條、遂被勘却、今遵行令條、無人取用、任非其人、何濟繁務、望請當坊比坊無人之時、准前例簡用件色者、右大臣宣、奉勅依請、左京准此、

坊令
坊長

藏人所幷齋宮給也、諸道得業生任例、○中略 註同擧任例、(中略)京職紀信實、菅原道眞、○中略 同屬大少中略○ 左右京本

職請臨時內給、所々擧、諸道擧任之、

〔職原抄下〕左京職唐名京兆又云馮翊 掌京中事、昔者宅地以下、悉京職之所知也、近代移于撿非違使廳、

大夫一人相當從四位下唐名京兆尹 四位已上任之、或爲公卿兼官、 權大夫一人 四位殿上人諸大夫共任之、於諸大夫者爲抽賞之儀、 亮權亮相當從五位下唐名京兆少尹 五位諸大夫任之、雖六位又任之、相當五位也、不可准自餘、頗爲重職、 進大少相當從六位下相當正七位下唐名京兆司錄 六位侍任之 屬大相當正八位下少相當從八位上唐名京兆錄事、

〔續日本後紀十二仁明〕承和九年十月丁丑、文章博士從三位菅原朝臣清公薨、○中略 十二年○弘仁 敍從四位下、轉式部大輔、尋任左中辨、有不適意、求遷右京大夫、上從容問京職大夫官品、清公朝臣對曰、正五位官、即日改爲從四位官、左亦同之、

〔日本書紀二十五孝德〕大化二年正月甲子朔、宣改新之詔曰、○中略 其二曰、初脩京師、○中略 凡京每坊置長一人、四坊置令一人、掌按撿戶口、督察姧非、其坊令取坊內明廉強直堪時務者充、里坊長並取里坊百姓清正強幹者充、若當里坊無人、聽於比里坊簡用、

〔令義解二戶〕凡京每坊置長一人、四坊置令一人、掌按撿戶口、督察姧非、催駈賦徭、謂案職員令、不注坊令職掌、至此乃注者、以坊令職掌、與坊長同、故在一處相併而注也、

〔通典三食貨〕鄉黨

大唐令、諸戶以百戶爲里、五里爲鄉、四家爲鄰、五家○五家原作三家、據唐六典改、爲保、每里置正一人、(中略) 註掌按比戶口、課植農桑、撿察非違、催驅賦役、在邑居者爲坊、別置正一人、掌坊門管鑰、督察姦非、並免其課役、在田野者爲村、別置村正一人、

〔令義解一職員〕左京職 坊令十二人

補任

〔享祿本類聚三代格十八〕太政官符
應差左右京職兵士四百八十人(職別二百卅人、各以廿人爲一番、月別二番、番別十五箇日、)
右被右大臣宣偁、奉勅、往者在外所司、私使兵士、徒施朝憲、還蠧黎庶、所以停廢此色、差點健兒、思省勞煩、□布恩渙、如聞、左右兩京、掌殊諸國、驅策兵士、莫非公途、何者行幸則先驅馳道、尋常則衛護宮城、巡管內而糺非違、搜□人而守囚禁、如斯之類、差科處多、代以健兒、何堪濟事、前從停廢、實在恤人、今之警備、豈謂爲國、宜左右兩京停却健兒、更置兵士、依前件差科事色宜准舊例、
延曆廿年四月廿七日(○又見日本紀略)

〔延喜式左右京四十二〕兵士卅人

〔延喜式左右京四十二〕凡宮城邊、量便立鋪、兵士廿人、爲番守衛、其功食以傜錢充、
凡兵士以淺桃染爲當色、不得與衛士雜亂、
凡兵士幷坊長等不仕料物、充職中用、

〔延喜式左右京四十二〕守正倉六人　守客館二人(只置右京、左京不須、)　守朱雀樹四人　掃清丁卅六人(條別四人、但一條二條各三人、北邊坊二人、○中略)
右依前件雇使、功食以傜錢充、其食人日米一升二合、鹽一勺、(但兵士日米二升、鹽二勺、)功錢並依當時法行之、(但掃清丁功錢不行、)

〔官職秘抄上〕諸職大夫
左右京　修理　參議散三位、殿上四位等任之、自權大夫轉任例、(右京權時○中略)近衛中將兼京職大夫例、(賓綱)辨官兼同大夫例、(輔經、經通、賓政、通俊、)五位任同大夫例、(橘能貞)　同權大夫(○中略)　左右京　修理　四位五位殿上、地下、公達、諸大夫任之、陰陽道者任例、(清明、光榮、)近衛中將兼任修理權大夫例、(隆俊、隆綱、)　同亮(權亮中略)○　左右京　多醫道陰陽道輩任之、諸大夫任之、助俊、補國等也、　同進(大少中略)○　左右京　重代侍任之、多

〔延喜式四十二左右京〕凡每年二月八月、前上丁三日、各雇夫掃除大學、二月五十人、八月一百人、前享一日夕差兵士四人令衞廟門、

〔延喜式四十二左右京〕凡六月十二月大祓、預令掃除其處、亦兵士禁人往還、元日賀明掃除穢蕪、

凡京路皆令當家每月掃除、其彈正巡檢之日、官人一人、史生一人、將坊令坊長兵士等祗承、四月八日、七月十五日、巡察東西寺准此、

凡宮城邊朱雀路溝、皆令雇夫掃除、又左京者、大學、神泉苑、鴻臚東館、右京者、穀倉院、鴻臚西館、客徒入朝之時、均分客館之內、左右京共掃除、並夫一人日充米二升、其功錢依當時法行之、

〔續日本紀四元明〕和銅元年八月庚辰、兵部省更加史生六員、○中略左右京職各六員、

〔續日本紀七元正〕養老元年七月己未、加左右京職史生各四員、

〔延喜式十八式部〕凡諸司史生者、○中略左右京職各十一人、○各○權○人

〔享祿本類聚三代格四〕太政官符

應置職掌事職別二員、并令把笏、

右得左右京職解偁、管司并條令百姓等、申政之日、訴訟之時、進退乖儀、言辭不遜、或執非爲是、總理不伏、如此之類、觸事繁多、望請簡入色人可堪事者、每職置二員、分番上下、守當職裏者、依請、

弘仁十年十一月五日

〔延喜式四十二左右京〕市司執鎰二人

右依前件雇使、功食以徭錢充、其食人日米一升二合、鹽一勺、但兵士日米二升、鹽一勺、功錢並依當時法行之、但掃清丁功錢不行、

〔延喜式四十二左右京〕書生卅四人十一人長上、廿三人雇、限勘造計帳月、

〔延喜式十八式部〕凡諸司使部者、○中略左右京職各十五人、

〔續日本紀（淳仁 二十三）〕天平寶字五年二月丙辰朔、勅（中略）其管左右京並任一人、長官者名以爲尹、官位准正四位下官、

（按ズルニ、當時藤原仲麻呂事ヲ用井、盡ク官號ヲ改ム、左右京職ノ大夫ヲ改メテ尹ト爲ス、蓋シ唐ノ京兆尹ニ擬シタルモノニテ、八年九月ニ至リ、此名モ諸官ト共ニ舊ニ復セシナリ、

〔類聚三代格（五）〕太政官符

改定左右京職大夫官位事

右案官位令、正五位上官、今被右大臣宣偁、奉勅宜爲從四位下官、

弘仁十三年正月廿六日（○又見類聚國史）

〔令義解（四 考課）〕興崇禮教、禁斷盜賊、爲京職之最、（謂京兆以上）

〔延喜式（四十二 左右京）〕凡車駕行幸、京職前驅、若夜即屬以上及史生將坊令書生等、執燎供奉、（其松明職備之）

〔延喜式（四十二 左右京）〕凡每年九月幣帛使向伊勢者、史生一人、將坊令二人兵士四人前驅、（臨時幣帛使亦同）

凡齋王臨河祓除、及向伊勢者、進屬各一人、史生一人、將坊令二人兵士十人前驅、（出雲國造奏神壽詞、遣大唐渤海等國使、祭天神地祇、若上道等日、及蕃客入朝之時亦同、）

凡賀茂齋内親王祓除、及向齋院者、進屬史生各一人、將坊令二人兵士十人前驅、預營作道橋泥塗等、

凡三位已上子孫、并四位五位子、年到二十一已上者、貫屬式部省、

〔延喜式（四十二 左右京）〕凡東寺文珠會日、進屬各一人、史生一人、坊令二人、兵士六人、向會所供事、（左京供西寺會）

凡京中路邊病者孤子、仰九箇條令其所見所遇、隨便必令取送施藥院及東西悲田院、

凡每年出擧造橋料錢二百貫、取其息利隨事充用、官人遷替依數付領、

〔延喜式（四十二 左右京）〕凡正月十七日、於豐樂院有射禮節、自豐樂門迄儀鸞門、左右京職中分其庭東西掃除、其夫功食料充調傜錢、

初見

〔大內裏圖考證左右京職二十七〕諸圖、左京職、朱雀大路東、姉小路北方一町、諸圖、左京職、朱雀大路西、姉小路北方一町、

〔日本書紀天武二十九〕十四年三月辛酉、京職大夫直大參巨勢朝臣辛檀努卒、

〔續日本紀元正七〕養老元年正月己未、中納言從三位巨勢朝臣麻呂薨、○中略飛鳥朝○天武京職直大參志丹之子也、

〔日本書紀持統三十〕三年七月丙寅、詔左右京職及諸國司、築習射所、

職員職掌

〔令義解職員一〕左京職右京職准此、管司一、

大夫一人、掌左京戸口、名籍、字養百姓、謂字養也、亦糺察所部、貢擧、孝義、田宅、雜徭、良賤、訴訟、謂凡訴訟者皆自下始、故先由京國、而後至官省也、市廛、度量、倉廩、租調、兵士、器仗、謂案簿令、有兵士、无器仗、令於此令、兵士器仗、注、郎知、非兵士之器仗、別有官器仗、與諸國同、堂道橋、過所、闌遺雜物、僧尼名籍事、亮一人、大進一人、少進二人、大屬一人、少屬二人、坊令十二人、使部卅人、直丁二人、

〔拾芥抄中本官位唐名〕左右京大夫左右京職右扶風、京兆府、京兆尹、河南府、右馮翊、亮京兆尹小監、京兆馮翊、進京兆司錄、京兆馮翊判事、屬京兆錄事、馮翊記事、

〔唐書百官志四十九下〕西都東都北都牧各一人、從二品、西都東都北都鳳翔成都河中江陵興元興德府尹各一人、從三品、掌宣德化、歲巡屬縣、觀風俗、錄囚、恤鰥寡、親王典州、則歲以上佐巡縣、

〔宇治拾遺物語二〕今はむかし左京のかみなりける古上達部ありけり、年おひていみじうふるめかしかりけり、ゑもわたりなる家にありきもせでこもりゐたりけり、そのつかさのさくはんにて紀用經といふもの有けり、長岡になんすみける、つかさの目なれば、此かみのもとにもきてなんをこづりける、

〔令義解官位一〕正五位○上階左右京大夫　從五位○下階左右京亮　從六位○下階左右京大進　正七位○上階左右京少進　正八位○下階左右京大屬　從八位○上階左右京少屬

古事類苑

官位部三十一

令制官職二十七

左右京職

左右京職ハ、其創置ヲ詳ニセズ、孝德天皇ノ大化二年ニ、坊令、坊長ノ制ヲ定メタリシカドモ、京職ノ事未ダ見エズ、天武天皇ノ十四年ニ初テ京職大夫ノ名アリ、此時ハ未ダ左右ニ分タザリシナラム、持統天皇ノ三年ニ左京職ノ名見エタレバ、兩京ヲ置キシコト明ナリ、

左右京ニハ、各大夫、亮、進、屬ノ四等官、及ビ坊令（一名條令）等ノ職アリ、京內ノ戶口名籍等ヲ掌ルコト槪ネ國司ノ如ク、更ニ市廛度量ノ事ニ預ル、而シテ輦轂ノ下ニ在ルヲ以テ、行幸ニ前驅シ、齋宮齋院等ヲ送迎シ、孤兒ヲ收養シ、道路ヲ掃清スル等ノ事頗ル繁シ、坊令ノ下ニ坊長アリ、（又町長トモ云フ）坊令ト共ニ專ラ戶口ヲ檢シ、姦非ヲ督シ、賦徭ヲ催スコトヲ掌ル、保トハ五家相保スルモノニテ、一人ヲ以テ長ト爲シ、互ニ相檢察ス、

此職ハ原來所部ヲ糺察シ、訴訟ヲ司リシガ、中世以降漸ク衰ヘテ、其職檢非違使ニ移ルニ至レリ、

名稱

〔倭名類聚抄 五官名〕職 職員令云、○中略左京職、（比多利乃美佐止豆加佐）右京職、（美岐乃美佐止豆加佐）

〔朝野群載 六太政官〕諸司訓詞 左右京職（ヒダリミギリノミサトノツカサ）

〔職原抄 下〕左京職 唐名京兆 又馮翊

所在

〔拾芥抄 中本百官〕京職 左右 左朱雀東、姉小路北、七條北、堀川西、左京、堀川東、右京、

〔日本紀略桓武〕延曆十二年七月辛丑、巡覽新宮、賜造宮使及將領衣、　十四年五月己卯、造宮使主典已下、將領已上、一百三十九人、各隨其功敍位、

〔日本後紀二十嵯峨〕弘仁元年九月癸卯、依太上天皇〇平城命、擬遷都於平城、正三位坂上大宿禰田村麻呂、從四位下藤原朝臣多聞、從四位下紀朝臣田上等爲造宮使、

造平城宮司

〔續日本紀四元明〕和銅元年九月戊子、以正四位上阿倍朝臣宿奈麻呂、從四位下多治比眞人池守、爲造平城宮司長官、從五位下中臣朝臣人足、小野朝臣廣人、小野朝臣馬養等爲次官、從五位下坂上忌寸忍熊爲大匠、判官七人主典四人、

〔續日本紀四元明〕和銅二年十月癸巳、勅造平城宮司、若彼墳隴見發掘者、隨卽埋歛、勿使露棄、普加祭酹以慰幽魂、

造難波宮司

〔續日本紀十一聖武〕天平四年九月乙巳、正五位下石川朝臣枚夫爲造難波宮長官、

造離宮司

〔續日本紀九聖武〕神龜元年十月辛卯、天皇幸紀伊國、　甲午、至海部郡玉津嶋頓宮、留十有餘日、　戊戌、造離宮於岡東、　壬寅、賜造離宮司、○中略行宮側近高年七十已上祿、各有差、

〔續日本紀十四聖武〕天平十四年八月癸未、詔曰、朕將行幸近江國甲賀郡紫香樂村、卽以造宮卿正四位下智努王、輔外從五位下高岡連河內等四人、爲造離宮司、

催造宮官

〔續日本紀十一聖武〕天平四年二月乙未、中納言從三位兼催造宮長官知河內和泉等國事阿倍朝臣廣庭薨、

○按ズルニ、催造宮官ヲ置ケル年代詳ナラズ、而シテ續日本紀聖武天皇神龜元年三月紀ニ、始テ催造司ヲ置キ、天平二年九月紀ニ、小野牛養ヲ催造司監ニ任ズルノ文アリ、催造司ト催造宮官ト同一ナリヤ否ヤ詳ナラズ、

造宮使

〔續日本紀二十三淳仁〕天平寶字五年十月己卯、詔曰、爲改作平城宮、暫移而御近江國保良宮、是以國司史生已上供事者、幷造宮使藤原朝臣田麻呂等加賜位階、郡司者賜物、

〔續日本紀三十八桓武〕延暦三年六月己酉、以中納言從三位藤原朝臣種繼○中略等、爲造長岡宮使、六位官八人、於是經始都城、營作宮殿、

〔續日本紀四十桓武〕延暦八年三月癸卯朔、造宮使獻酒食幷種々玩好之物、

直丁三人　廝二人　妻太匠卅五人　廝一十二人　燒炭仕丁一十九人　廝一十三人作瓦仕丁三人　廝三人　衞士七百六十人　火頭三百九十七人　并壹仟參佰漆拾參人料（長上工一十三人　史生八人　醫師一人　省掌二人　民領廿九人　番上工六十三人　直丁三人　并一百一十九人　人別日米二升　鹽二勺　妻太匠卅五人　廝十二人　燒炭仕丁一十九人　作瓦仕丁三人　衞士七百六十人　并八百卅九人　人別日米二升　鹽月一升　直丁廝二人　燒炭仕丁廝一十三人　作瓦仕丁廝三人　火頭三百九十七人　并四百一十五人人別　庸綿月二、屯）

請甲賀宮米參佰伍拾壹斛陸斗

鹽五斛捌斗伍升貳合

右民領二人　妻太匠一十八人　廝三人　衞士五百六十三人　并伍佰捌拾陸人料

請奈良宮米貳佰貳拾三斛二斗

鹽參斛貳斗伍升貳合

庸綿捌佰參拾屯

右長上工一十三人　史生八人　醫師一人　省掌二人　民領廿七人　番上工六十三人

直丁三人　廝二人　妻太匠廿七人　廝九人　燒炭仕丁一十九人　廝一十三人　作瓦仕丁三人　廝三人　衞士一百九十七人　火頭三百九十七人　并漆佰捌拾漆人料

以前人等來十一月卅箇日料糧所請如件、故移、

天平十七年十月廿一日　　錄從八位上島田臣國足

輔從四位下秦伊美吉

（續日本紀 三十 稱德）神護景雲三年十一月壬午、造宮長上正七位下秦倉人呰主、〇中略賜姓秦忌寸、

（日本後紀 五 桓武）延曆十五年七月戊戌、外從五位上物部多藝連建麻呂爲造宮大工、外從五位下秦忌寸都岐麻呂爲少工、

史生
算師
工人

爲少輔、

〔續日本紀光仁三十三〕寳龜五年三月甲辰、從五位上文室眞人高嶋爲造宮大輔、

〔續日本紀光仁三十四〕寳龜八年正月戊寅、從五位上藤原朝臣鷲取爲造宮大輔、從五位下文室眞人子老、爲少輔、

〔日本後紀桓武五〕延曆十五年七月癸丑、造宮職官位准中宮職、但大属特爲七位官、

○按ズルニ、官位相當ヲ皆中宮職ニ准ジ、大属ノミハ、中宮職ハ正八位下ナルヲ造宮職ハ七位トセシナリ、

〔日本後紀桓武八〕延曆十八年二月乙未、贈正三位行民部卿兼造宮大夫美作備前國造和氣朝臣清麻呂薨、四月乙酉、中納言從三位藤原朝臣内麻呂爲兼造宮大夫、近衞大將但馬守如故、

〔續日本紀元明六〕和銅七年十月辛未、造宮省加史生六員、通前十四人、

〔續日本紀元正八〕養老三年六月丙子、令○中略造宮省○中略等始把笏焉、

〔日本後紀桓武五〕延曆十五年十月戊辰、造宮職筭師爲從八位官、

〔東大寺正倉院文書十二〕戸主少初位上出雲臣深嶋年肆拾伍歳、正丁、造宮省工、右手於灸○中略

山背國愛宕郡出雲郷雲下里神龜三年史生從八位下間人宿禰男君

〔續修東大寺正倉院文書十五〕造宮省移民部省文所請大粮、

造宮省移民部省

合應請米伍佰漆拾肆斛捌㪷

鹽玖斛壹㪷肆合

庸綿捌佰參拾屯

右長上工一十三人　史生八人　醫師一人　省掌二人　民領廿九人　番上工六十三人

〔續日本紀 七元正〕養老元年二月丙申、制曰、除造宮省之外、令外諸司判官例無大少、官品宜准令員判官一人之例、

〔續日本紀 四元明〕和銅二年九月乙卯、授大倭守從五位下佐伯宿禰男從五位上、造。宮。大。丞。從六位下臺忌寸宿奈麻呂從五位下、

〔續日本紀 八元正〕養老四年十月戊子、從五位下當麻眞人老爲造。宮。少。輔。、

〔續日本紀 十四聖武〕天平十三年九月乙卯、以正四位下智努王、正四位上巨勢朝臣奈氐麻呂二人、爲造宮卿、

〔續日本紀 十四聖武〕天平十四年八月丁丑、詔授造。宮。錄。正八位下秦下島麻呂從四位下、賜太秦公之名幷錢一百貫、絁一百匹、布二百端、綿二百屯、以築大宮垣也、

〔續日本紀 十六聖武〕天平十七年五月庚申、遣造。宮。輔。從四位下秦公島麻呂、令掃除恭仁宮、

〔續日本紀 十九孝謙〕天平勝寶六年四月庚午、正五位下中臣朝臣益人爲造宮少輔、

〔續日本紀 二十二淳仁〕天平寶字三年十一月戊寅、遣造宮輔從五位下中臣連張弓越前員外介從五位下長野連君足造保良宮、六位已下官五人、

〔續日本紀 二十四淳仁〕天平寶字六年正月戊子、從五位上巨曾倍朝臣難破麻呂爲造。宮。大。輔。、七年正月壬子、從五位上藤原朝臣宿奈麻呂爲造宮大輔、上野守如故、從五位下石河朝臣豐人爲少輔、

〔續日本紀 二十四淳仁〕天平寶字七年四月丁亥、從五位下石河朝臣豐人爲造宮大輔、從五位下小野朝臣小贄爲少輔、

〔續日本紀 二十五淳仁〕天平寶字八年十月癸未、從五位下小野朝臣石根爲造宮大輔、

〔續日本紀 三十稱德〕神護景雲三年八月甲寅、從五位上阿倍朝臣清成爲造宮大輔、

〔續日本紀 三十一光仁〕寶龜二年九月己亥、從五位上榎井朝臣子祖爲造宮大輔、正五位下息長眞人大國

沿革

職員補任

造宮職

造宮ノ官ハ、宮城ノ造營ノ事ヲ掌リシガ、文武天皇ノ大寶元年ニ、此官ヲ職ニ准ゼラレタリ、後改メテ省ト爲シヽガ、桓武天皇ノ延暦元年ニ之ヲ廢セリ、而シテ日本後紀延暦十五年七月紀ニ、造宮職官位ヲ中宮職ニ准ズルノ文アレバ、再置セシヲ知ルベシ、平城天皇ノ大同元年二月ニ此職ヲ停メ、木工寮ニ併セラレシヨリ後、復タ之ヲ置カズ、

造平城宮司、造難波宮司、造離宮司、催造宮官、造宮使等ハ、臨時ニ之ヲ置キシモノニテ、常置官ニアラズ、

〔續日本紀 二文武〕大寶元年七月戊戌、太政官處分、造宮官准職、○下略

〔續日本紀 二文武〕大寶二年正月丙子、造宮職獻杜谷樹長八尋、俗曰比比良木、

〔續日本紀 四元明〕和銅元年三月丙午、正五位上大伴宿禰手拍爲造宮卿、

○按ズルニ、造宮職ヲ改テ省トセシ事、史ニ所見ナシ、

〔續日本紀 三十七桓武〕延暦元年四月癸亥、詔曰、朕君臨區宇、撫育生民、公私彫弊、情實憂之、方欲屏此興作、務茲稼穡、政遵儉約、財盈倉廩、今者宮室堪居、服翫足用、佛廟云畢、錢價既賤、宜且罷造宮勅旨二省、法花鑄錢兩司、以充府庫之寶、以崇簡易之化、但造宮勅旨雜色匠手、隨其才幹、隸於木工内藏等寮、餘者各配本司、

〔日本後紀 五桓武〕延暦十五年七月癸丑、造宮職官位准中宮職、

○按ズルニ、造宮省廢後、造宮職ヲ置キシ事、史ニ所見ナシ

〔日本後紀 十三桓武〕大同元年二月丁酉、停造宮職、併木工寮、

〔續日本紀 四元明〕和銅元年三月丙午、正五位上大伴宿禰手拍爲造宮卿、

停廢

〔續日本紀 二十八 稱德〕神護景雲元年八月丙午、從五位下紀朝臣廣庭、阿倍朝臣小東人、並爲勅旨少輔、從五位下葛井連道依爲員外少輔、法王宮大進如故、外從五位下健部朝臣人上爲大丞、

〔續日本紀 二十九 稱德〕神護景雲二年十一月癸未、外從五位下石上朝臣家成爲勅旨少輔、從五使下紀朝臣門守爲大丞、

〔續日本紀 三十一 光仁〕寶龜二年閏三月戊子朔、從五位下大中臣朝臣繼麻呂爲勅旨少輔、

〔續日本紀 三十五 光仁〕寶龜十年十二月己酉、中納言從三位兼勅旨卿侍從勳三等藤原朝臣繩麻呂薨、(中略)寶龜初、拜中納言、尋兼皇太子傅、勅旨卿、

〔公卿補任 光仁〕寶龜四年(癸丑)

中納言從三位藤繩麻呂(勅旨卿)

〔續日本紀 三十三 光仁〕寶龜五年三月甲辰、正五位下葛井連道依爲勅旨少輔、從五位下健部朝臣人上爲員外少輔、伊豫介如故、

〔續日本紀 三十四 光仁〕寶龜七年三月癸巳、大外記外從五位下羽栗翼爲兼勅旨大丞、　八年五月癸亥、勅旨少錄正六位上丹比新家連稻長、大膳膳部大初位下東麻呂、賜姓丹比宿禰、

〔續日本紀 三十五 光仁〕寶龜九年十月乙未、遣唐使第三船、到泊肥前國松浦郡橘浦、判官勅旨大丞正六位上兼下總權介小野朝臣滋野上奏言、(下略)

〔續日本紀 三十六 桓武〕天應元年十月己丑、從五位下健部朝臣人上爲勅旨少輔、

〔續日本紀 三十七 桓武〕延曆元年四月癸亥、是日詔曰、朕君臨區宇、撫育生民、公私凋弊、情實憂之、方欲屏此興作、務茲稼穡、政遵儉約、財盈倉廩、今者宮室堪居、服翫足用、佛廟云畢、錢價既賤、宜且罷造宮勅旨二省、法花鑄錢兩司、以充府庫之實、以崇簡易之化、但造宮勅旨雜色匠手、隨其才幹、隸於木工內藏等寮、餘者各配本司、

職員

延慶三年九月十三日、兼修理右宮城使、

〔公卿補任後土御門〕寛正七年丙戌〇文正元年

参議正四位上藤宣胤

長祿二三十四、右宮城使〇中略寛正二年三月五日、左宮城使、

〔公卿補任後奈良〕天文四年乙未

参議正四位上藤兼秀

享祿三正廿、修理左宮城使、

勅旨省

勅旨省ハ、其創置詳ナラズ、續日本紀淳仁天皇天平寶字八年十月ノ條ニ、粟田朝臣道麻呂ノ官銜ニ、勅旨員外大輔トアルヲ以テ、史冊ニ見エタル始ト爲シ、桓武天皇延暦元年ニ停廢ス、其職掌ハ同年廢省ノ詔ニ、服翫足用ノ文アレバ、臨時ノ勅旨ニ由リ、服翫ヲ造リシモノナルガ如シ、

〔續日本紀淳仁二十五〕天平寶字八年十月癸未、式部大輔勅旨員外大輔授刀中將從四位下粟田朝臣道麻呂爲兼因幡守、

〔續日本紀考證淳仁八〕後又有勅旨卿、及勅旨少輔、勅旨大丞少丞等之稱、蓋八省外、別置是官、〇中略但未詳其置在何年、

〇按ズルニ、天平寶字二年八月、官號ヲ改易セシ時、勅旨省ノ名見エザレバ、其以後ニ置キシ所ナラン、

延久四年十一月九日

〔朝野群載七公卿家〕補公卿家令

修理右宮城主典正六位上行右京屬中原朝臣重貞

被右大臣殿〔○藤原俊家〕仰云、件人宜爲家令者、

永保元年七月　日　　別當散位惟宗朝臣

〔本朝世紀〕康和元年四月九日辛巳、權左中辨能俊朝臣任修理左宮城使、叔父陸奥守國俊朝臣服暇

內也、

〔濫觴抄下〕左右宮城使　鳥羽二年戊子(天仁元年嘉承三年)三月五日始置之、

〔本朝世紀〕康治元年六月十八日己卯、權大納言藤伊通卿參左仗、被行宮城使、防鴨河使除目、右大辨

源俊雅朝臣書之、〔○中略〕

太政官(牒奏)

修理左宮城使　使正四位下藤原朝臣資信(兼左中辨)　判官正六位上藤原朝臣敦雅(兼撿非違使右衛門尉)

主典正六位上大江朝臣久俊(兼式部)

修理右宮城使　使從四位上源朝臣雅綱(兼右中辨)　判官正六位上三善朝臣惟康(兼左大史)　主典正六

位上清原眞人宗景(兼民部錄〇中略)

康治元年六月十八日

〔玉海〕治承三年十月廿二日丙午、隆職注送、去夜臨時除目被任修理宮城使、造東大寺使、防鴨河使等

也、

〔公卿補任花園〕延慶四年(辛亥〇應長元年)

參議從四位上藤公敏

修理左右宮城使

〔日本紀略 清和〕貞觀十五年十月十日辛丑、勅、左右坊城使、仁壽二年既從停廢、隷木工寮、今彼寮作事繁多、難兼濟、宜復舊置之、

〔拾芥抄 中本百官〕修理宮城使 左右　使　判官　主典

〔職官志 四〕修理宮城使 承和六年三月、修理宮城使左右各二員、今省之、定置各一員、在其前已置史官失之也、既有修理職、又置修理宮城使、獨有遣宮職、時別有遣宮使、僅遣宮長官等也、修理職訓要以爲奉行禁內修理之事、修理宮城使顧統紗以爲修理宮城十二門及大社敗壞、併考之難同掌修理、所謂使者以其所修理弘多、補之勤修理職也、修理職使世以爲恒官、而修理宮城使、職因事置、置廢世有、

〔標注職原抄 下本〕修理宮城使の始置詳ならず、三代格天長元年の官符に左右坊城使あり、坊は京內諸坊城は宮城にて大內の外郭、又は左右京の坊門など修理の職ならん歟、左右と分置せられたるにても、外重より京中の事までの如くおもはる、使といふにても宮城以外にあづかることとゑるし、修理職は大工と共に中重以內を掌り、外重以外は坊城使の任なりけん、

〔職原抄 下〕修理宮城使 左右
使 辨官兼之、多者左右中辨兼任之　判官 官史常兼之　主典

〔官職秘抄 下〕修理宮城使 令外官　以中辨多任之、或及少辨、
判官　左一人必五位外記史間補之、一人六位撿非違使補之、右一人經外記史、五位一人當職史補之、五位判官一方二人例、延久三年　主典　式部民部錄左右京屬志等任之

〔百錬抄 五 後三條〕延久三年三月廿七日、始置修理左右宮城使、前日有議定、而初所被任也、准左右坊城使例也、

〔朝野群載 八 別奏〕太政官符　五畿內諸國司
應禁斷御鷹飼外、私飼鷹鶻、并京邊狩獵事、○中略
修理左宮城使正四位上行左中辨源朝臣　修理左宮城判官正五位下行左大史小槻宿禰

〔類聚三代格五〕太政官符

應左右坊城使、幷侍從厨、防鴨河、葛野河兩所五位以下別當四年遷替兼責解由事、

右太政官去天長元年六月十九日下民部省符偁、參議左大辨從四位上直世王奏狀偁、侍從厨幷防鴨川、葛野河兩所五位以下別當等、永預其事、曾無交替、縱有欠損、何以拘留、稽之公途、理不可然、望請自今以後限三箇年、更相遷替、付領官物、即責解由、謹錄事狀、伏聽天裁者、右大臣宣、奉勅依奏者、今被大納言正三位兼行左近衞大將民部卿清原眞人夏野宣偁、奉勅三年之歷、從事迫促、宜自今以後四箇年爲遷替期、左右坊城使同准之、

天長八年十二月九日

○按ズルニ、此職ヲ始テ置キシ年代詳ナラズ、

〔享祿本類聚三代格四〕應停修理左右坊城使置修理職事

□□□□□□□□□□年十月十日、符已置件□□□以後宜改其號、

○按ズルニ、本書缺失シテ年月ヲ知ルコトヲ得ズ、弘仁九年ノ官符ナルベシ、說ハ修理職ノ條ニ擧ゲタリ、

〔續日本後紀八仁明〕承和六年三月丙申、修理坊城使員、左右各二員、今省定置各一員、

〔類聚三代格七〕太政官符

應修理坊城非理之損事

右得宮內省解偁、木工寮解偁、撿案內、太政官去仁壽二年六月七日下左右京職符偁、木工寮解偁、省去三月廿五日符偁、太政官今月廿日符偁、右大臣宣、奉勅停修理左右坊城使隸木工寮、宜官物一事已上受領者、寮依符旨受領既訖、○中略

齊衡二年九月十九日

用度

已下、三百卅三日已上、乃爲ニ滿役一、此所ニ摭未見ニ法式一、人非ニ木石一、何暇有ニ堪、伏請依レ令、疾病者給ニ役日直一、放免厮丁一者、不レ入ニ役限一、卽三百日以下、二百五十日已上爲ニ一年役限一、然則匠丁有レ休、闕功省レ倍、許レ之、

〔延喜式二十五主計〕凡諸國所レ進修理職、交易檜皮、幷造瓦料魚鹽海藻等、待ニ彼職日收勘會抄帳一、

〔拾芥抄中末宮城〕諸司厨町

修理職領一町近衛南中宮東　修理職二町近衛南中御門北西洞院東室町西

〔朝野群載二十八諸國功過〕修理職

納畢、前山城守從五位下賀茂朝臣保道、任中四箇年、所レ濟納物事、

承德元年　客作兒功稻仟漆佰肆拾束　葉仟圍

同二康和元二幷參箇年各色目同前

右件年々納物、依レ例納畢如レ件、

康和五年二月　日　正六位上行少屬紀朝臣

正六位上行少進惟宗朝臣

正四位上行大夫兼美作守藤原朝臣

寬弘七年三月廿三日宣旨云、應下除目時如ニ舊令一進中納畢勘文上修理職納、諸國任終年、調庸雜物事、

右彼職奏狀云、長保元年被レ下ニ國々宣旨一、得ニ彼職奏狀一云、除目時令ニ彼職進ニ納畢勘文一者、宣旨所レ指、炳誡已重、而諸國牧宰、偏立ニ愚執一、動致ニ遁避一、或守ニ前格之文一、已拋ニ後符之誡一、或存ニ官符之趣一、專忘ニ宣旨之嚴一、任レ舊依レ請者、

〔後愚昧記〕應安二年正月十六日、景大夫入道大江景繁朝臣子、法名觀圓、土岐大膳大夫入道家人也、修理職領丹州山國庄、元[illegible]將軍、木工頭知康朝臣知行之、以ニ右大將一立ニ于面一、以ニ土岐權威一去年以ニ武家擧一、達ニ預勳裁一了、祗ニ候右大將亭侍屋一云々、

○

長上紀助吉死闕替

右得修理職去七月廿七日解偁、件氏吉等、才能頗長、年勞又積、仍可被補長上、如件、望請官裁、被補件闕、將勵後進者、正三位行中納言兼春宮大夫左衛門督藤原朝臣師氏宣、依請者、省宜承知、依宣行之、符到奉行、

權右少辨　　左大史

康保四年十月十四日

〔朝野群載九功勞〕大工依造功申敍爵

正六位上行修理大工伴宿禰延武誠惶誠恐謹言

請殊蒙天恩因准先例依造宮賞被敍爵狀

右延武謹撿案內、國家有大造作幷造營之時、修理木工、不論大小工、以爲第一之者被敍爵、古今之例也、是以造興福寺時、多吉忠以修理小工、被關榮爵、是必依可被抽賞於第一者、雖非大工、以小工所被敍也、爰延武爲大工之上職、已爲第一、可預榮爵、尤當其仁、抑吉忠與延武、大小工之間非無差別、皇居與他所、恩賞之處亦可懸隔、重案事情、木工者文室光任、紀守武相比爲五位、修理者雖竭勤節、已無敍爵、職之大愁、何以如之、望請天恩、依件賞被敍爵者、爲職爲身、將知勤節、延武誠惶誠恐謹言、

延久四年正月五日　　正六位上修理大工伴宿禰延武

〔台記〕久安四年七月廿日乙巳、早旦範家來仰云、去十七日工頼成、可任木工少工之由宣下了、而申非本望之由、可改任修理少工者、召外記仰之、

〔類聚國史百七職官〕弘仁十年十一月辛卯、修理職言、據令、凡役丁匠、皆十人外給一人、充火頭、疾病、及遇雨不堪執作之日減半食、闕功令倍、唯疾病者、給役日直、又飛驒國、庸調俱免、每里點匠丁十人、每四丁給厮丁一人、頃年木工寮例、匠丁百卅人內充厮丁五人、工長之外、悉以從役、總計一歲之內、三百五十日

史生

算師

諸工

〔類聚國史百七職官〕弘仁九年七月庚寅、定修理職史生八員、

〔延喜式十八式部〕凡諸司史生者、〔〇中略〕修理職十人、〔權二人〇中略〕但〔〇中略〕修理〔〇中略〕等官職坊寮司史生待宜旨補任、

〔類聚國史百七職官〕弘仁十三年七月辛卯、修理職置算師一員、

〔延喜式十八式部〕凡修理職長上工、木工五人、檜皮工一人、瓦工二人、石灰工一人、將領卅二人、並預考、又工部六十人待職移勘籍補之、同預考、

〔類聚符宣抄七〕太政官符式部省

應補修理職燒石灰長上從八位下淸宗宿禰忠孝事

右得彼職去四月廿八日解偁、謹檢案内淸宗氏秀以石灰長上之勞、去年被任山城權少目、自爾以降依無其人、勤闕其用、方今件忠孝是氏秀之男也、箕裘繼業職掌可堪、不擧若人誰練其道、望請以件忠孝被補氏秀之替、將令勤石灰之事者、右大臣宣、依請者、省宜承知依宜行之、符到奉行、

右少辨藤原朝臣國光　左少史栗前宿禰扶茂

天曆四年九月廿三日

〔類聚符宣抄七〕太政官符式部省　外

應補長上三人事

從七位上公連氏吉

長上額田吉村轉任權少工替

從七位上淸世吉世

轆轤長上品治豐連死闕替

從七位上新連近助

別當

非參議從三位平惟忠

仁治元十廿四、修理權大夫、

〔公卿補任 花園〕延慶四年辛亥〇應長元年

參議從四位上藤公敏 七月廿日任、兼修理大夫、

〔明和新增京羽二重 一〕藏人方

修理職田中大膳平盛豐　同井上友之進源忠顯

〔安政三年雲上明覽 上〕禁裏御所

御修理職　西池監物 上加茂　德岡典膳 百万遍ヤシキ　岡本隼人 寺町下ノ切通

下　内藤東市佑 同切通　峯式部少丞 廣小路寺町東

准后御方

御修理職兼御鍵番　藤林左衛門權尉 八條殿町東　岩波造酒 塔ノダン　清水播部

權助 御靈馬場

〔慶應元年都仁志喜 二下〕藏人方

修理職無位中川源房武　廣瀨同勝明

〔小右記〕長和五年二月廿七日壬寅、資平告送云、昨日所々別當定了、〇中略修理職以左大辨道方爲被職別當、木工寮以左中辨經通爲別當、彼職寮事一向可執行、又造宮事可行之宣旨等下了、

〔小右記〕長元四年九月十四日己未、所充淸書事問遣右大辨、報狀云、修理職、穀倉院、可充內府之由、昨日關白被命者、土代充關白、余報云、內藏寮、修理職、穀倉三所猶第一爲別當、就中攝政關白必爲三箇所別當、舊例勘文等指夾笇送大辨許、承平七年例爲後鑒、貞信公御例也、示送云、申案內關白被命云、依舊例可淸書、亦以此由可示下官者、件土代前太相國先年所見給、彼時一定、今更被改、可無便歟、

補任

〔兼胤公記〕寶曆三年四月十六日、修理職奉行五辻三位日野西辨被ㇾ示、今度總御葺替之處、所々端々殘候由、是ハ一兩年已前ニ葺替、御屋根も宜故、今度不ㇾ改候由ニ候、其內渡殿抔も其通ニ候、先年每度總葺替之節ハ、悉相改殘候ヶ所無ㇾ之候、今度殘候內ニ、早速修理無ㇾ之候而者、不ㇾ叶所も有ㇾ之候間、何とぞ悉葺替有ㇾ之候樣、修理職共申候ニ付、被ㇾ示之由也、猶追而可ㇾ申之由示了、

〔官職秘抄上〕諸職大夫

修理　參議散三位、殿上四位等任ㇾ之、自權大夫轉任例、（中略）修理濟政（○中略）　同權大夫（○中略）　修理　四位五位殿上地下公達諸大夫任ㇾ之、（○中略）　近衞中將兼任修理權大夫例、（隆俊、隆綱）　同亮（○中略）　修理　殊有ㇾ清撰、五位例、（大膳秀行、高世、民道）（○中略）　同進（大少）（○中略）　修理　重代侍任ㇾ之、多藏人所幷齋宮給也、五位進例、（中略）修理行政　同屬（大少）（○中略）　修理　本職請自ㇾ下師任ㇾ之、或又臨時內給、

〔日本紀略十三後一條〕寬仁元年正月廿三日癸亥、去夜竊盜入御所、而宿直瀧口二人、經南殿庭東走射之、瀧口內舍人藤原長輔擬政隨身、同良孝等射取之、卽有勅祿、　廿四日甲子、今夜內舍人長輔任大舍人允、良孝任修理進、依昨日賞也、

〔公卿補任堀河〕康和六年（甲申○長治元年）

非參議從三位藤顯季

寬治八年七月十三日、任修理大夫、

〔公卿補任崇德〕保延五年（己未）

非參議從三位源行宗

元永三正廿八、修理權大夫、

〔玉海〕治承三年十一月十七日辛未、今日有解官除目等、（○中略）　除目（○中略）　修理大夫平經盛（兼）

〔公卿補任後嵯峨〕寬元四年（丙午）

正八位下修理大屬　從八位上修理少屬

〔拾芥抄中本官位唐名〕修理大夫修理職將作大匠　將作監匠作大尹　亮匠作少尹將作少匠　進將作丞　屬將作主簿　笇師將作計史

○將作大匠ノ事ハ、土工司篇ニ漢書、唐六典等ヲ引キタリ、宜シク參看スベシ、

〔百寮訓要抄〕修理職。內裏の修理造作事奉行する職也、もろ〳〵の工以下此所にしたがふべし、

〔侍中群要十〕御殿修理　可塗石灰壇時仰修理職

〔夕拜備急至要抄下〕一內裏修理木工寮修理職

修理職

紫宸殿但此內內匠寮所役相交　透渡殿　中門廊村上中門井土間　殿上內下侍二ヶ間諸對屋　陣座　床子座　內侍所

進物所土間分　藏人町　矢殿　本所藏人所殿下御直廬　記錄所

〔夕拜備急至要抄上〕一最勝講　修理木工寮修理職

一五節舞姬參入　修理木工寮修理職

〔夕拜備急至要抄下〕一立太子　同○春宮坊　內膳屋令修理職造進

一立后節會　修理職立炬火屋

〔禁秘御抄上〕草木

凡清涼殿及瀧口透垣等、皆木工寮役、他殿舍修理職役也、

〔日本紀略五冷泉〕安和元年十月八日戊午、今日戌二點、天皇自麗景殿遷御清涼殿、先是仰修理職令替改板敷、先帝久御殿昇霞、仍改敷也、

〔日本紀略八花山〕寬和元年十月十三日癸丑、大嘗會以前可造含嘉堂之由、仰修理職、

〔日本紀略十二三條〕長和三年六月十九日癸酉、於修理職有造宮事始、

廳舍　職員 職掌

左兵衛督清原眞人夏野宣、偁、奉レ勅、停二修理職一、隷二木工寮一、其□□□□□□□職之□、但減二大允大屬各一人、醫師一人、□□師一員、〇下文缺

〇按ズルニ、本書缺損シテ年月ヲ知ルコト能ハズ、其載スル所ノ清原夏野ノ官位ニ據リテ考フルニ、類聚國史ニ天長二年七月癸卯、授二正四位下清原眞人從三位一、任二中納言一ト見エ、同三年左近衛大將民部卿ニ轉ゼシ事見エタレバ、本文ハ天長二年三年ノ間ニアルコトヲ知ル、此後再ビ修理職ヲ置キシ事ハ、史ニ之ヲ逸セリ、

〔拾芥抄中本 百官〕修理職外令 大宮東、陽明門大路南、

〔職原抄下〕修理職、掌二宮中修理事一、

大夫一人相當從四位下 唐名匠作大尹　四位已上任レ之、或公卿任レ之、　權大夫一人　四位五位殿上人任レ之、或諸大夫任レ之、頗爲二規模一也、　亮權亮 相當從五位下 唐名匠作少尹　諸大夫任レ之、相當五位也、然而六位又任レ之、諸司四分中頗爲二重職一歟、大膳、左右京修理之外無レ當二五位之四分一、然而近代以二左右京一爲レ重、其次修理、其次大膳也、但大膳亮頗劣也、　進大少 相當從六位上 相當從六位下 唐名匠作丞　六位侍任レ之　屬大少 相當從七位下 相當從八位上 唐名匠作錄事　算師 唐名匠作計史

〔類聚三代格五〕太政官符

定二修理職官位一事

右太政官去延曆十五年七月廿四日下二式部省一符偁、造宮職官位宜レ准二中宮職一、但大屬特爲二七位官一、其馬料者少屬已上人別給レ之、又弘仁九年七月十九日符偁、修理職官位馬料季祿等准二據造宮職一者、右大臣宣、奉レ勅、件職官位宜レ仍二舊貫一、

寛平三年八月三日

〔拾芥抄中本 官位相當〕從四位下修理大夫　從五位下修理亮　從六位上修理大進　從六位下修理少進

名稱

外事ニ從ハシム、坊城使、宮城使共ニ其使ヲ左右ニ分チリ、

〔倭名類聚抄 五官名〕職　職員令云、修理職、(宇佐女豆久留豆加佐)

〔朝野群載 六太政官〕諸司訓詞　修理職(ヲサメツクルツカサ)

〔玉海〕嘉應元年正月七日甲子、申剋參內、○中略左大將云、修理大夫訓讀如何、答云、北山之所注作納ムル官云々、余○藤原兼實案之、術納メ作クル官也、見賓仲抄也、仍召云、修理大夫(ヲサメツクルツカサ)藤原朝臣、(先問在座識否是如何也)成賴進、○下略

〔下學集 上官位〕修理大夫(シユリ)匠作

〔職原抄 下〕修理職 唐名匠作

沿革

〔續日本紀 二十九稱德〕神護景雲二年七月戊子、從四位上伊勢朝臣老人爲修理長官、遣西隆寺長官中衞員外中將如故、從五位下相模宿禰伊波爲次官、右兵衞佐如故、　三年六月庚申、以大外記從五位下池原公禾守、左大史外從五位下堅部使主人主、並爲修理次官、

〔續日本紀 三十二光仁〕寶龜三年十一月丁丑朔、外從五位下輕間連鳥麻呂爲修理次官、

〔續日本紀 三十三光仁〕寶龜五年九月庚子、外從五位下英保首代作爲修理次官、周防掾如故、

〔享祿本類聚三代格 四〕應停修理左右坊城使置修理職事

□□□□□□□□□年、十月十日符已置件□□以後宜改其號、○下文缺

○按ズルニ、本書年月缺失シテ、其何時ノ事ナルコトヲ詳ニセズト雖モ、下ニ引ク所ノ享祿本類聚三代格ノ文ニ據レバ、弘仁九年ノ官符ノ殘缺セルナルベシ、

〔享祿本類聚三代格 四〕太政官符

應停修理職隷木工寮事

右撿案內、去延曆廿四年廢造宮職隷木工寮、弘仁九年置修理職、令掌其職、今被中納言從三位兼行

職員

周禮有賈人中士下士、主平定物價也、漢大司農、屬官有平準令丞、韋昭辨釋名云、平準、主平物價、使相依準、史記云、桑弘羊領大農令、以諸官各自市相爭、以故物多騰躍、乃請置大農部丞數十人、分部主郡國、置平準於京師、受天下委輸、盡籠天下之貨物、貴則賣之、賤則買之、如此則富商大賈、無所牟大利矣、所以置平準焉、故超廣漢廉潔下士、州舉茂才爲平準令、〇中略煬帝隋〇三年、改平準署、隷太府寺、皇朝因之、〇中略

平準令掌供官市易之事、丞爲之貳、

〔續日本紀光仁三十〕寶龜二年九月乙巳、罷左右平準署、

〔續日本紀淳仁二十四〕天平寶字六年正月戊子、外從五位下椋垣忌寸吉麻呂爲右平準令、　七年七月乙卯、從五位上高元度爲左平準令、

〔續日本紀稱德二十八〕神護景雲元年九月辛亥、從五位下池原公永守爲造西隆寺次官、大外記右平準令如故、

修理職　修理左右坊城使　修理左右宮城使 併入

修理職ハ、ヲサメツクルツカサト稱シ、又シユリシキト稱ス、本司ハ嵯峨天皇ノ弘仁九年ニ於テ定メラレシガ、其以前已ニ續日本紀稱德天皇神護景雲二年七月紀ニ、伊勢朝臣老人ヲ修理長官ト爲スノ文アレバ、修理官ノアリシヲ知ルベシ、淳仁天皇ノ天長年間ニ、此職ヲ停メ、木工寮ニ併セシガ、後復舊シテ、木工寮ト共ニ宮城等ノ修理營作ノ事ヲ分掌セリ、修理左右坊城使ハ左右ノ坊城ヲ修理スルヲ掌ル、其創置詳ナラズ、嵯峨天皇ノ時、此司ヲ停メシガ、後廢置一ナラズ、後世宮城ヲ修理スルコトアル時ハ、修理宮城使ヲ置キ、修理職ト內

補一、

嘉祿三年二月九日己丑、藤原資定、歲七藤原俊國歲十六兩人、給穀倉院學問料、資定者、參議從三位左大辨家光卿擧之、○中略

寶治元年三月二日　　　播部頭兼大外記周防權守中原朝臣師光勘申

用途

〔延喜式三十大藏〕凡絁百廿疋、調綿二百屯、毎年十二月申官充穀倉院、

左右平準署

廢置

平準署ハ、常平倉ヲ諸國ニ置キ、糶糴シテ利ヲ取リ、以テ貢調運脚ノ飢寒ヲ濟ヒ、兼テ京中ノ穀價ヲ平準スル爲メニ設クル所ニシテ、淳仁天皇天平寶字三年ニ之ヲ創メタリ、左平準署ハ東海東山北海ノ三道ヲ掌リ、右平準署ハ山陰山陽南海西海ノ四道ヲ掌リシガ、光仁天皇寶龜二年停廢ニ歸ス、

〔續日本紀二十二淳仁〕天平寶字三年五月甲戌、勅曰、頃聞、至于三冬間、市邊多餓人、尋問其由、皆云、諸國調脚不得還鄕、或因病憂苦、或無粮飢寒、朕竊念茲、情深矜愍、宜隨國大小、割出公廨以爲常平倉、逐時貴賤糶糴取利、普救還脚飢苦、非直霑外國民、兼調京中穀價、其東海東山北陸三道、左平準署掌之、山陰山陽南海西海四道、右平準署掌之、

〔史記三十平準書〕平準書第八

索隱曰、大司農屬官有平準令丞者、以均天下郡國輸斂、貴則糶之、賤則買之、平賦以相準、輸歸于京都、故命曰平準、

〔唐六典二十太府寺〕平準署令二人從七品下

物事、右彼院奏狀云、調庸雜物、參期有限、違越懈怠、科條不輕、而諸國受領之吏、偏稱先例、不濟任終年之調庸、天暦四年宣旨云、調庸雜物、守參期可貢進、隨其進納之多少、將定功過之褒貶、縱有他功、不勤見納之輩、抑其慶賞、加以往任終年調庸物、前司所濟之數、明見不與解由狀、而所司進功過勘文之時、不注見進未進合期過期之由、然而敍位除目、定不沉任終年、合期令進濟、除目以納擧勘文、定受領功過、

〔類聚國史（八十政理）〕弘仁十四年三月辛未、京師米貴、人皆飢乏、出穀倉院穀一千斛、減價賣與貧民、百姓悅焉、

〔日本紀略（嵯峨）〕弘仁十四年三月丁丑、左右京飢、出穀倉院穀賑給、

〔扶桑略記（二十四醍醐）〕延長六年三月廿日、勅、遣淑光朝臣於左大臣許、給勘唐僧沙彌等給料例文、仰唐人僧長秀、自公家准前例可令給料事、前年仰穀倉院令給、而彼院稱無物不行、一日自院給長秀、仍所改仰也、

〔中右記〕嘉保二年十二月廿八日、民部卿參仗座、有任僧綱幷諸寺別當阿闍梨宣旨等、又被下秀才給料宣旨、

（嘉保）廿八日　穀倉院學問料藤原令明（敦基朝臣長男）

〔葉黄記〕寬元五年（○寶治元年）四月廿七日庚戌

勘申文章得業生菅原在匡與同公長座次相論事（○中略）

一蔭位年齒等事

康保元年十二月七日己酉、穀倉院學問料可給二人歟、三人競望之中、藤原忠輔（國光朝臣男、大納言在衡卿孫）、菅原輔昭（文時朝臣男）、三統篤信（故元夏宿禰男）等也、而以在衡卿孫忠輔被給之、輔昭篤信等之間、宜定申有才學問之者、而篤信隨召奉誠頗免疵瑕、諸儒已進擧狀、仍篤信忠輔共給之、至輔昭年齒尤幼、相次可定

天長四年六月五日

〔三代實錄十七清和〕貞觀十二年二月廿三日乙巳、參議從四位上行大宰大貳藤原朝臣冬緒、進起請四事、〇中略其四曰、穀倉院地子交易物、比年之間、令監一人勾當其事、毎年交易輕物輸進、因玆勾當之人、初請傾直稻、既訖、其後府司責其返抄、而左右巧答不肯究進、遂使不知意之吏招放還之煩、熟尋其由、理不可然、凡一官之事、官長所行、縱有其人、何慇不濟、而更置專當、還致物煩、望請從停止、府司一向交易率進、詔並從之、

〔古事談王道后宮〕延久三〇後三條善政ニハ、先器物ヲ被作ケリ、資仲卿藏人頭ニテ奉行之云々、升ヲ召寄テ、取廻々々御覽ジテ、簾ヲ折、寸法ナドサヽセ給ケリ、米ヲバ穀倉院ヨリ召寄テ、於殿上小庭、貫首以下藏人出納ナド見沙汰シテ、小舍人タマダスキシテハカリケリ、〇中略斛器ハ方樞ヲ差ヲ、石ヲ括テサゲテオモシニテ跨木ニ懸テ、於穀倉院圖々米ヲバ被納ケリ、仍何石トハ用石字也、件器石等、于今有穀倉院、

〔朝野群載二十八諸國功過〕穀倉院

勘申前山城守從五位下源朝臣長俊所濟率分納物事

永曆四年　調庸乾元錢　率分四十八貫文　年料百八十八貫文

永保元二三幷三箇年色目同前

右官宣、件長俊、任中所濟率分納物、宜勘申者、件年々料、所濟既畢、仍勘申、

應德三年月　日　正六位上行藏人安部朝臣

正六位上行頭主計允清原朝臣

從四位上行別當主計頭小槻宿禰

長保三年五月廿二日官符下民部省云、應不置任終年合期令進濟、穀倉院納調庸租穀交易雜

〔延喜式二十三民部〕凡穀倉院所納穀者、載京職稅帳申之、其匙二枚、省收掌、鑰庫匙亦同、

〔日本後紀十七平城〕大同三年九月乙未、勅、權入食封、限立令條、比年所行、甚違先典、其招提寺封五十戶、荒陵寺五十戶、妙見寺一百戶、神通寺卅戶、宜且納穀倉院、

〔類聚三代格八〕太政官符

近江國穀一十一萬五千斛

應運進一十萬斛

駄賃料一萬五千斛駄五萬疋疋別三斗

常賃一萬斛疋別二斗今加五千斛疋別一斗

右太政官今月十四日論奏偁、臣聞洪範八政、以食爲首、帶甲百萬、無粟非守、故先王制政、務充倉廩、往哲垂規、期乎足食、然則儲積者、治國之大要、安民之急務也、豫無儲備、恐致闕乏、謹撿去天平神護二年二月廿日勅書偁、夫蓄貯者、爲國之本、宜運近江國近郡五萬斛貯納於松原倉者、伏望准據舊例、運件國緣江諸郡穀收穀倉院、纔即運送越前國物、便塡其代、但運賃者、並給正稅、給法者加增常例、以勸民力、臣等管見所及、商量如件者、畫聞既訖、

弘仁十三年三月廿八日

〔政事要略五十九交替雜事〕貞觀格云、應賻物料商布停收施藥院進穀倉院事、

右太政官去天長元年六月廿日下民部省符偁、諸司主典已上卒死之日、例給賻物、事有恒例、而至給物實避忌經日、喪家之費、卒難支給、今被右大臣宣偁、奉勅宜件料特令交易充殯斂者、須仰所出國、始自今年、每年交易、附貢調使進施藥院、其直幷運賃料、同用正稅者、今得施藥院解偁、院中雜事、觸類繁多、而重行賻物、不堪兼濟者、正三位行中納言兼右近衞大將春宮大夫良峯朝臣安世宣、奉勅宜始自來年令收穀倉院、○本文有脫字、據條本類聚三代格補、

職員

〔百寮訓要抄〕穀倉院　別當　四位五位諸道の者是に補す、近頃は大外記など是に補す、

〔二中歷諸司二〕穀倉院別當

春世左大夫有友寛平元　菅野大外記清方延長六　十市主計頭良佐天慶三　小槻主計糸平天慶五天曆イ　賀茂計保憲安和三　中原税以忠延喜二天曆イ

文道光貞元二　菅野大外記忠輔永祚二　車持税實光寛和元　伴税忠陳永延元　小槻右大夫奉親長保元　伴税茂忠寛弘二

安部計吉平寛弘三　中原税奉平寛弘六　中原博士貞清寛弘七　源造酒正頼重長和六　小槻左大夫孝信永承三　丹波税雅忠應徳十

丹典藥頭忠康寛治二五　丹税醫博士雅康康和三十一　丹波醫博士實康保安三　清原信俊　清信憲　中師安

中大外記師業　中大外記師元　卜部仲遠　清大外記頼業　安部弘季宗弘イ　中親能

小槻隆職　同左大夫廣房　小右大夫公尙　小左大夫國宗　中師員　中師朝

〔小右記〕長元四年九月十四日己未、所充清書事、問遣右大辨、報狀云、修理職穀倉院、可充内府之由昨日關白被命者、土代充關白、余〇藤原實資報云、内藏寮、修理職、穀倉三所、猶第一爲別當、就中攝政關白、必爲三箇所別當、舊例勘文等、指夾筆送大辨許、承平七年例爲後鑒、貞信公〇藤原忠平御例也、

〔仲資王記〕文治五年六月五日癸巳、大膳權大夫安部季弘任穀倉院別當云々、

〔續日本後紀三仁明〕承和元年七月戊午、勅聽穀倉院預人等寓棲其院西南區地長廿丈廣十二丈之內、

〔公卿補任後奈良〕天文十一年壬寅

非參議從三位清業賢

享祿二二十、穀倉院別當、

職掌

〔西宮記臨時五〕諸院　穀倉院(中略)納畿内諸國調錢、諸國無主位職田、及沒官田、大宰稻等諸庄物、勤年中饗、有公卿及四位五位別當、預藏人等、

〔百寮訓要抄〕穀倉院　諸國の米おさめらるゝ所也

〔西宮記正月〕踏歌事

八日被定踏歌之事、〇中略召穀倉院預、仰可設同日〇十四日中院出立饗之由、

穀倉院

名稱

創置

穀倉院ハ、畿内諸國ノ調錢、無主ノ位田、職田、及ビ沒官田等ノ穀ヲ收メ、年中ノ祿物、及ビ貧民賑恤ノ料ニ充ツ、諸臣ノ賻物、學生ノ學問料モ、亦此院ヨリ出ス所ナリ、

此院ハ平城天皇大同年中、始テ置ク所ニシテ、別當、預、藏人等ノ職員アリ、

〔拾芥抄中本官位唐名〕穀倉院諸倉監鎭

〔源氏物語一桐壺〕このきみ○源氏の御わらはすがた、いとかへまうくおほせど、十二にて御元服し給、ゐたちおぼしいとなみて、かぎりあることにことをそへさせ給ふ、ひとゝせの春宮の御元服、南殿にてありしぎしきの、よそほしかりし御ひゞきにをとさせ給はす、所々のきやうなど、くらづかさ、こ。く。さ。う。院。など、おほやけごとにつかうまつれる、

〔西宮記臨時五〕諸院　穀倉院　或抄云、大同年中、始置此院、

廳舍

〔西宮記臨時五〕諸院　穀倉院在二大學西一

〔延喜式四十二左右京〕凡穀倉院勅旨所正倉守、左右京兵士、職別一人、其粮料令彼所請行之、

〔日本紀略二朱雀〕天慶六年三月十二日庚寅、夜穀倉院倉二字、廳屋一字火、

〔百錬抄四後一條〕寬仁三年三月一日、穀倉院炎上、

〔左經記〕長元七年八月九日丙寅、入夜東風大吹、所々舍屋、幷中門等多以破損、十一日戊辰、穀倉院廳幷雜舍顚倒、

〔百錬抄五鳥羽〕元永元年十一月廿九日、穀倉院火、

院印

〔續日本後紀三仁明〕承和元年二月丙寅、始充穀倉院印一面、

工人

いそがせ給内にはゐどころ、つくも所にて、女房のもからぎぬに、ゐかきつくり給などいみじくせさせ給、

〔榮花物語三十四暮待星〕故院、〇後一條のつくも所にて、心ことにせさせ給へりしかば、いとめでたくなべてならず、御ぐしのはこ、かたつかたは、たゞのかねのはこ、いまかたつかたにはすきばこなるを、ふたつゞゝ殿上人に給はせて、うちの物はつくらせさせ給、こゝろ〳〵にいどみしたり、

〔竹取物語〕男六人、つらねて庭に出來たり、一人のおとこ、文はさみに文を插て申、つくもどころつかさのたくみあやべのうちまろ申さく、玉の木を作りつかふまつりし事、五穀を斷て、千餘日に力をつくしたる事すくなからず、然るに祿いまだ給はらず、是給はりて、わろきけこにたまはせんと云て、さゝげたり、

〔除目大成抄四〕作物所

請殊蒙天恩因准先例以漆工道正六位上多治宿禰友方拜任諸國丹波大掾狀

右得友方款狀偁、謹撿案內、當所工等、以畢奏每年任諸國大掾、承前不易之例也、爰友方出仕之後、卅餘年于茲、至大少公事、色々御物、敢不致懈怠、望請天恩因准先例、以友方被拜任件掾、將勵奇肱之後輩矣、仍勒在狀、謹請處分、

嘉保二年正月廿七日　案主從七位上左史生息長宿禰

預正六位上內匠屬上野淸近

正六位上造酒令史秦

散位從五位下粟田朝臣

散位從五位下紀朝臣

用度

〔延喜式三十六主殿〕諸司所請年料　作物所油三斗

〔榮花物語二花山〕わか宮○一條のうつくしうおはしますらんも、ことしは三にならせたまへば、秋つかた、御はかまぎのことあるべう、うちにはつくも所に御具どもせさせ給、

〔榮花物語八初花〕御ぐどもをかたはしよりあけひろげて、御目とゞめて御覽じわたすに、○三條これはこれはとみどころあり、めでたう御覽せらる、御ぐしのはこのうちのしつらひ、こばこどものいりものどもはさらなり、殿のうへ、○藤原道長室倫子きんだちなどの、われも／＼といどみし給へるどもなれば、いみじうけうありて御らんず、中宮○一條后藤原彰子の御まいりのもかやうにこそは覺しをきてさせ給めりしか、宣耀殿に故村上の帝の、かのむかしの宣耀殿の女御にし奉らせ給へりけるは、まきゑの御ぐしのはこひとよろひはつたはりて、いまの宣耀殿の女御の御かたにぞ候を、そのうちをいみじう御覽じけうせさせ給しを、これに御らんじあはするに、かれはことのほかにこだいなりけり、さるは村上の先帝のさま／＼の御心をきて、この世の御門の御心よりもすぐれさせ給へりけるも、わが御くちふでしておほせられて、つくも所のものども御らんじては、なほしせさせ給へるを、これはなほいとこよなふ御らんせらるゝに、ときよにしたがふめうつりにやと、御心ながらおぼしめせど、猶これはいとめでたければ、とのゝ御心ざまのあさましきまで、なに事にもいかでかくとぞおぼしめしける、

〔榮花物語十二玉村菊〕今年○長和四年は、ひめ宮の御とし三にならせたまへば、四月に御はかまぎの事あるべし、いまよりつくも所に、ちいさき御ぐども、いみじうせさせ給、

〔左經記〕萬壽二年十一月廿日戊戌、伊勢齋宮○具平親王女嫥子御裝束、○註略令レ奉二大内一、是來五日、著裳給云々、今年廿一仍差二藏人右兵衞佐源資通一爲二勅使一、遣二件御裝束一、抑兼仰二作物所一、令レ作二衣筥一合一、入二此御裝束一、又令レ作二銀小筥一合一、入二合燒物一、副二御裝束一云々、

〔榮花物語三十一殿上の花見〕春ふかくなるまゝに、齋院わたらせ給べきとしにて、心ことにおぼしめし

職掌

請殊蒙天恩依年勞恪勤以內竪正六位上丸部宿禰信方補任諸國掾闕狀

右得信方欵狀偁、謹撿案內、爲作物所內竪之輩、依年勞恪勤補任諸國掾、逐年不絕、爰信方出仕當職之後、及三十箇年、就中爲木道工、大少公事、敢不致所濫、准之傍輩可謂殊功、今加覆審所申有實、望請天恩依年勞恪勤、以件信方被補任掾闕者、彌俾知奉公之貴、仍勒在狀、謹請處分、

寬治六年正月廿三日

預正六位上行造酒令史秦忠寸信忠

正六位上行內匠屬坂上宿禰守忠

從五位下粟田朝臣

從五位下紀朝臣

〔西宮記正月〕御卯杖

上卯、諸司獻卯杖之後、作物所供御杖四杖、作御生氣方物形、置洲濱上、

〔西宮記臨時一〕改錢

大臣奉勅、仰博士令勘錢文、奏定畢、擇吉日、召能書者於陣頭令書字樣、奏聞、賜作物所彫定、副官符下鑄錢司、

〔榮花物語月の宴一〕式部卿の宮○重明の北のかた○登子は、うちわたりの、さるべきおりふしのおかしき事みには、宮へかならずまいり給けるを、うへ○村上はつかに御覽じて、人しれずいかで〳〵と覺しめして、きさき○村上后藤原安子にせちにきこえさせ給ければ、心ぐるしうて、知らぬがほにて、二三度はたいめせさせ奉らせ給けるを、○中略御門さるべき女房をかよはさせ給て、しのびてまぎれ給つゝまいり給、又つくも所にさるべき御てうどもまで、心ざしせさせ給けることを、○下略

〔古今著聞集十九〕康保三年閏八月十五日、作物所畫所あいわかつて、殿の西の小庭に、前栽をうへられけり、

天德四年九廿一、令藏人爲光仰大炊助忠助、如故可爲作物所預事、(忠助爲大炊丸之時、爲此所預、轉助之後、依前例下宣旨云云、)

〔侍中群要　十〕補所々別當事

作物所　補所々別當之時、以詞被仰下、即奏慶賀、○中略

書所作物所等預事

藏人奉勅仰本所、墨書同之、

〔榮花物語　一月宴〕康保三年八月十五夜、月宴せさせ給はんとて、○中略右の頭には、つくも所の別當右近少將爲光、これは九條殿の九郎君なり、

〔小右記〕永觀二年十一月十七日癸亥、昨日召左府被定所々別當、以余(○藤原實資)爲作物所別當者、以惟成朝臣令奏慶賀、

〔枕草子　六〕つくも所の別當する比、(○藤原時柄)たれがもとにやりけるにかあらむ、物のゑやうやるとて、これがやうに仕るべしとかきたる、まんなのやう、もじの世にまらずあやしきを見つけて、

〔類聚符宣抄　十〕史生淺井淸遠

右中納言藤原朝臣在衡宣、件人宜令惣直作物所、其間准見仕給上日者、(實奉勅者)

天曆四年七月廿日　　權少外記春道有方(奉)

左馬史生矢集春生

右馬史生內則忠

右中納言源高明卿宣、件人等作仕中宮御賀物之間、宜令直作物所、及除寮直日之外、准見仕給上日者、

天曆七年六月十六日　　少外記文武並(奉)

〔除目大成抄　四〕作物所

非參議從三位藤茂範

貞永元八七、直內御書所、

作物所

名稱　作物所ハ、ツクモドコロト稱シ、別當預等ノ職員アリ、禁中ノ調度等ヲ調進スル所ニシテ、續日本後紀承和十五年三月紀ニ、始テ見エタリ、

〔倭訓栞中編十五〕つくもどころ　作物所と書り、禁中の細工所なりといへり、源氏枕草紙などに見えたり、拾芥抄に、進物所の西にありといへり、

〔源氏物語三十五若菜〕かんの君に、さまかはり給へらんさうぞくなど、〇中略つくもどころの人めして、忍びてあまの御ぐどものさるべきはじめのたまはす、

〔拾芥抄中本官位唐名〕內作物所監〇〇〇〇小府

所在　〔西宮記臨時五〕一所々事

作物所在二進物所西一〇又見二拾芥抄一

初見　〔續日本後紀十八仁明〕承和十五年三月甲子、是日永安門西廊有レ火、〇中略初是作物所冶師、行二火之所一延也、

職員　〔西宮記臨時二〕畫所預并墨畫作物所預等事內御書所別當

奉レ勅御下、又召二藏人一宣仰下、可レ准二若住生一、

以二名簿一從二御所一下、給二藏人一、奉レ宣仰下、

〔西宮記臨時五〕一所々事

作物所在二進物所西一、有二別當預一、熟食間二畫所一、分內豎、

〔侍中群要十〕補所々別當事

内御書所(中略)○

補所々別當之時、以詞被仰下、即奏慶賀、納殿預同之、但内御書所別當不奏慶賀、只仰彼所、

候内御書所學生事

別當藏人、奉勅仰下本所、召大學官人、可准告任(○告任恐有誤)之由下宣旨、

〔北山抄(三拾遺雜抄)〕内宴事

延喜十五年、令仰右大臣候内御書所、勸解由次官諸蔭可召預由、(前例、候藏人所校書殿文章生、皆預此所、未有例、故仰特召之、)

〔小右記〕正暦六年正月二日己酉、巳時許參内今日行幸也、(中略)○秉燭還宮、於南殿通籍、最後留守右大辨扶義名謁、扶義今朝著紅花色下重、人々云、行幸日不著色、仍忽於内御書所脱却著他色、

〔小右記〕永觀二年十二月八日癸未、參内、於御前定申内御書所事、(右中辨資忠、地下人、是直幹朝臣例也、藏人式部丞爲時、爾人、可令行彼所事、)可候彼所學生十二人、(此中有大内記保胤朝臣、是覆勘、先朝御時、有順淑遠朝臣也、文章得業生弘道、文章生及學生等也、但開闔散位惟貞、學生巨勢爲時等也、)

〔朝野群載(五朝儀)〕文章生令宗惟正　學生大江通景　惟宗有親　已上令直内御書所

應德三年正月廿六日　藏人左衞門權佐藤原朝臣(奉)

〔朝野群載(五幹儀)〕補御書所人事(三枚)

右京權大夫從四位下藤原朝臣敦基

正五位下行掃部頭兼備中大掾惟宗朝臣孝言

藏人防鴨河使權左少辨正五位下兼行左衞門權佐藤原朝臣爲房仰云、宜以敦基朝臣爲内御書覆勘、以孝言爲開闔者、

寬治元年十二月廿六日　開闔正五位下行掃部頭兼備中大掾惟宗朝臣孝言奉

〔公卿補任(龜山)〕文永十一年(甲戌)

一本御書所

〔西宮記臨時五〕一所々事

一本御書所在侍從所南、有公卿別當、預、并書手、熱食、世間書一本進公家、進月奏、仁王會、相分書充願、

〔貞信公記〕天暦二年三月廿日、中使俊朝臣來云、○中略本宮御書所預、書手等、使補一本御書所、何、

〔百練抄七二條〕平治元年十二月九日、夜右衛門督信頼卿、前下野守義朝等謀反、放火上皇○後白河三條烏丸御所、奉移上皇上西門院於一本御書所、

〔平治物語一〕三條殿發向并信西宿所燒拂事

信頼卿ハ同○平治元年十二月九日夜子剋計ニ、左馬頭義朝ヲ大將トシテ、其勢五百餘騎、院ノ御所三條殿ヘ押寄、○中略伏見源中納言師仲卿、御車ヲ差寄セ、急可被召由被申ケレバ、早火ヲ懸ヨト聲々ニゾ申ケル、上皇○後白河周章テ、御車ニ被召バ、御妹ノ上西門院モ一御所ニ渡ラセ給ケルガ、同御車ニゾ奉リケル、信頼、義朝、光泰、光基、季實等、前後左右ニ打圍テ、大内ヘ入進セ、一品御書所ニ押籠奉ル、

〔平治物語一〕院御所仁和寺御幸事

二十六日○平治元年十二月ノ夜更テ、藏人右少辨成頼、一品御書所ヘ參テ、君○後白河ハ如何被思召候、世間ハ今夜ノ明ヌ前ニ可亂ニテ候、

内御書所

〔西宮記臨時五〕一所々事

内御書所在承香殿東片庇、延喜始、依勅有御事、有別當開闔、衆等、熱食、或仰穀倉院、令買進蓄位祿、充雜用、同樂所、

〔皇代記後白河〕保元二年十月廿六日戊午、始被置内御書所、

〔侍中群要四〕被問内御書所見參事聞所可尋

渡御承香殿之時、被問内御書所衆見參ハ、藏人奉仰天、御書所ニ誰々加侍ル、衆一々稱籍了、若其音不達御所ハ、藏人傳、

雜載

左大辨藤原朝臣家宣傳宣、左大臣宣、奉勅、件等人、宜爲諸司所々諸寺撿挍別當者、

承久二年三月廿五日　左大史兼主殿頭小槻宿禰國宗奉

〔侍中群要　六〕月奏事

藏人任補次、執當此事、出納御藏小舍人等、各有其巡云々、○中略　一本御書所、書上﨟別當中、別當預等名所、以奥爲上、御書所、書預以下、內御書所殿上、預別當置之、以別當爲奥下、

已上不覽所別當

〔北山抄　三拾遺雜抄〕花宴事

淸涼殿東、又庇北第二間、立御倚子、置物御机等、○中略　次仰侍臣召文人、入自仙華門、參著、候殿上、藏人所御書所成業者等預之、○中略

康保三年三月三日、有曲水宴、○中略　式部大輔直幹、及殿上文人、藏人所文章生、御書所學生已上、入自仙華門、著座、探韵畢、賜酒肴公卿以下、

〔勘仲記〕弘安七年三月廿四日癸酉、及晩參內、今夕被行御書所作文、予○藤原兼仲奉行地下文人仰別當令催之、殿上文人自藏人方催之、再三遣使者、先之御書所立大盤二脚、居饗、用途大炊寮勤座上下有掌灯、次別當覆勘開闔衆等、少々著饗座勸盃、及一兩獻饗了、舁出大盤、次奏事具由、先之主上密々渡御、女房候御共、雲客不及秉燭、次兩貫首直衣、藏人秉燭相伴、指引雲客著端座、次衆撤座下灯臺、置待路料也、次座上立切灯臺、撤木灯臺、切灯臺自御所中出之、次置文臺、折敷次敷圓座、已上衆役之、次大內記邦行開闔置序退、次人々置詩、先六位、次儒者、次雲客、自下﨟次第置之、予入座末、經中央置之、詩令持隨手人々次第著座、於殿上文人者、五品等不及著座、南座、雖構假板敷、尙以狹也、次別當差定讀師講師、讀師事、別當差重房朝臣之處、申予親、長輔朝臣可勤仕歟、長輔朝臣依自所勞難叶之由申之、可爲如何樣乎之由、可伺定由別當示之、乃奏聞之處、可依先例、且又可仰重房朝臣之由被仰下、在範參進勤講師、重房朝臣勤讀師、次講頌儒士少々、依召進寄講之、披講了、人々復座、

三月廿四日　加賀權守兼康奉

謹々上頭宮內卿殿〇中略

二十五日、御書所別當事不審尤多候歟、然而寬治正治之例、官注申候、仍可被補六位許候也、官中帖尤不審候也、必不可限御侍讀之由存候、然而近來皆以御侍讀被入之、仍沙汰候也、今日可令言上候、〇中略

三月廿五日　宮內卿經高〇中略

此日殿上所宛也、申剋著束帶(蒔繪劍)參內、入化德門(頭候)參宮御方、則參內御方、頭宮內卿經高朝臣云、左大史國宗未參、文書未持參云々、仍遣人之處、依召參御所之由令申如何、予(〇藤原道家)云、全以不遣召、重可遣人、此間於鬼間許定十代間事、國宗宿禰內々所送之大間、與付職事之大間文相違、仍問答之、予注文大略改直畢、又云、奬學院別當事、任正治例不可被入別當、御書所別當不可被入四位、入六位一人云々、此條猶不可然也、大臣以希代之例被補別當者、尤可書內大臣也、大臣已載之、何限被所可有議乎、無理不可、載大臣別當之由者、任代々之例可被改補大納言也、御書所別當、又不被入御侍讀之例希歟、若不被始御書所之時、六位許補之歟可尋、〇中略

定文書樣

定諸司所々諸寺撿挍別當〇中略

一本御書所

權大納言藤原朝臣良平〇中略

御書所

左衞門權少尉藤原康光〇中略

承久二年三月廿五日

弓場殿給試、以秋草露爲題、以含爲韻、七言八韻、巳剋給題云々、申剋獻詩了、

〔中右記〕寛治元年十二月廿六日甲辰、今日被始御書所、別當式部權大輔正家朝臣、藏人文章生成實、覆勘敦宗朝臣、開闔孝言、衆三人、學生、此中二人今日登省、

〔朝野群載〕五朝儀式部權大輔正家朝臣　藏人能登掾成實　巳上可爲御書所別當

右京權大夫敦基朝臣　可爲同所覆勘

掃部頭孝言　可爲同所開闔

學生大江通景　惟宗廣信　藤原雅仲　巳上令直同所、中略

寛治元年十二月廿六日

藏人左衛門權佐　奉

〔玉蘂〕承久二年三月廿四日、明日所宛、一定歟之由、遣尋頭經高朝臣御許、返事云、明日殿上所宛事、如當時衆必定候、就中依佳例、今月必可令遂行之由、昨日御氣色候き、勿論候歟、中略

御書所別當事、當時範時卿候也、而被裁公卿之例、古今之間、未承及候、仍昨日奏事由候、未承分明御定候也、但正治、只被補六位許也承候、一定候歟、可令言上之由申遣官候了、未承左右候、此事難治事候歟、何樣可候哉、中略

三月廿四日　宮内卿經高

逐申

御書所別當事、殿上紀傳儒者候歟、上古必不被御侍讀之由候哉、而剩被裁公卿之條不審候、爲之如何、如此言上之間、令依召馳參内裏候畢、仍委不言上候、中略

御書所別當事、公卿之例不分明歟、同雖被計申候、被補六位許之例間相存云々、又必不限御侍讀歟、定被決聖斷歟、中略

藤原雅任、中原長國、補御書所二人正闕、大中臣奉親、藤原公政、已上二人補員外、伴方規、可待將來闕之由被仰下、

〔北山抄 六〕御書所寄人事

以上、或云、仰辨、可尋、

〔古今和歌集 序上〕延喜五年四月十八日に、大内記きのとものり、御書のところのあづかりきの貫之、〇中略右衞門の府生みぶのたゞみねらにおほせられて、萬えふしふにいらぬふるきうた、みづからのをもたてまつらしめ給ひてなん、〇下略

〔類聚符宣抄 十〕左京少屬高橋業利

左大臣宣、件人身侍御書所、宜准見仕給上日者、

延喜七年四月廿日　大外記阿刀春正奉

同日召仰大屬阿保久範

式部少錄矢田部公望

右右大臣宣、奉勅、件公望、暫止本省直、令候御書所者、

延喜廿一年五月十三日　少外記島田良行奉

〔源順集〕天曆五年、宣旨有て初て大和歌えらぶ、撰ぶ所梨壺におかせ給ふ、〇中略めしおかれたるは、〇中略御書所預坂上茂樹也、

〔官職秘抄 下〕監物局　少監物〇中略　以御書所書勞任例坂上是則

〔權記〕長保二年九月廿四日戊辰、御前有作文事云々、式部權大輔獻題云、木葉落如舞、探韻、藏人孝標獻序、御製四韻、左大臣、左大辨、宰相中將、被候御書所、

〔權記〕寛弘二年七月十日丙辰、參衙有政、右大辨始可候南申文、仍起座入內、可寄御書所學生九人、於

內竪町（鷹司北堀川西半町內竪辻子東）

御書所

一本御書所　內御書所併入

御書所ハ、宮中ノ書籍ヲ管スル所ニシテ、其創置詳ナラズ、別當、預、開闔、覆勘衆等ノ職員アリ、此所ニハ每ニ詩ヲ以テ學生ヲ試ミルコトアリ、預モ課試ヲ經テ補スルコトアリ、

一本御書所ハ、世上流布ノ書籍各一本ヲ書寫シテ藏スル所ナリ、別當、預、書手等ノ職員アリ、

內御書所ハ、蓋シ御覽ニ供スル書籍ヲ管スル所ナラン、醍醐天皇ノ延喜年中、始テ別當開闔衆等ノ職員ヲ置ケリ、

名稱

〔拾芥抄中本官位唐名〕御書所（秘書殿芸閣）

〔日本紀略十一條〕寬弘二年七月十日丙辰、於弓場殿試學生九人、是則御書所衆二人有其闕、仍試競望之輩所被試也、題云、秋叢露作珮、（七言八韻）其中奉試、藤原公政、中原長國、藤原雅任、被直芸閣、

〔菅原在良朝臣集〕夏夜於秘書閣同詠雨中早苗和歌○歌略

所在

〔西宮記臨時五〕一所々事

御書所（在式乾門東腋、有預、書手、熟食、進月奏、仁王會書呪願五十餘枚、）

職員

〔江家次第十九〕弓場殿試事

文章生當職散位中、方略學生中、學問料、並申登省宣旨、申御書所衆闕少人多時、又別被試秀才進士、時有此事、○中略

一條院　寬弘二年七月十日丙辰

秋叢露爲佩（七言八韻）

時者、永從解却、若有不奏當剋、後奏剋外者、奪先勞十日、立爲恒例云々、今案先奏中務省、奏宮內省之間、後奏本所備、

〔官職秘抄 下〕監物局　主典　主鈴　典鎰　已上多以內竪所擧奏任之、或以所々奏任之、往年爲昇進官、近爲內竪奏時之職、

〔西宮記 十一月〕一五日射場初事

前取著座、（內竪十人、第一人持札、二人持的、中梓、入自日華門、自龍道渡埒前著、）執札者獨南埒艮北面立、卽指北趁上、立南殿坤角壇下、更趁還經埒後著座、

〔北山抄 三 拾遺雜抄〕殿上賭射事

籌指取矢著座、〇中略 註 次矢取內竪度埒前、次前後射手依次參射、

〔北山抄 九 羽林要抄〕射場始

王卿著座、次矢取內竪十人、（一人取簡、立機樹下退歸、一人取梓、是若賭射外不可取歟、）度自埒前著座、

〔中右記〕天仁元年十二月廿二日丁酉、今日弓場始也、〇中略 矢取內竪十人、度自埒前、（一人取簡）

〔延喜式 十二 中務〕凡十二月奉諸陵幣者、〇中略 山階、柏原、長岡、深草、田邑、鳥戸、後田邑、小野、八陵、參議已上、若非參議三位一人、四位若五位一人、內舍人、內竪、大舍人各一人、〇中略 多武岑墓、藤氏內舍人一人、內竪、大舍人、一人遞參、

用度

〔延喜式 三十三 大膳〕親王以下月料

內竪二百人料、鹽三斗六升、（小月三斗四升八合）

〔西宮記 臨時 五〕一所々事

內竪所（中略）（居在大舍人寮南、以甲斐周防爲衣服料、）

〔拾芥抄 中末 宮城〕諸司厨町

天慶元年十二月十六日、於神祇官有祭事云云、欲羞汁物之時、厨別當等不候、仍令預等欲羞之間、內豎大舍人等各相論云、還可取盤云云、上卿仰云、內豎奉仕殿上役、准此等事令內豎頭奉仕手長、大舍人者、可取盤者云云、如仰令奉仕之、

〔西宮記 正月〕十六日進多季帳事

射禮建禮門儀略○中 兵部著座、內膳供膳、內豎居王卿鮒熱飯等

〔北山抄 一 年中要抄〕四月朔日旬事

宸儀御南殿、略○中 進物所供御膳、采女昇御臺盤、至南廂西第二間之比、出居次將召內豎二音、稱唯參入立櫻樹邊、仰云、御飯給、稱唯退出、此間采女取傳造酒司酒器、立南廂西第二間、內膳下器立第一間、東宮采女立御臺盤、內豎昇大盤立臣下前、次置箸匕、舊例自本置之 此間酒番侍從著座、采女供御四種、次東宮采女供之、略○注 次給臣下、次內豎持下器西度、兩儀、從階下往還、 至進物所受索餅、還至版位坤之間、供御膳索餅、次給太子、內豎於本所分盛、給王卿及出居、

〔北山抄 一 年中要抄〕四月朔日旬事

十一月朔日、奏御暦、略○中 同元日儀、但闈司退出後、少納言率內豎入自日華門、先昇案退出、次少納言令昇櫃退出、略○中 有撤饌儀、三獻後、安御箸畢、采女撤御膳、略○注 之間、出居次將召內豎二聲、內豎稱唯、即仰云、鼓多參來、內豎等參上、撤臣下饌、

〔侍中群要 二〕內豎所式云、宿奏亥一刻奏之、闕怠者、奪先勞五日者、又云、時奏、內豎伺刻奏之、身直雖終、無次人兼奏之、闕者每刻除先勞五日、補者別有異賞、但奏伊勢幣帛、並葛野廣瀨龍田之祭、及國忌荷前發日宿奏、若誤奏者、上殿者封當番二日、除先勞五日、不殿上人亦同之、

又寬平七年十月廿八日別當宣云、時奏、內豎有一刻之闕怠者、奪先勞五日之例、載在所式、而不守式例、重致闕怠、自今以後、闕一刻者、即停日給令候十日、闕二刻者、除時奏帳、闕三刻者、削上殿之名、闕一

乘輿幸豐樂院後堂、賜可敍人歷名於内侍、内侍臨東檻授大臣、大臣喚内豎宣、喚式兵二省、二省丞各一人參入、○中略内記授宣命文於大臣、○中略大臣喚内豎、稱唯、内豎大夫趨立左近陣西頭、大臣宣、喚式部兵部、稱唯、出喚二省輔、

〔儀式八〕正月八日敍内親王以下儀

皇帝既御、○中略大臣喚内豎二聲、内豎稱唯、入立東庭、大臣宣、喚中務省、内豎稱唯、出喚輔以上、若其无丞闕之稱唯、

〔儀式八〕四月廿八日牽駒儀

左寮屬一人、立左兵衞陣東頭、執牘奏御馬牧及次第毛色、内豎一人、立馳道北邊而轉奏、馳畢寮屬内豎共還入、

〔延喜式十二中務〕凡大儀日、○中略輔丞各二人、相分率内舍人、大極殿前庭近衞陣以南隊之、内舍人不足者、權補册人、大舍人十人、内豎廿人、有品親王家十人、省直仰令進名簿、仍補之、

〔北山抄二年中要抄〕十一月辰日○新嘗節會事

大臣以内豎傳仰所司、令移大歌座舞臺北、○注略又令内豎移立小忌王卿座於東第二間、

〔北山抄四拾遺雜抄〕賜將軍節刀事

大臣奏勅書、次就内侍所、令出節刀、上卿及内侍署出文著陣座、仰辨官進彼所、令内豎舁之、置上卿座下、

〔江家次第三正月〕射遺事

外記著藏人所、令奏有射遺由、藏人奉仰、差内豎召參議一人、

〔侍中群要二〕下宣旨事

下宣旨之時、陣座上卿不候者、詣里第下奉、於御物忌之時、若藏人小數、差内豎可召遣上卿也、

〔西宮記六月〕中院儀○神今食

賦字

永久四年正月日　六位別當治部少丞源盛定

内竪所
奏時籍勞帳事
正六位上藤井宿禰武松　望申播磨國大掾
年勞廿五年　上日卅五日
右年勞上日注進如件
永久四年正月日　六位別當治部少丞源盛定

内竪所
朱雀院籍勞帳事
正六位上藤井宿禰友國　望申加賀國大掾
年勞十三箇年　上日一千三百箇日
右依例年勞上日注進如件
久壽二年正月廿三日　頭正六位上行主稅允菅野朝臣倫時

〔明和新增京羽二重一〕外記方
内豎　正五位下兼主鈴内豎頭渡邊出雲守源珍亮　同　正五位下高屋遠江守中原康昆
同　從五位下渡邊大藏大丞源珍之　同　從五位上高屋治部少丞中原康博

〔内裏式上〕元正受群臣朝賀式
中務率陰陽寮、舁置曆之机、入自逢春門、位皆此立庭中、退出、輔已上一人留奏進、〇中略内竪人、自逢春門持机出授陰陽寮、

〔内裏式上〕七日〇正月會式

內藏遠兼
頭上毛野公房
內　藏
橘　忠胤
嶋田公忠
惟原保尙
別當大藏大丞吉野滋春

別當中納言兼民部卿中宮大夫平朝臣伊望宣、奉勅依請者、
同年閏十一月十一日別當大藏大丞吉野滋春奉
奉行
別當左近衞少將源朝臣當季
爲備勘例所寫留也

〔殿暦〕康和四年正月廿一日丁丑、依吉日、今夜始內豎所之簡ニ加判、朝臣字也件儀以職事藏人頭重資奏事之由、件云簡內豎所簡ニ可加判也、而余〇藤原忠實未任彼別當者、今夜被仰下何事候哉、重資則還來云聞食了、早可仰下者、彼簡加判、

〔除目大成抄〕三內豎所
散位籍勞帳事
正六位上伴朝臣助通　望申石見國大掾
年勞卅五年　上日五千日
右年勞上日注進如件

先內豎頭多任伊勢若美濃掾

伊勢

正六位上日下部宿禰德安內豎所頭云云

次執事任掾云々

權掾正六位上某戶某丸內豎所執事勢

次同大籍喚

和泉

權目正六位上近江朝臣元吉○內豎大籍喚中略

次任內豎大籍奏時

大和

少目正六位上小治田宿禰廣兼內豎大籍奏時

次任內豎別籍上古院宮崩後、以本宮人被寄、四所巡籍是也、若前坊、朱雀院、一條院等之類、

相模

少目正六位上私宿禰信元內豎天曆籍、或不注內豎字、可尋、

以上五人許任畢內豎若無頭執事者加任別籍一○一本作二人許云云

〔類聚符宣抄 七〕內豎所

請重蒙處分、因准進物所、按書殿等例、改官人代號、爲執事職狀、

右謹撿案內、件所頭官人代各六員也、其號雖異、勤公是同、供奉節會、勤仕殿上役、又臨時奉藏人所仰、趁陣頭官中之召、如此之勤、曾無差別、而諸司往々以雜色人等、私號官人代、彼此雖異、名號一同、仍不案事情之輩、以爲卑賤之職、於是競進之輩漸稀、繁劇之勤殆闕、方今所在官人代內藏遠兼、村主實茂、頃月依有身病不勤見仕、遠兼獨兼仕厨家幷日給事、一身之勤、已在兩端、雜役繁多之間、公事可怠、是依人之不進、職之不滿也、因茲注其由、言上先了、重望特蒙鴻恩、因准進物所、按書殿等例、改官人代號、爲執事職、然則出仕之人、勵勤王之節、拜官之輩、知奉公之貴、仍勒事狀、謹請處分、

承平六年四月三日　官人代村主

リ、類聚三代格、令集解並ニ誤ル、

所在

〔西宮記臨時五〕一所々事

內豎所在二一本御書所東一、內豎在二春興殿東廊一、

〔續日本紀三十四光仁〕寶龜七年九月庚辰、是月毎夜、瓦石及塊、自落內豎曹司及京中往々屋上、明而視之其物見在、經二十餘日乃止、

〔日本紀略五冷泉〕安和二年七月二十三日戊辰、風猶不止、厨家南門內豎所等、○中略等悉以顛倒、

職員

〔職原抄下〕內豎所別當。。知二內豎所事一

一人必爲其仁、他人不望之、

〔西宮記臨時五〕內豎所○註略以大臣中將六位○中將六位四字恐衍爲別當、有頭執事。。。有熟食、有年官、有奏時、

〔西宮記臨時〕諸宣旨

內豎頭執事　以名簿、自御所、賜藏人、藏人仰本所云々、

〔侍中群要十〕補所々別當事

內豎所○中略

補所々別當之時、以詞被仰下、即奏慶賀、

〔侍中群要十〕內豎頭并執事等事

以名簿給藏人、藏人仰本所、

〔西宮記正月〕除目

大臣依召著圓座、○中略大臣依御氣色、揖笏以闕官入筥、文入大間、撤筥奉御簾中復座、覽了返給復座正笏候氣色、勅云、早久、開大間、臨任四所、內豎十人之中、頭伊勢內豎、召京官時任目、○中略已上頭執筆外有本所大少錄及官人代、

〔江家次第四正月〕除目

三月戊寅、左中辨從四位下藤原朝臣雄田丸爲兼內豎大輔、

〔續日本紀桓武四十〕延曆八年十月乙酉、散位從三位高倉朝臣福信薨、○中略少年隨伯父背奈行文入都、時與同輩晩頭往石上衢遊戲相撲、巧用其力能勝其敵、遂聞內裏、召令侍內豎所、自是著名、○中略薨時年八十一、

〔續日本紀稱德二十八〕神護景雲元年七月丁巳、是日始置內豎省、以正三位弓削御淨朝臣淨人爲卿、中納言衞門督上總守如故、從四位上藤原朝臣是公爲大輔、左衞士督下總守如故、從五位下藤原朝臣雄依爲少輔、右衞士督如故、從五位下田口朝臣安麻呂爲大丞、大丞二員、少丞二員、大錄一員、少錄三員、

〔續日本紀光仁三十二〕寶龜三年二月丁卯、○丁卯恐丁丑誤罷內豎省及外衞府、其舍人者、分配近衞中衞左右兵衞、

〔類聚國史帝王三十二〕延曆二十二年五月丁卯、曲宴、賜侍臣及近衞內豎布有差、

〔類聚國史職官百七〕大同二年十月己巳、停內豎隷左右大舍人寮、各一百人、

〔日本後紀嵯峨二十一〕弘仁二年正月庚子、制、上殿舍人一百廿人、復舊名爲內豎、

〔享祿本類聚三代格四〕太政官符

減定大舍人數事

元八百人　今定四百人、

右被中納言從三位兼行宮內卿藤原朝臣貞嗣宣偁、奉勅、今依舊置內豎、宜大舍人依件定之、其食及時服定一百人、

弘仁十一年四月廿一日

○按ズルニ、此官符、又職員令集解ニ見エテ、弘仁十年八月二十六日ニ係ケタリ、今公卿補任ヲ檢スルニ、貞嗣ノ中納言兼宮內卿タルハ弘仁十二年正月ニ在リ、其薨ズルハ十五年正月ニ在

沿革

〔愚昧記〕仁安二年五月一日戊戌、參內著陣、以藏人親長、(○中略)註奏可解陣之由、即返來云、聞食ツ、予(○藤原實房)移外座、令置軾、令外記召內豎、(其闕知不佐和眞波)

〔續日本紀〕(二十孝謙)天平寶字元年七月戊申、召入右大臣以下群臣、皇太后詔曰、汝(多知)諸者、吾近姪(奈利)、又豎子卿等者、天皇大命以、汝(多知乎)召而、屢詔(志)久、朕後(爾)太后(爾)能仕奉(利)助奉(禮止)詔伎、

〔歷朝詔詞解〕(三)豎子卿　豎字、本に竪に誤、今改む、からぶみ周禮に、內豎といふ官名有て、注に豎未冠者之官名とあり、故皇朝にても、童にて仕奉る人を豎子といひて、ワラハと訓り、安閑紀に僮豎(レキベワラハ)などゝも有、和名抄に、內豎三百人、俗云知比佐和良波と有、(○中略)萬葉二十に、二年(○天平寶字)春正月三日、召侍從豎子王臣等、令待於內裏之東屋垣下、即賜玉箒肆宴云々など見ゆ、大御許近く仕奉る者也、卿とは即豎子を詔給へる也、良家の子弟もあれば也、さるは此豎子といふものは、必しも童子のみにもあらず、成長たる人の、なほ童の形にて仕奉るもある歟、はた大御前近く仕奉る人々を、豎子になずらへて豎子卿(ワラハベマヘツギミ)といふにもあるべし、

〔拾芥抄〕(中本官位唐名)內豎所(宮闈坊)

〔續日本紀〕(十九孝謙)天平勝寶八歲五月癸亥、出雲國守從四位上大伴宿禰古慈斐、內豎淡海眞人三船、(○三船時年三十五)坐誹謗朝廷、无人臣之禮、禁於左右衞士府、

〔續日本紀〕(二十孝謙)天平寶字元年四月辛巳、(○中略)內供奉豎子、授刀舍人、(○中略)各竭乃誠、宜令加位二級幷賜綿帛、

〔續日本紀考證〕(七孝謙)豎子(所謂內豎也、(中略)豎俗竪字)

〔續日本紀〕(二十六稱德)天平神護元年閏十月庚寅、詔曰、(○中略)內豎、衞府、特賜新錢、亦有差、

〔續日本紀〕(二十八稱德)神護景雲元年九月甲子、以從四位上日下部宿禰子麻呂、爲內豎員外大輔、

〔續日本紀〕(二十九稱德)神護景雲二年六月辛丑、衞門大尉外正五位下葛井連根主爲兼內豎大丞、　三年

（朝隆）正五位上行左少辨藤原朝臣
從四位上行左中辨平朝臣信範
（資定朝臣）造興福寺長官正四位下行右大辨藤原朝臣
（忠光卿）造東大寺長官參議從三位行左大辨兼周防權守藤原朝臣

内豎所

名稱

内豎所ハ、内豎ノ事ヲ掌ル、内豎トハ蓋シ内供奉豎子ノ謂ニシテ、節會ニ供奉シ、殿上ニ驅使セラル、モノナラン、稱德天皇ノ神護景雲元年七月ニ至リ、爲ニ省ヲ置キシガ、光仁天皇ノ寶龜三年ニ之ヲ罷メタリ、其後一二ノ變遷ヲ經テ、嵯峨天皇ノ朝ニ舊名ニ復シ、其後別當執事等ノ職員ヲ置ケリ、

〔倭名類聚抄〕五官名局　内豎局　二方品員云、令外置之省、寶龜三年廢之、今内豎三百人、（俗云知比佐和眞波）

〔廣韻〕上聲三豎（立也、又童僕之未冠者、又姓、左傳鄭有大夫豎拊、臣庾切四、）豎（俗）

〔周禮註疏〕天官一内豎倍寺人之數、（註、豎、未冠者之官名、）

〔禮記註疏〕文王世子二十文王之爲世子、朝於王季日三、（中略）○註、雞初鳴而衣服、至於寢門外、問内豎之御者曰、今日安否何如、（註、内豎、小臣之屬、掌外内之通命者、御如今小史直日矣、）（中略）豎上主反内豎曰安、文王乃喜、

〔江家次第〕一正月元日宴會
内辨細記　七日
内辨○中略著兀子之後、喚知不佐和良和二音高長、内豎頻泰立、

記。錄。所。

勘申加賀國所當大藏省納物本數事

調綾壹疋

緋絹捌疋　黃絹拾陸疋　帛絹陸拾肆疋　白絹捌疋

中男紅花壹斤

正稅交易絹佰貳拾玖疋

右依宣旨勘申如件

貞治二年閏正月七日

防鴨河判官大判事正五位下兼行明法博士左衞門大尉石見權介坂上大宿禰明宗

正五位上行主計頭兼博士長門權守淸原眞人宗季

正五位上行明法博士兼左衞門大尉中原朝臣章世

正五位上行掃部頭中原朝臣師季

正五位上行主稅頭中原朝臣師守

。。造東大寺次官正五位上行主殿頭兼左大史小槻宿禰量實闕國

正五位上行大外記兼長門介中原朝臣師連

從四位上行大學頭菅原朝臣在後朝臣

從四位上守刑部卿菅原朝臣時親朝臣

正四位下行大炊頭兼大外記下總守中原朝臣師茂

修理東大寺大佛長官正四位下行左大史小槻宿禰匡遠

右中辨正五位上平朝臣行知藏人勾當

今日、被行雜訴沙汰、四條前大納言、中御門大納言、左大辨宰相等參仕、職事頭左中將爲遠朝臣、藏人右中辨行知等、參□

今日、雜訴御沙汰、廿六日分被引上、是主上自明日可有御服藥森酒之故也、

今日、家君茂〇師出仕以前、藏人右中辨行知尋申近江國稻村大明神位階事、載請文、於記錄所被付之、

今日藏人右中辨行知觸申家君云、月次神今食任例可被沙汰云々、祗候記錄所之間、不及請文之由答了、

近江國愛智郡稻村大明神位階事、御不審候、若無位神候哉、今間可令注進之由所被仰下也、仍執達如件、

十一月廿二日　右中辨行知

四位大外記殿

裏書廿二日書到書様廿二日　師茂　量實　師守　明宗

當日不書之、後日書遣開闔歟、

見參

參議左大辨藤原朝臣忠光　右中辨平朝臣行知　大外記中原朝臣師茂　左大史小槻宿禰重實、　主稅頭中原朝臣師守　大判事坂上大宿禰明宗

貞治元年十一月廿二日

〔師守記〕貞治二年二月九日己酉、今日記錄所越訴沙汰延引、開闔宿所自去七日可犬死穢、可不參之間無人之故歟、

〔師守記〕貞治二年後正月七日戊寅

吉書案

嘉暦二年三月七日

〔師守記〕貞治元年十一月十一日壬子、今日大夫史於記錄所老人星勘文見申、家君（〇師茂）兵庫頭宗時朝臣、內々奏之云々、被相尋自餘陰陽師之處、分明不申老人星由、然而注進文ハ老人星文也云々、去月三日自大閤被尋下官務間、注進之由語申之、宗時朝臣注進、予於當所寫之了、大判事同寫之、廿二日癸亥、今朝家君（〇師茂）以使者今日雜訴沙汰延否事被尋頭右大辨資定朝臣之處、必定云々未始家君著衣冠、（上紙）有同車、予（衣冠上紙）參記錄所、給寄人右中辨行知、（藏人、勾當）四位大外記家君（衣冠、奥座）、大夫史重實、（端座、開闔）、主稅頭予（衣冠上紙、端座、重實次）、大判事明宗（衣冠端座、予次）、等參著、明宗直著到日、其後面々書名字、雜仕不參之間被傳之、明宗取庭中目六、酉始傳奏四條前大納言隆蔭卿（直衣下紙、端座）、中御門大納言宣明卿（衣冠下紙、奥座）、左大辨宰相忠光卿（衣冠下紙、端座、隆蔭卿次）、等著座、无出御、庭中一ヶ條、感神院神人、堀川商人等申材木商賣事、付祇園奉行職事可申之由傳奏被問答、被返了、四條三位隆鄉卿雜掌推參庭中、是異桑庄預所職事、開闔量實爲九條殿奉公仁之間可有退座之處、無其儀、申意見、無謂趣也、此事不入庭中目六、其故者、當所開闔訴之、其上當所沙汰落居事也、仍可推參庭中之由明宗令申了、仍推參申之、四條前大納言不及問答、中御門大納言宣明卿可奏聞之由被申之間、明宗取目六、□□申狀□□卷目六起座付宣明卿、則明宗歸座、傳奏起座、奏後宣明卿一身歸著當所、仰勅答云、此事有沙汰可令仰云々、仍勅答之趣召仰訴人了、

沙汰事

四座下部宿老與中﨟相論紺年預得分事

兩方參入、宿老十餘人、中﨟十人許參入、申所存之後退、訴論人面々有評定談合、處詮最初置文宿老八人加判定法之上者、宿老每年管領無子細歟、中﨟背宿老命條不可然歟趣一同勘者、明宗左大辨宰相□□□不著座、七月十二日兩方所進諸取案、明日可書送開闔之由示了、

記錄所

左大史匡遠與前侍從信親相論備中國新見庄事

右件庄、大夫史隆職爲本領主國宗通時相承之剋、通時未處分之條勿論歟、爰匡遠擘建久三年七月十日國宗讓狀、通時可附屬有家之間、件狀預置後家（有家母）畢、當庄自元宛出仕之羽翼、就繼家奉公可管領之旨執之、信親者淳方口爲國宗嫡孫、傳領之日讓大藏卿局、大藏卿局委信光朝臣、信光讓與信親之間、帶四代之手實、蒙兩度勅裁、有家者爲淳方之猶子、出身奉公依不可遂越、彼行事有家顯衛統良千宜四代七十餘廻不及訴訟、不貽手繼、當庄又非可付家地之由爭之、各所立申似有子細、通時未分之財、淳方一圓管領、委附大藏卿局之處、有家以來不及沙汰、尤以不審、而彼局一期寬宥之由、匡遠成會釋哉、此條雖不足信受、有家爲淳方之弟、繼收養、强雖慕後葉之理訴歟、件庄或被賞奉公、隆職被立之由、國宗載請文、或相嫣羽翼之旨、淳方訴關東、就中信親所進淳方建長狀、可返家之趣聊表所見歟、然者匡遠帶國宗讓狀、就繼家奉公可被宛行之由所申似有其寄哉、此上事須在時議矣、仍言上如件、

嘉曆元年八月九日

左衛門少尉中原朝臣章香
兵庫頭中原朝臣師右
大外記淸原眞人賴元
左中辨藤原朝臣實治

〔輯古帖 入〕記錄所

春德丸（奉）
神護寺（奉）

右西津庄事、來十一日議定可有之、其沙汰各帶文書正文可被參當所之狀、所廻如件、

〔吾妻鏡六〕文治二年六月九日乙卯、去四月之比、政道事、殊可致興行之趣、付議卿令奏聞給了、勅答之條々、執職事目錄、帥中納言〈〇藤原經房〉被進之、今日所到來也、〈〇中略〉

一記錄所事

先日被計申之時、被仰攝政〈〇藤原兼實〉訖、諸方訴訟尤可被決斷歟、重可有急沙汰之由被申訖、

〔玉海〕文治三年二月廿八日庚子、仰詞二通、先內覽之、

一通、諸司諸國幷諸人訴訟、及庄園券契、於記錄所宜令勘決理非、

一通、年中式日公事用途、宜令記錄所勘申式數、

〔吾妻鏡八〕文治四年九月三日丙申、宮內大輔重賴不法事、就被下院宣、早可被停止之由被仰遣重賴、又勅願寺領年貢濟否事、雖被尋而々地頭請文等未整、遲々之由同所被申也

若狹國司申、松永宮河保地頭宮內大輔重賴不隨國命事、可令停止非法之由成下文令進上候、右件事、いかにも御定可有候也、領家は尋常にて、地頭不當無極之所多候、又地頭尋常にて、年貢不致懈怠所々も候、而領家中にも地頭惡乘勝て訴申事も候之由承及候也、然者記錄所へも被召候て、決眞僞て御裁許候者、不當地頭は成恐て令勵忠節心候歟、又尋常地頭は彌令存公平候歟、尤可被召問勤否候也、但其ために被召候はん輩、若不令參上候歟、注給交名可令召進候也、以此旨可令申上給候、賴朝恐々謹言、

九月三日　　賴朝〈在裏判〉

〔吾妻鏡二十二〕建保四年十二月八日丙辰、伊賀國壬生野庄者爲春日社領、而宇都宮彌三郎朝綱入道稱地頭押領之由、興福寺住侶僧信賢所參訴也、今日有其沙汰、不能關東御成敗、於記錄所被遂對決、可宜之由被仰下云云、

〔東寺百合古文書三十〕記錄所注進

予氣色量實、置於扇於右腋、取吉書一覽之、雜仕等持取筆加署名字二字、其後覽量實、量實加署、次覽家君、家君氣色匡遠宿禰信□右腋取吉書、一覽之後加署、終次覽匡遠宿禰、同加署、雜仕授吉書於開闔量實、量實次第取上、覽右中辨行知、史生不參之間、次第取上之、量實授家君、家君被授右中辨、就便如此取傳者也、右中辨行知加署、雜仕進筆、次行知授右中辨、信兼朝臣雜仕進筆、信兼加署、其後雜仕授吉書於開闔了、其後右中辨起、次左中辨起座了、依被庭中訴人傳奏、不及著座、小時右中辨來當所、有庭中者、可有出御之由有沙汰云々、無訴人之由開闔令申之、其後明宗直著到日、面々目上首書名、次書見參、折紙渡開闔、開闔以公次行包內々進之、其後面々退出、

〔師守記〕貞治六年四月廿六日壬申、今日大夫史兼治進狀於家君、(師茂)是五ヶ所事、勾當辨遣大判事狀、幷大判事遣開闔狀等進之、勾當辨仲光狀云、被加押紙分不甘心、略押紙、今一本可書改、勘狀可加署之候、此分勘者明宗談開闔候間、開闔談家君、諸衆連署注進、依一人異議書改事、先規不覺悟候、有異議勾當可爲別勘文歟、此上猶爲勾當令申候者、雖爲新儀可書改注進者、可爲別勘文歟、可有計候べく之趣被答之了、

〔建武年間記〕記錄所寄人

四位左大史冬直(宿禰)　清大外記頼元　絅大外記師利　新大外記師治　大判事明清　主計大夫判官明成　兵衞大夫判官職政　佐渡大夫判官秀清　土佐守兼光　河內大夫判官正成　伯耆守長年(中略)○

建武元五十八治定畢

〔公卿補任〕(伏見)永仁二年(甲午)

參議正四位下藤賴藤

正應三年十一月廿八日、爲正藏率分所勾當、行記錄所幷裝束使事、

早可仰下之由仰之、廿八日庚子、召定經、仰來月一日直物事可申沙汰之由、本親經奉行也、而依穢氣改仰之、此日始被置記錄所、以閑院亭中門南內侍所南廊爲其所、執權辨定長也、親經依觸穢不出仕、寄人十二人參入、奉行職事定經也、仰詞二通、先內覽之、

〔辨官補任〕文治三年丁未

權右中辨從四位下藤定長 二月廿八日爲記錄所勾當、○中略

右少辨正五位下同親經 藏人、月日爲記錄所勾當、

〔公卿補任後宇多〕弘安六年癸未

非參議從三位源雅憲

建治元十二廿六權右中辨、同日敍從四下、同二二月日補記錄所勾當、○又見辨官補任

〔公卿補任伏見〕正應六年癸巳○永仁元年

參議正四位上平經親

正應五年二月廿五日、爲記錄所寄人、

〔公卿補任光明〕曆應二年己卯

參議正四位下藤宣明

正中四年三月十七日、補記錄所勾當、

〔師守記〕貞治二年後正月七日戊寅、今朝家君○師茂以使者、今日記錄所庭中、幷雜訴沙汰延否事、被尋問頭右大辨資定朝臣、必定之由答之了、○中略寄人左中辨平信兼朝臣今日遂初參、右中辨同行知藏人、勾當、四位左大史匡遠宿禰衣冠上結、奥座、四位大外記家君束帶、端座、大夫史重實束帶、端座、家君次、開闔、主税頭予衣冠上結、端座、重實次、大博士宗季衣冠上結、奥座、匡遠次、大判事明宗衣冠、端座、予次、等參著、左右中辨面々著座、後參著端座、信兼朝臣遂初參之□有吉書、自下薦覽吉書、雜仕以筆副吉書□書署名字二字、次宗季加署、次雜仕授吉書於予、

職員

らに志つらはれ、御座なども設けらる、障子の繪は畫所の預光芳に仰られて、時のうたよみに名所のうたども奉らしめ、その心をもてかゝしたまふ、色紙形は一乘院入道尊昭親王淸書す、又東の庭に梅をうゑられ、和歌を講せらる、題は梅有喜色とかや、寛保二年きさらぎのことなり、天明の火にやけうせ侍りぬ、

〔職原抄下〕記錄所

上卿　辨　開闔　寄人　已上依宣旨行其事、但於上卿辨者、可令行記錄所事之由被宣下也、

〔野宮問答〕開闔　寄人

昔之記錄所、又は文殿なぞにも此職名有之候、如何樣之事を知事候歟、

答

如被示候、記錄所、和歌所、文殿ニ有之候、開闔ハ、別當寄人は加勢之意にて候、

〔二判問答〕不審申上條々事

一記錄所文殿

記錄所被置禁中、有上卿辨開闔寄人等、被行天下政務所也、自後三條院御代被始之、至後光嚴院時分有其沙汰歟、

〔有職袖中抄〕記錄所　諸ノ訴訟ヲ決斷スル所也、七十一代後三條院延久年中ニ始メテ是ヲ置カレ、諸國ノ衰事ヲ正サルゝ也、後醍醐帝モ記錄所ヲ置キテ、民ノ患ヲ聞キ玉ヘリ、

上卿、辨、開闔、寄人、イヅレモ官人也、才智ナクシテハ不叶、人ヲエラバルゝ也、上卿ハ納言已上也、辨ハ辨官ナリ、是ヲ職ト云フ也、開闔ハ右筆ニ議シテ、訴訟ニ依リテ雙方對決スベキナンドヲバ、諸國ニ至ルマデ文ヲツカハス事行也、イヅレモ宣下ノ官也、

〔玉海〕文治三年二月十七日己丑、定經來云、記錄所辨事、延久保元其藏人辨爲執權、被仰親經可宣者、

建武元五十八治定畢

〔增鏡十五村時雨〕中務のみこひとつ御腹に妙法院の法親王尊澄と聞ゆるは、いまの座主にて物し給へば、かた〴〵の比叡の山の衆徒も、御門〇後醍醐の御軍にくはゝるべきよし奏しけり、つゝむとすれど事ひろくなりにければ、武家にもはやうもれ聞て、さにこそあなれどようゐす、まづ九重を、きびしくかため申べしなどさだめけりかくいふは、元弘元年八月廿四日なり、雜務の日なれば、記錄所におはしまして、人のあらそひうれふる事どもをこなひくらさせ給ひて、人々もまかで、君も本殿に志ばしうちやすませ給へるに、今夜すでに武士どもきほひまいるべしと、志のびて奏する人ありければ、とりあへず雲の上をいでさせ給ふ、中宮の御かたへわたらせ給ひても、志めやかにもあらず、いとあはたゞし、かねておぼしまうけぬにはあらねども、ことのさかさまなるやうになりぬれば、よろづうき〳〵と、我も人もあきれいたくて、內侍所、神璽、寶劍ばかりをぞ、忍びていでわたらせ給ふ、

〔續神皇正統記後小松〕應永八年皇居土御門殿炎上、卽室町殿に行幸、火の事は佛在世にもためしあれば、聖代にかゝはらぬ事にこそ侍れ、翌年新造の內裏に遷幸、天下を治給事卅餘年、尊號例いごとく、此御宇までは、記錄所の御沙汰も被行侍るとかや、

〔言繼卿記〕天文十八年九月三日己巳

一禁裏東坡點之事ニ參內、竹內殿、予、新中納言、菅宰相等、於記錄所沙汰也、

廿年三月廿二日庚戌

一禁裏御和漢有之、於記錄所有之、

〔閑窻自語〕同帝〇櫻町御時被修記錄所事

これも同じみかど、寛保のはじめ、記錄所とて、小御所の西に、かたのごとくの所のありけるを、さ

テ、萬民ノ訴訟ヲ聞召タルト云事、太平記ニ見ヘタリ、此御代天下混亂ニ及ベルヨリ以往ハ、國家ノ政事悉ク武家ニ歸シタルユヘ、内裏モ漸ク形ノ如クナルノミニテ、一向ニ記錄所ノ沙汰ニモ及ザル事トナリタルマヽ、爰ニモ後三條ノ御時ノ事ヲ以テ記シ玉フモノナリ、

〔吾妻鏡四十〕建長二年三月一日丁卯、造閑院殿雜掌事、爲被進覽京都、云本役人、云始被付分、今日悉被注緝之、深澤山城前司俊平、中山城前司盛時等爲奉行云云、　其目錄樣　後日被注入分略○中

記。錄。所。　　隱岐入道跡

○按ズルニ、右ハ閑院ノ造營ノ時、記錄所ハ隱岐入道ノ子孫ニ課シテ、其役ヲ助ケシメシヲ謂フナリ、

〔新抄五〕弘安十年十一月廿七日甲寅、記錄所始也、任寬元例、踐祚翌月所被始置也、開闔頭衛中行之歟、勾當寄人等如舊之由被仰下畢、

〔梅松論上〕いつしか諸國に國司守護を定、卿相雲客各其位階に登りし體、實に目出度かりし善政なり、武家楠、伯耆守、赤松以下、山陽山陰兩道の輩、朝恩に誇る事、傍若無人ともいつゝべし、御聖斷の趣、五畿七道八番にわけられ、卿相を以頭人として、新決所と號て、新に造らる、是は先代引付の沙汰のたつ所也、大議にをいては、記錄所にをいて裁許あり、略○中爰に京都の聖斷を聞奉るに、記。錄。所。決斷所ををかるゝといへども、近臣臨時に内奏を經て、非儀を申斷間、綸言朝に變じ暮に改りしほどに、諸人の浮沈掌を返すがごとし、

〔建武年間記〕雜訴決斷所

一當所論人無左右不可直訴記。錄。所。事

云記錄所、云當所、可有沙汰條々、已被定其法畢、若有參差事者、當所庭中幷越訴之時、可申所存、沙汰未斷之最中、於令直訴之輩者、注置訴人之名字於當所、雖爲理訴、三ヶ月不可及其沙汰乎、略○中

辨官三人　權右中辨藤原惟方　左少辨源雅頼　右少辨藤原俊憲

寄人廿一人　文章博士藤原長光　大外記中原師業　左大史小槻師經　治部權少輔藤原俊經　已下略了

〔續世繼三大內渡〕世を治させ給こと、○後白河昔にはぢず、記錄所とて、後三條院の例にて、かみは左大將きむのり、辨三人、より人などいふ物、あまたおかれ侍りて、世中をしたゝめさせ給、

〔愚管抄五〕保元三年八月十一日におりさせたまひて、○後白河東宮二條に御讓位ありて、大上天皇にて白河鳥羽の定に世をしらせたまふ間に、忠隆卿が子に信頼と云殿上人ありけるを、淺間しきほどに御寵愛ありける、去程に又北面の下﨟どもにも、信成、信忠、爲行、爲康など云者ども兄弟にて出きなどしてければ、信頼は中納言右衞門督までなされてありけるが、この信西はまた我子ども俊憲大辨宰相、貞憲右中辨、成憲近衞司などになしてありけり、俊憲等才智文章など誠に人にすぐれて、延久例に記錄所おこしたてゝゆゝしかりけり、

〔平治物語一〕信頼信西不快事

少納言入道信西ト云者アリ、○中略後白河上皇ノ御乳母、紀伊二位ノ夫タルニ依テ、保元元年ヨリ以來ハ、天下大小事ヲ心ノ儘ニ執行テ、絕タル跡ヲ繼、廢タル道ヲ起シ、延久ノ例ニ任テ、大內ニ記錄所ヲ置、理非ヲ勘決ス、聖斷私ナカリシカバ人ノ恨モ不殘、世ヲ淳素ニ歸シ、君ヲ堯舜ニ致奉ル、延喜天暦ノ二朝ニモ不耻、義懷惟成ガ三年ニモ超タリ、

〔百寮訓要抄別註八〕記錄所

白河院御脫屣ノ後ヨリハ、院中ニ廳所ヲ立玉ヒテ、萬機ノ庶政ヲ御沙汰アリケルマヽ、御在位ノ主上ハ唯寶祚ヲ守リ玉フノミニテ在セバ、記錄所ノ事モ、自然ト廢絕ニ及ベリ、然ルニ後醍醐天皇、國家政事ノ衰ヘタルヲ歎キ思食ノ叡慮深キニヨテ、御在位ノ時ハ記錄所ヘ出御ナリ

沿革

〔田中文書〕太政官牒石清水八幡宮護國寺

宮寺所々庄園參拾肆箇處事

一應如舊領掌庄貳拾壹箇處事

山城國肆箇處

壹處　字奈良庄　久世郡　水田陸町玖段參佰歩

右太政官、今日下彼國符偁、記錄庄園券契所、去年五月廿八日勘奏偁、國司解狀作田陸町玖段參佰歩、不注子細、本寺注文云、件處神境東四至內也、雖無文書、宮寺四至內者、任國司注文、可被裁許者、正二位行權中納言兼治部卿皇太后宮權大夫源朝臣隆俊宣、奉勅宜仰彼國如舊令免除者、〇中略

以前庄園如件、國宜承知、依宜行之者、宮寺承知、牒到准狀、故牒、

延久四年九月五日

修理左宮城判官正五位下行主計頭兼左大史竿博士和泉守小槻宿禰在判　牒

防鴨河使右少辨正五位下兼行左衛門權佐東宮學士備中介大江朝臣

〔中右記〕天永二年九月三日、庄園記錄所上卿、并辨可被置事被仰、〇鳥羽　九日、入夜藏人辨雅兼來仰云、庄園記錄所上卿可奉行、辨雅兼、大外記師遠、大夫史盛仲、明法博士信貞可爲寄人之便、仰左少辨之、是依延久之例、被仰下者、但件事國司與本家相論之時、可撿知云々、不申上者、強不及沙汰歟、十月五日甲午、今日庄園記錄所事始也、以太政官朝所爲其所、午剋許人々參入、座二行、（西座、辨上官、東座寄人五位以下、）諸司兼居膳三獻了、

〔百練抄七後白河〕保元元年十月廿日、更置記錄所、

〔醍醐雜事記八〕一記錄所始被置事（保元二年五月二日）

ニ省略アリト云ヘドモ、記錄所ハ其間ヲ定メ置ルヽナリ、

〔愚管抄 四〕後三條院の位の御時、〇中略 延久の記錄所とて、はじめておかれたりけるは、諸國七道の所領の宣旨官符もなくて、公田をかすむる事、一天四海の巨害なりときこしめしつめてありけるが、即ち宇治殿の時、一の所の御領々々とのみいひて、庄園諸國にみちて、受領のつとめ堪がたしなどいふを、きこしめしもちたりけるにこそ、宣旨を下されて、諸人領知の庄園の文書をめされけるに、宇治殿へ仰られたりける御返事に、皆さ心得られたりけるにや、五十餘年君の御後見をつかうまつりて候し間、所領もちて候もの丶、強緣にせんなどおもひつ丶よせたび候ひしかば、さにこそなんと申たる計にて、まかり過ぎ候き、なんぞ條文書かは候べき、たゞそれがしが領と申候はん所のしかるべからぬたしかならずきこしめされ候はんを、いさゝか御はゞかり候べき事にも候はず、かやうのことがらこそ申沙汰すべき身にて候へ、かずをつくしてたゞされ候べきなりと、さはやかに申されたりければ、あだに御支度のさうゐのことにて、むごに御案ありて、別に宣旨をくだされて、この記錄所へ文書どもめす事は、前大相國の領を除くといふ宣旨ありて、中々つや〳〵と御沙汰なかりけり、この御沙汰をばいみじきことかなどこそ世の中に申ける、

〔神皇正統記 後三條〕此天皇は、東宮にて久しくおはしましければ、しづかに和漢の文、顯密のをしへまでもくらからず知らせたまふ、詩歌の御製もあまた人の口に侍るめり、後冷泉のすゑのさま、世中あれて、民間のうれへありて、四月より位に居給ひしかば、いまだ秋のおさめにもをよばぬに、世のなかのなをりにける、有德の君にてまし〳〵けるとぞ申傳え侍る、始て記錄所と云所をおかれて、國々のをとろへたる事をなをされき、延喜天暦よりこなたには、まことにかしこき御事なり、

創置

飢のよし叡聞に達して、記錄所を設て、みづから天下の訟を聞召れしのよし、舊記に見へたり、此所に上卿、又辨、又開闔、又寄人を置、上卿は長官也、大中納言勅宣を承て決斷の事を奉行す、辨は次官也、左右の大中辨并に職事等是に任す、開闔は判官也、諸大夫ならびに諸道の輩是に任す、寄人は主典也、當所の執筆の職なるによつて、文筆堪能の輩を補せらる、かやうの大職をかろ〳〵しく申は、文盲のいたりぞかし、

〔八坂神社文書〕〔一〕太政官符　感神院

應爲院領四至内田畠事

在山城國愛宕郡四至（東限白河山、南限五條以北、西限堤、北限三條末以南、）

右記錄庄園券契所、去正月廿六日勘奏偁、件地元者常荒也、而以去長和五年二月十七日、依無公私之制、請國判已以開發、以其地利可充法華三昧料者、國郡與判、其後代々更無收公、而又去長元六年之比、申請前太政大臣家（藤原賴通）〇之處、仰國司免判又了、雖無官省符、事在起請以前、又不致其煩、已及數代、被裁許無其妨歟者、正二位行權大納言兼皇太后宮大夫源朝臣經長宣、奉勅件院四至内田畠宜仰彼院令領掌者、院宜承知、依宣行之、符到奉行、

延久三年二月廿四日　右少辨正五位下兼行左衞門權佐東宮學士大江朝臣（花押）

正五位下行主計頭兼左大史算博士和泉守小槻宿禰（花押）

〔百練抄〕（五後三條）延久元年二月廿三日、可停止寬德以後新立庄園、縱雖彼年以往、立券不分明、於國務有妨者、同停止之由宣下、　閏二月十一日、始置記錄所、庄園券契所、定寄人等（始行之於官朝所）

〔百寮訓要抄別註〕〔八〕記錄所　朝所トハ、政ヲ行ハルヽ所ナリ、官ノ朝所トアレバ、太政官ノ廳ノ中ニ、記錄所ヲ構ヘ置レテ、天下ノ雜訴ヲ聞シメサルヽナリ、朝所ト書テ阿以多乍登古呂ト讀ムナリ、記錄所ノ號ハ、官ノ廳ノ文書ヲ置ルヽト云義ナリ、當時里内ニテ殿閣モ名ノミニテ、僅

古事類苑

官位部三十

令制官職二十六

記錄所

名稱

記錄所ハ後三條天皇ノ時、諸國莊園ノ弊害ヲ矯正センガ爲メ始メテ置ク所ナリ、故ニ一ニ記錄莊園劵契所ト云フ、其後一時中絕セシヲ、保元元年藤原信西等ノ建議ニヨリテ再興セリ、上卿辨開闔寄人等ノ職員アリテ、其事ニ當レリ、而シテ後世ニ在リテハ、莊園ノ外汎ク一般ノ政務訴訟ヲ聽斷スル所ト爲レリ、

櫻町天皇ハ、古ノ盛事ヲ思慕セラレ、殿內ニ一處ヲ開キ記錄所ニ模セシト云フ、

〔百寮訓要抄〕記錄所　禁中にて諸人の訴訟を判斷せらるゝ所也、後三條院延久に殊興行ありて、天下の政道をなほされし時、才人をえらびて寄人におかれし也、上卿辨寄人など皆世務にたへたる器量をえらびて補せらるゝ事也、

〔官位訓四〕記錄所の事

記錄所といふを、只物を記錄(シルシシルス)ところとおぼえて、かるがるしくいひのゝしる族あり、かならず推量に心得ては、大きなる僻事多し、されば記錄所といふは、人王、七十一代後三條院延久元年に、諸國衰微して、萬民下に苦しむのよし叡聞に達し、御門是を御身のあやまりにて、天災あるよとかなしませ給ひ、はじめて大內に記錄所を設て、天皇爰に出御あつて、躬天下の訟を聞せ給ふ、其後時代によつて用捨一ならず、九十五代後醍醐天皇の御宇、元亨元年に天下大に旱して、萬民街に

哉否事不尋得、民部卿源大納言談云、不可立加者、大藏卿道良、治暦御即位日、爲近衞少將立加之由、所被談也、彼是之間不思得處、左兵衞督能定卿被談云、應德三年御即位之日、我爲左中將、依一院御給敍從四位上、○藏人頭引陣之間、依故大殿仰、乍著甲立加敍列給位記也、付件例宗能引陣之間、宣命欲畢之程、經華樓陣後幷延休堂南令立加敍列見、此事藏人左近將監長隆立加、就中今日武官敍人無一人、仍稱前例立加也、人々不可、然由被難云々、不知是非、故大殿仰定公事之全謂歟、以彼仰可爲證驗也、後日新大納言基綱卿被申云、甲冑之士不拜之由見本書云々、此事可尋、宗能行幸供奉五位裝束、白浮文袍打下襲給位記之後於宿所著四位闕腋、無文裝束、供奉還御、此次其後垂纓持笏申慶於處々也、爲房談云、寬德二年御即位之日、右衞門權佐實綱乍著武禮冠兩襠加立敍位也、件人爲下官外祖父、仍今日雖著甲何不立哉、

〔十訓抄七〕圓融天皇の御時、頭中將○藤原實資にて殿上に候給けるに、式部丞藏人藤原貞高と云人大盤に付たるが、頓死したりけるを、頭奉行にて、奏○奏恐書識司下部を召て、かき出させられけるに、何方より出べきかと申ければ、東陣より出べきぞと仰られけるに、藏人所衆、瀧口、出納、御倉女官、主殿司下部共に至るまで、そこらの者共是を見んとて、東陣へ競ひ集るほどに、殿上の疊ながら西陣より出せとの給ければ、引違て、西より出しければ、見物なくて陣の外へ出たる、父三位來て、迎へ取てけり、

〔有職問答一〕一藏人事

藏人と稱するは、禁中殿上藏人、其外春宮藏人候也、院宮ニハ藏人候ハヾニ十、攝關家ニハ職事ト號シテ家司ヲ申候、其モ藏人とハ不稱候、四位五位六位皆有事ニ候、

殿上人にかぎらず、院宮攝關家にも有事にて候、其は其所にて藏人の役を沙汰するをよび候、位は六位にて候、如此成官職、院々宮々に有之候由被仰出候畢、此分候哉、

はるゝものならば、人にきかせずして、おさゞに忠こそのせさせ給ふなり、己がすることにあらずといひて、もてありけるかう人となければ、もてまいりたるといへとの給へば、はくちうちかたぶきて、とみにとらず、北方手をすりていつゝ、ぎぬ五十ひきとらせての給ふ、いとすくなけれども心ざしなり、今又もありなんとてとらせ給ふ時に、いとやすき事に侍をていぬ、はくちうちへおこゝもまいり給ふ、かんだちめみこたちおほくまいりあつまり給ふ、忠こそも侍らひ給時、藏人所におびをもてきてうるなりとていでたるに、藏人ありはらの忠げ家、心づきたる人にて、かしこくおどろきて、これは世中にありがたきもの持たる人かな、こゝら見つる中に、これににたるおびなし、ないえんに右のおほいどのゝさしたまへるにいとおぼえたり、さりともそれならんやは、左衛門尉なる人のいで、そのおびはうへの御覽じて奉れと、おほせたまひしを、るいだいに傳はれるおびなり、ちがけがのちいでまうでこずは、たてまつらんとそうし給ふを、たゞこそのおびにこそなしつらめなどいひて、さばれうへに御覽せさせんといひて、もてまいりてうるとそうす、うへ御覽じて、いとかしこくおどろき給ふ、これはちかげの大臣のおびにこそあめれ、うれたき人かな、わがこひしには子いできなば、とらせんといひしを、さにこそありけれ、ふしぎなることかなとて、右大臣をめして、いとかしこくおしまれしおびは、いだしたてられにけりやとて、わらひ給ふ、

〔續古事談 二臣節〕在衛維時オナジ時ノ藏人ニテ、藤内記江式部トテゾアリケル、コメ維時ハ、聰敏フシギナリケリ、遷都ヨリ後ノ人ノ家始ヨリ、今ニイタルマデ、ソノ主ノ名ウリカフ年月、皆コレヲ覺エ、又人ノ惣ミナシリタリケリ、此藏人ノ時、於御前前栽ノ名ヲ書タリケル一草ヲヨム人ナカリケリ、

〔中右記〕嘉承二年十二月一日壬午、眞書云藏人右近少將宗能、今日依本符勞敍從四位下也、先例立加敍列

〔春記〕長久元年四月廿一日己巳、予卽參內、仰〇後朱雀云、日者汝〇藤原資房隱居之間、万事鬱々、一夜關白〇藤原賴通參入、語職事等不了之由、殿上間事、資房更不知給者、事尤道理也、但末代事萬事皆以如泥、殿上間事何爲哉、藏人或兒童、或皆乳母子、又强緣、忽公事爲宗、豈何隨禮義哉、只以身可奉公事、不可及他人、努力々々、末代之事只可守其身者也、讒賊在傍、可恐前鑒之、不可左右申者也、　五月十二日丙寅、今日終日候內、依人數少也、逐日殿上作法如蠻夷、藏人等有若亡也、頻雖成諷諫一切無承引之、强緣藏人只以讒言爲宗、一切無徒々々、不如鉗口、只可爲以目之代也、予愁々無極、公事繁多、爲御使往反、毎日不知其度數、尫弱之人何爲哉、無術、

〔空穗物語祭の使〕みかどくらづかさのきぬ三百ひき、御唐櫃にいれさせ、つかさの御みぞ櫃どをに入れ、藏人所の御くだ物櫃十につみて、大將にたてまつり給はんとするに、殿上藏人ひとりもなし、

〔空穗物語忠こそ〕ちゝおとゞの御もとに、おやの御時よりつぎ〳〵つたはれる名だかき帶、ないえんにさし給へりけるまゝに、一條殿にをき給へりけるを、この北方とりかくし給ひて、かくうせぬとのゝしり給ひけり、おとゞおどろきさはぎ給ふ事かぎりなし、さま〴〵にこれがいでくべきほうを行ひて、こゝら五つぎ六つぎと傳はれる帶を、かくわが代にしも失ひつる事とて心をまどはしてなげきたまふ、〇中略北方いかでこの帶を忠こそのとりたると、父大臣に聞かせ奉らんとおぼして、世の中にかしこきはくちのせまりまどひたるを召して、まうごはわがいはん事聞きてんや、ありとあるたからみなわたさむ、願はん事は、難かるべき事なりとも、さながらさんとの給へば、はくち、おほせ給はん事は、かたかるべき事なりともうけたまはらんと申、北方、このおびとき十むらあまりとをとりいでゝ、このおび右のおとゞのうちへまいり給へらん時、藏人所にもてゆきて、うる物なりとていだせ、あたいとはれば、千五百貫といらへよ、せめてと

事也、惟方卿昀曰、全不取云々、岡内府說、經宗卿同曰不取云々、予案、公光頭時取之、若家禮歟、別事也、殿訓曰、舊例之次第取之、違歩事間在之由、尤所聞也云々、

〔文德實錄 六〕齊衡元年十月辛未、召刑部大輔春澄朝臣善繩、文章博士菅原是善、民部少輔大枝朝臣音人等、於藏人所、評重陽節文人所上詩、

〔三代實錄 二十九 淸和〕貞觀十八年七月十四日己丑、先是去年十月、勅喚散位大藏朝臣善行、侍藏人所、校定御書、兼以顏氏家訓、敎授帝左右、年少及禁中好事者、至是講竟、詔於藏人所、賜竟宴、喚大學文章生等賦詩、

〔西宮記 臨時 二〕藏人所講書事

延喜十年十月廿九日、今日藏人所行漢書竟宴事、別當左大將藤原朝臣、左大辨道明朝臣、右大辨淸貫朝臣以下殿上侍臣預宴座、數盃之後、探題詠史、召詠史之詩、御侍間食、左大辨道明朝臣講了、絲竹間奏、寅三剋宴了、公卿已下有賜祿有差、博士絹六疋、尙復二人賜絹三疋、自內藏寮給之、

〔九曆〕天德三年九月五日、臨時除目、左大臣奉行云々、藏人珍材來云、內給所錢卅貫可進藏人所、

〔淸原元輔集〕藏人所に櫻の花のちるを見て、つかさ給はるべき年の春給はらで

櫻こそ雪とちりけれ時雨つゝ春ともえらですごしつるかな

〔權記〕寬弘七年正月一日辛亥、秉燭未供御膳以前、外記令申雅樂寮申舞裝束不具之由、是年來候藏人所、而去年多燒亡、仍所申云々、卽內辨退下、仰令借法興院裝束也、

〔小右記〕長和二年九月三日壬辰、資平從內退出云、今朝頭中將〈○藤原公信〉從者男到藏人所、請中將手水納桶了、其後資平從童請資平手水、而頭中將男取杓不與、資平童更汲湯用自手水、資平童云、專不可洗自手、先可奉侍從殿御手水、此間相論、男以杓打童面、童引破男烏帽、男拔刀突童腹、已及死、頭中將卽捕獲男身、縛付西廊柱者、

止、

參御物忌之人、雖宿衣著、劍把笏、於殿上口邊徘徊、觸示參籠之由、而劍笏、近代不然、但撿非違使必帶之、參籠之輩及丑一剋昇殿、又御物忌中夜參宿之人不給夕、然而近代皆給夕、

殿上侍臣不具劍笏、爲要籍驅仕也、至于近衞司宿侍之時具劍、撿非違使亦同之、又節會日御出之後帶劍昇殿上、○中略

貫首上卿坐殿上事（革長）

貫首上卿坐殿上之時、不用西戸、從主殿司往還小戸出入、（是六位事也）件事從長德間所爲來云々、（是頭事也）

（上卿坐時例、不問先例、）外座當神仙門柱口時、亦從神仙門往返、抑御讀經等時供膳於朝餉時、取下盤、藏人頭雖坐上從西戸下居二大盤、必不居一大盤、但至于居大盤不可爲難、雖貫首可然、上臈於日記辛櫃邊坐者、於戸上可候氣色、

〔禁秘御抄下〕雪山

年内雪蒙催所衆瀧口等參、春雪沓鼻隱レバ必可參、大内藤壺（弘徽殿也）里内依便宜藏人下知修理職儲屋具、雪不足之時、被召諸御願寺、執行奉之、瀧口相具衞士及取夫、上殿舍上、於棟拋雪、所衆作雪山、瀧口上臈三人、所衆上臈三人、立庭奉行、持柄振、藏人頭候簀子奉行、（多直衣）藏人候便宜所傳事、修理職作屋、凡如此事、上古不見、自中古事也、事始大略一條院御時以後也、清少納言記有其子細、初雪見參、近代絶畢、初雪日仰六位藏人令取所見參、藏人束帶（或宿衣）召朝餉仰之、内侍傳仰、藏人進見參給祿、内藏寮絹、大藏省布也、

〔貫首秘抄〕主上出御時關白下重尻事　近日頭五位藏人或取之、或不取之、予（藤原俊憲）五位藏人之時、問範家卿、答云、強不取之、只折行給所々引直之也、内府（藤原公教）被命云、我顯隆宗輔頭時、初昇殿以後、多見頭、五位藏人不云辨官近衞將、主上出御之時、關白取御裾、職事取關白裾、天津々久事不見不聞

上卿於無名門前被奏文之時、藏人奏了出對之間、於橋上鳴沓云々、在孔雀間之上官開令知勅可
之由者、上卿及貫首坐殿上之間、藏人不往反西小戸、此時自主殿司昇降之橋可上下也、是近代之
例也、貫首不被坐之時、通行任意也、但朝餉御膳之時、取殿上下盤之藏人、猶出入件小戸、
右貫頂門藏人不通、可往反殿上東戸也、但上臈多坐東戸邊之時、可隨形也、非不知之、
居殿上之間、大臣被參者起座隱去、又他上卿參之時、六位一兩居者、早立去了、但四五位列座之時、
藏人不可立去、
藏人於大臣前必居、但傳宣旨之時、仰詞了後可居也、於自餘上卿前不可直以蹲折、
居小板敷之間、上卿貫首等被參者、早以下地、候殿上若下侍之時、貫首被參者、不可動座、頭居殿上、
被示雜事之時、藏人若在地早參座、可申返答、座若狹者、上小板敷下侍等可承也、又藏人在座之間、
頭於地被示者、早下座可答申也、殿上奧座不往反、又雖南座、頭被著之時不通、此時勸盃藏人小板
敷可登也、是兩貫首共被坐之時事也、若一人坐北座者、勸盃藏人自沓脫束行、可上長押也、
於殿上前不吐唾、是故實也、而末代更無禁止之輩、於殿上若上卿貫首召藏人之時、不高聲稱唯、只
可申侍之由、但奉於執政人非此限、新藏人未從事以前、若可上下格子者、先達相副勤仕、又無指事
不入鬼間邊、不出弓場殿、又供指油之時、不入夜御殿、又候殿上之間、若主上出御者、早以立隱、又高
聲不喚主殿司、一月不言、三月不食、是往日之次說歟、
障有事之時、縱及深更不下格子、又不脫束帶、近代留置下臈一人、自餘皆臥事非穩便、
供御膳之後、宿衣之人不可昇殿、若於宿衣候御前之間、刻限既至供膳者、早從閑道退下、不可渡渡
殿之道、凡朝膳午一剋、皆以束帶、
自御前被召貫首之時藏人自向彼在所告申、又大盤之時伺參催申、是近代之例云々、
臨昏之時、貫首被退下者、藏人取脂燭前行、是亦近代之藏人也、於路間逢遇貫首者必相送隨命進

家

御手水番、依例裝候御手水、女房仰云、女房不候、(謂命婦不候)藏人奉仰示可供奉人、(四位、五位、六位、合三人也、但五位四位中必用上﨟一人、人不候者不供、)三人到度御前經御湯殿南簀子入御簾中候之、

〔安齋隨筆 前編 二〕一女房男房　侍中群要(卷三)に云く、供御盥事、(中略)此事多く女房の所供也、召男房稀有の事なりと見えたり、此の男房と云ふは、藏人の事をさして云ふなり、藏人の職は、天子の御身近く親しく召仕はるゝ者にて、御側の女房も同樣なる故に、女房になぞらへて男房と云ひたるなり、藏人に非ざる男を男房とは云ふ可からざる也、源平盛衰記に、(卷十四ノ三)壹岐判官知康が鎌倉に下りて賴朝の所望に依りて手鼓を擊ける事を記したる條に、女房男房心を澄し、落淚する者も多かりけりと見えたり、此男房は藏人をさすにあらず、女房と云ふにつきて、日拍子のよきまゝに、男房と連ねて云ひたるなり、直に男を男房さいふ事は、此外には見及ばず、

〔侍中群要 五〕禮節事　進退往反事

家

南殿北廂常道也、而新藏人初參之後、一月以上不往返自南殿、但事狎之後任意、又南殿階前不可渡、但或宿老上卿有被聽之、

人自和德門之時、昇自仁壽殿東中階、入南殿北廂、自殿上向陣座之時、降自同殿東南階、又雨濕之時、入自和德門者、從綾綺殿西壇上南行、從陣後軒廊西行、昇自小橋、入南殿、(出儀亦如之)上卿雖被立、雨日猶無妨往還、但上卿多被立之時、不用此道、縱雨不可行、又晴日不可行壇上、依爲雨儀路也、上卿多被立壁下之時、欲昇仁壽殿中階、先當階前深揖耳、今案、此事如何、先例上卿被立壁下之時、不用件中階云々、

被問上卿見參之時、藏人至陣腋、招陣官同問之、或至南殿東廂格子下伺見歸參奏之、

上卿被參弓場之時、藏人不出其前、隨召參、藏人縱雖衞府先必下裾參之、(今案、殿上前皆下裾、不待上﨟之揖、)奏、史在孔雀間之時、藏人不出弓場方、

雜載

貞應元年五月日　出納彈正忠中原在判　藏人學生大江在判　左衞門權少尉藤原在判
左近衞將監高階在判　左近衞將監源在判　式部少丞源在判　勘解由次官平朝臣在判　右少辨平朝臣在判　別當　頭左近衞中將藤原朝臣在判　右大辨兼皇后亮藤原朝臣在判

〔拾要抄十〕和州鑄物師共江相尋候答書

奉差上口上書

油留木町
鍋屋町
松平甲斐守領分葛下郡五位堂村鑄物師
七人之者共〇中略

一私共儀ハ、往古河內國日置庄ニ而、百九人鑄物師職仕罷在候處、仁平年中、禁裏樣御惱被爲在候由ニ而、鐵鑄燈爐百八基鑄造可奉預旨奉蒙勅命候ニ付、右百九人之者ゟ、鐵鑄燈爐百八基奉預候處、其後御惱御平愈被爲在候旨、右依勤功、仁安二年ゟ私共職分諸役御免除、御趣意之御牒奉頂戴候、右筋目を以朝恩之鑄物職仕、私共儀者、右百九人之內ニ而於和州も私共七人ニ限り相勤、數年來相續仕來り罷在候、右私共代換り之節、支配禁裡藏人所御藏眞繼美濃守ゟ繼目之許狀被下置、鑄物師職之事、舊蹤分明ニ御座候、於當國者、私共之外新鑄職相企候もの是迄御座候而も、御差留被成下候處、左之通、〇下略

〔侍中群要四〕御盥事

案主水司供御手水、〇中略此事多女房所供也、男房希有、

男房人供御盥儀

牒、得件鑄物師等去月日解狀云、號藏人所供御人鐵燈爐以下於御年貢可進上、抑據人供御人意趣者、居住之處、興福寺御領日置庄也、任傍例、有限所當官物之外無他役、被雜役免除、兼又爲鐵賣買京中往反之間、爲衞士并使廳下部等依被取失、觸事有煩、仍爲通件煩、各賜短冊、諸國七道并京中町和泉河內兩國市津往反之間、爲通件役、注子細言上如件者、件燈爐尤以可爲公用、依請、且爲雜役免除、且仰左右衞府并使廳諸國七道、可令免除件役之狀、所牒如件、敢勿違失、故牒、

仁安二年正月日　出納明法生中原

別當左大臣兼左近衞大將藤原朝臣、藏人左右衞門權少尉藤原、頭左近衞權中將兼皇后權亮藤原朝臣左近衞權少尉藤原、權右中辨平朝臣、　左衞門權少尉藤原

防鴨河使左衞門權佐

〔東寺百合古文書二十七〕藏人所牒　燈爐御作手鑄物師等

應令早任代々御牒并院宣將軍家下文旨、停止諸國七道市津關渡泊地頭守護所神人先達等非法煩事

牒、得彼御作手等去月日解狀偁、謹撿案內、當供御人者、是自二條天皇御宇被建立、可令停止諸國七道市津關渡津料例物地頭守護所神人先達等非法煩之由、忝賜御牒、更無牢籠、令往反諸國、賣買私物、以其利潤令備進御年貢并臨時御物、迄于今有勤無懈、殊功異他之處、去年亂逆以後、彼輩等非法不可勝計、早任代々御牒、院宣、并將軍家下文狀、可令停止件煩之由被仰下、而且又若罪科之輩出來者、先觸申子細於本所、可有其沙汰之旨重被成下御牒者、彌仰朝威之貴□者、早任申請令停止彼等非法之煩、無懈怠可令備進有限恒例臨時召物年貢以下物之狀、所仰如件、御作手等宜承知、勿違失牒到准狀、以牒、

藏人所御厨

十六日乙丑、今日被附甘露寺家同列添願書如左、〇中略

今度北小路差次藏人俊矩敍爵申望候ニ付、〇中略然處俊矩儀は、去寬政三年十一月被補藏人、文化十一年正月經極臈十年勞、致遂。。退、至今年勤勞及四十一年候、〇下略

〔中右記〕元永二年六月七日壬午、其次可云關白、近代藏。人。所。御。厨、多以被打入私人之領、多是入春日山階寺領之由所聞食也、此事誠不便々々、關白可沙汰之由云々、　八日、藏人所御厨と春日興福寺幷坂戶御牧相論事、先日承其由、大略沙汰之處、或五十三町領知之由進證文、其外百町餘人御厨、或進僞書、如此沙汰之處未切作也、可進慥證文之由、仰頭辨顯隆朝臣了、與未進候也、

鑄物師

〔除目大成抄六〕承曆三　大舍人少屬正六位上秦宿禰俊任　臨時內給　俊家

藏人所鑄物師從七位上秦宿禰俊任誠惶誠恐謹言

本 請特蒙天恩、因准先例、依年勞幷進納私物三百疋御佛行事所功、拜任諸司大舍人屬闕狀、

右俊任謹撿案內、爲藏。人。所。鑄。物。師。者、依年勞之功、拜任諸司屬者、古今之例也、就中俊任以私物進納御佛行事所、勞公用、謂其功豈無哀憐哉、望請天恩、因准先例、被拜任件官者、彌知奉公之貴矣、仍勒在狀、謹請闕處分、

承曆三年正月廿五日　鑄物師從七位上秦宿禰俊任

近代人々說、藏人方功可注臨時內給云々、此事不可然、雖藏人方功被下宣旨了者、猶可注其功也、但近代無宜下沙汰云々、

〔拾要抄十〕眞繼美濃守差出候書付寫

藏人所牒　河內國丹南郡狹山鄉內日置庄鑄物師等

應早進上鐵燈爐以下御年貢事

使

鷁退

○按ズルニ、右俊矩ハ寛政三年十一月十六日藏ナニ補シ、天保二年敍爵セリ、供給條下ニ俊矩記ヲ引ケリ、

〔天保十年京羽二重〕江家

俊矩（天保二被加堂上聽昇殿）―俊迪―俊文

北小路右將監大江俊迪（トシヒラ）（正六位上藏人皇太后宮權少進）四十六（○中略）

右自源家至江家家數三十八、總合家數百三十七、

〔職原抄下〕藏人所

六位藏人四人　藏人者（○中略）至于極﨟者必預巡爵、若有奉公之志者、除其籍更加末座也、

〔親長卿記〕長享三年（○延德元年）六月七日、藤原懷幸去年申敍爵畢、雖然令逆退申六位侍中事、但有例、故持經例有之、

〔基熈公記〕元祿二年十二月十六日己卯、藏人藤原兼仍敍爵之事、昨夜被仰下候趣、奉拜謝候、殊種々被添御意候條、偏御厚恩之至、難述筆頭畏存候、然者昨日如言上兼仍未練若輩候へば、今少積勞可令奉公内存候間、明日官位御沙汰之序、於御前鷁退之義可申上存候、但從表向以議奏衆今日にも鷁退之事可申入候哉、御恩惠之上候、□今一度御内意被仰下候者、猶以可畏存候、此等之趣宜預御沙汰候、頓首謹言、

十二月十五日　基熈上

〔春秋左傳註疏十四（僖公）〕經十有六年春王正月、是月六鷁退飛過宋都、（註略）疏、（中略）正義曰、（中略）洪範五行傳曰、鷁者陽鳥、鷁字或作鶂、（中略）公羊傳曰、視之則六、察之則鷁、徐而察之則退飛、是亦鷁見先後而書之、

〔大江俊矩公私雜日記（美濃紙上包小本四折）〕天保二年九月十三日壬戌、小折紙願書等差出置甘露寺家了、（○中略）俊矩儀、寛政三年被補藏人、文化十一年極﨟十ヶ年之後、逆退被仰付、（○中略）

通之旨、昨日蒙仰、仍昨日申殿下了、而重仰云、今度院藏人仲職雖片時可補之由所申也、先可被補之由所思食也、且又可相計者、可在勅定之由申之、重仰云、猶有申敍爵之輩歟如何、重申子細、無左右仰（藏人敍爵事御宣）非藏人事（左近將監源雅[illegible]中）仰云、被仰下有何事哉、廿日乙巳、上卿取解狀一兩被結之、（中略）其次仰云、左衛門尉衆貢令敍從五位下、次召外記賴業被仰敍爵事等、（中略）召藏人大舍人助經奉仰云、左衛門尉菅原在高（非藏人大榮、大學頭在茂男、先罷久不社之、）藤原仲職（院藏人二萬、故攝津守爲繼男、其外異形叉放埓者也、然而以云院藏人歟、）可爲藏人、左近將監源雅經（伊賀前司雅兼男）可聽昇殿者、

〔基熙公記〕元祿四年正月十四日庚子、頭賴重朝臣來、暫時言談、武家傳奏來、有談事、其序申云、大外記師庸朝臣男、去年望申元服敍爵事、雖然當時可經歷六位藏人輩、其數少間、存奉公之儀可延引旨示之、而此間又師庸申云、可經歷六位由畏存、於然先加首服聽昇殿、可令見習公事樣可預御沙汰由頻申之、可爲同樣哉也、答云、如申者往古之非藏人之體也、與當時非藏人混亂如何、其上其身於稱非藏人者、不可庶幾歟之間、就彼是先當年中可岡旨可彼示由示之處、尤之由領狀了

〔大江俊矩公私雜日記〕天保二年九月九日戊午

俊光（別紙四折）　寶永六年六月十九日補藏人、　享保二年三月七日敍爵、

俊光男　俊在　享保二年三月十日補藏人、　同十年五月三日辭職（死）

俊在男　俊章　延享三年十月十三日補藏人、　寶曆十二年九月廿四日敍爵、

俊章男　俊興　寶曆十二年十一月十八日補藏人、　明和四年二月廿七日敍爵、

俊興男　俊冬　明和四年二月廿八日補藏人、　寬政三年十一月十四日敍爵、

俊冬男　俊矩　寬政三年十一月十六日補藏人、（中略）

十三日壬戌、小折紙願書等差出置甘露寺家了、（中略）

上包中御定　一（〇〇〇〇中略三十九年）　正六位上右近衛將監大江俊矩（六十四歲）

づかり候之條、本意にはたがひ候にたり、一代に年號の多くつもり候と、當代の藏人五位とのおほくつもるはよしなき事に候、御用心候べき事なり、藏人の代々多くつもりたるがゆへに、今はいとあさましき人おほく藏人に補し候にたり、此四五十年がさきまでは、なるべきもの丶ならぬはおほく候き、なるまじきもの丶なりたるは候はざりき、近代はさも譜代と申もの丶いとおちぶれたるもの一兩人藏人になさぬば候はず、あさましき藏人はいとおほく候める、自今以後は、一﨟へたらん藏人をもちて受領の巡には入るべし、一﨟へざらむをば入るべからず、但し故ありて敍爵せむはこの限りにあらずとだに仰くだされ候なば、いとかく急ぎのくものはさふらはじかし、この四十年がさきに、藏人五位のはてにて人くづと、諸人に思ひ申候し者は、惟明季良と申て二人侍き、その時これらは何ともなき上達部のもと二三所四五所などまかりかよひ候しなり、今のくちきく我はとおもひて候、藏人五位はすこしうるほひある上達部殿上人は申べきにもあらず、われ〳〵おなじく藏人へたる諸大夫のすこしもうるほへるがもとにはほうはうとまかりあひて候なり、人の心のわろくなりて候か、もしは受領になるみちの候はですぢなく世の捨がたくて身すて候かの間なり、

〔後撰和歌集雜十五〕藤原さねきが藏人よりかうぶり給ひて、あす殿上まかりおりなんとしける夜さけなうべけるづいでに、　兼輔朝臣

むば玉のこよひばかりぞあけ衣あけなば君をよそにこそ見め

〔新拾遺和歌集雜十九〕藏人にて侍りけるが、かうぶり給はりて後よめる、　藤原高範

位山のぼる我身のいかなれば雲井の月にとをざかるらん

〔本朝世紀〕康治元年十月十日己巳、藏人源俊保敍爵、蔭孫藤原隆憲補其替、元一院藏人也、

〔吉記〕治承五年〇養和元年五月廿九日甲辰、藏人事、藏人頭所望奏聞事時綱申、爵替在高所望可何樣哉之由可申殿下〇藤原基通

敍爵

卽遣二一禮歸來、(非番山科家□行向申遣挨拶)次向萬里小路頭辨家、以雜掌(粟津齋勝)主辭職、逆。退。之。願。書。二通、藏人申文一通、(以上入武傳內見分)申武傳、內見無子細由附之、(日附令相(此間出損)は昨日附、武傳今朝被返由申子細附之)且禁色昇殿之一紙相添、令附進、宜預披露旨申入處、(但辭職被聞食、卽日藏人禁色昇殿等宜下顯之叡慮、幷過日內々廣橋前亞相被申入置、通、其都合相成樣矣々頼入置也、)已上四通共有落手、宜有取計旨返答有之也、

〔侍中群要 一〕新藏人不從事間事

新藏人未從事以前、雖奉仕上下格子、名謂不參御前、召殿上、若人不候之時、以小舍人主殿司告先達藏人、又無指事不入鬼間邊、不出弓場殿、自非人指答外不言、不自咲、飲食言語以謙愼爲宗、又未從事間、奉仕上下格子之時、先達猶可相加歟、但示氣色、可隨上藹命、新任之人强抗先達、有時難知者也、此間奉仕差油、不可入夜大殿、又主上出御殿上、隨便可隱也、

〔職原抄 下〕藏人所

六位藏人四人　藏人者、不依年齒老少、以當參次第定上下、至于極藹者、必預巡爵、

〔名目抄 諸公事言說〕爵(シヤク)(凡諸位ノ總號也、但又初敍五位之時ヲ謂敍爵、日本ノ法也、)

〔有職問答 二〕一六位藏人之事

(殿上公達ノ息モ多補候、或又凡家ノ家禮ノ諸大夫モ補レ之候、)多分地下の者ども也、假令攝關家禮などの准仁たるべし、其も當職のほどは、殿上の振舞は大概五位(殿上人ノゴトシ)藏人に同之、敍五位しては殿上をおるゝなり、

〔大槐秘抄〕おほよそ代のはじめの藏人は、御卽位のさきに臨時に敍爵する事候はず、御卽位の敍位にさだまりてする事に候、しかるを今度はじめて御卽位(條○)二以前に、かうぶりを給はりて候なり、おほよそ藏人の臨時に敍爵仕る事は、ありがたかるべき事なり、世會の諸大夫のなを年少にて藏人に補て候などが、臨時の敍爵ばし候を、近代は一日まかり成ぬれば、みな敍爵せむと思ひあひて候なり、藏人の受領に任せし事は、六年侍中の勞に候、しかるを近代一日をへて巡にあ

二。﨟。公　承候

三。﨟。公。　承候

四。﨟。公。　承候

〔大江俊矩極﨟要用日記十〕文化十一年正月廿一日(俊矩)一﨟年限、當冬可辭申、近例的當也、然聊依有所存、舊多欲辭申處、依舊院(○後櫻町)御事、無力延引、及當春了、去九日內存之意味密々談廣橋前亞相處、不圖被申上殿下(○近衞政熈)、且達天聽、殊有難有仰、誠恐入之儀也、(巨細在雜記)又依有奉公之望、以先考例願望之意趣相認、去十五日伺陽明(○近衞政熈)御氣色之處、無思召由被仰候、仍昨日披露始相濟故、今日願書二通書加日附、(伺陽明御氣色之時、月附計相認、其由申上置了、藏人申文一通相添、)持參月番傳奏六條家人內見處、明朝可被返間巳剋頃可申出由有返答、(雜掌木村條之進)仍差置歸、件三通如左、

(料紙小奉書四折)
俊矩儀、爲一﨟勤仕既及十箇年候間、恐存候、仍辭職之事願存候、宜御沙汰希存候也、

正月廿七日　俊矩

日附之事、後日廿六日願辭以吉中被示逵云、明朝可被露之間、明廿七日日附書改可差出由也、

仍卽日貮通共日附書改持參、於宮中附願辭了、([illegible])

(料紙同上)
俊矩辭職之事、依請於被聞食者、愚昧未練之質恐入存候得共、奉公之念願候間、何卒如每例更申藏人加末座勤仕之儀深願存候、被垂御憐愍、願之通被仰出候樣、偏宜御沙汰希入存候也、

正月廿七日　俊矩、

已上二通、以美濃紙爲一包、

大江俊矩

(料紙同上)
申藏人之事

廿二日、巳剋頃向六條家、昨日差出證書附申出處、以雜掌(昨日同人)被逵一覽處、無子細由被返之、令落手、

右能頼謹撿古實、被任吏途之春、以新敍爲宗、被撰新敍之時、以藏人爲先、誠是聖代之舊跡、抑亦當時之嘉躅也、爰能頼蟬冕竭忠、雀級播榮以降、剖虎符巡、偸思魏闕之新恩、退鳴有愁、只悲類宋都之故事、被超下﨟之例、未聞上古之跡、採擇之仁、登用異他、望請天慈、因准先例、依爲藏人巡第一、被拜任最前闕國者、不空雲路之勞、將勵出宜之辨矣、能頼誠惶誠恐謹言、

安元二年正月廿八日　　散位從五位下藤原朝臣能頼

〔大江俊矩公用往來 五〕文政二年十月廿二日、一﨟廻文自二﨟達來、卽送三﨟了、如左、

明廿三日、於内々方仕舞囃子能御覽候、御竭御用候間、侍中衆兩人、申刻可有參勤也、

十月廿二日　資善
明光

右之通能來行被觸候間、被仰合乍御苦勞御參可給候、助功儀御入魂希入候也、

十月廿二日　助功

差次殿　承候
江藏人殿
新藏人殿

〔寬永七年雲上明覽 下〕六位藏人四人

氏藏人 北小路左將監大江俊昌 正六位上 丸太町御幸町西 十九
差次藏人 北小路左將監大江俊堅 正六位上 丸太町御幸町西 四十九
極﨟 藤嶋中務大丞藤原助胤 正六位上 相國寺門前二本松 四十五
新藏人 細川左衛門權少尉源常典 正六位上 柳辻子 三十二

〔大江俊矩公用往來 五〕文政二年二月三日、一﨟廻文自三﨟達來、卽口返却、如左、

別紙傳奏觸、自廣橋家任到來入見參候也、

二月二日　助功

〔廣韻入聲〕臘盧盍切、臈俗

〔職原抄下〕藏人所

六位藏人四人　藏人者、不依年齒老少、以當參次第定上下、至于極臈者、必預巡爵、〈中略〉六位藏人奉行禁中細々公事朝夕御膳等事、稱之日下臈也、〈中略〉至極臈者、著麴塵袍、是申下御服之儀也、晴時雖下臈著之、第二臈稱之差次、第二稱之新藏人也、

〔職原抄辨疑私考上〕六位藏人四人　第二稱之差次〈中略〉

按、第三、氏ノ藏人漏ナムカ、但准后所意アッテ略シ玉フヤ、粗據ドコロアリトイヘドモ、少疑コトアッテ決セザレバ是非ヲシルサズ、

〔光臺一覽四〕外に六位の藏人と申て、四人御座候、地下に而は候へ共、昇殿いたし候、今平人より公家に出身の有、此四人の職道より外無之候、第一は極臈と申候、第二は差次之藏人、第三は姓を呼て、源藏人とか、平藏人とか、其人の姓を被召候、第四は新藏人と申は四人共に正六位上に而、八省之大丞など申なり、年齡の老少に不拘、當參次第に依て、上下を被定御事なり、凡新藏人に被補し日より、廿年の臈を積ば、必五位下に敍爵して、七省之大輔など申公家の數に入事也、巡爵に預るとて尤規摸之事也、地下出身の道是也、然れども奉公の志有之者は、巡爵之時其籍を除て末坐に下り、新藏人と成て、更に奉公す、是又面目之事とす、

〔爲房卿記〕承曆三年正月二十七日丁酉、除目入眼、〈除目入眼事〉以兵部少輔藤國仲被任因幡守、藏人巡第二臈、上臈散位橘俊清、去十日比遭慈母喪、彼此望申云々、自昨夜於御前有公卿之定、觸穢之人雖被抽任定申云々、但巡爵巡官依喪不被任之例未曾聞事云々、

〔除目大成抄五〕散位從五位下藤原朝臣能賴誠惶誠恐謹言

請特蒙天恩、因准先例、依爲藏人巡第一、被拜任最前闕國狀、

三事

藏次

〔職原抄下〕藏人所

五位藏人三人　自廷尉佐、補藏人、兼辨官、此爲至極之朝奬、所謂三事兼帶是也、頗選中之選也、

〔職事補任村上〕五位藏人　三事右少辨正五位下源俊天慶九四廿六補、廿七從四位下、

〔職事補任花山〕五位藏人　三事左少辨從五位上藤惟成永觀二八廿七補、寛和二六於花山寺入道、

〔職事補任三條〕五位藏人　三事右少辨從五位上藤資業長和三正十四補、二八補新帝藏人、

〔職事補任六條〕五位藏人　三事右少辨正五位下藤長方永萬元六廿五補、十二、從四位下、右中辨、仁安二閏七、

〔職事補任高倉〕五位藏人　三事左衛門權佐正五位下藤經房仁安三二十九補、嘉應二正廿八兼左少辨、

〔皇帝紀抄七高倉〕先侍中七ケ月三事藤經房、嘉應二年正月十八日任左少辨、藏人左衛門權佐、同七月廿六日辭藏人佐、

〔源平盛衰記四十六〕時政實平上洛附吉田經房卿廉直事

同年○文治元十一月二十八日、兩使、數百騎ノ兵ヲ率シテ入洛ス、義經行家ハ都ヲ落ヌ、時政實平上洛シタレ共、合戰ナケレバ洛中靜也、時政源二位ノ依下知、諸國ニ守護ヲ置、庄園ニ地頭ヲ可成由、吉田藤中納言經房卿ヲ以奏シ申ス、又二十六箇國ヲ相分テ、庄領國領ヲイハズ、段別兵粮米ヲ充、義經行家追討ノタメトゾ聞エシ、○中略吉田中納言經房卿ヲバ、其比ハ勘解由小路中納言ト云キ、廉直ノ性世ニ顯レ、忠貞ノ譽無隱ケレバ、源二位今度院奏シケルハ、大小事、向後以經房卿可奏聞之由被申タリ、平家ノ時モ大事ヲバ此卿ニ被申合キ、○中略此卿ハ權右中辨光房朝臣息男、十二歲時、父光房ニ後レ、孤子ニテオハシケレ共、次第ノ昇進不滯、三事顯要ヲ兼帶シ、夕郎貫首ヲ經、參議右大辨中納言大宰帥ヲヘテ、終ニ正二位大納言ニ至ケリ、人ヲバ越ケレドモ、人ニハ越ラレズ、君モ重ク思召、臣モ憚思フベキ人ノ善惡ハ針ヲ袋ニ入タルガ如シトイヘリ、誠隱レナカリケレバ、源二位マデモ被憑給ケリ、

〔雲圖抄〕十一月五節事　○藏人爲行事有故障之時、二○三○藏勤之、

〔薩戒記〕應永卅三年九月十六日丙午、頭中將示送云、故藏人右中辨俊國、分配公事可支配職事等也、此内來月平座可與奪經直、件消息案可注給者、則書遣之、

〔類聚三代格十二〕太政官符

應禁斷郡司百姓私物、假稱官家物、并科責不受正税、不輸田租之輩事、

右得美濃國解偁、凡諸國例、分配郡司充租税調庸專當、○中略

寛平七年九月廿七日

〔師守記〕曆應三年二月八日辛卯、今日大原野祭延引之由、奉行職事頭中將資兼朝臣、以使者觸申之、延引事、依不存出分配外記師忠、代官一﨟外記利口應向、及晩窓歸宅、此祭延引事、尤兼日職事可相觸之處、今日未剋許觸之、希代事也、職事無沙汰、以外也、爲之如何、

〔大江俊矩記卷勤分配〕自文化元年十二月至同十一年正月參勤分配

御手水盆供（四方拜其外臨時之儀）　（例幣御神樂）

文化元年十二月十日内侍所臨時御神樂　常顯　十七日東庭御遙拜（石清水八幡宮正遷宮）　助功

文化二年正月一日四方拜　俊常　九月十一日例幣御拜　常顯　十二月三日内侍所臨時御神樂　助功

文化三年正月一日四方拜　俊常　九月十一日例幣御拜　俊矩　十二月十日御神樂（無出御）常顯

文化四年正月一日四方拜　常顯　九月十一日例幣　助功　十二月十三日御神樂　俊常

○按ズルニ、藏人ノ分配ハ、古クハ通常藏人新任ノ時、一﨟ヨリ其所役ヲ分チ充テラルヽ事ヲ謂フモノヽ如シト雖モ、平時分擔ノ事務モ亦分配ト云フ事本文ノ如シ、由テ併セテ之ヲ此ニ附載セリ、

式年中恒例之事有分配、件分配一條院御時入道大納言公任爲頭之間所被始也、新藏人補任之後、一﨟藏人定件分配、上代無件分配、有御物分配云々、臨時事依貫首若一﨟藏人定行之、雖貫首必以一﨟令定件事、至于臨時大事或有勅定、承其事之後、能尋舊例行之、出納御藏小舍人各一人召仰件事、

〔古今著聞集十八飲食〕順德院の御時、新藏人源邦時分配をしける、極﨟以下下侍にて、次第のことゞもおこなひけり、三獻の後、一﨟判官藤原のやすみついひけるは、今夜新藏人ふるまはれて候、やすみつすでに沈醉に及べり、此うへにあやにくしてねがひ物にをよぶべしといふ、邦時みな存知つかうまつられて候、仰をあひまつやといふ、康光いはく、藤兵衞尉孝時を尋出され候て、琵琶をかきならさせて朗詠をすゝめられ候へかし、さやうに候はゞ猶數盃もかたぶけ侍ぬべしといひけり、孝時其日子細ありてしこうしながら其座には列らざりけり、主上の御供して、時の札のもとの格子に穴をあけて御覽せられける所に伺候したりけり、〇中略此まゝに新藏人にあひしらふを強ていひければ、すまひ〳〵出にけり、極﨟すゝめて非職一高兵衞尉知經がうへにすへけるを、知經いきどをりて、座次をみだされ候事めんぼくなく候へば、いとまを申て罷たゝんといふを、三﨟にて大膳亮範綱がありけるが、知經がいふことを聞て、あれはおなじ非職なればいたみ申され候にこそ、範綱座をくだりてすへ申べしとて居くだりけり、範綱いみじく見え侍りける、さて三﨟のかみにつきて侍ける、當座のめんぼくゆゝしかりけり、此後極﨟つねの御所に候御琵琶をぬすみ出され候へかしといふ、新藏人すなはち座を立て參る時、そのついでに、御笛をおなじくうかゞはれ候へどいひけり、すなはち兩物をもて來ければ、藤兵衞比巴をしらぶ、﨟笛をねどり、其後朗詠あり、孝時新豐の酒色の句を詠ず、極﨟ならびに非職知經助音す、おのおの興にのりて數獻に及て事はてにけり、分配近年たえて侍ことを、邦時おこしおこなひたりける、いみじかりけり、此のちは又絕て今はきこえず、

分配

場、(第三間程也、頗退歟、)中次藏人一﨟大江俊幹降殿上沓脱、(四間)一經神仙無名等門出逢慶人一揖、藏人答揖、本路歸入、就臺盤所簾下、如形奏聞了、降小板敷逗出復命、(今度執笏)了本路歸入、慶人拜舞了、出無名門外脱劒笏、懷中吉書、入無名門、昇小板敷著端薄疊、(中臺盤中程)藏人俊幹予等於下戶外諸從、著橫敷座、(俊幹北、予南、)次頭目一﨟俊幹受之、起座進簀下、召主殿司仰硯、主殿司持參硯、俊幹整硯取筆、如形書入藏人頭三字了、召主殿司令撤硯復座、次予受頭目、召主殿司令居湯漬、主殿司稱唯、先頭料居折敷、持參居之、次一﨟料末臺盤中程、次予料同末程、各奧緣相並居之、(不用折敷、手持參如常、)次俊幹予一同受頭目、移著奧座、(俊幹著了、予起座也、)予向頭申著、(拔足中之、予覺悟、雖於橫敷備之時、移著後不及申著、此日頭被見合遲故申之也、忠賴朝臣時亦如此云々、)頭掛著、俊幹予次第掛之、三息之後頭拔箸、藏人同之、先予、次俊幹等復座、(撤湯漬之儀無之、)其後俊幹受頭目起座、至頭座下、頭曰、吉書候、(不拔足而曰之、)俊幹稱唯、參朝餉方還出、至頭座下、仰出御之由、頭拔足稱唯、且仰曰、文杖、俊幹微唯復座、予更起座、進文杖、下取之至下戶下、此間頭起座、至下戶下、予取直文杖傳之、頭跪取之置下、取出懷中吉書挾之、(斜挾之也、)出下戶候朝餉簾下奏聞、(但此時未出御、御裝束亦不具、仍重能朝臣密々候內々方、被待出御之期也、)(予不復座而入候所、俊幹同自端起座入候所、是御裝束可奉仕故也、)

十一年正月廿一日癸丑、大江俊矩申藏人之事、　廿三日乙卯、一拜賀當日獻物以下之事、○中略　寬政以前新補拜賀獻物以下事、

禁中　ひだい一はこ、こんぶ一はこ、するめ一はこ、御たる二か、　女院　ひだい一はこ、こんぶ一はこ、御たる一か、　親王　干鯛一箱、昆布一箱、御樽一荷、　准后　ひだい一はこ、こんぶ一はこ、御たる一か、　攝政　干鯛一箱、昆布一箱、御樽一荷、　大典侍　生肴一折　長橋　同斷　大御乳母　同斷　傳奏　同斷○以下一人略　議奏　同斷○以下四人略　披露職事　同斷　中次藏人　同斷　內侍所　御鈴料　方金百疋、鯣一折、

○按ズルニ、寬政以下ノ例モ、右ト大同小異ナレバ之ヲ略ス、

〔侍中群要〕十分配

拜

大永四年二月十二日、(中御門以本寫之)

此次第、二條帥卿拜賀時次第也、逍遙院新作云々、今度以此次第遂其節者也、

天明五年十月十三日　右近衞權少將藤原宗章

〔言繼卿記〕天文三年四月六日壬寅、一中御門拜賀ニ付(藏人佐宣治拜賀　宣治)見舞了、又太刀石帶(犀角丸鞆)隨身冠ニ、同老懸ニ、同壺胡籙、同弓、同太刀二振借用之、

一夜五時分出門、雜色四人、隨身二人、如木一人、布衣一人、白丁等也、予禁中ニ而著衣冠見物、藏人佐入四脚門、北へ行、下侍邊ニ立辰、向橘以緒申次出向、佐一揖、申次答揖、次申次帶劍持笏出テ一揖、次佐一揖、次聊進退、次舞踏如常、次下侍ニ而撤劍笏、笏葉室重代慶賀笏之間、予懷中退出之時又遣了、

〔大江俊矩公私雜日記〕文化元年四月十七日丙子、一臈廻文來如左、卽剋送三臈了、

明後十九日巳剋庭田頭中將拜賀從事候、如別紙被示候、對揚一人(俊幹)參仕候、今御一人被示合御參可被成候也

四月十一日　俊幹

大學助殿(如承候、參勤可申行向、贈物之事、御同意候也、)

縫殿助殿

大炊助殿

十九日戊寅、庭田頭中將重能朝臣拜賀從事也、對揚藏人二人、一臈大江俊幹、二臈予等、巳剋參仕、(各著下襲)藏人方諸司同剋出仕、殿上鋪設奉仕、○中略

一巳半剋斜、藏人頭左近衞權中將重能朝臣參入、自建春門經和德、左靑鎖、宣仁等門及階下來立弓

歸出、仰聞食之由、揖、今度帶劒而出、頭答揖、今度深揖出、不御之故也、藏人退入、次一兩步進出、先左足、拜舞、先突左膝、次拜舞畢、撤劒、其儀於無名門外西腋邊、諸大夫侍等舉持可渡之、入無名門、先進左足、出神仙門、昇自脊脫、未聞、不應膝、先進左足、著端座、北面、大臣疊也、小舍敷次日程順下方也、安座引寄裾、

抑上藺頭入無名門、昇小板敷、著奥座、下藺頭或同昇小板敷著端座、覽吉書之時、或著奥、說々不同、但天永二年崇仁御記、被用中右之指南、又德治三年公明卿初任拜賀槐御記等分明也、不可求例於他家、昇沓脫著端座、是所存古風也、

次藏人著横敷、　次藏人仰主殿司召硯、取簡書藏人頭三字、　次藏人召主殿司、令居湯漬、頭料居折敷、居畢、藏人令氣色之時、聊居寄臺盤方、寄懸箸於湯漬、食之由也、須臾如元置箸復座、　次自懷中取出吉書置前、禮紙端聊披見、如元卷之、座前横置之、件吉書內藏寮請奏美濃國庸絹、解文等各有裏紙、卷籠一懸紙、兼仰出納召取之、懷中所持參也、舊例或當座仰藏人召取、若忘失不令持參者、以藏人可召取也、

次目藏人、藏人來申吉書候之由、　次藏人歸來、聞食之由氣色、近代多無出御、持吉書於右手加左手於上方、左方へ筋替テ持之、　次起座右廻、出上戶、於臺盤所妻戶付內侍奏之、路間自上戶外、藏人取脂燭前行、被返下之後左廻退入上戶、脂燭同前、著座、如元向臺盤、引寄裾吉書暫置前、　次目藏人、藏人來、硯可持參之由仰之、其調硯、則持來、次居而横敷方先披吉書展懸紙、折上下奥端等、作法如書、取內藏寮請奏則加禮紙入懷中、今夜則於陣下、上卿之時如廣絹解文引テ裏紙可加懸紙也、今度儀後日以消息可令宣下、仍當座不及引裏紙者、　次取廣絹解文引裏紙披見之、引弃之紙押入疊下、　卷寄之書袖書、

可成返抄、

藏人頭右近衞權中將藤原朝臣

書記如元卷之、目藏人、藏人來下之、藏人賜之下出納、出納成上返抄、書宿紙、三押帖、居折筥、藏人持參之、　次披返抄、奥署所加判則返下之、如元居而臺盤方、藏人撤硯、　次起座出上戶、於便宜所懸下裾尻、內々參御所、　次退出　經本路、但不經神仙無名門、自殿上口下殿、於便宜所帶劒笏、出四足門、如木道前、　次歸本宅、　於門內拜二親、各二

仁折入ヲ懷中之、是事奏聞之後成返抄之時、爲不取違他文也、（此故廣光也、師綱之儀也、）奏聞之儀、當時其由計也、故卽時内侍返出之也、萬一奏聞之時有叡覽被返下者、禮紙之様可相替歟、若經程内侍被返出之時、得其意著殿上之以前、於年中行事之障子邊、又内々可撿察也、内侍卽時返出之者、不可及此事、可爲如常也、○中略次天盃拜領、事終經本路歸出殿上下沓脫、（初登所也）著沓退出、

吉書案

一廣絹解文事

美濃國司解申　進上廣絹事

合伍疋

右當年御服内且進上如件、以解、

明應元年八月廿六日　出納中原朝臣

守從六位上源朝臣永行

一返抄袖書事

可成返抄

藏人左近將監源諸仲

〔逍遙院内府藏人頭拜賀次第〕藏人頭拜賀次第

剋限著束帶（蒔繪細太刀、紫緂平緒、馬瑙帶、把笏、吉書二通懷中之、）次覽日時勘文（納筥、諸大夫覽之、）次身固　次下沓脫（如木雜色敷兩學）諸大夫獻沓（如木雜色傳侍、侍又傳之、）次出門（如木追前）行列（走雜色取松明先行）本儀可在如木雜色之後、隨身四人外、不取松明歟、但隨近日之風儀如此、次隨身四人二行（各取松明）次主人　次諸大夫（在主人左方、今度布衣、内々儀也、）次侍　次如木雜色　次白丁笠持諸大夫靑侍等之僮僕、今度略竟、不可爲例也、參内　入四足門、（如木追前）進立弓場代、次六位藏人出逢奏事之由、（小揖也）藏人答揖、參御所方、次藏人

一帶　巡方歟、丸柄歟、入道依爲大辨用巡方、中丞之例不審候、　答云、先例如此候歟、

一裾長　依貫首不可相違候、然而日來何樣見候ヶム、日來被引候程二尺三寸候、　答云、中辨二尺、然而用一尺八寸とぞ承候、當時二尺三寸頗長候歟、雖然貫首之時忽被減者あしく候なん、只可爲如本歟、

一小舍人童裝束色　牛童ニハ薄色ヲ用候、童薄靑何樣可候哉、　答云、神妙候歟、可宜候歟、

官藏人方

一吉書

藏人方（內藏寮臨時公用、美絹　弘絹）　此定候歟、美濃不書通候ヘドモ、爲先例何事候哉如何、　答云、先例有限之上、近日未定之國也、國司又在京强無難候歟、

官方

年料米文尤可候歟、依爲大辨不申官方吉書之樣々入道之時見候、中辨ハ必可申歟、結申之時先官方歟、於陣下時、年料文ヲバ於陣腋直給史、（依一上宣也、）

〔諸仲卿藏人奏慶記〕明應九年八月廿六日戊申、陰雨相交、今夜五辻藏人諸仲、（名字撰之、）予自此亭奏侍中之慶、雖暮門依陣外甚望之間、强不及恪惜者也、秉燭之時分、三獻終而出門、路次一條東行、（步行也、）東洞院南行、入四足門、（如木雛色道先、如出門之時、）直到殿上口、（其處殿上立蔀也、兩方去四五尺許、立向長方立也、）立申、次唐橋藏人在名出逢、（空手、）（兼降立殿上蔀殿邊、而退進出相對立、）次一揖如常、（此揖奏慶賀之由也、）次申、次答揖歸入、（此時入神仙門代內、）退復進出、（此時帶劒笏、自神仙門出之、）如初立對、而奏者先揖、（仰食由之揖也、）次慶人深答揖、（依請仰、此時深揖也、）次奏者歸入門、即著殿上橫敷、（此著座尤早速、拜舞之最中著之間、）（又者無骨也、雖爲閑樣、今夜慶賀之人先可着也、復申次可着也、經下臈之後可着、）次一兩步進出、（先右足、次左足、次右足、左足、相開蹐立、）拜舞、（先二拜、突右膝、跪左膝、二拜、終之時、取笏、）（於庭上立舞蹈、先左、次右、又次左、次突右膝居、又舞蹈、先又左、次右、次又左、次取笏作居、揖而立、更又二拜、如初、二拜畢、無小揖、直退便宜之所、）拜舞終後、先於傍（下時、南庭、）解帶劒撤笏、（插笏之時沙汰之、）於此處出納出吉書二通取之、懷中之、二通同樣也、仍於廣廂解文者、礑紙之端聊內方

五日（寅日往亡日）　答云、於寅日者當家之例不憚來、可依家例歟、但爲往亡日云々、尤可有猶豫歟、
六日（五墓道虚）　可用何日哉　答云、道虚者休日也、休日庚申其例已多、而五墓云々、道虚與五墓輕重之條猶可被示合陰陽家也、保安補貫首之時、家榮云、五墓日貞信公著座例也、不可憚、宗憲云、不可用五墓、不可入宮室之由有本文云々、遂用宗憲說了、
同共侍幷公役瀧口事　答云、經房相具馬允公定了、九條戸部冷泉納言例也、今度無異儀可被逐入道殿御跡歟、於瀧口者不召具、
小舍人童事　答云、拜賀之日召具了、諸大夫補貫首之時、或具二人云々、
御藏小舍人祿事　五日可給之事　答云、告來之時給祿可及明日之由不相存、如何、去夜及深更之間、於翌日者勿論歟、更不可有日次沙汰、
役人事（答云、著衣冠、）　祿法事　答云、先例不同、用家例了、　下官之時六丈絹一疋（用美絹、散位盛職取之）　仕人料手作布三段、　諸司官人取之
所衆瀧口等列參日次　答云、當日若翌日例也、不可及日次沙汰歟、
同申次侍事　答云、先例多用古人衞府、近代可然淸華人用藏人五位、或又用式部民部五位等、下官用式部大夫隆仲、且是折中也、又冷泉納言之時、瀧口所衆兩人相替申次云々、今度可被逐禪門御例歟、
車簾綱緖事　答云、爲給綱代者、可被用村濃給歟、
（頭辨問條々事）五日丁卯、頭辨問初拜之間條々事、
庚申日事
一禁色　自殿下下給候、仍無左右可著之由相存候、　答云、舊例著平絹先申慶、次被下禁色宣旨、著用之從事、然而近代無此儀歟、

初參之日必開簡、書藏人頭字、一字又改不字、可給日歟、但藏人廣綱昨日注加藏人頭字一、雖然猶可改不字歟、又申日初參不謂有口之說云々、申日上卿□□齊信卿云々、早依無日次、來四日爲隨事、今日急參云々、

〔中右記〕保安元年十二月二日戊辰、巳時許參院、右大辨顯隆誠、顯頼補五位藏人之後、今日申慶、並可申吉書也、○中略

顯頼先著無文裝束申慶、次禁色宣旨被下之後、著改綾裝束申吉書、下右衛門府云々、主上出御晝御座云々、

〔山槐記〕永曆元年十一月三日丁丑、巳剋著宿衣、堅文織物籠括參內、須宿侍後朝可著宿衣也、然而此內裏無可然所、去月廿九日行幸大內、夜不期宿了、且付近例等、以立日所著始也、藏人泰綱來曰、臺盤具了、今日可著始之由、兼日內々所示藏人也、殿上人等雖不○。鐵爲對揚可令語申之由示付、然而無參入之人、右近中將實宗兼雅許參入、予所觸催也、予○藤原忠親經大盤上著奧座、上長臺盤下程實宗著端、兼雅著奧、次藏人蒙氣色、次著之、次主殿司居物於折敷、取居予前、自餘入前只以手居之、次立箸、二臈不立箸、勸發、泰綱一臈請取、又勸發各兩度、次汁、次酒殿、一臈以次明高藏人泰綱當座下臈也、新藏人未初參、可勸盃之由取予氣色、予目許了、泰綱來予座上勸盃、取次杓、盃至迄非藏人、泰綱候横敷、此後以明高取予氣色、召著泰綱於納言殿上口邊、行事令居物、泰綱召出番衆、立小庭懸燈樓、於頭昇湯漬了拔箸、藏人等著横敷、喚主殿司令罷飯、此間候起候渡殿邊、

〔吉記〕治承五年六月十九日甲子、頭中將申慶從事今日頭中將經盛朝臣申慶從事、檳榔、鈍色表袴、下襲等著之、於弓場殿以藏人兼時申事由、昇自小板敷、經殿上著奧座、兼時付簡、令居湯漬、藏人著端座、次以兼時申吉書候由於內侍、鬼間奏之、出自殿上上戶、藏人泰經指脂燭在前、奏了即出陣宣下、

壽永二年七月三日乙丑、小除目事今日有小除目敍位等、○中略被補貫首事被補藏人頭、左中辨兼光朝臣、

頭辨問初任間事四日丙寅、頭辨問初任間事慶申日次事、

退出之後、雖不從事、出入不任意、或隨上臈氣色退出、臨昏テ束帶歸參、宿侍如前、凡新藏人初參以後、及數日〈天仁万〉早旦束帶退出、歸參時、亦以束帶、隨貫首及上臈藏人氣色、當番日朝候、〈布袴〉漸以著宿衣、〈件事兩三日後、上代不然云々、只近代一臈與奪免宿衣云々、又被免宿衣後數日布袴云々、更未聞事也、〉凡新藏人早速束帶爲善、就中貫首束帶時、先被束帶、於宿衣候殿上間、貫首束帶テ被參ヘ、登時退下遂電テ、束帶シテ參上、若有承行事、無傍人者、於御膳宿邊立隱テ令見憚申氣色、又同有承行事〈天〉可下殿ヘ、雖上臈觸申事由可退下、

〔侍中群要　九〕藏人拜官事

〈家〉侍臣藏人等清書後奏慶、〈或說云、爲清書覽中書（中書本作中務者）時云隨御書奉仕人命奏慶云々、〉無官藏人拜官奏慶、不著禁色、〈爲地下也〉待後宜旨參入之時、著禁色令奏慶由、參入之後、經兩三日奏文書、供御膳、

〔夕郎五代拜賀次第〕但御記〈隆方〉

〈五位藏人新任〉天喜五年十二月八日庚戌、今日被補五位藏人、□小舍人光遠所告來也、依例與祿物、即□□令申事之由、

廿日壬戌、被補職事之後、今日初參大內、日者故障連々、于今遲々、昨日又內裏御衰日也、仍雖有衰日之憚、仰承遲參天氣所參內也、主稅頭孝秀不可忌衰日之由依有相示也、付簡之後退出、雖申慶由不拜踏、服者之例也、

廿四日丙寅、初奏吉書、〈美乃絹解文、臨時公用請奏、〉奏畢之後出殿上、引裏紙等、臨事公用文出左仗下、與左兵衞督、〈經任〉絹解文下出納、令成返抄、即同加署名下畢、抑內覽之後、先以大學頭實綱朝臣令候殿下御氣色云、近代隨事人々內覽、幷奏聞之間、先申所方之文、次申下上卿之文、而此事謬說也、可申一度之由、無止人々已有所申、可令依何說御覽哉者、仰云、一度可申者、出御之後令覽、一度畢、內裏同前、又休日奏吉書、已有先例、近則中納言經長卿補藏人日、被休日者、此外間有先蹤云云、今日供御膳、又候宿侍、

〔爲房卿記〕永保元年九月一日甲申、藏頭通俊朝臣、今日晚頭申慶賀、即候殿上、〈外自小板敷、藏人頭或隨事日以後用件路、是依奏事路也、不隨事以前、猶自昏脫可昇云々、但近代自申慶賀之日用小板敷者、〉居湯漬、〈件湯漬又新藏人新殿上人初參之時可居之由人々示之、然而近代必居、〉又不開衞、愚案

拜賀對揚

朝臣之子也、父祖曾祖不補藏人、以其姉殊寵、浴此恩、道路以目、

〔台記〕久壽元年十二月廿五日癸卯、後聞、今日中納言中將以大舍人助藤仲賴補勾當、件人父義經、祖賴綱、曾祖泰經、不經藏人、高祖賴經經藏人、然而優勤勞所補也、先日申定禪閤云々、

〔赤染衛門集〕たかちかゞ藏人のぞみしにならで、內記になりしかば、左ゑもんの命婦のもとに奏せよとおぼしくて、

わがなげく心のうちをまるしてもみすべき人のなきぞ悲しき

さて藏人になりて、いとまなうて、えいでざりしが、おぼつかなくて、裝束やりしついでに、

何事を思はんとこそおもひしかみぬもくるしき思ひなりけり

たかちかゞ、あきのぶがむすめに物いひそめて、新藏人にていとまなくて、えいかぬにや、あらんといひしにかはりて、

曉のまぎのはねがきめをさめてかくらんかずを思ひこそやれ

〔吾妻鏡二十三〕建保六年六月十四日甲寅、新藏人時廣廣元二子自京都參着、去月十七日補藏人、同廿七日初參、而將軍家大將御慶賀御神拜之時、爲勤前驅、廿八日出京、從其役之後、又可還參之由奏聞云云、

〔侍中群要一〕藏人初參事

式抄初參　宣旨下後、小舍人來告、卽參入於殿障、令藏人奏、立橋西藏人歸來立橋上、向御所、背於令奏人也、仰聞食由、微音稱唯、近代不稱拜舞先再拜、次作立左右左、次跪左右左、次年居小拜、次立再拜、次小拜、舞踏欲畢之間、奏者歸入於立蔀邊相待、隨其後入於履脫、脫履、居小壁下東面、古書云北面、藏人開簡著之、封後事也頃之居湯漬、隨先達氣色食之、了置箸歸著小壁下、入夜之後臨深更、隨上臈命下直廬、近代御寢之後退下脫裝束著宿衣、逐電昇殿、宿所合宿可然、先達宿所、近代不脫靴、候小壁邊、早旦日給之後下宿所、著裝束、早速還昇、頃之退出、三日之間不觸障唯觸氣色於得意先達退、又上臈自達示其由了、三箇日不觸障由、天

官位姓名（若蔭）

右被別當左大臣（近代或稱內侍宣）宣偁、件人宜爲藏人者、

年月日　頭（若藏人官位姓名奉）

〔禁秘御抄（中）〕藏人事

凡補藏人、延喜天曆御記、頭奉勅、向大臣亭仰之、又召御前仰之、或又被御時內侍宣也、

〔西宮記（臨時五藏人）〕康保二年正月十七日、藏人頭延光朝臣於左大臣（實賴○藤原）第仰永觀、通理、爲信等爲藏人、朝光、信輔昇殿、大臣稱所勞不參、仍就第令仰、延光還申、大臣報云、件人々各可然者也、早被下宣旨、仰、以內侍宣仰下了、或記云、天祿四年七月廿六日、內大臣（兼通○藤原）於御前召藏人頭惟正仰云、藏人朝光以所職讓光顯、先可下宣旨、申云、讓由可載宣旨歟、仰云、尋先例可行之、卽撿在所底宣旨口等、承平之比公忠讓與五位藏人於男信明、已讓由不載彼宣旨文、同日被聽、不見昇殿宣旨、以此由申內丞相、被仰云、然者唯不載讓狀可下宣旨、但朝光故爲昇殿之上、雖避侍中無可避昇殿之理者、唯下侍中宣旨了、次於御前有除目事云々、

〔朝野群載（五朝儀）〕藏人所

補藏人頭以下

左近衞中將從四位下兼行美作介藤原朝臣能實

可爲藏人頭

蔭孫正六位上藤原朝臣盛房

可爲藏人（○中略）

應德三年十二月八日　藏人左衞門權佐藤原朝臣

〔台記〕久壽二年四月九日乙酉、今日院判官代源光宗、非藏人藤家輔補藏人云々、光宗口出雲守光保

頭二人○中略五位藏人三人○中略六位藏人四人○中略非藏人無員數○中略

已上宣下之職也、但藏人者頭以下非上卿奉勅之宣、所謂內侍宣也、管領職事承仰召仰出納令告知其人也、藏人頭以下六位藏人以上書位署之時書加其職名、是古來之例也、

〔西宮記 正月〕一補藏人事、以所雜色、六位殿上有官者、公卿子、文章生之中譜第者補、近代一所侍、勾當多被補之、所別當公卿依召候御前、敷菅圓座藏人置紙筆、入柳筥依仰書之、令為藏人、不顯本官、書宣旨之時注官云々、位階等、人々聽昇殿、月日書了奏覽、上卿退出下頭若藏人、藏人下出納令書宣旨、給宣旨左近陣、頭藏人別本宣旨、以內侍宣書下、

〔江家次第 十四 踐祚〕讓位

執柄召藏人一人、以內侍宣可任云々、其人應召進自砌候於第一間砌下、執柄仰云、藏人留收給布、稱唯、頗出拜舞退入、

〔代始和抄〕御讓位事

次に又さきの藏人をもちて、藏人頭二人、五位藏人三人、六位の藏人、殿上人の昇殿等の事を仰す、藏人殿上口にして出納に仰す、次に新補の貫首以下慶を奏して、殿上に候す、其後官方藏人方の吉書を進覽す、

〔職事補任 圓融〕藏人頭

右近少將從四位上藤實資天元四二十七補齊光替、永觀二八廿七渡補新帝頭、

〔侍中群要 一〕初補間事

式抄被補藏人事、正月七日敍位以後、除目以前、擇宜日被補也、或又御齋會次、女敍位次、出御晝御座、著御冠御直衣、有仰所別當大臣、大納言有其例、依召候御前、御座間孫廂座、先是藏人承御旨所管圓座枚數御座間長押下、又件間反燈樓綱、次召紙硯等、藏人經簀子敷、從上卿右方置之、○注略書了御覽返給、還退出殿上給、頭若藏人藏人裝束御賜之、留於所底、書宣旨、同留於所其文云、姓名若蔭姓名、若文章生、得業生、宜為藏人年月日、近代無晝御座儀、頭奉白宣仰之、

亭、御心附之趣可申聞旨申入了、

一前亞相以左少辨被尋合曰、爲一臈卽日申下御衣、近例有之哉、人體年月等被承置度由也、予不詣記、故尙歸宅後相考注一紙、後刻差次(勛功○藤島)定可參上間、其節可進覽旨申答置歸了、歸路向二臈(勛功○藤島)亭面會、廣橋被示意味一々令物語處、後刻被參彼亭可被申所存由也、且又件書付之義相賴置、歸宅後早速相認切紙、附二臈令進覽廣橋家、如左、

爲一臈卽日申下御衣近例

寬政六年十二月廿一日　俊幹(依參會無召詞)　此日爲一臈申下御衣

安永三年十一月廿日　俊冬(有召詞)　同上

明和二年十一月廿日　俊名(豐明之日早參中也)　此日爲一臈(但御衣之儀ハ當時故不被下著用可爲勝手頭中將被申渡、)

廿七日己未、酉半刻計、藤島右馬助助功(青色闕腋著用也)來向被示曰、午刻過於宮中頭辨內々被告、(俊矩)辭職被聞召由、仍早速遂議奏、當番烏丸亞相依爲一臈申下御衣之儀及內談處、一應殿下被申上、其後御內儀掛合等相濟後勝手可申下由被示、卽以表使附勾當內侍申下之儀如先例相濟、用意之靑色闕腋袍著用申上、御禮了、自申刻過所々廻禮、只今一巡了由風聽物語有之、(略)○下

帶劍

〔侍中群要 五〕殿上帶劍事

侍臣不具劍笏、爲要籍驅仕也、而至于近衞將、帶劍上殿無妨、仍宿侍之時、或副於宿物持上、亦雖外衞、至于撿非違使又隨身云々、

〔薩戒記〕應永卅三年四月廿一日乙酉、今朝藏人中務丞源重仲(兼將監)參院之時帶劍、(祭日細劍、丸緒帶之、)以入尻鞘、右兵衞佐永基朝臣示不可入尻鞘之由、仍侍中撤之、彼朝臣經藏人之人也、於野劍者入之、於細劍不可入之歟、

補任

〔職原抄 下〕藏人所

不圖今日宣下之由、乍去覺悟違之事ニ可有之間、內々被示由也、依之告使之事被相尋處、其儀は昨日極﨟江示合置候故、當日にても今晩にても任所意可被申受由被示云々、右之趣予半剋斗刑部權大輔入來被示、尤差次藏人入來ニ而只今迄相談有之由、何分今夜先以名代御禮可申上儀歟、不覺悟、當惑之旨被示也、予曰、何分御禮可申上、併其時宜藏人宣下之通覺悟にて可然哉、將又告使之事最早今夜及深更旁以可爲當日之儀歟、是等之儀爲念一應廣橋前亞相相談可然、予早速著裝束雖可罷出、段々及深更之間、先一步モ早被向廣橋家相談可然申之、卽時權大輔被走向彼亭、予亦卽時著裝束至廣橋家處、則返答有之處也、藏人宣下之通御禮廻可然、勿論告使當日申受無子細由也、依之予卽爲名代御禮廻相勤、先令參內處、先剋御格子之由故、空退出、甘露寺頭辨家廣橋家計今夜相勤、其餘明朝可相廻積、丑剋過歸家了、

〔侍中群要〕五麴塵袍

除節會幷主上著御日之外、可然擧所必著之、著蘇芳下重時、付蘇芳裏、柳色下重時付青裏、蒲萄付紫裏云々、然近代絕無此事、著青色時必用浮文袴、或用唐綾袴、用固文時用庭燎文云々、日外不用云云、以青色(初任幷夏冬更衣時也)掛用打衣、着有色綾袙等、(勿著白衣等)但撿非違使常以青色爲宿衣、(白袙等無其忌)儀式官著青色時放冠額宛曳裾、著巡方帶、撿非違使不切裾、凡著青色下重只隨便、至于白下襲非此限、張柳下重殊所不見也、

〔大江俊矩公私雜日記〕文化十一年正月廿五日丁巳、一差次藏人爲一﨟申下御衣事、本人(〇藤島勤功)所存如何哉、自此間可有人來內談哉、被存居處無其儀、彼人有物忌人故申下御衣著用後初度之參役兩寺御法會故、心中可爲迷惑歟、然則來月一日自申次之節著用有之樣被申下可然歟、其邊之儀は如何樣共可相成事之由前亞相雖被申居、何分本人所存不相知事故、空彼是被申居而已之由左少辨有時、仍予申入曰、御心添之段本入可申聞、然則早速參上申所存可及御相談、卽只今歸路立寄彼

五位には輙く聽されず、雖然藏人に於ては、皆ゆるさるゝなり、

〔侍中群要 五〕裝束

初著禁色時、申可然人御下襲表袴著、近代下冠云々、

〔光臺一覽 四〕通例は、六位の藏人にも禁色を聽さるゝ御事なり、且月の蝕には、極﨟若席を以て、天子常の御殿を掩ふ事なり、大義の役なり、極﨟には麴塵の袍とて、天子の御召料也、世に云山鳩色の御裝束なり、是を拜領して、晴の時尤着す、御衿を申下すの儀なり、乍地下公家玄關より參內し、細々の公事政道をまじはり勤る役なり、少外記、小史等之中より出身して、此藏人にぬけるなり、極﨟の外は、三人とも黑みの有緋裝束なり、深緋といふなり、

〔朝野群載 五朝儀〕聽禁色

藏人蔭孫正六位上高階朝臣敦遠

宣聽著禁色衣服（或說無衣服二字）

應德三年二月十日

〔公忠朝臣集〕おなじ御時、（○醍醐）五位の藏人なりけるを、位さらせ給ひければ、ひらぎぬのさうぞくに成てまかりたるをみて、 女房

ほどもなくぬぎかへてけるから衣

といひけるを聞て

あやなきものはよにこそ有けれ

〔基量卿記〕延寶五年閏十二月十六日、今日午剋藏人右少辨入來、明日禁色宣下、勅許之由也、

〔大江俊矩公私雜日記〕文化元年十二月十四日己巳、新藏人（○大江俊常）禁色昇殿之事、今夜宣下也、自頭辨以捻文申來由、先是於宮中頭辨、差次藏人へ內々被示、（予退出後故也）拜賀當日宣下之積、今日及披露處、

禁色　麴塵袍

候、

〔兵範記〕仁安三年十月廿一日己酉、酉一剋、御禊畢還御、御膳幄、秉燭之後次第事了、戌剋還宮、裝束司留頓宮了、

八藏人、五位二人、平絹茜袍、掖闕躑躅下襲、(已上織物) 黑半臂縮泉綾表袴、巡方帶、(魚袋) 野劒尻鞘、平緒、著靴、楚楸、不結唐尾、

〔職原抄〕下藏人所

五位藏人三人　頭及五位藏人必聽著禁色、拜賀以前被下宣旨例也、但自本聽禁色之人更不及宣下、

六位藏人四人　六位職事又聽禁色、至極﨟者著麴塵袍、是申下御服之儀也、晴時雖下﨟著之、

〔河海抄〕(九乙通女)なをしなどさまかはれる色ゆるされて　殿上六位聽直衣、蒙禁色雜袍之宣旨歟、或說云、加職事歟、六位職事著禁色故也、西宮抄云、指貫ハ王者以下衆人所用也、古時有制、臣下不用、近代五位以上、昇殿六位皆用之云々、

〔安齋隨筆〕(八)禁色　榮花物語初花の卷に、みすのうちを見わたせば、例の色ゆるされたるは、靑色赤色のからぎぬに、(中略)色ゆるされたるとは、禁色をゆるされたる人々を云、靑色赤色は天子の御袍の色にて、禁色也、又をり物にさま〴〵の文をりたるも禁色なり、これらをきる事をゆるさるゝを禁色をゆるさるゝと云也、色ゆるさるゝと云は、此事をいふ也、禁色をゆるされざる人には、むもんの平絹をきるなり、むもんの平絹とは、さま〴〵のもんをおり付ず、もんなきたゞの絹をいふ也、

〔標注職原抄〕(下本)禁色、令式にては、紅紫梔染蘇芳染等の類をいふ、然るにその制やゝ弛みて、後世禁色といふは、表袴に窠霰等の文あるを許さるゝことなり、但これたゞ公卿のみにて、四位

著青色人不可用白袷等、至于青色用束帯後用宿衣、略○注 宿衣著青色時必織物奴袴等用平絹奴袴、也、又殊不至于夏時用薄物差貫例事也、下衣猶可著綾衣幷打衣等白絹緋聊以凡也、至于撿非違使不有此限、藏人不著青色鈍差貫、上古年齢漸傾人、多著此色、然而近代殊不見、至平絹差貫、四月朔間、奴袴以絹爲善、極熱之間以縑多著用、更衣之後著宿袍、貫首被著直衣、一臈著宿衣、綾六位著之、藏人爲勅使幷依可然事、城外之時下御直衣著用、更衣之節還官人（新任衛府儀式官等）可著宿衣、可尋先例、略○注 藏人更衣之外不著絹裝束、雖更衣時儀式官衛府著綾裝束、但此等官人爲新藏人時、夏更衣皆著縑白重、至于冬更衣不著綿裝束、非件等官人、雖古藏人必著絹裝束、參河守定經爲左衛門尉時、四月更衣薄物白重下襲平絹表袴、道信中將著此裝束云々、著絹裝束時必著無文冠、著綾裝束、後又不著此裝束、有心喪人著青鈍織物表袴、綾柳色下重等、夏時著薄物青朽葉下重、至于奴袴以青鈍著用、綾絹相交、參河權守範國朝臣爲藏人時、故式部卿宮薨給時、著此裝束、勘解由次官行親朝臣爲藏人時、伯耆守道行朝臣卒去時、又著此裝束、各尋先例所爲歟、但至于青鈍表袴、非心喪人號天色時々著用、凡染表袴可然時所著用也、無便時著用必有謗難事也、

〔枕草子十〕藏人のあをいろなどの、いとひやゝかにぬれたらんは、いみじうおかしかるべし、ろうさうなりとも、雪にだにぬれなば、にくかるまじ、むかしの藏人は、よるなど人のもとなどにただあを色をきて雨にぬれてもしぼりなどしけるとか、今はひるだにきざめり、只ろうさうをのみこそうちかづきためれ、

〔枕草子〕淵は

藏人などの身にしつべくて、いなぶち、かくれのふち、のうきのふち、玉淵、

〔大槐秘抄〕おほむさしぬきの文は窠の文をめすに候、これはおほんうへのはかまの文をめすに候、たゞ人は窠の文のさしぬきはき候はず、藏人の此御さしぬきをおろしてきるは、つねの事に

装束

雖五位職事同心之間、六位所存雖難被矣、傳送以忠世卿具被聞食、預敍爵上者、且爲面目者也、

藤原季經朝臣

〔千載和歌集雜十七〕還昇して侍ける人のもとにつかはし侍ける

うれしさをよその袖までつゝむ哉たち歸りぬるあまのは衣

〔名目抄詳註私儀〕還昇

千載集雜歌中、還昇して侍ける〈中略〉云々、是は六位の藏人、五位に敍して、かえり殿上する事なり、

〔新千載和歌集雜十七〕藏人源兼任が還昇のことをよろこびつかはすとてよみ侍ける

中原師宗朝臣

我君のめぐみぞそらにしられけるまたたちのぼる雲の上人

〔侍中群要五〕可著裝束事

午剋以前可著裝束、新藏人初參之後、早旦束帶、隨一﨟命、漸著宿衣、雖其後猶以裝束爲先、藏人著宿衣、催候殿上時、貫首裝束被參、早下宿所著裝束、逐電可上、爲宗休息、莫致遲留、若殿上人不候無隱便所、可有憚中氣色、新藏人欲下宿所、無人之時爲令候殿上、莫催上﨟、但有公事幷如此事之時不此限、又著宿衣催時、剋限多過雖候可示氣色、

〔貫首秘抄〕直衣事　常時參內無憚、但陪膳參時立隱云々、給文書之時直衣無憚、又依召參晝御座無憚、但不奏文書也、院參亦无憚、故民部卿顯賴頭時、院中文書常直衣奏之、

冬直衣、十月七八日計可著之、維摩會辨不下向之以前可著也、

〔西宮記臨時四〕冠

五位已上六位藏人及新冠者皆用綾冠、更衣時幷暑月著白下襲、著無文冠、〈近代五位已上、雖更衣用綾、〉

〔侍中群要五〕裝束藏人事

る人也、六位も、藏人は殿上する也、五位に成ても、藏人をさりては地下にをる、事也、

〔公卿補任後冷泉〕永承二年丁亥

參議正四位下藤經季

長元四年三月廿八日補五位藏人、同六年正月五日敍正五位下、同八年正月五日敍從四位下、少將

同九日還昇、

〔爲房卿記〕寛治四年五月四日戊辰、因幡守顯隆朝臣還昇、○顯隆明日可申慶賀之由、道御了、今日爲衰日之故也、

〔公卿補任鳥羽〕元永三年庚子○保安元年

非參議從三位藤顯隆

寛治元年正月卅日院藏人、○中略 同二年正月十一日藏人、十七歲 同廿五日左近將監、同二月十三日從五位下、同三年正月廿八日宮内權少輔、同四年四月廿日從五位上、同六月五日勘解由次官、十九歲

〔公卿補任崇德〕保延四年戊午

參議正四位下藤公能

大治六年正月二日敍正五位下、女院御給 同四月十九日補藏人、長承二年正月七日敍從四位下、府勞 同十六日還昇、

〔藏人補任〕弘安十一年○正應元年

六位　右近將監橘以益 四月十日補、經業替、年十九、元前安嘉門院藏人、初參以前任右近將監、即遂初參、

參河守正五位下邦良二男、故前但馬守正五位下邦康入道孫、母關東濱名右馬允貞家法師女、五月廿五日依不傳御草鞋、永實以益付顯世訴除籍云々、而不痛之歟、且於兩家者雖一代不傳之也、爰依申披、於永實者雖令還昇、於以益者難治間、令申敍爵、仍同月廿八日敍、臨時 次兩貫首付爲家

途上禮節

昇殿
還昇

卿末之例也、思渡之歟、於他所無例者也、關白亭猶以蒙命之時事也、不可自由云々、

〔三中口傳一〕一禮儀事

藏人頭　遇攝政可下車　遇大臣可税駕　遇大中納言參議可扣車〇中略

五位職事　遇大臣税駕　遇大中納言參議藏人頭扣車

〔名目抄諸公事言說〕還昇クワンジヨウ常ノ音ハショウ也、ジヨ名目也、又上ニヒカレテニゴルナリ、

〔有職問答五〕一藏人事

五位ハ勿論、六位も昇殿を被聽候哉、其時役ハ何事を沙汰候哉、五位藏人四品候へバ、藏人を辭退ノ時地下ノ者モ、藏人ニ補候ヘバ、昇殿禁色キンジキヲ被聽候也、中候也、四品シテハ藏人ノ頭ニ又昇進之候也、のよし申候、子細いはれ何事にて候哉、

〔禁秘御抄中〕藏人事

敍爵後、或月內、或次月還昇、先規終有兩三輩、當時家光範經二人也、

〔職事補任一條〕五位藏人

左近權少將正五位下藤道綱寬和二六廿三補、同七月廿二日從四位下、卽還昇、〇中略　左少辨正五位下藤在國同年十一廿二補、永延元十一十四從四位下、右中辨、同十九日還昇、

〔小右記〕長和二年正月十五日丁未、外記政始、資平從內退出云、今日被定藏人昇殿、左相府去夕觸候、御物忌定申也、被定藏人昇殿事藏人保任朝臣、少內記藤原隆佐、右兵衞尉藤原敎親、藤原登任昇殿、左少將朝任朝臣還昇、右少辨資業朝臣、經任朝臣、右近將監藤原親業、

〔枕草子二〕藏人おりたる人、むかしは御せんなどいふ事もせず、そのとしばかり、うちわたりにはましてかげも見えざりける、いまはさしもあらざめる、藏人の五位とて、それをしもぞいそがしうつかへど、なをなごりつれ〳〵にて、心ひとつは、いとまある心ちぞすべかめれば、下略

〔枕草子春曙抄二〕藏人おりたる人　六位藏人四ヶ年のち、巡爵にあづかりて、地下におりた

ナン居候、且件資房外祖父之知章モ頭ノ上ニノミコソ居候シカト云々、

〔春記〕長暦二年十月六日己巳、早旦參御前、〇後朱雀中丞雜事等退出、參右衛門督殿、今日關白殿率人々、於白河被成遊興云々、〇中略今日可有和歌事者、仍不退出、資道已下於此渡殿有饗、予〇藤原資房不著、近代無著藏人頭上之者而行經如此、是經輔所相示也、又執柄〇藤原賴通輕藏人頭之故也、自今以後、不可參如此之所也、入夜有和歌事、事畢各分散、予太冷之、

長久元年九月一日癸丑、忩忙無極之間、万事彌不諧、就中近來日食欲絕巳無所期、僅雖有公俸國司一切不聞入、無術之代也、更以何爲哉、官途無隙、家途無術、是宿報也、何爲何爲、

〔薩戒記〕應永廿八年正月二日、今夜殿上淵醉可早參之由兼日頭辨〇右大辨藤原盛光相觸之、仍著半臂、是流例也、院御藥事了欲參內之處、剋限可賜人之由頭辨被示送之、仍予數剋相待之處、凡以無音、如此之間、或人告送云、只今頭辨內議云、近代貫首辨官與羽林相並之時、雖下臈辨官爲殿上管領、今又如此、仍著殿上座之時、亂位次管領頭可著奧座由先々沙汰舊了、仍爲頭中將之人殿上淵醉日、皆以申障不參、是爲不著下歟、而今日頭中將予〇中山定親也、可令參入云々、定欲申所存歟、辨官儀勢雖然、亂位次已著上臈頭之上之例未無之、爲之如何之由頭辨有命者、予此事兼內々所聞及也、然而彼等申狀更無其謂、不可有其例、予又不足求先例、只以理之所推可申達者、五位職事、管領殿上有例、爭可著貫首上哉、頭辨于今不被示、可參入之由定此故歟、仍予則參內、欲昇殿上之間、頭辨早以入上戶著奧座、自餘次第欲著座、此事如何、所存之趣一切不被示、予又被告剋限、竊以欲申行此事歟、於于今者強不及爭論、只顧公儀之違亂、予不及昇殿、枉理閉口、窓以退出、

〔薩戒記〕部類二應永卅一年　兩貫首立公卿列末事

兩貫首列公卿末事、上皇〇後小松有御不審、兩人共失念云々、傳聞吉田中納言家俊、園前中納言基秀兩貫首之時、共以如今日、于時關白成恩寺被責先規、各無申旨云々、所詮於關白亭拜禮之時貫首列公

保元四年院拜禮、予不立、無骨之人等多在之故也、同年立美福門院拜禮無件等人之故也、

仁平二年鳥羽院御賀、殿上人取籠物列立庭上、右大辨朝隆正四位下在忠盛朝臣正四位上上、是兼取御氣色可列上之由被仰故也、大辨頭殊嚴重之故云々、○中略

內府○藤原公教命云、大臣居殿上スレバ、頭不居小板敷事也、最勝講等之時、公卿居滿殿上バ頭通女官之戶召之時モ如此、自小板敷昇テ居座上召之、關白被候之時ハ居小板敷召之、非執柄之大臣ニハ於殿上召之、忠宗用女官戶、前大相國○藤原實行同之、予申云、當時左府命云、出自下戶端座ノ公卿ノ後ヲ分通テ就座上仰之云々、如何、被命云、此事雖可然頗無骨、故ニ用女官戶也、

〔貫首秘抄〕又被命○藤原公教云、近代頭翔偏如公卿歟云々、不可然之氣色也、頭ハ公卿之尾、殿上人之首也云々、

先日平三位曰、接公卿座事隨氣色云々、同被說、又或人曰、於院上者依位階云々、但如御幸之時立公卿之末也、

或人曰、季仲頭之時、白川院拜禮時、爲家以位階上﨟推立季仲之上、其後如此、件以前不然云々、可尋之、

鳥羽院五十御賀獻物之時、頭右大辨朝隆朝臣爲正下四位、立正上四位忠盛之上、是兼取御氣色云云、大辨頭雖庭上不列人下故云々、

〔古事談〕二臣節 冷泉中納言朝隆藏人頭之時、何事トカヤニ公卿座末ニ居タリケルヲ、宇治左府○藤原賴長被追立云々、其詞云、藏人頭ハ有召之時コソ座末ニハ候ヘ、推參甚見苦事也、早可罷立云々、朝隆不及力トツブヤキテ退起云々、

〔古事談〕二臣節 白川院競馬之日、頭中將資房之上ニ、行經朝臣任位次居ケリ、仍後朱雀院ニ被勘申ケレバ、令六借給テ、宇治殿ニ令尋給ケレバ、令申給云、藏人頭之上ニ不居事ハ殿上事也、他所次第ニ

待遇　座次

亮は、自享保十一年到寶曆十一年、在職三十六年、病死候故不及願著候、北小路故俊幹朝臣は、自安永四年到文化元年、在職三十年、叙爵後御合力米貳拾石賜之候、其餘ニハ在職滿三十年候者スラ無之候、錦小路故賴庸朝臣在職廿五年、北小路故俊包朝臣在職廿二年、細川故常芳在職廿七年ニ候得共、皆々叙爵後御合力米貳拾石宛賜之候、元祿以來凡百四五十年之間、同列在職之年限相考候處、勤勞及四十年候者、澄仲卿之外一人モ無之、多分十年前後廿年未滿之在職ニ候、叙爵後被下候御合力米員數モ拾石或拾五石抔依勤勞之年限不一樣候、(元祿以前は猶更、在職年限短者多分有之候、)何分是迄致拜領來候叙爵後之御合力米ニ貳拾石以上賜之候先例未無之候故、自本人は貳拾石拜領之例ニ而相願候得共、如前文澄仲卿ヨリモ在職一ヶ年相勝リ候處、在職三十年或三十年未滿之者江被下候同樣貳拾石賜之候而ハ、甚殘念歎敷事ニ存候、往々奉公之勵ニモ相成候事故、何卒多年勤勞之功相立候樣、以格別之思食、在職中賜之候御合力米三拾石其儘自當冬分拜領被仰付候樣伏願入度候、以御憐愍願之通蒙恩許候者、本人者勿論同列一統深く畏入可存候、依之不顧恐懼相願申候、此段偏宜御沙汰願入存候也、

九月　　常保
　　　　賴永
　　　　俊常

甘露寺一位殿
德大寺大宮大夫殿

〔貫首秘抄〕院拜禮事　經宗說同內府、但經宗曰、於小朝拜者非職不立頭上云々、此說實無、亦曰、院拜禮舊ハ頭立上、而季仲頭之時爲家無道立上、其後依位階也云々、位階下﨟頭上﨟十人許ナラバ可列立、上﨟イタク多ハ不可立、無計ノ末ニハ不可立、可見苦云々、愚(○藤原俊憲)案此事可然歟、

之流例、以極﨟領收納滿十年爲限也、元來少身之事故、雖一ヶ年分收納相望事、經此職者之通習也、於俊矩亦任近例、今年分收納、以後當冬辭申度儀、雖爲勿論、然共老人二人在次座、非可守年限之時故、早辭一﨟相讓申度念願也、〇下略

〔大江俊矩公私雜日記〕天保二年九月十三日壬戌、俊矩儀(小奉書四折、美濃紙上包、)寬政三年被補藏人、文化十一年極﨟十ヶ年之後逆退被仰付、深畏入勤仕罷在候處、近來追々及老衰候上、別而眼氣不相勝、御奉公相勤兼候故、申望爵度存念候、甚恐入候得共、若念願通敍爵被仰付候者、何卒以別紙先例之趣御合力米拜領之儀相願申度候、以御憐愍願之通拜領被爲仰付候者、深畏入可存候、此段宜御沙汰偏願入存候也、

九月　　俊矩

甘露寺一位殿

德大寺大宮大夫殿

十六日乙丑、今日被附甘露寺家同列添願書如左、(次奉書四折二枚注之云々、美濃紙上包也、作草稿ハ任二﨟被示、予所擬之也、去十二日來議之上聊今ニ筆削、即三﨟執筆清書也、)

今度北小路差次藏人俊矩敍爵申望候ニ付、如先規御合力米拜領之事、自本人以例書相願申候、然處俊矩儀は、去寬政三年十一月被補藏人、文化十一年正月經極﨟十年勞致逆退、到今年勤勞及四十一年候、且又當春三月依所勞引籠候迄者、御用向無懈怠遂勤仕、故障不參之外者所勞不參一ヶ度モ無之、四十年來不闕皆勤仕、其上御大禮幷御再興事抔モ無滯相勤候者之儀ニ有之候間、何卒在職中致拜領候御合力米石數不被減三拾石、其儘拜領被仰付候樣致度、同列一統之念願ニ有之候、尤在職中之儘石數不被減賜之候事は、先例無之儀勿論不容易願望深恐入存候得共、如俊矩勤勞有之候者、亦於同列古今無例候、慈光寺故澄仲卿は、自享保十年到明和元年在職四十年候、依爲多年之勤勞敍爵後被聽還昇、永被加堂上之列候、此儀は格別之事候、小森故賴

古事類苑

官位部二十九

令制官職二十五

藏人所下

供給

〔延喜式 三十 大膳 三〕藏人所料、月別腊魚卅斤、滓醤六升、長人日別鹽五勺、鮭半隻、鮨十五兩、海藻七兩、

〔光臺一覽 四〕極﨟は家領は百石、外は少知也、非藏人と申は名は右四人の藏人に似寄たれども、中中さにはあらず、禁中に而公家方の使者、坐敷廻りする者なり、五攝家親王と清花の大臣は、五位の殿上人を被使なり、清花の大中納言より以下之諸家召仕ひたまふ也、下鴨、松尾、稻荷、平野等の社家の氏人、又は町宅之人も有り、下されもの漸十石位より五六石迄也、公家方御同前に、近習內內外樣有也、非藏人は、公家玄關の北の小入口を非藏人部屋と云、夫より入事也、公家方も御切來被略事にて、下部計に而、參內之時之上下大小に而、此口より入、下部に、文匣裝束入爲持、御番に參る衆も有なり、秘密にてはなくて、貧窘の事なり、

〔大江俊矩公私雜日記 一〕文化十一年正月九日辛丑、辰半剋計參內、廣橋前亞相面會、密々得內談云、俊矩一﨟年數既及十箇年恐入之間、舊冬辭申度所存、幸十一月有閏月爲閑暇良期之間、閏月初旬欲遂內談之處、不存寄御凶事、無力延引令越年了、抑於近例者、當年冬可辭退儀、雖的當年限、當時二﨟三﨟各爲老年、仍雖一ヶ年早令辭退度寸心也、尤年限之事、古來雖無定例、近年多以十年爲限、雖然非公議之所預、皆私之沙汰也、殊近來稱十箇年者、實及十一箇年了、其故者、一﨟中賜領地之處、初年一ヶ年不收納、先一﨟令收納故也、自第二年到第十一年十ヶ年之間、極﨟領收納畢、其冬令辭退事、爲近來

條不便之由申之、予云、職事雜役事、幽玄事也、羽林役送事連綿、但自何頃被破介文哉、何樣被聽禁色之輩如此役送不勤仕、於室町殿不云高下致其沙汰事、自普廣院殿御代不能左右歟、沙汰外事也、予五位職事之時、舊院(後花園)御在位之時、不斷祇候、内外一獻之時、一度も不勤、其時祇候之輩、故三條内大臣(公保公、實雅公、)中山尹大納言(宣親)中御門大納言(宗繼)飛鳥井中納言入道(祐雅、俗名雅世、)此外濟々也、予在過分之儀、雖不勤仕役送、彼人々背先例不可然之由可訴申歟、不及其沙汰、當時飛鳥井前大納言(雅親、于時中將、)伯二位(實益、中將、)民部卿(忠富、于時少將、)山科故中納言(顯言、于時中將、內藏頭、)等殿上人之時、致其役了、今更無覺悟之旨返答了、

月宛彼司、其中割鷹飼十人犬十牙料、充送藏人所、貞觀二年以後無置官人、雜事停廢、今鷹飼十人、犬十牙料、永以熟食充藏人所、

〔續日本後紀三仁明〕承和元年十月壬午、後太上天皇(○淳和)幸雲林院、遊獵北郊、内裏(○内裏二字、原作有四閑三字、今據類聚國史改、)藏人所衆從之、

〔三代實錄四十二陽成〕元慶六年十二月廿一日己未、勅、(○中略)美濃國不破安八兩郡野、本自禁制、永爲藏人所獵野、(○中略)備前國兒嶋郡野、永爲藏人所獵野、承和之制、今縁不行、何禁芻蕘、莫害農畝、總施法禁、頒下諸國、

〔侍中群要十〕犬狩事

家無佛神事之時、幷休日御物忌等之間、隨仰召仰左右近陣官行之、瀧口等相從之、藏人等追御所犬所狩獲、幷召左右衞門官人令放流之、

〔禁秘御抄下〕犬狩

藏人承仰下知、所衆瀧口參、瀧口帶弓箭儲所々射犬、所衆入椽下狩出、而此役太見苦、仍近代好遲參、定蒙召籠、仍衞士幷取夫入椽下、匡房記曰、堀河院御時、犬狩、被閉諸陣、而先例當御物忌時、犬狩尤有便、(予後忠又藏人一兩人持弓、先例犬狩時、仰左右近陣吉上等狩之云々、殿上將佐已下可持弓也、)

〔源平盛衰記十七〕藏人取鷺事

延喜帝ノ御宇、神泉苑ニ行幸アリ、池ノ汀ニ鷺ノ居タリケルヲ叡覽有テ、藏人ヲ召テ、アノ鷺取テ參レト仰ケレバ、藏人取ントテ近付寄ケレバ、鷺羽ヅクロヒシテ既ニ立ントシケルヲ、宣旨ゾ、鷺マカリタツナト申ケレバ、飛去コトナクシテ被取テ御前ヘ參ケリ、

〔親長卿記〕文明五年三月十七日、其後綾小路中納言入道參會、先度一獻之時、役送事被除五位職事、俊景朝臣、(彼入道息)六位藏人許役送勤仕、不便事也、令文中、辨近衞物不勤雜役之由被載之、被破令文之

御覽

入御藏令出、其後付下板退下、加封於藏如元云々、〇中略

出野御倉物事

內藏官人參近衛陣申給御鑰云々、勅使行向開封之間事同前、召修理職、令造階云々、催中務省云云、

〔侍中群要十〕御覽御鷹事

家 此時侍臣臂之參御前、御覽之後召御鷹飼等、各令分給、

御覽鵜事

家 奏覽解文下給之時、被仰可有御覽之由、卽垂御簾、御厨子所鵜飼等著舍人裝束、持參瀧口戶、於御前出之、若鵜飼等不候、所衆出納等候之、而後召鵜飼等分給、兵衛陣前立胡床、藏人出納御厨子所預等著之、或只於陣屋座行之、上古於進物所樹下給之云々、

進鷂鷹時事

諸國進鷂時、奏解文後、藏人於右兵衛陣外召鷂飼分給、藏人出納居胡床子、有御覽時所衆取鷂籠參御前云々、御鷂所衆同持參云々、

御覽諸國貢鵜事

家 奏解文下給之比、被仰可御覽之由、先下廂御簾、召鵜、持來時仰使門陣々可入之由、令候北廊戶外、或說云々、出羽必覽、余未必覽、隨召召御前、御厨子所鵜飼著舍人裝束持參、出之入之、了上御簾、若無鵜飼者藏人所幷出納等持之令覽、已有先例、

御覽之後給鵜飼事

出納一人、藏人一人、預等召鵜飼長等於右兵衛陣前給之、上古例、於進物所菓木下給之、今其木無、倒云々、

〔三代實錄四十四陽成〕元慶七年七月五日己巳、勅、弘仁十一年以來主鷹司鷹飼三十人犬三十牙食料、每

殿上用途

〔朝野群載五朝儀〕所牒

藏人所　國々

應早速交易進上鴨頭草移上紙墨等事

丹波國（花一帖）　但馬國（上紙卅帖）　播磨國（上紙十五帖）　備中國（花一帖）　伊豫國（墨十五帖）　讃岐國（墨十五帖）　甲斐國（花一帖）　信乃國（花一帖）　上總國（花一帖）

使某

牒、件鴨頭草移等、爲充東對御簾用途料、所仰如件、國宜知狀、差副綱丁於使者、早速交易、依數進上、用途有限、不限延怠、牒到准狀、故牒、

治曆元年九月一日　出納左京屬紀朝臣政輔　別當左大臣兼皇太弟傅藤原朝臣　藏人左少辨藤原朝臣　蔭子平　頭造興福寺長官左中辨近江權介藤原朝臣　權左中辨源朝臣

藏人所下文。。。。。。

所下田原御栗栖司幷刀禰等

可早任道理糺定寄人山背友光作手畠貳段愁人申事

使蔭子平

右得友光今月一日解狀云、云々者、如申狀者、頗有其謂、御栗栖司幷刀禰等宜承知、任道理行之、不可違失、故下、

延久三年十一月四日　出納明法生清原　頭修理左宮城使左中辨藤原朝臣　左京大夫兼右兵衞權中將美作權守藤原朝臣　藏人式部大丞藤原　蔭子藤原

預御倉鑰匙

〔侍中群要十〕出内藏不動藏物事（可尋載之）

家奉勅先召官人、可參入、（允、屬、史生、藏部各一人預參）史生給藏人所御匙。。。。、勅使立藏前、令開撿、開撿了之後、使官人

〔小右記〕長和五年五月廿七日庚午、頭中將資平從攝政殿〈○藤原道長〉言送云、候內之間、依召參攝政殿仰云、今日著鈦政、政了、撿非違使等有可參入之仰、仍召遣畢、依一日鬪亂事可被召問云々、若有可召問之仰、令解劒可問歟、但於彼殿可問者、無便歟如何者、報云、藏人頭奉勅召問之時、令候藏人所客座、以六位藏人令問、奉仰之頭者、著所座聞所辨申事、重時令收劒、於攝政殿可被問者無便、收劒歟、只申彼殿隨指歸可進止、爲令避後々難也、重取案內示送云、六位藏人不可問歟、

〔禁秘御抄下〕召籠事

侍臣已下有咎之時召籠、或令候殿上、藏人頭召籠非普通事歟、近公雅被召籠、師賴爲頭之時、與藏人定仲伺見五節帳臺試〈寅日、無出御〉有沙汰、師賴恐懼、卅日許籠居、爲頭人勘事不聞事也、時人驚耳目云々、公雅事不可爲例、應和中少將四五人伺見除目、仍令召籠左右近陣、地下者召籠陣、殿上人者只候禁中也、藏人或召籠橫敷、仲資百日候橫敷、藏人頭私召籠恒事也、又瀧口所衆等、或召籠御所中、或召籠于殿上口、片時不許、殊重時也、召籠人不從御膳、不參御前、

〔貫首秘抄〕不仕之瀧口召籠本所ニハ不令著到、是第一之勘當也、相傳之事也、下馬寮幷陣事ハ奏事由所許也、於召籠者頭任意也、

〔東寺百合古文書百六十〕內侍所女官三條訴淸原行守遺物事

地臺所〈在劵文壹通〉

在左京四條貳坊玖町西肆行北八門內者、自幼少之時女官所養育也、彼地者女官所領也、而行定逝去之後、後家件遺物幷欲總領之間、於藏人所彼經對問之處、女官所申依有其理宛賜女官也、於其外家地資財、娘所從之冠者所宛給後家也、互守此支配、雖向後不可口論之狀如件、故支配、

文治六年三月廿日

藏人左衞門權少尉藤原〈在判〉

女官三條〈加判〉

〔侍中群要 一〕凡殿上喧嘩濫行、藏人必加糺彈、

○按ズルニ、此事前文引ク所ノ侍中群要所載ノ藏人式ニモアリ、

〔侍中群要 七〕陣中非違事

家 陣中雜犯、藏人召看督使、令捕之、或以小舍人搦之、召撿非違使給之、若藏人尉候者、出陣外勘糺之、

勘人事

家 所衆瀧口事

件輩不勤公役之時、令止上日、或先勞三日、可隨事狀、

小舍人仕人等事

小舍人等有可誡之事者、即令恐申、恒例也、至于下陣者近代之事也、仕人者令押籠所之水棚下、或笞其殞、

女官等事

所々女官、陣中女可著唐衣、又雨日皆用屐子、令加制止、

客座事

所有客座、諸司之人若依懈怠公事被召勘之時、令居客座、但三分以上先奏事由之後居之、深誡者板上沃水居之、凡勅勘之輩、隨其事跡、件座不論品秩、無謂官位、又有被召問之人者、藏人著所座問之、召人居客座、

諸衞人事

諸衞之人不召之時、藏人召仰本省令勘誡之、諸司官人依過怠居客座事、〈三分以上奏之〉

〔侍中群要 一〕禁制裝束亂猥

右供奉殿上可尋儀度、而晝時夜裝束亂髻褻服、宜加禁遏、勿令復然、若有犯者從追却、

除目

式

凡聽昇殿者、別當奉勅傳宣、藏人頭卽書宣旨、而後令奏慶賀、拜舞昇殿、卽以附簡、小舍人宣旨、別當不必在之、不奏慶賀、

昇殿人初參事

家

其人於脇陣逢藏人、令奏參入之由、奏云、某候ﾌ矣、卽出立橋上、仰聞食由、小拜之後退去、〇中略 其後付簡、

〔雲圖抄正月〕除目事政始之後、以吉日被始行、限以三日、御物忌之時、執筆以下皆悉參籠、以吉日先被行御修法云々、

御裝束儀、一同敍位、但御座帖御中前有三宮、南申文、御硯筥上返遊蓋盛之、中關官帳、北大間也、其外與敍位無相違、殿下或令候簾中給、撰申文作法座席等詳見敍位部、但申文巨多口傳區分、能訪先達、且就舊記可量行歟、貫首第一大事云々、荒短冊之時、欲撰定申文、已爲懈怠之基、先申其官各一結付荒短冊舉之後、皆悉取集貫首前、一官一司或四五人、或三四人、重以撰定、是又非無其煩、全無牢籠云々、有難之申文、或不奏云々、書帝王御名之類也、

〔除目申文抄〕撰申文事

資房抄云、藏人頭二人、五位藏人二人、六位乃堪書短冊之者一人、引捨ル紙ヲ卷整之者一人許也、雖藏人、雜々不可候也、古者可撰申文之由承勅命、頭撰之也、近代兩頭所候也、

今案、近代藏人等皆參候、不可然歟、

〔基量卿記〕延寶七年正月廿七日

延寶六年十二月廿八日　宣旨

從五位下源忠寬宜任備中守、

藏人頭――本〇中略

右之外口宣案各一枚宛宣位各別ニ調之調之上ニ書口宣案草、上卿之稱號宮等如例書付之、

〔新野問答〕一殿上の御簡(フダ)とはいかゞ、答、殿上の間に、其官職を記し置れ候、其書附を殿上の御簡と申候、おほくは勅筆にて有之候故、殿上の御簡と申候、殿上の御簡と訓申候、闕官をせられ候時は、其名を除かれ申候を、殿上の御簡をけづると申候、

〔侍中群要 一〕簡事

家抄正月三箇日及御物忌日、臨晩封之、(不入袋、只打返立之、以面向壁立、)又節會行幸日、還御之後封了入袋、又仁王會御佛名之間、晩頭封之、幷入袋如恒、又有可然之事日、不待必廻限封之、多晩頭封之、是會釋歟、又移御他所之時、行幸之後、至其所封之、入袋三箇日間不封簡不守株、(故公忠右中辨說云々)

二宮大饗日、參內侍從令出納書見參、召宮司下給、宮司中大夫又入見參云々、

〔禁秘御抄 下〕除籍

侍臣等有罪過之時、及除籍、頭藏人承仰仰藏人、藏人削簡、藏人非藏人同之、殿上受領在彼簡、同削之、應和伊陟依狂病絕入、有沙汰、仰曰、於子齊敏者、只病故不仕、伊陟病無便近召仕、若復本性之時可聽、枉削其籍、依不同之疑、具注之、凡雖下部彼病不能參內事也、

〔令義解 四選敍〕凡經癲狂酗酒、(謂、酗酒者、以酒爲凶也、經者、言昔有此事、今則无之、若今見爲者、灼然不可任用也、)及父祖子孫(謂、此祖孫者、不及曾高曾玄也、)被戮者、皆不得任侍衞之官、(謂、侍從以上、及內舍人、中務判官以上、內記、幷兵衞之類、其案雜令、禁內驅使、亦不可配也、)

〔殿暦〕嘉承元年正月九日壬寅、今日依吉日侍藏人所分始、藏人簡新造、件簡袋上書、去年十二月廿五日定書之、(內記知朝書之)本侍簡渡侍藏人所、障子上ニ立臺盤二、(一四尺、一八尺、)依故大殿例也、藏人所四位職事(清實)朝臣、重仲朝臣、侍所別當(以綱朝臣、朝輔、成實等也、)各著束帶申慶、

〔山槐記〕治承四年二月廿一日癸卯、今日有讓位事、○中略殿上藏人所、臺盤所簡、作改之、頭辨兼內々仰舊主藏人通業、出納盛俊等、木工寮可作進之由下知之、袋令召設內藏寮、召民部大夫爲雅令書簡、

〔侍中群要 九〕昇殿人事

人竟上日之時、雖申貫首、輙難進退、努々可用心、〇中略
可給殿上幷所日事
侍永籍簡書者日給剋限者、自正月至八月辰四點、自九月至二月巳二點、今案殿上藏人把筆給之
所者出納於藏人所給之、〇中略
式抄　得夕不得日事
齋院垣下平野祭參、其中一人若歸參、時剋相叶ハ給夕不得日、
不得夕事
式抄　御物忌中夜參籠之人及丑一剋昇殿、雖入日記宿侍不得夕、但近代皆得夕云々、又明日可有神事
齋而服者失而宿侍、理須退出、仍不給夕、〇中略
日給從里第參上事
日給從里第參上、藏人不可封簡、猶從朝候人退出、又無可封人、隨形可封、開簡日給又如此、御物忌
中夜參籠幷候上宿等之類、雖知剋限之闕、不以候殿上人可令開也、是又可隨形勢之、雖封後、豪召
參入之人、必開日給、爲維摩勅使并歸參而奏見參等後給日九夜七、(最勝會可尋之)會參之人又如此、(但可尋見)
(役日數斂)春日祭參下氏人又給日三夜二、(非氏人勤公役給云々、但諸宮使非此限、)他祭々入見參皆給、
〔大槐秘抄〕藏人は、殿上にならびふす事に候、殿上人もちかくまで殿上にふして、かうぶりのひた
ひあがりてこそ日給のをりはゐあひてさふらひしかど、近代は殿上にふす人もさふらはぬけ
うのことに候、いそぎひとめす事などの候に、とのゐ所よりさらにさうずきてまいる、ひなき事
にて候、也藏人の受領にまかりなり候は、六年があいだかくのごとく侍中してさふらひつる賞
なり、いまはたま〳〵候も、みなかたすみにねあひて候、またいそぎ敍爵して、あれはなに事の賞
にかは受領にもまかりなり候はむ、かくえなり候はぬもこゝかるべき心とする事に候也

殿上上日日給

の朝臣のきたりつらんはと、とはせ給へば、さぶらひつれど、おほせごともなし、おかつきに御むかへに參るべきよし申してなんまかで侍ぬると聞ゆ、このかう申すものはたきぐちなりければ、ゆづるいとつきぐ〳〵しくうちならして、ひあやうしといふ〳〵あづかりがぞうしのかたへにいぬるなり、内をおぼしやりてなだいめんはすぎぬらん、瀧口のとのゐまうし、いまこそとをしはかり給ふは、まだいたうふけぬにこそは、

〔河海抄　二夕顔〕亥一剋侍臣名對面、(起自延喜元年)同亥一剋侍臣奏之後、瀧口武士名對面事、

延喜九年正月廿日、藏人源揚宣旨云、候瀧口輩三ヶ夜已上無故不參、早預著到、宜待後仰矣、

〔貫首秘抄〕給上日事　二三百夜モ有給之人不穩之例也、不勤上日ヲ給人(天)介越人之條尤不穩便事也、然而爲例事云々、給假令城外之條、又奇怪第一事也、瀧口一切不可城外云々、各借給夜ト云事ヲシテ二三十日城外事也云々、(○中略)

前頭勘當止上日ヲバ、後頭一切不免之、近代或免之、不穩云々、

〔貫首秘抄〕同藏頭給上日事　頭任意給之、而平三位(○範家)曰、我頭之時不給之、爲人愁故也、服暇除服出仕事、頭亦任意之由、經宗被命云々、

〔貞信公記〕承平二年二月十四日、藤原清平、源興國、島田公豫、多治命、各可令候藏人所之由、付中明令奏被勸文、月付、是前御時藏人所人々也、源脩平、忠孝、藤原爲忠等、合七人、是上日千日以上者也、

〔侍中群要　(僞)〕日給事

未三點封之、(古說未上三剋云々)此以前參入、(○入一本作人)皆預日給、(但供朝膳人聞封後可直改不字歟、但竟上日藏人不直改)不參入ヲバ書不字、獻假文人ハ付假、若干滿日以墨引下、當日參人日給、不參ハ書不、恐申人不書不字、自紙也、被免被召日給日以墨引下、但封後(奈波真)明日可改不字歟、(○中略)日給雖未奏文書、隨先達示可注之、貫首被候バ縱雖不被逢日給、必可奏之、正剋限時至于貫首者奉稱、自餘人可隨氣色致會釋、但新藏

一々名謁、三人以上候時問之、不足三人時不問、不足之由、不鳴弦陣中、瀧口殿上名謁亦復如此、若御格子乃内閑人候時ハ可待其人乃問云々、但至瀧口名謁者、在外職事至天問、若名謁間乃燈消バ以後殿上燈沿其燈樓、或呼居高欄云々、或用脂燭、

〔日中行事〕六位の藏人一人まごびさしを北へあゆみゆきて、二間の前のはしより、第三の板敷の上にひざまづきて誰々か侍るといふ、瀧口つるうちしてをの〳〵名のりをとなふ、瀧口の戸よりまかりいでゝもんしやくのさきおひちらして、北の陣よりはじめて、所々のもんしやく、御湯どのゝはざま、殿上の口などにて申めぐる、殿上にては貫首なり、小板敷に伺候したるやとたづぬれば、さなきよしを主殿司こたふ、貫首あればめんきよにつきてひざまづきて申なり、かへりあそびに歌うたふ、

〔枕草子三〕殿上のなだいめんこそ猶おかしけれ、○中略はてぬなりときくほどに、たきぐちの弓ならし、くつの音そゝめきいづるに、藏人のいとたかくふみこほめかして、うしとらのすみのかうらんにたかひざまづきとかやいふゐずまゐに、御前のかたにむかひて、うしろざまに誰々か侍るととふほどこそおかしけれ、ほそうたかう名のり、また人々さぶらはねばにや、なだいめんつかふまつらぬよしそうするも、いかにとゝへば、さはることども申に、さきゝてかへるを、まさひろ○藏人方弘はきかずとて君達のをしへければ、いみじう腹立しかりて、かんがへて、たきぐちにさへわらはる、

〔侍中群要二〕日中行事　亥一剋武士名對面事侍臣奏之後

〔源氏物語四夕顔〕この院のあづかりのこ、むつましくつかひ給ふ、わかきおのこ、またうへわらはひとり、例の隨身ばかりぞありける、召せば御こたへしておきたれば、指燭さしてまいれ、隨身もつるうちしてたえずこはづくれと仰せよ、人はなれたる所に心とけていぬるものか、惟光

名謁問籍

角よりはじめてうしとらにてはつ、御帳の東御まくらをばさはらず、

〔蓬萊抄〕三月三日御燈事

近代頭五位藏人必勤件役、但有故障之時、雖非職依催所勤仕也、

〔侍中群要二〕日中行事

亥一尅侍臣名對面事、宿奏之後、案侍臣名對面、起自延喜元年之比、

〔枕草子三〕殿上のなだいめんこそ猶おかしけれ、御前に人さぶらふおりは、やがてとふもおかし、あしをとゞもしてくづれいづるを、うへの御つぼねのひんがしおもてに、耳をとなへて聞くに、しる人のなのりにはふとむねつぶるらんかし、又ありともよくきかぬ人をもこのおりにきゝつけたらんは、いかゞおぼゆらん、なのりよしあしきゝにくゝさだむるもおかし、

〔日中行事〕下格子の後殿上のなだいめんの事あり、藏人頭まごびさしの南のはしにしりをかく、殿上人は上の戸の口、六位はかべのもとに候す瀧口北の戸より入て前庭にたつ、六位の藏人上首のまへにすゝみてたぞといふ、その〳〵なのりす、六位は姓をくはふ、

〔禁秘御抄上〕問籍事

瀧口於北陣申之、參御湯殿北、次於殿上口申之、有公事之時不可申之、

〔貫首秘抄〕瀧口問籍事　應務不申、本所鼓舞不憚之、弓場始賭射等御出之中間ニモ問籍不憚之、縱宗卿可憚之由案之歟、射場始之間、有問籍、件亞相所傾奇也、

〔侍中群要四〕名謁事〈亥二剋御了〉

〈儀〉雖不奏、文宿侍三箇日以後、隨上﨟氣色進止、待次天稱姓名、但自問時頗進、自本座突膝天問之、〈其詞云々〉次第至天自稱姓名、各名謁了經貫子敷、入自南第二間、上孫廂長押上、逼東天北行、〈自東第三枚許板〉〈行、頗令有音、〉於昆明池障子巽〈近來說、下貫子敷云々、〉時瀧口衆列居於御前〈東庭〉、次藏人先咳、次瀧口鳴弦二度、問〈誰々、加侍〉

點燈

塗石灰壇之間、垂西間母屋御簾、塗了上、近仗候之

殿上作事

近衛司帶劔候、或召將監帶弓箭候、地下將監候長橋上

御前敷砂事

家 敷間懸垂御簾、敷了卽上之、御階以南右衛門勤之、以北左衛門、有事之時必敷之、殿上前同敷之、

家 殿上作事

御在所作事之時、召近衛將監帶弓箭候、地下之者候長橋、或殿上近衛司帶劔所候也、

式 凡御在所執造作事、所司率工部參上、召御近衛將監帶弓箭令候殿上、

御殿修理

御殿有可修理所、仰內匠、但御格子可修理時仰內匠、竹臺御障子、同仰內匠、御障子面破損、召內藏絹仰作物所令張、仰畫所令畫、可塗石灰壇時仰修理職、

雜工昇殿事

雜工昇殿時、召近衛將監令候長橋、見式將監不候時、次將候之間有其例、

令拭御前油事

家 召土器令春置之、召大膳若內藏寮召掃部寮小筵幷鎭子置其上而後令掃拭、

〔禁秘御抄上〕日沒以後事

先掻燈自御湯殿方進之、內侍取之供夜御殿四方、其後供所々掌燈、女房役之夜深藏人自南妻戸奉仕指油、夜御殿火不可消之也、近代皆消歟、

〔日中行事〕夜の御殿のあし油、藏人非藏人にもたせて、たゝき戸をあけてまいりて、夜もすがらきえぬやうにするなり、非藏人は戸の下にたて、うちを見せず、さし油もかいともしもたつみの

主殿女嬬、

〔日中行事〕卯の時に、とのもりの司あさぎよめするをとにおどろきて、藏人御殿の格子をあぐる、南第二の間をおしして見るにいまださしたれば、鬼の間より入て次第にさし木をはづして格子をあぐ、御調度引直して御ゑとねうるはしくゑき、硯のはこ御座のまへ(右のかた)におく、御劒御ゑとねのみぎに(つかにし、はみなみ、)をく、おびとりのべてするゑにひとしく置なり、(中略)御簾あげ朝ぎよめども上しもはてぬれば藏人ども殿上にさぶらふ、

〔侍中群要〕〔二〕戌一剋藏人下格子事(夏立二大防一)

藏人式云、夜剋男藏人祇候、寢儀御寢殿之時卽下格子者、今案、年來日記、以戌一剋爲下格子時、然而早晚隨御而已、事見辰一剋抄、

〔大鏡〕〔五太政大臣兼家〕月のあかき夜は、げ。か。う。じ。もせでながめさせけるに、(兼家)

〔日中行事〕亥の時に下格子し、御簾をたれて、第二の間のさうろを内にとり入て、つりがねにかく、をの〳〵下格子して御ゑとねをうちかへす、御硯のはことりて上に御劒をくはへて置て、大床子の御厨子の上にをく、格子どもにさし木さして、鬼の間のとりゐ障子ひきたて丶、藏人はいづるなり、

〔侍中群要〕〔十〕敷砂事(南殿ハ南階左右相分敷之)

暫垂南御簾、敷了上之御前庭中(以南右衞門府敷之、以北左衞門府敷之)、毎有可然事仰彼令敷之、上格子以前敷之、殿上前同鋪之、

又朝干飯及大盤所前兩壺地、時々掃除敷砂之、臨夜事ニハ不必令敷砂、御齋會、內論義、御佛名等之類也、

塗石灰壇事

平長　召上達部時遣内豎、但至于大臣遣所衆、無所衆時間々用出納、至于殿上人遣小舍人、

〔禁秘御抄〕下召人

侍臣遅參、或稱障不參之時、或遣實撿使、稱病侍醫遣之、凡殿上人召使、藏人瀧口、藏人已下或馬部、康治節會少納言不參、以外記使部召之、藏人方馬部也、馬部召藏人有通、乍著水干引立參殿上口、希代珍事也、

〔台記〕康治三年(天養元年)正月七日己未、予(藤原頼長)著左仗北座、別當曰、夜前敍位未請印、依少納言不參也、于今尚無申可參由于少納言云々、位記入覽筥在南座、(中略)成隆申所勞由、行幸催時申請實撿使云々、遣間例於師安許、申云、無請印少納言不參之例者、予問人々云、非可默止、外印少納言不參時、以辨爲代、可准彼歟、又行幸奏少將爲少納言代、可准之歟、權大納言宗輔伊通等云、可准□□□例歟、又宗輔卿云、節會召如何、余云、正曆元年正月十六日踏歌節會少納言不參、以右少將理兼爲代官、雖稀有之例、至節會召者不可事闕、即余招光房問云、少納言如何、答云、成隆許遣消息了、但不可叶歟、即以光房申攝政云、三少納言許遣奇法使、可被催出歟、若其身不參者可搦召知恥從者歟、成隆申疾病由、可遣實撿使歟、又可被停任歟、歸來云、二少納言遣外記使部可催出、若不參者可搦召知耻從者、自藏人方遣馬部等、先例不見之故也、至于成隆者可被停任、不可遣使、

〔台記〕仁平元年三月廿一日壬辰、藏人資能來云、臨時祭舞人公光、陪從邦綱、申疾甚由、仰可遣實撿使之由、(藏人撿公光、出納撿邦綱、)

格子開閉

〔禁秘御抄〕上日沒以後事

清涼殿上下格子、藏人奉仕之、(中略)里内隨便宜藏人候之、

〔侍中群要〕一上格子事

(慥)新藏人出從殿上東戸、押南第二間御格子、先遂藏人入自鬼間、放二間(乃)格子、次第上之、撤燈樓預

承平七年四月十五日、賀茂使藏人頭左中將敦忠朝臣依召、率使并陪從近衞等參入、群立庭中、敦忠立其前、近衞六人列舞、此間左大臣候御前簀子巽角、舞了賜御衣敦忠、(自掛一襲、藏人右少辨相職給之、敦忠不拜舞、退出、爲失云々、)

〔侍中群要〕八 御書使事、

家賜御書之後、暫置日記辛櫃上、(以所數下、若殿上無人、令主殿司守、或置所御膳棚上、以小舍人令預之、)於直廬理髮整衣服了、取御書退出、陣中之間、令持小舍人、(小舍人令著表衣也、)前行至門乘車、(若無自車、乘在門之車、令相輔車主、又路間以御書挿夾車前棹立穴也、)參其所於中門邊、自取御書參上、本家儲座召之、勅使進就簾前、(以膝可懸茵、故實也、)獻入御書、頃之女房自簾中出盃、(肴物可然之五位取、)童女出來行酒、(銚子提等之類、)爾後給御返事授祿、(后宮祿者下地再拜、自餘無拜、)隨仰歸參、(御返事祿等入車、)陣中之間、御返事令持小舍人立後、祿物令持從者在後、於昇殿之所自取御返事、以祿懸肱參上、(祿落置便所、若參晝御座方、可置年中行事障子邊、參朝干飯方者、置巳額馬障子邊、令通見自大盤所、)獻御返事了退去而已、此儀初度御書若年首事也、當時無酒祿等、但陣中御書ハ自持從殿々之上往反、有祿者卽以自持不具小舍人、凡御書使路頭雖逢大臣不下車云々、而今樣令懸御書猶下云々、○中略

御書御使及給祿事、○中略

家先賜御書暫置藏人所御膳棚上、(是明有可爲之故也、若如理髮事歟、)召誡小舍人、令著朝衣、令持御書向件所、(始從御所至于陽明門、時々稱警蹕、或云、不可必稱、又陣中御書不令持小舍人、)到陽明門欲乘車、先取御書置前、(或云、令持小舍人令走(走一本作立)車前者、是往古儀也、不可用歟、)次到件所欲下自車、亦先取御書與小舍人、下後徘徊中門邊、令取案內、本家鋪座屈請、親自取御書(若有官把笏之人插笏取之、若授女房之後亦更把笏、)就座傳女房、須臾可然之五位一兩取肴物居前、須勸盃、童女行酒、(勸盃只以盃差出、自簾中行酒、把銚子提等類出居簾外、而行之、)了、沈醉之後授御返事、受取還參、(若雖有被物不拜之、入車中、還參陽明門中步、)入之間、從類持之至于殿上下、懸肱昇殿、落置於便所、送返事、或人云、至于御返事入自陽明門之間立後可入者、亦說云、此事未甘心、可備奏覽之文兩端說可尋注之、

〔侍中群要〕四 召上達部時

〔侍中群要 八〕諸使事

家唐物使右辨以下、近代藏人以下、所小舍人御厩官符、雜丹、雜器、造茶一三明　地黃煎氷魚使藏人所上鵜瀧口　宇佐使殿上五位、神祇卜部官符、御厩、御即位時和氣氏五位、　同御祈使法師　交易金銀、朱砂、　大神寶使藏人所御厩官符　訪齋王病使納言以下殿上人　遣齋王位記使藏人所　著裳使殿上兵衛佐　女御位記使兵衛侍從、內侍或遣竪、　更衣以上初參後朝使殿上六位以上　賜瓜侍從所使殿上五位六位高戶者　摘大歌所辛夷使藏人所高戶　度者使近衛將　諷誦使近衛將藏人頭　臨時賑給使殿上人　平野祭使殿上五位　大嘗會御禊點地使少將　八十島使典侍藏人宮內宮主　勅答使近衛將、或納言、內親王、攝政、　遷內侍所神使五位藏人勅　平野見參使近衛將監春冬遷藏人、御　開東大寺勅封御倉使辨監物宣旨　開藥御倉使藏人侍醫侍從　勅計使殿上六位已上　祈雨使六位藏人　牽分使近衛將藏人仰東宮主馬正或宮進　東西宣旨飼使藏人　召大臣在亭使內藏人所外記　召親王在亭使藏人所　召公卿在里使內豎外記召使　召諸司人使內小舍人外記使部　召法師使隨高下各別藏人并所人以下藏人宣旨　納宣陽殿御物使近衛將藏人　御狩使所下文御厩飼　諸寺瓷使除宮時御瓷、外所司以備大舍人永宣旨、　諸寺藥使內豎　同諸司粥使永宣旨　訪天台座主被凌辱盜人使藏人所民輔　訪天台座主之喪使殿上人　女御更衣養產使藏人　撿諸寺破損使殿上人　出內侍所節刀使辨將監內侍女史、天德四年例、　鑄節刀使藏人將監、左右近衛將、　出安福春興戎具使左右近衛將　給御題使式部大輔、臨時近衛瀧口、　四界例祭使藏人所人　四角御祭使瀧口　臨時祭使殿上四位巡　返僧表使兵衛佐

蘇甘栗使事

家大臣家大饗內藏人奉仰召仰出納令調蘇甘栗等在所蘇四壺、栗十六籠各入折櫃一合合二合也置土高坏折櫃高坏井召內藏小舍人一人二人歟仕人二人相從之、藏人束帶著鞾麈尾向彼家入立便所中門召之家司大夫二人出對、傳取蘇等還入、主人召勅使敷座召之勸酒給祿、給祿之時、乍把笏宮寄肩候之、給了即下庭再拜罷出、更不還上、即步出之歸參奏復命、祿落使所置但小舍人祿疋絹家司出來給之、小舍人插頸而已、

〔西宮記 臨時 十〕祭使事

長治三年正月一日

御裝束

〔古事談 一 王道后宮〕隆國卿爲頭奉仕御裝束、先奉探主上〇後冷泉御玉莖、主上令打落隆國冠給、敢不爲事、放本取候、是每度事也、

執御插鞋

〔貫首秘抄〕取進御插鞋事　平三位(家)〇註曰、五位藏人取進トゾ見給ヘシ、而或頭不請不知案內歟云云、經宗亞相云、五位藏人取進之、頭不取進之云々、又平三位曰、令下御殿長押御之時所著御也、仍於長押際供之云々、經宗亞相云、出御時、於母屋際(母屋之際事也、)供之、入御之時、於臺盤所障子之間令脫御云々、此說不同、予案、出御晝御座不召之、然者於長押際可召歟、但又於南殿猶召之、與奪道(出御)事歟、兩說強不乖歟、且予五位職事之間、於長押際供之、

侍御浴

〔禁秘御抄 上〕恒例每日次第

早旦供御湯、主殿官人奉行之、(近代多經五位也、)釜殿運湯、須摩志女(官人二)取傳、藏人爲鳴弦候戸外、〇中略典侍(或上臈女房)進御湯帷、奉河藥、次典侍取河藥器抛板、于時藏人鳴弦、主殿官人稱名、主殿助藏人候之時或稱名、(官人不候之時事也、)是每日每度事也、

〔侍中群要 四〕御湯殿事

(慣)藏人承仰、仰出納若御藏小舍人御物忌時者、前日仰主殿寮官人可籠候之由、〇中略

(革長)御湯殿

可令奉供御湯殿之由被仰時、藏人召出納若小舍人仰其由、令仰主殿寮并女官等、及其期藏人若非藏人取弓參御湯殿奉仕、鳴弦了後同主殿官人共歸殿上、

奉使

〔禁秘御抄 中〕御使事

依人依事有差別、藏人頭、近衞將、五位藏人、六位藏人等也、又所衆瀧口等無難事也、細々事、藏人無難、依事定勅使、不可勝計、(在江記、)

〔源氏物語桐壺〕ものなどもきこしめさず、あさがれゐのけしきばかりふれさせ給ひて、大床子の御ものなどは、いとはるかにおぼしめしたれば、はいせんにさふらふかぎりは、心くるしき御けしきを見たてまつりなげく、

〔河海抄一桐壺〕大床子のおもの　天子のつかせ給ふ床子なり、號晝御膳、大床子の御膳、上古は朝夕供之、近代一度也、昔は主上著御正しく食御之、近來不然、左波を取て御箸を立らる、陪膳其御箸を取て又立、御箸を折て出、無出御時は女房鳴扇三音、其時陪膳人撤之、陪膳藏人頭以下四位侍臣役送、四位五位六位隨時有陪膳番、仍陪膳より上首も役送常事也、上古は公卿陪膳も有之歟、

〔朝野群載五朝儀〕陪膳番

陪膳　一番子辰申　行任朝臣　實綱朝臣　經家朝臣　經秀朝臣　定長朝臣　二番丑巳酉　國成朝臣　信宗朝臣　定房朝臣　實基朝臣　經宗朝臣　三番寅午戌
保家朝臣　隆俊朝臣　基家朝臣　經成朝臣　四番卯未亥　範國朝臣　經信朝臣　兼基朝臣　成章朝臣

右依仰所定如件、但先觸女房、若有闕怠、守次勤仕、無故三度闕怠之輩、不可昇殿者、

寬德二年正月十六日

陪膳　重資朝臣　正家朝臣　道時朝臣　師隆朝臣　顯實朝臣　長實朝臣　兼實朝臣　爲房朝臣　經忠朝臣　有家朝臣四度　基隆朝臣四度　仲實朝臣　時範朝臣　俊忠朝臣一度　實隆朝臣　宗輔朝臣二度〇以下十八人略

供膳　俊忠朝臣一度　宗輔朝臣二度　俊賴朝臣三度　長忠朝臣五度　成宗朝臣二度　有賢朝臣八度　家俊朝臣四度　爲隆二度　雅兼六度　行信　懷季〇季、本作秀、　定能二度　家保　家隆二度　實明　忠長　能明　能賢　忠宗　顯俊　顯親二度　國枚二度　雅定　仲光　五十二度　知信廿〇廿、本作卅、度　廣房廿八度　有忠

事、非常事欲下時召主殿司、居大鉢於下盤、夕膳御飯稱夜候料不下云々、先達云、上古更不聞事者、然而近代有此事、聊以謬事也、粥亦朝大盤以前有下時、是非常事、

〔侍中群要二〕日中行事　午一剋供朝膳事

藏人式云、午一剋大炊、內膳、主水、造酒、采女等寮司、及進物所之供御膳、采女傳取捧進女藏人、女藏人取奉更衣、又進於御、了更衣、女藏人撤却、采女受机各返授所司、次主水司供御噉、采女捧持、更衣女藏人傳取供於御、了撤却、返授同前者、　定、男陪膳番、次文云、先觸女房、若有闕怠、守次供奉者、今案進物所、御廚子所、供御膳不足九種、先申其由於藏人、然後供進、

〔侍中群要三〕御膳次召御酒事

陪膳召藏人、藏人參入、仰云、御酒召之、藏人到上、御廚子所取御酒授陪膳、陪膳取供之、御器使留御臺盤、

〔侍中群要二〕酉一刻供夕膳事

藏人式云、申二剋供夕膳、具同朝膳者、今案年來日記、以酉一剋為夕膳剋、餘同朝、

〔禁秘御抄上〕御膳事

凡御膳、大床子御膳、（上古朝夕、近代一度供之、）朝餉御膳、（朝夕夜供）皆一度供之、此御膳等、近代主上不著、又只御膳三度、是只女房サバ〃カリ取之、只內々稱小供御、御乳母沙汰供御三度所著也、大床子御膳（晝）ハ時々必可有著御、其作法、藏人奏御膳時、御直衣、自帳後著大床子、（懸膝著之、東向、）陪膳人警候、昔正食之、近代只立箸許也、取左波立箸、陪膳取其御箸又立、別御箸折出也、著御之時、二臺盤物陪膳自居之、不然之時、藏人居之、○中略 內々御陪膳公卿藏人頭ナドハ聽之、侍臣殊可然近臣ナドハ聽之、

〔職原抄下〕藏人所

六位藏人四人　六位藏人奉行禁中細々公事、朝夕御膳等事、稱之日下﨟也、四人分日令奉行故也、

門尉、同ム類、臨時之事、或次列限書之、多ハ宿侍之後書之、記藏人不入宿侍、名所不書、

〔續世繼花ちる庭の面六〕藏人頭におはせし時〇藤原公能も、殿上の一す物し、日記のからびつに、日ごとに日記かきていれなどして、ふるきことをおこさんとし給ふとぞきこえ給し、

諫諍

〔詠百寮和歌〕藏人頭

雲の上のゑひをすゝむる盃に手まづさへぎる藏人の頭

〇按ズルニ、職掌ノ條下ニ引ケル侍中群要所載ノ藏人式ニ、奉傳勅旨下百官、若有違道、必可忠諫、愼勿默止焉トモアリ、

侍御饌

〔侍中群要四〕大盤間事

家朝大盤巳剋也、上古辰剋以前居之云々、殿上辨宿侍參結政之時、著朝大盤、及剋限參結政云々、其間大盤三箇度也、有晝大盤、供朝膳之後、午剋計行云々、〇下七字、本作次下御飯所行也七字、欲下御飯之時、主殿司令居大鉢於下盤、爲瀉入也、但近代不然、御膳罷了之後、自御膳宿所下遣也、至于夕膳之御飯不可下、稱夜候料、近來大盤只朝夕二箇度也、晝大盤非每日事、抑朝大盤之時、下物自御厨子所所渡也、小盤物二前各四坏、上古無小盤物云々、夕大盤之時無御厨子所下物、只以下盤物稱九種物也所用也、又御精進之間不用魚味、但將差物密々有此事、雖然不穩便、又以例也、又御厨子所之物疎惡之時、召彼所衆於殿上前加勘責、又殿上飯疎惡不法之時、藏人色者書召大炊寮官人於所勘責、幷令計定飯之盛樣、令居按書殿西長押者、

大盤事〇中略

凡大盤事、藏人所催行也、飯有懈怠之時、召小舍人仰可催遣之由、下物亦以小舍人主殿司催御厨子所、件物疎惡之時、召御厨子所衆於殿上前勘仰、或時及恥辱、雖非常之刑、已承前之例也、飯疎惡不法之時、召大炊寮所下部於藏人所計定召勘其旨、盛樣居按書殿長押上云々、下御飯之間、有件

家月奏返抄等之類、從下薦加名、御牒等之類、奉行藏人先加自名、爾後從上加之、勘文從下加之、自餘多從上加之、所下文只藏人二人以上加名、又出納一人加之、

〔類聚符宣抄六〕被右大臣宣偁、就廳座聽政參議已上、須外記每日記錄、一月二度進藏人所、事依勅語、不可疎漏者、

仁和二年七月三日　大外記大藏善行奉

〔定家朝臣記〕康平三年六月十六日、殿、(○藤原賴通)藏人所書寫大般若二部、於賀茂下上社供養之、

〔文館詞林奥書四百五十三〕按書殿寫、弘仁十四年歲次癸卯二月、爲冷然院書、

○按ズルニ、按書殿ノ寫書ハ、藏人所ノ掌ル所ナランヽ、

〔侍中群要四〕日記

家當日日記記者、不候宿者不注名云々、

式凡當日日記、無大小詳注記、不可遺脫、

懐成業者多所記也、但見古今舊例、雖非成業堪其事者只記之、當日之事不漏巨細可記也、不載記事可用心、宿侍難給夕、不候殿上、猶不注哉、所謂觸御物忌、依召役、(役本作召)御夕之類也、雖書日記、不宿侍、藏人不書著、(○著本作署)所件記所書本古云々、多是假文之裏等也、近代以紙屋紙書之、

日記體

日下世書支干、或書之、名注、次注天晴陰、辰一剋上格子、同四剋主水司供御手水幷御粥、巳一剋供日次御贄、衞府隨番、近江國、月次所、東西河、件河五月五日以後九月九日以前供御贄、宇治田上御網代、自九月九日至于新嘗會供氷魚、衞府供鯉鮒、近江國供鯉鮒幷雉雲雀、但雉雲雀有期、相互供之、御精進時衞府供菱菁、春時或供直、自餘日次所停止御贄、午一剋供朝膳、酉一剋供夕膳、戌一剋下格子、御讀經時不注上下格子、次宿侍、四位官名朝臣、五位官名、六位官姓名、頭藏人必書之、上臈頭藏人乃稍次闕次有頭藏人、不書頭藏人、同之人指次可書同字、所謂左近少將之類、同姓乃下ラハ又注同字、所謂式部小丞藤原ム左衞

院東大路(々西)東京極大路(西々)鷹司小路、神解小路、万里小路(已上中本號、他小路等、只中其大路之其方小路、)堀川(號中本云)

(云、元小路、今稱大路云々、〇中略)

撿非違使奏事

別當有闕之時、廳底可然人奏事由、(行于例事、依可下給也、)有名犯人并有宣旨追捕者、得之時參藏人所奏其由、(或有給祿之時、各疋絹也、佐若有此中、藏人所授於六位官人出納、有何事乎、藏人尉可有任心也、〇中略)

飛驛解文

付中務省、若無省官者付外記、外記獻上卿、上卿持參御前同奏云々、

飛驛奏(使到來、中務官奏之、若無省官者付外記、令上卿於御前披之、)

〔侍中群要十〕式令申慶賀幷罷申事

地下人參敷陣、近衛將令奏、次將不候藏人奏之、上達部殿上人參射場令奏、藏人奏之、(近衛將奏之、又雖殿上人、於敷陣令奏、有何妨哉云々、常事也、)僧侶參朔平門外令奏、(近衛次將之時藏人傳奏云々、藏人奏聞之後仰次將、俗殿如此云々、)上卿ハ奏詞如見參、四位五位六位又同前、(地下六位可奏官姓名歟、通例只奏名、)除目之時、地下下﨟之者、及三人之時奏聞云々、僧綱ハ大僧正某(律師已上可知、)凡僧只奏名、凡有奏慶人時、先出令、次參御前奏之、其人候奉勅語之後還出、有官之人把笏、(衛府著劒、射八於殿上口、〔屬ハ云々〕本作於射場殿把笏渡殿上前、上代只奏某人々候由、)對御所方、(向後其人也)次仰云、聞食、拜舞之後還入、(但上﨟ハ必可侍拜、人自餘人も再拜之間可還入歟、)僧綱給祿、(令持出納於門邊傳取、仰勅語後給祿、不向跪、)立親王之時、外戚公卿奏慶賀、(其詞可尋、凡如此歟、強〔強恐衍〕奏慶、)巨多可尋之、駒牽之時給御馬、公卿已下奏慶、(其詞同可尋之、)小朝拜之時、第一人於射場被奏事由、勅許之後出自仙花門、(其詞其人小朝拜可候之由令奏上歟、雖有親王猶大臣可奏云々、)罷申受領參敷陣、以藏人令奏出逢之儀、如慶賀奏詞、某國守厶朝臣其日任國罷下之由令奏、召御前之時、出御之後依仰召之、(歷殿上前、入自仙花門、候長橋内、)

〔侍中群要六〕所文書加署事

記二、若有可留御所文之時、隨狀於殿上申聞食之由、然則上卿揖而去之、(式部少輔外記)

〔西宮記(臨時　)〕詔書　大納言就御所付藏人奏聞

〔江家次第十八〕詔書覆奏

上卿(○註略)著陣、外記申詔書覆奏可候由、(○中略)上卿見畢返給、外記插之立小庭、上卿付御所令藏人奏之、

攝政時、若御直廬若里第者、藏人可持參、畫可字返、

〔禁秘御抄上〕諸陣月奏　御覽外無指御沙汰、(每月藏人奏之)

○按ズルニ、藏人月奏ノ事ハ、政治部上日篇ニ詳ナリ、宜シク參看スベシ、

〔侍中群要七〕臨時急事　天文密奏事

(家)博士參腋陣、藏人出對取奏書、還上、插殿上文刺奏之、件書早可備御覽之故、追御所奏之、雖御物忌、猶奏之、御覽了留御所、抑追御所之事、可有用心歟、又博士早旦參者、藏人不堪束帶、乍布袴取文刺奏之、如朝候之次也、(○中略)

燒亡奏事

撿非違使等參腋陣、付藏人奏之、(藏人帶使者在撿非違使之列者、或令其人奏、脫弓箭劍等、於殿上口預小舍人、了昇以奏聞)之、藏人送聞案內、了參御所奏云、撿非違使等(乃)令奏(ル)、某大路其方(東西南北)某大路之其方之小路其方(東西南北)若干家(家數不必申)燒亡、火起失火、(仁奉年毛侍ケル、若放火ニ候比計里、)見參(乃)官人左佐某(四位朝臣)(加)右佐某左政人某姓某(五位加姓)(不)右政人ム姓某、左志ム姓ム、右志ム姓ム、左府生ム姓ム、右府生ム姓ム等候フ、各奏了還出、相對官人等仰云聞食ツ、

又說(左佐右佐)(判官判官)(志志)(府生府生)

申條里號事

北邊大路(或只申條、大路是俗說)上東門大路(ミミ西)陽明門大路(十二門准之可知)二條大路(以下准之)宮城東大路(ミミ西)洞

御覽之由於史、凡奏報進所々、

初候奏事　藏人頭奉仰、其上又仰左大辨云々、（大臣者不論左右內、皆同、○中略）

御物忌時官奏儀　關白殿令頭申、故二條相府有不請之氣、可用五位藏人云々、

〔侍中群要六〕恒例雜事　官奏事

大臣於陣座召藏人、藏人參著膝突、大臣命云、奏候（不）、藏人承了退還、參御所奏云、其上（乃）奏候（不、左乃大キ）（万不智支美乃奏左不頁不、他准之、但奏申是殿上辨所爲也、若不候之時、以藏人被申也、）卽被仰可勤仕御裝束之由、其儀取御硯置御座上、（本置之所、西方疊上移置也、）御硯入水可磨墨、（是故實也、）取在晝御帳之御几帳二基、（取南北、不取東西、）立母屋南第二三間東端、（西向立之、）（常儀也、又說向東立之、）東廂北御障子戸可引立也、孫廂南第四間敷圓座一枚、爲大臣座、（中央少侍西敷之、去廂長押東板三板許、）同廂燈樓綱返之、自南次第（留）五箇間也、（以文刺差返之、）第五間以北綱不返之、年中行事障子押寄殿上東戸前、（不全奏云々、頓有小道、）若青瑣門閉レバ可開也、臨昏供燈、御座南北立燈臺二本、（相並御疊東端立之、有打敷、）大臣座北立切燈臺一本、（頓退西立之、打敷同上、）御裝束畢著御御座、召大臣、卽藏人出陣召之、（其詞云女受）畢退出、大臣參上自青瑣門、著座奏事云々、

〔侍中群要九〕臨時奏文

詔書復奏、上卿付藏人奏之、御畫可返給、　勅書復奏中務輔付內侍、內侍不候之時、付藏人奏之、返給、

詔勅宣命二度、先草、次淸書、上卿付藏人奏之、返給、　例宣命一度、若有辭別者二度、　國忌奏、上卿付內侍所、或云式部丞付藏人所、近代不奏歟、

〔侍中群要三〕上卿於弓場殿令奏文事

家若上卿於弓場殿令奏文之時、先喚藏人取覽筥（若書杖）授之、藏人先受取挿、參上奏聞之後、還弓場殿、相傳宣旨、（○註略）之後返給了、其間若有所被仰之事、隨其旨仰之、（○註略）藏人退出、此間若退出之時、上卿起座出於弓場殿奉宣旨、上卿雖不早起、專不得留於殿上、先候氣色、共出弓場而可傳宣旨者、或

じくげさもに入候、

傳勅旨

〔傳宣草上〕一藏人方宣旨上卿不承之、職事直下知也、而近職事勅失而有下上卿事、仍爲存知注之、

補藏人頭事　補五位六位藏人事　聽昇殿事　藏人所雜色非雜色事下名簿於出納同出納事　瀧口武者事同前　御冠師事付巾子作　御鷹飼事藏人奉勅仰撿非違使　納代司事　丹波御柄司事　進物所預執事等事　御厨子所預衆等事　內豎所預以下事以上以名簿下給藏人、召仰本所、　交野禁野司事　采女事入官奏、或奉勅讀時藏人仰本所、　樂所始事　所々別當事給所、樂殿、御厨子所、贄殿、酒殿、御書所、樂所、作物所、　畫所預幷畫口等事　作物所預事以上以名簿下給藏人、召仰本所、　近衛擬近奏事次將奏之、下官人、稱內侍宣、近代藏人奏之、　諸司官人代事藏人下本司官人、稱內侍宣、而近代被仰官勅、　公卿以下恐懼事　藏人所小舍人事　內侍所勾當事　節折藏人事　猿女事以縫殿寮解內侍宣或上宣、　五節舞師事已上內侍宣　賀茂祭使、典侍、命婦、藏人、闈司、等申請雜事、下藏人所、內給所、穀倉院事等、　供御稻粟國郡卜定文事內侍下辨　御酒料屯田稻國郡卜定文事同上　御導師事　此外猶繁多也、可尋注、

〔官職便覽五十家記〕藏人所宣旨、幷御牒下文等之事、出納書之、

〔西宮記臨時〕諸宣旨

進物所預執事　以名簿自御所賜藏人、藏人召仰本所預奉膳永宣旨、

御厨子所預衆事　以名簿自御所下藏人、藏人仰本所定額膳部永宣旨、

傳奏

〔江家次第十八〕勅書　太上天皇尊號事

上卿著陣、奥、次移著外座、召官人令鋪膝突、藏人仰可令作太上天皇尊號詔書由、中略令藏人覽之、次令持內記進弓場殿奏、付藏人

〔江家次第九九月〕官奏

大臣著陣、中略後朝史進奏報、行事藏人於殿上口取之、改插殿上文刺奏之、必於晝御座覽之、其後仰

藉者借其力ト、コレニテ要籍ノ字義明ナリ、畢竟用ヒカルト云コトニテ、何カノ役ニ立ツヲイフ、今時ノ用人ト云、或ハ役ニ立ツ人ナドト云ガ如シ、唐ノ末ニ藩鎮朱滔等ソノ家ノ用人ヲ要籍官ト云トミエタリ、此モソノ時代ノコトバナリ、ユヘニ日本ニテ、ムカシハ事ノ役ニ使フコトヲ要籍驅使ト云フ、驅使トハカリ使フコトナリ、令ニ驅使丁ノ賤職アリ、

〔侍中群要　四〕凡行事

(革長)行事至于分配行事、豫所存也、臨時行事、隨上﨟之所行也、縱雖巡行事、早可承諾、若猶有不常事者、一度可觸一﨟、無承引之時、中心猶不安、可申貫首、隨彼定可奉仕、新藏人、縱雖非理事、至于不懸隔事、謹可隨上﨟命、雖遁所憚、事重疊及度々之時必有所澀、雖口々謗者也、抑行神事之時、不奉仕佛事行事、

〔侍中群要　十〕定事

年料物(上﨟五位藏人、知納殿事藏人、)中重掃除、(下﨟五位藏人、)四月旬、(上﨟五位藏人、)十月旬、(下﨟五位藏人、)賀茂祭五節、(一﨟藏人、依巡行之、)御佛名、(二﨟藏人召分配書、依巡行之、)臨時祭、(衞府藏人無衞府暫不定、以入陪從藏人爲其行事、)

〔言繼卿記〕天文十四年三月二日甲子、一從廣橋使有之、先度從鷹司殿被申候粟津之物之儀、御返事早々可申候由有之間、證文藏人所置文法住院殿奉出兩通、惠林院殿當御代以上五通同平日記調遣了、

關白として掠御申の條々の事

一あはづの物、京都にて種々の物ゑやうばい、往古なきよし申入られ候、いそぎ證文出對あるべく候、此供御人の事は、天智天皇御宇よりはじまり、そののち正和五年藏人所にてさだめをかれ、內侍所、日吉社等、神供朝役以下のさたをいたし、いまにさういなき所に、御いらんかくごなく候、公武古今數通の證文をやぶられ候べき事、ちか比荒涼の御事候、京中のたなの事も、おな

序、乘輿杖、醉、何無戲、愼勿傳語焉、殿上非違、喧嘩濫惡、隨聞必加糺彈、愼勿隱忍、奉傳勅旨下百官、若有違道、必可忠諫、愼勿默止焉、（召仰諸司之後、不過時剋、即可覆奏其召仰狀、）當番記事、無大小愼勿遺脫焉、臨時雜役、應召奪、愼勿遲留焉、所中舊事、尋問蹤迹、一々興行、愼勿疎略焉、所中雜物、分別色目、明々充用、愼勿違誤焉、（紙布墨等之類、充公用之餘、依先例任用、）汝曹敬之、式云、勿疎勿輕、又諸聽昇殿者、可知此意矣、朕爲汝曹不敢隱情、今之所敍、懇不中道、汝曹秘於內而勿施於外、存於意而勿出於言、若出言施外令知之、非唯汝曹之不密、斯乃朕之大過也、（中略）

寬平二年十二月廿八日

〔職原抄 下〕藏人所（唐名侍中）

嵯峨天皇御宇弘仁年中初置之、模異朝侍中內侍等職歟、彼侍中尤爲重任、內侍者、宦者之任也、或有卑之代、或有貴之時、古來宦者知事、先賢之所謗也、唐玄宗以內侍高力士爲一品將軍、爾降內侍執文武之柄、遂亡唐祚、依之執政之官太惡宦者云々、本朝不必然、弘仁以往、少納言及侍從爲近習宣傳之職、而此御宇初置當所、以公卿第一人爲別當、（左大臣爲別當、是流例也、）四位侍臣中殊撰補其人爲頭、（但上古有五位頭、近代無之、）五位中又撰補三人、六位中又撰補四人、謂之職事、又爲要籍驅使六位中撰良家子令候殿上、謂之非藏人、凡殿上事頭以下職事所奉行也、依之聽昇殿輩、併以頭爲貫首、雖位階上臈、必著其座下、是流例也、但非參議大辨猶不著其下云々、重其職故歟、執頭之輩雖大辨猶著其下也、

〔乘燭譚 二〕要籍驅使ノコト

令ニ凡職事官云々、父母合侍者並解官、其應侍人才用灼然要籍驅使者、令帶官侍、又職原抄ニ云、爲要籍驅使六位中良家子令候殿上、謂之非藏人ト按ズルニ、要籍ト云ハ、唐人ノ語、亦官ノ名ニモアリ、通鑑唐德宗紀ニ、要籍謝遵トアリ、註ニ要籍官ハ唐ノ時節度衙前之職、又曰、節度使之腹心也、朱滔王武俊ノ相王タル要籍ヲ改メテ承令ト云、又通鑑ニ部不要籍ト、注ニ云、要者須其用、

心にてなをこれいとあやし、藏人所瀧口のおのこども、少將のぶかたつかさにはやからん馬はやめしにつかはして、これが辟するをさしてまかりて、目に見えずとも、その程と申せとおほせ給ふ、

〔今昔物語 十九〕瀧口藤原忠兼敬實父得任語第廿五

今昔□□院ノ天皇ノ御代ニ、夏比、殿上人數冷ミセムガ爲ニ大極殿ニ行ケリ、其ノ共ニ瀧口所ノ衆數有ケリ、冷ミ畢テ返ルニ、八省ノ北ノ廊ヲ行ク程ニ、俄ニ空陰テ夕立ス、然レバ今ヤ晴ル晴ルト立テ待ツ間ニ、或ハ笠持來ル人モ有リ、不持來人モアリ、然レバ君達ハ多クテ、笠ハ少ケレバ、笠持來ルヲ待ツトテ立タル程ニ、官掌□□ノ得任ト云フモノアリ、家ハ西ノ京ニ有ケレバ、陣ニ參テ罷出ケルガ、俄ニ夕立ニ値テ束帶シタル者ノ袖ヲ被テ、西ノ京様ニ走テ行クヲ、此ク殿上人ノ數立タル前ヲ渡ルニ、瀧口所ノ衆モ數居タリ、其ノ中ニ瀧口ノ忠兼ハ、實ニハ此ノ得任ガ子也、其レヲ烏藤太ト云フ者ノ、兒ナリケル時ヨリ取テ養テ、烏藤太モ我ガ實ノ子也ト云ヒ、忠兼モ然カ名乘テ、得任ガ子ト云フ事ヲバ、人顯ハシテモ不云シテ私語キテノミ有ケルニ、忠兼瀧口共ノ有ル內ニテ、此ノ八省ノ廊ノ北面ニ居並タルニ、此ク得任ガ夕立ニ値テ、沓襪ヲバ手ニ取テ袖ヲ被テ濕テ走リ行クヲ忠兼見テ、迷テ袴ノ扶ヲ上テ笠ヲ取テ走リ寄テ、得任ニ差シ際シテ行クヲ見テ、殿上人ヨリ始テ、瀧口所ノ衆皆此レヲ見テ、不咲シテ或ハ泣ニケリ、

〔山槐記〕永曆元年十二月一日乙巳、申剋許、瀧口十一人列來、惟宗賴平獻二字、日來城外、其後召寵之間、于今遲參云々、賜酒肴、入夜退出畢、

〔侍中群要 二〕一藏人式云　寬平二年左大辨橘廣相奉勅作之

職掌

凡藏人之爲體也、內則參陪近習、外則召仰諸司、職掌之尊、誠可嚴重、朕慮眇之性、愚而又愚、寢食之間、日愼一日、藏人等須敍位除目間、奏議政之場、適所聞得、無是無非、愼勿外漏焉、翫月賞花、調曲吟詩之

瀧口事　內府〈○藤原公教〉命曰、頭籠御物忌之時、朝間瀧口皆悉來直廬之前、號之御物忌、見參頭押瀧口奏名於直廬壁、令見合見參輩、令尋不參輩也、此御物忌之時、頭雖宿侍不來云々、又所衆ハ無此事、瀧口歷頭之公卿ニ遇テハ帶弓箭、不然之公卿ニ遇テハ只取弓計、是故實也、故行違云、近代知者無之云々、

〔十訓抄中〕寛和齋宮〈○濟子〉野宮におはしけるに、工役瀧口平致光とかやいひける者に名立給ひて、群行もなくてすたれ給けり、それより野宮の工役は留りにける、

○按ズルニ工役一本公役ニ作ルコト、禁秘御抄等ノ文ニ同ジ、

〔續古事談〕〈五諸道〉保輔ト云者ハ、元方ノ民部卿ノ孫致忠朝臣ノ子也、故國章ノ三位ノ家ニ強盜入ニケリ、〈○中略〉保輔ガ所爲ノ由郎等白狀ニヨリテ、〈○中略〉檢非違使幷ニ武藝ノ者瀧口ニイタルマデカノ家ヲカコミテサグリモトムルニ、〈○下略〉

〔左經記〕寛仁元年七月三日己亥、左大辨被示云、〈寄瀧口作法事〉被寄瀧口作法奏者以名簿奏聞、被下之時下給出納、出納卽書之、人名納置藏人所、次出納且召仰下宣旨之由、且召諸陣官人等、官人等蒙仰書宣旨趣、各押付陣々等云々、

〔小右記〕長和二年八月廿一日庚辰、今日伊勢齋內親王入給宮內省、〈伊勢齋王禊東河入宮內省事〉〈○中略〉院別當民部大輔爲任近候御車前、瀧口二人爲饌、多事不具記耳、

〔空穗物語〕〈樓の上上〉內裏に夜さりのゐぎのおものにつかせ給はんとする程に、心ぼそう悲しう哀なるもの、音、風につけて聞ゆるを、おどろきあやしがらせ給ひて、殿上の人この物の音はきくや、いづくにかあらん、いとあやしとおほせ給しが侍る、いとあやしと申しゐてきかせ給へば、東たつみの方より聞ゆ、藏人の少將おもしろきことも京極の大將の家のきんの聲、內まで聞えんやは、あやしとおとこ女かたきゝて、哀がり淚落さぬなし、うへもいとかなしくおはします御

官瀧口永仁被始置之、以任日定座歟、〇瀧口以下七十四字據一本補

〔簾中抄禁中下〕藏人所　瀧口廿人

〔小右記〕永觀三年〇寛和元年六月廿二日乙未、參內、候宿、侍從時叙、齊信被聽昇殿、藤原正廉、平致平、藤原貞正、藤原俊陰、藤原義方、余擧申也、合五人被候瀧口、初候者十人、令加是五人、合十五人、

〔日本紀略後一條十三〕長和五年二月十七日壬辰、被寄瀧口十七人、今三人以先朝三勞被加寄、

〔水左記〕承曆五年〇永保元年十二月十七日己巳、瀧口源榮任右馬允、前々春除目任之、而始自今年被加瀧口員十人、春秋除目被任之也、

〔爲房卿記〕永保元年十二月十八日庚午、右馬允源榮、瀧口去春除日、菅野則季任右馬允、而自春比被加補瀧口十人、春秋可給官由有其云々、榮又拜任也、瀧口合三十人也、仍本所板敷東一間被續屬、立加大盤一脚、是去春事也、今夕申轉任慶賀、〇下略

〔西宮記臨時二〕瀧口武者

以名簿下給、先試其藝、依善射被定下、藏人奉勅仰諸陣、陣官書宣旨押陣、

〔西宮記臨時一〕諸宣旨

瀧口依試射場殿中院及便所藏人仰諸陣近代不試

〔貫首秘抄〕瀧口所衆沙汰事　何樣可存哉之由問經宗亞相、無洲事之由被命也、大都中將頭沙汰也、于時無頭中將、故尋沙汰云々、

〔小右記〕長和五年二月二日丁丑、瀧口事左兵衛尉式光、右馬允有信、可候瀧口之事同有許氣、就中式光事有褒譽、　九日甲申、攝政命云、被試瀧口事十三日於左近府可試瀧口、被申之人々太多、仍可試也、資平爲勅使可申優劣者、爲避後難欲申請今一人、余答云、五位藏人宜歟、次有官者可被寄瀧口之事漸以無苦者、

〔貫首秘抄〕相具瀧口事　平三位〇範家日、城外具之、頭辨晝夜出行、仍可具之時モ強不具之、相親之人強請ニハ遣所之共相具、頭借與之間、爲公役給上日也、

〔有職袖中抄〕瀧口 所ノ名也、清涼殿ノ北黒戸ノ東ニ在リ、出入ノ口也、此處ヲマモル番ノ侍ヲ瀧口ノ侍ト云フ、五十九代宇多帝ノ時始メテ此ノ勤番ヲ置カル、數二十人、武官ノ任トナルコトハ、八十九代龜山院ノ文永年中ニ始マル、源平重代ノ侍ヲ以テ任ズ、賴朝卿ノ時、千葉、小山、秩父等ノ侍是ヲ勤ムル由、東鑑ニ見エタリ、禁秘抄ニ、瀧口ハ大略所衆ニ同ジキ也云々、瀧口、北面、東宮帶刀等、一列ノ官也、

〔禁秘御抄中〕瀧口
員數廿人、無有官、大略同所衆、但白地不昇殿、公役體同、但御船公役必瀧口也、著布衣、且募候砌下、九條關白殊制申、但非難歟、遠所勅使等公役隨仰奉仕、無定樣、又栽草木樣雜役、皆例也、無官或内舍人將曹志進等補之、院宮親王公卿侍臣等皆擧申、頭下知藏人、藏人仰出納召付、若有試、藏人一人於左近射場試能射例也、天德四年七人召加、又於弓場試時、公卿侍臣等試之、此等上古例也、

〔禁秘御抄階梯中〕瀧口 按宇多天皇御宇、撰能射者令候御所邊、其所御溝水所落聚也、仍號瀧口、候其所之武士稱瀧口、後代爲名、

小舍人 按雜色、所衆出納、小舍人、皆著束帶、於瀧口不能著束帶、是於瀧口者、以堪射藝者撰補之、仍號武士也、不拘公事、只著布衣帶弓箭候砌、奉守護君、以候瀧口邊稱瀧口武士、依不預公事不著束帶也、既此御抄所衆條下有官不可過一人、瀧口條下有官或内舍人將曹志進等補之云々、其品何不束帶哉、既於出納、如諸國目補之、猶著束帶、小舍人多無官歟、昔白張裝束也云々、中古以來、衣冠布袴束帶多所見也、是皆預公事者也、於瀧口武士者、束帶例一切不見、是以射藝爲事故也、

〔職原抄下〕藏人所
瀧口 同上、(六位侍可然之輩補之) 堪武勇之輩可補之云々、瀧口二十人、此内一﨟二﨟三﨟、已上謂之上﨟三人、座敷以初參定上下、但堪上日上﨟三人者問籍下仕十日、四﨟以下五箇日云々、四﨟號事行、有

瀧口

〔西宮記臨時〕諸宣旨

小舍人、頭以下定補、定額御倉小舍人、頭以下議定、

〔兵範記〕仁安三年七月廿四日癸未、參院、次參殿下、次參內、定下御藏小舍人定額、件職本式六人也、其內先朝小舍人三人、坊小舍人三人相定、而先朝定額今難廢弃、又依坊時賞、今被相定之輩、親父不可爲非職、故又六人被議定、并十二人被仰下了、六人之外一倍之條、雖爲新儀、近來諸司官人諸衞頭官等員數加增、仍頭內藏頭并五位職事三人六位等議定所仰下也、

中原守時　紀友弘坊一　多治宗時　矢田部久則坊二　中原久盛　草部近國坊三　已上六人、任次第座籍爲定額、矢田部則弘、本定額、久則父、清原季宗、本定額、草部近正、本定額、近國父、小野國守、本定、中原安久、本定、惟宗兼宗、本定

已上六人爲本定額、今難廢弃之上、則弘近正等子依坊賞被定了、其父爲非職、依無便又被定加了、如此之間已及十二人了、

〔西宮記臨時四〕候藏人所童子、以平絹爲裝束、不着綾、童子青赤色之外、元三日、十六日間著絹黃衣、黑半臂、除目、節會、行幸、初參、三日相撲召合之日、著總角、或無總結、以織物爲麴塵代、以白綾爲白襲、以黃花俗歟冬也紅梅等爲下襲、爲曳倍支類、依人可用、衆諸不得習之、

〔日本紀略二朱雀〕天慶六年四月十八日乙丑、小舍人藤原齊敏、加冠參入召御前、

〔慶應元年都仁志喜二下〕藏人方

御藏小舍人　從四位下山科安藝守紀正之　正五位下同出雲守同正恒　同筑前守同生春○以下三人略

〔西宮記臨時五〕一所々事

瀧口本所在御所近邊、寬平御時、被置衆十人、若廿人、隨時議、有內官、有熱食、進月奏、

右臨時公用、以諸國所進年料內、依例所請如件

貞享四年三月二十一日　正六位上行少属藤井宿禰久還
正六位上行少允藤井宿禰久重

○按ズルニ、此文ノ前ニ官方吉書幷ニ攝政家政所ノ吉書アリ、

〔慶應元年都仁志喜二下〕藏人方

出納　從四位上伯耆守平田內藏權頭中原職修內藏寮年預右近府駕預　正六位下同河內守同職救

〔簾中抄禁中下〕藏人所　御藏小舍人六人○中略　殿上童　小舍人といふ

〔有職袖中抄〕小舍人　昔ハ六人、近代十二人、出納ニ同ジ、代々傳ヘテ其ノ家アリ、又云ク、親王大臣ノ家司等任ズト云々、殿上ニシテ殿上人ニツカハルヽ役也、常ニ校書殿ニツメル也、公用アル時ハ殿上ニ召サルヽ也、是ヲ召ストキハ、藏人、鈴ノ綱ヲヒク也、是ニ依リテ參ルト云々、二條院ノ御宇、殿上ノ橫敷坤角ノ柱ニ綱ヲツケ、鈴ヲ付ケラルヽ也、初ハ馬寮ノ指繩ヲ用ヒタル故ニ、鈴繩ト云フ也云々、

〔禁秘御抄中〕小舍人

六人、近代及十二人歟、此等事更非御意成敗、一向頭藏人計也、如出納、如鷄鬪參事、彼御時〇堀河ノ例ナレドモ不甘心、近年萬事雖廢、彼等不見目、近代好華族、動存無禮、尤不可然、清涼殿御裝束時、頻好昇殿、予度々以藏人追下畢、近代公事、六位無沙汰、偏只出納小舍人沙汰也、誠雖爲奉公者、追日濶尾體也、著美服、又望衞府志、懸老懸、如殿上判官、尤不似先例、昔多白張裝束也、普通衣冠猶希、況著衞府裝束、近日事也、可止々々、小舍人召加、藏人下知、有名簿歟、可勘、御冠師頭仰之、繪所別當召望名簿下繪所、一切皆可准之、小舍人多補史生、

〔職原抄下〕藏人所　小舍人　以上皆有重代經歷輩

出納

正六位下結城安藝介藤秀壽〇以下七人略

〔簾中抄 下禁中〕藏人所　出納四人

〔有職袖中抄〕出納シユツノウ　官名ニハアラズ、是藏人所ノ出シ納レヲ主ル也、代々傳ヘテ其ノ家アル也、一二三四﨟アリ、四番メヲ新出納、又ハ雜出納ト云フ、是雜具ヲ出入スル役也、禁秘抄ニ出納三人、是藏人方一切ノ奉行也、

〔禁秘御抄 中〕出納

三人、是藏人方一切奉行者也、夜陰外不衣冠、又候御壺、體事無先例、堀河院御時、如鳥聞被召連、猶不廿心事也、出納者上古內親王大臣ナド擧申、藏人下知下名簿、學生明法生諸國目等補之、

〔職原抄 下〕藏人所　出納〇中略　以上皆有重代經歷輩

〔朝野群載 五朝儀〕補出納

正六位上行治部少錄豐原朝臣時眞

可爲藏人所出納

應德四年三月廿四日　藏人左衛門權佐藤原朝臣 奉

〔山槐記〕永曆元年十二月十八日壬戌、出納仲政持來御廐飼補任牒、

應保元年七月廿一日壬辰、出納仲正持來牒加判返給事出納仲正持來牒、近江御厨事也、加判返給了、同牒書二枚、同加判一通、爲留置藏人所也、是例事也、

〔季連宿禰記〕貞享四年三月廿一日己亥、卯一點著束帶、參近衞殿左大臣殿里亭、〇中略　吉書事、奏聞已前、今出川春宮大納言大夫伊季卿著仗座、次頭右大辨俊方朝臣著床子座、〇中略

一藏人方吉書〇〇〇〇〇同〇出納〇用意之、

內藏寮　請米拾斛

〔職原抄〕下藏人所　所衆　五六位侍可然之輩補之

〔禁秘御抄〕中藏人所衆

員數廿人也、又有官不可過一人、煤拂、日月蝕席引役、又諸御裝束奉仕之時、昇殿佛名、名謁、猶上簀子、廿人內少々召仕、近候御壺、流例也、或給所々公役、又上日給也、公役關白直廬、又鳥犬等ニ付テ不可過兩三人、有官者候御壺、高倉院御時康言也、藏人仰出納下名簿、六位著藏人所、所衆束帶付簡、藏人令付之、居湯漬之時藏人退、故實也、

〔中右記〕天永三年十月十九日癸卯、可渡御新造大炊殿也、（渡御新造大炊殿）○中略藏人大膳亮說雅率藏人所衆奉仕中殿御裝束、

〔除目大成抄〕八左京少進正六位上源朝臣俊貞（保安元）藏人所

藏人所衆正六位上源朝臣俊貞誠惶誠恐謹言

請殊蒙天恩、因准先例、依上日第一勞、被拜任治部刑部宮內丞等闕狀、（左京少進）

右俊貞謹撿舊貫、爲藏人所衆者、依上日之次第、拜任要官、承前不易之恒規也、爰俊貞始自儲闈之昔、至于御宇之今、夙夜積功、黽俛從事、推其勞積、已爲第一、若任所望之官、誰謂非據之仁乎、望請天恩、因准先例、依上日第一勞、被拜任件等闕者、將仰聖化之無偏、彌知奉公之不虛矣、俊貞誠惶誠恐謹言、

元永三年（○保安元年）正月廿五日　藏人所衆正六位上源朝臣俊貞

〔山槐記〕永曆元年十二月三日丁未、一清原宗直望申藏人所衆事、（史大夫致直子）

申大殿、（○藤原伊通）仰云、早可奏聞、申院、（○後白河）仰云、大殿可仰下之由被申者、早可宣下、重申大殿、早可仰下、申內、（○二條）聞食了、明日召名簿可仰下也

〔慶應元年都仁志喜〕二下藏人方

所衆　正五位下　岡田豐後守菅原業柄　土橋淡路守平重威　正五位下結城筑後守藤秀伴

所衆

ざふしきの藏人に成たるめでたし、こぞの霜月のりんじの祭に、みこともたりし人とも見えず、君達につれてありくは、いづくなりし人ぞとこそおぼゆれ、外よりなりたるなどは同じ事なれど、さしもおぼえず、

〔殿暦〕康和五年十一月十一日丙戌、齋院御方ニ(天)主上(〇堀河)被仰云、今夜一﨟永雅給冠、爲章朝臣子、補藏人以前相代歟、是自院(〇白河)被申歟、去八日ニ補雜色、今夜補藏人、

〔源平盛衰記〕二十六 平家東國發向幷邦綱卿薨去同思慮賢事

近衛院御宇仁平元年六月七日、四條内裏ニ燒亡アリ、關白ノ亭ニ行幸ナルベキニテ、主上南殿ニ出御在ケレ共、折節近衛司一人モ不參、御輿ノ沙汰仕人モナケレバ、イカナルベシ共思召分ズ、アキレテ渡ラセ御座ケルニ、此邦綱、藏人所ノ雜色ニテオハシケルガ、急參テ加樣ノ儀ノ事ニハ屋輿ニコソ被召候ヘト奏シテ、舁出シテ進タリケレバ、主上召レテ出御ナル、角申ハ何者ゾト御尋有ケレバ、藏人所雜色藤原邦綱トゾ申ケル、下﨟ナレ共賢々敷者哉ト思召テ、法性寺殿御參内ノ次デニ、御感ノ御物語アリケレバ、法性寺殿モコトサラ不便ニ召仕テ、御領數多給ナドシテ、家中タノシクヲゾ御座ケル、

〔山槐記〕治承四年四月廿一日癸卯、(廣家補藏人事)藏人所雜色平廣家(宮内少輔棟範子)補藏人、時經敍爵替、猶四人也、踐祚以後未滿五人、　廿二日甲辰、中宮六位進源兼補藏人、藏人今般滿五人也、有五位藏人三人也、

〔有職問答〕三 一雜色(藏人所雜色也)是も非司他人は書共、我は姓を書、又別の官あれば其ヲ書、官なにほどの物にかやうに姓を書候哉、(所衆、是モ藏人所ノ衆ト云儀ニテ候、職原抄ニ凡ソ見エ候哉、)

〔禁中抄〕下 藏人所　所衆廿人

〔西宮記〕臨時二 藏人所雜色幷衆等事(出納同之、被仰頭補之、)以名簿自御所下給藏人、仰下本所、(雜色事)殿上人事、或内侍宣云々、

雜色

陰陽道

凡如陰陽道醫道候藏人所也、且元三御藥之時、醫道著藏人所、

○按ズルニ、醫道、陰陽道ノ輩モ、藏人所ニ候スルコト禁秘御抄ニアルヲ以テ、姑ク此ニ收ム、

〔簾中抄下禁中〕藏人所　雜色八人

〔禁秘御抄中〕藏人所雜色

本員數八人、代々皆轉藏人、仍公卿子孫、又可然諸大夫多補之、近比少々相交、但多良家子、不可說僧子、幷不知父者等補之、尤不可然事歟、雖爲諸院宮判官代藏人、不可著指貫、只狩袴體也、東遊時持陪從和琴、是左道役也、然而付職如此事恥思、非重代者所爲也、更々不可有劣儀歟、上古上卿仰之、近代頭下知藏人、藏人仰出納下名簿、

〔職原抄下〕藏人所　雜色　良家子補之

〔西宮記臨時二〕藏人所雜色幷衆等事、出納同之、被仰頭補之、以名簿自御所下給、藏人仰下本所、雜色事　殿上人事、或內侍宣云々、

〔侍中群要十〕補雜色已下事

式雜色奉勅仰出納、出納遣仕人告之、宣旨等　所衆以名簿下給出納、出納同前、

式瀧口如所衆、但仰諸陣、帶弓箭可出入之由也、

式定額御藏小舍人頭已下著殿上、非藏人不著、或不取退盤、或於下侍行之、從下申上、相議之後召出納、仰下定外小舍人以名簿下給、貫首已下見作名簿了、後藏人仰下、

〔貞信公記〕承平二年五月十八日、定藏人所雜色五人、　十一月四日、以惟扶朝臣爲裝束司、以平時常、藤原有茂爲藏人所雜色、

〔枕草子十〕身をかへたらん人などは、かくやあらんとみゆるもの、

候人

〔非藏人日記〕元治二年〇慶應元年十二月廿四日乙卯

一被免非藏人奉行　清水谷中納言

一被加非藏人奉行　竹屋前宰相

右之通被仰出之旨、奉行伏原殿ゟ申來、

〔貫首秘抄〕五位以上候藏人所之人、近代不召名簿、只下知出納遣所下部令告之、雜色所衆必下名簿、

〔簾中抄下禁中〕藏人所　殿上人廿人、〇中略六位殿上人非藏人あり、

〔類聚符宣抄四〕內舍人藤原守典〇中略候藏人所

右大納言藤原扶幹卿宣、件等人、宜令奉仕今月廿三日荷前、若猶有不足者、差仕省丞等者、

承平七年十二月十七日　少外記三統公忠奉

〔朝野群載五朝儀〕藏人所　補藏人頭以下

左近衞中將從四位下兼行美作介藤原朝臣能實　可爲藏人頭〇中略

正四位下行主稅頭丹波朝臣雅忠　正五位下行主計頭賀茂朝臣道言　已上令候藏人所

應德三年十二月八日　藏人左衞門權佐藤原朝臣

〇按ズルニ、此文ニ據レバ、藏人頭ハ從四位下ノ人ニシテ、候人ニハ正四位下ノ人アリ、

〔朝野群載五朝儀〕補御書所人事〇中略

蔭子平季盛　藤原有憲　紀保遠　惟宗義行　已上令候藏人所

寬治元年十二月廿六日　藏人左衞門權佐藤原朝臣奉

〔禁秘御抄中〕醫道

侍醫常近龍顏者也、召小板敷、於殿上倚子奉拜天顏、〇中略藏人所者、如此者座也、然而藏人所程遠之間近參也、

別紙四折
非藏人家督相續之事

延享三年、俊章藏人闕中望候節、實子無之ニ付、以俊與(于時知光)爲養子、非藏人家督相續御願申上、卽願之通被仰付候事、

寶暦十二年、俊興藏人闕中望候節、實子無之、以弟俊多爲養子、非藏人家督相續御願申上、卽願之通被仰付候事、○中略

寛政三年、俊矩藏人闕中望候節、未タ出生之子無之故、任父俊多例、實子出生及年頃候上、非藏人家督相續被仰付被下度旨御願申上候處、卽願之通被聞食候事、

其後、俊追出生及十歲候故、享和三年、非藏人家督相續御願申上候處、卽願之通被仰付候事、

右之通、明和寛政兩度は未タ出生之子無之候故、無是非家督相續暫中絶仕候得共、此度は實子俊文十歲ニ相成候者有之候故、何卒延享寶暦如兩度之例、非藏人家督相續之儀御願申上度候、段々願之數相重り、深く奉恐入候得共、何卒以御憐愍願之通被爲仰付被下候者、誠以難有仕合、深く畏入可奉存候事、

〔德川禁令考 二令條〕學習所令條

天保十三壬寅年十月

堂上方學習所創建之儀ニ付傳奏衆ヨリ口達○中略

大體堂上四十歲以下、十五歲以上、非藏人二百人計、幷御內勤之者にも、諸司官人子弟之外等にも、追々相願候はゞ、人數に可被加候、右之次第故、年々米金五六百石餘程被宛行候はゞ、精々質素に可被仰付候得共、堂上地下諸生往々之御見込に而者、三四百人計にも可相成哉、其中ニ而隔年位に昇殿之人計成共、御殘用途にて上中下出精之御褒美、聊成共被下候得者、自然と風儀改革、研學有之、往々御役に相立候半人柄に相成可申、○下略

對謁之段申入、被免候上可相止儀、是迄有來候儀、押而相止候儀不行屆候、此段は奉行中心得ニ申含候由申渡、　廿五日、帥中納言被示、非藏人困窮ニ付、被召出之節、御肴獻上御免相願候儀者、何分難仕迷惑候、何とぞ此儀は是迄之通獻上仕度由一統申ニ付、先被示候由也、先承知之段答了、　廿六日、帥中納言昨日被示、非藏人之事、攝政殿へ申入候處、倚長橋局へ御談被成、兩御所之獻上物被免候樣可被成由也、　八月三日、非藏人幷諸司輩江申渡等、議奏中五卿兩人相談書付、攝政殿江入御覽、如左、

一非藏人相續番代見習等被仰付候節、爲御禮獻上物之儀自今不及獻候、勿論兩御所江不致獻上儀ニ候得者、外ニ被持參物も可相止候、乍然奉行江者先々格式之通ニ禮物可致持參候事、

六年十月廿一日、非藏人中相願御切米御扶持米欠米惡米不相渡候樣ニ致度由願書、飯室伊賀守、庄田對馬守へ相渡、倚御藏方吟味候而、欠米惡米不相渡候樣可取計申付、願書渡置了、　七年七月廿六日、非藏人□田淡路、松尾筑後、橋本越後、松室筑前、松本伊勢、松室丹後、御扶持拜領之願差出候へ共、當時難及沙汰候、願書可指返候、仍爲心得示置之由東久世へ申入了、　九年五月六日、非藏人大賀肥後、松本志摩、松室信濃、儲君御用之節、彼御方へ可相詰、非常之節可致參勤之由議奏衆兩人列坐、綾小路宰相へ山科被申渡了、常は是迄之通、此御所勤番可致之段被申渡了、

〔大江俊矩公私雜日記〕天保二年九月九日戊午、奉願口上之覺、

今度藏人及闕候ニ付、恐入候得共、以家例相願候、右叶冥加蒙勅許候者、作後　文今年十歲相成候、此者非藏人家柞相續之儀御願申上度候、何卒以御憐愍願之通被仰付候者難有忝可奉存候、此旨御奉行樣江宜御披露賴入存候、以上、

年號支月　　　北小路近江印

番頭連名宛○中略

之、當時非藏人ト稱スル、諸社社司等、著藏人袍（細櫻剛陂）卅餘人定番候宮中、女孺代也、但稱女孺事如何之間、被稱非藏人、被召仕之後、于今同前也、後光明院など切々被召遣、出頭於御前、但御直ニ物を仰らる丶程の事は希有之事也、後西院亦以同事、而仙洞御在位之間、到今日一向不召御前、今日一位以下陪膳、雲客勤之、又切々御客之時、每度雲客勤之、雲客等頗鬱憤之事歟、但和歌御當座ナドノ時ハ、一位以下陪膳、當時仙洞藏人上北面等勤之也、

總而當時仙洞御在位以後御沙汰、後水尾院以來之風俗、一向陵夷、於善事者不及十之一、餘悉不叶人情、諸人難澀歟、今日猶以仙洞之御所中風俗、人々難義、難記之、大概朝廷衰微之基歟、

〔兼胤公記〕寶曆三年七月十八日、先日非藏人松室肥後倅出勤ニ付、松室大隅參入、諸大夫迄申候は、是迄非藏人出勤之節、爲御禮參上、輕少之者致進上候事ニ候へ共、一統困窮候間、御禮獻上物も不致候故、殿下へも不致進上候段申置候、右斷申候はゞ兼ても其譯可申儀、押而相止候儀如何候、兩人樣も兼而承知候哉之由尋給之間、兩人曾不存候、猶遂吟味可申入段申入了、　十九日、昨日攝政殿被命、非藏人一統困窮ニ付、出勤之節肴進上省略之事如何子細哉、三條中納言召寄吟味候處、番頭共兼而其段申候ニ付、參入申候樣ニ被申付候由也、大隅如何演說候哉、可被尋之段申渡、後刻被示云、大隅江被問候處、兩御所へ獻上物は致候、攝政殿以下役人江進物相斷候間、攝政殿へハ大隅參以取次諸大夫中迄宜賴存候由申置候由也、　廿一日、非藏人共貧窮ニ付、被召出之節、肴進上斷候儀、一昨日帥卿へ令吟味候處、大隅一統之御斷申入候、併肥後儀、兩御所江之獻上物は致候由攝政殿申入候處、此間之儀は不及左右、其通ニ可被閣候、困窮一統之儀ニ候間、獻上物も御斷申可然候、其段奉行衆江願書指出候樣に可取計、其上尙議奏共遂相談獻上物被免其心ニ而兩奉行江肴送候樣可然之由也、　廿四日、帥中納言召寄非藏人共、一等困窮之儀ニ候間、兩御所獻上も御斷申可然候、其段兩奉行迄相願候樣ニ可被取計候、一等ニ困窮を申立、斷申候はゞ、於攝政殿諸大夫へ

○非藏人　藤有忠（縫殿助）　源仲遠（右兵衛尉）　平忠長（五月一日補藏人）　藤孝行（左兵衛尉、正月二十二日補藏人）　藤有倫（故淳倫朝臣一男、二月補）　源行綱（右兵衛尉、五月二十日補、遷昇、十二月十二日使宣旨、二十八日遷左）　平繁茂（左兵衛尉、五月二十日遷昇、七月二十四日補藏人）　藤仲綱（八月五日昇殿、同日任左兵衛尉）

〔親長卿記〕文明十九年十一月十六日、文地（五條爲學）事、於非藏人は誠參候、近代無之、至裝束等如予申、御不審也、所詮可召進六位侍中之由可仰高辻三位（故爲親死去之後、取立文地丸之故也）之由被仰、勸修寺了、次退出、

廿一日、高辻三位（長直）來對面、申云、五條爲學可元服、仍非職之六位（六位着用裝束事）ニテ可出仕、仍著用裝束平絹指貫可著用事、尋人々意見之處、不可有子細由各申詞如此、（民部卿、本書到來、諸攝家及官外記、）人々申詞、其人數忘却、予申云、六位（秀才）可著用平絹指貫之事、先非職六位近代誰人出仕哉、又誰人著用哉、不覺悟之間、何體之衣服著用不及覺悟、無相違之由各々申、先蹤爲覺悟歟如何、申云、平只無子細之由可進申詞云云、予云、無覺悟事無子細之由可申之條難治、已著用之時有傍難之難、無覺悟申入之由可申事歟、於愚老者不知先規之由命之、及再往、只各々申詞可申同心之由頻申之、所詮予可申他行之由、其謂は人々申詞無覺悟之間、構和曲可申之條難治之間、不可同心、有此席不申勅答猥藉也、平只無相違之由可申之間承候間、他行不存知之分可被申條返答、次此等與諸攝家官外記等相語取申詞歟、故後成恩寺非職六位可著平絹指貫之由或仁尋申時、被仰返事云々、是又不審也、誰人以著用之先蹤有御返答ケルゾ、何樣於愚老不知著用之先規之間閉口了、彼卿不可說、

〔基熙公記〕元祿二年十二月十二日乙亥、未刻許、內府同道參仙洞、（○中略、靈元、）及亥刻御夜食、御酒六七獻之後各退出、窮屈窮屈、（○中略）

一諸家輩、一向平折敷也、後陽成院、後水尾院以來、非藏人爲陪膳、後水尾院、後西院、院中御振舞之時、猶以如此、（○中略）

一於御前諸家御相伴時、藏人勤陪膳、是古規也、後水尾院以後、御相伴人數多時、事遲々間、非藏人勤

非藏人

男秀才齊光任式部丞、齊光預榮爵之日、維時遷任式部權大輔、爰舉周明春受可任式部丞之運、依有父子同官忌、明春可辭所帶式部權大輔、爲維祖父之風跡、欲舉愛子於天官、幸蒙神恩、事適成就者、明年之內、令舉周奉臨時祭、又如風聞者、近日自東自西萬民子來云々、是尤神恩之深也、〇中略恐々拜白、

長保四年十二月九日

〔職原抄下〕藏人所

非藏人無員數

重代諸大夫中、未補藏人之間、先遂昇殿、此云非藏人、又云非職之者、不奉行公事、不著禁色、

〔禁秘御抄中〕藏人事

非藏人四人也、間々五人也、六人有例、不可然事也、

〔新野問答〕一藏人と申は如何樣なる儀にて候哉　答〇中略非藏人員數なく候、藏人に同じく昇殿いたし候へども、公事を奉行致不申候、此故に藏人にあらず候、此職殿上の掃除を致し、大臣に仕はれ申候、六位藏人の闕有之時、器量によりて罷成候、

〔山槐記〕永曆元年十二月三日丁未、一太政大臣被申皇大后宮少進良清望申非藏人事、大殿〇藤原伊通仰云、可申由、　院宣〇後白河曰、大殿可令計申給、　大殿仰云、件男子細委不知給、可在御定、　院宣云、可申內、〇二條　勅定云、當時非藏人三人、人數雖多、四人有其例、可依院仰云々、　今夜不能申院、明日可申也、

六日庚戌、一太政大臣被申良清內非藏人事可申內之由一日有院宣、勅定云、當時三人、雖人數多四人又有例、只在御定、此旨申院、無左右御返事、未剋歸蓬屋、

〔藏人補任〕嘉祿二年

〈藏人文章生也、〉藏人大輔雅賴宜下云々、

永曆元年十二月七日辛亥、〈被補藏人事〉藏人藤兼隆〈光經卿二男　院判官代〉　平信季〈信範二男、關白勾當、〉

治承四年四月廿二日甲辰、中宮六位進源兼補藏人、

元曆元年八月十三日己巳、今夜大宮中納言〈實宗〉加階後〈○中略〉著陣、〈○中略〉藏人源仲國從事吉書、可下大宮中納言、〈實宗〉而著陣之後退出、仍不下之、若持向里亭歟、內藏人頭雅隆朝臣候陪膳、伊賀前司賢泰、左近大夫家補、相具仲國云々、

〔親長卿記〕長享三年六月七日、參內奏改元、奉行〈宗光〉傾狀之趣同風記奏之、其次六位藏人〈六位藏人五人事〉近年人數稱四人之由被稱、治承吉御記見五人之由、仍奏此趣、爲儲儀ば懐幸事可補云々、

〔薩戒記〕嘉吉元年八月十五日、一六位藏人事、

一人可沙汰進之由仰、公有朝臣之處、家領第一在所越中今庄被召放之間、窮困無極、然而御免出仕候間、於自分奉公者不可存緩怠、於此事更不可叶、乎欲蒙御免之由申之者、抑當時藏人二人、〈定仲、政仲、〉而政仲申觸穢之由不出仕、定仲一人相扶病身雖出仕、每事如及闕如、被仰被朝臣之處不可叶云々、於于今何樣可有沙汰哉、申合關白、〈○藤原持基〉可然候樣可申沙汰者、

〔兼胤公記〕寶曆三年十二月廿一日、一六位藏人拜借金之願難及沙汰候由申渡、願書極﨟へ返了、

〔朝野群載〕〈三文筆〉熱田宮祈請男擧周明春侍中所望狀

右匡衡、賜鵠板於頴巷、促熊軾於尾州、昔泥雪窻之幽明、今仰熱田之冥助、去年神拜之次、依代々之例、已奉臨時祭、近日京上以前、致懇々誠、又奉臨時祭、是則中心有所願、秀才藏人之濫觴、起自江家、始自延喜、延喜則曾祖父伊豫權守千古朝臣、爲侍讀之間、男秀才維時爲藏人、天曆卽祖父中納言維時卿爲侍讀之間、男秀才齊光爲藏人、圓融御宇叔父左大辨齊光爲侍讀之間、男秀才定基爲藏人、今當時匡衡爲侍讀之間、男擧周爲秀才、四代相傳、家風不衰、天之福江家不亦悅乎、又維時卿辭式部大輔以

〔中右記〕長承元年九月四日、候殿下、○藤原忠通間、新藏人長重初覽吉書、年初八。歲。云々、古今未有如此例、甚見苦事也、是長輔長男、中納言長實孫也、一日補藏人也、

〔枕草子五〕めでたきもの

六位の藏人こそなをめでたけれ、いみじき君達なれども、えしもき給はぬあやをりものを心にまかせてきたる、あをいろすがたなどいとめでたきなり、所のしう、ざふしき、たゞの人の子どもなどにて、殿原の四位五位六位もつかさあるが下にうちゐて、何と見えざりしも、藏人になりぬれば、えもいはずぞあさましくめでたきや、せんじもてまいり、大饗のあまぐりのつかひなどにまいりたるを、もてなしきやうようし給ふさま、いづこなりしあまくだり人ならんとこそおぼゆれ、御むすめの女御后におはします、まだひめ君など聞ゆるも、御使にてまいりたるぞ、御文とりいるゝよりうちはじめ、しとねさし出る袖ぐちなど、あけくれ見しものともおぼえず、下がさねのしりひきちらして衞ふなるはいますこしおかしう見ゆ、みづから盃さしなどし給ふを、我心にもおぼゆらん、いみじうかしこまり、べちにゐし家の君だちをもけしきばかりこそかしこまりたれ、おなじやうにうちつれありく、うへのちかくつかはせ給ふさまなど見るは、ねたくさへこそおぼゆれ、御文かゝせ給へば、御すゞりのすみすり、御うちはなどまいり給へば、われつかふまつるに、みとせよとせばかりのほどを、なりおしく、物のいろよろしうてまじろはんはいふかひなきものなり、かうぶりえておりんことちかくならんだに、いのちよりはまさりておしかるべき事を、其御たまはりなど申てまどひけるこそ口おしけれ、昔の藏人はことしの春よりこそなきたちけれ、今の世にははしりくらべをなんする、

〔山槐記〕久壽三年○保元元年正月六日戊申、被仰下侍中二人、一人東宮非藏人大學助藤原俊光、一人新院非藏人文章得業生藤原盛業、被補藏人二人事

三月十七日及昏黒參內、今日被仰下頭辨藏人等、藏人頭右中辨雅敎、藏人平範保一院藏人、高階重章美福門院、被補頭及六位藏人事

從四位上　同　典藥助丹羽賴愛十五

〔官職秘抄下〕六位藏人正六位上　非藏人　重代者補之、雖重代放埒者不聽之、近代不然之非也、

〔職原抄下〕藏人所

六位藏人四人　重代諸大夫中不放埒有器量之輩補之、地下諸大夫多以之爲先途、雖五位已後、以藏人五位爲規模之故也、藏人者、不依年齒老少、以當參次第定上下、至于極臈者、必預巡爵、若有奉公之志者、除其籍更加末座也、六位藏人奉行禁中細々公事、朝夕御膳等事、稱之曰下臈也、四人分日令奉行故也、六位職事又聽禁色、至極臈者、著麴塵袍、是申下御服之儀也、晴時雖下臈著之、第二臈稱之差次、第四稱之新藏人也、

〔禁秘御抄中〕藏人事

員數五人、中古六人、常事也、七人有例、隨不置五位藏人　臨時敍爵、尤可止事也、公卿侍臣息幼少ナドハサモアリ、只諸大夫等子、頗臨時爵、尤無由事歟、凡望成業者、多年被越人不敍爵例也、而近比一二臈敍留、尤不可爲例事也、近代左道藏人等如浮雲之類、被補此職、生涯面目也、仍付萬事存華族作法、失禮只可然輩更不可存此趣事也、敍爵後、或月內、或次月、還昇、先規纔有兩三輩、當時家光範經二人也、藏人給御衣、只時被給ナドハ不及子細、初參之時可然人子ナドノ外ハ不給也、昔天曆御時、雅材卿給裝束、自內藏寮調進、○中略公卿侍臣子外、自家直補藏人無之、諸院宮藏人判官代也、凡補藏人道有淺深、

第一公卿侍臣子、是不及左右、　第二非藏人　第三執柄勾當　第四院藏人幷母儀藏人后六位等

第五所雜色　第六成業儒　第七所々藏人判官代

〔三代實錄八清和〕貞觀六年二月二日己未、從五位下行越後介高橋朝臣文室麻呂卒、文室者左京人、○中略年九歲事嵯峨太上天皇、敎皷琴、其伎日長、○中略仍賜文室麻呂號曰琴師、十六歲始加元服、便爲藏人。

丞藤宗光（[illegible]）予聞此事、感賀之思、誠以千廻、就中宗能明年四品之期也、今年已有此恩、家施光華、人驚耳目、朝恩之重、可喜可恐、五位藏人三人、我朝希代例也、

朱雀院（少將真筆藏人）　村上（少將藤伊尹）　一條院（左少辨高階成忠、藤説孝）　後一條院（少將源朝任、藤經通）

院（右少辨經家）　後冷泉院（少將源隆綱）　當時（少將源宗輔、兵衞佐顯雅、少將藤宗能）　已上十一人誠希代之例、面目之秋也、

感悅之餘、以女房因幡内侍雅子恐悅之旨令奏聞、

〔兵範記〕仁安三年十月廿一日己酉、御禊、（中略）酉一剋御禊了、還御御膳屋幄、秉燭之後、次第事了、戊剋還宮、裝束司留頓宮了、（八藏人五位二人平絹茜袍掖闕、躑躅下襲、○已上據著）（下略）

〔勘仲記〕弘安七年十二月廿五日己巳、今夕被行内侍所御神樂、（中略）次還御、頭中將候御劒、予（○藤原兼仲）（五位藏人一人候草鞋御廉、引直御裾事）進御草鞋、（内豎持之傳予、自所令取也）便褰御簾、予候御後、（五位藏人不取御裾事）（不取脂燭、引直御裾、五位藏人不取御裾者例也）於額間長押下給御草鞋、次入御、予出殿上、返給御草鞋於内豎了、次退出、典侍已下祿、近年無沙汰歟、

〔平戸記〕延應二年（○仁治元年）正月廿二日丁亥、今度可被行善政之由風聞、而初度除目尤可備後見、仍注付之、誠雖無殊事、業敎朝臣任民部大輔、全非善政歟、此年來藏人五位大略蟄歟任、以省輔可被行德政者、皆可被解職歟、但雖不及其儀、今度被任藏人五位之條、又可被恨也、而不憚之被任也、只如前之除目也、

〔有職問答〕二一平家物語に藏人大夫（クランドノタイフ）と稱事

御不審之由被仰出候キ、但敍爵したる仁の藏人に補し候事候歟、被仰出候キ、其ハ禁中職事など（五位ニテ藏人ニナルト名家ノ衆中ニテハ候マジキ、推量候ニハ六位ノ藏人ヲ經歷シタル人ノ五位ニ成タルヲ）（藏人五位ト世ニ稱候、其事ヤラン、此事何所ニテ候哉、物語ノ前後ニテ料簡モ候ベキカ、不見候、）の分にて候哉、地下之頭藏人の事猶又如何子細御座候哉、被仰出度候、

〔嘉永七年雲上明覽〕下藏人大夫

典藥寮家領三十二石餘（丹波氏）（梨木町）

小森典藥頭賴之朝臣　五十九

左近中將正五位下源湛（仁和四年十一月廿七日補、寬平二年二月七日敍四位、）　左近少將從五位下藤原敏行（同月廿七日補、仁和五年依病解、）　內藏助藤高階（同十月補日補）　右少辨從五位上源希（年月日補、大藏大輔、寬平五年敍四位、正五下左中辨）　平季長（寬平三年正月十九日補）　左近少將正五位下在原友于（同四月補、同四年正月七日敍四位、）　右中辨正五位下源昇（兼侍從）（寬平四年正月九日補、同五年正月十八日敍四位、）　侍從從五位下藤定國（寬平五年正月補、右衛門佐、兵部少輔、同八年正月辭、）　左近少將正五位下藤仲平（寬平五年正月十八日補、同六年正月七日敍四位、）　在弘景（同六年正月七日補、同七年八月依病解、）　左衛門佐從五位下源善（同七年八月十一日補、）　平好風（同八年三月八日補、同九年五月十七日敍四位、）

〔職事補任一條〕五位藏人

左近權少將正五位下藤伊周十四才（永延元十十七補、同二正七從四位下、）

〔職事補任白川〕五位藏人

侍從從五位下藤保實十四（承保元十一廿四補、同四正十一從四下、右少將）

〔職事補任鳥羽〕五位藏人

侍從從五位上藤實能十四（十四歲補二五位藏人一例）（天仁二正十六補、天永二正廿三兼美作守、○中略）

侍從從五位上藤成通十六（天永三正十補、永久三八十九右少將、永久六正七從四位下、）

〔職事補任崇德〕五位藏人

右近少將正五位下藤忠基十五（保安四四五補、大治元十廿一從四位下、）

〔任官勘例〕五位職事三人例　長治二年、六位藏人一人被加補也、

〔職原抄下〕藏人所　五位中又撰補三人、

〔中右記〕康和四年正月十五日、女敍位云々、執筆民部卿（俊）右大臣殿候給、從三位藤光子、（新大納言室宗內御乳母）此外別事不聞歟、被補侍中、以侍從源顯國補五位藏人、高階宗章補藏人、（丹波守爲章朝臣子、爲藏人所雜色、井院殿上人、）

〔中右記〕長治二年正月十六日、節會了後被補藏人二人、頭辨重資朝臣於殿上仰下、（左兵衛佐藤宗能、位藏人二人、衍大臣加五、式部）

〔官職秘抄下〕五位藏人　辨少納言、廷尉佐、勘解由次官、坊大進、母后、皇后大進中、公達幷重代名譽之諸大夫補之、

〔職原抄下〕藏人所

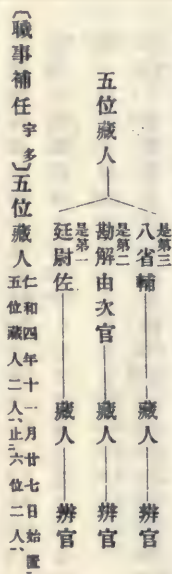
五位藏人三人（唐名仙郎或夕拜郎）　五位殿上人中、名家譜第殊撰其器用所補也、補當職者、次第昇進已爲恒規、是故以補當職已爲出身之初云々、常例先任八省輔、（治民兵等）次任勘解由次官、次任廷尉佐、次補五位藏人、次任辨官、（是順路也）補藏人之日、帶廷尉佐（是第一）勘解由次官（是第二）省輔等（是第三）以之知朝奬之淺深也、自廷尉佐補藏人兼辨官、此爲至極之朝奬、所謂三事兼帶是也、頗還中之還也、次補藏人頭、（猶帶辨、是又清撰也、）若雖稟其家非其器者、去辨任他官也、是故以頭辨爲規模、次任參議、（有其闕者、藏人頭任之、是常例也、）故也、又公達爲中少將侍從之輩、有稽古之人、望補此職、是爲表其才也、不練習舊章、不稟受口傳者、尤可有斟酌也、至于今非其才補其職者、忽招恥辱、殆失於身者也、頭及五位藏人必聽著禁色、拜賀以前被下宣旨例也、但自本聽禁色之人、更不及宣下、

〔職原抄辨疑私考上〕五位藏人三人

常例、先任八省輔、（治民兵等）次任勘解由次官、次任廷尉佐、次補五位藏人、次任辨官、（是順路也）

按、八省輔、勘解由次官、廷尉佐ハ各五位藏人ニ補スルノ三徑ヲイヘリ、然則或任八省輔、或任勘解由次官、或任廷尉佐、次補五位藏人、次補辨官ト記シ玉フベキノ誤ナランカ、如此ナレバ、前後ノ文相合ベシ、更ニ圖ニ作テ左ニシルス、

五位藏人
　八省輔（是第三）――藏人――辨官
　勘解由次官（是第二）――藏人――辨官
　廷尉佐（是第一）――藏人――辨官

〔職事補任宇多〕五位藏人（仁和四年十一月廿七日始置五位藏人二人、止六位二人、）

罪、謹言、

寛平三年二月日　散位正五位下菅原朝臣狀

〔貫首秘抄〕左府〇藤原伊通又命云、頭ハ藏人ヲ能令敎仕也、有事之時兼能々敎可進退之樣、不然者臨期不知案內、藏人失東西、將自違亂之基也、　先年故師能辨曰、經宗不敎藏人、失錯之時令責勘之、不可然之由存之歟、予案、是未練無智之六位之事也、雖六位重代幷文簿之輩、雖頭專不可敎訓、未練如泥之輩、密々令敎仕爲善歟、

〔蓬萊抄〕凡兩貫首束帶之時、雖非職雲客、著宿衣者不得候、但見相憚之氣色、若優之者强不可退去、然而當陣中公事及卿相束帶之時、宿裝束之人不可候殿上矣、

〔貫首秘抄〕殘人送頭事　予〇藤原俊憲申云、新大納言經宗頭時、予爲藏人、彼時藏人乍五人（予時五人人歟也）起橫敷送頭、範家卿于時爲五位藏人、談云、六位一兩送之、皆悉送事近代出來、尤非也、如何、被命云、全以皆悉不送、只隨便宜少々相送也、非如私從者、又指脂燭事近日或兩人指之、在頭前之由傳聞之、不然事也、一人在前也、自餘縱雖指在後、是有事之日各指脂燭之時之事也、不然之時不過一人也、予六位之時、嚴閤命給云、皆悉送頭事、雖不可然、只隨時宜有何事哉、予案、新大納言問慣頭事於內府、而皆悉可送之由彼亞相被存、依不審令尋申內府之處、被命之旨不然如何、彼亞相頭時頗被好威勢故歟、同時頭資信卿不然、送申之時於弓場殿邊必謝遣止之、必有咨揖、予雖隨近例、少々猶令留殿上、皆悉起殿上之條尤無便歟、往年事等事之次注加之、後者效之、

〔貫首秘抄〕非參議遇頭抑車事　予〇藤原俊憲問左衞門督光賴曰、地下人同抑之歟、被答曰、殿上人已然、況於地下哉トゾ思給ル、又問平三位、答同之、左衞門督我爲頭之時、或人有不抑車事、禪門命給云、藤宰相顯長頭時常曰、近日人不抑車、不當之由所歎也、

〔蓬萊抄〕凡藏人頭之外、不往反殿上奧座、又非職雲客於殿上高聲呼主殿司尤非也、

言、

永正四
四月晦日　　　　　　　　　康親 廿三歳
御房
勸修寺殿

〔基熙公記〕延寶八年正月廿一日、午剋許、右大將、勸修寺大納言、三條大納言、中御門前宰相、四人同道來云、此間頭重條朝臣奉歎狀申云、雖爲中絕有冥加被補頭、而不才之身、頗有無調法之事等、殊舊冬冷泉位階之事等、偏不勸候、罪在一身、依彼是辭職之由也、依是四人令談合、先歎狀ヲ返遣、不奏聞之由申含重條朝臣候處、得其意、於然は任各意見厚面皮可罷出候由有返答、其體一向に思ひつめたる氣色也、　七月廿三日庚戌、勸修寺大納言、三條大納言爲御使來、對面之處、仰云、頭中將重條朝臣、去年冷泉位階［　　］之後、諸人官位披露之事、一向不取次申剩其後種々有綏怠、且又去十五日著直衣冠參內、尤貫首直衣之事無御用日著之事理運歟、雖然種々不調法上、時節不可然之間、可被召官職、如何之由也、予申云、慮外重疊之上は、叡慮之旨尤可然、雖然當時武家珍重之沙汰連續、少々可有御宥免哉之由存之、內意如此、雖然難出其外之由申入了、

〔本朝文粹五辭狀〕請罷藏人頭狀　　　　　　　　菅贈太相國〔道眞〇菅原〕

右臣某伏奉昨日任藏人頭之勅旨、夢中之想、經曉猶迷、冰上之行、向春欲陷、臣謹撿近代之例、天安藤原良縄、貞觀藤原家宗、同山蔭、仁和平正範、藤原有穗、源元、當代〇宇多藤原時平、同高經、源希等、或出自潢流、或生於鼎族、其德也堪守芝蘭之種、其威也足率鴛鳳之群、未有凡夫儒士之能當此任、以遺其名者矣、臣罷官南海、歸命北辰、枯骸更華、死骨重肉、訓闕下而趍拜、分已無涯、列侍中以周旋、恩何不翅、古人云、服之不適身之災也、臣自謂、褐衣短裳、亦須愼之、況其職之乖人望乎、況其任之逸天量乎、伏願聖主陛下、停臣所掌、更選其人、勿俾跛牂妄躡仙欄、腐鼠初汙禁省而已、縱使臣凌崩浪於龍頭、臣豈敢辭命、縱使臣蹈畏途於虎尾、臣豈敢惜身、唯此非據之職、臣之所不知也、臣某誠惶誠恐、頓首々々、死罪死

可有御沙汰事、○中略

一藏人頭　光長朝臣　兼忠朝臣

二人相並可被補歟、光雅朝臣被下追討宣旨了、天下草創之時、不吉之職事也、早可被停廢之、○中略

十二月六日　賴朝在判

〔平戶記〕仁治三年三月九日辛卯、頭中將通行朝臣、今夜申拜賀、卽供奉行幸、於官廳勤仕御手水役云云、拜賀以下事、今朝所尋問也、彼朝臣無指好、只所來問也、是偏古風也、非近世之法歟、

〔花園院御記〕元亨三年十月二日辛酉、書裏傳聞、樂所別當宗平朝臣非管絃者藏。人。頭。代。々。例。也。十月又多佳例歟、

〔師守記〕曆應三年二月七日庚寅、今日右大辨國俊朝臣尋申云、右大辨超上首左大辨、補藏人頭例、聊不定云々、又雖中辨例候、可注賜云々、先例少々載御狀被注遣了、　右大辨國俊朝臣御返事案、

今春未申入畏悅存候之處、悅奉了、抑辨官超上首補藏人頭例、藤原家口卿嘉祿元年七月六日補藏人頭今日轉左中辨、超右大辨藤原成長、同光藤卿正和二年八月七日補藏人頭元右大辨超左大辨雅任朝臣、今間御不定之由奉之間、隨勘出且令注申候、猶定其例候歟、恐惶謹言、

二月七日　師、、、

〔實隆公記〕永正三年十月　職事辨官三ヶ度加級例中年

頭右大辨藤原綱光享德二正五從四下、廿從四上、三四正四下、同月　同　益光寬正二正五從四上、六十三正四下、十二一正四上、　頭左中辨藤原宣胤寬正二正五從四下、三廿五從四上、六十三正四下、　同右中辨藤原兼顯文明六正廿六從四下、二四從四上、四廿正四下、

〔康親卿貫首拜賀次第〕康親貫首所望狀案

貫首所望事、康親不顧未練之身、欲補顯要之職、且朝儀之聊爾、且傍倫之巨難、可恥可恐者乎、雖然併仰一天無偏之恩化、可歩譜代奉公之先蹤候、勅許無相違之樣、預申御沙汰候者、可爲祝著候、恐惶謹

ゼズ、其外タマ〳〵貫首ニナレリ、コレオホキナルヨロコビニアラズヤ、枚惠ノ云ヤウ、コレハ大、乘ノ親ナリ、トカク申スニヲヨバズトナム、

〔春記〕長曆三年十二月十七日癸酉、仰云、藏人頭以信長可仰下歟由可仰關白（〇藤原賴通）者、早旦參被殿申此由、被申云、承畢、但令聞女院（〇一條后上東門院藤原彰子）給可有一定者、予歸參奏此旨畢、未時許仰云、頭事申女院畢、早有補任之御返事、至于今可仰下也、此由又可觸關白者、又參又申此由（此殿自今日有大死、以章信於門外令申也）、復命云、承畢、早可被仰下者、季御讀經幷荷前使定事速難參入、可被仰他上卿之由右府（〇藤原實資）所被仰也、予申關白、命云、早奏此旨可改仰內大臣（〇藤原教通）者、又令申、有外記勘文候（祭主事）早可奏者、予即歸參、奏此旨等、仰云、以信長朝臣可補藏人頭之由可仰下者、予即仰出納爲國畢、今日人々奏慶、左大辨已下參入、奏賀、去夜依申日不奏云々、如何、資仲奏之云々、今日無陪膳、仍予陪膳畢、入夜信長參入、奏賀之藏人義綱奏畢、付簡畢、信長即退出畢、

〔吉記〕治承五年五月廿九日甲辰、午上參院（〇後白河）付泰經朝臣奏雜事（藏人頭所望奏聞事）、藏人頭所望輩事（泰通、兼光、光雅等朝臣申之、）仰云、有思食煩事所遲々也、　六月五日庚戌、次參院（〇中略）及申剋被仰出云、藏人頭事（貫首事勅問事）、清通朝臣申、爲上臈之由、若被超下臈者可敍三品云々、若量涯分歟、近則雅長卿有此恩、尤可然歟、泰通朝臣中將任日上臈也、又奉公勝傍輩之由申之、尤可然之由思食、但兩人相親之間也、泰通有抽賞者、清通可有哀憐歟、其外下臈昇進者可超數輩、中々不及沙汰歟、又維盛朝臣募申坊官勞、非無其謂、彼是難決叡慮、攝政（〇藤原基通）可被計申、又可仰合左右兩府（〇藤原經宗、兼實、）者、聊有申上旨、奉重仰退出、　十日乙卯、（小除目事）行幸以後有小任官事、右少將維盛朝臣轉右中將、（被補藏人頭事）上卿右衞門督源宰相中將執筆、件維盛朝臣被補藏人頭、藏人佐光長奉行之、

〔玉海〕文治元年十二月廿七日丙子、午剋右中辨光長朝臣持來賴朝卿書札、幷折紙等、如夢如幻、依爲珍事爲後鑒續加之、（〇中略）折紙狀云、

くにさしあひ給へりけるを、たれぞとゝひ給へるに御なのり給へば、〇行成おもひかけずおぼして、なに事に參り給へるぞとあれば、頭になしたびたれば、まいりて侍るなりとあるに、あさましとあきれてこそ、おごきもせでたち給ひたりけれ、げに思ひかけずだうりなりや、この源民部卿かく申なし給へる事をおぼし知りて、從二位のおりかとよ、こえ申給ひしかど、さらにかみにゐ給はざりき、かの殿いで給ふ日はわれやまひ申し、又ともにいで給ふ日は、むかへ座などにぞゐ給ひし、さて民部卿正二位のおりこそは、本のやうにげらうになり給ひし、

〔古事談二臣節〕行成卿不堪沈淪、將出家、俊賢〇源爲頭〇藏人頭之時、至其家制止曰、有相傳之寶物哉、行成曰、有寶劍云々、俊賢早沽却、可修祈禱、我將擧達、仍爲下﨟無官前兵衞佐備前介四位被補頭、任納言之後、皆雖爲俊賢上﨟、依思恩遂不著其上云々、

○按ズルニ、公卿補任長保三年行成ノ傳ニ據ルニ、長德元年八月廿九日藏人頭ニ補セラル、時、從四位下備後權介タリ、本書ニ備前介トアルハ卽權介ヲ云フナリ、

〔古事談二臣節〕俊賢爲五位藏人之時、中關白〇藤原道隆被聞云、誰人補頭ヲ爲公家可有忠節哉、俊賢答云、無過於俊賢者、仍爲五位頭、今度齊信得理、自必存可補之由、參內、於明義門下會俊賢、畢可被補頭云云、誰人哉云々、答云、俊賢也云々、齊信顏面退歸畢、齊信後爲藏人頭、所行甚高、召隨身於小庭仕之、每度如大將、誦鳳凰池上之月之句、徘徊禁庭、人莫不歎伏、爲神仙中人、

俊賢卿蒙中關白恩、五位而補藏人頭、越多人、思此恩、而入道殿〇藤原道長蒙內覽宣旨給日、睡眠云々、傷帥殿〇藤原伊周、道隆子、事之故云々、ソラネブリウチシテキタリ、帥內大臣事故云々、

〔續古事談二臣節〕左大辨經賴ト云人アリケリ、五十ニ及テ藏人頭ニナリタリケルヲ、アナガチニヨロコビケレバ、致惠座主ト云人イサメテ云ク、カクヨロコバルヽコソ無益ノ事トオボユレトソシリケレバ、コノ人云ヤウ、コレハヨク案ゼラレヌナリ、天下ノ人イクソバクゾ、公卿廿餘人ハ論

ちがやまにおもへば、ゑもののうはげいたづらにおいにたりといふ心なり、〇又見二十訓抄一、

〔職事補任冷泉〕藏人頭

右近中將從四位下藤元輔安和二五七補藏人

〔職事補任圓融〕藏人頭

五位職事直補二五位頭一例

右衞門佐從五位上藤顯光天延二十五補、元五位藏人、

〔小右記〕長和四年十月十日丁亥、早旦資平來云、加階事、昨日以二新源中納言一達二左相府一〇藤原道長了、氣色頗宜者、傍頭兼綱申二加階一、仍所レ申也、亦近代爲二藏人頭一之者、無二指事一敍二正四位下一、件例始レ自二大宮院御宇一、多有二此例一、今以二彼例一兼綱所レ申、仍資平同所レ申也、密々云々、主上〇三條被レ仰云、兼綱給二加階一者、同可レ賜二資平一者、

廿二日己亥、藏人頭二人兼綱資平敍二正四位下一、臨時朝恩歟、

〔大鏡五太政大臣伊尹〕この侍從大納言殿〇行成こそ、びごのすけとて、まだ地下におはせし時、藏人頭になり給ふなれ、例いとめづらしきことよな、其比は源民部卿殿〇俊賢は〇註略職事にておはしますに、かんだちめになり給ひければ、一條院此つぎには又たれかなるべきとはせ給ひければ、ゆきなりなんまかりなるべき人に候とさうせさせ給ひけるを、地下のものはいかゞあるべからんとの給はせければ、いとやん事なきものに候、地下などおぼしはゞからせ給ふまじ、ゆくすゑにもおほやけになに事にもつかまつらんに、たへたるものになん、かくやうなる人を御らんじわかぬはよのためあしき事に侍り、せんあくをわきまへおはしませばこそ、人も心づかひはつかうまつれ、このきはになさせ給はざらんはいとをしき事にこそさふらはめと申させたまひければ、だうりの事といひながらなり給ひにしぞかし、おほかたむかしは、さきの頭の擧によりて、後の頭はなることにて侍りしなり、されば殿上にわれなるべしなど、さだのぶの民部卿中將にておはせしおり、おもひ給へりける、此人はこよひときゝてまいり給へるに、いづこもとか

けしきたがひたることもおはせで、すぎ給けるに、心よからぬ御けしきのみえければ、あやしくおそれおぼしてこもりゐ給へりけるほどに、めしありければいそぎまゐりておはしけるに、としごろはおろかならずたのみてすぐしつるに、くちをしきことは藤原雅材といふ學生のつくりたるふみの、いとほしみあるべかりけるをば、など藏人になるべきよしをばそうせざりけるぞ、いとたのむかひなくとおほせられければ、ことわり申限りなくて、やがておほせくだされけるに、みくらのことねり家をたづねて、かよふ所ありときゝて、その所にいたりて、くら人になりたるよしつげゝれば、そのいへあるじのむすめのをとこ、所雜色なりけるが、藏人にのぞみかけけるをりふしにて、わがなりぬるとよろこびて、祿など饗應せむれうに、にはかにしたしきゆかりどもよびていとなみけるほどに、ことねり、雜色どのにはおはせず、秀才殿〇雅材のならせ給へるなりといひければ、あやしくなりて、いへあるじいかなることぞとたづねけるに、ざうじきがめのあねかをとうとかなる女房のまかなひなどしけるを、この秀才しのびてかよひつゝつぼねにすみわたりけるを、かゝる人こそおはすれど、いへの女どもいひければ、よもそれは藏人になるべきものにはあらじ、ひがことならむといひければ、ことねり、その人なりといひければ、雜色もいへあるじもはぢがましくなりて、かゝるものかよふよりかゝることはいでくるぞとて、よのうちにそのつぼねのしのびづまをおひ出してけり、そのことをいかでかくものうへまできこしめしつゞけゝん、いとほしきことかな、さてはいでつかまつらんに、よそひのしかるべきもかなひがたくやあらんとて、くらづかさにおほせられて、くらのかみとゝのへて、さまぐ\のあまの羽衣たまはりてぞ、まゐりつかへける、そのつくりたりける詩は、釋奠とかに、つることゝのつのさはになくといふ題の序をかきたりけるとぞことばをばえおぼえ侍らず、その心は、めぐりかけらんことをよもぎがしまにのぞめば、かすみのそでいまだあはず、ひく人やあるとあさ

参議正四位下巨勢野足

弘仁元年三月十日補二藏人頭一、頭始也、冬嗣亦補也、

〔職事補任 嵯峨〕藏人頭

左衛門督従四位上巨勢野足 弘仁元年三月十日補、六十二歳、九月十一日任二参議一、 右衛門督従四位下藤原冬嗣 同日補、中務大輔、春宮大夫、同二年正月任二参議一、 左近少将従五位上藤三守 弘仁二年二月廿七日補、内藏頭、春宮亮、同七年三月任二参議一、 左少辨従五位下良岑安世 同日補、左衛門権佐、右馬頭、左兵衛督、左大辨、三月任二参議一、 皇后宮大夫従四位上藤貞嗣 弘仁七年補、五十七歳、同十年三月任二参議一、 中務大輔正五位下眞世王 同日補、卅歳、同十二年正月任二参議一、従四位下、左京大夫、 右近少将正五位下橘常主 弘仁十一年正月補、式部少輔、修理大夫、左少辨、中務大輔、同十三年三月任二参議一、式部大輔、従四位下、 右中辨従五位下南淵永川 弘仁十二年正月補、同十三年解、 右大辨従四位下藤道雄 弘仁十三年三月補、十四年正月任二参議一、 左衛門督従四位下橘氏公 同三月日補、右近中將、同十四年正月解、従四位上、右近中將、 佐伯永繼 同十四年正月補、同年四十七、止レ頭、依レ議位一、 中務大輔従四位下朝野鹿取 同日補、止レ頭、同前、

〔公卿補任 淳和〕天長十年 癸丑

参議従四位上朝野鹿取

弘仁元年三月十日補二藏人一、同二年正月七日従五位下、廿八日頭、帝○嵯峨昔在藩之日侍講也、

〔標注職原抄 下本〕鹿取、先に六位藏人になりて、かく直に頭にすゝめる、殊恩に依る事にはあれど、實は藏人所を置れて程もなく、いまだ規則よく定まらざるゆゑなり、

〔職事補任 仁明〕藏人頭

右近少将従五位下良岑宗貞 嘉祥二年正月補、三年三月天皇崩、出家、

〔文徳實録 一〕嘉祥三年三月丙午、左近衛少将従五位上良岑朝臣宗貞出家爲レ僧、宗貞先皇之寵臣也、先皇崩後、哀慕無レ已、自歸二佛理一、以求二報恩一、時人愍焉、

〔續世繼 九 蘆田鶴〕村上の御時、枇杷の大納言延光、藏人頭にて御おぼえにおはしけるに、すこしも御

網藏人ハ事モ疎也、夕郎貫首ヲ經テ、正二位大納言ニ至リ給ヘリ、是偏ニ母賀茂大明神ニ志運給ヒケル故也、又入道ノ角去難ク被思ケルモ、神明ノ御利生トゾ申ケル、

〔西宮記臨時一〕諸宣旨

藏人頭以下事　所別當、於御前定之下藏人、藏人仰出納續宣旨書、(舊例、下宣旨左近陣、或內侍宣、)

〔官職秘抄下〕藏人頭(令外官)　近衞司辨官清撰其人、諸大夫爲辨官者補之者、御乳母夫并子坊官等也、而爲隆非此三始而補之、

〔職原抄下〕藏人所　頭二人(稱貫首)　四位殿上人中、清撰之職也、辨方一人、近衞司方一人補之、常例也、凡頭者、當職之時不依位次、著諸侍臣之上、有參議闕者必任之、仍古來爲重職、又奉行大小公事之間、非器無才之輩不能競望者也、以之思之、雖末代可謂清撰歟、昔東三條攝政(兼家公)爲藏人頭、敍三位、(帶中將)後任中納言、猶爲藏人頭、是希代之例也、

〔本朝世紀〕康保四年六月十日丁卯、又被定補藏人頭以下殿上人等、(頭左京大夫藤兼家)

〔公卿補任冷泉〕安和二年(己巳)

中納言兼帶藏人頭例

中納言從三位藤兼家(二月七日任、元三位中將、不經參議、同日兼春宮大夫、左近中將藏人頭等如元、四月十一日去藏人頭、同月日勅授帶劍、)

〔新野問答〕一藏人と申は如何樣なる義にて候哉　答、(中略)○藏人の別當は左大臣の位にて、公卿の至極規模といたし候職にて候、凡殿上の事は、此頭已下の職事奉行する也、藏人頭二人、四位殿上人之中、器量を撰び任申候、大辨之內一人、(是を頭の辨と申候)中將の內五位藏人三人當職に補候へば、次第の昇進無滯、辨官にうつり頭に成參議に至り申候、當職より廷尉の佐勘解由次官八省の大少輔を兼帶いたし候、頭及五位の藏人共に禁色を被免候、

〔帝王編年記十二嵯峨〕弘仁元年三月、始定置藏人頭、(巨勢野足、藤原冬嗣、)

〔公卿補任嵯峨〕大同五年(庚寅○弘仁元年)

乳母也、自少年時盛會風雲、補夕郎預榮爵、

○按ズルニ、夕郎、五代拜賀次第ト云フ書ニ、藏人藤原親長ノ奥書アリテ、文安三年二月廿三日、親長夕郎。拜賀之時、備龜鏡畢トモ云ヘリ、

〔漢官舊儀上〕黃門郎屬黃門令、日暮入對青鎖門拜、名曰夕郎、

別當

〔有職問答二〕一藏人所別當事

左大臣多分補之候、大臣任じ給ふ、是禁中本奉行也と被仰出候畢、其分候哉、藏人方事存知之由候也

〔西宮記臨時二〕藏人頭以下事

所別當上卿奉勅、於御前定之、以定文給藏人、藏人給官之後、有宣旨了、還補、或頭於御前定申、仍仰出納、以内侍宣書云々、

〔職原抄下〕藏人所

別當　爲公卿第一之人補之、世俗稱一人者執柄也、一人一所稱之、於禁中者殿稱之、衆人殿下稱之、自往昔無異儀、稱一上者執柄之外第一大臣也、當所別當一上所補也、是執柄依執天下之政、無其暇、仍官中諸公事併與奪次大臣之故、以次人爲一上也、殿上事准之可知之、

〔公卿補任宇多〕寬平九年丁巳

大納言從三位藤時平七月七日爲藏人所別當、

〔小右記〕長和五年二月廿七日壬寅、資平告送云、昨日所々別當定了、以右大臣○藤原顯光爲藏人所別當、

藏人頭

〔設艸小言五〕藏人頭　コレバカリ頭ヲトウトヨム、兩頭ト云、藏人頭ハ二人アルユヘナリ、

〔拾芥抄中本官位唐名〕藏人頭貫首。

〔書言字考節用集三官位〕貫首タハンジユ斥藏人頭云貫首附、以爲殿上人上首故、又山門座主曰貫首、是亦以爲三千大衆統領、

〔源平盛衰記二十六〕平家東國發向幷邦綱卿薨去同思慮賢事

邦綱ハ、藏人頭宰相中納言春宮大夫兼官兼職ヲ經テ終ニ正二位大納言ニ至リ給ヒケリ、○中略邦

〔簾中抄下禁中〕藏人所　別當一人、頭二人、　藏人八人（五位二人或三人、六位六人或五人、）これ皆職事なり、

〔拾芥抄中本官位唐名〕藏人（貫首、頭、仙籍、仙郎、夕拜、夕郎、珥貂、含鶏侍中、或前疑、貫首名、後承、或侍中、常伯、中渦、拜郎、）

〔續本朝往生傳〕大江擧周朝臣者、式部大輔匡衡朝臣第二子也、射鵠之後、東三條行幸之日、作文爲序者、深催叡感、五位藏人雅通、依本家子孫賞敍四位之替被補侍中、文道炳然之光華也、

〔和漢朗詠集下雜〕慶賀

吏部侍郎職侍中、著緋初出紫微宮、（賛在衡、正通、）

〔唐六典八門下省〕侍中二人正三品

漢書百官表云、侍中皆加官所加、或列侯將軍卿大夫無員、多至四（〇四、漢書及通典作數、）十人、得入禁中諸曹、受尚書事、皆秦制、〇中略

侍中之職、掌出納帝命、緝熙皇極、總典吏職、贊相禮儀、以和萬邦、以弼庶務、所謂佐天子而統大政者也、凡軍國之務、與中書令參而總焉、坐而論之、擧而行之、此其大較也、凡下之通于上、其制有六、一曰奏抄、〇註略　二曰奏彈、〇註略　三曰露布、〇註略　四曰議、〇註略　五曰表、六曰狀、〇中略　皆審署申覆而施行焉、〇註略

凡法駕行幸則負寶以從、〇註略　大朝會大祭祀、則版奏中嚴外辦、以爲出入之節、與駕還宮、則請解嚴、所以告禮成也、凡大祭祀皇帝制齋、既朝則請就齋室、將奠則奉玉、〇註略　若祼宗廟則進瓚而贊酌鬱酒以祼、既祼則贊酌醴齋、其餘如祭神祇之禮、籍田則奉耒以贊事、〇註略

凡諸侯王及四夷之君長朝見、則承詔而勞問之、臨軒命使、冊后及太子、則承詔以命之、〇註略

凡制勅慰問外方之臣、及徵召者、則監其封題、若發驛遣使、則給其傳符、以通天下之信、凡官爵廢置、刑政損益、皆授之於記事之官、既書於策、則監其記注焉、凡文武職事六品以下所司進擬、則量其階資、校其材用、以審定之、若擬職不當、隨其便屈退而量焉、

〔續本朝往生傳〕但馬守源章任朝臣者、近江守高雅朝臣之第二子也、母從三位藤原基子、後一條院御

職員

ぬ人のかく記さむは、誤ながらもことわりなる事なりけり、後三條天皇の御代に、攝關の權を挑むとて、記錄所を置れたるに合せて、藏人所の始まれる意をも類推すべし、かくて世中穩になりにける後も、猶相かはらず、この藏人所に、機密の政をも掌て、其職全く少納言侍從の如く、近習宣傳をむねとするより、いつとなく、主上の大御身にかゝれる事をば皆あづかり奉るやうになりて、文書をのみ置べき御藏に、內藏寮より取わけて、御衣服御調度等をも納むる事とはなりにけらし、されば武家ざまに准ていへば、內藏寮は大納戶の如く、藏人所は小納戶のごとし、今昔物語に、此糸をば藏人所に納られて、天皇の御服に織るなり、又續世繼物語に、をさなくおはしますみかどなど、常には五節の帳臺の試にも、出させ給ふ事まれなるに、讚岐の帝、おとなにならせたまひて、始て出させ給ひしに、御指貫は何のもんといふ事も、納殿の藏人おぼつかなくおもへるに、納殿卽校書殿の事なり、此殿の左右に塗籠あり、これいはゆる御倉なり、また今昔物語に、納殿の砂金百兩奉れとありければ、藏人取てまゐりたるを、また紫式部日記に、納殿にある御衣とり出させて、此人にたまふ、また立坊部類記に、寬仁元年八月廿三日、被渡壺切御劍於東宮、藏人範永持出自納殿、於殿上口授右近少將公成朝臣、兼東宮權亮公成令持御藏小舍人云々などある、皆藏人所に、御調度御衣服等を掌る證にて、侍中群要に、往反御倉前之人必下裾とある、下裾は致敬なり、服御の物を納め置るゝ御倉の前なるゆゑに、ゐやまひてかくの如し、されば御倉を掌るを名にして藏人とはいへるなり、但掌る處の心ばへは、古今に沿革ある事上件の如し、

〔西宮記臨時五〕一所々事　藏人所（中略）有別當、大臣頭藏人、八人出納、小舍人、有熟食年官、進月奏、

〔伊呂波字類抄久官職〕藏人所

頭　五位　六位　非職　雜色　所衆　出納　小舍人

〔拾芥抄中末宮城〕藏人所在校書殿、有別當、左大臣一人、頭二人、預二人、出納三人、小舍人六人、有熟食年官、進月奏、或云、衆十二人、有內官、或所衆廿二人、瀧口廿二人、或藏人八人、五位二人、或三人、六位六人、或五人、是皆職事也、

ハテヌレバ、ソノノチゾ舞樂御遊ナドモアリケル、君ノ御心ニハ、民ノ訴ヘヲ聞召テ御コトワリアルヨリ外ノ大事ナカリケリ、徵旦取衣領會者少トイフ本文是ヨリオコレル事ナリ、アサマツリゴトニイヅル事ハ、イマダクラキ程ナレバ、衣ノクビヲサグリウル事カタシトイフナリ、嵯峨天皇ヨリコノカタ、此事廢レニケリ、此君殊ノ外ニ放逸ニシテ、政ヲ御心ニ入レ給ハズ、サレドモ、ソノ儀式ハ猶アリケリ、五位ノ藏人二人ヲサシテ、御倚子ノカタハラニスヘテ、憂ヲキカシメ、群議ヲ聞シメテ、後ニ聞召テ成敗セサセ給ヒケリ、コレ今ノ職事ノハジメナリ、嵯峨ノ別業ナドヘ常ニオハシマシケルユヘニ、御イトマナクシテ、自ラ朝政ニアハセ給ハザリケルナリ、

〔標注職原抄別記下〕此文いと不審し、其故は、嵯峨天皇の卽位は、大同四年四月十三日〈○註略〉にて、藏人所を置れたるは、其翌年の三月十日の事にしあれば、卽位より纔一年ばかりの間なり、且太上天皇仙洞におはしまして、内には藥子の艶妻あり、外には仲成の奸臣あり、つひに今年の九月に甚しき亂出來たるばかりの世なれば、嵯峨の別業におはしまして、萬機をば職事に委ね放逸に過させ給ふなどやうの事あるべくもあらじ、按ふに藏人所を置れしは、太上天皇藥子仲成を用給て、政を院中にて聞し召すに、よこさまなる事ども多く、民の寃枉をうくるが少からで、既に厲階をも引出んとせし比なるゆゑに、位に卽せ給て、卽この所を置き、年來の虐政を正さむとし給へるにやあらむ、機密の字に心を付べし、さるは當代の御事なれば、太政官にて行せ給ふべきを、かく近臣にのみ與らしめたまへるは、大臣の内にも、おのづから心を合せたる人のあらむもはかりがたきを憚らせ給ひての事ならん歟、〈○註略〉然るを嵯峨天皇の放逸より置れたるやうに、續古事談にいへるは、後代に至て、藏人の勢ひ強くなり、殆太政官をも凌ぐばかりに見ゆめるより、おのづから異朝の宦者と同じやうに譏て、准后すら、なほ此抄に、擬侍中内侍之職歟〈侍中は大納言の事にて、藏人にあつるは違へり、○中略〉とのたまへるばかりなれば、故實を委くたどら

創置

簡ハ妻戸ノ内ニ候、次々ハ次間ニ候、藏人夜ハシソクヲ執テ頭ニ隨也、

〔江家次第十七〕御元服

勸學院小學生等（寛仁六人）同加元服參入、（院別當辨奏其由、暫令候藏人所、往年候客座、近代著所座、）

〔左經記〕万壽三年三月廿八日、藏人所清信、穀倉院預久頼、修理屬正弘等、（依仁王會堂莊嚴事）依關白殿（○藤原頼通）仰、候客座、依仁王會堂粧嚴疎略也、

〔拾芥抄中末宮城〕納殿（累代御物納之、在宜陽殿、恒例御物納藏人所綾綺殿、紙御屛風在仁壽殿、頭藏人雜色爲預、以藏人、雜色、出納小舍人爲預人、進月奏）

〔西宮記正月〕一、八日、大元御修法所請雜香事也（見式）

丁子香十兩、白檀香十兩、淺香十兩、薫陸香十兩、安息香十兩、百和香十兩、青木香十兩、苓陵香十兩、蘇二壺、蜜一升、（已上減定所給之法也、內藏寮以件文付藏人、藏人從納殿給之、）

〔侍中群要五〕禮節　往反御倉前之人、必下裾、不往反小舍人座上、

〔源氏物語三十四若菜〕帝春宮を初たてまつりて、心ぐるしくきこしめしつゝ、藏人所、おさめ殿のから物どもおほく奉らせ給へり、

〔皇年代略記嵯峨〕（首書）弘仁元年三月十日、始置殿上侍臣藏人所、

〔續古事談王道后宮〕昔平城天皇ノ御時マデハ、此國ニモアサマツリゴトシ給ヒケリ、ソノ儀式、イマダホノ〴〵ノホドニ、主上イデヽ南面ニオハシマス、群臣百寮、オノ〴〵座ニ攝ス、四方ノ訴人サウナク、內裏ヘ參リ集テ、高キ机ノ上ニウレヘ文ノ箱トイフ物ヲ置レタリケレバ、アヤシノ民百姓マデ申ブミヲモテマキリテ、此箱ニイル、史外記辨少納言ナド次第ニトリアゲテコレヲヨミ申ス、群臣オノ〴〵コレヲ評定シ、主上マノアタリ勅定ヲ下サル、訴モシ左右ニアレバ、即チメシトハル、片々ノモノ當時ナヽレバ、退キテ問ルベキ由ヲ仰ス、申文多クシテ事ノ外ニ日タケヌレバ、ヤガテ其座ニテ供御ヲマイラス、諸卿御膳ヲオロシテ、オノ〴〵コレヲ食フ、ソノ政モシ、シ

〔河海抄桐壺〕藏人所は按書殿の北面也

〔標注職原抄下本〕藏人所は按書殿にあり、藏人とは御藏を掌る人といふこと也、按書殿は字面の如く書を按するの殿の義にて、侍臣に仰て書籍を按合せしめ、そを藏め置せ玉ふ所也、故にこの殿の內に納殿とてあり、書を納る庫の事なり、されば納殿をやがて御倉ともいふ、〇中略かく始めは、書籍を藏る所と定られたりけめど、後にやう〳〵服御の器物をも多くこゝに置せ玉ひ、御用の度ごとに藏人に仰て持はこばせ玉へば、內藏寮の別所といはんが如し、

〔夕拜備急至要抄下〕一內裏修理　修理職〇中略　藏人町〇中略　本所藏人所

〔侍中群要八〕諸試　所衆等試事

家奉試者、在座幷宿所、不放他行、藏人授勅題云、其剋以前可獻云々、獻後藏人到時刻取集奏之、但藏人著所西座、他人不著此座、

〔西宮記臨時二〕藏人所講書事

天曆三年三月卅日癸酉、此日於藏人所有尙書竟宴、〇中略藏人所座在宿所內、垂帳

〔大內裏圖考證十二上按書殿〕藏人所　宿所按、或以藏人町稱宿所、

〔侍中群要五〕禮節　不往反小舍人座上、西橋

〔禁腋秘抄〕清涼殿

末ノ柱ヨリ按書殿ノ後ニ綱ヲ張テ鈴ヲ付、鈴ノ綱ト云、藏人小舍人ヲ召ス時ナラス、〇中略小板敷沓脫ノ間ノ門ヲ神仙門ト云、此門ノ外ニ出納、小舍人候也、小板敷ノ前ヲ小庭ト云、爰ニハ藏人ツバキハキナドスルコトナシ、東ニ向タル戶ヲ無名門ト云、諸ノ奏、公卿ノ慶申ナド此門ノ戶ニテ申也、小板敷ニ向テ下侍二間アリ、東ハ妻戶ナリ、次一間シトミ也、二ニワリテ西ハ下テ御物棚ヲ其前ニ立、傍ニ時ノ札立タリ、小庭ノトウロ、晝ハ御物棚ノ傍ニ置、藏人頭、小板敷ニ候時ニ、藏人曲

藏人ハ靑色ノ裝束ヲ著スル例ニシテ、頭幷ニ五位藏人ハ必ズ麴色ヲ聽サレ、六位亦多ク之ヲ聽サル、而シテ六位ノ極﨟ハ、節會幷ニ主上著御ノ時ノ外ハ、麴塵ノ袍ヲ著スルヲ得、是御服ヲ賜ハルニ本ヅクト云フ、

〔運步色葉集久〕藏人内豎者唐名侍中

〔易林本節用集久官位〕藏人クラフト侍中

〔空穗物語祭の使〕つかさの御みぞひつとをにいれ、くら人所の御くだ物ひつとをにつみ、大將にたてまつり給はんとするに、〇下略

〔有職袖中抄〕藏人所　藏人ノ集會スル所也、拾芥抄ニ校書殿ニアリト云々、校書殿ハ月花門北七間面ト云々、藏人ハ小性ノ如キモノ也、天子近習ノ職也、

〔有職問答二〕一藏人事

武家に拜任無其謂候歟、不得其意任仁も候、犬追物などの時、撿見よばゝり候に、大路くらんど、是モ不審候、春宮御座ナキ時ハ、有ベカラザル官ニテ候、平家ナドニモ、ケ様ノコエニヒカレテカタリ候哉、ヨビ候時ハ、クラウド尤可然候、呼候、くろうど能候由龍翔院殿〇三條公敦など被仰候キ、如何、

〔倭訓栞前編久八〕くらんど　藏人をよめり、くらうどの轉也、俗にくらうづともいへり、

〔新野問答〕一藏人と申は如何樣なる義にて候哉　答、藏人と申は、かくす事を知る人と申いはれにて候、其譯は、上古には、天子、記錄所へ出御ありて、天下の政務御裁斷有之故、嵯峨天皇弘仁元年に初て此職を御側に被召仕、大政官の政を取次を被仰付候、叡慮の趣を官人へ被仰下、官人の存寄をも此職事人を以御聞被成候故、細密の義内事をも存知候故、かくすをも知る人にて候、かくすと申義意味有之候、ものを覆隱す心持にては無御座候、唯内々の事を取計ふ義にて候、玉體に非常の事有之時の備の心も有之候、夫故かくし人の心も有之候、

〔西宮記臨時五〕一所々事　藏人所在校書殿

ト云フ、以上頭及ビ五位六位ノ藏人ヲ職事ト云フ、

候人ハ、殿上ニ在リテ、藏人ト同ジク結番シ、御膳ニ侍ヘシ、及ビ宿直スルモノニテ、或ハ其位階頭ノ上ニ在ルモノアリ、醫師、陰陽師ノ類ノ特ニ殿上ノ祗候ヲ聽サルヽモノモ亦候人ナルベシ、非藏人ハ、往時ニアリテハ、四人若シクハ六人アリテ、六位中ノ子ヨリ選任セシガ、德川時代ニアリテハ、諸社ノ社司等、藏人ノ袍ヲ著シテ、宮中ニ伺候シ、古ノ女孺代ヲ勤メテ、之ヲ非藏人ト稱シ、後ニハ其數二百人ニモ及ビ、屢〻困窮ヲ訴ヘテ、朝廷ヲ煩ハシヽコトアリキ、而シテ以上頭ヨリ非藏人マデハ、宣下ノ職ナリ、雜色ハ、本員八人ニシテ、公卿ノ子孫幷ニ諸大夫ヲ以テ之ニ任ズル例ナリシモ、中世以來良家ノ子、若シクハ僧ノ子等モ之ニ任ズルコトト爲レリ、而シテ是ヨリ出デヽ藏人トナルモノ多シ、所衆ハ、藏人所衆ノ略稱ナリ、五位六位ノ侍之ニ補ス、古ハ總員二十人アレドモ、有官ハ一人ニ過ギズ、雜役ニ從フノ外昇殿セザル例ナリ、出納ハ古ヘ四人アリ、藏人所ノ出納ヲ司ル、小舍人ハ、一ニ御藏小舍人ト云フ、其數六人、或ハ十二人アリ、出納ト共ニ往時ハ極メテ微賤ノ職ナリシモ、中世以降專ラ六位藏人ノ所役ヲ行ヒテ、美服ヲ著ケ、又衞府ノ官ヲ望ミ、老懸ヲ懸ケ、殿上ノ判官ノ如クナリシト云フ、瀧口ハ、武人ナリ、藏人所ノ瀧口ニ直スルヲ以テ名ヅク、定員二十人ニシテ、所衆ト同ジク昇殿スルヲ得ズ、專ラ射藝ヲ以テ仕フルモノナレドモ、或ハ御船幷ニ遠所ノ勅使、其他齋宮等ノ公役ニ從ヒ、或ハ草木ヲ移植スル等ノ雜役ヨリ、捕縛ノ事ニマデ從フナリ、

藏人所ハ、以上ノ諸員、遞ニ宿直シ、御衣御膳ヨリ、凡テノ御起居ノ事ニ至ルマデ供奉セザルハナク、進奏傳宣及ビ除目ノ事ニ從ヒ、諸節會ノ儀式ヲ掌リ、又御使ヲ奉ジテ遠近ニ往來シ、殿上ノ糾彈、召籤、侍臣ノ名謁、瀧口ノ問籍等、凡テ殿上ニ於ケル指油、下格子ノ末ニ至ルマデ、大抵之ニ關セザルモノナシ、

古事類苑

官位部二十八

令制官職二十四

藏人所上

藏人所ハ、嵯峨天皇ノ弘仁元年始テ置ク所ニシテ、別當、頭、五位藏人、六位藏人、非藏人、候人、雜色、所衆、出納、小舍人、及ビ瀧口等ノ職員アリ、

別當ハ、宇多天皇ノ寛平九年始テ置ク所ニシテ、當時大納言藤原時平ヲ以テ之ニ補ス、爾後常ニ攝關ニ亞ゲル人ヲ以テ之ニ補スルノ例ナリ、頭ハ二人アリ、多クハ四位ノ人ニシテ、近衞中將ヲ以テ兼ヌルモノヲ頭中將ト云ヒ、大中辨官ヲ以テ兼ヌルモノヲ頭辨ト云ヒ、特ニ頭辨ヲ以テ淸選トス、頭ハ殿上重要ノ職ニシテ、公卿ノ昇殿スルモノ皆其指揮ヲ受ク、故ニ又貫首トモ稱ス、五位、六位ノ藏人ハ、時ニ其人員ニ增減アレドモ、大抵五位三人、六位四人ナリ、五位藏人ハ五位ノ殿上人中ニ就キテ、名家譜第ノ者ヲ選ビテ之ヲ用キル、而シテ檢非違使ノ佐、及ビ辨官ヲ兼ヌルモノヲ三事兼帶ト稱シテ、殊ニ榮譽ト爲ス、六位藏人ハ、重代ナル諸大夫ノ中ヨリ選任シ、其座次ハ位階年齒ヲ論ゼズ、補任ノ新舊ニ依リテ、極臈、差次、氏藏人、新藏人ト名ヅク、氏藏人ハ姓氏ヲ以テ稱スルナリ、古ハ其在任都合六年ノ後ニ、輪次ニ五位ニ敍ス、之ヲ巡爵ト云フ、藏人ハ六位ト雖モ皆昇殿スルモノナリ、然ルニ巡爵ニ預ルトキハ、直ニ進ミテ五位藏人トナルコトヲ得ザレバ、藏人ノ職ヲ去リ、殿上ヲ辭セザルヲ得ズ、故ニ多ク極臈ヨリ新藏人ニ降ル、之ヲ鶴退ト云フ、而シテ敍爵ノ後、特ニ昇殿ヲ聽サルヽヲ還昇

御公事等可致其沙汰、若猶令違背寺命、有不法者、付職可預御沙汰者也、仍爲後日請文之狀如件、

寛正四年三月十七日

總追補司式部

盛吉花押

安者無一通支證、爲僧慮之沙汰上者、於彼職者任先例光安可令進退領掌者也、仍下知如件、

延文三年十月八日

〔東寺百合古文書三十一〕新見庄公文幷總追捕使兩職事

右兩職猶口備中守被補任畢、凡當庄所務、敵方多治部在所近隣之間、旁以非無怖畏、仍且加代官扶持且可致庄家警固之由就望申、尤爲肝要歟之間、被補子息鶴壽丸畢、

補任　東寺領備中國新見庄領家方公文總追捕使兩職事

藤原鶴壽丸

右人爲彼兩職、全知行御公事以下課役、守先例可致其沙汰、庄家宜承知、敢勿令違失、故以下、

明德元年十一月日　公文法眼在判

〔東寺百合古文書ロノ自一至二十九〕新見庄總追捕司幷公文職補任狀案寛正四三十七

補任　東寺領備中國新見庄領家方總追捕司職事

福本式部尉盛吉

右以彼人所補件職也、御年貢幷恒例臨時御公事等任先例可致其沙汰者、庄家宜承知、敢勿違失、故以下、

寛正四年三月十七日　公文上座實俊判

寺主元秀判

年預法印權大僧都判

公文補任狀案文言同前

補任東寺領等〻〻公文職事

宮田帶刀家高

〔東寺百合古文書ロノ自一至二十九〕謹請申　東寺御領備中國新見庄領家御方總追捕司職事

右爲御寺恩被下補任之條、忝畏存處也、仍奉對寺家彌抽忠節、不存不忠不義、御年貢幷恒例臨時之

致新儀狼藉之條、甚無道也、自今以後、二人代官內、南方一人、北方一人定置之、得分又任本注文、無增減可有沙汰也、此上若不拘成敗違犯者、殊可被處過怠之狀依仰下知如件、

承久四年四月五日

陸奧守平（花押○北條義時）

〔但馬國大田文〕太田太郞左衞門尉政頼弘安八年之注進

近衞南殿御領 伊田莊 廿八丁（地頭太田左衞門太郞政頼○中略）

同莊總追捕使田一丁四反（總追捕使中務太郞關東給○中略）

法勝寺領領家押小路中納言吉家、公文小谷太郞家茂御家人、

糸井莊七十四丁二反三百步、總追捕使善法橋榮能、

〔押田氏所藏文書〕鎌倉幕府執權裁許狀

最勝光院領備前國長田庄雜掌與當庄加茂鄕內中村新山下加茂地頭式部孫右衞門尉賴泰、鶴峰、河內村地頭式部左衞門二郞光藤、紙工保地頭式部六郞光高相論所務條

一庄官職（公文、案主、總追捕使、押領使、諸社神主、）事

右六波羅注進訴陳狀具書等、子細雖多、所詮當庄所務條々、有其沙汰、弘長二年十月廿五日被裁許之處、於庄官職者、子細不分明、可尋成敗之由被仰六波羅畢、○中略 但賴泰等爲本地頭跡、令庄務之上者、彼所職事一向難稱本所進止、然則領家成任補可從兩方之所勘焉、○中略

以前條々、依鎌倉殿仰下知如件、

弘安十年四月十九日

相模守平朝臣（花押○北條貞時）

陸奧守平朝臣（花押○北條宣時）

〔徵古文府一〕窪田御厨二分一方總追捕使左衞門二郞光安申當職事

右所職者、光安之伯父新三郞盛安、依令訴訟、先日加下知訖、雖然光安支申之間、尋究是非之處、於盛

莊園總追捕使

應永三年八月日　案主散位三田久千花押　物申占部常義花押　和田權祝大中臣家
貞花押　釜田權祝中臣宗政花押　押領使大中臣口景花押　總追捕使大中臣家
景花押　檢非違使大中臣忠繼花押　大祝正六位上占部宿禰政常花押　大禰宜
正六位上中臣朝臣宗親花押　大宮司散位大中臣朝臣則重花押

〔吾妻鏡六〕文治二年正月十一日庚寅、高瀨庄事、不可交武家沙汰之由、雖被仰下、北條殿注所存於折紙被付帥中納言〇藤原經房云云、

高瀨庄事、雖令究濟兵粮米候、於地頭總追捕使被補候畢、但於狼藉者可令停止候也、

〔吾妻鏡十六〕建久十年〇正治元年三月廿三日乙卯、中將家依有殊御宿願、〇中略御奉免狀書様、

御神領

近江國蒲御厨　尾張國一楊ヒトツヤナギ御厨　參河國飽海、本神戶、　新神戶　大津神戶

伊良胡御厨總追捕使

右件所々地頭等、依別御祈願所被停止彼職候也、鎌倉中將殿〇源賴家御消息如此、仍執達如件、

建久十年三月廿三日　兵庫頭

祭主殿

〔三寶院文書一〕可令早停止爲醍醐寺領越前國牛原庄地頭時盛代官新儀非法事、

副下　承元元年將軍家御下文一通

本地頭得分注文一通

右如訴狀者、庄內村村地頭代九人、總追捕使幷公文五人、總從類百餘人入部、庄家面々供給無隙之上、各吹毛求疵、處無實之咎、土民不堪苛酷、失安堵之計、因之寺家年貢課役雜事一切不及其沙汰云云、事若實者甚不穩便、地頭得分者追行政法師之跡、廣義給注文畢、今地頭須守彼例之處、無是非偏

神社總追捕使

〔承久記上〕承久三年夏ノ比ヨリ、王法盡サセ給ヒテ民ノ世トナル、故ヲ如何ニト尋レバ、地頭領家ノ相論トゾ承ハル、古ヘハ下司庄官ト云計ニテ、地頭ハ無カリシヲ、鎌倉右大將、〇源頼朝朝敵ノ平家ヲ追討シテ、其ノケンシヤウニ、日本國ノ總追捕使ニ補セラレテ、國々ニ守護ヲ置キ、郡郷ニ地頭ヲスヘ、段別兵粮ヲアテトラル丶間、領家ハ地頭ヲソネミ、地頭ハ領家ヲアダトス、

〔増鏡二新島守〕ひやうゑのすけ頼朝、〇中略其年〇建久元年の十二月九日、權大納言になされて、右近大將を兼たり、またはすのついたちごろよろこび申て、おなじき四日、やがてつかさをばかへしたてまつる、この時ぞ諸國のそうついふくしといふ事うけたまはりて、地頭職に我家のつは物どもなしあつめける、この日本國のおとろふるはじめはこれよりなるべし、

〔保元物語一〕新院御所各門々堅事附軍評定事

爰ニ鎮西八郎爲朝ハ、〇中略君ヨリモ給ラヌ九國ノ總追捕使ト號シテ、筑紫ヲ隨ヘントシケレバ、菊池原田ヲ始トシテ、所々ニ城ヲ構ヘテ楯籠レバ、其儀ナラバイデ落イテ見セントテ、未勢モツカザルニ、忠國計ヲ案内者トシテ、十三ノ歳ノ三月ノ末ヨリ十五ノ歳ノ十月迄、大事ノ軍ヲスル事二十餘度、城ヲ落ス事數十箇所也、城ヲ攻ル謀、敵ヲ打行テ、人ニ勝レテ、三年ガ内ニ九國ヲ皆攻落シテ、自ラ總追捕使ニ押成テ惡行多カリケルニヤ、〇下略

〔吾妻鏡二〕治承五年〇養和元年三月十二日戊子、諸國未靜謐、武衛非無御怖畏、仍諸社有御立願、今日先以常陸國鹽濱大窪世谷等所々被奉寄鹿島社、其上御敬神之餘、於宮中爲不令現狼藉、以鹿島三郎政幹被定補當社總追補使云云、

〔鹿島文書二〕鹿島太神宮神官等謹言上

欲早任代々相傳旨、被棄破梶山掃部助幹繼非分押領、如元被令全和田權祝家貞知行者、各奉行祭禮彌抽夙夜御祈禱忠安丸名田畠等事、〇中略

者、雖存廉直、所補置之眼代等、各有猥所行之由、漸懐人之訴、就之早可令停止之旨、所被成御下文也、俊兼奉行之云云、

〔吾妻鏡　六〕文治二年三月一日己卯、諸國被補總追捕使幷地頭、内七箇國分北條殿被拜領畢、而深存公平、去比上表地頭職、其上重被付書狀於帥中納言、黄門又付定長朝臣被奏聞之、　七日乙酉、北條殿被申七箇國地頭上表事、○中略

時政申狀　奏聞畢、○中略

一總追捕使事、雖替其名、只同前歟、但義經行家不出來以前、二位卿〈○源頼朝〉不申行之外、一向可被止之由雖被計仰、世間不落居之間、每國置總追捕使、若又廣博庄園計補者可宜歟、最狹少所々皆悉被補者、喧嘩不絶、訴訟不盡歟、且令散萬人之愁、可爲尋出兩人之術歟、○中略

一沒官所々事、二位卿無申旨、仍不能被仰左右、以前條々以此趣可被計仰歟、如此事不知子細事也、殊可令斟酌給、今春不勸農者、諸事有若亡歟、能々優恕致沙汰者、定叶天意歟之由、内々御氣色候也、仍言上如件、

三月七日　　左少辨定長

進上　帥中納言殿

〔吾妻鏡　十六〕正治二年二月廿日丙子、親長自京都歸參、具下國人播磨國總追捕使芝原太郎長保、是景時與黨也、佐々木左衞門尉廣綱相副郎從送進之、親長參御所申云、去二日入洛、同七日廣綱基淸相共先追捕景時之五條坊門面宅、縛郎從、其白狀於近江國富山庄生虜長保云云、於長保者所被遣義盛之宅也、

〔長門國守護職次第〕豐浦都者、仲哀天皇二年被立之、○中略

豐西郡司○中略　一貞平○中略　九　土肥次郎實平〈被總追捕使、代官土岐二郎、〉

總追捕使

〔朝野群載二十二諸國雜事〕追討使官符

太政官符近江國司

應以散位從七位上甲可臣是茂、令追捕部內凶黨事、

右得彼國去年十月十七日解偁、謹檢案內、此國帶三箇道、爲要害地、奸猾之輩、横行部內、强盜殺害、往往不絕、仍前々國宰、部內武藝之輩、撰堪其事之者、申請公家、爲追捕使、近則故佐々貴山公興垣、故大友兼平等是也、爰兼平者今年二月其身死去、前司介藤原朝臣清正、權大掾依知秦公廣範、可補彼替之狀言上、解文先畢、而件廣範齡已老、身非武藝、今件是茂、忠孝之情、方寸不撓、文武之用、隨分相兼、糺察追捕、可堪其職、望請官裁、因准先例、以件是茂爲追捕使、肅靜部內者、右大臣宣、依請者、國宜承知、依宜行之、符到奉行、

正五位下守左中辨藤原朝臣文範　　左大史

天暦十年六月十三日

〔類聚符宣抄七〕太政官符紀伊國司

應以前土左掾正六位上御春朝臣聰高補任追捕使事

右得彼國去年十一月廿八日解狀偁、謹檢案內、此間山海之間、寇賊聯綿、奸類伺隙、爰爲追捕使之者、雖有其數、或據鞍之力難堪、或汗馬之勞失便、今件聰高夙傳弓馬之能、尤足警急之備、望請官裁、早被補任件職、將爲扞城之便者、正三位行中納言源朝臣保光宣、依請者、國宜承知、依宜行之、符到奉行、

左少辨　　右少史

正暦三年十月廿八日

〔吾妻鏡四〕元暦二年文治元年四月廿六日己卯、近年兵革之間、武勇之輩、耀私威於諸庄園、致濫行歟、依之去年春之比、宜令停止之由被下綸旨訖、而關東以實平景時被差定近國總追捕使之處、於彼兩人

諸國追捕使

〔本朝世紀〕天慶四年八月七日甲午、山陽南海兩道追捕使右近衛少將小野好古朝臣今日入京、先是自山崎津申上云、去年征東使大將軍藤原忠文朝臣入京時、公家遣神祇官等相迎使河邊、行解除事、此般好古入京日、若准彼例可有解除歟云々、右大辨藤原在衡朝臣以此由執申太政大臣家、〇藤原忠平仰、令大外記三統公忠宿禰勘申先年追々追捕使等歸洛時例者、公忠申云、大將軍者依法條已有解除事、至于追捕使無解除例云々、在衡朝臣以此由申太政大臣家、仰云、然者不可有解除之由可仰遣者、

〔貞信公記〕承平二年四月廿八日、仰追捕海賊使可定行事、

〔日本紀略朱雀二〕承平四年十月廿二日己丑、定追捕海賊使等、

天慶三年正月十四日庚辰、任追捕凶賊使等、　三月四日庚午、定追〇追字原无、據二年正月十六日記補、捕南海凶賊使等、

〔北山抄六〕追捕使

畿內近江等國、或奉勅宣旨、自餘諸國解申官、給上宣官符、押領使同之、

〔朝野群載二十二諸國雜事上〕申停追捕使押領使

越前國司解　申請官裁事

請被停止追捕使押領使等狀

右在京雜掌申云々、今件隨兵士卒非必其人、或借威使勢橫行所部、或寄事有犯脅路人民、所部不靜、還致愁歎、望請官裁、被停止件使者、猶郡司之力不及、國宰之勤難堪、須隨事狀申請件使、仍錄事狀謹解、

天曆六年三月二日

同年十一月八日　右大臣宣、奉勅依請、

〔香取舊大禰宜家所藏文書〕
注進　香取社諸神官總領庶子死亡逃亡跡田畠屋敷已下目錄
一行事禰宜庶子死亡跡〇中略
一押〇領〇使〇　田二反大内大押領使御殿田〇中略
嘉慶二年十二月二日
案主在判
田所同
錄司代

名稱
戰時追捕使

追捕使

追捕使ハ、承平二年ニ、海賊ヲ追捕スルタメニ其使ヲ補セシヲ以テ、史上ニ見エタル始トス、天慶三年ニハ、平將門ノ亂ノタメニ、東海、東山、山陽諸道ノ追捕使ヲ補シ、藤原純友ノ亂ノタメニ、追捕南海凶賊使ヲ補セリ、卽チ討手使ナリ、天曆ノ比ニハ、國司ノ部內ニ於テ凶黨ノタメニ此使ヲ置キシコトアリ、是平時ニ在リテ此ヲ設ケシ始トス、元曆文治ノ際ニ在リテ、賴朝ノ奏請ニ由リテ、毎國ニ總追捕使ヲ置キ、己之ガ長ト爲レリ、蓋シ行家義經ヲ捕フルヲ以テ名トシタルモノニテ、終ニ朝廷衰替ノ基ト爲レリ、時ニ神社及ビ莊園ニモ又總追捕使アリ、亦姦盜ニ備フルナリ、

〔伊呂波字類抄〕津官職 追捕使

〔日本紀略〕三朱雀 天慶三年正月一日丁卯、今日任ニ東海東山山陽道等追捕使以下十五人一、其中東海道使從四位上藤原忠舒、東山道使從五位下小野維幹、山陰道使正五位下小野好古、

仍筑後國在國司押領使兩職爲本職之間、可知行之由雖申之、如此事非頼朝成敗候、御奉行之由承及候、有御奏聞可充給永平候、恐惶謹言、

閏七月二日　　頼朝

進上　帥中納言殿

〔吾妻鏡七〕文治三年九月十三日辛亥、攝津國　廳以下、幷御室御領間事被定其法、今日爲北條殿奉可得其意之由、所被仰遣三條左衞門尉之許也、其狀云、

攝津國爲平家追討跡無安堵之輩云云、總諸國在廳、庄園下司、總押領使可爲御進退之由被下宣旨畢者、○下略

〔吉田文書〕○首缺

卅二坪　一反小　垣安藤五郎

卅三坪　三反半　押領使名主○中略

右酒戸吉沼田檢注地文段丁注進如件、

安貞二年十一月　目　地頭代在判

社田所權祝大舍人在判

檢注御使紀在判

〔香取文書七〕下總國香取社敷地內二俣村壹所事

在御燈料荒野壹所事○中略

平朝臣

大神使中臣末光花押　權撿非違使　正撿非違使花押　押領使　行事禰宜

吉房花押○下略

勉勇之心、彌領狼戻之俗者、從二位行權中納言兼中宮大夫右衛門督藤原朝臣齊信宣、依請者、國宜承知、依宣行之、符到奉行、

右少辨　　　　左少史

寛弘三年三月九日

〔朝野群載二十二諸國雜事〕申補押領使

淡路國司解　申請官裁事

請被因准傍例、給官符以正六位上高安宿禰爲正、補押領使狀、

右謹撿案內、此國四方帶海、姧猾易通、況乎世及澆季、俗亦狼戻也、警衛之備、無人勤行、望請官裁、以件爲正補押領使職者、將令執不虞之勤、仍勤事狀謹解、

寛弘三年四月十一日

〔法然上人行狀畫圖一〕抑上人は、美作國久米の南條稻岡庄の人なり、父は久米の押領使漆の時國、母は秦氏なり、〇中略かの時國は、先祖をたづぬるに、仁明天皇の御後西三條右大臣光公の後胤、式部大郎源の年、陽明門にして藏人兼高を殺す、其科によりて美作國に配流せらる、こゝに當國久米の押領使神戸の大夫漆の元國がむすめに嫁して、男子をむましむ、元國男子なかりければ、かの外孫をもちて子としてその跡をつがしむるとき、源の姓をあらためて漆の盛行と號す、盛行が子重俊、重俊が子國弘、國弘が子時國なり、

〔長門國守護職次第〕豐浦都者、仲哀天皇二年被立之、〇中略

長門國平家以往守護職、元者號押領使職、

〔吾妻鏡六〕文治二年閏七月二日丙子、二品令擧草野大夫永平所望事、依有殊功也、御書云、

平家背朝威企謀叛、鎭西之輩大略雖相從彼逆徒、筑後國住人草野大夫永平、仰朝威致無貳忠詑、

境之中、暴惡之輩、任心横行、自非官符之使、何糺執惡之徒、加以年來之間、賦稅之民、恣集黨類、勵奔人物、謹案事情、糺捕凶類之道、尤在此使、方今靜平、才幹兼備、亦堪武藝、清廉之性、勤公在心、望請官裁、准件等國例、以靜平被裁給押領使、且令斷凶惡之輩、且令存平善之風者、右大臣宣、依請者、國宜承知、依宜行之、符到奉行、

從四位下行左中辨橘朝臣好古　左大史出雲宿禰蔭時

天曆六年十一月九日

申停追捕使押領使

越前國司解　申請官裁事

請被停止追捕使押。。領使。。等狀

右在京雜掌申云々、今件隨兵士卒、非必其人、或借威使勢、横行所部、或寄事有犯、脅略人民、所部不靜、還致愁歎、望請官裁、被停止件使者、猶郡司之力不及、國宰之勤難堪、須隨事狀申請件使、仍錄事狀謹解、

天曆六年三月二日

同年十一月八日　右大臣宣、奉勅依請、

〔權記〕長保二年十二月九日壬子、參河國押領使源好官符、令擧直朝臣送□□朝臣許、

〔類聚符宣抄七〕太政官符陸奧國司　外

應以正六位上平朝臣八生補任押領使職事

右得彼國去長保五年三月十日解狀偁、謹撿案內、此國北接蠻夷、南承中國、奸犯之者、動以劫盜、仍試以件八生爲國押領使、令行追捕事、凶賊漸以刋蹤、部內自以肅清、見其勤公、最足採用、抑八生故武藏守從五位上平朝臣公雅弟同公基男也、門風所扇、雄武拔群、望請官裁、以件八生被補任押領使、將勵

平時押領使

命ヲ弃テ合戰ト思フト相語テ、秀郷等多ノ兵ヲ具シテ行向ニ、○下略

〔陸奥話記〕武則○清原、以同年○康平五年秋七月、率子弟萬餘人兵、越來於陸奥國、將軍○源頼義大喜、率三千餘人、以七月二十六日發國、八月九日到栗原郡營岡、昔田村麿將軍征蝦夷之日、於此支整軍士、自其以來號曰營、壁溝遺跡存也、武則眞人先軍此處、邂逅相遇、互陳心懐、各共拭涙、悲喜交至、同十六日定諸陣押領使、清原武貞爲一陣、武則子也

〔奥州後三年記上〕出羽國の仕人吉彥秀武といふ者あり、これ武則が母方のをい又むこなり、昔頼義貞任を攻し時、武則一家をふるひて、當國へ越來て、栗原郡營の岡にして、諸陣の押領使を定めて軍をとゝのへし時、此秀武は三陣の頭に定めたりし人なり、

〔朝野群載二十二諸國雜事〕申兼押領使幷給隨兵、

從五位下下總守藤原朝臣有行、誠惶誠恐謹言、

請被特蒙天恩、因准先例、兼行押領使幷給隨兵卅人狀、

右謹撿案內、當國隣國司等、帶押領使幷給隨兵、勤行公事、其例尤多、近則前司守從五位下菅原朝臣名明、依天慶九年八月六日符、兼押領使幷給隨兵卅人、凡坂東諸國不善之輩、横行所部、道路之間取物害人、如此物忩、日夜不絕、非施公威、何肅國土、望請天恩、因准先例、不費官物、國廻方略、漸次充行、然則若有凶黨之輩、且以追捕、且以言上、有行誠惶誠恐謹言、

天曆四年二月廿日從五位下

同年五月五日左大臣宣、奉勅依請、

追討使官符○中略

太政官符　出雲國司

應以清瀧靜平、爲押領使、令追捕部內奸濫輩事、

右得彼國去正月廿六日解狀偁、謹撿案內、美作伯耆等國、申請官符押領使、勤行警固事、而此國在二

戰時押領使

〔吾妻鏡三十一〕嘉禎二年正月十七日乙亥、將軍家依御疱瘡餘氣、御腹御膝腫物、號押領使、廿餘箇處令出給、

〔三代實錄三十三陽成〕元慶二年六月七日辛未、出羽國守藤原朝臣興世飛驛奏言、○中略陸奧押○領○使○本○無原使字、今據下文補之、大掾藤原梶長等所將援兵與本國兵卒、合五千餘人聚在城中、賊出不意四方攻圍、官軍力戰賊勢轉盛、○下略

〔三代實錄三十四陽成〕元慶二年七月十日癸卯、出羽國飛驛奏曰、正五位下守右中辨兼權守藤原朝臣保則到國、察向前之行事、運行軍之籌策、遣○中略上野押領使權大掾南淵秋郷等、率上野國見到兵六百餘、屯秋田河南、拒賊於河北、○下略

〔扶桑略記二十二字多〕寛平六年九月五日、對馬島司言、新羅賊徒船四十五艘到著之由、大宰府同九日進上飛驛使、同十七日記曰、同日卯時守文室善友召集郡司士卒等仰云、○中略即島分寺上座僧面均、上縣郡副大領下今主爲押領使、百人軍各結廿番、遣絶賊移要害道、

〔將門記〕于時賊首兄弟及伴類等、可追捕之官符、以去正月○天慶三年十一日下於東海東山兩道諸國、○中略相次海道擊手將軍兼刑部大輔藤原忠舒、下總權少掾平公連爲押領使、

〔豫章記〕好方越智郡押領使ト云、在國シケリ、是朱雀院ノ御宇也、天慶二年ニ純友ト云逆臣、九州ヲ押領シテ宣旨ヲ背ケリ、仍テ退治スベキ由好方ニ被仰付、○中略其子好峰、野間押領使ト云、

〔本朝世紀〕天慶四年十月廿三日己酉、昨日今日山陽南海兩道諸國警固使押領使幷擊手使等、可停止之由官符請印、

〔今昔物語二十五〕平將門發謀反被誅語第一

將門、常陸下總ノ國ニ住シテ、弓箭ヲ以テ身ツ莊トシテ、多ノ猛キ兵ヲ集テ伴トシテ、合戰ヲ以テ業トス、○中略爰ニ貞盛幷ニ押領使藤原秀郷等此レヲ傳ヘ聞テ、彼等公家ノ恥ヲ助ケムト思フ、身

〔伊呂波字類抄安官職〕押領使アフリヤウシ

〔貞丈雜記四役名〕一押領使と云は、押はおさへる也、領は我物にして支配する也、使は役の字の意也、在々處々の守護の爲に此役人を置て狼藉者をおさへさせ、其處を支配させるなり、其役人を押領使と云也、使の字はつかひと云心にてはなし、つかさと云義にて役の字の心也、撿非違使などの使の字に同じ、押領ノ二字ヘ人ノ物ヲオシトリスル事也、此押領使の押領ハ狼藉者を押ヘ其所ヲ寧領スル也、

〔武家名目抄職名附錄二十二上〕押領使

按、押領使の司ざる所は、大かた追捕使に同じ、押領は統領のごとし、大にしては一軍、小にしては一隊の長なり、但押領使に二樣あり、常にいふ押領使は永く其職にありて事あるにのぞみて其事に從ふものなり、是は公家に奏して置るもの也、扶桑略記、陸奥話記に見えたるは、時の主將臨時に定むるものにして、永く其職に居るものにあらず、よむもの辨じてしるべし、

〔倭訓栞中編一〕あふれう　押領と書り、西宮記、東鑑に押領使見えたり、代々數郡を押領して朝に服事するもの、稱也、されど元矢〇元原作今改慶に陸奥押領大掾藤原梶長と見え、下野押領使藤原秀郷あり、三押領使といふは、奥州秀衡、伊豆祐親、肥後菊池也、天曆の頃、下總守藤有行請補押領使と見え、寛弘の時に、以高安爲正爲淡路國押領使と見ゆれば、國司の外專追捕を司れり、一國の政務は國司の主る所とし、兵馬の事は國司へ導るに及ばず、押領使の任たり、よて北山抄にも諸國申置押領使事と見ゆ、日本紀遣唐の押使の如し、天曆の時罷追捕押領等使と朝野群載にも見えて、國々より公役にて出る軍兵を召れて出る頭の事也、よて奥羽軍記に陣頭とも見ゆといへり、されば字の如く押領したる事とては、使といふべからずとぞ、疱瘡の後に出る瘡を俗にあれうしといひ、關東にては、あふれうしといふ、押領使の義なりと、梅村載筆に見えたり、此事東鑑に見ゆ、美濃にて長吏といへり、

存知之狀、依仰執達如件、

至德元年三月廿日　左衞門佐判

當寺供僧御中

〔東寺百合古文書百六十八〕勢多請取

請取　東寺寄捨非違使俸祿料足事

合拾參貫文者

右料足事、雖爲貳千疋、七百疋者就歎承、今度計閣申者也、仍所請取之狀如件、

應永廿二年十一月十五日　章鄕花押

〔東寺百合古文書二ノ自百六十四至百八十七〕寄捨非違使俸祿事

先日委細被仰下候處、不被申上候、然者右何樣候哉、仲超法印寺務之時再往被經御同心、千疋申御狀候、證文案被遣候、今年分所詮五百疋可被致同心候、若亦可爲難澁者、先向明年五百疋必可被致同心候、一向社申子細者、任申樣可被付敷地之由重被仰下候、謹言、

應安三十二月廿五日　□□

最勝□□執行殿

押領使

押領使ハ兵士ヲ管拘統領スルモノニシテ、合戰アルニ當リ、或ハ朝廷ヨリ命ジ、或ハ大將ヨリ命ズル所ナリ、然ルニ其間ニハ常置ノ職ト爲シ、之ヲ諸國ニ設ケ、以テ奸盜ヲ鎭壓セシガ、後世ニハ專ラ平時ノ職ト爲レリ、

一坪　御名三反　わらいぬ殿
二坪　御名三反大内大八神　同人
三坪　御名三反　十良入道
四〻　御名一反　同人
五〻　司寺大　同人
六〻　吉安私二反　同人
七〻　司三反　檢非違使いやみし入道
八〻　司一反　同人
九〻　甲九五反　けんぴいし〇下略

〔香取文書五〕香取大神宮元三御頭人之次第
宮介殿、次權檢非違使、次正檢非違使、次大祝、次祿司代、次四郎神主、次吉原檢校、次權禰宜、田所、正月祭擬祝、次物申祝、〇中略

天文二十四年癸丑八月三日　大禰宜散位大中臣實隆花押

物申方へ

〔澀柿〕賴朝、佐々木ニ被下狀、〇中略
わが身は國の檢非違使ぞかしとて、其事となく人はおぢおそれんずると、勝にのりて小事をとがめて威をふるはんとし、國の者共をも、所從などの樣におもひなして振舞事あらば、後には能事あらんや、かへて耻に成べき企也、

〔東寺百合古文書二十七〕東寺雜掌申、當寺幷最勝光院寄檢非違使俸祿、毘原給事、帶文保勅裁、去康暦以來、就御執奏被免除之處、去年向大禮官人章賴等支申間、雖有其沙汰、向後所被免許也、早可被

〔鹿島神官補任記〕檢非違使、是モ行事職也、神領中乃非違於檢斷留須役也、刑法幷諸訴訟等之事於掌留、近代檢非違使之掌留事、大方波總大行事掌留也、

〔香取舊大禰宜家所藏文書〕

注進　香取社諸神官總領庶子死亡逃亡跡田畠屋敷已下目錄

一行事禰宜庶子死亡跡○中略

一權檢非違使庶子分（はまのけんびしあんず）　田三反カトタ　胤時田四反ユヤマ　同人田小宮神ウシロ　同人大マスハラ　同人　小カヤモト　同人二反小神タマタ　同人二反大花ノ井　同人二反田所名サワラ　同人二反ヌマウサキ　同人二反サワラウサキ内　同人二反四郎三郎作ヌマ　同人二反田中内　寶幢院畠分　司大古新堂　胤時司二反　同人同屋敷一字津宮ウサキ　同人同屋敷一字津宮田中　同人赤馬、ヘタノ山カイホリチ、サ○中略

一正檢非違使逃亡跡田畠事

田三反ウリチ　チリハタ　大應寺田二反半永代サヽハラ　大應寺田三反大神田　田二反ユキノエ　田一反アカタ

田半サヽハラ○中略

嘉慶二年十二月二日

案主在判

田所同

錄司代

〔香取舊大禰宜家所藏文書〕注進　香取御神畠檢注取帳事

大禰宜帳ハ永仁、錄司代帳ハ文保、田所帳ハ建武、案主帳ハ正慶、合彼四帳、應永六年ニ社家地頭公人寄合爲後證注置處也、

合

一坪吉千代私五反内豐前殿　次郎三郎　五郎四郎女子　二人○中略

吉原

二宮朝夕御饌所二見御厨重役人平安満等重謹言上

欲早止理不盡平責儀、且糺明是非、被拔御下文等當鄕內中福寺領田事、

副進　御下知并神宮施行御使告狀等案

件事及兩方催促之間、難堪之剋、言上子細之處、可尋糺子細旨御下知并神宮施行之間、聊雖成安堵之思、又以去月廿三日、爲毗沙門堂殿御雜掌號氏重神主之使、致苛責之間、任先例可拔彼御下文等之旨令問答之時、可出對彼所見之由乍令承知、又以今月三日、不帶御下文等改篇、號五段垣內律師之使、及平責之條、難堪之次第也、市河孫三郎以當寺領雖無片時違亂之儀、濫被混亂彼闕所之內、被下御教書者、尤可出對者也、將又爲毗沙門堂殿御雜掌者、進而可拔彼御下文者也、然則早止理不盡平責儀、任先例被見御下文、爲致有限所役、粗重言上如件、

正中二年十二月　日　　右二通(一通略)二見鄕西村神役人等所藏

〔徵古文府三〕下　撿非違使周弘　　可早任勅裁旨致沙汰伊勢國二見浦密巖寺事

副下御教書

右彼密巖寺事、今月十七日勅裁、同十八日到來、早任被仰下之旨、於向後者停止新儀非分違亂輩、全寺領等、可致管領之由可相觸住寺長老、次遷宮料并日頃御靈等之事、無臨期煩、可勤仕之旨可令告知所司等之狀如件、

康曆元年十二月廿一日　　祭主神祇權大副大中臣朝臣御判

〔鹿島神宮古文書〕社頭毎日番次第○中略

十五日　撿非違使○中略

右此旨可守也

永正十八年辛巳正月日

寛平九年十二月廿二日

〔壬生家文書 二〕廳宣　撿非違使經則、眞景、眞經、

可早任宣旨祭主告知狀、本宮使相共令致沙汰、度會郡内所在不論二所大神宮神戶、御厨、御園、并權門勢家庄園島浦津等、點定水手雜船等、漕送尾張國墨俣渡事、〇中略

治承五年二月廿日

〔東寺百合古文書 二ノ自百八十八至二百一〕差進文書紛失日以此定案詞後代可尋申

川合庄依沙汰進官文書目錄等事、〇中略

一以應德二年六月九日大神宮撿非違使新家俊晴申文云、東寺御領川合大國御庄勅施入田六十六町也、内十五町年來官物進未結解裁也、

一同年六月廿五日撿非違使俊晴於祭主賴宣朝臣進申文云、多氣郡川合田六十六町之内見熟田十五町、年來官物進未可沙汰進依御外題旨者、爰倩以案事情成願寺別當觀範解狀不分明、永保元年十一月十六日按祭主衙牒送狀云、欲被早任道理裁定寺家可領伊勢國多氣郡十五條三岡前里内田五町稱東寺大國庄領田成妨、寺家嵯峨先帝御願、去貞觀五年九月三日官省符田也者、去應德元年十月廿八日、仁和寺宮御室政所進申文云、件庄田者、二品秀良親王以勅旨田、去承和年中成官省符所被施入也、以去年十一月十五日間宣旨、倚以去年六月五日得觀範解狀、倚成願寺嵯峨天皇御願、秀良親王建立者詞不同、忝巧虛言歟、年號相違、願主不同、官省符兩度申來不分明、號有政定宣旨田二町五段獲稻一千二百五十束押取、〇中略

應德三年七月　日注留之　東寺權上座大法師位

〔徵古文府 三〕下撿非違使定與、訴狀無相違者、早神宮使共先止理不盡之責、尋糺子細令注進之、

祭主 花押

國檢非違使下部

目代波多野因幡入道子息毗沙王丸
小目代隱岐伊豆阿闍梨、井いなづの助太郎入道、稅所多田右衛門尉知直、國司より給之
〔齋藤文書 陸中二〕曾我與一太郎貞光代惠藤三光爲謹言上
欲早任先代貞應二年八月六日御下知狀旨、被停止檢非違所以下輩入部津輕平賀郡本鄕內曾我五郎次郎惟重知行分跡村之間事
副進
一通　先代下知狀案 權大夫殿
右曾我五郎次郎惟重檢非違所政所下部等不可入部彼所之由、自被成御下知狀以來、知行分村々者到于今無背其法者也、所詮支證等如此上者、任先下知狀之旨、爲拜領國宜粗言上如件、
建武二年三月日

郡檢非違使

〔三代實錄 五清和〕貞觀三年十一月十六日丙戌、武藏國每郡置檢非違使一人、以凶猾成黨、群盜滿山也、
〔吾妻鏡 九〕文治五年九月廿四日辛巳、平泉郡內檢非違使所事、可管領之旨、葛西三郎淸重賜御下文於郡內諸人停止濫行可糺斷罪科之由云云、凡淸重今度勳功、殊拔群之間、匪奉此等重職、剩伊澤磐井牡鹿等郡已下拜領數箇所云云、

神社檢非違使

〔類聚三代格 一〕太政官符
應置伊勢大神宮神郡檢非違使事
右依神祇官奏狀偁、大神宮司解偁、檢非違使雖在國內、非卜食者無入神郡、因茲管度會多氣飯野三箇神郡諸人、或犯禁忌、或好濫惡訴訟之輩、日月不絕、司勤神事、無遑巡察、望請神民之中幹事者、充檢非違使、一向令糺犯罪之人、但不給俸料、准大內人把笏從事者、官錄解狀謹請天裁者、權大納言正三位兼行右近衛大將民部卿中宮大夫菅原朝臣宣、奉勅依請、

國檢非違使目代

〔古事談 四勇士〕宗形宮內卿入道師綱、陸奧守ニテ下向之時、基衡押領一國、如无國司威、仍奏聞事由、申下宣旨、擬檢注國中公田之處、忍郡者、基衡藏テ先々不入國使、而今度任宣旨擬檢注之間、基衡件郡地頭大庄司季春ニ合心テ禦之、國司猶帶宣旨推入之間、已放矢及合戰了、守方被疵者甚多、基衡カクハシツレドモ、背宣旨射國司事、依恐存、招季春云、依無先例雖追返國司、背宣旨之條非无違勅之恐、イカヾスベキト云々、季春云、今仰兼皆存知事也、主君命依難奉背、於一矢者射候了、然者君者不知食之體ニテ召己頸、可被遣國司之許也、其上ハ定無爲候歟云々、基衡乍拭淚諾了、基衡申於守云、基衡一切不知事候、郡地頭丸依无先例致自由之狼藉候、於今者不可及子細、季春已召取畢、早賜御使、於其前可刎頸云々、依之國司遣檢非違所目代云々、

〔吾妻鏡 六〕文治二年九月廿五日戊辰、平六兵衛尉時貞、執進召使則國狀二通、書之、一通付職事云々、彼一通今日所到來也、是紀伊國由良庄七條紀太濫行事也、

下　遣蓮花王院御領廣由良御庄召使則國申藤三次郎吉助丸謀計濫妨事

右則國捧持院宣、相具御使（檢非違使平六兵衛尉代官）罷入御庄、相尋根元之處、彼吉助、以前ニハ號左馬頭殿御使字藤內、而今則國罷向之時、吉助申云、左馬頭殿トハ僻事也、吉田中納言阿闍梨使也稱申、於院宣者不可用トテ、放種々惡口、企陵礫、御使申云、我兄弟者於伊豫國、斬院力者二人頸、況於召使者不及沙汰之由申之、然而則國申含由緒檢非違所小目代、披陳子細之剋、謀計露顯、支度相違、夜中逃去了、

○中略

仍勒在狀言上如件、

文治二年九月十一日

御使召使藤井（判）

〔伊呂波字類抄 古官職〕小目代

〔若狹國稅所今富名領主代々次第〕一洞院內大臣公繼卿（大覺寺殿）公家一統の御代、世上動亂之後、國司稅所今富、元弘三年八月十日より、建武元年八月迄、

達、

〔三代實錄 十四 淸和〕貞觀九年十二月四日己巳、勅、上總國置檢非違使一員、主典一員、帶劍把笏、

〔三代實錄 十六 淸和〕貞觀十一年三月廿二日庚辰、令下總國檢非違使帶劍把笏、

〔三代實錄 二十九 淸和〕貞觀十八年七月八日癸未、山城丹波兩國司申請、割國司公廨稻一分、給檢非違使、但有調庸未進欠負未納之年、准國司例勘補、從之、

〔三代實錄 三十二 陽成〕元慶元年十二月廿一日丁亥、能登佐渡兩國並始置檢非違使各一人、帶劍把笏、

〔三代實錄 三十三 陽成〕元慶二年二月十三日己卯、丹後國言、割國司公廨稻一分例、給檢非違使傔料、太政官處分、依請焉、

〔三代實錄 三十六 陽成〕元慶三年十月廿二日戊寅、河內國檢非違使從七位下八戶史野守〇中略等六人賜姓高安宿禰、

〔類聚符宣抄 七〕太政官符大和國司 外

從八位上伴宿禰公扶

右從三位守大納言源朝臣高明宣、奉勅、件人宜補彼國檢非違使者、國宜承知、依宣行之、其公廨稻一分給之、符到奉行、

右大辨　　　左大史

天曆八年二月廿三日

〔吾妻鏡 五十二〕文永三年四月十五日戊寅、長門國一宮神人等致殺害沙汰之由事、守護人資平就註申子細、有其沙汰、幷猥藉事可令奉行由資平雖申之、守護沙汰事被定式目畢、而爲守護之身補國檢非違使之條不可然云云、

〔寬平御遺誡〕諸國權講師、權檢非違使等、朕一兩許之、不可爲例、

言正三位兼行左近衛大將皇太子傅陸奥出羽按察使源朝臣能有宣、奉勅、宜自今以後停補无位人、并以六年爲一秩、唯職非永例、隨時廢置、先任之輩、秩限滿則不待替人、直從解任、

寛平六年九月十八日

〔本朝文粹二意見封事〕意見十二箇條　善相公清行

一請停以贖勞人補任諸國檢非違使及弩師事

右諸國檢非違使、掌糺境内之姧濫、禁民間之凶邪、然則國宰之爪牙、兆庶之銜策也、必須明習法律、兼詳決斷、而今任此職者、皆是當國百姓納贖勞料者也、徒費公俸、不堪差役、空帶其名、曾非其器、亦猶如畫餠不可食、木吏不能言也、伏望、監試明法學生、充任職々、其試法一如明經國學之試、國中追捕及斷罪、一向委此檢非違使、猶如京下有判事及檢非違使也、〇中略

延喜十四年四月廿八日　從四位上行式部大輔臣三善朝臣清行上封事

〔年中行事秘抄正月〕大宰檢非違使元日平旦奏之、四方拜還御間、

〔朝野群載二十大宰府〕補府檢非違使

太政官符　大宰府

從五位上姓名

右右大臣宣、奉勅、件人宜補彼府檢非違使者、府宜承知、依宣行之、其公廨一分事給之、符到奉行、

辨　史

年　月　日

〔文德實錄七〕齊衡二年三月乙巳、制、大和國檢非違使正六位上伊勢朝臣諸繼預把笏、諸國檢非違使把笏、始於此人、

〔文德實錄九〕天安元年八月辛未、許令攝津國人散位從八位下岸田朝臣全繼帶兵仗把笏檢國中非

成テ、數百騎ノ兵ヲ相副テ下シ遣タレ共、大衆其ニモ恐レズ、蜂起シテ、押寄散々打落シ、兼康ガ家子郎等ノ頸廿六斬テ、猿澤ノ池ノ端ニ懸タリ、兼康蚑々都ヘ逃上ル、面目ナクゾ見エシ、是ノミナラズ、南都ニハ、淸盛入道ハ平氏ノ中ノ糟糠也、武家ニ取テハ塵芥也、イカニト云ヘバ、祖父正盛ハ、正シク大藏卿爲房ノ加賀國知行ノ時、檢非違使所ニ被召仕キ、〇下略

〔吾妻鏡 六〕文治二年四月四日辛亥、右兵衞長谷部信連者、三條宮侍也、宮依平家讒、蒙配流官符御之時、廷尉等亂入御所中之處、此信連、有防戰大功之間、宮令遁三井寺御訖、而今爲抽奉公參向、仍感先日武功、態爲御家人召仕之由、被仰遣土肥二郎實平、(于時在西海)之許云云、信連、自國司給安藝國檢非違所并庄公畢、不見放之由云云、

〔吾妻鏡 二十八〕寬喜三年五月十三日、今日有被定下條々、先諸國守護人者、大犯三箇條之外、不可致過分沙汰、檢非違所者、廻寬宥之計、可專乃貢勤之由云云、

〔西宮記 臨時 二〕諸國檢非違使傔仗事

大宰陸奧依宣旨、給官符於式部、鎭守府給兵部、

申文或國解、自御所下給上卿、上卿下給辨官、(近代先以申文給式部、令勘一分給不、問非違所、勘定闕否之後、奏聞作任符、)至于人給、更又給他色宣旨於式部丞、若有大宰非違闕者、正月一日平旦、付藏人且奏聞、不論上下﨟、依奏申文之先後、被下宣旨、(四方拜之後、待還御奏之云々、)

〔西宮記 臨時 二〕下式部省宣旨〇中略

諸國檢非違使事(謂他色宣旨也〇中略)帶劍事(近代不給、或給之、)

〔類聚三代格 五〕太政官符

應諸國檢非違使立秩限并停補无位人事

右檢案內、把笏帶劍、威儀不輕、糺察追捕、職掌惟重、而年來所任不必其人、官縱雖卑、選何疎略者、大納

答有之、卽其趣申入奉行、時巳剋斜也、其後有屆哉不知也、

一奉行被示曰、後剋雖陳之間、判官可參進儀以家來可申遣勢田亭也、雖然自分被召留陣故、其節難申間、藏人相心得可催之、尤家來其時分可來居、雖申付置可間違哉無心許間、以仕人可申遣旨被示、申領掌、卽出納にも申聞、令覺悟置、雖陳之間、更命出納差遣仕人於勢田豐前守亭、只今早々判官等可進立旨令催促、（尤雖承知之事、可承歸申含了）判官八人參入自建春門、列立和德門外也、

國郡檢非違使

國檢非違使所

諸國檢非違使ガ始テ把笏ニ預リシコト、文德天皇齊衡二年ノ史ニ見エタレバ、使ヲ置キシコトハ此ヨリ前ニ在リシコトニテ、京都ニテ廳ヲ定メシ時ノ前ニ在リ、而シテ武藏國ノ如キハ、奸盜ノ多キヲ以テ、特ニ每郡之ヲ置キシコトアリ、又神社ニ在リテモ伊勢神宮、鹿島神社等ノ如キ大社ニハ、特ニ之ヲ置キシコトアリ、其職掌ハ啻ニ皆檢察追捕ニ在リ、諸國檢非違使選任ノ法ハ、宇多天皇ノ寬平中、無位ノ人ヲ補スルヲ停メ、六年ヲ以テ一秩ト爲シ、期滿ツトキハ、直ニ解任ズルノ制ヲ立テ、大ニ弊習ヲ一洗セムトセシモ、延喜中三善淸行ガ上ル所ノ意見封事ニ據レバ、弊習ハ仍ホ改ラズシテ、諸國百姓ニハ、贖勞料ヲ納レテ補任セラルルモノモ多カリシナリ、

〔源平盛衰記二十四〕南都合戰同燒失附胡德樂河南浦樂事

南都ノ大衆蜂起騷動シテ不靜ケレバ、公家ヨリ御使ヲ遣シテ、何事ヲ計申テ、角騷動スルゾ、子細アラバ奏聞ヲ經ベシト被仰下タレバ、別ノ風情ナシ、只淸盛法師ニ不會候、乃至名字ヲモ不聞候ト申、太政入道不安思テ、大衆ヲオドサントテ、備中國住人妹尾太郎兼康ヲ、大和國ノ檢非違所ニ

云、昨日撿非違使等依召參攝政殿（○藤原道長）（使等一事、強姧同盜行、）以資平被仰左右衛門佐、佐一日使官人稱別當宣、不糺強姧事、行他行、理不可、然以行其事之官人四人可令辨遣失物、其外官人等夜中可追捕進大學助至孝（可追捕至孝事）者、今朝使官人等參入令申云、昨日依臨昏黑不能搜撿宅々、今曉先罷向至孝母宅、只有下女申云、母及至孝等在內大臣（○藤原公季）厩者、但至孝宅無人之內依別當宣近々可搜撿者、攝政曰、昨日臨夜而不搜撿、又雖別當（○藤原實成）家近々何不搜撿、若是別當氣色歟、但在內大臣厩之由在至孝母從女申詞、記內大臣家事、別當不可不知、觸別當可聞彼詞者、事太多々、不能委記、余申三剋退出、

〔吾妻鏡　一〕治承四年八月四日甲申、散位平兼隆（前廷尉、號山木判官）者伊豆國流人也、

〔香取文書（舊田所家所藏甲）〕撿非違使廳國衙

當國住人等申、負物幷本物返質劵田畠事、

右於國任樣制令計成敗、有子細者可被注進、悉仰、牒、

建武元年五月三日

〔兼胤公記〕寶曆五年六月九日、別當被申院雜色兼國加茂介、今度位階相願候件之者、使廳致兼役居候間、指支有間敷哉之由、勢多左衞門尉申ニ付、被談候由也、兩人申云、兼役之者、一方ニ而ハ官位有之、一方ニ而ハ無位之者モ外ニ有之候、併末々混合致候而も如何ニ候間、使廳者無位ニ而不致混合候樣ニ、急度證文勢多方へ受取置候樣可被申付候歟、併先關白殿へ被伺可、然候由示之、別當諾、後剋被示云、關白殿へ被申入候處、院雜色ニ而位階望申候儀少モ不苦候、使廳ハ元讓受兼役候間、院雜色ニ而位階望申候ハヾ、使廳之方他へ讓候樣被申付候樣ニ被命候、被屆了、

〔大江俊矩公私雜日記〕享和四年（○文化元年）二月十一日辛未、一判官參集之屆依無之、可吟味旨奉行被示命兩局出納、雖令吟味、庭上不候、一向不知由各申、仍以番頭代聞合取次處、如北陣時、勢田豐前守亭參集也、尤參集之儀自非藏人口雖可屆申奉行、臨期所勞人有之、及遲刻、追付可屆申覺悟之旨返

雜載

替何事候歟、但於其人者不被下所望申文、暗難定申者、左兵衞督定申云、光國事同左大辨、資清事、於明法博士者重役也、乍居進勘文、忽不可補替、於道志者撿非違使中兩三人也、如仰此間只一人也、依病不仕、廳事如廢、誠不便、被加補可宜、不然者被補替何事候哉、諸卿皆同之、

〔中右記〕天永二年七月廿九日庚寅、撿非違使志資清(明法博士也)稱所勞由、久不出仕、因之使廳之政懈怠、可被改替歟如何、人々被申云、近代道之志只一人也、且可被成制歟、且可被移他官歟、以頭辨被奏此旨之處、明法之者中望撿非違使者申文四通被下、仰云、可撰申者、人々被申云、件人々才智慥不知給、慥被尋可被成歟、返上申文、

〔詠百寮和歌〕撿非違使

此道の仰をおぶる人を見よ五賢く身にぞ備る

〔徒然草下〕堀川相國(○太政大臣藤原基具)は美男のたのしき人にて、其事となく過差を好み給ひけり、御子基俊卿を大理になして、廳務をおこなはれけるに、廳屋の唐櫃見ぐるしとて、めでたく作りあらためらるべきよし仰せられけるに、此唐櫃は上古よりつたはりて、其はじめをしらず、數百年を經たり、累代の公物、古弊を以て規模とす、たやすくあらためられがたきよし、故實の諸官等申ければ其事やみにけり、

〔日本紀略四村上〕康保元年二月十五日壬戌、宣旨撿非違使之政以法家官人爲宗、而右衞門志赤染時用依勘事不從事、宜以右少史日下部豐金令參政庭者、

〔小右記〕長和五年五月廿五日戊辰、今日大學助大江至孝、推入威儀師觀峰女宅、欲強奸、彼法師加制止之間、已以拏攫、至孝以從者令申右三位中將能信、令遣雜人等欲打調法師之間、已遁去、弟子法師拔刀突殺亂入者一人、中將家人數多重來、搜取宅內財物等曳出、觀峰女將向中將家、自途中歸遣、其後使官人等依別當仰、馳向濫行所、追捕下手法師、此間宅內如掃、一塵無遺云々、廿八日辛未、資平(於攝政第、被問撿非違)

司、又條云、盜人不論輕重、停移刑部、別當直著鈦、配役所令驅使、如官當收贖、各依本法、自餘犯、並從常律、〇中略使等所掌、非啻准彈正之事、兼行追禁、推拷之法、然則至准彈正、須自見及風聞、卽糺彈其犯、但不可禁拷反坐、於從常律、當禁拷反坐、不可習臺事、因斯言之、所掌相兼、執行亦多、是則爲早糺人犯、忽決其罪也、而今或使等論云、旣云准彈正事者、爰知不可反坐誣告之人、比年所行、亦復如之者、方今嫌惡之輩、爲報私怨、僞誣死犯、告使所、隨卽追禁犯人、推鞫之間、久苦禁獄、遂不承伏之日、僅及問告人、于時所告之事是旣虛也、須依法反坐、而偏稱准彈正事、直從放免、无更反坐、因玆檢非違使之職、還爲招誣之府、非據行法令、何以絕此亂計、〇中略

延長七年九月十九日

〔政事要略六十一糺彈雜事〕被別當宣偁、爲政之宗、旣有剋限、而頃年官人遲著政座、臨夜歸却、繁劇之勤、豈合如斯哉、自今以後、自三月至于七月、辰三點、二八月巳一點、自九月至于正月、巳二點、以此爲例、至于其剋限、有官人不具停政、宜申其由、參政之間、途不獲止之犯人、有勘糺追捕之事、早差使者、申送其由、若爲避遲參之責、有申矯飾之障、官人臨事、宜相定行、勿以違失者、

天慶五年閏三月二十八日　　防鴨河使左衞門權佐兼丹波守平隨時奉

左大史多米朝臣國平仰偁、右中辨源朝臣道方傳宣、內大臣宣、奉勅、左右衞門陣宿直官人、每番各加置檢非違使也、寄事追捕、不直本陣、若向近所、尙以本人可令歸勤、若趣遠所、亦替他可令宿直、自今以後、更莫闕怠者、

長保元年十月二十五日　　左衞門少志美努理明奉

件宣旨、同被下右陣、

〔長秋記〕天永二年七月廿九日、明法博士資清稱病數年不出仕、無他道志、廳事擁怠、可被改補歟、然者可被任誰人哉、可定申者、內府示人々云、〇中略資清事度々雖有宣旨、猶不出仕、量知所勞無術歟、被補

用途
廚町
戒飭

雜例云、燒亡所、佐或著位袍、柏挾、帶弓箭、騎向、或著位袍、卷纓加緌、帶弓箭、著深履云々、此說得宜也、案、著位袍、著毛沓、無便、或說著布袴、加緌宜云々、古人如此云々、大夫尉以下皆布衣、帶弓箭、著毛沓、藏人尉、著青色之日著深沓、著位袍之時著淺沓、但不必著青色、隨便、燒亡之時幷更衣以後未著雜袍之前可著之云々、藏人尉奏之時、其儀解胡籙太刀等、置殿上口橋邊、有小舍人者給之、著毛沓者從主殿司宿往返、皆依非常著用物、在沓脫、有其憚之故也、

〔新和歌集五神祇〕檢非違使になりて、白襖始に鹿島社に參てよみ侍る、　藤原時朝
ゆふたすきかけていのりし白妙の袖にもけふはあまるうれしさ

〔師守記〕貞和五年十月廿八日乙卯、今日堀川入道內府被尋申云、檢非違使別當爲禮服公卿例、不定云々、

檢非違使別當爲禮服公卿例

後一條院　長和五年二月七日御卽位　禮服公卿內　宣命使　權中納言藤原實成、右兵衞督、○別當、
高倉院　仁安二年二月廿日御卽位　禮服公卿內　宣命使　中納言藤原隆季左衞門督、○別當、
土御門院　建久九年二月三日御卽位　禮服公卿內　權中納言源通資右衞門督、○別當、
順德院　承元四年十二月廿八日御卽位　禮服公卿內　參議藤原光親右兵衞督、○別當、

〔延喜式四十八左右馬寮〕凡檢非違使馬四疋、寮飼其冬月便割左衞門乾芻內四百斤充之、右寮飼右衞門料充之、

〔拾芥抄中末宮城〕諸司廚町　使廳近衞北、堀河西、猪隈東、

〔政事要略八十四糺彈雜事〕太政官符　檢非違使、應依法反坐誣告人事、
一右彼使別當中納言從三位兼行右衞門督藤原朝臣恒佐奏狀偁、太政官去寬平七年十二月二十二日、給使等符偁、檢非違使別當中納言兼行左衞門督源朝臣光奏狀偁、檢非違使式云、凡使之所掌、准彈正事、並依臨時宣旨行之、又條、諸司諸衞及諸家官人以下雜色以上等、若有犯過者、禁其身經本

〔續日本後紀 八仁明〕承和六年七月己丑、勅、令撿非違使等當色之外著雜色袍、

〔續世繼 四白川のわたり〕笏は束帶にてぞ持つことにて侍るを、このゐ裝束にも、ことに隨ひ人によるべきにや、撿非違使などは常にもち侍るめり、

〔山槐記〕永曆二年〇應保元年四月廿五日丁卯、予問申云、大理狩衣裏有無如何、色又如何、命云、縹裏表襖、茶染襖、皆著之也、　申云、白裏如何、　命云、打任ハ不著、但遠所頗月見之時著縹、白裏也、　申云、火丁看督長有著烏帽之時哉、　命云、火丁內裏燒亡之時著之、是率爾之儀也、　爲故實一兩人必令著烏帽歟、取彼白羽大理負之、者烏帽者可爲早參之儀也、大理負白羽之時、火丁三人負白羽也、今一人ハ不負、而惟方入道亂逆之時、火丁皆負之、我又負之、無謂事也、中院右府入道、高野御幸之時、火丁著烏帽云々、看督長布衣遠所之時常事也、當職之時、美福門院自熊野御還向之時、參向稻荷之時令著之、白張淺黃隨思令著也、　申云、隨身布衣可著何色乎、　命云、淺黃青仁香等歟、

〔侍中群要 五〕爲撿非違使藏人向燒亡處時、　束帶若衣冠胡籙等著青色、可著毛沓、位袍可著淺沓、降雨可著深沓、但必可著青色也、但更衣間未著新節宿衣時、著青色可有儀云々、

〔清獬眼抄〕一供奉行幸廷尉向炎上事

抑大夫尉重定朝臣、爲經朝臣、平尉有成、已上三人束帶平胡籙、行幸供奉之故也、參上、此廷尉自閑院內裏參上、被寄御輿之時云々、各下馬、參宮中令破却西角舍屋者也、但各不帶替野矢、若白羽矢之條不被甘心者也、

〇中略

又平尉成國、源尉康綱、志基廣、府生友忠、著布衣參上、太無謂事歟、行幸之日、諸衛府者布衣不可往行洛中、況其時火所不及沙汰事也、申奏之時可參內、而不供奉行幸著布衣參內不可有憚歟、

〔清獬眼抄〕一燒亡事

西宮抄云、撿非違使追捕火事間不著綏、只卷纓帶弓箭云々、

服裝

右臣實行言、伏以龍躍鳳翔、先任鱗翼之方、宜風導俗、必俟皐呂之臣、誠是國之器用、資于賢良者也、臣去保安三年十二月十七日任權中納言、同廿二日兼右衛門督、補檢非違使別當、大治四年十月九日轉左衛門督、前後仁恩、夙夜戰慄、揣分於己、方寸失圖、苟重陰德之嘉績、謬昇月卿之崇班、編削少功、何分枝條於三尺之竹、進退易迷、未佩芬芳於四照之花、謹撿家譜、曩祖貞信公始爲大理卿以來、累祖相繼行此職者、都盧六人也、或三四年、或六七年、各上讓章、早遁執法、雖至遲者無過十稔、昔郭氏七代之遺風、隆漢稱其美、今微臣七代之餘烈、頑魯招其訕、況辨論難振、誰吐棲君卿之詞、兢惕自深、偷慕臺孝威之志、既多世哲之繼跡、宜還時髦之差肩、伏冀乾慈曲垂宸照、紫庭夜月、縱抽獻替警衛之勤、棘署曉霜、將避聽斷糺彈之職、不勝荷懼之至、修狀以聞、臣某誠惶誠恐、頓首頓首、死罪死罪、謹言、

天永元年五月日　　　　正三位行權中納言兼左衛門督藤原朝臣某上表

〔本朝續文粹五〕辭檢非違使別當

請罷檢非違使別當職狀中納言實季　　　　敦基〇基一本作光朝臣

右臣實季言、竊以檢非違使別當者、司刑議獄之職、防姦閑邪之備也、非其人則不居、唯惟賢之所任、故皐陶爲大理焉、有虞之君彰德、張釋爲廷尉矣、隆漢之民服心、先哲舊蹤往訓眼、臣謬以叢脞之質、久帶李法之官、晴聽斷而寒心、難決殘夢於左水之浪、醉仁恩而赭面、猶謝旨酒於東海之門、然間春風七廻、臨棘署而勤舊、秋霜三尺、行竹令而威輕、上招蒼穹之譴、下貽黃砂之寃、休退之志、寤寐其徂、方今庶民之仰聖明也、誰觸殷帝一面之網、微臣之繼父祖也、其奈吳君三代之塵、恐令至治之俗、更謂妄授之時、伏冀洪慈弭此顯職、將致吐納於龍作之任、兼抽警巡於虎旅之陣、不耐悾款屛營之至、修狀以聞、臣實季誠惶誠恐、頓首頓首、死罪死罪、謹言、

承曆三年三月四日　　　　正二位行權中納言兼左衛門督藤原朝臣某上表

〔延喜式四十一彈正〕凡參議已上檢非違使別當已下、府生已上、聽著桙楸、

辭別當

前大納言同雅房土御門中納言同、以上舊大理也、等佇立大理後布障子外伺見之、予○藤原公衡加其所、只今覽別當宣之間也、著座官人左大尉章隆朝臣奥、右少尉章保朝臣端、左少尉職隆朝臣奥、左少尉重友朝臣端、左少尉中原明綱奥、藤原重直同、中原章任同、同明證同、同章任端、同章夏奥、右少尉同章綱端、同章榮同、同章材同、左大志同明治奥、左少志紀業知同、右少志同章員端、右府生中原倚名、○註略等也、次第如例、吉書覽了後、大理起座、官人平伏、官人自下臈起座、列中門外左北右南如例、人々於中門內伺見之、次出門外、行免者、今日無雑犯也、次官人還列庭中、次歸著廳座、申次可出逢也、而早出云々、仍官人等云々退出、○下略

〔師守記〕曆應三年正月廿二日丙子、今日使廳廳始延引、依雨也云々、　廿三日丁丑、今日使廳廳始也云々、

○按ズルニ、藤原資明、曆應元年九月十六日檢非違使別當ト爲リ、當時猶ホ在職中ナリ、故ニ此廳始ハ蓋シ年始ノ開廳ヲ云ヘルモノナラン、

〔本朝續文粹五〕辭檢非違使別當

重請罷檢非違使別當職狀參議公成　明衡朝臣

右公成言、謬以樗智之身、猥居李法之任、刑書不明、更慙燭下之丹筆、心機易紊、寧辨雨後之黃絲、職之過涯、惴惴而已、爰久纏疾病、漸送光陰、須鴻術於上池之方、何尋馮字於左水之夢、仍去二月十九日、修狀辭讓、而祈請無容、春風少溫和之聲、兢惕不止、秋露增危殆之思、然間霧氣難霽、病葉彌畏棘林之風、霜科忘威、勁節未彰柏臺之月、伏羨廻蒼穹之至明、照赤地之懇惻、停此清班、授彼碩德、則細瑟之宜克諧、鄭國楚桃之譽自芳、張維之法無爽、齊客化枳之談永絕、不勝憂懼征營之至、臣某誠惶誠恐頓首頓首、死罪死罪、謹言、

長曆二年月日　參議正二位行中宮大夫兼左兵衞督備前權守臣藤原朝臣某上表

請罷檢非違使別當職狀中納言實行　敦光朝臣

廳始

〔山槐記〕治承三年正月三日壬戌、今日有廳始事、未剋官人等來、左尉中原章貞、源仲賴、源季貞、志清原季光、安倍資成、府生安倍久忠、右尉中原基廣、志中原明基、府生大江經廣等也、明基申云、見參之外重奉官人、左大夫尉大江遠業、志中原清重、右尉平兼隆、志中原重成、府生紀兼康等也、今日延引之由披露云々、若承誤件日遠業不參歟、只今遣召了、其後參入者、定及晚頭歟者、仍予著直衣冠出廳、章貞覽吉書、其儀見去年記、吉書至于久忠許之後、予起座歸、又官人等相率立門、糺雜犯一人、仲賴彈之、事了或歸著廳、或退出、此間淸重重成來、申剋遠業朝臣來、可有免物歟之由、明基兼所申也、先例有無不定、就中見囚帳無輕犯者、仍無免物、去年十二月廿九日渡此亭、三條堀川立廳屋、依無殘日、無廳始、今日所始也、　十九日戊寅、除目入眼也、○中略檢非違使別當平時忠、三箇度還補、希代之例也、二度獨無例者也、初度解官、第二度依建春門院御事辭申、然而□被下辭書、左□□雅行廳事中陰以後返給、無程辭退、此間光雅又爾度行廳事、其後予補別當辭申替、又被補、世以不甘心歟、使宣旨左衛門尉紀久光、解官右衛門尉平兼隆、廷尉也、不知其故、父信兼申行云々、此外無殊事、任人不具注、見除目、　二月二日庚寅、別當時忠卿還補時忠廳始、先被參院、熊野御精進屋、左尉源季貞在共、次參內之間甚雨、歸亭之後有廳始、時用軒廊、予自去々年四月至于去年十二月寄宿彼亭、以件廊爲廳、今又以同所爲廳屋云々、左尉中原章貞、源仲賴、右尉中原基廣、志同明基、同重成、府生紀兼康、安倍久忠著廳、久忠遲參、大理直特加勘發云々、　十六日甲辰、別當別當著陣事時忠著陣、正月五日敍正二位、十九日補大理、第三度今日始著陣、無前駈、召具看督長、無官人云々、　別當宣符施行、使廳政著陣始事有使廳政云々、

〔吾妻鏡三十二〕嘉禎四年○曆仁元年二月廿六日壬寅、將軍家○藤原賴經令補檢非違使別當給、　廿九日乙巳、大理廳始也、檢非違使廿六人皆參、其中五位尉八人云云、大理出御、各逐面拜云云、及晚將軍家御參內、供奉人同去廿二日、至曉更渡御于前右府幷准后御亭云云、

〔管見記〕弘安十一年正月十三日己亥、今日新大理通重卿廳始幷拜賀、去冬京官除目、任左衛門督、補檢非違使別當、細細事被示合、又可奏子細也、每事不審云々、來訪哉之由、嚴親卿被示遣、仍申一點著直衣、青張指貫著下袴、行向大理亭、三條坊門萬里小路亭、東禮、門口之於姉小路西門下車、昇自西面方、先是廳始已始、○註略嚴親前亞相直衣下結萬里小路

實春爲因幡御目代勤仕之、午時許廷尉參院內給、裝束闕腋袍冠卷纓(不加緌)平裝束之劒(野劒、不令入尻鞘)令相具平胡籙給、(懸緌)車(立隊)立追前、(加叙貢佐)火丁二人(烏帽子、赤衣)如常、白羽矢仁止加利矢ヲ差ス、

御共衞府　左衞門尉藤時成　左衞門尉藤康言　左兵衞尉平義行(土屋兵衞)　左兵衞尉平重保(師岡兵衞)　左兵衞尉藤弘綱(源八兵衞)　左馬允平重資(澁谷馬允)　予(無官闕如之)

此外武士百騎許、爲用心所被見也、于今平家有四國餘、散有洛陽、仍所被用心也、今日仍所々參會不令具看督長給、　此外之事略之畢、九牛一毛ヲ誌耳、

〔源平盛衰記　四十一〕義經拜賀御禊供奉(附)實平自西海飛脚事

十月(○元暦元年)十一日義經拜賀ヲ申、拜賀トハ使ノ宣ヲ蒙テ、從五位下ニ敍シケル、御說申也、其夜內ノ昇殿ヲユルサル、火長前ヲ追ベシヤ否ヤノ事、內々大藏卿泰經卿ニ尋申ケレバ、希代ノ例ナレバ、身ニハ不存トテ、梅小路中納言長方卿ニ被問ケレバ、殿上ノ六位ノ撿非違使、前ヲ追ヘリ、五位尉トシテ相並テ、雲上ニ在、前ヲ不追、頗光花無歟ト被申ケレバ、前ヲ追ヘリ、總テ其作法佐ニタガフ事ナカリケリ、院御所ニテハ御前ヘ被召ケリ、伴ニハ、布衣ノ郎等三人ヲ召具ス、左衞門尉時成、右兵衞尉義門、左馬允有經也、此外武士三百餘人、路次ニマジハレリ、用心ノ爲ニヤト覺ヘタリ、(○下略)

〔管見記〕弘安十一年正月十三日己亥、今日新大理(通重)廳始幷拜賀、(○中略)官人等云々退出、次大理改著束帶、(無文帶、紺地平緒、沃懸地細劒、無文裾、長自踵四尺、闕腋長可四尺、縫腋三尺五寸)萬里小路、予等同在此所扶持、出御門先是退出、(○中略)予暫候弘御所邊、不經程花山院中納言左大辨等來加雜談、亥終剋別當爲拜賀參入、(毛車皆具、予備遣之、○中略)左尉源致光、(布衣冠如例)在共不具一員、彼家例云々、於中門申之、(右少辨俊仲申次之)舞踏、次東二條院御方(申次同前)又舞踏(依國母也)次退出、後聞、先參內裏、(藏人頭俊定申次之)次參皇后宮御方、次參常盤井殿、次參萬里小路殿(新院幷大宮院)、次參親王御所、(不拜直昇、寄儀歟)次參向關白許、(不拜直退出云々)次歸家云々、以上所傳聞也、

近邊宅人守(○人守、即四府守)爲座、然而猶可用庭上、庭上爲座敷弘筵、但左右一繭座敷横座(紫端疊各一帖)饗應畢之後、看督(裝束如常)各入見參退出畢、又別當隨身火長等到來、同令饗應之、但各卜近邊少屋爲座、或說隨身ニハ以待廊有爲座之人、然而多用少屋歟、亡父用少屋云々、隨身ニハ懸盤、近代有用高月(タカツキ)之人、可謂非禮、宜守家風之跡、莫好違法、肴二種各前別居之、酒一瓶出之、又火丁(○火丁、即火長)中(仁)肴二種居折敷前別居之、酒一瓶同賜之、(但火丁者折櫃(仁)加擅敷二種、酒一瓶、一貫云々、可無其難云々、)又左右佐火丁率來、先例畏之時、大破子之外全無饗之儀、然而近代稱入見參、各以率來、是無指費、似無會釋、仍與酒肴各謝遣云々、又本府催吉上等率來、隨於饗應、次第如常、(○中略)

一伊豫大夫尉義經朝臣畏申事(是可稱○畏○申歟、其後八月六日任左衛門尉、即蒙使宣旨、官元無去九月三日敍留、未申畏以前也、)

元暦元年十月十一日丙寅、被申畏、午剋著束帶、今日著白襖、束帶以前冠垂纓、(有文)袍、(赤衣、縫腋)牢比、(青打、但今日不入之)下襲、(柳)赤帷袙、(紅染)單衣、(同染)表袴、餝劒、(後懸有文)平緒、(紺地丸文)黃帶烏犀丸鞆(但或進方云々、然而有時議、用丸鞆)、淺沓、笏、扇、束帶畢之後、被仰昇殿之由、勅使御倉小舍人(衣冠)參上、徘徊中門之邊(自上)、直講師茂(著衣冠)中之、賜絹一疋、次院御方小舍人(衣冠)參上、同賜疋絹(今日內院昇殿共被聽之)勅使歸路之後、外記史部烈參、請官符如常、直講乍入宮請取之、賜絹一疋、白布三段、(但白布三段入宮之)史部退出、廷尉進出中門廊、左右看督長寵見參、其儀當中門妻戶(天)左右二行引烈、(左北右南)弓以弦(仁)挾見參(天)差寄(ス)、先左次右、廷尉乍立取之、引懸紙(天)披見之、如元卷籠紙(天)賜直講、其間直講傍蹲居、(○中略)

元暦二年乙巳正月一日、天霽、新大夫判官(義經朝臣)有御出仕、院內口御出仕以前、左右看督長等爲入見參引而參入、以庭中爲座云々、申次之、各給垸飯一具、(一具、別交菓子一、外居飯一、外居肴十種、內鯉毛鳥、大瓶一、土器肴折敷等也、)二人守不參云々、去年十二月廿七八日之比、以下官看督長囚守來朔日申可參上歟之由、仰合識者之人々處、不參藏人尉之許、是又爲殿上人、今者相同敘負佐、爲五位尉殿上人之例、未及聞、然者不參之條可宜歟之由各示之、然而看督長者可來也、於人守者不可參之由被下之、仍看督長所參也、垸飯大井次郎

衣冠、下家司二人（主計屬範行、左史生康定、）取之、（官符成前日持來有例云々）次使部二人持來官符、（入筥）史大夫盛職取之、依書加他人書寫返給之、賜祿、（各一疋、絹、但代白布各一段、）右馬允親長成宗取之、次持來兵部移、（入筥）史大夫盛職取之、各進出前庭、致正高聲數返唱之、留移返宮給祿、（史生二人、書生一人、各六丈絹一疋、使部三人、各白布一段、）勘解由判官祐俊、內藏允師倫行之、次權佐著束帶著座、次一獻、民部大夫盛周勸盃、民部大夫久明取瓶、（提、）無兩三獻、次內藏允師倫取圓座一枚、敷中門廊、權佐居圓座、次看督長二行相分各十餘人參進前庭、持見參圖交名立左右、（上萬各一人插見參幷圖交名等於弓、之弓閒插之弓）右衞門尉宗季下逢取之、權佐披見之不返給、次於門中（兼立車於門外）駕車、（兩相公會也、出門之時、火長追前、）看督長前行叱呵雜人、

路次行列　車（新調、小八用如例、牛童青仁黃衣、）　次小舍人童（白張下袴）（纐纈衣）　門部隨身二人（褐白袴蓑壓巾）　狩衣胡籙

火長二人（赤狩衣白羽矢）　雜色六人（白張平禮）（白衣下袴）　笠持（白張）

權佐裝束　冠　袍（赤）　下襲（放免著有文）　表袴（浮文）　袙（赤）　單衣（同）　帶　劒（野劔蒔繪等、左衞門權佐長方借進也）　平絹（紺地孔雀丸、右兵衞督借進之、）

〔吉記〕治承五年四月十一日丙辰、今日一臈判官源兼資申長於禁裏、不拜之由藏人等見物談之、觸鼎殿馬、雜色白張、童橘、調度懸青丹著之、相具事云々、

〔大夫尉義經畏申記〕（部類抄云）大夫尉源義經定補撿非違使事、付使廳行事目錄記之、總悉以略之畢、撿非違使分有一卷、不如以之略之、

定補撿非違使事（附使廳行事）　始補任後朝事（尉以下府生懸太刀於出居事、）　請官符事　初著白襖事　申長事（附所所事）　觸文事　劒裝束事　尻鞘事　共者雜事　畏翌日參大理事　聽烏帽子事　官符奉行以前不聽烏帽子事　不著白衣於冠事　革襪寸口事　大風可著冠事　三淺事　白襖著三度後可著平禮事　可著三色事　有五色事　大夫尉申慶賀事〇中略

左右看督各一具、左右囚守各一具、（已上酒肴四具）給畢、以車宿看督囚守同時來之時、以車宿看督長爲座下、

拜賀

同八年　左佐從四位下橘爲義正月□日敍從四位下、宣旨如元、
治安三年　左佐從四位下大江保資正月七日敍從四位下、萬壽元正月廿六日任信乃守、
萬壽二年　左佐從四位下藤原定輔
長元八年　左佐從四位下藤原隆佐正月七日敍四品、
永承元年　右佐從四位下源長秀十一月十三日敍四位、天喜二二月二十遷任備前守、
治曆三年　左佐從四位下橘爲仲正月五日敍四品、
承曆二年　左佐從四位下藤原行曆正六敍四品、永保三二一任阿波守、
天仁二年　左佐從四位下藤顯隆正月六日敍從四位下、佐如元、元藏人右中辨、
天治三年　左佐從四位下藤行盛十一月十七日敍從四位下、長承二年五月六日任攝津守、
久安五年　左佐從四位下藤光頼八月廿二日敍四品、久安六十廿七佐、[illegible]
承久四年　左佐從四位下藤原經資八二敍四品、嘉祿二正廿三遷任兵部卿、

〔玉英記抄官位部〕建武元二、小除目、從五位下橘正成、勳功賞從五位下橘正成、檢非違使如元、

〔中右記〕大治五年十二月九日、新檢非違使重宗左府生今日申慶、但不拜云々、是使之作法也、

〔山槐記〕仁安二年二月十四日癸未、日向守藏人右衛門佐長申事向右衛門權佐長所、今彼次第談之、朝間小雨、午後晴、今日藏人右衛門權佐經房拜申也、去月廿日補廷尉、昨日可申慶、而依甚雨延引、巳剋向彼亭、四條南、東洞院西、頭之人々平宰相親範、右兵衛督時忠、右四位左少將修範朝臣、左少辨爲親、右少辨重方、已上廷尉、兩人中宮權大進光長、民部少輔盛方、治部大輔行範、兵部權少輔光綱、春宮少進平棟範、右衛門尉源經業、也、廷尉來坐寢殿東庇、此三箇間垂母屋簾、南西副立四尺屏風、敷高麗端疊、南上二行、奥端各三枚、饗居饌、上達部二人料各四本、殿上人料各三本、已上高坏有菓子、先々例又或便所居饌、殊親昵之輩著座云々、今度不然、不待人々來集、爲親重方來之後、權佐著白張、平禮出居、本府差送狩、隨身番長一人、門部二人、火長二人、維色、所敷布縁長疊二枚、居机饗四前、番長門部著之、火長等不著之、無勸盃、給祿、番長門部六丈絹各一疋、火長中布一段、著

云云、此事太相叶御意云云、彼狀云、

正五位下行左衞門大尉中原朝臣廣元誠惶誠恐謹言、殊蒙天恩被罷所帶左衞門尉撿非違使職狀、

右廣元、去年四月、任明法博士左衞門大尉、即蒙撿非違使宣旨、三箇之恩、一所不辭、是以同十一月五日、先遁李曹之儒職、愁居棘署之法官、竊以累祖立身、雖趁北闕之月、一族傳跡、皆學南堂之風、而按尉者王之爪牙也、專爲輦轂之警衞、廷尉者民之銜勒也、宜致囹圄之手足、爰廣元性受暗愚、爭辨黨讐兩日之夢、心非明察、寃隔紫雄三代之蘆、不草謝桑於非分之任、竭忠於方士之誠耳、望請天慈、曲照地慮、然則內避瞰鬼之殛眸、外弭識人之衆口、難慰悚兢之至、廣元誠惶誠恐謹言、

建久三年二月廿一日　　正五位下行左衞門尉中原廣元、

〔勘仲記〕弘安七年七月廿一日丁酉、關東相本判官敍留事、可宣下之由、帥卿奉書到來、即內覽令宣下了、任本儀先可給從五位下位記、次撿非違使如元書口宣兩度奉上卿了、一度又宣下近例云々、件書樣、

左衞門少尉平宗明

如元爲撿非違使、宜賜從五位下位記、

〔勘仲記〕弘安十一年（〇正應元年）正月五日辛卯、入夜參內敍位議、（〇中略）（四位廷尉事）左大辨、宰相、少納言親平朝臣、中務口輔氏家參陣、抑經親四品廷尉兼耳目者也、近例頗遜逅歟、夕郞事、去年被超越俊光之間籠居、今爲雪會稽之耻有四品之昇進歟、太不可然、四位廷尉佐年々、

天慶五年　左佐從四位下平朝臣隨時、（去年四月、遷春宮權亮、）

長德元年　右佐從四位下高階信順、（正月七日敍四品、九月□日、佐辭退、）

寛弘三年　左佐從四位下允亮、（正月七日敍四品、宣旨如元、同年正月□日任河內守、）

修理左宮城判官從五位上左大史兼備前權介小槻宿禰在判

仁安二年正月卅日

太政官符彈正臺

正五位下守右中辨兼行左衞門權佐藤原朝臣長方　正五位下行右衞門權佐藤原朝臣經房

正六位上行左衞門權少尉大江朝臣遠重　正六位上行左衞門權少尉橘朝臣盛康　正六位上行左衞門權少尉平朝臣成房　正六位上行右衞門權少尉藤原朝臣爲範

右太政官今日下左右衞門等符偁、正三位行權中納言兼左兵衞督藤原朝臣實國宣、奉勅、件等人宜爲檢非違使者、府宜承知、依宣行之者、臺宜承知、府到奉行、

從四位下行權右中辨平朝臣在判

修理左宮城判官從五位上行左大史兼備前權介小槻宿禰在判

仁安二年正月卅日

〔玉海〕治承三年十一月十九日癸酉、今夜又有除目云々、〇中略

止使。宣旨。　左衞門少志中原清重　右衞門志同重成　右衞門府生安倍久忠〇中略

使。宣旨。　源光長　藤友實

〔吾妻鏡七〕文治三年八月廿七日乙未　一北面人々任廷尉事

此事、近年諸人望也、先々不輙事歟、能々撰其仁、可被抽補事、〇中略

以前既面々含子細畢、若於不拘頼朝成敗輩者、隨被仰下、可加治罰事、

右條々、存公平、所令言上也、

文治三年八月廿七日

〔吾妻鏡十二〕建久三年三月二日甲戌、廷尉廣元書狀自京都參著、當職事、既上辭狀訖、其案文謹獻上

天永二年正月廿三日丙戌、藏人少將忠宗仰下撿非違使宣旨、宗清、藏人有業、

〔山槐記〕仁安二年二月十四日癸未、藏人右衞門佐長申事、今日藏人右衞門權佐經房畏申也、○中略今日不申藏人方吉書、又不被向府督許云々、兵部省移右衞門府、

正五位下藤原朝臣經房

右人去月卅日任權佐、仍移送如件、移到任用、故移、

仁安二年二月七日　正六位上行少錄大江朝臣範重　正六位上行少丞卜部宿禰基忠

正三位行藤原朝臣在判　從五位上行大輔藤原朝臣　從五位上行權大輔藤原朝臣　從五位上行少輔兼伯耆守平朝臣　從五位上行權少輔藤原朝臣

太政官符右馬寮

正五位下行右衞門權佐藤原朝臣經房　正六位上行右衞門權少尉藤原朝臣爲範

右太政官今日下右衞門符偁、正三位行權中納言兼左兵衞督藤原朝臣實國宣、奉勅、件等人宜爲撿非違使者、府宜承知、依宣行之者、寮宜承知、符到奉行、

從四位下行權右中辨平朝臣在判

修理左宮城判官從五位上行左大史兼備前權介小槻宿禰在判

仁安二年正月卅日

太政官符右衞門府

正五位下行權佐藤原朝臣經房　正六位上行權少尉藤原朝臣爲範

右正三位行權中納言兼左兵衞督藤原朝臣實國宣、奉勅、件等人宜爲撿非違使者、府宜承知、依宣行之、符到奉行、

從四位下行權右中辨平朝臣在判

去年蒙宣旨、而誤以他人被下宣旨、令及今年、若給宣旨於他人、天下之人可大驚歟、又匡衡者秀才、自中古以來、不知爲秀才者蒙使宣旨之者、左右可在勅定、恒昌爲文章生、身候雲上、所申可然、但文章生次第右衛門尉幾忠已在上臈、彼已當其運、又維敏可有追捕者、爲貞盛子、頗揚名、其理運相當、又有使廳奏乎、爲長幾忠維敏三人得道理者等也、抑唯可在勅定、若以他人被定仰者、天下聚口歟者、依御物忌不奏、入夜歸參內候宿、　五日戊辰、早朝奏太相府報奏之趣、被仰（〇圓融）云、以左藤原爲長、師賴、右大江匡衡、可爲檢非違使者、　七日庚午、早朝參殿、申檢非違使之仰旨、被奏云、前日奏聞其趣、今重有此仰、又更何申左右、隨勅命者、卽參大內奏聞、仰云、左藤原爲長、同師賴、右大江匡衡可爲檢非違使之由可仰上卿者、下官奏云、日來海賊蜂起、緣海調庸已以難運、愁苦無極、往還失聞其計如絕、就中間者賊徒打鼓叩金、劫往還人、掠隨身物、依無朝威、早可被定仰歟、仰云、左大臣與諸卿相共可定申者、　八日辛未、早朝參左府、申檢非違使宣旨事、（左藤原爲長、同師賴、右大江匡衡、）

〔類聚符宣抄七〕太政官符　左衛門府（承知下彈正、左馬寮、　外印）

正六位上行少尉平朝臣中方　正六位上行少志惟宗朝臣博愛

右左大臣宣、奉勅、件人等宜爲檢非違使者、府宜承知、依宣行之、符到奉行、

左大辨　左大史

長保三年二月三日

〔公卿補任（後一條）〕寬仁三年（己未）

前太政大臣從一位藤道長（萬壽四年、以左衛門志豐原爲長補檢非違使、雖無其闕、依造塔（法成寺塔）行事也、）

〔扶桑略記（二十八後一條）〕萬壽四年十一月廿六日壬戌、以右衛門志豐原爲長補檢非違使、但檢非違使雖無其闕、共有造塔之功、殊被抽賞也、

〔中右記〕嘉承二年十二月廿五日丙午、今日檢非違使宣旨二人被下、（藏人左衛門尉尹通、右衛門尉親實、）

〔吾妻鏡三十二〕嘉禎四年〇暦仁元年二月廿六日壬寅、將軍家〇藤原頼經令補檢非違使別當給、

〔東海一漚集一〕寄前大理藤納言洞院實世〇

世運醍醐五百春、忻逢聖德有賢臣、龍盤虎踞基依舊、鳳舞鸞翔儀轉新、寂寂庭中無獄者、潭潭府内聚文人、古來獻替忠良事、豈棄蒼生辭逆鱗、

〔公卿補任光嚴〕正慶二年癸酉

前權中納言正三位藤實世五月十七日詔爲現任、并左衛門督使別當、

〔政事要略六十一糺彈雜事〕近京地津頭糺察事、在雜部、檢非違使式文也、近京條見彼雜部、巡事依此式歟、

檢非違使

請被特授六位官人等事

右衛門少志正七位下水車貞椀　府生正七位上當世宿禰基宗　右衛門少志正七位下惟宗朝臣善經

右謹檢案内、七位已下者、補檢非違使之日、特授六位、望請依承前例、將被特授、謹請、

寛平六年八月十一日

右衛門權佐源朝臣當時

左衛門權佐源朝臣唱

別當中納言兼左衛門督源朝臣光

爲存古事載件文

〔小右記〕天元五年二月四日丁卯、祈年祭等延引、仍今日有大祓、召御前被仰云、檢非違使別當宣旨可下之、左衛門尉藤師類、左府〇源雅信經年擧申者、臨其期已以相違、右衛門尉大江匡衡、儒者當仁、平恒昌身爲侍中、所申難檢、同維敏放使廳擧、件等四人中、太相府〇藤原頼忠可定申者、〇中略太相國被申云、師類、左府年久擧申者也、但同府尉藤原爲長、一道成業者、又爲勘解由判官十二箇年、其後能遷左衛門尉、

也、早歸令內府不本望由可令奏達也、又被仰云、御堂御子數多、其中有任件職者、不任人心、兩端能々可相量也、承此旨歸洛、歸參內大臣殿申件旨、早令參內給可令奏、不本望之由所申也、內大臣殿霍亂御氣御座、不能令參內者也、仍以件趣申右府〇藤原師實可令奏達者、仍參內申付右府、右府云、今夜御寢已了、明朝候天氣可申者、仍下官退出、　十二日、內大臣殿依不例御自夜前所候也、早旦自右府御許送書云、彼事尚可候天氣候者、依不堪切々參內、對面右府間申天氣左右、答云、件事一定思食事也、重被申左右有憚者、下官仍退出歸家、申剋頭中將〇源隆綱送書云、可爲檢非違使別當宣旨下了者、戌剋許、官使部以宣旨來云、孝信宿禰所承也、件宿禰云、付右衞門志經職可令獻別當者、仍雖罷向經職許、罷違不相會、仍爲恐及明日所持參也、下官答云、猶尋經職可付彼者、間此事使部至經職家付了、入夜經職持來件宣旨、見了取置了、今日未明參宇治殿、申成別當不堪由、殿下被仰云、縱云有勳勸難避歟、於此事無止事也爲悅者、

〔玉海〕安元三年〇治承元年正月廿五日丙寅、早旦人傳云、除書雖有延引之儀、忽以被行之、　廿九日庚子、未剋定能朝臣來語除目事等、〇中略抑除目夜被仰下檢非違使別當、其間有違亂事云々、先被仰時忠還任之由、次被改忠親、件事職事莊淸書上卿等之間有失錯歟、法皇〇後白河注任人於一紙宸筆被新博陸、卽忠親也、博陸又被下知其由了、而有此望失、大略職事之誤歟、其故兼風聞、時忠還任之由云々、除目翌日伺候院北面、檢非違使等依內々天氣先向忠親之許、而稱僻事之由追歸之、仍向時忠家喜悅謁之云々、然之間改定、時忠大歎息云、本自全不被此望、拜除之後忽被改之、雖不過事現、早隨之高名太以難堪云云、　二月廿五日乙未、申剋大夫史隆職宿禰來、呼前談話雜事、令申事等、〇中略檢非違使別當違亂事、彼夜光能朝臣慥依殿下仰、以忠親卿爲別當之由仰上卿了、而上卿誤仰時忠云々、是光能所語也者、是又相違、世間之風聞歟、

〔尊卑分脈十一藤原〕公季閑院流長元二十七薨
—實成檢別當
—公成檢別當
—實季檢別當
—公實檢別當

新任

宣旨體

官位姓名

官位姓名若及二三人（及二三人者）　若及二三人者傍書、已上二字可爲檢非違使年號月日也、依風記不書請由及承人官位姓名、

年月日

〔任官勘例〕檢非違使別當不被任年々

自承和九年至嘉祥二年八箇年、貞觀十年至次年、自永保四年至應德三年三箇年不任之、

〔朝野群載〕補檢非違使別當二枚

大納言從三位左近衛大將春宮大夫藤原朝臣時平宣、奉勅、以參議正四位下行右衛門督源朝臣貞恒、爲檢非違使別當者、

寛平五年六月十五日　右衛門權佐藤原朝臣弘道

右少史大春日利用仰云、右大辨紀朝臣長谷雄傳宣、右大臣宣、奉勅、以中納言兼左兵衛督平朝臣惟範、爲檢非違使別當者、

延喜八年三月五日　左衛門府生阿部

〔任官勘例〕檢非違使別當近衛大將兼任例　能有　貞信公○中略

非參議四位爲檢非違使別當例　利尹

〔水左記〕治暦三年五月十日丁亥、皇后宮○後冷泉后藤原寛子御心地不例御座、仍下官○源俊房宿直、内大臣殿○源師房令參内給、令退出給、時召下官告云、可爲檢非違使別當、有天氣如何、下官申云、不堪之上不本望候、猶以其由可令奏給者、又被仰云、事一定也、不可申辭退者、下官又申云、參宇治殿○藤原頼通可隨御氣色者、又被仰云、告事也、　十一日參宇治可被爲執金吾天氣候由、内大臣夜前所告候也、而件職不本望之上、不堪候者也、不可被成之由可然者可令奏給之由所執申也、被仰云、於今者大小善惡事不知者

大辨弁造八省裝束使等補之、藏人所小舍人補例、紀貞光一人例、延喜八、九、十九、延長九、承平二、

〔西宮記臨時一〕諸宣旨

撿非違使別當事上卿奉勅、仰弁官下宣旨、書官符一紙、召弾正於左衛門陣仰下、承平六年六月十七日[illegible]云々佐已下、以官符下弾正、京職、馬寮、本府、

〔有職問答二〕一撿非違使別當事

中納言參議之外不補之、院ノ別當又藏人所ノ別當ニハ補候也、大臣の内可然上首被勤之、別當宣事只一人也、位署には別當藏人別當ノ事也、此時ハ藏人別當ト書、内大臣右大臣など本官のうへに書之と被仰出候、其分候哉、

〔有職問答五〕一撿非違使宣事

以前被仰出候には、口宣などは出候はず候、出納の言葉にて藏人方之事ハ出納候使ノ宣旨ハ官ニ仰セ候ベキニテ候、以前ノ卷物ニ注之、又臨時ニ補スル時、口宣ヲ書テ下候事モ近例也、被申渡よし候、其勅命の樣何と被仰聞候哉、使宣旨は悉此分候哉、又使宣旨により候て口宣など被成事も候哉、大臣など令任給ハ必可行節會ニテ候、大臣檢非違使タル事曾以不可有之候、候も替まじく候哉、

〔西宮記臨時二〕下撿非違使宣旨　敕免禁色事　雜袍事　帶劒上卿下事宣旨　鬪亂事　殺害事成内侍宣

所宣、官　御鷹飼著摺衣緋袴事　敕免事上卿召官人仰宣、　諸有宣旨被仰下事保内侍宣

件使雜事別當上卿一向仰行、若非納言之別當及臨時糺彈非違雜事者、奉宣旨上卿令辨官召仰耳、是則諸國申請使官人事、幷所所愁申鬪亂等之類也、或又上卿召府生以上於陣膝突宣旨、禁色等類但五位者直就膝突、六位先候庭前、隨上卿氣色著膝突、

〔侍中群要九〕使宣旨

撿非違使宣旨、上卿奉之、藏人頭書宣旨下上卿、但藏人尉蒙使宣旨之時、不待官符、先出殿上口切裾、成懸之時、即申慶賀、有本官官人不申云々、又官符不成之間、若人數不候、可供御膳、或入人數候之、雖勤宿侍、晝時不候、出入之間、雖著褏袴、不具火長隨身、又不騎馬、

〔侍中群要九〕申恐事關白殿、府督別當等許歟、或私主、

業生幷諸國掾直補廷尉、非無蹤跡、明法得業生讚岐時人任左志、同完人永繼任右志、又大和掾藤原好行任右尉等也、成直明法擬得業生兼居司馬職、准彼等例、欲補志闕、惟雖愚歎累葉之欲絕學、又雖拙嗜文章而齡闌、今仰無偏之化、誰謂非據之任、畢奏之處、何無哀憐者、今加覆審、所申有實、方今使廳之政、法家爲基、當時所在、道志二人也、巳少糺勘之人、自爲擁怠之本、望請天恩、因准先例、依諸第學道勞、以件成直被拜任左右衛門志、郎令蒙使宣旨者、將俾致奉公之節矣、仍注事狀、謹請處分、

永治二年（康治元年、）正月廿一日

正五位下行右衛門權佐兼近江守皇后宮大進藤原朝臣

正五位下行左衛門權佐藤原朝臣

正三位行權中納言兼左衛門督藤原朝臣公教

〔吾妻鏡四十〕建長二年十一月廿日癸巳、宇佐美左衛門尉祐泰廷○尉○事、可有御擧之由及御沙汰云云、

〔官職秘抄下〕檢非違使（令外官）

別當　中納言參議中爲公達衛府督撰人補之、至于諸大夫者、非通規、近衛大將爲別當例、（能有、貞信公、）中將爲別當例、（秋津、氏宗、能有、）非參議四位爲別當例、（行平、）依人讓補之例、（延光、）停釐務例、（俊寬、）無別當年（自承和九、至嘉祥二、八箇年、貞觀十十一兩年、自承保四至應德三三箇年、）

佐（左右）　爲左右衛門權佐輩蒙使宣旨任人等見于彼權佐所、正佐例、（高扶、）近衛少將蒙使宣旨例、（弘景、滋實、伊望、爲信、）遷他官後更任例、（春岡、）自五位尉轉任例、（保繼、幸明、當道、）兼侍從例、（有穗、）四位例、（始自允亮、）兄弟相並例（承平、供俊、）明法道者任例、（公方、允亮、保實、道成、）

尉（大少、有左右、）　重代者幷明法道輩、文章得業生、文章生、藏人等補之、五位尉始、（天曆五、藤爲忠、）二人始、（天祿三、源致明、同滿季、）三人始、（天仁元年、[illegible]季、源光國、藤盛重、）四人始、（承安元、源爲經、平業房、藤能盛、巳上左、平成國右、）殿上尉敍留例、（源賴國、同賴綱、）敍爵後更蒙使宣旨例、（範國、）五位之後、始補尉、蒙使宣旨例、（中原廣元、）近衛將監例、（播磨貞理、）兵衛尉例、（源齊賴、平爲俊、）

志（大少、有左右、）　明法道者多補之、自餘者自府生或轉之、或諸司三分爲院主典代輩遷之、蒙使宣旨一人例、（天喜五、定成、康平元、章成、）

府生（左右、）　本府案主、幷三局史生等補之、其中於辨官史生者、以

士貢淸是也、有降誕孩之日、外祖父有眞收養爲子、仍入彼戶爲菅原氏、傳兩祖之風、苟繼箕裘、嗜二章之道、已及强仕、金科玉條、披文道之遺草而可探、勘問糺彈、以有眞之庭訓而可決、望請天恩、因准先例、改菅原氏賜本姓惟宗、遷任件官職、將知儒胤之異他矣、有隣誠惶誠恐謹言、

永久二(一一二〇)(本作三)年正月十三日　正六位上行典膳菅原朝臣

少判事中檢非違使志

正六位上行少判事中原朝臣範光、誠惶誠恐謹言、

請特蒙天恩、因准先例、遷拜明法博士信貞申受領、幷檢非違使志明兼申轉任替狀、

右範光謹考舊貫、件兩官者、皆取博士高才之者所補來也、高才之中、抽成業之者、成業之中、抽譜第之者、相兼之輩、上古獨希也、範光隨父祖廿年、久傳諄誨、繼箕裘三代、早遂大成、李門之春風、吹研精於靑蓑之杖、棘署之秋霜、辨聽斷於丹管之筆、儒官廳衙總諸務之旨歸、兼希代之採用、然而宿運惟拙、朝恩未覃、空競三餘之陰、漸垂五旬之暮、歲月其徂、齒髮先衰、若漏當時之淸撰、何干向後之榮祿、望請天恩、因准先例、遷拜件官、彌誇明時之無偏、將慰多年之沈憂、範光誠惶誠恐謹言、

保安五年正月十二日

〔愚昧記〕檢非違使

請特蒙天恩、因准先例、依譜第學道勞、以正六位上行備前大掾惟宗朝臣成直被拜任左右衞門志、卽令蒙使宣旨狀、

右得成直款狀、偁、謹檢案內、成直親父故左衞門志成□久仕廷尉、夙夜在公之時、晨昏守庭訓、坐臥傳門業、勘判記錄之章、糺斷推鞫之詞、雖謂親父之提耳、猶代大匠分執斧者也、而使廳者是依爲判斷之處、多登用法曹之士、尉志之間、同時四五人補來尙矣、就中道志三人並任例也、近則長德四年、右志伴忠信□本忠國、縣犬養爲政、長保四年、左志惟宗博愛、豐原爲時、右志縣犬養爲政等是也、抑自明法得

近則櫻井右胤(○右胤一本作有弼)惟宗公以、高橋明賴等是也、況乎被置法家檢非違使三人之例、古今已多、爰義定苟稟儒門之胤、久疲憲條之學、獨抱後群(○群一本作拜)之愁、未休中丹之歎、僉議之處、唯仰哀憐、望請天恩、因准先例、拜任件國轉任替、暫戴豸冠、將理刑法、義定誠惶誠恐謹言

寬治三年正月廿三日

(朝野群載十一廷尉)檢非違使

請被殊蒙天恩、因准先例、以左衞門府生正六位上淸原眞人忠重轉任志闕狀、

右得忠重款狀偁、謹檢案內、爲檢非違使府生之者、使奏轉任志者、承前之例也、而忠重使廳之勞五十一年、頹暮之齒八十餘歲、採擇之處、盍仰哀憐者、今加覆審、所申有實、望請天恩、因准先例、被轉任件闕者、將令知奉公之不空、仍勒事狀、謹請處分、

天仁三年正月十六日　防鴨河使右衞門佐從五位上兼守右少辨藤原朝臣實光

修理右宮城使從四位上行右中辨兼左衞門權佐備前守藤原朝臣顯隆

別當參議正二位左兵衞督兼備前權守源朝臣能俊

(中右記)天永二年七月廿九日庚寅、檢非違使志資淸(明法博士也、)稱所勞由、久不出仕、因之使廳之政懈怠、可被改替歟如何、人々被申云、近代道之志只一人也、且可被成裥歟、且可被移他官歟、以頭辨被奏此旨之處、明法之者中、望檢非違使者、申文四通被下、仰云、可撰申者、人々被申云、件人々才智、慥不知給、慥被尋、可被成歟、返上申文、

(朝野群載九功勞)申檢非違使

正六位上行典膳菅原朝臣有隣、誠惶誠恐謹言、

請特蒙天恩、因准先例、改菅原氏、賜本姓惟宗、遷任左右衞門志、卽蒙檢非違使宣旨狀、

右有隣謹檢案內、出法曹、居諸司之者、遷金吾、至廷尉、載在竹帛、不遑羅縷、又改氏姓、任道志者、明法博

人矣、遠自天長今至明時、爲叙負尉之者未有如此、定遠年老勞久、身沉憂深者、朝選之處、亦仰哀憐、望
請天恩、依年勞幷上日第一勞、被補廷尉者、彌致奉公之忠矣、定遠誠惶誠恐謹言、

康和二年正月十八日　正六位上行左衞門少尉紀朝臣定遠

〔朝野群載十一廷尉〕撿非違使

請被特蒙天恩、因准先例、以正六位上行明法博士兼左衞門少志中原朝臣範政兼轉尉闕狀、

右得範政款狀云、出自法曹、居廷尉之職、依志勞轉尉、古今之通規也、至流滯之者、不過十有餘年、近則伴忠信、長保二年四月任右志、長保元年五月轉右尉、歴四年縣犬養爲政、長德四年十二月任左志、寛弘二年十二月轉尉、歴八年豐原爲時、長保四年三月任左志、寛弘元年十一月轉右尉、歴三年同爲長、萬壽四年十二月任左志、長元三年十月轉尉、歴四年惟宗忠方、長元五年二月任左志、長久三年正月轉尉、歴十一年等是也、不追羅縷、而範政去永保四年正月初任右志、應德四年遷左志、前後勞于玆十七箇年、其間障直恪勤、凡糺紀之節、及臨時劇務之役、日夕奔波、无致懈怠、因玆年來每有尉闕、雖奏申文、宿運已拙、頻漏渥澤、早被擧奏、慰多年之歎者、今依款狀、加覆審、所申有實、若無優擧、何勵後輩、望請天恩因准先例、以件範政、將被令急轉尉闕、仍勒在狀、謹請處分、

康和二年正月廿一日　右少辨正五位下兼行右衞門權佐藤原朝臣俊信
左少辨正五位下兼行左衞門權佐藤原朝臣顯隆
正二位行權中納言兼左衞門督藤原朝臣公實

〔朝野群載九功勞〕式部錄申撿非違使

正六位上行式部少錄上野朝臣義定誠惶誠恐謹言、

請特蒙天恩、因准先例、拜任撿非違使右衞門志惟宗國任申轉任替狀、

右義定謹撿案內、出自法曹、居式部民部勸解由主典、拜任左右衞門志、卽蒙撿非違使宣旨、蹤跡多存、

評定

選擧

皆著鈦、而唯著鈦強竊二盜、不著鈦殺人者、若有格式改法之文歟、對曰無、又問曰、據鬪訟律、雖因鬪而用兵刃殺者入常赦勘文、若有格式改法之文歟、對曰、此兩事雖无改法、格式其來既尙、名曰廳例、定仰曰、宜據律令不用廳例、卽使兼成口別當曰、今月可有恒例政、殺人者可著鈦事、早奏法皇、宜依勅裁、

〔徒然草下〕德大寺右大臣殿〇實能　檢非違使の別當の時、中門にて使廳の評定おこなはれける程に、官人章兼が牛はなれて、廳のうちへ入て、大理の座のはまゆかの上にのぼりて、にれ打かみて臥たりけり、おもき怪異なりとて、牛を陰陽師の許へつかはすべき由各申けるを、〇下略

〔師守記〕貞治六年六月十八日癸亥、今朝任官敍位宣下之時、口宣被載尻付例、被注獻大理卿、昨日對面申可被尋申之旨被仰下候趣、被示之故也、只今使廳評定也、仍不返事、憑給畢之由以詞有返事、

〔神皇正統記朱雀〕この御時、平の將門といふ者あり、上總介高望が孫なり、〇注略　執政の家につかうまつりけるが、使の宣旨をのぞみ申けり、不許なるにより、いきどをりをなし、東國に下向して、叛逆をおこしき、

〇按ズルニ、平將門ガ望ミシ所ノ使ノ宣旨ハ、恐クハ國ノ檢非違使ヲ指セルナラン、然レドモ別ニ明徵ナケレバ、姑ク此ニ擧グ、

〔朝野群載九功勞〕申檢非違使　宣旨

正六位上行左衞門小尉紀朝臣定遠、誠惶誠恐謹言、

請殊蒙天恩、依年勞幷上日第一勞、蒙檢非違使宣旨狀、

身勞四十六年　左馬允勞十二年　當職勞卅四年　上日夜萬四千七百九十

拜任之後被除七箇年上日夜定

右定遠謹撿案內、去天喜三年任左馬允、治曆四年拜除當職、其間謂節會行幸、謂陣直警衞、不尋當番非直、不論雨夜雪朝、偏勵夙夜之節、已迨七十之算、爰任自下﨟、超補廷尉之輩、倩訪歷記、都盧五十一

嘉暦二年七月十二日　主計助兼左衞門少尉坂上大宿禰在判

廳宣

〔有職問答一〕一廳宣事

檢非違使別當也、別當ハ品々アリ、ケビイシ別當ハカリナ只別當トノミ書、別當號は職に付て其數有とは云共、普通に廳宣と申事は檢非違使別當宣の外には別に候はぬよし被仰出候、

〔官職難儀〕廳宣とは　國守の吾國中へ下知するを云、司の宣と申心也、廳宣と申は檢非違使廳宣事也、院廳下文をも廳宣と云、去ながら檢非違使別當宣のごとくをし出しては申さぬ也、

廳牒

〔香取文書田所家所藏〕檢非違使廳　牒諸國衙

當國住人申、負物幷本物返質劵田畠事、

右任國口格制、令計成敗、有子細者、可被注進之者、以牒、

建武元年五月三日　右衞門府中原在判

廳例

〔日本紀略十一條〕長保三年閏十二月七日甲戌、不堪佃定奏、被定檢非違使廳申請五箇條雜事、

〔政事要略六十七〕太政官符　檢非違使

雜事五箇條

一應衣袖幷袴廣同以一尺六寸為限事〇中略

以前條事所仰如件、使宜承知依宣行之、符到奉行、

參議從三位行左大辨兼勘解由長官藤原朝臣　從五位下行左大史小槻宿禰

長保三年閏十二月八日

〔字槐記抄〕仁平二年五月十二日丙午、早朝法皇〇鳥羽賜書曰、近日京師連夜殺人、或白日手刃、宜禁斷之、〇中略酉剋歸、上御門、召左衞門志兼成明法博士仰曰、可禁斷京中殺害之由、可示別當、其次加仰曰、近年獄囚不禁獄中、在下部家之由有其聞、兼成付封於獄門、不可令出之、問兼成曰、據獄令、流徒罪居役者

別當宣

所候也、仍執達如件、

康曆元年十月廿三日　　左近將監鎭氏奉

謹上檢非違使大夫判官殿

〔職原抄下〕檢非違使

別當宣者則廳宣也、古來被准勅宣、仍天下重之、違背廳宣者可准違勅云々、

〔政事要略六十一糺彈雜事〕別當宣云、行政之日、雜事依去寬平七年二月二十一日別當宣、度別申其狀、若墜非當日須決、差志若府生申者、

延喜十二年三月十一日　　東市正兼左衞門少尉當世基宗奉

〔雜筆要集〕別當宣樣第十九

被別當宣偁、攝津國豐島北條供御人某丸、爲高木冠者某、散々被蹂躪之由、有其訴、早可令召進其下手人、綸旨頻降、不可遲引之由候之處也、仍執達如件、

其月某日　　〻〻奉

謹上　高木冠者殿

同請文第二十

謹請　別當宣事

右去何日別。當。宣。今日到來、所請如件、抑下手人不日可召進之處、負深手而爲萬死一生也、依令兩三日之間、加療治令存命之後、可令召進、敢不可及猶豫者也、此旨可令執啓給、源某謹言、

其月某日　　源某〻〻請文

〔東寺百合古文書百六十〕檢非違使廳下　山僧賀運六角油小路地事

右別當宣別諸官評定日六 如斯、早可令存知之狀下知如件、

宜不得敢延怠、故下、

永久五年五月五日　防鴨河使判官左衞門尉源朝臣重時　源康季　平宗實(〇實一本作定)　少志大江行重　明法博士兼少志備後大掾中原明兼　防鴨河使主典左衞門府生伴有貞　右衞門少尉藤原惟職　橘貞隆　藤原盛道　少志安倍資清　造東大寺主典少志惟宗成國　左衞門府生內藏經則

檢非違使移　山陽南海兩道國衙

欲被令備前守忠盛朝臣搦進海賊事

右院宣偁、如聞者、頃日海路之間、凶賊滋蔓、乘數十艘之船、浮百萬里之波、或殺略往反之旅客、或劫奪公私之勝載、積惡彌長、宿暴日成、寔惟諸國司等、各憚驍勇、無心捉搦之所致也、宜令忠盛朝臣搦進件輩者、欲被早任院宣、令搦進彼賊徒之狀、依別當宣、移進如件、乞也衙察狀、故移、

大治四年三月

正六位上行右衞門尉明法博士中原朝臣明兼

從五位下行左衞門少尉源朝臣輔遠

〔吉記〕壽永二年七月廿四日丙戌、午始許參院、(直衣、)于時右大辨(親宗)示云、聊依有可被仰合事、人々可被召之由有仰、於左內兩府皇后宮大夫者遣召了、暫可候之、大理(〇藤原實家)(右大辨布衣大臣參之時不審事)同以祗候、良久左府、皇后宮大夫等被參、右大辨(參之時如何、)(布衣、大臣被可被成廳下文於賊徒事議定事)仰云、成廳下文、可遣推問使於賊徒之許、其狀跡各可議定申者、

〔東寺百合古文書〕(百十八)檢非違使廳下　義寶僧都雜掌

唐橋猪熊敷地(井)東寺南田地參段(號當蒲田)事

右別當宣(副諸官沙汰文)如斯、早可令存知之狀、下知如件、

康曆元年十月廿三日　少判事兼左衞門少尉坂上大宿禰(在判)

義寶僧都申、唐橋猪熊敷地(井)東寺南田地參段(號當蒲田)事、任諸官沙汰之趣、可令下知給之由別當殿仰

撿非違使別當〻〻

同請文樣第二十二

謹請　使廳御下文事

右去何日御下文今日到來、就被載之狀、謹考案內、加與丁友久申狀、無一不矯飾、其故何者、件夜強盜依爲近隣、合音而追征之處、殿下御領橘御園境內令追入畢、件一人手負者、昔爲某郎從云々、夫者彼所住人也、爰今爲損人任心慣申無實、還不招奏事不實之罪哉、以此旨被奏聞者、尤仰憲法、仍謹所請如件、

某月某日　　源〻〻〻請文

〔東寺百合古文書四十五〕撿非違使下　攝津國垂水庄可早任前下文停止庄內臨時雜役人夫等事

右件庄、爲東寺領可停止臨時雜役之由、去治曆三年、并寛治之比下文、顯然也者、任舊可令停止件雜爭之狀、依別當宣所仰如件、不可違失、故下、

嘉承三年七月四日　左衞門少尉平朝臣在判　藤原朝臣在判　藤原　修理左宮城兼明法博士志中原在判　少志大江在判　府生淸原在判　右衞門少尉源朝臣在判　藤原在判　藤原在判　防鴨河判官少尉源在判　平在判　少志安倍在判　防鴨河主兼府生伴在判

〔朝野群載十一 廷尉〕撿非違使廳下　越後國住人平永基

應令早附使者召進稱前對馬守源義親法師等事、

右義親者、去嘉承年中、依己叛科追討早畢、而近來如風聞者、浮浪法師一人、自號義親、從陸奧國越渡當境之後、徘徊永基之所云々、因之可召進之由、先日附國司被下知之處、初申可召進之狀、後稱不揭得之旨、前後之詞、非无相違、奸詐之甚、何以加之、早附使者、可召進正身之間、稱死殺由、梟其首者、眞僞難知歟、尙遁事於左右、致遲引者、永基參洛、使者共可言上子細之狀如件、依別當宣仰如件、事出於院

廳下文

畢、又宜同移之、

弘仁十一年十一月廿五日 ○又見政事要略

〔類聚三代格十二〕太政官符

應納雜色人贖銅事

右太政官去弘仁十一年十月廿五日下刑部省符偁、大納言正三位兼行左近衛大將陸奥出羽按察使藤原朝臣冬嗣宣、雜色人贖物可令檢非違使催徵之宣旨下彼使畢、宜移之者、今得使解偁、使所行之事、非唯巡檢京中、拷決犯盜、臨時勘事、觸類繁多、又去弘仁十一年十二月十一日宣旨偁、檢非違使所掌之事與彈正同、臨時宣旨、亦糺彈之者、加以看督長左右各二人、差科非一、無有暫暇、今預徵贖物、誰用濟使事、謹請官裁者、大納言正三位兼行左近衛大將民部卿清原眞人夏野宣、宜停隸檢非違使、同亦實錄申官、隨即下知本貫令徵納、

天長九年七月九日 ○又見政事要略

〔雜筆要集〕檢非違使廳下文樣第二十一

檢非違使廳下　攝津國多田館　應被早搦進强盜張本某身事

副下　强盜交名注文一紙

右得去何日加與丁友久解狀偁、謹考案內、去何日夜大强盜打入于友久住宅、令殺害友久妻子二人畢、即追尋行處、追得一人手負捉而問之、皆是多田藏人滿重之郎從也云々、伏案上所行、夫應不涸當、鯨勞寄島、是世間之謂也、然滿重恣振私之武威、多失隣之公人、何況乎民乎者、早且爲傍輩之誡、召上彼犯人等、一々欲被禁獄者、如解狀者、罪科不輕、速任注文旨可召進之由、所仰如件、宜承知、不可違失、故下、

年號某月某日　〻〻〻〻

死囚　徵贖

寛平七年二月二十一日　民部權大輔兼右近衞少將在原弘景奉

私案、行政之制、雖立每日之法、章條之中亦多可避之時、所謂散齋之内不判刑殺、不決罪人類也、但近代之例、至于祭月、諸祭以前不行廳政、未得其意、尋古勘問日記、神事之月、神事以前有行政例、天暦元年八月十三日（放生雖非官闕、隨申請、差遣撿非違使、若看督長、年來亦十五日以前不行政、）康保四年二月二十一日、右政應和四年四月九日、左政、長德三年十一月七日、依殺害事、佐以下官皆參左廳、問左府生西忠宗、右府生飛鳥戸好兼等、其儀如尋常政、忠宗等催廳外、隨召參對、（上日以前、年來例不改、然而依無東大事、依宣旨聞之、雖許著本座聞、解卻行事如常犯人、）別當中納言兼左衞門督從三位源朝臣光宣、奉勅、囚禁之事、待斷之間、身命難存、是則使等不相具之所致也、自今以後、五位及尉志府生並四員在者、宜得其政、不可具官、須左右相交者、

寛平七年二月二十一日　民部權大輔兼左近衞少將在原弘景奉

〔日本紀略　十四後一條〕長元元年五月廿六日庚申、撿非違使廳政也、依無明法道志、以右少史坂合國宣令著行、依爲古人也、

〔三代實錄　四十九光孝〕仁和二年十月六日辛亥、詔左右撿非違使、免輕罪繫四二十二人、

〔類聚三代格　十二〕太政官符、

應移式部省、抑未輸贖銅諸國朝集使返抄、移大藏省、抑留位祿季祿事、

右得刑部省解偁、謹案獄令云、凡贖死刑限八十日、流六十日、徒五十日、杖卌日、笞卅日、若无故過限不輸者、會赦不免、雖有披訴、據理不移前斷者、亦不在免限者、今犯罪之輩、相續不絕、贓贖未納、逐年彌多、追徵之吏、徒疲催勸、負贖之人、无心進納、既狎前斷、不畏後科、望請在京官人、抑留位祿季祿、雜色人等令撿非違使催徵、在外諸人抑留朝集使返抄、令濟其事、謹請官裁者、大納言正三位兼行左近衞大將陸奧出羽按察使藤原朝臣冬嗣宣、依請、宜令刑部省移式部大藏等省、其祿物者令大藏省准贖銅數、便卽抑留充刑部省、具（○具恐其誤）應抑留返抄諸國及犯罪官人并贖銅數依件移送、又下宣旨撿非違使、

事不申別當、佐無進退、況尋先例、別當假聞、佐以下勤雜務、若有可定承之事、參藏人所、宜申其由者、要知廳事已異他司也、但尋常之政、佐以下官不申別當、任例勤行、所謂斷罪之色不必經長官之故也、然猶同判如律者、臨拷訊之時、似可申別當也、然而廳例不申別當、佐以下行來尚矣、或本條、或故實、仍舊隨宜、得意可行耳、

〔法曹至要抄上 罪科〕一鬪亂鬪殺事

案之、成鬪亂犯、使廳任意可掌、依載式條也、是以所當之罪、若爲笞杖者、須立決放、又若及徒流死者、勘奏之後、徒罪以下於使廳可決、流罪以上可送刑部省也、然而此事近代皆以絕畢、至于及流徒罪之者、禁獄舍、相重杖笞之者、禁獄政所、或禁便所、是使廳積習之例也、非法條之所指、

〔法曹至要抄中 禁制〕兵仗事

案之、於非職之輩帶兵仗之時、六位以下者、直決杖八十、若諸司三分、諸道博士、殿上侍臣、秀才、僧尼及廢疾以下之輩並五位以上可奏請、若檢非違使糺得申別當、隨仰行而已、

〔政事要略六十一 糺彈雜事〕檢非違使式云、盜人不論輕重、停移刑部省、別當直著鈦配役所、令驅策者、○又見西宮記

〔西宮記臨時十〕成勘文事

檢非違使式云、私鑄錢之輩、停送鑄錢司者、著鈦與盜人同、令沒入資財田宅、○中略

今案、强盜、竊盜、私鑄錢等著鈦事、檢非違使等守式文可行也、至于餘罪科者、須進勘奏、被下刑官斷之、仍非別宣旨之外、只爲捉搦、不知加著鈦云々、

〔政事要略六十一 糺彈雜事〕別當中納言兼左衛門督源朝臣光宣偁、近者囚徒滿獄、科決猶遲、或所犯是輕、禁囚日久、或本罪既重、徒斷終身、獄官之道、理不可然、因之去年十月五日須定左右檢非違使廳毎日行政之狀已了、而猶遲緩不肯行之、自今以後宜依前件行、其政不可隔日、又須所行事條目錄毎日申之者、

相率隨兵、參彼三條高倉御所、先之得入道三品之告逃出御、廷尉等雖追捕御所中、遂不令見給、

〔古今著聞集 十二偸盗〕承久の頃、内裏へ盗人を追入たりけるを、所の衆行實、記錄所邊にてからめ取けり、行實、件の盗人に、しろき水干袴に紅のきぬ著せて、ざうもつくびにかけ、さて北陣をわたして、檢非違使にうけとらせられけり、行實は、衣冠に卷纓して、深沓をぞはきたりける、佐々木判官廣綱、白襖に毛沓はきて、郎等廿人に、一色の鎧きせうけ取けり、ゆゝしき見物にてぞ侍ける、北陣の門前に、犯人を引すへたりけるを、廣綱が下部すゝみてうけ取て引たつる所に、犯人がいはく、しばらくまたせ給へ、申上べき事候とて、一首の歌を詠じ侍ける、

あふみなる鏡の山に陰見えてさゝきのへとてわたりぬるかな

〔徒然草 下〕看督長の負たる紈を、其家にかけられぬれば、人出いらず、此事絶て後、今の世には封をつくることになりにけり、

四禁

〔法曹至要抄 上罪科〕一追捕事

檢非違使式云、諸司諸衛及諸家官人以下雜色以上若有犯過者、且禁其身、且經本司、

〔法曹至要抄 上罪科〕一故殺事

案之、罪重、近代之例、依無刑部省斷、於使廳禁獄、依爲死罪、不定徒年限、又此間絶無勘奏、甚以不當、仍雖不令著鈦、直依別當宣遣獄舍而已、

斷罪行決

〔吾妻鏡 十九〕承元五年〇建暦元年十一月四日壬子、申剋、坊門黃門使者參著、是勅勘之時、態預專使事、郎雖可賀申、行幸已下公事連綿之間遲々云云、去月廿二日行幸、入夜造朱雀門大工國永已下番匠等給使廳、幸本國司、猶終不日之功、可嘗假葺之由有勅定云云、

〔政事要略 六十一糺彈雜事〕檢非違使式云、推事不論左右、雖無佐若尉、一人猶得行事、

〔政事要略 六十一糺彈雜事〕案令條、次官職掌雖同長官、長官若无故障、次官難可執行、是以無止廳事、若城外

これなり、今三日のいとまをたべ、それに志るしなくば、我を具し出たまへ、恨有まじき、みめかたちたらひ愛敬づきたる女房のうちなきて申ければ、檢非違使もあはれに思ひてのべたりける程に、小大進、

思ひいづやなき名立身はうかりきとあら人神に成し昔を、とよみて、紅のうすやう一重にかきて、御寶殿にをしたりける、

〔續古事談 五諸道〕保輔ト云者ハ、元方ノ民部卿ノ孫、致忠朝臣ノ子也、故國章ノ三位ノ家ニ、強盗入ニケリ、保輔ガシワザトキコエテ、カレガ郎等ナシ申テ、ザウ物トモアラハレニケリ、又忠信朝臣ヲイタル事、兵衛尉維時ヲコロサントスル事、ミナ保輔ガ所爲ノヨシ、郎等白狀ニヨリテ、檢非違使所々ヲウカヽフトイヘドモ、カラメエズ、顯光中納言ノ家ニコモリタルヨシキコエテ、檢非違使幷ニ武藝ノ者瀧口ニイタルマデ、カノ家ヲカコミテサグリモトムルニ、中納言ノ北方、車ニノリテイデムトスルニ、ウタガヒテ、クルマヲサラシメズ、父致忠ニハ看督長下部ヲツケテスダレモカケヌ車ニノセテマモリケリ、此家ニモナカリケレバ、三日ノ内ニタテマツルベキヨシ、父致忠ガ請文ヲタテマツラシム、此事ニヨリテ、諸衞ノ官人弓箭ヲオヒテ内裏ニ候フ、京中シヅカナラズ、カラメテタテマツリタラムモノ、勸賞ヲコナハルベキヨシ、宣旨クダリケリ、父致忠ハ左衞門弓バニクダサレケリ、保輔セメニタヘズ、北山花園寺ニテ出家ノヨシキコエケレバ、檢非違使ハセ向テタヅヌルニ、ニゲニケリ、キリステタル髮狩衣指貫ヲトリテカヘリニケリ、

〔殿暦〕長治二年三月十一日、戊申、企參仕之間、余〇藤原忠實隨番國重、於東宮主殿女髮ヲ切之由自東宮大夫許示送、仍件男給檢非違使了、其由大夫許ニ示送了、

〔吾妻鏡 一〕治承四年五月十五日丙寅、可被配流茂仁王於土左國之旨被宣下、上卿三條大納言實房、職事藏人右少辨行隆云々、是被下平家追討令旨事依令露顯也、仍今日戌剋檢非違使兼綱光長等

なりにければ、御供のけびゐしども、かう〳〵帥はみだりこゝちあしとてためらひ侍らふ。〇中略帥殿は播磨に、中納言殿は但馬にとゞまりたまふべき宣旨くだりぬ。〇中略中納言殿は〇中略かくて但馬におはしつきぬれば、國の守公家の御定より外にさし進みて仕うまつる事多かり、中納言殿は心のあいきやうづき給へれば、誰もいみじうぞ仕うまつりける、おはしつきぬれば、延安、都へ還り參るに、いとゞ心細げなる御ありさまの心苦しさに、わが子を供にゐていきける友助といふを留めて、御心に隨へといひ置て、我はのぼりにけり、播磨にもあるべき樣にまつらひすへ奉りをきて、御供の撿非違使ども還り參りぬ、いと遙なりつる程の御供に、よそ〳〵の人も哀に嬉しう思ふめり、

〔今昔物語二十九〕西市藏入盜人語第一

今昔□天皇ノ御代ニ、西ノ市ノ藏ニ盜人入ニケリ、盜人藏ノ内ニ籠タル由ヲ聞テ、撿非違使共皆打衞テ捕ヘムト爲ルニ、上ノ判官□ノ□ト云ケル人、冠ニテ青色ノ表ノ衣ヲ著テ、調度負テ其中ニ有ケルニ、鉾ヲ取タル放免ノ、藏ノ戸ノ許ニ近ク立タルヲ、藏ノ戸ノ迫ヨリ、盜人此ノ放免ヲ招キ寄ス、放免寄テ聞クニ、盜人ノ云ク、上ノ判官ニ申セ、御馬ヨリ下テ此ノ戸ノ許ニ立寄セ給ヘ、御耳ニ差寄テ忍ビテ可申キ事侍リト、放免上ノ判官ノ許ニ差寄テ、盜人此ナム申スト告レバ、上ノ判官此レヲ聞テ、戸ノ許ニ寄ラムト爲ルヲ、異撿非違使共此レ糸便ナキ事也ト云テ止ム、然レドモ上ノ判官此レハ樣アル事ナラムト思テ、馬ヨリ下テ、藏ノ許ニ寄ヌ、其ノ時ニ盜人藏ノ戸開テ上ノ判官ヲ此ニ入ラセ給ヘト云ヘバ、上ノ判官戸ノ内ニ入ヌ、

〔十訓抄十〕鳥羽法皇の女房小大進といふ歌よみありけるが、待賢門院の御衣一重失たりけるをおひて、北野に籠り、祭文書て祈られけるに、三日といふに、神水を打こぼしたりければ、守。。撿非違使。是に過たる失や有べき、出給へと申けるを、小大進なく〳〵申やう、おほやけの中の私と申は

くして今日も暮れぬ、いと淺ましきことなり、けびゐしどもことあやまちたらば、皆科あるべきよし聞くにも、その夜よ一夜いもねじとおもひさはぐ程に、酉の時ばかりに、あやしの網代車のこゝらの人どもをぢぬ樣なるが、二三人ばかり供にて、この宮をさしてたゞ來にくるに、怪しくなりて、このけびゐしどものての赤きぬなど著たるものども唯よりによりて、なにの車ぞ、唯今かゝる所に來るはとて、長柄にさとつけば、あらずや殿の木幡に參らせ給へりしが、今歸らせ給ふなりといふを聞て、此者ども皆去りぬ、御車、御門のもとにて舁おろして、內大臣殿おりさせ給ひぬ、けびゐしども、皆おりて並居たり、見奉れば、御年は唯今廿二三ばかりにて、御かたちのとゝのをり、ふとり淸げにて、色あひまことに白くめでたし、〇中略さておはしましぬれば、帥、木幡に參らせたりけるが、只今なむ歸りて候と奏せさすれば、むげに夜に入りぬれば、今宵はよくまもりて、明日卯の時にとある宣旨あり、されば夜一夜いもねで立明したり、〇中略宮の御前、母北の方、つととらへて更にゆるし奉らせ給はず、かゝるよしを奏せさすれば、几帳ごしに宮の御まへを引放ち奉れど、宣旨しきれど、けびゐしども、ゝ人なれば、おはします屋にはえもいはぬもの共のぼり立て、塗籠をわりのゝしるだに、いみじきを、又いかでか宮の御手をひき放つ事はあらんと、いとおそろしうおもひまはして、身もいたづらに罷なりて後は、いと便なかるべし、とく〳〵とせめ申せば、すぢなくていでさせ給ふに、〇中略むしろはりの車にのり給ふ、〇中略帥殿は筑紫の方なりければ、未申の方におはします、中納言殿は出雲の方なれば、丹波の方の道よりとて、戌亥さまにおはする、〇中略帥殿はその日のうちに、山崎關戶の院といふ所にぞ留まらせ給へる、この御供には、さるべきけびゐしども四人ぞ仕うまつりたりける、その手のものどもの御車に附て參るぞ、あはれにゆゝしき、中納言の御供には、左衞門尉延安といふ人は、長谷の僧都のはらからの撿非違使ぞ仕うまつりたりける、淺ましきことども盡もせず、關戶の院にて、帥殿は御心ちあしう

人々いひさだめておそろしうむつかし、内大臣殿〇藤原伊周も中納言殿〇隆家もおぼしなげく、〇中略世の中にある檢非違使のかぎり、この殿の四方にうち圍みたり、各々えもいはぬやうなるもの、たちこみたるけしき、道大路の四五町ばかりの程は、ゆきゝもせず、いとけおそろしき殿の内の氣色ありさまども、いはんかたなく騷がしければ、寢殿の內におはしましある人々多かれど、人おはするけはひもせず、哀にかなしきに、かゝるにこのあやしのものども、殿の內に打廻りつゝ、こゝかしこを見騷ぐけはひえもいはずゆゝしげなるにも、物のはざまより見出して、ある限りの人々胸ふたがり、心地いといみじ、殿今は遁れ難きことにこそはあめれ、いかでこの宮の內を出て、木幡に參りて、近うも遠うも遣はさん方にまかるわざせむと思しの給はするに、この者どもたちこみたれば、おぼろげの鳥獸ならずば出給はん事かたし、〇中略さても中納言はあるけしきし侍り、帥はすべて候はぬよしを奏せさすれば、有まじきことなり、宮をさるべく隱し奉りて、塗籠をあけて、くみれのかみなどをも見よとある宣旨、きびしきりにそふ、御塗籠あけ侍らん、宮さりおはしませと、檢使違使申せば、今はすぢなしとて、さるべく几帳など立てゝ、淺はかなる樣にて御坐まさせて、けびゐしどものみにもあらず、えもいはぬ人具して、此ぬりごめをわりのゝしる音も、あさましうゆゝしく心憂し、さは世の中はかくあるわざにこそありけれど、目もくれ、心も惑ひて、涙だに出こず、中納言も我にもあらぬさまにて、薄鈍の御直衣指貫など著給ひて、あさましくて居給へれば、人々畏まりて近うもえ參りよらぬに、このてのあやしのものども入亂れて、きえたる氣色どもぞ淺ましういみじき、さであけたれども、夢におはせぬよしを奏せさす、出家したるにか、さるにても唯今は都の內を離るべきにあらず、能々あされ〳〵と宣旨きびしきりなり、けびゐしどもかつはなく〳〵いみじうおもひながら、宣旨のまゝにするに、おはせねば、いとあさましきことにて、帥なしとてそのあたりさらず、夜晝まもるべきよしの宣旨きびしきりにあり、か

〔政事要略七十糺彈雜事〕右中辨藤原朝臣道方傳宣、內大臣宣、奉勅、奉呪咀中宮伊豫守佐伯朝臣公行妻、從者藤原吉道出納不知姓春正、宜仰檢非違使偏尋在處令捕進、但捕獲之輩、隨其品秩、將加勸賞者、

寛弘六年二月廿日　左少史竹田宣理奉

防鴨河判官右衞門志林重親奉

〔朝野群載十一廷尉〕右辨官下　大和國

應勤行檢非違使供給事

左衞門權少尉藤原顯輔　從三人、火長二人、　大志粟田豐道　從三人、火長一人、　府生船保重從二人、火長一人、　右少志安倍守長　從一人、火長一人、　左右看督長二人

右權中納言藤原朝臣長家宣、奉勅、爲令追捕犯人、差件等人、充使發遣如件、國宜承知、依宜行之、使者仰彼之國、依例供給、官符追下、

年　月　日　左大史

左辨官下　大和國

應勤行檢非違使供給事

右衞門權大尉藤原顯輔　從三人、火長二人、　右衞門大尉平時道　從三人、火長二人、　左右看督長二人　從各一人

右權中納言源朝臣道方宣、奉勅、爲令追捕强盜、差件等人、充使發遣如件、國宜承知、依宜行之、仰彼之國、依例供給、官符追下、

萬壽二年五月三日　左大史中臣朝臣

中辨源朝臣

〔榮花物語五浦々の別〕かくて祭はてぬれば、世の中にいひさゞめきつることども、あるべきさまに、

隨事追捕、立爲永例、

〔三代實錄 五十 光孝〕仁和三年二月乙巳朔、大藏省奏言、昨夜偷兒穿正藏院庫壁盜取官物、多少難記、遣撿非違使索焉、

〔侍中群要 七〕撿非違使事

從追捕歸參、帶弓箭直以參入、若給祿者不拜舞、

天德四年、不論尉志府生等、各給祿一疋、

天祿四年、尉一疋、志府生各給一疋、此例不詳

〔大鏡 五 太政大臣伊尹〕花山院の、ひとゝせ、祭のかへさ、御覽せし、御ありさまは、誰も見奉りたまひけんな、まつりの日ことゝいださせ給へりしたびのことぞかし、さる事あらんまたの日は、なを御あるきなどなくてもあるべきに、いみじき實法一のものどもかうぼうのらいせいをはじめとして、御車の尻にうちむれおほく參りし氣色ども、いへばおろかなり、なによりも御すゞのいとけうありしなり、ちいさき柑子をおほかたのたまにつらぬかせ給ひて、たつまには大柑子をしたる御ずゞいとながく、御さしぬきにぐしていださせ給へりしは、さる見物やは候しな、人々紫野にて御車に目をつけたてまつりたりしに、撿非違使まいりて、きのふことゝいだしたりしわらははべ捕ふべしといふことといできにけるものか、このごろの權大納言殿〇藤原行成まだその頃は、わかくおはしましゝ程ぞかし、人はしらせてかう〳〵の事候、とくかへらせ給ひねと申させ給へりしかば、そこら侍ひつるものども、蜘の子を風の吹き拂ふごとくにげぬれば、唯御車ぞひのかぎりにてやらせて見物車のうしろの方よりおはしましゝこそ、さすがにいとをかしうかたじけなくおぼえおはしましゝか、さて撿非違使つきやいといみじうからうせめられ給ひて、太上天皇の御名は、ながくくださせ給ひにき、

之巻所、就見地管領聽進止之條傍例勿論歟、然者勤仕有限職役、敎令院領掌可無其妨哉、

明淸　明成　章有　章兼　章世　明宗

敎令院雜掌與津村彥次郞重光相論、壬生小路朱雀田地壹段半事、任諸官評定文、可令下知敎令院給之由、別當殿仰所候也、仍執達如件、

康永二年九月十三日　前長門守重藤奉

謹上　濟士大夫判官殿

檢非違使廳下　敎令院雜掌

壬生小路朱雀田地壹段半事

右別當宣副諸官評定文如斯、早可令存知之狀、下知如件、

康永二年九月十八日　大判事兼明法博士左衞門大尉遠江介坂上宿禰在判

〔泉涌寺文書〕

檢非違使廳下　泉涌寺別院二階方丈

七條町以下四箇所田地事

右別當宣副諸官評定目錄如斯、可令存知之狀、下知如件、

曆應二年四月十二日　大判事兼明法博士左衞門大尉坂上大宿禰花押

曆應二年四月十二日評定條々

一泉涌寺別院二階寺領七條町以下四箇所田地事

件田地、當知行實否被尋問地百姓等之處、寺家管領無相違云々、然者任諸官證判紛失狀、被下別當宣之條有何事哉、

參仕官人　明成宿禰　章有朝臣　秀淸朝臣　章兼朝臣　章世朝臣　信香　明宗

追捕

〔續日本後紀八仁明〕承和六年六月己卯、勅、彈正臺及檢非違使雖配置各異、而糺彈違犯、彼此亦同、但至犯人逃走、姦盜隱遁、彈正之職不堪追捕、自今以後、緣糺違犯、有可追捕者、臺使相通、遣檢非違使長等、

案、成永領之思、致問答之間、就訴申使廳、去年嘉暦二五月十三日、同六月六日、爲對馬判官重行之奉行、以廳下部雖被付下訴狀於成尋之母儀住宅、渉兩年、于今不及請文散狀、無理之至顯然候、仍重訴申之處、重行辭退使廳出仕之間、爲御沙汰被渡下總判官秀清畢、何閣使廳御沙汰、奉掠御門跡、可支申本訴御擧狀哉、有所存者、就使廳催促、尤可捧陳狀者歟、併所仰上察也、早任先度旨被申成御擧狀候之樣可有御披露哉、恐々謹言、

八月十九日　　淨顯請文

大夫阿闍梨御房

擧狀云

上桂庄替吉身庄の御擧狀、成尋支申間事、雜掌淨顯請文、かやうに候、いろき申御さた候べく候、あなかしこ、

玉熊丸

八月○嘉暦元年廿二日

宮兒　法印御房

〔東寺百合古文書百七十八〕康永二年九月十三日評定

敎令院雜掌與津村彥次郎重光相論鹽小路朱雀田地壹段半事

件小田事、敎令院雜掌、帶承元建曆本劵等、爲當門跡領巷所代々一圓進止之由訴申之處、重光備建長七年淨戒讓于妻觀音女、元德二年戒心觀音女法名沽劵相傳領知之旨爭之歟、爰如敎令院出帶元曆一院御座御作手解狀者、鹽小路南朱雀東角貳段大、前待賢門院御莚藺田也、被渡院御方及數十年訖、可被停止濫妨云々、就之彼地爲平家領之由有其聞、仍雖點定、依院宣免除訖、不可有濫妨之趣鎌倉外題越而分明歟、而重光所進建長七年淨戒讓狀、八條坊門北自朱雁東朱雁面巷所壹段半、去寬喜以後、親父袈裟丸開發之地也、仍淨戒相傳云々、不得京職免許開熟之、自稱旁難被許容之上、如此

廳召

聽訟

圖帳被取出之間、良李眞人經奏聞致如此之沙汰云々、

〔中右記〕寛治八年〇嘉保元年十二月晦日、散位從四位下大江公仲流隱岐國、是行向散位資俊宅強盜放火殺害者、仍召問使事、從撿非違使廳有召、及三箇度、遂不參、仍勘罪名處流罪也、

〔政事要略六十一糺彈雜事〕貞觀十二年七月廿日、別當宣、倆聽訴之官、各有其職、獨爲總行、事多擁滯、自今以後、自非強竊二盜、及殺害、鬪亂、博戲、強姧等外、一切不可執行者、〇又見大夫尉義經畏申記

〔東寺百合古文書九十九〕勘申東寺與成願寺相論田地拾漆町陸段貳佰拾步事

在伊勢國管多氣飯野兩郡內字川合庄田

右左大史小槻宿禰祐俊仰云、右中辨藤原朝臣有信傳宣、權中納言藤原朝臣公實宣、奉勅、東寺與成願寺相論伊勢國管多氣郡宇川合庄田、宜仰撿非違使對決兩方文書等、令勘申理非者、調度文書幷兩寺解狀雖有其數、依注載先勘文、只抽所備要、省略繁文、〇中略 東寺所進承和二年四月十五日相傳省符、並延長三年太神宮牒東寺之狀、兼亦成願寺所進弘仁天長承和等民部省圖帳案、成願寺傳領頗似有其謂、仍勘申、

康和元年九月十九日　正六位上行左衞門少志中原朝臣資清

〔新抄〕文永元年二月廿八日癸酉、山門訴訟猶與盛云々、仍訴訟內於越前國者被付熊野造營事、已被停止之、〇元日吉修造所寄也而室町前大納言被配流於杜本庄、預所左衞門尉有使者、已被禁獄之處、奉行撿非違使章總宥置他所之上者、章繼可被禁獄之由云々、　三月五日庚辰、大判事章職解官事、已被治定、又子章繼、當時被下使廳、來十日可被流罪云々、山門之訴訟、與盛之故也、

〔東寺百合古文書七ノ自一至二十〕上桂庄替吉身庄御舉狀間事、今年二月廿二日成尋狀、同八月十三日令旨謹下預候畢、彼成尋無故支申御舉狀之條、無道至極候、其故者、德治年中、依有事緣、爲御門徒故喜樂坊少輔法師圓竪口入、件門弟成尋之母儀平氏女許入置彼文書於質券之處、成尋構無窮今

權右中辨源朝臣公忠傳宣、大納言藤原朝臣恒佐宣、奉勅、爲令勘糺東大寺興福寺雜人等濫行、差遣右衞門志比部貞直先了、而貞直依身病重未能向、宜以府生若江善邦改遣者、

承平五年六月三日　左大史尾張言鑒奉

〔年中行事秘抄正月〕大饗日主人不出客亭例〇中略

李部王記云、天慶二年正月四日、詣太政大臣饗所、主公稱病不出客亭、〇中略元日〇元日恐有誤遣巡察等於三位已上家、糺彈他司人、集會其間事、今案、檢非違使向大饗所之始歟、

〔台記〕久安三年七月廿三日乙酉、頭資信朝臣、下明法勘申淸盛朝臣罪狀文、副本解及官史使廳問注記等、

〔古今著聞集三公事〕いづれの年にか、白馬節會に進士判官藤原經仲參りたりけるに、雜犯たゞすべき物なかりければ、ちからおよばで、檢非違使ども退出せんとしけるに、なにがし僧正とかやの見、沓をはきながら、木のまたにのぼりて、見物しけるを、經仲が下部をもてめしとりてたゞしける詞に、長大垂髮にて、皮の沓をはき、たかき木にのぼりて宮闕をうかゞふ、一身をもつて師のをかしをなせる、ゑがるべしやいかんと勘問したりける、時にのぞみていみじかりけり、叡感ありて、女房の衣をたまはせけりとなん、

〔大夫尉義經畏申記〕可令向市廛人結番事〇結番人名略

右市廛雜物沽價法、被載去八月卅日官符、兼又高買之輩不恐嚴制、猶以違犯、宜令檢非違使等、五箇日一度分番、向東西市、可令勘糺違法之由、同九月十九日被下宣旨畢、仍任被宣下狀、爲令行向所令結番也、來卅日一番可行向也、又自件日限、又以前如此轉輪儲守結番、行向市廛、可令勘糺件違法之狀、依別當宣所廻如件、

治承三年十月廿六日

〔新抄〕文永四年十一月三日丙戌、外記文殿預景助被下使廳、檢非違使章兼請取之、本局宿納民部省

糺彈勘問

右爲賜渤海客舍時服、差使者右史生依知秦與相、今日發遣於越前國、中納言從三位兼行左衞門督藤原朝臣清貫宣、奉勅、差件等人、至于穴太驛家、令勤護送者、國宜承知、依宣行之、

延喜廿年三月廿二日　　大史紀宿禰高行

〔九條年中行事四月〕齋內親王禊事祭前午日行之、有未日之例、先禊日十許日、定奏前驅次第、使等近代例不差自志轉任之尉等、

〔定家朝臣記〕康平四年九月廿一日庚午、有御賀茂詣、○藤原賴通、中略、午剋令出給、上卿十四人、騎馬供奉、春宮權大夫已下、御前四人、在上卿前、御車、唐車、檢非違使二人、行房奉季、內大臣殿、源大納言、皇太后宮大夫、已上乘車被供奉、

內府前驅廿人、有御前、檢非違使一人供奉御後、申三點著御下社、

〔殿曆〕康和四年十月十九日庚午、申剋許見馬、次沐浴、戌剋許爲隆朝臣來、內御使也、仰云、世間盜人極多、檢非違使又諸障物儲可候之由仰了、

〔台記別記〕久壽二年四月三日己卯、午剋向東三條、依賀茂詣定也、　廿日丙申、主人車、檳榔毛、蘇芳簾、下絹、○中略、車副四人、略○註、牛童、略○註、檢非違使右衞門尉源資經、雜色百五十人、

〔愚管抄六〕文覺上人、播磨給はりて、思ふまゝに高雄寺建立して、東寺いみじく作りて有しも、使廳檢非違使にてまもらせられなどする事にて有けり、

〔政事要略六十一糺彈雜事〕檢非違使式云、使之所掌、准彈正彈事、幷依臨時宣旨行之、

〔政事要略六十一糺彈雜事〕別當中納言從三位源朝臣光宣、奉勅、左右檢非違使等行政之日、免不直彈之責者、

寬平八年十月十一日　　左衞門權佐源朝臣貢奉

〔朝野群載十一廷尉〕令檢非違使糺濫行宣旨

護衛

右大史尾張宿禰言鑒仰云、右中辨藤原朝臣在衡傳宣、大納言兼右近衛大將藤原朝臣保忠宣、奉勅、撿非違使左衛門府生大原忠宗、右衛門府生若江善邦等、宜差巡撿伊勢齋親王上道、大和伊賀兩國道橋使者、

承平二年四月十八日　右衛門權府生村主保範奉

〔朝野群載 廷尉十一〕右辨官下　撿非違使

應重禁斷諸司所々新任人等饗祿事

右左大臣宣、奉勅、燒尾荒鎭、格制稠疊、而年序推移、人心憍慢、偏迷含〇含一本作令一具之性、動踏陷沒之機、斯乃法官緩而不加督察、習俗狎而無畏嚴制之所致也、重加禁遏、永懲將來、仍須違犯之輩、罪加先格、有司容隱、爲他被告、且以與同罪者、使宜承知、依宣行之、不得寬恕、

長保六年二月廿六日　大史小槻宿禰

〔春記〕永承七年五月六日庚戌、今日臨幸有何事哉、仍遣召道平朝臣了、關白〇藤原賴通且被行雜事、召撿非違使、仰。可。作。道之事、召外記史、被仰諸司供奉事、召辨被仰御裝束、召頭辨、被仰藏人方事云々、

〔殿暦〕康和五年九月十五日辛卯、天陰雨猶降、世間無術事歟、五畿内無術由有聞、仍一昨日有軒廊御卜、陰陽寮申云、神社不拜之所致歟、仍遣撿非違使、實撿北野平野祇薗邊也、撿非違使等還來申云、件四所等所加實撿也、而北野平野等近邊に不淨事等極多、進注文、

長治二年八月九日癸酉、次京中道路不淨事を仰、相副撿非違使於京職可掃之由能仰了、

〔朝野群載 廷尉十一〕遣撿非違使於遠國

右辨官下　近江國

右衛門府生正六位上國造恒世

從貳人　看督長壹人　火長參人

案之、御馬乘鷹飼舞人等之臨時被聽摺衣之外、不論男女、先從破却、可決笞卌、但至于女、雖須決笞廿、轉加勘發放免、使廳例耳、

〔日本紀略 十四後一條〕長元三年四月十五日丁酉、賀茂祭、今日見物車出紅衣、檢非違使源清以下糺彈之、

〔春記〕長暦二年十二月九日辛未、人々云、瀧口正任爲檢非違使傔基被破却歟、紅衣之次被打調、其耻無極云々、前々破却制物、令脫其衣破之、而打調殊無例、是依有宿意云々、非常事也、件正任、本傔遠之從者、令相從傔基云々、若其阿黨歟、然而已爲公人、任意可打調哉、世間事不屑王事故歟、猶可有會釋事也、

〔薩戒記〕應永卅三年四月廿一日乙酉、今日賀茂祭也、○中略女房使、典侍光子、○中略後聞、典侍前驅至土御門北乘馬在陽明門代廳司所、典侍雜色禁之令下馬云々、太奇恠、後聞、檢非違使大夫尉坂上明親云々、

〔法曹至要抄 上罪科〕一僧尼行事違法事○中略

貞觀十六年九月十四日官符云、應僧尼法服不用綾羅錦綺等違法之色事、右檢非違使起請云、望請頒示天下、曉喩諸人、然後若違法布施者、不論施受加呵責、

〔三代實錄 二十六清和〕貞觀十六年十二月廿六日庚辰、檢非違使起請二條、其一應糺彈近京之地非違事、謹案、使等依舊宣旨、唯檢京中之非違、由是姦猾之輩、好城邊之地、避使等撿察、亦觸類應彈之事、多在山崎、與渡、大井等津頭、使等卽事經過郡邊、目有所見、口不能言、望請津頭及近京之地在非法、使等有所看著、卽便糺彈、其二應沒私鑄錢者、田宅資財事、謹案、法條中無可沒入私鑄錢者財物、而使等先例、或沒其舍宅資財、既非法意、亦無宣旨、論之政理、誠難遵行、望請處分將爲永例、

〔政事要略 六十一糺斷雜事〕右大臣宣、奉勅、檢非違使每旬巡察大井、與渡、山崎、大津等非違者、○中略

寬平六年十一月三十日　左衞門少尉橘在公奉

〔朝野群載 十一廷尉〕巡撿道橋

左右看督長各二人　　從各一人

火長三人

右左大臣宣、奉勅、爲札行春日祭濫行、差件等人、發遣如件、國宜承知、依宣行之者、仰彼之國依例供給、

官符追下、

年　月　日　　右大史

〔法曹至要抄中雜〕一鞍具幷鞦等事

案之、有著件制物之輩、撿非違使直破却、無職無蔭之類見決、至于有職高位者、强不科罪者、

一乘車馬幷累騎事〇中略

撿非違使式云、累騎並乘己主鞍馬、擔夫乘車馬等類、隨狀科不應爲輕重之罪、

案之、非色之輩、乘車之時、科違式罪、可決笞卅、但有位有蔭之輩不限決之、又累騎並乘己主鞍馬、擔夫乘車馬等之類、成此犯者、事重決杖八十、事輕決笞卅、若有位有蔭之輩者、令候使所懲將來、又應例也、

〔新古今和歌集十八雜〕延喜の御時、女藏人内匠、白馬節會見はべりけるに、車よりくれなゐの衣をいだしたりけるを、撿非違使のたゞさむとしければ、いひつかはしける、

女藏人内匠

おほそらにてる日の色をいさめては天の下には誰かすむべき

かくいへりければ、たゞさずなりにけり、〇又見政事要略六十九

〔法曹至要抄中雜〕一染摺成文衣袴事

承平三年十一月九日、別當宣云、如聞、祭使等摺袴下襲、其長過多者、仍使官人等向祭使所、出件袴下襲、任法札行、

一藏人所小舍人、辨官使部、王臣家已下雜色、幷使廳下部等不可騎馬事、

右同宣、奉勅騎馬之制、可聽有限、宜任法條愼加督察、就中看督長防援猥以控御、檢非違使等、偏忘糺彈、還更積習、若見傍輩不申上、知所犯令隱容者、將處違勅罪者、

以前條事下知如件、使宜承知、依宜行之、符到奉行、

正四位下行右大辨兼內藏頭藤原朝臣

修理右宮城判官正五位下行左大史兼算博士播磨守小槻宿禰

永久四年七月十二日

〔朝野群載十一廷尉〕太政官符彈正臺、左右京職、檢非違使、

應禁過私飼鷹鶴幷致狩獵事

右左大臣宣、奉勅、狩獵之誡、嚴制重疊、而近日恣忘制令、私飼鷹鶴、競馳郊野、殺屠猪鹿、論之憲章、理不可然、宜仰彼臺職等愼令禁過者、臺職等宜承知、依宜行之、符到奉行、

左少辨正五位下兼淡路守平朝臣

正五位下行左大史兼算博士能登守〇守一本作介小槻宿禰

大治五年十月七日

同六年正月廿五日　左衞門少志惟宗成國奉

警察

〔延喜式四十六左右衞門〕凡釋奠祭日、都堂講宴之時、左右檢非違使禁過堂下濫行之輩、

〔江家次第三正月〕御齋會始　左右檢非違使著庭中座、糺察非違、

〔朝野群載十一廷尉〕左辨官下　大和國

使檢非違使左衞門權少尉安倍延行　從三人

少志美奴理明　從二人

也、

〔西宮記臨時二〕下検非違使宣旨 赦免禁色事 雜袍事 帶劒(上卿、下宣旨)事 鬪亂事 殺害事(或内侍宣)、(所官宣) 御鷹飼著摺衣耕袴事、 赦免事(上卿召官人仰) 諸有宣旨仰下事(弁内侍宣)

件使雜事、別當上卿一向仰行、若非納言之別當及臨時糺彈非違雜事者、奉宣旨、上卿令辨官召仰耳、是則諸國申請使官人事、(并)所々愁申鬪亂等之類也、或又上卿召府生以上、就陣膝突宣旨、(禁色等類)但五位者、直就膝突、六位先候庭前、隨上卿氣色、著膝突、 諸宣旨例(奉勅上宣并下所等)

〔延喜式(四十一彈正)〕凡新有立制宣旨者、告示検非違使、

〔朝野群載(十一廷尉)〕新制宣旨七箇條

太政官符 検非違使

雜事漆箇條

一五節相撲兩日間、不可改著裝束貳具事、

一紅紫二色、除昇殿者幷女房勞外、不可著用事、

一錦繡二重織物衣服、一切不可著用事、

一諸人衣服、不可過男參領、女伍領事、

一上下諸人不可纏頭事

右左大臣宣、奉勅、件五箇條、先格後符、嚴制稠疊、而時代推遷、奢侈競起、是則有司不加糺彈之所致也、自今以後、殊加禁遏、莫令更然者、

一諸司諸衞官人以下、不可乘車事、

右同宣、奉勅、聽乘車翟、載在格條、而不憚憲章、違犯爲事、況宿衞之人、各遠兵杖、恣飛花軒、狼戾之至、職而斯由、且任法決斷、且錄名言上者、

職掌

氣色ヲ、異檢非違使共見ツヽ、目ヲ咋セツヽ、己等ガ裝束ヲバ只解ニ解ツ、此レガ腹立テ不解ヌヲモ、アヤ悒立ツ様ニテ只解ニ解セツ、然テ口口看ノ長ヲ呼テ、此ノ殿原ノ裝束共一具ヅヽ、淨キ所ニ取リ置ケト云ケレバ、看ノ長寄テ、先ヅ此ノ袴複ラミノ檢非違使ノ裝束ヲ莪草ノ上ニ置ク程ニ、袴ノ抉ヨリ白キ糸ノ頭ヲ紙シテ被裹タル二三十計フタ〳〵ト落シタリ、檢非違使共此レヲ見テ、彼レハ何ゾ何ゾト集テ目ヲ咋セテ喤リ間ヘバ、此ノ袴複ラマシノ檢非違使、顔ノ色ハ朽シ藍ノ様ニ成テ、我レニモ非ヌ氣色シテ立テリ、異檢非違使共、然コソアヤ悒立ツレドモ、糸惜カリケレバ、裝束ヲ取テ怱キ著テ、馬ニ乘テ思々ニ馳散ジテ逃テ去ニケレバ、檢非違使一人胸病タル者ノ顔ツキニテ、我ニモ非デ裝束打シテゾ、馬ニ乘テ馬ニ被任テ返ニケル、然レバ口口看ノ長一人ナム、其ノ糸ヲバ拾取テ、此ノ檢非違使ノ從者ニ取セケル、從者モ我レニモ非ヌ氣色ニテゾ、糸ヲバ取ケル、放免共此レヲ見テ、己等ガドチ密ニ私語ケルニ、我等ガ盜ヲシテ身ヲ徒ニ成シテ此ル者ト成タルハ、更ニ恥ニモ非ザリケリ、此ル事モ有ケリト云テゾ忍テ咲ヒ合タリケル、此レヲ思フニ、其ノ檢非違使極テ愚也ケル者也、極ク欲ク思フトモ、然カ追捕セム所ニテ糸ヲ取テ被見顯ル、極テ奇異キ事也、然レバ此ノコト異檢非違使共口ニ糸惜ク思ケレバ、隱ストスレドモ、自然ラ世ニ聞エテ、此クナム語リ傳ヘタルトヤ、

〔職原抄下〕檢非違使（此云使廳、本所乃稱顯職也、）淳和天皇御宇天長年中初置之、異朝尤重此職、昔唐虞代皐陶爲士、此云大理、周禮立官之日、大司寇卽此任也、後代置大理寺、本朝又以刑部省爲糺判之官、天長年中准唐朝置使廳、蓋是大理寺也、但別當以下爲宣下職、爲衞府之人補之、又書位署之時、不書此職號、是流例也、又別當宣者則廳宣也、古來被准勅宣、仍天下重之、違背廳宣者、可准違勅云々、又當使補看督長六十六人、此爲遣諸國也云々、朝家置此職以來、衞府追捕、彈正糺彈、刑部判斷、京職訴訟、併歸使廳、仍爲國家之樞機、歷代以爲重職者

〔平家物語五〕文覺流されの事

こゝに信濃の國の住人安藤武者みぎむね〇中略文がくが刀持たる右のかいなをまたゝかにうつ、〇中略その後門外へ引出て廳の下部にたぶ、〇中略この法師都においてはかなはじ、をんるせよとて、伊豆の國へぞながされける、〇中略法。便。兩三人をぞ付られたる、是らが申けるは、廳。の。下。部。のならひ、かやうの事に付てこそ、をのづからゐこも候へ、いかにひじりの御房はゑりうどは持給はぬか、をんの國へ流され給ふに、とさんらうれうどときの物をもこひ給へかしといひければ、文覺はさやうのよそ事をいふべき、とくいはなし〇中略といひければ、〇下略

〔今昔物語二十九〕檢非違使盜糸被見顯語第十五

今昔夏比檢非違使數下邊ニ行テ、盜人追捕シケルニ、盜人ヲハ捕ヘテ縄付テケレバ、今ハ可返キニ、ロロト云檢非違使一人、疑ハシキ事倘アリト云テ、馬ヨリ下テ其ノ家ニ入ヌ、暫許有テ檢非違使出來タルヲ見レバ、前ニハ然モ不見エザリツルニ、袴ノ裾ノ初ヨリハ複ヨカ也ケレバ、異檢非違使共、皆目ヲ付テ怪シト思ケルニ、初此ノ檢非違使ノ、家ヘ未ダ不入ザリケル時、其ノ襴度懸ノ男ノ、此ノ家ヨリ出來テ、主ノ檢非違使ト私語ツルヲ、怪シト思ヘルニ合セテ、此ク檢非違使ノ袴ノ複ラカナレバ、異檢非違使共ノ云ヒ合セテ云フ樣、此レハ極ク心不得ヌコト也、此ノ事不見顯ズバ、我等ガ爲ノ耻也、此テハ否不止ジ、構ヘテ此檢非違使ノ裝束解セテ見ムト謀テ、此ノ捕ヘタル盜人ヲ川原ニ將行テ問ハムト云合セテ、屏風ノ裏ト云フ所ニ將行ヌ、其ニテ盜人ヲ問テ後可返キニ、河原ニテ去來我等熱キニ水浴ムト、一人ノ檢非違使ノ云ケレバ、異檢非違使共ハ糸吉キ事也ト云テ、皆馬ヨリ下テ、裝束ヲ只解ニ解ケルニ、此ノ袴複ラカシタル檢非違使此レヲ見テ、此レ更ニ不有マジキ事也、糸便无シ、輕々ニ何ナル檢非違使ガ河原ニテ水ハ浴ム、馬飼フ童部ナドノ樣ニ穴異樣ト云テ、我ガ裝束ヲ解セムト謀ルヲバ不知シテ、只スヽロヒニスヽロヒテ腹立ッ

皆射殺サセテケリ、然レバ强盜シニ、其ノ家ニ行テ被打殺タル樣ニテナム止ニケル、由无キ物欲クシテ命ヲ亡ス奴原カナ、口ハ賢キ男ノ德ニ命ヲゾ存シタリケルトナム語リ傳ヘタルトヤ、

〔源平盛衰記十八〕文覺流罪事

公卿僉議アリテ、此僧ヲ京中ニ置テハ惡カリナントテ、伊豆國ヘ流罪ノ由ニテ、當時ノ國務也ケレバ、源三位入道ノ子息仲綱ニ被仰付ヌ、〇中略院ヨリ廳ノ下部二人付ラレタリ、〇中略廳ノ下部放免二人モ下向スベキニテ有ケルガ、文覺ニ語ケルハ、廳ノ下部ノ習、懸事ニ付テコソ自酒ヲモ一度飲事ニテ候ヘ、去バコソ又折々ニ芳心ヲモ申事ナレ、上人御房程ナラヌ人ダニモ、人ニハ訪ヲモ乞事ニ候、〇中略

文覺淸水狀天神金事

去程ニ、東山ニコソ後生マデモト契テ、常ニ行眤ブ事ハナケレ共、朝夕ニ難忘、思被思タル人ハアレ、縦無間ノ府マデモ身ニ代ラヌ人也、ヨニ憑ム甲斐在テ、實ノ詮ニハ叶ヌベキ人ゾ、サラバ實ニ道ノ土產ニモ大切也、殿原ニモ志ヲモ申、吉ヨキ酒ヲモメサセン、硯紙マウケ給ヘト云フ、下。部。悅テ、硯借ヨセ、紙買儲タリ、文覺紙ヲ取向テ見レバ、如法雜紙也、見マヽニ奇怪ナル奴原ガ紙ノ樣カナ、人ノ品ヲバ消息ニテ知事也、吉紙ヲ尋テ進ヨ、コレ人タメニ非ズ、只今物儲テ取センズルゾトテ投返ス、放免ドモ、惡キ僧ノ詞バカナ、奴原トハ何事ゾ、イザ咎メントスルヲ、其中ニ制シテ、暫、一天ノ君ヲダニモ惡口申物狂也、天狗ノ樣ナル者ナレバ、何トモイヘ、人々數者ニイハレテコソ耻ニモ及ベ、其上唯今物乞テエサセント云人ニ、讒合テ要事ナシトテ、上品ノ紙ノ神妙ナルヲ尋出シテ進ル、文覺申ケルハ、法師ハヨニ腹惡者ニテ、惡口申テ候ケリ、中直リシ率、抑我ハ天性筆ヲトラヌ者也、能書ン人ヲ請シ給ヘ、件ノ人ハ目モ心モ辱シキ人也、文樣尋常ナルベシト云ケレバ、穴煩シノ御房ヤトハ思ヘドモ、若興アル事ヤ有ト思テ、其邊ニ走廻テ、能書ノ人ヲ尋テ出シテ來レリ、

共十人計同心ニテ、明日ノ夜來リ可會キ由ヲ契テ散ヌ、此ノ男ハ主ノ家ニ返テ、何カデ此ノコトヲ密ニ主ニ聞セムト思テ、伺ケル程ニ、主エンノ邊ニ出タリケレバ、男土ニ突居テ、前ニ人モ无キ程ニ、物云ハムト思タル氣色ナレバ、主、和男ハ、何事云ハムト思フゾ、暇得テ本國ニ下ラムト思フカト問ケレバ、男然ニハ不候ズ、忍テ可申キ事ノ候フ也ト云ケレバ、主何事ナラムト怪ビ思テ、隱レノ方ニ呼ビ放テ聞ケバ、男申スニ付テ、極ク皮口ク候フ事ナレドモ、聞セ奉ラデハ何カデカト思ヒ給ヘテナム、然口ノ事ノ候フ也ト云ヘバ、主極ク善ク告タル、下衆ハ物ノ欲キマヽニ此ル心ハ无キ者ヲ哀レ也ケリト云テ、然ラバ和男只門ヲ開テ盜人ヲ入レヨト計云テ、心ニ思ハク、外ニテ追ヒ返シテハ、否不捕ズシテ誰トモ不知テ止ナム惡カリナムト思テ、手迷ヒヲシテ親ク年來知タリケル口ノ口ト云フ兵ノ許ニ行テ、口密ニ此ノ事ヲ云ケレバ、口聞キ驚テ深キ契有ケル人ニテ、口郎等トモ无ク、雜色トモ无ク、兵ノ道ニ達シケル者共五十人計ゾ明日ノ夕ニ竊ニ遣ラムト云ケレバ、口喜テ返ニケリ、亦ノ夜ニ成テ、彼兵者、弓箭兵仗共ヲバ、或ハ物ニ裹ミ或ハ長櫃ニ入レナドシテ、然リ氣无キ樣ニテ前ニ遣テ、夜ニ成テ、兵共ハ、只ノ樣ニテ一人ヅヽゾ、其ノ家ニ行テ隱レテ居タリケル、漸ク其ノ時ニ成テ、或ハ調度ヲ負ヒ、或ハ打物ヲ取テ、皆甲冑ヲ著テ、手ヲ舐テ待ケリ、亦出テモ逃ル事有バトテ、少々ハ外ノ辻々ニモ立テタリケリ、放免共ハ努々此ノ事ヲ不知ズシテ、只偏ニ仲人ノ男ヲ憑テ、夜打深更ル程ニ、其ノ家ニ行テ門ヲ押セバ、男支度シタル事ナレバ、行テ門ヲ開ルマヽニ、走リ返テ板敷ノ下ニ深ク逼入ヌ、其ノ時ニ放免共ハラ〳〵ト入ルニ、立テ兵共儲タル事ナレバ、正ニ愚ナラムヤハ、獨リ宛ニ捕ヘツ、盜人ハ十人計有ケルニ、艶ヌ兵共ノ四五十人兼テ儲テ待タムニハ、聊ニ不動サズシテ、皆捕ヘテ車宿ノ柱ニ縛リ付テ、其ノ夜ハ有テ、夜明テ後ニ見レバ、皆目ヲシバ叩テ被縛付テアリ、此ル奴原獄ニ禁ジタリトモ、後ニ出ナバ定メテ惡キ心アリナムト思ケレバ、然リ氣无クテ人ニモ不知セズシテ、夜ニ入テ竊ニ外ニ將行テ、

〔今昔物語二十九〕放免共爲強盜入人家被捕語第六

今昔、□ノ□ト云フ者アリケリ、家ハ上ニナム住ケル、若カリケル時ヨリ、受領ニ付テ、國々ニ行クヲ役トシテ有ケレバ、便漸ク出來テ、萬ヅ叶ヒテ、家モ豐ニ、從者モ多ク、知ル所ナドモ儲テゾ有ケル、而ル間東ノ獄ノ邊近キ所ニテ有ケレバ、獄ノ邊ニ住ム放。免。共、數相ヒ議シテ、強盜ニテ□ガ家ニ入ラムト思ケルニ、其家ノ有樣ヲ委モ不知ザリケレバ、構ヘテ其ノ家ニ有ラム者ヲ一人語ヒ取ラムト謀ケルニ、□ガ攝津ノ國ニ知ル所ノ有ケルヨリ、宿直ニ上タリケル下衆男ノ有ケルヲ、放免共、其奴ハシモ田舍人ナレバ、被□ナムカシ、物ヲダニ得テハ、ヨモ不聞ヌ樣ハ不有ジト議シテ、構ヘテ其ノ宿直人ノ男ヲ放免ノ家ニ謀寄セテ、物吉シテ食ハセ、酒ナド呑セテ語ヒケル樣、和主ハ田舍人ニテ有ナレバ、京ニテハ常ニ物欲キ時モ有ラム、亦要事ナル事モ有ラム、極テ糸惜シ、故有テ和主ヲ糸惜ト思フコトノ有ルゾ、和主ハ若ケレバ否不知ジ、然レバ今ヨリハ京ニ有ラム程ハ此樣ニ常ニ座セ、物モ食セム、亦用アラム事ハ云ヘナド懃ニ語ヒケレバ、男善トハ思ヒ乍ラ、恠ト思ケレドモ、亦然ル樣コソハ有ケメト思テ返ヌ、此樣ニ爲ルコト既ニ四五度ニモ成ニケレバ、放免共今ハ□得ット思テ、辭ビ氣无ク語ヒ付テ後ニ云ケル樣、實ニハ和主ノ宿直スル家ニ我等入レテムヤ、然ラバ无限キ喜ビヲ云ハン、此ノ世ニ身一ツ過計ノコトヲコソハセメ、此レ人ノ可知キコトニ非ズ、世ニアル人ハ上モ下モ身ノ爲ニコソ人モ怖シケレナド事吉ク□ケレバ、此ノ男下衆ナレドモ、思量有テ實カリケル奴ニテ、心ノ内ニハ、奇異キコトナレバ、思ヒ不懸マジキコト丶ハ思ヒケレドモ、只今辭ヒバ定メテ惡カリナムト思テ、糸安キコト也ト請テケリ、放免共喜テ、且トテ絹布ナド取セケレドモ、男只今不忩トモト爲得テム、後ニト云テ不取テ返ルニ、放免ノ云ク、然ラバ明日ノ夜トナム思フヲ、夜半計ニ其ノ門ノ許ニ至テ、門ヲ押サハ、儲テ門ヲ開ヨト、男コトニモ非ズト云テ返ヌ、放免共ハ彼ノ所兵ノ家ニ非ネバ、心安ク思テ、其ノ心得タル者

信卿云、放免著用綾羅錦繡服、爲撿非違使共人、何故乎、戸部答云、非人之故不憚禁忌也、公任卿云、然者雖致放火殺害、不可加禁遏歟、他罪科者皆加刑罰、於著美服條有指證文歟、齊信卿答曰、贓物所出來物ヲ染摺成文衣袴等、件日揭焉之故、所令著用歟、四條大納言頗被甘心云々、

〔徒然草下〕建治弘安の比は、祭の日の放免のつけ物に、異樣なる紺の布四五たんにて、馬を作りて、尾髮にはとうしみをして、蜘のゐかきたる水干に著て、歌の心などいひて渡りし事、常に見及び侍しなども、興ありてしたることゝちにてこそ侍しかど、老たる道志どもの、今日もかたり侍る也、

〔小右記〕長和三年四月廿一日丙子、今朝四條大納言○公任密々示送云、使廳事、極多奇事、是衆案也、面可談說者、誠雖須公、○公任女、爲別當藤原敎通妻、不從諷諫歟、使廳猥藉不如今時者、看督長放免等橫行京中、切市女笠、又別當舍人等同切云々、市女笠非禁制物、假令雖禁物、看督長放免別當下人破却、太奇怪也、別當○敎通時年十九、年歯極若、又無才智、暗夜暗夜又暗夜也、京畿之間昏亂無度、使鼻如口、聖人鑒戒而已、

〔中右記〕寬治八年○嘉保元年十二月四日辛未、召撿非違使丈部保成、付申文、獻別當、是備前役夫工催神民爲廳下部被殺害事、依上卿命也、　八日、一日字佐使立日撿非違使廳下部等、備前役夫工催使神民殺害事、重付說長令申、

〔殿曆〕長治元年十二月廿一日庚申、今日物忌也、仍不出行、巳時許爲隆來、御使也、此間撿非違使郎等追捕間、近邊家取物之由其有聞、仍被召問之處、件事實也、仍件撿非違使等有可沙汰之事也、

〔長秋記〕大治四年十一月十八日壬戌、此曉眞寶山階寺寺主自關白御許被召院、盛通預之云々、未剋於院門前被問信實、放免付左右手於徒跣問之云々、大路及耻辱歟、事了召盛通被仰、不可預放免、可譴郎等家也、無指答云々、此事如何、初及耻辱、後蒙恩言、乍令存不失之由、及耻事、豈可謂正理哉、　十二月六日庚辰、兩院御幸三條殿、別當談云、去○去下恐脫日字追捕間、當講惠曉房所安置之東大寺聖寶僧正五師子如意爲放免被盜取給、檜佛師顯如者尋取出、被返送本寺、師子文雖取破、如元打付云々、

放免共ニ此ナム思ト云ケレバ、放免然ラバ然モ爲セヨト云ケレバ、男家ニ死人ヲ持テ行タレバ、妻此ヲ見テ、其レハ何ゾト云ヘバ、男然々ノ事ニテ此ク思テ持來ル也ト云テ泣ク事无限シ、〇下略

〔今昔物語二十九〕藤大夫□家入強盜被捕語第七

今昔、猪熊ト綾ノ小路トニ、藤大夫□ト云フ者住ケリ、受領ノ共ニヤ有ケム、田舍ニ行テ返リ上タリケルニ、物共多ク持來テ綀ケルヲ、隣ニ有ケル盜心有ケル者見テ、此樣ノ態シケル得意共ヲ歛語ヒ集メテ、強盜ニテ其ノ家ニ入ニケリ、〇中略其ノ後、錢モ无クテ夜明ヌ、隣人モ集リ來テ訪ヒ喤ル、西ノ洞院ト□トニ有ル、藤判官□ト云フ檢非違使モ、此ノ藤大夫ト得意ニテ有ケレバ、人ヲ遣セテ訪ヒケルニ、此ノ盜人突殺シタル小男、彼ノ藤判官ノ許ニ行テ然々ノコトナム仕タルト聞セケレバ、藤判官聞キ驚テ、放免ヲ呼テ、彼ノ藤大夫ガ家ニ遣テ見セケレバ、放免其ノ家ニ入テ、被突殺タル盜人ヲ引出シテ見レバ、隣ニアル某殿ノ雜色也ケリ、早ウ隣ニテ物共ヲ持來タリケルヲ見テ入タル也ケリ、放免此ノ由ヲ藤判官ニ申セバ、藤判官、即チ彼ノ雜色ノ家ニ人ヲ遣テ、妻ヲ搦サセツ、妻ハ定メテ知リタラントテ問ケレバ、妻否不隱サデ夜前コソ某丸彼丸ハ語來テ私語仕リシガ、其等ガ家共ハ其々也ト云ケレバ、且ツ檢非違使ノ別當ニ申シテ、其ノ女ヲ前ニ立テ其ノ家々ニ行テ捕フレバ、其奴原、今夜盜人シ極シテ臥セリケルヲ、皆員ヲ盡シテ尋子捕ヘテケリ、

〔古事談一王道后宮〕入道殿、〇藤原道長賀茂祭見物、棧敷間俄花山院鬪亂事アリ、以職事被仰可遣檢非違使之由、奏者申云、上卿誰人哉、仰云、如此急遽大事只稱內侍宣也云々、此度院被惜下手人、入道殿仰使廳下部、昇院築垣上、院恐之被出下手人云々、

〔江談抄公事一〕賀茂祭放免著綾羅事

被命云、放免賀茂祭著綾羅事、被知哉如何、答云、由緒雖尋未辨、被命云、賀茂祭日、於棧敷、隆家卿問齊

〔野宮問答〕放免

徒然草の三箇の大事とやらん世間に申ふらし候、かの草紙に放免のつけものと候をことしくして、秘說あると申なし候、是は誹諧師貞德と申もの申出したるよし聞及候、天台の空假中を以て其說をなすよし、一笑に候、貞德、官家之故事を習はず候故、放免と申事を不知して申出たる事に候、此事平家物語にも見え候、文覺なかされの卷に、伊豆國へゐてまかるに、放免兩三人をぞ付られたる、これらが申けるは、廳の下部のならひ、箇樣之事につきてこそおのづからゐこも候へと有之候、此文段よき放免の注に候、撿非違使廳之下部を放免と申候也、

〔公家新制四十一箇條〕弘長三年八月十三日　宣旨○中略

使廳放囚不可著綺類、又風流過差之制同于當色、紺目結幷二陪三陪紺布一切停止之、○中略

撿非違使　有限之下部等之外、雖五位尉雜色不可過二人、

〔今昔物語十六〕仕長谷觀音貧男得金死人語第廿九

今昔京ニ有ケル生侍ノ身貧キアリケリ、父母モナク、濕ル主モ无ク口身モ无カリケレバ、極テ貧クシテ過ケルニ、長谷ノ觀音コソ難有キ人ノ願ヲバ滿給フナレ我ノミ其ノ利益ニ可漏ニアラズト深ク信ジテ、京ヨリ不楷ヌ身ナレドモ、只獨リ歩ヨリ長谷ニ參ニケリ、○中略九條ノ程ヲ行クニ、只獨リ心細クテ行ケルニ、廳ノ下部ト云フ放免共ニ會ヌ、此ノ男ヲ放免共俄ニ捕ツレバ、男此ハ何故ニ捕ツルゾト云ヘバ、早ウ夫ニ取ナリケリ、曳張テ上樣ヘ將行テ八省ニ將入ヌ、男奇異ク怖シク思フ程ニ、內野ニ有ケル十歲許ナル死人ヲ此レ川原ニ持行テ棄ヨト責ケレバ、○中略此ノ死人ヲ持ニ、極テ重クシテ不持上ズ、然レドモ、放免共強ニ責レバ、念ジテ持テ行クニ、放免共後ニ付テ見レバ、弃テ逃ル事モ无クテ行、クニ、極テ重シ、川原マデ否不行著シテ、男心ニ思フ樣、我レ獨シテ此ノ死人ヲ川原ヘ難持行シ、然レバ我レ家ニ持テ行テ、夜ル妻ト二人持テ弃テムト思テ、男、

火長

案主長

放免下部

解緩、受付諸事、不過廿日、縱雖追喚徵納之時、自先參上、可申其狀、又京官官仕、明立剋限、至住洛都之外、雖從機急之役、任意往反、尤乖憲法、自今而後、無佐裁許、輙向城外、當番不勤直、無故不參政之類、不憚制止、若及三度、宜從解却、俾愼傍輩者、

長保五年十一月二十八日　左衞權佐令宗朝臣允亮奉

〔小右記〕長和三年四月廿一日丙子、內膳典膳坂田守忠、日來依殺害之事、檢非違使付看督長令守護、亦且拷訊從者、承伏了云々、仍可訊守忠云々、

〔江家次第六四月〕松尾祭

檢非違使設渡船、近代只令看督長役之、可尋之、

〔狹衣一上〕又ある人々、一日もみかどをむごにたゝかせ給ひしに、あくる人もなかりしかば、おほしますをいとひまいらするか、べつたうどのゝ御子とはしらぬか、いたうあなづり奉らば、かどのおさなどゐてきて、このかどあけさせせんなどいひければ、少將殿こそおはすれどいへば、まれまれある女どもゝ、このごろは、おぢてまうでこず、いたうわりなきや、

〔伊呂波字類抄久官職〕火長在使廳

〔野宮問答〕火長　檢非違使廳之下輩之官人也

〔政事要略六十一糺彈雜事〕檢非違使雜事上

私問、以衞士號火長、若其情有所見哉、答、不見明文、但可准的軍防令、云兵士十人爲一火、

〔政事要略六十一糺彈雜事〕被別當宣云、案主長是可掌使廳文、以傳者也、非有才用、難可勤仕、如聞者、依無其人、不置件職、文書紛失、事自懈緩、宜以左右門部有才幹者一人、爲件公文之預、令得勘據之使者、

天曆六年十一月二十八日　左衞門少志笛有忠奉

〔伊呂波字類抄波人倫〕放免ハウメン延尉下部也

被別當宣偁、看督長之職、雖品秩卑微、隨公務之後、逐日繁多、而六位官人等、偏稱有其怠、任意處勘事、因茲急速之事、自以解體、追捕之間、無人充仕、自今以後、若看督長等、有所闕怠、先定其犯、處勘事由、宜觸佐者、

天慶五年閏三月二十八日　防鴨河使右衞門權佐兼丹波守平朝臣隨時奉

〔政事要略六十一糺彈雜事〕別當宣偁、左右看督長等、各守次第、可勤獄直、而或寄事他役、連月不勤、或引怠自身、數日無仕、是則重不立制、忘憲法也、自今以後、直限五日、依次可替、但向津頭、在京邊、赴他事、役未畢者先歸獄門、須勤本直、若有急速之事、可無相替之人者、蒙處分可進退、向遠使者不在此限、自餘不勤本直、及三度者、解却職掌、將懲傍輩者、

應和三年七月十三日　右衞門權佐平朝臣偕行奉

被別當宣偁、看督長是左右之間、雖有員數、差雜役猶以不足、而官人等、蒙臨時宣旨、毎向城外事、稱有先例、官人一人、隨身看督長二人、因之守直之者彌多、從役之輩猶少、自今以後、城外官人一人率一人、但事不獲止、可過此數、先申事由、而後進止之者、

康保三年八月十九日　右衞門少尉宮道忠城奉

別當宣偁、尉以下官人、差遣看督長於京外、及處勘事、幷隨身城外之事、皆是觸佐、隨其許容所行也、而如聞、日來件官人等、不觸事由、恣差遣遠所、處勘事、及隨身向城外、是尤不可然、已有舊制、何乖往規、自今以後、依昔例行之、任意不得進退者、

正曆三年十月十四日　右少辨兼右衞門權佐東宮學士周防權守高階朝臣信順奉

別當宣偁、尉以下官人、差遣看督長於京外、及隨身城外之輩、皆是觸佐、可隨許容之由、本存起請、不可乖違、如聞、依公事差遣之日、就私事役仕之間、偏任各之進退、不待佐之聽許、既謂有司、豈以無法乎、又看督長職者、獄直爲最、從政爲善、而或奉使赴畿內、涉月淹留、或點居在城外、送旬經廻、須加茲肅誡、彼

尉　道志　看督長

詔獄、

〔有職問答 二〕一六位尉事
四府尉未六位の時、(左右衛門尉平)使宣旨を蒙を云、(左右衛門ナラデハ不レ蒙ニ使宣旨一例也)必爵をせずとも、使宣旨をば蒙事有、其時は縦左右兵衛尉た(雖レ有レ例後不蒙ニ使宣旨一例也)り共、判官と他人は可レ稱之由被ニ仰聞一候畢、其分候哉、

〔書言字考節用集 三 官位〕道志(ダウシ)。(明法道輩、爲ニ六位一時、任ニ衛門志一、謂ニ之道志一、)

〔百寮訓要抄別註 七〕官職秘抄ヲ按ニ、明法道ノ輩、廷尉タルモノヽ外、大志ニ任ゼザル事ナリ、近代ハ不レ然、院主典代、官史生、出納、下家司等ノ中、譜代器用ノ者、衛門ノ府生ニ任ジテ、使宣旨ヲ蒙テ、夫ヨリ志ヘ轉任スルナリ、追捕ノ者ハ志ニ任ゼザル例ナリ、

〔官職秘抄 下〕左右衛門府

少尉　兵衛尉有ニ年臈一者、○中略木鳥道志等任レ之、

〔下學集 上人倫〕看督長(カドノヲサ)

〔倭訓栞 前編 六 加〕かどのをさ　看督長と書り、職原抄に見ゆ、撿非違使の別當に附屬する者なり、

〔西宮記 臨時 二〕補ニ看督長一事　左右佐以下判補

〔職原抄 下〕撿非違使　又當使補ニ看督長六十六人一、此爲レ遣ニ諸國一也云々、

〔標注職原抄 下本〕又當使補ニ看督長六十六人一、これ恐らくは諸國の撿非違使の事なるを、准后おもひたがへて、看督長と記したまへるなるべし、

〔政事要略 六十一 糺彈雜事〕被ニ別當宣一偁、蒙ニ宣旨官符一、出ニ城外一之官人等、宣旨之外、左。右。看。督。長。等、或三四人、或五六人、任レ意隨身、赴ニ向使所一、自今以後、宣旨之外不レ得レ過ニ其數一、但于ニ隨身看督長等一、先注ニ其夾名一、可レ觸ニ佐一者、

天慶五年閏三月二十八日　防鴨河使右衛門權佐兼丹波守平朝臣隨時奉

佐

一放生會上卿相具一員下向事　檢非違使騎移馬之者一員之時也、雖行幸皆乘只鞍也、而故信賴卿元三出仕、令乘差泥障之馬、不相具前駈、太有若亡事也、有前駈無一員、恒事也、有一員無前駈未聞見事也、

一遠所行幸之時相具下部事　下部著水干小袴、此時也、件裝束水干者紺藍摺無式法美麗調之、小袴者フクラ柴（皆）染タル一色令著也、是如衞士所著赤狩衣色也、

一内裏近邊火事之時著木蘭地奴袴事　陣中之時著之、文ハ如恒奴袴也、予申云、著件袴之時著紅衣歟、　命云、可然也、

〔百練抄（八高倉）〕承安三年三月十二日、別當成親卿、定下諸衞官人二分三分郎從員數、

〔帝王編年紀（十三淳和）〕天長元年、是歲初補廷尉佐（左並仲守右藤永雄）

〔標注職原抄（下本）〕廷尉とは、宋書百官志に、凡獄必質之朝廷、與衆共之之義、かゝれば廷は朝廷なり、通典に、自上安下曰尉、故武官皆以爲號、かゝれば尉は帶仗の官の事也、

〔有職問答（一）〕一廷尉號事

檢非違使佐を申ならはし候、（佐ハ廷尉ノ佐廷尉トバカリ尉ヲ申付候、直總號也、勿論候）されど共檢非違使總號に用候よし被仰出候き、（此分候）

〔有職問答（二）〕一廷尉位署事

我と書には、左右衞門權佐と可讀也、衞府佐は諸人任ずる事ながら、廷尉は別而宣旨也、さるにより て、權佐に使宣旨の外には不任之、但正佐にて使宣旨もあるべし、（此分候 古例見官職秘抄）

〔後漢書（二十五百官志）〕廷尉卿一人、中二千石、（應劭曰、兵獄同制、故稱廷尉）本注曰、掌平獄、奏當所應、凡郡國讞疑罪、皆處當以報、（胡廣曰、讞質也、漢官曰、員吏百四十人、其十一人四科、十六人二百石廷尉文學、十六人百石、十三人獄史、二十七人佐、二十六人騎吏、三十人假佐、一人官醫）

正左監各一人、（前漢有左右監平、世祖省右而猶曰左）　左平一人六百石、本注曰、掌平決詔獄、

右屬廷尉、本注曰、孝武帝以下置中都官獄二十六所、各令長名、世祖中興皆省、唯廷尉及雒陽有

代初以參議爲使、(略○中)若使爲檢非違使別當者、馬副八人、府隨身四人、火長四人、雜色十二人、取物四人之外、或加看督長四人、實成卿子孫之說也、

〔政事要略 六十一 糺彈雜事〕典侍從五位藤原朝臣灌子宣、奉勅、別當中納言兼行右衞門督藤原朝忠朝臣令奏云、日者依有身病、不從公事、仍著鈦等例務不得令催行者、使政不行、何得經日、須被病間、件雜務佐以下早勤行、若有可定承之事、宜參藏人所令申其由者、(實仰藏人頭右近衞權中將源朝臣延光)

康保二年五月五日　左衞門尉藤原朝臣邦保奉

〔古事談 五 神社佛寺〕經成卿爲檢非違使別當之時、中納言闕所望之間、詣石淸水、以神主某強盜百人搦頭者也、依件功勞可被拜任、今度納言闕之由可令申祈云々、神主云、吾神者禁斷殺生之宗、放生御爭令申其旨哉ト云、經成重云、御禁斷殺生之旨御託宣文明白歟、但件託宣之末、爲國家有巨殺者出來之時非此限ト侍リ、何事トカ令知哉、猶可令申ト云、神主令申其旨之間、果任中納言畢云々、(○又見十訓抄)

〔宇槐記抄〕仁平元年四月七日、太神宮事、右大臣(○源雅定)奉行可宜之由、使朝隆朝臣奏法皇、(○鳥羽)其狀如此歟、被仰下太神宮事、專可奉行事、倩案此事、(略○中)大和國訴訟如雨脚、伊勢訴訟相加者、自然懈怠、何疑之有乎、仍欲辭申也、右大臣度々爲勅使參彼宮、旣蒙其惠、登三台之任、加之爲檢非違使別當之間、禁止強盜、廉正之名、聞于內外、隨又其身非忩劇、訴訟裁判無停滯歟、就中故入道大相國(○藤原師通)爲右大臣之間、有別勅奉行太神宮事、于時法皇御宇也、公私皆爲吉例、早被仰下右大臣、旁有其便歟、仍解狀返獻之、宜以此由可令洩奏給者、左大臣殿(○賴長)仰旨如此、執任恐々謹言、

四月七日　皇后宮權少進執任奉

謹々上　頭辨殿

〔山槐記〕永曆二年(○應保元年)四月廿五日丁卯、大理(家)命曰、我存生之時、相構可補檢非違使別當、當職(尋入教命)之時所存事三事、不遂遺恨也、

別當

廷尉、梁爲秋卿、班第十三、（○隋志十三作十一）陳因之、後魏置少卿司直、北齊及隋爲大理寺、隋置評事、皇朝因之、龍朔二年改爲詳刑寺正卿、咸亨元年復爲大理、光宅元年改爲司刑寺、神龍元年復故、兩漢卿秩中二千石、魏晉宋齊梁陳俱第三品、後魏第二品上、太和以後降爲第三品、隋正第三品、皇朝降爲從三品、

少卿二人、從四品上、

後魏置爲第三品上、太和以後降爲第四品上、北齊第四品、隋因之、皇朝置二人、降爲從四品上、

大理卿之職、掌邦國折獄詳刑之事、（○下略）

〔新儀式 五臨時〕定檢非違使事

召大臣於御前、定補別當一人、（公卿之中、帶左右衞門督者補之、或近衞大將中將、或左右兵衞督等補之、）幷佐二人、（用左右衞門權佐、或近衞少將、）尉四人、志四人、（或補二人、）府生四人、（或補二人、）但隨闕補之、其左右多少亦以不定、具見補任諸所職事之例、

〔西宮記 臨時一裏書〕康保元年十一月七日云々、仰云、檢非違使員數佐、尉、志、府生之間、加減有前例、近則寛平七年、左右合佐四人、尉四人、府生二人、天慶三年、左右佐二人、尉五人、志三人、府生四人、同九年、左右佐二人、尉五人、志二人、府生四人云々、

〔百寮訓要抄〕檢非違使

別當　大納言殊器量をえらばるゝ職なり、白川院の仰には、五ヶの德あるものを任ずべしとおふせられけるとぞ、容儀、才學、富貴、譜代、近習也、

〔古事談 一王道后宮〕鳥羽院仰云、檢非違使別當ハ、兼六箇事之者任之官也、所謂重代、才幹、成敗、容儀、近臣、富有云々、

○按ズルニ、別當ハ七德ヲ備フベシトノ事職原抄ニアリ、前文職員ノ下ニ引ケリ、

〔江家次第 六三月〕石淸水臨時祭

最也、

佐二人（左右唐名廷尉）　爲左右衛門權佐者、蒙使宣旨、正佐爲廷尉之例邂逅也、又上古有中少將蒙宣旨之例、凡廷尉佐者、名家譜第之中淸撰之職也、昔者廷尉佐、著大理廳屋、中古已來不著之、於使廳政者佐以下著行也、

尉（稱之判官、）　左大尉二人　右大尉二人　左右少尉（近代員數不定）　明法道儒必任之、上古其流不一、中古以來、坂上中原兩家爲法家、仍必任之、於少尉者、追捕輩各任之、至大尉者、多明法道所任也、但殿上藏人爲廷尉者、間任大尉、追捕者、武士重代者幷諸家倦勤中殊撰重代器用所被補也、其實追捕犯人、關其賞者希事歟、非明法而補之稱追。捕。是世俗之所云傳也、又源平武士、雖諸大夫多補之、大夫尉源義經者、剩爲昇殿廷尉云々、又六位尉敍五位時、多者去之、明法道者、必敍留、其外輩依殊恩令敍留也、但近代每人敍留、違舊例也、又左右尉者、必左右衛門也、至大理者、衛門兵衛依關事也、佐尉志者、必衛門也、但近衛兵衛邂逅有例云々、

志　左（大少）　右（大少）　明法道輩六位時任衛門志、卽蒙使宣旨也、非成業輩轉任爲規摸、稱非成業者、院主典代、廳官、太政官史生、藏人所出納、諸家下家司中、譜第、器用者、先任左右衛門府生、蒙使宣旨也、武勇家幷追捕輩者不任之、凡志者、奉行使廳諸公事之故、以當道爲其撰、此號道志也、

府生（左右）　府生者、非奏任官、仍府督判授之、後申下使宣旨者也、

〔唐六典十八大理〕大理寺卿一人、從三品、

尙書云、帝曰、咎繇汝作士、五刑有服、孔安國注曰、士、理官也、周官爲司寇、韓詩外傳云、晉文公使李離爲理、理謂察理刑獄也、史記天官書、斗魁四星、貴人之牢曰大理、漢書百官表云、廷尉秦官、掌刑辟、有正、左右監、景帝更名大理、秩中二千石、武帝復爲廷尉、宣帝置左右廷尉、平哀帝復爲大理、王莽改曰作士、後漢復爲廷尉、魏初爲大理、後復爲廷尉、置律博士、晉置丞主簿、明法掾、歷宋齊皆爲

朝等任廷尉事令申給之趣尤有其謂事歟、但白河鳥羽院御時も、源氏平氏等相並爲追捕官人、其外又如此被召仕之輩依無他昇進之道拜任來歟、强非新儀歟、知廉事下向之時も不奏事由、在國之間も無申入之間、進止とも只可在御計、不及沙汰事也、奉公者子孫事令執申給之旨隨喜思食也、且是本自有御存知也、

〔拾芥抄中本官位唐名〕檢非違使大理別當　廷尉佐尉

〔延喜式四十六左右衞門〕凡檢挍左京非違者、佐一人、尉一人、志一人、府生一人、火長九人、二人看督、二人案主、四人佐尉、從各二人、志從一人、府生從一人、

凡檢非違使別當、充隨身火長二人、

〔政事要略六十一糺彈雜事〕案式、已上二條、右衞門府准此者、弘衞式云、凡檢右京非違者官人一人、府生一人、火長五人、二人看督長、二人官人從一人、府生從、貞衞式云、前式凡檢右京非違者、今案可注左京佐一人、尉各一人、今加志一人、天安二年正月二十三日始任之、口口火長五人云云、官人從今加二人、佐尉各一人、志從一人、案主一人、

私案檢件等式、看督二人、案主長一人也、而今置案主長二人者、依政劇人少使等權議所置、不可爲永例、已上二卷私記所注、爲見當事所加載也、

〔職原抄下〕檢非違使

別當一人唐名大理　參議已上尤擇其人也、補此職之人、必帶衞門兵衞督、往古有參議中將補之例、雖非參議補之、中古以來更無其例、昔爲大將之人補之、又有例、仍至大納言帶此職、近代又未聞事也、仍中納言大理任大納言之日必去其職、是流例也、世俗說補大理之人可備七德、所謂譜第、器量、才幹、有識、近習、容儀、富有云々、有剩事歟、又昔者諸大夫不任之、而光顯卿初任之、其後連綿歟、參議大理者過納言闕之時必任之、上首參議縱雖爲英雄不相爭事也、但參議大辨者、勞効等同、仍或同時登用、或互有超越之例、是可依勞之淺深歟、又參議中將勞効久者自相爭也、然而近代以別當爲其

〔帝王編年記十三仁明〕承和元年、是歲始置檢非違使別當、(文室秋津補之)

〔公卿補任仁明〕天長十一年(甲寅○承和元年)

(使別當始、別當中將大辨之例、)參議從四位上文室秋津(左大辨、左中將、武藏守、正月七日補檢非違使別當、使別當始也、)

〔吾妻鏡五十二〕文永三年三月廿九日壬戌、此間刑部卿宗教朝臣就鞠事、作一卷勘狀、(中略)載于狀之趣者、蓬宮仙洞之間之供奉臨幸之臣云、參候蹴鞠之輩、專禮之時、無上括之儀、淳和天皇御宇天長元年被始置使廳以降、天子昇霞、九重之廻祿騷動、獄舍巡見等、依爲楚忽之儀上之、此外之時、上括之輩、先規多以非吉事、(下略)

〔中右記〕元永二年二月卅日、早旦歸家、檢非違使成國來談云、去夜治部大夫時忠爲強盜被切殺了、凡京中連夜強盜入人家、被殺害者甚多、大略使廳力不及歟、何爲哉、只天下之滅也、可然時歟、

〔吾妻鏡六〕文治二年二月一日己酉、今日北條殿於六條河原刎群黨十八人首、凡如此犯人者、不可渡使廳、直可處刎刑之由云々、

〔吾妻鏡七〕文治三年十月三日庚午、付下河邊庄司千葉介等上洛、洛中群盜以下條々令奏聞給事、悉有勅答、其狀今日到來于鎌倉也、又御熊野詣用途事被仰下、不日可令進御請文給之由云々、

院宣云、去八月十九日、同廿七日等御消息、今月十五日到來、條々事、奏聞候畢、

一群盜幷人々事

如令申給、洛中案內者、若又畿內之輩所爲之由所聞食也、本自關東武士所行とは全不風聞、又不仰遣其旨、只近代使廳沙汰逐日陵遲、如鴻毛、在京守護武士合力致沙汰者、何不被禁遏乎由、依思食、殊可有尋沙汰之由所被仰遣也、就中實犯之輩號武士威之時、使廳彌迷成敗云云、尤可有推察事歟、然而可爲使廳沙汰之由令計申給之條、法之所指、尤可然事也、仍殊可有御沙汰之由被申攝政畢、但於武士可合力事歟、抑公朝所從事等聞食及、如狀者尤不當事歟、早可有尋沙汰也、信盛公

〔江談抄二雜事〕音人卿爲別當時長岡獄移洛陽事
被談云、臣房仕帝王至納言ハ、始祖音人卿爲檢非違使別當之時、奉爲國家能致忠之故、必仕帝王也云々、予問其由緒如何、被答云、音人卿爲檢非違使別當之以前、獄所在長岡京、件所ニテ獄所極以荒涼、囚人勵逃去、仍音人卿改立此獄門之後、無逃刑人還又重恩也、修善根之人、與饗膳稱施饗、是彼時始也、仍音人卿最後被談ケルハ、我子孫ハ依國家致忠、必仕帝王可至大位也、但刑人其罪尤重之者、此依囚獄門無輒逃之者

〔十訓抄十二〕後冷泉院御時、源中納言經衡卿、檢非違使別當にて、十五年まで使廳を行はれけり、○中略又大理譜とかや、犯人のをのづから獄舍の下を掘て逃出る事あらせじがために、四面に土の底を板をほり入て立られたりけり、此奉公の忠なる事なれ共、か樣までの思はかりは罪業の因にもやとよしなくおぼゆ、

〔文德實錄二〕嘉祥三年十一月己卯、從四位下治部大輔興世朝臣書主卒、書主右京人也、○中略弘仁七年二月轉爲左衛門大尉兼行檢非違使事、

〔政事要略七十糺彈雜事〕弘仁八年九月廿三日、中納言藤原朝臣多嗣宣、奉勅私飼鷹者、○中略宜仰看督長嚴令禁察、

〔類聚符宣抄六〕右大臣宣、檢非違使等緣使之政有令外記傳申者、宜隨狀申者、
弘仁十三年十一月廿日　大外記坂上忌寸今繼奉

〔類聚國史百七十三災異〕弘仁十四年十一月壬申、亥剋巡大藏舍人等呼失火於大藏省、○中略優婆塞三人、藏部一人、親入盜物、○中略優婆塞降非違禁固、藏部降囚獄著釱、

〔職原抄下〕檢非違使　淳和天皇御宇、天長年中初置之、
○按ズルニ、公卿補任ニ據レバ、檢非違使別當ヲ置キシ事ハ、仁明天皇天長十一年正月ニ在リ、

二月二十一日、別當中納言兼左衞門督源朝臣光宜、定左右檢非違使廳、不隔日可行政之由、已以明也、而年紀多積、自似解體、方今政貴簡要、還不失舊之蹤、事有弛張、亦甚知推斷之意、加以諸司行務、皆定其廳、至于使政、何在兩府、靜尋由緒、專非穩便、須於左右府停所行之政、以左政舍便爲使廳、每日勤行、令無擁滯、然則涇渭之流自分、輕重之科早定、但官人相具、一如去寛平七年二月二十一日奉勅宣旨、

天曆元年六月二十九日　防鴨河使右衞門權佐齋院長官藤原朝臣成國奉

私第廳屋

〔山槐記〕仁安二年四月廿三日庚寅、今日叙負廳、年始政始云々、于今懈怠、廳底陵遲之基也、

〔山槐記〕治承三年正月三日壬戌、今日有廳始事、○中略去年十二月廿九日渡此亭三條東河立廳屋、依無殘日、廳始、今日所始也、　廿三日壬午、今日日次無憚、仍令撤廳赤辛櫃、去々年正月任右衞門督、補檢非違使別當、去々年度々雖辭申、無御承引、重又辭申、去十九日除目入眼夜被下辭書、而翌日爲衰日、一昨日欠日、昨日重復、仍及今日、子細見去廿日記、午剋右志中原明基道志府生紀衆康已上衣冠布來候廳、明基令隨仲朝臣布衣申參入之由、仰早可渡辛櫃之由、明基衆康昇之、賜看督長、看督長二人裝束以弓二張置辛櫃上、昇之出門、囚守二人請取之、以取夫令持之、渡明基宅、大理廳始來廿九日云々、至于彼日、置道志之許、是例也、圖帳文等明基取之退出、此後撤廳硯疊弘筵等、依當王相方、不壞廳屋、宿本所之後可令壞歟、　二月廿八日丙辰、今日壞却廳屋、施入因幡堂、去月十九日辭大理職、其後即可壞之處、不宿本所樋條洞院四過四十二日、○下略

○按ズルニ、後世檢非違使ノ別當ニ補セラルヽモノ自ラ廳屋ヲ第中ニ設ケ事務ヲ執行ス、本書ノ記者中山忠親、治承三年正月別當ヲ辭セリ、故ニ其廳屋ヲ壞却シテ佛寺ニ施入セシナリ、

獄舍

〔續日本後紀二十仁明〕嘉祥三年三月甲午、此日御體綿綿、事極篤㥜、諸名僧等持呪皆願、五輪投地不暫休息、左右非違○非違一本作檢非違使、獄中人、除盜之外、悉從放免、

府局

〔沙汰未練書〕一名主、庄官、下司、公文、田所、總追捕使、（總追捕使者、其所撿斷職、又撿非違使云也、）以下職人等事、件所職等者、地頭領家進止職也、（進止者、進退事也、）但帶各別御下文者、有限公事課役之外、不可隨地頭領家私下知、

〔有職問答五〕一撿非違使事

此不審更不休候、四府の佐尉志等の使宣旨を蒙候時、撿非違使と申號を被補候哉、職原には、撿非違使四府各別に被載候處、同等のやうに稱候如何候哉、別當には、攝家、清花幷高位の御方々などのかりそめにも洛外へ發遣有まじき人々も被任候歟、就之猶使ノ宣旨を被成事不及分別候、又使宣旨をば諸司四職等のすけせうなども被補例も御座候哉、（此事委細ニ見エ候、參議ニテモ中納言ニテモ撿非違使ノ別當ニ補スル日、必四府ノ督ゴトハ任ズル事ニテ候也、上古知所候也、後世名家ノ任也、勿論候、諸職トテ殊ニ執スル事ニテ候、彼ノ宣旨ト稱之候ヘバトテ、使ナツトムル事ハナキ官ニテ候、非違ナダメシカンガフル使ト云心マテニテ候、洛外ナドヘハ殊ニ大理ハカリソメニモ出マジキ事ニテ候也、ニテ候共、使ノ宣旨ヲ蒙ノ日、必四府ノ尉ヲ兼任スベキ事ニテ候、）

〔有職問答三〕一撿非違使（顯職ニテ本官トハイカヾ）

撿非違使ハ別テ本官ナリ、此官ニ任ズルヲ一級トス、左右衞門、左右兵衞、必此官ノ先達トス、非違ヲタヾスト云心ハ、使ノ宣旨ニテ事ノ相違ヲタヾス官也、仍規摸トス、

別當尉志府生何れも武家官歟、當時も可任候哉、

（是ハ武官ノ重執シテ任之事候、列官ト申、是ニテアルベク候、又別當ハ大理トテ、重職ニテ不兼其職者輙不可任之歟、尤執來候、佐ハ廷尉佐トテ、是又名家ノ重拜任、殊規摸トシ候、尉ハ判官ト用之候、武家ノ重モ任來候家等殊爲重職候、志ハ坂上中原各明經道者任之、四道志ト申候也、府生ハ誰ニテモ、別當ノ相計ニテ任之候、必皆近衞ノ外衞ノ官ヲ兼帶スルナリ、近衞ハ兼帶セズ、外衞バカリ也、）

〔新野問答〕一撿非違使とは官にて候哉、職にて候哉、　答、職の名にて候、左右衞門督、佐、尉の内に有之候、大方兼官にて候、撿非違使の別當は、參議以上の任也、尤容儀、才智、富有等を撰ぶなり、（富有を撰ぶ事、貧者は賄の私曲を見れてなり、）

〔政事要略六十一糺彈雜事〕貞觀六年八月十五日、右大辨大枝朝臣音人傳宣、右大臣宣、撿非違使行事、停本府之局、移市司行者、（西宮記）○又見西宮記

中納言兼中宮大夫左衞門督藤原朝臣顯忠

別當宣偁、如聞、捕禁之徒、日而無絕、末類之者、隨亦不少、或待推鞫之間、空送居諸、以究斷決之程、難堪飢寒、遂令囚禁之輩、終身命於夏臺、是則不定使局於一處、往反左右衞門府之所致也、況去寬平七年

ニ當ルモノトス、放免ハ、廳ノ下部ナリ、犯人ノ放免セラレタルモノヲ役シテ、追捕囚禁ノ事ニ從ハシメ、或ハ流人ヲ護送セシム、此輩ハ賀茂祭ニ美服ヲ著ケテ之ニ從フコトアリ、贓物ヲ染メテ用ヰルモノナリト云フ、

檢非違使ハ、京中ノ非違ヲ檢察スルモノニシテ、祭祀、法會ノ場ニ臨ミ、或ハ道橋ヲ巡視シ、掃清ヲ催督シ、齋王ヲ護衞シ、又ハ糾彈、聽訟、追捕、囚禁、斷罪、行決、免囚、收贖等ノ事ヲ掌レリ、此等ノ職ハ、原來衞府、彈正、刑部、京職ノ分掌ナリシガ、終ニ此廳ニ歸シ、勢力ノ大ニ張レルニ從ヒ、檢非違使以下放免ノ輩ノ漸ク暴横ヲ肆ニシ、世上ノ弊害トナリシコトモ少カラザリシガ、鎌倉幕府ノ起ルニ至リ、其權擧ゲテ武家ニ移レリ、

名稱

〔伊呂波字類抄計官職〕檢非違使

〔職原抄下〕檢非違使此云二使廳一、本所乃靫負廳〇衞門府也、

〔榮花物語五浦々の別〕けびゐしどもかつは泣々いみじう思ひながら、宣旨のまゝにするに、〇下略

〔鹿島神宮古文書〕鹿島御神領

一三石　　　　檢比師〇中略

文祿四年乙未八月十七日

〔空穗物語藏開上〕藤中納言は衞門督なれど、裝束きよらにせずとて、ひゐの別當はかけず、

〔吾妻鏡八〕文治四年五月十七日壬子、遠景已下御使等渡二貴賀井島一、遂二合戰一、彼所已歸降之由所レ言上一也、而宇都宮所衆信房、殊施二勳功一云々、爰信房近江國領所者、去比被レ付二非違別當家領一訖、就二此大功一可レ返給一歟之由言上、

〔空穗物語あて宮〕これはなかされたるむまくるまにのりてゆくことも、ゆひくらにのりて行、ひゐのせうすけなしてをひやれり、

古事類苑

官位部二十七

令制官職二十三

檢非違使

檢非違使ノ廳ハ、初メ二箇所ニシテ、左右衞門府內ニ在リシガ、寬平七年始テ左右檢非違使ノ廳ヲ定メ、天曆元年右廳ヲ廢シ、專ヲ左廳ニテ事ヲ行ヘリ、仁安ノ比ニハ廳荒レテ久シク修セザリシヲ以テ、年始ノ政ヲモ行フコト能ハズ、治承ノ比ニハ終ニ別當ノ新任スルゴトニ、廳ヲ其宅ニ設クルコトヽナレリ、別當ハ唐名ニ大理ト稱ス、中納言、參議中、公達タル左右衞門督ノ兼職ニシテ、最モ其選ヲ重ンジ、諸大夫ニ至リテハ通規ニアラズト爲ス、或ハ近衞大中將、左右兵衞督ノ任命セラレシコトモアリ、古來別當ヲ稱シテ、譜第、器量、才幹、有職、近習、容儀、富有ノ七德ヲ兼備スルモノニアラザレバ、其任ニ勝ヘズト爲セリ、佐ハ二人アリテ、左右衞門權佐ヲ以テ之ヲ兼ヌ、尉ハ大少アリ、大尉ハ多ク明法道ノ輩ヲ以テ之ニ補シ、坂上中原二氏之ニ居ル、少尉ハ多クハ源平ノ武士ヲ以テ之ニ補ス、大少志ハ明法道成業ノ者ノ衞門志ニ在ルモノヲ以テ淸選ト爲シ、特ニ之ヲ道志ト稱ス、此外非成業ノ者モ亦之ニ補ス、院主典代等ノ如キ是ナリ、要スルニ、檢非違使ハ正官ニアラズシテ、長官ヲ別當ト云フノ外ニ、別ニ次官主典ノ名ナシ、其佐ト云ヒ、尉ト云ヒ、志ト云フハ、皆本官ナル衞門ノ官名ナリ、故ニ衞門府ノ官ヲ以テ之ヲ帶ブルヲ例トスレドモ、稀ニハ近衞兵衞ヲ以テ兼ヌルモノナリ、火長ハ、看督長、案主長等ノ總稱ナリ、看督長ハ、獄直ヲ爲シ、及ビ追捕ノ事ニ當リ、案主長ハ、文案

〔拾遺和歌集九雜〕身のうれへの事を歎げきて、勘解由判官〈○相當從六位下〉にて、　源順

あら玉の、年のはたちに、たらざりし、ときはの山の、〈○中略〉すみのえの、松はいたづら、老いぬれど、みどりの衣、ぬぎすてん、春はいつとも、しらなみの、〈○下略〉

〔詠百寮和歌〕勘解由使

定なき御調の數に知られけり國を治る人のよしあし

右中辨藤原朝臣佐忠傳宣、中納言藤原朝臣師氏宣、勘解由使申請以從七位上上道公安木、宜補任同使史生勝治邦無故不上替者、

應和三年二月廿七日　右大史粟田

勘解由使　從六位上宗形臣秀友

右史生從七位上上道公安木死去之替、所請如件、

天祿元年八月十九日　正四位下行長官藤原朝臣

從五位上守右少辨藤原朝臣雅材傳宣、中納言從三位源朝臣延光宣、以宗形秀友宜補任勘解由史生上道安木死闕替、(右少史坂本茂直仰)

同年十二月廿一日　大錄雀部有信奉

用度

〔延喜式四十四勘解由〕凡雨日覆奏料、油絹三尺、納公文幷紙料、闕韓櫃十合、並隨破損申官請換、

凡猨頭硯幷奏料插文杖、隨破損申官、官仰所司作充、

凡年料炭者、(從十一月一日迄二月卅日、日別三斗、但有閏月者、隨加給之、)夏月申官、官下符大藏省、卽准當時沽以直充之、黑葛筥二合、砥一顆、緣端茵一枚、(長官座料)黃端茵三枚、(次官料)紺布端茵六枚、(判官主典料)折薦帖八枚、(史生史掌書手等料)席六枚、(次官已上土敷料)並三年一度申官請換、

雜載

〔類聚符宣抄六〕被中納言宣偁、勘解由使只有律令、都無格式、至辨諸務多收疑滯、宜格式草案授於彼使所者、

承和七年七月廿三日　大外記淸內御園奉

〔延喜式十八式部〕凡內膳司、勘解由使、齋院司、莫責神祇等不參、

凡主稅寮、勘解由使、莫責正月御齋會不參、

〔延喜式四十五左右近衞〕凡勘解由使侍奏之間、聽陪陣邊度紫宸殿階下、

〔文德實錄 七〕齊衡二年九月甲子、散位從五位上田島朝臣清田卒、清田者、正六位上村作之子也、〇中略天長元年爲少外記、三年兼爲勘解由判官、

〔延喜式 十八式部〕凡勘解由使主典一人、輪轉令兼國博士得業、待使局所送名簿乃補、

〔續日本後紀 三仁明〕承和元年九月庚申、勘解由主典阿直史福吉、〇中略賜姓清根宿禰、

〔除目大成抄 七〕勘解由使

請被殊蒙天恩因准先例以正六位上中原朝臣俊重拜任主典闕狀

右得俊重款狀偁、謹□案內、依諸司擧奏拜任要官者、古今之例也、近則爲頼、依當局擧奏拜任主典、自餘之例不可勝計、況乎親父俊兼、拜任主典遷任官史、採擇之處、可謂重代者、今加覆審所申有實、望請天恩因准先例、以件俊重被拜任主典者、將令勵奉公之節、仍勤事狀、謹請處分、

元永三年正月廿六日

次官從五位下平朝臣

從五位上行次官兼右衞門權佐丹後守藤原朝臣

參議從三位大藏卿兼左大辨長官周防權守藤原朝臣長忠

〔延喜式 十八式部〕凡諸司史生者、〇中略勘解由使十二人、〇中略勘解由〇中略等使司史生、待從官下名簿、不試直補之、

凡主計主稅勘解由等寮使史生勞十年爲限、以外諸司史生廿年爲限、並補諸國史生、

〔類聚國史 七十百官〕承和五年六月壬子、勘解由使言、使局史生〇生原无今補□下名簿、不給監試、便被補任、許之、

〔類聚符宣抄 七〕右中辨源朝臣公忠傳宣、中納言藤原朝臣實頼宣、山邊滋蕃宜補任勘解由使史生船恒滿死闕之替者、

天慶二年閏七月廿五日

左大史尾張宿禰言鑒奉

ド通例ナルガ如シ、

〔續日本後紀 九仁明〕承和七年四月戊辰、參議左大辨從三位藤原朝臣常嗣薨、去延暦廿年遣唐持節大使中納言正三位葛野麻呂第七子也、○中略天長元年遷式部少輔、尋兼勘解由次官、

〔續日本後紀 一仁明〕天長十年五月丁亥朔、勘解由次官從五位下藤原朝臣諸成爲右少辨、

〔續日本後紀 十仁明〕承和八年二月丁未、外從五位下讃岐朝臣永直爲兼阿波權掾、大判事勘解由次官如故、

〔續日本後紀 十八仁明〕承和十五年五月丙戌、外從五位下山田宿禰文雄爲勘解由次官、

〔文德實錄 二〕嘉祥三年十月乙巳朔、從五位下文室朝臣笠科爲勘解由次官、

〔文德實錄 四〕仁壽二年二月壬子、外從五位下家原宿禰氏主爲勘解由次官、竿博士如故、　六月己酉、從五位下菅原朝臣善主爲勘解由次官、　十一月己亥、勘解由次官從五位下菅原朝臣善主卒、○中略從五位下安倍朝臣安正爲勘解由次官、

〔文德實錄 九〕天安元年二月甲申、從五位下山田宿禰春城爲勘解由次官、　六月庚寅、從五位下田口朝臣統範爲勘解由次官、

〔官職秘抄 下〕諸道官　明法　博士　兼勘解由次官例 利業、道成、

〔三代實錄 六淸和〕貞觀四年八月十七日癸丑、是日從五位下守大判事兼行明法博士讃岐朝臣永直卒、永直者右京人也、○中略天長八年兼勘解由判官、承和元年○中略是年兼勘解由次官、○中略永直自爲官吏、爰及晩節、歷任勘解由次官、使判決之道、能究其旨、爲彼使司者、今猶爲准的焉、

〔公卿補任 平城〕大同四年己丑

畿內觀察使從四位下紀廣濱

延暦十六年九月四日勘解由判官。

參議從四位下伴國道右大辨、九月廿日兼勘解由長官、

天長六年己酉

參議從四位上小野峯守刑部卿、勘解由長官、

八年辛亥

參議從四位下藤常嗣七月十一日任、元藏人頭、勘解由長官如元、

〔續日本後紀三仁明〕承和元年五月壬申、无品貞子內親王薨、○中略遣勘解由長官從四位下藤原朝臣雄敏○中略左京亮從五位下吉田宿禰書主等監護喪事、

〔續日本後紀九仁明〕承和七年六月甲寅、從四位下和氣朝臣仲世爲勘解由長官、

〔公卿補任仁明〕承和十一年甲子

參議從四位上滋野貞主十一月十四日兼勘解由長官

十五年戊辰○嘉祥元年

參議從四位下小野篁四月三日兼勘解由長官

〔文德實錄二〕嘉祥三年十月戊午、從四位上藤原朝臣衛爲勘解由長官、

〔文德實錄九〕天安元年六月壬午、中納言正三位源朝臣定上表曰、臣定言、○中略臣幸預葭莩、頻霑渙汗、位非德舉、榮乃恩升、謬忝納言之職、已知身分有餘、而亦兼以左兵衛府、及勘解由使、○中略竊以兵衛府、機警繁務、吏士難調、勘解由使、拘放多端、疑論難決、縱得其才、弗勤無益、雖有其勤、非才何用、而臣不才之上、恪勤又癈、既同曠官、何免重責、至中納言者、有長官、傍多衆賢、國務行留、不繫一員、因願唯帶此納言、早解彼兩職、○中略右大臣宣、奉勅抗表懇至、宜從來請、　甲申、從四位下藤原朝臣良繩爲右大辨、左近衛中將、勘解由長官、備前權守如故、

○按ズルニ、公卿補任、辨官補任等ニ據ルニ、此後左右大辨タル人、本使ノ長官ヲ兼ヌルコト、殆

長官相當従四位下　四位已上任之、多者參議散二位三位任之、　次官相當従五位下　名家五位任之、頗爲顕官、仍一向地下諸大夫等不任之、　判官相當従六位下　六位侍任之、但聊堪右筆者所望任也、爲顕職之故也、凡顕職者、無指事之輩拜任、無念之儀也、顕職者、外記、官史、式部、民部丞、彈正忠、勘解由判官等也、左右衛門尉、猶雖爲顕官、於今者不及沙汰、　主典相當従七位下

〔百寮訓要抄〕勘解由使

長官　三位以上可然人皆是に任す、近來儒者名譽の人など任せらるゝ也、　次官　殿上地下、四位五位、皆是になる、　判官　六位以下是に任す　主典　六位以下是に任す

〔公卿補任桓武〕延暦十六年丁丑

參議正四位下藤内麿九月四日兼勘解由長官、

廿四年乙酉

參議正四位下菅野眞道

延暦十六年九月丙戌〇四日　勘解由長官

〇按ズルニ、延暦二十二年二月二十五日ノ撰定ニ係ル延暦交替式ノ位署ニ、使正四位下行左大辨兼左衛士督皇太子學士但馬守菅野朝臣眞道トアリテ、眞道ガ藤原内麻呂ノ後秋篠安人ノ前ニアリテ、長官タリシコト明カナルモ、公卿補任ニ十六年九月丙戌ノ任トセシハ誤ナルベシ、

〔公卿補任桓武〕延暦廿四年乙酉

參議従四位下秋篠安人正月十七日任、右大辨勘解由長官少輔如元、

延暦廿二年五月兼勘解由長官

〔公卿補任淳和〕弘仁十五年甲辰〇天長元年

補任

進諸國定額寺資財帳事

右勘解由使起請偁、○中略望請六年一申、以擬勘據者、左大臣宣、奉勅依請、

天長二年五月廿七日○類聚三代格作廿五日

〔貞觀交替式〕定官舍雜物破損大小事

右勘解由使起請偁、○中略望請中破以上、依格徵料、小損之色、後任相承、以徧修理、不勞言上者、左大臣宣、奉勅依請、

天長二年五月廿七日

應令後任之吏催督前司不作辟家破損事

右勘解由使起請偁、○中略望請前司修造不改前格、新吏催督更施新制、仍須言上不與解由狀之後、若不令任中造了者、得替之日、拘留解由狀、則國威全存、公平自著、仍錄事狀聽天裁者、右大臣宣、奉勅依請、

承和八年二月廿二日

〔三代實錄七清和〕貞觀五年九月廿五日甲寅、勘解由使應請二條、其一曰、神社根准官舍帳、勘了之日、令移式部省、其二曰、奴婢生益附帳之日、令注父母名、太政官處分、並依請、

〔官職秘抄下〕勘解由使令外官

長官　大辨兼官也、或參議又兼之、辭此職給受領例、爲輔以男惟孝申任駿河　次官　名家五位任之、依爲顯官、能撰其人、辨官兼任例、道明相職　判官　良家子任之、文章生多應其撰、諸道得業生任例、平元明　自主典轉任例、伊福部安近、滋業恒、依撿非違使請任例、源嘉依長官請任例、藤忠重　主典　西以次史重代者任之、或以成功任之、安部孝親、中原國守、或本使請、

〔職原抄下〕勘解由使云勾勘是非唐名、取義歟、

陳意見

合、勘畢之日、省移式部省、待移文到、乃爲上日、如此則諸國進有據之帳、使者致勘出之帳、謹請官裁者、大納言正三位兼行左近衛大將陸奥出羽按察使藤原朝臣冬嗣宣、奉勅依請者、望請神社帳因准件格、令神祇官爲例勘會、即下知諸國、具注色目、幷移式部省等事、一同官舍帳者、右大臣宣、依請、

貞觀五年九月廿五日

〔延暦交替式〕太政官符國司交替、付領過限、准狀科罪事、○中略

以前勘解由使奏偁、○中略遷任國司、及新任之人、分付受領、過百廿日者、解却見任、幷奪俸料、其解任之人、及代之國司過限者、科公事稽留之罪、亦奪俸料、○中略被中納言從三位壹志濃王宣偁、奉勅依奏、

延暦十七年四月七日

太政官符

一應科徵新任國司撿物違法事○中略

一應科責國司規避不知官物事○中略

以前勘解由使奏偁、諸國司等違犯多端、不設條例、何以懲肅、謹錄事狀、伏聽天裁者、右大臣宣、奉勅依奏者、諸國承知、立爲恒例、

延暦十九年九月十二日

〔貞觀交替式〕未得解由內外官人犯用借貸依法斷罪事

右勘解由使起請偁、○中略望請內外諸司所申不與解由狀內、若有借貸犯用之徒者、錄下刑官、令斷其罪者、左大臣宣、奉勅依請、其且徵物役身、亦依太政官弘仁十三年八月廿五日符行之、又不與解由狀、或皆名交替欠、不顯欠失細由、事涉詔詐、科附乖實、宜欠損犯用色目、具載申之、不得隱漏、

天長二年五月廿七日

太政官符

〔延喜式 十一 太政官〕凡諸司年終帳、正月廿一日進之、但被管二月廿一日、其年號下注十二月卅日、並加外題下勘解由使、

〔延喜式 四十四 勘解由〕凡年終帳、以弘仁十三年、天長四年爲證帳、自餘三年一除、

凡勘諸司年終帳者、據去年帳幷證帳、計會今年帳、若有勘出者、召彼本司告知其由、卽錄後年帳可改正狀、長官已下主典已上、共署進之、

勘會赦帳

〔享祿本類聚三代格 十七〕太政官符

應造進會赦帳程期准不與解由狀事

右撿案內、○中略 太政官承和十年十月二日下勘解由使符偁、大納言正三位兼行右近衞大將民部卿陸奧出羽按察使藤原朝臣良房宣、奉勅勘解由使勘申收會赦帳可立程限之狀事是有理、實協規憲、而天安二年十一月七日恩赦之後、諸國或致違期、今被右大臣宣偁、可行不行、事豈可然、宜追下知以聞未語、○以聞未語四字、恐有闕文誤字、

貞觀四年七月十五日

〔延喜式 四十四 勘解由〕凡不與前司解由狀、幷令任用分付實錄帳、及撿交替使帳等、未勘奏之前、前司雜怠會赦不會之由、不可勘申、

勘神社帳

〔類聚三代格 七〕應神社帳准官舍帳勘畢之日令移式部省事

右得勘解由使解偁、官舍器仗池堰國分寺神社等類、中破已上、前司出料幷修理之狀、每年申上、明立格制、而諸國言上、不與解由狀內、多載神社破損、因玆卽仰神祇官令勘破損色目、申云、或國雖進社帳不具色目、或國不進其帳、無由據勘者、是則無積科責之所致也、夫有司勘事文案爲本、不撿彼帳何辨眞僞、今撿弘仁十一年三月十九日格偁、民部省解偁、官舍池溝等帳、或偏載修理之色、不顯其總目、或不見修理之由、只注其總目、望請下知諸國、上件色目一一令申、進官之日卽下二寮、召朝集使爲例勘

勘年終帳

年月日

右奏聞了日、於長案後紙記之、

〔類聚三代格十五〕太政官符

應給田諸司要劇下符勘解由使事

右撿案內、給要劇者、當司各注前月上日、後月四日進官、下符宮內省、若諸司有致雜怠、隨卽抑止、待其辨申、然後許之、而元慶年中、自從割官田給要劇、諸司未必解文進官之、以不給米、無復留意、是以懈怠官人無由勘責、不上具僚徒得俸米、因寬平元年十二月廿五日、可載年終帳狀下知既訖、若無出給之符、何知用之遺、雖行米賜田、名號各異、而計日請俸、彼此一同、仍須下符勘解由使、勘會年終帳、其有用遺者、便充日月〇日月恐同書誤權官等料、不許輙充他用、若有勘出者、官人迁替之日、拘其解由、遣唐大使中納言從三位兼行民部卿左大辨春宮權大夫菅原朝臣宣、奉勅依件行之、

寬平八年九月五日

太政官符

應准要劇下符勘解由使給田諸司番上糧事

右案太政官去九月五日符偁、元慶年中、割官田給諸司要劇、寬平元年、可載年終帳狀、〇以上原缺、今據寫本事類本類聚三代格補、下知既訖者、夫給番上糧者、諸司去月五日應給米月料狀移宮內省、省卽總計、同月十日申官下符、而去元慶年中、亦割官田充給彼料、厥後所司晏然不進糧文、仍見仕不仕無知其由、論之政途理不可然、遣唐大使中納言從三位兼行民部卿左大辨春宮權大夫侍從菅原朝臣宣、奉勅長上番上職掌雖異、從事勤公、給稟惟一、自今以後、宜宮內省依例進糧文、隨卽下符勘解由使、令勘會年終帳、明知其用殘、若有勘出、一如要劇、

寬平八年十月十三日

前官位姓名（年月日任幷到來、年月日解、）

合若干條

一某物、若干

右寺司國官位姓名等、年月日解（寺以牒代解、）偁云云、

以前事條所勘如件

年月日

長官位姓名　　主典位姓名

次官位姓名　　判官位姓名

次官位姓名　　判官位姓名

判官位姓名

主典位姓名

主典位姓名

勘解由使謹奏

勘某寺某司某國不與解由狀事

前官位姓名（年月日任幷到來、年月日解、）

合雜事若干條

色目云云

以前事條所勘如件、謹以申聞謹奏、

年月日

署名如上奏式

官位姓名宣、奉勅依奏、

年月日

内案式

勘解由使謹奏

勘ㇾ某國不與解由狀ㇾ事

前官位姓名年月日任幷到來、年月日解、

右國官位姓名等、年月日所ㇾ言上、

一前司可ㇾ辨濟ㇾ

某物若干

一後司可ㇾ辨濟ㇾ

某物若干

一前後司共可ㇾ辨濟ㇾ

某物若干

一可ㇾ從ㇾ恩免ㇾ

某物若干

以前事條所ㇾ勘如ㇾ件、謹以申聞謹奏、

年月日

署名同上

長案式

勘解由使

勘ㇾ某寺某司某國不與解由狀ㇾ事

寛縱不行、官物減耗、大概由斯、今諸國不與解由狀所載、負累彼此不同、或欠失千計物既入己、或無實萬數、皆在民身、尋其犯過、輕重相殊、而俱拘解由、不許敍用、論之公途、實乖折中、左大臣宣、奉勅宜仰諸司依式行之、令彼負累之倫、自知廉耻之節者、事須內外諸司所申、不與解由狀、勘解由使勘判訖、刑部省待使局送斷其犯罪、然後更付使局令奏、其餘徵物舊祿等、皆如舊例、

寛平六年十一月卅日

〔延喜式〕四十四勘解由奏式

勘解由使謹奏

勘某寺某司某國不與解由狀事（撿交替使、幷實錄帳、准此注之、）

前官位姓名（年月日任幷到來、年月日解、）

合若干條

一某物若干

右寺司國官位姓名等年月日解（寺以牒代解）偁云云、交替帳注云、撿交替政使位姓名等、年月日解偁云云、實錄帳注云、國官位姓名、年月日解偁、被太政官月日符偁云云、

以前事條所勘如件、謹以申聞謹奏、

年月日

長官位姓名

次官位姓名

次官位姓名

撿校

官位姓名

官位姓名宣奉勅依奏

（内案、端書長案解文等料、凡紙二通、草案并勘判等料、）諸司五通、（上紙三通、奏并端書長案等料、凡紙二通、草案并勘判等料、）先書其草案、而隨解文所載事條、召縁事所司、令勘申之、（被管諸司不経縁官、直喚令勘、）主典已上次官已下次第勘判、其後長官閲彼此之所執、定勘判之得失、即書黏紙、長官已下共署進、撿按覆勘、既訖捺使印、爲長案、更書奏文并内案及解文等、（在京諸司不修内案并解文、）次官已下相共按讀、覺則加署、（署式在左）大臣奏聞之後、錄奏了狀、副解文進官、（解文使印、）捺其奏文踏印訖、（下外官請内印、下内官請外印、）副之官符更下使局、（符直注奏文解文下其司某國及所司之狀、）使局受取頒行、（下諸司奏文并解文、副官符召縁官付之、下諸國召雜掌付之、）

凡諸寺諸司諸國遷替之人、或不待與不任意歸散、或所執無道不加署名、如此之輩、不與解由狀、隨下直以勘奏、

（延喜式四十四勘解由）凡不與解由狀、并實錄帳等、依次勘奏、但卷小事小、勘判易決、及所司勘申無稽據者、不必據次、特以勘奏、

凡内外官人、或自内官遷於外任、或未終外任遷於内官、其不與解由狀、内官卅日、外官六十日内、不論前後超次勘奏、若可過程期者、注可被拘留之色目、期日已前且以申官、

（延喜式四十四勘解由）凡言上不與前司解由狀、并實錄帳之後、前司之同任相尋解任、亦修不與解由狀言上、所載雜事及所執不異者、合載一人狀、不再煩奏聞、但其除弃之狀、詳注奏文、若前後之狀、色目所執相違、事不獲已可共報下、不據次第一度勘奏、

（延喜交替式）凡言上不與解由狀之國司、依勘解由使勘判、可辨濟前司之雜怠、若有任中雜務辨濟無闕者、寬以往怠、勿拘其身、

（類聚三代格十二）太政官符

應斷未得解由人所犯本罪事

右撿交替式、未得解由内外官人、犯用借貸可依法斷罪、天長二年五月廿七日條制已立、而垂制之後、

ヲ次第シテ掌ナリ、勾勘ト云ハ、官目ニハアラザレドモ、其義勾ヘ勘ルト云コトニテ、勾勘スルトモ云ナリ、勾ハ按ルナリ、其餘諸司ニ至リテモ、各其職ニ付テ出納ノモノアレバ、是又解文ヲ作テ當使ヘヲクリテ、其解ノ由ヲ得ルナリ、諸寺ト云ヘドモ、公役ニ預ルモノハ又右ノ如クナリ、

〔白石紳書九〕一勘解由は諸國の任限は四年なり、四年に四度上洛して勘定をす、それを四度解といふ也、其解の由を勘ふる官也、

勘不與解由狀

〔延喜式四十四勘解由〕凡辨官所下臨時勘文者、判官主典各一人加署進之、若事緣徵免官物者、得上宣乃勘申、次官以上一人、亦同加署、

〔延喜式四十四勘解由〕凡諸國所進撿交替使幷實錄帳等所載國內雜物者、修奏文日、只載欠失之類、不注見在之物、但新勘附公廨之色目等不省除之、在京諸司准此、

凡勘判程限公文、四百張已上者、發勘卅日、續勘各廿日、二百張已上者、發勘廿五日、續勘各十五日、二百張已下者、發勘廿日、續勘各十日、

凡按讀始自二月迄于八月、合七箇月、日別廿五枚已上、始自九月迄于正月、合五箇月、日別廿枚已上、

凡書寫功程、始從二月迄于八月、合七箇月、日別奏文六枚、長案幷諸司承知七枚、草案九枚、始從九月迄于正月、合五箇月、奏文五枚、長案幷諸司承知六枚、草案八枚、若其手迹猥雜、文字脫誤者、從追上日、

〔延喜式四十四勘解由〕凡緣解由幷年終帳等事、任得召仰諸司、未勘申狀、判官主典各一人署之、一日受事、二日令申、雖云多條、不過五日、違此稽留、卽責過狀以進官、若拒捍不進、及不應召者、獨指某人、別錄申官、抑留要劇馬料季祿等、其身參進辨申之後、可追給狀、更亦申官、

〔延喜式二十二民部〕凡勘解由使所令勘事、不經省直仰二寮、

〔延喜式四十四勘解由〕凡勘內外諸司所進不與前司解由狀、令任用分付實錄帳、撿交替使帳等者、辨官外題下於使局、卽率解文紙數、令本司本國進料紙、其料紙百帳加筆四管、墨一挺、勘知帳會枚帳等亦同、但諸寺諸司不備筆墨、諸國七通、上紙五通、奏幷

〔享祿本類聚三代格四〕太政官符

應省除書生二人加置史生二人事

右得勘解由使解偁、書生十三人、依式勘籍、役使其身、而所司曾不勘籍、彌歷數年、因茲前補者、愁課役而歸本鄕、新補者、懲前人而無進仕、局中之事、自致擁滯、伏撿事意、書生永損課役之數、同預百度之例、史生雖有把笏之名、而有〇有恐衍無勘籍之煩、至充公役、彼此一般、望請省除書生四人、加置史生四人、謹請官裁者、從二位行大納言兼左近衛大將源朝臣多寶、奉勅宜二人依請、

元慶五年十一月廿七日

〔延喜式十八式部〕凡勘解由使勘籍書生、〇中略自非次官以上許文、不得輙遷他色、

〔續日本後紀四仁明〕承和二年十月乙亥、勘解由使言、使局雜使十二人之中、給服食者二人、使以此二人號爲使掌、准省掌令把笏、許之、

〔延喜式十八式部〕凡勘解由使雜使八人、以散位留省等色、定額之外、與兵部省通計與奪、

〔延喜式十八式部〕凡諸司使部者、〇中略勘解由使二人、

〔百寮訓要抄〕勘解由使、勾勘、是強非唐名、取義歟、　諸國の參期、四度解など申て、年貢をたゞしかんがへて、國司の善惡を主ざる也、

〔百寮訓要抄別註五〕勘解由使　勘解由式ヲ考ルニ、當官ハ諸司諸國諸寺等ノ年貢調物ノ類ヲ勘撿シテ改ル官ナリ、故ニ未進ノ物アレバ解由ノ狀ニ印署ヲ加ヘズ、猶勘撿シテ其怠リヲ官ヘ申告ルナリ、譬ヘバ諸國ヨリ貢ヲ奉ル時ハ、委細ノ帳面ヲ作テ當使ヘ送リツク、判官主典其ヲ勘定シテ、目錄ニ注シテ長官次官ニ申セバ、長官次官各連署シテ官ヘ奏スル事ナリ、一ケ年ニ四度ヅヽ、國々ノ解文ヲ勘撿シテ、其解、懈怠ナキ由ヲ連署シテ奏スルユヘニ勘解由使ト云ヒ、又是ヲ勾勘トモ云ナリ、是其職掌ヲ以テ官目トシテ、一局ヲ構ヘテ、長官ヨリ主典マデ四分

不疎、拘放事重之故也、以此觀之、拜除已違先符、位階猶據舊例、因茲四位之人、還守五位之職、五品之輩、更居六位之官、論之官位、誠不相當、使等伏請共增位階、依件被定、謹聽天裁者、右大臣宣、奉勅依請、

天安元年十一月十日

〔享祿本類聚三代格四〕太政官符

應置書生一十人事

右得勘解由使解偁、此使年中勘申諸司諸國不與解由狀、殆及百卷、而今所置史生八員、身非木石、互有病故、書寫之事、動致擁滯、望請置件書生、勸以出身、准民部左右京職等例、不歷省試者、大納言兼行右近衞大將良岑朝臣安世宣、奉勅依請、但割雅樂寮歌人五人、筑紫諸縣儛生五人充之、

天長五年十一月廿五日

〔類聚國史百七職官〕貞觀十四年八月八日丙午、勅加置勘解由使史生二員、書生三員、

〔享祿本類聚三代格四〕太政官符

應加置史生二員書生三人事

右得勘解由使解偁、所有史生八人、書生十人、就中相分上下、九人常直、是不與解由狀希有之時、被配之數也、頃年內外諸司不與解由狀、幷實錄會赦等帳、逐日彌積、其卷大者五六十張以下、小者三四十枚以上、書寫之勞百倍昔日、加以依去貞觀十二年十二月廿五日格、勘奏諸司不與解由狀、方今公文猥積、書手少數、事之擁滯、莫不由斯、望請加置史生書生、以濟公事、謹請官裁者、從三位守大納言兼左近衞大將行陸奥出羽按察使藤原朝臣基經宣、奉勅依請、仍須割宮內省史生二人、治部省書生三人、並不經監試充之、

貞觀十四年八月八日

〔三代實錄四十陽成〕元慶五年十一月廿七日辛未、勅勘解由使省書生二人、加置史生二員、

直寮、空延日月、豈合道理、國宜知狀、遷替之人、必付解由、申送於官、自今已後、永爲恒例、

天平五年四月五日〇又見續日本紀、

〔公卿補任桓武〕延暦十六年丁丑

參議正四位下藤内麿九月四日兼勘解由長官、

〔延暦交替式〕太政官符國司交替付領過限、准狀科罪事、〇中略

以前勘解由使奏偁、〇中略被中納言從三位壹志濃王宣偁、奉勅依奏、

延暦十七年四月七日

〔職原鈔通考十二〕勘解由使

令外官也、延暦十七年被置此官、見天安格文、

〔百寮訓要抄別註五〕勘解由使

當官ハ、延暦十七年ノ頃置ルヽト見ヘタリ、三代格ヲ考ルニ、文德天皇天安元年十一月十日官符ニ、應増勘解由使官人位階事云々、去延暦十七年七月廿日下式部符偁、被大納言正三位神王宣偁、奉勅使人等、職是要重、宜依件官位云々トアリ、是ヨリ先ニ勘解由ノ官目見ヘザレバ、全ク延暦十七年ノ頃ニ置レタルベシ、去レドモ國史格式等ニ當使ノ官ヲ置ルヽト云明徵ナケレバ、暫ク件ノ官符ヲ以テ據トスベシ、

〇按ズルニ、延暦十七年七月二十日ニハ、只勘解由使ノ官位ヲ定メタルノミニシテ、此時始テ本使ヲ置キシニハ非ラザルコト、上文公卿補任、及ビ延暦交替式ニ據リテ知ルベシ、

〔日本後紀十四平城〕大同元年閏六月丁丑、廢勘解由使、

〔標注職原抄下本〕是當月觀察使を置れたるに依てならん歟、そは勘解由とは、官人遷替のをり、前官の人、任中公事の雜怠なく、また任中公物の欠負なければ、新官より解由狀を與ふ、使は卽

長者大僧都空海（正月八日、於宮中眞言院被始行後七日御修法、依宣旨、止勘解由司廳、號内道場眞言院、）

〔大内裏圖考證（三十眞言院）〕左寺天永二年引付曰、眞言院、元者勘解由司也、七間二面正廳、無（○無字恐誤）五間一面東西廳、中庭新造立壇所、其前築墻、此時同新造之、今長者坊、東廳也、護摩堂者、西廳也、伴僧宿所屋者、正廳也、厨所舍者、後廳也、此餘之雜舍、或用舊舍、或新造、　阿闍梨寛信記曰、永治二年正月十五日眞言院、（勘解由司廳也）

〔日本紀略（七圓融）〕天元三年十二月十日己卯、今日以勘解由使、爲弘徽殿御休所、

〔中右記〕大治二年二月十四日甲戌、未時許、當西有燒亡所、申時火滅了後、陰陽頭家榮示送云、燒亡之興、火起營司小屋、燒陰陽寮、勘解由使廳、宮内省、幷園韓神社、神祇官八神殿、郁芳門等了、（○又見百練抄）

〔延喜式（四十四勘解由）〕凡使局官舍、隨損申官、令加修理、

〔伊呂波字類抄（加官職）〕勘解由使（日本紀云、延暦九年庚午、依參議彈正大弼從四位下橘常主奏狀、始置勘解由使、）

長官　次官　判官　主典
史生　書生　使掌

○按ズルニ、參議彈正大弼從四位下橘常主ノ奏狀ニ依ルトハ、天長元年九月ニ勘解由使ヲ再置スル時ノ事ニシテ、延暦九年トハ年代頗合ハズ、意フニ延暦九年庚午ハ、勘解由使始置ノ年ヲ云ヘルニテ、日本紀トハ續日本紀ヲ云ヘルナラン、然レドモ續紀ニ此事ヲ載セズ、又他書ニモ所見ナケレバ、今考フルニ由ナシ、但シ公卿補任ニハ、延暦十六年九月四日ニ長官以下ヲ任ゼシコト見エタリ、而シテ尙ホ本使ヲ置キシコトハ、此時ニ在ルカ、或ハ此以前ニ在ルカヲ明ニセズ、

〔延暦交替式〕勘解由使謹奏　撰定諸國司交替式事（○中略）

式部省符、交代官人付解由狀事、凡國司等相代、向京、或替人未到以前上道、或雖交替訖不付解由、因玆去天平三年朝集使等告知已訖、然國司寛縱、曾不遵行、仍遷任之人不得居官、無職之徒不許

使錄

〔拾芥抄 中本 官位唐名〕勘解由長官 勾勘　次官　判官　主典

〔運歩色葉集 古〕勾勘 勘解由唐名

〔易林本節用集 古 官位〕勾勘 勘解由

〔本朝續文粹 五 表〕請ㇾ罷二參議并勘解由長官職一狀　　明衡朝臣

伏冀玄鑒由照丹祈、停二此參議勾勘之官一、授二其賢哲良才之輩一、〇中略

年月日　　參議某

〔唐六典 一 尚書〕凡天下制勅計奏之數、省符宣告之節、率以二歳終一爲ㇾ斷、京師諸司、皆以二四月一日一納二于都省一、其天下諸州、則本司推校、以授二勾官一、勾官審之、連署封印、附二計帳使一、納二于都省一、常以二六月一日一、都事集二諸司令史一、對覆、若有二隱漏不同一、皆附二于考課一焉、

〔唐六典 二 吏部〕凡考課之法、〇中略善狀之外、有二二十七最一、〇中略十七曰、明二於勘覆一、稽失無ㇾ隱、爲二句檢之最一、

〔大内裏圖考證 二十下〕勘解由使局

在所　諸圖太政官乾隅 圖見二太政官一

〔百寮訓要抄別註 五〕勘解由使

當使局ハ、太政官ノ乾ノ角ニテ、中務省ノ正南ニアリ、

〔三代實錄 十三 清和〕貞觀八年八月七日己卯、勅、參議正四位下行左大辨兼勘解由長官南淵朝臣年名、參議正四位下行右衞門督兼讃岐守藤原朝臣良繩、於二勘解由使局一、鞠二問大納言正三位兼行民部卿太皇太后宮大夫伴宿禰善男一、

〔元亨釋書 一 傳智一〕釋空海、世姓佐伯氏、〇中略承和元年、海奏乞、准二唐國内道場一、置二眞言院於宮中一、勅以二勘解由司廳一爲二曼荼羅道場一、

〔東寺長者補任〕承和二年 乙卯

鎭西鎭撫使

〔有栖川家系〕熾仁親王　文久三年八月十五日、鎭西鎭撫使被ㇾ仰出、同十九日不ㇾ及ㇾ其儀ㇾ旨被ㇾ仰出、

〔正心誠意〕文久三年八月十八日壬辰、帥宮〇有栖川宮熾仁親王西國使被ㇾ止、昨日被ㇾ仰下ㇾ由也、

勘解由使

勘解由使ハ、音讀シテカゲユシト云フ、卽チ內外諸司ノ解由ヲ勘査スルコトヲ掌ル、解由トハ、新舊司ガ交替スルトキ、新任ヨリ前任ニ付スル文書ニシテ、卽チ任中ニ調庸ノ未進、官物ノ欠損等ナキコトヲ證スルナリ、若シ未進欠損アルトキハ、新司ハ解由ヲ與ヘズ、勘解由使ハ、其解由ト不與解由トヲ問ハズ之ヲ勘査スレドモ、最モ力ヲ用キルモノハ不與解由ノ勘判ナリ、蓋シ解由ヲ得ザルトキハ罪ヲ獲ルコトニシテ、新舊司ノ爭ハ每ニ此ニ在レバナリ、解由ノコトハ政治部解由篇ニ詳ナリ、參看スベシ、

本司ノ起源ハ詳ナラズト雖モ、公卿補任ニ據ルニ、桓武天皇ノ延曆十六年以前ニアリシコトハ疑フベカラズ、平城天皇ノ大同元年ニ、一タビ本使ヲ廢セシカドモ、淳和天皇ノ天長元年、復之ヲ置キ、爾後常設ノ官ト爲レリ、

名稱

〔伊呂波字類抄〕加官職勘解由使

〔運步色葉集〕賀勘カ解ゲ由ユ唐名勾勘

〔易林本節用集〕加人倫勘カ解ゲ由ユ

〔百寮訓要抄別註〕五勘解由使　令外ノ官ナリ、倭名抄ニ此官名ヲ脫セリ、職原抄ニ登久留余之加牟加婦留豆加加佐ト訓アリ、常ニハ加介由ト云、

〔職原抄〕下勘解由使云ㇾ勾勘ㇾ非ㇾ官名ㇾ取ㇾ義是强歟

長門宰相父子、〇毛利敬親、定廣、遵奉攘夷之勅諚、去月十日已來、頻打拂夷船、今月一日、不勝利之上、六日、七日連戰、頗失利由相聞、抑於大日本國、顯然攘蠻夷者、此父子計ニ付、深有叡感、又勝敗之安否、爲被訪聞召、用意出來次第、速下向長州、可述叡旨奉仰、不肖之身、殊一身蒙重任之條、恐縮之至、再三雖辭申、既御決定、自是歸家、明日明後日之內、可發足存定由也、　十五日申半刻、公董朝臣入來、爲暇乞、表向名目爲監察使、被慰賞長州也、但西國大名不振興輩、可引立蒙仰、奉勅下向之上ハ、抛身命叡念可張行決心、再會不可量由被述之、感淚難止、今日御暇參內、天氣殊御厚情、賜天盃、又賜眞御太刀、備前長船政光齋樹遺、文化御卽位大樹還納、眞御馬阿州所獻之中也、被置移被、龜井所獻也、被盡叡慮之條、深以忝畏之旨、彌以可盡力由被示共感泣了、卽罷歸、家來士四人、醫師一人、中間下部、且懇意藩士六七人召具、又親兵士之內五十人引卒、依火急明午刻發輿之旨被示了、勅使用途金二千兩、親兵中へ千兩、自省中賜之、尤途中人足等、不難澁樣、各買上人足也、

九月廿三日、今日西國監察使公董朝臣被召返、

〔實麗卿記〕文久三年七月十一日、傳聞東園中將〇基敬紀伊國加多浦、四條侍從〇隆謌播磨國赤石等海防、爲監察使下向之事被仰出云々、

〔言成卿記〕文久三年七月十四日、行向四條亭、侍從面謁、中元祝詞申、幷來十七日、播州監察使參向、歎幷雜事可申承申了、被答云、深切忝、元來嚴重御使、中々歸京之程も日數難計、息大夫若輩萬事宜賴云々、被語云、監察使ト謂條、官軍大將之趣意ニ候、元來黑夷舟、交易船、關東へ通海云々、往反之時可打果、播州城主へ雖勅宣、依事延滯、攘夷之心、更無之、依之以勅使御催促未用バ、勅使爲大將、豫親兵召、五藩長州、因州、阿州、土州、今一州可尋士有志三十人隨從云々、魁主可奉仕仰云々、寮御馬拜領云々、紀州和歌浦、東園中將同斷參向云々、　十七日、紀州和歌浦監察使、東園中將基敬朝臣、播州監察使四條侍從隆謌朝臣等、今日再興、

西海道觀察使從三位藤繩主大宰帥

東海道觀察使從三位菅野眞道四月十三日遷＝東山(山恐海誤)道觀察使一[illegible]

山陽道觀察使正四位下藤園人〇九月十九日任＝中納言一

東海〇海恐山誤道觀察使正四位下藤緒嗣

南海道觀察使正四位下吉備泉

北陸道觀察使從四位上藤仲成四月十三日任、同月兼常陸守、

山陰道觀察使從四位下藤眞夏四月十三日任、元美作守、

畿內觀察使從四位下紀廣濱九月十九日任

山陽道觀察使從四位下多入鹿九月十九日任、兼左京大夫、

〔日本紀略嵯峨〕大同四年九月壬戌、從四位下紀朝臣廣濱爲＝畿內觀察使、從四位下多朝臣入鹿爲＝山陽道觀察使一、

〔公卿補任嵯峨〕大同五年庚寅〇弘仁元年

參議從三位藤繩主大宰帥、六月廿八日如ㇾ故爲＝參議一、元四海道觀察使、

參議從三位菅野眞道六月廿八日如ㇾ故爲＝參議一、元山陽(陽恐陰誤)道觀察使、

參議正四位上藤緒嗣六月廿八日如ㇾ故爲＝參議一、元畿內觀察使、

參議正四位下藤眞夏六月丙申停＝觀察使一爲＝參議一

參議從四位下紀廣濱六月廿日停＝觀察使一

參議從四位下多入鹿二月日任＝參議一、六月丙申停＝觀察使一爲＝參議一、

〇

〔正心誠意〕文久三年六月十四日己丑酉刻前、公董朝臣〇正親町再入來、申刻前、學習院へ有召、參內之處、

使從四位上守刑部卿兼右衞士督陸奥出羽按察使臣藤原朝臣緒嗣言、伏奉去月廿八日勅、以臣遷任東山道觀察使、兼帶陸奥出羽按察使、臣以弱庸、躡口非據、負乘之咎、年月積淹、今復恩寵崇重、方任加授、無所逃責、榮悚相交、臣聞簡才官人、聖上之通範、量力就列、臣下之恒分、臣性識羸劣、久纏疾痾、戎旅之圖、未嘗所學、而委愚臣、專總邊鎭、軍機多變、兵術靡常、若萬一有顚、事意相違、卽非啻微臣之死罪、還亦國家之大勞也、當今天下困疫、亡歿殆半、丁壯之餘、猶未休息、是知民窮兵疲、而守不可止、忽有不虞、何用支防、又臣前屢言、軍事難成、今當其位、豈知不堪、伏願陛下、曲賜鑒察、特愍臣之駑駘、免有臨時之失、不任悚懼屛營之至、謹昧死奉表以聞、輕觸宸威、罔識攸措、　十二月甲子、東山道觀察使正四位下兼行右衞士督陸奥出羽按察使臣藤原朝臣緒嗣言、臣以空虛、謬叨非據、司帶兩使、封食二百、兼復預武禁、寄備宿衞、荷恩則丘山非重、議勞則涓塵未効、心口神飛、罔知所厝、臣聞擇才官人、聖上之宏規、量力取進、臣下之恒分、故名器無濫、授受惟宜、臣前數言、陸奥之國、事難成熟、至于今日、用臣委彼、退慮前言、豈知不堪、加以今聞、國中患疫、民庶死盡、鎭守之兵、無人差發、又狂賊無病、强勇如常、降者之徒、叛端既見、因玆奥郡庶民、出走數度、儻乘隙作梗、何以支擬、臣生年未幾、眼精稍暗、復患脚氣、發動無期、此病歲積、兼乏韜略、若不許賤臣、猶任其事、縱令萬一有失、非只臣身之伏誅、還紊天下之大事、然則上損朝庭之威、下敗先人之名、伏願皇帝陛下、更簡良材、以代愚臣、方隅之鎭、速寄其人、臣生長京華、未閑宜風、望請咸返進所帶封職、被任熟國長官、且問百姓之苦、且療一身之病、雖製錦之誠慙於前古、特願天鑒紆光、曲賜矜允、無任兢懼慺懇之至、謹奉表以聞、輕黷嚴扆、伏深戰越、有勅不許、

〔日本後紀十七平城〕大同三年六月己卯、正四位上菅野朝臣眞道爲左大辨、山陰道觀察使如故、〇中略　正四位下藤原朝臣園人爲式部卿、山陽道觀察使東宮傅如故、　十月己酉朔、大外記從五位下豐宗宿禰廣人爲兼主稅頭、山陰道觀察使判官陰陽助如故、

〔公卿補任平城〕大同四年己丑

〔公卿補任 平城〕大同二年 丁亥

東海道觀察使從三位藤葛野麿 四月十六日癸酉、停參議號、任觀察使、元參議、○號以下八字、一本作下向六月甲子任觀察使十字、

西海道觀察使從三位藤繩主 四月十六日癸酉、停參議、

山陰道觀察使正四位上菅野眞道 大宰大貳、同日停參議、

山陽道觀察使正四位下勳五等藤園人 同日停參議、拜觀察使、皇太子傅、

畿內觀察使從四位上藤緖嗣 停參議、(中略)十一月十六日兼左大辨、觀察使右衞門督如元、

北陸道觀察使從四位上秋篠安人 同日停參議號、

南海道觀察使從四位下吉備泉 同日停參議號、

東海道觀察使從四位下安倍兄雄(中略)四月十六日 ○本注一日廿二 停參議號觀察使、

大同三年 戊子

東海道觀察使從三位藤葛野麿 五十三

西海道觀察使從三位藤繩主 大宰帥

山陰道觀察使正四位上菅野眞道 六十八

山陽道觀察使正四位下勳二等藤園人(中略)四月攝行北陸道事

畿內觀察使正四位下安倍兄雄 五月廿八日遷畿內觀察使、元山陰道

東海 ○海恐山誤 道觀察使正四位下藤緖嗣 正月上表曰、臣請可罷諸道觀察使、天聽許允、卽使所請、

南海道觀察使從四位下吉備泉

〔日本後紀 十七平城〕大同三年四月甲寅、令山陰道觀察使正四位上兼民部卿菅野朝臣眞道攝行東海道事、山陽道觀察使正四位下兼皇太弟傅宮內卿藤原朝臣園人攝行北陸道事、　五月己酉、正四位下安倍朝臣兄雄爲畿內觀察使、從四位上藤原朝臣緖嗣爲東山道觀察使、　六月壬子朔、東山道觀察

當道播磨備中備後安藝周防等五箇國、去延暦四年以降、廿四年已往、庸幷雜𣪘等未進、其數不少、良由頻年不稔、人民彫弊也、〇中略伏望未進代、一收頴稻、混合正税、庶於公無損、於私得便、但任觀察使以來、一依舊令辨進、許之、

〔享祿本類聚三代格六〕太政官符

停止給新任國司等公粮事

右西海道觀察使大宰帥從三位藤原朝臣繩主奏偁、〇中略望請當道公粮、永從停止者、右大臣宣、奉勅依請、自（〇自字原无、據令集解補、）餘諸國亦宜准此、

大同三年六月六日

使印

〔日本後紀十四平城〕大同元年閏六月戊子、賜諸道觀察使印、

〔日本後紀十七平城〕大同三年六月乙亥、勅、用印之事、應據合格、宜諸國觀察使印、一從停止、若事可行下、准諸司請印、

補任

〔公卿補任平城〕延暦廿五年（丙戌〇大同元年）

參議從四位上藤緒嗣（五月廿四日爲山陽〔陽恐陰誤〕道觀察使、閏六月十九日爲畿内觀察使、或本、閏六月十四日假遷畿内觀察使、大同二年四月廿二日停參議、爲畿内觀察使、）

參議從四位上秋篠安人（五月十九日兼春宮大夫、廿四日停參議、爲北陸道觀察使、）

參議從三位藤葛野麿（五月廿四日遷東海道觀察使、）

參議從四位上藤園人（五月五日兼皇太弟傅、叙正四下勳三等、同廿四日爲山陽道觀察使、兼宮内卿、相摸守、）

准參議從四位下吉備泉（五月廿四日任南海道觀察使、）

准參議從四位下安倍兄雄（或本云、大同元年閏六月十四日任山陽道觀察使、）

〔續日本後紀五仁明〕承和三年四月丙戌、散位從四位下甘南備眞人高直卒、天渟名倉太玉敷天皇（〇敏達）之後六世、正五位下淸野之第三子也、〇中略大同元年、歷大宰少監、西海道觀察使判官、

〔類聚三代格八〕太政官符

應七道諸國催殖桑漆事

右東海道觀察使從三位行式部卿藤原朝臣葛野麻呂奏狀偁、桑漆之課、具載令條、易殖易生、養乃成林、至于採用、公私由之、然國郡官司不務催殖、既致闕乏、〇中略望請下知當道、交替分附、若不填數者、拘留解由、以懲不填、其貶責解任、一依先格者、右大臣宣、奉勅依奏、自餘諸道、亦同准此、

大同二年正月廿日

太政官符

應借貸正稅諸國書生等事〇中略

右得山陽道觀察使正四位下守皇太弟傅兼行宮內卿勳五等藤原朝臣園人解偁、備前國解偁、書生等申、己等白丁課役之民、而長直公事、不顧私業、〇中略身勞不異郡司、榮祿還無所覩、伏望特被申官、借貸正稅、各以救乏者、國司勘之、事有合矜、仍請使裁者、使等商量、賞則招人、餌則聚魚、若不加優矜、則部內公文、將託誰人、望請當道諸國、隨國大小、正稅一萬二千束已下、八千束已上、每年借貸、令自勸勉、謹請處分者、右大臣宣、奉勅宜作差給之、若有未納、令國司填之、立爲恒例、五畿內六道諸國、亦宜准此、

大同二年四月十五日

〔享祿本類聚三代格六〕太政官符

應停畿內諸國事力事

右得當道觀察使左大辨從四位上兼行右衞門督藤原朝臣緒嗣奏偁、〇中略今國司等、公廨有潤、兼家營田、望請停給事力、支用雜役、然則公途得濟、私門無乏、謹請處分者、被右大臣宣、奉勅依請、

大同三年二月五日

〔日本後紀十七平城〕大同三年五月庚子、山陽道觀察使正四位下皇太弟傅兼宮內卿藤原朝臣園人奏言、

一山岳於國爲禮事○中略

一漆菓事○中略

以前得七道觀察使解偁、今聞諸國司等、官符到日、施行諸郡、郡司下知鄕邑、而後相俱點爾、曾无爭指示、然則百姓之愚、可共樂成、或暗蔽麥、何曉符旨、理須國司案撿前後詔旨格符、幷官符之內、所載事類、披搜彼此、發明上下、委曲陳喩、再三敎誡、則將黎庶知歸、手足有措、而偏執目前、須聽不聽、常爐巡撿、可示無示、每下官符、民疑尋問、良宰莅境、豈其如之、伏請下符諸國、每事存限、務加敎喩、无致憂煩、謹請處分者、右大臣宣、依請、

大同元年八月廿五日

〔類聚三代格十五〕太政官符

應令依法處分損田事

右太政官去大同元年十一月二日下諸道符偁、畿內東海北陸山陰南海五道觀察使奏偁、撿太政官去延曆廿一年七月十五日符偁、右大臣宣、奉勅夫全國利人、古今通典、而前例後格、共乖適中、仍取捨彼此、更立新制、今須天下田租、戶別立率、常免二分、令輸八分、其有損七分已上戶者、大國卅九戶已下、上國卅九戶以下、中國廿九戶已下、下國十九戶以下、以爲限制、若損七分以上戶、國內總依此限、及損五分、有多少通計不過一分者、令國司撿實處分、通計前爲三分以下、至其納官之數、定收七分以上、若凶年損過此法、卽准例申官聽裁者、據此准量、五分已上、明有其限、四分以下、未見所由、縱令有甲授田一町、十分而論、見損四段、又有乙損三段、而諸國覆損使等、確執格旨、不勞三四分、百姓爲患、莫過於斯、望請收租之法、復依不三得七之舊例、但卅九戶之差、一依格行者、右大臣宣、奉勅依請者、諸國承知、依宣行之者、今被右大臣宣偁、奉勅定損之法、格文灼然、○中略 如超此法、乃以申官、

弘仁七年十一月四日

陳意見

一在官貪濁、處事不平　一肆行姦猾、以求名譽、　一畋遊無度、擾亂百姓、　一嗜酒沈湎、廢闕公務、
一公節無聞、私門日益、　一放縱子弟、請託公行、　一逃失數多、克獲數少、　一統攝失方、戎卒違命、
右同前群官不務職掌、仍當前件一條已上者、伏望不限年之遠近、解却見任、其違乖撫育勸課等
條者、亦望准此、
伏奉今月十一日勅、諸國調庸支度等物、每有未納、交闕國用、又群官政績、多乖朝委、雖加戒諭、曾無
改革、如不黜陟、何以勸沮、所司宜作條例奏聞者、臣等商量所定、具如前件、謹錄事狀奏聞、伏聽天裁、
謹以申聞、謹奏、
延曆五年四月十九日
〔日本後紀平城十四〕大同元年六月癸巳朔、山陽道觀察使正四位下藤原朝臣園人言、西海道年中入京雜
使、其數繁多、而此道疲弊、殊於他堺、撿察其由、率緣迎送无息不得顧私、伏望西海道府國五位已上、自
今以後、自非秩滿解任者、不聽輙入京者、許之、　閏六月□□今山陽道觀察使參議正四位下守皇太
弟傳藤原朝臣園人言、山海之利、公私可共、而勢家專點、絕百姓活、愚吏阿容、不敢陳正、頑民之亡、莫過
此甚、伏望依慶雲三年詔旨、一切停止者、今如所言、則知徒設憲章、曾无遵行、率由所司阿從、而令百姓
有妨、宜一切收入、公私共之、若有犯者、依延曆年中格、一无所宥、自今已後、立爲恒例、　八月乙酉、參議
東海道觀察使從三位藤原朝臣葛野麻呂言、延曆十七年格、出擧正稅、給穀收穀、立爲恒例者、○中略伏
望依延曆十一年十一月廿八日格、年中雜用、幷公廨等稻、不勞爲糙、以省民弊者、許之、
〔類聚三代格十六〕太政官符
合四箇條事
一氏々祖墓及百姓栽樹爲林等事○中略
一原野事○中略

下、如其令解、至掌鈴印、舊論不同、若有此類、令誰執掌、伏望是事立例、令易遵行者、今據令條、罪應解官者、雖云未斷、不得預政、宜依使奏、又遣使訪察國司上下、共令解官者、具狀言上、待報之間、所有鈴印、使自執掌、

一善惡功過、令得准折事

右同前奏偁、案考課令云、罪雖成殿、情狀可矜、或雖不成殿、而情狀可責者、省校日皆聽臨時量定、又云、當上上考者、雖有殿不降、注云、謂非私罪、選敍令云、計考應進、而兼有上考下考者、並得准折、上中以上、雖有下考、聽從上第、公罪下中、私罪下上、雖有上下、仍從下考者、今據此文、進降考第、猶聽准折、黜陟善惡、豈無折降、伏望一人兼有功過、聽量輕重准折者、宜依使奏、

一例外狀迹隨事撿察事

右同前奏偁、案考課令、善最之外、別有可嘉尙者、皆聽臨時量定、又案選敍令、考滿應敍之人、有高行異才、或尤達治體、皆聽擢以不次、不須限以常條、今國司交替之事、格例不移之類、別奉處分、聽使勘申、准此論之、條例之外、所有狀迹、事須撿按、而非有處分、不敢輒行、伏望折中立制、以明擧措者、今宜雖是條例之外事、緣國郡功過者、聽使撿察、隨事褒貶、但交替之事、須官處分、

以前被右大臣宣偁、奉勅、使所起請事條、宜依前件、諸道使等、亦宜准此、

大同四年九月廿七日

(類聚三代格七)太政官謹奏

一撫育有方、戸口增益、　一勸課農桑、積實倉庫、　一貢進雜物、依限送納、　一肅淸所部、盜賊不起、

一剖斷合理、獄訟無寃、　一在職公平、立身淸愼、　一且守且耕、軍粮有儲、　一邊境淸肅、城塁修理、

右國宰郡司、鎭將邊要等官、到任三年之內、政治灼然、當前件二條已上者、伏望五位已上者、量事進階、六位已下者、擢之不次、授以五位、

右同前奏偁、案考課令、官人背公向私、職務廢闕者爲下中、令解見任、今據令、闕務卽令解見任、准例、嗜酒相須科處、伏望嗜酒致廢務、則事發便解、廢務緣他事、則待考始解者、今宜嗜酒及緣他至廢公務、俱是一事、宜以考解、

一公節無聞私門日益條

右同前奏偁、今案此條、身無公節之譽、兼有潤家之益、則迹涉貪濁、自入貶黜、但或公節無聞、而私門不益、或潤家無枉、而公節有聞、伏望斯之徒、不入貶限者、宜依使奏、

一放縱子弟請託公行條

右同前奏偁、案職制律、有所請求曲法之事、罪處笞杖、本罪仍在主司許者、亦與同罪、今恒科雖輕、條例特重、伏望原情量狀、准例解任、又法家所論、子弟者、是謂子孫弟姪、今雖非子弟、放縱親識、與民爭利、兼事請託、蠹民害政、事在難容、伏望一准子弟、共處同科者、今宜不論輕重、同解見任、一依使奏、

一擧擢善政科責不實事

右同前奏偁、今案條例、若有三年之內、一年當條、或有三年之內每年當條、至于進擢、未審同異、又案令條、隨善多少、定考昇降、又若數處有功、並應進考者、亦聽累加、然則或當善狀三條已上、至于擢進、不可同等、伏望准歷年而定等級、依條數而候高下、庶令人勉善政、國多賢能、又考課令云、官人因加戶口及勸課田農、并緣餘功進考者、於後事若不實、縱經恩降、其考皆從追改者、伏望若有不實被擢、准法一從追奪者、今宜功過多少依考課例、六考高下准成選法、又追奪之責、亦依令條、

一准犯合解應停釐務事

右同前奏偁、案惡八條總例偁、同前群官不務職掌、仍當前件一條已上者、不限年之遠近、解却見任、其違乖撫育勸課等條者、亦望准此者、今案考課令、准考應解官者、卽不合釐事、待報符卽解、然則有犯合解、豈可視事、而今所行官人有犯、推斷合解、未報之間、猶預釐務事、乖法意、理須改正、又國司上

下上、降考下上、隨有犯科處、不必解官、若今所冤、事輕罪杖以下、猶解見任、恐涉刻薄、伏望定犯輕重、以擬褒貶者、今宜絕無冤訴、即令褒擢、如有違乖、准犯處罪、並依使奏、

一在職公平立身清愼條

右同前奏偁、案令官人淸愼顯著、及公平可稱等、各爲一善、其一最已上有二善爲上下、然則非有拔群之人、何應超等之擧、伏望若有此色、其錄行狀、指陳政迹之本末、委顯遠近之推服、乃始褒擢免叨濫、其違乖公淸之科、同下貪濁之條者、今縱令當此一條、即身有件二善者也、或加恪勤之善、自昇上中之第、始應褒擢、依使奏、

一在官貪濁處事不平條

右同前奏偁、今案令條、居官諂詐、及貪濁有狀、降考即解見任、而據令、貪濁有一即解、依例兩事相須始解、伏望被人告言貪濁有狀、臨時便解、除此之外、貪濁之科、准考解却、若有兩事共犯、不可更論遲速者、今宜居官貪濁者、待考解任、處事不平者、須降考第、

一肆行奸猾以求名譽條

右同前奏偁、案職制律、內外諸司、實无政迹、遣人妄稱己善、申請於上者、杖一百、注云、雖有政迹、而自遣者亦同、夫諂求之事、觸途多端、所犯輕重、不可無差、伏望量諂求事類、定科責輕重、但實有政迹、被衆推服、民共稱善、不入貶限者、今雖非求名、而行奸猾、惡之爲本、實既灼然、而使奏偏擧求譽之罪、不論肆猾之坐、宜不限輕重、並處解官、但罪重者、事發即解、犯輕者、待考乃解、餘依使奏、

一畋遊無度擾亂百姓條

右同前奏偁、既稱無度、亦注擾亂、二事相須、然後令坐、伏望雖畋遊無度、不致擾亂者、即存寬簡、不入科責者、宜依使奏、

一嗜酒沈湎廢闕公務條

考上中、褒擢之功、於是熟矣、所課三考之內、政治灼然者也、自餘並依考選之法、其戶口增益加三分、則進考三等、居上中第、又勸課田農加六分、則進考三等、亦居上中第、其前荒後闢、及王臣開墾、亦須爲功同入分法、又或田租依實徵收、不必得七爲限、當時正稅全納無殘、舊年之物、依格徵納、此並事緣勸農、可謂積實倉庫、若國司到任三年之內、件二條中三考上中、及勸課條內、兼無此積實者、政治灼然、乃合擢進、其郡司雖無九等考第、三年之內、增減分法、亦准國司、但所部稱小、歷任無限、褒擢之期、宜准還進、其下諸條限三年內、每年計功、亦皆准此、

一貢進雜物依限送納條

右同前奏偁、今撿此條、事在勸勵、或常無未進之國、實非新司之功、久弊多殘之郡、乃知後人之能、伏望能改前人之怠、兼塡舊時未進、始令進擢、實愜事宜、又准條例、至有違乖、即令解任、而案大同三年十二月廿九日格、調庸違期、依律科處、不必解任、伏望調庸違闕者、即准律科處、自餘雜物者、依條例黜陟者、今依使奏、調庸是重、尙依罪之輕重、餘物是輕、亦宜依律科處、餘依使奏、

一肅淸所部盜賊不起條

右同前奏偁、今案此條、既稱不起、縱有一人、豈謂肅淸、伏望堺絕盜賊、郡無一人、部內淸肅、乃始褒進、又准條例、若有違乖、起豈一人、令解見任、仍案賊盜律云、部內有一人爲盜者、里長笞卅、郡內一人笞廿、國隨所管郡多少、通計爲罪、强盜者、各加一等、准據此律、輕重異科、而今一人爲盜、即處解官、求之人情、恐近苛刻、伏望准賊盜多少、定科責輕重、又所有盜賊、卅日內捕獲者、亦望准據律條、不入過例者、今撿使奏、須准律條、郡內有一人爲盜者、即郡司處違乖之科、其國若管二郡者、二人爲盜、若管三郡者、三人爲盜、若盜賊滿此數、國司即令解任、餘亦依使奏、

一剖斷合理獄訟無冤條

右同前奏偁、今案條意、人無冤訴、即令褒擢、若有冤枉一人、即入違乖之科、仍案考課令、處斷乖理爲

設憲章、未聞遵行、是則國郡官司不糠之所致也、今爲行十六條、量置六道觀察使、道別一人、判官一人、主典一人、所以移風淳風、易俗雅俗、激揚清濁、黜陟幽明也、其事有大小、使有輕重、自非國由屢興政關成敗、宜遣判官以下督察、兼復取所司清廉幹了、官差發撿按、庶富之詞、聞諸先聖、安集之語、在於風人、凡厥使手、副朕意焉、

〔類聚三代格七〕太政官符

合裁下觀察使起請事十六條

一撫育有方戸口增益條

一勸課農桑積實倉庫條

右山陰道觀察使從三位行大藏卿兼左大辨菅野朝臣眞道奏狀偁、謹撿去延暦五年四月十九日所立十六條例、撫育勸課等善狀八條下偁、國宰郡司等到任三年之內、政治灼然、當前件二條已上者、五位已上者、量事進階、六位已下者、擢之不次、授以五位、又云、其違乖一條已上者、不限年之遠近、解却見任者、今撿此條、直稱增益、不限口數、至於減損、亦無分法、仍案考課令云、凡國郡司、撫育有方、戸口增益者、各准見戸、爲十分論、加一分、國郡司各進考一等、注云、謂據及少領以上、又云、每加一分進一等、撫育乖方、戸口減損者、各准增戸法、亦減一分降一等者、又云、國郡司勸課田農、能使豐殖者、亦准見地、爲十分論、加二分各進考一等、每加二分進一等、注云、謂熟田之外、別能墾發者、又云、其有不加勸課、以致損減者、損一分降考一等者、今令有進降之法、例無褒貶之差、而當道諸國、時有此弊、既無限制、何以黜陟、又或前時荒廢、後人開發、或去年有荒、今年開發、如此之類、論功有疑、又或百姓各事墾發、或王臣家自多開墾、如此之色、取捨未詳、伏望增益減損、並定分法、待有滿限、擬澀褒貶、又或般富國郡、積實年久、此非新人之功、或衰弊有漸、常多未納、不爲後過、若有弊國之舊物、別能積實、般富之郡、還致空損者、乃始昇降、以勵將來者、今使所奏上件二條、增減分數、宜依令條、假令國司三

二十九日、到揚州大都督府、卽依式例安置供給、得觀察使兼長史陳少遊處分、○下略

〔書言字考節用集官位三〕狩使(カリノツカヒ)往古置常職八人、分遣五畿七道、掌正國司、撿庶民、謂之觀察使、

〔日本後紀平城十四〕大同元年五月丁亥、始置六道觀察使、

〔扶桑略記抜萃平城〕大同元年五月十八日辛巳、置六道觀察使、

○按ズルニ、日本後紀ニ五月丁亥トアリ、二十四日ナリ、此ニ五月十八日トアルハ誤ナリ、

〔公卿補任平城〕延暦廿五年丙戌改五月十八日、爲大同元年、皇代記云、大同元年五月廿四日、以參議爲六道觀察使者、不置畿內七道歟、五月廿八日、以參議爲觀察使、

〔日本紀略平城〕大同二年四月癸酉、詔云々、罷參議號、獨置觀察使、

〔公卿補任平城〕大同二年丁亥四月十六日、詔、宜罷參議號、獨置觀察使、

〔日本紀略嵯峨〕弘仁元年六月丙申、太上天皇平城○詔曰、去大同元年、爲行十六條、並置觀察使、各委一道云々、夫參議之寄、望重守大、任歸責成、職非虛設、是以廢置之云々、宜罷觀察使、復參議號、封邑之制、亦仍舊歟、

〔二中歷一公卿〕參議(中略)大同元年五月廿四日、改爲觀察使、畿內七道各一人、其加一官人耳、弘仁元年復爲參議、

〔職原抄上〕參議八人

本朝聖武天皇天平三年置參議、大同御宇罷參議、置五畿七道觀察使、合八人、弘仁御宇罷觀察使、皆爲參議云々、

〔日本後紀平城十四〕大同元年六月壬寅、手詔曰、朕以庸虛、謬承先業、雖奉丕訓、猶暗政治、負重春氷、取喩方易、御朽秋駕、比懼非難、伏惟先帝、括地宜風、統天立化、布堯心而撫育、垂禹泣而哀矜、謹讀延暦五年四月十一日詔下者、備諸國庸調支度等物、每有未納、交闕國用、良由國郡司遞相怠慢、又莅政治民、多乖朝委、宜量其狀迹、隨事貶黜、所司宜作條例奏聞、公卿卽依制旨、上一十六條事、自茲厥後、既經年所、空

名稱

觀察使　監察使　鎭西鎭撫使【併入】

觀察使ハ、諸國ノ治否ヲ觀察シ、國郡司ノ淸濁ヲ黜陟スルコトヲ掌ル、本使ハ、巡察使ノ差遣ヲ停メテ後、平城天皇ノ大同元年ニ、始テ六道ニ置ク所ニシテ、參議ヲ以テ兼任セシメシガ、同二年ニ至リ、參議ノ號ヲ廢シテ、專ラ觀察使ト稱シ、之ヲ八道ニ置ケリ、嵯峨天皇ノ弘仁元年、本使ノ號ヲ停メ、再ビ參議ノ稱ニ復セリ、觀察使ノ號ヲ存セシコト、僅ニ五年ノ間ノミ、

〔伊呂波字類抄官職久〕觀察使クワンサツシ今云、平城天皇大同元年五月、始置六道觀察使、同二年四月、罷參議號觀察使、嵯峨天皇弘仁元年六月、罷觀察使、復號參議、

〔唐書百官志四十九〕觀察處置使、掌察所部善惡、擧大綱、凡奏請皆屬於州、貞觀初、遣大使十三人、巡省天下諸州、水旱則遣使、有巡察安撫存撫之名、神龍二年、以五品以上二十人爲十道巡察使、按擧州縣、再周而代、景雲二年、置都督二十四人、察刺史以下善惡、置司擧從事二人、秩比侍御史、揚益幷荊四州爲大都督、汴兗魏冀蒲綿秦洪潤越十州爲中都督、皆正三品、齊鄜涇襄安潭遂通梁夔二十州爲下都督、從三品、當時以爲權重、難制罷之、唯四大都督府如故、置十道按察使、道各一人、開元二年、曰十道按察採訪處置使、至四年罷、八年復置十道按察使、秋冬巡視州縣、十年又罷、十七年復置十道京都兩畿按察使、二十年曰採訪處置使、分十五道、天寶末、又兼黜陟使、乾元元年、改曰觀察處置使、

〔容齋三筆七〕唐觀察使

唐世於諸道置按察使、後改爲采訪處置使、治於所部之大郡、既又改爲觀察、其有戎旅之地、卽置節度使、分天下爲四十餘道、大者十餘州、小者二三州、但令訪察善惡、擧其大綱、然兵甲財賦民俗之事、無所不領、謂之都府、權勢不勝其重、能生殺人、或專私其所領州、而虐視支郡、〇中略今〇宋之州郡、控制按刺者、率五六人、而臺省不預毀譽善否、隨其意好、又非唐日一觀察使比也、

〔續日本紀三十五光仁〕寶龜九年十月乙未、遣唐使第三船到、泊肥前國松浦郡橘浦、判官勅旨大丞正六位上兼下總權介小野朝臣滋野上奏言、臣滋野等、去寶龜八年六月二十四日、候風入海、〇中略八月

故按察使從三位大野朝臣東人制法、隨事推決、

延暦六年正月廿一日

〔日本紀略淳和〕天長五年二月甲寅、賜鎭東按察使伴朝臣國道餞、有御製、賜衣被及雜珍玩物、

〔日本後紀平城十七〕大同四年三月戊辰、是日東山道觀察使正四位下兼行右衞士督陸奥出羽按察使藤原朝臣緒嗣、爲入邊任、辭見内裏、召昇殿上、令奥侍從五位上永原朝臣子伊太比賜衣一襲被等、

〔詠百寮和歌〕按察使

奥深き人の心はしら川の關しなけれは終もしられし

○

攝官

〔續日本紀元正八〕養老三年九月癸亥、以正四位下多治比眞人三宅麻呂、爲河内國攝官、正四位下巨勢朝臣邑治爲攝津國攝官、正四位下大伴宿禰旅人爲山背國攝官、

〔職官志五〕蓋攝官亦猶按察、以王畿特立其名也、

〔標注職原抄別記下〕畿内には攝官といふものを、守の外に置れたり、○中略皆京都に遠き國なるかゆゑに、内官の中にて名望ある人に、國事を攝せしめたまへるものなり、大和に攝官なきは、京都を置れたる國にて、諸司百官多けれは、何事の不便もあらぬゆゑに、却て除かれたるものなり、和泉はいまだ分たれさる以前のことなり、○中略但按察使の國には守なき例なるを、攝官はさにあらで、守の外に別に置れたり、これ卽畿内と諸國とのけぢめなり、

〔續日本紀元正八〕養老五年八月辛卯、改攝官記事、號爲捴事、

知國事

〔續日本紀元正九〕養老六年三月戊申、以正四位下阿倍朝臣廣庭、知河内和泉事、

〔公卿補任聖武〕神龜三年丙寅

中納言正三位大伴宿禰旅人山城國事月日兼知

○按ズルニ、公卿補任養老三年ノ條ニ、中納言正四位下大伴宿禰旅人、兼山背國攝官

雜載

安集穴、干戈搖動、時爲風塵、是臣之愆、愆莫甚焉、是臣之罪、罪莫大焉、伏願留陛下遠慮之心、罷微臣遙領之職、選龍虎以代之、推武猛以求之、則鳴鼓收沸野之聲、自當不日、斯馬乾出塞之汗、亦得指期、無任悚懼忝竊之至、謹奉表陳讓以聞、不省、

〔大鏡三太政大臣賴忠〕やがて后（○圓融后藤原遵子）女御（○華山女御藤原諟子）のひとつはらのおとこ君、只今按察大納言公任と申す、小の丶宮（○藤原實賴）の御まごなればにや、歌の道すぐれ給へり、よにはづかしう心にくきおぼえおはす、

〔公卿補任後一條〕寬仁五年（辛酉○治安元年）

權大納言正二位藤公任（正月廿八日兼按察使）

〔類聚符宣抄八〕太政官符　陸奥出羽等國司幷鎭守府　內印

正二位行大納言兼左近衞大將春宮大夫藤原朝臣朝光

右去正月廿九日兼任陸奥出羽等國按察使畢、國府承知、符到奉行、

辨　史

永延二年二月十三日

〔續日本紀八元正〕養老四年三月乙亥、按察使向京、及巡行屬國之日、乘傳給食、因給常陸國十丁、遠江國七丁、伊豆出雲二國鈴各一、

〔類聚三代格十二〕太政官符

應陸奥按察使禁斷王臣百姓與夷俘交關事

右被右大臣宣偁、奉勅如聞王臣及國司等爭買狄馬及俘奴婢、所以弘羊之徒、苟貪利潤、略良竊馬、相賊日深、加以無知百姓、不畏憲章、賣此國家之貨、買彼夷俘之物、綿既著賊襖冑、鐵亦造敵農器、於理商量、爲害極深、自今以後、宜嚴禁斷、如有王臣及國司違犯此制者、物即沒官、仍注名申上、其百姓者、一依

〔續日本紀 二十九稱德〕神護景雲二年二月癸巳、從三位藤原朝臣繩麻呂爲近江按察使、民部卿勅旨大輔侍從如故、

〔續日本紀 三十二光仁〕寶龜三年九月丙午、從四位下大伴宿禰駿河麻呂爲陸奥按察使、仍勅、今聞汝駿河麻呂宿禰、辭年老身衰、不堪仕奉、然此國者、元來擇人以授其任、汝駿河麻呂宿禰、唯稱朕心、是以任爲按察使、宜知之、卽日授正四位下、

〔公卿補任 光仁〕寶龜六年乙卯

參議正四位下大伴宿禰駿河麿九月廿七日任、勳三等、十一月乙未敍正四位上、兼陸奥出羽按察使鎭守府將軍、

〔續日本紀 三十六光仁〕寶龜十一年三月丁亥、陸奥國上治郡大領外從五位下伊治公呰麻呂反、率徒衆殺按察使參議從四位下紀朝臣廣純於伊治城、

〔公卿補任 桓武〕寶龜十二年辛酉天應元年○天應二年壬戌延暦元年

參議正三位藤小黒麿右衛門督常陸守、正月庚申兼陸奥按察使、督守如元、

參議從三位大伴家持左大辨、春宮大夫、陸奥守、閏正月坐氷上川繼事免、(中略)五月五日更任春宮大夫、六月兼陸奥出羽按察使、

〔文德實錄 五仁壽〕三年十二月丁丑、相摸權介從五位上山田宿禰古嗣卒、古嗣右京人也、○中略天長三年、爲陸奥按察使記事、

〔三代實錄 三十三陽成〕元慶二年六月八日壬申、大納言正二位兼行左近衞大將陸奥出羽按察使源朝臣多上表請解按察使曰、臣聞器違其分、榮非可榮、任越其才、量還失量、(中略)臣以無人望、過受國恩、祿秩優崇、寵命隆赫、往年降詔、以臣本官兼督陸奥出羽諸軍事、惟彼兩地異類群居、暗昧是非、簡略禮義、頃者梟聲轉大、狼心益狂、殺我人民、燒我城邑、臣實須脚踐沙漠之地、身臨胡虜之庭、致其腰領之誅、肆其爪牙之銳、而臣族非將種、門謝兵家、聚米爲山、更迷指畫之趣、簞醪投水、誰表迎飮之誠、遂使犬羊流離、不

右一首治部卿船王

〔續日本紀二十三淳仁〕天平寶字五年正月壬寅、從四位上藤原惠美朝臣眞光爲兼美濃飛驒信濃按察使、授刀督從四位上藤原朝臣御楯爲兼伊賀近江若狹按察使、

〔公卿補任淳仁〕天平寶字五年辛丑

參議從三位藤原朝臣御楯

或書云、八月日、高野天皇及帝幸藥師寺、還幸授刀督從四位上御楯第宴飮、授御楯正四位上、〇中略後任伊賀近江按察使、

天平寶字六年壬寅

參議正四位上藤原惠美朝臣眞先

天平寶字二年八月日從五位上、三年六月從四位下、五年正月從四位上、職歷鎭國衛驍騎將軍兼美濃飛驒按察使、

〔公卿補任稱德〕天平寶字九年乙巳〇天平神護元年

非參議從三位藤原朝臣藏下麿正月勳二等、二月日爲近衛大將兼左京大夫伊與土左按察使、

非參議從三位文室眞人大市七月七日叙、出雲按察使如元、

天平神護二年丙午

參議從四位上藤原朝臣田麿

養老六年壬戌生、〇中略天平寶字五年正月授從五位下、〇中略七年正月任美濃守、七月陸奧出羽按察使、

〔續日本紀二十八稱德〕神護景雲元年三月己巳、從三位藤原朝臣藏下麻呂爲伊豫土左二國按察使、近衛大將左京大夫如故、

〔職官志五〕按置按察使、獨不在筑紫、固有大宰府管之也、此官本臨時以詔所授、卽與鎭撫使節度使同其類、未嘗聞建府、且在陸奥出羽、輒兼之鎭守將軍者多例矣、鎭守府自有在焉、則不得別有按察使府、況至後世、率皆屬遙授、則不應問其府之有無、百官略、職原鈔、並有府字、恐是衍文、

〔續日本紀八元正〕養老四年九月戊寅、以播磨按察使正四位下多治比眞人縣守、爲持節征夷將軍、五年六月辛丑、從四位上百濟王南典爲播磨按察使、

〔續日本紀九聖武〕神龜元年十月乙卯、散位從五位下息長眞人臣足任出雲按察使、時贓貨狼藉、惡其景迹、奪位祿焉、

〔公卿補任聖武〕神龜三年丙寅

參議正三位藤原朝臣房前月日授刀長官兼近江若狹按察使

天平十一年己卯

參議從四位上大野朝臣東人四月十九日任、陸奥出羽按察使如元(中略)天平三年正月日從四上、官至陸奥出羽按察使兼大養德守、

〔公卿補任光仁〕寶龜六年乙卯

非參議散位從三位大伴宿禰古慈悲七十六

飛鳥朝常道贈大錦中小吹負之孫、平城朝越前按察使從四位下、祖父麿之子、

〔續日本紀二十二淳仁〕天平寶字四年正月丙寅、勅曰、○中略陸奥國按察使兼鎭守將軍正五位下藤原惠美朝臣朝獦等、敎導荒夷、馴從皇化、○中略宜擢朝獦、特授從四位下、

〔續日本紀十八孝謙〕天平勝寶四年十一月乙巳、以參議從四位上橘朝臣奈良麻呂爲但馬、因幡按察使、兼令撿按伯耆出雲石見等國非違事、

〔萬葉集十九〕二十七日○天平勝寶四年十一月林王宅餞之但馬按察使橘奈良麿朝臣宴歌三首

能登河乃、後者相牟、之麻之久母、別等伊倍婆、可奈之久母在香、

補任

肆行姦猾、以求名官、（諂事長官、設毀其善、自求功考、百端讒譖而無實事者、）

右按察使巡歴管國、訪察事條如前、

敦本棄末、情務農桑、

幼標孝悌、有感通神、

文學優長、識明時務、

有力超衆、武藝絶群、

田蠶不修、耕織廢業、

不孝不義、聞於里閭、

假託功德、誑扇妖訛、

恐脅公私、欺凌貧弱、

右百姓有前件善惡狀迹者、隨狀擧罰、錄狀具通、

養老三年七月十九日

聞

〔百寮訓要抄〕陸奥出羽按察使府　陸奥出羽は、大國にて有間、此兩國を殊更成敗する也、按察使　陸奥出羽を管領する職也、大中納言可然人是になる、中古以來國の成敗はなし、陰陽師醫師など、又此府にもをかるゝ也、

〔官職秘抄下〕按察使（令外官）　大納言可兼之、或及中納言、參議兼任例見于參議所、

〔官職秘抄上〕參議　兼按察使例（清原長谷）

〔職原抄下〕陸奥出羽按察使府

按察使（相當從四位下唐名都護）　近代納言已上兼之

記事（唐名都護錄事）

弘仁三年四月七日

太政官符

應停止遙授陸奥出羽按察使大宰帥等傔仗事

右中納言兼右近衛大將從三位行春宮大夫藤原朝臣時平宣、奉勅、遙授官員不赴州府、凡其傔仗、於事無益、自今以後、宜從停止、

寛平七年十一月七日

〔延喜式 十八式部〕凡大宰帥大貳井陸奥出羽按察使、及守等傔仗者、申太政官補之、不得輙取白丁、若情願以子補之者、聽取一人、但身不赴任者不給之、

〔續日本紀 八元正〕養老三年七月庚子、始置按察使、○中略其所管國司、若有非違及侵漁百姓、則按察使親自巡省、量状黜陟、其徒罪以下斷決、流罪以上錄状奏上、若有聲教條脩、部内肅清、具記善最言上、

〔類聚三代格 七〕按察使訪察事條事

在職公平、立身清慎、在職公平、必須察吏雄伏、立身清慎、合國郡共和、與論薦讃、聲稱多少、並抑指陳、

剖斷合理、獄訟無寃、剖斷合理、自然無寃、若有國移郡斷者、管國寃、如此之徒、即非合理、斷既乖錯、人國○中略人有寃、

籍帳皆實、戸口無遺、國郡官人、能加撿括、籍帳戸口、無所隱漏、

繁殖戸口、増益調庸、國郡官司、撫育有方、戸口増益、調庸多進、此謂之分成、

勸課農桑、國阜家給、國郡長官、字養无倦、訓導有方、人務農桑、家赴染事、

在官貪濁、處事不平、國郡官司、貪濁不平者、具言其状、

容縱子弟、請託公行、子弟親識、縱容所部、與民爭利、乗勢抑覇之類、

嗜酒沈湎、畋遊無度、耽酒凶醵、縱闘公務、及招携惡少年、犯暴田苗之類、

逋逃在境、淹滯不歸、容止外界逋逃、其數多少不覺、及有寛容者、

延暦十七年六月廿八日

〔日本後紀嵯峨二十二〕弘仁三年正月乙酉、制、陸奥出羽按察使、正五位上官、今改爲從四位下官、

〔類聚三代格五〕太政官謹奏

應增陸奥出羽兩國按察使位階事

右謹撿案內、去養老五年六月十日奏、用件官品、准正五位上、爾來流行、以至今日、臣等商量、方面之任、威風所存、夷囚之侶、瞻仰是賴、然則職重階輕、管大勢少、伏望增階品、爲從四位下官、將優邊守、且鎮物情、臣等商量具件如前、伏聽天裁、謹以申聞、謹奏、聞、

弘仁三年正月廿六日〇又見令集解

〔職官志五〕陸奥出羽按察使

按察使一人從四位下

記事職原抄不載其官位、按、按察使准正五位官時、記事准正七位官、方其昇爲四位、蓋亦應從爲六位、後世按察使但空名、以兼之大納言以上、而記事不復任、故忘官位矣、

〔類聚符宣抄六〕中納言兼兵部卿藤原朝臣繩主宣、奉勅、〇中略按察使記事、元稱佐官、宜亦改換只稱記事、

弘仁八年六月廿三日　少外記高丘宿禰潔門奉

〔續日本紀九元正〕養老七年十月庚子、勅、按察使所治之國、補博士醫師、自餘國博士並停之、

〔伊呂波字類抄計官職〕傔仗〇弘仁格云、延暦十七年六月廿八日、定置二人、按察使賜四人、鎭守將軍賜三人、出羽守賜二人、天長五年四月十四日[illegible]云々

〔類聚三代格五〕太政官符

加減傔仗員事

陸奥出羽按察使四人元三人、今加一人、〇中略

右被右大臣宣偁、奉勅、傔仗之數依件加減、

がゆゑに、官員の繁多を厭ひて、按察をば省かれたれど、またさばかり廣き境内なれば、按察使なくはあるべからじと、議定せられての事なるべし、佐渡隱岐の越前出雲に隷せるは、もとよりの按察使の國なり、備後はいつ按察の國となれりけむ、これはたゞ陸奥と共に始置の年しられず、紀伊隷大和國守と見えて、隷大和按察使となきは、上件にいへる如く、大和には按察の名目を建られぬゆゑに、紀伊の非違を大和の守に隷して糺弾せしめ給へるなり、

○按ズルニ、鎭守將軍ノ國史ニ見エタルハ、天平元年紀ニ、陸奥鎭守將軍從四位下大野朝臣東人云々トアルガ始ニシテ、鎭守府ノ稱ハ、弘仁三年四月二日ノ格文ニ始テ見エタリ、サレバ陸奥國ニ、鎭守將軍アルコトハ、按察使ヲ置キシ養老年中ヨリハ遙ニ後ナリシコト明ナリ、標注職原抄ノ説誤レリ、

〔續日本紀 八元正〕養老三年七月庚子、始置按察使。　丙午、補按察使典。

〔標注職原抄別記 下〕按察使、その兼帶の國をば、介、掾、目を以て治めしめ、自らは政事の大綱を握て非違を糺し、所管の國には、守以下あるゆゑに、政事の綱目を皆これに委ね、使はたゞ非違のみを預りきくなるべし、故に兼帶の守のかたにては、自身の下に介、掾、目あり、所管の使のかたにては非違の事を記錄する官、たゞ一人を補したり、卽はじめて使の置れたりし養老三年七月庚子の件に、補按察使典と見えたる是なり、典は執筆の役なり

〔續日本紀 八元正〕養老四年三月己巳、改按察使典號記事。

〔類聚三代格 五〕太政官謹奏

定陸奥國官員事

按察使一人、記事一人、○中略

右上件官員、臣等商量所定如右、伏聽天裁、謹以申聞、謹奏、聞、

るはいかなるよしならむと或人いへり、答云、按察使は、所管に係れる名、國守は一國にのみあづかる職にて、その實は異名同物なれば、兼帶の一國にあづかるかたにては守といひ、所管の數國に係るかたにては按察使といふなるべし、〇中略抑かく養老三年に、按察使を置れたる文の中に、畿内と近江、飛驒、若狹、加賀、佐渡、隱岐、長門、陸奥、出羽、紀伊、及九國二島を除かれたるは、いかなる事に歟と不審につきて猶考るに、畿内には攝官といふものを守の外に置れたり、〇中略また九國二島に置れぬは、大宰府あるゆゑなり、其よし上件にいへり、なほ同紀に養老五年四月辛亥、令七道按察使、及大宰府、巡省諸寺、隨便併合、とあるも、大宰府に按察使なき一證なり、

〔續日本紀八元正〕養老四年九月丁丑、陸奥國奏言、蝦夷反亂、殺按察使正五位下上毛野朝臣廣人、

〔職官志五〕陸奥出羽按察使（養老三年七月、置按察使于諸國、(中略)四年九月、陸奥國奏、蝦夷作亂、殺按察使上毛野廣人、是因疑見其有按察使焉、前不書補之、史官失之也、）

〔續日本紀八元正〕養老五年五月辛亥、令七道按察使、及大宰府、巡省諸寺、隨便併合、　八月癸巳、置長門按察使、管周防石見二國、又以諏方飛驒隷美濃按察使、出羽隷陸奥按察使、佐渡隷越前按察使、隱岐隷出雲按察使、備中隷備後按察使、紀伊隷大和國守焉、

〔標注職原抄別記下〕置長門云々と置字を下せるをおもふに、これまで長門には按察使はなかりしなるべし、さるは長門は他に異なる邊要の地なれば、〇注略當國に使の置れざりしは缺典なるからに、今年始め置れて、周防石見を其所管とせられたるものなり、美濃はもとよりの使の國なれば、諏方飛驒を隷られたる、さることなり、（美濃按察使は、養老三年の制、尾張、參河、信濃の三國を管したるに、續紀天平寶字五年正月壬寅、鎮國驍騎將軍從四位上藤原惠美朝臣眞光、兼美濃飛驒信濃按察使と見えたるは、尾張三河を除き、飛驒を隷られたり、）陸奥按察使は、養老三年の件に見えず、然らばこれも今年の始置かと思ふに、文義長門の例に違れば、さにはあらじ、これより以前に置れたるが、紀に其文の脱たるなるべし、さるは甚き大國なるを、養老三年に置れざりしは、いかにぞと考るに、此國には守の外に既く鎮守將軍を置れて、國府と鎮府と相並たる

外に是を置て、兩國の政務をつかさどらしむる也、中比より納言以上の兼官となれり、

〔續日本紀 八 元正〕養老三年七月庚子、始置按察使、令伊勢國守從五位上門部王管伊賀志摩二國、遠江國守正五位上大伴宿禰山守管駿河伊豆甲斐三國、常陸國守正五位上藤原朝臣宇合管安房上總下總三國、美濃國守從四位上笠朝臣麻呂管尾張參河信濃三國、武藏國守正四位下多治比眞人縣守管相模上野下野三國、越前國守正五位下多治比眞人廣成管能登越中越後三國、丹波國守正五位下小野朝臣馬養管丹後但馬因幡三國、出雲國守從五位下息長眞人臣足管伯耆石見二國、播磨國守從四位下鴨朝臣吉備麻呂管備前美作備中淡路四國、伊豫國守從五位上高安王管阿波讃岐土佐三國、備後國守正五位下大伴宿禰宿奈麻呂管安藝周防二國、

〔標注職原抄別記 下〕按察使

續日本紀養老三年七月庚子、始置按察使、○中略　これ按察使の所見の始なり、但この時、國守の外に、別に按察使を置れたるにはあらず、伊勢、遠江、常陸、美濃、武藏、越前、丹波、出雲、播磨、伊豫等の守を、そのまゝ按察使といふ名に改め、旁近の國を管せしめたるものになむ、（されば按察使、即國守なり、）たとへば職員令に、大宰府帶筑前國とあるも、筑前の內に大宰府あるゆゑに、筑前には別に國守を置れず、やがて大宰府に筑前の國務をまかせて帶せしめられたるなり、されば九州にていへば、筑前は大宰府の兼帶の國、その外の八國は、大宰府の所管の國なり、故に八國には別に國守あり、兼帶と所管とのけぢめ見るべし、この例を以て推すに、伊勢は按察使の兼帶の國なり、伊賀志摩は、按察使の所管の國なり、（故に伊賀、志摩には、別に國守あり、）遠江は按察使の兼帶の國なり、駿河、伊豆、甲斐は、按察使の所管の國なり、（故に駿河、伊豆、甲斐には、別に國守あり、）その他もこれに准へて知べし、かゝれば按察使を任せる國々は、守を按察使とのみいひて、守とはいふまじき理なるに、天平四年九月乙未の同紀に、從五位上石上朝臣麻呂爲丹波守と見えたり、丹波は按察使の治る國なるを、守とあ

沿革

行可被獻歟、丁被計申之由仰之、都護卿被仰云、此事近代之伯獻之者略儀也、復舊規可有御申之條、道之再興、目出之由可申云々、

〔唐六典 三十 州縣官吏〕大都護府、大都護一人、從二品、

副大都護一人、〇唐書百官志作二人 從三品、

副都護二人、〇舊唐書百官志作四人 正四品上、

漢武帝開西域、安其種落三十六國、置使者校尉以領護之、宣帝時、鄭吉爲西域都護、始立幕府、都護之名自吉始也、至章帝時廢西域都護、令戊己校尉領之、魏晉之間、有都護左右軍、都護將軍之號、遂廢都護之名、皇朝永徽中、始置安南安西大都護、景雲二年又置單于都護、開元初、置北庭都護、今有單于副都護、〇中略

都護副都護之職、掌撫慰諸蕃、輯寧外寇、覘候姦譎、征討攜離、長史司馬貳焉、諸曹如州府之職、

〔二中歷 一 公卿〕按察使 養老三年七月始置之

〔濫觴抄 上〕按察使

同年〇元正五年、即養老三年、七月始置之、

〔拾芥抄 中本 百官〕陸奧出羽按察使 養老元年十月始置之

〇按ズルニ、養老元年ニ陸奧出羽按察使ヲ置キシコト、舊史ニ所見ナシ、

〔職原抄 下〕鎭守府

陸奧者、上古以來爲邊要、爲其國境廣、元明天皇和銅五年九月、分置出羽國、元正天皇養老二年〇二年恐三年誤、置按察使、令監察兩國事、

〔湖月抄 五 若紫〕師 續日本紀を勘るに、元正天皇の養老三年に、はじめて諸國にあせちを置けり、其後天平寶字七年七月に、陸奧出羽の按察使のみを置けり、陸奧出羽は大國なれば、國司以下の官の

名稱

藤原繩麻呂ヲ以テ近江ノ按察使ト爲シヽ以後ハ、陸奧出羽按察使ノ外ハ、一モ史冊ニ跡ヲ留メタルモノナシ、

陸奧出羽按察使ハ、諸國ノ按察使ト同ジク、養老年中ニ置キシモノニシテ、後世マデ永ク存セシハ、此二國ノ邊要ニ在ルヲ以テナリ、故ニ陸奧守鎭守府將軍タル人ハ、必ズ此二國ノ按察使ヲ兼ヌルヲ例トス、然ルニ後世邊防ノ漸ク廢弛スルニ及ビ、此使ハ、徒ニ空名ヲ存スルノミニテ、納言以上ノ兼職トナレリ、

〔伊呂波字類抄 安官職〕按察使府アンサツシフ 養老三年、紀始置陸奧出羽按察使記事、

〔下學集 上官位〕按察使アンザツシ アセチ 都護

〔運歩色葉集 阿〕按察使アセチ 唐名都護

〔倭訓栞 中編 安一〕あせち 按察使の音轉也、元正天皇の御宇に始り、其後鎭守府將軍以下を置り、

〔百寮訓要抄 別註六〕按察使 令外ノ官ナリ、按察使、讀テ阿世知ト訓ス、和名抄ニ此官號ヲ脫ス、續日本紀元正天皇養老三年七月庚子、始テ當使ヲ置ル、職原抄ニハ陸奧出羽按察使府トアリ、此官號ハ唐ノ官號ヲ用ヒラル、

〔容齋三筆 七〕唐觀察使

唐世於諸道置按察使、後改爲采訪處置使、治於所部之大郡、既又改爲觀察、

〔拾芥抄 中本 官位唐名〕陸奧出羽按察使 都護府上都護 記事 都護錄事

〔運歩色葉集 登〕都護トコ 按察之唐名

〔易林本節用集 登官位〕都護トコ 按察使アゼチ

〔康富記〕寶德元年十二月十一日丙戌、晚參按察殿、有御對面、自李部親王被申、王氏爵御申文事、近年神祇伯資益王被出之、是無親王御座之時儀也、第一親王可被出事本儀也、但任近例可被略歟、就奥

句、不顧義理、任意決斷、由是薩摩訴狀不得披心、淸白吏道、豈合如此、自今以後、不得更然、若有此類、隨法科罪、

〔類聚三代格 七〕太政官符

定詔使官使事

右頃年之間、爲推民訴、遣使四方、或國司等對捍使者、不承勘問、捍侮之辭、觸類多端、遂乃使旨不展、徒然引歸、寃屈之民、累年懷愁、路次之驛、空疲迎送、稍尋其由、緣無使威、詔使臨界、豈如此乎、左大臣宣、奉勅、度時立制、古今攸貴、宜定使色、以嚴將來、其巡察、覆問、撿稅、交替、畿內挍班田、問民苦幷訴等使、並准詔使之例、賑給撿損田池溝疫死等使、猶爲官使、但遣使之旨、出於勅語、卽是等所謂詔使而已、不可更限事之輕重、

天長二年五月十日

按察使 攝官 併入

按察使ハ、數國ヲ總督シ、國司ノ治迹ヲ察シ、之ガ黜陟ヲ行フモノニテ、徒罪以下ハ直チニ斷決シ、流罪以上ト善狀アルモノトハ、治迹ヲ錄シテ奏上スルナリ、

本使ハ、元正天皇ノ養老三年ノ創置ニシテ、伊勢、遠江、常陸、美濃、武藏、越前、丹波、出雲、播磨、伊豫、備後等ノ諸國守ヲシテ之ヲ兼ネシメ、其旁近ノ二國、若シクハ三四國ヲ管セシム、而シテ特ニ西海道諸國ニ按察使ヲ置カザリシハ、大宰府アリテ之ヲ管スルガ故ナリ、又畿內ニハ別ニ攝官ト云フヲ置キ、京官ヲ以テ國事ヲ攝セシメタリ、是其職ハ按察使ニ同ジケレドモ、畿內ニ在ルヲ以テ別ニ其名ヲ立テシナリ、而シテ按察使ハ、稱德天皇ノ神護景雲二年、從三位

雜載

略

〔續日本紀 稱德 二十九〕神護景雲二年三月乙巳朔、先是東海道巡察使式部大輔從五位下紀朝臣廣名等言、得本道寺神封戶百姓欵曰、公戶百姓、時有蕃恩、寺神之封、未嘗被免、率土黎庶、苦樂不同、望請一准公民、俱沐皇澤、使等商量、所申道理、至是官議奏聞、奏可、餘道諸國亦准於此、又同前言、運舂米者、元來差傜、人別給粮、而今傜分輸馬、獨給牽丁之粮、窮弊百姓無馬可輸、望請依舊運人別給粮、又下總國井上浮島河曲三驛、武藏國乘潴豐島二驛、承山海兩路、使命繁多、乞准中路置馬十匹、奉勅依奏、其餘道舂米、諸國粮料、亦准東海道施行、北陸道使右中辨正五位下豐野眞人出雲言、佐渡國造國分寺料稻一萬束、每年支在越後、常當農月、差夫運漕、海路風波、動經數月、至有漂損、復徵運脚、乞割當國田租以充用度、山陽道使左中辨正五位下藤原朝臣雄田麻呂言、本道郡傳路遠、多致民苦、乞復隸驛將送、又長門國豐浦厚狹等郡、宜養蚕、乞停調鋼、代令輸綿、南海道使治部少輔從五位下高向朝臣家主言、淡路國神本驛家、行程殊近、乞從停却、詔並許之、

〔東大寺正倉院文書 十七〕巡察使從 史生一口、從一口、 七郡別一日食爲單壹拾肆日 史生七口、從七口、

裱紙裏書 駿河國正稅帳天平十年目正八位上川原田宿禰忍國 〇駿河國以下二十二字據十八卷補

〔續日本紀 聖武 十三〕天平十一年二月戊子、詔曰、皇后寢膳不安、彌益疲勞、朕見此苦、情甚惻隱、宜大赦天下救濟病患、　壬辰、勅、二月二十六日赦書云、以赦以前事告言者、以其罪罪之、宜暫可停、若百姓心懷私愁、欲披陳者、悉聽之、巡察使宜隨事問知、具狀錄奏、勿依赦書罪告人、

〔續日本紀 稱德 二十八〕神護景雲元年六月癸未、勅、東山道巡察使正五位上行兵部大輔兼侍從勳三等淡海眞人三船、稟性聰慧、兼明文史、應選標擧、銜命巡察、諸使向道之時、受事雖一、省風還報之日、政路漸異、存心名達、檢括酷苛、以下野國國司等、正稅未納、幷雜官物中有犯、然獨禁前介外從五位下弓削宿禰薩摩、不預釐務、亦赦後斷罪、此陳巧辨、其理不安、既乖公平、宜解見任、用懲將來、又比年法吏、但守文

〔續日本紀三十二光仁〕寶龜三年九月癸卯、遣從五位下藤原朝臣鷹取於東海道、正五位下佐伯宿禰國益於東山道、外從五位下日置造道形於北陸道、外從五位下內藏忌寸全成山陰道、正五位下大伴宿禰潔足於山陽道、從五位上石上朝臣家成於南海道、分頭覆撿、每道判官一人、主典一人、但西海道者、便委大宰府勘撿、

〔日本紀略桓武〕延曆十四年閏七月丙申、任畿內七道巡察使、

〔文德實錄四〕仁壽二年二月丙辰、散位從四位上和氣朝臣仲世卒、仲世者故民部卿正三位淸麻呂第六子也、〇中略天長元年爲北陸道巡察使、

〔日本紀略淳和〕天長二年八月丁卯、任五畿內七道巡察使、十二月丁巳、諸道巡察使辭見紫宸殿、訖即於東階下各賜祿、

〔續日本後紀十六仁明〕承和十三年八月辛巳、散位正三位藤原朝臣吉野薨、參議從三位勳二等大宰帥藏下麻呂之孫、致仕參議正三位兵部卿綱繼之男也、〇中略天長元年加從五位上、三年兼伊豫守、爲畿內巡察使、

復命

〔續日本紀一文武〕四年八月丁卯、依巡察使奏狀、詔諸國司等、隨其治〇治字據日本紀略補能、進階賜封各有差、

〔續日本紀三文武〕大寶三年十一月癸卯、太政官處分、巡察使所記諸國郡司等、有治能者、式部宜依令稱擧、有過失者、刑部依律推斷、

〔續日本紀十聖武〕神龜四年十二月丁亥、先是遣使七道、巡撿國司之狀迹、使等至是復命、詔依使奏狀、上等者進位二階、中等者一階、下等者破選、其犯法尤甚者丹後守從五位下羽林連兄麻呂處流、周防目川原史石庭等除名焉、

〔續日本紀十六聖武〕天平十七年四月甲寅、詔依巡察使上奏、原免天下諸國去年田租、

〔續日本紀二十三淳仁〕天平寶字五年八月癸丑朔、勅曰、頃見七道巡察使奏狀、曾無一國守領政合公平、

北陸道使、正五位下百濟王金爾爲山陰道使、外從五位下大伴宿禰三中爲山陽道使、外從五位下巨勢朝臣嶋村爲南海道使、從四位上石上朝臣乙麻呂爲西海道使、外從五位下大養德宿禰小東人爲次官、道別判官一人、主典一人、

〔續日本紀十九孝謙〕天平勝寶六年十一月辛酉朔、任巡察使、以從四位上池田王爲畿內使、從五位下紀朝臣小楯爲東海道使、從五位下石川朝臣豐成爲東山道使、從五位下藤原朝臣武良志爲北陸道使、從五位上大伴宿禰家持爲山陰道使、從五位下阿倍朝臣毛人爲山陽道使、從五位下多治比眞人木人爲南海道使、從四位上紀朝臣飯麻呂爲西海道使、道別錄事一人、

〔續日本紀二十一淳仁〕天平寶字二年正月戊寅、以從五位下石川朝臣豐成爲京畿內使、錄事一人、正六位下藤原朝臣淨弁爲東海東山道使、判官一人、錄事二人、正六位上紀朝臣廣純爲北陸道使、正六位上大伴宿禰潔足爲山陰道使、正六位上藤原朝臣倉下麻呂爲山陽道使、從六位下阿倍朝臣廣人爲南海道使、正六位上藤原朝臣楓麻呂爲西海道使、道別錄事一人、

〔續日本紀二十二淳仁〕天平寶字四年正月癸未、以文部少輔從五位下藤原朝臣楓麻呂爲東海道巡察使、二部少輔從五位下石川朝臣公成爲東山道使、河內少掾從六位上石上朝臣奧繼爲北陸道使、尾張介正六位上淡海眞人三船爲山陰道使、右少辨從五位下布勢朝臣人主爲山陽道使、典藥頭外從五位下馬史夷麻呂爲南海道使、武部少輔從五位下紀朝臣牛養爲西海道使、毎道錄事一人、觀察民俗、便卽按田、

〔續日本紀二十七稱德〕天平神護二年九月丙子、以從四位下阿倍朝臣毛人爲五畿內巡察使、從五位下紀朝臣廣名爲東海道使、正五位上淡海眞人三船爲東山道使、從五位上豐野眞人出雲爲北陸道使、從五位上安倍朝臣御縣爲山陰道使、正五位下藤原朝臣雄田麻呂爲山陽道使、從五位下高田朝臣家主爲南海道使、採訪百姓疾苦、判斷前後交替之訟、幷撿頃畝損得、其西海道者便令大宰府勘撿、

〔日本書紀二十九天武〕十四年九月戊午、直廣肆都努朝臣牛飼爲東海使者、直廣肆石川朝臣虫名爲東山使者、直廣肆佐味朝臣少麻呂爲山陽使者、直廣肆巨勢朝臣粟持爲山陰使者、直廣參路眞人跡見爲南海使者、直廣肆佐伯宿禰廣足爲筑紫使者、各判官一人、史一人、巡察國司郡司及百姓之消息、

〔扶桑略記五天武〕十五年八月、七道諸國遣巡察使、

〔日本書紀三十持統〕八年七月丙戌、遣巡察使於諸國、

〔續日本紀一文武〕三年三月壬午、遣巡察使于畿内、撿察非違、　十月戊申、遣巡察使于諸國、撿察非違、四年二月壬寅、遣巡察使于東山道、撿察非違、

〔續日本紀三文武〕大寶三年正月甲子、遣正六位下藤原朝臣房前于東海道、從六位上多治比眞人三宅麻呂于東山道、從七位上高向朝臣大足于北陸道、從七位下波多眞人余射于山陰道、正八位上穗積朝臣老于山陽道、從七位上小野朝臣馬養于南海道、正七位上大伴宿禰大沼田于西海道、道別錄事一人、巡省政績、申理寃枉、慶雲二年四月甲寅、遣使巡省天下諸國、

〔續日本紀四元明〕和銅二年九月己卯、遣從五位下藤原朝臣房前于東海東山二道、撿察關剗、巡省風俗、仍賜伊勢守正五位下大宅朝臣金弓、尾張守從四位下佐伯宿禰大麻呂、近江守從四位下多治比眞人水守、美濃守從五位上笠朝臣麻呂、當國田各一十町、穀二百斛、衣一襲、美其政績也、

〔續日本紀十聖武〕神龜四年二月甲子、是日遣使於七道諸國、巡監國司之治迹勤怠也、

〔續日本紀十三聖武〕天平十年十月己丑、遣巡察使於七道諸國、採訪國宰政迹、黎民勞逸、

〔續日本紀十四聖武〕天平十四年九月戊午、遣巡察使於七道諸國、

〔續日本紀十五聖武〕天平十六年九月甲戌、遣巡察使於畿内七道、以從四位下紀朝臣飯麻呂爲畿内使、正五位下石川朝臣年足爲東海道使、正五位上平群朝臣廣成爲東山道使、從五位下石川朝臣東人爲

位進賜治賜止波久勅、天皇我大命乎衆聞食止閉宣、

按行倉庫

〔令集解五職員〕倉庫令云、在京倉藏、並令彈正巡察、在外倉庫、巡察使出日、即令按行、

檢察闕刻
巡省風俗

〔續日本紀四元明〕和銅二年九月己卯、遣從五位下藤原朝臣房前于東海東山二道、檢察闕剋、巡省風俗、

〔續日本紀六元明〕靈龜元年五月辛巳朔、勅諸國朝集使曰、天下百姓、多背本貫、流宕他鄕、規避課役、其浮浪逗留、經三月以上者、即土斷輸調庸、隨當國法、又撫導百姓、勸課農桑、心存字育、能救飢寒、實是國郡之善政也、若有身在公庭、心顧私門、妨奪農業、侵蛑萬民、實是國家之大蠧也、〇中略今失職流散、此亦國郡司敎導無方、甚無謂也、有如此類、必加顯戮、自今以後、遣巡察使、分行天下、觀省風俗、宜勤敦德政、庶彼周行、

按勘器仗

〔續日本紀六元明〕靈龜元年五月甲午、詔曰、〇中略五兵之用、自古尙矣、服强懷柔、咸因武德、今六道諸國、營造器仗、不甚牢固、臨事何用、自今以後、每年貢樣、巡察使出日、細爲按勘焉、

勘檢隱田

〔續日本紀二十二淳仁〕天平寶字三年十二月丙申、武藏國隱沒田九百町、備中國二百町、便仰本道巡察使勘檢、自餘諸道巡察使檢田者、亦由此也、其使未至國界、而豫自首者免罪、

〔續日本紀二十三淳仁〕天平寶字四年十一月壬辰、勅先歲逆徒、家掛羅網、今年巡察、人畏憲章、〇中略其七道巡察使所勘出田者、宜仰所司、隨地多少、量加全輸、

賑恤患苦

〔續日本紀二十二淳仁〕天平寶字四年五月戊申、勅如聞、頃者疾疫流行、黎元飢苦、宜天下高年、鰥寡孤獨、廢疾及臥疫病者、量加賑恤、當道巡察使、與國司親問患苦賑給、若巡察使已過之處者、國守專當賑給、務從恩旨、

差遣例

〔日本書紀七景行〕二十五年七月壬午、遣武內宿禰、令察北陸及東方諸國之地形、且百姓之消息也、

〔日本書紀十應神〕九年四月、遣武內宿禰於筑紫、以監察百姓、

〔日本書紀十五清寧〕三年九月癸丑、遣臣連巡省風俗、

數、臨時量定、

〔令集解職員二〕朱云、巡察使者、未知其志何、答臨時若可遣此使者此官明預掌耳、○中略釋云、外官謂國司也、古記云、問巡察使者注、權於內外官、未知外官有限以不、答外官諸國司也、問若郡司大少毅等堪此任者若爲、答郡主政以下及大少毅等不可取、但少領以上臨時量耳、穴云、內外官、謂迄郡司用也、案本令知耳、問散官何、答擢才委任、然則合取用職事中、間家令爲內官哉、答令通例不同諸司也、案公式令上下之條知耳、又有准諸司考法立考耳、○中略讃云、公式令云、在京諸司爲京官、自餘皆爲外官者、案之內文武官并國司等是、若無其人者、臨時簡取散位家令及郡司耳、但擢才授職、故擧官人耳、

〔續日本紀聖武十五〕天平十六年九月乙酉、勅八道巡察使等曰、是行使等、撿問事條國郡官司依實報答者、縱當死罪咸原勿論、若有經問不臣、被使勘權、○權諸本作複、恐衍誤、者、事雖細小、依法不容、使宜懇勤告示、一事以上、准勅施行、　丙戌、勅頒三十二條於巡察使、事具別勅、因勅曰、凡頃聞諸國郡官人等、不行法令、空置卷中、無畏憲章、擅求利潤、公民歲弊、私門日增、朕之股肱、豈合如此、自今以後、宜依頒條、每四考終、必加訪察奏聞、即隨善惡黜陟其人、遂令涇渭殊流賢愚得所、若有巡察使諂曲爲心、昇降失理、當寘法律以明勸沮、無偏無黨、清風肅俗、拔自常班、處以榮秩、宜告所司知朕意焉、又口勅十三條、具在別勅、又勅曰、爲撿天下諸國政績治不、今差巡察使、分道發遣、但比年以來、所任使人、訪察不精、黜陟有濫、吏民由是未肅、風化所以尚擁、故今具定事條、仰令巡撿、唯恐官人不練明科、多犯罪愆、遺陷法網、仍垂非常之恩、特開自新之路、其國郡官司雖犯謀反大逆常赦所不免、咸悉除免、一切勿論、但情懷奸僞、不肯吐實、使人存意、再三喩示、若是固執猶不首伏者、依法科罪、普天率土、宜知朕懷焉、又口勅五條、語具別記、

〔類聚國史職官九十九〕天長四年正月癸未、制曰、天皇我詔旨止良末勅大命乎衆聞食止閉宜、仕奉人等中爾、其仕奉狀乃隨爾治賜人毛在、又巡察使乃撿氏奏賜人毛在、御意乃愛盛爾治賜人毛一二在、故是以冠

天長五年八月九日

○按ズルニ、文德實錄仁壽二年二月丙辰、和氣仲世ノ傳ニ、天長元年、爲北陸道巡察使トアリ、又續日本後紀承和十三年八月辛巳、藤原吉野ノ傳ニ、天長三年爲畿內巡察使トアルハ、此詔ニ不遣巡察使、時世久矣ト云ヘルト合ハズ、其人ニ命ズルノミニテ、其地ニ赴カザリシカ、

〔類聚國史百五十九田地〕天長七年三月乙酉、巡察使出攝津國乘稻二萬八千三百束、充開河邊郡勅旨田料、

〔日本書紀二十九天武〕十四年九月戊午、直廣肆都努朝臣牛飼爲東海使者、○中略各判官一人、史一人、巡察國司郡司及百姓之消息、

○按ズルニ、巡察使ノ稱、以後復所見ナシ、

〔續日本紀三文武〕大寶三年正月甲子、遣正六位下藤原朝臣房前于東海道、○中略道別錄事一人、巡省政績、申理冤枉、

〔續日本紀十五聖武〕天平十六年九月甲戌、遣巡察使於畿內七道、○中略從四位上石上朝臣乙麻呂爲西海道使、外從五位下大養德宿禰小東人爲次官、道別判官一人、主典一人、

〔續日本紀十九孝謙〕天平勝寶六年十一月辛酉朔、任巡察使、以從四位上池田王爲畿內使、○中略道別錄事一人、

〔續日本紀二十孝謙〕天平寶字二年正月戊寅、詔曰、○中略今者三陽既建、萬物初萌、和景惟新、人宜納慶、是以引使八道巡問民苦、務恤貧病、矜救飢寒、○中略所司宜知、差清平使、勉加賑恤、稱朕意焉、以從五位下石川朝臣豐成爲京畿內使、錄事一人、正六位下藤原朝臣淨辨爲東海東山道使、判官一人、錄事二人、

〔令義解一職員〕太政官

巡察使掌巡察諸國、不常置、應須巡察、權於內外官取清正灼然者充、謂、郡司軍毅等、不在此限也、巡察事條、及使人

廣參路跡見南海使者、直廣肆佐伯廣足筑紫使者、各判官一人、史一人、然當時未有巡察使之號、持統帝八年七月、遣巡察使於諸國、巡察建官號、蓋自此始也、

〔續日本紀元明五〕和銅五年五月乙酉、詔諸司主典以上、幷諸國朝集使等曰、〇中略自今以後、每年遣巡察使、撿挍國內豐儉得失、宜使者至日、意存公平、直告莫隱、若有經問發覺者、科斷如前、凡國司、每年實錄官人等功過行能幷景迹、皆附考狀申送式部省、省宜勘會巡察所見、

〔續日本紀淳仁二十一〕天平寶字二年十月甲子、勅、〇中略頃年國司交替、皆以四年爲限、斯則適足勞民、未可以化、〇中略自今以後、宜以六歲爲限、省送故迎新之費、其每至三年、遣巡察使、推撿政迹、慰問民憂、待滿兩廻、隨狀黜陟、

〔日本紀略桓武〕延曆十四年八月甲午、停遣巡察使、

〔類聚三代格七〕太政官符〇中略

一遣巡察使事

右同前〇右大臣藤原冬嗣奏狀偁、古者分遣八使、巡行風俗、考牧宰之治否、問人民之疾苦、所以宣風展義、舉善彈違也、伏望量遣件使、考其治否者、依奏、〇中略

以前意見奏狀、依今月八日詔書頒下如件、

天長元年八月廿日〇又見本朝文粹二

〔享祿本類聚三代格十七〕太政官符

應免國郡司勘發犯罪人之罪事

右得刑部省解偁、去正月廿七日詔書偁、不遣巡察使時世久矣、國郡司等怠緩、入罪者衆、泣辜之仁、特從矜免者、夫宣導之吏、猶被恩免、所攝之民、何不赦除、〇中略大納言正三位兼行右近衞大將良岑朝臣安世宣、奉勅同從矜免、

古事類苑

官位部二十六

令制官職二十二

巡察使

巡察使ハ、諸國ヲ巡察シテ國郡司ノ治否ヲ考ヘ、人民ノ疾苦ヲ問フコトヲ掌ルモノニシテ、内外官ノ清正著聞ナル者ヲ選ビテ、臨時ニ之ヲ任ズ、而シテ其巡察ノ事條、及ビ使者ノ員數等モ、亦臨時ニ之ヲ量定ス、

上代已ニ臣連等ヲ諸國ニ分遣シテ、百姓ノ消息ヲ巡察シ、風俗ヲ観省セシメシ事アリシガ、持統天皇八年ノ紀ニ、初メテ巡察使ノ號見エタリ、而シテ大寶令制定ノ時、太政官ノ下ニ巡察使ノ名見エタレドモ、未ダ期ヲ定メテ差遣スルガ如キコトハナカリシナリ、元明天皇ノ和銅五年ニ、毎年差遣ノ制ヲ立テ、淳仁天皇ノ天平寶字二年ニ、三年一遣ノ法ヲ定メタリシガ、桓武天皇ノ延暦十四年ニ至リ、一旦差遣ノ事ヲ停メ、淳和天皇ノ天長元年ニ、再ビ本使ヲ設ケシカド、以後幾クナラズシテ、復廢絶シタルモノヽ如シ、

名稱

〔釋日本紀 二十二 秘訓〕巡察使

〔伊呂波字類抄 官職志〕巡察使 大小

沿革

〔日本書紀 三十 持統〕八年七月丙戌、遣巡察使於諸國、

〔職官志 一〕太政官

天武帝十四年九月、以直廣肆都奴牛飼爲東海使者、伏見少麻呂山陽使者、巨勢粟持山陰使者、直

直任、至于軍□□團□常苦粮食、望請□□□□□□□□□□人粮准大宰府統領、以正税被充給、謹請官裁者、正三位行中納言兼民部卿藤原朝臣多緒宜、奉勅宜正任□□□依請、

元慶□□□□□

〔延喜式二十一治部〕凡陸奥出羽鎮守府史生、傔仗、博士、醫師、陰陽、弩師〇中略等賻物、並以當國物給之、

供給

大臣宣、偁、奉勅依請、其按察使准此給十人、

大同五年五月十一日

〔續日本紀九元正〕養老六年閏四月乙丑、太政官奏曰、〇中略望請陸奥按察使管內百姓、庸調浸免、勸課農桑、敎習射騎、〇中略又言、用兵之要、衣食爲本、鎭無儲粮、何堪固守、募民出穀、運輸鎭所、程道遠近、爲差委輸、以遠二千斛、次三千斛、近四千斛、授外從五位下、奏可之、

神龜元年二月壬子、從七位下大伴直南淵麻呂〇中略等、獻私穀於陸奥國鎭所、並授外從五位下、四月癸卯、敎坂東九國軍三万人、敎習騎射、試練軍陳、運綵帛二百疋、絁一千疋、綿六千屯、布一万端於陸奥鎭所、

〔延喜式二十六主税〕凡鑄錢司、鎭守府官人已下、到任之日、准國司給四分之一借貸、

〔類聚三代格十二〕勅、如聞比年坂東八國、運穀鎭所、而將吏等以稻相換、其穀代者、輕物送京、苟得無恥、又濫役鎭兵、多營私田、因茲鎭兵疲弊、不任干戈、稽之憲典、深合罪罰、而會恩蕩、且從寬宥、自今以後、不得更然、如有違犯、以違法罪之、宜加捉搦勿令侵漁之徒肆其濫濁、

延暦二年四月十五日〇又見續日本紀

〔日本紀略桓武〕延暦廿一年正月庚午、越後國米一萬六百斛、佐渡國鹽一百廿斛、每年運送出羽國雄勝城、爲鎭兵粮、

〔日本後紀二十二嵯峨〕弘仁三年七月癸酉、陸奥國言、屯田元二百町、伏望定一百町、爲鎭守儲者、許之、

〔享祿本類聚三代格十八〕太政官符

應給七團軍毅主帳卌五人粮米事

國府廿人　鎭守府十五人

右得陸奥國解偁、件軍毅等、不顧私業、晝夜勤戍、邊要之備、實在伊人、方今健士兵士等、全食官粮、結番

之足也、安民足用、強兵威敵、臣等管見、不敢不奏、〇中略以前奉勅、陸奧國司奏狀如前、具任所請、遙勤兵權不可簡略、

弘仁六年八月廿三日

〔續日本後紀十三仁明〕承和十年四月壬戌、陸奧鎭守將軍從五位下御春朝臣濱主言、健士元勳位人也、既脫調庸、亦无課役、承前之將、擇其武藝、特號健士、給粮免租、結番直戍、而勳位悉盡、無人充行、仍任格旨、差行白丁、全給公粮、兼免調庸、人同役異也、請射下〇射下恐誤字健士、准兵士下兵、同令役修理城隍、許之、

傔仗

〔伊呂波字類抄官職計〕傔仗弘仁格云、延暦十七年六月廿八日、定置二人、按察使賜十人、鎭守將軍賜三人、出羽守賜二人、天長五年四月十日

〔書言字考節用集官位三〕傔仗ケンヂヤウ將軍判授之官

〔類聚三代格五〕太政官符

加減傔仗員事

陸奧出羽按察使四人元三人、今加一人、　鎭守將軍三人減一人定二人

右被右大臣宣偁、奉勅傔仗之數、依件加減、

弘仁三年四月七日

〇按ズルニ、傔仗ノコトハ封祿部ニ詳ナリ、

護身

〔享祿本類聚三代格十八〕太政官符

一應給鎭官護身事二箇條內初條

右得東山道觀察使正四位下兼行陸奧出羽按察使藤原朝臣緒繼解偁、天平五年十一月十四日勅符偁、給國司以下軍毅以上護身兵士、守八人、介六人、掾五人、目三人、但遣鎭奧塞者、守十人、介八人、掾七人、目五人、史生傔仗各三人、大小毅各三人者、今撿此符、不預鎭官、請□□之將□□□之□者、被右

〔日本後紀桓武十二〕延暦廿四年二月乙巳、相模國言、頃年差鎭兵三百五十人、戍陸奥、出羽兩國、而今徭丁乏少、勳位多數、伏請中分鎭兵、一分差勳位、一分差白丁、許之、

〔日本後紀嵯峨二十二〕弘仁二年七月乙未、出羽國鎭兵賜復三年、以在邊戍家業絶亡也、　閏十二月辛丑、征夷將軍參議從三位行大藏卿兼陸奥出羽按察使文室朝臣綿麻呂奏言、今官軍一擧、寇賊無遺、事須悉廢鎭兵、永安百姓、而城柵等所納器仗軍粮、其數不少、迄于遷納、不可廢衞、伏望置一千人、充其守衞、其志波城近于河濱、屢被水害、須去其處、遷立便地、伏望置二千人、暫充守衞、遷其城訖、則留千人、永爲鎭戍、自餘悉從解却、又兵士之設、爲備非常、既無遺寇、何置兵士、但邊國之守、不可卒停、伏望置二千人、其餘解却、又自寶龜五年至于當年、總卅八歳、邊寇屢動、警□無絶、丁壯老弱或疲於征戍、或倦於轉運、百姓窮弊、未得休息、伏望給復四年、殊休疲弊、其鎭兵者、以次差點、輪轉復免者、並許之、

〔享祿本類聚三代格十八〕太政官符○中略

一停止鎭兵事

合壹仟人　膽澤城五百人　德丹城五百人

右得管諸郡司解偁、百姓苦役、無過鎭兵、當戍之年、妻子共赴、絶隣在遠、無所乞貸、身迫公役、不遑耕作、盡賣衣物、僅資妻子、歸鄕之日、裸身露頂、道程僻遠、復無路粮、望其舊居、應无所處、因斯規留奥地、長絶歸情、山川迂遠、無由撿括、奥地米宛、○米宛疑未充誤熟郡先竭、職此之由、若停鎭兵、加兵士、民無弊苦、兵得強練者、臣等議量、良有道理、何者、番上之役、兵士六十日、調庸半輸、以旬相替、無妨家業、健士九十日、各食公粮、夫婦免租、課役全脱、兼預考例、一日爲番、無長戍之憂、此民之安也、今見定課丁三万三千二百九十人、勳七等以下五千六十四人、就中簡點丁壯家業稍可者、令馬兵倶備、□□□□□□□□□□□兵士、勸彼鎭兵、論其強弱、猶婦女與丈夫、此兵之強也、前番後更、往來相代之間、兵常一倍、隊伍既定、戎具復備、縱有機急、應聲可致、此兵之威也、今停鎭兵、徵兵士、相折用度、年中所剩、四千一百餘束、此用

〔續日本紀九聖武〕神龜元年二月乙卯、陸奧國鎭守軍卒等、願除己本籍便貫比部卒、父母妻子共同生業、許之、

〔續日本紀十聖武〕天平元年八月癸亥、天皇御大極殿、詔曰、○中略改神龜六年爲天平元年、而大赦天下、○中略陸奧鎭守兵、及三關兵士、簡定三等、具錄進退如法、臨敵振威、向冑萬死不顧一生之狀、幷姓名年紀居貫、軍役之年便差專使上奏、　九月辛丑、陸奧鎭守將軍從四位下大野朝臣東人等言、在鎭兵人勤功可錄、請授官位勸其後人、勅宜一列三十人各進二級、二列七十四人各一級、三列九十六人各給常布、

〔續日本紀二十九稱德〕神護景雲二年九月壬辰、陸奧國言、兵士之設、機要是待、對敵臨難不惜生命、習戰奮勇、必爭先鋒、而比年諸國發入鎭兵、路間逃亡、子之士○子之士三字恐誤又當國舂運年粮料稻卅六万餘束、徒費官物、彌致民困、今撿舊例、前守從三位百濟王敬福之時、停止他國鎭兵、點加當國兵士、望請依此舊例、點加兵士四千人、以停他國鎭兵二千五百人、○中略許之、　三年正月己亥、陸奧國言、他國鎭兵、今見在戍者三千餘人、就中二千五百人、被官符解却已訖、其所遺五百餘人、伏乞暫留鎭所、以守諸塞、又被天平寶字三年符、差浮浪一千人、以配桃生柵戶、本是情抱規避、萍漂蓬轉、至城下復逃亡、如國司所見者、募比國三丁已上戶二百烟、安置城郭、永爲邊戍、其安堵以後、稍省鎭兵、官議奏曰、夫懷土重遷俗人常情、今徙無罪之民、配邊城之戍、則物情不穩、逃亡無已、若有進趣之人、自願就二城之沃壤、求三農之利益、伏乞不論當國他國、任便安置、法外給復、令人樂遷以爲邊守、奏可、

〔續日本紀三十三光仁〕寶龜五年七月壬戌、陸奧國言、海道蝦夷、忽發徒衆、焚橋塞道、旣絕往來、侵桃生城、敗其西郭、鎭守之兵、勢不能支、國司量事、興軍討之、但未知其相戰、而所殺傷、○此下恐有脫文　六年十月癸酉、出羽國言、蝦夷餘燼、猶未平殄、三年之間、請鎭兵九百九十六人、且鎭要害、且遷國府、勅差相模、武藏、上野、下野四國兵士發遣、

異向國令占往還十日、僅決吉凶、若有機急、何知物變、請被言上、將置件職者、國加覆覈、事誠可然、望請始置其員、令備占決、謹請官裁者、大納言正三位兼行民部卿藤原朝臣冬緒宣、奉勅依請、

元慶六年九月廿九日

醫師

〔延喜式兵部二十八〕凡鎭守府陰陽師醫師、侍被道博士及侍醫等擧狀補之、

〔日本後紀十七平城〕大同三年七月丙申、勅、陸奥鎭守官人遷代之期、未有年限、宜自今以後一同國司、其醫師以八考爲限、

〔類聚三代格五〕太政官符

應鎭守府醫師秩六年爲限事

右先例以五年爲限、今被右大臣宣偁、奉勅宜改彼例六年爲限、

貞觀八年十二月五日 〇又見三代實錄一三

弩師

〔類聚三代格五〕太政官符

應補鎭守府弩師事

右撿案內、件弩師、寶龜以來式部補任、始自大同二省互補、今被中納言兼左近衞大將從三位行民部卿淸原眞人夏野宣偁、奉勅、文武之職、執掌各異、鎭守之官、須兵部補、

天長五年正月廿三日

〔延喜交替式〕凡鎭守府官人弩師等任限、一同國司、

府掌

〔續日本後紀十三仁明〕承和十年九月甲辰、始置陸奥國鎭守府掌一員、令帶刀把笏也、

〔三代實錄十六淸和〕貞觀十一年二月廿日戊申、勅賜鎭守府府掌二人職田各二町、〇又見類聚三代格十五

〔延喜式民部二十二〕凡陸奥鎭守、大宰等府、府掌各二人、每人給職田二町、

鎭兵

〔延喜式兵部二十八〕凡鎭兵、陸奥國五百人、出羽國六百五十人、

直爲名、而請院宣、北朝亦知尊氏之爲師直見過、而實惡其跋扈、故從直冬所請賜院宣也、而太平記以爲賜直義之院宣、恐誤也、然此說無實錄明文、且園太曆不載院宣、然今考園太曆前後所載之意、及院宣之文義、以理推之、以事察之、必然之勢當如此耳、讀者察焉、

〔慶長年錄〕慶長十六年三月六日、大御所樣（〇德川家康）御上洛、駿府を御出、同十七日、御入洛、同廿二日、大御所樣御所望にて、當家之御元祖新田義重贈官あり、（鎮守府將軍）廣忠公に贈官、（權大納言）

軍監

〔下學集（上官位）〕軍監（グンケン將軍亞相）

〔續日本紀（二十淳仁）〕天平寶字四年正月丙寅、鎮守軍監正六位上葛井連立足、（〇中略）授外從五位下、鎮守軍監從六位上大伴宿禰益立、（〇中略）進三階、

軍曹

〔續日本紀（二十二淳仁）〕天平寶字四年正月丙寅、鎮守軍曹從八位上韓袁哲、（〇中略）進三階、

〔除目大成抄（八）〕雜々

昌泰三京　鎮守府軍曹從七位上物部宿禰黑繼（左近番長勞）　時平

〔類聚符宣抄（七）〕攝津國司解　申重請官裁事

請被以前鎮守府軍曹正六位上津守宿禰茂連補任管住吉郡大領死闕狀

右件茂連、越次被補件貫茂死闕之狀、言上早了、（〇中略）重望請官裁以件茂連、越次被補任件郡大領職、將令勤郡務、仍錄事狀、謹請官裁、謹解、

天德三年四月五日　從七位上行六人部宿禰是輿

守從五位下藤原朝臣安親

陰陽師

〔類聚三代格（五）〕太政官符

應置鎮守府陰陽師事

右得陸奧國解偁、鎮守府牒偁、軍團之用、卜筮尤要、漏剋之調、亦在其人、而自昔此府無陰陽師、每有征

ル、

〔太平記二十八〕自持明院殿被成院宣事

左兵衛督入道慧源〈足利直義〉ハ、師直ガ西國ヘ下ラントシケル比ヲヒ、潛ニ殺シ可奉企有ト聞ヘンカバ、爲遁其死、忍テ先大和國ヘ落テ、越智伊賀守ヲ憑マレタリケレバ、近邊ノ郷民共同心ニ合力シテ、路々ヲ切塞ギ、四方ニ關ヲ居テ、誠ニ嚴ナゲニゾ見ヘタリケル、〈中略〉何樣天氣ナラデハ私ノ本意ヲ難遂トテ、先京都ヘ人ヲ上セ院宣ヲ伺申サレケレバ、無子細軈テ被宣下、剰不望鎮守府將軍ニ被補、其詞云、

被院宣偁、斑鳩宮〈聖徳太子〉之誅守屋、朱雀院之發將門、是豈非捨惡持善之聖猷哉、爰退治凶徒、欲息父叔兩將之鬱念、叡感甚不少、仍補鎮守府將軍、被任左兵衛督畢、早率九國二島幷五畿七道之軍勢、企上洛、可令守護天下者、依院宣執達如件、

觀應元年十月二十五日　　權中納言國俊奉

足利左兵衛督殿

〔參考太平記二十八〕按院宣文、非賜直義者、蓋賜直冬院宣也、文中云、欲息父叔兩將之鬱念、所謂父叔者、言尊氏直義、且此時、直義既無父叔、然則賜直冬者明矣、又云、任左兵衛督云云、直義既在北朝爲左兵衛督、今不可任同官、今考園太暦曰、尊氏進發西國之時、直義出奔、師直欲搜求直義而後發京、而尊氏不許、人皆疑焉云云、又云、直義更無別心、只師直師泰奇怪之憤許也、且可召賜兩人之旨、去年約諾事、可爲何樣哉之由、自大和書狀遣將軍云云、因以事勢推考之、直義欲誅師直之時、先遣妙吉侍者赴中國、〈出園太暦〉使直冬發兵討師直、既而直義反爲師直所制、罷職就第、師直亦命中國人、欲殺直冬、於是直冬赴九州發兵、因之尊氏師直將西征之、〈出太平記〉至是直義潛逃至大和、欲與直冬共討師直、尊氏心雖同直義、而爲權臣師直所挾、故外從師直、而實無討直義直冬之心、由此直冬以討師

伽藍寄附佛性灯油矣、基衡者、果福耕父、管領兩國、又三十三年也、復夭亡、秀衡得父讓、繼絶興廢、蒙將軍宣旨以降、官祿越父祖、榮耀及子弟、亦送三十三年卒去、已上三代九十九年之間、所造立之堂塔、不知幾千萬宇云云、

〔吾妻鏡 九〕文治五年九月七日甲子、宇佐美平次實政生虜泰衡郞從由利八郞、相具參上陣岡、而天野右馬允則景生虜之由相論之、二品○源賴朝仰行政、先被注置兩人馬幷甲毛等之後、可尋問實否於四人之旨、被仰景時、者白直垂折烏帽子紫革烏帽子懸、立向由利云、汝者泰衡郞從中號者也、眞僞强不可構餝歟、任實正可言上也、著何色甲者生虜汝哉云云、由利忿怒云、汝者兵衞佐殿○賴朝家人歟、今口狀過分之至、無物取喩、故御館者、爲秀鄕將軍嫡流之正統、已上三代汲鎭守府將軍之號、汝主人猶不可發如此之詞、矧亦汝與吾對揚之處、何有勝劣哉、○下略

〔尊卑分脈 平四〕知盛鎭守府將軍征夷大將軍

〔公卿補任 後醍醐〕元弘四年甲戌○建武元年

非參議從三位源尊氏左兵衞督、鎭守府將軍、武藏守、正月五日敍正三位、九月十四日任參議、

建武二年乙亥

參議從二位源顯家右中將、陸奧權守、十一月十二日爲鎭守府將軍、

〔神皇正統記 後醍醐〕次の年○延元元年丙子の春正月十日、官軍又敗れて、高氏すでにちかづく、○中略かかりし間に、陸奧守鎭守府將軍顯家卿此みだれを聞て、親王○後村上をさきにたて奉り、陸奧出羽の軍兵を率して責上る、

〔太平記 十九〕奧州國司顯家卿上洛幷新田德壽丸上洛事

奧州ノ國司北畠源中納言顯家卿、去元弘三年正月ニ園城寺合戰ノ時上洛セラレテ、義貞ニ力ヲ加ヘ、尊氏卿ヲ西海ニ漂ハセシ無雙ノ大功也トテ、鎭守府ノ將軍ニ成レテ、又奧州ヘゾ下サレケ

請殊蒙天恩依征夷功被下重任宣旨與復任國勤斷公事狀
右頼義謹檢案内、〇中略爰奥州之中、東夷蜂起、領郡縣以爲胡地、驅人民以爲蠻虜、數十年之間、六箇郡之内、不從國務、如忘皇威、就中近古以來、暴惡爲宗、仍去永承六年、忽以頼義爲令征罰被任彼國、天喜元年、兼鎮守府將軍、頼義御鳳凰之詔、向虎狼俗、〇下略

〔梅松論 上〕七十二代白河院御宇、永保年中に、陸奥守兼鎮守府將軍源義家を以、清原武衡、家衡を誅せらる、

〔古事談 四勇士〕白河院御時、後藤内則明、老衰ノ後召出テ、合戰ノ物語セサセラレケルニ、先申云、故義家朝臣、鎮守府ヲ立テ、秋田ノ城ニ付侍之時、薄雪ノ降侍リシニ、軍ノ男共ト申之間、法皇被仰云、今ハサヤウニテ候ヘ、事ノ體甚幽玄也、殘ル事共、可定此一言トテ賜御衣ト云々、

〔尊卑分脈 源〕頼義 鎮守府將軍、小一條院判官代、相模、陸奥、出羽、伊與等守、
義家 鎮守府將軍、出羽、陸奥、下野、伊與權守、

〔陸奥話記〕康平六年二月十六日、獻貞任、重任、經清首三級、〇中略同廿五日、除目之間、賞勳功、〇中略武則〇清原爲從五位下鎮守府將軍、

〔奥州後三年記 上〕永保のころ、奥六郡がうちに、清原眞衡といふものあり、荒河太郎武貞が子、鎮守府將軍武則が孫なり、

〔除目大成抄 八〕賞
康平六 鎮守府將軍從五位上清原眞人武則 討俘囚賞

〔玉海〕嘉應二年五月廿七日丙申、奥夷狄秀平任鎮守府將軍、亂世之基也、

〔吾妻鏡 九〕文治五年九月廿三日庚辰、於平泉巡禮秀衡建立無量光院給、〇源頼朝是摸宇治平等院地形之所也、豐前介爲案内者候御供、申云、清衡繼父武貞 號荒河太郎、鎮守府將軍武則子、卒去後、傳領奥六郡、伊澤、和賀、江刺、稗拔、志波、岩手、去康保年中、移江刺郡豐田館於岩井郡平泉、爲宿館、歷卅三年卒、而兩國 陸奥出羽有一萬餘之村、建

良兼―公雅―致頼―致經―忠通（鎮守府將軍、號村岡小五郎、）

良孫（鎮守府將軍）

良文（鎮守府將軍、從五位、村岡五郎、）

〔尊卑分脈　源一〕經基王（天德五六十五、始而賜源朝臣姓、號六孫王、依爲第六親王子也、鎮守將軍、武藏、筑前、信濃、但馬、伊與等守、）

滿仲（鎮守府將軍、（中略）依住攝津國多田郡、號多田、建立多田院、）

○按ズルニ、同書第四卷ニハ、經基王ヲ鎮西將軍ニ作リ、滿仲ノ弟滿政ヲ鎮守府將軍ト書セリ、

〔類聚符宣抄　八〕太政官符陸奥國司幷鎮守府（内印）

從五位□藤原朝臣文條

右今月三日、任彼府將軍畢、國府承知、至卽任用、符到奉行、

左中辨　　左大史

永延二年十月五日

〔小右記〕長和三年二月七日癸亥、（將軍維良貢物於左府事）今日將軍維良自奥州參上、所貢左府（○藤原道長）之物、馬廿疋、（十二疋貢國解、今八疋不載國解、今二疋貢家子達、）胡簶、鷲羽、沙金、絹綿布等、其數尤多、爲預將軍任符隨身數万物詣道府、道路成市、見之巨万云々、件維良初蒙追捕官符、不經幾關來爵、又任將軍、財貨之力也、外口猥戾貪彌濫貯財寶、令買官爵之計歟、悲代也々々々、

〔陸奥話記〕六箇郡之司有安倍頼良者、（○中略）橫行六郡、劫略人民、（○中略）於是朝廷有議、擇追討將軍、衆議所歸獨在源朝臣頼義、（○中略）忽應朝選、專征伐將帥之任、拜爲陸奥守兼鎮守府將軍、令討頼良、天下素知才能、服其採擇、入境著任之初、俄有天下大赦、頼良大喜、改名稱頼時、（同太守名、有禁之故也、）委身歸服、境內兩清、一任無事、任終之年、爲行府務、入鎮守府、（○下略）

〔本朝續文粹　六奏狀〕正四位下行伊豫守源朝臣頼義誠惶誠恐謹言

鞍馬寺緣起云、利仁、爲鎮守府將軍、智勇口偉足將帥、突厥之類、莫不歸服、爰下野國高藏國〇國恐山誤群盜蟻聚千人結黨、藏峯藏安爲其前鋒、自關東貢朝之調庸雜物、爲彼黨類常被抄掠、國之蠹害、唯以在之、因茲公家被忽撰其人、天下所推、偏在利仁、可討罰異類之由被綸綸、〇下略

〔將門記〕抄本首存此數十字夫聞、彼將門者、天國押撥御宇柏原天皇〇桓武五代之苗裔、三世高望王之孫也、其父陸奥鎮守府將軍平朝臣良持也、

〔梅松論上〕先達て諸軍勢をば向られしかども、御遠慮有けん、小山、結城、長沼が一族をばおしみ止らる、此輩は治承のいにしへ、賴朝、義兵のとき、最前に馳參して忠節を致したりし小山下野大掾藤原政光入道の子供の連枝の人の子孫也、遠祖武藏守兼鎮守府將軍秀郷朝臣、承平に朝敵平將門を討取て、子々孫々鎮守府將軍の職を蒙りし五代將軍の後胤なり、

〔尊卑分脈藤原十〕秀郷從四下、武藏守、鎮守府將軍、爲貞盛朝臣副將軍、非鎮守府將軍、此儀非說也、不見將軍補任、世人號後藤太、

├千時鎮守府將軍
├千常從五下、鎮守府將軍、
│　├千方鎮守府將軍
│　└公脩鎮守府將軍

〔今昔物語二十五〕平將門發謀反被誅語第一
今昔、朱雀院ノ御時ニ、東國ニ平將門ト云兵有ケリ、此レハ柏原ノ天皇〇桓武ノ御孫ニ、高望親王ト申ケル人ノ子ニ、鎮守府ノ將軍良持ト云ケル人ノ子也、

〔神皇正統記後醍醐〕中古と成て、平の將門を追討の賞にて、〇中略平の貞盛正五位下に敍し、鎮守府將軍に任ず、

〔尊卑分脈平四〕高見王──高望王上總介、從五下、始而賜平姓、
├良望從五下、陸奥守、鎮守府將軍、
│　├貞盛從四下、陸奥守、鎮守府將軍、
│　└繁盛鎮守府將軍──維茂出羽介、鎮守府將軍、號余五將軍、
└良將從五下鎮守府將軍

〔公卿補任桓武〕延暦廿四年乙酉
參議從三位坂上田村麿　十五年〔延暦〇〕正月廿五日、任陸奥出羽按察使兼陸奥守、十月甲辰、兼鎮守府將軍、

〔梅松論上〕五十代桓武天皇、中納言兼鎮守府將軍坂上田村丸を遣して、奥州の夷赤髪以下の凶賊を平げらる、

〔日本後紀十七平城〕大同三年五月己酉、從五位下坂上大宿禰大野爲陸奥鎮守副將軍、　六月庚申、鎮守將軍從五位下百濟王敎俊爲兼陸奥介、〇中略外從五位下道島宿禰御楯爲陸奥鎮守副將軍、　七月甲申、勅、夫鎮將之任、寄功邊戌、不虞之護、不可暫闕、今聞鎮守將軍從五位下兼陸奥介百濟王敎俊、遠離鎮所、常在國府、儻有非常、何濟機要、邊將之道、豈合如此、自今以後、莫令更然、

〔日本後紀二十一嵯峨〕弘仁二年三月甲寅、勅、〇中略鎮守將軍從五位下佐伯宿禰耳麻呂、副將軍外從五位下物部匝瑳連足繼等曰、去二月五日奏偁、請發陸奥出羽兩國兵合二万六千人、征爾薩體幣伊二村者、依數差發、早致襲討、事期殄滅、不得勞軍以遺後煩、

〔日本後紀二十二嵯峨〕弘仁三年二月己亥、外從五位上物部匝瑳連足繼爲鎮守將軍、

〔三代實錄二淸和〕貞觀元年正月十六日癸酉、從五位下行陸奥介坂上大宿禰當道爲鎮守府將軍、

〔三代實錄三十三陽成〕元慶二年三月廿九日乙丑晦、出羽國守正五位下藤原朝臣興世飛驛上奏、夷俘叛亂、　六月八日壬申、散位從五位下小野朝臣春風爲鎮守將軍、詔令春風與陸奥權介從五位下坂上大宿禰好蔭、星火進發、先入陸奥、各將精兵五百人奔赴救之、賜春風好蔭甲冑各一具、　九日癸酉、勅曰、從五位下小野朝臣春風、今月八日任陸奥鎮守將軍訖、事須依格分付受領、而率將軍兵向出羽國、宜令前將軍從五位下安倍朝臣比高准見任例暫行府政、

〔尊卑分脈九藤原〕時長〔鎮守府將軍民部少輔〕――利仁〔武藏等守、從五上、越前、能登、加賀、鎮守府將軍、〕――有象〔下野守、鎮守府將軍、號中將軍、〕

す、後弘仁に至りて、鎮守府の官員を定められし時將軍一員になされたれば、その後はさらに權官をおかるゝことは廢絶せしなり、

〔續日本紀光仁三十六〕寶龜十一年三月甲午、以從五位下大伴宿禰眞綱爲陸奥鎮守副將軍、　六月辛丑、從五位上百濟王俊哲爲陸奥鎮守副將軍、

〔續日本紀光仁三十六〕天應元年十二月乙酉朔、陸奥守正五位上内藏忌寸全成爲兼鎮守副將軍、

○按ズルニ、職原抄ニ副將軍二人トアリ、恐クハ此文ニ據リシナラン、

〔續日本紀桓武三十七〕延曆元年六月戊辰、春宮大夫從三位大伴宿禰家持爲兼陸奥按察使鎮守將軍、外從五位下入間宿禰廣成爲介、外從五位下安倍猨島臣墨繩爲權副將軍、

〔續日本紀桓武三十八〕延曆四年二月丁丑、從五位上多治比眞人宇美爲陸奥按察使兼鎮守副將軍、國守如故、　五月甲寅、從五位下百濟王英孫爲陸奥鎮守權副將軍、

〔續日本紀桓武三十九〕延曆六年二月庚申、陸奥介從五位下佐伯宿禰葛城爲兼鎮守副將軍、　庚辰、從五位下池田朝臣眞枚爲鎮守副將軍、　閏五月丁巳、陸奥鎮守將軍正五位上百濟王俊哲、坐事左降日向權介、　七年二月丙午、陸奥按察使守正五位下多治比眞人宇美爲兼鎮守將軍、外從五位下安倍猨島臣墨繩爲副將軍、

〔續日本紀桓武四十〕延曆十年二月辛亥、陸奥介從五位下文室眞人大原爲兼鎮守副將軍、

〔職官志五〕鎮守府

副將軍二人、載於職原鈔、然猶謂中古以來不任之、考之史、寶龜四年、陸奥按察使大伴駿河麻呂兼鎮守將軍、厥明年、令河内守紀廣純兼鎮守副將軍、副將軍昉於此時、○中略十年○延曆陸奥介文室大原兼副將軍、爾後不復任、故元弘三年格乃省之、

〔日本後紀桓武五〕延曆十五年十月甲申、近衛少將從四位下坂上大宿禰田村麻呂爲兼鎮守將軍、

〔續日本紀 三十稱德〕寶龜元年九月乙亥、正四位下坂上大忌寸苅田麻呂爲陸奥鎭守將軍、

〔公卿補任 桓武〕延曆四年乙丑

非參議從三位坂上忌寸苅田麻呂

寶龜初、加正四位下、出爲陸奥鎭守府將軍、

〔梅松論 上〕四十八代稱德天皇女帝、中納言兼鎭守府將軍坂上苅田丸を以、大將として淡路廢帝、幷與黨藤原仲麻呂を誅伐せらる、

〔續日本紀 三十二光仁〕寶龜四年七月甲午、以正四位下大伴宿禰駿河麻呂爲陸奥國鎭守將軍、按察使及守如故、

〔續日本紀 三十三光仁〕寶龜五年七月庚申、以河內守從五位上紀朝臣廣純爲兼鎭守副將軍、勅陸奥國按察使兼守鎭守將軍正四位下大伴宿禰駿河麻呂等曰、將軍等前日奏征夷便宜、以爲、一者不可伐、一者必當伐、朕爲其勞民、且事含弘、今得將軍等奏、蠢彼蝦狄、不悛野心、屢侵邊境、敢拒王命、事不獲已、一依來奏、宜早發軍應時討滅、　六年十一月乙巳、遣使於陸奥國、宣詔、夷俘等忽發逆心、侵桃生城、鎭守將軍大伴宿禰駿河麻呂等、奉承朝委、不顧身命、討治叛賊、懷柔歸服、勤勞之重、實合嘉尙、駿河麻呂已下一千七百九十餘人、從其功勳加賜位階、

〔續日本紀 三十四光仁〕寶龜七年五月戊戌、以近江介從五位上佐伯宿禰久良麻呂爲兼陸奥鎭守權。副。將。軍、　八年十二月辛卯、初陸奥鎭守將軍紀朝臣廣純言、志波村賊、蟻結肆毒、出羽國軍與之相戰敗退、於是以近江介從五位上佐伯宿禰久良麻呂爲鎭守權副將軍、令鎭出羽國、至是授正五位下勳五等、

〔武家名目抄 職名二上〕按、軍防令に、凡將帥出征、兵滿一万人以上、將軍一人、副將軍二人と注せるによれば、副將軍の內、一人は權副將軍ともいふべけれど、其名目他に所見なければ、只鎭守府にのみ權副將軍といふ稱ありしことしるべし、されどこれはた邂逅の事にして、多くは聞え

〔續日本紀 十聖武〕天平元年九月辛丑、陸奥鎭守將軍從四位下大野朝臣東人等言、在鎭兵人、勳功可錄、請授官位、勅、其後人、

○按ズルニ、養老六年紀ニ陸奥鎭所、神龜元年紀ニ陸奥國鎭守軍卒ナド見エタレドモ、鎭守將軍ノ號ハ、之ヲ以テ初見トス、

〔續日本紀 十三聖武〕天平十一年四月壬午、陸奥國按察使兼守鎭守府將軍大養德守從四位上勳四等大野朝臣東人、○中略爲參議、

〔武家名目抄 職名二下〕按、本書○續日本紀及日本後紀、續日本後紀等、皆鎭守將軍と記して府字なし、只こゝのみ府字を加へたり、思ふに此時いまだ鎭守府の號あらず、恐らくは誤ならん、鎭守府といふは、始て三代實錄に見へたり、

〔續日本紀 二十孝謙〕天平寶字元年六月壬辰、左大辨正四位下大伴宿禰古麻呂爲兼陸奥鎭守將軍、陸奥守從五位上佐伯宿禰全成爲兼副將軍、

〔續日本紀 二十二淳仁〕天平寶字四年正月丙寅、勅曰、○中略陸奥國按察使兼鎭守將軍正五位下藤原惠美朝臣朝獵等、教導荒夷、馴從皇化、不勞一戰、造成既畢、又於陸奥國牡鹿郡、跨大河凌峻嶺、作桃生柵、奪賊肝膽、眷言惟績、理應襃昇、宜擢朝獵特授從四位下、陸奥介兼鎭守副將軍從五位上百濟朝臣足人、○中略進一階、

〔續日本紀 二十三淳仁〕天平寶字五年正月壬寅、從五位下大伴宿禰益立爲陸奥鎭守副將軍、鎭國驍騎將軍、

〔公卿補任 光仁〕寶龜九年戊午

參議從四位下石川朝臣名足　天平神護二年八月、正五位下、三年○神護景雲元年正月十一日、陸奥守鎭守府將軍、

將軍
副將軍
權副將軍

寅の春二月、鎭守大將軍顯家卿、又親王〇後村上をさきだて申、かさねて打上る、海道の國々ことごとくたいらぎぬ、

〔神皇正統記 後醍醐〕左少將顯信朝臣〇顯家弟中將に轉じ、從三位に敍し、陸奧の介鎭守將軍を兼てつかはさる、東國の官軍、ことごとく彼節度にしたがふべきよしをおほせらる、

〔武家名目抄 職名二下〕按、建武の制、三位已上の人將軍に補すれば、必ず大の字を加ふ、然れば顯信また大將軍たること推して知るべし、

〔伊呂波字類抄 加官職〕將軍 鎭守府

〔運歩色葉集 地〕鎭守府將軍 唐名監使

〔下學集 上官位〕鎭守府將軍 鎭東將軍

〔運歩色葉集 賀〕監使 鎭守府將軍唐名

〔官職秘抄 下〕鎭守府將軍 令外官

〔有職問答 三〕一鎭守府將軍

陸奧守多兼之、又有他人任之例、上古鎭北鎭東アリ藤原久信、同秀文、淸原武則、

東を守るに定り候哉、兼官も候哉、

上古東夷ツネニ帝都ヲ侵候間、東征ノ將軍ヲ置歟、本官ハ何ニテモアルベシ、鎭守府ノ將軍ヲ兼任スルナルベシ、

〔有職問答 五〕一鎭守府事

兼官之類に候よし陸奧守タル人兼任候、此事見職原抄候哉、被仰出候き、兼官には何の官より兼候哉、

〔有職問答 三〕一副將軍

此號百官に見えず、別に口宣下候哉、

是ハ鎭守府將軍ノ下ツカサト覺候、但別テ朝敵追討ノタメニ被遣將軍之時、撰器量爲副將軍之條、先規勿論候哉、

三位已上位高職下、依之申加大字而已、

〔建武年間記〕請被加大將軍號狀

右謹考故實、陸奧國者、遠當邊境之至要、鎮備蝦夷之不虞、依之弘仁三年、殊下勅符、建立鎮守府、擇主帥之器、授將軍之號、自置件職以降、以從五位上階爲彼相當、而多爲當國刺史兼之、或爲隣州牧宰任之、爰顯家官昇八座、位至二品、依別勅在當州、剩以勳功賞兼鎮守府、雖似洪恩之重疊、位高而官卑、頗可謂違先格、所請者、自今以後、三位以上任此職、日加大字、以爲永格、凡因時制議者、歷代之規範也、親王任刺史之日、號曰太守、蓋此謂乎、抑又無功賞者、無創業之途、當仁而奏請者、後蓋由此、望請天裁、早被加大字、知公卿之貴者、顯家誠惶誠恐謹言、

建武三年二月日　　參議從二位行左衞門督兼鎮守府將軍源顯家

位記被加大字了、宣旨案可尋之、

〔武家名目抄 職名二下〕按、本文弘仁三年建立鎮守府といへるは非なり、是彼年府の官員を定められしに渉りて誤るなり、

〔古文書類纂 上執達狀〕後醍醐天皇延元元年鎮守府執達狀 陸中南部行義所藏

袖判 北畠顯家

尊氏直義等、去五月雖亂入京都、官軍依致防戰、尊氏以下數十人、七月十五日自害、爰當國一二三迫凶徒等、襲來之旨有其聞之間、所被差遣軍勢也、定早々可令靜謐歟、糠部軍勢無左右不可參符、且可靜謐郡内之由、鎮守大將軍仰所候也、仍執達如件、

延元元年八月六日　　軍監有實 奉

南部六郎殿

〔神皇正統記 後醍醐〕高氏等西國の凶徒を相かたらひて、重ねて攻のぼる、○中略又のとし○延元三年戊

〔延喜交替式〕凡鎭守府權任官人待代人到、乃從解任、

〔延喜式十一 太政官〕凡鎭守府權任官人籤符、注替人姓名、

〔類聚三代格七〕太政官謹奏○中略

一且守且耕、軍粮有儲、　一邊境淸肅、城隍修理、

右國宰郡司、鎭將邊要等官、到任三年之內、政治灼然、當前件二條已上者、伏望五位已上者、量事進階、六位已下者、擢之不次授以五位、○中略

一逃失數多、克獲數少、　一統攝失方、戎卒違命、

右同前群官、不務職掌、仍當前件一條已上者、伏望不限年之遠近、解却見任、其違乖撫育勸課等條者、亦望准此、○中略

延曆五年四月十九日

大將軍

〔職原抄下〕鎭守府

將軍一人（相當從五位上 唐名鎭東將軍）　古來尤爲重寄、非武略之器者、不當其仁、仍代々稱將軍者、鎭守府將也、中古以來爲陸奧守者、多兼鎭府、不可必然事歟、守者、宜擇吏幹之才、將者、須用藩鎭之器故也、又昔並置府國、依恐于地廣而在邊要也、以信夫郡以南租稅充國府之公廨、以苅田以北稻穀充鎭府之兵粮云云、見格又邊要之中、以陸奧爲最、仍此國昔置五千人兵也、是皆可屬鎭府乎○中略　副將軍二人、中古以來不任之、　軍監（相當正七位下 唐名兵曹參軍事）　軍曹（相當從八位上 唐名上鎭錄事）　堪武勇之士可補此職歟、近代於軍曹者、公卿給之時聞申之、無其謂事也、　傔仗二人　擇重代武士補之、將軍判授之官也、凡傔仗者陸奧守同給二人、按察使給四人云々、

〔職原抄下〕鎭守府

建武三年、勅、三位已上爲當府將軍者、可加大字者云々、是依國司請奏被下宣旨也、將軍相當五位也、

將軍一員　軍監一員　軍曹二員　醫師弩師各一員

右被右大臣宣、偁、奉勅、鎮兵之數減定已訖、其鎮官員數、宜依前件、

弘仁三年四月二日（○又見日本後紀）

〔武家名目抄（職名二下）〕按、鎮守府は、もと正員の外に副將軍を拜し、或は權副將軍を任ず、こゝに至て將軍一員に定む、自後副官權官等絕て任ずる事なし、

〔伊呂波字類抄（知官職）〕鎮守府

將軍　將監　軍曹　醫師（五年爲限、四海外四年、）　弩師（同上）

〔拾芥抄（中本官位唐名）〕鎮守府將軍（鎮守府上鎮二將、案、唐官有上中下鎮守、將軍錄事、鎮東將軍）　軍監（上鎮鎮副軍亞將、兵曹參軍事、倉曹將）　軍

曹（上鎮錄事鎮事）

〔二中歷（七官名）〕外國

都府　鎮守府將軍（鎮東將軍）　副將軍　軍監（將軍亞將）　軍曹（將軍錄事）

〔日本後紀（十七平城）〕大同三年七月丙申、勅、陸奥鎮守官人、遷代之期、未有年限、宜自今以後、一同國司、其醫師以八考爲限、

〔類聚三代格（五）〕太政官符

應鎮守府醫師秩六年爲限事

右先例以五年爲限、今被右大臣宣、偁、奉勅、宜改彼例六年爲限、

貞觀八年十二月五日（○又見三代實錄）

〔延喜交替式〕凡鎮守府官人弩師等任限、一同國司、但醫師者六年爲限、

〔延喜式（二十八兵部）〕凡鎮守府官人不得任陸奥國人、

凡鎮守府權任官人、待代人到、乃從解任、其補任帳、具注替人姓名、

府印

府中祭神

職員

時言之、未嘗爲勳四等從四位上、疑朝獵暗記之誤耳、

〔倭名類聚抄 五國郡〕陸奧國 國府在宮城郡、鎭守府在膽澤郡、

〔日本紀略 桓武〕延暦廿一年正月丙寅、遣從三位坂上大宿禰田村麻呂造陸奧國膽澤城、　戊辰、勅、官軍薄伐、闢地瞻遠、宜發駿河、甲斐、相模、武藏、上總、下總、常陸、信濃、上野、下野等國浪人四千人、配陸奧國膽澤城、

〔武家名目抄 職名二下〕按、大野東人多賀城を築きてより、彼城をもて鎭府のごとくせられしかど、爰にいたりて、この膽澤城を定めて鎭府とす、弘仁以後、鎭守府と稱するものはこれなり、〇中略　吾妻鏡に田村麻呂を鎭守府將軍の中興といへるも、此鎭府を造れるを以てなり、

〔吾妻鏡 九〕文治五年九月廿一日戊寅、於伊澤郡鎭守府、令奉幣八幡宮 號第二殿 瑞籬給、〇源賴朝 云云、是田村麻呂將軍爲征東夷下向時、所奉勸請崇敬之靈廟也、彼卿所帶弓箭幷鞭等納置之、于今在寶藏云云、

〔東鑑要目集成 地一〕鎭守府

鎭守府八幡宮、膽澤郡ニアリ、今猶存ス、寶殿ニ最靈ト云石在、又古ノ鏑矢劒等有、鎭守府舊跡八方八丁也ト云傳フ、又隣村ニ寵殿ト云社アリ、辻ナドヽ云田圃ノ字アリ、舊名殘ルナリ、クシミタマト申奉ルハ、筑前國怡土郡深江村八幡宮ノ御神體ナリ、〇中略　田村麻呂其神體ヲ勸請シ玉ヘルニコソ、

〔續日本後紀 三仁明〕承和元年七月辛未、賜陸奧鎭守府印一面、无用國印、今殊賜之、

〔三代實錄 六淸和〕貞觀四年六月十五日壬子、陸奧國鎭守府正六位上石手堰神預官社、

〔延喜式 神名十〕陸奧國膽澤郡七座 並小　石手堰神社

〔類聚三代格 五〕太政官符

定鎭守府官員事

騎兵惣一千人、開山海兩道、夷狄等咸懷疑懼、仍差田夷遠田郡領外從七位上遠田君雄人、遣海道、差歸服狄和我君計安壘、遣山道、並以使旨慰喩鎭撫之、仍抽勇健一百九十六人、委將軍東人、四百五十九人分配玉造等五柵、麻呂等帥所餘三百四十五人鎭多賀柵、遣副使從五位上坂本朝臣宇頭麻佐鎭玉造柵、判官正六位上大伴宿禰美濃麻呂鎭新田柵、國大掾正七位下日下部宿禰大麻呂鎭牡鹿柵、自餘諸柵依舊鎭守、二十五日、將軍東人從多賀柵發、○下略

〔續日本紀光仁三十四〕寶龜八年五月乙亥、仰相模、武藏、下總、下野、越後國、送甲二百領于出羽國鎭戍、

〔古京遺文〕修造多賀城碑

多賀城　去京一千五百里

去蝦夷國界一百廿里

去常陸國界四百十二里

去下野國界二百七十四里

去靺鞨國界三千里

此城神龜元年歲次甲子、按察使兼鎭守將軍從四位上勳四等大野朝臣東人之所置也、天平寶字六年歲次壬寅參議東海東山節度使從四位上仁部省卿兼按察使鎭守將軍藤原惠美朝臣朝獦修造也、

天平寶字六年十二月一日

碑在陸奧國宮城郡市川村、卽多賀城廢趾也、多賀柵、始見續日本紀天平九年四月、碑上有西字、其義未詳、續日本紀、東人神龜元年二月授從五位上、二年閏正月授從四位下勳四等、天平三年正月授從四位上、其爲鎭守將軍見天平元年九月、爲按察使見九年正月、碑所書官位、皆得于置是城之後、其後十一年四月爲參議、十三年閏三月敍從三位、十四年十一月薨于職、碑不言參議從三位者何也、若以置城之

羽、常陸、下野をも管領し、其職掌は古の鎮將に百倍して、實に征夷府の勢をなせり、且その奏請にまかせて、新に大の字を加へられ、鎮守大將軍と稱す、顯家戰死の後、弟顯信、又陸奥國司となりて、此職に兼任せられき、顯家巳後、公卿たる人この職に居るときは、必大の字を加へらる丶事になりしかど、これは南朝の勅に出て、一時の制なり、（職原抄征夷使條に、凡頼朝卿補之後、依重征夷之任、不置任鎮守、元弘以來被置任と記せり、この抄は南朝の書なる故なり、）北朝にては、觀應年中、足利直冬を以て鎮守府將軍に任せり、これまた陸奥の鎮將となすにはあらず、將軍の名をかりて師直を誅せんがためなり、其後絶て此職を任せず、慶長年中、源義重朝臣に鎮守府將軍を贈られしは、賴義朝臣、義家朝臣等の例を追はれしなるべけれど、贈官とせしはこれを始とすべし、

所在

〔職原抄下〕東山道　鎮守府（見武官下）　將軍　副將軍　軍監　軍曹

陸奥者、上古以來爲邊要、爲其國境廣、元明天皇和銅五年九月、分置出羽國、元正天皇養老二年、置按察使、令監察兩國事、聖武天皇元年、陸奥國内又置鎮守府、府國相並行國事云々、

〔武家名目抄職名二下〕按、聖武天皇元年は神龜元年なり、この年鎮守將軍大野東人、始て多賀柵を築し故に、本書にこの文あるなり、然れども續日本紀を考るに、養老六年八月丁卯、令諸國司簡點柵戸一千人、配陸奥鎮所、焉、神龜元年四月癸卯、運糇帛二百匹、絁一千匹、綿六千屯、布一万端於陸奥鎮所云々の文あり、これによれば多賀柵を築かれざりし以前、すでに鎮守の柵ありし事明なり、されど鎮守將軍の號は、東人に始まりしをもて、かくはかゝれし成べし、又弘仁以後、鎮守府と稱せるものは、延暦中、坂上田村麻呂をして築かせられし、膽澤城のことなり、

〔續日本紀元正九〕養老六年八月丁卯、令諸國司簡點柵戸一千人、配陸奥鎮所焉、

〔續日本紀聖武十二〕天平九年四月戊午、遣陸奥持節大使從三位藤原朝臣麻呂等言、以去二月十九日到陸奥多賀柵、與鎮守將軍從四位上大野朝臣東人共平章、且追常陸、上總、下總、武藏、上野、下野等六國

未置鎮守已往、東征人或爲按察使、或爲鎮守將軍、文屋綿丸以來、有征夷將軍之號云々、愚案於鎮府者已有鎮將、依之重遣將帥之日、臨時加征夷號歟、○中略權大納言右近大將源賴朝卿辭兩職歸東國之後、有勅被任征夷大將軍、○中略凡賴朝卿補之後、依重征夷之任、不並任鎮府、元弘以來被並任畢、

〔官職難儀〕將軍とは　鎮守府將軍は絕す任ずる也、陸奥守たる人これに任ずる例多し、○中略鎮守府號、近代是を任せず、

〔拾芥抄中本百官〕鎮守府天平五年置常府

○按ズルニ、天平五年ニ鎮守府ヲ置キシコト、國史ニ所見ナシ、

〔百寮訓要抄別註七〕鎮守府　鎮守將軍ノ府ニテ令外ナリ、○中略續日本紀曰、天平元年九月辛丑、陸奥鎮守將軍從四位下大野朝臣東人等言、在鎮兵人勤功可錄、請授官位勸其後人ト、此時ヨリ鎮守ノ號アリテ、其府ヲ鎮所ト云ヘリ、

〔武家名目抄職名二下〕按、鎮守將軍は陸奥の鎮將なり、弘仁以後、おほくは鎮守府將軍と稱す、はじめ奈良朝に、此將軍を陸奥の鎮所に居らしめて、蝦夷を鎮衞してより、代々武略ある人を選てこれに補す、夷狄叛亂のことあれば、征夷使と共に征伐の事をつとめしむ、副將軍、權副將軍に至ては、時に從て一定なし、大方事あるに臨みて是を任ずるが故なり、延曆中、坂上田村麻呂に命じて、膽澤城を築かしめ、これを鎮守府とし、弘仁中、府の官員を定めし時、將軍一員となされて、更に副官權官を置れず、それより後七十餘人、相繼で任せられしかど、文治中、鎌倉殿○源賴朝を征夷大將軍になされてより後は、將軍の號を重せらるゝが故に、さらに鎮守府將軍を任せず、元弘一統の後、足利殿○尊氏奏請して、この職に任せられしかど、もと鎮府警衞の意にはあらで、ひとへに將軍の稱をからん爲なれば、遂に奥州には下らずして、征東將軍にうつれり、依て更に陸奥國司源顯家を鎮守府將軍に拜せらる、もとより彼地に鎮衞しければ、名義は往古に復せしかど、實は陸奥、出

さ、されど今は音讀にてある也、

〔職原抄 下〕外武官

本朝將帥之任、起於神代也、〇中略聖武天皇御宇、陸奧國置鎭守府、初任將軍遣之、若是本朝置軍府之初歟、

〔職官志 五〕蝦夷不馴、服叛無常、在古其寇邊也、命將征之、而未建將軍號、及和銅二年、命左大辨巨勢麻呂爲陸奧鎭東將軍、民部大輔佐伯石湯爲征越後蝦夷將軍、將軍之號、蓋起自此、而養老神龜相尋有持節征夷將軍、持節鎭狄將軍、持節大將軍、副將軍、征東大將軍、副將軍、並是臨時所拜、而非正官也、唯鎭守將軍、則有其府治焉、正官也、然史官失其置年、據多賀城碑曰、神龜元年歲次甲子、按察使兼鎭守將軍從四位下勳四等大野朝臣東人所置也、是似東人當時已爲此官、考之史、於其年二月有陸奧鎭守軍卒之言、蓋謂鎭守將軍所領者、然其所置多賀城未可必曰府、但號爲鎭所、或稱之曰柵、卽與玉造、牡鹿、桃生、新田、色麻等城同類、而多賀城特是將軍所親鎭焉、故天平九年正月、詔持節大使兵部卿藤原麻呂如陸奧、二月會鎭守將軍大野東人于多賀城、四月、東人進屯于比羅保許山、出羽守田邊難波爲奏其狀云、今春大雪、方倍常歲、以故早取賊地、不獲耕焉、天時已爾、違所圖也、唯造城郭一朝可成、守城以人、存人以食、而耕失候、將何以給、且兵利則進、不利則止、今宜引兵而旋、守城待年、乃爲東人深入賊地、奏請其鎭多賀城、據此多賀城在古將軍鎭所無疑矣、後紀殘編、延曆二十一年正月、以鎭守將軍坂上田村麻呂已定賊地、乃勅田村麻呂城膽澤、蓋由是將軍自多賀城徙鎭焉、和名鈔云、鎭守府、在膽澤郡是也、已以多賀城爲國司所治、和名鈔云、國府在宮城郡是也、然初置膽澤城、未可必曰府、其號府、蓋自弘仁定官員時始、而由是官稱鎭守府將軍、與國相比爲軍政、或往々國守兼將軍也、職原鈔未深考之、以鎭守府爲聖武之二年、故今擧其始末明之矣、

〔職原抄 下〕征夷使

名稱

將軍ハ、府ノ長官ニシテ、陸奥出羽按察使陸奥守タル人、之ヲ兼ヌルヲ例トス、副將軍、權副將軍、軍監、軍曹等ノ名、亦初メヨリ見エシカドモ、其員數ヲ、將軍一員、軍監一員、軍曹二員、醫師弩師各一員ト定メシコトハ、嵯峨天皇ノ弘仁三年ニアリ、而シテ仁明天皇ノ承和十年ニ、始メテ府掌ヲ置キ、陽成天皇ノ元慶六年ニ、陰陽師ヲ置ケリ、又傔仗ト稱スルモノアリ、將軍ノ隨從官ナリ、

中古以後、源平二族ノ武將ヲ以テ、鎭守府將軍ニ任ゼシコト多シ、而シテ康平六年ニ、武功ニ依リテ清原武則ヲ將軍ト爲ス、是土豪ヲ以テ任ゼシ始メナリ、其後源頼朝征夷大將軍ニ任ジ、幕府ヲ鎌倉ニ開キショリ、頗ル將軍ノ號ヲ重ンジ、復鎭守府將軍ヲ任ゼズ、然ルニ建武中興ノ際、源顯家ヲ以テ鎭守府將軍ト爲シタリシガ、建武三年顯家ノ奏ニ依リ、三位以上ノ人將軍ニ任ゼラルヽ時ハ、大ノ字ヲ加ヘテ鎭守府大將軍ト稱セシム、而シテ南北朝一統ノ後ハ、終ニ此職ヲ任ゼズ、

〔倭名類聚抄 五官名〕府 職員令云、○中略 鎭守府、

〔倭名類聚抄考證 十官名〕原書无鎭守府、按天平寶字五年、以田中朝臣多太麻呂爲鎭守副將軍、同九年、爲鎭守將軍、見續日本紀、至承和十年、始置鎭守府、見續日本後紀、此引令載之誤、

○按ズルニ、承和十年始メテ鎭守府ヲ置キシコト、百寮訓要抄別註ニモ見エタレドモ、續日本後紀ニ無シ、蓋シ承和十年九月甲辰、始メテ府掌一員ヲ置キシコトアレバ、之ヲ誤レルナラン、承和元年ニ、既ニ府印ヲ賜ヒシコトサヘ見ユレバ、府ヲ置キシコトハ猶ホ其以前ニアルコト明ナリ、

〔伊呂波字類抄 知官職〕鎭守府

〔歷朝詔詞解 六〕鎭守府は、エミシノマモリノツカサ、副將軍は、スケノイクサノキミなどや訓べ.

〔續日本紀 八元正〕養老四年九月戊寅、以從五位下阿倍朝臣駿河爲持節鎭狄將軍、軍監二人、軍曹二人、卽日授節刀、

〔續日本紀 九聖武〕神龜元年五月壬午、從五位上小野朝臣牛養爲鎭狄將軍、令鎭出羽蝦狄、軍監二人、軍曹二人、 十一月乙酉、征夷持節大使正四位上藤原朝臣宇合、鎭狄將軍從五位上小野朝臣牛養等來歸、

〔續日本紀 三十六光仁〕寶龜十一年三月甲午、從五位上安倍朝臣家麻呂爲出羽鎭狄將軍、軍監軍曹各二人、

鎭守府

鎭守府ハ、陸奧出羽ノ蝦夷ヲ鎭衞スル將卒ノ屯所ニシテ、初メハ鎭所ト稱シタリ、創設ノ年代ハ詳ナラザレドモ、陸奧鎭所ノ號ハ、既ニ元正天皇ノ養老六年ニ見エ、陸奧鎭守將軍、陸奧國鎭守軍卒、及ビ鎭兵等ノ名ハ、神龜天平ノ間ニ見エタレバ、鎭府ヲ置キシコト、既ニ養老以前ニアリテ、神龜天平ノ間、漸次整備セシモノナルベシ、天平九年紀ニ、遣陸奧持節大使藤原朝臣麻呂ガ、鎭守將軍大野朝臣東人ニ陸奧國多賀柵ニ會セシコト見エ、又多賀城碑ニ據レバ、此城、神龜元年歲次甲子、按察使兼鎭守將軍從四位上勳四等大野朝臣東人之所置也トアリ、卽チ多賀城ハ、當時鎭守將軍タル人ノ親ラ鎭衞セシ所ニシテ、謂ユル鎭所タリシコト知ルベシ、而シテ其制ノ大ニ見ルベキヲ致シヽハ、桓武天皇ノ延曆二十一年、坂上田村麻呂陸奧國膽澤城ヲ造リ、鎭府ヲ此ニ移シヽヨリ後ナルベシ、而シテ多賀城ハ自ラ國府トナレリ、倭名類聚抄ニ陸奧國、國府在宮城郡、鎭守府在膽澤郡トアル是ナリ、

壽永二年七月日〇中略

征夷大將軍從三位行權中納言兼左兵衛督平朝臣知盛〇下略

〔參考源平盛衰記 三十〕平家延暦寺願書事

從二位行權中納言平朝臣知盛印本、一本、八坂本、鎌倉本、知白本、佐野本、長門本、有二征夷大將軍兼左兵衛督十字一、按公卿補任無二明文一、

〔百練抄 後鳥羽十〕元暦元年正月十一日、以二伊豫守義仲一可レ爲二征夷大將軍一之由、被レ下二宣旨一、

〔吾妻鏡 三〕壽永三年〇元暦元年正月十日庚子、伊豫守義仲兼二征夷大將軍一云云、粗勘二先規一、於二鎭守府宣下一者、坂上〇田村麻呂中興以後、至二藤原範季一〇安元二年三月雖レ及二七十度一、至二征夷使一者僅爲二兩度一歟、所レ謂桓武天皇御宇、延暦十六年丁丑十一月五日、被レ補二按察使兼陸奥守坂上田村麻呂卿一、朱雀院御宇、天慶三年庚子正月十八日、被レ補二參議右衛門督藤原忠文朝臣一等也、爾以降皇家廿二代、歳暦二百四十五年、絶而不レ補二此職一之處、今始例於三輩一、可レ謂二希代朝恩一歟、

〔源平盛衰記 三十四〕京屋島朝拜無レ之附義仲將軍宣事

同〇元暦元年正月十一日、左馬頭義仲可レ爲二征夷將軍一之由被二宣下一、是ハ木曾ヒタスラ荒夷ニテ、禮義ヲ亂リ、法度ヲ失テ、心ノ儘ニ振舞ケレバ、必洛中ニシテ僻事出來ナン、サレバ東國ノ武士替入ランマデノ御計也ケリ、是ヲバ木曾爭カ知ベキナレバ、只今亡ンズル義仲、大ニ畏リ喜ビケルコソ哀ナレ、

〔神皇正統記 後鳥羽〕平氏いまだ西海にありし程、源義仲と云もの先入京す、兵威盛なるを以て、世中の事をおさへおこなひけり、征夷將軍に任ず、此官はむかし坂上の田村丸までは、東夷征伐のために任せられき、其後將門がみだれに、右衛門督忠文の朝臣、征東將軍を兼て節刀を給ひしよりこなた、久しくたえて任せられず、義仲ぞはじめて成にける、

〔續日本紀 元明四〕和銅二年九月乙丑、賜二征狄將軍等祿一、各有レ差、

〔類聚國史百九十風俗〕延暦十九年十一月庚子、遣征夷大將軍近衛權中將陸奥出羽按察使從四位上兼行陸奥守鎭守將軍坂上大宿禰田村麻呂、撿按諸國夷俘、

〔日本紀略桓武〕延暦廿年二月丙午、征夷大將軍坂上田村麻呂賜節刀、

〔日本後紀十二桓武〕延暦廿三年正月甲辰、刑部卿陸奥出羽按察使從三位坂上大宿禰田村麻呂爲征夷大將軍、正五位下百濟王敎雲、從五位下佐伯宿禰社屋、從五位下道島宿禰御楯爲副、軍監八人、軍曹廿四人、

〔日本後紀二十一嵯峨〕弘仁二年四月庚辰、正四位上文室朝臣綿麻呂爲征夷將軍、從五位下大伴宿禰今毛人、佐伯宿禰耳麻呂、坂上大宿禰鷹養爲副、　壬午、勅征夷將軍等曰、夷狄干紀、爲日已久、雖加征伐、未盡誅鋤、今依來請、今將出兵、其軍監軍曹等、且簡用具奏上、但犯軍法、禁身請裁、隊長已下、依法決斷、國之安危、在此一擧、將軍勉之、

〔日本紀略嵯峨〕弘仁四年五月辛巳、從三位文室朝臣綿麻呂爲征夷大將軍云々、

〔武家名目抄職名一上〕按、蝦夷の反亂代を歷てやまず、故に時々將軍を遣して、討せしかどなほやむ事なかりしに、綿麻呂征夷使となりて、伐平げしより、永く其憂なくなりしかば、此後たえて征夷使を拜せず、鎭守將軍ひとり鎭府にありて、ひたすらに非常を警衞し、たま〲蝦夷亂るゝ事あれば、陸奥出羽等の國司を催し、官兵を興して、これを征することになれり、これ特に制ありて定めしことにはあらず、時世の勢によれるなるべし、

〔長門本平家物語十四〕山王大しに祈請して、三千の衆徒をかたらはばやとて、一門卿相十餘人、同心連署して、願書を山王へ送る、其狀云、

敬白

可以延暦寺歸依淮氏寺、以日吉神尊崇加氏社、一向仰天台佛法事、〇中略

益立爲兼陸奥守、　六月辛酉、勅陸奥持節副將軍大伴宿禰益立等、　九月甲申、授從四位上藤原朝臣小黒麻呂正四位下、爲持節征東大使、

〔續日本紀　桓武　三十七〕延暦二年十一月乙酉、從五位上大伴宿禰弟麻呂爲征東副將軍、

〔續日本紀　桓武　三十八〕延暦三年二月己丑、從三位大伴宿禰家持爲持節征東將軍、從五位上文室眞人與企爲副將軍、外從五位下入間宿禰廣成、外從五位下阿倍猨島臣墨縄並爲軍監、

〔續日本紀　桓武　三十九〕延暦七年三月己巳、從五位上多治比眞人濱成、從五位下紀朝臣眞人、佐伯宿禰葛城外從五位下入間宿禰廣成、並爲征東副使、　七月辛亥、以參議左大辨正四位下兼春宮大夫中衞中將紀朝臣古佐美、爲征東大使、　十二月庚辰、征東大將軍紀朝臣古佐美辭見、詔召昇殿上、賜節刀、因賜勅書曰、夫擇日拜將、良由綸言、推轂分閫、專任將軍、如聞承前別將等不愼軍令、逗闕猶多、尋其所由、方在輕法、宜副將軍有犯死罪、禁身奏上、軍監以下、依法斬決、坂東安危在此一擧、將軍宜勉之、因賜御被二領、綵帛三十疋、綿三百屯、

〔續日本紀　桓武　四十〕延暦八年五月丁卯、詔贈征東副將軍民部少輔兼下野守從五位下勳八等佐伯宿禰葛城正五位下、葛城率軍入征、中途而卒、故有此贈也、　六月甲戌、征東將軍奏、副將軍外從五位下入間宿禰廣成、左中軍別將從五位下池田朝臣眞枚、與前軍別將外從五位下安倍猨島臣墨縄等議、〇下略　　十年七月壬申、從四位下大伴宿禰弟麻呂爲征夷大使、〇一本作征東大使、正五位上百濟王俊哲、從五位上多治比眞人濱成、從五位下坂上大宿禰田村麻呂、從五位下巨勢朝臣野足、並爲副使、

〔日本紀略　桓武〕延暦十一年閏十一月己酉、征東大使大伴宿禰乙麻呂辭見、　十二年二月丙寅、改征東使爲征夷使、　庚午、征夷副使近衞少將坂上田村麻呂辭見、　十三年正月乙亥朔、賜征夷大將軍大伴弟麻呂節刀、　六月甲寅、副將軍坂上大宿禰田村麻呂以下征蝦夷、　十六年十一月丙戌、以從四位下坂上大宿禰田村麻呂爲征夷大將軍、有副將軍等、

下佐伯宿禰石湯爲征越後蝦夷將軍、內藏頭從五位下紀朝臣諸人爲副將軍、出自兩道征伐、因授節刀幷軍令、

〔續日本紀八元正〕養老四年九月戊寅、以播磨按察使正四位下多治比眞人縣守爲持節征夷將軍、左京亮從五位下下毛野朝臣石代爲副將軍、軍監三人、軍曹二人、○中略即日授節刀、

〔職官志五〕征夷狄、掃妖氛、所以弘廓王有、鎭撫民生也、擇將帥之英材、處軍國之要務、自古所重矣、古景行帝時、小碓尊以皇子之至親、受征討之大任、將東伐蝦夷、過伊勢、見齋宮倭姬、而受艸薙之神劍、後世將軍賜節刀、蓋亦近此義、所謂閫外之委、不得不然、然在古、征夷使之號未建、其建號、以多治比縣守爲始、養老四年縣守爲持節征夷將軍、○中略既而罷征夷之號、故神龜元年以藤原宇合爲持節大將軍、○中略天平九年以藤原麻呂爲持節大使、大使即大將軍也、○中略十三年○延曆賜征夷大將軍弟麻呂○大伴節刀、征夷之號、重於此、

〔續日本紀九聖武〕神龜元年四月丙申、以式部卿正四位上藤原朝臣宇合爲持節大將軍、宮內大輔從五位上高橋朝臣安麻呂爲副將軍、判官八人、主典八人、爲征海道蝦夷也、 十一月辛未、遣內舍人於近江國、慰勞持節大使藤原朝臣宇合、 乙酉、征夷持節大使正四位上藤原朝臣宇合、鎭狄將軍從五位上小野朝臣牛養等來歸、 二年閏正月丁未、天皇臨朝、詔敍征夷將軍已下一千六百九十六人勳位、各有差、

〔續日本紀十二聖武〕天平九年正月丙申、先是、陸奧按察使大野朝臣東人等言、從陸奧國達出羽柵、道經男勝、行程迂遠、請征男勝村、以通直路、於是詔持節大使兵部卿從三位藤原朝臣麻呂、副使正五位上佐伯宿禰豐人、常陸守從五位上勳六等坂本朝臣宇頭麻佐等、發遣陸奧國、判官四人、主典四人、

〔續日本紀三十六光仁〕寶龜十一年三月癸巳、以中納言從三位藤原朝臣繼繩爲征東大使、正五位上大伴宿禰益立、從五位上紀朝臣古佐美爲副使、判官主典各四人、 甲午、以征東副使正五位上大伴宿禰

征東將軍

舊主遺勅、殊ニ可被致忠戰之由、綸旨ヲゾ下サレケル、

〔日本紀略 朱雀二〕天慶三年正月十九日、勅以參議修理大夫藤原朝臣忠文任右衞門督、爲征東大將軍、

〔貞信公記〕天慶三年二月八日甲辰、征東大將軍賜節刀進發、可召諸司所々堪兵之人仰右中辨、五月十五日庚辰、大將軍進節刀、十七日、大將軍來、良久談說、左中辨緣兵雜事申承、

〔公卿補任 朱雀〕天慶三年 庚子

參議正四位下藤忠文 六十七、修理大夫、正月十九日、兼征夷大將軍、同日兼右衞門督、大夫如元

〔扶桑略記 朱雀二十五〕天慶三年二月八日甲辰、辰剋主上出御南殿、賜征夷大將軍右衞門督藤原忠文節刀、下遣於坂東國、即以參議修理大夫兼右衞門督藤原忠文爲大將軍、世謂宇治民部卿是也、刑部大輔藤原忠舒、右京亮藤原國幹、大監物平清基、散位源就國、同經基等爲副將軍、幷下總權少掾平公連、藤原遠方等同下遣也、

〔源平盛衰記 二十六〕平家東國發向附大臣家尊勝陀羅尼事

二月〇養和元年一日、征東大將軍左兵衞督知盛卿、〇中略東國へ發向ス、

知盛所勞上洛事

同十二日ニ、征東將軍左兵衞督知盛卿所勞重テ墨俣ヨリ上洛ス、〇中略副將軍ノ左少將清經朝臣モ、同被入洛ケリ、

〔神皇正統記 後醍醐〕高氏は申うけて東國にむかひけるが、征夷將軍ならびに諸國の總追捕使を望みてけれど、征東將軍になされて、こと〴〵くはゆるされず、

〔室町家傳〕等持院殿尊氏、建武二年八月九日、爲征東大將軍、元鎭守府將軍

鎭東將軍

〔續日本紀 元明四〕和銅二年三月壬戌、陸奧越後二國蝦夷、野心難馴、屢害良民、於是遣使徵發遠江、駿河、甲斐、信濃、上野、越前、越中等國、以左大辨正四位下巨勢朝臣麻呂爲陸奧鎭東將軍、民部大輔正五位

征西將軍

〔續日本紀考證 三元明〕左將軍 蕃夷朝貢任左右將軍以備儀衛、又見七年十一月紀、

〔續日本紀 六元明〕和銅七年十一月庚戌、從四位下大伴宿禰旅人爲左將軍、從五位上多治比眞人廣成、從五位下久米朝臣麻呂爲副將軍、從四位下石上朝臣豐庭爲右將軍、從五位上上毛野朝臣廣人、從五位下粟田朝臣人爲副將軍、

〔續日本紀 六元明〕和銅六年七月丙寅、詔曰、〇中略討。隼。賊。將。軍、幷士卒等戰陣有功者一千二百八十餘人、並宜隨勞授勳焉、

〔續日本紀 八元正〕養老四年三月丙辰、以中納言正四位下大伴宿禰旅人爲征。隼。人。持。節。大。將。軍、授刀助從五位下笠朝臣御室、民部少輔從五位下巨勢朝臣眞人爲副。將。軍。、　七月甲寅、賜征西將軍已下至于抄士物、各有差、

〔日本紀略 二朱雀〕天慶四年五月十九日戊寅、征南海賊使小野好古飛驛言、賊徒虜掠大宰府內、仍以參議右衛門督藤原朝臣忠文任征西大將軍、又任副將軍軍。監。以下、

〔阿蘇宮文書〕朝敵追討事、四方官軍等不一揆、或先驅而失其利、或城守而似怠慢、就中九州士卒等、雖非無功績、各爭雄而及參洛之遲引云々、依之凶徒猶不退帝都、涉旬月之條、國家之弊、庶民之憂、宸襟無聊、故爲進官軍勸軍陣、無品親王〇懷良爲征西大將軍所有御下向也、方々官軍急速應催促可被參洛、恩賞賞罰等事、併所被委將軍御成敗也、存其旨殊可令致忠節者、天氣如此、悉之以狀、

九月十八日 〇延元三年

右中辨 判

阿蘇大宮司殿

〔太平記 二十一〕任遺勅被成綸旨事附義助攻落黒丸城事

萬機悉ク北畠大納言ノ計トシテ、洞院左衛門佐實世、四條中納言隆資卿、二人專諸事ヲ被執奏、同十二月〇延元三年、中略、筑紫ノ征西將軍宮、遠江井城ニ御座アル妙法院、奥州新國司顯信卿ノ方ヘモ、任

〔續日本紀元明五〕和銅四年九月丙子、勅、頃聞、諸國役民勞於造都、奔亡猶多、雖禁不止、今宮垣未成、防守不備、宜權立軍營、禁守兵庫、因以從四位下石上朝臣豐庭、從五位下紀朝臣男人、粟田朝臣必登等爲將軍、

〔續日本紀稱德二十九〕神護景雲二年十一月己亥、是日以正三位弓削御淨朝臣淸人爲檢按兵庫將軍、從四位下藤原朝臣雄田麻呂爲副將軍、從五位下紀朝臣船守、從五位下池田朝臣眞枚、並爲軍監、六位軍監二人、軍曹四人、

〔續日本紀文武三〕慶雲二年十一月己丑、徵發諸國騎兵、爲迎新羅使也、以正五位上紀朝臣古麻呂爲騎兵大將軍、

〔續日本紀考證文武二〕騎兵大將軍 按、推古十八年十月紀云、新羅任那人臻於京、命額田部連比羅夫、爲迎新羅客莊馬之長、以膳臣大伴爲迎任那客莊馬之長、蓋亦此、

〔續日本紀聖武十三〕天平十二年十月丙子、任次第司、○中略正五位下藤原朝臣仲麻呂爲前騎兵大將軍、正五位下紀朝臣麻路爲後騎兵大將軍、徵發騎兵、東西史部、秦忌寸等總四百人、 壬午、行幸伊勢國、十二月丙辰、解騎兵司、令還入京、

〔續日本紀稱德二十六〕天平神護元年十月辛未、行幸紀伊國、○中略正四位下藤原朝臣繩麻呂爲御前騎兵將軍、正五位上阿倍朝臣毛人爲副將軍、從三位百濟王敬福爲御後騎兵將軍、從五位下大藏忌寸麻呂爲副將軍、各軍監三人、軍曹三人、

〔續日本紀光仁三十五〕寶龜十年四月庚子、唐客入京、將軍等率騎兵二百、蝦夷二十人、迎接於京城門外三橋、

〔續日本紀元明五〕和銅三年正月壬子朔、天皇御大極殿受朝、隼人蝦夷等亦在列、左將軍正五位上大伴宿禰旅人、副將軍從五位下穗積朝臣老、右將軍正五位下佐伯宿禰石湯、副將軍從五位下小野朝臣馬養等、於皇城門外朱雀路東西分頭陳列、騎兵引隼人蝦夷等而進、

〔江談抄 雜事二〕元方爲大將軍事
被命云、天慶征討使之時、朝議以堪其事、欲以元方爲大將軍、元方聞之云、大將軍所言一事以上國家無不被用、若被拜大將軍者、必請貞信公〇藤原忠平子息一人爲副將軍云々、因茲寢此議云々、

〔平家物語 五〕ふじ川の事
ふくはらには、公卿せんぎ有て、今一日もせいのつかぬ先に、いそぎ討手を下さるべしとて、大將軍には、小松の權のすけ少將これもり、ふく將軍には、さつまの守忠度、侍大將には、かづさの守たゞきよをさきとして、つがふ其勢三萬よき、〇下略

〔武家名目抄 職名二上〕按、大將の稱は、始めて雄略紀に見え、副將は欽明紀に出たり、往古は官軍出て征することあれば、必大將軍、副將軍を任せられて、節刀軍令等を給はする式ありしに、中古以來は、其式も大かた略儀に從ひ、もし事ある時は、武士の其器に堪たるものに命じて、征伐を致さしむ、是を呼で征罰使、追討使など稱すること、常のならひとなりぬ、然りしより後、大將軍副將軍の職を授くる事は、おのづから絶て、ひとへに一軍の首將をよびて大將軍と稱し、次將を副將軍といふことゝなれり、こゝにひける平家物語以下に見えたるもの是なり、されば大將軍副將軍といへるも、皆俗言にとなへし稱呼にて、全く其職に任せられしにあらずといへども、是亦朝廷の命に出たる將帥にして、其名稱も同きが故に、こゝに贅せり、

〔日本書紀 二十七 天智〕皇祖母尊〇齊明卽天皇位、七年七月丁巳崩、皇太子〇天智素服稱制、是月、〇中略皇太子遷居于長津宮、稍聽水表之軍政、八月、遣前將軍大華下阿曇比邏夫連、小華下河邊百枝臣等、後將軍大華下阿倍引田比邏夫臣、大山上物部連熊、大山上守君大石等、救於百濟、仍送兵仗五穀、
二年三月、遣前將軍上毛野君稚子、間人連大蓋、中將軍巨勢神前臣譯語、三輪君根麻呂、後將軍阿倍引田臣比邏夫、大宅臣鎌柄、率二萬七千人、打新羅、

而欲聞新羅攻任那之狀、遂到任那、以薦集部首登弭、遣於百濟、約束軍計、

〔日本書紀二十一崇峻〕四年十一月（〇十一月原作十二月、據日本書紀曆考改、）壬午、差紀男麻呂宿禰、巨勢臣比良夫、狹臣（〇狹臣、書紀集解據即位前紀、作膳臣賀拕夫、）大伴嚙連、葛城烏奈良臣、爲大將軍、率氏氏臣連、爲裨將部隊、領二萬餘軍、出居筑紫、遣吉士金於新羅、遣吉士木蓮子於任那、問任那事、

〔日本書紀二十二推古〕八年二月、新羅與任那相攻、天皇欲救任那、是歲、命境部臣、爲大將軍、以穗積臣、爲副將軍、（並闕名）則將萬餘衆、爲任那擊新羅、　三十年（〇三十年原作三十一年、據日本長曆改、）七月、爰遣吉士磐金於新羅、遣吉士倉下於任那、令問任那之事、時新羅國主遣八大夫、啓新羅國事於磐金、且啓任那國事於倉下、因約曰、任那小國、天皇附庸、何新羅輒有之、隨常定內官家、願無煩矣、則奈末智洗遲、副於吉士磐金、復以任那人、達率奈末遲、副於吉士倉下、仍貢兩國之調、然磐金等未及于還、即年以大德境部臣雄摩侶、小德中臣連國、爲大將軍、以小德河邊臣禰受、小德物部依網連乙等、波多臣廣庭、小德近江脚身臣飯蓋、小德平群臣宇志、小德大伴連、（闕名）小德大宅臣軍、爲副將軍、率數萬衆、以征討新羅、

〔續日本紀四元明〕和銅二年十二月壬寅、式部卿大將軍正四位下下毛野朝臣古麻呂卒、

〔續日本紀考證三元明〕大將軍（案十一月薩摩隼人入朝、徵諸國騎兵、以備威儀、古麻呂蓋爲騎兵大將軍歟、未詳、）

〔續日本紀十聖武〕神龜五年七月乙卯、勅三品大將軍新田部親王、授明一品、

〔續日本紀考證四聖武〕大將軍（天平八年十一月、從三位葛城王等上表、亦云大將軍一品新田部親王、案和銅四年八月、詔新田部親王、爲知五衞及授刀舍人事、親王稱大將軍、蓋以此、）

〔續日本紀十三聖武〕天平十二年九月丁亥、廣嗣（〇藤原）遂起兵反、勅以從四位上大野朝臣東人、爲大將軍、從五位上紀朝臣飯麻呂爲副將軍、軍監軍曹各四人、

〔續日本紀三十六光仁〕寶龜十一年三月癸巳、以中納言從三位藤原朝臣繼繩、爲征東大使、正五位上大伴宿禰益立、從五位上紀朝臣古佐美爲副使、判官主典各四人、

擊狹穗彥、時狹穗彥興師距之、忽積稻作城、其堅不可破、此謂稻城也、踰月不降、(○中略)將軍八綱田、放火焚其城、

〔新撰姓氏錄 右京皇別下〕眞野臣
天足彥國押人命三世孫、彥國葺命之後也、男大口納命、男難波宿禰、男大矢田宿禰、從氣長足姬皇尊、(諡神功)征伐新羅、凱旋之日、便留爲鎭守將軍、

〔日本書紀 九神功〕爰伐新羅之明年春二月、皇后(○神功)領群卿及百寮、移于穴門豐浦宮、卽收天皇之喪、從海路以向京、時麛坂王、忍熊王、聞天皇崩、亦皇后西征、幷皇子新生、而密謀之曰、今皇后有子、群臣皆從焉、必共議之立幼主、吾等何以兄從弟乎、乃詳(○詳、與章切、詐也、)爲天皇作陵、詣播磨、興山陵於赤石、仍編船絚于淡路島、運其島石而造之、則每人令取兵、而待皇后、於是犬上君祖倉見別、與吉師祖五十狹茅宿禰、共隷于麛坂王、因以爲將軍、令興東國兵、

〔續日本紀 二十五淳仁〕天平寶字八年九月甲寅、是日討賊將軍從五位下藤原朝臣藏下麻呂等凱旋獻捷、

〔續日本紀 三十八桓武〕延曆四年七月庚戌、刑部卿從四位下兼因幡守淡海眞人三船卒、(○中略)八年(○天平寶字)被充造池使、往近江國修造陂池、時惠美仲麻呂適自宇治走據近江、先遣使者、調發兵馬、三船在勢多、與使判官佐伯宿禰三野、共捉縛賊使及同惡之徒、尋將軍日下部宿禰子麻呂、佐伯宿禰伊達等、率數百騎而至、燒斷勢多橋、(○下略)

〔日本書紀 十四雄略〕九年三月、天皇欲親伐新羅、神戒天皇曰、無往也、天皇由是不果行、勅紀小弓宿禰、蘇我韓子宿禰、大伴談連、(談、此云箇陀利、)小鹿火宿禰等曰、新羅自居西土、累葉稱臣、朝聘無違、貢職允濟、逮乎朕之王天下、投身對馬之外、竄跡匝羅之表、阻高麗之貢、呑百濟之城、況復朝聘既闕、貢職莫脩、狼子野心、飽飛飢附、以汝四卿、拜爲大將、宜以王師薄伐、天罰龔行、

〔日本書紀 十九欽明〕二十三年七月、是月遣大將軍紀男麻呂宿禰、將兵出哆唎、副將河邊臣瓊缶出居曾山、

外將軍制之、軍功爵賞、皆決於外云々、大將謂之元帥、(出左傳)其居處謂之幕府、(漢書注)將軍職在征行無常處、所在爲治、故言幕府云々、又稱將帥云麾下、又云戲下、漢書師古曰、戲諸軍之旌麾也云々、又將帥有賜節鉞之制、節度者所以示其信也、斧鉞者所以專刑戮、本朝將帥之任、起於神代也、其初天照大神欲降天孫於豐葦原中國之時、遣經津主神、(又云齋主神、香取神是也、)健雷神、(鹿島神是也)令平諸不順者云々、大物主神帥八十萬神昇天、天神勅曰、宜領八十萬神永爲皇孫奉護、乃使還降之云々、一書曰、事代主神八萬四千鬼類大神將也云々、又云、大伴連遠祖天忍日命、帥來目部遠祖天槵津大來目、背負天磐靫、臂著稜威高鞆、手提天梔弓、天羽羽矢、及副持八目鳴鏑、又帶頭槌劒、而立天孫之前云々、神代之制粗可見矣、至于人代、神武天皇東征之日、物部氏祖道臣命爲軍帥、(古稱武士云物部、起於此云々、)崇神天皇十年、命四道將軍遣四方云々、將軍之號、正起於此歟、其後景行天皇四十年、以皇子日本武尊爲大將軍、以武日命武彥命爲左右將軍、東征蝦夷云々、爾來征行之日、命將軍不可勝計、我國平定新羅高麗百濟之後、百濟尤納懇欵、依之彼國置日本府、遣鎭守將軍治之云々、然乃建將軍府之初在此乎、(年紀猶可勘入)聖武天皇御宇、陸奧國置鎭守府、初任將軍遣之、若是本朝置軍府之初歟、征夷征東等臨時置之、不聞有其府也、

〔日本書紀 五崇神〕十年七月己酉、詔群卿曰、導民之本、在於敎化也、今既禮神祇、災害皆耗、然遠荒人等、猶不受正朔、是未習王化耳、其選群卿、遣于四方、令知朕意、　九月甲午、以大彥命遣北陸、武渟川別遣東海、吉備津彥遣西道、丹波道主命遣丹波、因以詔之曰、若有不受敎者、乃擧兵伐之、既而共授印綬爲將。軍、　十月乙卯朔、詔群臣曰、今反者悉伏誅、畿內無事、唯海外荒俗、騷動未止、其四道將軍等、今忽發之、

丙子、將軍等共發路、　十一年四月己卯、四道將軍以平戎夷之狀奏焉、

〔古事記 中崇神〕此之御世、大毘古命者、遣高志道、其子建沼河別命者、遣東方十二道而、令和平其麻都漏波奴(自麻下五字以音)人等、又日子坐王者、遣旦波國、令殺玖賀耳之御笠、(此人名者也、玖賀二字以音、)

〔日本書紀 六垂仁〕五年十月己卯朔、天皇幸來目居於高宮、○中略卽發近縣卒、命上毛野君遠祖八綱田令

古事類苑

官位部二十五

令制官職二十一

將軍

將軍ハ軍衆ヲ統領シ、不順ヲ征服スルヲ以テ任トス、其稱ノ國史ニ見エタルハ、崇神天皇ノ時、四道ニ將軍ヲ遣シヽヲ以テ始トス、將軍ハ臨時ノ職ニシテ、西國ニ事アレバ、征西將軍ヲ命ジ、東國ニ事アレバ、征東將軍ヲ命ズ、其鎭東將軍ト云ヒ、征夷將軍ト云フハ、時ニ隨ヒテ號ヲ殊ニスルニ過ギズ、而シテ或ハ征夷將軍ノ外ニ、征狄將軍ヲ命ゼシ事アリ、夷ト云ヒ狄ト云フハ、陸奧ト出羽トヲ別チシナリ、蓋シ東陬ノ地タル叛服常ナラズ、每ニ出師ノ擧アルヲ以テ、元正天皇ノ朝ニ、多治比縣守ガ持節征夷將軍タリシ以來、其任ニ膺ル者モ多カリシガ、桓武天皇ノ朝ニ、坂上田村麻呂、文室綿麻呂ガ相繼ギテ、之ニ任ゼシ後、漸ク平定ニ趨キシヲ以テ、久シク其人ヲ命ゼザリシガ、後鳥羽天皇ノ元曆元年ニ、源義仲ヲ以テ之ニ任ズ、然レドモ征夷ノ二字ヲ加ヘテ、將軍ノ榮號ト爲スニ過ギズ、源賴朝ノ起ルニ及ビテ、亦其稱ヲ襲ヒ、武家執政ノ常職ト爲リ、大ニ往昔ノ征夷將軍ニ異ナリ、事ハ鎌倉將軍篇ニ在リ、又鎭守府將軍アリ、常置ノ官ナリ、鎭守府篇ニアリ、又大宰府ヲ廢セシ時ニ、鎭西府將軍ヲ置キシ事アリ、大宰府篇ニ附出セリ、

將帥

〔職原抄下〕外武官

將帥之職古今重之、所以分閫外之權也、漢書云、馮唐曰、王者遣將、跪而推轂曰、閫以內寡人制之、閫以

藏謂內外庫藏、其倉庫亦同、准此、

〔續日本紀三十六光仁〕天應元年四月己丑朔、左右兵庫兵器自鳴、其聲如以大石投地也、

〔儀式十〕將軍進節刀儀

其日大臣侍殿上、喚舍人、舍人共稱唯、少納言代人自承明門〇註略就版、大臣宣喚征某賊大將軍姓名、少納言稱唯、退出喚之、將軍稱唯、捧節刀就版奏云、〇中略退出、其節刀令收兵庫、

內兵庫司

〇

〔令義解一職員〕內兵庫

正一人、掌准兵庫頭、佑一人、令史一人、使部十人、直丁一人、

〔令集解五職員〕朱云、爲非常事內外二處設者、或云、此司爲御料設者、未明、

〔令義解一官位〕正六位〇下階 內兵庫正　正八位〇上階 內兵庫佑　大初位〇下階 內兵庫令史

〔續日本紀三十六光仁〕寶龜十一年十月癸巳、左右兵庫鼓鳴、後聞箭動聲、其響達內兵庫、

〔享祿本類聚三代格四〕太政官符

應定諸司使部事〇中略

內兵庫六人〇中略

以前、被右大臣宣偁、奉勅、諸司使部徒滿其數、無用官司、宜改張格令依件爲定、〇中略省宜承知、自今以後永爲恆例、

延曆十四年七月十日

〔令集解五職員〕內兵庫司大同三年正月廿五日、詔改時制、論代立規、往古相沿、來今莫革、故隨時分職、損益非同、求之變通、何常準之有也、思欲省司合吏少牧多羊、致人務於清閑、期官寮於簡要、其內兵庫併左右兵庫、主者施行、

〔延喜式四十九左右兵庫〕凡鼓吹雜生習業所須、鉦一口、大鼓一面、楯𦗭鼓二面、多良羅鼓四面、答鼓一面、大角廿口、小角卌口、大笛四口、排幡二管、鉦鼓箕簴九脚、並侍官符充之、

○按ズルニ、鼓吹ノ事、モト鼓吹司ノ掌ドル所タリ、然ルニ宇多天皇ノ寛平八年、本寮ニ合併セラレ、鼓吹ノ事、皆本寮ノ所管ニ歸セリ、

〔延喜式三十七典藥〕諸司年料雜藥

兵庫寮四種

〔延喜式四十九左右兵庫〕凡鼓吹生等年料、万病膏、神明膏、百毒散、茯苓散各一劑、淸酒五斗、並申官請受支給、

〔拾芥抄中末宮城〕兵庫町土御門南、大宮西一町、

職員供給

〔延喜式二十三民部〕凡兵庫寮用度帳、令所司勘、

〔東大寺正倉院文書四〕□兵庫移　民部省

合直丁肆人立丁二人廝二人料米壹斛壹斗陸升日別四升　鹽壹升壹合陸勺日別二勺　布貳段

□前直丁幷廝等、來五月廿九日料應給公粮□件、以移、

天平十七年四月廿一日

〔續修東大寺正倉院文書十五〕右兵庫移　民部省

所請米壹斛貳斗　鹽壹升貳合　綿肆屯

右直丁立丁貳人、廝丁貳人、合肆人、立丁人別日米二升、鹽二勺、廝丁人別綿二屯、

以前直丁等、來十一月卅日料粮具顯如件、以移、

天平十七年十月廿一日　正八位下行少屬阿刀造濱主

大允正七位下勳十二等民伊美吉古麿

雜載

〔令義解五宮衞〕凡兵庫大藏院內、皆不得將火入、其守當人須造食者、謂官人以下直丁以上也、於外造、謂於五十丈外造也、餘庫

鉦三下、還本宮亦如之、次擊喚隊司、謂諸衛次官以上、鼓三下、訖擊解陣鉦五下、並諸衛相應、
大儀及行幸、諸衛府所須擊鉦鼓人及執夫、本府臨時具錄其數、申官、然後分配、
凡出充諸衛及中務省元日儀仗、並待官符充行、

獻器仗

〔令義解五官衛〕凡有獻軍器戎仗等、謂弓箭刀楯之類、爲軍器也、鼓吹幡鉦之類、爲戎仗也、即令內舍人隨獻人、謂假令、勅兵庫及臣下獻器仗者、庫司及物主謂之獻人也、將入、
〔儀式七〕正月七日儀
兵庫寮官人置櫃弓矢別櫃於高札上共舁、○中略卿若大輔一人、獨留侍僚下出舉、進立兩机中央、奏曰、兵部省奏、兵庫寮奉禮御正月七日乃御弓、又種種矢獻良乎久申給波止久申、

補任

〔官職秘抄上〕諸寮頭
兵庫　公達諸大夫任之　同助權○中略　兵庫　已上可任良家子、凡諸司助以公卿二合爲最、是可任式部丞之故也、○中略自允轉任例、(中略)兵庫源是○中略　同允大少○中略　兵庫○中略　已上臨時內給、諸院宮給、文章生、同散位、諸道得業生、成功輩等任之、凡諸道擧問者生、任寮三分、尤爲難、○中略攝政內舍人隨身任例(中略)兵庫橘本官盛
〔職原抄下〕兵庫寮
頭一人無權頭　五位諸大夫任之　助權　六位諸大夫任之　允大少　六位侍任之　屬大少

用途

〔延喜式四十九左右兵庫〕凡諸國所進修理甲料、馬革者尾張六張、近江十七張、美濃廿四張、但馬十一張、播磨卌二張、阿波十張、並以驛傳牧等死馬皮熟而送之、若不足者、買備滿數、
〔延喜式二十三民部〕凡兵庫寮造箭柳箟四百廿隻、○中略並仰大和國、每年交易令送、箭箟以時採乾、簡取強好、價幷運賃、並用正稅、
〔延喜式三十六主殿〕兵庫寮胡麻油六合、五合修理甲一百領料、一合造大藏太刀幷伊勢神宮祭使料、○中略猪油小廿斤、造鼓吹生等藥料

次栖鳳樓西南角壇以西相去一丈立鼓、以北相去六尺立鉦、（用少長）次朱雀門内東去十丈、自垣北去七丈立鉦、又去一丈立鼓、（用大長）所須鉦鼓簨簴槌等、預前申請用、事訖返上、

凡大儀分配擊鉦鼓人、及執夫者、太極殿及會昌以外三門、別擊鉦鼓人各一人、執夫四人、中務擊鉦鼓人各二人、執夫八人、諸衞別擊鉦鼓人一人、執夫四人、執纛四人、（左右衞門府執纛夫各十六人、）執戟四人、大儀擊鉦鼓人著平巾冠、（漆羅頂、）緋大袖袍、緑襖子、帛博帶、（長五尺、廣四寸、以布為心、以帛為表裏、其二端各著緑帶、長各五尺、）大口帛袷袴、白布襪、烏舃、執鉦鼓夫著皂縵頭巾、皂緌、朱末額、緋大纈袍、白布帶、（長八尺、廣四寸、四重為疊、）白布袴、紺布脛巾、鞋、並收寮庫、臨時出用、但分配中務衞府、擊人執夫裝束者、省府充之、

凡大儀、擊鉦鼓節、群官陳列畢、閤外大臣仰兵部省、省令寮擊外辨鼓、平聲九下、諸門依次相應、（殿下鼓不應、）開門畢、寮頭進申閤内大臣、令擊殿下喚鼓、雙聲九下、諸門依次相應、群官人就位畢、殿下擊、褰御座帳鉦、平聲三下、（諸門鉦不應、）禮畢擊下帳鉦、如初、即殿下擊退鼓、雙聲九下、諸門依次相應、群官退出、訖外門擊鉦五下、諸門鉦依次相應、（殿下鉦不應、）然後諸衞擊退隊鼓、（事見衞府式、）

凡大射、建羅幡者、烏羅十二旒、旒別張竹二株、著鈴二口、帛巾二條、（六旒纈、六旒緋、各長八尺、廣八寸、）阿禮幡十二旒、各著柄、（左第一紫色、次深緑、次緋、次緑、次黄、次淺緑、右方准此、）花槍廿口、幡廿旒、旒別著柄、（建兵部及寮官人等幄下、）預前十日、移送兵部、木工寮射殿之前、量定步數、便建標杭、當日質明、列建羅幡、訖即返上、○中略

車駕行幸、執纛一人、（騎馬、牧子二人執轡、）著皂末額、緋大纈袍、布汗衫、帛袴、布帶、鞋、行縢、執纛綱二人、著桃染布衫、布袴、布帶、執戟一人、（從執纛人、）執鉦二人、執鼓二人、（以熊皮著鉦鼓、）擊者二人、（已上服色同執纛人、）鉦鼓師各一人、（騎馬、服色同執纛人、）寮官二人、著公服行縢、（騎私馬、）並陣大臣前、其所須裝束、申官請受、事訖返上、

行幸擊鉦鼓節、其日質明、寮承大臣命、擊動鼓三度、度別平聲九下、即裝束、訖擊列陣鼓一度、平聲九下、諸司陣列、訖擊進鼓三度、度別九下、（初擊細聲、漸登大聲、）次擊行鼓三度、度別雙聲二下、（陣列或遅、相尋擊之、）御行宮擊靜陣

〔延喜式二十八兵部〕凡諸國司造官器仗之日、不得造私器仗、

〔東大寺正倉院文書三十〕天平五年十月

一同日〇二十一日進上公文貳拾陸卷肆紙(中略)官器仗帳一卷伯姓器仗帳一卷

接續裏書出雲國計會帳天平六年八月廿日正八位下行目小野臣淑奈麻呂

修理

〔令義解五軍防〕凡在庫器仗、有不任者、謂任堪也、言不堪用也、當處長官驗實具狀申官、隨狀處分除毀、謂除去也、其鑕刃袍幡弦麻之類、謂鑕矟之屬曰鑕、刀劍之屬曰刃、旗幡之屬曰袍、弓弩之屬曰弦麻也、即充當處修理軍器用、在京庫者送兵部、任充公用、謂亦充修理軍器之用、上事申兵部、然後受用也、若弃掌不如法、致有損壞者、謂弃猶廢也、隨狀推徵、

〔令義解六營繕〕凡貯庫器仗有生澁綻斷之者、謂柔識生衣是爲生澁、即刀劍生衣出內難澁之類也、衣服縫解爲綻、假令鎧甲斷貫之類是也、三年一度修理、若經出給破壞者、並隨事料理、在京者所須調度人力、申太政官處分、在外者役當處兵士及防人、調度用當國官物、

〔延喜式四十九左右兵庫〕凡破損甲、每年五十領、待官符到請料修理、即返納本庫、

修理挂甲一領料、漆四合、金漆七勺六撮、緋絁二尺五寸、緋絲三銖、絲五銖、調綿一屯六兩、商布一丈三尺、洗革四張半、掃墨一合、馬革一張半、絲一兩三銖、單功卅一人、

建大門楯六枚、戟十二竿、若有破損者、待衞門府移寮、即修理、其料物、隨損多少請受、

備儀仗

〔延喜式四十九左右兵庫〕凡元日、及即位、構建寶幢等者、預錄色目移送兵部、前十五日復請夫單卅人、各日飯五升、鹽二勺、勤十五日、事訖還上、待官符到、寮與木工寮共建幢柱管於太極殿前庭龍尾道上、前一日率內匠寮工一人鼓吹戶卅人、構建寶幢、從殿中階南去十五丈四尺建烏像幢、左日像幢、次朱雀旗、次青龍旗、此旗當殿東頭楹、玄武旗當西頭楹、右月像幢、次白虎旗、次玄武旗、相去各二丈許、與蒼龍白虎兩樓南端楹平頭、訖並返納、

凡大儀立鼓鉦者、太極殿東南閤內大臣幄西南去一丈立鉦、又南去一丈立鼓、鉦加角櫃二柄、鼓木櫃二柄、並有覆覆、下皆准此、擊人各一人、長一人、用寮頭、著朝服、以下皆准此、次會昌門外東去九丈、自廊南去五丈立鉦、又去一丈立鼓、用允爲長

出納

〔享祿本類聚三代格十八〕太政官符

出納兵庫器仗事

右被大納言從二位藤原朝臣永手宣偁、奉勅、出納庫兵事可重察、故先下勅、內印施行已畢、而今中務監物仍承先例、唯與本庫知之、行符既重、撿司猶輕、自今已後、宜令諸司出納、

天平神護元年閏十月廿五日

〔續日本紀二十六稱德〕天平神護元年閏十月壬子、〇二十四日、令集解作二十五日、三代格作二十五日、先是兵庫器仗者、中務監物與本司相對出納、至是諸司相知出納、〇又見職員令集解、享祿本類聚三代格、

〔延喜式四十九左右兵庫〕凡出納雜器仗者、皆寮官隨事覆奏、訖與諸司出收、

〔令義解五軍防〕凡出給器仗等、謂器者、軍器也、仗者、儀仗也、付領之日、明作文抄、謂文抄猶文記也、行還事畢、據簿勘納、謂巡行軍行皆同、其非巡行軍行而別有供威儀者、故云事畢也、如有非理損失、申官推徵、謂推徵之法、自准下條也、

曝涼

〔令集解五職員〕釋云、案、曝涼之時申兵部、兵部申官、官奏請鎰曝涼、

〔延喜式二十八兵部〕凡兵庫器仗應須曝涼者、本司預移省、省申官、官令中務擇日、訖就庫監曝、十日使了、所須人力本司申官、官仰左右衞門府、府奏聞、然後充之、

〔延喜式四十九左右兵庫〕凡器仗應須曝涼者、預移兵部、諸司兵部、就庫監曝、十日內令了、曝涼隨時辨置異所、所須人力寮申官、官仰衞門府、奏聞然後充之、

〔延喜式三十三大膳〕曝曬兵庫寮器仗監物一人、兵部官人二人、五位一人、六位以下一人、史生一人、雜使三人、各限十日給食、准百度法、

撿閲

〔延喜式二十八兵部〕凡諸國樣〇器〇仗〇者、省與兵庫撿按定品了、副國解文奏進內裏、閲定其品了、省更申官、官下符兵庫寮、卽諸司就庫收之、其器仗鐫題專當官人姓名、若撿閲有不如法、隨事科貶、

〔延喜式四十九左右兵庫〕凡諸國樣器仗、皆先進兵部、卽與寮官共加校閲、御覽訖乃勘收、數見兵部式、

河内國七十一烟　和泉國五烟　伊勢國四烟　尾張國四烟
遠江國廿烟　近江國十八烟　美濃國卅二烟　丹波國七烟
播磨國四烟　紀伊國廿六烟

右雜工戸免調庸、毎年自十月一日至二月卅日役使雜作、人別不得過五十日、其役分物毎年附貢調使進之、但攝津國有馬郡羽束工戸役十五日、不免其調、若有絶戸、其口分田准價賃租、充雜工食、不給公粮、

鼓吹戸

〔延喜式四十九左右兵庫〕鼓吹戸

山城國七十五烟　攝津國二烟　河内國廿三烟六烟丁別

右起十月一日盡二月卅日、以十人爲一番、番別卅日、更代教習、若有破除隨即補之、其始發聲日、申官待報、三月一日辨官并兵部省官人就寮簡試能不、訖乃放却、

凡鼓吹戸計帳之日、喝已上一人到國、與國司共以中上戸定之、莫令他役、長上四人、大小角鉦鼓各一人

凡鼓吹部者、簡取戸内百姓才業秀衆者、移兵部省勘籍補之、大角生十人、小角生八人、大笛生二人、鼓生十人、鉦生四人、

安置

〔令義解五軍防〕凡軍器在庫、皆造棚閣、謂棚、棚閣也、閣、櫓閣也、安置、色別異處、以時曝涼、謂識一曝涼也

〔政事要略五十四交替雜事〕延兵格云、應辨置兵庫器仗事、

右軍防令云、凡在庫器仗、有不任者、當處長官驗實具狀申官、在京庫者、送兵部任充公用、若弃掌不如法、致損壞者、隨狀推徵、又云、軍器在庫、皆造棚閣安置、色別異處、以時曝涼者、而收宰等不勤曝涼、无意辨置、滿庫擁積、徒致摧〇享祿本類聚三代格作擢損之費、五兵濫殽、〇享祿本類聚三代格作混淆雜、應警急之用、前後之司、默然付領、安不忘危、何忽其備、中納言兼右近衛大將從三位行春宮大夫藤原朝臣時平宣、奉勅宜自今以後、曝涼隨時、辨置異處、交替之日、莫致欠損、在京所司亦同准此、

寬平七年七月十一日

延暦十四年七月十日

〔延喜式兵部二十八〕凡左右馬兵庫等寮掌使部、馬部並省補之、

〔享祿本類聚三代格四〕太政官符、

大角長上一人　少角長上一人　鉦鼓長上一人

右充鼓吹司長上、而依太政官去八月廿九日論奏、以左右兵庫造兵鼓吹等四司爲兵庫一寮、既訖、件長上宜隷彼寮、

使部十二人

右便以廢左右兵庫使部隷兵庫寮、

遣唐大使中納言從三位兼行民部卿左大辨春宮權大夫侍從菅原朝臣道眞宣、宜依件隷之、

寛平八年十月五日

弩師

〔享祿本類聚三代格四〕太政官符

應置兵庫寮弩師一人事

右左大臣宣奉勅、安不忘危、治必思亂、夫弩者兵之勝具、戰之機資、一箭所當百夫不敵、而彼寮徒設其器、不置其人、宜始置件師專令傳習、

延喜三年二月八日

工部

〔延喜式兵部二十八〕凡〇中略兵庫寮工部廿人、鼓吹生卅四人、〇中略省隨其解移申官、勘籍補之、其考帳者、每年送省、

〔延喜式左右兵庫四十九〕凡雜工部廿人簡取戸內百姓藝業勝衆者、移兵部省勘籍補之、

雜工戸

〔延喜式左右兵庫四十九〕雜工戸

左京廿五烟今絶戸　右京卅九烟今絶戸　大和國六十九烟　攝津國五十烟

〔令義解官位一〕從五位階〇上　左右兵庫頭　正六位階〇下　左右兵庫助　正七位階〇下　左右兵庫大允　從七位階〇上　左右兵庫少允　從八位階〇上　左右兵庫大屬　左右兵庫少屬階〇下

〔唐六典十六〕武庫令、兩京各一人、從六品下、

周禮有司甲下大夫、司弓矢下大夫、司兵中士、司戈盾下士、並武庫之任也、漢屬執金吾、後漢太僕屬官有考工令丞、主作兵器、弓弩、刀鎧之屬、成則付執金吾入武庫、又云、武庫令六百石、魏晉因之、宋尙書庫部屬官有武庫令、掌軍器、齊因之、梁〇梁下恐脫衞尉寺統武庫令、北齊九字、衞尉寺統武庫署令丞、掌甲兵及吉凶儀仗、後周依周官、隋衞尉寺統武庫署令二人、皇朝因之、後減置一人、〇中略

武庫令、掌藏天下之兵仗器械、辨其名數、以備國用、丞爲之貳、

〔拾芥抄中本官位唐名〕兵庫頭兵庫寮庫將軍　武庫署武部郎中　武庫令庫部郎中　助武庫員外郎　允武庫丞　屬武庫主事武庫府庫部主事

史生

〔令集解職員五〕左兵庫寮　右兵庫准此大同四年三月十四日官府云、應新置并加置諸司史生員事、左兵庫二員、右兵庫二員、右新置如件、以前被右大臣宣稱、奉勅、大官職之員、事資閑繁、寮司之務、執無繁簡、而諸司史生先無定准、或闕此員、實乖通時、宜量事繁置令濟理務者、謹依勅旨、加增并新置等員如件、〇又見享祿本類聚三代格

〔日本後紀十七平城〕大同四年三月己未、始置左右兵庫史生各二員、

〔延喜式二十八兵部〕凡隼人司權史生一人、兵庫寮權史生二人、省擇補、

〔北山抄六下宣旨事〕

諸衞府生馬寮史生馬醫等事　下兵部兵庫寮者、省補之、

〔延喜式二十八兵部〕凡〇中略其左右馬寮、兵庫寮史生已上補任之後、省移本司、即令帶仗、自餘雜任、本衞判帶、

使部

〔享祿本類聚三代格四〕太政官符、

應定諸司使部事〇中略

左兵庫六人　右兵庫六人〇中略

右太政官去年二月廿八日下二兵部省一符偁、去年九月七日下二式部省一□□□太政官去八月廿九日奏偁、左右兵庫造兵鼓吹等四司總爲二一寮一便爲二兵部省管隷一者、右大臣宣奉レ勅依レ請者、中納言兼右近衞大將從三位行春宮大夫藤原朝臣時平□□□□□□□隷爲二被官一者、今被二大納言正三位兼行左近衞大將藤原朝臣時平宣一偁、奉レ勅、宜改二被官一復レ舊爲二管隷一、

□□□□□月五日

○按ズルニ、此格文、盡食缺損シテ、年月詳ナラズト雖モ、鼓吹司ノ長上等ヲ以テ、兵庫寮ニ隷セシメタル時ノ格文、及ビ廢司ノ要劇番上料ヲ收メシトキノ格文等ニ依ルニ、去年九月七日トアルハ、寛平八年ナレバ、去年二月廿八日トアルハ、寛平九年ニシテ、此格文ハ寛平十年即チ昌泰元年ノモノナルベシ、而シテ其月ヲ詳ニセズ、

又按ズルニ、此文ニ據レバ、寛平八年、左右兵庫造兵鼓吹ノ四司ヲ合セテ兵庫ノ一寮ト爲シ、兵部省ノ管隷ト爲シ、同九年ニ、管隷ヲ改メテ被管ト爲シ、昌泰元年ニ、舊ニ仍リテ又管隷ト爲シシガ如シ、然レドモ文字缺失シテ、其詳細ヲ知ルニ由ナシ、

〔官職難儀〕令外官とは○中略

兵庫なども令には内兵庫左右兵庫とて三の司成しを、皆一にあはせて、今は兵庫寮と計申也、

〔官職秘抄〕後附令内被二減省一之官

兵部省被官　造兵司寛平八年併二兵庫寮一　鼓吹司寛平八年併二兵庫寮一

職員 職掌

〔令義解〕職員一左兵庫右兵庫准レ此

頭一人、掌二左兵庫儀仗兵器、安置得レ所、謂依二軍防令一、凡軍器在レ庫皆造二棚閣一安置色別具レ所是也、出納、曝凉、及受レ事覆奏事一、助一人、大允一人、少允一人、大屬一人、少屬一人、使部廿人、直丁二人、

〔令義解〕考課四慎二於曝凉一謂曝者、陽乾也、凉者、風凉也、明二於出納一、爲二兵庫之最一、謂二助以上一、

沿革

〔日本紀略九一條〕永延元年十一月十七日丙子、今夜子剋、兵庫寮納戎具九間御倉町屋二字燒亡畢、十二月四日壬辰、於八省廊大祓、依兵庫寮失火也、　十二日庚子、奉遣伊勢以下諸社幣帛、依兵庫寮失火事也、伊、石、賀、松、平、春、原、　廿八日丙辰、詔大赦天下、常赦所不免者、赦除之、老人給穀、復百姓半徭、依兵庫寮灾也、

〔百練抄四一條〕永延元年十一月十七日、兵庫寮倉燒亡、自神代所傳之戎具悉爲灰燼、

〔日本紀略十三後一條〕寛仁四年七月廿二日辛未、夜大風吹、壞內裏所々、〇中略兵庫倉一宇、其外不可勝計、

〔兵範記〕仁安三年九月十五日癸酉、陰陽寮擇申可被開出兵庫器仗日時、　十月六日甲午、次下官〇平信範大夫史相議開出兵庫寮器仗、節旗一流、有廿九旒、鉦鼓一面、小鼓一面、懸鈎形、件物等依寮庫顚倒、近來宿納官厨家、今日儀任日時勘文、去月廿七日勘之、未二點、遣行事官、欲令開出之間、寮官存近例持參、仍於此行事可撿知也、旗以下或加修補、可新調由、仰寮官了、任例可注進支度云々、旗以下并寮官供奉裝束任例可致沙汰由、下知本寮了、

〔日本書紀二十九天武〕朱鳥元年正月乙卯、酉時難波大藏省失火、宮室悉焚、或曰、阿斗連藥家失火之引及宮室、唯兵庫職不焚焉、

〔日本書紀二十五孝德〕大化元年八月丙申朔庚子、拜東國等國司、仍詔國司等曰、〇中略於閑曠之所起造兵庫、收聚國郡刀甲弓矢、邊國近與蝦夷接境處者、可盡數集其兵、而猶假本主、

〔令集解五職員〕大同三年正月廿五日、詔、〇中略其內兵庫併左右兵庫、主者施行、

〔官職秘抄後附〕令內被減省之官

左右兵庫寮內兵庫司　昌泰元年、併爲一寮、

〔享祿本類聚三代格四〇上文缺〕

頭一人　助一人　大允一人　少允一人　大屬一人　少屬□□　史生四人

名稱

〔倭名類聚抄五官名〕寮　職員令云、○中略兵庫寮、豆波毛乃々久耳乃官

〔朝野群載六太政官〕諸司訓詞

兵庫寮ツハモノクラノ

〔二中歷七官名〕兵庫ツハモノヽクラ

〔倭訓栞中編十五都〕つはもの、つかさ　倭名抄に兵部省をよめり、兵庫寮つはものみくらのつかさとよむ、

〔倭訓栞中編十五都〕つはものくら　和名抄に庫をよめり、又兵庫を訓せり、

〔職原抄下〕兵庫寮唐名武庫署

廳舍

〔拾芥抄中百官〕兵庫寮宮城内、安嘉門東掖、

〔大内裏圖考證二十八兵庫寮〕兵庫寮　諸圖安嘉門内西腋、大藏省北、漆室東、東西四十丈、南北三十五丈、

〔日本紀略三村上〕天暦元年四月十日乙丑、盜入兵庫寮、仍閲撿盜失物有數、

〔日本紀略五冷泉〕安和二年七月廿三日戊辰、風猶不止、○中略兵庫寮南門、○中略等悉以顚倒、

〔兵範記〕仁安元年十月十五日乙酉、次向行事所、開兵庫寮、爲撿知器仗也、此事去上旬被定御禊雜事之時、被勘日時畢、於待賢門下東、主水司正廳爲行事所也、入東門著西壁下座、大夫史行事史生三四人官掌爲宗等候座、大夫史云、兵庫寮顚倒無實以後、官裝束司倉宿納彼器仗等、運渡此行事所可令撿知者、即仰寮官運寄之、

〔扶桑略記二十五裏書〕承平二年八月廿五日未剋、兵庫倉町西北廿一間倉轉倒、

〔日本紀略四村上〕康保二年十月廿七日癸亥、兵庫倉有火、十一月四日庚午、於建禮門大祓、依去月廿七日兵庫寮燒亡也、十日丙子、奉遣諸社幣、依兵庫寮火事也、伊、石、賀、松、平、春、原、

〔扶桑略記二十六村上〕康保二年十月廿七日、兵庫累代戎具皆以燒亡、

馬神

本寮者、許之、

〔扶桑略記 二十五 裏書〕承平三年正月廿三日庚子、上卿召久永朝臣仰云、近日群盜入交京中掠取人物、宜召仰諸衞結番、令勤毎夜巡撿、以左右馬寮御馬充之者、

〔山城名勝志 一 宮城〕左馬寮

諸社根元記曰、生馬神、天德三年三月廿九日、正三位、坐左馬寮、

右馬寮　諸社根元記曰、保馬神、延喜三年三月十五日、從五位下、坐右馬寮、

〔三代實錄 三十五 清和〕元慶三年二月四日甲子、授左馬寮無位生馬神從五位下、

〔日本紀略 一 醍醐〕延喜元年七月一日庚戌、加左馬寮坐生馬神一級、御馬苦勤甚也、

兵庫寮　内兵庫司併入

兵庫寮ハ器仗ノ安置、出納、曝涼等ノ事ヲ掌ル、凡ソ軍器ノ庫ニ在ルヤ、皆棚閣ヲ造リ、種類ヲ分チテ安置シ、歲每ニ一度必ズ之ヲ曝涼ス、其破損シテ用ニ堪ヘザル者ハ、三年ニ一度之ヲ修理ス、

我國兵庫ノ創設ハ、極メテ上古ニアルベケレドモ、兵庫ノ名ノ國史ニ見エタルハ、孝德天皇ノ大化元年、東國ノ國司等ニ詔シテ兵庫ヲ造ラシメ、國郡ノ刀甲弓矢ヲ收聚セシメタルヲ以テ始トス、而シテ天武天皇ノ朱鳥元年ニ至リ、始メテ兵庫職ノ稱見エタリ、大寶令ニハ、左右兵庫寮ノ外ニ、內兵庫司アリ、其所掌相同ジ、意フニ、非常ノ事ニ備ヘンガ爲ニ、更ニ是設アルカ、平城天皇ノ大同三年、內兵庫司ヲ廢シテ左右兵庫寮ニ併セ、宇多天皇ノ寬平八年、更ニ左右兵庫、造兵、鼓吹ノ四司ヲ合併シテ、兵庫ノ一寮ト爲ス、

〔延喜式（四十八左右馬寮）〕凡年中諸祭祓馬者、二月祈年祭十一疋、六月十二月月次祭各二疋、六月十二月晦祓各三疋、四月七月廣瀨龍田兩社祭各三疋、（四月左二疋、右一疋、七月左一疋、右二疋、增減之數、互以輪轉、前祭二日差馬部一人遂之、）九月伊勢大神宮神嘗祭二疋、齋宮寮主神司六疋、齋內親王遷野宮祓一疋、並覆奏以放近都牧繫飼馬充、自餘所用、臨時聽處分、

凡諸祭幷大祓料繫飼馬、及給人馬者、皆燒返印、但臨時奉名神馬非此限、

〔三代實錄（二十五淸和）〕貞觀十六年二月六日丙申、祭春日神例也、而內裏犬產、○中略左馬寮牛斃、右馬寮馬死、由是停遣勅使、

〔延喜式（四十八左右馬寮）〕凡齋王遷野宮日、鞍馬十疋、（乳母已下御匣人以上料、）車二兩、寮官二人陪從、其向伊勢者、鞍馬十三疋、迄近江國府、（藏人已下女孺已上料、）永充四疋、（一疋御馬、自餘女騎料、其鞍官備、若有闕失、隨卽補之、）

〔延喜式（五齋宮）〕凡御馬二疋、女孺乘馬六疋、並以左右馬寮馬充之、若有死失者請替、

〔延喜式（三十九內膳）〕凡作園所須牛十一頭、以左右馬寮牛充之、其死老者申省請替、官驗其實然後充之、

〔延喜式（四十八左右馬寮）〕凡馬牛、分充衞府者、左近衞看督馬二疋、（櫪飼一疋、放飼一疋、）左兵衞行夜二疋、（櫪飼加鞍、幷衞士每夜充之、）左衞門牛四頭、其櫪飼充秣草、牛亦充草、

凡撿非違使馬四疋、（櫪飼、）其冬月便割左衞門乾蒭內四百斤充之、（右寮割右衞門料充之、）

凡頭已下史生已上、聽騎用放飼御馬各一疋、

〔北山抄（四拾遺雜抄）〕大索事

前一日、上卿奉勅、仰外記召賑給使、差文令參議書、（近例不必差之、）召六府馬寮等官人、○中略令仰馬寮、御馬各廿疋置鞍、官人相具可奉建禮門前、（可充給賑給使料云々、或稱可有行幸、令誡御諸衞幷馬寮等、）

〔續日本後紀（十仁明）〕承和八年正月乙酉、左右兵衞府言、撿舊例、夜行御馬、本寮飼丁控持朱雀門下、待時乘騎、巡撿城中、而去弘仁年中被配此府、其後所行御馬、隨死請替、請替之間、徒經數日、望請依舊例復

令得入京、謹請官裁者、左大臣宣、奉勅、依請、

承和十三年三月廿一日

〔享祿本類聚三代格十八〕太政官符

應專當國飼御馬官人事

右被内大臣宣偁、奉勅、國飼御馬、設爲機速、而大和河内攝津山背伊勢近江美濃丹波播磨紀伊等諸國所飼、或有病患、或有疲弊、若有彼事、必致闕失、此國司等不存捉搦、怠慢所致、奉公之道、豈合如此、宜令長官專當其事、能加撿挍、勿令更然、自今以後、永爲恒例、

寶龜三年五月廿二日

勅、供奉端五之節國飼御馬、自今以後、宜付專知官貢進、如有事故者、差目已上官充替、

寶龜五年五月九日

〔延喜式二十六主稅〕凡國飼馬秣米者、畿内外國共起十月迄三月、疋別日四升、起四月迄九月二升、其牽青馬夫者、畿内及近江丹波起十二月廿五日迄正月八日、人別日米一升二合、鹽一勺二撮、牽走馬夫者、畿内及近江丹波起四月廿五日、伊勢美濃等國起同月廿一日迄五月七日並給食、

放繫

〔延喜式四十八左右馬寮〕凡放播磨國家嶋御馬、寮直移國放繫、寮別卅疋從當年十月始放飼、來年三月下旬繫取、其路次之國、各充使等食幷牽夫遞送、

攝津國鳥養牧右寮 豐嶋牧右寮 爲奈野牧右寮 近江國甲賀牧左寮 丹波國胡麻牧左寮 播磨國垂水牧左寮

右諸國所貢馬牛、各放件牧隨事繫用、

〔延喜式四十八左右馬寮〕凡應放父馬者、具錄色數、奏訖即申官施行、

充用

〔延喜式四十八左右馬寮〕凡諸節及行幸應用國飼御馬者、斟量須數奏聞、乃下官符令進、唯牧放飼馬者、寮移當國、國即令牧子牽送、但攝津國鳥養牧、豐島牧、不移當國、寮直放繫、

繫飼

國飼

諸國貢繫飼馬牛事

右被大納言正三位紀朝臣古佐美宣偁、奉勅、諸國所貢馬牛、或年齒過老、不中乘用、或疲瘦殊甚、不似御馬、加以貢上違期、總爲緩怠、此則所司撿領乖方、國司繫飼不勤之所致也、宜仰所司、馬五六歲、牛四五歲爲限令貢、

延暦十五年十月廿二日

〔延喜式四十八左右馬寮〕凡諸國貢繫飼馬、各隨馬數備刷梳剉麻籠頭共進、

凡課欠駒價稻、每駒徵七十束、

〔延喜式四十八左右馬寮〕凡車駕巡幸鈴印駄、用繫飼强壯者充之、繮人二人、以飼丁充之、於宮門外負駄以列駕前、駕輿丁餉駄一疋、其女騎十八疋、走馬廿五疋、近幸走馬廿疋、自餘馬數臨時聽處分、

凡繫飼馬籠頭鏁若有破損者、取諸國貢馬籠頭鏁充用、

凡繫飼馬每年絆繩料熟麻三斤、分爲三度、疋別一斤、申官請受、

〔延喜式四十八左右馬寮〕凡國飼御馬者、山城國六疋左寮大和國五疋右寮河內國六疋右寮攝津國十疋右寮伊勢國十疋左寮近江國十疋左寮美濃國十疋右寮丹波國五疋左寮每年預前五月五日節、差專當國司牽進、

〔享祿本類聚三代格十八〕太政官符、

應復舊進上國飼御馬事

右得伊勢國解偁、撿案內、弘仁以往、件御馬、以四月廿日爲入京之期、而依太政官去天長三年三月廿九日符旨、改五月五日、以四月廿七日爲節、國飼御馬亦縮例期、四月十日入京、而太政官去天長十年四月廿一日符偁、四月廿七日節、是一時之權制也、非歷代之通範、宜復舊例、以五月五日爲節者、須供節御馬復舊例、而頃年之間、偏執縮期、既忘後改、因茲去年以四月廿日令入京、而左馬寮勘云、無官符輙改其期、於事不當者、羸瘦御馬、求飽生草、雖勤勞飼、忽難肥息、望請因循舊例、四月廿日

以前來五月廿九箇日料粮所請如件、以移、

天平十七年四月廿一日　從八位上行少屬縣犬養宿禰時足

合　損廝二人也

馬牛御牧貢馬

〔延喜式四十八左右馬寮〕御牧

甲斐國〔柏前牧穗坂牧〕眞衣牧　武藏國〔石川牧由比牧〕〔小川牧立野牧〕　信濃國〔山鹿牧大野牧〕〔鹽原牧大室牧〕〔岡屋牧猪鹿牧〕〔平井牧萩倉牧〕

〔笠原牧新治牧〕〔高位牧長倉牧〕〔宮處牧鹽野牧〕〔埴原牧望月牧〕　上野國〔利刈牧大鹽牧〕〔有馬牧拜志牧〕〔沼尾牧鹽山牧〕〔久野牧新屋牧〕市代牧

右諸牧駒者、毎年九月十日、國司與牧監若別當人等〔信濃甲斐上野三國任牧監、武藏國任別當、〕臨牧撿印、共署其帳、簡繫齒四歲已上可堪用者、調良、明年八月附牧監等貢上、若不中貢者、便充驛傳馬、〔信濃國不在此限、〕若有賣却、混合正稅、其貢上馬、路次之國各充秣蒭幷牽夫、遞送前所、其國解者、主當寮付外記進大臣、經奏聞分給兩寮、閱定其品、

凡年貢御馬者、甲斐國六十疋、〔眞衣野柏前兩牧卅疋、穗坂牧卅疋、〕武藏國五十疋、〔諸牧卅疋、立野牧廿疋、〕信濃國八十疋、〔諸牧六十疋、望月牧廿疋、〕上野國五十疋、

諸國貢馬

〔延喜式四十八左右馬寮〕凡牝馬歲廿已上、不在責課之限、

〔延喜式四十八左右馬寮〕凡諸國所貢繫飼馬牛者、二寮均分撿領、訖移兵部省、其數遠江國馬四疋、駿河國牛四頭、相模國馬四疋、牛八頭、武藏國馬十疋、上總國馬十疋、下總國馬四疋、常陸國馬十疋、上野國馬卌五疋、牛六頭、下野國馬四疋、周防國馬四疋、長門國牛二頭、讃岐國馬四疋、伊豫國馬六疋、牛二頭、毎年十月以前長牽貢上、〔路次之國、不充秣蒭牽夫、〕並放飼近都牧、

〔延喜式二十八兵部〕諸國馬牛牧〇中略

右諸牧馬五六歲、牛四五歲、毎年進左右馬寮、各備梳刷刲、其西海道諸國送太宰府、但帳進省、

〔享祿本類聚三代格十八〕太政官符

職員供給

凡馬底板者、廣一尺、厚六寸、長一丈一尺、疋別十枚、櫪長一丈六尺、以一艘充二疋、若有朽損者、申官修理、但底板亦令諸國採送、

凡馬水桶杓杴等及炬松、寮斟量儲充、

〔延喜式四十八左右馬寮〕凡行幸御馬鞍帊、深紫綾一條、（幅二八尺長）御笠帒胡床帒鞭帒宮帒各一口、（並各加油絹帊）騎人錦小袖二口、若有穢損、返故請新、

凡行幸御馬一疋、馬子八人、（右兵衛二人、馬部六人）其裝束人別緋袍（夏單衣）襖子（夏不須）帛汗衫各一領、調布袴一腰、細布帶一條、（長一丈）並隨穢損申官請受、（狩野行幸之日、著緋細布袍袴）

凡寮馬牛斃者、以其皮充鞍調度幷籠頭等料、唯御靴料牛皮七張半、充內藏寮、年中神事料馬皮一張、充木工寮、騎射的料馬皮各二張、充近衛兵衛等府、其除年中用之外、賣却充寮中用、

〔續修東大寺正倉院文書十五〕（左）□馬寮移　民部省

（合）□米壹拾捌斛伍斗陸升（別二升）　鹽壹斗八升五合六勺（別二勺）　布參拾貳段（別一段）

右直丁二人、駈使丁卅人、廝卅二人、幷六十四人料、

（以）□前來五月廿九箇日料粮所請如件、以移、

天平十七年四月廿一日

大初位上守少馬狩忌寸（故）

正七位上行大允蔦井連馬主

小允從七位上久米朝臣廣繩

合　叄廿人（直丁十人、千十人）　勘少錄桑原忌寸

右馬寮移　民部省

合米拾漆斛玖斗捌升、別二升、　鹽壹斗漆升捌合、別二勺、　布參拾段、別壹段、

右直丁二人、駈使丁廿九人、廝卅人、合六十一人料、

仰内辨、

〔延喜式主税二十六〕凡國飼馬秣米者、畿内外國共起十月迄三月、疋別日四升、起四月迄九月二升、其牽青馬夫者、畿内及近江丹波起十二月廿五日迄正月八日、人別日米一升二合、鹽一勺二撮、牽走馬夫者、畿内及近江丹波、起四月廿五日、伊勢美濃等國、起同月廿一日、迄五月七日並給食、

〔令義解八廐牧〕凡官畜應請脂藥療病者、所司預料須數、每季一給、（謂、官畜者、馬寮之畜也、所司者左右馬寮也、言廐請脂及藥、療治廐馬病者、馬寮預料數申官、官即每季一給、其牧畜者不在此例、）

〔延喜式典藥三十七〕諸司年料雜藥

左右馬寮　馬藥石硫黃各六升四合（季別一升六合）

〔延喜式左右馬寮四十八〕凡馬藥每季胡麻油一斗二升五合、椒油六升二合五勺、猪脂三升二合五勺、硫黃一升六合、每年作馬蹄料砥二顆、並申官請受、但薦大四斤、干薑小十斤、奏請隨用盡請、不限年月、

〔延喜式主殿三十六〕諸司所請年料

左右馬寮車油三斗八升三合（寮別一斗九升一合五勺）飼青御馬所料油二斗六升四合（寮別一斗三升二合）季料胡麻油三斗二升（寮別一斗六升）椒油一斗六升（寮別八升）猪膏六升四合（寮別三升二合）

〔延喜式左右馬寮四十八〕凡車五輛、屋形五具、裓五具料、桃染調布四端（具別二丈七尺五寸）縫絲大二分四銖、敷茵五枚、並支度三年一申官儲備、但車油一斗八升每年請受、其鋪取舊廻充新、隨損乃請、不必限年、

凡煮秣豆釜一口、若有損壞、申官返舊請替、

凡櫪飼馬籠頭鏁、若有破損者、取諸國貢馬籠頭鏁充用、

凡櫪飼馬、每年絆縄料、熟麻三斤、分為三度、疋別一斤、申官請受、

凡剉槽者、十疋充一口、方一丈、深二尺、若有壞損、寮加修理、刷梳疋別各一枚、剉二疋一枚、並有破壞、斟量充之、但礪寮採備之、

〔延喜式左右馬寮四十八〕諸國每年進秣料
近江國米百五十斛、備前國大豆八十斛、
右左馬寮料、以正稅春備、并交易充之、若有未進者、每年十二月卅日以前、其錄其數進官、官下所司拘調庸返抄、
播磨國米百五十斛、阿波國大豆八十斛、
右右馬寮料亦准上條、
〔延喜式主計二十五〕凡左馬寮秣料米、近江國百五十斛、備前國大豆八十斛、右馬寮料、播磨國米百五十斛阿波國大豆八十斛、並以彼寮請文勘會抄帳、
〔朝野群載諸國公文二十七〕主計寮解　申返抄事
備前國應德二年雜米使正六位上行
年料、白米仟佰柒拾伍斛
大炊寮納〇中略
左馬寮秣大豆捌拾斛〇下略
〔延喜式左右馬寮四十八〕諸衛府并兩國年料藁
左近衛府四千斤、左衛門府八千斤、左兵衛府三千斤、山城國六千八百卅三斤、畠藁五千八百斤、野藁一千卅三斤攝津國千斤、
右左馬寮年中藁料、右寮准此、
凡閏月料御馬藁者、申官令畿內國進之、
凡諸衛府營作藁畠、二月耕種、七月以前苅收、不得申旱損、
〔貞信公記〕延長九年二月十七日、有官奏事、高堪朝臣左馬寮申諸國御馬藁備前大豆未進等、下勘事

大和國二町五段　山城國十四町六段百八十步

一充右馬寮水田二百卌五町五段三百廿四步

大和國廿四町一段百卌五步　信濃國百八十四町五段二百五十三步

越前國卌五町八段二百九十六步　播磨國一町百五十三步

陸田十七町一段百八十步

大和國二町五段　山城國十四町六段百八十步

勅依前件

大同三年十月十三日

〔本朝文粹二意見封事〕意見十二箇條　善相公清行

一請加給大學生徒食料事

右臣伏以、治國之道、賢能爲源、得賢之方、學校爲本、○中略其後代々下勅、給罪人伴家持越前國加賀郡沒官田一百餘町、山城國久世郡公田卌餘町、河內國茨田澁川兩郡田五十五町、以充生徒食料、號曰勸學田、○中略而年代漸久、事皆睽違、承和年中、伴善男訴家持無罪、返給加賀郡勸學田、又有勅、分山城國久世郡田卌町、爲四分、其三分給典藥左右馬三寮、○下略

〔延喜式左右馬寮四十八〕山城國美豆厩畠十一町、野地五十町餘、

右二寮夏月簡御馬不肥者遣飼、亦諸祭料馬同令放飼、

〔延喜式主稅二十六〕凡勘租帳者、皆據當年帳、○中略左右馬寮田、飼戸田、○中略並爲不輸租田、

〔延喜式主計二十五〕凡左右馬寮牧田地子、除例用遺、國司交易輕物、所送以彼寮返抄勘會抄帳、

〔延喜式主稅二十六〕凡諸國牧馬、不堪貢進者、申官賣却、混雜皮直、每年出擧、用其息利、以充貢馬經國之間、及牧馬秣料、但信濃國者、便用牧田地子、其皮直送左右馬寮、

用途

大少一人宛、六位地下官也、瀧口侍に官を賜ふ時、先此官に任ずる例也、　左右馬屬大少有七位

八位地下官也、

〔延喜式左右馬寮四十八〕大和國京南庄、并率川庄墾田廿四町一段一百卌五步、佃十六町一段一百卌五步攝津國二町、信濃國一百八十四町五段二百五十三步、越前國少名庄卅五町八段二百九十六步、佃十町播磨國一町、

左右馬寮每年依件營種、自餘皆收地子、以充秣料及雜用、其遠國地子者、交易輕物送寮、運功便割其内、但信濃國馬多蒭并貢馬籠頭料亦用地子、所殘交易送之、

大和國京南庄一處、墾田廿四町一段一百卌五步、佃十六町一段一百卌五步與栗栖庄一處、地十五町栗林一町信濃國一百八十四町五段二百五十三步、越前國桑岡尾箕兩庄卅五町八段二百九十六步、佃八町播磨國一町、

左右馬寮並准上條、○中略

畿内畠

山城國十四町六段一百八十步、大和國二町五段、

左右馬寮每年耕營、充年料蒭不足及寮雜用、

山城國十四町六段一百八十步、大和國二町五段、

左右馬寮並准上條、

〔類聚三代格十五〕一充左馬寮水田二百卌七町五段三百廿四步

大和國廿四町一段百卌五步　攝津國二町

越前國卅五町八段二百九十六步　播磨國一町

信濃國百八十四町五段二百五十三步

陸田十七町一段百八十步

皇出自玄輝門、御桂芳坊、依火氣熾、天皇遷御職曹司、十二日戊寅、仰六衛府、左右馬寮、兵庫寮可警固之由、

補任

〔官職秘抄下〕左右馬寮

頭　四位上﨟公達任之、近代及諸大夫自權頭轉任例、(保昌、章任、家保、)五位例、(遠度、遠基、相尹、)　權頭　可然公達諸大夫任之、　助(權)　往代英華貴種人多任之、近代經藏人之輩、幷公達任之、六位例(源悅、在原夏井、)自允轉任例、(藤道秀)　依成功任例、(遠職)　允(大少)　瀧口、院武者所、先坊帶刀、成功者等任之、又御監請任之、或自諸司三分遷之、皆用重代者、又自近衞將監遷任例、(件高尙)　依諸道擧任例、(坂上信親〇中略)　屬(大小)　寮奏、臨時內給等任之、又自近衞將曹遷任例、(播磨陣平)

〔職原抄下〕左右馬寮

頭一人　四位五位中可然之輩任之、知寮務時尤爲重職、　權頭一人　五位殿上人、諸大夫共任之、於諸大夫者尤爲清撰之職、　助一人(權助一人)　五位諸大夫任之、其撰超于他諸司助也、五位侍任之、太備眉目者也、　允(大少)　近代六位侍任之、瀧口給官時任允、是例也、　屬(大少)

〔百寮訓要抄〕左馬寮

頭(典廐令)　四位五位是に任ず、武官にて侍り、殊人をえらばるべし、　權頭　四位五位是に任ず

助(典廐少令)　五位六位是に任ず　權助　おなじ

右馬寮　同左

頭　同左、但聊勝劣は有べし、　助　以下左に同

〔光臺一覽二〕左右馬寮

左右馬頭一人宛　唐名典廐令、諸家四品五位殿上人任之、　左右馬權頭一人宛　五位殿上人、又地下も任之、　左右馬助一人宛　左右馬權助一人宛　唐名典廐少令、五位地下官也、　左右馬允

請之、

同月六日競馬幷騎射式

右當日早朝、鞍細馬十疋、(雖有騎馬不献鞍率奏文、其預此例、)車駕幸武德殿、登時寮頭以御馬名簿進於御監、則傳奏、寮官率近衞十人、令騎細馬、卽以次度、度畢、頭以下從殿後至於馬出埒下、左右近衞中少將與寮頭助共令競走、左右寮允各一人立馬出埒左右側、奏馬名、詞云、某牧若干、某毛御馬若干、有臣下貢者同上條、內豎傳奏、左右近衞將監左右馬寮允屬各一人、率馬醫就馬留標下、注勝負丈尺、競走畢還寮、近衞兵衞官人、率舍人等到來、裝束而騎調馬、陣列向射場、騎射訖、諸衞更亦騎御馬、供奉雜戲、

祭事

〔延喜式 四十八 左右馬寮〕凡平野夏冬祭、櫪飼馬四疋、(二疋赤、二疋白、)園韓神祭二疋、(白)饒人疋別馬部二人、每祭官人一人、率馬醫供奉、其馬、祭畢並還本寮、

凡賀茂二社祭、走馬十二疋、(松尾二疋、在此內也、)馬別韉鞦料調布四尺二寸、表腹帶七尺、結額髮絲二兩、(餘祭馬裝准此)其使、五位已上官一人、(使者裝束之數、見內藏式、)皇后宮走馬二疋、(馬裝同上)並二寮遞供奉、(餘祭准此)又女騎料四疋、(內侍已上料)前祭二日、經御覽、(兩寮之間、點定能否、)齋院女騎料八疋、屬馬醫史生各一人、共預供之、

凡大神社夏祭、走馬十二疋、(二疋儲料)其使、允一人、率馬醫馬部供奉、

凡春日社春冬祭、神馬四疋、(事訖放本牧)走馬十二疋、其使、五位以上官一人、率馬醫一人馬部八人供奉、但馬部各青摺布衫一領、申官請受、事訖返上、

凡大原野春冬祭、神馬四疋、(事訖放本牧)走馬十疋、其使、允一人、率馬醫一人馬部八人供奉、

凡當宗、社本、山科等社夏冬祭、走馬十疋、其使、屬一人、率馬醫騎士馬部等供奉、

警固

〔世俗淺深秘抄 下〕一左右馬頭不警固、陣中行幸時不供奉、但一兩日有逗留行幸之時、雖馬寮可令警固也、總馬寮、非不可警固、

〔日本紀略 六 圓融〕貞元元年五月十一日丁丑、子刻、內裏有火、火出自仁壽殿西面、但中重外舍屋不燒、天

騎射　競馬

前、預前兩寮立繫不調馬之柱各一株、以爲鞍騎之便、五月四日以前、各抽收、鞍不調馬、騎以騎士、但允以下率近衞兵衞官人舍人等還至於寮家、悉鞍馬令騎、其不堪騎者、騎以騎士、但不誤馬次第入埒盡度、度畢、登時寮官率馬醫幷近衞兵衞官人等、就於馬留埒西邊、點定馬走品、寮屬一人執馬簿立馬出埒西邊、毎馬出奏、內豎傳奏、馬馳畢更還寮、簡定騎射料馬、

〔北山抄 二年中要抄〕八月七日牽甲斐勅旨御馬事 卅匹

次上卿召左近次將名稱唯後召左馬頭一人名、○註略稱唯後召右同上、已上取手召左右相列參入、立東階南北、○註略上卿宣云、御馬取禮、同音稱唯、進分取之、○中略無一寮頭助之時、左右共止例、天慶九年八月十七日、穗坂御馬於南殿令分取、左馬頭助不候、仍候氣色、先帝御記、一寮不候之時、又被止一寮、依彼例可行者、去年例、又知之云々、康保二年八月七日、於仁壽殿覽眞衣野御馬、左衞門督藤原朝臣、左中將博雅朝臣、左馬助滿仲、右少將淸遠等令分取、右馬頭助不參、如此之時、令左右次將取之、而召加左馬助失也、依無左右次將令馬頭助分取例、天曆八年九月廿七日、穗坂御馬、依左右次將不參、雖無先例令馬寮分取、有取後院牧御馬之例、官牧無例云々、○中略次將一人與馬頭助一人取例、有近例云云、可注、

〔左經記〕寬仁元年八月廿三日戊子、右少辨蒙仰左右馬寮御馬各二疋可渡東宮之由、傳仰上卿、卽賜宣旨、頭之、牽御馬四疋於北陣邊、右少辨依大殿仰啓事由於皇太后、卽奉令旨可令入東宮御馬之由、召仰陣官等、畢、今朝攝政依固御物忌御座里第、仍有宮令旨也、次菅圓座一枚、敷南孫廂、次大夫進著圓座之後、作啓陣之近衞等取御馬、一々牽御前、隨仰乘下牽出畢、

〔延喜式 四十八 左右馬寮〕五月五日節式

右當日早朝鞍簡定馬、授二府、騎射官人率舍人到來裝束、居駕幸武德殿、左右各以奏文附御監、寮一奏、載射手官人以下官姓名、一寮奏載所出之國毛色、左右隔年互奏其後騎馬陣列而行、寮五位以上官一人、騎馬在前、諸衞射人皆以次列、向於馬場、御馬度畢、右五位以上官一人、在後而行、其所須裝束料物、疋別結額髮料紼絲大二分四銖、韁鞚料調布四尺二寸、表腹帶料七尺、馬幷舍人名札二枚、帒料紼油絹二丈、裹絹等經奏

右得撿甲斐武藏信濃上野等國御牧使右馬助源悅解狀偁、牧失官馬牛者、可徵牧子長帳之文已明也、於國司及牧監、其法未立、唯勘諸牧帳、國司牧監相共署印、然則御馬欠失何當不知、今撿實之日、若无實馬數多者、依令只徵牧子長帳哉、將依勘署帳責國司牧監哉、若可共責者、牧子長帳已有率分、國司牧監未見其數、使准何法將辨行之者、中納言兼右近衞大將從三位藤原朝臣時平宣、奉勅、凡於致欠失國司牧監共有其罪、然而國司雜務繁多、不遑專一、須責其怠不可徵物、但牧監專行牧事、無所兼濟、亦須勘其怠准牧子徵之、

寬平五年三月十六日

飼養

〔令義解八廐牧〕凡廐細馬一疋、中馬二疋、駑馬三疋、謂細馬者上馬也、駑馬者下馬也、各給丁一人、獲丁每馬一人、謂以馬戸丁充、其飼乾之日、不充獲丁、但於採木葉者、不可每馬充一人、此須兼口而量充、即依下條、番役之外、亦輸調草、是也、日給細馬粟一升、稻三升、謂稻者半穗米、故稱升也、豆二升、鹽二勺、中馬稻若豆二升、鹽一勺、駑馬稻一升、乾草各五圍、木葉二圍、周三尺爲圍、青草倍之、謂倍於乾草也、皆起十一月上旬飼乾、四月上旬給青、其乳牛給豆二升、謂給草之法、待式處分、稻二把、取乳日給、

〔延喜式四十八左右馬寮〕凡細馬十疋、中馬五十疋、下馬廿疋、牛五頭、每年四月十一日始飼青草、十月十一日以後飼乾草、馬日二束半、牛二束、束別重十斤二兩、其飼丁馬別一人、以衞士充、但刈青草丁幷飼牛丁總七十四人、幷充仕丁、其飼秣者、冬細馬日米三升、大豆二升、中馬下馬各米一升、大豆一升、牛米八合、夏細馬日米二升、中馬一升、下馬及牛不須、

駒牽

〔延喜式四十八左右馬寮〕四月廿八日御監駒式小月廿七日

右當日早朝、調列櫪飼御馬八十疋、國飼卅一疋、車駕幸武德殿、登時官人率御馬自便門出、至於馬出埒下、寮頭以御馬名奏進於御監、御監即執奏、而後左右寮頭左右分立於御馬之前、允一人執簿進立殿前、乃從埒西外御馬稍進、比至御前奏馬名、詞云、某司御馬合若干、寮飼若干、某國御馬駒若干、有臣下貢者、稱姓名貢御馬、度盡退出、次右寮御馬如前、左右寮助亦左右分立、度畢即左兵衞陣

上卿奉勅、下宣旨於辨官、給官符、

〔類聚三代格十五〕太政官符

應賜信濃國監牧公廨田事

右被大納言從三位神王宣口、奉勅、監牧之司、雖非正職、而離家赴任、有同國司、宜以埴原牧田六町爲公廨田、自今以後、永爲恒例、但以當土人任者、不在賜限、其新任之年、便以牧田稻給佃料町別一百廿束、

延曆十六年六月七日

〔類聚三代格十五〕太政官符

置甲斐國牧監事

右得彼國解偁、此國所領牧、與信濃國同、頃年蕃息漸多、繫飼歳倍、牝牡之數于今千餘、而至當監事品秩稍卑、按撿馬政、於事無勢、望請准信濃國同置牧監、謹請官裁者、正三位行中納言兼右近衛大將春宮大夫良岑朝臣安世宣、奉勅依請、

天長四年十月十五日

太政官符

應復舊加置信濃國牧監一員事

右牧監元置二員、而依太政官去天長元年八月廿日符、減一員置一員、今被右大臣宣偁、奉勅、宜復舊置二員、其歷限幷責解由等、一依先符、

天安二年五月十一日

〔享祿本類聚三代格十八〕太政官符

應令牧監塡償欠失牧馬事

牧監別當

上卿奉勅仰下寮官人可仰助歟、無助之時、外記仰官人、近代例也、

〔北山抄六〕下宣旨事

馬寮御監事　仰寮官、近例或令外記傳宣云々、

〔官職知要中〕牛車馬寮御監之事

御監者、或云、御監閑馬之意、又一說御厩馬監騎射之儀也といへり、〇中略逍遙院殿〇實隆四三條御說曰、御監とは書下ものなり、左右大將これをうけ給り、御厩のことをしり給ふとみえたり、

〔光臺一覽四〕將軍宣下の節は、宣旨十一通一度に被下候、御兼任の官職多く有故也、〇中略此宣旨は、文昭院樣之將軍宣下の時也、大外記官務の諱も其通りなり、〇中略

　　　　　　　　　　　　內大臣正二位兼右近衞大將源朝臣家宣

　右以件人、宜令兼補右馬寮御監、

　　寶永六年四月幾日　大外記正六位上兼右大史掃部頭酒造正中原朝臣師英奉

〔官職知要中〕牛車馬寮御監之事

今案、御監之外、左右馬寮の別當あり、左馬寮別當は今出川家之職也、右馬寮別當は三條正親町家之職なり、今出川家大將之時といへども、猶此職勤仕し給ふよし承りぬ、

〔延喜式二十八兵部〕凡任牧監者、甲斐國一人、信濃國二人、上野國一人、並令把笏、秩限六年、准國司責解由、其考左右馬寮按定、十一月卅日以前送省、

〔延喜式四十八左右馬寮〕凡甲斐信濃兩國牧監、左寮武藏國別當、上野國牧監、右寮各撿功過上日寮考、十一月卅日以前移兵部省、

凡官牧馬帳、甲斐國信濃上野附牧監、武藏國附別當進寮、寮勘損益移主計寮、

〔西宮記臨時二〕諸牧牧監別當事

厩之馬、敎賴馳訴主君按察大納言、〇藤原實行 是依爲近隣、大納言三條南高倉東、敎賴三條東洞院、自大納言家并左兵衞督家、下部等數十人出來、欲奪留件馬之間、依人數少馬部二人被毆陵、其殘一兩逃脫已了、〇中略 其後無音、而今有此事、廿七日 敎賴裝束等、入其車被送按察許、答云、何可給哉、宜遣主許也云々、敎賴仍此事號ハダカノ馬助、

飼戶

〔令集解五職員〕穴云、飼丁猶言飼戶、古記及釋云別記云、左馬寮飼造戶二百卅六戶、馬甘三百二戶、右馬寮馬甘造戶二百卅戶、馬甘二百六十戶、右馬造戶等仕寮者爲伴部、免調雜徭、不仕者取調、其馬甘爲雜戶、免調雜徭、以前雜戶、品部戶莫差兵士、但品部或常品部、或差人夫、年代充品部、

天平勝寶三年官符云、馬飼者悉充雜徭、如舊作番上下左右馬寮、國司與本司共撿按勿令遺漏、

〔延喜式四十八左右馬寮〕飼戶

山城國六烟、大和國卅烟、河內國一百八烟、美濃國三烟、尾張國九烟、

右隷左馬寮、每年當國計帳進官、官先下民部省、令勘損益乃下寮、

右京職三烟、山城國五烟、大和國卅九烟、河內國五十一烟、攝津國十六烟、美濃國三烟、

右隷右馬寮、並准上條、

凡飼戶計帳者、國司每年勘造進寮、其絕戶田每年賃租送官、

馬戶

〔令義解八廐牧〕凡馬戶、分番上下、謂次丁以上也 其調草正丁二百圍、謂若有水旱年實不登者、准畿內國例、唯免其輸、不免番役也、次丁一百圍、中男五十圍、

〔延喜式二十二民部〕凡左右馬寮刈草仕丁百卅八人、均充二寮、

御監

〔書言字考節用集三官位〕馬寮御監續日本紀、和銅四年十二月、以葛城王補馬寮監、

〔續日本紀五元明〕和銅四年十二月壬寅、以從五位下葛木王補馬寮監、

〔西宮記臨時二〕左右馬寮御監事

馬部

〔令義解八廐牧〕主帥准牧長謂、馬部之當番者也

〔延喜式四十八左右馬寮〕凡馬部卅人、取負名入色者充之、

〔延喜式二十八兵部〕凡左右馬兵庫等寮掌使部、馬部、並省補之、

〔續日本紀三十稱德〕寶龜元年八月戊午、初天平十二年左馬寮馬部大豆鯛麻呂、誣告河內國人川邊朝臣宅麻呂男杖枚代勝麻呂等、編附飼馬、宅麻呂累年披訴、至是始雪、因除飼馬之帳、

〔禁秘御抄下〕一給馬部吉上
所衆瀧口等有咎下寮、於殿上口給之、馬部相具罷出、

〔禁秘御抄下〕一召人
侍臣遲參、或稱障不參之時、或遣實檢使、稱病侍醫遣之、凡殿上人召使、藏人瀧口、藏人已下或馬部、康治節會少納言不參、以外記使部召之、藏人方馬部也、馬部召藏人有通、乍著水干引立、參殿上口、希代珍事也、

〔古事談一王道后宮〕保延五年四月廿五日、齋王令入本院給之後、次第使左馬助藤原敦頼、與肥前權守俊保同乘退出之間、於一條大宮、馬部數十人搦之、先引落自車、俊保同被引張云々、然而於俊保者放弃之、敦頼更返乘、馬部等圍繞之、時向中御門西洞院邊停車、申子細於右兵衛督家成卿、其時家成在西洞院中御門家云々武衛酒宴之間也、馬部付侍申達云、去年不辨手振裝束、馬助日來雖相尋逃隱不相逢、今日適搦取候、欲剝其裝束如何、答仰云、可取者可取、不可取者不可取云々、是依中間不委沙汰之意也、馬部走還又引落敦頼、冠襪不殘一物剝取其裝束、又牛車等同取之、追放敦頼、敦頼拘其摩良走入小屋了、尋其由緒之處、去年敦頼奉仕寮使、依先跡手振裝束即可給馬部等也、而敦頼云、今度裝束依事不諧借用他人也、仍可返納、後日以代物可辨馬部也、馬部等承諾又畢、其後馬部頻雖責乞不致其辨、或隱不逢、已似所遁、馬部訴右兵衛督、是仍寮頭父也、武衛云、汝等不覺也、何不責取哉、仍馬部入敦頼宅取立

馬允一方十人也、而久安比、左四十人、右四十人爲員數、被宣下、近代不知其數云々、

馬醫

〔續日本紀 十一 聖武〕天平三年十一月丁未、太政官處分、武官醫師、使部、及左右馬監、馬醫、帶仗者考選、及武官解任者、先例幷屬式部、於事不便、自今以後令兵部掌焉、但正身依舊在寮上下、

〔續日本紀 八 元正〕養老三年六月丙子、令(中略)左右馬寮馬醫等始把笏焉、

〔延喜式 二十八 兵部〕凡(中略)左右馬寮馬醫各二人、史生各四人、但六衞府府生、幷馬寮馬醫、史生、待宣旨補任、自餘省補之、

史生

〔令集解 五 職員〕大同四年三月十四日官符云、應新置幷加置諸司史生員事、左馬寮四員(元二員、今加二員)右馬寮四員(元二員、今加二員)以前被右大臣宣偁、奉勅夫官職之員、事資閑繁、寮司之務、孰無繕寫、而諸司史生先無定准、或闕此員、實乖適時、宜量事廢置令濟理務者、謹依勅旨加増幷新置等員如件、(○又見享祿本類聚三代格、日本後紀)

〔職官志 五〕史生　集解、大同四年三月加二員、通前四員、其元員未詳置何世、恐是職員令誤脱不載、

〔令集解 五 職員〕弘仁四年三月十三日官符云、應令史生帶劒事、右得左右馬寮解偁、夫馬者軍國之用、非常之備、掌守之司、不可無備、望請令史生帶劒備于非常者、右大臣宣、奉勅依請、

〔延喜式 十二 中務〕時服　左馬寮廿八人(中略)史生四人

〔延喜式 二十八 兵部〕凡諸衞府生已上新補任者、省具錄移本司奏聞、然後帶仗、(中略)其左右馬寮兵庫寮史生已上補任之後、省移本司、即令帶仗、自餘雖任本衞判帶、

凡左右馬寮史生、准諸衞府生給季祿、

騎士

〔延喜式 二十八 兵部〕凡左右馬寮騎士、每寮十人、(中略)省隨其解移申官、勘籍補之、其考帳者、每年送省、

〔延喜式 四十八 左右馬寮〕凡騎士十人、隨其才移兵部、勘籍即預寮考、若無故不上者還本、其衣服夏冬二季申官、

頭一人、掌左閑馬調習養飼、供御乘具、〈謂是即自内藏寮所送者、其在大藏賞賜之料、亦同送焉、〉配給穀草及飼部戸口名籍事、助一人、大允一人、少允一人、大屬一人、少屬一人、馬醫二人、馬部六十人、使部廿人、直丁二人、飼丁、

〔唐六典十七大僕寺〕典厩令、掌繫飼馬牛、給養雜畜之事、丞爲之貳、

〔令義解四考課〕調肥閑馬、不脱飼丁、〈謂脱漏也、不從戸貫、爲脱也、〉爲馬寮之最、〈謂助以上、〉

〔令義解官位〕從五位〇上 左右馬頭 正六位〇下 左右馬助 正七位〇下 左右馬大允 從七位〇上 左右馬少允 從八位〇上 左右馬大屬 馬醫 從八位〇下 左右馬少屬

〔拾芥抄中本官位唐名〕馬頭〈左 左右馬寮尚書局駕部大僕寺乘黃典厩署、右 駕部郎中尚書奉御大僕卿典厩令乘黃令〉 助〈駕部員外郎大僕小卿侍馬、尚書直長部尉典厩員外郎〉 允〈大僕丞乘黃丞馬部、尉典厩丞尚書直長〉 屬〈駕部主事尚乘令史尚乘、書令史大僕主簿典厩府〉 馬醫〈獸醫〉 史生〈尚乘書史〉 馬部〈習馭〉

〔百寮訓要抄〕左馬寮〈典厩〉 諸國の牧の馬を立をかる、延喜式にのする所、毎年の御馬數百疋に及べり、諸國の牧又其數をしらず、駒牽といふ事は八月ばかりにて當時は侍れども、月々の駒牽其數有、委細は延喜の左馬寮式に見えたり、

〔官職秘抄下〕左右馬寮

允〈大少〉〇中略

令云、大少允各一人、其後任人多加、而久安被下宣旨、以左右允各二十人、爲員數、近代及四五倍、

頭註 久安四年正月廿七日、左右馬允各廿五人、保元三年正月卅日各卅人、

〔百練抄七近衞〕久安四年正月廿八日、左右馬允廿五人、〇中略永可爲員數之由、被仰外記、

〔職原抄後附〕左右馬允各二十五人、〈中略〉久安四年正月二十七日、以藏人木工頭平範家、仰外記、左右馬允各二十人、〇中略永可爲員數者、〈保元三年正月三十日、以藏人右少辨親範、仰外記、〉

〔拾芥抄中本官位唐名〕馬頭〈左右〉

職員 職掌

〔百寮訓要鈔別註七〕左馬寮　令條ニハ、兵部省ノ被管ニ兵馬司ト云アリテ、諸國ノ牧馬ヲ取テ、軍團ニ屬テ是ヲ養シメ、軍馬ノ備トナシ、又公私ノ馬牛トテ、傳馬公廨ノ馬牛ヲ沙汰シ充ルヲ公ト稱シ、又官畜ニ非シテ民間ニ馬牛ヲ養シメテ、蕃飼スルコトヲ掌ル、是ヲ私ト云ナリ、此馬牛ハ國家ノ大事アレバ、夫ヲ差シ發セシメテ、事ノ用ニ備ヘンガ爲ナリ、其掌リニヨテ諸國ノ牧ノ事ヲモ、兵馬司ヨリ管領セシナリ、〇中略然ルニ嵯峨天皇大同三年正月、兵馬司ヲ止メテ當寮ニ併セラルヽヨリ以來、諸國ノ牧ノコト、及兵馬ノ事、又公私馬牛等ノ事、并郵驛傳馬等ノ事マデモ、一々當寮ノ掌ル事ニナリタリ、其義ハ悉ク厩牧令ト、左馬寮ノ式ニアリ、

〔享祿本類聚三代格四〕太政官符

應置書生十人事

右得兵部省解偁、〇中略依去大同三年正月廿日詔書、廢兵馬司、自玆以後、彼司之務、總歸於省、衆務繁劇、既殊昔時、望請、准式部省、置件書生者、被右大臣宣偁、奉勅、式部省書生總卅人、宜停其十人依件令補、試其身才、然後補之、不得令濫吹之輩輙備其員、

弘仁四年七月十六日

〇按ズルニ、此格文ニ據レバ、大同三年ニ兵馬司ヲ廢シ、其職掌ハ兵部省ニ歸シタルコト明ナリ、然ルニ官職秘抄後附ニ馬寮ニ併ストアルハ、據ロ未ダ詳ナラズ、而シテ百寮訓要鈔別註ノ言ノ如キハ、官職秘抄ニ據リタル臆說ナランヽ

〔職官志五〕左馬寮秘鈔、大同五年正月、併左右馬寮爲一、然其後降此官名、仍有左右、則復分之也、復分之未詳在何世、

〇按ズルニ、此ニ秘鈔トアルハ、官職秘抄ヲ云ヘルナルベケレド、該書ニコノ記事ナシ、且ツ大同五年ニ左兵馬寮ヲ併セテ一ト爲シヽコト、國史格文ニモ見ル所ナシ、甚ダ疑フベシ、

〔令義解一職員〕左馬寮右馬寮准此

〔續日本紀 桓武三十六〕天應元年五月乙丑、從四位上伊勢朝臣老人爲主馬頭、癸未、從五位下安倍朝臣祖足爲主馬助、

〔續日本紀 桓武三十七〕延暦元年閏正月甲子、從五位下多治比眞人三上爲主馬頭、外從五位下大荒木臣押國爲助、八月乙亥、正五位下粟田朝臣鷹守爲主馬頭、

〔續日本紀 桓武三十八〕延暦四年正月辛亥、正五位下多治比眞人人足爲主馬頭、七月壬戌、從五位下石浦王爲主馬頭、

〔續日本紀 桓武三十九〕延暦六年二月癸亥、從五位下大伴王爲主馬頭、

〔續日本紀 桓武四十〕延暦十年七月癸亥、從五位下淺井王爲主馬頭、丹波守如故、

〔日本後紀 桓武十二〕延暦二十三年四月壬子、侍從從四位下葛野王爲兼主馬頭、

〔日本後紀 桓武十三〕大同元年二月庚戌、從五位下紀朝臣八原爲主馬助、四月辛亥、是日從五位下藤原朝臣山人爲主馬權助、

○按ズルニ、寶龜九年二月庚子、從五位下笠朝臣望足右馬頭ト爲リ、同十年九月庚午、從五位下正月王左馬頭ト爲リシヨリ、大同三年六月庚申、從五位上藤原朝臣淸主左馬頭ト爲リ、從五位上坂上大宿禰石津麻呂右馬頭ト爲リシマデ、凡ソ三十年間ハ、左右馬寮ノ事、國史ニ於テ一モ記載ナシ、而シテ主馬寮ノ事ニ至リテハ、記事一二ニ止マラザルコト、此ニ列擧スル所ノ如シ、且ツ延暦十四年ノ格ノ如キハ、衞門府以下中衞府マデ、擧グル所皆武官ノ諸司ノミナルニ、主馬寮ヲ擧ゲテ左右馬寮ヲ擧ゲザルヲ見レバ、當時左右馬寮ヲ廢シテ主馬寮ヲ置キ、大同年間ニ至リ舊ニ復セシコト、殆ド疑フベカラザルガ如シ、

〔官職秘抄 後附〕令内被減省之官

兵部省被官　兵馬司 大同三年正月併馬寮

沿革

〔百錬抄八高倉〕安元二年十一月八日、右馬寮廳御廐等燒亡、

〔日本書紀二十二推古〕元年四月己卯、立廐戸豐聰耳皇子、爲皇太子、仍錄攝政、以萬機悉委焉、橘豐日天皇第二子也、母皇后曰穴穗部間人皇女、皇后懷姙、開胎之日、巡行禁中、監察諸司、至于馬官、乃當廐戸、而不勞忽産之、

〔令義解一職員〕左馬寮右馬寮准此

〔享祿本類聚三代格四〕太政官符

應定諸司使部事〇中略

主馬寮十人〇中略

以前〇中略自今以後、永爲恒例、

延暦十四年七月十日

〔類聚三代格十五〕太政官符

一返收田十三町元大學寮勸學田

大和國七町十市郡　近江國六町栗太郡

右爲充二寮收之

一充二寮田十三町即同勸學田

典藥寮勸學田八町大和國四町近江國四町

主馬寮公廨田五町大和國二町近江國三町

右更加置之

以前被右大臣宣偁、奉勅如右、

延暦十七年九月八日

ニ至リ、兵馬司ヲ廢セリ、

名稱

〔倭名類聚抄五官名〕寮　職員令云、(中略)右馬寮、(美岐乃牟萬乃豆加佐、)左馬寮、(比多里乃牟萬乃豆加佐、)

〔令集解五職員〕左馬寮(穴云、馬乃司、)

〔職原抄下〕左右馬寮(唐名典廐)

〔空穗物語祭の使〕かくてとのよりまつりのつかひいでたちたまふ、兵衞つかさのつかひには中將君、くらつかさの使にはくらのかみかけたるゆきまさ、むまつかさの使には式部卿の宮のむまの君ぞいでたち給、

廳舍

〔拾芥抄中本百官〕馬寮(左右、宮城內談天門北掖)

〔大內裏圖考證二十八左右馬寮〕左馬寮

諸圖左馬寮在藻壁門內南掖談天門內北掖、南北八十四丈、東西三十五丈、

右馬寮

諸圖右馬寮在宮城西南隅談天門內南掖、南北八十四丈、東西三十五丈、

〔日本紀略一醍醐〕延喜十三年十一月七日乙巳、大風猛烈、左馬寮顚倒、人死、

〔日本紀略三村上〕天曆元年二月三日己未、早朝、鹿入右馬寮、臥䑺船下、至豐樂院、爲西獄盜人被打殺、

七月四日丁亥、今夜大風猛烈、京中廬舍、或顚倒或破壞、(中略)左馬寮造酒司南門、典藥寮東檜皮葺屋等顚倒、

〔百練抄七二條〕長寬元年十二月十三日、左馬寮(中略)等燒亡、

〔續日本後紀八仁明〕承和六年四月丙寅、火于左馬寮廐町、其燼飛落中院細殿之上、撲滅焉、

〔左經記〕長元七年八月十一日戊辰、右馬寮廐町舍顚倒、御馬五匹被打殺、雖然翌日壞掘見之、一匹不損云々、

野修理大夫持種ノ子義敏ヲ執リ立、任右兵衛佐家督ヲ續シム、

〔重編應仁記十〕斯波今川於遠州軍事附朝倉出身事

斯波家ハ代々尾張守ニ任ゼシ故ニ、名氏ヲ尾張トモ名付ケ、又應安年中ヨリ、代々洛中ノ二條武衛陣ト云所ニ宅地ヲシメ居ケル故ニ、武衛家共稱號シケリ、

〔異稱日本傳下四日本國紀〕左武衛殿居國王殿南、世與畠山細川相遞爲管提、掌他國使臣支待諸事、後光嚴天皇應安三年庚戌、宣德三年源義淳遣使來朝、書稱左武衛源義淳、○中略

今按、武衛之號、志波尾張守高經之子義將任右兵衛督、兵衛唐名武衛、故其子孫世號武衛、

○按ズルニ、尊卑分脈斯波系圖ニハ、義將右兵衛督ニ任ゼラレシコト見エズ、右兵衛ニ任ゼラレシハ其子義重ナリ、異稱日本傳ノ說ハ誤レルニ似タリ、又重編應仁記ニ、斯波家代々武衛陣ニ任セシ故ニ、武衛家ト號セシ由云ヘレド、イカガアラン、系圖ニ據レバ、斯波家代々兵衛佐タリシコトハ、殆ド例ナルガ如シ、意フニ武衛ノ號此ニ起レルカ、

左右馬寮

左右馬寮ハ、官馬ノ調習養飼、及ビ供御ノ乘具、穀草ノ配給、飼部ノ戶口、名籍等ノ事ヲ掌ル、凡ソ官馬ハ、毎年御牧及ビ諸國ノ牧ヨリ貢上スルモノニシテ、左右馬寮、均分撿領シテ之ヲ飼養ス、御牧ハ本寮ノ掌ル所ニシテ、諸國ノ牧ハ兵部省ニテ掌ル所ナリ、

古代牧馬ノ事ハ、甚ダ之ヲ重ンジ、馬養部アリテ之ヲ飼養シ、馬養首及ビ造アリテ之ヲ統領セシガ、大寶令制定ノ時ニ至リ、左右馬寮ヲ置キ、專ラ官馬ノ事ヲ掌ラシメ、兵部省ノ下ニ兵馬司ヲ置キテ、牧及ビ兵馬、郵驛、公私ノ馬牛ノ事ヲ掌ラシメタリシガ、平城天皇ノ大同三年

用途

雜載

ニトヾマル、大夫尉三人、コノ時初ルナリ、

〔平戸記〕仁治元年十二月五日甲子、今朝除目聞書披露、（中略）

主殿權助惟宗行重　可賜左兵衛兼字

行重、允行範息云々、以諸司助兼兵衛尉、希代不次之恩也、行範大殿寵人之間、近來誇張、世以驚目、剩今有此事、道路以目、莫言々々、

〔延喜式〕（四十七左右兵衛）幕卅條（絁十條、細布十條、調布十條、）十並廿年一度、申官作替、其儀服已下破損物、充府中雜用、

〔延喜式〕（四十七左右兵衛）芻畠七町五段（在山城國）

〔拾芥抄〕（中末宮城）諸司厨町、　左兵衛町（近衛南、堀川東一町、）

〔實隆公記〕永正三年四月六日乙卯、新大納言與侍來臨、有縫殿卿知行右兵衛府領（攝津國）事、有被尋下之子細、愚存分申入之、

〔續日本紀〕（二十孝謙）天平寶字元年八月辛丑、勅曰、六衛置射騎田、毎年季冬、宜試優劣、以給超群、令興武藝、（中略）左右兵衛府各十町、（○又見類聚三代格）

〔延喜式〕（四十七左右兵衛）射田十町、（在近江國）其地子者、充敎習騎射步射用、但右府射田、在播磨國、

〔延喜式〕（四十七左右兵衛）凡兵衛卅人、三年一給大衣、錄奏請、（色同近衛府）兵衛四百人、番長四人、橫刀緒料深緑帛、人別七尺五寸、隔三箇年奏請、（但右兵衛深緑纈、）凡臨時行幸、靑揩衫二百領料、細布一百端、（衫別二丈一尺）綵一斤九兩、（別三銖）生藍卅圍、（直）並隔三年申官請受、染揩裁縫、常有四百領、

〔重編應仁記〕（三）武衛騷動事

文正元年ノ夏四月、武衛ノ義敏ト義廉ト家督爭ヒ騷動ス、其故ハ去ル永享八年九月廿九日、武衛ノ總領千代德丸落馬シテ、同月晦日申ノ剋ニ卒去セシム、（中略）家督相續ノ子無キニヨリ、一族大

參議從三位藤能保（四十四、右兵衞督、正月廿四日兼伊豫權守、七月十八日轉左、）

〔續日本紀 二文武〕大寶元年正月丁酉、以守民部尚書直大貳粟田朝臣眞人爲遣唐執節使、○中略右兵衞率直廣肆坂合部宿禰大分爲副使、

〔續日本紀考證 二文武〕右兵衞率（卒、卽率字、所類反、與帥同、卜本、永正本、補寫本、擬本、作率、乃率之俗字、案古鈔本諸書、率士率先之率、多作卒、卒率音近、遂以卒字筆畫多繁、或借用卒字、猶部領作部令、辨官作弁官之類也、）

〔續日本紀 四元明〕和銅元年三月丙午、以從五位上佐伯宿禰垂麻呂爲左兵衞率、從五位下高向朝臣色夫知爲右兵衞率、　二年十一月甲寅、從五位上田口朝臣益人爲右兵衞率、

〔續日本紀 十七孝謙〕天平勝寶元年八月辛未、左兵衞率正五位下鴨朝臣角足、○中略爲兼大忠、○中略（紫微）

〔續日本紀 十九孝謙〕天平勝寶八歲五月乙亥、勅曰、○中略右兵衞率從五位上鴨朝臣虫麻呂、○中略敍、○中略從四位下、

〔續日本紀 二十孝謙〕天平寶字元年六月壬辰、從五位上日下部宿禰子麻呂爲左兵衞督、從五位下石川朝臣人公爲右兵衞督、

〔職官志 五〕兵衞督、考之史、其初作率、和銅元年從五位下佐伯垂麻呂爲左兵衞率、從五位下高向色夫知爲右兵衞率、天平勝寶元年、亦有左兵衞率正五位下鴨角足、至寶字蓋改率作督、故元年從五位上日下部麻呂爲左兵衞督、從五位下石川人公爲右兵衞督、

〔續日本紀 三十四光仁〕寶龜八年四月己卯、從五位下紀朝臣眞乙爲左兵衞員外佐、

〔公卿補任 圓融〕天延四年（丙子○貞元元年）

（辭守、大男申任兵衞尉例）

參議正四位下源惟正（四十八、修理大夫、備前守、正月廿六日辭守、以男進理申任左兵衞權尉、）

〔續古事談 五諸道〕盛重ハ童名今犬丸ナリ、下﨟ナレドモ、心ギハウルセクスクヨカナル者ナリ、カヽレバ次第ノ昇進、多クハ別功ノ賞也、盜人射トヾメテ兵衞尉ニナリ、仲正ガ郎等カラメテ大夫尉

直臣　佐　權佐　一已上任人如衛門佐、少納言兼任例、法興院大臣、能信、大自馬助遷任例、俊輔、政長、四位例、齊敏、清盛、　尉大少　諸宮侍長、先坊帶刀、攝政内舍人、或成功者等任之、或自諸司三分遷任之、凡以重代授之、又有依文章生勞身任例、清原爲長、源政隆、又有依府奏任例、高階眞任○中略　志大少　本府奏、或臨時内給任之、自帶刀任例、藤眞臣

〔職原抄下〕左右兵衛府

督一人　中納言、參議、散二三位、非參議四位等皆任之、　佐一人　權佐一人　五位殿上人中、可然之輩任之、但英雄强不望之、即任少將故歟、　尉大少　六位諸大夫幷侍任之、侍者自當府尉多轉衛門也、諸大夫不必然、　志大少　非要官、仍府官之外、强不任之、　府生　同前

〔百寮訓要抄〕左兵衛府

督武衛大將軍　三位四位是に任ず、衛門に同、但聊おとるべし、○中略　佐武衛次將　殿上地下の五位是に任ず、　權佐　同上○中略　尉　地下の六位任ず

右兵衛府　同左　督　三位四位是に任ず　佐　權佐皆左におなじ

〔任官勘例〕左右兵衛督大辨任例　希世○中略

左右兵衛權佐兼任少納言例　法興院殿　能信

自馬助遷任左右兵衛佐例　俊輔　政長

〔光臺一覽二〕左右兵衛督、一人宛　唐名武衛大將軍、從三位以上中納言なり、四品に任ずる事は間々例也、　左右兵衛佐、一人宛　左右兵衛權佐、一人宛　唐名武衛次將、　諸家五位ノ殿上人任之、或ハ少將に任じ難き家筋之人任之也、

〔公卿補任後鳥羽〕文治六年○建久元年

參議任左兵衛督、納言任右兵衛督例

權中納言正三位藤兼光四十六、七月十八日兼右兵衛督、能保轉任左兵衛督替、

ゑふたてまつる、これになづらへて、さうひやうゑふばかりたてまつるにや、

〔延喜式四十三春宮〕凡東宮鎮魂日、所司裝束宮内省、同御、○中略左右兵衛各四人、陣列前後、向祭處、入自南門、到堂南東階前而留立、

〔東宮年中行事十一月〕なかのみの日、ちむこんのまつりの事、

さうのひやうゑ、をの〳〵四人ぐぶ、所のしゆ八人、そくたいしてせむくうす、たちはき一人、いくはんにてくるまのしりにありて、くないしやうにいたりて、あくのきたにくるまをたてたり、

〔東宮年中行事十二月〕しものむまのひ、みぐしあげの事、

このひ、御めのと、もしはしかるべき上らう女房、御ぐしをあひぐして、宮づかさのびりやうにのりて、殿もんれうにむかふ、○中略女房ならびに左右ひやうゑ、たちはきら、ぐぶ、殿もんれうにいたる、

叫閧

〔延喜式四十三春宮〕凡十二月晦日戌時追儺、○中略兵衛開門如常、

〔續日本紀三十八桓武〕延暦四年正月丁酉朔、天皇御大極殿受朝、○中略始停兵衛叫閧之儀、

〔續日本紀考證十二桓武〕兵衛叫閧案隼人式、凡元日、即位、及蕃客入朝等儀、官人史生率大衣隼人等分陣應天門外左右、群官初入、自胡床起發吠聲三聲云々、兵衛叫閧疑亦此義、

○按ズルニ、叫閧ハ大舍人ノ叫門ニ同ジ、隼人ノ吠聲トハ異ナリ、考證ノ説當ラザルガ如シ、

從雜役

〔延喜式四十七左右兵衛〕凡毎月晦日、掃除宮中者、差將領府生一人、兵衛四人、送民部省、

〔侍中群要十〕伐中重枯木事　仰左右衛門府令伐、若隨便陣仰令左右兵衛伐、其木之由、至于木作物所申之、

補任

〔官職秘抄下〕左右兵衛府

督　任人同衛門督、但殿上四位或任之、大辨兼任例、希世中辨兼任例、後實近衛中將兼任例、經清五位任例、

行啓供奉

御同、並

〔延喜式左右兵衞四十七〕凡供奉行幸官人以下裝束、並准近衞、騎私馬、但踐祚大嘗會祓禊、用虎像纛幡一旒、鷹像隊幡四旒、小幡廿旒、鉦鼓各一面、其用度准衞門府、

凡供奉行幸駕輿丁裝束十一具、中宮准此、

〔延喜式左右兵衞四十七〕凡駕行之日、分配兵衞者、御輿長二人、不帶弓箭、御膳前二人、御馬副二人、自餘陪陣、

〔新儀式臨時五〕皇后移徙事

御輿入某亭、供奉所司分直宮中、兵衞陣於宮門、或詔遣左右近衞中將將監番長各一人也、左右兵衞已下如常、嘉祥三年、皇大夫人移御東五條院例也、

〔愚昧記〕仁安四年正月十三日庚午、酉剋參、皇太后可渡給七條殿云々、○中略行啓之儀如御幸、公卿蒔繪劒、但右兵衞督帶螺鈿劒、依可參行幸歟、

〔延喜式左右兵衞四十七〕凡分配諸處者、東宮官人一人、兵衞廿人、

〔北山抄四拾遺雜抄〕立后事

立太子儀同之、但衞門陣不候、上卿仰近衞次將如立后、仰兵衞佐云、啓陣令候、即是尋常所候、依佐不參也、未補帶刀之前、近衞陣猶候、

〔西宮記臨時五〕東宮行啓

左右兵衞尉已下一員、兵衞廿人、上臈奉勅、仰外記、誡兵衞府云々、

〔北山抄九羽林要抄〕東宮行啓

左右兵衞陣啓、尉以下供奉、自餘不供奉、仍雖供奉人、兵衞督佐外不可帶弓箭、但未補帶刀之間、近衞陣同供奉、行列次第在陣頭、侍從後亮前、依候啓也、隨則宮司兼次將者、帶弓箭耳、

〔東宮年中行事五月〕三日さうひやうゑふしやうぶをたてまつる事、

こむあんに、ふるくはこの事みえず、しかるを康和以後、このふこれをたてまつる、だいりには六

行幸供奉

即日仰左近將曹宮道有憲、左兵衛權大尉坂上行松等了、

〔延喜式左右兵衛四十七〕凡正月上卯、督以下兵衛已上、各執御杖一束、次第參入、立定、佐一人進奏、其詞曰、左右兵衛府申、正月能上卯日能御杖仕奉氐進良久登申給波久登申、勅曰、置之、醫師已上共稱唯、獻畢以次退、其御杖榠櫨三束、(一株爲束)木瓜三束、比々良木三束、牟保己三束、黑木三束、桃木三束、梅木二束、(已上二株爲束)椿木六束、(四株爲束)中宮東宮宮別榠櫨一束、(二株爲束)木瓜二束、比々良木二束、牟保己一束、黑木二束、桃木三束、梅木二束、椿木二束、並各長五尺三寸、

〔北山抄正月一〕上卯日獻御杖事

延喜七年記云、左右兵衛佐以下兵衛已上、總卅人、著劒不帶弓箭、捧杖相對參入、列立案內、(去版許丈)一佐等或著闕腋、左以杖末取右手、右取左手、左佐忠房就版奏之、醫師以上稱唯、忠房就案轉杖置之退出、(或雖有左佐右佐奏之、天曆六年左佐有二人、右佐不參、有勅左佐仲舒、度右供奉、)

〔延喜式左右兵衛四十七〕凡二月八月上丁、進釋奠三牲、(大鹿、小鹿、猪、各一頭、加五臟、)並丙日、送大學寮兎二頭、(醢料、)潔清乾曝、前祭三月送大膳職、其貢進之次、以左近衛府爲一番、諸衛輪轉、終而更始、若享在新年春日大原野園韓神等祭之前、停供三牲、代之以鯉鮒、諸衛准此、

〔令義解宮衛五〕凡車駕出行、(謂出幸於京外也、)兵衛衛士先按行、(謂按撿行列也、)於及道邊隱暎處、撿察非常、(謂隱者、隱翳也、暎者、暎蔽不明、其備預諸不虞、司衛之善政、故至於隱暎之處、必慎非常之變也、)前後呵叱、觀人大言、登高者使下、(謂凡天子出行、放人令縱觀、若高聲大言、及登高臨矚者、並皆呵禁、令其押下也、)若有所幸、(謂於宮中及京內、有所臨幸也、)皆先防禁門巷、(謂閭閻門戶、及巷里道術、禁其人物、並皆令靜謐也、)防驅斥所不當留者、(謂去乘輿三百步之內、非陪幸之人、不得輒近、故皆驅斥也、)

〔律疏衛禁〕凡車駕行衛隊者、杖一百、若衛兵衛及內舍人仗者、徒一年、(謂入衛隊間者、謂車駕行幸、皆作隊仗、若有人衛入隊間、若杖一百、衛入仗間者、徒一年、其仗衛主司、依上例、故縱與同罪、不覺減二等、)誤者、各減二等、(謂若有人誤入隊間、得杖九十、誤入仗間、得杖八十、)若畜產唐突、守衛不備入宮門者、杖七十、衝仗衛者、笞五十、(畜產唐突、謂走逸入宮門、守衛不備者、杖七十、若入殿門、律更無文、亦同宮門之坐、仗衛者、在宮殿及駕行之所、得

服裝

督佐、並著位襖、金裝横刀、靴、策、著幟殳、尉志、並皂緌、位襖、白布帶、横刀、弓箭、麻鞋、府生兵衛、並皂緌、紺襖、白布帶、横刀、弓箭、麻鞋、（兵衛、大射、饗賜蕃客時、著屆巾末額、）小幡卌旒、（大射建之）小儀（謂告朔、正月上卯日、臨軒授位任官、十六日踏歌、十八日賭射、五月五日、七月廿五日、九月九日、出雲國造奏神壽詞、册命皇后、册命皇太子、百官賀表、遣唐使賜節刀、將軍賜節刀、）督以下、並准中儀、但兵衛准近衛、

凡踐祚大嘗會小齋官人兵衛裝束、並准近衛府、陣於齋院諸門、其大嘗屯陣裝束、一如元日、但除纛隊幡鉦鼓、

〔延喜式兵衛四十七〕凡大射官人二人、皂緌、位襖、白布帶、横刀、弓箭、緋脛巾、麻鞋、兵衛廿人、皂緌、末額、紺襖、白布帶、横刀、弓箭、白布脛巾、麻鞋、其後參官人二人、兵衛十人亦同、

凡五月五日騎射、官人二人、皂緌、深緑貲布衫、（佐著緋布衫、）金畫細布甲形、金畫冑形、白布帶、横刀、弓箭、行縢、麻鞋、兵衛十人、皂緌、緋大纈布衫、（其頭二人、紫大纈、）丹畫細布甲形冑形、白布帶、横刀、弓箭、行縢、麻鞋、（横刀緒請大藏）

〔延喜式彈正四十一〕凡衛府舍人刀緒、（○中略）左兵衛深緑、右兵衛深緑纈、

〔世俗淺深秘抄下〕一左右兵衛、不論左右用紫革（○劍裝束）不審也、如式者、猶左無文青革、右有文青革、大略可同左右衛門、近代儀不審也、

進獻

〔延喜式兵衛四十七〕凡鮮鮒御贄、隔三日進、（左子辰申、右酉巳丑、）

〔類聚符宣抄四〕御膳

被右大臣宣偁、左兵衛府申云、進日次御贄之日、近衛陣令捧持御贄之兵衛、解却兵仗、兵衛府持論云、可解却兵仗之由不見格式、若有臨時之宣旨者、將奉承其由者、而近衛府亦持論云、雖無格式幷宣旨、而行來年久、既成流例、不可輙變者、如此爭論、坐闕供御、理不可然、宜仰兩府定此事之間、猶依前例令貢進者、

仁和三年十一月五日　大外記大藏善行奉

行夜

等、

〔延喜式四十七左右兵衛〕凡分配諸處者、東宮、官人一人、兵衛廿人、其行夜者、中隔二人、(起亥一刻、訖子四刻、但右起丑一刻、訖寅四刻、)八省院豐樂院各一人、(起子三刻、訖丑三刻、但右起丑四刻、訖寅四刻、)大藏二人、內藏一人、(起子三刻、訖丑三刻、但右起丑四刻、訖寅四刻、)馬行二人、巡行京中、(起亥一刻、訖寅四刻、)其馬者、馬寮每夜加鞍幷衛士送、穀倉院一人、(分番差送)

〔續日本後紀十仁明〕承和八年正月乙酉、左右兵衛府言、撿舊例、夜行御馬、本寮飼丁控持朱雀門下、待時乘騎、巡撿城中、而去弘仁年中、被配此府、其後所行御馬、隨死請替、請替之間、徒經數日、望請依舊例復本寮者、許之、

〔延喜式四十七左右兵衛〕凡捉人將領兵衛二人、每番移送京職、

凡十二月晦日、差兵衛四人令聞見夜中變異、其名簿午剋以前進內侍、酉剋候陣、隨召帶兵仗參入近衛陣、分頭退出、元日平旦、錄夜中見聞之事進近衛陣、

儀仗

〔延喜式四十七左右兵衛〕左兵衛府(右兵衛准此)

大儀(謂元日、即位、及受蕃國使表、)

其日寅二剋、近衛府始擊動鼓、相應裝束、督著武禮冠、深緋襖、繡裲襠、將軍帶、(飾以金銀、)金裝橫刀、靴、策著械殳、佐、武禮冠、緋襖、錦裲襠、將軍帶、金裝橫刀、靴、策著械殳、尉志、並皀緌、深綠襖、(志紺襖、)錦裲襠、白布帶、橫刀、弓箭、緋脛巾、麻鞋、府生兵衛、並皀緌、紺襖、挂甲、白布帶、橫刀、弓箭、白布脛巾、麻鞋、(兵衛加末額、)卯一剋、近衛府擊列陣鼓、以次相應、卯三剋、擊進陣鼓、仗初進擊行鼓、各相應如前、皆就隊下、督佐率尉以下隊於龍尾道東階下、(若蕃客朝拜者、於會昌門內外、)隊虎像纛幡一旒、熊像幡四旒、小幡九十六旒、鉦鼓各一面、又尉率志已下隊於北殿門左、(右府隊於同門右、餘亦准此、)小幡十八旒、志率兵衛以上隊於北掖門東廊門、其供奉駕陣者、駕御後殿、各就本隊、禮畢駕還、供奉如初、兵庫寮擊退鼓、群官退出、其隊進退准近衛府、

中儀(謂元日宴會、正月七日、十七日大射、十一月新嘗會、及饗賜蕃客、)

守門

〔令集解宮衞二十四〕穴云、宿衞、謂內舍人兵衞、其五衞主典以上亦同、爲宿衞官故也、近侍、謂依律注解訖也、略○中跡云、宿衞、謂兵衞內舍人、但衞士等无合入內之理、近侍、謂中務判官以上、納言等也、

〔令義解選敍四〕凡經癲狂酗酒、謂酗酒者、以酒爲凶也、經者、言昔有此事、今則无之、若今見爲者、灼然不可任用也、及父祖子孫謂此祖孫者、不及曾高曾玄也、被戮者、皆不得任侍衞之官、謂侍從以上、及內舍人、中務判官以上、內記、并兵衞之類、其案雜令、禁內驅使、亦不可配也、

〔令義解宮衞五〕凡應入宮閤門者、謂衞門所守、謂之宮門、兵衞所守、謂之閤門也、本司具注官位姓名、略○註送中務省、付衞府、各從便門著籍、

〔令集解職員五〕分配閤門、釋云、御在所內重門也、音、公合反、爾雅、小閨謂之閤、說文、門旁戶也、朱云、分配閤門者、殿門亦同、穴云、閤門之掖門、及殿門等、兵衞亦合禁衞、爲有害故也、令釋云、大極殿東西小門、是謂閤門、謂取本律心說耳、言大極殿之後、有御在殿、副殿之後垣有東西小門耳、爾雅、小閤謂之閤、但於此令兵衞禁衞門、此閤門耳、以時巡檢、車駕出入、分衞前後、伴云、古記云、遠行幸者、必以左爲前、以右爲後也、近行幸者、隨便爲前後、故云前後也、分謂分左右而爲陣列也、

〔江次第抄正月二〕七日節會

閤門　今案、建禮門者、宮門、永明長樂永安門者、閤門也、此次第、閤門則長樂永安也、腋門者、左腋右腋門也、

〔令義解宮衞五〕凡開閉門者、第一開門鼓擊訖、卽開諸門、略○中閉門鼓擊訖、卽閉諸門、略○中卽諸衞按檢所部及諸門、謂諸衞者、五衞府主典以上、但長官者、依下條以時檢行也、所部者、御垣周迴、及大藏民部廩院等、令衞士守是也、

〔令集解宮衞二十四〕古記云、略○中所部、謂依別式、左右衞士府、中門並御垣廻、及大藏、內藏、民部、外司、喪儀、馬寮等、以衞士分配防守、以時檢行、爲有所部之人謂之所部也、左右兵衞府、內門諸門按檢也、衞門府中門外門檢也、

〔律疏衞禁〕凡於宮門外、若宮城門、守衞以非應守衞人冒名自代、若代之者、徒一年、京城門減二等、守衞謂兵衞、其在諸處守當、又減一等、謂非宮城京城等門、自餘街鋪提道、及別守當之處、餘犯應坐者、各減宿衞罪三等、謂非冒代以外餘犯、或兵仗違身、輒離職掌之類、本條應坐者、各減宿衞罪三等、若逃走違番不在減例、其冒代人、未至職掌之處事發者、律无正條、宜從不應爲輕笞四十、主帥以上、加守衞罪二

〔延喜式主計二十五〕凡勘大帳者、據去年帳勘其出入、(中略)其依府所免爲府損、(中略)左右近衛、兵衛、門部、(下略)

〔續日本紀元明四〕和銅二年八月辛亥、車駕幸平城宮、免從駕京畿兵衛戶雜徭、

〔東大寺正倉院文書九〕右京三條三坊

戶主次田連福德戶手實　天平五年(中略)

不。課。戶主次田連福德、年參拾、　正丁、左。兵。衛。(下略)

〔東大寺正倉院文書三十〕七月(中略)

五日移民部省下符壹道(兵衛免課役狀、中略)

(接續裏書)出雲國計會帳天平六年八月廿日正八位下行目小野臣淑奈麻呂

〔令義解五宮衛〕凡宿衛人、(謂兵衛、其門部亦准此也、)應當上番、而有故不得赴、(謂赴、至也、言不得至本府也、)及下番須一日程以上行者、(謂其計程者、從私家計、不從本府、故云下番也、)皆於本府申牒、具注所行之處、若不滿一日程者、聽暫往還、

〔令集解二十四宮衛〕釋云、宿衛人、謂兵衛內舍人也、衞士者非也、案律可知也、

〔律疏衛禁〕凡宿衛人應上番不到、及因假而違者、一日笞廿、三日加一等、過杖一百、五日加一等、罪止徒二年、(謂若有番上宿衛人、番期五日未滿、因一日假逢違不上者、合科四日違罪、所以知者、番期有限、限內有故、須請假、日假滿即須赴番、違假不上、准日科斷、其人四日之外、即當下直、下日不勞請假、豈合計日累科、四日之外、明知不坐、)

〔令義解五宮衛〕凡宿衛器仗、若有人稱勅索者、主司覆奏、然後付之、(謂宿衛器仗者、兵衛府及內舍人所帶之仗也、主司者、兵衛及中務判官以上也、)

〔律疏衛禁〕凡宿衛者、兵仗不得遠身、違者笞五十、若輒離職掌、加一等、(謂宿衛人、各有職掌之處、而輒離者、)別處宿者、又加一等、主司各加二等、(謂兵仗遠身、杖七十、輒離職掌、杖八十、別處宿者、杖九十、)

〔令義解五宮衛〕凡宿衛及近侍之人、(謂宿衛者、兵衛及內舍人也、近侍者、少納言、侍從、中務、判官以上也、)二等以上親、犯死罪被推勍者、推斷之司、速遣專使、(謂若罪人在外、量狀殊重者、馳驛、牒報也、)責牒報宿衛及近侍之人本司本府、勿聽入內、(謂依選敍令、父祖子孫被戮者、皆不得任侍衛之官、今案此條、伯叔兄弟、亦不可任侍衛之官、何者二等親、犯死罪被推勍者、勿聽入內、以此言之、推勍之間、既不聽入內、殺戮之後、何得任侍衛也、)

貲養

〔續日本紀 二十淳仁〕天平寶字元年四月辛巳、勅曰、○中略中衞兵衞舍人、○中略歷仕三十年已上、加位一級、

〔延喜式 四十七左右兵衞〕凡擬兵衞者、預擇定便習弓馬者、入色廿人已下、白丁五人已下、修奏進內侍、奏訖卽遣勅使試其才藝、騎射一尺五寸的、皆中者爲及第、步射卌六步十箭、中的四已上者爲及第、片一箭不中、皮者、以二的准折、

〔續日本紀 八元正〕養老四年五月癸酉、太政官奏、諸司下國小事之類、以白紙行下、於理不穩、更請內印、恐煩聖聽、望請自今以後、文武百官下諸國符、自非大事、若逃走衞士、仕丁替、及催年料廻殘物、并兵衞采女養物等類事、便以太政官印印之、奏可之、

〔續日本紀 十聖武〕天平元年四月庚午、諸國兵衞貲物、令當郡見在郡司節級輸之、仍附貢調使送所司、其輸法、以上絁一疋、充銀二兩、以上絲小二斤、庸綿小八斤、庸布四段、米一石、並充銀一兩、卽依當士所出准銀二十兩、

〔續日本紀考證 五聖武〕兵衞貲物 養老四年五月紀云、太政官奏、兵衞采女養物等類事、以太政官印印之、案貲養物、卽貲物也、

〔東大寺正倉院文書 三十〕十一月○天平五年

一廿四日進口兵衞養絲壹伯貳拾斤事

右附貢調使史生大初位上依網連意美麻呂進上、○中略

接継裏書
出雲國計會帳天平六年八月廿日正八位下目小野臣淑奈麻呂

免賦

〔續日本紀 九元正〕養老七年十月乙卯、詔曰、今年九月七日、得左京人紀家所獻白龜、○中略左右兵衞、○中略賜祿有差、

〔續日本紀 九聖武〕神龜三年三月辛巳、宴五位已上於南苑、但六位已下官人、及大舍人、授刀舍人、兵衞等、皆喚御在所、給鹽鍬、各有數、

〔令義解 三賦役〕凡舍人、史生、伴部、使部、兵衞、衞士、○中略並免課役、

考課

〔令集解宮衞二十四〕古記云、皆須撿點正身然後奏、謂兵衛者、每年二番上、每番撿點奏聞、但衞士者、番代之事、一度奏聞、以後不奏、故注謂自本國初上番者也、上謂參上也、合行事門部亦奏、跡云、依衞門門部等不合奏、朱云、貞同此也、依文可習者、穴云、兵衛初任之日、兵部判補、但授兵仗日、本衞奏耳、○中略釋云、撿點、驗也、點、小黑也、謂撿點見在正身、本衞奏耳、穴云、撿點奏聞、謂兵衛者、本府奏聞、衞士者、兵部撿點奏聞、師依令釋本府奏之說、律云、主司不知冒情、注云、主司謂兵衛府、又云、兵衛冒代事、從國來者、衞府不坐、故其衞士兵部分配三府、故兵部奏聞乃分配、師不依之朱云、撿點、未知點字意何、又兵衛每番撿點何奏、以筆點名上耳、令釋同、又每番可撿點耳、

〔令義解五軍防〕凡兵衛使還者、經三番以上、謂差遣遠使及征討幷防人部領等之類也、三番以上者、雖經二三年、猶亦准此法也、免一番、若欲上者聽、

〔令義解四祿〕凡兵衛、六月內、上日夜各八十以上者給祿、有位准大初位、無位准少初位、授刀舍人亦准此、

〔令集解二十三祿〕釋云、天平寶字三年格云、授刀舍人兵衛等、有位鍪十口、今減二口、无位五口、今減一口、

〔令義解四考課〕凡兵衛、立三等考第、恭勤謹愼、宿衞如法、便習弓馬者、謂弓馬相須、即得為上也、為上、番上不違、職掌無失、雖解弓馬、非是灼然者謂或弓或馬、一者灼然、亦為中也、為中、違番不上、數有犯失、謂數者三度以上也、犯者、故犯也、失者過失也、並是杖罪以下、即降其考、若至徒以上者、仍可解任也、好請私假、不習弓馬、謂雖習弓馬而好請私假者、比類中等、優劣殊懸、猶居下第、其自餘諸條居下仰上、企而不及者、亦准此也、者為下、

〔令義解四選敍〕凡敍舍人史生兵衛伴部使部及帳內資人、並以八考為限、八考中進一階、四考中、四考上進二階、八考上進三階敍、

〔令義解五軍防〕凡兵衛、每至考滿、兵部按棟、謂唯據考文、不可試才、即與式部銓擬法不殊也、隨文武所能、具為等級、謂計堪理務者、為三等之品級也、申官、堪理時務者、量才處分、謂量其才能、任文武官、即雖有武才、不堪理務者、亦不可任用也、其年六十以上、皆免兵衛、謂考抜之日、乃放免也、即雖未滿六十、若有尫弱長病、不堪宿衛、及任郡司者、謂長病者、不可必滿日限、量狀不堪宿衛者、即解也、郡司者、主帳以上也、本府錄狀、幷身送兵部、撿覆知實、奏聞放出、謂兵部奏聞也、

上番

儀容端正、工於書筭、(謂二事不相須、師以下身材強幹等亦准此、其先補使部、後父爲五位者、令無申送之文也、)爲上等、身材強幹、(謂材質也、力也、)便於弓馬、爲中等、身材劣弱、不識文筭、爲下等、十二月卅日以前、上等下等送式部簡試、上等爲大舍人、下等爲使部、中等送兵部、試練爲兵衛、如不足者、通取庶子、(謂止補兵衛、不爲舍人也、)

〔續日本紀 二文武〕大寶二年四月壬子、令筑紫七國及越後國簡點采女兵衛貢之、但陸奧國勿貢、

〔續日本紀 九元正〕養老六年閏四月乙丑、太政官奏曰、(中略)望請陸奧按察使管內百姓、庸調浸免、(中略)其國授刀兵衛、(中略)皆悉放還各從本色、(中略)奏可之、

〔續日本紀 九聖武〕神龜三年九月己卯、停安房國安房郡、出雲國意宇郡采女、令貢兵衛、

〔續日本紀 十九孝謙〕天平勝寶七年六月壬子、太宰府管內諸國、國別貢兵衛一人、采女一人、

〔類聚國史 四十後宮〕延曆十七年三月壬申、詔曰云々、郡司譜第之選、永從停廢、取藝業著聞堪理郡者爲之、國造兵衛、同亦停止、但采女者、依舊貢之、

〔享祿本類聚三代格 四〕太政官符

停國造補兵衛事

右檢去三月十六日勅書倆、郡領譜第、既從停廢、國造兵衛、同亦停止者、今中納言從三位壹志王宣倆、奉勅、先補國造、服帶刀仗、仕奉宿衛、勤官之勞、不可不矜、宜除國造之名、補兵衛之例、

延曆十七年六月四日(○類聚國史係四月甲寅、甲寅四日也、)

〔東大寺正倉院文書 十一〕戶主從八位下勳十二等出雲臣眞足、年伍拾壹歲、　正丁(中略)

弟少初位上出雲臣國繼、年參拾貳歲、　正丁右兵衛、額黑子、(中略)

(接縫裏書)山背國愛宕郡出雲鄉雲上里神龜三年史生從八位下間人宿禰男君

〔令義解 五宮衛〕凡兵衛衛士上番、(衛士上番、謂自本國初上者、)(謂兵衛者、每番奏聞、衛士者、唯初上一還奏聞也、)皆須檢點正身、然後奏聞、(謂兵衛衛士、正身見在者、即以少墨點其名上也、奏聞者、本衛各奏聞也、)

右歌一首、傳云、有右兵衛(姓氏未詳)多能歌作之藝也、于時府家、備設酒食饗宴府官人等、於是饌食盛之皆用荷葉、諸人酒酣、謌舞駱驛(駱驛恐絡繹誤)○乃誘兵衛云、開(開恐關誤)○其荷葉而作此歌者、登時應聲作斯歌也、

定額

〔日本後紀十七平城〕大同三年七月壬寅、左右近衛、及左右兵衛等府、近衛、兵衛元各四百人、今定各三百人、

〔日本後紀二十一嵯峨〕弘仁二年十月壬申、詔曰、衛士兵衛四府者、宮掖是守、戒嚴非輕、所以警愼姦邪、防遏虞猾、雖綏撫瀛表、專叶禮樂之風、而備豫機先、必資弧矢之利、皇明建極、大聖乘乾、取適於時、須有沿革、其左右衛士兵衛等、宜依舊數、

〔延喜式十二中務〕時服

左兵衛府二百六十七人(中略)兵衛二百人、萬與丁五十人、右兵衛府准之、

〔職官志五〕左兵衛府

兵衛四百人(集解云、大同三年七月省官員、左右兵衛各四百人、今定三百人、(中略)中務式兵衛二百人、又書也、)

〔享祿本類聚三代格四〕太政官符

應定諸衛府員外舍人數事

左兵衛府二百人(右兵衛府准此○中略)

右左大臣宣、奉勅、件府近衛門部兵衛等數、載在格條、而頃年之間、據異能供節要籍驅使等事、每府申請補任之漸、殆倍本數、論之政途、理不可然、自今以後、宜依件定之、

寛平三年十二月十五日

簡點

〔令義解五軍防〕凡兵衛者、國司簡郡司子弟(謂郡司少領以上也、子弟者子孫弟姪也、)強幹便於弓馬者、郡別一人貢之、若貢采女郡者、不在貢兵衛之例、三分一國、二分兵衛、一分采女、(謂假令一國有三郡者、二郡貢兵衛、一郡貢采女、若其不等者、從多貢兵衛耳、)

凡內六位以下、八位以上嫡子、年廿一以上、見無役任者、每年京國官司、勘撿知實、責狀簡試、分爲三等、

以前被右大臣宣偁、奉勅、諸司使部、徒滿其數、無用官司、宜改張格令、依件爲定、○中略省宜承知、自今以後、永爲恒例、

延暦十四年七月十日

〔享祿本類聚三代格四〕太政官謹奏

廢省官員幷減定人數事○中略

左兵衞府○此中略右兵衞府准

使部卅人今定十人

右件、料酌職務、今所減定

以前○中略臣等商量如前件、謹錄事狀、伏聽天裁、謹以申聞、謹奏、

大同三年七月廿日

聞

駕輿丁

〔延喜式四十七左右兵衞〕凡駕輿丁五十人

〔續日本後紀十仁明〕承和八年七月甲戌、左兵衞府駕輿丁町西北角失火、燒損百姓廬舍卅餘烟、累追行人令撲滅矣、

兵衞

〔釋日本紀二十一秘訓六〕左右兵衞トネリ事

〔釋日本紀二十二秘訓七〕僞兵衞カスホノトネリ

〔西宮記十月〕一旬

延喜廿年十月一日、三府候上番、左府不候者、右府奏之、下番准之、奏詞、左右乃某府申、左久、其月乃上番爾可仕奉帶刀舍人、伴乃宮都古、兵舍人等乃名付簡進止申寸、

〔萬葉集十六〕久堅之、雨毛落奴可、蓮荷爾、停在水乃、玉爾似將有見、○有將誤有恐

位者、前後一准衞門府

以前（○中略）臣等商量所定具件如前、謹錄事狀、伏聽天裁、謹以申聞謹奏、聞、

延曆十八年四月廿三日

醫師

〔續日本紀（八元正）〕養老五年六月癸卯、始置左右兵衞府醫師各一人、

〔三代實錄（十七清和）〕貞觀十二年三月卅日壬午、散位從五位上菅原朝臣峯嗣卒、峯嗣者、左京人也、（○中略）弘仁十三年除左兵衞醫師、十四年遷醫博士、

府生

〔續日本紀（十聖武）〕神龜五年十一月壬寅、制衞府府生者、兵部省補焉、

〔職官志（五）〕按、職員令衞門兵衞等、並不載府生、然凡府生者、往々經見於史中久矣、但未詳其置何世、○按ズルニ、神龜五年八月、始メテ中衞府ヲ置キ府生六人アリ、五府府生ヲ置キシハ、恐ク是時ニアランカ

番長

〔令集解（五職員）〕左兵衞府、　右兵衞府准此、（○中略）番長四人、（中略）釋云、師說、此四百人、兵衞之內也、與上云百外一穴云、可倣令釋解說、跡云、番長四人、依文四百之外、又但依師說、令習四百內人也、朱云、番長四人者、兵衞四百之數內、但注兵衞之上者、選取兵衞中長者、則充兵衞等之也、故難兵衞之員內、注置其上也、尋心可學者、古記云、番長四人、此郎取兵衞四百內也、更不取也、少納言在侍從中、文異意同耳、但案文可云四

案主府掌

〔本朝世紀〕永祚二年（○正曆元年）十月四日丙午、太皇太后宮（○冷泉后昌子）從去六月御于此內親王（○村上皇女資子）家、而今夜遷御于本宮、（○中略）供奉諸司（○中略）左兵衞權佐藤原朝臣行成、尉一人、志一人、府生一人、番長一人、案主一人、府掌一人、兵衞十七人、右兵衞佐不參、尉以下如左、

使部

〔續日本紀（二文武）〕大寶二年八月戊申、有勅五衞府使部、始准兵衞給祿、

〔享祿本類聚三代格（四）〕太政官符

應定諸司使部事（○中略）

左兵衞府廿人　右兵衞府廿人（○中略）

〔百練抄七近衞〕久安四年正月廿八日、左右兵衞尉各廿人、〇中略永可レ爲二員數一之由被レ仰二外記一、

〔官職秘抄下〕左右兵衞府

令云、大少尉各一人、其後任人多加、而久安被レ下二宣旨一、以二左右各二十人一爲二員數一、近代及二三四倍一、

〔職原抄後附〕左右兵衞尉各二十人、(中略)久安四年正月二十七日、以二藏人木工頭平範家一仰二外記一、〇中略左右兵衞各二十五人、〇中略永可レ爲二員數一者、保元三年正月三十日、以二藏人右少辨親範一仰二外記一、

〔源平盛衰記二十五〕西京座主祈禱事

堀河院御宇、〇中略西京ノ座主良眞僧正ヲ召テ被二宣下一ケルハ、臨時ノ御祈禱アルベシ、日時幷ニ何ノ法ト云事ハ、思召定テ遂テ被二仰下一ベシ、先兵衞尉ノ功ヲ一人召仕テ、今度ノ除目ニ申成ベシト仰含ラル、僧正勅命ニ依テ、成功ノ人ヲ召付テ貫首ニ申ケレバ、除目ニ會テ即成ニタリ、其比ノ兵衞尉ノ功ハ、五萬疋ナリケレバ、〇下略

〔源平盛衰記二十三〕義經軍陣來事

昔八幡殿ノ後三年ノ合戰ノ時、弟ニ兵衞尉義綱ハ、折節帝王ニ事候ケルガ、兄ノ向後ノ覺束ナサニ、御暇ヲ給テ罷下ベキ由奏聞シケレ共、御免ナカリケレバ、陣家ニ弦袋ヲ懸テ逃下テ、金澤ノ館ヘ參向シタリケレバ、八幡殿殊ニ悅給テ、故賴義朝臣ノ御座タルトコソ覺ユレトテ、涙ヲ流シ給ケリ、

〔倭名類聚抄五職名〕佑官　兵衞衞門四府曰二志一、(中略)佐官皆

〔類聚三代格五〕太政官謹奏

左右兵衞府

今加二少尉各一員、少志各一員一、

右件任居二禁衞一職資二警守一、部統之方、無レ異二庶府一、而官員是少、行事稍多、伏請加二置件員一、克理府事、其官

〔空穗物語祭の使〕御せんの御さいまつともしたる、兵衛のせうども、にはかにいるにおどろき見給、

〔續修東大寺正倉院文書十五〕左兵衛府移　民部省

合仕丁捌人（斷丁四人 立丁四人）

請米貳斛參㪷貳升（日二升）　鹽貳升參合貳勺（日別二勺）　布肆段（人別一段 ○中略）

天平十七年四月廿一日　從七位上行大志大野我孫麿

正六位上行大直安倍朝臣宮道

○按ズルニ、大直ハ大尉ヲ云ヘルナリ、

〔續修東大寺正倉院文書十五〕右兵衛府移　民部省

合直丁肆人（物部小里 玉作麿 丸部小高根 矢田部子人）

應給米貳斛參斗貳升（人別日二升）　鹽貳升參合貳勺（人別日二勺 ○中略）

天平十七年四月廿一日　正六位下行少直津史秋主

○按ズルニ、少直ハ少尉ヲ云ヘルナリ、

〔類聚三代格五〕太政官謹奏（○中略）

左右兵衛府

今加少尉各一員、少志各一員、

右件任居禁衛、職責警守、部統之方、無異庶府、而官員是少、行事稍多、伏請加置件員、克理府事、其官位者、前後一准衛門府、

以前（○中略）臣等商量所定具件如前、謹錄事狀、伏聽天裁、謹以申聞謹奏、聞、

延暦十八年四月廿三日

階

〔日本後紀 八桓武〕延暦十八年四月辛丑、衛門督、元正五位上官、今爲從四位下官、佐從五位下官、今爲從五位上官、左右衛士兵衛等、一准衛門、

〔類聚三代格 五〕太政官謹奏〈○中略〉

衛門府

督一員

右元正五位上官、今定從四位下官、〈○中略〉

佐一員

右元從五位下官、今定從五位上官、其左右兵衛等府、伏請一准此府、〈○中略〉

以前〈○中略〉臣等商量所定具件如前、謹錄事狀、伏聽天裁、謹以申聞謹奏、聞、

延暦十八年四月廿三日

〔拾芥抄 中本官位相當〕正八位下〈左右兵衛大志〉從八位上〈左右兵衛少志、左右兵衛醫師、〉

〔拾芥抄 中本官位唐名〕兵衛督〈左兵衛府 右大將軍〉〈武衛威衛 武衛大將軍〉〈鷹揚衛威衛 鎮軍大將軍〉佐〈武衛將軍 鎮軍將軍〉〈威衛將軍 鷹揚將軍〉尉〈武衛〉長史〈威衛長史、今號二 武衛校尉、鎮軍長史、〉志〈武衛錄事威衛 錄事鎮軍錄事〉府生〈武衛史 參軍事〉

〔倭名類聚抄 五職名〕長官　兵衛衛門等四府曰督〈(中略)皆加美〉已上

〔下學集 上官位〕左右兵衛督〈カミ 武衛將軍〉

〔倭名類聚抄 五職名〕次官　兵衛衛門曰佐〈(中略)皆須介〉已上

〔伊呂波字類抄 須官職〕佐〈スケ 外衛〉

〔倭名類聚抄 五職名〕判官　兵衛衛門四府曰尉〈(中略)皆萬豆利古止比止〉

〔伊呂波字類抄 世官職〕尉〈外衛川二四衛府〉已上セウ、

職員　職掌

〔北山抄 二年中要抄〕六月晦日施米事
東西北三箇山、毎山使十人之中、各有一二三四五合五、東手愛宕寺、北手右近馬場、西手右。兵。衞。馬。場。給之、

〔玉勝間 十三〕北山抄に、右兵衞馬場といふも見えたれば右近馬場のみならず、六衞府みなおのおのその馬場有し也、

〔西宮記 臨時五〕一所々事
宿。所。　兵衞督宿所、在本陣、　同佐宿所、在玄暉門外左右、○又見拾芥抄、

〔日本紀略 醍醐〕延喜十五年十一月廿一日丁丑、停五節舞姫、依左兵衞佐源敏相曹司死穢也、

〔令義解 一職員〕左兵衞府 右兵衞府准此
督一人、掌検校兵衞、謂毎番検校、此府不称門、分配閤門、以時巡検、車駕出入、分衞前後、及左兵衞名帳門籍事、謂勝者是即略文、更無別例、佐一人、大尉一人、少尉一人、大志一人、少志一人、醫師一人、番長四人、謂依文番長者、在兵衞四百人之外、兵衞四百人、使部卅人、直丁二人、

〔唐六典 二十四諸衞〕左右武衞大將軍將軍之職、掌如左右衞、其異者、大朝會率其屬被白質鍪甲鎧、執白弓箭白楯白矟、建鶩麾四色麾五牛旗飛麟旗駃騠旗鸞旗犀牛旗鵕鸃旗騼騝旗、跸稱長唱警持鈒隊應跸、爲左右廂儀仗、凡翊府翊衞外府熊渠番上則分配之、正殿前則以諸隊次立於驍衞下、在嘉德門內外、以挾門隊坐於東西廊、

〔百寮訓要抄〕左兵衞府 武衞　是も禁中警固の官也、門外をかたむ、衞門府のごとし、又行幸行列などの事をつかさどる、又宮中巡撿する官也、

〔令義解 一官位〕從五位 階○上 左右兵衞督　正六位 階○下 左右兵衞佐　正七位 階○下 左右兵衞大尉　從七位 階○上 左右兵衞少尉　從八位 階○上 左右兵衞大志　左右兵衞醫師　左右兵衞少志 衞○左右兵少志下

廨舍

〔拾芥抄中本百官〕兵衛府左右（宮城内陽明門北掖、左近衛府南）

〔大内裏圖考證二十八左右兵衛府〕左兵衛府

諸圖陽明門内南腋、南北四十丈、東西三十五丈、〇圖略

右兵衛府

諸圖殷富門内南腋、南北四十丈、東西三十五丈、〇圖略

〔本朝世紀〕康保四年六月十日丁卯、左兵衛府正廳、爲先帝〇朱雀御齋會行事所、

長保四年十月十三日甲戌、今夜戌剋、西京近衛御門北小路町口西東燒亡、其火飛來右兵衛府廳屋上、同燒亡倉并雜舍、

〔類聚國史百七十三災異〕天長三年正月庚午、亥剋失火左兵衛府廚院、灰滅厮女一人、　壬申、緣左兵衛府失火事、祓除於南庭、

〔北山抄四拾遺雜抄〕任大臣儀〇中略至陽明門、史外記辨少納言、北方之人留立左近府之東、南方之人留立左兵衛府門之東方、參議以上行過、當左兵衛府小門、少倚道北留立、

〔北山抄六〕大臣退出事

大臣比至陽明門前、納言以下當左兵衛府小門留立、

〔愚昧記〕仁安四年〇嘉應元年正月十九日丙子、政始也、〇中略予出西門、揖少納言辨等、〇註略北行於左衛門陣架下、取據、（召使取之、授之、）經小路、於左兵衛府東小門下下、據、（近代無其基跡、二本相並樹、其程云々、）東行到陽明門、

〔大内裏圖考證二十八左右兵衛府〕北門

年中行事畫、陽明門出立圖、左兵衛府北門八足瓦屋、

〔中右記〕永久二年六月十八日、參院、〇中略以宗實奏事、〇中略又申、左兵衛府北門、自本及大破之處、去八日未剋、地震之間、已顛倒了、仰〇白河云、件門淡路守輔明可作之由、申請樣ニ覺御也、

沿革

參議通親

かしは木の葉守の神のたゝればや三笠の山をさしはなるらむ

兵衞を柏木、大中少將を三笠山と異名する事は、後撰拾遺等の歌にはじまれるよし、顯昭法橋、契冲阿闍梨など、委しく云はれたり、〇兵衞以下、清水濱臣標註

〔日本書紀用明二十一〕元年五月、穴穗部皇子、欲姦炊屋姫皇后、而自強入於殯宮、寵臣三輪君逆、乃喚兵衞、重璅宮門、拒而勿入、

〔日本書紀天武二十九〕朱鳥元年九月丙午、天皇病遂不差、崩于正宮、甲子、直大參當摩眞人國見、誄左右兵衞事、

〔日本書紀持統三十〕三年七月辛未、流偽兵衞河內國澁川郡人柏原廣山于土左國、以追廣參授捉偽兵衞廣山兵衞生部連虎、

〔續日本紀淳仁二十一〕天平寶字二年八月甲子、是日大保從二位兼中衞大將藤原惠美朝臣押勝〇中略等、奉勅改易官號、〇中略左右兵衞府、折衝禁暴、虎賁宣威、故改爲左右虎賁衞、

〔周禮註疏三十一夏官司馬〕虎賁氏、掌先後王而趨以卒伍、〇註疏略軍旅會同亦如之、舍則守王閑、〇註疏略王在國則守王宮、〇註疏略國有大故則守王門、大喪亦如之、

〔漢書十九上百官表〕期門、掌執兵送從、〇中略平帝元始元年、更名虎賁郎、師古曰、賁讀與奔同、言如猛獸之奔、

〔續日本紀淳仁二十三〕天平寶字五年十月癸酉、以右虎賁衞督從四位下仲眞人石伴爲遣唐大使、〇中略從五位下藤原惠美朝臣辛加知爲左虎賁衞督、

〔續日本紀淳仁二十五〕天平寶字八年正月己未、從五位下大原眞人宿奈麻呂爲左虎賁翼、從五位下藤原惠美朝臣薩雄爲右虎賁率、

〔續日本紀淳仁二十五〕天平寶字八年九月丙辰、勅逆人仲麻呂執政奏改官名、宜復舊焉、

〔拾遺和歌集十九雜戀〕中納言敦忠、兵衛佐に侍ける時に、しのびていひちぎりて侍けることのよにきこえ侍にければ、　右近

人しれずたのめしことはかしは木のもりやしにけんよにふりにけり

〔倭訓栞前編加六〕かしはぎ　定家卿の說に、土御門中納言、敦忠○藤原兵衛佐なるに、かしは木のもりにしものを、とよめるよりの事といへり、

〔蜻蛉日記上ノ上〕かくありしときすぎて、世中にいともはかなく、とにもかくにもつかでよにふる人ありけり、略○中かしはぎのこだかきわたりより、かくいはせむとおもふことありけり、

○按ズルニ、此日記ノ作者ハ、藤原倫寧ノ女ニシテ、藤原兼家ノ妻ナリ、天暦年中、兼家右兵衛佐タリシカバ、柏木ノ木高キ云々トハ云ヘルナリ、

〔後拾遺和歌集雜六十〕入道攝政、兼家○藤原夜がれがちに成侍りける比、くれにはなど、いひをこせて侍ければ、いひつかはしける、　大納言道綱○兼家子母

かしは木の杜の下草くれごとに猶たのめとやもるをみる〳〵

〔後拾遺和歌集哀傷十〕左兵衛督經成、身まかりにけるそのいみに、いもうとのあつかひなどせんとて、師賢朝臣こもりて侍りけるにつかはしける、　小左近

よそにきく袖も露けきかしはぎのもとのしづくを思ひこそやれ

〔後拾遺和歌集雜六十〕入道前太政大臣、道長○藤原兵衛佐にて侍ける時、一條左大臣雅信○源の家にまかりそめて、かくなんあるとはしりたりやといひにをこせ侍ける返事によめる、　馬内侍

春雨のふるめかしくもつぐるかなはやかしは木のもりにし物を

〔月詣和歌集戀六〕もの申ける女の、兵衛佐なりける人にかたらひつきぬとき、てつかはしける、

〔倭名類聚抄考證官名十一〕兵衛府職員令、兵衛府有二左右一、天武紀亦云二左右兵衛一、今猶然、

〔延喜式中務十二〕時服　左兵衛府ツハモノヽトネリノツカサ

〔小右記〕寛仁元年十一月廿二日丙辰、今日新嘗會、○中略召二右兵衛督藤原朝臣一、召詞、右乃兵乃舍人司乃藤原朝臣、　二年十一月廿二日庚辰、召二右兵衛督公信一、其詞云、右乃武舍人官乃藤原朝臣、　三年十一月十六日戊辰、召二左兵衛督頼定一、其詞云、左乃武舍人官乃源朝臣、

治安四年正月七日丙申、召二左兵衛督公信一、左乃兵舍人司乃藤原朝臣中納言

〔書言字考節用集官位三〕左兵衛府サヒヤウヱノフ唐名左武衛

〔空穗物語國讓下〕ひ。や。う。ゑ。づ。か。さ。よりは、まいりにけむや、

〔空穗物語吹上下〕かくてなかよりまかづるまゝに、ひ。や。う。ゑ。の。つ。か。さ。たちよりて、○下略

〔職原抄下〕左右兵衛府唐名武衛

〔易林本節用集下不〕武衛ブエイ兵衛

〔唐六典諸衛二十四〕左右武衛大將軍各一人、正三品、

魏武爲二丞相一、有二武衛營一、晉宋齊梁陳、又有二建武奮武等將軍一、又有二武烈武毅等將軍一、至レ隋採二諸武之名一、置二左右武衛府一、有二大將軍一人、將軍二人一、皇朝因レ舊、光宅元年、改爲二左右鷹揚衛一、神龍元年復レ故、

〔八雲御抄異名三下〕左右兵衛　か。し。は。ぎ。

〔書言字考節用集官位三〕柏木カシハギ左兵衛督異名、見二八雲抄一、

〔枕草子三〕かしは木、いとおかし、はもりの神のますらんもいとかしこし、兵衛のすけ○佐ぞう○尉などをいふらんもおかし、

〔大和物語上〕良少將、兵。衛。佐。な。り。け。る。比、監の命婦になんすみける、女のもとより、か。し。は。ぎ。のもりのした草老ぬとも身をいたづらになさすもあらなん

古事類苑

官位部二十四

令制官職二十

左右兵衞府

左右兵衞府ハ、大寶令ノ定ムル所ニ依レバ、其官員ニハ、督佐大少尉大少志醫師各〻一人、番長四人、兵衞四百人、使部三十人、直丁二人アリ、蓋シ兵衞ノ稱ハ、已ニ用明天皇紀ニ見エタレドモ、當時未ダ府ヲ置キシニハアラズシテ、宮闕ヲ禁衞スル兵士ヲ指セルニ過ギザラン、而シテ天武天皇紀ニ至リ、始メテ左右兵衞ノ稱見エタリ、意フニ此時ニハ、已ニ左右兵衞府ノ設ケアリシナルベシ、

兵衞府ノ職、閤門ヲ禁衞シ、宮闕ニ宿衞シ、京中ヲ巡撿シ、大小ノ朝會ニ儀仗ヲ備ヘ、車駕行幸ニ前後ヲ分衞スル等ノ事ヲ掌ル、蓋シ大寶令制定ノ時ハ、五衞府ノ中、本府最モ親近ノ衞兵ナリシガ、左右近衞、左右衞門、左右兵衞ノ六府ト爲ルニ至リ、本府主要ノ所掌ハ、擧ゲテ近衞府ニ屬セシニ似タリ、

兵衞ハ、ツハモノヽトネリト訓ジ、後ニ字音ヲ以テヒヤウヱト稱ス、兵衞ハ郡司ノ少領以上ノ子弟ヲ取ルモノニテ、郡別ニ一人ヲ貢セシムルナリ、(采女ヲ貢スル郡ハ、兵衞ヲ貢セズ、又令ニテハ國ニ三郡アルトキハ、二郡兵衞、壹郡采女ヲ貢スル制ナリ、)又内六位以下八位以上ノ嫡子ニシテ、年二十一以上ノモノヲモ取ル、並ニ身材強幹ニシテ弓馬ニ便ナルモノヲ簡點スルナリ、

〔倭名類聚抄(五官名)〕府 職員令云、○中略兵衞府、

雜載

略其賜物、○中略使部、伴部、門部、主帥、各布一端、

〔續日本紀十三聖武〕天平十二年六月庚午、勅曰、○中略宜大赦天下、○中略中衞舍人、左右兵衞、左右衞士、衞門府衞士、門部、主帥、使部等、不在赦限、

〔日本後紀十七〕大同三年七月壬寅、廢衞門、併左右衞士府、廢衞士府主帥各六十人、○又見令集解

〔續日本紀二十孝謙〕天平寶字元年八月辛丑、勅曰、○中略今故六衞置射騎田、每年季冬、宜試優劣以給超群、令與武藝、○中略左右衞士府、○中略各十町○類聚三代格十町下、有七段百五十六歩七字、

〔日本紀略平城〕大同二年十月辛未、定左右衞士府官人服色、大尉六位著深綠、少尉七位著内口口○内口口恐淺綠誤主帥著紺布、先是大尉著緋、少尉主帥著淺綠、无所據、是以改

〔令集解 宮衞 二十四〕釋云、續漢書、大將軍有營五部、部有校尉一人、比二千石、杜預注左傳云、百人爲一隊、今令五十人爲隊、然則五十長以上、是謂部隊主帥、古記云、部隊主帥、謂左右兵衞府番長、左右衞士府主帥、衞門府門部以上也、

〔唐六典 吏部 二〕諸衞主帥如三衞之考、

凡統領有方、部伍整肅、清平謹恪、武藝可稱者爲上、居官無犯、統領得濟、雖有武藝不是優長者爲中、在公不勤、數有愆失、至於用武復無可紀者爲下、

〔政事要略 二十九 年中行事〕荷前事

衞禁律云、闌入山陵兆域門者笞五十、謂周兆故爲營域者 越垣者杖一百、陵戸不覺減二等、謂專當者 主帥又減一等、謂親監當者 故縱者、各與同罪、

〔唐律疏議 七 衞禁〕諸闌入太廟門及山陵兆域門者徒二年、〇中略 守衞不覺減二等、〇注略 主帥又減一等、主帥謂親監當者

疏議曰、主帥謂領兵宿衞太廟山陵太社三所者、但當檢校即坐、不限官之高下、又減守衞人罪一等、唯坐親監當者、

〔續日本紀 五 元明〕和銅四年十月甲子、勅依品位始定祿法、〇中略 門部、物部、主帥等、並絲二絇、錢十文、

〔享祿本類聚三代格 四〕考郎固左右衞門府主帥給祿、如有立仗者執兵立□□□□府々生准此、宜付□□□□常、

神龜五年七月廿一日

〇按ズルニ、本文前後蠹食多クシテ、意通ゼズト雖モ、當時衞門ハ一府ニシテ、未ダ左右ノ制アラズ、サレバ衞門ハ衞士ノ誤ナルベシ、

〔續日本紀 十 聖武〕天平元年八月癸亥、天皇御大極殿、詔曰、〇中略 改神龜六年爲天平元年、而大赦天下、〇中

天平十六年七月十二日　從七位上行少属出雲

從六位上行少進縣犬養宿禰

〔享祿本類聚三代格四〕太政官符

應レ定二諸司使部一事 ○中略

左衞士府六十人　右衞士府六十人 ○中略

以前被二右大臣宣一偁、奉レ勅諸司使部、徒滿二其數一、無レ用二宮司一、宜下改二張格令一依レ件爲上レ定、但左右衞士兩府者、職掌別二他府一、亦宜レ充二中等位子一者、省宜承知、自レ今以後、永爲二恒例一、

延曆十四年七月十日

〔令義解六衣服〕朝服

衞府督佐 ○中略 主帥○○ 謂二門部使部一、其隊正等者、依二衞士例一也、 皂縵頭巾、皂紘、位襖、烏油腰帶、烏裝橫刀、白脛巾、白襪、烏皮履、會集等日、加二挂甲一、帶二弓箭一、以二錦襠一代二位襖一、以レ挂代レ履、並朝廷公事則服之、○中略 其督以下主帥以上、袋准二文官一、

〔續修東大寺正倉院文書三十六〕造東大寺司移兵部省

合位記貳伯玖拾參紙 並衞士 見給正身壹伯伍十壹紙　未給壹伯肆拾貳紙

肆拾玖紙左衞士 一紙紀伊國、六紙相模國、一紙備後國、九紙出雲國、六紙遠江國、一紙下野國、十二紙丹波國、五紙因幡國、四紙伯耆國、

伍拾紙右衞士 五紙丹波國、九紙備後國、三紙相模國、八紙備中國、二紙遠江國、八紙出雲國、一紙參河國、一紙備前國、十一紙上總國、一紙下總國、一紙伯耆國、○中略

以前位記、見在正身班給已訖、但相替歸鄕、未レ給二位記一、仍望便附二朝集使一、欲レ令レ下二國一、注レ狀故移、

天平勝寶二年五月廿六日　主典從七位上葛井連

次官從五位下兼行大倭介佐伯宿禰

〔令義解五宮衞〕凡車駕有レ所二臨幸一、若夜行、部隊主帥、○○ 謂五十人爲レ隊、即五十人以上長是爲二主帥一也、 各相辨識、

主帥六十人（今廢）　衛士六百人（今定五百人）　門部百人（今置中略）〇

以前伏奉今月十五日詔書、七衛府雜任已下員伍稠疊、思從減省、卿等評議定數奏聞者、伏奉詔書如右、（〇中略）臣等商量如前件、謹錄事狀、伏聽天裁、謹以申聞謹奏、

大同三年七月廿日（〇又見日本後紀、職員令集解、）

聞

〇按ズルニ、衛士ニシテ、衛門左右衛士ノ三府ニ涉ルモノハ、衛府總載ニ具ス、

（續續修東大寺正倉院文書二十四帙五卷）皇后宮職移　右衛士府

合先所請火頭四人（返一人、留三人）

春日部古麻呂

右一人、今所返、

丈部古麻呂　林大麻呂　丹治部小山

右三人、留宮、限來年七月、與庸直欲駈使、仍錄狀移送、故移、

天平十一年七月十二日

從七位上行少屬出雲

從六位上行少進縣犬養宿禰

（續續修東大寺正倉院文書二十四帙五卷）皇后宮職移　左衛士府

合先所請火頭九人（返六人、留三人）

猪養得足　宍人眞麻呂　君子淂　玉作牛部　物部大田　曾禰友足

右件六人、今所返、

丈部眞年　三宅栗栖　韓人眞人

右三人留官、限來年七月、與庸直欲駈使、仍錄狀移送、故移、

奈良宮　四月定人數肆拾玖人　逃走衞士肆人
五月粮應請人數肆拾伍人（衞士）　料米貳拾陸斛壹斗　鹽貳斗陸升壹合
訓仁宮　四月定人數貳伯肆拾捌人　逃走死去衞士火頭肆人（一人衞士逃、一人衞士死、一人火頭逃、一人火頭死、）　割加甲可宮壹伯參拾貳人（一百卅一人火頭、一人廝丁、）　自甲可宮來加衞士壹人
五月粮應請人數壹伯壹拾參人（一百十二人衞士、一人直丁、）　料米陸拾伍斛伍斗肆升　鹽陸斗伍升伍合肆勺
甲可宮　四月定人數伍伯參人　逃走衞士火頭漆人（三人衞士逃、一人衞士依病申送、三人火頭逃、）　自訓仁宮來加壹伯參拾貳人（一百卅一人火頭、一人廝丁、）
五月粮應請人數陸伯參拾肆人（二百九十一人衞士、二百卅七人火頭、二人直丁、三人廝丁、）　料米貳伯貳拾漆斛玖斗肆升　鹽貳斛貳斗七升九合四勺　布貳伯肆拾壹段
以前起五月一日盡晦廿九箇日、衞士、火頭、直丁、廝丁等、應食公粮所請如件、錄狀故移、
天平十七年四月廿一日
從七位下行大志忍海連國楯
正六位上行少尉凡直石嶋
合
損九人（衞士六人、火頭三人、）
〔日本後紀十三桓武〕延暦廿四年十二月壬寅、公卿奏議曰、○中略衞門府衞士四百人、減七十人、左右衞士府各六百人、毎減一百人、○中略許之、
〔𡦹祿本類聚三代格四〕太政官謹奏
　廢省官員并減定人數事○中略
左衞士府（右衞士府准此）

〔續日本紀淳仁二十四〕天平寶字六年十一月丁丑、遣御史大夫正三位文室眞人淨三、左勇士佐從五位下藤原朝臣黑麻呂、○中略等四人、奉幣於伊勢大神宮、

〔續日本紀稱德二十九〕神護景雲二年十一月癸未、正五位上石上朝臣息繼爲左衞士督、河內守如故、從五位下上毛野朝臣馬長爲員外佐、

〔續日本紀光仁三十三〕寶龜六年三月乙未、從五位下佐伯宿禰藤麻呂爲左衞士員外佐、從五位下大中臣朝臣繼麻呂爲右衞士員外佐、

〔續日本紀元正八〕養老三年六月丙子、令神祇官宮主、○中略左右衞士府醫師、左右馬寮馬醫等、始把笏焉、

〔享祿本類聚三代格四〕太政官符

中衞左右衞士府醫師各二員、

今省廢一員定一員、

右被右大臣宣偁、奉勅宜依件省定、

延曆十八年六月一日

〔續日本紀光仁三十五〕寶龜九年二月癸巳、右衞士府生少初位上飯高公大人、○中略賜姓宿禰、

〔續日本紀聖武十四〕天平十三年五月庚申、令諸國常額之外、差加左右衞士各四百人、衞門衞士二百人、實之、

〔續修東大寺正倉院文書十五〕右衞士府　移民部省

四月定人數捌伯人　逃走死去、幷依病申送、衞士火頭壹拾伍人、八人衞士逃、一人衞士死、一人衞士依病申送、四人火頭逃、一人火頭死、

來加衞士火頭陸人四人衞士二人火頭

五月糧應請人數漆伯玖拾貳人五百卌八人衞士、二百卅八人火頭、三人直丁、三人廝丁、

請米參伯壹拾玖斛伍斗捌升　鹽參斛壹斗玖升伍合捌勺　布貳伯肆拾壹段

略禰麻呂、日本書紀作根麻呂、續日本紀或作尼麻呂、皆同、天武天皇之發吉野至伊勢也、禰麻呂等二十餘人從之、天皇遷美濃、令禰麻呂等將兵討大友皇子於近江平之、是年歲次壬申、誌云、壬申年將軍者謂是也、天武天皇十二年、改姓賜連、十四年再改賜忌寸、文武天皇大寶元年、以壬申年功賜食封一百戶、又以中功賜功田八町、傳二世、見天平寶字元年十二月紀、云先朝所定、慶雲四年卒、續日本紀云、慶雲四年十月戊子、從四位下文忌寸禰麻呂卒、遣使宣詔、贈正四位上幷賻絁布、以壬申年功也、據誌云十月戊子者疑史筆之誤、但正四位上是贈位、靈龜二年四月紀、天平寶字元年十二月紀、亦並云贈正四位上、可以證也、誌不曰贈者、蓋書人之誤耳、其爲左衞士督、史不載、乃缺文也、

〔續日本紀 三文武〕大寶三年十二月己巳、以正五位下路眞人大人爲衞士督、

○按ズルニ、衞士府左右アリ、衞士督ノ上、左若シクハ右字ヲ脫セルカ、或ハ衞士ハ衞門ノ誤カ、

〔續日本紀 二十四淳仁〕天平寶字六年八月丁巳、右勇士率從四位下上道朝臣正道、○中略侍于中宮院宣傳勅旨、

○按ズルニ、右勇士ハ右衞士ノ改稱ニシテ、率ハ長官ナリ、

〔續日本紀 二十五淳仁〕天平寶字八年正月己未、從四位下仲眞人石伴爲左勇士率、

〔續日本紀 二十九稱德〕神護景雲二年十一月癸未、正五位上石上朝臣息繼爲左衞士督、河內守如故、

〔續日本紀 三十八桓武〕延曆四年九月己未、兵部少輔美作守正五位上藤原朝臣雄友爲兼左衞士權督、

〔續日本紀 十聖武〕天平元年二月辛未、遣式部卿從三位藤原朝臣宇合、衞門佐從五位下佐味朝臣忠麻呂、左衞士佐外從五位下津島朝臣家道、右衞士佐外從五位下紀朝臣佐比物等、將六衞兵、圍長屋王宅、

〔續日本紀 二十四淳仁〕天平寶字六年正月戊子、從五位下笠朝臣眞足爲右勇士翼、

○按ズルニ、勇士衞ハ、衞士府ノ改稱ニシテ、翼ハ次官ナリ、翼或ハ佐トモ云フ、事ハ下文ニ見ユ、

職員 職掌

禰眞木麻呂、右兵庫頭從五位下佐伯宿禰金山等解偁、己等之祖、室屋大連公、領靫負三千人、左右分衞、是以衞門開閤奕葉相承、望請改衞士字、以爲衞門者、被右大臣宣偁、奉勅、勘撿古記、所申有理、宜依件改、

〔日本後紀 二十一 嵯峨〕弘仁二年十一月己未、改左右衞士府、爲左右衞門府、

〔令義解 一 職員〕左衞士府（右衞士府准此）督一人（掌禁衞宮掖、謂掖者、正門之傍小門也、檢校隊仗、以時巡撿、衞士名帳、及差科、謂差配兵庫大藏之類也、大儀陳設、謂大儀陳設、禮儀陳設、兵事、車駕出入前駈、引導也、後殿、謂在後爲殿事、）佐一人、大尉二人、少尉二人、大志二人、少志二人、醫師二人、使部六十人、直丁三人、衞士

〔日本後紀 十七 平城〕大同三年六月壬申、東山道觀察使從四位上守刑部卿兼右衞士督陸奥出羽按察使臣藤原朝臣緒嗣言、（中略）禁衞宮掖、撿校隊仗者、衞府之守局也、然則以時巡撿、臨事陳設、若有闕失、罪更寄誰、（下略）

〔令義解 十 獄〕凡（中略）在京決死囚、皆令彈正衞士府監決、若囚有寃枉灼然者、停決奏聞、（謂彈正奏聞、）

〔令義解 一 官位〕正五位（上階）左右衞士督　從五位（下階）左右衞士佐　從六位（下階）左右衞士大尉　正七位（上階）左右衞士少尉　正八位（下階）左右衞士大志　左右衞士醫師　從八位（上階）左右衞士少志

〔日本後紀 八 桓武〕延曆十八年四月辛丑、勅、（中略）衞門督、元正五位上官、今爲從四位下官、佐、從五位下官、今爲從五位上官、左右衞士兵衞等、一准衞門、

〔古京遺文〕文忌寸禰麻呂墓版

壬申年將軍左衞士府督正四位上文禰麻呂忌寸、慶雲四年歲次丁未九月廿一日卒、

墓版、用銅造、長八寸五分、廣一寸四分、天保二年九月、大和國宇陁郡八瀧村農夫、於圃田堀得之、（中略）

右衛門府町

古本拾芥鈔右京圖、右衛門町、中御門南、堀川東、印本拾芥抄圖、作左衛門町、未知孰非、　拾芥抄右京圖、姉小路南、富小路東三町、

〔延喜式左右衛門四十六〕凡內馬場埒料、椙二百卌荷、葛廿荷、其用途並充府物、自四月十二日始掃除幷造埒、

左右衛士府

左右衛士府ハ、大寶令制定ノ時、創メテ置ク所ニシテ、宮掖ヲ禁衛シ、隊仗ヲ撿挍シ、衛士ヲ差配シ、所部ヲ巡撿シ、車駕ノ前後ヲ護衛スルコトヲ掌ル、平城天皇ノ大同三年、衛門府ヲ本府ニ合併シテ左右靫負府ト稱シ、猶左右衛士府ノ文字ヲ改メザリシニ、嵯峨天皇ハ弘仁二年更ニ左右衛士府ヲ改メテ、左右衛門府トセリ、事ハ衛門府篇ニ具ス、

〔續日本紀淳仁二十一〕天平寶字二年八月甲子、大保從二位兼中衛大將藤原惠美朝臣押勝、○中略奉勅改易官號、○中略左右衛士府、率諸國勇士、分衛宮掖、故改爲左右勇士衛、

〔續日本紀淳仁二十五〕天平寶字八年九月丙辰勅、逆人仲麻呂執政奏改官名、宜復舊焉、

〔日本後紀平城十七〕大同三年七月壬寅、廢衛門、併左右衛士府、廢衛士府主帥各六十人、置門部各一百人、其諸門禁衛、出入禮儀、及門籍門牓等事、令衛士府主之、仍號曰左右靫負府、

〔日本後紀平城十七〕大同三年十月丙辰、左。衛。士。坊失火、燒百八十家、賜物有差、　十一月丁未、右。衛。士。坊失火、燒七十八家、賜物有差、

〔令集解職員五〕弘仁二年十一月廿八日官符云、應改左右衛士府爲左右衛門府事、右撿按內、太政官、去大同三年七月廿日奏狀偁、謹按令條、禁衛宮掖、以時巡撿、斯衛士府之職也、今衛門所掌復不異於此、徒設官員、事乖忙劇、伏請一從廢省、其諸門禁衛、出入禮儀、及門籍門牓等事、同令衛士府主之、然靫負爲名、年祀積久、今廢彼混此、雖不改文字、號曰左右靫負府者、甞聞既訖者、今得散位從五位下大伴宿

右節。服。廿年一換、

凡番長二人、門部一百人、橫刀緒料淺縹東絁十二疋四丈五尺、(人別七尺五寸、但右淺縹纈、)門部靑揩衣五十領料細布廿五端、練絲六兩一分、門部大襖十領、料細布紺白各五端、綿一百屯、(別十屯、)

右隔三年請

凡緋末額七百條、布帶三百廿條、料白布卅四端、(以八尺二寸爲二條、)脚纏五十具、料布一端一丈八尺、(以三尺充二具、)

右隔五年請

凡門部十人、三年一給大衣、並錄奏請、

凡舊破節服、幷紺衣大衣衞士衣、及衞士不仕料物、並充府中雜用、

〔延喜式四十六左右衞門〕凡大替衞士兵。仗。戎。具。隨身領遣、不得勘收本府、

〔延喜式四十六左右衞門〕幕。卅條、(縫十條、細布十條、調布十條、)幷廿年一度、申官作替、

〔延喜式三十七典藥〕左右衞門府各卅四種　大。黃。十五兩○下略

〔延喜式四十六左右衞門〕凡府牛藥。秣。請左馬寮、(事見馬寮式)但靑蒭者、令衞士刈飼之、

〔延喜式四十六左右衞門〕勅旨藥。畠。廿町(在山城國)　鍬八十口(鍬品料、但隔三年一請、)

〔續日本紀二十孝謙〕天平寶字元年八月辛丑、勅曰、○中略六衞置射。騎。田。毎年季冬、宜試優劣以給超群、令與武藝、○中略衞門府、左右衞士府、左右兵衞府、各十町、○類聚三代格作衞門府八町九段一百歩

〔延喜式四十六左右衞門〕射田十四町二段百九十六步、(四町在山城國、十町二段百九十六步在近江國、)右府射田十四町二段百七十步、(在攝津近江兩國)

〔拾芥抄中末宮城〕諸司廚。町。　左衞門府(鷹司南、大宮東、近衞北、堀川西、)右衞門府四町(土御門南、西洞院東、近衞北、室町西、)

〔大內裏圖考證二十八左右衞門府〕左衞門府町

右京圖左衞門町、押小路南、姉小路北、高倉東六町、

用途

〔朝野群載(九功勞)〕正六位上行左馬權少允平朝臣清房誠惶誠恐謹言
請被殊蒙天恩、因准先例、以私物修理進齋院外院舍屋等、拜任左右衛門尉最前闕狀、
右清房謹撿案內、以私物修理件齋院舍屋、拜任左右衛門尉者、古今之例也、近則宮道式賢修理齋院外院、任左衛門尉、藤原親實修理內院任右衛門尉等是也、就中某拜任當職之後、行幸節會、諸社祭役、大極殿守護、全無闕怠、申請之旨、何無裁許、望請天恩因准先例、修理進件院舍屋、被拜任左右衛門尉最前闕者、將致警衛之勤、清房誠惶誠恐謹言、
康和三年二月九日　正六位上行左馬少允平朝臣清房

〔葉黃記〕寬元五年(〇寶治元年)三月五日戊午、靫負尉所望輩本官事、予藏人頭之時、每度仰外記令尋實否、依多謀官之輩也、其後此風未忌、今日再三有其尋、　六日己未、淡路國爲宜陽門院御沙汰被造營後白河院法花堂、仲貞任之、山城守國信罷任國申任靫負尉、雖有先例猶不可有過分事、仍申止畢、

〔新抄(五)〕五月(〇弘安十年)廿四日(甲寅)今日成功員數事被定之、八省丞(七百疋、但民部千五百疋)、諸司助(千五百疋)、同允(五百疋)、諸國權守(千五百疋)、近衛將監(八百疋)、靫負尉(千五百疋)、兵衛尉(千疋)、馬允(六百疋)、敍爵(千五百疋)、法眼(千五百疋)、法橋(千疋)、如此、而行事官等以成功擧申之條、太不可然、向後永可停止、若有違犯之聞者、殊可有其沙汰之由、爲頭大夫信輔朝臣奉行、被下御教書於四位大夫秀氏宿禰、卽員數注文同被下之、

〔延喜式(四十六左右衛門)〕凡督料袷袍一領、料黑緋綾四丈、緣絹四丈、佐料袷袍二領、料緋綾一疋二丈、緣絹一疋二丈、綿裲襠廿五領、(三領督佐料、七領尉料、十五領志料、)尉料袷袍七領、料深緣絹四疋四丈、淺緣絹四疋四丈、志料袷袍十五領、料深縹絹十疋、縹絹十疋、門部料袷袍七十六領、料紺絹卅八疋、縹絹卅八疋、門部料黃袷袍一百領、料黃絹五十疋、縹絹五十疋、門部料黃單袍五十領、料絹廿五疋、衞士三百廿人、衣幷袴料布二百卅八端、縹絲十三絇四兩、

被勤して、他國に住し候者多く有之候、後世に至り、何右衛門尉、何兵衛尉ご私に稱し候者、右之遺風にて御座候、

〔朝野群載九功勞〕別功者申靫負尉

藏人所雜色散位正六位上源朝臣家重誠惶誠恐謹言

請特蒙天恩、因准先例、依運造圓德院內檜皮葺八間四面堂、五間一面廊等各一字、并鏤造同堂金物等功、被拜任左右衛門尉闕狀、

右家重謹撿案內、爲文章生之者、雖無所募拜除金吾、古今之例也、何況申請別功之輩、必浴朝恩、爰去寬治二年閏十月十二日宣旨偁、應令文章生源家重以私物運造圓德院內堂一字、廊一字、依其成功、不待次第任左右衛門尉最前闕者、家重殊勵微力、不日造進、請所司覆勘先畢、其後重蒙宣旨、可鏤造進件堂金物等者、同致其勤亦畢、頻成莫大之殊功、未遂警衛之宿望、就中苟爲功臣之胤、早釣貢士之名、況爲藏人所雜色之者、朝撰異他、採擇之間、誰謂非據、望請天恩因准先例、依件功被拜任金吾、將竭夙夜之節矣、家重誠惶誠恐謹言、

康和二年七月廿三日　藏人所雜色散位正六位上源朝臣家重

〔朝野群載九功勞〕正六位上行左馬少允紀朝臣久俊誠惶誠恐謹言

請特蒙天恩、因准先例、依以私物造進太子宿朱器殿、幷鳥曹司功、遷任左右衛門尉闕狀、

右久俊謹撿案內、依土木之功、任金吾之例、古今已多、久俊依承德二年四月十三日綸言、造進件屋等、以康和元年閏九月一日申請覆勘畢、重案舊貫、中原賴遠、造進鳥曹司、早以拜除、藤原永儀、造進太子宿、又被遷任、皆依一字之造營、超先功之等倫、以彼論此、盍仰哀憐而已、望請天恩因准先例、依件成功、遷任金吾者、將勵愚魯之性、彌致警衛之勤矣、久俊誠惶誠恐謹言、

康和二年七月廿三日　正六位上行左馬少允紀朝臣

業生幷諸國掾直補廷尉、非無蹤跡、明法得業生讃岐時人任左志、同宍人永繼任右志、又大和掾藤原好行任右尉等也、成直明法擬得業生兼居司馬職、准彼等例欲補志闕、惟雖愚歎累業之欲絶學、又雖拙嗜三章而齡闌、今仰無偏之化、誰謂非據之任、擧奏之處、何無哀憐者、今加覆審、所申有實、方今使廳之政、法家爲基、當時所在道志二人也、已少糺勸之人、自爲擁怠之本、望請天恩因准先例、依譜第學道勞、以件成直被拜任左右衛門志、則令蒙使宣旨者、將俾致奉公之節矣、仍注事狀、謹請處分、

永治二年正月廿一日　正五位下行右衛門權佐兼近江守皇后宮大進藤原朝臣

正五位下行左衛門權佐藤原朝臣

正三位行權中納言兼左衛門督藤原朝臣公敎

依成功任靫負尉

〔年々隨筆三〕官をうらるゝ事は、いつよりかありそめけん、○中略衛府尉諸司三分を無員數にして、成功を募らるゝやうになりしも、いつのほどよりならん、いまだ考えず、もしは後白河院などの御おこたりにはあらざるか、一人二人づゝ、やう／＼に數まして、きはやかにいつよりといふ事はなきなるべし、文治のころは、無員數なる事勿論也、寛元の比になりては、猥なる事いふべくもあらず、寛元三年の平戸記に、十三度の除目の聞書をのす、その度ごとに、四府の尉おの／＼十二三人づゝ任せらる、○中略かの記に靫負尉以下、無量無數などいひ、公事每度被行成功之口任雖知末世之至、猶々可悲ともあるは、その比の有職も歎かれし事ながら、これを除ては生財の道なかりし也、○中略かの無量無數の成功にいたりしは、行事官より諸國に觸て、富豪の百姓に募りたる物なれば、きのふまで庄官里長の沓とりし者も、けふは正六位上左衛門尉となりて、弓やなぐひなど勢たちありくはいと／＼みだりにて、やみがたき勢とはいひながら、かなしきわざ也、

〔難波江未定稿六〕何右衛門尉

是はもと成功と申候て、國々より造營の料などを奉り、其功にて衛門尉、兵衛尉等に任じ、其役不

志補任

正二位行權中納言兼左衞門督藤原朝臣公實

〔百練抄後鳥羽十〕建久元年十二月十四日甲午、今日無官之輩十人被任叡負尉、討奉衡之功賞也、

〔吾妻鏡四十〕建長二年四月廿五日庚申、諸御家人任官之間、無本官之輩、直可任左右衞門尉之由望申之、向後可停止之被仰出、淸左衞門尉爲奉行、

〔古事談臣節二〕業房龜王兵衞之時、夢ニ御前ヲ奉被追却門外ヘ被追出ト見テ、後朝康賴ニ、カヽル夢ヲミツル、年始ニフクタノシキ事也ト云ケレバ、康賴云、極吉夢也、可任叡負尉之夢也、叡負陣門外之故云々、果十ケ日中拜左衞門尉云々、

〔朝野群載功勞九〕正六位上行内膳典膳菅原朝臣有隣誠惶誠恐謹言

請特蒙天恩、因准先例、改菅原氏賜本姓惟宗、遷任左衞門志、即蒙撿非違使宣旨狀、

右有隣、謹撿案内、出法曹居諸司之者、遷金吾至廷尉、載在竹帛、不遑羅縷、又改氏姓任道志者、明法博士貢淸是也、○中略望請天恩因准先例、改菅原氏賜本姓惟宗、遷任件官職、將知儒胤之異他矣、有隣誠惶誠恐謹言、

永久三〇一本作二年正月十三日　　正六位上行内膳典膳菅原朝臣

〔愚昧記裏書〕撿非違使

請特蒙天恩、因准先例、依譜第學道勞、以正六位上行備前大掾惟宗朝臣成直、被拜任左右衞門志、即令蒙使宣旨狀、

右得成直款狀偁、謹撿案内、成直親父故左衞門志成□久仕廷尉、夙夜在公之時、晨昏守庭訓、坐臥傳門業、勘判記錄之□紕斷推鞫之詞、雖謂親父之提耳、猶代大匠兮執斧者也、而使廳者、是依爲判斷之處、多登用法曹之士、尉志之間、同時四五人補來尙矣、就中道志三人並任例也、近則長德四年、右志伴忠信、坂本忠國、縣犬養爲政、長保四年、左志惟宗博愛、豐原爲時、右志縣犬養爲政等是也、抑自明法得

惟方忠方永承三　平貞叙永承三　藤章俊天喜六　源賴俊康平七　豐原奉季康平五　源義綱治曆二　同家宗治曆二　平季衡延久四
藤經仲康和元保安三　源光國承曆三　平兼季承德二　藤盛重天仁元　源重時天仁二　平志盛天永四　平宗實天永二　藤盛通保安
源資遠　源光信流罪　平盛兼　季範　源光保　同近康　同季賴　源爲義解官
義康イ无　基盛　平信忠　源資經　季實イ无　本脱イ信業　爲行　爲信イ无
信兼　資經解官　貞能　貞義イ无　重貞　業房　爲經イ无　能盛
盛國叙爵後更叙留　師高同叙　遠成同叙　康綱　景高　忠綱　知綱解官　季貞解官
仲賴　義經伊與守　知親　信盛　公朝　定康　季國　廣元元因幡守兼明
法博士、外記大夫、　賴時　明基　能宗解官

〔朝野群載十一廷尉〕請被特蒙天恩、因准先例、以正六位上行明法博士兼左衞門少志中原朝臣範政、兼轉尉闕狀、

右得範政款狀云、出自法曹、居廷尉之輩、依志勞轉尉、古今之通規也、至流滯之者、不過十有餘年、近則伴忠信、長德二年四月任右志、長保元年五月轉右尉、歷四年縣犬養爲政、長德四年十二月任左志、寬弘二年十二月轉尉、歷八年豐原爲時、長保四年三月任左志、寬弘元年十一月轉右尉、歷三年同爲長、萬壽四年十二月任左志、長元三年十月轉尉、歷四年惟宗忠方、長元五年二月任左志、長久三年正月轉尉、歷十一年等是也、不追羅縷、而範政、去永保四年正月初任右志、應德四年遷左志、前後勞于玆十七箇年、其間陳直恪勤、凡記錄之節、及臨時劇務之役、日夕奔波、無致懈怠、因玆年來每有尉闕、雖奏申文、宿運已拙、頻漏渥澤、早被擧奏、慰多年之歎者、今依款狀加覆審、所申有實、若无優擧、何勵後輩、望請天恩因准先例、以件範政將被令急轉尉闕、仍勒在狀、謹請處分、

康和二年正月廿一日

右少辨正五位下兼行右衞門權佐藤原朝臣俊信

左少辨正五位下兼行左衞門權佐藤原朝臣顯隆

尉補任

經房　光雅　親宗　光長　定長　定經

兼受領人

共政大和　敏忠攝津　時明和泉　允亮河内　宣孝山城　孝忠同　爲義攝津　顯賴丹

顯能越前　憲方近江　賴憲紀伊

〔本朝文粹六奏狀〕請特蒙鴻慈因准先例兼任辨官左右衞門權佐大學頭等申佐官替狀

大江匡衡

伏撿故實、文章博士兼辨官例、大江朝綱卿、菅原文時卿也、兼衞府例、藤原菅根兼左近衞少將也、兼大學頭例、祖父維時卿、菅原文時卿也、諸道博士兼衞府佐例、明法博士惟宗公方兼左衞門權佐也、〇中略加以伶人左衞門尉大友兼時、右衞門尉秦身高等、猶遇臨時之恩、各預不次之賞、蓋重其藝能也、〇中略

正曆四年正月十一日從五位上行文章博士兼尾張權守大江朝臣匡衡誠惶誠恐謹言

請特蒙天恩因准先例依儒學勞被兼任辨官闕左右衞門權佐申他官替狀、　大江以言

謹撿故實、文章博士兼辨官、儒士居左右衞門權佐、繼踵無絕、不可遑計、〇中略望請天恩、被兼任件等官、聊發榮花於翰林之三春、將傳故實於學稼之萬代、以言誠惶誠恐謹言、

寬弘四年二月廿二日正五位下行文章博士大江朝臣以言誠惶誠恐謹言

〔二中歷二諸司〕大夫尉始起

藤爲忠天曆六年正月敍、左使、　源滿季天祿三、右、　同致明左、延元正敍、　源光國右　平兼季左右イ　藤盛重左、嘉承三敍、　藤盛通右　源光信流罪　源中原資遠　平盛兼左　源義經左、元曆元敍、平氏誅戮功、昇、

大夫尉

藤爲忠天曆五正七始　源滿季天祿三　同致明天延元　藤貞材寬和二　源爲文正曆三　藤忠親長德三　安部信行長德五　豐原爲時寬弘六

源賴國同八　藤宗相寬仁　紀宣明萬壽元　宮道式光長元三　平直方長元四、　季任長元八　平維方長久二　高章行寬德二

伊望　藤安國右　中正左　源忠右　藤亮堪左　紀淑人左　源仲兼右　小野好古右朱雀
源洪左　俊　中随時四位　源俊左　藤村上成國右　同滋望右　同克忠左　源敦右
藤文文範右　惟宗法家公方左　小野維幹右　橘儒公輔右　源國光右　平備行右　橘文伊傳左　藤倫寧左
菅輔正左　藤致忠右　同文陳忠左　江文澄景右、兼河内守　藤冷泉安親左　同永保左　同圓融相親左　同文共政右、大和如元、
源沃左　藤爲信中少將右　同爲頼左　三善儒道統右　平親信右　藤惟成左　同長清左　同政方正左
高階敏忠右、兼攝津守、　源時明和泉如元、右、　高階儒信順右　惟宗允亮右、四位、兼河内　源文孝道右　同宣孝右、兼山城　同孝忠兼山城、右、　同中尹右
橘文爲義四位、左、兼攝津守、　藤文頼任右　同儒資業左　同章信右　江後一法家保實左　藤文家業　同文定輔左四位
源文爲善左　藤儒家經左　平文雅康右　藤四位隆佐左　平文範國右　同定親左　同行親右　藤儒實綱右
泰憲　令宗法家道成左　源長季四位　藤憲房右左　同隆方右　平定家左　橘爲仲四位　藤儒有綱右
江從三位儒匡房左　藤文季綱右　同鳥羽儒四位行家左　同儒敦宗右　同爲房左　同儒有俊右　同堀川知綱右　同儒有信左
平文時範右左　藤顯澄右左　同儒俊信右　同儒實光右左　藤新院重澄右　同顯頼右、兼丹波守、左　平文實親右　藤儒行盛左
同顯能右、兼監[illegible]守、　同儒宗光右　同朝隆右左　同憲方　同親隆左　同光頼左　同憲方右　同範家左
同顯遠左　藤惟方　頼憲　藤俊憲右　同貞憲　同爲親　平時平　藤光方
時忠解官　重方　長方　經房　盛隆　光雅　親宗　光長
親雅　藤定長　平棟範　藤定經　同宗隆　長房　同家イ資實　同朝經左、元侍從、
同宗方　同光親　親長

今案叙負佐兼三官人

醍醐清貫　朱雀俊　花山惟成　一條信順　後三資業　後一章信　後朱定親　同泰憲
後三匡房　鳥羽爲房　堀川時範　新院顯隆　同顯頼　同實光　實親　朝隆
光頼　範家　顯遠　惟方　俊憲　貞憲　時忠　長方

督補任

佐補任

〔任官勸例〕左右衞門督、大業人任例、　香人卿　兼光卿

左右衞門佐四品例　周家

自權佐轉任例　長谷雄　異臣

〔光臺一覽二〕衞門府と云は

左衞門督　中納言以上　右衞門督　宰相以上　何れも一人宛　唐名金吾將軍　左右衞門佐

一人宛　左右衞門權佐一人宛　唐名金吾次將　五位四品之殿上人任之　左右衞門尉大小　左

右衞門志大小　何レも六位地下無數　左右衞門府生　六位七位共任之

〔公卿補任土御門〕建仁三年癸亥

中納言正二位藤公繼春宮權大夫、八月廿一日更兼右衞門督、補檢別當、十月廿四日復任、同日轉左衞門督、經右衞門督任左衞門督例

〔新儀式五臨時〕定檢非違使事

召大臣於御前、定補別當一人、公卿之中、帶左右衞門督者補之、或近衞大將中將、或左右兵衞皆補之、幷佐二人、用左右衞門權佐、或近衞少將、〇中略其

左右多少亦以不定、

〔官職知要中〕攝家淸華羽林名家之品

勸修寺流　勸修寺、甘露寺、葉室、萬里小路、淸閑寺、小川、坊城、中御門等七家童形之時同前、元服之時、

從五位上、以廷尉佐爲初任、次任辨官、藏人に補し給ふ、所謂廷尉佐者、爲左右衞門權佐之人、被蒙檢

非違使之宣旨、曰之廷尉佐也、

〔二中歷二諸司〕靫負佐寬平以後

高階忠峯宇多左　在原弘景右　藤滋實左　源唱左　同當時　在原弘景少將左　藤滋實少將右　同茂範右

源實左　藤恒尚左　同如道左　延喜連並左　源當平右　同兼似左　元善左　同春仁左

清貫右　同貞興左　同恒尚左　同當幹左　平時望左　橘公緒少將左、左　平伊望少將左　忠文

士任例、又有四位例、又有自尉轉任例、併載撿非違使所、又散位者任例、（始自諸氏）　大尉　令云、二人、然而輒不任之、爲五位尉之輩中殊撰人、　少尉　兵衞尉有年臈者、諸司三分、爲凡有成功諸司助、文章得業生、前坊帶刀長、木鳥、道志等任之、又有依府督請任例、（始自平春行）　凡拜任輩、皆撰重代者授之、依勳功別功任之輩、古今連綿、（中略）　大志　明法道者、爲廷尉之外不任之、近代不然、　少志　府奏臨時內給任之、明法道者、自諸司二三分遷之、自馬允任例、（藥田憲行）　自帶刀任例、（山口千陸）　自瀧口任例、（紀實明、菅野義宣、）

〔職原抄下〕左右衞門府

督一人（相當從四位下、唐名金吾將軍）　左衞門督者、爲中納言參議之人兼任之、近代無非參議任之例、（但源賴家朝臣任左衞門）　右衞門督者、雖非參議任之、但近代無非參議四位任之例、　佐一人（相當從五位上、）（督別儀歟）、四府之中、殊執之、（唐名金吾次將、）　五位殿上人中任之　權佐一人　名家譜第擇其人任之、必蒙使宣旨、又必可補藏人故也、　尉（大相當從六位上、少相當正七位上）　唐名金吾校尉　顯官也、仍六位諸大夫幷侍、尤可擇其仁也、近代不及是非沙汰、可謂無念、其中蒙使宣旨者至于今爲異他之儀、又五位後敍留、撿非違使之外、未聞其例、　志大少　唐名金吾錄事　見撿非違使篇

〔百寮訓要抄〕左衞門府（金吾）　是も宮城守護職也外衞といふ也、門外を警固すべし、

督（金吾將軍）　大中納言是に任ず、殊執る官也、　佐（金吾次將）　四位五位是に任ず　權佐　五位是に任ず、五位藏人辨官を兼して此佐を兼、使の宣旨を蒙を三事と申也、　大尉（金吾校尉）　撿非違使の道志可然者、是に任るなり、　少尉　撿非違使とも、五位六位是に任ず、　大志（金吾錄事）　同前　少志　おなじ

右衞門府　左衞門府に同

督　納言三位四位以上是に任ず、子細左衞門の督におなじ、但左にはおとるべし、　佐　左衞門府に同　權佐　おなじ　大尉　左におなじ　少尉　左におなじ

前十日、仰左右衛門府、令差進獵長尉志一人、（長等掌各府列卒廿二人）

〔延喜式 四十六左右衛門〕凡狩子五十人冠并衣袴布卌端三丈之中、紺布一端一丈五尺冠料、桃染布廿五端、白布十四端一丈五尺、糠絲十八兩三分、

〔内裏式 上〕七日（○正月）會式

其日平明、左右衛門、樹梅柳於舞臺之四角及三面、（○中略）其日逮昏、（○中略）左右衛門門部秉燎、入自延明萬秋兩門、列於顯陽承歡兩堂前、各十炬、（北面）

〔延喜式 四十六左右衛門〕凡諸節會之日祿、令衛士運進、

凡諸節會日、若入夜者、令衛士進秉燭、其數十人、（若有障害者廿人）

〔延喜式 三十大藏〕凡諸節會日所懸之幔、令左右衛門府守之、若不勤守致破損者、申官拘留官符要劇馬料、

〔侍中群要 十〕伐中重枯木事

仰左右衛門府、令伐、若隨便陣仰令左右衛門伐其木之由、至于木作物所申之、

〔侍中群要 十〕犬狩事

無佛神事之時、并休日、御物忌等之間、隨仰召仰左右近陣官行之、瀧口等相從之、藏人等追御所之犬、所狩獲、併召左右衛門官人令放流之、遲參之間、右兵衛陣外以陣官令守之、隨來給之、

〔三代實錄 二十七清和〕貞觀十七年六月廿三日甲戌、不雨數旬、農民失業、轉經走幣、祈請佛神、猶未得嘉澍、古老言曰、神泉苑池中有神龍、昔年炎旱、焦草礫石、決水乾池、發鐘鼓聲、應時雷雨、必然之驗也、於是勅遣右衛門權佐從五位上藤原朝臣遠經、率左右衛門府官人衛士等、於神泉苑決出池水、

〔官職秘抄 下〕左右衛門府（令外官勅）

督　中納言參議中、公達輩任之、近代粗有諸大夫例、又大業人任例、（音人兼光）　佐　公達任之、於諸大夫者規模也、四位例、（周家）自權佐轉任例、（長谷雄眞臣）　權佐　重代者、有名譽任之、或大業者居之、又有明法博

從雜役

令退出洛外、以左右衛門尉堪事者令送配所、(昌泰例、檢非違使尉送之、)撰日告諸社、又告諸陵、

〔延喜式 二十八兵部〕凡兵庫器仗、應須曝涼者、本司預移省、省申官、官令中務擇日、訖就庫監曝、十日使了、所須人力本司申官、官仰左右衛門府、府奏聞、然後充之、

〔延喜式 四十一彈正〕凡八省院廻、左右衛門相分掃除、(豐樂院亦同)

〔延喜式 四十六左右衛門〕凡每月晦日掃除宮中者、差將領府生一人火長四人、送民部省、

〔延喜式 四十六左右衛門〕凡臨時伊勢奉幣、及神今食、新嘗會、諸節日、掃除小安殿廻、並豐樂院中院前庭等、

〔江家次第 九九月〕十一日小安殿行幸裝束

前一日仰左右衛門府、左右馬寮、令掃除龍尾道以北、大極殿以北、

小安殿東西左右馬寮、龍尾道上左右衛門府、　又云、左右衛門府東西相分敷砂、

〔江家次第 一正月〕元日宴會

當日平明、令主殿寮掃除南庭、○中略仰左右衛門府、從長樂永安兩門令敷砂、(左衛門長樂門、右衛門永安門、並擬東司、仰左右近衛陣、令開之、)

○按ズルニ、七日節會モ亦同ジ、

〔侍中群要 十〕敷砂事 (南殿ハ南階左右相分敷之)

暫垂廂御簾、敷了上之、御前庭中、(以南右衛門府敷之、以北左衛門府敷也、)每有可然事、仰彼令敷之、上格子以前敷之、殿上前同鋪之、

〔門室有職抄〕立砂事

慶賀之時、乃至貴人之御儀ニ立之、宗トハ門外又庭前、兼日立之、臨時ニ可散之意、前日ニ砂ヲ散サズ、翌日ニ雨ナムド降ル時可散之料、仍內裏ニハ長日之左右衛門府ノ立砂ト云是也、

〔新儀式 四臨時〕野行幸事

〔延喜式左右衞門四十六〕凡行幸之日、召集散所衞士、令供奉、若致闕怠、每一日怠奪五斗粮、

巡撿

〔延喜式左右衞門四十六〕凡撿技左京非違者、佐一人、尉一人、志一人、府生一人、火長九人、二人看督、一人案主、四人佐尉從、各二人、志從一人、府生從一人、

〔扶桑略記裏書二十三〕延喜四年三月四日己亥、大臣已下就陣、議可搜捕京中群盜之事、七日壬寅、左衞門志高仁、捕得群盜首、於陽明門前著鈦了、

掌囚人

〔令義解獄十〕凡徒流囚在役者、囚一人、兩人防援、謂其囚二人者、四人防援、若囚在圄囹者、既禁其身、不可同在役法、仍須臨事量配令堪掌固也、在京者、取物部及衞○士充、謂三府衞士也、○分物部、三分衞士、在外者取當處兵士分番防守、謂此亦爲兵士立文、

〔延喜式左右衞門四十六〕凡捉人防援、火長七人、三人守獄所未彈人、四人領著鈦囚、

〔延喜式刑部二十九〕凡決死囚者、省預移送彈正衞門、其日會集市司南門、共監行決、其彈正左衞門官人列門外東、各西面北上、相去一許丈、刑部右衞門官人列門外西、各東面北上、相去同上、市獄兩司列於南庭、自衞府南去四許丈、各北面中上、東西兩頭相去三許丈、囚人當中間而跪、自兩司南去三四許丈、物部分陣防援、列囚左右、北向中上、立定、錄進於兩司中間、北面宣告犯狀罪名、示衆、衆人稱唯、畢還於本列、即丞召兩司仰云、依例行之、兩司稱唯、以還本列、轉告物部、物部稱唯、案劍戮之、絞者用繩、其殘骸者、令授近親斂之、若無親者、令兩司埋城外閑地、豎樹牓示、注國郡姓名、

〔延喜式彈正四十一〕凡決死囚、皆令臺左右衞門府監決、若囚有冤枉灼然者、停決奏聞、

〔令義解獄十〕凡(中略)○在京決死囚、皆令彈正衞士府監決、若囚有冤枉灼然者、停決奏聞、謂彈正奏聞、

〔扶桑略記裏書二十五〕延長八年十月二日、見徒罪人、皆悉放免、人別給錢云々、左右衞門尉鑒之、

〔本朝世紀〕天慶四年十一月廿九日乙酉、兩國賊首藤原純友之次將者佐伯是基、乍生將來左衞門府、

〔北山抄拾遺雜抄四〕貶退事

密告之人、進其告狀、先閉諸陣、左衞門陣、小閑用之、諸衞佐等候殿上之者、服布衣帶狩胡籙、若有禁固之人、左右大辨就左衞門射場勘問、令進過狀之後、任法行之、除目例等見記文也、告人進賜賞、二階、以撿非違使佐

禮冠、而著武冠、失也、

〔左經記〕寛仁四年二月一日癸未、或人云、左衞門權佐保資、申慶之間著尋常五位袍云々、又或人云、入道殿仰云、撿非違使佐、申慶之間、用尋常衣、次令催成撿非違使官符之後、待兵部移、帶劍著黄袍、又申畏、不拜云々

進獻

〔延喜式左右衞門四十六〕凡鮮鮨御贄、隔三日進藏人所、左寅午戌、右卯未亥、

〔侍中群要三〕日中行事

巳一刻奏日次御贄事

御厨子所例云、寛平九年七月四日、始定四衞府小鮨日次御贄、左兵衞、子辰申 右兵衞、丑巳酉 左衞門寅午戌 右衞門卯未亥 者、今案十隻以上、申廿隻已下也、若無鮨者、申其由於藏人、隨其處分以他物進之、又若御精進者、預仰其由、以雜菜令進之、

〔延喜式左右衞門四十六〕凡二月八日上丁、進釋奠三牲、大鹿小鹿猪各一頭、加五藏、並丙日送大學寮、菟二頭、料醢、潔清乾曝前祭三月送大膳職、其貢進之次、以左近衞府爲一番、諸衞輪轉、終而更始、若享在新年春日大原野園韓神等祭之前、停供三牲、代之以鯉鮒、諸衞准之、

〔延喜式左右衞門四十六〕凡正月講最勝王經所、進衞士十五人并雜花一櫃、諸衞以次進之、其種子稻五十束、請山城國便郡衞修爲十三荷、亦進會所、

供奉

〔延喜式宮內三十一〕供奉踐祚大嘗小齋

左右衞門府、各官人二人、府生一人、門部廿人、語部十五人、門部八人、

〔延喜式齋宮五〕凡齋王將入于初齋院、臨河頭爲祓、○中略 左右門部各二人、左右火長各十人供奉、

〔延喜式齋院六〕凡定齋王畢、卽卜宮城內便所爲初齋院、卽先臨川頭祓禊乃入、○中略 左右門部各二人、左右火長各十人供奉、

服裝

〔延喜式左右衛門四十六〕凡供奉行幸官人以下府生以上、並准近衛府、門部皂緌、紺布衫、白布帶、横刀、弓箭、行騰、麻鞋、行幸近以蒲脛巾代行騰衛士皂緌、桃染布衫、白布帶、横刀、弓箭、白布脛巾、草鞋、但踐祚大嘗會禊祓、用鷲像纛幡二旗、其執纛一人、著末額、緋行騰、纈袍、帛傳帶、騎馬、執纛二人、貲布衫、布帶、步行、並用兵庫寮夫、他皆准此鷹像幡四旗、小幡卌旗、少減於威儀幡、他亦准此鉦鼓各一面、其用度雜物、及擊鉦鼓人、執纛夫等裝束、並見兵庫式、

凡大射官人二人、著皂緌、位襖、白布帶、横刀、弓箭、緋脛巾、麻鞋、門部十人、皂緌、末額、紺袍、白布帶、横刀、弓箭、白布脛巾、麻鞋、衛士十人、皂緌、末額、桃染布衫、白布帶、横刀、弓箭、白布脛巾、麻鞋、其次第者、在兵衛府後、

〔日本後紀二十二嵯峨〕弘仁四年二月甲午、改門部緌帶色、左門部著淺縹、右門部淺縹纈、

〔延喜式四十一彈正〕凡衛府舍人刀緒、○中略左門部淺縹、右門部淺縹纈、

〔江家次第十一十二月〕追儺

不開建禮門時、衛門不可帶弓箭歟、

年中要抄曰、近衛衛府公卿、皆帶弓箭、雖無所據可從例歟、大將儀曰、大將及諸衛督、皆帶弓箭、此事無所據、又不見舊例、然而近代帶之、未得其意、○註略

左右衛門佐帶弓箭哉否事

予案建禮門不開、於中重行事、仍不帶、有信問、予說不帶之、前例慥可尋之、故行親帶之云々、

左右衛門督、近來帶之、次又有不帶之人、

〔後三條院御卽位記〕抑左衛門佐爲仲朝臣、傳祖父爲義朝臣裝束、在府右衛門佐良基、新調備云々、又左衛門大夫尉二人、義綱帶弓箭、家宗不帶弓箭矣、

內府說云、御前以南者、以北爲上、以北者以南爲上、當左右時、以中爲上、然則左失之、

義綱存尉雖五位可帶弓箭之由、家宗五位不可帶之由、家宗失也、又義綱已帶弓箭、理不可著武

不開之由、而尙可開之由、依有上官仰令開已畢、而今違式早不開之由被勘當、無所避申者、(○中略)據此等文、於會昌門、左右衛門率門部等可開之由、式條已存、而件府官人執申以府門部不開之由、然而依上官仰遂以開門、早不開之由、進承伏狀畢、是尤犯違式罪者也、但事无口須依坐法爲等連督、爲首、笞卌、身帶三位、議減一等笞卌、合贖銅三斤、佐二人、爲第二從減一等笞卌、各帶五位請減一等笞廿、各合贖銅二斤、尉五人爲第三從減一等笞廿、各贖銅二斤、或是五位、或帶六位、至五位者請減一等、於六位者例減一等、各笞十、合贖銅一斤、志五人爲第四從減一等笞十、帶六位例減一等、可无其罪、仍勘申者、從二位行大納言兼右近衛大將陸奥出羽按察使藤原朝臣師輔宣、奉勅、宜依件徵納者、宜承知依宣行之、符到奉行、

従五位上守右少辨兼左衛門權佐源朝臣並

正六位上行右少史御立維宗

天慶九年八月七日

〔延喜式 四十六 左右衛門〕凡踐祚大嘗會、齋院屯陣裝束、一如元日、但除纛隊幡鉦鼓、

凡大儀之日、居兕像於會昌門左、事畢返收本府、(右府居右)

〔延喜式 七 踐祚大嘗祭〕卯日、(○中略)諸衛立仗、諸司陳威儀物、如元日儀、(○中略)伴佐伯各二人、分就南門左右外掖胡床、待時開門、(○中略)左右衛門督以下、各引其隊分衛其方及門、門部糺察諸門出入、

〔内裏式 上〕元正受群臣朝賀式

諸衛服大儀、各勤所部、立大儀仗於殿庭左右及諸門、門部四人居於章德興禮兩門東西也、(各用胡床、)(○中略)四剋大臣入自昭訓門就幄座、闈外大臣(若無大臣者、參議以上行事、)令撾外辨鼓、諸門鼓皆應、(殿下鼓不應、)乃開章德興禮兩門、(自餘小門先已開)訖大伴佐伯兩氏、(左大伴、右佐伯、不帶劒者權帶、)率門部各三人入自南門、坐胡床於會昌門上、門部坐於門下、(東西相對、去壇一丈、當門北檻、西亦同、)

中儀［謂元日宴會、正月七日、十七日大射、十一月新嘗會、及饗賜蕃客、］

督佐並著位襖、金裝横刀、靴、策、著韈殳、尉志並皁緌、位襖、白布帶、横刀、弓箭、麻鞋、府生門部並皁緌、紺襖、白布帶、横刀、弓箭、麻鞋、衛士皁緌、桃染布衫、白布帶、横刀、弓箭、麻鞋、並居胡床、［門部衛士、大射並饗賜蕃客時、著皁巾末額、］隊幡四旒、小幡六十旒、［大射建之］

小儀［謂告朔、正月上卯日、臨軒授位任官、十六日踏歌、十八日賭射、五月五日、七月廿五日、九月九日、出雲國造奏神壽詞、册命皇后、册命皇太子、百官賀表、遣唐使賜節刀、將軍賜節刀、］府生以上、並准近衛府、門部黃袍、衛士桃染布衫、餘准中儀、［除末額］其蕃客上表、天皇不臨軒者、亦准小儀、［兵衛府准此］

〔政事要略［八十二糺彈雜事］〕太政官符刑部省

應徵納右衛門府贖銅拾貳斤事

參議從三位兼行督讃岐守源朝臣高明	贖銅參斤
權佐從五位上橘朝臣好古	贖銅貳斤
佐從五位上小野朝臣道風	贖銅貳斤
大尉從五位下藤原朝臣守人	贖銅壹斤
權少尉正六位上源朝臣忠光	贖銅壹斤
少尉正六位上藤原朝臣倫寧	贖銅壹斤
少尉正六位上藤原朝臣忠用	贖銅壹斤
權少尉正六位上藤原朝臣助信	贖銅壹斤

右得大判事兼行民部少輔明法博士惟宗朝臣公方等勘申狀偁、右少史御立維宗仰云、少辨源朝臣俊傳宣、大納言藤原朝臣師輔宣、奉勅、去四月廿八日御即位、右衛門早不開會昌門、依之進過狀畢、宜仰明法博士等令勘申其罪狀者、撿彼府去五月十一日所進過狀偁、去月廿八日、早不開會昌門狀、右會昌門須任式差遣府門部令開、而依延長七年正月一日朝拜日記、誤一度執申以府門部

宿直

〔枕草子春曙抄三〕夜行とは、衛門府は內裏の御門を守る故、夜の巡行をつとむる也、

〔政事要略六十一糺彈雜事〕左大史多米朝臣國平仰偁、右中辨源朝臣道方傳宣、內大臣宣、奉勅、左右衛門陣宿直官人、每番各加置撿非違使也、寄事追捕、不直本陣、若向近所、尙以本人可令歸勤、若赴遠所、亦替他可令宿直、自今以後、更莫闕怠者、

長保元年十月二十五日　　左衛門少志美努理明奉

〔江家次第十二神事〕齋王卜定事伊勢

立陣屋、左右衛門、幷仰衛門可宿直之由、次立炬火屋、修理職

儀仗

〔延喜式四十六左右衛門〕左衛門府右衛門府准之

大儀謂元日、卽位、及受蕃國使表、

其日寅二刻、近衛府始擊動鼓、以次相應、卽令裝束、督著武禮冠、深緋襖、繡裲襠、將軍帶、飾以金銀金裝横刀、靴、策著鞾、佐武禮冠、緋襖、繡裲襠、將軍帶、金裝横刀、靴、策著鞾、尉志並皂緌、深綠襖、志緋襖綿裲襠、白布帶、横刀、弓箭、緋脛巾、麻鞋、府生門部並皂緌、紺襖、挂甲、白布帶、横刀、弓箭、白布脛巾、麻鞋、門部加末額衛士皂緌、末額、桃染布衫、挂甲、白布帶、横刀、弓箭、白布脛巾、麻鞋、卯一刻、近衛府擊列陣鼓、以次相應、卯三刻擊進陣鼓、仗初進擊行鼓、各相應如前、皆就隊下、督率尉以下、隊於會昌門外左、若蕃客朝拜者、隊於應天門內、鷲像纛幡一旗、鷹像隊幡二旗、小幡卌九旗、鉦鼓各一面、伴氏五位一人、右佐伯氏、各服禮服、率門部三人、裝束同上、不著弓箭、入自腋門居會昌門內左廂、門部在門下、依時刻令開門、佐率尉以下、隊於應天門外左、隊幡二旗、小幡卌五旗、尉一人率門部三人居門下、開門畢還本陣、又尉率志以下、隊於朱雀門外、隊幡二旗、小幡卌八旗、志一人率門部五人居門下、開門畢還本陣、自朱雀門外至于第一坊門、傍路衛士隊之、又尉率衛士已上、隊於龍尾道以南諸門、小幡四旗、志率衛士已上、隊於東西諸門及餘腋門、其供奉駕陣者、駕御後殿、各就本隊、禮畢駕還、供奉如初、兵庫寮擊退鼓、群官退出、其隊進退、准近衛府、

行夜

禁中穢也、

天德四年六月十日、行月次祭、奉別幣於大神宮云々、民部卿藤原朝臣令奏奉幣時文、申刻二藤原朝臣令奏宣命、案依内裏穢不御八省、藤原朝臣著左衛門陣、

天慶三年十一月廿日、依禁中有佛事、於左衛門陣定奉幣使、

〔日本紀略後一條十三〕寬仁四年七月廿二日辛未、夜大風吹壞内裏所々、〇中略左衛門陣北舍一宇、〇中略右衛門陣舍、〇中略其外不可勝計、

〔百錬抄八高倉〕治承元年四月卅日、陣中有火事、中略宮強盜所爲云々、打消畢、矢二筋射立右衛門陣四足、希代珍事也、

〔延喜式四十六左右衛門〕凡行夜者、八省院、豐樂院、門部毎夜各一人、左起戌一刻、迄亥一刻、右起亥二刻、迄子二刻、但

〔侍中群要四〕夜行事

諸陣夜行見參等、藏人及亥二剋、以小舍人令問見參、催仰夜行、是毎夜之事也、亥子剋、左近勤之、丑寅剋、右近也、中重ハ兵衞勤之、大庭ハ叙負〇衞門廻、但雨夜不廻之、

夜行事毎夜新藏人令問諸陣見參、差小舍人遣之、

亥子剋、左近丑寅剋、右近但雨雪夜不廻、中隔夜行兵衞廻之、大場叙負〇衞門廻之、藏人豫加催、但非毎夜事也、

宮中夜行

宮中夜行、左右近所奉仕也、中重夜行、左右兵衞勤行、從亥刻至子刻左奉仕、從丑刻至寅刻右奉仕、至于左右衞門可奉仕八省夜行也、藏人強不可知行、左右近等有懈怠時、各召官人誡仰了、

〔枕草子三〕ゆげいのすけのやかう、かりぎぬすがたもいといやしげなり、〇中略けんぎのものやあるとたはむれにもとがむ、

陣座

勝也、其勝中務省付衛府、門司勘校、有闕乖者隨事推駁、(謂駁正也)[illegible]別勅賜物、不存此限、

〔令義解 五宮衛〕凡儀仗軍器、(謂用之禮容、爲儀仗、用之征戰者、爲軍器、卽同實而殊號者、)十事以上、(謂弓一張、箭五十隻、各爲一事、卽弓箭不相須也、假令一日之內、五事先入、五事後入者、通計先後、須奏聞、其出者亦准此也、依下條、諸門出物、無勝者、一事以上、並不得出、卽知九事以下、皆合責勝、但不奏聞耳也、)出入諸門者、皆責勝、門司奏聞、勘驗出入、(謂門司者、衛府也、)其宿衛人、常服用者、不拘此限、

〔拾芥抄 中末宮城〕殿舍事

衛門陣(左建春門、右宜秋門、)

〔空穗物語 たゞこそ〕はくちを左衛門のぢんにめしてとはせ給へば、はくち、せめられごゑして、かのたばかりことを申、

〔枕草子 〕左衛門のぢんなどに、殿上人あまたたちなどして、とねりの馬どもをとりて、おどろかしてわらふを、(○下略)

〔枕草子春曙抄 一〕左衛門の陣　建春門をいへり、をよそ衛門府は、宮城の諸門を守る官也、其中に、西の諸門は右衛門守りて、宜秋門これ右衛門の陣也、東の諸門は左衛門守りて、建春門左衛門の陣也、陣とは其官人の居る所をいふなり、

〔文德實錄 十〕天安二年五月壬午、大雨、洪水汎溢、(○中略)東堀川水入冷然院、庭中如池、左衛門陣直廬浮流、

〔扶桑略記 二十三裏書〕延喜十二年九月十九日癸亥、午刻山鷄自丑寅方飛來、集左衛門陣上卿座上、十五年九月七日、內裏有犬死穢、仍上卿以下、於左衛門陣南屛前、立幄床子等、被立諸社奉幣使、

〔北山抄 六〕奉幣諸社事

禁中有穢之時、令外記傳仰、或就左衛門陣仰之、(○中略)

延喜十九年六月廿三日、諸社使自左衛門陣發遣、上卿著陣座、使參議以上就床子、內記授宣命、依

云、五十人以上、謂臨時入雜色人等、摠計滿五十人者、合奏、或先卅人入、後廿人入者、亦合奏、但先入廿人、出計後、又廿人入之類、不合奏、當衞、謂若閤門者兵衞亦幷合奏也、朱云、先從西門入廿人、後從東門入廿人者、從入東門可奏者、未知先入廿人、東門不知不奏何、先云、不知雖不奏无罪者、未知何、中務省臨時錄名付府者、依文每人可錄姓名也、直不可送大數也、

〔類聚三代格十二〕太政官符

應不進門籍文武諸司官人隨犯科責事

右得中務省解偁、謹案太政官去弘仁十一年四月廿一日符偁、諸司門籍送省、省覆勘訖、丞一人加署、喚左右衞門幷左右兵衞等府分附、前番門籍返付本司者、又案宮衞令云、應入宮閤門以內者、本司具注官位姓名、送中務省付衞府、各從便門著籍、每月一日十六日一換籍、宿衞人准此者、而或不進門籍、出入任意、准法論之、罪涉闌入、遂使遷任名記據舊未改、他番門籍通用無據、商量其由、不加科責所致也、望請自今以後、諸司不進門籍者、直移刑官依法斷罪、謹請官裁者、右大臣宣依請、

仁壽二年四月廿八日

〔類聚三代格十二〕太政官符

應勘送不進門籍諸司官人位階貫屬事

右得中務省解偁、○中略又仁壽二年四月廿八日格偁、諸司不進門籍、任意出入、准法論之、罪涉闌入、自今以後、不進門籍、直移刑官斷罪者、而今諸司多不進門籍、妄出入宮門、省依格旨移刑部省、彼省報移云、斷罪之道、先知罪人位階貫屬而後斷之、須具載移文者、爰省爲令注進位階貫屬、頻召不進門籍之司、辭適任意、曾無應召、望請官裁令式兵兩省勘送其位階貫屬者、右大臣宣依請、

元慶六年八月五日

〔令義解五宮衞〕凡諸門出物、无牓者、一事以上、並不得出、（謂一事猶一物、與上條義異也、防其盜詐、故更責牓也、文云出物、即知除兵器之外、入物者不可責

門者、不得出入勘會否、○中略釋云、之類、謂請假病患等也、見衛禁疏也、穴云、改任、謂爲專除籍、若內分人任侍從之類、此非應除籍之色也、宜授籍時改之門无妨出入、爲无登時改籍之文故也、或云師云、雖非除籍之色、尙牒省改換官名耳、稱前司名不可出入之故、在穴、宿衛、謂內舍人兵衛、凡長上皆每一日十六日換耳、行使、謂一日以上行使是也、問改任行使、未知任日卽除、爲當給退文訖時歟、答任日卽除耳、其五位以上、而奉辭奉見者、依下條无籍應入禁中人行耳、上文本司錄官位姓名送中務省、謂此文每月一日十六日換籍是、言本司造門籍、每月送中務之付衛府耳、其衛府官亦合先送中務、故云、下文宿衛人准之之處、令冠條文耳、或云、問中務付衛府之日、行事如何、徑取集諸司籍而付歟、爲當造中務移文付歟、爲當於諸司所進之籍、後紙加中務官人之署而付歟、答不見正文、但說略見上也、在穴、

〔延喜式中務十二〕凡應入宮閤門諸司門籍、每月一日(正月用三日、但停朝拜年元日、以下如此之類皆效此、)十六日送省、省覆勘訖、丞一人加署、卽喚左右衛門及左右兵衛等府分付、但前番門籍返付本司、

〔令義解宮衛五〕凡无籍應入禁中(謂門籍以內也)及請迎輸送、(謂就禁中請物、是爲請迎、輸物送禁中、是爲輸送也、)丁匠入役者、中務省臨時錄名付府、五十人以上當衛錄奏、(謂五十人以上者、假如卅人先入、十人後入者、通計先後、旣滿五十、亦須錄奏、若於東西分入者、亦以此率之也、當衛者、衛門及兵衛府也、)其有所輸送未畢、欲宿守物者、斟量聽留、(謂中務衛府、相共斟量、其請迎未畢者、亦准此也、)

〔令集解宮衛二十四〕釋云、假令四十人先入、依文後入通計前入滿五十人者、卽須錄奏、當衛衛門、及兵衛府也、每五十人入亦須奏也、古記云、當衛錄奏、謂主當門籍府也、問一日之中、先入卅人、後入廿人、合五十人、未知奏不、答合奏也、穴云、問自東門廿五人、自西門廿五人、左右兩司何奏、答倚一府奏耳、問公式令云、勅處分五衛之事、令司覆奏者、未知兩條、答、依參入數多者衛府錄奏聞、依兵庫事者本庫卽可奏耳、不可從一也、或云、當門者、於宮門衛門府、於閤門兵衛府耳、若宮門閤門、二門可通入者、二府各奏哉、又稱五十人以上者、臨時入數歟、答、二府各可奏、又稱五十人以上者、臨時入人數耳、(在穴跡)

〔令集解五職員〕衞門府管司一

督一人掌〇中略門籍門牓（中略）次云、門籍依律令在宮門也、門牓依宮衞令諸門出物無牓不得出一事以上者、未知宮城門亦有牓哉、答、合至宮衞令求也、事、

〔令義解五宮衞〕凡應入宮閤門者、謂衞門所守、謂之宮門、兵衞所守、謂之閤門也、本司具注官位姓名、謂本司者、在京所司皆是也、具注官位姓名者、此爲主典以上立文、其雜任准之也、送中務省、付衞府、各從便門著籍、謂宮門閤門、當人出入、各有要便者、是爲便門也、但五位以上、著籍宮門、謂五位以上、身貴朱紫、事殊士庶、故在京者、皆於諸門著其通籍也、皆非著籍之門者、並不得出、若改任行使之類、謂改任者、出任外官、若在京遷官者、至一日十六日、須換其籍、其未換之間、尙依舊籍也、之類者、假患等類、亦約此中也、者、本司當日牒省除籍、每月一日十六日、各一換籍、宿衞人准此、

〔令集解二十四宮衞〕古記云、外門謂最外四面十二大門也、主當門司、謂門部也、其中門、謂衞門與衞士共防守門也、始著籍此門也、內門、謂兵衞主當門之也、〇中略古記云、付衞府、謂左右衞士府、不預門籍之事也、朱云、送中務省付衞府、謂若可入閤內人者、可付衞門兵衞二司也、然則本司記二通、下送中務省也、送中務省、未知以何人可送、答、不見、尙直丁等令送耳、付衞府、未知召衞府不也、字意何、答、送而付意耳者、或云、問、文云、本司具注官位姓名、送中務省、又下文云、本司當日牒省除籍者、未知不經所管省、徑送中務歟、爲當先經管省後送中務意歟、又造書樣依何式哉、答、寮司門籍者、造解文送管省、造移文送中務也、亦加移文付衞府耳、但加中務官人押署、爲當不加署者不見也、後案中務押署可送、可檢付者付本府也、非付門也、後日所定、寮司門籍、造解文送省、省受取造移文、云門籍若干、而送中務耳、不加押署也、中務付衞府之日亦如之、未知、在穴、〇中略釋云、在京五位以上雖不出入、而著籍也、在外者不著也、其五位以上、亦隨便門著、何者非著門者不得出之文、承下故也、古記云、五位以上著籍中門、謂便門之外、又更著中門也、內門不合、无籍也、穴云、但五位以上著籍宮門、謂雖不合入著耳、但五位以上、謂在京五位以上、雖常不入、爲臨時入著耳、其國郡司五位者、不在此例、何者改任當日、爲除籍訖故也、文稱宮門、其閤門、上解訖也、跡云、五位以上著籍宮門、謂上云、注官位姓名送中務、一位以下直丁以上、皆籍隨便門、置宮門閤門、今此五位以上雖无掌、而籍合置便宮門者、非著籍之

守門

〔三代實錄十清和〕貞觀七年三月十三日甲午、制、諸司諸衞府仕丁衞士日功、收長年錢二十文、

〔徒然草上〕尹大納言光忠入道、追儺の上卿を勤められけるに、洞院左大臣殿〇藤原實泰に次第を申し請られければ、又五郎男を師とするより外の才覺候はじとぞの給ひける、かの又五郎は、老いたる衞士のよく公事に馴れたる者にてぞありける、近衞殿著陣し給ひける時、膝突を忘れて外記をめされければ、火をたきて候ひけるが、まづ膝突をめさるべくや候ふらんと忍びやかにつぶやきける、いとおかしかりけり、

〔令義解五宮衞〕凡理門至夜燃火、謂内及中外三門、皆衞士燃火也、幷大器貯水、監察諸出入者、

〔令集解二十四宮衞〕釋云、内中外門並衞士燃火也、古記云、内門中門外門、幷衞門府衞士燃火也、今行事、不燃外門也、穴云、宮城門並有理門、而燃火監察出入耳、或云同之、於京城門不可有理門、在穴、

〔延喜式四十六左右衞門〕凡黃昏之後出入内裏、五位已上稱名、六位已下稱姓名、然後聽之、其宮門皆令衞士炬火、衞門亦同、

凡宮城門者、並令衞士衞之、美福、郁芳、待賢、陽明、上東、達智等門、左府衞之、皇嘉、談天、藻壁、殷富、上西、安嘉等門、右府衞之、但朱雀門、左右相共衞之、偉鑒門、左右隔年、遞以衞之、

凡門部一人、衞士四人、守八省院、門部一人、守大極殿、門部一人、守豐樂院、但左華樓下所收、最勝王經齋會辨官行事所雜物者、令守八省院左門部衞士掌守、武德殿幷後殿及廻壁、令右衞門衞士守、

〔延喜式四十六左右衞門〕凡宮城諸門守屋者、各本府修造、

凡諸門廐亭、便令守門火長衞護、若致非理損者、奪其粮料、充修理料、

〔延喜式四十六左右衞門〕凡宮門者門部閉、〇閉上恐脫開字、

凡伊勢齋内親王初齋之時、差門部二人、衞士一人、爲門衞、門部直陣、衞士炬火、其賀茂齋院門衞准此、但雖遷齋院猶充之、

〔延喜式六齋院〕凡門衞陣屋、本府〇衞門府造之、炬舍、木工寮造之、

之官非一、勘納之所各異、爰專當郡司、所參之處、彼此有數、拘絆一處、空經數旬、去國千里、受責一身、郡司艱難無過斯焉、望請言上此由、令勘納本府、辨行處々者、國司覆審、所申不虛、望請官裁所進功錢養物、被收一府、即令分行者、權大納言正三位兼行右近衞大將民部卿中宮大夫菅原朝臣道眞宣、依請、自餘諸國亦宜准此、但左右馬寮不在此限、

昌泰元年六月十六日

〔延喜式民部二十二〕凡衞士仕丁養物者、隨鄉所出、正丁七人半、惣所輸徭分稻一百五十束、准當土沽價、交易輕物、及舂米所得之數、專入正身、女丁亦同、其撿納之事、委各本司本家、皆附貢調使申送省、但衞士各送本府、其逃人資物各給替人、若無替人者入官、諸家封戶仕丁者、不論逃否、皆給主家、

凡割衞士仕丁大粮內、自正月至于六月給商布、自七月至于十二月給綿、木工工部准此

〔延喜式主稅二十六〕凡衞士仕丁、日功養物未進者、主計寮待本司本家移文、與調庸未進移之寮、即准未進數、沒國司史生已上公廨、混合正稅、

〔朝野群載諸國公文二十七〕請左衞士五十九人事

康和五年料九人　長治元年料九人　同二年料九人　嘉承元年料八人　天仁二年料八人

天永元年料八人　同二年料八人

右能登國年料、所請如件、正返抄未到之間、以此請文、可被勘會公文之狀如件、

天永四年五月　日　少志紀

謹上　二寮濟事殿

件衞士、每年有散用、仍請彼注文爲證文、且以進濟、且渡主計寮、備勘會、

〔續日本紀聖武十三〕天平十二年六月庚午、勅曰、〇中略宜大赦天下、〇中略中衞舍人、左右兵衞、左右衞士、衞門府衞士、門部主帥使部等、不在赦限、

〔日本後紀 桓武 十三〕延曆廿四年十二月壬寅、公卿奏議曰、〇中略衞門府衞士四百人減七十人、〇中略許之、

〔延喜式 時服 廿二〕時服

左衞門府六百八十一人(中略)衞士六百人、右衞門府准之、

〔延喜式 兵部 二十八〕凡衞士相替、三年爲限、其替人至京、省試練身才、雖無四才、身體强壯可得習者、並撿閱戎具、即令帶仗、分配二府、尫弱之輩、返却本國、若有舊人才灼然、情願留者、本府移省、知實便配、其應還人、省對見令解仗、即給返抄還本鄕、

〔延喜式 左右衞門 四十六〕凡衞士相替者、一國來訖且奏、不須必待諸國摠到、若有舊人身材、及便弓馬、情願留者、移兵部省便配、其諸國皆悉替訖、定第摠奏、

凡大替衞士、兵仗戎具、隨身領遣、不得勘收本府、

〔政事要略 交替雜事 五十九〕民部省符、定諸國事力副丁事、

右衞士仕丁、離土在京、以免調庸、更充食粮、兼給副丁五人、以爲遠資、〇中略

弘仁十年二月廿三日

〔三代實錄 淸和 十一〕貞觀七年十二月十七日甲子、諸衞士仕丁等愁訴云、遠辭鄕國、苦役京都、唯仰養丁之輸物、以充羈旅之資用、而本國司偁、依詔復徭、養物之數、三分減一、然則留國之民、既蒙十日之復、上京之丁、猶苦一年之役、凡在勞逸、彼此不同、望請依舊被給、太政官處分、宜加增養丁恒例輸數、即下知東海東山北陸山陰南海道、依件行之、

〔享祿本類聚三代格 十八〕太政官符

應令本府撿納分行衞士功錢養物事

右得出雲國解偁、管諸郡司解偁、衞士是身役者也、須自參上各盡年役、而此國頃年戶口衰弊、無人差充、或雖有其身不堪見役、或閉點其役、率類逃散、仍專當郡司、相替彼身、辨濟日功養物、而衞士等所直

別、六尺間、

使部

〔令義解 職員一〕衞門府

使部卅人

〔享祿本類聚三代格 四〕太政官符

應定諸司使部事

衞門府廿人 中略○

延暦十四年七月十日

〔東大寺正倉院文書 十一〕戸主大初位上出雲臣千依、年陸拾玖歲、耆老 中略○

弟少初位上出雲臣牛養、年參拾漆歲、　正丁右頰黑子 右衞士府使部。。。。。

接續裏書 山背國愛宕郡出雲郷雲上里神龜三年史生從八位下間人宿禰男君

看督

〔延喜式 左右衞門 四十六〕凡撿按左京非違者、佐一人、 中略○ 火長九人、 二人看督、一人案主、 下略○

〔續日本後紀 仁明 七〕承和五年二月庚子、勅旨曰、分遣左右衞門府生、看督。。 等於畿內諸國、追捕奸盜云々、

衞士

〔書言字考節用集 人倫 四〕衞士 エジ 左右衞門府被官、在禁門、燒篝拒非常者、

〔詞花和歌集 戀上 七〕題しらず　　大中臣能宣朝臣

み垣守衞士のたく火のよるはもえひるは消つゝ物をこそ思へ

〔令集解 職員 五〕衞門府

衞士 朱云、數臨時可定也、餘同於此也、

〔續日本紀 文武 二〕大寶元年八月丙寅、令諸國加差衞士、配衞門府焉、

〔續日本紀 聖武 十四〕天平十三年五月庚申、令諸國常額之外、差加左右衞士各四百人、衞門衞士二百人、貢之、

物部

衛府舍人ト門部トヲ別記セリ、續紀ノ文恐クハ脱誤アラン、

〔北山抄 五〕大嘗會事

召物部門部語部隼人等事(左右衛門府九月上旬申仰左右京并國々、○中略)之、

門部　左右京各二人　山城國三人　大和八人　伊勢二人　紀伊一人

〔續日本後紀 十三仁明〕承和十年十二月戊午、攝津國豐島郡人、左衛門府門部正八位上迹連繼麻呂、(○中略)除迹字、賜阿刀連姓、

〔本朝世紀〕天慶元年八月四日戊寅、是日酉三剋、自建禮門前至于中務省北前、羽蟻群飛宛如張幕、(○中略)召春花門陣吉上門部紀秋生問、具申見由已了、

〔令義解 一職員〕衛門府

物部卅人(謂此名爲内物部、爲決罪人特置此府、當決罰時、皆帶刀劍、)

〔令集解 五職員〕跡云、物部、謂臨時別勅、爲令決罪人而置耳、古記云、物部卅人、此名爲内物部也、臨時爲罪人決罰在此府耳、但決罰之時、皆帶刀也、垂領足持笞杖一構、不解刀、行事耳、

〔續日本紀 五元明〕和銅四年十月甲子、勅依品位始定祿法、(○中略)門部、物。部。主帥等、並絲二絇、錢十文、

〔續日本紀 九聖武〕神龜元年十一月己卯、大嘗、(○中略)從五位下石上朝臣勝男(○中略)等、率内物部立神楯於齋宮南北二門、

〔延喜式 七踐祚大嘗祭〕凡物部、門部、語部者、左右衛門府、九月上旬申官、預令量程參集、物部、左右京各廿人、

〔儀式 三〕踐祚大嘗祭儀中

卯日平明、神祇官班幣帛於諸神、(○中略)石上榎井二氏人各二人、(著明服、)率内物部卅人(著緋布彩、)立大嘗宮南北門神楯戟、(門別楯二枚、戟四竿、木工寮預設楯木於二門左右、其楯戟等物祭事畢、收左右衛門府、)訖物部分就左右楯下胡床、(門別物部廿人、左右各十人、五人爲

廢省官員并減定人數事

衞門府

右件、謹案令條、禁衞宮掖、以時巡檢、斯衞士府之職也、今衞門所掌、復不異於此、徒設官員、事乖忙劇、伏請一從廢省、〇中略又門部者掌率衞士守諸門、亦請分配左右、〇中略

以前伏奉今月十五日詔書、七衞府雜任已下、員伍稠疊、思從減省、卿等評議定數奏聞者、伏奉詔書、如右、官職之設、固嫌殷繁、宜導之方、唯務簡要、是以隨時損益、權宜弛張、聖詔所及、冠絕古今、臣等不揆淺近、遙叨周行、伏膺綸旨、敢以斟量、戰慄之誠、百倍恒品、臣等商量如前件、謹錄事狀、伏聽天裁、謹以申聞謹奏、

大同三年七月廿日

聞

〔享祿本類聚三代格四〕太政官符

應定諸衞府員外舍人數事〇中略

左衞門府一百人右衞門府准此〇中略

右左大臣宣、奉勅、件府近衞門部兵衞等數、載在格條、而頃年之間、據異能供節、要籍驅使等事、每府申請、補任之漸、殆倍本數、論之政途、理不可然、自今以後、宜依件定之、

寬平三年十二月十五日

〔續日本紀十聖武〕天平元年八月癸亥、天皇御大極殿、詔曰、〇中略是以改神龜六年爲天平元年、而大赦天下、〇中略其賜物、〇中略左右大舍人、六衞府〇衞門、左右衞士、中衞府、左右兵衞、舍人、中宮職舍人、諸司長上、及史生、各布二端、使部、伴部、門部、主帥、各布一端、

〇按ズルニ、衞門府ニ舍人ト稱スルハ、門部ヲ云ヘルモノヽ如シ、然ルニ續日本紀ノ文ニハ、六

ニ伴乃御奴ト稱スルハ、卽チ衞門府ノ門部ヲ云ヘルナリ、

〔令義解職員一〕衞門府

門部二百人

〔日本後紀平城十七〕大同三年七月壬寅、廢衞門、併左右衞士府、廢衞士府主帥各六十人、置門部各一百人、

〔延喜式中務十二〕時服

左衞門府六百八十一人〈中略〉門部六十六人、右衞門府准此、

〔令義解職員一〕囚獄司

物部卅人〈謂、此伴部之色、故式部補任、其衞門府門部亦同也、〉

〔延喜式兵部二十八〕凡衞門府門部、先簡負名入色人補之、若不足者、三分之一通取他氏、

〔令義解考課四〕凡衞門門部立三等考第、正色當門、〈謂、正色者、色貌嚴正、不爲阿曲者也、當門者、執掌之處也、〉明於禁察、監當之處、能肅姦非者、〈謂、糺斷奸詐、無有漏失者也、〉爲上、居門不怠、撿挍無失、〈謂、雖無是失、頗有疏漏、故猶爲中也、〉至於禁察、未是灼然者爲中、不勤其門、數有愆違、撿挍之所、事多疎漏〈謂、漏失以上者、乃爲多也、〉者爲下、

〔唐六典吏部二〕凡親勳翊衞皆有考第、考第之中略有三等、〈中略〉諸衞主帥、如三衞之考、〈中略〉其監門校尉直長如帥之考、

正色當官、明於按察、監當之處、能肅察姦非者爲上、居官不怠、檢校無失、至於監察、未是灼然者爲中、不勤其職、數有愆違、檢校之所、事多疎漏者爲下、

〔續日本紀聖武十〕天平元年八月癸亥、天皇御大極殿、詔曰、〈中略〉是以改神龜六年爲天平元年、而大赦天下、〈中略〉使部、伴部、門部、主帥、各布一端、

〔續日本紀孝謙十二〕天平寶字元年四月辛巳、勅曰、〈中略〉門部主帥、〈中略〉歷仕三十年已上、加位一級、

〔享祿本類聚三代格四〕太政官謹奏

番長府掌

〔延喜式 兵部 二十八〕凡諸衞府生已上、新補任者、省具錄移本司、奏聞然後帶仗、

〔新儀式 臨時 五〕定諸司史生諸衞府生事

四衞府府生、或依府奏、或補他所有勞功者、事見補例、

〔北山抄 六〕下宣旨事 下諸司文、放衞廳文、

諸衞府生、馬寮史生、馬醫等事、

下兵部 兵庫寮者、省補之、

〔本朝世紀〕天慶五年四月九日壬戌、此日有勅、召內給所錢百貫文、爲使藏人所雜色等差小舍人并諸衞物節、分給東西飢餓疾疫之輩、就中、〇中略

七八九條 〇左京 料十九貫文、加給田料 使蔭子橘公輔、小舍人長尾元生、左衞門府掌高橋淸則、

〔本朝世紀〕正曆元年十月四日丙午、酉剋大外記中原朝臣致時、率史生二人、參於一品資子內親王家、是太皇太后宮、從去六月御于此內親王家、而今夜遷御于本宮、〇中略 康供奉諸司、〇中略 左衞門權佐藤原方正、尉一人、志一人、府生一人、番長一人、府掌一人、門部八人、衞士廿人、右衞門佐藤原朝臣實正、尉一人、志一人、府生一人、番長以下、如左、〇下略

門部

〔伊呂波字類抄 毛 官職〕門部

〔令聞書 一〕衞門府

門部 カドモリノミヤツコ 二百人　門守ヲ云ナリ

〔江家次第 四 六月〕二孟旬儀

闈司奏 闈司一人、入自同門(左腋門)就版位、奏府候番奏之由、勅曰、令申、闈司稱唯退出、次六府番奏、六府次將各一人、取番奏札入自左腋門、經南廊柱內西進、下自長樂門前橋、斜進列立庭中、(中略)次衞門佐奏云、左右乃衞門府中久其月乃上番仁可奉仕伴乃御奴乃名簿乃簡云々、〇下略

〇按ズルニ、六府ノ番奏ハ近衞府ノ近衞、衞門府ノ門部、兵衞府ノ兵衞ノ上番ヲ奏スルナリ、此

醫師一人正八位下（養老三年九月、置衞門府醫師一員、據此今令條所載、疑所追筆、不然則此加置之誤、）

〔續日本後紀 仁明一〕天長十年三月庚子、左衞門醫師從七位上出雲連永嗣、改連賜宿禰、

〔日本紀略 醍醐一〕延喜十八年九月十七日、右衞門醫師深根輔仁據掌中要方、

府生

〔職原抄 下〕左右衞門府

府生（唐名金吾衞史、武衞監門衞史、）

〔職官志 五〕按職員令、衞門兵衞等、並不載府生、然凡府生者、往々經見於史中久矣、但未詳其置何世、○按ズルニ、神龜五年八月始メテ中衞府ヲ置キ、府生六人アリ、十一月ニ至リ、衞府府生ノ補任ハ兵部省ヲシテ之ヲ掌ラシメタリ、

〔古今和歌集 序〕延喜五年四月十八日、（○中略）右衞門の府生みぶのたゞみねらにおほせられて、萬えうしうにいらぬふるき歌、みづからのをもたてまつらしめ給ひてなん、（○下略）

〔朝野群載 十一 廷尉〕巡撿道橋

勅、撿非違使左衞門府生大原忠具、右衞門府生若江善邦等、宜差巡撿伊勢齋親王上道、大和伊賀兩國道橋使者、

承平二年四月十八日　右衞門權。府。生。村主保範奉

〔職原抄 下〕撿非違使

府生（左右）府生者、非奏任官、仍府督（○左右衞門督）判授之後、申下使宣旨者也、

〔延喜式 中務十二〕時服

左衞門府六百八十一人、（中略）府生四人、（中略）右衞門府准此、

〔延喜式 兵部二十八〕凡（○中略）左右近衞府府生各六人、左右衞門府、左右兵衞府、各四人、（○中略）但六衞府府生、井馬寮馬醫史生、待宣旨補任、自餘省補之、

類かくとも、其身はかゝざる事也と見えたり、まことに、自身は名のり過たるやうに聞ぬ、又古記所見なし、

〔大夫尉義經畏申記〕一伊豫大夫尉義經朝臣畏申事、是可ㇾ解ニ長申ニ歟、其後八月六日任ニ左衞門尉ニ、即蒙ニ使宣旨一、元暦元年去九月三日叙留、未ㇾ申ㇾ長以前也、

〔貞丈雜記官位四〕一大夫を、すみて云と、にごりて云に差別あり、左京大夫、修理大夫、大膳大夫、皇太皇宮大夫、などの時は、だいぶと濁りて云也、たいふとすみて云時は、五位の事也、弘安禮節などにも、五位の事を大夫と書れたり、たとへば左衞門尉は六位の官也、左衞門尉になりたる人、五位に敍すれば、左衞門大夫と云也、源義經は左衞門尉にて、撿非違使の判官を兼ねて、五位に敍しける故、大夫判官と云ひし也、

〔本朝世紀〕天慶五年三月十九日癸酉、卯剋狐登ニ御所ㇾ也、即捕獲、召ニ左衞門陣官ㇾ給ㇾ之、陣官依ㇾ仰差ニ看督長ㇾ下遣、

○按ズルニ、江次第抄ニ、陣官、將監將曹也トアリ、是近衞府ノ陣官ヲ云ヘルナリ、衞門府ニ在リテハ、尉志ヲ陣官ト云フベシ、

志

〔倭名類聚抄五職名〕佐官　兵衞衞門四府曰ㇾ志、(中略)皆佐官

〔下學集上官位〕志サクワン

〔職原抄下〕左右衞門府

志大少　唐名金吾錄事

〔本朝百官稱呼〕左右衞門府

志　金吾衞錄事參事　監門

醫師

〔續日本紀八元正〕養老三年九月辛巳、始置ニ衞門府醫師一人ㇾ、

〔職官志五左右〕衞門府

〔建武年中行事正月〕十一日より縣召の除目行はる、〇中略第二日、その儀昨日に同じ、〇中略今宵顯官の擧あり、左右衞門の尉を申、外記史を申、申文をとり調へて、上首の公卿をめして大臣これを給、參議まで見くだして、各々難なきを擧申、

〔雲圖抄〕除目事

申左右衞門尉、成功之者、七八人已上撰入之、經帶刀瀧口居衞府之者、弓場武勇之者、重代之者、大業成業之者、可爲先云々、號顯官是也、

〔百寮訓要鈔別註七〕左衞門府

古ハ當府ノ尉モ顯官タレドモ、賴朝武權ヲ取テ以來、禁中ノ武官ハ實ニ有名ノミナリ、〇中略然ト云ヘドモ、使宣旨ヲ蒙ルトキハ、顯官勿論ノ事ナリ、中古マデハ、使宣旨ヲ蒙ルモノ、大尉左右ニ各二人ニテ四人アリ、少尉ハ員數定マラズ、去レバ使宣旨ヲ蒙ラヌ族ハ、顯官ト云ヘル名ノミニテ、其實ハ餘情ナキ事ナリ、

〔枕草子八〕大夫は、式部大夫、左衞門大夫、〇中略六位藏人、思ひかくべき事にもあらず、

〔有職問答四〕一敍爵以後ハ、大夫將監、大夫進、大夫屬と稱候哉、常如此申候ナドハイタク無間顯候然者いづれの官のすけ、せう、さくわんも、爵を玄候はゞ、大夫と可書候哉、

左衞門大夫、兵衞大夫ナドハ、常又爵之候、サシタル顯職ニテモナキ官ナレバ、呼付候ハヌカト覺申候、〇下略

〔官職知要中〕以敍留判官稱大夫之事

敍留者、官位相當の人、位階をのぼりて、官如元とゞまるをいふ、敍はのぼる也、留はとゞまるなり、凡諸司判官は相當六位也、志かるを敍五位而官如元なる時は、〇中略左右衞門尉ならば、左衞門大夫、右衞門大夫といふ、〇中略大夫と稱するは、侍のうへ隨分規模事也、いにしへは、輙五位には敍しがたき事也、清少納言枕草紙曰、式部大夫、左衞門大夫、史大夫、六位藏人、おもひかくべきにもあらず、かうふりえてなどとみえたり、逍遙院殿〇三條西實隆御說曰、人賞して、民部大夫、右衞門大夫などの

六十人、故院白河〇後の御時までも十人が內外にてこそ侍しか、ゆげいのせうの檢非違使は、數もさだまらず、一度の除目をみれば、靫負尉兵衞尉四十人にをさるたびなし、千人にもなりぬらん、人、官を求めて、ぞくらうわきざしを尋ねてねがふ者は、近臣格勤の男女にておらんには、左右におよばぬことぞかし、

〔平戶記〕寬元三年十二月八日己巳、今夜又被行除目、〇中略

左衞門尉藤季繼 春日行幸內藏寮功　藤賴綱 同木工寮功　佐伯胤重 同　中原盛景 秘齋宮本所力
　平貞時 松尾社遷宮功　淸原繼貞 同　藤親康 同　平茂長 同
　藤家持 元三雜物功　宮道忠村 臨時　惟宗行賴 御祈功　藤國行 臨時
　平季政 同　藤淸光 春日行幸行事所功　藤時景 同　藤資盛 同
右衞門尉藤季明 松尾遷宮神寶功　中原盛光 同　源重胤 同　藤俊綱 同
　安倍賴保 春日行幸行事所功　丹治時高 同　大江貞遠 同賴宮功　平賴綱 同
　大江資氏　藤高能　藤吉光 〇中略

靫負尉已下、無量無數可謂至極云々、春日行幸料、被改之由有其聞之處、他功多又被任、如何、

〔江談抄 五〕廣相任左衞門尉、是善卿不被許事、

又云、廣相任左衞門尉、是善卿不被許、此事云々、菅家獻策之時、來省門、被時強不施小屋、只徘徊省門、廣相著毛沓到此處、廢事之處々相共被勸之、

〔百鍊抄 六崇德〕保延六年正月九日、左兵衞尉平家弘、抽任左衞門尉、縣召除目以前也、

〔官職難儀〕平內左衞門など申は、內舍人より左衞門尉に成たるを、もとの官を付てよぶ也、太郎など申仁の左衞門尉に成たるを、太郎左衞門と申も同じ事也、勸解由左衞門、彈正左衞門など、皆同事なり、勸解由判官、彈正忠などより、左衞門尉に成たる事也、

〔職原抄〕下左右衛門府

大尉　相當從六位上
少尉　相當正七位上　唐名金吾校尉

〔職原抄辨疑私考〕下此官〇衛門元令條ニ在テ左右ナクシテ、只衛門府タリ、其大尉相當從六位下ニアツ、延暦十八年四月廿二日格ニ、督、佐及左右兵衛府ノ相當ヲ改玉フ時、衛門大尉以下猶舊ノ如シ、然シテ大同三年正月廿日、衛門府ヲ左右衛士府ニ併セ、其後弘仁二年十一月廿八日、左右衛士府ヲ改テ、左右衛門府トシ玉フ時、相當延暦格制ニ准ゼラル、拾芥鈔モ亦同ジ、然ニ職原抄大尉ノ相當從六位上トアツルモノ頗疑アリ、蓋三代實錄貞觀四年三月四日ノ文ニ、從六位下守右衛門大尉藤原朝臣好行ト、位卑官尊ノ位署ニ記サル、然則若弘仁貞觀ノ間ニ、大尉ノ相當ヲ改玉フヤ、然ドモ其制類聚三代格ニナシ、且三代實錄ノ位署、間亦違失アレバ、彼此疑有テ一決スル所ヲシラズ、若是ヲ從六位上ニ定玉ハヾ、兵衛大尉亦改ラレンカ、

〔百練抄〕七近衛久安四年正月廿八日、左右衛門、左右兵衛尉各廿人、〇中略永可レ爲二員數一之由被レ仰二外記一、

〔官職秘抄〕下左右衛門府

令云、少尉二人、其後或及二六七人一、中古以降、殆過二十人一、而久安被レ下二宣旨一、以二左右各二十人一爲二員數一、近代三倍歟、

〔拾芥抄〕中本官位唐名左右衛門、左右兵衛等尉、本數毎尉八人也、久安比、一府廿人可レ爲二員數一之由宣下、近年剩任繁多也、

〔拾芥抄〕中本百官久安四年正月廿四日、藏人木工頭平範家仰二外記一云、自レ今以後、左右衛門、尉各廿人、〇中略永爲二員數一、此外闕不レ可レ補二闕官帳一者、〇中略保元三年正月卅日、藏人右少辨親範仰二外記一云、左右衛門、左右兵衛尉等各廿五人、〇中略永爲二員數一、

〔愚管抄〕七治れる世には官、人を求む、亂れたる世には人、官を求むと、この比の十人大納言、三位五

尉

ゆ。げ。い。の。す。け。の夜行、かりぎぬすがたも、いといやしげなり、

〔枕草子春曙抄三〕ゆげいのすけの　左右の衛門佐を云也

〔光臺一覽五〕雜事追加

寶永年中、關東ゟ酒井靱負佐、從五位下諸大夫被仰付よし御奉書、例之通御諸司へ到來せり、珍敷は、其節靱負佐にてと申參りたり、靱負佐は百官にてはなし、俗官也、故に一應關東ㇸ被伺し也、本人好む名也、將軍樣にも、見呼付られし名なれば、其儘靱負の佐にてと申來りたり、然共百官に非ざれば、宣旨は不被下まゝに、位記計被下之節宣旨を不被下ときく、後日轉敍位の時は、宣旨可被下やと問答有て、とかく名は一生靱負佐に可有之とて、其後四品の時も、位記計被下たり、一生靱負佐にて有給ひし也、若州小濱酒井靱負佐忠昌と申せし殿也、いか樣替りたる事とじりぬ、

〔職原抄下〕左右衛門府

佐一人唐名金吾次將

〔本朝無題詩五秋〕秋夜書懷呈左。金。吾。員。外。次。將。之閣下　藤原基俊〇略詩

〔續日本紀十七聖武〕天平勝寶元年八月辛未、大納言正三位藤原朝臣仲麻呂爲兼紫微令〇中略衛。門。員。外。佐。外從五位下中臣丸連張弓〇中略爲少志、

〔倭名類聚抄五職名〕判官　兵衛衛門四府曰尉〔中略〕皆萬豆利古止比止

〔伊呂波字類抄世職官〕尉外衛四衛府用、已上七カ、

〔平家物語一〕鵜川合戰の事

故少納言入道しんせいのもとに召つかはれける、師光成景と云もの有〇中略さか〳〵しかりしによつて、常は院へも召つかはれけるが、もろみつは左衛門のせう、なりかげは右衛門のせうとて、二人一どにゆ。ぎ。ゑ。の。せ。う。になりぬ、

督

佐

號二監門次將軍一監門小將軍　尉金吾長史號二監門衞長史一金吾校尉參軍今　志金吾錄事監門錄事　兵曹騎曹　府生監門衞史中候司　門部執戟

〔倭名類聚抄職名五〕長官　兵衞衞門等四府曰レ督（中略）已上皆加美。

〔東觀漢記列傳八〕賈復、上置二兩府官屬一、(案、此光武在二河北一時事。)復與二段孝一共坐、孝謂レ復曰、卿將軍督。我大司馬督。不レ得二共坐一、復曰、俱劉公吏、有二何尊卑一、

〔源氏物語柏木三十六〕衞門。。。のかんの君、かくのみなやみわたり給ことゝ、なほをこたらで年もかへりぬ、○按ズルニ、かんハカミノ音便ニテ、卽チ督ナリ、

〔貞丈雜記官位四〕一左衞門督、右兵衞督杯の督の字を、かみと云事、本也、又かうとも云、左衞門のかうなどゝも云也、督殿と書て、かうのとのと云、左衞門督、兵衞督などの人をうやまひて、かうのとのと云也、

〔倭訓栞前編加六〕かうのとの　四等の長官をすべてかみといふ、それを音便にてかうとよべり、とのは殿也、源氏にかうのきみといへるも意同じ、

〔職原抄下〕左右衞門府

督一人唐名金吾將軍

〔本朝百官稱呼〕左右衞門府

督　金吾衞將軍唐　武候衞將軍同

〔續日本紀桓武三十八〕延曆四年九月己未、造東大寺長官內藏頭從四位下石上朝臣家成、爲二兼衞門權督一

〔倭名類聚抄職名五〕次官　兵衞衞門曰レ佐（中略）已上皆須介

〔伊呂波字類抄須官職〕佐スケ外衞

〔枕草子三〕にげなきもの

職員 職掌

〔官職秘抄後附〕令外官云新加官是也

左右衛門府令條有衛門府、左右衛士府、大同三年正月、併衛門府於左右衛士府、然而弘仁二年十一月、改左右衛士府為左右衛門府、

〔令義解一職員〕衛門府管司一

督一人、掌諸門禁衛、出入禮儀、以時巡檢、謂以時驗有時、依宮衛令、五衛府官皆以時按檢所部、糺察不如法、是也、長、及隼人、門籍門牓、謂載人名為籍、載物數為牓、事、佐一人、大尉二人、少尉二人、大志二人、少志二人、醫師一人、門部二百人、物部卅人、謂此名為內物部、為決罰人、特置此府、當決罰時、皆帶刀劍、使部卅人、直丁四人、衛士、

〔令義解一官位〕正五位階○上衛門督　從五位階○下衛門佐　從六位階○下衛門大尉　正七位階○上衛門少尉　正八位階○下衛門大志　衛門醫師　從八位階○上衛門少志

〔日本後紀八桓武〕延暦十八年四月辛丑、勅、○中略衛門督、元正五位上官、今為從四位下官、佐從五位下官、今為從五位上官、左右衛士兵衛等、一准衛門、

〔類聚三代格五〕太政官謹奏○中略

衛門府

督一員

右元正五位上官、今定從四位下官

佐一員

右元從五位下官、今定從五位上官、其左右衛○右下恐脫士二字兵衛等府、伏請一准此府、○中略

以前雖設官分職令員有限、而斟酌閑繁、取捨時宜、恒典通論善政所先、今者衛府寄隆職務尤重、伏請使昇置品員、僻秩相當、臣等商量所定具件如前、謹錄事狀、伏聽天裁、謹以申聞、謹奏、聞、

延暦十八年四月廿三日

〔拾芥抄中之官位唐名〕衛門督左衛門府　監府　金吾　城門校府　右監門大將軍　監門衛大將軍　金吾大將軍　佐金吾將軍　監門小將軍　今

廢省官員并減定人數事

衞門府

右件、謹案令條、禁衞宮掖、以時巡檢、斯衞士府之職也、今衞門所掌、復不異於此、徒設官員、事乖忙劇、伏請一從廢省、其諸門禁衞、出入禮儀、及門籍門牓等事、同令衞士府主之、然靫負爲名、年祀積久、今廢彼混此、雖不改文字、號曰左右靫負府、又門部者、掌率衞士守諸門、亦請分配左右、〇中略

以前伏奉今月十五日詔書、七衞府雜任已下、員伍稠疊、思從減省、卿等評議定數、奏聞者、伏奉詔書如右、官職之設、固嫌般繁、宜導之方、唯務簡要、是以隨時損益、權宜弛張、聖詔所及、冠絕古今、臣等不揆淺近、濫叨周行、伏奉綸旨、敢以斟量、戰悚之誠、百倍恒品、臣等商量如前件、謹錄事狀、伏聽天裁、謹以申聞、謹奏、

大同三年七月廿日 〇又見職員令集解

聞

〔官職秘抄後附〕令內被減省之官

衞門府 大同三年正月併左右衞士府、〇正月、七月誤、

〔日本後紀二十一嵯峨〕弘仁二年十一月己未、改左右衞士府、爲左右衞門府、

〔令集解五職員〕弘仁二年十一月廿八日官符云、應改左右衞士府爲左右衞門府事、〇中略今得散位從五位下大伴宿禰眞木麻呂、右兵庫頭從五位下佐伯宿禰金山等解偁、己等之祖室屋大連公、領靫負三千人、左右分衞、是以衞門開闔奕葉相承、望請改衞士字、以爲衞門者、被右大臣宣偁、奉勅勘檢古記、所申有理、宜依件改、

〔職原抄下〕左右衞門府、唐名金吾、又云監門、元者云衞士府、嵯峨天皇御宇、弘仁二年十一月、改云衞門府、

沿革

〔三代實錄（六清和）〕貞觀四年五月十六日癸未、是日夜東京左衛門衛士居區失火、

〔三代實錄（三十陽成）二〕元慶元年十一月廿一日戊午、夜左衛士居坊火、延燒七家、

〔三代實錄（四十光孝七）〕仁和元年二月十八日甲辰、夜東京一條衛士町失火、延燒三百餘家、

〔三代實錄（四十光孝九）〕仁和二年八月十二日戊午、西京衛士所居坊失火、延燒百餘家、

〔延喜式（四十左右京二）〕凡京中衛士仕丁等坊、不得商賈、但酒食不在此例、

〔日本書紀（二十皇極四）〕四年六月甲辰、中大兄密謂倉山田麻呂臣曰、三韓進調之日、必將使卿讀唱其表、遂陳欲斬入鹿之謀、麻呂臣奉許焉、（○中略）於是中大兄戒衛門府、一時俱鏁十二通門、勿使往來、

〔續日本紀（二文武）〕大寶元年八月丙寅、令諸國加差衛士、配衛門府焉、

〔續日本紀（二十淳仁一）〕天平寶字二年八月甲子、大保從二位兼中衛大將藤原惠美朝臣押勝、（○中略）奉勅改易官號、（○中略）衛門府、禁衛諸門、監察出入、故改爲司門衛、

〔周禮註疏（九地官司徒）〕司門、下大夫二人、上士四人、中士八人、下士十有六人、（司門、若今城門校尉、主王城十二門、）

〔續日本紀（二十淳仁五）〕天平寶字八年九月丙辰、勅、逆人仲麻呂、（○中略押勝）執政奏改官名、宜復舊焉、

〔類聚國史（百七職官）〕大同三年正月壬寅、詔曰、（○中略）隼人司併衛門府、

〇按ズルニ、隼人司ハ、モト本府ノ被管ナリシヲ、是ニ至リテ本府ニ併ス、

〔日本後紀（十七平城）〕大同三年八月庚戌朔、其隼人司、依今年正月廿日詔書、既從廢省併衛門府、而衛門府併左右衛士府、仍更置此司、隷兵部省、

〔日本後紀（十七平城）〕大同三年七月壬寅、（○二十二日）廢衛門併左右衛士府、廢衛士府主帥各六十人、置門部各一百人、其諸門禁衛出入禮儀、及門籍門牓等事、令衛士府主之、仍號曰左右衩負府、

〔享祿本類聚三代格（四）〕太政官謹奏

〔禁腋秘抄〕弓場ハ、ユミバト云、左右衞門ノ弓場ヲユバトハ云、

〔權記〕長保六年〈○寬弘元年〉十月六日丙戌、早朝推問使來、進調度文書等、卽詣右府奉之、依御消息詣左府申推問使所隨身、府典代忠義、檢非違使爲望等不可令候任處乎之由可令奏內之由、亦參內令左近中將奏、仰云、忠義等須給獄所、而使所進文書等未奏之間、暫可令候左衞門府弓場、卽仰右衞門志爲致、亦詣左府申案內歸家、

〔日本紀略〈十一一條〉〕寬弘三年六月廿二日壬辰、左衞門尉文行、被禁本府弓場、

〔日本紀略〈十四後一條〉〕長元五年八月一日庚子、前武藏守平致方被下左衞門弓場、依息男刃傷從女也、六年八月廿一日甲寅、豐後權守藤原有道、被下左衞門弓場、依守藤原棟隆訴也、　八年七月十八日己亥、召前壹岐守藤原行範令候左衞門弓場、

〔中右記〕寬治八年閏三月十一日、中宮侍盛家、給左衞門弓場、

〔北山抄〈四拾遺雜抄〉〕貶退事　密告之人、進其告狀、先閉諸陣〈左衞門陣小閉用之〉諸衞佐等候殿上之者、服布衣帶狩胡籙、若有禁固之人、左右大辨就左衞門射場勘問、

〔今昔物語〈二十三〉〕平維衡同致賴合戰蒙咎語第十三

今昔、前ノ一條院天皇ノ御代ニ、前下野守平ノ維衡ト云兵有リ、此ハ陸奧守貞盛ト云ケル兵ノ孫也、亦其時ニ平致賴ト云兵有ケル、共ニ道ヲ挑ヌ〈○ヌ下恐脫ル字〉間、互ニ惡キ樣ニ聞カスル者共有テ、敵ト成ヌ、其領各一國ニ有テ、致賴進テ維衡ヲ討罸ムトシテ、合戰スル間、其多ノ子孫伴類幷ニ郞等眷屬等、互ニ射殺ス者其ノ員有リ、然ドモ勝負无シテ、維衡ヲバ左衞門ノ府弓場ニ被下レ、致賴ヲバ右衞門ノ府ノ弓場ニ被下テ、共ニ被勘問ニ、皆進テ咎ニ落ニケリ、

〔續日本後紀〈十七仁明〉〕承和十四年八月癸丑、西京衞士町災、燒百姓廬舍卅餘烟、

〔續日本後紀〈十八仁明〉〕承和十五年〈○嘉祥元年〉六月乙卯、右衞門南町民家失火、延燒數十烟、

參議辨官等奉仰、各就左。右。衛。門。府。廳免之、

〔源氏物語九葵〕かの御息所は、齋宮の左衛門のつかさにいり給にければ、〇下略

〔河海抄五葵〕齋王三年齋之間、卜定所より諸司へ入給事也、左衛門府は、近衛猪熊、近衛以北猪熊以東に廳屋とて有、

〔源氏物語孟津抄〕教隆が説に云く、齋宮伊勢へくだらせたまはむとて、三とせ齋のあひだ、卜定する所より大内裏の諸司へいらせ給ふことにや、但大内には左衛門府なし、近衛いのくまに左衛門府あり、内裏より一町のきに、近衛よりは北、いのくまよりは東、廳屋とて丹ぬりなり、

〔本朝世紀〕久安五年五月廿六日丁未、今日於左衛門府廳有進過狀致、申剋左衛門權佐光賴、入自廳後戶著座、尉已下平伏不動座、(兼居食餉)一獻、(大夫尉光保兼行、寄佐左邊飲之、授佐光保、取次杓)佐取盃授右尉、中原季盛巡行、次居汁、(府生季兼、取御中汁居由)次二獻、(光保同勸如初)次撤儀果、次置飯、(大夫尉光保、召看督長重兼、令置之)次覽四帳、(公文、案主實兼寄号筒、入筥置御前)次左尉源宗弘、右尉中原季盛、藤守光等、勘問囚三人如常、(案主覽之)案主渡道志兼成、可持參別當御許料也、次覽看督長等見不參文、佐已下一覽、佐以下次第加署判、畢返給案主、次尉光保、召看督長、令取飯、次佐光賴退出、先是府生清原季兼起座、立廳西庇間、佐退出、季兼揖佐、佐答揖、案主等送佐、看督長拂雜人、如常、

〔儀式八〕相撲節儀

樂所大夫率樂人等、於衛門廳事前庭、亂舞三成、訖始參進行列、

〔百鍊抄十二順德〕承久元年十一月廿七日己未、巳時白川祓殿邊燒亡及數丁、〇中略是時叡負廳燒亡、放火云々、

〔三代實錄十清和〕貞觀七年五月廿四日甲辰、遣諸衛府官人已下、大搜於東西京、先是左衛門獄。中、著鈦四六人、穿獄垣逃去、仍以搜索、

衛舎

〔詠百寮和歌〕左衛門督　右衛門督
八雲たついつもかはらず御垣守左右にて行かへりぬる
〔河海抄十四柏木〕右衛門のかむのきみ　御門を柏木と云
〔源氏物語新釋二十二柏木〕巻の名は、詞に柏木とかへでといひ、歌に、柏木に葉守の神はまさずとも人ならすべき宿のこずゑかてふにより、且右衛門をば、かしは木てふ名有事もし古くはそれをもかぬべし、
〔倭訓栞前編加六〕かしはき　源氏にかしはは木の巻あり、月卿雲客をなぞらふるに、右衛門督を柏木によそへ、歌にもよめり、
〔雅言集覧加十八〕かしはき、柏木兵衛衛門ノ稱ナリ、眞淵云、源氏ニ、右衛門督ヲカシハ木トイヘルヲ思ヘバ、中重〇中重上下恐有二脱文一左右衛門ハ外重ナレド、トモニ御門モルサマオナジキ故ニ同稱アルカ、
〔拾芥抄中末宮城〕左衛門府鷹司南大宮東近衛北堀河西
〔大内裏圖考證二十八左右衛門府〕左衛門府
諸圖左衛門府、鷹司南、近衛北東〇東字疑衍大宮東、猪隈西方一町、
右衛門府
古本拾芥抄圖、右衛門府印本作二右兵衛町一者誤寫近衛南、大宮西一町、
〔百寮訓要鈔別註七〕左衛門府、〇中略當府ハ、鷹司ノ北、〇北恐南誤近衛ノ南、〇南恐北誤大宮東、堀川ノ西ニアリテ、其地宮門ノ外トニス、凡二町ノ所ナリ、今按ニ、二町ノ内、大宮ヨリ猪隈マデ一町ノ間ハ、検非違使ノ廳ナルユヘ、本府ハ猪クマ以東一町ナリ、
其陣ハ建春門ニアリ、
右衛門府　當府ハ、藻壁門ノ外、近衛南、勘解ノ北、猪隈ノ東ニアリ、其陣ハ宜秋門ノ内ナリ、
〔新儀式五臨時〕恩赦事

古事類苑

官位部二十三

令制官職十九

左右衞門府 左右衞士府附

衞門府ハ、大寶令ノ定ムル所ニシテ、其職員ニハ督一人、佐一人、大尉、少尉、大志、少志各〻二人、醫師一人、門部二百人、物部三十人、使部三十人、直丁四人、衞士若干人ヲ置ク、而シテ其職トスル所ハ、宮闕ノ禁衞、諸門ノ開閉ニシテ、非違ヲ巡撿シ、不法ヲ糺察シ、及ビ門籍門牓等ノ事ヲ掌ル、

上世門衞ノ事ハ、大伴久米二氏ノ世職トスル所ナリキ、久米氏衰ルニ及ビ、大伴佐伯ノ二氏相並ビテ之ヲ掌ル、而シテ大寶令制定ノ時、衞門府ヲ諸衞ノ上ニ置キ、諸門ノ開閉ヲ掌ラシメ、其門部ハ、大伴佐伯ノ氏人ヲ以テ任ジタリ、其後平城天皇ノ大同三年、衞門府ヲ廢シテ左右衞士府ニ併セシガ、仍ホ呼ブニ靫負ノ稱ヲ用ヰ、左右門部各〻百人ヲ置ク、然ルニ嵯峨天皇ノ弘仁二年、大伴宿禰眞木麻呂等ノ奏請ニヨリ、衞士府ノ字ヲ改メテ衞門府ト爲ス、是ニ於テ始メテ左右衞門府ノ稱アリ、而シテ非違ヲ撿スルコトハ、本府ノ掌ル所ナリシカ、後世撿非違使ノ別ニ起ルニ及ビ、其別當ハ多ク本府ノ督ヲ以テ兼補シ、佐尉志以下亦使ノ官ヲ兼ヌル者多シ、之ヲ使ノ宣旨ヲ蒙ルト云フ、

名稱

〔倭名類聚抄 五官〕府 職員令云、近衞府、兵衞府、衞門府、由介比乃豆加佐

〔古事記傳 七〕和名抄に、近衞府、兵衞府、衞門府を由介比乃豆加佐とあるは、靫負と書て、由伎於比

從四位下同繼繩右大辨、十一月癸未、兼外衞大將、辨如元、

沿革

當時衞府ノ制、衞門、左右衞士、左右兵衞ノ外、近衞、中衞、及ビ外衞ノ三府アリ、合セテ八府ナリシヲ、寶龜三年二月、外衞府ヲ廢シテ、其舍人ハ、近衞、中衞、左右兵衞ノ諸府ニ分配セリ後世、左右近衞、左右衞門、左右兵衞ノ六府トナルニ及ビ、特ニ近衞府ニ對シテ、左右衞門左右兵衞ノ四府ヲ稱シテ、外衞ト云ヘルコトアリ、今ノ外衞ト其名ハ同ジクシテ、其實ハ大ニ異ナリ、

〔續日本紀稱德二十六〕天平神護元年二月甲子、定外衞府官員、大將一人爲從四位上官、中將一人爲正五位上官、少將一人爲從五位上官、將監四人爲從六位上官、將曹四人爲從七位下官、

〔大日本史職官四〕按本書〇續日本紀外衞大將、始見于天平寶字八年、蓋一時權置、至是定爲正官也

職員

〔續日本紀稱德三十〕寶龜元年六月辛丑、初天皇自幸由義宮之後、不豫經月、於是勅左大臣〇藤原永手攝知近衞外衞左右兵衞事、右大臣〇吉備眞備知中衞左右衞士事、

〔續日本紀光仁三十二〕寶龜三年二月丁卯〇丁卯恐丁丑誤罷内竪省及外衞府、其舍人者、分配近衞中衞左右兵衞、

〔續日本紀淳仁二十五〕天平寶字八年十月壬申、高野天皇〇孝謙遣兵部卿和氣王、左兵衞督山村王、外衞大將百濟王敬福等、率兵數百、圍中和院、

〔續日本紀淳仁二十五〕天平寶字八年十月癸未、正五位下藤原朝臣田麻呂爲外衞中將、

〔續日本紀稱德二十六〕天平神護元年二月丙寅、正五位上藤原朝臣田麻呂爲外衞大將、從五位下豐野眞木人篠原爲中將、

〔續日本紀稱德二十九〕神護景雲二年十一月癸未、從四位下藤原朝臣繼繩爲外衞大將、

〔公卿補任稱德〕神護景雲二年戊申

參議從四位上藤田麻呂十一月任大宰大貳、去外衞大將、同月爲檢校兵庫副將軍、

雜載

今省₂廢一員₁定₂一員₁

右被₂右大臣宣₁偁、奉₂勅宜₁依₂件省定₁、

延暦十八年六月一日　○又見₂日本後紀、職員令集解₁、

太政官符

應₂定諸司使部₁事

中衛府廿人　○中略

延暦十四年七月十日

〔東大寺正倉院文書　十〕添上郡

天平元年定大税穀捌仟捌伯貳拾斛貳斗貳升貳合、○中略　穎稻肆仟壹伯伍拾捌束漆把、○中略　用肆伯漆束壹把、(中略)○○中衛府作御田三町、種稻六十束、

接續裏ニ　從七位上行大目勳十二等中臣酒人宿禰古麻呂

〔續日本紀　二十孝謙〕天平寶字元年八月辛丑、勅曰、○中略　今故六衛置₂射騎田₁、毎年季冬、宜₃試₂優劣₁以給₂超群₁、令₃興₂武藝₁、其中衛府三十町、○又見₂類聚三代格₁、

〔續日本紀　二十四淳仁〕天平寶字六年二月乙卯、造₂綿甲冑一千領₁、以貯₂鎭國衛府₁、

○按ズルニ、鎭國衛府ハ中衛府一時ノ改稱ナリ、

附　外衛府

天平神護元年、授刀衛ヲ改メテ近衛府ト爲シヽトキ、始メテ外衛府ノ官員ヲ定ム、其官員大將中將少將各ニ一人、將監將曹各ニ四人アリ、蓋シ天平寶字八年、既ニ外衛大將外衛中將等ノ號、國史ニ見エタレバ、此時ニハ唯其官員及ビ位階ヲ定メタルニ過ギザルベシ、而シテ外衛府ヲ置キシ年月ハ、國史ニ所見ナシ、

軍、

○按ズルニ、鎭國驍騎將軍ハ、中衛少將ノ一時ノ改稱ナリ、

〔續日本紀十八孝謙〕天平勝寶二年三月戊戌、賜中衛員外少將從五位下田邊史難波等上毛野君姓、

〔續日本紀二十孝謙〕天平寶字元年六月壬辰、從五位下田中朝臣多太麻呂爲中衛員外少將、

〔續日本紀二十二淳仁〕天平寶字三年七月丁卯、鎭國衞次將從五位下田中朝臣多太麻呂、爲兼上總員外介、

○按ズルニ、鎭國衞次將ハ、中衛員外少將ノ一時ノ改稱ナリ、

〔續日本紀二十八稱德〕神護景雲元年八月丙午、從五位下弓削御淨朝臣廣方爲武藏員外介、中衛將監如故、

〔續日本紀十聖武〕神龜五年八月甲午、勅置中衛府、○中略中衛三百人、號曰東舍人、

〔職官志五〕按稱日來舍人者、以其所新置、故對故有內舍人大舍人而言也、

○按ズルニ、日東舍人ノ四字、刻本ニ日來舍人ニ作レリ、誤リナラン、

〔續日本紀十三聖武〕天平十二年六月庚午、勅曰、○中略宜大赦天下、○中略中衛舍人、左右兵衞、左右衞士、衞門府衞士、門部、主帥、使部等、不在赦限、

〔續日本紀十九孝謙〕天平勝寶八歲七月己巳、勅、○中略中衛舍人、亦以四百爲限、

〔續日本紀二十孝謙〕天平寶字元年四月辛巳、是日遣內舍人藤原朝臣薩雄、中衛二十人、迎大炊王、立爲皇太子、○淳仁　七月戊申、詔曰、○中略是日夕、中衛舍人從八位上上道臣斐太都、告內相云、　八月甲午、驛使中衛舍人少初位上賀茂君繼手、應敍從八位下、賜絁十匹、調綿二十屯、調布二十端、

〔享祿本類聚三代格四〕太政官符

中衛左右衞士府醫師各二員

職員

〔有職問答 三〕一左右近衞府

右兩衞の外に、中衞と申號候哉、時代いづれの比、誰人任候哉、何の比より停止候哉、

往古大將、皆中衞大將也、其後又置近衞、大同二年四月、以近衞爲左近衞、以中衞爲右近衞府云々、然ハ當時ノ右近衞ハ、則上古ノ中衞府也、

〔公卿補任 聖武〕天平二年庚午

參議正三位藤原朝臣房前 兼民部卿、或本中務卿、十月一日任中衞大將、

〔扶桑略記 六聖武〕天平二年四月廿八日、立興福寺塔、藤原皇后、幷中衞大將藤原房前等、自臨彼伽藍、率文武官、持簀運土、建五重寶塔一基、

〔續日本紀 三十五光仁〕寶龜十年十二月辛酉、以中務卿從三位藤原朝臣田麻呂、爲兼中衞權大將、

〔公卿補任 光仁〕寶龜九年戊午

參議從三位藤田麻呂 攝津大夫、十二月辛酉、兼中衞權大將、

〔續日本紀 二十六稱德〕天平神護元年二月己巳、從四位下石上朝臣宅嗣爲中衞中將、常陸守如故、

〔公卿補任 稱德〕天平神護二年丙午

參議兼中將始
參議正四位下石上朝臣宅嗣 正月八日任、中衞中將如元、

天平神護元年正月從四位下、二月日爲中衞中將、

○按ズルニ、中衞中將、是ヨリ以前所見ナシ、而シテ授刀衞ヲ改メテ近衞府ト爲セシハ、天平神護元年二月ナリ、恐クハ是時中衞府ニ始メテ中將ヲ置キ、以テ近衞府ト相對セシナランヽ

〔續日本紀 二十九稱德〕神護景雲二年七月戊子、從四位上伊勢朝臣老人爲修理長官、造西隆寺長官中衞員外中將如故、

〔續日本紀 十一聖武〕天平三年六月庚寅、外從五位下佐味朝臣足人爲中衞少將、

〔續日本紀 二十三淳仁〕天平寶字五年正月壬寅、從五位下大伴宿禰益立爲陸奧鎭守副將軍、鎭國驍騎將

〔日本紀略桓武〕延暦十一年四月乙巳、勅、近衛中衛兩府大將、元從四位上官也、去天平神護元年改爲正三位官、宜依舊爲從四位上官、

○按ズルニ、天平神護元年、授刀衛ヲ改メテ近衛府ト爲シ大將ヲ正三位ノ官ト爲シヽコト、續日本紀及ビ享祿本類聚三代格ニ見エタレドモ、此時中衛大將ヲ正三位ノ官ト爲シヽコト、一モ所見ナシ、蓋シ藤原仲麻呂官號ヲ改易セシトキ、鎭國大尉即チ舊ノ中衛大將ヲ正三位ノ官ト爲シヽガ、官號ヲ舊ニ復セシトキ、位階モ一時從四位上ト爲シ、天平神護元年ニ至リ、近衛大將ト共ニ昇セテ正三位ト爲シヽガ、是ニ於テ復從四位上ノ官ト爲シヽナラン、

〔日本紀略平城〕大同二年四月己卯、詔云云、近衛府者、爲左近衛、中衛府者、爲右近衛、

〔享祿本類聚三代格四〕詔、中衛府者、職同近衛、並是禁兵□馬、警巡斯重、東西分陣、夙夜在公、嚴肅非殊、理容晝一、自今以後、宜改近衛府者爲左近衛、○近衛以下八字、據日本紀略補、中衛府者、爲右近衛、復置中將、亦宜□□□□□□□□准近衛、主者施行、

大同二年四月廿二日

〔公卿補任平城〕大同二年四月廿二日、改近衛府爲左近衛、改中衛府爲右近衛府、復置中將、左右近衛此始也、

○按ズルニ、中衛府、初メ中將ヲ置カズ、天平神護元年、石上宅嗣始メテ中衛中將タリ、下文職員條ヲ參看スベシ、爾後中衛中將、國史ニ散見ス、而シテ延暦十一年ヨリ大同二年マデ、凡ソ十六年間ハ、中衛中將ノ任、國史ニ所見ナシ、蓋シ享祿本類聚三代格、及ビ公卿補任ニ、大同二年四月、復置中將トアルニヨレバ、延暦十一年以後、中衛府ニ中將ヲ置カザリシコト知ルベシ、

〔長秋記〕保延元年二月七日辛亥、大宮大夫來給、明日任大將、○藤原賴長、間事尋問給、○中略、予尋申云、謂中衛大將是何職乎、答云、謂右大將近衛大將謂左大將云々、

〔唐六典二十四諸衞〕左右衞大將軍各一人、正三品、

秦漢始置衞將軍、後漢及魏並因之、然增其班秩、晉文帝置中衞。又置中。衞。將。軍。武帝受命、分爲左右二衞、

〔享祿本類聚三代格四〕□□府

大將一人從四位□官　中將一人從四位[ ]　少將二人正五位下官　將監四人從六位上官　將曹四人從七位[ ]

醫師二人　府生六人　番長六人　中衞四百人　使部卌人

□□□□□□□□府、置常在大內、以備周衞、其考選祿文〇下闕

〇按ズルニ、此格文、續日本紀ノ文ト契合セザル所多シ、此ニ中將一人トアレドモ、紀ニハ中將ナシ、紀ニ少將一人トアルヲ、此ニハ二人トアリ、此ニ中衞四百人トアリテ、紀ニハ三百人トアリ、蓋シ中衞府中將ノ國史ニ見エタルハ、天平神護元年二月八日ニシテ、石上宅嗣始メテ中衞中將タリ、而シテ授刀衞ヲ改メテ近衞府ヲ置キシモ、此年二月三日紀作三月二日ニシテ、大將以下職員、此格文ト對比スルニ略ボ參差ナシ、是ニ由リテ思フニ、此文蠹食闕損シテ、年月詳ナラズト雖モ、恐ク神龜五年ニ、中衞府ヲ置キシトキノ格ニハアラズシテ、天平神護元年、中衞府ノ官員ヲ增加シ、以テ近衞府ト相對セシメシ時ノ格文ナルベシ、而シテ國史此記事ナキハ、偶之ヲ逸セシナラン、

〔續日本紀淳仁二十一〕天平寶字二年八月甲子、是日大保從二位兼中衞大將藤原惠美朝臣押勝、〇中略等奉勅改易官號、〇中略中衞府、鎭國之衞、且此爲先、故改爲鎭國衞、官重位卑、故大將爲正三位官、改曰大尉、少將〇原作中將爲從四位上官、曰驍騎將軍、員外少將爲正五位下官、曰次將、

〔續日本紀考證七淳仁〕中將當下依金澤本補本一作少將上、按、神龜五年八月、置中衞、有少將無中將、其置中將、在神護元年、改中衞爲近衞之時、

〔續日本紀淳仁二十五〕天平寶字八年九月丙辰、勅、逆人仲麻呂〇押勝舊名執政奏改官名、宜復舊焉、

沿革

〔續日本紀稱德三十〕神護景雲三年十月乙未朔、詔曰、○中略復勅久之、朕我東人爾授刀天侍之留牟事波、汝乃近護止天之護近與止疑誤字○近念天毛奈在、是東人波、常爾云久、額爾方箭波立止毛背波箭方不立止云天、君乎一心乎以天護物曾、此心知天汝都可念止勅比之御命乎不忘、此状悟天、諸東國乃人等、謹之利麻奉侍禮、

〔續紀歷朝詔詞解五〕東人爾授刀天とあるは、授刀舍人なるべし、さてその授刀舍人には、凡て東國の人のみを補せられたる歟、はた授刀舍人の中に、東國の人なるをえりて侍はしめ給へるか、さるこまかなることは知がたし、近護止天之授刀衞を改めて近衞府とせられしも、此官もとより近き護なりしが故なり、

〔令集解雜二十三〕釋云、天平寶字三年格云、授刀舍人兵衞等、有位臺十口、今減二二口一、无位五口、今減二一口一、

〔續日本紀淳仁二十三〕天平寶字四年十一月丙申、遣授刀舍人春日部三關、中衞舍人土師宿禰關成等六人於太宰府、就大貳吉備朝臣眞備、令レ習諸葛亮八陣孫子九地及結營向背、

圖中衞府

中衞府ハ聖武天皇ノ神龜五年ニ置ク所ニシテ、其地位常ニ諸衞ノ上ニ在リ、專ラ禁中警衞ノ事ヲ掌ル、稱德天皇ノ天平神護元年、授刀衞ヲ改メテ近衞府ト爲スニ及ビ、本府是ト相對シテ天皇ノ親衞タリキ、而シテ平城天皇ノ大同二年ニ至リ、更ニ近衞府ヲ改メテ左近衞府ト爲シ、本府ヲ改メテ右近衞府ト爲ス、左右近衞ノ稱是ニ始マル、近衞府參看スベシ、

〔續日本紀聖武十〕神龜五年八月甲午、置中衞府、大將一人、從四位上少將一人、正五位上將監四人、從六位上、將曹四人、從七位上府生六人、番長六人、中衞三百人、號曰東舍人使部已下亦有レ數、其職掌、常在大內、以備周衞、事並在レ格、

〔帝王編年記聖武十一〕神龜五年七月廿一日、始置中衞府、

○按ズルニ、神龜五年八月ニ甲午ナシ、七月乙卯ノ誤ナリ、帝王編年記ニ中衞府ヲ置クヲ以テ七月二十一日ニ係ケタリ、卽チ乙卯ナリ

〔續日本紀 淳仁二十三〕天平寶字五年八月甲子、高野天皇〇孝謙及帝幸藥師寺禮佛、奏呉樂於庭、施綿一千疋、還幸授刀督從四位上藤原朝臣御楯第宴飮、

〔公卿補任 帝孝謙〕天平寶字八年甲辰

中納言正三位藤原朝臣眞楯九月十一日敍正三位、勳二等、兼授刀大將、

〇按ズルニ、授刀衞ノ官員、督ト曰ヒ、佐ト曰ヒ、尉、志ト曰フ、然ルニ天平寶字八年以後、皆大將、中將、少將ト稱シテ、督、佐ト曰ハズ、蓋シ其號ヲ改メシコト、國史ニ記載ナシト雖モ、恐クハ天平寶字八年九月、藤原仲麻呂ガ改メシ諸衞ノ新官名ヲ廢シテ、舊ニ復セシ時ニアランカ、

〔續日本紀 淳仁二十五〕天平寶字八年十月癸未、授刀少將從四位下牡鹿宿禰嶋足爲兼相模守、〇中略式部大輔勳旨員外大輔授刀中將從四位下粟田朝臣道麻呂爲兼因幡守、

〔續日本紀 淳仁二十四〕天平寶字六年八月丁巳、令〇中略授刀大尉從五位下佐味朝臣伊與麻呂等侍于中宮院、宣傳勅旨、

〔續日本紀 淳仁二十五〕天平寶字八年九月乙巳、太師藤原惠美朝臣押勝、逆謀頗泄、高野天皇〇孝謙遣少納言山村王、收中宮院鈴印、押勝聞之、令其男訓儒麻呂等邀而奪之、天皇遣授刀少尉坂上苅田麻呂、將曹牡鹿島足等、射而殺之、押勝又遣中衞將監矢田部老、被甲騎馬、且劫詔使、授刀紀船守、亦射殺之、

〔續日本紀 桓武三十七〕延暦二年正月乙酉、正四位上道島宿禰嶋足卒、〇中略寶字中、任授刀將曹、八年惠美訓儒麻呂之劫勅使也、島足與將監坂上苅田麻呂、奉詔疾馳射而殺之、

〔續日本紀 淳仁二十四〕天平寶字六年五月丙午、賜太師正一位藤原惠美朝臣押勝帶刀資人六十人、通前一百人、

〔續日本紀 淳仁二十五〕天平寶字八年九月戊申、以太宰員外帥正二位藤原朝臣豐成、復爲右大臣、賜帶刀四十人、

雜載

鴨朝臣虫麻呂〈〇中略〉其所從授刀舍人二十人、增位四等、

〔續日本紀　八元正〕養老四年三月甲子、有勅特加右大臣正二位藤原朝臣不比等授刀資人三十人、

〔續日本紀考證　四元正〕案授刀資人、即授刀舍人、蓋取諸授刀寮、稱曰帶刀、其義亦同、是特所以優異寵臣、別勅賜之、猶舍人新田部二親王賜內舍人、大舍人、衞士之類、故賜之無定員、而令條不載也、

〔續日本紀　八元正〕養老五年三月辛未、勅給右大臣從二位長屋王帶刀資人十人、中納言從三位巨勢朝臣邑治、大伴宿禰旅人、藤原朝臣武智麻呂各四人、其考選一准職分資人、

〔續日本紀　二十二淳仁〕天平寶字三年十一月壬辰、勅、益大保從二位藤原惠美朝臣押勝帶刀資人卄人、通前四十人、

〔東大寺正倉院文書　十一〕戶主從八位下勳十二等出雲臣眞足年伍拾壹歲　正丁〈〇中略〉

弟少初位上出雲臣國上、年參拾五歲、　正丁　授刀舍人

〈接續裏書〉山背國愛宕郡出雲鄕雲上里神龜三年史生從八位下間人宿禰男君

〔續日本紀　八元正〕養老五年十二月辛丑、太政官奏、授刀寮及五衞府、別設鉦鼓各一面、便作將軍之號令、以爲兵士之耳目、節進退動靜、奏可之、

〔萬葉集　六雜歌〕四年〈〇神龜〉春正月、勅諸王諸臣子等、散禁於授刀寮、〈〇下略〉

〇

授刀衞

〔續日本紀　二十二淳仁〕天平寶字三年十二月甲午、置授刀衞、其官員、督一人從四位上官、佐一人正五位上官、大尉一人從六位上官、少尉一人正七位上官、大志二人從七位下官、少志二人正八位下官、

〔職官志　五〕天平寶字三年十二月、又置授刀衞、〈〇註略〉其前有授刀舍人寮、〈〇註略〉既而廢寮、〈〇註略〉唯其授刀舍人隷諸衞之府、莫有適屬、〈〇註略〉今授刀衞、蓋總其舍人者、特不曰府而曰衞也、

〔續日本紀　二十六稱德〕天平神護元年二月甲子、改授刀衞爲近衞府、

衛謂庭、不得輒離其府、散使他處、因賜五衛府及授刀寮醫師已下至衛士布、人有差、

〔令義解四祿〕凡兵衛、六月內、上日夜各八十以上者給祿、有位准大初位、無位准少初位、授刀舍人亦准此、

〔令集解二十三祿〕朱云、授刀舍人謂一事、但此書不見其本司也、穴云、授刀舍人謂大舍人帶刀也、私案、此說不安也、於今不見其所仕之司耳、

○按ズルニ、令ノ本註ハ、令制定ト同時ニ成リタルモノニシテ、當時未ダ授刀舍人寮ノ設アラズ、故ニ此ニ授刀舍人トアルハ、大舍人ナドノ中ニテ、帶刀スベキ者ヲ云ヘルナラン、集解穴ノ說妥ナルガ如シ、

〔續日本紀五元明〕和銅四年十月甲子、勅、依品位始定祿法、○中略帶劒舍人○中略絁二約錢十文、

〔續日本紀六元明〕靈龜元年七月壬辰、授刀舍人狛造千金、改賜大狛連、

〔續日本紀九元正〕養老六年閏四月乙丑、太政官奏曰、○中略望請陸奧按察使管內百姓庸調浸免、○中略其國授刀兵衛衛士、○中略皆悉放還、各從本色、若有得考者、以六年爲叙、一叙以後、自依外考、　七年十月乙卯、授刀舍人、○中略賜祿有差、

〔續日本紀九聖武〕神龜三年三月辛巳、宴五位已上於南苑、但六位已下官人、及大舍人、授刀舍人、兵衛等、皆喚御在所、給鹽鍬、各有數、

〔續日本紀十聖武〕神龜四年十月甲戌、王臣以下、至左右大臣舍人、兵衛、授刀舍人、中宮舍人、雜工舍人、太政大臣家資人、女孺、賜祿各有差、

〔續日本紀十六聖武〕天平十八年二月己丑、改騎舍人、爲授刀舍人、

〔職官志五〕騎舍人、未詳置何世、蓋今改其職、入名籍於授刀舍人、而授刀舍人不復言其寮、則寮已廢、以其舍人隷之諸衛府、猶如衛士分配三府歟、

〔續日本紀十九孝謙〕天平勝寶八歲五月乙亥、勅曰、左衛士督從四位下坂上忌寸犬養、右兵衛率從五位上

沿革

寮ヲ廢セシ年月、國史記載ナシ、然ルニ淳仁天皇ノ天平寶字三年、更ニ授刀衞ヲ設ケ、督佐大尉少尉各一人、大志少志各二人ヲ置ク、蓋シ前ニ中衞府ニ屬セシメタル授刀寮ノ舍人ヲ收メテ之ヲ總轄セシナラン、稱德天皇ノ天平神護元年、本衞ヲ改メテ近衞府ト爲ス、

〔續日本紀四 元明〕慶雲四年七月丙辰、始置授刀舍人寮、

〔職官志五〕蓋授刀舍人寮、或略稱授刀寮、又其稱帶劍、義同授刀、此臨時所置、是以其官若無定名、亦不有定員、

〔續日本紀八 元正〕養老四年八月甲申、詔、〇中略新田部親王爲知五衞及授刀舍人事、

〔續日本紀十九 孝謙〕天平勝寶八歲七月己巳、勅、授刀舍人考選賜祿名籍者、悉屬中衞府、其人數以四百爲限、闕卽簡補、但名授刀舍人、勿爲中衞舍人、其中衞舍人亦以四百爲限、

〔職官志五〕神龜置中衞之日、有三百人、至此限以四百、與授刀舍人、都爲八百人、授刀舍人已無寮、則無復其長官可適從、故姑屬中衞、仍名授刀、以別於中衞、而其隸諸衞之府依舊、但名籍輒入中衞以統焉、

職員

〔續日本紀四 元明〕和銅元年三月丙辰、以從五位下小野朝臣馬養、爲帶劍寮長官、

〔公卿補任 聖武〕神龜三年 丙寅

參議正三位藤原朝臣房前 月日、授刀長官兼近江若狹按察使、

〔令集解二十 衣服〕養老六年二月廿三日格云、〇中略從三位行授刀頭藤原朝臣房前上意見、

〔續日本紀八 元正〕養老四年三月丙辰、以中納言正四位下大伴宿禰旅人、爲征隼人持節大將軍、授刀助從五位下笠朝臣御室、〇中略爲副將軍、

〔續日本紀八 元正〕養老四年正月庚辰、始置授刀舍人寮醫師一人、

〔續日本紀十 聖武〕神龜四年三月甲午、天皇御南苑、參議從三位阿倍朝臣廣庭宣勅云、衞府人等、日夜宿

供給

〔續日本後紀 十六仁明〕承和十三年九月乙丑、參議從五位上和氣朝臣眞綱卒也、故民部卿從三位淸麻呂之第五子也、〇中略爲左近衛次將時、割留俸分、兼添私物、買得攝津國良田、納之厨家、有章醪投河之義、士卒補疲于今賴之、情切助公、於焉可見、

〔江家次第 十一十二月〕御佛名

今夜差栢梨左近衛府攝津庄名也、以彼地利所造之甘精也、

頭書　裏書曰、栢梨、昔府中將和氣某、以攝津國栢梨庄寄左近府、以其地利充官人以下酒醪料、錄奏請、

〔延喜式 四十五左右近衛〕凡大衣者、將監已下府生已上、人別橡帛三丈一尺、帛三丈一尺、綿十屯、近衛二百人、紺細布、白細布、各二丈一尺、綿十屯、橫刀緒、近衛四百八人、八人番長緋帛各七尺五寸、右近緋纈皆三年一給、並

凡近衛駕丁祿物糧米、府總請取班給、其不仕料、幷節服、及靑摺衫、大衣駕丁裝束舊破之物、幷充府中雜用、兵衛亦同、

凡駕輿丁百人隊正二人、火長十人、丁八十八人、衣服料、夏隊正火長、各庸布一段、丁別商布一段、冬隊正火長、各庸布二段、綿三屯、丁別商布二段、綿三屯、

凡從行官人已下執夫已上、並計路程給糧、人別日米一升六合、鹽一勺六撮、馬丁數見彈正式米一升、鹽一勺、餘府准此、

〇按ズルニ、近衛府職員供給ノ事ハ、政治部ニ詳ナリ、

附授刀舍人寮 授刀衞 併入

授刀舍人寮、或ハ略シテ授刀寮ト云フ、天皇親衞ノ舍人ヲ掌ル、元明天皇ノ慶雲四年始メテ之ヲ置ク、其後、孝謙天皇ノ天平勝寶八年ニ至リ、授刀舍人ノ考選、賜祿、名籍等、悉ク中衞府ニ隷セシメ、尙ホ授刀舍人ノ名ヲ存シ、四百人ヲ以テ定員トセシコト、國史ニ見ユ、而シテ授刀

用途

〔延喜式 四十五 左右近衞〕凡騎射的百廿六枚、受木工寮、但駒牽幷六日的、當府備之、

凡車駕巡幸、應須甲楯者、預前申奏請受兵庫、其數臨時聽勅、餘府准此、

凡胡床三百基、緒料緋絲、基別八兩、塗料漆、基別一合、隨損申官請、

蓐卅條〈錦十條、緋布十條、調布十條、〉並廿年一度、申官作換、

〔延喜式 四十五 左右近衞〕凡年料所須雜藥者、申官請受、〈數見典藥式〉餘府准此、

〔文德實錄 九〕天安元年八月辛卯、右近衞舍人町火、

〔拾芥抄 中 東宮城〕諸司厨町

左近四町〈土御門南、近衞北、西洞院西、堀川東、〉

〔延喜式 四十五 左右近衞〕凡府蒭陸田十町、〈穫蒭四千斤〉營刈運賃幷食料、二月一日申官請受、〈町別營夫六十人、駈丁四人、夫日米二升、鹽二勺、滓醬二兩、醬滓一合、糟三合、駈丁日米一升二合、鹽一勺、滓醬一兩、醬滓一合、糟三合、功錢駄賃臨時量定、駄別運蒭十二斤、〉其缺者、町別二口、三年一請、但蒭左府送左馬寮、右府送右馬寮、〈衞門兵衞各亦准此、〉

射田、左右近衞府、各十町、〈在近江國〉地子充教習騎射步射用、

〔類聚三代格 十五〕太政官符

合畠八町〈〇中略〉

三條一坊十町

右一町近衞蓮池

以前被右大臣宣偁、奉勅件處、永充二司、〈〇勅旨省、近衞府、〉以爲園池、

延曆十四年正月廿九日

〔日本紀略 嵯峨〕弘仁元年八月壬午、右京地一町、賜右近衞府、

〔日本後紀 二十一 嵯峨〕弘仁二年十月乙亥、大和國添上郡地二町、賜左近衞府、

略○中貞觀忠仁公以來、爲執柄弟、師家弟忠房○前攝政藤原爲他門人、原公經子實氏○前太政大臣藤被超之人未聞及事歟、凡元服正五位下、不歷參議任中納言中將之人、爲大納言、忠房時爲大納言○之時、雖上﨟大將、實氏時爲右大將○無任大臣之例歟、幸運任意之世、更不及先例之沙汰歟、令逢此時給、爲御先祖、爲朝議、實足悲痛者歟、

〔玉蘂〕曆仁元年正月廿三日、見聞書、左中將藤實藤、太政入道(藤原公經)末子最愛、非攝政關白子息之人、五位中將例、師忠卿、賴實公息也、希代事也、

〔有職問答〕一五位の中將も有之候哉

答、五位の中將は、攝關の子息、元服の時、五位にして中將に任ぜらるゝ也、攝家淸花の子息、四位にて中將に任ずる也、尤權有、相當從四位の下にて候、

〔公卿補任花園〕延慶二年己酉

三位中將兼大將例

非參議從三位藤公賢左中將、九月廿六日兼左大將、十月十五日任參議、

〔公卿補任四條〕曆仁二年己亥○延應元年

非參議從三位藤實藤正月五日敍、任一第子左中將如元

嘉禎三年正五、正五下、皇后宮御給同廿九日左少將、同四○曆仁元年正廿三轉左中將、

〔公卿補任後奈良〕天文廿四年乙卯○弘治元年

凡人二位中將例

非參議正三位源通興左中將、正月六日敍從二位、中將如元、四月廿六日任權中納言、

將監補任

〔江次第抄四〕除目

左近將監　花園抄云、將監自無官不任、但大臣子非此限、

將曹補任

〔有職問答三〕一將曹　府生

任家ありや、役は如何、隨身家任之、兵杖ヲ給ハル人ニ相從也、

〔有職問答五〕一樂人伶人隨身此三輩などは、初官はなにゝ被任候て、極官は何を先途に昇進候哉、

左右近、將曹、將監ナド、帶之事ニ候、將曹コトナキ歟、樂人、近日、四品ニ昇進之類多候、舞人、大略五位極官ニ候、

器具

〔延喜式四十五左右近衞〕凡威儀及行幸所須器仗者、收於府庫、臨時出用、但甲楯不在此限、餘府准此

り給て、やがて中納言中將ときこえき、昔のみかどの御子、一の人のきむだちなどおはすれど、かく四位五位などもきこえ給はで、はじめて三位中將になり給、年のうちに中納言中將などは、いとありがたくや侍らん、又そのつぎの年、保安元年にや侍けん、大納言になり給て、年をならべて右近大將かけ給き、よの人宮大將など申て、みゆきみる人は、これをなんみものにしあへることに侍し、

〔平家物語 十〕よこぶえの事

小松の三位の中將これもりの卿は、身がらは八嶋に有ながら、心は都へかよはれけり、中略都へ上り、戀しき者共をも、今一度見もし見えばやと思はれけれ共、おち本三位中將殿重衡のいけどりにせられて、京かまくらにはぢをさらさせ給ふだにも口惜きに、下略

〔百寮訓要鈔別註 七〕按ニ、常ニ三位中將ト稱スルハ、敍留ヲ規模トスルノ稱ナリ、譬ヘバ、一府ニ三位中將二人アルトキハ、上首ノ人ヲ本三位中將ト稱シ、下﨟ヲ新三位中將ト稱スルナリ、

中納言中將二人例

〔公卿補任 順德〕建保四年丙子

權中納言　正三位　藤家通左中將、七月十六日從二位、

　　　　　正二位　源實朝六月廿日任、右中將、七月廿日轉左、

承久三年辛巳

非參議　正三位　藤敎實右少將、正月五日從二位、中略

〔官職便覽 三〕位階始敍之事條

從二位　少將、承久、敎實始之、光明峯寺道家公男、建保五四廿一從五位上、同六月廿九右少將、同六正五從四位下、承久元正五正四位下、同四月八日從三位、同二四六正三位、同三年正五從二位、

〔明月記〕寬喜三年三月十五日辛丑、巳時許、伊勢清定來、近日巷說又嗷々、任槐之間一定云々、聞及歟、

〔公卿補任一條〕寛和三年（丁亥○永延元年）

非參議從三位藤道長（九月廿日敍、（中略）左少將如元、廿六日止少將、）

〔官職便覽三〕位階始敍之事條

從三位　少將者、宇治關白始之、（兼家公男道長公、號御堂、寛和三年九月廿日敍從三位、左少將如元、）其以後執柄息時々敍之、（道長公孫忠家卿、永承元二十一從五位上、同十一十三正五位下、同三正六從四位下、同十二月七日從四位上、同四二五正四位下、同五十十三從三位少將如元、同六六十六正三位、同十二月五日補右中將、）規模事也、

〔百寮訓要鈔別註七〕三位少將ト云モ、少將ニ任ジタル後、三位ニ至テ猶敍留アルコトナリ、三位ニテ少將ニ任ズルコトハナキコトナリ、

〔公卿補任三條〕長和二年（癸丑）

非參議正三位藤頼宗（右權中將、正月兼備中權守、九月十六日從二位、（行幸大中宮））

〔官職便覽三〕位階始敍之事條

從二位　二位中將始頼宗公也、（藤道長公二男、寛弘三三右中將從四位上、同八八十一敍從三位、長和元四廿七正三位、同二九十六從二位、同三任權中納言、）攝關子及孫得之、只人俊房、（源師房公男、永承五十十三敍從三位、左中將如元、同六二十三正三位、天喜二二廿二從二位、）通光公等也、（源師房公七代孫、通親公男、建仁元四廿二從三位右中將、同二七十三正三位、同十月十九日從二位、）

〔中右記〕元永二年十一月廿八日、披見聞書之處、三位中將有仁、任權中納言、（中略）○源氏中納言中將初例也、中納言中將ハ、始自昭宣公至當時内府七人、皆藤氏人也、

〔續世繼八花のあるじ〕三宮の御子（○後三條皇子輔仁）は、中宮大夫師忠の大納言の御むすめのはらに、花園の左のおとゞとておはせしこそ、光源氏などもかゝる人をこそ申さまほしくおぼえ給しか、（中略）元永二年にや侍りけん、中の秋のころ、御とし十七とや申けん、はじめて源氏の御姓たまはりて、御名は有仁ときこえき、やがてその日三位中將になり給て、その年の十一月のころ、中納言にな

〔公卿補任桓武〕延暦廿四年乙酉
参議大辨兼少將例。
参議従四位下秋篠朝臣安人正月十七日任、右大辨、勘解由長官、少將如元、
〔河海抄五〕三位中將。 在所未勘、〇中略 延暦廿年十一月日、坂上田村麻呂叙従三位、元左中將、是三位中將始也、一條院御時、道綱任歟、
〔公卿補任仁明〕承和二年乙卯
参議正三位源信正月七日叙正三位、十一日兼近江守、左兵衛督如元、四月庚寅兼左中將、
〔濫觴抄下〕三位中將
同年安和元十一月、左近中將藤原兼家叙之、
〔官職便覽三〕位階始叙之事條〇中略
從三位 近衛中將者、承和二年源信公始叙之、承和二年正月七日從三位、同四月兼左中將、同三年正三位、依彼例、東三條關白兼家公、藤忠平公孫、康保五年十一月廿三日叙、從三位頭中將如元、
〔河海抄桐壺一〕藏人少將事 光孝天皇仁和四年十一月始補之、于時正五位下左近少將源湛、正五位下左近少將藤原敏行也、
執政臣息補例
清愼公、實頼、貞信公一男、母宇多院皇女源順子、延喜十九年正月廿八日、任右近衛權少將、延長四年正月七日、叙正五位下、二月廿五日、補藏人、廿七
謙德公、伊尹、右大臣師輔一男、天暦二年正月卅日、任左近少將、去七日叙從五位上、二月十九日、補藏人、此内清愼公例相叶歟、
〔濫觴抄下〕中納言中將。井藏人頭
圓融元年己巳安和二二月廿六日、從三位藤原兼家、任權中納言、兼藏人頭中將如元、

義懷　賴宗　能信　通房　俊房　忠家　祐家　基長　經實　忠通　賴長　兼房　基實　家
房　忠良　良經

三位中將
源有仁　賴長　基實

三位少將
賴通　忠家　基實、略

宰相中將
藤有實　時平　仲平　定方　恒佐　師輔　敦忠　師尹　伊尹　兼家　爲光　道兼　道綱　道
賴　伊周　隆家　齊信　俊賢　賴通　敎通　師房　師通　公實　保實　宗輔　成通　賴長
公敎　忠雅　經宗　兼長　師長　伊實　實長　實定　基房　定房　信賴　實國　兼實
實房　宗家　忠親　兼房　兼雅　成信　宗盛　實家　實守　實宗　定能　維盛　實家　公
繼　重衡　公房

〔公卿補任稱德〕天平神護二年丙午
參議兼中將始
參議正四位下石上朝臣宅嗣正月八日任、中衞中將如元、

〔河海抄四紅葉賀〕稱德天皇天平神護二年正月八日、石上宅嗣任參議、元中衞中將、宰相中將始也、

〔官職知要中〕遣藏人消息宛所之事
宰相たる人、中將を兼給ひしと　人より宰相中將と被書候とも、自身は宰相とばかり書給
ふ也、是諸家一同に如此、必家の高下にもよらず、前に准じてしるべし、但近比或人說とて承り
ぬ、自身も家によりて宰相中將と被書候といへり、若しからば難たるべき歟、家によりてかゝ
れたる古案證文ありや、未知、猶博覽の人にたづぬべし、

也、故に羽林家と稱せり、

〔故實拾要 十一〕羽林家

右自先祖歷近衛司、自中少將昇進シテ兼武官、劔笏ヲ帶スル家々也、是ヲ羽林家ト云、

○按ズルニ、羽林家ノコトハ、姓名部家格篇ニ詳ナリ、

〔增鏡 十五 村時雨〕おなじ年(○元徳元年)の冬の頃、平野北野兩社に一度に行幸なり、勸修寺(○名家)の殿原、むかしより近衛司などにはならぬ事にてありつれど、内の御めのと吉田大納言定房、過にし頃從一位して、いとめづらしくめでたければ、今は上臈とひとしきにや、稚き子の宗房といふも少將になさる、

〔公武大體略記〕一名家

諸家の中に、先祖より近衛司を經て、少將中將より昇進し、武官を兼、劔笏を帶するをば羽林次將といひて、敍爵の始に侍從に任ず、又文筆を面として儒道を學び、辨官を經て萬事を奉行するを名家と稱じて、敍爵の始に、五位に敍して大夫と號す、

〔職原抄 下〕諸大夫者

六條修理大夫顯季餘流、此號四條、隆房大納言、初任近衛將以來、昇進多如公達之家、

〔職原抄通考 十七〕隆房大納言、(○註略)初任近衛將、(永萬二年六月任少將、蓋系圖所見、自是以前、父隆季卿弟、宗明成親以下任近衛將、蓋此族依斷絶、此書以隆房卿爲初例歟、)

〔二中歷 一 公卿〕中納言中將

藤定國 同兼家 藤道隆 同師實 藤忠實 同忠通 源有仁 藤賴長 藤兼長 同師長 基實 基房 兼實 家實 良輔 良經 源實朝

二位中將

中少將補任

自左近大將遷任右近大將之例

權大納言正二位藤家敎（春宮大夫、五月十五日、兼左近大將、閏六月十六日、遷任右近大將、）

〔公卿補任　後醍醐〕元應二年庚申

止大將敍一品例

大納言正二位藤冬氏（左大將、月日止大將、同日敍從一位、非所存之間、閉門籠居云々、）

〔公卿補任　後圓融〕永和二年丙辰

任大臣之後大將例

內大臣正二位藤兼嗣（正月六日兼左大將、）

〔公卿補任　後小松〕應永二年乙亥

同年任大將并大臣例

權大納言正二位藤公定（正月七日補內敎坊別當、同廿八日兼左大將、三月廿四日任內大臣、）

同年任大將并大臣例、大將轉任日大臣例、

權大納言正二位藤實冬（正月廿八日兼右大將、十二月廿七日轉左大將、同日任內大臣、）

應永九年壬午

凡人上﨟右大將、先任大臣例、

內大臣正二位藤公行（八月廿二日任、右大將如元、九月十七日止大將、）

〔公卿補任　崇光〕應永廿七年庚子

任大將同月任大臣例

權大納言正二位藤公光（閏正月十日兼任左大將、同十三日任內大臣、）

〔管見記〕永享十年十一月十九日、今夜被行小除目、二條大納言（持通）兼任左大將、（超權大納言實顯、權大納言實量、）凡攝家閑凡家上﨟任之例連綿、或又任位次、凡人上首任之、古例兩端也、

〔職元秘抄〕羽林家ハ、中將少將ノ唐名ヲ羽林ト云、故ニ此武官ヲ兼ル家ヲ云、コノ羽林家ノ中ニモ、宰相中將ヲカクル家少シ、大ニ規模ニスルコト也、頭中將カクル家モ少シ、正親町、中山、園、姉小路、今城、油小路等也、

〔光臺一覽三〕羽林家廿七軒は、川鰭、滋野井、河野、姉小路、山本、風早、四條、押小路、山科、油小路、四辻、鷲尾、櫛笥、持明院、園、東園、松木、正親町、中山、清水谷、野宮、高倉、難波、千種（源）庭田、（源）六條（源）飛鳥井、右の家々なり、○中略此廿七軒を羽林家と申は、羽林は中少將の唐名也、諸家之中、宰相中將に任ずる家是計

攝祿臣などの御子たちは申に及ばず、延喜の比より後、凡人の中には、勸修寺の先祖、泉の大將定國、三條の右大臣定方、源氏には、堀川左大臣、俊房公六條右大臣、顯房公平家には、小松内府、重盛公屋嶋内府宗盛公の外は例なく侍りしを、仁治二年の比、大將の闕ありしに、只今さして成べき仁もなかりしにて、拜任は難題なりけるを、始終大臣までは思ひよらず、只一日名をかくべき由申請ければ、なされし時は右大將にて、德大寺太政大臣實基公のおはせしは、左に轉ずべかりしかども、わざと轉せで、只直になされ候へと申ければ、左大將に成ぬ、さて右大將は、出仕はしあはれざりけり、いく程なくて、實有卿、大臣にもならで大將辭退せられにき、大臣を申けれども、始より沙汰事ふりぬとて許されねば、遂にならで止にしに、これは兄弟任ずるのみならず、左右同時に相並たり、是も凡人にとりては、重盛宗盛の外は例なく侍るにや、後に公相公、右大臣にて兵仗給て、公基公、内大臣の左大將、公親公右大將にて、春日の行幸供奉せられたりしこそ、ゆゝしく侍りしか、公相の大將になりし時は、左右ともに闕有しかば、上﨟にて花山院の入道右府定雅公のありしをおき、直に左に成べき由申されければ、花山院は、家も文書も燒拂ひて、出家すべき由申けるに因て、超越の儀なくて、花山院は左に成て、ともにゆゝしき大將にてぞ有し、

〔愚管抄六〕實朝先はこれより先に中納言中將申てなりぬ、さて大將にならんとて、左大臣○藤原道家の大將を兵仗にかへて、九條殿の例なればとて、いそぎあけて左大將になされぬ、やがて大臣にならんと申て、ならんに取ては内大臣は例わろし、重盛宗盛など云も、皆内大臣なりければなど云不思議とも聞えし程に、九條殿の子に良輔左大臣、○中略同年○建保六年の多比、世にもがさと云病起りたりしを、大事にわづらひて、十一月十一日うせ給にけり、○中略かゝる事出きて、左大臣闕ありければ、内大臣實朝、思のごとく右大臣になされにけり、

〔公卿補任伏見〕正應五年壬辰

〔續世繼六花ちる庭のおも〕德大寺〈○實能〉のおとゞの御子は、右大臣公能のおとゞ、〈○中略〉みめも心ばへもいというなる人にぞおはしける、中納言の大將になりて、右大臣までなり給へりき、

〔顯廣王記〕安元三年〈○治承元年〉正月廿四日乙丑、入眼、有任大將、〈左大將□□右大將宗盛〉二月三日癸酉、右大將申慶賀、初節親戚有府一員、前驅藏人五位八人、六位二人、一家殿上人十輩、後從三位中將平知盛也、

〔源平盛衰記一〕清盛捕化鳥幷一族官位昇進附禿童幷王莽事

清盛我身ノ榮花ヲキハムルノミニ非、子孫ノ繁昌ハ龍ノ雲ニ昇ルヨリモ速也、男ハ各誇官職、女子ハ取々ニ幸シケリ、長男重盛、內大臣ノ左大將、二男宗盛、中納言ノ右大將、三男知盛、三位中將、嫡孫維盛、四位少將、家門ノ繁昌子孫ノ榮花、類モナク例モナシ、〈○中略〉天平十二年正月、始テ以參議兵部卿藤原豐成卿中衞大將ヲ置ル、寶龜四年、大納言中務卿藤原魚丸、初テ兼近衞大將、大同二年四月、改近衞府左近府トシ、中衞府ヲ以テ右近府トセシヨリ以來、兄弟左右ニ相並例、僅ニ四箇度也、文德天皇御宇齊衡元年ニ、左ニ忠仁公良房、冬嗣公二男、西三條右大臣良相公、同五男、朱雀院御宇天慶八年ニ、左ニ清愼公實賴、貞信公一男、右ニ九條右大臣師輔公同二男、後朱雀院御宇寬德二年、左ニ大二條關白敎通公、御堂ノ二男、右ニ堀河右大臣賴宗公、同三男、二條院御宇應保元年、左ニ中山關白基房公、法性寺關白二男、右ニ後法性寺關白兼實公、同三男、相並給ヘリキ、是皆攝祿ノ臣ノ公達ナリ、凡人ニトリテ無先例、偏ニ官位ヲ重ンジ賢才ヲ選シ故ナリ、況昔ハ殿上ノ交リヲダニ嫌レシ人ノ子孫ゾカシ、今ハ禁色雜袍ヲユリ、顯職溫官ヲ經テ、父子丞相ノ位ニ至リ、兄弟將相ノ榮ヲ並ベタリ、末代トイヘ共、不思議ナリシ事共ナリ、

〔五代帝王物語後深草〕大宮院〈○後嵯峨后藤原實氏女姞子〉の御せうとたち、公相公基は、左右の大將に並て、珍らしき例にて侍しに、父の前相國〈○實氏公〉院の最勝講五卷の日、左右の大將共に具して參せられたりしかば、一家の公卿、座を立て禮節ありき、ゆゝしとも申もをろか也、近衞大將兄弟任する事、帝王

〔公卿補任一條〕永延三年己丑〇永祚元年

任大臣後兼大將例

內大臣正二位藤道隆二月廿三日任、七月十三日、兼左近衞大將、

長德二年丙申

中納言中將兼任大將例

中納言正三位藤道綱四月廿四日任、十二月廿九日兼左近大將、元右近中將、

〔中右記〕元永二年二月六日壬午、今日依可有任大將〇藤原忠道事、早旦先著直衣參東三條殿、〇中略大臣後任左右大將人々、〇註略右大臣源光任右大將、內大臣藤道隆任左大將、內大臣藤師實任左大將、內大臣藤信長任右大將、左大臣源俊房任左大將、內大臣藤忠通任左大將、已上六人、此外、多大納言口間被成大將也、

〔續世繼六花ちる庭のおも〕春宮大夫〇藤原公實の六郞にやおはすらん、左大臣實能のおとゞ、〇中略人がらよくおはすればにや、三位中將へ給へるも、ことのほかの御おぼえなり、このごろこそ、おほくきこえたまへ、關白つぎ給べき人などはなちては、さることも侍らぬに、いとめづらしく侍りき、大納言の大將になり給へりしも、ちかくたゞびとのなり給こともなきに、いとめづらかになん侍りし、左大臣までなり給へる、閑院のおとゞ〇藤原公季の後は、四代なり絕給へるに、この殿の大將になりはじめ給て、兄の太政のおとゞ、この左のおとゞ、右大臣內大臣になりはじめ給て、君達もおの〳〵なり給へり、兄の太政のおとゞ、あせちの大納言とておはせし、大將おとうとになられてこもり給へりしに、一の大納言忠敎、二大納言實行、三にて雅定、第四實能の大納言おはせし、上﨟三人をおきて大將になり給しかば、實行雅定二人は、いりこもりておはせしを、中院の源大納言雅定、左大將に成給てのちこそ、實行雅定、右大臣、內大臣になり給しか、

〔公卿補任後白河〕久壽三年丙子〇保元元年

中納言正二位藤公能右衞門督、八月廿九日蒙兼大將宣旨、九月八日任右大將、

基

〔公卿補任 宇多〕寛平五年癸丑

中納言大將例

中納言從三位藤時平 二月十六日任、同廿二日兼右近大將、

〔公卿補任 醍醐〕延喜九年己巳

近衞大將撿非違使別當兼帶例

權中納言從三位藤忠平 九月廿七日兼右近大將、大夫如元、十月廿二日使別當、如元、

〔公卿補任 圓融〕安和三年庚午○天祿元年

中納言人任大將例

中納言正三位藤兼家 八月五日兼右大將、

貞元二年丁丑

權中納言從三位藤濟時 十月十一日兼右大將、

〔愚管抄 三〕貞元二年に、關白○藤原兼通やまひおもりて、すでにと聞えけるに、とりつくろひて法興院大入道どの、○藤原兼家大納言大將にて內裏へ參られけるを、人の此病のとぶらひに是はおはするかといひければ、さもやと思はれけるほどに、はやう參內といひけるをきゝて、病のむしろよりにはかに內へまいらんとて參られけり、○中略まいりて御前に候て、最後に除目おこなひさふらはんと思ひ給ひて參りてさふらふなり、やゝ人まいれ、ちかき公卿もよほせ、除目のあらんずるぞと有ければ、あやしみ思ひて人々まいれりけるに、少々事ども申て、右大將○兼家はきくわいの者に候、召れ候べき也、大將所望の人やさぶらふ、はゞからず申せとたかくいはれけるに、誰かはさうなく申さん、おそれて在けるに、小一條大臣師尹は、九條の御弟也、其人の子に、なりときとて、中納言なる人在けり、此人思ひけるやう、此時ならでは、いつか我大將をゆるされん、申てんと思ひて、かさねていかに大將所望の人のさぶらはぬか、たゞ申せといはれけるたび、なりときと高く名乘出したりければ、めでたしめでたし、とく〳〵とて、右大將に、なりときと書てけり、

右大臣正三位藤內麿〈近衛大將、四月廿二日詔改二近衛一爲二左近衛大將一〉

中納言從三位坂上田村麿〈大將、四月廿二日改二中衛大將一爲二右近衛大將一〉

〔公卿補任　淳和〕天長十年〈癸巳〉

非參議從三位橘氏公〈正月七日敍、三月廿四日兼右大將、別當如元、六月八日任二參議一〉

〔河海抄　五　葵〕參議兼大將例

藤原房前〈右大臣不比等男〉中衛大將　同豐成〈左大臣武智丸男〉中衛大將　吉備眞吉備〈右衛士府生下道國勝男〉中衛大將　藤原是公〈參議乙丸男〉中衛大將　大中臣諸魚〈右大臣清丸男〉近衛大將　藤原雄友〈右大臣是公男〉中衛大將　同內麿　近衛大將　同乙叡〈右大臣繼繩男〉中衛大將　同冬嗣〈右大臣內丸男〉左近大將　文屋綿麿〈正四位下大原男〉左近大將　藤原吉野〈繼綱男〉左近大將　橘氏公〈贈太政大臣清友男〉右近大將　藤原常行〈右大臣良相男〉右近大將　同伊尹〈右大臣師輔男〉左近大將

〔二中歷　公卿一〕大將〈大同以後〉〈說云、左近者元近衛府、天平神護元年置之、大同二年爲二左近一、右近者中衛、大同二年爲二右近一〉

藤內麿〈平城、右大臣〉乙叡　坂上田村〈丸男、平城中納言左、大同元年〉　巨勢野足〈弘仁二、六、參右〉　藤冬嗣〈弘仁十二、正參左〉　文屋綿麿〈弘仁十三、中參右〉　長峯安世〈弘仁十四、中右〉　清原夏野〈仁明　天長三、八〉　藤吉野〈天長九、正、參右〉　同氏公〈貞觀十七、非參右〉　源常〈承和四、中左〉　藤良房〈齊衡元、中右左〉　同良相〈清和　齊衡元、八、大納言右左〉　源定〈天安二、中左〉　藤氏宗〈天安元、四、中左〉　藤基經〈貞觀十五、中左〉　同常行〈參右〉　同良世〈寛平六、中左〉　源多〈元慶元、大左〉　藤能有〈寛平元、中右〉　藤時平〈延喜　寛平元、中右左〉　菅道眞〈寛平六、中右〉　藤定國〈昌泰二、中右〉　源光〈昌泰四〉　藤惟範〈延喜六、八、右中〉　藤忠平〈右中〉　同道明〈右中〉　藤定方〈朱雀　左中〉　藤仲平〈左大〉　藤保忠〈大右〉　同恒佐〈右大〉　藤實賴〈村上　左中〉　同師輔〈右大〉　同顯忠〈左大、右〉　同師尹〈圓融　左中〉　源高明〈右〉　藤伊尹〈左大〉　同賴忠〈左中〉　藤兼家〈右中〉　同濟時〈左中〉　同朝光〈右、一條　左大〉　同道隆〈內大〉　同道兼〈左大〉　同道長〈右大〉　同顯光〈右大〉　同公季〈左大〉　同道綱〈右中〉　同實資〈中納言右〉　同賴通〈大、後一條〉　同教通〈左中〉　同通房〈後朱　右大〉　同賴宗〈右大〉　同師實〈左內〉　源師房〈大、左大〉　藤信長〈右、大院〉　同師通〈後二條　右內、八參雲左、朝承抄曆、中〉　源顯房〈右大〉　源雅實〈堀川　左大〉　同俊房〈右、左左〉　藤忠實〈大、左大〉　同家忠〈左大〉　同忠通〈右〉　源有仁〈左內、大〉　藤賴長〈右內、左大〉　平雅定〈右、大臣左右〉　實能〈右左〉　兼長〈左中〉　公教〈內大〉　公能〈右左、大〉　基房　兼實　基通　藤忠雅　同經宗　藤師長　平重盛　同宗盛　藤實定〈治承二正二丁酉、左大將、中任賀〉　良通

實房　兼雅　良經〈後京極〉　賴朝〈鎌倉〉　賴實〈大炊御門〉　家實　道家　公繼　公房　通光　實朝　家道　公經

實氏　家嗣　良平　教實　兼經　良實　兼平　實經　實有　忠家　通忠　定雅　公相　公

〔故實拾要十〕大將兼官

凡大將ハ、將軍家攝家淸華家ノ外ハ不ㇾ兼ㇾ之也、自餘ノ諸家中、大將ヲ兼ルコト更ニナシ、又大臣ニテ兼二大將一人不ㇾ謂二大將一大臣ヲ云也、譬バ左大臣タル人ノ兼二大將一トキハ、左大臣殿被ㇾ仰ナド〻云也、大臣ハ都テ如ㇾ此也、大納言ニテ兼二大將一トキハ、不ㇾ謂二大納言一左大將殿被ㇾ仰ナド〻云也、又將相ト云ハ、大臣ノ大將ヲ云ナリ、大臣、大納言、トモニ大將ヲ兼ルトキハ隨身ヲ召具ス、員數、大臣ノ大將ハ隨身八人召具ス也、大納言ハ隨身六人也、

〔職原秘抄〕左右ノ大將ハ淸花ニテハ規模ノ官ニテ、武官ハミナ此下ニツク、攝家ノ攝關ヲ規模トスルガ如シ、

〔一話一言四十六〕松岡淸介答二人之問一書

一、右大將樣、〇德川家慶、文政五年任二內大臣一、內大臣に任せられ候へば、左大將に被ㇾ任候事に御座候哉、左大將は、右大將より重く御座候へば、內大臣に被ㇾ任候上は、左大將に被ㇾ轉候事も御座有べく候へ共、御當家〇德川にて、左大將の御事御座候、東照宮樣、天正十三年、右大將に任せられ、同十五年左大將に轉せられ、十六年、左大將を辭したまふ、いづれも御任槐前の事にて、御例とも申がたし、其後御代々御受職の後、右大臣御轉任の後も、右大將にてあらせられ候へば、此度も右大將にて、左大將にはならせられまじく候、去かしながら攝家は大納言の時右大將を兼、任槐の後、多は左大將に被ㇾ轉候へば、押極候て、右大將にてあらせらるべくとも難ㇾ申候、

〔續日本紀二十六稱德〕天平神護元年二月己巳、以二從三位藤原朝臣藏下麻呂一爲二近衞大將一、

○按ズルニ、天平神護元年二月三日、授刀衞ヲ改メテ近衞府ト爲ス、近衞大將コレヲ以テ始トス、

〔公卿補任平城〕大同二年丁亥

從二位行權大納言藤原朝臣公名
右人今年八月十五日兼任大將畢、
移送如件、移到任用、故移、
永享五年十二月十五日　正六位上行少錄□□
正六位上行少□□□

卿從三位行藤原朝臣親信
大輔從四位下行卜部宿禰兼勝
少輔從五位下行源朝臣持常
權少輔正五位下行惟宗朝臣相豐

大將補任

〔故實拾要十二〕左右大將　相當從三位　唐名幕下、羽林大將軍、幕府、稱大樹、
是武官ノ極官也、本式ハ左近衛大將、右近衛大將ト云也、常ニ云トキハ、左大將、右大將ト云也、此官ニ任ズルハ、攝家清華將軍家ノ外、任ズルコトナシ、堂上諸家中モ、大臣ニハ任ズレドモ、大將ニ任ズルコト曾テ以不能コト也、大將相當ハ大臣ヨリ劣リタレドモ、萬事ノ作法、大臣ニ替ルコトナシ、弓箭兵仗ヲ帶シ、中將少將將監等ヲ引具シテ、奉親衛天子官也、

〔花鳥餘情六〕大將は、參議より丞相までを兼帶する職也、

〔有職問答三〕一左右近衛府、內大將の事、大臣、中納言、參議の兼する職也、

〔有職問答四〕一大將に被任候事、參議以上の兼職も候哉、其外にも兼任候哉、兩局務なども參議を勿論候經歷候哉、不思寄事候、攝家清花ノ外不任候、雖執柄兼職候、

〔有職問答五〕一太政大臣事太政大臣兼候事候ハズ候
此官に、大將をかけて被任事も候哉、

文返給宮、親衡指笏取宮　　於始取返賜宮於置口取之退、親衡拔笏歸昇、（本儀可給祿、然而任近例、內々以代物下行了、）予召家司親衡仰可催具之由、次於同妻戶家司覽日時勘文、二通（入筥、一通拜賀、一通著陣、宗家強拜賀之日不著陣、〇中略）予披見返給之、親衡引懸紙下之家司、（後日返上、）次有重朝臣參簾中、有身固事、此間口及泥黑、仍隨身等取松明、列居東庭、〇註略予垂裾出妻戶、（侍從基繁褰簾、為陣家事┃密儀也）出妻戶之時、番長一人追前、著沓侍從口役之、近衛五座秦久通傳之、（侍所司隱岐左衛門尉口重、服不參、仍隨身五座傳之、）降立地上、隨身相互追前、前行、（左方、）前駈取松明、前行、（右方、）近衛一座下毛野武次取裾懸弓相從、予步出門、參室町殿、此間依累日雨┃深泥步儀難叶之間、密々乘八葉車、參室町殿、僮僕等總門邊可相待之由仰含了、〇中略於總門前下車、沓役人如先、（久通持之、）隨身皆悉追前、先行前駈、右方前行如先、武次懸裾於弓相從、入西門、進立中門下、（先之殿上人列立、事宿前、）拜舞、（此間隨身消松明、）初第二度幷後兩度拜、都合三度、番長發前聲、拜了直退出、次參內、〇中略進立無名門前、番長跪予西方、（東面、）近衛等列予後方、次右中將基晴朝臣出來無名門、（撤垂裾、歸笏、）予奏慶之由、朝臣歸入、少時歸出、（帶持笏、）仰聞食之由、退入、次二拜、〇中略

抑以愚昧之質居顯職、如形拜賀遂其節、所自愛也、併是祖神加護、累家之餘慶也、彌可敬可貴、今度扈從公卿、有存旨、一向不及相觸、遺恨無極、可相伴之仁、大略又同官也、

擇申　御拜賀日時

今月十五日甲子　時戌

永享五年十二月十五日散位安倍朝臣有重

擇申　御著陣日時

今月十五日甲子　時戌

永享五年十二月十五日散位安倍朝臣□□

兵部省移　右近衛府

中納言、自室町殿被申之處、任理運可被拜任予之由有勅答、仍不可有子細之由被申云々、併是祖神加護、烈祖冥助也、抑悅無極了、 十五日、拂曉、任槐事、今日宣下云々、仍爲畏申參室町殿、衣冠上括、此間著用綾指貫、著之、以赤松播磨守申入事之子細了、則令對面給、祝著無極者也、仍參仙洞、以四辻羽林相公申入之、蒙慇懃叡旨、恐悅之至、餘身者也、次參禁裏、未御寢之程云々、申置勾當內侍令退出了、 十六日、昨日宣旨、只今內々相副狀進之、緩急之至也、尤可持參者哉、雖然遼遠之間、次持參之儀、召置之由仰遣了、大外記兩度狀無、依續賀也、

權大納言藤原朝臣公名

正二位行權大納言藤原朝臣俊宗宣、奉勅件人、宜兼任右近衞大將者、

永享五年八月十五日大外記中原朝臣師世奉

此口宣案內々乞請于頭辨畢

上卿藤大納言

永享五年八月十五日　宣旨

權大納言藤原朝臣公名

宜兼任右近衞大將

藏人頭右大辨藤原忠長奉

十二月十五日甲子、任大將已後、□處依舊院御事等、于今令遲□神今食延引、有子細不能記、今日被行□予爲卜合、仍今日奏慶者也、未剋出向陣頭、口著裝束、縫腋綾表袴、下襲於兒羅加須螺鈿劒、有文巡方帶、紫淡平緒、依爲神事奉行之日、著吉服申拜賀、尤自此口口可出立之處、每事依不得計略無其儀、零落作法、不便不便、先之家司親衞等著裝束云々、隨身等遲參之間、度々加譴責了、此間兵部省持參移文、予先居東面、□家司親衞、持笏垂裾降庭中、從口口並插笏取莒昇簀子、持參予披覽移文、此間親衞取笏候留

位有敍、綪瓶子淸職、次居菓子、（椿餅、梨、枝柿、橘、手長如初、）次昇立祿案一脚於西透廊馬道間、賜府生已下祿、（家司前周防守廣親、知家事、紀俊光唱見參、案主等分給云々、○中略）次大殿令出自東方給、（○中略）大宮大夫勸盃大殿、瓶子侍從光家、綪瓶子爲實、此間賜將監將曹祿、（○中略）次次將祿、（○中略）次上達部祿、（○下略）

〔吾妻鏡十〕文治六年（○建久元年）十一月廿二日壬申、大納言家（○源賴朝）可被任大將之由院宣（經房奉）到來、

廿四日甲戌、入夜被行除目、藏人右少辨家實宣下、

右近衞大將源賴朝

上卿別當、（通親卿）執筆右宰相中將、（公時卿）幕下之外、無任人云云、　廿六日丙子、右大將家番長以下、自院被定仰之、　廿八日戊寅、依可有大將御拜賀隨兵等事、今日有其定、　十二月一日辛巳、右大將家御拜賀也、主稅頭在宣朝臣、獻日時勘文、是依院宣也、申一剋御參仙洞、

〔愚管抄六〕文治は六年と云四月十一日に改元にて建久に成にける、元年十一月七日、賴朝卿は京へ上りにけり、（○中略）やがて右大將になされにけり、十一月九日、先任權大納言參議中納言をもへず、直に大納言に任ずる也、同廿四日に任右大將、同日拜賀、十二月三日、兩官辭退してき、もとよりふし〳〵に正二位までの位には賜りにけり、大臣も何もにて有けれど、我心にいみじくはからひてけり、いかにも〳〵末代の將軍に有がたし、ぬけたる器量の人なり、大將の悅申にも、いみじくめづらしき式つくりて、前駈十人は、みな院の北面の者給はりて、隨身かねよりが太郞かねひら給りて、公卿には、能保、妹の夫にてやがて次第になしあげたれば、中納言にて、それ一人具して、やがてその妹の腹の女に、聟にとりたりし公經中將、又從弟を子にしたる、もと家の中納言が子の保家少將、是をぞ具したりける、我車のしりに、七騎の武士を鎧きせて兜はきず、たゞ七人具したりき、その名どもはたしかにも覺えねば略しぬ、見る人こはゆゝしき見物かなと申けり、

〔管見記〕永享五年八月十四日、早旦四辻宰相中將送狀云、明日右大將事、可被宣下之由、昨夕以日野

中將重通朝臣不列拜、故實也、次將軍從西弘庇經南簀子暫御座上達部座上頭、次予參進將軍御南簀子奉仰、降自南透渡殿西階、從庇傳、次將可著座之由、向忠基朝臣揖也、次予經泉東昇小板敷、次忠基朝臣已下昇自透渡殿西階、經南庇西戶著奧座、宰相中將重通朝臣追加著、故實也、宰相中將二人也、仍敷茵二枚、而實衡朝臣不參、次將未著座以前、撤件茵一枚、敷加圓座了、次將監多忠方、五位中原貞清、府生道守重元、下毛乃助忠、番長正友、秦正清、於西廊舞求子、依雨中也不出立舞、番長著下襲先例也、和琴將曹遠兼、件琴自殿下給之、笛清原成貞、篳篥豐嶋行永、此間上達部、被候殿上人座、次將軍起座、經南簀子西行、於西第一間簀子、差笏令取盃給、太皇太后宮大進有成持參盃、藏人右少辨資信取瓶子、將軍自簀子東進、經上達部座上入奧座、令勸宰相中將□□給、左馬助長時持參續瓶子、此間中宮少進顯憲取將軍菅圓座、出自東方、敷次將座上頭退入、前甲斐守雅職勸將監、諸大夫五位取瓶子、依无四位被用五位也、散位資兼勸府生、瓶子同前將軍令著圓座給、散位爲基重範、舁將軍御前机立之、赤木机也、居物同公卿、不居飯、无實盛、次民部卿、忠教太皇太后宮大夫、師頼源大納言、顯雅右衞門督、定能藤中納言、伊通中宮權大夫、宗能右兵衞督、顯頼大藏卿、經忠左宰相中將、成通左大辨、師俊新左宰相中將、公教著座、次殿上人著座、此間堂上供燈、上達部座上下各一燈、殿上人床下一燈、四透渡殿一燈、將監座前一燈、南庭立明左近官人也、左大將之時召右近、右大將之時召左近云々、池邊舉篝、次二獻、民部卿勸左少辨俊雅取瓶子、盛定取續瓶子、雅清勸將監□□勸府生、次三獻、大宮大夫勸之、瓶子侍從光家、續瓶子清職、家時勸將監、行佐勸府生、三獻以後、將監已下勸盃先例也、三獻以前用樣器盃、酒部召獻件盃之由、度々記無所見、仍自饗所令就之、能可相尋、次居次將汁物、汁膾加鮒、燒物擁劍、府生爲手長、次供將軍飯汁物等、有成爲陪膳、供主人飯汁物之條、先例不詳、而元永二年二月、關白殿大將日、供御飯汁物等、今度有殿下仰、隨件例也、次居納言已下汁物、雅職爲大納言手長、忠兼爲中納言以下手長、散位宗賢爲殿上人手長、次四獻、源大納言勸、瓶子中務權少輔師能、續瓶子行佐、今度以後用春日器盃、又公卿次將相互擬最末公卿盃轉殿上人、次羞汁雜羹加烏賊生鮑、次第并手長徒近如初、次五獻、右衞門督勸之、瓶子散

將給、御裝束儀、(東三條殿)寢殿南庇六个間放出之、敷滿長筵、(有差筵、鑰子等、)南面簀子、弘庇、西透渡殿等敷滿筵、南庇西第六間、子午鴨柄下母屋南面五个間、西妻切二个間、西庇南第二間、卯酉鴨柄、幷九个間垂御簾、其内懸壁代、件壁代柱外付御簾懸之、鴨柄下懸御几帳帷、如例添其御簾立亘四尺御屛風十帖、南西面面庇御簾卷上之、自南庇西第四間至于第二間西柱下敷高麗端帖、其上敷同緣地鋪、其上施東京錦茵二枚、爲宰相中將座、(第一茵大納言、第二與對座、)其西絶席三許尺、敷高麗緣圓座六枚、爲中將座、(已上東上南面、弁參議、中將上薦座與南第四人對座、)其南自西第五間西邊西行、(自第四間東柱進出第五間茵一枚許也、)至于同第一間(座末有路、)敷高麗緣圓座、爲宰相座、西庇二行對座、敷紫端疊四枚、爲殿上人座、(以南爲上、)西透廊泉南母屋三个間、敷長筵、敷緣端帖三枚、爲將監將曹座、(北上東面、)西廐人所廊馬道間以南二个間、二行對座、敷紫端帖、爲諸大夫座、次居饗膳、(中〇略)今朝召仰本府、令進官人已下見參文、爲祿法召仰也、午剋大納言殿令參内給、從西面出御、前驅八人、(太皇大后宮大進有成、中宮少進顯憲、前肥前守爲實、散位清職、左馬助長時、參川權守成定、勾當高階仲行、源盛賢等也、)殿上人扈從、(皇后宮亮信雅朝臣、右京權大夫顯信朝臣、右近少將公能朝臣、忠頼朝臣、左少將俊雅、少納言雅國、若狹守公信等也、)此間左府參東三條給、(宿)除目執筆、内府除目了、參入東三條、關白殿於弓場令奏御慶賀給、次新將軍於同所令奏慶賀給、御隨身始以警蹕、本府差進御隨身等、(有進文、)

將監中原貞清　將曹清原遠衆　府生道守重元　番長下毛野厚則　近衛秦公近　中臣行衆

秦重正　中臣近助　藤井武清

府生已上、束帶壺胡籙、　番長已下、褐衣白狩袴、　移御馬四匹同令儲、(不見陣頭歟、)

再拜了之間、番長厚則、始發前者、府官人已下、於弓場邊發歌笛聲、次將軍令奏官人已下可給饗祿之由給、勅了、次參中宮御方令申御慶賀給、令退出東三條給、府中少將乘車扈從、將監已下騎馬在御車後、御隨身番長以上四人、乘移馬候御車前、前駈八人、如初入御、自西門入中門、昇自祿所廊西小橋、經同南簀子、暫御座西庇殿上人座、次中將忠基朝臣、經定朝臣、少將公能朝臣、忠頼朝臣、經宗朝臣等、率府生已上、於西透廊有拜禮、依進出庭中、康平例也、次將一列、將監已下一列、已上各東面北上也、宰相

上、先近衞以上六位官人、於庭前歌舞、訖著庭中座、（將曹以下近衞以上著此座、主將監者其座在簀子敷、）次公卿及中少將等座立机、相次立机食床於庭中、給六位以下肴物盃酒無算之後、被物匹絹等各有差、（隨便有管絃事、）但新任大將、若在里亭者、引可到其所、（賭弓勝方饗准是可知、此日以親王為垣下、蓋故實耳、）

〔北山抄〕八大將要抄 初任事

饗飲之儀、如相撲還饗、但令奏慶賀之次令奏畢、官人等給御酒、蒙可許退去、（上卿奉之仰外記、）

〔北山抄〕八大將要抄 近代大將申慶賀後、以吉日參

〔侍中群要〕九 大將慶賀

近衞大將新任之時、令奏慶賀之後、又召藏人令奏聊可給酒肴於士卒之狀、奏聞之後、藏人召撿非違使下宣旨云々、（刑部書事也、）

〔中右記〕元永二年二月六日壬午、今日依可有任大將事、早旦先著直衣參東三條殿、（○中略）任大將事ハ、兼日奉仰之時、撰日次、儲饗饌於家、參內、任大將後引次將以下、還家給饗祿也、春秋除目之次晴被成大將之時ハ不儲饗祿、後日申慶許也、而長和四年十月廿八日、御堂（○藤原道長）左大臣間、准攝政秋除目初於直廬被行之時、內大臣公季辭申大將、其替宇治殿（○道長子賴通）大納言間、令成左大將給也、秋除目之次雖令成給、儲饗祿於家、給次將以下之由見御堂御記、旨今日殿下所被仰也、

〔知信朝臣記〕長承四年（○保延元年）二月二日、大納言殿（○藤原賴長）可令蒙任大將宣旨給、仍大殿渡御東三條殿、午剋許、大納言殿令參給、晚頭大納言殿令參內給、檳榔御車、前駈六人、（前甲斐守雅職）右京權大夫顯親、少納言雅國等扈從、御共□□參著右仗座、承宣旨、（可任大將、可勘申日時之由、先例也、）次令退出東三條給、關白殿出御對南面御座、內府已下伺候、大納言殿同令候于座給、次召予、（束帶）予參上被仰陰陽師可召之由、歸出藏人所召之、陰陽頭家榮朝臣、（衣冠）參候于南簀子、予參上候于弘廂、被尋仰任大將日次、予仰家榮、家榮申云、八日壬子、予入申上之、依先例也、此日時勘文付職事被奏件日、　八日壬子、大納言殿令任右大

任大將式

は、又五家門の息の外は、必ず任ㇾ之難きよしなり、

左右近衞少將（唐名羽林次將無二定數一、）

羽林家之五位の少將、四品に敍するには、少將を辭す例なり、敍留は殊なる恩也と有、敍留とは位階一級を進む時は、其官は辭すべき事也、留置てその官におるは殊なる御恩なりと云々、又四品之人、少將に任ずるは常の事也、從三位の少將は、攝家は常也、清華には間々有ㇾ之、大臣家は邂逅の事也、

左右近衞將監　地下五位之樂人御隨身

左右近衞將曹　地下六位之樂人御隨身

左右近衞府生　左右近衞番長　地下六位七位樂人十九家御隨身等任ㇾ之、

〔西宮記 臨時 二〕左右大將事（遷任事也、自餘准ㇾ是可ㇾ知、）

上卿奉ㇾ勅、下ㇾ給宣旨於兵部丞及外記、

〔鹽尻 八十 一〕武業記

後世左右の近衞大將を置れてより、之を武官の長とし、文官の大臣に比す、其倚賴他に異なるもの歟、大臣には任ずれども、大將に任ずる事難きを以て、其重職たる事を知るべし、幕府、幕下、大樹と申も〔大將の異稱にして、天下兵馬の權之に歸せり、されば共、名帳位記等は兵部省の知る處なり、

〔西宮記 臨時 十一〕一左右大將事

初任事、（以ㇾ右大將ㇾ轉ㇾ左大將ㇾ之時、或儲ㇾ饗或不ㇾ儲云々、越ㇾ上﨟ㇾ任者進ㇾ辭表ㇾ、次第任不ㇾ然、）除目以前、兼日奉ㇾ勅語ㇾ用ㇾ意饗、除目大臣以下著ㇾ議所座、大將暫留ㇾ於射場殿、令ㇾ奏ㇾ慶拜舞畢、（此間可ㇾ令ㇾ奏ㇾ饗事ㇾ歟、）渡ㇾ南階前ㇾ退出之間、近衞等候ㇾ庭間ㇾ發ㇾ物聲ㇾ、撫ㇾ箏弦歌、于ㇾ時率ㇾ公卿及次將以下ㇾ、出ㇾ從ㇾ敷政門ㇾ向ㇾ里亭ㇾ、少將以上、垣下公卿各著座、（公卿著ㇾ外座ㇾ、次將在ㇾ內座ㇾ、大將上﨟有ㇾ親王大將ㇾ、著ㇾ中將）

濟時　伊周

式部大輔兼任少將例

伊望

敍四品後更任少將例

公通　爲通

文章博士兼任少將例

菅根

〔光臺一覽 二〕近衛府と云は、左右有、強て左右に高下不有也、

左近衛大將一人（唐名親衛、又羽林大將軍共、）

武官の中、極官也、五攝家、大納言の時、左大將を兼て內大臣の闕を待也、大納言に大將を兼ざれば大臣を經る事不叶、

右近衛大將一人、攝家は左大將而已、清華ば大納言の上は、右大將を兼て內大臣の闕を待、其外諸家にても、子細有之、大臣に任ずる人は、大納言にて是非大將を兼ざれば、大臣に任ずる事不叶也、左大將は、攝家いつも兼給ふて、清華に不讓して、やゝもすればまた右大將をも攝家の中に兼らるゝ事有、大納言にて大將を兼、大臣に任ずる時は、大將を辭する事常なれども、內大臣にて大將を兼るを規模と有て、五攝家は多く內大臣に任じて後、五六年程は大將を被兼事也、清華は不叶也、

左右近衛中將（唐名羽林中郎將、無定數、）

當代此官に任ずる人、家を極て羽林家と云、其餘流皆任之、四品より任ずる事也、從三位の中將は、大臣の子か孫にて非ざれば任ずる事不叶、大臣と指ていへば、（五攝家、清華、大臣家も有、）二位五位の中將

右近衞府　大將中將少將以下左におなじ、仍是をしるさず、

〔任官勸例〕參議兼大將例

巨勢野足　藤冬嗣公　文屋綿麿　藤吉野卿　橘氏公卿　源常行卿　後二條殿

近衞大將、大業人任例、

菅贈大相國(菅原道眞)

散三位任大將例

氏公卿

大將兄弟相並例

淸愼公與九條右丞相　大二條殿與右大臣賴宗　重盛與宗盛公　公相與公基公

大辨兼近衞中將例

舒　氏宗　能有　兼明　道綱

非少將任中將例

能季　實季　雅俊

近衞中將爲五位例

始自能實

三位少將例

宇治殿　忠家　六條殿　洞院殿　藤忠嗣(前攝政忠家二男)

自將監轉任少將例

有實

辨官兼任少將例

凡卑賤、將曹、樂人舞人近衛舍人等爲府生者、幷大將請府奏等任之、有自醫師任例、(三島貞祥)

〔職原抄　下〕左右近衛府

大將　非譜第之華族者、更不任之、多是大納言中、譜第上臈任之、於執柄息者、超次第所任也、又多被任左也、至大臣帶之爲規模、又中納言任之、於凡人者、彌爲眉目、參議時、任之例、後二條關白師通公也、非參議人任例、氏宗公也、近代不可有此比量者歟、又任大將人、其職掌大略同大臣、只守位次著座許也、其外内外作法、不混餘人者也、　中將(權中將○中略)　華族四位任之、執柄息、若一世二世源氏、中納言時兼之、凡人兼之實朝公是也、非常之極也、淸華之人、參議時兼之、中絶家兼帶、爲無余之儀也、二位三位中將非大臣子若孫者不任之、至二位中將者、執柄息外希例也、五位時任之、執柄息外不可然云々、英雄大臣息任之、近代事也、非大臣子孫任之、隆房卿等是也、其外强雖非英雄重代、拜任家有之、　少將(權少將○中略)　五位殿上人中、爲譜第公達者任之、敍四位時去其職、但敍留者、是殊恩也、近代每人敍留、又中有才名人事也、近代殊執之、少納言兼任、又希例也、　將監　六位諸大夫任之、五位時敍留、隨分執之、舞人樂人等任之、卽又敍留定事也、然而諸大夫者執之、是各守故實故也、六位侍任之、或執之、或不執之、凡者不打任事也、於敍留者更無其例、　將曹　舞人樂人近衛舍人等任之

〔百寮訓要抄〕左近衛府

大將(羽林大將軍、常云下、)　府のかみと申、近衛の大將軍なり、執柄三家の人、殊執する職也、大臣などよりも、近衞の大將を凡人の人々は先途にする也、大納言中納言兼官也、中納言大將は稀也、弓箭を帶する武官也、　中將(○中略)　公達の殿上人四位五位是になる、名家儒家などは是にならず、是も禁中警固の職也、弓箭兵仗を帶すべし、　少將(羽林次將)　四位五位是に任ず中將におなじ、　將監(親衞校尉)　五位六位是に任ず、　將曹(親衞錄事)　隨身等是に任ず、他人はいたく任せず、

補任

僧綱申慶賀事

殿上ニ近衛司不候ハ、地下將藏人ヲシテ傳奏セシムベシ云々、近代近衛將不候之時、藏人奏之、

〔侍中群要九〕上表事

奏覽之後、藏人奉仰給上卿、○註略上卿令內記作勅答了奏覽、先草、次清書、藏人依仰、召近衛次將給之、入本筥留置筥遣彼家之、若無勅答之時、藏人依仰、召近衛司返遣之、

〔禁秘御抄下〕表

大臣辭表有勅答、第一表以近衛表返給、二度以下不加華足、

〔官職秘抄下〕左右近衛府令外官

大將　大臣大納言撰其人任之、但攝政關白家嫡、雖中納言參議任之、多左、非執柄子息中納言兼任例、氏公、常行、三位任例、氏公、大業人任例、菅贈太政大臣、依父讓任例、雅實、兄弟相並例、清愼公（藤原實賴）九條右大臣（藤原師輔）二條前太政大臣（藤原教通）、賴宗、入道前太政大臣（藤原基房）前關白（藤原兼實）、

中將有權官　四位少將轉之、執柄子息、雖五位任之、至于中納言兼任之例、始自良相公、參議兼帶、能撰人、至于二位三位中將者、非執柄子息、一世源氏者、不敍留之、而實能公始爲三位中將、自爾以降多此例、參議後任例、臣綱、能俊、宗家、大辨兼任例、能有、非少將人任例、能季、實季、雅俊、五位少將任例始自能實、

少將有權官　侍從諸衛佐遷任之、又能撰人、雖有例諸大夫不任之、三位例、宇治前太政大臣、六條攝政、自廷尉佐任例、豐仲、滋實、伊望、仲宣、小野好古、自將監轉任例、有實、辨官兼任例、濟時、伊周、式部大輔兼任例、伊望、文章博士兼任例、菅根、敍四位後、更任例、公通、爲通、○中略祖孫爲一府大中少將例、康平五、右大將賴宗、少將師兼、右大將師房、少將雅實、父子爲一府大少將例、寬治二、右大將顯房、少將顯雅、兄弟左右大將相並例、嘉祥二、忠仁公、良相公、兄弟爲一府大中將例、康和五、右大將雅實、少將顯雅、兄弟爲一府中將例、永保二、家忠、經實、同三、經實、能實、兄弟爲一府少將例、寬治元、國信、顯雅、承德二、顯雅、家定、

將監　良家子任之、無官者不任之、但大臣子孫、并大將請必不然、或云、大將請、猶可嫌無官、又自二分不任之、但有如舞人樂人近衛舍人、自將曹轉任之例、又成功輩任之、或本府奏、又有依公卿給任例、源雅通、舊例一府四人也、近代及十餘人、又爲

弓箭候陣外、

解陣、大將召左將監名、稱唯、置笠西面立庭中、召右如左儀、大將仰云、陣解、將監等稱唯、左召大殿昇二音、稱唯、仰云、下右如前、將監等立本列、率近衞出、次將出、無大將者、他上﨟之應、在孫庇南一間、衞府帶弓箭無上﨟者、內侍仰左中將解陣、昌泰三年仲平、延木十三年定方、雷鳴日、近衞將監在家中參內、有障者早可歸本陣、〇中略

延喜四年四月七日、此日自朝迅雷甚雨、左大臣兼大將、時平右大將定國參上、列陣如例、又召左右兵衞督佐等待之、兵衞上殿著、差左少將元方奉入仁和寺、〇宇多帝御所及未終頗止、左右解陣、取諸陣見參、晉雷電又甚、又近衞列立、差左少將忠相、左右近衞各十人、奉入仁和寺、及酉剋、左大臣行解陣事云云、〇中略

天德四年正月二十四日、除目儀間雷鳴、左右大將、帶弓箭候御前座、但陣不立云云、故延光大納言私記

昌泰三年閏六月二十九日、申一剋雷電、陣列如常、左右大將、各有障不參、酉剋左中將仲平、奉內侍宣行解陣事、則遣使於諸陣、爲勘計也、

〔禁秘御抄 十〕雷鳴

上古上卿、召近衞佐令候御前、諸衞警固、次諸陣見參令給祿、近代不及如然之儀、雷鳴又送年踈、

〔侍中群要 十〕慶賀奏

近衞司奏之、若殿上人不候バ、地下次將付藏人令奏、藏人奏聞後、仰同人聞食之由、若上卿付藏人令奏、藏人隨其官取笏著劒令奏、上卿殿上人於射場、又上卿於仁壽殿東小庭令奏、賜御馬慶等、著劒通南殿、

令申慶賀幷罷申事

地下人參腋陣、近衞將令奏、次將不候、藏人奏之、上達部殿上人、參射場令奏、藏人奏之、近衞將奏之、雖殿上人、又於腋陣令奏、有何難故云々、常事也、僧侶參朔平門外令奏、近衞次將之時、藏人傳奏云々、藏人奏聞之後仰次將、俗慶如此云々、〇中略

僧慶

凡僧綱、內供奉、延曆寺座主等、爲奏慶賀候陣外、中少將奏事由、非殿上中少將、付藏人令奏之、〇中略

装束事伺了、仰云、更不可替例、殿上人歟、廿三日、御前、殿下、左中辨宗隆、少納言隆經、大外記師直、大史隆職六臣殿、右少辨頼國、少納言宗信、大外記良業、將監史(六位)史一員左少將知光、左馬助業家、行列次第等在別紙、

〔五代帝王物語(後深草)〕同(○建長)六年、八幡賀茂へ一員の御幸あり、十月廿二日まづ八幡へなる、珍しき事なれば、舞人以下心ごとに出立たり、宇治左府(頼長)の例とかやとて、大殿の御子、中將(基平文永關白)舞人に參り給、希代の事なれば目出たき見物也、

禁囚人

〔日本紀略(平城)〕大同二年十月辛巳、藤子藤原宗成、勸中務卿三品伊豫親王、潛謀不軌、(○中略)親王遽奏宗成勸已反之狀、即繫宗成於左近府、

大索

〔北山抄(九羽林要抄)〕大索(天暦二年例、奉仰之時、尋常裝束申返事時帶弓箭等、被問左大臣上卿、藤原實頼公、師輔公、爲左右大將、)次將依召參入候膝著、○註(略)蒙上卿仰、率僚下(有隨兵三四人)搜檢當條、歸參進膝著、申嫌疑者之有無、

大狩

〔侍中群要(十)〕犬狩事

無神事佛事之時、休日依仰、召仰左右近陣官人、令狩之、所狩獲之犬、給左右衛門令放流、

〔禁秘御抄(下)〕犬狩

匡房記曰、堀河院御時犬狩、被閉諸陣、而先例當御物忌時犬狩尤有便、(予、後忠、又藏人一兩人持弓、先例、犬狩時、仰左右近陣吉上等狩之云々、殿上將佐已下可持弓也、)

候雷陣

〔延喜式(四十五左右近衛)〕凡大雷時、左右近衛陣御在所、又左右兵衛、直參入陣紫宸殿前、内舍人立春興殿西廂、不必待闈司奏、

〔西宮記(六月)〕雷鳴陣

大將已下、帶弓箭候御前孫庇、(大臣大將、帶弓箭、不著緌、)額間左右(左北右南、大將在前西上、左自北昇、右大將自南著無妨、雷鳴時以圓座爲大將座、宰相中將著大將下云云、將監以下立御前、向東、著蓑笠、)兵衛立南庭、(盛時召加御前、持長楯)敷雷鳴御座、鳴盛時分、陣遣后殿、外衛督佐候殿上者、帶

開左掖門、(主鈴入後閉門、遲入无鈴奏者不開、)

〔西宮記臨時十〕一左右大將事

早參遲出(行幸節會時事也)

延喜十八年十月十九日己未、天皇幸北野、右大臣(○藤原忠平時兼左大將)令申脚病發動不能參入由、仍右衛門督藤原朝臣、奉仰令勘申無大將行幸例、外記勘申云、嵯峨院御時、去承和年月日幸北野、並無大將者、然間右大臣參入、

〔殿暦〕康和三年九月廿七日乙酉、今日御方違行幸也、

(裏書)今日行幸、左右大將不供奉、是有前例歟、右大將(○源雅實)依忌日不參、余(○藤原忠實時爲左大將)依重服不參、仍兩大將不參也、

〔世俗淺深秘抄上〕一、大嘗會御禊行幸之時、近仗陣引様、御膳幄陣、左近御幄巽、西上南面、與御幄北柱平頭立胡床、右近御幄南、公卿幄前、東上北面、異左近儀也、是故實也、

一員御幸供奉

〔北山抄九羽林要抄〕后宮行啓

六府次將以下一員、率近衞等供奉、(装束同行幸)其外宮司兼中少將者、帶弓箭可供奉、入御之後、王卿名對面、宮司問之、諸衞不脱弓箭、著饗座矣、

〔世俗淺深秘抄上〕一上皇相具一員、參神社時、有著染下襲事、非尋常事、即余日吉參時著之、蘇枋浮織物也、裏濃文龜甲ノ中(留)菊花也、先規不分明、然有所存、或曰以僻了見所著歟云々、

〔世俗淺深秘抄下〕上皇召具一員、參神社時、猶候下北面、重令供奉御後、

〔玉海〕元暦二年(○文治元年)六月廿日辛未、此日法皇相率舞人幷競馬乘尻等、參詣日吉社、但御出家之後、依無被召具一員之例、六府不供奉、且又保延三年八月、故院御幸日吉之例也、(但被御出家以前也)

〔明月記〕建久七年四月十七日、參大炊殿、相次參大臣殿、有家朝臣參會、見參之次、御賀茂詣一員次將

侍扶持、以予(左近權中將〇藤原定親時)爲左馬頭代、予云、次將所役事、雖無定式、先例多以上臈將爲內侍扶持歟云々、又以左中將資雅朝臣爲璽內侍扶持、彼朝臣今夜第一將也、旁不普通之事歟、如何者、頗辨承諾、卽以資雅朝臣可爲劒內侍扶持、予可扶持璽內侍、雅永朝臣可爲左馬頭代云々、各諾之、如此事、近代職事不知故實、每度如此、

行幸供奉

〔延喜式 四十五 左右近衞〕凡行幸者、將監一人升自西階、受取御劒供奉、卽率近衞二人護之、亦令近衞二人護印鈴、

凡行幸還宮、少將已上、與近臣撿收內豎執物、

凡車駕行幸經宿者、從行及留守、並具數奏、(主典已上具顯交名)餘府准此、

凡臨。時。行。幸。料、青揩衫二百領、料細布一百端、(衫別二丈一尺)絲一升九兩、(別三銖)生藍卅圍、(直)並隔三年申官請受、染揩裁縫、常有四百領、

〔延喜式 四十五 左右近衞〕凡供奉行幸大將以下少將以上、(幸遠者著揩衣、幸近臨時處分、)並著皂緌、横刀、弓箭、行縢、草鞋、(幸近除行縢著靴)將監以下府生以上、並著皂緌、布衫、白布帶、横刀、弓箭、行縢、麻鞋、(幸近以蒲脛巾代行縢)近衞、皂緌、青揩布衫、白布帶、横刀、弓箭、蒲脛巾、麻鞋、(騎隊廿五人、堪騎射少將以下在此中、皆用官馬、以行縢代脛巾、幸近者五人、自餘府生已上及近衞並乘私馬、)

〔西宮記 臨時 十〕左右少將各一人、候御綱末、行警蹕行列之事、(候御綱末將、必乘官馬、自餘公私任意、結唐尾、)

〔藻鹽草 十五 人倫幷異名〕左近右近中少將

みつなのこのゑ(數々にみつなのこのゑ引つれてすむみはしの音ぞのどけき、御綱近衞は左近右近中將也、帝の出御の時、御階の左右に立て成奉る也、)

〔北山抄 九 羽林要抄〕行幸

時刻御南殿、左次將以下、出自敷政門、到日華門外、右次將率御輿長等、(御輿長之中、用番長一人、但腰輿不須、)經階下至同門外、宸儀出御、御帳南頭卽持、立御輿於門前橋上、次將挂手、(左北、右南、上﨟少將前立、中將以下依次立、以中爲上也、參議兼中將者、在公卿列、御輿過前之間、離列相從、)左右大將、進立南階東西、王卿列立庭中、左右將監以下列陣進立、(府掌引之)左將曹率近衞

明門壇上、舞左右近亂聲後、奏音聲、左居櫻樹下、右居橘樹下、王卿史部左萬歳樂或蘇合、賀殿、右延喜樂或鳥蘇、地久、或舞陵王、納蘇利、左右近衞亂聲、樂人舞人皆近衞官人、不用雅樂、左插頭梨、右款冬、臨時奏管絃、

〔花鳥餘情 九澪標〕東遊の舞人十人、馬にのりて、裝束はあをすりといふ物をきて、神社の行幸、關白の賀茂春日詣などにめしぐして、社頭にて求子など舞、其後馬場にて馬をはする事あり、よの常は左右近衞の官人是をつとむ、

〔台記別記〕康治二年正月十八日丙午、賭弓也、○中略龍王急序破二反、左近府生光親舞了發亂聲、予命止之、近年例、不論勝負、左右皆奏舞、依無事理、予止之、宗輔卿曰、故堀川院好舞樂、因之不論勝負、左右共令奏、其後爲流例、

供奉

〔江家次第 一正月〕四方拜事

寅一剋出御、黄櫨御袍藏人頭候御裾、近衞次將取御劒前行、入屛風之後、候屛風外、

〔北山抄 九羽林要抄〕元日節會

天皇御南殿、左右近衞入自日華月華兩門、左次將、出敷政門、到日華門下、陣南階東西、著位襖、付魚袋、帶螺鈿長劒、著靴、中將執紫緌、少將執緋緌尖、將曹一人行前、若无將曹、府生亦得、闈門如之、中將以下、依次各立胡床前、北上東西面、若上臈不參者、計座就之、近例上臈少將一人、在中將前、候就第一胡床、不知其故、若思度行幸儀歟、宸儀著御座、近仗稱警蹕、左中將發聲即立、仗居胡床、臨暗時、陣前各炬火、雨儀立平張、候其下、他節會皆效之、○中略次左右將曹各一人、率番長一人、近衞七人、番長以下五人闈門、三人拔門、皆著緌、近例黄袍誤也、開承明門、○中略還御、陣稱警蹕、若暫入御、大將發警蹕聲、近仗起座共稱、若大將宰相中將等不候者、大臣稱之、事畢還御之時、陣可稱之、若無一府次將、依宣旨召度比府次將令供奉有例、行幸又如之、階下褻近衞府所設、次將立壇下勸盃、一條院儀、右次將經上官座前、可向西中門歟、

〔薩戒記 部類〕白馬節會部

應永廿六年正月七日壬子、公卿已下漸參集、頭右中辨支配次將等所役、以左少將雅永朝臣爲劒内

乃共昇殿、賜群臣酒、兼奏音樂、左右近衛府更奏舞、

〔續日本後紀 仁明 四〕承和二年七月甲辰朔、天皇宴群臣於紫宸殿、左右近衛遞奏音樂、勅令四位已上開襟、至夕宴罷、賜祿有差、　十二月辛未朔、天皇御紫宸殿、賜群臣酒、○中略左右近衛府遞奏音樂、既而賜見參親王以下五位已上祿、各有差、

〔三代實錄 清和 五〕貞觀三年七月廿六日戊戌、帝御前殿、觀相撲、左右近衛府奏音樂、

〔三代實錄 陽成 三十八〕元慶四年七月廿九日辛巳、晦、御仁壽殿、覽相撲、左右近衛府遞奏音樂散樂雜伎、各盡其能、出內藏寮絹一百疋、賜相撲人各一疋、右近衛內藏富繼、長尾米繼、伎善散樂、令人大咲、所謂鳴許人近之矣、

〔西宮記 四月〕駒牽

近衛少將以下番長已上六人、奏東遊、先右駿河舞、次左求子、歌人用右、他所臨時各四人、左先奏、右近奏樂、納曾理、狛桙、

〔榮花物語 二御賀〕治安三年十月十三日、との、うへ○藤原道長妻源倫子の御賀なり、○中略事どもはつるきはに、萬歲樂、いゑのこの君達舞人にて四人まひ給、左衛門督の御子の右馬頭かねふさの前帥の御この四位少將つねすけ、おなじあに君藏人少將よしよりは、帥中納言の御子の源少將さねもとがさゝれたりつるが、にはかになやむ事ありて、えまはずなりぬるかはりにめされたるなりけり、かたては源大納言の御子の右近少將あきもと、皇太后宮權大夫の御子の左近の少將すけふさ、ともたふの源宰相の御子右近少將もろよし、近江守なりまさの朝臣子右馬助みちなりなどなり、すけみちは藏人侍從五位にてまふべきを、侍從は衛府ならねば、にはかにむまのすけにはなさせ給へるなりけり、

〔江家次第 六 四月〕二孟旬儀

供御酒、畢、三獻酒番歸　左右近衛發亂聲、御輦放御手之間奏之、先是樂人等參入、左候軒廊北庭、右候射場殿前、舞人著尋常服、遞奏音樂舞等、畢、雨儀於承

中將可稱之也、永久四年十一月、豐明節會出御時、右近中將雅定候列、而左近少將顯國稱之、或記難之、但可尋事歟、行幸時、雖有左宰相中將、及中納言中將、猶右大將稱警、然者雖右中將稱之、有其謂歟、

〔古今著聞集三公事〕萬壽二年、踏歌節會に、右大臣、内辨にて陣につきて宣命見參を見給ひける間、入御ありけるに、三位の中將師房卿をおきながら、大納言齊信卿警蹕をせられければ、人々あやしみあえりけり、權大納言行成卿、その失錯を扇にしるして队内にうちおかれたり、暦に記さんために、先づ扇には書きたりけるにや、其子息少將隆國朝臣參りあひて、我扇にとりかへて見られければ、この失禮を記したりける、それよりやがて披露ありけるを、齊信卿深くうらみにけり、もとよりよろしからざる中なりければ、かゝるとぞ世の人いひける、

〔西宮記臨時十〕行幸警蹕事

宸儀入御之時、出下自御輿、佇立給之間稱之、但於行在所出入之儀、可准節會、但宰相中將者、先立王卿之列、御輿寄南階之間、離本列副御輿、到南階、還御之時王卿等稱、籍如常、

〔北山抄入大將要抄〕神社行幸、〇幸下一本有可字、准大嘗會御禊、但至于社頭不警蹕、猶可有憚歟、〇中略天元三年同行幸式、乘輿還御、此間雅樂寮奏樂、近仗稱警蹕者、同二年、石清水行幸還御之間、於宿院御在所稱警蹕云々、今案、於社頭不稱之、還宮時可稱云々、

〔徒然草下〕東大寺の神輿、東寺の若宮より歸座の時、源氏の公卿參られけるに、この殿〇源通基大將にて、さきをおはれけるを、土御門相國、〇源定實社頭にて警蹕いかゞ侍るべからんと申されければ、隨身のふるまひは、兵仗の家が知る事に候ふとばかり答へ給ひけり、さて後に仰せられけるは、この相國北山抄を見て、西宮の說をこそしられざりけれ、眷屬の惡鬼惡神を恐るゝゆゑに、神社にて、殊にさきをおふべき道理ありとぞ仰せられける、

〔續日本後紀三仁明〕承和元年正月癸丑、天皇朝覲後太上天皇於淳和院、太上天皇逢迎、各於中庭拜舞、

警蹕

此陣、〈節居二胡床一、无二引陣儀一、引列時、宸儀初見時稱レ警、居、禮畢奉獻間、又起稱二警蹕一、〉將監陣在二小安殿以南一、〈御南之間稱二警蹕一者、而近例不レ稱之、大將代二大臣一定下、自餘有二(有一本作二府字一)惟(惟一本作二准又權字一)上定之、皆服二大儀一云々、〉事訖還レ宮、

〔延喜式中宮十三〕凡正月上卯、遲明職官、設二案二脚於南廊一、左右近衛次將、率二將監以下近衛已上一、陣二列常寧殿左右一、

〔延喜式左右近衛四十五〕凡神。今。食及新嘗會、陣二小齋近衛以上一、隊二齋院內一、大齋隊二院外一、

〔西宮記臨時十〕宸儀出入警蹕事

凡宸儀出入之時、左右大將以下稱二警蹕一、若大將及次將在二殿上一者、待二其聲一可レ稱也、又旬日宸儀入御之時、出居將一人稱二警蹕一、

〔年中行事秘抄〕清涼殿行事

一御每レ有二出入一、近衛少將已上稱二警蹕一、

〔北山抄大將要抄八〕朝賀

辰一剋出御、〈中略〉○至二太極殿後房一下二御輿一、大將以下稱二警蹕一如レ常、〈下二御輿一立定間稱レ之、新儀式云、不レ稱レ警、仍檢二內裏式一、警蹕侍衛如レ常云々、又年紀文多稱レ之、但天慶九年即位、大將依レ候二幾外一不レ稱之、近仗疑又不レ稱、依二彼年例一後々不レ稱歟、近例通レ門立レ幾、大將及王卿候二其內一、何因不レ稱乎、〉

〔西宮記臨時十〕節會警蹕事〈內宴、射場始、節會、行幸、或皆當座上﨟所レ稱、或記曰、除二大臣一之外不レ可レ稱云々、可レ尋、〉

宸儀入御之時、離二御座一二三尺許稱レ之、宸儀出御之時、立二御座前一、欲二居給一之間稱レ之、節會之日、若無二左〈左○下一本有二右字一〉大將及宰相中將一者、當日上卿稱二警蹕一云々、是事大將及次將所レ職也、但天皇御二南殿武德殿等一之時、若大將及次將等退出之間、天皇若避レ座著座之時、當座第一上卿稱二警蹕一云々、天皇避レ座、則王卿起座、宸儀離レ座二三尺許、大將稱レ警、入御之時、〈○時一本作二後字一〉可レ經二時剋一者、內侍出二於御帳艮角屏風妻一、則王卿以下復座、次出御之時宸儀初見、則王卿起座、〈若內侍不レ出、則王卿作レ立可レ待二宸儀出御一也、〉宸儀欲二居給一之間、大將稱レ警、

〔世俗淺深秘抄上〕一節會時、主上御出時、近仗稱レ警、必不レ依二左將一、若左ハ少將、右ハ中將候之者、雖二右近

警固

之於庭中拜舞、

〔延喜式 十五 內藏〕賀茂祭

使等裝束料　近衞府五位已上官人一人、絹五疋、細布五端、（並官物）緋貲布一端、（寮物）近衞十二人、（二人松尾社、其料充寮物、）各絹一疋、綿一屯、調布一端、細布一丈四尺、領緒八尺、（左近緋、右近纈、已上官物、）

〔玉葉〕建曆二年三月廿二日宣旨

一可停止賀茂祭使齋王禊供奉人莖車及從類裝束過差事（○中略）

縱近衞官人已下衣服　金銀珠鈿、錦繡綾羅織物銅薄、狩襖擣裡、可停止、於擣衣者、不在制限、

〔北山抄 九 羽林要抄〕警固

上卿著陣座、六府次將等帶劒把笏應召、（○中略）上卿仰可警固之由、（若入夜者、上卿先問名、中官姓名、或五位以上不稱姓、違式也、）同音稱唯、左廻退出、（或右廻經下臈前、）

解陣儀、同召仰、上卿仰曰、解陣、微音稱唯退出、卽左次將以下、近衞以上、入自宜仁門、列立平張下、（西上南面、）一次將召將監名、稱唯、仰曰陣解（介、）將監仰將曹、將曹仰府生、府生仰番長、番長仰府掌以下、（不召名、只稱舍人等、）畢退出、右陣於射場前平張下行之、其後脫却弓箭、（近例不行此儀云々）

〔北山抄 九 羽林要抄裏書〕固御階下事（此事起於北野行幸、延喜以前歟、見行成卿記云々、）

今案、中少將爲給祿皆昇殿上、仍將監以下可陣於階下歟、警衞之心也、但旬時陣不立者給祿時、六位已下可陣列歟、可尋舊記、

〔北山抄 八 大將要抄〕朝賀

辰一剋出御、御輿持立日華門前橋上之時、左右大將、進立南階東西、（近例公卿列立之時、待次將經階下進來、）次王卿列立、左右將監以上引陣、（府掌引之）左將曹引近衞開左腋門、（主鈴入後閉門還入○中略）先是大少將以下陣青龍白虎樓下、謂之華樓陣、（奏賀宣命畢、群臣拜舞間、振萬歲幡、稱謂謂之稱萬歲也、）中將仗供奉御前、謂之御階下陣、供奉御輿、次將等就

〔延喜式十五内藏〕春日祭

使等裝束

近衞少將若中將一人、近衞十二人、〇中略 使官人別、〇中略 近衞別、緋貲布袍一領、寮物、便納各府、隨損請換、通用他祭、帛一疋、調綿一屯、調布一端、刀緒料緋帛七尺五寸、布帶細布一丈四尺、

〔延喜式三十大藏〕凡春日祭、〇中略 近衞少將一人、絹六疋、綿六屯、細布五端、布五端、近衞十二人、別帛一疋、綿一屯、布一端、刀緒料緋帛七尺五寸、布帶料細布一丈四尺、

〔建武年中行事二月〕上のひつじのひ、春日祭の使たつ、近衞の中少將つとむ、昔は賀茂のまつりのごとし、いまは蠻繪の隨身など許ぞ見ゆめる、府の官人、すりばかまきて舞人つとむ、かも祭のごとし、使無名門のまへに參てことの由を申、舞人ものゝねならす、

〔延喜式三十大藏〕凡大原野祭、〇中略 近衞將監一人、絹二疋、綿二屯、細布二端、近衞十人、別帛一疋、綿一屯、布一端、刀緒料緋帛七尺五寸、帶料細布一丈四尺、

〔建武年中行事二月〕卯の日、〇上卯 大原野のまつり、近衞の將監使つとむ、春日祭のごとし、

〔延喜式十五内藏〕大神祭

夏祭料　使等裝束料　近衞將監一人、近衞十人、〇中略　近衞官人、絹三疋、細布三端、貲布二端、(中略)近衞

同春日祭、但馬部減紅花八兩、

〔西宮記四月〕大神祭 有三卯用中卯、近衞府使立、

〔西宮記十二月〕大神祭 內藏寮使立、近衞府使不立、

〔日本紀略六圓融〕貞元元年四月五日辛丑、大神祭使、近衞將監等申故障、仍以左兵衞尉藤惟親補左近權將監、令〇令下恐有脫字 勅使、

〔世俗淺深秘抄上〕一近衞次將奉仕賀茂祭使時、被召御前而賜酒饌、其後五位職事藏人頭賜御衣、賜

王卿參上、但至于出居將、率侍從、自日華門參上著座、近衞將監下﨟、猶著南端、

東廂南第一間立白木床子二脚、南上西面、爲出居中少將座、

〔江家次第 正月三〕御齋會內論義

〔江次第抄 六〕二孟旬儀

出居次將　旬次將出居、必左將勤仕、出自本陣之故云々、然而又右將有例、出居次將、於宜仁門外押笏紙、著靴、昇東階、著東廂床子、錦端床子著之

〔江家次第 七月八〕相撲召合

巳剋御南殿、○中略 次出居次將、率出居侍從、入自日華門參上、著東格子邊座、南上西面、但次將必著南、侍從經次將後着、

〔北山抄 羽林要抄裏書九〕師入道仲實記歟

承曆元年閏十二月廿日、今夜御佛名中夜也、出居右中將、右少將顯實、四位 右中將家忠四位○關白藤原師實子在座、依位階所著也、而民部卿起御前座、出殿上、耳語俊明卿、小選招家忠、示依官次可著之由、即家忠著顯實之上、此事不見聞之儀也、若可依官次者、凡左將可著右將之上歟、有五位中將者、可著四位少將之上哉、於府以中將爲上也、出居座、尙依位次可著歟、然而依爲執柄之息、誰人之論之哉、若爲外人者、可成論歟、實季卿云、出居座依位階著也、未知此例者、但顯實家忠、同日敍四位、至顯實者、本自爲上臈也、前儀尙可依次第也、若家忠可著上者、前之次第可改歟、

〔世俗淺深秘抄 上〕一中將ハ位階之下臈、少將ハ上臈ナル時、著座府之役之時ハ、中將爲上臈、始出居時依位也、五位中將、四位少將同之、但先例有種々沙汰歟、

〔延喜式 左右近衞四十五〕凡諸祭供走馬者、春日社使、少將已上一人、但帶參議者不須、賀茂亦同、近衞十二人、大原野社、將監一人、近衞十人、大神社、將監一人、近衞十人、賀茂社、少將已上一人、近衞十二人、二人先參松尾社、供走馬、並每祭左右遞供之、其裝束預奏請受、色數見內藏式、

出居

束のごとし、騎射にはたゞ褐衣を著す、二やうに裝束わけたり、とねり共のえんなるさうぞくけそうをつくしてもは、競馬の裝束のこと也、

〔榮花物語三十二歌合〕たかつかさ殿のうへ、七十賀せさせ給ふ、○中略弘徽殿藤壺のはざまのいこせばきに、上達部殿上人たちこみ、近衛づかさ、やなぐひおひて、たちやすらひたり、

〔續世繼一子日〕同○萬壽四年正月には、上東門院に、としのはじめのみゆきありて、○後一條朝覲の御はいせさせたまひき、○中略近衛司のひらやなぐひ、ひらをなど、めもあやなるに、きぬのいろまじはれるうちより、からのまひ、こまの舞人、左右かた〴〵袖ふるほどなど、所にはえておもしろしなども、言葉もおよばずなん侍りける、

〔詠百寮和歌〕大將

わが君の近き守りのまゆ作り墨おしろいも調ぞたぶ

中將

宮づかふわが公達の色重ねて、ふや花やと身をかざりきつ

少將

梓弓君を守りにさす竹のやさしく見ゆる雲の上人

〔西宮記臨時十〕內宴事

此日、時及晩景、則近衛將等帶弓箭、遲候出居之座、

〔北山抄八大將要抄〕內宴

起御座時稱警蹕、如節會、但大將及宰相中將不候者、出居稱之、旬日如此

〔西宮記臨時十〕旬日事

奏之時內侍臨檻、則出居參上著座、次王卿一一參上、若有大臣之大將時、內侍臨檻、則大臣先參上、次

歟、所詮不可有難事也、

〔世俗淺深秘抄上〕一上皇於如鳥羽賀茂祭警固中畧、被行如競馬時、近衞次將必卷纓帶劒也、祭警固不及洛外之由、是一說也、然而或帶之、縱雖不帶劒、於纓者必卷之、其上爲衞府者、何可不帶之哉、

〔世俗淺深秘抄下〕一凡尻鞘ハ、四位豹、五位虎也、但行幸之時、五位次將用豹皮、四位不入尻鞘故歟、舞人時、四位入尻鞘、然而猶五位輩或用豹、行幸之時用虎皮人有之、時人難之云々、筑豹、小豹、虎次第如此、而御賀時殿上人奉仕舞、左用小豹右用筑豹、是頗不審也、

一次將勤本府役時、帶細劒間、付丸緒帶之、五位將或帶野劒、然而古賢甚難之、

一次將立陣列日、直候陣時、著野劒付魚袋、而近代多以不付魚袋、甚非說也、

〔世俗淺深秘抄上〕一行幸日、次將曳表帶事、不論公卿四位五位、如春日日吉行幸時曳之、大將帶野劒時曳之、五位必曳表帶由云々、然而必不然、

一大將次將等、行幸之時、曳上帶事、或說曰、五位次將曳之、然而此說非尋常儀、遠所行幸之時曳、大將多春日行幸曳之歟、於次將者、猶八幡松尾是等畧モ可曳也、曳之樣、平緒之上程畧當テ曳之、結前也、モロカギ畧結也、露三寸許垂也、カキノ方モ聊見ユル程畧結也、雖有樣々說、以此說爲普通說也、

〔延喜式四十一彈正〕凡○中畧近衞府生以上、幷撿非違使等者、並除節會之外、不必著朝服、中諸司政之日、不在此限、

〔有職問書〕二中將も大紋の差貫用申候哉

答、三位の中將は著申候、四位の中將は成不申候、然共大臣たる人の子は、四位中將にても大紋のさし貫著用申候、

〔源氏物語二十五螢〕舍人どもさへえんなるさうぞくをつくして、身をなげたる、てまどはしなどをみるぞをかしかりける、

〔花鳥餘情十四螢〕今案騎射と競馬とに近衞の裝束不同、競馬には打懸といふ物を著す、陵王の裝

服裝

小儀謂告朔、正月上卯日、臨軒授位任官、十六日踏歌、十八日賭射、五月五日、七月廿五日、九月九日、出雲國造奏神壽詞、册命皇后、册命皇太子、百官賀表、遣唐使賜節刀、將軍賜節刀、

大將已下亦准中儀、但正月上卯、授位任官、十八日、少將已上、執弓箭、其大中將帶參議已上者、不執弓箭、其近衞黃袍、

〔延喜式四十五左右近衞〕凡節會御紫宸殿、中將已下、率近衞等入自日華門、將曹一人前行、右月華門、居胡床、少將已上胡床、各敷虎皮、

〔延喜式七踐祚大嘗祭〕卯日平明、〇中略十一月諸衞立仗、諸司陳威儀物、如元日儀、〇中略左右近衞中將以下、各引隊仗分衞大嘗宮、

〔北山抄八大將要抄〕大臣大將者、雖行幸時不帶弓箭、但近衞等、持弓箭相從、

〔北山抄八大將要抄〕大嘗會

供奉小忌者、帶弓箭如常、此日大儀也、定權官同元日、但无大將代、仍候大忌者不帶弓箭、

〔北山抄八大將要抄〕大嘗會御禊

大將不著飾劍、不付魚袋、依帶弓箭也、但供奉節下者不帶之、

〔西三條裝束抄〕老懸

納言ノ大將ハ、行幸等ニ弓箭ヲ帶、仍纓ヲ卷テ老懸ヲ用ユ、大臣ノ大將ニイタリテハ、弓箭ヲ不帶隨身ニ令持之、仍老懸ヲ不懸也、然ニ鹿苑院准后、〇足利義滿ハ永德二年ノ行幸ニ、左大臣ノ右大將トシテ、纓ヲ卷、老懸ヲカケ、弓箭ヲ帶セラル、但コレハ別勅ノヨシ見エタリ、後例タルベカラザルヨシ、成恩寺關白〇一條經嗣シルサル、凡大臣ノ大將弓箭ヲ帶スルコトハ、雷鳴陣ノ外、先例ナキヨシ見エハベルモノナリ、

〔世俗淺深秘抄上〕一行幸之時、次將若爲御使、前陣留毛後陣留テモ、行時必取弓也、奉仰時、乍騎馬奉之例也、然而下馬奉之宜事也、

〔世俗淺深秘抄上〕遠所行幸之時、用蒔繪螺鈿劍云々、然而猶非參議次將未聞其例、仍近代之人不用

閤門開閉

〔延喜式四十五左右近衞〕凡閤門者、將曹一人、率近衞八人、門閉、(五人閤門、三人腋門、)

〔江次第抄一〕開門　南殿正面門、承明門也、左右腋門、長樂永安門也、建禮門、相當承明門也、時百官皆在門外、至是命開門者、令群臣放入也、但承明者、近衞掌開闔、建禮者、兵衞掌開闔也、

〔江次第抄二〕宮衞令注云、謂衞門所守謂之宮門、兵衞所守謂之閤門也、今案建禮門者、宮門、承明、長樂、永安門者、閤門也、

當儀仗

〔延喜式四十五左右近衞〕左近衞府(右近衞府准此)

大儀(謂元日卽位、及受蕃國使表、)

其日寅二剋、始擊動鼓三度、度別平聲九下、卽令裝束、大將著武禮冠、淺紫襖、錦裲襠、將軍帶、(飾以金銀、)金裝橫刀、靴、策、著幞殳、中將武禮冠、深緋襖、錦裲襠、將軍帶、金裝橫刀、靴、策、著幞殳、少將武禮冠、淺緋襖、錦裲襠、將軍帶、金裝橫刀、靴、策、著幞殳、(但供奉御輿少將、皁緌挂甲、帶弓箭、)將監將曹並皁緌、深緑襖、錦裲襠、白布帶、橫刀、弓箭、緋脛巾、麻鞋、府生近衞並皁緌、深緑襖、挂甲、白布帶、橫刀、弓箭、白布脛巾、麻鞋、(近衞加朱末額、)卯一剋、擊列陣鼓一度、平聲九下、卯三剋、擊進陣鼓三度、度別九下、(初發細聲、漸至大聲、)仗初進擊行鼓三度、度別雙聲二下、皆就隊下、中將率將監以下隊於大極殿南階下、大少將率將監以下隊於中務陣以北、(若蕃客朝拜者、陣隊於龍尾道下、其隊幡小幡、各倍數、)龍像纛幡一旒、(加戟、其管預前儲備、餘皆准此、)鷹像隊幡四旒、小幡四十二旒、(緋黃各廿一旒、著戟、餘亦准此、)並鉦鼓各一面、(面別加槌、其簨簴、餘亦准此、)將監率將曹以下隊於大極殿以北後殿南、並居胡床、(少將以下胡床各敷虎皮、預奏請內藏寮、永收本府、餘府准此、)其供奉駕陣者、駕御後殿、卽就本隊、禮畢駕還供奉如初、兵庫寮擊退鼓、群官退出、訖擊退隊鼓三度、度別九下、(初發大聲、漸至細聲、)餘府以次相應、還入本府、各擊鉦五下、解陣、

中儀(謂元日宴會、正月七日、十七日、大射、十一月新嘗會、及賜蕃客、)

少將已上、並著位襖、橫刀、靴、策、著幞殳、將監已下府生已上、並皁緌、位襖、白布帶、橫刀、弓箭、麻鞋、近衞皁緌、緑襖、白布帶、橫刀、弓箭、麻鞋、(大射並賜蕃客之時、著脛巾末額、)

行夜

〔左經記〕長元元年三月廿八日癸亥、有殿上起請云々、當番陪膳二人可候宿、又五位一人、近衛司一人、必可候、兼又任古例、毎月日廿夜十、可奉仕之由右大辨奉仰、申關白殿、令定下云々、

〔延喜式左右近衛四十五〕凡行夜者、内裏、官人一人、近衛一人、起亥一刻、迄子四刻、但右起丑一刻、迄寅四刻、大藏近衛二人、内藏、近衛一人、起戌一刻、迄亥一刻、但右起亥二刻、迄子二刻、

〔延喜式左右近衛四十五〕凡看督二人、簡近衛性識強幹者充之、左右相交作二番、毎日一番候内裏、一番巡察京内非違、其馬、寮充之、永置本府騎用、飼見馬寮式、

〔侍中群要四〕宮中夜行

宮中夜行左右近所奉仕也、中重夜行、左右兵衛勤行、從亥刻至子刻、左奉仕、從丑刻至寅刻、右奉仕、至于左右衛門可奉仕八省夜行也、藏人強不可知行、左右近等有懈怠時、各召官人誡仰了、

〔禁秘御抄上〕近衛夜行事

此事近代大略如无、時々奉仕之、

〔三代實錄清和十四〕貞觀九年二月廿七日丁酉、勅、左右近衛、左右兵衛、分結四番夜行京内、賜左右馬寮未調御馬而騎焉、

〔三代實錄陽成三十三〕元慶二年二月廿七日癸巳、是夜偷兒剝取紫宸殿軟障、爲等夜近衛舍人所捕獲、

〔三代實錄光孝四十七〕仁和元年四月乙卯朔、是夜巡檢朝堂院、近衛等捕得一人、賚持油炭續松等、忽入火於筵、以紙縛其口、其人陰陽寮陰陽師、正六位上村國連業世之子、天文生名春澤也、

奏夜中變異

〔延喜式左右近衛四十五〕凡儺夜分遣近衛四人、聞夜中事記奏之、

〔年中行事秘抄十二月〕近衛等聞見夜中變異事

貞觀式云、凡十二月晦日、差近衛四人、令聞見夜中變異、其名簿、午剋以前進内侍、酉剋候陣、隨召帶兵杖、參入近衛陣、分頭退出、元日平旦、錄夜中見聞之事、進近衛陣、

衞大將從三位勳三等巨勢朝臣野足等上表曰、臣聞鉤陳六位、環北極以分輝、衞尉八屯、居西京而警夜、誠以紫宮淸切、周衞無虧、黃屋尊嚴、不虞是備、夫左近衞、元是依數長直、職掌既重、儀式亦殊、晝夜警護、不離禁中、常見宮省之事、悉知出入之人、大同之年、爲左右府、即停長直、一從番上、自玆上番下番遞去遞來、苟守當番之直、不顧長久之法、坐作進退、稍忘其儀、伏惟皇帝陛下、道高萬古、功邁百王、渙光之懸制、戎規、何能語美魏武之切言兵略、未足稱奇、臣等猥以庸虛、得預警執、職司宿衞、身統禁兵、伏望左右近衞府、府別簡其驍勇者五十人、依舊長直、自餘相副、亦令番上、許之、○又見朱本類聚三代格

〔日本紀略二朱雀〕承平三年正月廿三日庚子、仰左右衞門、兵衞府、馬寮、結番每夜令巡檢之、今夕陽明門內、近衞陣直大澤有春、爲同府近衞小槻滋連被忿怒、於酒殿北邊、以大刀被傷之、即逃去、有春僅存命、

〔知信朝臣記〕長承四年二月十七日辛酉、大將殿○藤原賴長始可令著陣給、○中略忠淸進二通文、

右近衞府

合中將已下府生已上

正四位下行權中將兼皇后宮權亮藤原朝臣忠基、從四位下行權少將兼伊與介藤原朝臣忠賴、正六位上行將監橘朝臣景通、正六位上行將曹淸原眞人遠兼、正六位上行府生惟宗朝臣忠淸、正六位上行府生道守宿禰重元、正六位上行府生身人部宿禰貞近、以前今月十六日宿直如件、

長承四年二月十七日

正二位權大納言兼大將皇后宮大夫藤原朝臣

以此文號曰奏、令著陣給之後、令加御名○賴長二字給者、大臣時朝臣云々、

〔玉海〕治承四年十一月八日丙辰、入夜右近府持來旬番奏簡、大將○藤原兼實子良通加名字返給了、

〔侍中群要四〕障進退事

陪膳當番　近衞司當直　五位當番　六位六人當番當直、隨日數無色、可進退、

宿直

非有指事不可行之、

〔北山抄 九羽林要抄〕宿申

亥子時、左陣毎剋夜行、丑寅剋、右陣勤之、若有闕怠、次將召勘直官人等、丑剋物節一人來、申宿申候之由、殿上及宿所、尋上﨟次將在所申之、次將問之、或乍臥與奪、左右於一所申者、後申之者、不必問之、依已知左右也、即申姓名、仰曰、申勢、稱唯告府生、府生兩度以拔聲示候由、問曰阿誰之、此度頗有歳儀問之、然猶徹音也、府生以下稱職姓名、即申宿侍之人畢、仰曰、縦之、申大將者、府生申候由、將曹申之、即申中將以下、申於中將者、申少將以下、申少將者、申將監以下、

〔左經記〕長元元年五月十一日乙巳、參右府申雜事、次參關白殿、左宰相中將實被示云、〇中略宿申時、將曹申大將、府生申中將、而九條殿、爲宰相中將之時、將曹宿申云々、

〔源氏物語 一桐壺〕ともし火をかゝげつくして、おきおはします、右近のつかさのとのゐ申のこゑ聞ゆるは、うしになりぬるなるべし、

〔源氏物語 奥入〕亥一剋、左近衛夜行、官人初奏時、終子四剋、丑一剋、右近衛宿申事、至卯一剋、内豎、亥一剋、奏宿簡、

〔源氏物語 十賢木〕こゝかしこ尋ねありきて、とらひとつと申なり、

〔花鳥餘情 七賢木〕今案、宿直申の近衛は、其夜大將次將の間、御とのゐしたる上首ノ人の所を尋て申也、殿上にても、又直廬にても申也、大將御前に祗候の時は、まづ中少將にて申せば、大將出合て尋仰也、たそことへば、近衛の官人官姓名を申す、大將則よしと仰ス、よしは領の字、るすの心なり、中少將も是に同じ、〇中略とらへと申は、右近の宿申也、此時源氏も右大將の時なれば、かくいへるなり、

〔延喜式 四十五左右近衛〕凡毎月一日、十六日、具錄當番近衛歷名、次官已上奏進、若無者、官亦奏、其宿衛者、日別錄見宿數、次官以上一人署名申送、闈司總取奏之、餘府准此、

〔日本後紀 二十二嵯峨〕弘仁三年九月乙丑、右大臣從二位兼左近衛大將藤原朝臣內麻呂、中納言兼右近

花山院御所、實方爲少將在殿上、五位藏人惟成、依御物忌入自无名門、實方咎之曰、爭用此路乎、惟成曰、縱雖有非違、何故咎乎、實方莞爾曰、有職之人、猶可被案延喜式、雖不肖身、至司存事者、私所尋習也、惟成無所答、

〔侍中群要十〕殿上作事

近衞司帶劍候、或召將監帶弓箭候、地下將監候長橋上、

雜工昇殿事

雜工昇殿時、召近衞將監令候長橋、見式、將監不候時、次將候之、間有其例、

〔世俗淺深秘抄上〕一節會日有出御日、近衞中將及少將、帶劍候殿上例也、爲頭中將人、出陣仰內辨、及仰諸事時、帶劍不持笏、是故實也、

〔世俗淺深秘抄上〕一節會之時、次將於堂上不可持笏、中古以往猶不帶劍、然而近代皆帶之、參御前者猶可解歟、此事具見師時卿之記、

〔北山抄九羽林要抄〕陣中事

式曰、殿上之事、少將以上督察云々、禁察殿上非違也、大都陣中雜事、近衞府可糺行也、往年聽昇殿之人、陣奉其宣旨、又南殿階下、聽往返之者、見府式、外記史、幷史生、內記、勘解由主典也、雖殿上侍臣、任意不往還、階前謂之馳道、總無便、敷政門者、上官近衞府外不得出入、其次將自非就事、尋常不必通之、外衞番長以下、帶兵仗不能入近衞陣中、中隔以內、是近衞陣中也、吉上近衞、候中閤門掖、謂之抑陣、兵衞陣不知其中事、仍外衞督佐隨身等、脫却兵具入閤門耳、和德門幷掖陣內、近衞府殿上人外總不入也、內藏寮部官人以下、可聽出入之由、在府式、又上官者、出入花德門无妨、其禁中有非違濫行、仰陣官吉上等可令糺彈、又看督使左右結番、每日一番可候內裏也、一番巡察京內、裏一作京、爲是糺行禁中非違也、然則內禮司雖併彈正、彈正不可行禁中事、彈式曰、宮城內外非違、及汚穢、每日忠以下糺察、但禁中者不須之、至于弼以上、可兼內外非違之由見職員令、內者迄御所也、撿非違使之所掌、依准彈正彈事、佐以上可糺行也、然而糺察殿上陣中事、已爲近衞府職掌、仍

職掌　禁衞

殿上督察

べて其例あるべからず、今の物語、齋院の御禊に、源氏の大將の一員を見せらるゝ事は、本陣のさたなければ、頗其理にそむかざるやうなり、さかれども右近の藏人のぞう、つかうまつること云は其例なけれども、源氏の大將をたこふるあまりに、かくは書なせるなり、かやうのことは、能々分別すべき事也、難義なるによりて、河海などにも筆をさし置侍り、

〔玉葉〕仁治二年正月一日、今日左右近衞一員如恒、左近府生番長、各三人也、

〔普廣院殿御元服記〕一永享二年七月廿五日、甲子申刻大將御拜賀供奉行列、中略、

一員三人府生將監　將曹

〔北山抄八大將要抄〕左近衞府

禁。兵。所。屬、警。巡。斯。重、凡殿上事、少將以上督察云々、〇中略

親衞大將軍左右　羽林大將軍

唐家之重職、無如大將軍、以警巡征戰爲事之故也、今慣彼朝、分官職行貴、貴一作賞、一進、仍本朝又異他官耳、

〔百寮訓要抄〕左近衞府羽林、親衞、近衞府と云は、君をちかくまほり奉る武勇の職也、左右衞門、左右兵衞をば外衞といふ、是は宮城の外を警固する職也、近衞は門内を警固すべし、

〔職官志五〕左右近衞、蓋舊兵衞之職也、其舍人亦分配宮閤宿衞、是職而兵衞之職、後世遷於外、職原抄、與衞門並稱爲外衞、然其制亦未詳定何世、

〔延喜式四十五左右近衞〕凡裝束紫宸殿、少將將監相共行事、

凡殿上之事、少將以上督察、

〔北山抄九羽林要抄裏書〕公方勘文云

殿上非違、少將以上可督察事、貞觀式云、殿上之事、少將以上督察云々、其督察意如何事、〇中略

一員

隨身と申候也、

〔倭訓栞〕前編十二須 ずいじん　小隨身といふは本府の隨身の外、中少將左右衞門兵衞等の召仕ふ隨身をいへり、

〔三代實錄〕三十七陽成 元慶四年五月廿三日丙子、授肥後守從五位上藤原朝臣房雄正五位下、先是西國流言、新羅凶賊將入侵寇、朝議以左近衞少將坂上大宿禰瀧守兼任太宰少貳、向彼之日、賜隨身近衞有數、瀧守少貳秩滿、仍以房雄代之、到府之後、流聞不驚、隨身近衞多致陵暴、其魁首左近衞釆女益繼狡猾尤甚、房雄殺之、

〔名目抄〕諸公事言說 一員（於近衞府者、將監將曹府生是也、於外衞者、尉志府生是也、各其府有之、長官晴日具之、判官具之歟、可勘之、雖可加人體無加之、）

〔桃花蘂葉〕一隨身人數事

納言兼大將時、番長一人、（左右依主人官）近衞五人（以上六人）大臣大將時、府生一人、番長一人、近衞六人、（以上八人）大臣辭大將之後、衞府長一人、（○中略）此外拜賀之日、各具一員（將監、將曹、府生等、）可見舊記、

〔源氏物語〕九葵 大將のかりの隨身、（○中略）けふは右近の藏人のぞう、つかうまつれり、

〔河海抄〕五葵 大將行粧之時、一員府官供奉する例なり、右近の藏人のぞうは、藏人右近將監也、（○中略）かりの隨身とは、かりそめの義也、一員當日ばかり、かりに隨身に供奉したるよしなり、

〔源語秘訣〕長和五年十月廿三日、後一條院の御禊の行幸に攝政（御堂殿）供奉し給ふ、府生以下十人、もとよりゆるされて召具し給、外に左右の將監將曹各一人づゝをめしわたさる、是を一員とも、又かりの隨身とも云也、おほよそ行幸の時は、左右近の官人は、皆本陣に供奉するによて、私の隨身にめしわたす事はなきを、攝政關白は別段の事なるうへ、鹵簿の圖にはなれて、陣外に供奉し給によりて、一員を具せられし也、されども殿上の藏人の將監を一員に具する事は、す

大臣、猶隨身を具すべきため兵仗をたまはるなり、攝政關白も兵仗を給はりて隨身をめしぐせらるゝ也、今の九條入道〈○藤原植通〉前關白に成給し時、大將兼ながら兵仗を申うけられしは、近比のおかしき事にてありし也、兵仗と云子細を分別なくて、申うくる物とばかり心得給しゆへにや、不可然由沙汰ありて、やがて大將をば辭申されけり、攝政關白にても大將をかけ給たる時は、兵仗をば申請られぬ也、九條殿の兵仗の事、隨分の輩の申さたにて、かやうの落度は、有職のとゞき候はぬ玄るしにやと申輩侍りき、

〔園太曆〕貞和二年十月二日丙子、今日依吉曜著直衣始出仕、〈○中略〉

隨身　官人〈冠、二藍上下、唐紅衣、白單、差石帶、持胡籙、帶劍、〉　番長〈冠、萌木上下、款冬衣、黃單、狩胡籙、帶劍、〉

已上、其色久安承元等例、

下﨟六人　一座〈檜皮、黃衣、白單、〉　二座〈朽葉、萌木衣、紅單、〉　三座〈花田、薄色衣、黃單、〉　四座〈薄色、款冬衣、紅單、〉　五座〈虫襖、薄色衣、紅單、〉　六座〈赤色、黃衣、白單、〉

已上、烏帽子帶劍布衣色々、或守先例、或加今案相計了、

〔管見記〕永享五年十二月十五日甲子、任大將〈○藤原公名〉之後□□□□處〈○中略〉今日奏慶者也、〈○中略〉出妻戶之時番長一人追前、著沓侍從口使之、近衛五座秦久通傳之、〈○中略〉近衛一座下毛野武次取裾懸弓相從、〈○中略〉

隨身　番長秦久守〈褐衣、白狩袴、狩胡籙、帶劍、壺脛巾、〉　近衛下毛野武次　秦久增　同延豐　同久秀　同久通

〔桃花蘂葉〕一隨身人數事〈付小舍人、雜色、府長、〉

自羽林至中納言中將、衛府長一人、小隨身四人、或二人、大納言時、衛府長一人、小雜色四人、

〔有職問答〕一小隨身とはいかゞ　答、小隨身は、中少將に有之候事也、中少將隨身をつるゝはづなれ共、隨身のあぎ無之時、役義に付隨身つれでは不叶時、手前の人にても、隨身に仕立つるゝを小

隨身

〔北山抄九羽林要抄〕白馬節舊年於馬寮有列見事、大將參著、定御馬次第等、亦酒之次、脫衣給馬頭物節云々、○頭或作預、

〔江家次第十九〕一院雜事

出入無警蹕、依新主宣旨、分左右近物節以下各五人、爲御隨身、

〔大鏡三太政大臣賴忠〕このおとゞ、いみじき事どもしおき給へる人なり、○中略馬のうへのずいじん、さうに四人つがひはじむる事も、この殿のしいで給へり、いにしへは、物のふしのかぎり一人づつありて、ふさう生○府はなくて侍し也、

〔續古事談五諸道〕京極ノ大殿師實○藤原ノ賀茂詣ニハ、院ノ御隨身近友敦季ヨリ始テ、舞人シタルナカニ、下毛野敦時、モノヽフシニテ、ヒトリ舞人ニイレリケリ、

〔三長記〕建永元年六月十六日丙寅、抑大將召仕隨身事、舊例於本陣補物節以下、以請文付職事奏聞、上卿奉勅下知兵部省歟、此儀久絕了、大將補任之後、只任意召仕之歟、不待宣下歟、然者御拜賀以前、雖兼數月何事候哉、儲饗之時除目了、大將進弓場之間、隨身出自本陣方來會弓場邊、第二度拜之時、初發前聲歟、無饗之時拜賀之日、只自里亭召具之歟、仰云、以請文奏聞古儀也、於今者無其儀、只拜賀已前可始隨身所也、

〔北山抄八大將要抄〕大臣大將者、隨身八人、府生一人、番長一人、近衞六人也、納言以下大將者隨身六人、番長一人、近衞五人、御即位日、內辨大臣爲大將者、隨身者裝束只如例、不著末額、胡籙、葉壓巾、是依爲大將代也、但府生隨身者、依在本陣著裲襠歟、大納言大將任大臣、自節會退出時、依未承還宣旨、隨身等解弓箭著布衣相隨、八省行幸時、大將爲上卿、解弓箭行事、左大將依博陸命、於嘉喜門座、撤之、被度東福門、與此書頗相違、左大將隨身布袴、色用濃蘇芳、右用黃朽葉、行幸等時例也、一尋常時、步隨身白襖袴、番長、任意

〔官職難儀〕兵仗とは

隨身をめし具する事也、○中略大將にては隨身ぐする物にて侍れば是非に及ず、大將にあらざる

物節

御棧敷ヲ渡シテ御覽ジケル時仰アリテ、人長秦弘馬ニノリテアゲツヽ、御前ヲ渡リケリ、近衞舍人ハ、ヨキ人ノチカク召仕モノニテ、事ニフレテ情アリ、ミメヨク、藝能振舞人ニコトナルベキモノ也、カヽレバ昔ノモノドモハ、皆サノミコソ有シニ、今ノヨニハ、ミメノワロク、能ノナキノミナラズ、心ギハアサマシキモノドモナリ、長ク失ニタルモノナリ、

〔空穗物語祭の使〕右近の中將少將、もの〻ふしら、ひきてまゐりたり、〇中略むまゆみはて〻、とねりども、こまかたつれてまひあそぶ、〇中略かくてひだり右のむまづかさ御むま、左右大將、とうにておはします、かんたちめみこたちかたわきてくらべ給、左ののりじりは、右近のせうよりはじめてもの〻ふしまでいちもちをえらび、右ののりじりは、左近のさうまでえらびにしひんがしあしらうて、むまづかさつきなみたり、

〔源氏物語十九松風〕近衞づかさの名高きとねり、物のふしどもなどさぶらふに、〇下略

〔花鳥餘情十松風〕今案、物節といふは、近衞とねりの中、東遊に達したるものを物節に補す、其中に、番長府生などをもまはせる也、是によりて春日祭賀茂祭の使の羽林、東遊の近衞十人召具するに、物のふしの近衞、求子、するがまひなどいふ事をつとむる也、〇中略賭弓すまふの大將のかへりあるじの時も、みな東遊あり、物の節の役也、

〔北山抄八大將要抄〕補物節事

定物節等者、中少將相共於陣座定補、先成府生奏付殿上少將、（奏聞後、令藏人給上卿、上卿下兵部、近例若无帶藏人之次將者付藏人云々、）次中將執筆、定書番長以下下給將曹、依召立稱唯、進立再拜、（大臣之大將、或於里第定云々、）左陣宰相中將同著納言座、他次將著參議座、若有酒肴於座上勸盃、

〔北山抄九羽林要抄〕宿申

亥子時、左陣每剋夜行、丑寅剋、右陣勤之、〇中略丑剋物節一人來申宿申候之由、

〔枕草子春曙抄四〕人長は、神樂の舞人陪從などの長也、內侍所の御かぐらに、韓神其駒などの時、起て舞もの也、

〔倭訓栞前編二十〕にんぢやう　人長と書り、神樂にあり、御神樂行事の者、近衞の官人勤む、貞忠記に御神態乃人乃長佐と見えたり、

〔江家次第十一十二月〕內侍所御神樂事

定召人殿上陪從六人、地下加陪從六人、諸衞召人八人、以下以所之仕人催諸衞召人、人長亦同、

〔續古事談五諸道〕人長、コレモ近衞舍人スル事也、昔尾張安居、兼時、ムチトコノ事ニタヘタリケリ、尾張時頼トイフ人長失テ後、スベキモノヤナカリケム、下野安行、兼時ガ孫ナルニヨリテ、宇治殿メシ出テ、其ノ藝ヲコヽロミ給ニ、家風オトサズ優美ナリケレバ、兼時モ近衞ニテツカウマツレル例ニヨリテ撰ビ用キラレケリ、タヾシ番長ヨリシモツカタ、人長スルコト久ク絕テ、ソノ裝束タシカニ知人ナシ、時ノ儀アリテ定メ仰ラレケリ、此安行モ程ナク失ニケレバ、中臣宗武、ソノ家ニ傳ヘズトイヘドモ、容體スグレタルニヨリテ、宇治殿メシテ此事ヲツトメシメ給ケリ、天曆御時、仲秀ト云人長アリケリ、ソレガ孫ニ紀本武ト云人長アリケリ、重代ノモノトイヘドモ、庭火ノ前ニ進ミ出テ、カナデケルコトガラ、兼武ニハ及バズトゾ時ノ人イヒケル、カヤウノ事モ、モノガラニヨルコトナリ、中原氏ノ人長、兼武ヨリ始マレルナリ、ソノ子近友兼近モ人長也、兼近、殿ノ隨身ニテアリケル時、松尾行幸ニ御供ニ候テ、社頭ニテ人長裝束シテ、還御ノ時、ソノ裝束ナガラ弓ヤナグヒオヒテ御共ニ候ケリ、扶宣モ人長ナリ、骨ナカリケルニヤ、茨田重方トイフ者ハ、五位ノ後マデ人長シケリ、今ノ世ニハ、秦氏兼方ガ流レノミスル事ニナリタリ、ソレダニハカ〲シク習ヒタルモノキコエズ、兼弘、モノヽフシニテ、始テ人長シケルニハ、フタ藍ノカウシ、ヌノヽ狩袴ニ伏組シテ、金銀ノ造花ノ枝ヲツケタリケリ、鳥羽院、小六條內裏ニオハシマシケルニ、ツカヒ陪從

人長

〔樂所補任〕保延二年丙辰

左近將監季貞左一 三月廿三日、勝光明院供養之日任、[illegible]

光時左二 十月十五日、法金剛院御塔供養之日任、散手賞、左舞人一二物相並、近衞將監初例、

〔樂所補任〕天承元年辛亥

右近將監忠方 正月二日、朝覲行幸樂賞、胡飲酒、同七日、以其賞敍從五位下、將監如元、光季例、轉任右方、二人之初例也、

右近將監近方 正月二日、朝覲行幸之日任、採桑老賞、抑採桑老、故父貴忠死去以後絕了、而依宣旨、召天王寺舞人秦公貞、所被習寫也、年[illegible]四、右舞人一二物相並、近衞將監初例、

〔西宮記臨時十〕祭使事

職掌之外、所隨身之官人、各一員、五位者、无將監、陪從官人一人、用府生之中見才者、散樂近衞一人、其外或一兩之官人有追從者、謂加陪從也、

〔江家次第十一十二月〕內侍所御神樂事

定召人殿上陪從六人、地下加陪從六人、諸衞召人八人、以下以所之仕人催諸衞召人、

〔左經記〕長元元年二月六日辛未、春日祭少將許、送陪從裝束六具、柳色下襲、半臂緒、青末濃、狩袴、二單、部服村濃、白合袴等、

〔台記別記〕仁平元年十一月十一日丁未、春日祭使、○中略辰剋於中門北簀子給舞人裝束、○中略所々饗膳、舞人十二前、黑柿机面押絹、陪從六前、朴木机面押絹、(中略)加陪從廿前、濱椿机面押紙、一員官人、陪從官人、散樂近衞、加陪從官人、加副官人、擬謂之加陪從、

〔玉葉〕承元四年三月五日癸巳、修明門院春日御幸也、○中略令敷御神樂座、被殿東第三間、以西母屋庇南北行、本末相分四行敷並之、掃部寮敷之、南廂中央間敷人長座、當陪從召人座敷也、次居衞重、內藏寮居之、次主殿官人燃庭燎於北砌、次陪從六人、本末各三人、召人六人、本末各三人、參進著座、次勸盃、次人長左近府生秦兼行事陪從召人起座、先仰主殿司御火、次仰掃部司膝突、次召笛、陪從一人就杖吹之如例、次召箏篥、次琴、次歌本末、已上儀皆同前、次人長退歸復座、陪從以下復座、

〔枕草子四〕こゝちよげなる物　神樂のにんぢやう。

樂人

左近衞府（右近衞府准レ此）

近衞四百人（今定二三百一）使部卅人（今定二十人一○中略）

大同三年七月廿日

〔源氏物語若菜三十五〕世の中にかくおはしまして、かゝるいろ〳〵のさかえを見給ふにつけても、神（○住吉）の御たすけは忘れ難くて、たいのうへ（○紫上）もぐしきこえさせ給ひて、まうでさせ給、（○中略）まひ人は、ゑふのすけ共のかたちきよげに、たけだちひとしきかぎりをえらせ給、此えらびにいらぬをば、はぢにうれへなげきたるすきものどもありけり、べいじうも、いはし水、かものりんじの祭などにめす人々の、みち〳〵のことにすぐれたるかぎりとゝのへさせ給へり、くはゝりたるふたりなん、近衞づかさの名だかきかぎりをめしたりける、御かぐらのかたには、いとおほくつかうまつれり、

〔河海抄若菜十三〕加倍從二人　近衞司例可レ勘

〔湖月抄若菜三十五〕哢（○哢花抄）問、陪從を歌人といふ事うたびとゝよむべき歟、答、陪從は臨時祭の時、歌人にては侍れど、二字をうたびとゝはよむべからざるにや、

くははりたるふたり　哢（○哢花抄）今の世にも臨時の祭などの時、陪從の外に加陪從とて、諸家の諸大夫などめしてくはへらるゝことあり、むかしは皆道の者の所役たるなり、

〔花鳥餘情十松風〕陪從には、府生の中、才あるものを用る、加陪從は、和琴、笛などふくものをいふ也、

〔花鳥餘情十八藤裏葉〕賀茂祭、春日の祭の使、近衞づかさを用らるゝは、東遊をたてまつらるゝ故也、

舞人陪從は、近衞づかさの被官たるによる也、使の出立、又返りだちに、様々の儀式ある事也、

〔三代實錄五清和〕貞觀三年四月乙巳朔、天皇不レ御二前殿一、於二右近仗下一賜二侍臣飮祿一如レ常、喚二左右近衞樂人一、於二北殿東庭一奏二音樂一、中宮別賜二中將以下近衞以上御衣幷布一各有レ差、

御輿長

〔延喜式左右近衛四十五〕凡行幸之時、御輿長五人、擇近衛膂力者、預前注交名奏之、並著紅染布衫、不帶弓箭、其料細布三端一丈四尺、紅花十五兩、隔三年請、

〔知信朝臣記〕長承四年〔〇保延元年〕二月十三日丁巳、大將殿〔〇藤原頼長〕參所々、令申慶賀給、〔〇中略〕給吉上御輿長駕輿丁等祿、〔〇中略〕御輿長六人内〔番長一人疋絹、近衛五人布各二段〕

〔定家朝臣記〕康平五年四月廿五日、給吉上幷御輿長等祿、御輿長六人、〔番長一人疋絹、近衛五人布二段、〕駕輿丁十四人、〔布二段〕

駕輿丁

〔延喜式中務十二〕時服

左近衛府四百廿五人、〔中略〕〔駕輿丁一百人、右近衛府准此、〕

〔延喜式左右近衛四十五〕凡番長八人、近衛六百人、駕輿丁百一人、〔二人擧正、十人火長、八十八人直丁、〕

凡駕輿丁百人、〔二人隊正、十人火長、八十八人丁、〕衣服料、夏隊正火長各庸布一段、丁別商布一段、冬隊正火長各庸布二段、綿三屯、丁別商布二段、綿三屯、

〔延喜式左右近衛四十五〕凡供奉行幸駕輿丁者、駕別廿二人、〔十二人擧御輿、十人執前後綱、〕皆著皂頭巾、皂緌、緋帛衫、調布襖、貲布衫、紫大纈褶、白布袴、白布帶、白布脛巾、總廿二具、〔中宮亦准此、〕貯收府庫、臨時充用、若有損破、申官請換、但笠簑請內藏寮、

使部

〔享祿本類聚三代格四〕太政官符

應定諸司使部事

近衛府廿人〔〇中略〕

延暦十四年七月十日

〔享祿本類聚三代格四〕太政官謹奏

廢省官員幷減定人數事

〔續古事談五諸道〕近衞舍人ハ、弓矢ヲグストイヘドモ、武勇ニハヲヨバヌモノナリ、宇治殿〇藤原賴通ノ御隨身ニ、四郎先生行武トイフモノアリケリ、馬ヌス人ヲトラヘテ、殿ニ井テ參タリケレバ、御隨身ハ近習ノモノナリ、カヤウノ事ケヂカヽラズトノ給テ、ハカバカシク沙汰ナカリケレバ、イツトナクカラメヲキテヤミニケリ、

〔鹽尻十七〕夫隨身は、兵仗を帶する、武備にあらずして何ぞや、宇治殿の言非也、宜哉武を忘れ、只婦女のごとくになりて、政柄武臣にとられける事、嗚呼、

〔續古事談五諸道〕神樂ハ、近。衞。舍。人。ノシワザナリ、ソノ中ニ多ノ氏ノモノ昔ヨリコトニ傳ヘウタフ、

〔今昔物語二十七〕近衞舍人於常陸國山中詠歌死語第四十五

今昔□□ノ比□□ノ□□□ト云近衞舍人有ケリ、神樂舍人ナドニテ有ルニヤ、歌ヲゾ微妙ク詠ケル、

〔今昔物語二十八〕近衞舍人共稻荷詣重方値女語第一

今昔衣曝ノ始午ノ日ハ、昔ヨリ京中ニ上中下ノ人、稻荷詣トテ參リ集ノ日也、其レニ例ヨリハ人多ク詣ケル年有ケリ、其ノ日近衞官ノ舍人共參ケリ、□ノ兼時、下野ノ公助、茨田ノ重方、秦ノ武員、茨田ノ爲國、輕部ノ公友ナド云フ止事无キ舍人共、餌袋破子酒ナド持セ列テ參ケルニ、中ノ御社近ク成ル程ニ、參ル人返ル人樣々行キ違ケルニ、艶ス裝ゾキタル女會タリ、〇中略重方ハ本ヨリ色色シキ心有ケル者ナレバ、妻モ常ニ云妬ミケルヲ、不然ヌ由ヲ云ヒ戰〇一本作諍テゾ過ケル者ナレバ、重方中ニ勝レテ立留リテ、此女ニ目ヲ付テ行ク程ニ、〇中略而ル間異舍人共此ノ事ヲ不知ズシテ上ノ岸ニ登リ立テ、何ト田府生。ハ送レタルゾト云テ見返タレバ、女ト取組テ立テリ、

〔今昔物語二十八〕近衞舍人秦武員鳴物語第十

今昔左近ノ將。曹。ニテ、秦ノ武員ト云フ近衞舍人有ケリ、

舍人

〔江家次第八七月〕相撲召合

早朝大將於宿所定手番事、右近進擬近奏、近例、左大將不必參內、年預將(中略)次將爲藏人者奏之、若無者、付藏人用本府白木杖書開字返給、[illegible]

〔延喜式四十一彈正〕凡聽左右近衛衆雅樂伎才長上者、令帶劒把笏、

〔北山抄九羽林要抄〕二孟旬

近衛次將奏曰、左右乃近衛乃府申久、其月乃上都番仁仕戸ツ末留可支劒乃八岐舍人乃名簿乃備進樂予申給度久申、

〔職官志五〕按職原鈔云、番長者、近衛舍人中撰用之、所謂近衛舍人、卽近衛、舊是中衛之類、故稱舍人、因知其人所出、亦內舍人大舍人、及近衛之色、

〔源氏物語十八松風〕近衛づかさの名だかきとねり、ものゝふしどもなどさぶらふに、さうざうしければ、そのこまなどゞみだれあそびて、ぬぎかけ給色々、秋のにしきを風の吹おほふかとみゆ、

〔河海抄八松風〕近衛の舍人は隨身也、神樂の人長は、かれらが役なり、よりて神樂の其駒をまはせらるゝ歟、

〔花島餘情十松風〕とねりいふは、官人にいまだならぬ近衛也、とねりは諸司にある事也、

〔徒然草一〕たゞ人も、舍人など給るきはゝ、ゆゝしとみゆ、

〔徒然草諸抄大成一〕近衛舍人は卽隨身也、隨身の下﨟なり、

〔江談抄三雜事〕近衛舍人得名輩

尾張安居重名安居、不改用訓云々、　六人部助利　尾張宣時　山廣景　播磨武仲　播磨定正　茨田助平

下野重行　土師武利　淸井正武

〔今昔物語二十七〕狐變女形値播磨安高語第三十八

今昔、播磨ノ安高ト云フ近衛舍人有ケリ、右近將監貞正ガ子也、法建院ノ御隨身ニテナム有ケル、

樂寮考人等、並是內考、至有才能府自試補、而今兵部省勘返云、大同元年格偁、蔭子孫、式部、兵部、散位子、留省、勳位等之類、聽本府試補、外考白丁者、勅使覆試、然後補之、件人等非格所指、須准外考白丁勅使覆試者、其三宮舍人、幷雜勘籍人、已預內考、何准白丁、又格擧大例、不勞細色、而兵部省、偏執格文、遞乖舊實、太政官處分、便弓馬者、因循舊例、本府試補之、

〔延喜式二十八兵部〕凡近衞兵衞者、本府簡試、省幷式部位子留省勳位等、便習弓馬者、奏聞補之、若蔭子孫、情願者亦准此、其外考及白丁異能者、京職諸國、具狀申送官、官下衞府試之、並得及第、具錄奏聞、若自進者、亦准此、即遣勅使覆試、及第同署更奏、然後補之、其遭喪解任、服闋願仕者、本府奏聞、訖副奏文以移送省、

〔日本後紀二十一嵯峨〕弘仁二年六月乙丑、令諸國進武藝人年卅已下、補左右近衞、

〔日本後紀十二桓武〕延曆廿四年二月庚戌、散位從四位下住吉朝臣綱主卒、綱主以善射爲近衞、後歷將曹將監、爲恪勤、宿衞不怠、好愛鷹犬、多得士卒心、仕至少將、

〔北山抄八大將要抄〕相撲召合

若有相撲人樂人等可補近衞者、早旦修奏文、次將奏之、

〔延喜式四十五左右近衞〕凡擬近衞者、預擇定便習弓馬者、入色卅人已下、白丁十人已上、修奏進內侍、奏訖即遣勅使試其才藝、騎射一尺五寸的、皆中者爲及第、步射四十六步十箭、中的四已上者爲及第、若一箭不中皮者、以二的准折、

〔北山抄九羽林要抄裏書〕擬近奏近例左不進之、直補之、右奏或被下、或不被下、承平六年七月廿八日九記、天皇御南殿、太閤被候簾中、右近衞府進擬近十四人之奏、皆樂人也、承平以來、左直衞□進件奏、右未申請、件奏付藏人奏、承平七年七月廿八日同記、今日左右近進擬近奏、而左奏已下相撲數乏不足取、右相撲依員京上、國被下左奏、不被下右奏云々、左右任數京上、而右奏不下、甚不安、其內彼六年先帝極度、何以彼年爲例云々、

〔日本後紀平城十七〕大同三年七月壬寅、左右近衛、及左右兵衛等府、近衛兵衛元各四百人、今定各三百人、

〔日本後紀嵯峨二十〕弘仁元年十二月癸巳、詔曰、天文垂象、鉤陳列衛於紫微、地理分區、金石効用於紺鉄、除兇禁暴、七德照其威、靜亂禦侮、四海服其武、弧矢之用焉自往昔、甲兵之備匪獨茲日、今左右近衛、其數減少、脫有機警、何以應乖、一張一弛、文武之道所先、觀時適時、廢置之宜斯在、其左右近衛、可復舊數焉、

〇又見享祿本類聚三代格

〔享祿本類聚三代格四〕太政官符

應定諸衛府員外舍人數事

左近衛府二百人右近衛准此　左衛門府一百人右衛門准此　左兵衛府二百人右兵衛准此

右左大臣宣、奉勅件府近衛門部兵衛等數、載在格條、而頃年之間、擬異能供節、要籍驛使等事、每府申請補任之漸、殆倍本數、論之政途、理不可然、自今以後、宜依件定之、

寬平三年十二月十五日

〔延喜式中務十二〕時服

左近衛府四百廿五人、(中略)近衛三百人、(中略)右近衛府准此、

〇按ズルニ、近衛ノ定員、元四百人ナリシヲ、大同三年百人ヲ省シテ三百人ト爲シ、弘仁元年詔アリテ舊數ニ復セリ、而シテ此ニ三百人トアリテ大同ノ數ニ同ジキハ、弘仁以後又減省セシヲ知ルベシ、

〔延喜式四十五左右近衛〕近衛六百人

〔職官志五〕左近衛府

近衛中務式、三百人、近衛式、凡近衛六百人、是併左右也、

〔續日本後紀仁明八〕承和六年八月庚戌朔、左近衛府言、補近衛事、春宮坊、皇后宮、中宮舍人、內匠、木工、雅

者以愁人所敬替、皆有例、

〔西宮記臨時十〕宿申之事

大將候、將曹率府掌以上到其在所、令府生申宿申候由、申數無定法、大將以答爲期、大將云、誰曹、府生云、某姓某丸、不申讓位、大將云、令申與、府生唯去畢、次將曹府生番長府掌次第列立、將曹宿申云々、中少將候、府生以下到向其所、令府掌申宿申候由、府生不宿申云々、

〔北山抄九羽林要抄〕警固

解陣儀、同召仰、上卿仰曰、〇中略陣解介、將監仰將曹、將曹仰府生、府生仰番長、番長仰府掌以下、不召名、只稱舍人等、

〔三代實錄三十九陽成〕元慶五年正月廿八日丁丑、是月諸衞陣多佐異、右近衞陣大將以下將曹已上座、狐頻遺尿、府掌下毛野安世宿侍陣座、狐溺其上、

〔享祿本類聚三代格四〕太政官謹奏

廢省官員并減定人數事〇中略

左近衞府右近衞府准此

近衞四百人、今定三百使部卅人、今定十人、〇中略

右件斟酌職務、今所減定、

以前伏奉今月十五日詔書、七衞府雜任以下、員伍稠疊、思從減省、卿等評議、定數奏聞者、伏奉詔書、如右、官職之設、固嫌殷繁、宜導之方、唯務簡要、是以隨時損益、權宜弛張、聖詔所及、冠絕古今、臣等不揆淺近、濫叨周行、伏膺綸旨、敢以斟量、戰悚之誠、百倍恒品、臣等商量、如前件、謹錄事狀、伏聽天裁、謹以申聞謹奏、

大同三年七月廿日

〔野々宮問答〕番長

是は任大將候故、近衞府官人は下司に候故、隨身に具し候、其下司の番長と申者に定め申候、是は隨身の中の心安き物になし候意にても可有候、大將私第にて補申候、此隨身職に付て、召具し候、隨身兵仗之宣下とは各別の事なり、

〔殿曆〕永久二年七月四日丁丑、右番長國重渡左、右番長兼弘召之、右年預將少將宗能承之、召左近長預國重可渡左由同仰了

〔百錬抄 十 後鳥羽〕建久元年十一月廿四日甲戌、以賴朝卿被任右大將、　十二月一日辛巳、右大將拜賀、〇中略左近府生秦兼平爲番長、同府生播磨貞弘爲下﨟隨身、

〔增鏡 五 内野の雪〕十二月〇寬元元年一日は、石清水の社に行幸あり、當代〇後嵯峨に始めたる度なれば、よろづ清らをつくさる、文治建久の例をまねばる、關白殿御馬にてつかうまつり給ふ、〇中略左右大將たゞいへ、されもと、の番長。。又心も詞もおよばず、いどみつくしたり、左大將のは馬にて前行、右大將のは張綱にてうつしの馬をひかせけるとぞ、

番頭

〔普廣院殿御元服記〕一永享二年七月廿五日甲子、申剋大將御拜賀供奉行列、〇中略

次御隨身番長下毛野氏春　次番頭八人〇下略

〔普廣院殿大將御拜賀雜事〕一供奉人事〇中略

一員三人　番長　近衞五人　權御隨身二人陣官人沙汰立之　番頭八人〇下略

〔貞丈雜記 四 官位〕一番頭とは、右に云近衞と云役の内にても、かしらだちたる者を番頭と號して、八人隨身に召ぐせらる、是を中﨟の隨身と云なり、

府掌

〔西宮記 臨時 十〕祭使事

追期日、本府進舞人陪從等差文、舞人一人、陪從一人、依使將仰所件使等隨上日手並所遣也、陪從依見才舞人之中番長一人、府掌一人、預此事定、若有懈怠者停行事之王

陣官人申開了由、次同類座上問國司著座否、(其詞、國司祗候ヌルカなんど云也、)廳頭申著了由、

〔名目抄 人體〕番長(バンチヤウ)

〔書言字考節用集 三官位〕番長(バンチヤウ)(近衞府隨身之上﨟)

〔貞丈雜記 四官位〕一番長と云は、義敎公御元服記に云、隨身番長一人、番頭八人、下﨟之御隨身五人と云事あり、近衞府の官の下役に、將曹府生番長近衞と云役人あり、此中番長近衞を隨身にめしぐせらるゝ也、番長とは、近衞、(近衞ノ舍人トモ云、サレドモ近衞ト計云フナリ、)と云役人、左右の近衞府にて六百人はざある內、八人弓馬の達者なるをゑらんで番長とせらるゝ、其中一人、隨身の長にして召ぐせらるゝ也、番長は隨身の頭也、是を上﨟の隨身と云なり、

〔後撰和歌集 二春〕壬生忠岑が左近のつがひのをさにて、ふみおこせて侍りけるついでに、身をうらみて侍りける返事に、○歌略

〔延喜式 十二中務〕時服

左近衞府四百廿五人、(中略)番長六人、(中略)右近衞府准此、

〔職官志 五〕左近衞府

番長(中務式六人、按六恐四誤、據近衞式、凡番上八人、是併左右也、)

〔延喜式 四十五左右近衞〕凡番長八人

〔標注職原抄 下末〕番長は、近衞舍人の中にて、上首八人を補す、大將前驅の者なり、

〔延喜式 四十五左右近衞〕凡長上番長近衞、不得預他事差遣、

〔職原抄 下〕左右近衞府

番長　近衞舍人中撰用之　上皇執政、若給兵仗大臣、及左右大將、必召仕之、大納言大將不召仕府生、大臣大將以上召加府生也、

廳頭　府沙汰人

府官人所司下知廳頭之許、
秦久澄可被補當府官人、可令下知給者、依大將殿仰、執達如件、
六月廿九日中務丞職行

〔名目抄人體〕廳頭(チヤウトウ)トノ字、ツト云ヤウニアルベシ、

〔書札禮〕元三大將出仕事
仰廳頭狀
元三可有御出仕、一員任例可被差進者、依大將殿御氣色、執達如件、
月日　左衞門尉某
左近廳頭殿

〔台記〕康治元年正月十六日庚戌、亥時參內、〇中略歸入軒廊東二間留立、(向東)引下重尻一尺許、(引上帶上也)自引之、又右近廳頭將曹久季同引也、

〔山槐記〕永曆元年八月十七日壬戌、府沙汰人大石光堅稱大將御使來云、番長中臣季近、可爲府生之由可仰下者、明後日可有拜賀云々、仍件男可爲官人云々、即仰光堅了、　十一月十七日辛卯、戌剋著束帶(縫腋、卷纓、懸緌、帶劒、相具壺胡籙、)參內、今夜中院行幸也、召府廳頭大石光堅、相尋小忌、即持來、於小板敷著之、(著次第具見去年記、)次負壺取弓、　十二月廿六日庚午、今日大將可有著陣、〇中略先入敷政門代、於宜仁門代邊問殿上時、府生大石光堅歸來云、巳二點者、(告時、依令覺悟光堅也、)次予進著端座、(北向著之、大內可當戶中央云々、)次光堅入日奏於筥、置予右邊、(座下方也)次置硯、予東向居直、開見日奏、書名字、如元卷之返給、次進移文見了、

〔玉海〕元曆二年五月廿五日丁未、右近廳頭清景來申云、來月廿日可有日吉御幸競馬、本府可用意帷、而件帷具等、爲群盜被取了、尤可有御沙汰云々、付年預將可申上之由仰了、

〔玉葉〕仁治二年正月一日、今日院拜禮、〇中略予(〇藤原道家)顚座上方催開門、(其詞、開門仕レなんど云也、)則東中門扉鳴、

十一日、以書札隨身等事伺本院〈○白河天皇〉御氣色、府生佐伯國重依不仕進、却番長中原重近可任司府生、近衛秦兼文可任番長件間事也、兼文第二也、一座下毛野武道、共中將之時隨身也、雖無別優劣、且依院御氣色任之、重近兼文各召之仰之、　十二日卯剋、府廳頭忠淸、持來府奏、加署返賜之、中原重近任府生奏也、近衛秦兼文任番長、以詞仰之、先例云々、

階忠記　承久三年閏七月〈十日任内大臣(藤原公經)同日右大將如元、〉

十日未剋、頭辨參上、大將如元宣旨、今日被仰下云々、且可奏府生事之由被仰歟、即召御隨身武延兼安等、被仰含、作法御參内之後、即可隨裝束之日也、仍賜裝束了、武延給束帶一具、兼安褐衣、

抑補府生事、本儀之以府奏付職事申入、勅許宣下勿論候也、隨而此所見も其儀候哉、但近來は是までの沙汰、更不覺候、若付職事奏聞、不及勅許候ぬれば、府生仰年預候しやらんと覺候、先公再愚身數輩補候しが府奏などを執奏は更に不覺候、猶此分を三條などへも可有御尋候歟、且近來年預將經歷輩にも可有御尋候哉、階忠にも府奏などまでは不見候、是も如申奏此由即推拜領召仰候ける歟と覺候、此後之記をも猶御覽候へ、自身府生ならで、他府生を任事、隨所望常事として覺候也、傍例は此記に番長をも奏たりげにも是は分明に近例奏聞までも不候也、〈○中略〉

廿八日　　公淸

後日内府注送此所見、

仁治二年十一月十三日

頭左中辨送狀云、左近番長秦兼躬、可被渡右云々、承候之由答之、即下知廳頭了、

寬元元年六月廿八日

隨身武澄來自男久澄可被補官人之由申之、仍書狀可給之由仰之、

同廿九日

歟、是は如然候、文章無其便候歟、委斗承候者畏悦候、抑又任大臣節會之日、其人參内還宣旨同日時者、節會之間、府生番長改著裝束候歟、其間に府生奏聞事、更無所見候乎、然者自專補之條、近代之例も不惡候歟、〇中略誠恐謹言、

四月廿八日　　公清

補府生事

小右記　治安元年七月（廿五日任右大臣(藤原實資)、廿八日大將如元、）

廿八日、大外記文義云、今日可被下大將如舊之宣旨可候内之由、關白被召仰、仍參内了、將曹正方參來云、大外記文義仰云、大將如元者可差進府生近衞一人之由乎、　廿九日、按察云、府生等以吉日可差進歟、將隨宣旨下可差進乎、

六條右府記　永保三年二月（正月廿六日任右大臣(源顯房)、廿七日大將如元、）

廿七日、今日隨身番長敦重任府生、奏文以府官人重俊付頭辨、又以近衞行利補番長之由、遣仰年預少將顯實朝臣許、　廿八日、敦重任府生宣旨被下云々、侍從中納言奉行云々、　同三月五日、敦重申慶賀始候隨身所云々、

時範記　永保三年二月（後二條）（正月廿六日任内大臣(源顯房)、廿七日大將如元、）

七日、依召參内、大臣殿爲御使參内奉謁、左衞門督御消息云、今日吉日也、仍欲上府生奏處、大内御物忌也、早取天氣可被示子細者云々、以口奏可被宣下者、歸參申此由、召府官人令書件奏（番長播磨俊貞）、次令加御判署（朝臣二字）後令取次將判署遣藏人右少辨基綱許了、（件御書被候内）宣下之後、府生信貞參仕中慶賀云々、（大殿内大臣殿）又仰云、右近衞番長下毛野武忠可爲左番長之由、可遣仰年預次將雅俊朝臣許者、（以府官人遣仰了、武忠本殿御隨身也、）

花園左府記　大治三年正月

〔拾芥抄〕中本 官位相當 正八位下 左右近醫師

〔中右記〕元永三年(○保安元年)十二月十七日、今夕依有除目下名催之由、(中略)醫道者只三人也、(中略)中原貞義任左近醫師也、於此一人者、所書入武官也、

〔拾芥抄〕中本 官位唐名 府生 衞史

〔延喜式〕中務十二 時服

左近衞府四百廿五人、(中略)府生六人、(中略)右近衞府准此、

〔職原抄〕下 左右近衞府

府生 同前(○近衞舍人樂人舞人等任之、)大將判授之、

〔殿暦〕永久二年七月三日丙子、今朝余(○藤原忠實)番長季俊、依院仰令補府生、仍余給馬、召頭中將通季仰之、(中略)抑近日、左近府年預將、中將信通云々、(本是頭中將通季)仍酉剋許信通を召仰之、戌剋許、季俊來申慶賀、余見之、

〔有職問答〕五 一將曹府生事

此兩官、隨身の家に任ずるよし被仰出候キ、兵仗を給人に相隨由候、何れの家いかなる官職の人中御給候哉、(勿論候、將曹ハ樂人ナドモ任候、府生ハ大將ノハカラヒニテ任候官候、兵仗ハ攝關大臣ナド可然之人、宣下セラレテ賜候也、)

〔園太暦〕貞和二年四月廿八日、今朝三條前内府(○藤原實忠)并内府(○藤原公清)被送狀、緘左了、(中略)

抑補府生間事、先日委細申承候き、本議之上者、奏聞條可宜歟之由治定候き、府生自然管領之分候者、理不盡歟之由存候、但以遲怠爲例、習而成俗候歟、然者毎事新也と存候、如何可奉公にて候はゞ其次第も不審候、治安以後記見出候分注進候、以此記等之趣且了簡仕候分は奏文を令書廳頭加署付職事、職事下宣旨於上卿、上卿下知外記、其後廳頭可差進一府生及近衞二人候歟、就是奏文殊不審候、如敍位除目府奏候歟、但番長望府生事、不見習之樣候、如何、其文章又大略載府中之勞功候

リ、聖武天皇神龜五年八月甲午、中衞府ヲ置ル、トキ、將監四人ヲ置ル、是將監ノ始ナリ、〇中略今ノ世ハ一府二十人ナリ、

按ニ、今ノ世其職掌ハ空ク有名無實ニシテ、却テ官員古ニ倍スルモノハ、公卿ノ息、元服ノトキ侍從ニ任ジテ、侍官ノ列ニ居スルニ同ク、樂人御隨身ノ族、將監將曹ニ任ジテ有官ノ思ヲナシ、其後兼國シテ敍爵スルノ階梯トナスユヘナルベシ、是官員ノ加増スルハ繁榮ナルニ似テ、却テ官位ノ廢レタル謂ナリ、

〔續日本後紀二十仁明〕嘉祥三年二月乙丑、陸奧出羽按察使從四位下藤原朝臣富士麻呂卒、〇中略天長十年正月任少進、尋遷右近衞權將監、〇下略

將曹

〔倭名類聚抄五職名〕佐官　近衞府曰將曹、(中略)皆佐官

〔伊呂波字類抄左官職〕將曹已上サウクワン用近衞府(中略)

〔書言字考節用集三官位〕將曹シヤウサウ近衞府主典、唐名親衞録事、

〔職原抄下〕將曹唐名親衞録事

〔拾芥抄中本官位唐名〕將曹衞録事　兵曹　騎曹

〔延喜式二十中務〕時服

左近衞府、四百廿五人、(中略)將曹四人、(中略)右近衞府准此、

〔拾芥抄中本官位相當〕從七位下　左右近將曹

〔百寮訓要鈔別註七〕將曹　相當ハ從七位下ナリ、天平神護元年八月甲子定、續日本紀當府ノ主典ナリ、〇中略其官員、舊例一府四人ト見ヘタリ、然シテ近代ハ一府ニ廿人ナリ、

醫師

〔延喜式二十中務〕時服

左近衞府四百廿五人、(中略)醫師一人、(中略)右近衞府准此、

るまじとの給へば、物みんこさをいとおかしとおもへり、

〔湖月抄螢二十五〕〇孟津抄官人は、將監、將曹、府生を云、

〔山槐記〕永曆元年八月十七日壬戌、府沙汰人〇府生大石光堅、稱大將御使來云、番長中臣季近、可爲府生之由可仰下者、明後日可有拜賀云々、仍件男可爲官人云々、即仰光堅了、

〔都氏文集四狀〕爲左近衞官人上大將狀

請被賜官人等補近衞狀

右謹按故實、式兵兩省官人、各賜補任人、其迹猶存、左右近衞官人、亦賜近衞、至事已寢、爾後、不參頗多、見任數少、差充諸處、或有不足、今請准據舊例、賜官人等以補近衞、但至所補、必簡藝能、不參之輩、便從解却、宿衞官人等、星夜不眠、霜曉□起、比彼二省之劇、已非一日之論、方今上有慶賀、下當頻之幸、遇將府鷹揚之秋、即是士卒皀藻之日、伏賜採察、被許容、謹言、

〔名目抄人體〕陣官ヂンクワン或官人

〔江次第抄三〕陣官　將監將曹也

〔拾芥抄中本官位唐名〕將監衞長吏　親衞校尉　衞將軍長史　錄事參軍　千牛長史

〔職原抄下〕將監相當從六位上

〔寬平御遺誡〕左右近衞將監敍位之事、追昔例、左右遞隔年敍之、而今敍位之事、不必每年、宿衞之勤、殊倍他府、始自舍人、至判官、置〇置作署一積四五十年、殆難待其運、今須復近代之例、每有儀式之敍位、左右共敍之、將勵宿衞之人、新君愼之、

〔官職秘抄下〕左右近衞府

將監　舊例一府四人也、近代及十餘人、

〔百寮訓要鈔別註七〕將監　相當ハ從六位上ナリ、天平神護元年二月甲子、定、續日本紀是當府ノ判官ナ

〔源氏物語九葵〕大將のかりの隨身に、殿上のぞうなどのする事は、つねの事にもあらず、めづらしき行幸などのをりのわざなるを、けふは右近のぞうつかうまつれり、

〔原中最秘抄上葵〕私云、かりの隨身とは、其日ばかりなどいふこゝろ也、殿上のぞうとは、左右近將監の藏人をかけたるなり、さて殿上のぞうといふ也、近衛府大將は、かみ、中少將は、すけ、將監は、せう、將曹は、さうくはんにあたる也、此卷には左近藏人のぞうとかき、須磨の卷には、左近のぞうの藏人とかけり、同事也、

〔東野州聞書〕一左近大夫と云官は、左近將監にて有ながら、從五位下に敍たるを大夫と申侍也、昔く人のさたし侍らぬ事也、猶々子細を人に可尋也、

〔有職問答三〕一將監事、爵をして後は、他人は大夫將監と書共、我は不書之(此分候)、又舞人隨身などは、將監に任たるをば判官と稱之、(此事當座無覺悟候)書札にも他人は判官と書之、我は將監と計書之、此段殊巨細被仰下度候、

〔官職知要中〕以敍留判官稱大夫之事

敍留者、官位相當の人、位階をのぼりて、官如元とゞまるをいふ、敍はのぼる也、留はとゞまるなり、凡諸司判官は相當六位也、しかるを敍五位而官如元なる時は、○中略左右近衛將監ならば、左近大夫、右近大夫といひ、○中略又將監を或左近右近大夫將監、或大夫將監ともみえたり、各顯職之分、かくのごとし、

〔百寮訓要鈔別註七〕按ニ、六位諸大夫ハ、敍留ヲ規模トスル故ニ、大夫將監ト稱ス、又或ハ左近大夫、右近大夫ナド云モ、大夫將監ノ事ナリ、但侍ノ六位モ將監ニ任ズレドモ、五位ニ敍スレバ其職ヲ去ルナリ、敍留ハ例ナシ、

〔源氏物語二十五螢〕左のつかさに、いとよしある官人おほかるころなり、せう〳〵の殿上人におと

〔百寮訓要鈔別註七〕近代中將幷少將マデ、各權官計ニテ、正官ノ事ナシ、世人大中納言ニハ正官ナク、權官ノミナルコトヲ知テ、其正權ノ差別ニ異說ヲ構ヘテ、區々ノ論ヲナセ共、中少將ニ正官ナク、權官計ナルコトヲ論ゼズ、今大中納言、中少將、共ニ正官ナク、權官計ナル事ヲ考論セバ、又其說ヲ考ルノ一助ニモナルベキカ、

將監

〔倭名類聚抄五職名〕判官　近衞曰將監(中略)皆萬豆利古止比止

〔伊呂波字類抄世官職〕將監近衞(中略)已上七ケ

〔北山抄八大將要抄〕內印付前驅事

內印時爲上卿者、召將監云、○○政人(不別左右)

〔江家次第十八〕陣覽內文儀　上卿召曰、近衞司、(大將者稱政人○○人戶)將監在陣座稱唯參進、候小庭、

〔明月記〕建久七年四月廿二日、昏黑參內、○中略大進長兼昇奧座、(乍立昇)座上卿前(上卿東間)申警固(○加由中○)(○警固宣)上卿問云、誰ソ、各稱籍○中略ミギノチカイマモリノツカサノマツリゴトビト藤原兼範(○時右近將監)

〔下學集上官位〕將監(シヤウゲン)親衞校尉

〔書言字考節用集三官位〕將監(シヤウゲン)(左右近衞府列官唐名親衞校尉、今按、古書所謂左右近衞尉是矣、)

〔[illegible]職問答四〕一近衞府に、少將迄は左右近衞少將と本式の位署に候、其列官にては候へども、左右近將監とは(常に中付候)申候、衞の字を不加候事如何、左右近衞將監將曹共可稱候哉、府生同前、(中候ハン、不可有難候事候歟、)

〔故實拾要十三〕左右將監　相當從六位上　唐名親衞校尉

是帶弓箭兵仗、禁中ノ庭上ニ候シテ奉守護御殿也、將監將曹等ハ、依爲地下人庭上ニ候スル也、本式ハ左近衞將監、右近衞將監ト云也、

〔空穗物語祭の使〕むまづかさの御むまに右。近のせうよりはじめて、はいのりつゝ、むまゆみつかうまつる、

〔官職秘抄下〕左右近衛府

舊例一府、中將一人、少將二人、中古以降、中少將各二人、而一府八人例、始自承德二年、又久壽三年院宣云、自今以後、左中將四人、少將四人、右中將四人、少將四人、幷十六人、宜爲定數、近來超過此員數畢、

〔職原抄後附〕左右近衛中少將各四人、幷十六人、宜爲定數、其外闕不可裁闕官帳、(保元元年正月二十九日院宣、後憲本、)

〔拾芥抄中本官位唐名〕近衛中少將、本數十六人也、左右幷定也、而久安比、被定十八人、近年剩任繁多也、

〔明月記〕元久元年四月十三日、在朝中將皆非人、或放埒、狂者、尾籠、白癡、凡卑下﨟、不可超上﨟、非器上﨟、無昇進之道理之由評定云々、毎除目剩加五十人、末代中少將不異匹夫、

〔續日本紀稱德二十六〕天平神護元年二月丙寅、以從四位下牡鹿宿禰嶋足爲近衛員外中將、　八月庚申朔、從三位和氣王、坐謀反誅、(○中略)參議從四位下近衛員外中將兼勅旨員外大輔式部大輔因幡守粟田朝臣道麻呂、(○中略)與和氣善、數飮其宅、

〔公卿補任稱德〕天平寶字九年(乙巳○天平神護元年)

參議從四位下粟田朝臣道麻呂(正月勳三等)

(頭書云)受領補任云、寶字八年十月巳後、權中將兼因幡守、

〔續日本紀稱德二十八〕神護景雲元年八月丙午、外從五位下丈部直不破麻呂爲下總員外介、近衛員外少將如故、

〔公卿補任桓武〕寶龜十二年(○天應元年)

參議從四位上紀船守(六月廿七日任、權中將如元、○中略)

天應元年四月癸卯從四位上、五月乙丑爲近衛權中將、

〔類聚國史百九十風俗〕延暦十九年十一月庚子、遣征夷大將軍近衛權中將陸奥出羽按察使從四位上兼行陸奥守鎭守將軍坂上大宿禰田村麻呂、檢按諸國夷俘、

〔薩戒記〕應永卅三年三月廿九日癸亥、今日除目入眼也、〇中略後日大外記師勝朝臣來談條々、〇中略
一尻付事、左右大將ハ左近衞大將ト被書之、而於中將者、不被載衞字、左近權中將ト被注之、此
事如何、不載衞字者、大將中將不可載之、又被載之者、共以可被注歟、而不同、尤不審事也、

〔有職問答三〕一中。納。言。中。將。之事、他人ハ中納言中將と書共、自書には中納言と計書之、參。議。の。中。將。
又同之、次二位の中將、三位中將と他人は書共、我は只中將と書之、
是も本式の位署には可替にて候哉此分候

〔日本後紀八桓武〕延暦十八年四月辛丑、勅、近衞府、〇中略加中將一員、

〔享祿本類聚三代格四〕詔、中衞府者、職同近衞、〇中略中衞府者、爲右近衞、復置中將、亦宜□□□□□□
□准近衞、主者施行、
大同二年四月廿二日〇年月日原缺、依日本紀略補、

〔百寮訓要鈔別註七〕中將ヲ置レタル始ハ不詳、聖武天皇神龜五年八月ニ、中衞府ヲ建玉フトキ
ハ、大將少將將監將曹ノミニテ中將ノ號ナシ、其後天平寶字二年、中衞ヲ鎭國衞ト改ラレタル
ヨリ後ニ、中將ヲ加ヘ置レシニヤ、稱德天皇ノ天平神護元年ニ、中衞府近衞府ト兩府ニ定メラ
レタル時ハ、兩府ニ各中將ノ號アリ、其任ゼラレタル人ハ、從四位下牡鹿宿禰嶋足、從四位下石
上朝臣宅嗣、共ニ中將タリ、是ヨリ以前ハ其號國史ニ所見ナシ、然レバ國史ニハ嶋足宅嗣ヲ以
テ其始トスベキカ、又公卿補任ニハ、大同二年、改近衞、爲左近衞、改中衞、爲右近衞、此時從四位下
安部兄雄、爲左近衞中將、從四位下藤原眞夏、爲右近衞中將、是補任ニ中將ノ號ノ見ヘタル始ナ
リ、

〔公卿補任平城〕大同四年己丑
山陰道觀察使　從四位下藤眞夏　大同二年四月十九日從四下、同廿八日右近中將、

ヲル丶トキニ、中將ヲ爲從四位上官、曰驍騎將軍員外將、少將ヲ爲正五位下官、曰次將トアレバ、元トハ少將ヲノミ次將ト云タルナリ、然ルニ天平寶字八年九月丙辰、勅官號ヲ舊名ニ復スルトキ、驍騎將軍員外將ノ號ヲ除キタレバ、其時ヨリ中將ヲモ少將ト共ニ次將ト稱シタルニヤ、其職トスル所ハ、共ニ近府ノ次官ナレバ、次將ノ號、尤相アタレルモノナリ、是ヨリ以降、往々次將ト稱ルハ、中少將ヲ混ジテ云ヘリ、

〔西宮記正月〕節會〇中略

天皇出御著靴、近〇仗〇稱警蹕、

〔北山抄九羽林要抄〕元日節會

天皇御南殿、左右近衛入自日華月華兩門、左次將出敷政門、到日花門下、陣南階東西、〇中略宸儀著御座、近仗稱警蹕、左中將發聲、即立仗居胡床、

〔江家次第一正月〕元日宴會

天皇著御帳中倚子、〇中略近仗稱警

〔江次第抄一〕近仗稱警　近仗謂近衛次將也

〔故實拾要十二〕中將　相當從四位下　唐名羽林中郎將、親衛中郎將、

是武官ナリ、本式ハ左近衛中將、右近衛中將ト云、於禁中弓箭兵仗ヲ帶シテ、奉親衛天子官也、雖任中將、位階四位ナレバ殿上人ト云、又雖爲中將、敍三位公卿也、但中將ノ時敍三位者、攝家清華家、大臣ノ子、若ハ孫ナラデハ無敍三位中將、都テ堂上諸家中任官ノコト、其家々ノ例ヲ以テ昇進アルコト也、依之任官ノコト、猥リニ不能競望者也、

少將　相當正五位下　唐名羽林大將、親衛郎將、

是武官也、本式ハ左近衛少將、右近衛少將ト云、於禁中弓箭兵仗ヲ帶シ、天子ヲ親衛シ奉ル官也、

〔小右記〕長和三年正月七日甲午、今日白馬節會、○中略内辨召二左近中將經房一給、其詞失、召詞云、左乃近守官乃源朝臣者、權大佐三箇字落、諸卿屬レ目、

〔殿暦〕康和五年正月七日、宣命見參等を取二副笏一、昇殿著座、召二參議一給之、其詞、左ノチカキマホリノツカサノカリノオ○ホ○井○ス○ケ○、ミナモトノアツム、顯通朝臣同進給之、○顯通時左近衞權中將

〔明月記〕建久七年四月廿二日、昏黑參内、○中略大進長兼昇二奥座一作昇、立二座上一卿前、上卿東面申二警固一○賀茂祭由、○中略上卿問云、誰ソ、各稱籍、

稱籍事

ヒダンノチカイマモリノツカサノカンノス○ナ○イ○ス○ケ○藤原定家○定家時左近衞權少將

〔仙源抄〕近衞府ニテハ、○中略中將ハスケ、右中將ハ右ノスケ、少將ハスナイスケ、

〔百寮訓要抄〕左近衞府　中將親衞中郎將、羽林將軍、云二羽林一、近衞介と申、

〔拾芥抄中本官位唐名〕中將親衞中郎將千牛將軍　羽林中郎將衞將軍亞將　親衞將軍羽林將軍　少將同上、今以二中少將一號二亞將次將一、親衞郎將、羽林中郎將、又羽林郎將、千牛中郎將、

〔標注職原抄別記上〕唐名

諸官の下に、異朝の官名を記したるを唐名といふ、○中略殊に武家ざまなどにては、中將少將といはむよりも羽林次將といひ、○中略正しとおぼえたる人多し、

〔江家次第正月一〕四方拜事

近衞次將取二御劍一前行、

〔百寮訓要鈔別註七〕左近衞府

中將　相當ハ從四位下ナリ、天平神護元年二月甲子ノ定、續日本紀當官ハ近衞府ノ次官ナリ、故ニ中將少將ヲ共ニ次將トス、次ノ字、清音ニ讀テ、支世字ト訓ズ、次將ノ號ハ、天平寶字二年八月、中衞ヲ鎭國衞ト改

中少將

〔古今著聞集一神祇〕應保二年二月廿三日、中納言實仲卿、日吉行幸行事の賞にて、從二位をゆるされける、後德大寺左大臣、〇實定同官にてこえられにけり、なげきながら時々出仕せられけれども、同日には出仕なかりけり、〇中略かくて年月をふる程に、治承元年三月五日、妙音院〇藤原師長のおとゞ、內大臣にておはしましけるが、太政大臣にのぼり給ひて、小松の大臣、〇平重盛大納言の左大將にて侍りけるが、內大臣にのぼられけるかはりに、大納言にかへりなりつゝ、六月五日、內大臣程なく大將を辭し申されければ、さりともこの闕にはと、たのみ深かりけれども、とかくさはりて月日の過ぎければ、この望成就せば、嚴島に詣ずべき由、心の中に願を立てられける程に、十二月廿七日、遂に左大將になられにけり、若宮〇春日の御託宣も思ひ合せられ、嚴島の宿願も賴ありてぞ思ひ給ひける、〇又見源平盛衰記

〔倭名類聚抄五職名〕次官　近衛府曰中少將(中略)皆須介已上

〔標注職原抄下末〕少將は大中少の次を以ていへば、中將の次なれど、和名抄に、中將少將共に須介と訓たれば、大將を長官にして、中將少將の次官なる事論なし、

〔伊呂波字類抄須官職〕將スケ用近衛

〔書言字考節用集三官位〕中將左右近衛府、唐名羽林中郎將、又云虎賁中郎將、

〔源氏物語二十五螢〕てつがひのおほやけごとにはさまかはりて、すけたちかきつれ參りて、さまことに、いまめかしくあそびくらしたまふ、

〔藻鹽草十五人倫異名〕中少將
すけたち源氏にいへり、中少將たちなり、

〔源氏物語三十藤袴〕大將〇鬚黑は、この中將〇柏木はおなじ右の。すけ。なれば、つねによびとりつゝ、ねんごろにかたらひ、おとゞにも申させ給けり、

レデ候ベキト諫申ケレ共、ゲニモト思召タル御氣色モナシ、

〔源平盛衰記 三〕成親望大將事

妙音院入道師長、其時ハ内大臣左大將ニテオハシケルガ、太政大臣ヲ申サセ給ハンガタメニ、大將ヲ辭シ申サレケリ、今度ハ後德大寺實定卿、御理運ノ大將也、若又殿ノ三位中將師家（○藤原基房子）ナンドヤ成給ハンズランド申ケル程ニ、新大納言成親卿、ヒラニ被望申ケリ、院ノ御氣色モヨカリケレバ、内外ニ付テ奏申ケル上ニ、諸寺諸社ニ樣々ノ大願ヲ立テ祈申、大納言自春日ノ社ニ七箇日籠テ新誓シ給ケレ共、指テ驗ナケレバ、貴僧ヲ八幡宮ニ籠テ、眞讀大般若ヲ始給ヘリ、眞讀半分計ニ成テ、高良大明神ノ御前ナル橘ノ木ニ、山鳩二羽出來テ食合、落テ死ニケリ、大菩薩ノ第一ノ仕者也、是直事ニアラズトテ、時ノ別當聖清、此由ヲ奏聞ス、則神祇官ニテ御占アリ、天子大臣ノ非御愼、臣下怪異トゾ申ケル、成親卿ハ、コレニモ更ニ恐ズ、猶又賀茂上社ニ仁和寺ノ俊堯法印ヲ籠テ、孔雀經ノ法ヲ行、下ノ若宮ニハ三室戶ノ法印某籠テ、荼吉尼ノ法ヲ修ス、七箇日ニ滿日、晴タル空俄ニ曇、雷電雲響キ、風吹雨降ナンドシテ、天地震動スル事二時バカリ有テ、彼寶殿ノ後ノ杉ニ雷落係ッテ燃ケリ、雷火他ニ不移トコソ云傳タレドモ、若宮ニ移テ社ハ燒ニケリ、神ハ不享非禮ト云事ナレバ、非分ノ事ヲ祈申サレケレバ、係ルフシギモ出來ニケリ、大納言ハ、僧モ法モ輕クテ、信心ガナケレバコソ、神モ不法ノ祈誓ヲトガメテ、加樣ノ懈怠モアレトテ、七日精進シテ、下社ニ七箇日籠テ、所願成就ト被申ケリ、七日ニ滿ズル誰カレ時バカリニ、夢現トモ覺ズ、赤衣ノ官人二人來リテ、大納言ノ左右ノ手ヲ引張、社頭ノ白砂ニ引落ス、コハイカニトオボス處ニ、大明神、御殿ノ戶ヲ推ヒラカセ給ヒテ、カク、

櫻花賀茂ノ河風恨ムナヨ散ルヲバワレモエコソトヾメネ、ト高ラカニ大納言ノ耳ニ聞エケレバ、身ニシミオソロシクテ、大將ノ所望ハヤミニケリ、

に、院、近衛烏丸の陣口に御幸なりて、仰下さるゝよしを承りて、罷り歸るべきよしを申させ給ひければ、力及ばせ給はで、その夜召しおほせありけり、やんごとなかりけることなり、

〔平治物語〕一信頼信西不快事

爰ニ近來、權中納言兼中宮權大夫右衛門督藤原朝臣信頼卿ト云人アリキ、人臣ノ祖、天津兒屋根尊御苗裔、中關白道隆八代後胤、播磨三位季隆ガ孫、伊豫三位忠〇忠原作中、今改隆ガ子ナリ、然レドモ文ニモアラズ武ニモアラズ、能モナク藝モナシ、只朝恩ニノミ誇テ昇進ニカヽハラズ、父祖ハ諸國ノ受領ヲノミ經テ、年闌齡傾テ後、僅ニ從三位迄コソ至リシカ、是ハ近衛司、藏人頭、皇后宮司、宰相中將、衛府督、撿非違使別當、此等ヲ僅二三箇年ノ間ニ經昇テ、年二十七ニシテ中納言右衛門督ニイタレリ、一ノ人ノ家嫡ナドコソ、加樣ノ昇進ハシ給フニ、凡人ニ於テハ、イマダ如此ノ例ヲ聞ズ、又官途ノ身ニアラズ、俸祿モ猶心ノ儘也、角ノミ過分也シカドモ、猶不足シテ、家ニ絶テ久シキ大臣ノ大將ニ望ヲカケテ、凡ヲホケナキ擧動ヲノミシケリ、去バ見ル人目ヲ塞キ、聞者耳ヲ驚ス、微子瑕ニモ過、安祿山ニモ超タリ、餘桃ノ罪ヲモ恐レズ、只榮花ノ恩ニゾ誇ケル、其比少納言入道信西ト云者アリ、〇中略或時信西ニ向テ上皇〇鳥羽仰ナリケルハ、信頼ガ大將ヲ望申ハ如何、必シモ重代清花ノ家ニアラザレドモ、時ニ依テナサルヽ事モ有ケルトゾ傳ヘ聞召ト仰ラレケレバ、信西、スハ此世中、今ハサテト歎カシクテ申ケルハ、信頼ナドガ大將ニ成ナバ、誰カ望ヲカケ候ハザラン、君ノ御政ハ司召ヲ以先トス、敍位除目ニ僻事出來ヌレバ、上、天ノ聽々ニ背キ、下、人ノ貶ヲウケテ、世ノ亂ルヽ端也、其例漢家本朝ニ繁多ナリ、サレバニヤ阿古丸大納言宗通卿ヲ、白河院、大將ニナサント思召タリシカドモ、寛治ノ聖主〇堀河御許サレナカリキ、〇中略況近衛大將ヲヤ、三公ニハ列スレドモ、大將ヲバ經ザル臣ノミアリ、執柄ノ息、英才ノ輩モ、此職ヲ前途トス、信頼ナドガ身ヲ以テ大將ヲケガサバ、彌奢ヲ究テ、謀逆ノ臣トナリ、天ノ爲ニ亡サレ候ハン事、爭カ不便ニ思召サ

〔百寮訓要鈔別註七〕幕下、幕府、大樹ナドヲ以テ、大將ニ充ルハ非ナリ、各征夷大將軍ニ宗合シテ宜キ唐名ナリ、

〔日本紀略桓武〕延暦十一年四月乙巳、勅近衛中衛兩府大將、元從四位上官也、去天平神護元年、改爲正三位官、宜依舊爲從四位上官、

〔類聚三代格五〕太政官謹奏

近衛府

大將一員

右元正〇正恐從誤四位口官、今定從三位官、〇中略

以前雖設官分職令員有限、而斟酌閑繁取捨時宜、恒典通論善政所先、今者衛府寄隆、職務尤重、伏請使昇置品員、爵秩相當、臣等商量所定、具件如前、謹錄事狀、伏聽天裁、謹以申聞謹奏、聞、

延暦十八年四月廿三日〇日本後紀又見同日

〔拾芥抄中本官位相當〕從三位左右大將、令不見、

〔北山抄八大將要抄〕和漢官號

左近衛府　大將從三位官也、從三位大納言兼大將者、舊例其署所大將從三位兼守大納言云云、近代所書、從三位守大納言兼大將云々、可否未決、其家號等、不必書近衛字、

〔古今著聞集三政道忠臣〕德大寺左府、中院右府を越えて右大將になり給ひにけり、保延五年十二月十六日、實能任右大將、同年十一月二日〇公卿補任爲保延六年二月廿二日内大臣辭左大將、十二月七日雅定任左大將、宇治左府內大臣左大將にておはしけるが、中院右府の料に左大將を辭し申されたりけるに、崇德院、德大寺右府を左に轉せさせんと思しめして、しばらくおさへられけり、中院右府のことをば、鳥羽院さきりに執し申させ給ひけれども、猶事ゆかざりければ、保延六年十一月廿五日

大臣大將者、次將自參申之、納言大將者、令官人申之、可用將監歟、家嫡大將、雖納言次將自參申之、別儀也、

〔北山抄八大將要抄〕倭漢官號
左近衛府〇中略親衛大將軍、左右羽林大將軍、唐朝之號也、作文或書之、

〔拾芥抄中本官位唐名〕近衛大將チカキマモリノツカサ左右(中略)親衛大將軍羽林大將軍千牛大將軍虎牙大將軍

〔林下集雜下〕大將になりてのち、賴政朝臣のもとへ申おくれる、
ゆきつもる年のしるしに花のさくはのはやしをばなどかたづねぬ
かへし
鳩のゐるつえしもたべば花のさくはのはやしへもいるべきものを
おなじ歌を、師光朝臣のもとへつかはしたりしかば、
はのはやし花さく春のうれしさはつゝむ程なり谷のうもれ木

〔撰字造語抄官位〕はのはやし〇中略

按ずるに、大將、中將、少將の唐官、羽林大將軍、羽林中郎將、羽林次將なれば、羽林の字にすがりて、はの林とはよめる也、されど詞もいうならずこそきこゆれ、

〔六代勝事記〕征夷將軍二位家、〇源賴朝西海の白波を平らげ、奧州の綠林を靡かして後、錦の袴をきて入洛、黃門亞相をへて羽林大將軍〇右大將に任せり、拜賀の儀式、希代の壯觀也、

〔公卿補任崇德〕保延五年己未
左大臣從一位源有仁三十七、左大將、十二月十四日、辭幕下、

〔三內口決〕一幕事
禁中左右近之陣有幕、大將ヲ號幕下事者、此子細ニ候、大將中將少將等、平生此近場ニ在陣之心ニ候、

契沖阿闍梨なざくはしく云はれたり、こゝの三笠山は、通親公、時に參議左中將におはせし故に、かくよまれたるなり、〇兵衞以下、清水濱臣標註、

〔新古今和歌集〕〔雜下十〕ふみつかはしける女に、おなじつかさのかみ〇右近衞大將なりける人、かよふときてつかはしける、

藤原義孝〇右近衞少將

しら雲のみねにしもなざかよふらんおなじみかさの山のふもとを

〔多武峯少將物語〕兵衞の佐の君〇藤原為光こそ、たうの少將君〇為光兄高光の御かはりに少將になり給ひて、よろこびに、この中納言殿〇藤原師氏に參り給へるを見給ひても、又せきやりがたき御けしきなり、中の君少將〇為光は、山の君〇高光のかはりとて、

たがはずやおなじ三笠の山の井の水にも袖をぬらしつるかな、北の方、

逢ふことすくなき身にはあはれなる三笠の君がかはりと思へば、〇中略兄君のなりいで給はん後に、立ちてありかんとこそ思ひしか、悅にありかん事の悲しき事と、の給ひけれど、いかゞはせんとぞありき給ひける、かくて近衞寮の人來て、歌ひのゝしれど、何の嬉しげもなくて、しほたれ給ひける、

名に立てる三笠の山に入り來ても涙のあめになほぬるゝかな、かへしうけ給はる人の聞えける、

三笠山雨は漏らじをいにしへの君がかざしの露にぬるゝぞ

〔林下集〕〔雜下〕大將になり侍し時、俊成入道の申おくる二首

雲のうへや近きまもりとなりぬればほしのくらゐもうたがひぞなき

三笠山さしのぼりぬるうれしさをあはれ昔の人にみせばや

〔江家次第〕〔八七月〕相撲召仰

大將

〔倭名類聚抄 五職名〕長官　近衞府曰大將、(中略)已上皆加美

〔下學集 上官位〕左右近衞大將(コンヱノタイシヤウ)　羽林大將軍

〔節用集 下官位〕近衞大將(コンヱノタイシヤウ)　羽林

〔倭漢三才圖會 九官位〕大將

左近衞大將、右近衞大將、今唯稱左大將、右大將、

〔拾芥抄 中本官位唐名〕近衞大將(チカキマモリノツカサ)　左右

〔空穗物語 嵯峨の院〕花さそふ風、ゆるにふける夕暮に、花雪のごとくふれるに、大將ふみ奉りに、やなぐひおひて、かうぶりに花雪のごとく散て、右の。ち。か。き。ま。も。り。の。つ。か。さ。の。か。み。藤原のなかただと申給こゑ、いとたかういかめし、

〔八雲御抄 三下異名〕近衞大將　みかさ山 中少將同之

ちかきまもりと云、次將は常事也、大將をも可謂也、近守なり、所謂同事也、源氏物語に、おほやけのちかきまもりを、わたくしの隨身といへり、是舍人事なり、

〔原中最秘抄 上〕大將の和名、みかさ山、お。ほ。き。ち。か。き。ま。も。り。といへり、

〔後撰和歌集 十五雜一〕兼輔朝臣、宰相中將より中納言になりて、又の年、のり弓のかへり立のあるじにまかりて、これかれ思ひを述ぶるついでに、　兼輔朝臣

故鄉の三。笠。の。山。は遠けれどこゑはむかしのうとからぬかな

〔月詣和歌集 六雜上〕ものの申ける女の、兵衞佐なりける人にかたらひつきぬときゝて、つかはしける、　參議通親

かしは木の葉守の神のたゝればや三笠の山をさしはなるらん

兵衞を柏木、大中少將を三笠山と異名する事は、後撰拾遺等の歌にはじまれるよし、顯昭法橋、

沿革

〔續日本紀 稱德二十六〕天平神護元年二月甲子、〇三日 改授刀衛爲近衛府、其官員大將一人、爲正三位官、中將一人、爲從四位下官、少將一人、〇一人、延喜中務式、享祿本類聚三代格作二人、 爲正五位下官、將監四人、爲從六位上官、將曹四人、爲從七位下官、〇授刀衛條當參看、

〇按ズルニ、享祿本類聚三代格ニ、近衛府ノ官位ヲ定ムル勅アリテ、三月二日ニ係ク、

〔公卿補任 稱德〕天平寶字九年 乙巳、改正月七日爲天平神護元年、二月改授刀衛爲近衛府、有大將已下、

〔日本紀略 平城〕大同二年四月己卯、〇二十二日 詔云々、近衛府者爲左近衛、中衛府者爲右近衛、

〔公卿補任 平城〕大同二年四月廿二日、改近衛府爲左近衛、改中衛府爲右近府、復置中將左右近衛此始也、

〔北山抄 八大將要抄〕和漢官號

左近衛府 令外官也、本近衛府、天平神護元年、勅置之、大同二年、詔爲左近衛府、

〔官職秘抄 後附〕令外官 云新加、官是也、

左右近衛府 元近衛中衛也、神龜五年八月、置中衛府、又天平寶字三年十二月、置授刀衛、天平神護元年二月、改授刀衛爲近衛府、大同二年四月、以近衛爲左近衛、以中衛爲右近衛、然而天平、

〔職原抄 下〕諸衛

左右近衛府 元者、近衛中衛也、平城天皇御宇大同二年、勅以近衛爲左近衛、以中衛爲右近衛、唐朝殊重此職、統領諸宿衛禁軍故也、本朝又爲重任、

職員

〔享祿本類聚三代格 四〕勅

近衛府

大將一人 正三位官　中將一人 從四位下官　少將二人 正五位下官　將監四人 從六位上官　將曹四人 從七位下官

醫師一人　府生六人　番長六人　近衛四百人

天平神護元年三月二日 〇續日本紀作二月三日

騂於右近衛馬埓、命先騎近衛等馳試御馬之遲疾、日暮還宮、

〔文德實錄九〕天安元年六月壬申、遣勅使於左近衛馬場、令試春宮坊擬帶刀舍人步騎兩射、各定其科、

〔北山抄八大將要抄〕野行幸　延喜廿一年、北野行幸、先御右近馬場供御膳、本府獻物、雖停諸司獻物、猶馬場所出穀栗聽之、

〔榮花物語五浦々の別〕北野にまいり給ふほどの道、いと遙に辰巳のかたより戌亥の方ざまに趣かせ給ふ、○中略猶暫しやすらはんと思して、右近の馬場のわたりに滯らせ給ふほどに、○下略

〔大內裏圖考證二十八左右近衛府〕左近衛府馬場

馬場殿或作乙殿屋

〔源氏物語九葵〕むまばのおとゞのほどに、たてわづらひて、○下略

〔河海抄五葵〕むまばのをとゞ　左近馬場の宿屋歟

〔花鳥餘情六葵〕おとゞは、乙殿屋とて、左右の馬場にあり、五月の騎射のとき、中少將の著座する所也、

〔爲房卿記〕康和五年十月廿一日、今日東宮擬帶刀於右近馬場有被試射藝之事、自院以頭辨被奏大內、持疑之間、巳及晡時、○中略少進行盛爲御裝束行事參向廐畠馬場、以右近馬場稱廐畠馬場之由、見寬平御記、

〔山槐記〕仁安二年五月六日癸卯、右近騎射眞手結也、任大將初度、大將有見物事也、○中略至于馬場埓西、去乙殿屋十四五許丈、立車、

〔百練抄十二順德〕承久元年七月廿一日甲寅、自辰剋大風、神祇官南廳、右近馬場之屋顚倒了、

〔延喜式四十五左右近衛〕凡大射人、預前於本府射場敎習、正月十四日以前試定、

〔山槐記〕保元四年正月十二日丁卯、未剋著束帶、○中略著左近府、於上東門下車、入府北門幷內西面門、著弓場屋、昇東舎脫、

〔日本紀略 三村上〕天曆二年三月廿七日丙子、此夜强盜入右近府曹司、掠取人物、

〔扶桑略記 二十六村上〕天德四年九月廿四日辛酉、遣藏人忠尹、仰僧正延昌、於左近衞府大將曹司、可修某御修法、

〔日本紀略 六圓融〕天延三年四月八日庚戌、亥剋皇太子出御左近衞府大將曹司、

〔西宮記 臨時五〕宿所　左右中將宿所　在玄暉門內東西、

〔本朝世紀〕天慶五年閏三月四日丁亥、有穢疑、〈○中略〉其穢左近衞府中將曹司〈西門北腋〉、月來橘光子命婦〈光件子者今上乳母〉寄居、其曹下女早朝起、見犬三四頭喫死童、

〔北山抄 四拾遺雜抄〕皇太子加元服儀

應和二年七月廿日、於傳家定御元服事、此日始行事所、以左近府中將曹司爲其所、

〔左經記〕萬壽二年十一月六日甲申、及午剋使〈○春日祭使〉少將來向宿所、及未剋向少將宿所、

〔日本紀略 三村上〕天曆元年二月十七日癸酉、今月四日、左近衞府少將曹司犬咋入死人頭肩片手、仍彼府立三十日穢札、

〔大內裏圖考證 二十八左右近衞府〕河海抄〈卷柱〉曰、天曆御記云、依左大臣定申、皇太子移左近衞府、昨日遣齊光、撿見、還來申、大將曹司、中將曹司、共無其便、少將曹司屋頗雖短陋、自他屋有便宜、然則可令加修理彼曹司、

〔日本紀略 七圓融〕天元三年十一月廿二日辛酉、女御遵子、移左近府少將曹司、

〔西宮記 臨時五〕宿所　左右將監宿所　在同宿所舍〈○左右中將宿所〉艮乾、

〔拾芥抄 中京程末〕一條京極末、號右近衞馬場、

〔河海抄 五葵〕左近馬場、一條西洞院、右近馬場、一條大宮也、

〔續日本後紀 八仁明〕承和六年二月乙丑、天皇先幸神泉苑、次遊覽北野、皇太子從駕、山城國獻御贄、便駐

〔小右記〕長和三年三月十二日丁酉、巳剋許、乾方有火、〇中略、火移府長倉射場舍、撲滅了者、

〔古事談〕六亭宅諸道 伶人助元、助種父、依府役懈怠事、被召籠左近府下倉、此下倉ニハ、蛇蠑ナル物ヲト怖畏之間、夜半計大蛇出來、其頭如祇園師子頭、其眼如銀提、其舌三尺計ニテ、大口ヲアキテ、〇下略、文見古今著聞集、

〔源氏物語〕三十一眞木柱 かぎりあるみあるじなどのこと共もしたるさま、ことに用意ありてなん大將殿せさせ給へりける、とのゐところにゐ給て、日ひとひ、きこえくらし給ことは、〇下略

〔湖月抄〕三十一眞木柱 細、〇細流抄 大將の直廬也、

〔源氏物語〕三十一眞木柱 大將は、つかさの御ざうしにぞおはしける、

〔河海抄〕十一眞木柱 左右近衛府曹司

〔湖月抄〕三十一眞木柱 大將の直廬の事也

〔西宮記〕五臨時 宿所 左大將宿所 在宣陽門内南廊 右大將宿所 在陰明門内南廊、〇南廊、拾芥抄作東廊、

〔花鳥餘情〕十六 左大將の直廬は、宣陽門の內の廊に有、右大將の直廬は、陰明門の內の廊にあり、ともに中重の門の內也、西宮抄に見えたり、

〔小右記〕長和二年正月十日壬寅、予〇藤原實資、于時大納言右大將、依有外記催、可候中宮行啓、仍爲令卷纓向宿所、北陣將宿所、爲予宿所、〇中略、於宿所鐘時刻參飛香舍、

〔新儀式〕五臨時 觸穢事

隔垣別門之所、雖同所不爲穢、〇中略、左右近衛府大將曹司之類等也、

〔日本紀略〕二朱雀 延長八年九月廿七日丁亥、先皇依不豫欲遷幸朱雀院之間、大漸彌留、仍移坐右近衛府大將曹司、〇又見扶桑略記

府、

〔日本紀略後一條十三〕萬壽四年二月廿七日戊戌、右近府幷圖書寮雜舍等燒亡、〇又見百練抄

〔中右記〕承德元年八月五日、朝間大雨、午後風大吹、〇中略左近府屋顚倒之間、〇下略

〔玉海〕文治二年十一月十六日己未、今夜可有御方違行幸云々、〇中略入御自左近府北面門、須被用南面入足門也、而其門內偏爲作畠、仍不足爲幸路、通北入御、太有煩云々、

〔百練抄十二〕建保五年九月三日、雨降大風、朱雀門幷左近府南門顚倒、

〔日本紀略後一條十三〕寬仁四年七月廿二日辛未、夜大風吹、壞內裏所々、〇中略左近衞府西門一字、

〔山槐記〕保元四年正月十二日丁卯、未剋著束帶、帶劍、隨身褻袴、著左近府、於上東門下車、入府北門幷內西面門、著弓場屋、

〔日本紀略冷泉五〕康保四年六月十日丁卯、以左近衞府正廳、爲先帝御齋會行事所、

〔日本紀略一條十一〕寬弘元年三月廿四日戊申、宇佐宮命婦幷神人等、參入陽明門、〇中略件神人等、今日以後三箇日、祇候左近廳南內、

〔左經記〕長元元年九月六日丁酉、參右府、被命云、依去二日大風、〇傍書云、右近府廳倒、府廳顚倒、以府力早可難造立、可然爵以其獻者欲作、量便申太閤、可示案內者、〇中略御報云、爵事可被申請也、 七年八月十日丁卯、〇九日大風除左衞門之外、五衞府廳幷雜舍、大膳掃部等舍屋、皆以顚倒云々、 十九日丙子、午剋參內、〇中略諸卿定申彼是被申云、隨損破大少計給爵、若本司、本府允屬等可令修造歟、〇中略左〇左一本作右字近府廳幷弓場屋、各一宇造立、依有申爵者、先日被下宣旨、隨新造立、欲葺檜皮屋之間、爲風共顚倒、今令申云、重造立、已無其力、作葺弓場一宇、欲預榮爵者如何、某被申云、依請被免有何事乎、

〔日本紀略一條十〕長德元年六月廿一日丙申、今日右近府廳、東西倉燒亡、〇又見扶桑略記

〔日本紀略村上四〕應和二年六月廿五日辛亥、夜左近衞府長倉一宇、及曹司屋有火、

廳舍

〔拾芥抄中本官位唐名〕近衞司親衞○幕府○羽林

〔史記二十七天官書〕北宮玄武、○中略注虛危、○中略其南有衆星、曰羽林天軍、正義曰、羽林三十五星、三三而聚散、在壘壁南、天軍也、亦天宿衞之兵革、出不見則天下亂、金火水入、軍起也、

〔漢書十九百官公卿表〕郎中令、秦官、掌宮殿掖門戶、○中略期門羽林、皆屬焉、(中略)師古曰、羽林亦宿衞之官、言其如羽之疾、如林之多也、一説、羽所以爲王者羽翼也、

〔唐六典二十五諸衞府〕左右羽林軍衞、大將軍各一人、正三品、

漢置南北軍、掌衞京師、南軍若今諸衞也、北軍若今左右羽林也、○中略皇朝名武衞所領兵爲羽林、

又別置左右屯營、各有大將軍將軍等員、龍朔二年、爲左右羽林軍、其名則歷代之羽林也、

〔大內裏圖考證二十八左右近衞府〕左近衞府

諸圖左近衞府、在陽明門內北掖、北至上東門南掖南北八十四丈、東西三十五丈、

右近衞府

諸圖右近衞府、在殷富門內北掖、北至上西門南掖南北八十四丈、東西三十五丈、

〔百寮訓要鈔別註七〕左近衞府、○中略當府ハ上東門ノ內、南ノ方ニテ、梨本空閑ノ東ニアリ、其警衞スル陣ハ、南殿ノ東、日華門ノ內ナリ、是ヲ陣ノ座ト云フ、乃チ閤門ノ內ヲ衞ト云ヘル是ナリ、○中略

右近衞府、○中略當府ハ在上西門內圖書寮西、其陣ハ月華門ノ內也、

〔日本紀略一醍醐〕延喜十六年三月三日丁巳、太上法皇○宇多可有五十御賀、於左近衞府廳試同御賀事等、

延長八年九月廿八日戊子、太上法皇○宇多幸右近衞府、卽日還本院、　廿九日己丑、法皇幸右近衞府、

〔日本紀略六圓融〕貞元元年五月十一日丁丑、子刻內裏有火、火出自仁壽殿西面、○中略東宮遷御左近衞

近衞次將奏曰、左右乃近。以。衞。乃。府。申。久。〔下略〕

〔朝野群載六太政官〕諸司訓詞

左右近衞府(ヒダリミギリノチカキマモリノツカサ)

〔古今和歌集十九雜體〕ふるうたにくはへてたてまつれるながうた　壬生忠岑

くれ竹の、よゝのふることゝ、なかりせば、いかほのぬまの、いかにして、おもふこゝろを、のばへまし、〔中略〕かくはあれども、てるひかり、ちかきまもりの、身なりしを、たれかは秋の、くるかたに、あざむきいでゝ、みかきより、とのへもるみの、みかきもり、おさ〳〵しくも、おもほえず、こゝのかさねの、なかにては、嵐のかせも、きかざりき、〔下略〕

〔顯注密勘八〕ちかきまもりとは、近衞也、忠岑もとは左近番長也、後右衞門府生にうつれり、右衞門は西也、されば秋のくるかたにぞとはいふなり、

〔百寮訓要鈔別註七〕左近衞府　和名抄ニ、近衞府トノミ記シテ和訓ナシ、古クハ知加岐間保利(チカキマモリ)ナド和訓セシニヤ、新千載集秋上ニ、左近衞大將多通、明らけきみはしの秋の月もみつちかきまもりの身につかふとて、又寄夜行懸〔年中行事歌合左〕ふけなばと何ちぎりけん九重やちかきまほりのめぐりける夜をトヨメル、各近衞ノ事ナリ、常ニハ近衞〔古本裏〕ト稱ス、令外ノ官ナリ、

〔新後拾遺和歌集二春〕文保三年、百首歌奉りける時、　前大納言爲定〔中略〕

せめてわがちかきまもりの程だにも御階の櫻ちらさずもがな

〔倭訓栞中編十四〕ちかきまもり　近衞の義なり

〔玉葉和歌集三夏〕盧橘をよませ給ける　龜山院御製

わすれずよ右のつかさの袖ふれし花立ばなや今かほるらん

〔職原抄下〕左右近衞府〔常ニ唐羽林、又云ニ親衞〕

子、若シクハ名族ノ才名アル者ノ兼任ト爲ス、

將監、之ヲマツリゴトヒトト訓ジ、又丞ト稱ス、卽チ本府ノ判官ナリ、員數ハ、左右各〻四人ナリシガ、後漸ク增加シテ、十數人ノ多キニ及ベリ、後世舞樂ノ伎ヲ重ンズルニ至リ、多ク舞人樂人ヲ以テ之ニ任ズ、

將曹、之ヲサクワント訓ズ、本府ノ主典ナリ、左右各〻四人アリ、亦多ク樂人舞人ヲ以テ之ニ任ズ、

府生ノ定員ハ、左右各〻六人ナリ、後世舞人樂人ヲ以テ之ニ任ゼシコト、將曹ニ同ジ、

番長各〻六人ナリ、近衞式ニハ八人トアリ、舍人ノ上首タル者ヲ選ビテ之ニ任ズ、多クハ大將及ビ兵仗ヲ賜ル大臣等ノ隨身タリ、番長ノ下ニ府掌ト稱スルモノアリ、記錄等ニ見エタリ、又後世ニ、番頭ト稱スル名モ見ユ、サレド其任用等ノコトハ、未ダ詳ナラズ、

近衞、又近衞舍人ト云フ、平城天皇ノ大同二年、左右近衞府ヲ置クニ及ビ、各〻四百人ヲ以テ定額トス、其後屢〻增減アリ、又員外舍人アリ、宇多天皇ノ寛平三年、省減シテ各〻二百人トセリ、然ルニ後世制度大ニ頽廢シテ、人員殆ド制限ナク、舍人ト稱スルモノ諸國ニ散在シテ凶暴ヲ肆ニスルニ至レリ、

名稱

〔倭名類聚抄五官名〕府　職員令云、近衞府、

〔書言字考節用集三官名〕近衞府(コンヱフ)有左右稱、唐名羽林、又云親衞、

〔空穗物語藏開上〕左右こんゑのつかさのがく所ぞもあり、○下略

〔雅亮裝束抄二〕おひかけをかくる事は、このゑづかさ、ゑふのかみ大將、常のことなり、

〔倭訓栞中編古八〕このゑ　近衞の音轉也、○中略異名伊勢物語に、近衞司を親衞司と書り、

〔北山抄九羽林要抄〕二孟旬

古事類苑

官位部二十二

令制官職十八

左右近衞府 授刀舍人寮 外衞府附 中衞府

稱德天皇ノ天平神護元年、授刀衞ヲ改メテ近衞府ト爲シ、大將以下ノ官員ヲ置ク、近衞ノ稱是ニ始マル、而シテ先キニ置ク所ノ中衞府ト相對シテ、宮闕ノ禁衞タリ、平城天皇ノ大同二年、更ニ近衞ヲ改メテ左近衞ト爲シ、中衞ヲ改メテ右近衞ト爲ス、是ニ於テ始メテ左右近衞ノ稱アリ、

近衞府ノ職、禁兵ヲ統ベテ宮闕ニ宿侍シ、兵仗ヲ帶シテ禁中ヲ警護スルコトヲ掌ル、而シテ大小ノ朝會ニ、隊仗ヲ率ヰテ威儀ヲ備ヘ、大駕行幸ニ、禁兵ヲ率ヰテ前後ヲ警衞スルガ如キ、亦本府ノ職トスル所ナリ、然ルニ後世武備漸ク弛ミ、兵馬ノ職全ク曠廢シ、華衣粉黛、徒ニ管絃ヲ弄シ歌舞ヲ事トシ、是ヲ以テ衞府官唯一ノ職ト爲スニ至レリ、

大將ハカミト訓ズ、左右各〻一人、概ネ大納言及ビ大臣ノ兼任トス、大臣ニシテ大將ヲ兼ヌルハ、文武ノ極官ヲ統ブル者ニシテ、之ヲ榮達ノ至極ト爲ス、

中將少將、共ニスケト訓シ、又次將ト稱ス、本府ノ次官ナリ、而シテ中將ヲオホイスケト云ヒ、少將ヲスナイスケト云フ、員數ハ、左右各〻一人ナリシガ、漸次增加シテ、後白河天皇ノ保元元年、左右各〻四人ヲ以テ定員ト爲ス、中將少將ハ朝會公事必ズ其儀ニ參與シ常ニ禁廷ニ宿侍シテ殿上ノ事ヲ督察シ、又諸社ノ祭使等ニ差遣セラレテ、頗ル淸望ノ官タルヲ以テ、攝關ノ

衞置射騎田、每年冬季、宜試優劣、以給超群、令興武藝、其中衞府卅町、衞門府、八町九段一百步 左右衞士府、各十町七段百五十六步 左右兵衞府、各十町

天平寶字元年八月廿五日

〔延喜式 主稅二十六〕凡〇中略 諸衞射田、左右馬寮田、並爲不輸租田、

〔今昔物語 二十八〕越前守爲盛付六衞府官人語第五

今昔、藤原ノ爲盛ノ朝臣ト云フ人有ケリ、越前ノ守ニテ有ケル時ニ、諸衞ノ大粮米ヲ不成ザリケレバ、六衞府ノ官人下部ニ至ルマデ、皆發テ平張ノ具共ヲ持テ、爲盛ノ朝臣ガ家ニ行テ、門ノ前ニ平張ヲ打テ、其ノ下ニ胡床ヲ立テ、有ル限リ居並テ、家ノ人ヲモ出シ不入ズシテ責メ居タリケリ、

〔拾芥抄 中末 宮城〕諸司厨町

帶刀町 一條南、堀川東、

〔續日本紀 十二 聖武〕天平元年八月癸亥、天皇御大極殿、詔曰、〇中略 改神龜六年、爲天平元年、而大赦天下、〇中略 其諸衞府內、武藝可稱者、亦以名奏聞、

〔三代實錄 四十 光孝〕仁和二年二月廿七日丁丑、太上天皇〇陽成 遣參議正四位下行左近衞中將兼近江權守藤原朝臣有實、奉還六府官人舍人等、帝不奉命、卽便奉還、先是遣六衞府官人以下、爲太上天皇宮衞、今還舊府、讓也、

〔三代實錄 二十六 淸和〕貞觀十六年九月十四日己亥、撿非違使起請五條、〇中略 其二、應許六衞府長官初任時一度饗宴事、謹案新格、諸司諸院、諸家所々之人、燒尾荒鎭等、總當禁斷、今以爲衞府長官、職掌異於文官、欲其選練武衞、與士卒共甘苦、而初任之日、聊無饗會、何能開彼虎旅之面、成其鳬藻之心、是以新任長官等、皆准舊例、一度饗宴、事不獲已、似忘格式、夫有格不行、却似無法、無法之罪、理亦難容、望請被改件事、有使執行、〇中略 有勅依之須下所司、

雜載

衞府公卿不帶弓箭、依節會也、次將執仗供奉、

六日

衞府公卿帶弓箭如駒牽日、

〔世俗淺深秘抄下〕一衞府褐近代甚强、以不然爲吉、左右袖聊外サマニ折也、如小忌著儀、但小忌ハ皆折、是手程少ヲ折也、故實也、

一衞府所謂下﨟輩、撿非違使外、不用辻總鞦也、

一雖下﨟衞府若輩、卷白樺色々紙於胡籙如次將、

一次將若諸衞佐、廿許年齡輩、著濃キ薄色指貫時、差同色紐、其樣如腹白、但組目頗於腹白短也、指樣如例、

〔助無智秘抄〕朝覲行事

大將、宰相中將、若三位中將ナドハ、異ナルハレニ染裝束ヲスベシ左右兵衞督、人ガラニヨリテキルベキニヤ、左右衞門督ナドハ、イトセヌコトナリ、イハンヤ顯職ニ幷ヌ人ハ、染裝束ハミグルシカルベシ、

〔令義解五宮衞〕凡宿衞器仗、若有人稱勅索者、主司覆奏然後付之、謂宿衞器仗者、衞府及內舍人所帶之仗也、主司者、兵衞及中務判官以上也、

〔令義解五宮衞〕凡元日朔日、若有聚集、謂元朔之外、別有聚集、假如出雲國造奏神事之類也、及蕃客宴會辭見、皆立儀仗、

〔令義解十雜〕凡在京諸司、主典以上、謂才伎長上亦准此也、每年正月並給座席、以下謂史生官掌之類、其兵衞衞士者本府別給、隨壞即給、

〔續日本紀八元正〕養老五年十二月辛丑、太政官奏、授刀寮及五衞府、別設鉦鼓各一面、便作將軍之號令、以爲兵士之耳目、節進退動靜、奏可之、

〔類聚三代格十五〕勅、治國大綱、在於文武、故爲勸文才、隨職簡要量置公田、但至脩武未有處分、今故六

卷纓著緌、又著平胡籙、虎皮尻鞘、闕腋、靴等、宮中行幸之時、著縫腋、壺胡籙、著淺沓、非違佐者、縫腋之上著平胡籙、〇籙下一本有靴尻鞘等四字、年來著平裝束壺胡籙、著淺沓、自餘可隨時議、

旬日番奏事

著縫腋靴等、無魚袋、同近衛府、

相撲出居事

裝束如節會時、無魚袋、同近衛府、

警固解陣行幸等召仰事

同近衛府、

本府手結事

眞手結日著平緒云々、同近衛府、

賀茂齋内親王禊日前駈事

裝束如節會時、不著魚袋等、騎和鞍之馬、隨身二人、著蠻繪袍等、非違佐隨身者、著狩例胡籙等、但所令持之物、雨衣沓登深沓、

搜盜事

卷纓著緌帶獵胡籙、著布袴革襪等、皆有副兵、隨上卿之仰、向條々搜求嫌疑者、歸參申其由、任例五位已上申返事、帶弓箭、

〔北山抄九羽林要抄〕殿上帶劒事

侍臣不具劒笏、爲要籍駈仕也、然外衞佐等、任意不帶之、至于近衞次將、帶劒上殿無妨、仍宿侍之時、副於宿物持上之、自餘不能持上、或說、檢非違使又持上云々、

〔北山抄八大將要抄〕五月節

腰帶、金銀裝橫刀、白袴、烏皮靴、兵衞督、赤皮靴、錦行騰、〈謂騰緘、取以覆股脛、令衣不飛揚者也、〉

朝服

衞府督佐、並皂羅頭巾、位襖、金銀裝腰帶、金銀裝橫刀、白襪、烏皮履、其志以上、並皂緌頭巾、皂緌、位襖、烏油腰帶、烏裝橫刀、白襪、烏皮履、會集等日、〈謂元日、及聚集、幷蕃客宴會等、止爲志以上立制也、〉加錦裲襠、赤脛巾、帶弓箭、以鞋代履、兵衞、皂緌頭巾、皂緌、位襖、烏油腰帶、烏裝橫刀、帶弓箭、白脛巾、白襪、烏皮履、會集等日加挂甲、帶槍、以位襖代緋襖、以鞋代履、主帥〈謂門部使部、其隊正等者、依衞士例也、〉皂緌頭巾、皂緌、位襖、烏油腰帶、烏裝橫刀、白脛巾、白襪、烏皮履、會集等日、加挂甲、帶弓箭、以緑襖代位襖、以鞋代履、並朝庭公事卽服之、衞士、皂緌頭巾、桃染衫、白布帶、白脛巾、草鞋、帶橫刀弓箭若槍、會集等日、加朱末額挂甲、以皂衫代桃染衫、朔節日則服之、〈謂朔日者、四孟朔日也、節日者、初注會集等日是也、其主帥以上注、稱會集日者、朔節日亦同、但衞士注、言會集日者、幷是朔節日、凡著朝服之時、督佐牙笏、志以上木笏、此文不載者、略諸須知也、〉尋常去桃染衫及槍、其督以下、主帥以上、袋准文官、

〔延喜式四十一彈正〕凡金銀薄泥、不得爲服用幷雜器飾、但五月五日、諸衞府甲冑之飾、不在制限、

凡刀子刃長五寸以上、不得輒帶、但衞府者聽之、

凡五月五日、供節諸衞府官人以下、除甲冑飾之外、不聽用金銀、縱有違犯、只彈禁色不得抑留、〈五品以上走馬裝束、禁色亦准此、〉

凡諸衞府五位以上、通著朝服、其著胡籙、幷立仗之日著位襖、但參議已上、不在此例、

凡諸衞府生以上、〈左右馬寮准此〉除衞仗日之外、皆著靴、但著布帶時、須用麻鞋、

〔西宮記臨時十〕外衞佐事

節會日陪陣事

著闕腋袍、螺鈿劍、靴等者、著魚袋、非侍從者大節著之、不把笏居胡床、引列之程皆起座、具見年中行事、

行幸時事

從雜役

不供之、加以造醢之法、先乾其肉、百日即成、謂之乾豆者、是取其義也、而今諸衛府、前祭一日之夕送鮮兎、夜中造醢、豈合禮意、自今以後、潔淨乾曝、先祭三月、送大膳職、依禮令造、其送致之次、左近爲一番、餘府依次輪轉、終而更始、如此則豆實合禮、衛府省煩、先是大學寮申請改行此事、至是許之、

〔侍中群要二〕從事以後雜事

日中行事

巳一剋奏日次御贄事○中略

御厨子所例云、寛平九年七月四日、始定四衛府小鮎日次御贄、左兵衛子辰申　右兵衛丑巳酉　左衛門寅午戌　右衛門卯未亥者、今案十隻以上申廿隻已下也、若無鮎者、申其由於藏人、隨其處分、以他物進之、又若御精進者、預仰其由、以雜菜令進之、

〔本朝世紀〕天慶二年七月十六日乙卯、今朝山城國紀伊郡百姓等、列立近衛御門內、愁申云、炎旱尤甚、依舊例給神泉苑水、將灌漑者、相職以事由申太政大臣幷上卿、上卿召少納言、仰向神泉苑可行件水之由、又召外記、仰諸衛可摂彼水之事由、　十七日丙辰、少納言橘實利、率史生幷諸衛舍人火長等向神泉、○泉下恐脱苑字、　自今日三ヶ日、放出池水、厨家毎日儲酒肴、

〔類聚符宣抄六〕大納言平朝臣伊望宣、件百姓等所申之水、宜准去延喜八年等例、差少納言橘朝臣實利、遣神泉苑、依件令行、但左右近衛左右兵衛等、毎府近衛兵衛各一人、駕輿丁二人、左右衛門、毎府門部一人、衛士二人、同差遣之者、

天慶二年七月十六日　　少外記物部貞用奉

服裝

〔令義解六衣服〕武官禮服

衛府督佐、兵衛佐不在此限、謂依官位令、兵衛佐是正六位下官、其雖任五位、不可同督、依相當法制禮服故也、仍須依朝服法、准志以上加錦裲襠、若六位任衛佐者、亦准志以上法也、以下准此、並皀羅冠、皀緌、謂冠紘也、牙笏、位襖、謂無襴之衣也、加繡裲襠、謂一片當背、一片當胸、故曰裲襠也、兵衛督雲鐶、金銀裝

進獻

（年五十八）爲季　左兵衞府生則重　右兵衞府生爲永　延國（華集吹）　忠影（年五十一）　時兼（年卅九）　則元　吉恒

○按ズルニ、衞府官ノ舞樂ニ關係セシコトハ、時代頗ル舊シ、然レドモ當時ハ皆近衞官ノミニシテ、衞門兵衞ハ與ラザリシモノヽ如シ、尙ホ近衞府職掌ノ條ヲ參看スベシ、

〔延喜式 四十五 近衞〕凡正月最勝王經齋會所進雜花一櫃、（諸衞府別一日、依次供之、）

〔西宮記 四月〕一四府進楡扇事

起四月一日盡九月、左右近衞、左右兵衞、付內侍所、

〔延喜式 四十五 近衞〕凡五月五日藥玉料、昌蒲艾（盛一輿）雜花十捧、（盛花居臺）三日平旦申內侍司列設南殿前、（諸府准此）

〔西宮記 五月〕三日、六府立昌蒲輿瓮花（各一荷、花十捧、南庭也、見近衞府式、并申內侍）、內藏寮官人行事藏人等、給糸所女官、

〔延喜式 四十五 近衞〕凡二月八月上丁、進釋奠三牲、（大鹿、小鹿、猪、各一頭、加五藏、）並丙日送大學寮、兎二頭、（醢料）潔清乾曝、前祭三月、送大膳職、其貢進之次、以左近衞府爲一番、諸衞輪轉、終而更始、

〔三代實錄 四十八 光孝〕仁和元年十一月十日庚寅、勅定左右近衞左右衞門左右兵衞等府所送釋奠祭牲、其一、應送進鮮牲事、撿太政官去延曆十二年五月十一日格云、祭禮之事、潔淨爲本、又制特（○特恐牲誤）體、明在禮法、然而頃年諸國進特（○特恐牲誤）既以制積、供禮漱豈、多乖禮制、須並用全體令進祭庭、一依禮法、割鮮升供、式云、三牲各加五藏、六衞府別、各一頭供之、今案延曆格、所以令全體供者、以取其新、合其禮法也、而式文曰、各加五藏、卽是解體可知、雖全體解體前後各異、而至于潔清新鮮、是古今不易之法也、而諸衞牲、腐臭尤甚、弃而不用、可匪常祀、忍而供之、恐乖禮制、祭禮之正道、鮮潔爲先、宜嚴下新制、令合禮法、其二、應定牲代魚色事、式云、享日在諸祭之前、及與祭相當、停用三牲及兎、代以鮮魚、而今諸衞所進牲代物、或乾魚、或果子、所送非一、猥任人意、宜令六府送鮎鯉鮮潔者也、其三、應停六府送兎、輪轉令送乾兎二頭事、式云、三牲及兎、六衞府各一頭供之、又云、豆實兎醢五合、今撿先聖先師、獨供兎醢、其餘

祭祀警固

天皇勅遣參議源朝臣能有及六衞府官人以下、

〔內裏式中〕賀茂祭日（○四月）警固式

先祀一日、大臣（若無大臣者、中納言已上亦得之、）令內侍奏可衞固之狀、又遣內豎喚六衞府佐以上各一人、（若無佐以上、尉亦得）喚之、諸衞來集、卽大臣上殿、喚內豎宣、喚候司々、內豎稱唯、出喚諸衞、若夜喚之、諸衞各稱名、如行在所將軍等之儀、以次入立、（入自日華門、立殿庭、）大臣宣、欲爲賀茂祀（我）故（爾）、如常奉衞固、諸衞共稱唯退、

〔西宮記四月〕警固

上卿付殿上辨若藏人令申可警固狀、（內侍不候、諸衞不具者、加其詞、）勅許、仰外記召內豎、內豎候小庭、（出自敷政門、）上卿仰云、諸衞召せ、內豎稱唯、出召諸衞入立鄉南、（兩日立廊下、入夜上卿問諸衞、稱官姓名、六位立後、四位者依位立、）上卿仰云、賀茂祭欲爲（加）故（爾）如常固守奉禮、諸衞稱唯、左廻出、（左近陣小庭、右近陣射場、諸衞各門前立平張、往還人入自中、解陣時同此儀、上卿仰云、陣解令、）

舞樂

〔源氏物語若菜三十五〕まひ人は、ゑふのすけ共の、かたちきよげに、たけだちひとしきかぎりをえらせ給、

〔花鳥餘情若菜二十〕舞人は十人、石淸水賀茂の臨時祭のごとし、六衞府のすけどもなり、陪從をば歌人といふ、十二人、四位五位六位、各四人也、是も道々のすぐれたるをめすよし見えたり、又くははりたるは加陪從といふ、是も兵衞尉なる物也、春日祭近衞使の時、舞人陪從はみな近衞の官人等也、臨時試樂調樂をば、近衞陣にて是をおこなふ故に、陪從は多は兵衞づかさなり、

〔樂所補任〕天永元年

雅樂屬時忠（笙二、年五十七、）　左近將曹正淸（笛一、年六十二、）　右近將曹忠方（右一、年廿六、）　右兵衞志則時　左近府生則方（伎樂吹、年七十三、）　光則（左三、年廿二、）　季貞（左四、年四十四、）　是行（年卅六）　基政（笛二、年卅二、）　行季（左五、年廿八、）　友光（左六、年卅）九、　則達（年五十七）　光時（左七、年廿二、）　助貞（笛、年五十、）　時員（年廿五）　右近府生正吉　公正　則淸（三鼓打、年五十四、）　助淸　助高（年五十八）　近方（右、年廿三、）　公持（笙、年卅一、）　左衞門府生正延（篳篥吹）　季忠（年六十二）　右衞門府生近正

佚事

司自南殿後經東歸左腋、雖六府不具、三四府奏、

〔北山抄 一四月〕同日（○朔日）旬事

六府番奏、（上番左奏、下番右奏、若上番无左官人右奏之、次官不參之時、列官帶弓箭在後、臨欲奏時任官次加前列奏之、或有一二府不具奏、例也、四位猶依官次可列立、依奏之次第可違濫也、天曆十年四月一日例知之、）勅答、（置介）訖、闈司二人、入自左掖門、列立六府上、次將等一々手傳授闈司、闈司各取重三枚、（或左次將取重授之）至橋樹下之間、左廻退出、闈司昇自西階、付內侍、內侍二人取左右近簡、就御帳東奏覽、

〔三代實錄 四十五 光孝〕元慶八年四月廿一日辛亥、天皇御紫宸殿、大臣已下侍、六府奏番奏簡、

〔三代實錄 四十七 光孝〕仁和元年四月乙卯朔、天皇御紫宸殿觀事、六府少（○少字恐衍）將佐等、奏當月番上近衞門部兵衞等夾名簡、

〔令義解 五 宮衞〕凡車駕出行、（謂出幸於京外也）兵衞衞士、先按行、（謂按檢於行列也）

〔令義解 五 宮衞〕凡車駕有所臨幸、若夜行、部隊主帥、（謂五十人爲隊、即五十人以上長、是爲主帥也、）各相辨識、雖是侍臣、從外來者、（謂侍臣者、少納言、侍從、中務少輔以上也、從外來者、元非陪從、而新來者也、）非勅不得輒入、

〔令集解 二十四 宮衞〕古記云、部隊主帥、謂左右兵衞府番長、左右衞士府主帥、衞門府門部以上也、

〔令義解 五 宮衞〕凡車駕出入、諸從駕人、當按次第、如鹵簿圖、（謂當按猶列次也、言諸衞各整當陣之列次、令其不雜亂也、）去御三百步內、不得持兵器、其宿衞人從駕者聽之、

〔令義解 五 宮衞〕凡鹵簿內不得橫入、（謂鹵簿者、鹵、楯也、簿、文籍也、言簿列楯以爲部隊也、橫入者、截陣以橫入也、）其監仗之官、（謂本衞之監仗者也）撿按者、得去來、

〔令集解 二十四 宮衞〕釋云、本衞監仗者也、或云、臨時有監仗官非、古記云、問其監仗之官、未知何官、答五衞府亦是監仗之官耳、朱云、監仗之官者未知、人色可有不何、

〔三代實錄 三十六 陽成〕元慶三年十月廿四日庚辰、寅時太上天皇（○淸和）駕牛車幸大和國、勅遣參議從三位行左衞門督兼美濃守源朝臣能有、率六府將曹志府生、府別各一人、近衞兵衞門部各十人、奉衞太上

宜秋門西面三間、云右衞門陣、謂之西面中門、
宜陽門三間、云左兵衞陣、建春內、
陰明門三間、云右兵衞陣、謂之宮西南內門、宜北內、
日華門東、謂之南殿前大庭東面門、春興宜陽兩殿間在此門、號左近陣、
月華門西、謂之南殿西面門、安福校書兩殿間有此門、右近陣、

〔續日本紀十聖武〕神龜四年三月甲午、天皇御南苑、參議從三位阿倍朝臣廣庭宣勅云、衞府人等、日夜宿衞闕庭、不得輙離其府、散使他處、因賜五衞府及授刀寮醫師已下至衞士布、人有差、

〔日本後紀二十一嵯峨〕弘仁二年九月丁未、勅、侍平城宮○平城御所諸衞府官人等、任意不直、已闕宿衞、宜改前勅、即命少將已上便檢挍焉、

〔三代實錄一清和〕天安二年十月戊子朔、六衞府見直於陣者、賜絹綿各有差、

〔日本紀略三村上〕天曆二年四月三日壬午、官奏、依強盜可勤陣直之由、召仰諸衞、

〔續日本紀三文武〕慶雲四年五月己亥、兵部省始錄五衞府五位以上朝參及上日、申送太政官、

〔延喜式四十五近衞〕凡每月一日十六日、具錄當番近衞歷名、次官已上奏進、若無者判官亦奏、其宿衞者、日別錄見宿數、次官以上一人署名申送、闈司總取奏之、餘府准此、

〔西宮記十月〕一旬

延喜十三十一、依雨付內侍所云々、開門闈司奏、勅令申輿、闈司退、六衞府將佐著縫腋袍、有六位者帶弓箭執簡、府次列立、六位後立、欲奏之時置弓、府次進倚下、府有四位者依色可列云々、而天曆口年、五位依府次列上、中將立下云々、各奏了、勅置介、同音唯、闈司二人出自左腋門、立上取簡、第一府取疊下二府簡、第四府取疊下二府簡、各取傳授闈司、闈司各執三簡、至橘樹下之比、諸衞左廻、闈司登自西階西一間、付內侍、內侍或記云、二人云々、取近衞簡二枚、自御帳東方奏覽、式文云、內侍二人、立自御後返給簡、闈

陣直

屋王宅、　癸酉、悉捉家內人等、禁著於左右衞士兵衞等府、

〔續日本紀考證五聖武〕六衞〈門左右兵衞、左右衞士、與衞門凡五府、併中衞爲六衞、〉

〔續日本紀二十孝謙〕天平寶字元年七月戊申、是日內相藤原朝臣仲麻呂、〈中略〉遣高麗朝臣福信等、率兵追捕小野東人答本忠節等、並皆捉獲、禁著左衞士府、〈中略〉　庚戌、又分遣諸衞、掩捕逆黨、更遣出雲守從三位百濟王敬福、大宰帥正四位下船王等五人、率諸衞人等、防衞獄囚、拷掠窮問、

〔續日本後紀十二仁明〕承和九年七月己酉、是日春宮坊帶刀伴健岑、但馬權守從五位下橘朝臣逸勢等、謀反事發覺、〈中略〉捕獲其身、于時伊勢齋宮主馬長伴水上、來在健岑廬、有嫌疑同被捕、又召右近衞將曹作武守、春宮坊帶刀伴甲雄等、令解兵仗、并五箇人、分付左近衞左衞門左兵衞等三府、幷令杻禁、

〔續日本後紀十三仁明〕承和十年十二月丙子、散位從五位上文室朝臣宮田麻呂之從者、陽侯氏雄、告宮田麻呂將謀反、遣內豎喚宮田麻呂、卽副使參於藏人所、卽禁宮田麻呂于左衞門府、　戊寅、禁告者氏雄于左近衞府、

〔續日本後紀二十仁明〕嘉祥三年二月壬子、分遣六衞府佐已下、覘捕京中群盜、又令左右近衞各十人巡撿東西、

〔文德實錄九〕天安元年三月癸丑、遣左右近衞左右兵衞及撿非違使左右馬於京南、捕群盜、　乙卯、亦遣六衞府舍人等於平城、捕群盜、

〔扶桑略記二十五朱雀〕承平三年正月廿三日庚子、上卿召久永朝臣仰云、近日群盜入交京中、掠取人物、宜召仰諸衞、結番令勤每夜巡撿、以左右馬寮御馬充之者、

〔日本紀略三村上〕天曆二年六月十五日壬辰、定明日搜索事、　十六日癸巳、分諸衞官人於京中、令搜索奸犯之者、

〔拾芥抄中末宮城〕建春門〈東面三間號左衞門陣、一云外記門、謂之宮東餅仗門、〉

捉罪人

〔續日本後紀仁明九〕承和七年二月己未、殊令左衞府夜行、京城緣群盜遍起也、　三月壬午、分遣六衞府搜捕京中盜竊、

〔三代實錄清和十四〕貞觀九年二月廿七日丁酉、勅左右近衞、左右兵衞、分結四番夜行京內、賜左右馬寮未調御馬而騎焉、

〔三代實錄清和二十八〕貞觀十八年四月廿七日甲戌、分遣左右近衞左右兵衞勇幹者、騎官馬、於東西京中每夜巡行、伺視非常、

〔令義解獄十〕凡犯罪、皆於事發處官司推斷、○中略　其衞府糺捉罪人、非貫屬京者、謂文云非貫屬京者、即知貫屬者皆送京職、但犯夜之類、衞府當日決放也、皆送刑部省、

〔續日本紀文武三〕慶雲三年三月丁巳、詔曰、○中略　比者諸司容儀、多違禮義、加以男女无別、晝夜相會、又如聞京城內外、多有穢臭、良由所司不存撿察、自今以後、兩省○式部、兵部、五府、並遣官人及衞士、嚴加捉搦、隨事科決、若不合與罪者、錄狀上聞、○又見類聚三代格、

〔新儀式臨時五〕搜盜事

若有京中强盜蜂起、仰下諸衞府、有令搜求、前一日、上卿奉勅、先差遣可守要害諸關之使、○中略　但秘其事不令洩、當日曉更、上卿召諸衞佐已下、分遣兩京條々令搜求之、○中略　又或撿非違使、幷諸衞尉已下結番、給御馬每夜令巡撿京中矣、

〔職原抄下〕撿非違使此云使廳、本所乃糺彈廳也、

淳和天皇御宇、天長年中初置之、○中略　朝家置此職以來、衞府追捕、彈正糺彈、刑部判斷、京職訴訟、倂歸使廳、

〔續日本紀聖武十〕天平元年二月辛未、左京人從七位下漆部造君足、无位中臣宮處連東人等告密稱、左大臣正二位長屋王、私學左道欲傾國家、○中略　因遣式部卿從三位藤原朝臣宇合、○中略　將六衞兵圍長

人自撿察人故、通平安、釋云、通消息耳也、

〔令義解 五宮衛〕凡庫藏門、及院外四面、恒持仗防固、（謂分配衛士、令其守護也、）非司（謂除庫藏司以外、皆爲非司也、）不得輙入、夜卽分時撿行、（謂衛士主司、各持時巡撿也、）

〔令集解 二十四宮衛〕釋云、配衛士、職掌云、差科是、古記云、謂衛門與衛士也、朱云、院外四面、恒持仗防固者、未知此文日夜並同何、但下文、夜則分時撿行、謂夜更爲加撿行、稱夜歟何、又可撿行何、答衛府可巡行者、未知五衛府、一夜內、各二度可巡行哉不、又上條與巡行之舍人別人歟同人歟何、或云、上條廣爲諸衛立文、此條獨爲衛士爲文、與上條異、見職員令穴云、

〔令義解 五宮衛〕凡京路、分街立鋪、（謂分街者、猶每街也、街者、四達之路也、鋪者、捉街之舍也、）衛府持時行夜、夜鼓（謂街鼓、其曉鼓亦同也、）聲絕禁行、曉鼓聲動聽行、若公使及有婚嫁喪病、須相告赴、求訪醫藥者、勘問明知、有實放過、非此色人犯夜者、衛府當日決放、（謂依上條、行夜諸衛、各詣本府、過平安、是爲當日也、）應贖及餘犯者送所司、（謂依獄令、刑部及京職、是爲所司也、）

〔令集解 二十四宮衛〕古記云、四衛府持時行夜、謂左右兵衛左右衛士也、今行事、中衛左右兵衛共行夜、一夜巡行、一夜停止、衛士不預也、穴云、持時行夜、謂上條宮內行夜也、此條京中行夜也、或云、衛府者、五衛倂警、爲當五衛之中、何府可夜行、答不見、任有夜行之府耳、同非五衛府倂夜行之事也、四衛可夜行、爲衛士量情不堪撿按故、（在穴）跡云、持時、謂分時各巡行耳、朱云、衛府持時行夜、謂撿鋪並道犯、與上條行夜人同人者、未知何色人、答衛府可行夜、但其色不見也、

〔律疏 衛禁〕凡宮城內外行夜、若有犯法、行夜主司不覺、減守衛者罪二等、（謂宮城內外及京街、夜並置鋪、持更、卽是守衛者、又有探更行更之人、此是行夜者、若當探行之處、有犯法者、行夜主司不覺、減守衛者罪二等、謂上條闌入、守衛不覺、減二等、註云、守衛謂專當者、行夜主司不覺犯法、皆減此持時專當人二等、）

〔侍中群要 四〕宮中夜行

宮中夜行、左右近所奉仕也、中重夜行、左右兵衛勤行、（從亥剋至子剋左奉仕、從丑剋至寅剋右奉仕、）至于左右衛門可奉仕八省夜行也、藏人强不可知行、左右近等有懈怠時、各召官人誡仰了、

〔令義解四考課〕部統有方、(謂、方者義方也、)警守无失、爲衞府之最、(謂、尉以上、)

〔令義解五宮衞〕凡應入宮閤門者、(謂、衞門所守、謂之宮門、兵衞所守、謂之閤門也、)本司具注官位姓名、(謂、本司者、在京諸司皆是也、具注官位姓名者、此爲主典以上立文、其雜任准此也、)送中務省付衞府、各從便門著籍、(謂、宮門閤門、當入出、各有要便者、是爲便門也、)

〔政事要略八十四糺彈雜事〕衞禁律云、應出宮內、而門籍已除、輒留不出、乃被告劾已有禁止、籍雖未除、不得輒入宮內、犯者以闌入論、(應出宮〈此間文缺〉使之類、依令除者、)

〔延喜式十二中務〕凡應入宮閤門諸司門籍、每月一日(正月用三日、但停朝拜年元日送之、以下知此之類、皆效此、)十六日送省、省覆勘訖、丞一人加署、即喚左右衞門及左右兵衞等府分付、但前番門籍返付本司、

〔令義解五宮衞〕凡諸門出物、无牓者、一事以上、並不得出、(謂、一事猶一物、與上條義異也、防其盜詐、故更責牓也、文云出物、即知除兵器之外、入物者不可責牓也、)其牓中務省付衞門、門司勘校、有欠乘者、隨事推駮、(謂、駮猶正也、)別勅賜物、不在此限、

〔令義解五宮衞〕凡(中略)○諸衞按檢所部及諸門、(謂、諸衞者、五衞府主典以上、但長官者、依下條以時檢行也、所部者、御垣周匝、及大藏民部廩院等、令衞士守是也、)持時行夜、(謂、宮城以內、其京內行夜者、下已有文、故不入此也、)者、皆須執仗巡行、分明相識、(謂、此行夜、兵衞既有左右、彼此共知、故曰分明相識也、)每旦色別、(謂、既有諸衞、故云色別也、)一人詣在直官長通平安、(謂、次官以上、凡衞府者、長官若次官一人、必在宿直、不得共退、故云詣在直官長也、)

〔令集解二十四宮衞〕釋云、諸衞、謂五衞府主典以上、但長官者、依下條以時檢行也、所部、謂依別式、左右衞士府、中門並御垣之檥、及大藏、民部、喪儀、馬寮等、以衞士分配防守、以時檢行、爲有所部之人、謂之所部耳、或云、私案、宮城內亦可行夜、案律可知也、在釋、古記云、(中略)○左右兵衞府、內門諸門按檢也、衞門府中門外門撿也、跡云、諸衞府按撿所部及諸門、諸門、謂兵衞衞士等、分充諸處令防守、而至夜亦令兵衞衞士等巡察庫藏條與行夜條並令讀、即此巡察人等名、安不之狀、申本司在直次官以上也、衞府志以上口令在直、公式令云、京官日出上、午後退、宿衞官不在此限故也、

〔令集解二十四宮衞〕釋云、詣、蒼頡篇、詣、至也、音五計反、官長、謂次官以上、(中略)○古記云、官長、謂次官以上、凡衞府者、長官次官一人必宿直、不得共退、今行事、官長次官大半耳、穴云、其主典以上不通平安、爲官

以上宮閤門、近衞、兵衞、衞門等之所守、參按諸書及古圖而作之、與清

與清按、大内の諸門に、内、中、外の三重あり、内重を閤門と云、此に内外あり、内閤門は日華、月華、左掖、右掖、内衞、恭禮、崇明、宣仁、敷政、明義、仙華、無名、一名化德左青瑣、右青瑣、神仙の十五門なり、閤は内中小門の義にて、禁裏の中の小門也、此をば近衞宮人守るなり、將曹一人にて近衞八人を率ゐて開閉をつとむ、其中五人は閤門、三人掖門とわかるなり、掖は宮ノ旁ノ舍を掖庭といひ、殿旁の垣を掖垣といふごとく、宮闕の旁の小門を左右の掖門と云也、右ノ十五門の内は禁裏ノ中也、此外に又閤門あり、承明、長樂、永安、玄輝、安喜、徽安、宣陽、嘉陽、延政、陰明、武德、遊義の十二門也、右の閤門内を内重と云、外閤門は兵衞守る也、但門外に在て守り、開閉のときは、近衞内に在て開閉する也、此外に中重あり、春華、建禮、修明、朔平、式乾、建春、宜秋の七門が中重の四方の門にて、此も兵衞守る也、此外に外重十四門あり、宮城門とも宮門とも云、陽明、待賢、郁芳、美福、朱雀、皇嘉、談天、藻壁、殷富、安嘉、偉鑒、達智、上東、上西の十四門也、此をば衞門が衞士を率ゐて守るなり、すべて内閤門は近衞、外閤門と中重の二ッは兵衞、宮城門は衞門の守る處と知るべし、

〔令集解三職員〕穴云、問律云、奉勅開諸門、本司不覆奏、注云、本司謂衞府及闈司、

〔令義解五宮衞〕凡諸門及守當處、非正司來監察者、先勘合契、謂非正司者、非本府官人、別勅令監察也、先勘合契者、契者符書也、書兩札、刻其側、合以爲信者、其衞府、府別雖有合契、給契之制、令條無文、但案軍防令、軍將征討、須交代者、勘合符、此條亦云、勘合契、卽有勘符契之文、卽知有勘給之法、假令非司之人、將契來者、卽主當當處人、當向本府請其片契、相對勘合之、同聽檢按、不同執送本府、

凡奉勅夜開諸門者、受勅人、謂奉勅旨開門之侍從等類也具錄須開之門幷入出人名帳、宣送中務、中務宣送衞府、衞府覆奏、然後開之、謂假有口勅、夜開宮門者、受勅之人宣送中務、中務覆奏宣告衞府、衞府覆奏轉告闈司、闈司轉奏、然後乃開也、若中務衞府、俱奉勅者、不合覆奏、其奉勅人名違錯、謂出入人名、與帳乖錯也、卽執奏聞、謂執申之義、非執縛之謂也、

凡車駕行幸、卽閉諸門、隨便開理門、其留守人者、各自理門出入、並駕還仗至乃開、

此圖ヨリ內ヲ外重ト云、此圖ガ宮城門ニテ衛門守ル、

達智門　偉鑒門　安嘉門

朔平門

安喜門　玄輝門　徽安門

貞觀殿

常寧殿

承香殿

仁壽殿

紫宸殿

弘徽殿

淸凉殿

宣耀殿

仙華門　明義門　無名門

敷政門　宣化門　恭禮門

此內ノ諸門近衛守ル

▲內重

日華門

月華門

此諸門兵衛外面ニ在テ守ル

永安門　▲中重　承明門　長樂門

宮城門　修明門　▲外重　建禮門　春華門

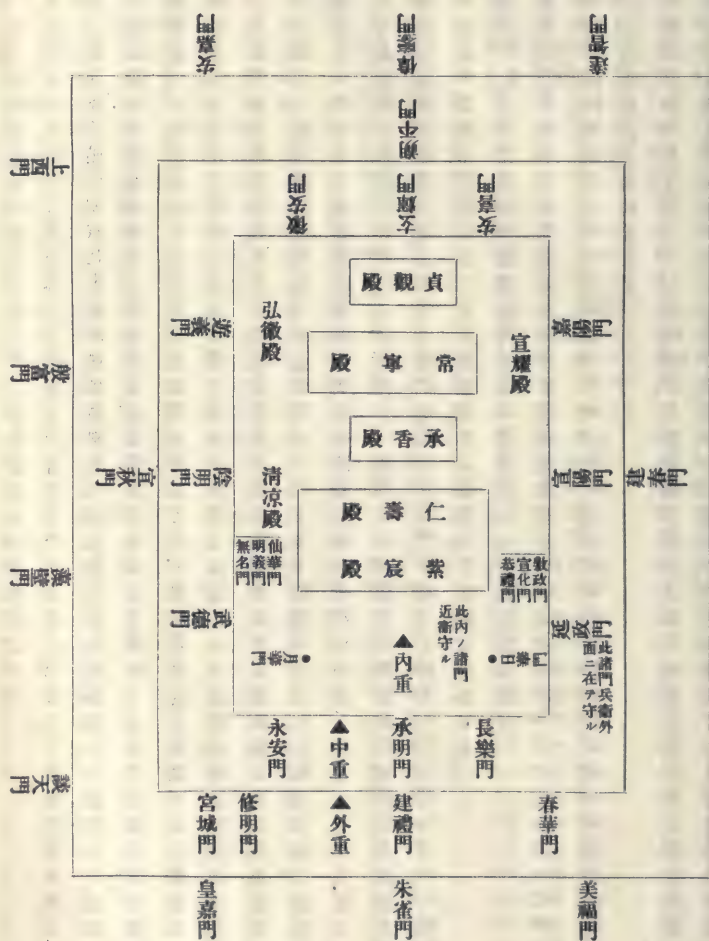
皇嘉門　朱雀門　美福門

上東門　陽明門　建春門　待賢門　郁芳門

嘉陽門　宣陽門　延政門

上西門　殷富門　宜秋門　藻壁門　談天門

遊義門　陰明門　武德門

職掌門衞

東山北陸山陰南海道依件行之、

〔政事要略五十九交替雜事〕民部省符

應加增衞士仕丁事力副丁事

衞士仕丁七人半（元五人、今加二人）　國司事力六人（元四人、今加一人）

右被太政官今月七日符偁、得出雲國解偁、百姓之徭卅日爲限、而貞觀六年正月九日格、改定廿日、事力所使、已違格旨、何者立丁副四人、一年可役百卅日、立丁調分廿日、庸分十日、徭分廿日、副丁四人徭分八十日、而總責立丁一人、令駈使三百六十日、今檢案內、所乘之日、二百卅日、黎元之弊莫過斯甚、夫百姓之徭、國吏所行、然而被拘式文、不得輙加、望請加增副丁、將省民弊、謹請官裁者、中納言兼左近衞大將從三位藤原朝臣基經宣、奉勅依件准加、自餘諸國亦宜准此者、省宜承知、依宜行之、立爲恒例者、諸國宜承知、依件行之、

貞觀十年十一月十六日

〔續日本紀八元正〕養老三年十月辛丑、詔曰、〇中略其賜一品舍人親王、內舍人二人、大舍人四人、衞士三十人、〇中略二品新田部親王、內舍人二人、大舍人四人、衞士二十人、〇中略其舍人以供左右雜使、衞士以充行路防禦、

〔續日本紀九元正〕養老六年閏四月乙丑、太政官奏曰、迺者邊郡人民、暴被寇賊、遂適東西、流離分散、若不加矜恤、恐貽後患、〇中略望請陸奧按察使管內、〇中略授刀兵衞衞士、〇中略如此之類、皆悉放還、各從本色、

〔令義解五宮衞〕凡應入宮閤門者、（謂衞門所守、謂之宮門、兵衞所守、謂之閤門也、）

〔職原抄新注高田與淸〕內重ハ近衞所守、古曰內衞、中重兵衞所守、古之中衞也、外重衞門所守、古之外衞也、

四月

一八日進上衞士逃亡幷死去出雲積首石弓等參人替事

右附意宇軍團二百長出雲臣廣足進上

一廿日進上衞士勝部臣弟麻呂逃亡替事

右附神門軍團五十長刑部臣水刺進上

七月

一廿三日進上衞士私部大嶋死去替事

右附熊谷軍團百長大私部首足國進上

(接續裏書)出雲國計會帳天平六年八月廿日正八位下行目小野臣淑奈麻呂

〔續日本紀九元正〕養老六年二月甲午、詔曰、去養老五年三月二十日、兵部卿從四位上阿倍朝臣首名等奏言、諸府衞士、往々偶語、逃亡難禁、所以然者、壯年赴役、白首歸鄕、艱苦彌深、遂陷疎網、望令三周相替、以慰懷士之心、朕君有天下、八載於今、思濟黎元、無忘寢膳、向隅之怨、在余一人、自今以後、諸衞士仕丁、便減役年之數、以慰人子之懷、其限三載以爲一番、依式與替、莫令留滯、○又見享祿本類聚三代格

〔續日本紀二十七稱德〕天平神護二年七月庚辰、詔賜三衞○衞門府及左右衞士府衞士、諸司直丁、置本司而經二十年已上者、爵人一級、

〔令集解十四賦役〕養老二年四月廿八日格云、向京衞士仕丁、免其房雜徭、以供當身資養、

〔令集解十四賦役〕養老四年三月十七日格云、仕丁衞士、幷匠丁及廝、並在役之日、免當房雜徭、

〔三代實錄十一清和〕貞觀七年十二月十七日甲子、諸衞士仕丁等愁訴云、遠辭鄕國、苦役京都、唯仰養丁之輸物、以充羈旅之資用、而本國司偁、依詔復徭、養物之數三分減一、然則留國之民、既蒙十日之復、上京之丁、猶苦一年之役、凡在勞逸、彼此不同、望請依舊被給、太政官處分、加增養丁、恒例輸數、卽下知東海

後奏聞、謂兵衞衞士正身見在者、卽以少墨點其名上也、奏聞者、本衞各奏聞也、

〔令義解五軍防〕凡衞士者中分、一日上、一日下、謂無事故日者、每下日、卽令於當府、敎習弓馬、用刀弄槍、謂弄者、玩也、槍者、木兩頭鋭者、卽戈之屬也、及發弩拋石、謂拋者、猶擲也、作機械擲石擊敵者也、至午時各放還、仍本府試練、知其進不、卽非別勅者、不得雜使、

凡衞士、雖下日、皆不得輒卅里外私行、必有事故、須經本府判聽乃去、其上番年、雖有重服、謂父母喪也、不在下限、下番日令終服、謂凡衞士雖遭重服、不在下限、心喪從公、驗事情從職者、而稱下番日令終服者、是欲免番年之衞役、非言更行居喪之禮、卽諸作業嫁娶之類、皆以正服年論下番日者非、其防人還鄕准衞士、但火頭者非在此例也、

〔令義解五軍防〕凡兵士以上、皆造歷名簿○註略二通、○中略其衞士防人還鄕之日、並免國內上番、謂免兵士之番役、卽校尉以下亦同、其征人還鄕之日、亦須相准免、假如經一年者、免一年衞役、經二年者、免二年衞役之類也、衞士一年、防人三年、

〔續日本紀五元明〕和銅四年九月甲戌、詔曰、凡衞士者、非常之設、不虞之備、必須勇健應堪爲兵、而悉皆庭羸、亦不習武藝、徒有其名、而不能爲益、如臨大事、何堪機要、傳不云乎、不敎人戰、是謂棄之、自今以後、專委長官、簡點勇敢便武之人、每年代易焉、

〔續日本紀八元正〕養老四年五月癸酉、太政官奏、○中略下諸國符、自非大事、差逃走衞士仕丁替、○中略便以太政官印印之、奏可之、

〔東大寺正倉院文書三十〕一廿七日符壹道、右衞士出雲積三國等、合三人逃亡狀、以三月十七日到國、

三月

一廿三日符壹道、衞門府衞士肆部臣弟膳逃亡狀、以四月十日到國、

六月

一廿五日符壹道、右衞士私部大嶋死亡狀、以七月十三日到國、○中略

天平六年

殿、本府假御隨身、將監將曹府生、給祿返遣之、(中略)○次給吉上御輿長駕輿丁等祿、

吉上六人(疋各二段)

〔定家朝臣記〕康平五年四月廿五日、給吉上并御輿長等祿、

吉上七人(番長一人布四段、近衛六人布二段、)御輿長六人(番長一人疋絹、近衛五人布二段、)

駕輿丁

〔書言字考節用集〕四人倫 駕輿丁(カヨブテウ) 駕輿丁(コシカキ)

〔延喜式〕四十五左右近衛 凡近衛駕輿丁直丁等、月粮米鹽、毎月請受、唯漬菜料鹽、春秋請之、(數見大膳式)餘府准此、

使部

〔續日本紀〕二文武 大寶二年八月戊申、有勅五衛府使部、始准兵衛給祿、

衛士

〔日本書紀〕二十一崇峻 二年(○用明)四月、橘豐日天皇崩、五月、物部大連(○守屋)軍衆三度驚駭、大連元欲去餘皇子等而立穴穗部皇子爲天皇、(中略)六月庚戌、是日夜半、佐伯連丹經手等、圍穴穗部皇子宮、於是衛士。。先登樓上、撃穴穗部皇子肩、皇子落於樓下、走入偏室、衛士等舉燭而誅、

○按ズルニ、衛士ノ稱始テ此ニ見ユ、

〔續日本紀〕八元正 養老二年五月庚申、定衛士數、國別有差、

〔令義解〕五軍防 凡兵士向京者名衛士、(火別取白丁五人、充火頭、謂鬪免之法、一同仕丁、其防人者不充火頭也、)守邊者名防人、

凡差兵士充衛士防人者、父子兄弟、不得併遣、(謂祖孫亦不可併遣、重於兄弟故、若先異國者、併遣無妨也、)若祖父母父母老疾合侍、家無兼丁、(謂正丁、即不限親疎也、)不在衛士及防人限、(謂免軍名以充侍也、)

凡衛士向京、防人至津之間、皆令國司親自部領、(衛士至京之日、兵部先檢閲戎具、分配三府、○衛門府及左右衛士府若有闕少者、隨事推罪、謂闕少者、戎具闕少、若衛士闕少、亦同也、推罪者、此爲部領立制、其衛士亦不可無罪也、○中略)其往還在路、不得前後零疊使、侵犯百姓、及損害田苗、斫伐桑漆之類、若有違者、國郡錄狀申官、統領之人、依法科罪、(謂路次之國、注犯申官、官團科罪也、軍行亦准此、)

〔令義解〕五宮衛 凡兵衛衛士上番、(衛士上番、謂自本國初上者、謂兵衛者、毎番奏聞、衛士者、唯初上一迴奏聞也、)皆須檢點正身、然

〔貞丈雜記役名四〕一馬部吉祥ノ事、○中略吉祥、又吉上とも書也、是は皆假り字也、愚按には、黄仕丁なるべし、黄色は無位の者の服の色也、仕丁は、めしつかはるゝ者の事也、無位にて黄色の狩衣著る、下部の者の事なるべし、

〔雅言集覽四十八〕馬部吉上　或云、衛士ノ中ニテ、上日上夜ヲヨク勤シ者ヲ頭トシテ云ナリ、

〔北山抄九羽林要抄〕陣中事
外衛番長以下、帶兵仗不能入近衛陣中、(中隔以内、是近衛陣中也、○吉上近衛候閤門掖、謂之抑陣、兵衛陣、不知其中事、)

〔禁秘御抄下〕給馬部吉上
所衆瀧口等、有咎下簡、於殿上口給之、馬部相具罷出、○中略或給吉上、同官外記方ナドハ、或給吉上也、
犬狩
匡房記曰、(中略)先例大狩時、仰左右近陣吉上等狩之云々、

〔本朝世紀〕天慶元年八月四日戊寅、是日酉三刻、自建禮門前至于中務省北前、羽蟻群飛、宛如張幕、○中略召春花門陣吉上門部紀秋生問、具申見由已了、　九月三日、今日左近陣公卿座、相變年來例、忽以改替、所以然者、自七月廿七日、主上○朱雀移御綾綺殿、自敷政門外北腋作屏東行、爲御在所内已了、依壞陣吉上舍人居所、以大辨已下外記史所著床子、更立敷政門外南殿、

〔本朝世紀〕天慶八年八月六日己巳、今日右兵衛陣官、吉上舍人、左近陣吉上舍人等申云、去夜子丑時許、更聞馬百匹許程、如人乘自件陣入來、○中略陣官吉上等、迷心神恐懼不出、騎馬者入畢、共出見之、更無人云々、

〔古今著聞集十七變化〕天慶八年八月五日の夜、宣陽建秋兩門の間に、馬二萬ばかりの音しけり、内裏引いるゝほど數剋を經けり、左近のわきの陣に候近衛、左兵衛の陣の吉上、みな是を聞けり、

〔知信朝臣記〕長承四年○保延元年二月十三日丁巳、大將殿、○藤原賴長參所々令申慶賀給、○中略還御于大炊

吉上

奔赴無及、然則徒爲諸國之豺狼、曾非六軍之貔虎、望請諸衞府舍人充補之後、不得歸住本國、若有事歸者、各限假日、取本府牒、附送國衙、不得限外留連、若猶懈緩不還者、國宰且解其職、且錄事狀、牒送本府、如此則貔貅比肩於門欄、狗吠休警於州壤、〇中略

延喜十四年四月廿八日　從四位上行式部大輔臣三善朝臣淸行上封事

〔日本後紀嵯峨二十二〕弘仁三年三月丁卯、異能之兵衞每府四人、准近衞給別祿月粮、

〔延喜式近衞四十五〕凡近衞武藝優長、性志耿介、不間水火、必達所向、勿顧死生、以一當百者、號爲異能、兵衞准此、其祿及食法、見兵部大膳等式、

〔延喜式兵部二十八〕凡武藝優長、性志耿介、不間水火、必達所向、勿顧死生、一以當百者、並給別祿、左右近衞各十二人、左右兵衞各四人、別春夏絁一疋、調布二端、秋冬絁二疋、綿二屯、調布二端、並准季祿日數給之、又月別白米一石、鹽一斗、長上十三日、番上十日以上給之、

〔延喜式大膳三十三〕諸衞異能士、月別鹽一斗、小月亦同

〔榮花物語かゝやく藤壺六〕よき日して御めのとよりはじめ、命婦、くら人、ぢんの吉上、衞士、仕丁まで、をくり物を給はすれば、〇下略

〔榮花物語日蔭の葛十〕御前に火たきやするゑ、陣屋つくり、吉上のこと〴〵しげにいひおもひたるけしきよりことおこりて、さぶらひの長どもなさせたまひ、さま〴〵こと〴〵しげにみえたり、

〔本朝文粹對冊三〕散樂得業生正六位上行兼腋陣吉上秦宿禰氏安對〇文略

〔倭訓栞前編七〕きちじやう　今昔物語に、藏人、馬司の馬をたまはり、それに乘て、吉祥に火をともさせ、先にたてゝと見え、盛衰記にも、めぶ吉祥に仰てと見えたり、めぶは馬部也、禁秘抄に見ゆ、平家物語に、めぶき仕丁と書るも、馬部吉祥也、或は給丁をかく呼たる也ともいへり、信濃の俗に、人の姓をいやしむる詞に、馬部丁といへるも是也とぞ、

貞觀十六年九月十四日

太政官符

應科罪居住所部六衛府舍人等對捍國司不進官物事

右得播磨國解偁、調庸租税、國之大事也、此國百姓、過半是六衛府舍人、初府牒出國以後、偏稱宿衛不備課役、傾作田疇不受正税、无道爲宗對捍國郡、或所作田稻、苅收私宅之後、毎其倉屋爭懸牒札、稱本府之物號勢家之稻、或事不獲已收納、使等認徵之時、不辨是非、捕以陵轢、動招群黨、恣作濫惡、於是租税專當調綱郡司、憚彼威猛不納物實、僅責契狀空立里倉、因玆調庸過期未進、正税違法返擧、前後之吏遷替之時、件未進返擧等色、勘負前司、遂爲無實、官物欠失、國宰羈絆、許此强梁安期與復、望請官裁張制科罪、調庸租税、合期令進者、左大臣宣、免除課役理待觸符、班收正税尤據耕田、如聞諸衛舍人未知皇憲、專怙宿衛蔑爾國郡、既爲所部之民、何扞宰吏之政、宜加教喩令勿違背、若下制之後猶有違犯者、捕身及錄名言上、隨卽事重解却、犯輕科罪、其未進官物、令貢納曾不寬宥、諸國准此、

昌泰四年閏六月廿五日

〔本朝文粹二意見封事〕意見十二箇條　善相公清行中略○

一請禁諸國僧徒濫惡及宿衛舍人凶暴事

右臣伏見、去延喜元年官符、已禁權貴之規錮山川、勢家之侵奪田地、芟州郡之枳棘、除兆庶之螯蠹、吏治易施、民居得安、但猶凶暴邪惡者、惡僧與宿衛也、中略○六衛府舍人、皆須毎月結番、曉夕警備、當番陪侍兵欄、他番休息京洛、東西帶刀町、此其住所也、若有機急者、又須當番他番俱勤防禦、而今件等舍人、皆散落諸國、或在千里郵驛之外、百日行程之境、豈得門籍編名、宿衛分番乎、此皆部內强豪、民間凶暴者也、國司依法勘糺其事、則破奔入洛、卽納錢貨爲宿衛、或帥徒黨而却圍國府、或奮老拳以凌辱官長、凡厥蠹害非唯疥癬、夫以還置衛卒者、爲備警急也、而今遠在甸服、不居京畿、縱令皇都無虞則此輩何用、若有急者、

欠之、

〔類聚三代格 十七〕太政官符

應解却郡司所帶左右近衞門部兵衞等事

右百里之任、衆務所繁、而或郡司偏稱宿衞、有妨公事、准之政途、理不可然者、中納言兼右近衞大將從三位行春宮大夫藤原朝臣時平宣、奉勅宜不論異能無才、且解却且言上、但擬用之輩、隨國司申、登時解退、曾不停滯、適令分憂之吏、頗得施治之便、

寬平六年十一月十一日

〔類聚三代格 十二〕太政官符

應勘移補左右近衞左右兵衞市廛百姓及決罰主殿主鷹織部等寮司雜色駈使幷犬飼餌取等事

右得左京職解偁、市司解偁、件等百姓多任衞府、恒住市邊、强買不止、毆寃無絶、又主殿主鷹織部等寮司雜色駈使、惡行既甚、陵官人、因玆市廛荒廢、公事難堪、望請衞府移送本府、以從解却、自餘雜色、更不經本隨犯決罰、然則暴亂永絶、市廛安業者、右大臣宣、依請、右京□亦宜准此、

承和元年十二月廿二日

太政官符

一應減定諸衞府舍人等及放縱之輩求酒食責被物罪事 三箇條初條

右撿非違使起請偁、謹案貞觀八年正月廿三日格、諸家諸人、神宴之日、不依主招、求酒食責被物者、不論蔭贖、坐從兇鉗、欲絶彼放逸、殊設此嚴科、使等理須依格旨加科責、然而原其罪過、實乖盜科、兇鉗之事、理非穩便、憚之不罪、則還似無格、忍之將行、則事涉慘虐、疑殆不斷、積習更倍、望請衞府舍人等、准六位已下把笏者、從解却、自外一依去天平寶字二年二月廿日勅書、決杖八十者、

以前右大臣宣、奉勅依請、

右被右大臣宣偁、奉勅、衞府舍人係望軍毅、今廢兵士、其望已絕、若有巧書筭者、宜用主政主帳、

延曆十四年五月九日

〔延喜式十八式部〕凡左右近衞長上十五年、番上廿年爲限、每年各二人、左右兵衞各一人、左右衞門隔年各一人、任諸國史生、其任郡領者、左右近衞各二人、左右兵衞各一人、待本府移勘錄譜第、奏擬文之日、副奏文進、諸衞同之但左右兵衞通任郡領及主政帳、左右衞門、若有移送府別郡領一人、隔三年補之、並以佐已上共署文任之、

〔延喜式二十八兵部〕凡○中略舍人、本府奏聞補之、不待省移帶仗、其左右馬寮兵庫寮史生已上、補任之後、省移本司、卽令帶仗、自餘雜任本衞判帶、

〔三代實錄十八淸和〕貞觀十二年十二月廿五日壬寅、諸衞府官人舍人、兼任諸國史生者、令式部省移兵部省、

〔延喜式四十二左右京〕凡六衞府舍人等、不得帶劒入市、

〔延喜式四十一彈正〕凡衞府舍人刀緒、左近衞緋絁、右近衞緋纈、左兵衞深綠、右兵衞深綠纈、左門衞淺縹、右門部淺縹纈、

凡縹色以藍揩者、衞府舍人等儀服、他人不得輙用、

〔延喜式二十八兵部〕凡六衞府舍人、被解却者、得考選幷季帳、員外直移送本貫職國、

凡諸衞舍人、祿鍬者、有位八口、無位四口、其門部者、有位無位並二口、

〔三代實錄二十六淸和〕貞觀十六年九月十四日己亥、撿非違使起請五條、○中略其四、應減定請衞舍人胡籙之箭數事、案右所行、准於令條、兵士箭數、以五十隻令盛於一箙、而今人力微弱、難帶五十隻、勘責不肯准行、或乃二十隻已下、十隻已上帶之、非常之備、豈容如斯、誠是科責無所重、人心不甘服之所致也、望請尋常平懷之時、以三十隻爲定、令便於帶著、但節會行幸、及臨時警固之日、依法滿於五十、不令武備

應六衞府（○左右近衞、左右衞門、左右兵衞、）醫師預奏任事

右得醫師等解狀偁、謹撿官位令、典藥寮醫師從七位、針師從八位、諸衞府醫師正八位、大宰府醫師正八位、又延曆十五年十月廿八日格偁、陸奧國醫師、准少目者、今典藥寮醫師針師幷大宰府陸奧國醫師等、皆是奏任、而至諸衞府醫師、獨在判補、伏案物意、可謂相違、望請官裁被預奏任者、中納言從三位兼行左衞門督源朝臣能有宣、奉勅依請、

仁和元年十二月廿九日

〔官職秘抄　下〕諸衞醫師

以道擧任之

府生

〔書言字考節用集　三官位〕府生（フシヤウ）（檢非違使、及六衞府下司、）

〔續日本紀　十聖武〕神龜五年十一月壬寅、制衞府府生者、兵部省補焉、

〔延喜式　二十八兵部〕左右近衞府府生各六人、左右衞門府、左右兵衞府各四人、左右馬寮馬醫各二人、史生各四人、但六衞府府生、幷馬寮馬醫史生待宣旨補任、自餘省補之、

凡諸衞府生已上、新補任者、省具錄移本司奏聞、然後帶仗、○中略自餘雜任、本衞判補、

〔西宮記　臨時二〕補諸衞府生事

依本司奏補之、或以所々有勞者補之、宣旨給兵部、馬寮同之、但兵庫寮史生、兵部補之、

〔續日本紀　二十孝謙〕天平寶字元年正月甲寅、詔曰、比者郡領軍毅任用白丁、由此民習居家求官、未識仕君得祿、移孝之忠漸衰、勸人之道實難、自今已後、宜令所司除有位人以外、（○外字原脫、今據一本補、）不得入簡試例、其軍毅者、還有六衞府中、器量辨了、身才勇健者擬任之、他色之徒、勿使濫訴、自餘諸事、猶如格令、

舍人

〔類聚三代格　七〕太政官符

應以衞府舍人任主政主帳事

不盛也、若其冗何、及於寶龜三年二月、罷外衞、且其舍人者、分配之近衞及左右兵衞三府、而大同二年四月、改近衞中衞、爲左右近衞、〈紀略〉三年七月、又罷衞門府、以其衞門職、附諸左右衞士府、仍號左右靫負府、〈○中略〉〈註〉遂號爲六府、或有四衞二府之稱焉、〈○中略〉〈註〉弘仁二年十一月、改左右衞士府、爲左右衞門府、〈○中略〉自是而後、六府之官、不復革也、蓋自官失其職、職移武人、所謂京師守護、卽古靫負、〈自鎌倉源二位、請定國、居其弟伊豫守義經于京師、以護之、而後京師守護之稱起、處置與古異、而頗有似矣、〉名與時變、事尙存焉、

職員

長官

〔倭名類聚抄〈五職名〉〕長官　近衞府曰大將、兵衞衞門等四府曰督、〈中略〉〈皆加美〉〈已上〉

〔續日本紀〈四元明〉〕慶雲四年六月庚寅、天皇御東樓、詔召八省卿及五衞督率等、告以依遺詔攝万機之狀、

〔令義解〈四選敍〉〕凡任官、大納言以上、左右大辨、八省卿、五衞府督、彈正尹、大宰帥、勅任、

〔令抄〈衣服〉〕牙笏　衞府督佐、五位相當也、故執牙笏、

〔令義解〈五宮衞〉〕凡五衞府官長、皆以時按撿、〈謂與職員令以時巡撿同、其判官以下、自依上條、每日按撿也、〉所部、糺察不如法、

次官

〔倭名類聚抄〈五職名〉〕次官　近衞府曰中少將、兵衞衞門曰佐、〈中略〉〈皆須介〉〈已上〉

〔空穗物語〈俊蔭〉二〕少將よりはじめ、ゑふのすけたちには、うすいろのも、きくちばのからぎぬ、〈○下略〉

判官

〔倭名類聚抄〈五職名〉〕判官　近衞曰將監、兵衞衞門四府曰尉、〈中略〉〈皆萬豆利古止比止〉

〔拾芥抄〈中末諸司官人座次〉〕諸司官人座次〈允亮說云、○中略〉

左右近衞將監　左右衞門尉　左右兵衞尉

〔江次第抄〈二〉〕敍位

外衞　西宮云、外衞勞同諸司、今按、外衞者、兵衞衞門尉也、

主典

〔倭名類聚抄〈五職名〉〕佐官　近衞府曰將曹、兵衞衞門四府曰志、〈中略〉〈皆佐官〉

醫師

〔日本後紀〈八桓武〉〕延曆十八年六月甲戌朔、省中衞左右衞士三府醫師一員、

〔享祿本類聚三代格〈四〉〕太政官符

是則四府ノ事也、衞府トモ云、此官八省ノ下、諸寮ノ上ニテ、諸職ニ等同也、故ニ衞府ノ督ハ、相當從四位也、

〔職原抄 下〕外衞

左右衞門府　督一人、○中略四府之中殊執之、

〔職官志 五〕左右近衞、蓋衞兵衞之職也、○中略兵衞之職、後世遷於外、職原鈔、與衞門並稱爲外衞、然其制亦未詳定何世、

〔職原抄引事大全 七〕四府者、左右兵衞、左右衞門也、

華庵曰、四府者、和訓不讀右字、是故實也、右兵衞讀兵衞、右衞門讀衞門也、

〔續日本後紀 十八仁明〕承和十五年四月丙辰、上御武德殿、閲覽諸牧細馬、兼令四衞○二府○驍才者騎射、

〔左經記〕長元七年八月九日丙寅、入夜東風大吹、所々舍屋幷中門等、多以破損、十日丁卯、人々云、京條大小屋舍、頗破殊甚、○中略除左衞門之外、五衞府廳○中略皆以顚倒、

〔日本紀略 三村上〕天曆三年六月四日丙子、喚院下人破壞諸衞舍人屋、六日戊寅、諸衞舍人數百人、爲群黨、所破院御厨預中務丞佐忠宅、

〔延喜式 四十五左右近衞〕凡威儀及行幸所須器仗者、收於府庫、臨時出用、但甲楯不在此限、○餘府准此

〔延喜式 二十八兵部〕凡諸儀所須器仗者、衞府府別貯庫、臨時出用、其挂甲者、預申官、官下符兵庫、府別分付、事畢返納、

〔職官志 五〕令有左右兵衞、左右衞士、與衞門凡五府、至神龜五年八月、置中衞、○註略而有六衞之稱焉、天平元年、式部卿藤原宇合、將六衞之兵、圍長屋王第、是也、天平寶字三年十二月、又置授刀衞、○註略其前有授刀舍人寮、○註略既而廢寮、○註略唯其授刀舍人隷諸衞之府、莫有適屬、○註略今授刀衞、蓋總其舍人者、特不曰府而曰衞也、至神護元年二月、改之爲近衞、○註略又置外衞、而二府○註略與前之六衞凡八府、當世禁旅之盛、從之如雲、非

〔源氏物語三十四若菜〕大將の君〇夕霧は、うしとらのまちに、人々あまたして、まりもてあそばして見給ときこしめして、〇中略上達部なりとも、わかき衞府づかさたちは、などかみだれ給はざらん、〇中略大將〇夕霧も、かんの君〇柏木も、みなおりゐて、えならぬはなのかげにさまよひ給ふ、

〔令義解五宮衞〕凡開閉門者、〇中略卽諸衞按檢所部及諸門、謂諸衞者、五衞府主典以上、

〔倭訓栞前編十三〕そゑ　源氏にそゑの瀧かひとみゆ、諸衞の義也、

〔名目抄諸公事官職〕六府左右近衞、左右衞門府、左右兵衞府、

〔源氏物語三十四若菜〕大將〇夕霧の御いきほひも、いといかめしく成給にたれば、うちそへて、けふの作法いとことなり、御馬四十疋、左右の馬づかさ、六衞府の官人、かみよりつぎ〳〵にひきとゝのふる程、日くれはてぬ、

〔河海抄十三若菜〕六衞左右近衞、左右衞門府、左右兵衞府、

〔令抄考課〕內外文武官　謂長上官也、五衞府謂內武官、軍團謂外武官、

〔令義解四考課〕凡內外文武官、謂依公式令、在京諸司爲京官、自餘皆爲外官、又五衞府、軍團、及諸帶仗者爲武、自餘並爲文是、但外武官不入此條、何者軍毅別爲立四等考第故也、〇下略

〔令義解七公式〕凡內外諸司、〇中略五衞府、軍團、及諸帶仗者爲武、謂馬寮兵庫等是也、大宰府、三關國、及內舍人、不在武限、謂文云不在武限、卽知合帶仗、既擧內舍人、亦中務丞以上、准而須知、自餘並爲文、

〔鹽尻八十一〕武業記

古帝京諸國武官ヲ置テ、天下軍馬ノ政令ヲ爲シム、凡內武官アリ、外武官アリ、其略如左、

內武官在京諸衞ノ職ナリ　諸衞是ニ二官アリ近外　近衞府是ニ左右ノ衞府アリ〇中略　外衞府是ニ衞門ト兵衞トニ官、各左右ノ府アリ、

〔故實拾要十二〕外衞

異アリテ、兵衞最モ親兵タリキ、然ルニ後世、中衞近衞ノ諸府新ニ起ルニ及ビ、衞府ノ制一變ス、特ニ弘仁以後ニ至リテハ、近衞ノ地位、常ニ衞門兵衞ノ上ニ在リテ、威權最モ顯耀ナリキ、是ニ於テ衞門兵衞ヲ外衞ト稱シ、以テ近衞ト對稱セリ、蓋シ六府ノ位次ハ、衞門ハ近衞ニ次ギタルモノニテ、兵衞最モ其下ニ居ル、而シテ守衞ニ在リテハ、近衞ハ閤門ノ內ヲ守リ、兵衞ハ其外ヲ守リ、衞門ハ宮門ヲ守ル、

〔節用集惠〕衞府官(エフクワン)

〔唐律疏議名例三〕諸犯二姦盗略人一、及受レ財而不レ枉レ法、○中略免官、謂二官並免、爵及降所不レ至者聽レ留、○中略

疏議曰、二官謂職事官、散官、衞官爲二一官一、勳官又爲二一官一、此二官並免、

〔拾芥抄中本官位唐名〕衞府金吾 監門 衞門 武衞 兵衞

〔書言字考節用集三官位〕衞府(エフ)謂衞門兵衞之武官、有二非常一者追捕之職、

〔白石紳書九〕一衞府、エフとフの字をすみてよぶなり、

〔貞丈雜記四官位〕一衞府の侍とは、左右近衞の役所を衞府と云ふ、衞府の侍は禁中になし、○中略武家の人々なれども、隨身の如く、弓を持ち矢をおひ、馬に乗る故に、衞府の侍と云ふなるべし、

頭註、又衞府ト計モ云フ也、エフト云ハズ、ヨウトヨム也、

〔延喜式四十八左右馬寮〕凡馬牛分二充衞府一者、左近衞看督馬二疋、糧飼一疋、放飼一疋、左兵衞行レ夜二疋、糧飼加レ鞍、并衞士毎夜充レ之、左衞門牛四頭、其糧飼充二秣草一、牛亦充レ草、

○按ズルニ、此衞府ハ六府ヲ總稱セルナリ、

〔伊勢物語下〕むかし男、つの國むばらの郡あしやを里に、しるよししていきて仕けり、○中略此男なま宮づかへしければ、それを便にてゑふのすけどもあつまりきにけり、此男のこのかみもゑふのかみなりけり、

凡臺有所犯者、式部省加糺正、

〔西宮記臨時五〕車禮

二省丞、逢大臣以下、不下、以笏令出見、弾正同之

〔類聚國史百七職官〕延暦十一年閏十一月壬午朔、新弾例八十三條、賜弾正臺、文多不載、

〔枕草子十二〕かたちよき君達の、弾正にておはするいと見ぐるし、

〔枕草子春曙抄十二〕弾正はたゞすつかさとて、諸法度違背の輩をたゞす官なれば、人愛すくなき物なり、形よき君達には似あはずとの心なるべし、

〔二判問答〕一爲弾正忠之者、叙爵叙留之後、可號弾正大夫忠之由有申輩、可號弾正大夫之條無子細歟、加忠字之段不審、左近大夫將監雖相似、准據若可有差別哉、是爲可分別左右歟如何、

細々稱呼以易言爲先、弾正大夫、左近大夫何事有哉、左近大夫將監、是又無巨難歟、

衞府總載

大寶令ノ制ニハ、衞門、左右衞士、左右兵衞ノ五衞府アリ、神龜五年、更ニ中衞府ヲ置キ、六衞ト爲セリ、天平寶字三年、又授刀衞ヲ置キ、天平神護元年、外衞府ヲ置ク、是ニ於テ凡テ八府ト爲ル、而シテ先ニ置ク所ノ授刀衞ヲ改メテ近衞府ト稱ス、其後寶龜三年、外衞府ヲ罷メ、大同二年、近衞中衞ヲ改稱シテ左右近衞ト爲シ、同三年、衞門府ヲ廢シテ左右衞士府ニ併セ、弘仁二年、又左右衞士ヲ改メテ左右衞門ト爲ス、是ニ於テ始メテ左右近衞、左右衞門、左右兵衞ノ六府ト爲リ、爾後衞府ノ制、復變改アラズ、

上代ハ内物部アリテ、專ラ宮闕ノ禁衞ヲ掌リシガ、五衞府ヲ置クニ至リ、其職ニ内外輕重ノ

臺掌

〔延喜式 十八式部〕凡諸司史生者、○中略彈正臺六人、

〔類聚國史 百七職官〕天長十年六月庚申、彈正臺言、天長三年減巡察二員、加屬二員、既有典員、何無史生、許之、令置二員、

〔續日本紀 三十稱德〕神護景雲三年十一月壬午、彈正史生從八位下秦長田三山、○中略賜姓秦忌寸、

〔享祿本類聚三代格 四〕太政官符

　置臺掌二人事

右得彈正臺解偁、糺禁非違者、臺家大務、而因犯被召之徒、多失其禮、非有臺掌、何糺進退、伏請置臺掌、敎正容止者、被右大臣宣偁、奉勅、准八省例補充、

　大同五年四月十一日○又見類聚國史

扶臺掌

〔三代實錄 五淸和〕貞觀三年八月廿一日壬戌、是日彈正臺始置扶臺掌二人、

〔延喜式 十八式部〕凡中務、治部、民部、兵部、大藏、彈正等省臺、正員之外、扶省掌臺掌以入色者、各置二人、令習儀式、皆待本司所送名簿乃補之、若正員有闕者、以扶省掌補之、

使部

〔延喜式 十八式部〕凡諸司使部者、○中略彈正臺、左右京職各十五人、

用度

〔文德實錄 四〕仁壽二年二月丙辰、散位從四位上和氣朝臣仲世卒、○中略累遷承和四年爲彈正大弼、○中略私以位祿買近江國高嶋郡田五町、以充厨家之費、

〔類聚國史 百七職官〕天長四年六月己未、近江國高嶋郡荒廢地一百五十二町、給彈正臺、

雜載

〔延喜式 四十一彈正〕凡闕官不仕要劇者、充臺中雜用、

〔延喜式 四十一彈正〕凡臺召式部省者、只可稱省、若省召臺者、可稱疏名、

凡中納言以上召臺者、疏以上參、

〔延喜式 四十一彈正〕凡尹若有犯者、弼以下忠以上、共判奏彈、彈當理者下座而退其彈正之内有非違者、各相彈之、

〔日本後紀嵯峨二十一〕弘仁二年四月戊辰、四品明日香親王爲彈正尹、

〔三代實錄清和七〕貞觀五年二月十日癸卯、四品太宰帥惟喬親王爲彈正尹、○中略從四位上行文章博士菅原朝臣是善爲彈正大弼、文章博士如故、

〔三代實錄清和十六〕貞觀十一年二月十六日甲辰、從四位上行安藝守基兄王爲彈正大弼、散位從五位下高階眞人令範爲少弼、

〔皇胤紹運錄〕冷泉院

―爲尊親王 二品彈正尹

―敦道親王 三品太宰帥

〔榮花物語三様々の悦〕三四の宮の御元服一度にせさせ給、さて三宮○冷泉皇子爲尊をば彈正のみやと聞えさす、四宮○敦道をば帥宮ときこえさす、

〔平家物語六〕小がうの事

主上○高倉、中略、やゝ深更に及んで、人やある人やあるとめされけれども、御いらへ申者もなし、稍あつて彈正の大ひつ仲國、その夜しも御とのゐに參りて、遙に遠う候ひけるが、○下略

〔尊卑分脈四源氏〕光遠後白河院判官代―仲國藏人 正五下 彈正少弼

〔公卿補任後醍醐〕正中二年乙丑

中納言從二位藤師賢中宮大夫、左衞門督、正月廿九日、兼彈正尹、止督、

〔太平記二〕師賢登山事附唐崎濱合戰事

尹大納言師賢卿ハ、主上ノ内裏ヲ御出有シ夜、三條河原迄被供奉タリシヲ、○下略

史生

〔日本後紀平城十七〕大同四年三月己未、始置左右兵庫史生各二員、○中略減○中略彈正臺二員、

〔日本後紀嵯峨二十一〕弘仁二年十二月辛未、彈正臺置史生六員、

者不ㇾ任ㇾ之、但明經明法、得業生、文章生、勸學院無官別當直任ㇾ之、依二殿上勞一任例、源學元亭　藤　依二人給一任例藤實
明春宮給　疏大少　臺奏、臨時內給、諸道舉、問者生任ㇾ之、自二陰陽師一任例、文直武

〔職原抄下〕彈正臺
尹一人　多任二親王一、或大納言以上兼ㇾ之、勅任之官也、頗爲二重職一、　大弼一人　少弼一人　殿上四位五位官也、爲二顯職一、近來多及二地下一、無念之儀也、　忠大少　六位諸大夫同侍等任ㇾ之、相當已高之上、爲二顯職一也、近來爲二靫負尉下官一也、不ㇾ叶ㇾ理歟、　疏大少

〔百寮訓要抄〕彈正臺御史臺憲臺　霜臺
尹御史大夫親王是に任せらる丶、又大納言以上可ㇾ然人是に任ず、三家の人々もなる官也、公卿の執する官也、　大弼御史中丞四位五位是になる、殿上人などもつねになる也、　少弼　上におなじ　忠侍御史六位是になる

〔有職問答三〕一彈正官
勿論ニ候
尹はかみにて候哉、任ずる事、親王に可ㇾ限候哉、親王ノ外、大中納言ノ兼官也、遐邇ノ事也、

〔續日本紀四元明〕和銅元年三月丙午、正五位下大石王爲二彈正尹一、

〔續日本紀六元明〕和銅六年八月丁巳、以二正五位下大伴宿禰道足一爲二彈正尹一、

〔續日本紀七元正〕靈龜二年四月壬申、以二從四位下大野王一爲二彈正尹一、

〔續日本紀十五聖武〕天平十五年六月丁酉、外從五位下紀朝臣男楫爲二彈正弼一、

〔續日本紀十六聖武〕天平十八年四月壬辰、從四位上船王爲二彈正尹一、

〔續日本紀二十九稱德〕神護景雲二年七月壬申朔、從五位下豐野眞人篠原爲二彈正弼一、

〔日本後紀八桓武〕延暦十八年四月乙酉、從五位下紀朝臣千世爲二彈正弼一、

〔日本後紀十三桓武〕大同元年五月壬申、三品諱嵯峨爲二彈正尹一、

補任

凡喪葬竸飾奢僭、及淫祀之類、左右京職若不禁者彈之、

凡市人集時、入市召市司、令市廓靜定、每肆巡行糺彈非違、(謂錦紗綾紵若濶不滿一尺九寸、長不滿六丈、又賣物者有行濫、及橫刀鞍等不題鑿造者姓名之類、)

凡東西二寺齋會日、(四月八日、七月十五日、)忠已下向寺糺彈非違、(糺衆僧及男女禁色幷男女交雜之類、)前三日喚左右京職云、將依例巡撿、宜使條令告寺家辨備之、

凡在京倉庫、並令臺巡撿之、

凡遣臺官人於五畿內之儀、預定忠一人、然後尹若弼一人、忠一人、參太政官請進止、訖卽參入被唱定、訖還出卽作下國符、請官印及官符、訖教使忠云、除殺罪之外悉決之、

〔續日本紀二十七稱德〕天平神護二年五月戊午、大納言正三位吉備朝臣眞備奏、樹二柱於中壬生門西、其一題曰、凡被官司抑屈者、宜至此下申訴、其一曰、百姓有寃枉者、宜至此下申訴、並令彈正臺受其訴狀、

〔續日本後紀八仁明〕承和六年六月乙卯、勅、彈正臺及撿非違使雖配置各異、而糺彈違犯、彼此亦同、但至犯人逃走、姦盜隱遁、彈正之職不堪追捕、自今以後、緣糺違犯有可追捕者、臺使相通、遣撿非違使長等、隨事追捕、立爲永例、○又見類聚國史

〔延喜式四十一彈正〕凡臺官等撿按獄中非違、(謂杖笞大小不安置彈人、及給薦席藥、合法以不之類也、)

凡有非違人、召其本司及管省而彈之、

〔職原抄下〕彈正臺

掌糺彈事、近代其職掌移于撿非違使廳、至中古於洛中巡撿猶勤之、當時已絕、

〔官職秘抄下〕彈正臺

尹　爲親王官、但大中納言兼之、邂逅例也、　弼(大少)　公達諸大夫任之、於大弼者參議或兼之、好古有例等也、又諸官權亮兼之、惟範是也、　忠(大少)　撰重代侍授之、良家子任之、必可轉民部丞之故也、無官

〔西宮記 臨時二〕下彈正臺宣旨

臺弼爲博士者、依著式部省試判事著式部事、　臺官人候式所事　臺官人參維摩會事、（同官人著射禮）　禁色雜袍事　勅授帶劒事、牛輦車等事、（以上上卿著左衞門陣下之）　以臺官人爲諸國使事（口宣宣旨召疏於左衞門陣仰之）　贖銅及糺彈等事、（可書下宣旨歟）但彼臺申云、不奉辨史傳宣等云々、但依官符宣旨所行也、諸禁制斷罪等、官符宣旨轉自臺至於撿非違使廳、

〔續日本紀 二 文武〕大寶元年十一月丁丑、令彈正臺巡察畿內、

〔三代實錄 十八 清和〕貞觀十二年十二月廿七日甲辰、制彈正臺復天長九年十一月二十九日格、毎月巡撿京中、幷勘記諸司諸院諸家及內外主典已上犯狀、直移式部兵部二省、貶奪考祿、

〔續日本後紀 九 仁明〕承和七年九月丁丑、太政官議奏、彈正臺巡撿之日、命左右京職祗承官人下馬事、臺言、巡察之日、祗承官人、被勘當時、下馬者行來尙矣、而比年左下、右不下、因問明法博士、答曰、勘與見勘何無分別、但無正文、可請官裁者、今案職員令、弼以下巡察彈正已上、掌巡察內外糺彈非違、又京職式云、彈正巡撿之日、官人一人、史生將坊長兵士等祗承者、右大臣宣、奉勅、忠及巡察彈正巡撿之日、京職進馬勿勞下馬、並須馬上承其勘當、弼如行事者、六位已下職司等、一切下馬、但史生坊令、身帶六位、雖逢忠已下、猶尙下馬、

〔續日本後紀 十三 仁明〕承和十年十二月甲戌、制、彈正京職、巡撿之日、下馬之法、相爭日久、須當弼行事、大夫及亮、揖馬請勘當、至于進馬、並依致敬、忠幷巡察撿按之日、進馬進退、一准弼亮相對之儀、史生坊令、不論位階、摠猶下馬、

〔延喜式 四十一 彈正〕凡巡撿之日、京職若承勘當者、依下馬法行之、其史生坊令不論位階皆下馬、

〔令義解 三 賦役〕凡在京有大營造、（謂役五百人以上也）役丁匠之處、皆令彈正巡行、若有非違、隨事彈糺、（謂役不知法也）

〔延喜式 四十一 彈正〕凡私養鷹鷂、臺加禁彈、

〔令義解 四考課〕訪察嚴明、糺擧必當、爲彈正之最、(謂忠以上及巡察、)

〔延喜式 四十一彈正〕凡臺奏彈事者、不經太政官而直奏聞、(將奏事者、忠詣闇門、告大舍人、令伺奏事狀、有可召者、尹已下忠已上、共入上聞、若御太極殿者、忠就大舍人處、伺奏事狀、舍人召臺者、進前上聞、但臨時奏事者、忠以上一人詣內侍所、令內侍奏聞之、)

凡臺聞官司枉判及閭里犯法者、追所由人勘問、其由得實應奏者、隨卽奏聞、

〔類聚三代格 十二〕詔、彈正者、月別三度、巡察諸司、糺正非違、若有廢闕者、仍具事狀移送式部、考日勘問、

和銅五年五月十七日(○又見續日本紀、)

〔續日本紀 十九孝謙〕天平勝寶八歲十一月丁巳、勅、如聞出納官物、諸司人等、苟貪前分、巧作逗留、稍延旬日、不肯收納、由此擔脚辛苦、競爲逃歸、非直敗治、實亦虧化、宜令彈正臺巡檢、自今以後、勿使更然、(○又見類聚三代格、)

〔儀式 六〕元正朝賀儀

彈正忠以下出自朱雀門西掖門、左右分列(左度自馳道、右便留在西、)於東西仗舍前(在東者西面北上、在西者東面北上、)糺彈禮儀及帶仗非違等(若有犯人、式部不糺正、直不彈之、)訖入自東西掖門、列立翔鸞棲鳳兩樓南頭、(西面位糺彈同上、)訖入自長樂永嘉兩門、列立東西朝集堂南頭、(以內糺彈如上)

〔延喜式 四十一彈正〕凡臺彈人者、詞容端嚴、依理糺彈、其受彈者敬愼容止、恭聲稱唯、乃陳所問、違者復彈、

凡臺糺彈不當者、卽有得彈之官、其臺彈不論合不、愼須受彈、

凡彈正不得彈太政大臣、太政大臣得彈彈正、其左右大臣與彈正、若有非違者、各得互彈、

凡彈親王及左右大臣者、弼已上在臺座、而遣忠一人於堂上彈之、諸王諸臣三位已上及參議者、就其前座彈之、(預仰所司、令設座、)四位已下不問王臣、皆喚其身於臺彈之、(五位已上設座、)其被彈人者、起座稱唯、彈竟之後、亦起稱唯、若不起者亦彈之、

○按ズルニ、此司ノ職掌ノ內、糺彈ニ係レル者ハ、法律部糺彈篇ニ詳ナリ、

右憲臺之任、寔號要班、自備官威、內外畏其嚴峯、鳥庭抗宜、風俗資其肅淸、而弼唯一員、政多擁滯、加置件員、爲大少弼、益以威嚴、

巡察彈正八員（今減二員）

□□□員從衆、其政差閑、減省員數、以在簡要、□□□□□□□隨宜、塞人乘時、政無礙滯、然則□□職分官、法令有限、而省闕加劇、於政爲便、臣等商量所□□□□□□□裁、謹以申聞、謹奏、

弘仁十四年十一月十三日（○年號原脫、據類聚國史補、）

〔類聚國史百七職官〕弘仁十四年十一月癸亥、巡察彈正八員減二員、定六員、

〔享祿本類聚三代格四〕太政官符

應加減官員事

減巡察彈正二員　加巡察屬二員（大小各一員）

右得彈正臺解偁、巡察□□等解偁、謹案勅□□□□年巡察彈正、檢巡京中及東西市諸寺、糺彈非違、□而破損汙穢等者、又云、凡宮城內外、及汙穢者、毎日遣巡察□□□□□□勅旨、觸類多途、又案職員令云、（○下缺）

○按ズルニ、本文缺失シテ年月ヲ詳ニシ難シト雖モ、下ニ引ケル類聚國史天長十年六月庚申ノ條ニ據ルニ、天長三年ノ事ナルベシ、巡察彈正ハ其初メ十員ナリシヲ、弘仁四年二員ヲ減ジ、同十四年又二員ヲ減ジ、六員ヲ以テ定額トシ、天長三年ニ至リ、又二員ヲ減ジテ四員トシ、其後遂ニ廢セラル、但其年月ヲ詳ニセザレドモ、類聚三代格寬平八年九月七日ノ官符、廢司ノ要劇番上料等ヲ收ムル條ニ、巡察彈正ノ田アレバ、當時仍ホ巡察彈正アリシコト明ナリ、故ニ巡察彈正ノ廢セラレシハ此後ニ在ルナリ、

〔類聚國史百七職官〕天長十年六月庚申、彈正臺言、天長三年減巡察二員、加屬二員、（○下略）

巡察使出日卽令按行、賦役令云、在京有大營造、役丁匠之處、皆令彈正巡行、則知在外有大營造、役丁匠之處、國司幷巡察使巡行耳、穴云、忠以下是自巡察人、故內謂宮城門、內宮門外也、於宮門內不令巡察故也、外謂宮城以外京內是也、宮門內聞有非違者、忠等亦召彈無妨、跡云、忠巡察等、內謂宮內、外謂京內、爲自親巡察故也、古記云、內者宮內也、外者京內也、諸國太政官隨處分耳、朱云、巡察內外、謂自巡察也、內者從宮城內從宮門外也、外謂從宮城外從京城內也、巡察彈正注云、內外與大忠內外幷同也、但大忠者從此事、外皆掌宮內雜事也、餘同神祇大祐之故、是以與巡察爲別也、大忠巡察內外時、疏共隨從可記非違也、巡察彈正之巡時亦同者、

〔令義解官位一〕從四位階〇上　彈正尹　正五位階〇下　彈正弼　正六位階〇上　彈正大忠　彈正少忠階〇下

正七位階〇上　彈正大疏　彈正巡察階〇下　正八位階〇上　彈正少疏

〔類聚三代格五〕勅、准令彈正尹者、從四位上官、官位已輕人不敢畏、自今以後改爲從三位官、主者施行、

天平寶字三年七月三日日本紀〇又見續

〔拾芥抄中本官位唐名〕彈正尹御史大夫、今號霜臺、　弼御史大少丞　忠御史侍　疏御史錄事御史主簿

〔令義解七公式〕凡彈正、謂巡察以上、其疏亦同也、別勅令權撿按餘官者、不得仍知彈正事、謂不關預彈正務、專知權撿按事、

〔延喜式四十一彈正〕凡臺疏以上、自非別勅、不得權任他務、

凡臺官人不得充所別當、

〔令集解五職員〕彈正臺弘仁四年六月十三日官奏云、加減彈正臺官員事、疏二員、今加少疏一員、巡察彈正十員、今減二員、史生六員、大同四年中減今加員、右件等官員、令條立限、而或事繁人少、來務難濟、或職員徒多、其政不要、事有沿革、政崇改張、臣等商量具件如前、伏聽天裁、謹以申聞、謹奏聞、〇又見類聚國史

〔享祿本類聚三代格四〕太政官謹奏〇中略

加減彈正臺官員事

弼一員今加大弼一員、從四位下官

廳舍

職員 職掌

奉勅改易官號、略〇中彈正臺糺正內外、肅清風俗、故改爲糺政臺、

〔續日本紀淳仁二十二〕天平寶字三年七月丁卯、三品池田親王爲糺政尹、

〔續日本紀淳仁二十五〕天平寶字八年九月丙辰、勅、逆人仲麻呂執政、奏改官名、宜復舊焉、

〔類聚國史百七職官〕大同三年正月壬寅、詔曰云々、內禮司併彈正臺、

〔拾芥抄中本百官〕彈正臺宮城內、朱雀門西掖、

〔文德實錄四〕仁壽二年二月丙辰、散位從四位上和氣朝臣仲世卒、略〇中累遷承和四年爲彈正大弼、初臺無南門、仲世奏移中院西門以爲臺門、

〔令義解一職員〕彈正臺

尹一人、掌肅清風俗、謂肅者敬也、風者氣也、俗者習也、土地水泉、氣有緩急、聲有高下、謂之風焉、人居此地、習以成性、謂之俗焉、假令信濃國俗、夫死者、即以婦爲殉、若有此類者、正之以禮敎、是以爲肅清風俗也、彈奏內外非違、謂內者左右兩京、外者五畿七道也、依公式令、告言官人害政、及有抑屈者、彈正受推、當理者奏聞、不當理者彈、如此之類、是爲彈奏也、事、弼一人、大忠一人、掌巡察內外、糺彈非違、謂內者宮城以內、外者左右兩京、即與尹職掌所謂內外者、遠近既異、其巡察彈正之巡察糺彈、亦同忠也、餘同神祇大祐、少忠二人、掌同大忠、大疏一人、少疏一人、巡察彈正十人、掌巡察內外、糺彈非違、史生六人、使部卅人、直丁二人、

〔令集解五職員〕穴云、內謂京內迄御所也、言內禮司禁察非違、大者奏彈、故又聞宮內非違彈糺無妨故也、外謂京外諸國也、受告言、有官人害政抑屈彈奏、故唐令亦爾也、略〇中釋云、內外謂京及諸國也、雖不巡行諸國、而諸國人輻湊京都、又彈正以聞見事、亦爲彈之故、諸國有非違者、仰國司合改、此所謂源清流清也、略〇中穴云、問獄令云、杖以下當司決、徒以上送刑部省、未知糺彈杖以下當司決哉、答、凡糺彈之罪笞以上皆依公式令、事大者奏彈、不合奏者糺移刑部省耳、但於當司內、一依獄令、杖以下當司決、徒以上送刑部、私案縱事大合同彈奏也、餘依先記、略〇中釋云、內外者、宮內爲內、京裏爲外也、其外國者巡察使人巡察耳、故巡察使注云、巡察諸國、倉庫令云、在京倉庫並令彈正巡察、在外倉庫

沿革

〔通典二十四職官〕御史臺

御史之名、周官有之、蓋掌贊書而授法令、非今任也、戰國時亦有御史、秦趙澠池之會、各命書其事、又淳于髡謂齊王曰、御史在前、則皆記事之職也、至秦漢爲糾察之任、所居之署、漢謂之御史府、亦謂之御史大夫寺、亦謂之憲臺、成帝時、御史府吏舍百餘區、井水皆竭、又其府中列栢樹、常有野烏數千、棲宿其上、晨去暮來、號曰朝夕烏、烏去不來者數月、長老異之、後果廢御史大夫、爲大司空、是其徵也、後漢以來謂之御史臺、亦謂之蘭臺寺、梁及後魏北齊或謂之南臺、後魏之制、有公事百官朝會名簿、自尚書令僕以下悉送南臺、後周曰司憲、屬秋官府、隋及大唐皆曰御史臺、龍朔二年改爲憲臺、咸亨元年復舊、門北闢主陰殺也、故御史爲風霜之任、彈糾不法、百僚震恐、官之雄峻莫之比焉、舊制但聞風彈事提綱而已、其鞫案禁繫則委之大理、貞觀末、御史中丞李乾祐以囚自大理來往滋其姦、故又案事入法、多爲大理所反、乃奏於臺中置東西二獄、以自繫劾、開元中、大夫崔隱甫復奏罷之、其後罕有聞風彈舉之事、多受詞訟、推覆理盡、然後彈之、將有彈奏、則先牒監門禁止勿許其入、武太后時、改御史臺爲肅政臺、凡置左右肅政二臺、別置大夫中丞各一人、侍御史殿中監察各二十人、左以察朝廷、右以澄郡縣、時議以右多名流、左多寒剗、其遷登南省者、右殆倍焉、以其不陵朝貴故也、二臺迭相糾正、而左加敬憚、龍朔以後、去肅政之名、但爲左右御史臺、睿宗即位、詔二臺並察京師、資位既等、競爲彈糾、百僚被察殆不堪命、太極元年以尚書省悉隸左臺、月餘右臺復請分絓尚書西行事、左臺大夫竇懷貞乃表請依貞觀故事、遂廢右臺、而本御史臺官復舊、廢臺之官並隸焉、

〔續日本紀十四聖武〕天平十四年十一月癸卯、參議從三位大野朝臣東人薨、飛鳥朝廷（天武）糺職大夫直廣肆果安之子也、

〔續日本紀考證五聖武〕糺職大夫（當唐御史大夫、即今彈正尹也、）

〔續日本紀二十淳仁〕天平寶字二年八月甲子、是日大保從二位兼中衛大將藤原惠美朝臣押勝（中略）等、

古事類苑

官位部二十一

令制官職十七

彈正臺

彈正臺ハ、タダスツカサト稱シ、又ダンジヤウタイト稱ス、内外ノ非違ヲ糺彈シ、風俗ヲ肅淸ニスルコトヲ掌リ、親王及ビ左右大臣以下ヲ彈劾スルコトヲ得ルナリ、其彈劾ハ太政官ヲ經ズシテ、直ニ奏聞ス、而シテ此司ハ官吏ヲ彈劾スルコトアルヲ以テ、疏以上ハ別勅アルニアラザレバ、權リニ他務ヲ掌ルコトヲ得ズ、此司ヲ特ニ臺ヲ以テ名トスルハ、唐ノ御史臺ニ倣フナリ、

本司ノ創置ハ詳ナラザレドモ、續日本紀聖武天皇天平十四年十一月紀ニ、飛鳥朝廷糺職大夫直廣肆果安ノ文アルニ據レバ、天武天皇ノ時、既ニ此職アリシヲ知ルベシ、而シテ此官ハ初メ頗ル權勢アリシガ、嵯峨天皇ノ弘仁年中檢非違使ヲ置クニ及ビ、其實權漸ク此ニ移リ、本司ハ爲ニ大ニ衰フルニ至レリ、猶ホ檢非違使篇、及ビ法律部糺彈篇等ヲ參看スベシ、

名稱

〔倭名類聚抄五官名〕臺　職員令云、彈正臺〈和名太々須豆加佐〉

〔朝野群載六太政官〕諸司訓詞

彈正臺〈タヽスツカサ〉

〔下學集上官位〕彈正尹〈ダンジヤウノイン〉〈御史大夫〉

〔職原抄下〕彈正臺〈唐名御史臺、又云憲臺、又云霜臺〉

雜載

〔續日本紀 十七 聖武〕天平勝寶元年正月己巳、比年頻遭亢陽、五穀不登、官人妻子多有飢乏、於是文武官及諸家司給米、人別月六斗、

〔日本後紀 十二 桓武〕延暦廿三年九月甲午、勅、幼稚親王、既不便筆、三位已上、亦無可署、准據令格、還成疑滯、必須自牒、事有不穩、自今以後、宜親王、四品已上、及職事三位已上、並聽以家司牒申牒諸司、其牒首、並具注其官品、其親王家、及其官位姓名家牒、以別同異、牒尾家令已下兩人署之、無品親王内親王者、並別當官人署名申牒、牒式准上定、別當人、依勅處分、其散事三位元無家司、至牒諸司、宜令自署、立爲恒式、

〔續史愚抄 靈元〕天和二年十二月二日乙亥、儲皇(御年八、第五皇子、母大納言典侍宗子、〇東山)御名字朝仁(アサヒト)、式部大輔豐長擇申、有立親王宣下、〇中略 親族公卿關白右大臣(冬經)已下六人、參儲皇親王本所、(下御所)次被補公卿(關白冬經已下六人、按親王家公卿事、始于茲歟、)

〔慶應元年 御所旅〕都仁志喜(一)親王御所(今上第一皇子)

正親町三條大納言實愛卿

三卿 日野大納言資宗卿　中院中納言通富卿　葉室左大辨宰相長順卿

祗候 梅溪宰相右中將通善卿　石野三位基安卿　櫛笥右中將隆韶朝臣　長谷美濃權介信成朝臣

加勢 梅溪侍從通治朝臣

京極前關白家〇藤原師實　肥後〇歌略

事業

〔業黄記〕寬元四年正月廿八日戊午、御拜賀事、〇是日藤原實經爲關白、翌日巳剋事訖、〇中略

本所儀〇中略　召家司仰下所々司〇中略

宣旨女房〇中略　宣旨　宰相局經雅卿女、時攝妻也、

〔續日本紀〕八元正　養老三年十二月庚寅、五位已上家、補事業、防閤、仗身、自是始矣、

〔類聚三代格〕十六　太政官符

應令結保督察奸猾及親守道橋事

右得左京職解偁、〇中略　望請親王及公卿職事三位已上、以家司爲保長、无品親王以六位別當爲保長、散位三位以下五位以上、以事業爲保長、然則皇憲通行、隣伍相保、奸猾永絶、道橋自全、謹請官裁者、右大臣宣、宜早仰下中明舊章、右京職亦准此、

貞觀四年三月十五日〇又見三代實錄

〔延喜式〕二十五主計　凡勘大帳者、皆據去年帳勘其出入、〇中略　其依符所免爲符損、八位蔭子、四位孫、大舍人、三宮舍人、諸司史生、事業(中略)並爲不課、

〔達幸故實鈔〕一　四位宰相〇藤原忠親　間可令用事業事

長寬二十十三、維摩會衾送關白藏人所、

送文書様

左宰相中將家奉送衾貳條

右維摩會料奉送如件

長寬二年十月十三日　事業正親佑大江盛房

永萬元正四、御齋會加供廻文依四位事業加奉事、自官持來御齋會加供廻文事業加奉了、返給、

むき名　上らふの名也、北の政所などはいはれずして、唯ならぬ人の名なり、
一のたい　御つま　これも上らふのがうする名也
小上らふ　これも小路の名、又二位三位大中納言とがうするなり、
中らふ　中少將などいふ也、左衞門のかみ、小かみは、小上らふかけたる名なり、
下らふ　侍從、小辨、少納言などは、下らふながら、中らふかけたる名なり、
うへわらは　これらは國名よせある名などをつく也、さぶらふ名などあるべし、
さじ　これも內裏などのさじおなじ事也

〔有職問答四〕一女に宣旨(上﨟ノ名)と申號候如何
是ハ中宮ノ宣旨、春宮ノ宣旨、又ハ關白家ニ宣旨ノ局トテ候、ソレハ其關白ニナラレ候時ノ宣旨ヲ、トリ入タル女房ヲ喚候也、
裏書 ●此宣旨ヲ摸シテ、攝關家ノ宣旨取傳タルニアラ子ドモ、可レ然女房ナド自然號候、

〔八雲御抄二作法〕女房　宣旨　東宮中宮等ならでも、攝關家も同、

〔榮花物語十六本の雫〕一品宮(○三條皇女禎子內親王)の御かたのわらはべ、おかしき、やさしき、ちいさき、大きさ、めでたきなど、さまぐ\〵つけさせ給へり、

〔續世繼八花のあるじ〕三宮(○後三條皇子輔仁)の御子は、中宮大夫師忠の大納言の御むすめのはらに、はなその丶左のおとゞ(○源有仁)とておはせしこそ、ひかる源氏なども、か丶る人をこそ申さまほしくおぼえ給しか、(○中略)越後のめのと、小大進などいひて、なだかきをんなうたよみ、いへの女房にてあるに、(○下略)

〔千載和歌集十一戀一〕權中納言俊忠、中將に侍ける時、歌合し侍けるに、初戀の心をよめる、
後二條關白家(○藤原師通)筑前(略歟)

〔風雅和歌集十九神祇〕春日社に參りて、身の數ならぬ事を思ひて讀侍ける、

〔慶應元年都仁志喜一〕閑院家　橋本中納言實麗卿　雜掌　和田右衛門大尉
花山家　野宮中納言定功卿　御用人　木下右兵衛少尉　西池主水
日野家　日野大納言資宗卿
雜掌　山中右將監　御用人　山中左府生
廣橋權中納言胤保卿
雜掌　梁山左膳　御用人　野村將曹

〔鹽尻六〕物加波藏人姓名　德大寺家に、物加波遠江守といふ諸大夫あり、是は待宵の小侍從と和歌贈答して、物かはと君がいひけん鳥の音のと讀しゆゑに、物かはの藏人と實定卿よび給ひしもの、裔也、

〔明良洪範九〕光廣卿、〇烏丸或年江戸へ下向シ、三年江戸ニオハシケル、京都ノ宅ノ留守居ニ置レシ雜掌某思ヒケルハ、卿ハ久々江戸ノ廣キ所ニ居ナレテ、此狹キ所へ歸ラレナバ、定メテ窮屈ナラントテ、マヅ土倉ノ内ノ物ヲ皆取出シ、家人共ニ配分シ、土倉ヲ打コボシ、庭園ヲ廣クシテ、卿ノ歸リヲ待レケル、光廣卿歸リ給ヒ、例ノ通リ居間ニ坐シ、庭園ヲナガメ給ヘド、何トモ仰セラレズ、雜掌某、御留守ニ庭園ヲ廣ク致候ト云フ、光廣卿、至極ナガメ宜シクナリヌ、土倉ハ如何ニト宣フ、雜掌某答テ、土倉ハ打コボチ申候ト云フ、光廣卿、中ナル物ハ如何ニト宣フ、雜掌某、御家人へ配分致候ト云フ、光廣卿、汝ハ何ヲ取シゾト宣フ、雜掌某答テ、我等ハ何モ取ラズ候ト云フ、光廣卿、ヨキ哉ト宣フト也、此君臣共ニ博學ニシテ、且禪學ヲ好ミ、頗ル悟道ニ入リシ人也トナリ、

家老

〔安政三年雲上明覽下〕卜部家　吉田三位良熈卿　家老　鈴鹿筑前守　鈴鹿出羽守　鈴鹿但馬守

女房

〔女房官品〕執柄家
大上らふ　かけほの親王、大臣の御娘などこの名にがうす、

〔安政三年〕雲上明覽〔上〕親王御方　伏見兵部卿貞敎親王
諸大夫　田中織部正　後藤縫殿助　後藤攝津守　津田伊勢守　田中美作守
侍　御牧左衞門權大尉　吉田近江介　浦野右京大進
〔慶應元年〕都仁志喜〔一〕親王家　桂淑子內親王
諸大夫　生嶋備後守　生嶋宮內權大輔　尾崎刑部權大輔　尾崎遠江守　生嶋隼人正
侍　高木長門介　塚田左衞門大尉　朝倉越前介　松永肥後介
〔明和新增〕京羽二重〔一〕御攝家方　近衞攝政太政大臣內前公
諸大夫　進藤刑部少輔　中川縫殿頭〔○以下四人略〕
侍　松本主計少允
九條左大臣尙實公
諸大夫　芝大藏權少輔　朝山內藏權頭〔○以下五人略〕
侍　日夏左京少進
閑院家　西三條權大納言實稱卿
諸大夫　河村伊豆守　雜掌　松村圖書
〔安政三年〕雲上明覽〔下〕御華族　久我大納言建通卿
諸大夫　春日讃岐守　森五位〔○以下三人略〕　侍　小島右衞門權大尉　林佐渡介
大臣家　中院侍從通繁朝臣
諸大夫　岡本豐前守〔○以下四人略〕　侍　清水近江介〔○以下二人略〕
御子左家　冷泉宰相爲理卿　雜掌　中川賴母　近藤縫殿
日野家　廣橋前大納言光成卿　雜掌　藤堂兵庫權助　濱路阿波守

諸大夫
侍
雜掌
御用人

〔古今著聞集十六興言利口〕妙音院入道殿、〇藤原師長仰らるべき事有て、孝道朝臣のわかゝりける時、けふたがはで祗候すべきよし仰ふくめられたりけるに、孝道仰を承ながらうせにけり、ひめもすあそびありきて、夕べに歸り參じたりければ、入道殿大きにいからせ給ひて、御勘發のあまりに、贄殿の別當なりける侍を召て、麥飯に錦あはせてにて、只今調進すべきよし仰られければ、則參らせたりけるに、孝道にくはせられけり、

〔拾芥抄中末院司〕關白家大臣家、大略同二攝關、〇中略膳部

〔故實拾要十〕諸大夫召仕家々

是諸大夫ヲ家司ニ召仕玉フハ、親王、攝家、淸華家、幷門跡等ニ召仕玉フ也、但親王攝家ニハ殿上人アリ、此殿上人、多クハ是名家ノ息也、自餘ノ諸家中、諸大夫ヲ召仕フ事、曾テ以不能義也、仍於諸家ハ、雜掌トテ重代ノ侍ヲ撰テ召仕フ也、然ドモ是無位無官ノ者也、

〔故實拾要十〕禁色直衣諸大夫勅許

是攝家淸華家ノ息、元服ノ時、禁色直衣ヲ著シ、諸大夫ヲ可召仕蒙勅許玉フ事也、凡元服ノ時、如家例禁色直衣諸大夫ヲ可召仕哉否ヲ、以職事達天聽時ニ、無相違可召仕ノ勅許有テ、元服シ玉ヒテ始テ參内ノ時、著禁色直衣、諸大夫ヲ召具シ參内アル事也、

〔故實拾要九〕元服

役送ヲ勤ル者ハ、攝家淸華家ニテハ、其家ノ諸大夫、著衣冠勤之者也、無位無官ノ靑侍等、更無勤之、羽林名家ノ諸家中ハ、依無諸大夫、其家ノ雜掌、俗云家老也、無位無官者也、或靑侍等、著布衣役送ヲ勤ル事也、

〔明和新增京羽二重一〕親王家　有栖川兵部卿織仁親王

諸大夫　豐嶋大舍人頭　山本備前守　細川伊豆守

侍　樋口刑部大掾

〔今昔物語二十八〕左京屬紀茂經鯛荒卷進大夫語第三十

今昔、左京ノ大夫□ノ□ト云フ舊君達有ケリ、○中略其ノ職ノ屬ニテ紀ノ茂經ト云フ者有ケル、○中略茂經宇治殿ノ盛ニ御マシケル時ニ參テ、贄殿ニ居タル程ニ、淡路ノ守源ノ賴親朝臣ノ許ヨリ、鯛ノ荒卷ヲ多ク奉タリケルヲ、贄殿ニ多ク取置ケルニ、贄殿ノ預□ノ義澄ト云フ者ニ、茂經、其ノ荒卷ヲ三卷乞取テ、○中略茂經ハ殿ヲ出テ、左京ノ大夫ノ許ニ行テ見レバ、大夫ハ出居テ、客人二三人許來タリ、○中略此ノ茂經ハ出走サ馬ニ乘馳散ジテ、殿ニ參テ贄殿預リ義澄ニ會テ、○中略茂經然バ其ノ主ノ云預ケ給ツラム男ノ四度解无ニコソ有ケレ、其レヲ呼テ問給ヘト云ヘバ、義澄其ノ男ヲ呼テ問トテ尋ヌル程ニ、膳夫ノ有ルガ、此レヲ聞テ云フ樣、○下略

〔續世繼四伏見の雪の朝〕大殿○藤原師實のふしみへおはしましたりけるも、すゞろなる所へはおはしますまじきに、雪のふりたりけるつとめて、としつながいたく伏見ふけらかすに、いかにゆきてみんとて、はりまのかみもろのぶといふ人ばかり御ともにて、にはかにわたらせ給たりければ、○中略修理のかみ○藤原俊綱さはぎいで、雪御らんじて、御ものがたりなどせさせ給ほどに、もろのぶ、かくわたらせ給たるに、いで去かるべきあるじなどつかまつれともよほしければ、としつな、いまに。へ。ど。の。まゐり侍りなんと申ければ、人にも去られでわたらせ給たればにへ殿まゐることあるまじ、日もやう〳〵たけて、いかでか御まうけなくてあらむといひければ、殿わたらせ給て、たゞせめよなどおほせられけるほどに、○下略

〔台記別記〕久安四年八月十四日己巳、今夜須補贄預、而左兵衛源行方、余(藤原頼長)贄殿預、當其仁、而當時重服、仍不補也、

〔台記〕久安四年十一月二日丙戌、今夜以行方近衞府生爲姬君贄殿別當、以時通無官六位爲余○藤原頼長贄殿別當、

御服所進物所

〔拾芥抄中末院司〕關白家大臣家、大略同ニ攝關、〇中略　御服所　進物所

〔台記別記〕久安六年正月十九日丁酉、女房筑前〇註略　取納燈盃之櫃〇註略　賜敦任、敦任青純指貫　賜知家事

主税允貞俊、〇註略　貞俊先向進物所、令生着灯於炭、〇下略

〇按ズルニ、此日藤原頼長養女多子、女御ト爲ル、

〔榮花物語二十九玉の飾〕十四日〇萬壽四年九月のつとめて、いかで過すこしあみんと仰せらるれば、さふらひめしておほせごとたぶに、かなへぞのよろこびをなしていそぎつかうまつれど、すこしなりともたゞとく〳〵との綺はすれば、進物所にかねやすに、たゞとく〳〵わかせてまゐらせよと、女房いひたれば、いそぎたちてまゐらせたれば、〇下略

〔玉海〕文治五年十一月十五日辛未、此日女子〇藤原兼實女任子叙三位、又定入内雜事、〇中略

進物所預　散位紀宗季　民部大夫也

納殿

〔續世繼四藤花觀〕もりなかのぬし、花ざかりに、まりもたせて、かゝりへまかりけるに、ゆきつなさそひにやりたりければ、御ものいみにこもりて、人もなければ、けふはえまゐらじと返事しけるをきゝつけさせ給て、〇藤原師實たゞいけとて、うすいろのさしぬきのはりたる、かうのそめぬのなど、をさめ殿より、とりいださせて、にはかにぬはせて、御まり花のえだにつけて、みまやの御馬に、うつしおきて、いだしたてゝつかはしければ、〇下略

〔續世繼七紫のゆかり〕御心〇源雅實のあはれなるあまりに、ものゝかずもこまかにえり給はざりけるにや、をさめどのするさふらひ人のもとに、きぬせさせにやれとありければ、ふたつがれうには二ひきなんつかはしつると申ければ、〇下略

贄殿

〔三中口傳三〕一稱屋名事

膳所名事〇中略　攝政家號贄殿ト、膳所トイフハ、樣下ノ下劣ノ事也、

雜色所

臣同著、

〔葉黄記〕寛元四年正月廿八日戊午、御拜賀事、○是日藤原實經爲二關白一翌日巳剋事訖、○中略

本所儀○中略 召二家司一仰下所々司一○中略

隨身所別當　兼康朝臣　時繼

〔勘仲記〕弘安二年正月十八日丙寅、參二殿下一○藤原兼平 申二條々事一今日左大將殿○藤原兼忠 御方被レ召二仰御隨身、家司信輔於二中門一召二仰之一番長下毛野武助、本衞武長也 近衞五人、武枝已下云々、同御方被レ加二補家司、左中辨定藤朝臣、權右中辨忠世朝臣、左衞門權佐仲兼、職事時方、被レ仰二御隨身所別當、業行朝臣、甲斐守仲信、被レ仰二御厩別當、右兵衞佐經親參承云々、

〔十訓抄九〕成方といふ笛吹有けり、御堂入道殿○藤原道長 より大丸と云笛を給て吹けり、めでたき物なれば、伏見修理大夫俊綱朝臣ほしがりて、千石にかはんと有けるにうらざりければ、たばかりて使をやりて賣べきよしいひけり、そらごとをいひつけて成方を召て、笛えさせんといひける、本意也と悦て、あたひは乞によるべしとて、互にかはんといひければ、成方色を失ひて、さる事申さずといふ、此使を召むかへて尋らるゝに、まさしく申候といふほどに、俊綱大にいかりて、人をあざむきすかすは、其咎かろからぬ事也とて、雜色所へ下して、木馬にのせんとする間、○下略

〔台記〕久安四年十一月十日甲午、今日以二以長一爲二中將○藤原兼長 雜色所別當、仰二顯憲朝臣一

〔兵範記〕久安五年十月十九日丁卯、今日於二宇治縣小松殿、有二左府若君○藤原賴長子師長 元服事、○年十二 中略 入道殿召二信範一被レ仰二家司、職事、下家司等事、奉レ迎退出○中略

雜色所長右近番長中臣重文○中略 雜色所左近邊、今度以二御車宿南妻一爲二其所一、

〔台記別記〕仁平元年二月十六日丁巳、是日今麻呂加二元服一、○中略

雜色長右近府生秦公貞、丹波兼藤井花里、　已上口宣

隨身所小舍人所

〔古事談二臣節〕法性寺殿〈○藤原忠通〉令書所々額給之間、自御堂額ヲ一依令申請給被書獻了、而陸奧基衡ガ堂ノ額ナリケリト令聞給テ、爭サル事有トテ、御厩舍人菊方ヲ御使ニテ被召返ケリ、基衡雖廻秘計不承引、遂責取テ三ニ破テ持歸參云々、菊方高名在此事、

〔拾芥抄中末院司〕關白家〈大臣家、大略同之、○中略〉　御隨身所〈別當番長〉　內舍人〈近衞〉　府生〈左右〉

〔三中口傳三〕一鋪設裝束事

隨人所　西壁邊敷高麗端帖一枚、爲別當座、〈常不敷之、可備之、有別當來著事之時敷之、〉以東敷黃端長疊、〈與別當座絕席〉其間立撥足臺盤二脚、南庇敷紫端帖爲宿侍所、北庇懸紺垂布、

〔榮花物語四見はてぬ夢〕關白殿〈○藤原道兼〉御こゝちなをあしうおぼさるれば、御風にやなどおぼして、ほをなどまいらすれど、さらにをこたらせ給はず、〈○中略〉御隨身所小舍人所は、さけをのみのゝしりて、うちあげのゝしる、わがきみの御心ちや、かうくるしうおはすらんともおもひたらず、〈○下略〉

〔台記別記〕長承四年二月八日壬子、大納言殿〈○藤原賴長〉令任右大將給、〈○中略〉新將軍於同所〈○弓場〉令奏慶賀給、西御隨身所懸垂布、敷高麗疊、上立新造臺盤二脚、〈小大盤一脚、長大盤一脚、○中略〉御隨身始以警蹕、本府差進御隨身等、〈有差支〉

將監中原眞淸　將曹淸原遠兼　府生道守重元　番長下毛野厚則

近衞秦公近　中臣行兼　秦重正　中臣近助　藤井武淸

府生已上、束帶壺胡籙、番長已下、褐衣白狩袴、〈○中略〉

予奉仰、仰御隨身所別當前甲斐守雅職、中宮少進題憲、仰書式有之云々、召御隨身厚則仰之、倚別當著御隨身所橫座、居肴物、有盃酌云々、次居例飯、御隨身著之、

〔台記〕久壽元年十二月廿八日丙午、酉刻許、家司日向守有成朝臣、覽隨身差文、留文返宮、次召家司有光朝臣、〈備〉仰以有成朝臣爲隨身所別當之由、有光直仰有成、〈有光下﨟、有成上﨟也、〉次隨身著所、〈政所儲酒肴〉有成朝

厩司

○按ズルニ、所司ニハ、其所屬ノ詳ナラザルモノアリ、姑ク此ニ附載ス、

〔台記別記〕仁平元年二月十六日丁巳、是日今麻呂〇藤原頼長子加元服、〇中略家司以下注一紙給親隆、〇中略所司治部丞中原親頼口宣

〔勘仲記〕弘安六年正月廿六日辛巳、晩參殿下、左大將殿姫君、二歳被行御五十日御百日儀、此佳禮、依神木御事去年不被行、仍于今所延引也、密儀也、家司左少辨信輔朝臣、職事賴泰、所司盛繼奉行之、

〔拾芥抄中末院司〕關白家大臣家、大略同攝關、〇中略御厩別當、預、案主、舎人、居飼、

〔榮花物語十九御著裳〕かくて賀茂のまつりなどもすぎて五月〇治安三年になりぬ、大みや〇一條后藤原彰子土御門殿におはしませば、との〇彰子父道長なにわざをして御らんせさせんと覺しめして、このとの丶御まやのまぐさの田は、との丶きたのかた、せがゐんと云ふところにぞうへける、このころうふべかりければ、みまやのつかさめして、この田うへん日は、れいのありさまながら、つくろひたることなくて、おこがましういかにもありのまゝにて、このみなみのかたのむまばのみかどより、あゆみつづかせて、らちの内よりとをして、北ざまにわたせ、うしとらの方のついぢをくづして、それより御らんじやるべきなり、

〔殿暦〕元久元年閏九月廿八日丁丑、今日厩別當雅職停止厩司、被補關白家司職事、氏院厩別當等事

〔山槐記〕治承三年十一月廿八日壬午、今日被補關白〇藤原基通家司職事、〇中略

厩別當　上從五位下行參河守平朝臣知度　下正五位下行左衞門權佐親雅

〔葉黄記〕寛元四年正月廿八日戊午、御拜賀事、〇是日藤原實經爲關白、翌日巳剋事訖、〇中略

本所儀〇中略召家司仰下所々司

　鹿田方上御厩司上下〇中略

厩司　上時繼元御厩別當也、仍補也、　下忠方備中守上下之間、藤氏知下補之、

源満義、藤仲頼、所司二人、（五位前内藏助爲經、六位治部丞中原親頼、）

〔西宮記〕（正月）一補藏人事（中略）近代一所侍勾當、多被補之、

〔通俗篇〕（十二行事）勾當　北史序傳、事無大小、士彥一委仲舉推尋勾當、唐書第五琦傳、拜監察御史、勾當江淮租庸、歸田錄、曹彬既平江南回、詣閤門入見牓子、稱奉勅勾當公事回、其不伐如此、却掃編、舊制、諸路監司屬官曰勾當公事、建炎初、避上諱、（○高宗諱構）嫌名、易爲幹辦、按勾當、乃幹事之謂、今直以事爲勾當、

○按ズルニ、勾當ニハ、其所屬ノ詳ナラザルモノアリ、此ニ附載ス、

〔禁秘御抄〕（中）藏人事
公卿侍臣子外、自家直補藏人無之、諸院宮藏人判官代也、凡補藏人道有淺深、（○中略）第三執柄勾當、

〔尊卑分脈〕（十二源氏）忠季――忠信（後二條院關白〈藤原師通〉勾當）――賴康（知足院殿下〈藤原忠實〉勾當）

〔台記〕久壽元年十二月廿五日癸卯、今日中納言中將（○藤原兼長）以大舍人助藤仲賴補勾當、件人父義經、祖賴綱、曾祖泰經、不經藏人（高祖賴經經藏人）然而優勤勞所補也、先日申之禪閤（○藤原忠實）云々、

〔保元物語〕（一）左大臣殿上洛事附著到事
新院（○崇德）ノ御方ヘ參リケル人々ニハ、（○中略）平馬助忠正、（○中略）三男左大臣（○藤原賴長）勾當正綱、

〔中右記〕寛治四年正月十六日、今夜被補藏人、永實、殿（藤原師實）勾當、

〔山槐記〕永曆元年十二月七日辛亥、（被補藏人事）藏人藤兼隆（光經卿二男、院判官代）平信季（信範二男、關白〈藤原基實〉勾當、）

〔玉海〕治承三年十二月十二日乙未、召光盛補大將（○藤原兼實子良通）方職事五位三人、勾當二人、大將方令召也、依爲侍始以後也、

文治二年七月十九日甲午、光長息小男補藏人（自余〈藤原兼實〉家勾當補也）之後、今日拜賀云々、

〔台記〕久安二年正月廿日庚寅、此日登山、（○中略）侍兩三在車後、（公春在此中）家司散位盛憲、所司治部丞親賴、

久安六年正月十九日

顯方別當散位藤原朝臣　所司治部丞中原朝臣在判
賴方刑部少輔藤原朝臣在判　爲經散位藤原朝臣在判
盛憲散位藤原朝臣在判　憲親散位藤原朝臣在判
憲賴勾當藤原朝臣在判、今案可書盤所、

〔古事談〕二臣節 小野宮右府、○藤原實資 於女事不堪之人也、北對前有井、下女等多稱清冷水集汲之、相府擇其中少年女、被招寄於閑所、已有迎所、宇治殿○藤原賴通 聞之、侍所雜仕女中擇有顏色之者、令汲水、相誡云、先汲水之後、若有招引者、其後弃水桶可歸參云々、果如所案、後日右府被參宇治殿之次、公事言談之間、宇治殿仰云、彼先日侍所水桶主、今者可返給云々、相府迷惑頗面無所申而止、

〔台記別記〕久安四年八月十四日己巳、今日補兩三位家司以下、妻(藤原賴長妻)三位、唯有家司而已、○中略 今夜仰書狀、豫與親隆朝臣所議定也、○中略

仰書樣○中略

散位從五位下藤原朝臣顯方　散位從五位下藤原朝臣賴方　散位從五位下藤原朝臣盛憲
散位從五位下藤原朝臣憲親
被仰偁、件等人、宜爲三位方○賴長養女多子 侍所別當者、
久安四年八月十四日　別當從四位下行尾張守藤原朝臣親隆奉

蔭孫正六位上藤原朝臣憲賴
被仰偁、件人、宜爲三位方侍所勾當者、
久安四年八月十四日　別當從四位下行尾張守藤原朝臣親隆奉

六年正月十九日丁酉、公通朝臣來仰曰、從三位藤原朝臣多子爲女御者、○中略 余○藤原賴長 仰侍長二人、

上達部座、幷侍所、去十一日被儲東面、其後撰吉日、今日被渡西面也、

〔玉海〕治承三年十二月八日辛卯、此日大將〈○藤原兼實子良通〉方侍始也、晩頭光盛參上、兼日下侍交名、各令加催大略參集云々、秉燭之後、余〈○兼實〉召光盛於簾前、仰家司職事已下事、光盛退下、書令旨之後、覽侍名簿、余見了返給、仰云、可令覽大將、先例雖無所見、案事理、元服夜、大夫爲幼年、仍只覽嚴父、不覽大夫、今度已爲納言已上、仍尤可令覽之由所仰也、光盛參大將曹司〈作女院御所也〉大將於簾中見之返給了云々、次家司職事〈家司二人、職事二人〉先申慶由於余〈余職事信光申之、布衣、尤可著衣冠也〉再拜、次參女院御所申之〈國行申次、卽加別云々〉次申大將方、〈申次前駈同〉次家司等退出云々、此間職事二人、侍十七人著侍所饗、〈居交合子飯、職事侍一度著之云々〉謂之侍始也、三獻之後、下著起座云々、〈○中略〉

侍所司　木工　藤重永〈○中略〉

侍交名　五位　孝盛　親經　重基　貞親

有官　大神祐行　紀久佐　藤原重永　中原實康　宮道哉國　豐原奉賴　宮道式房

無官　藤原厚康　豐原能時　藤原重經　藤原盛景　豐原奉弘　紀業兼

厚康依爲入學之者、居無官之上云々、

文治二年六月十九日乙丑、此日女房政所始、幷分藏人所、侍所等、〈○中略〉晩頭家司參集、〈○中略〉次侍所別當三人〈隆成令旨、[illegible]云々〉列中門、以職事兼申事由再拜、相引著侍所〈東北方〉又行臺盤、又成定器儲云々、

侍所別當　彈正大弼高階朝臣資泰　中務少輔源兼親　散位藤原經泰〈○中略〉

侍所司二人　散位時輔　前大膳進重俊〈已上本所司〉

〔台記別記〕久安六年正月十九日丁酉、女御家〈○近衞后藤原多子〉侍所牒　能登國〈衙〉

可早令進上垂布十五段事

牒、侍所用途料、可進上之狀、牒送如件、故牒、

侍所　少監物三善頼倫（年預）　縫殿允大江泰基（所司）　左衛門尉源光忠　左兵衛尉藤原通貞

左兵衛尉源行元　右兵衛尉源季政　右兵衛尉大江貴家　左馬允藤原盛業　左馬允藤原量道

右馬允大江成重

〔兵範記〕久安五年十月十九日丁卯、今日於宇治縣小松殿、有左府若君（○藤原頼長子師長）元服事、（年十二、○中略）入道殿（○藤原忠實）召信範、被仰家司、職事、下家司等事、奉仰退出、侍所召集人々名簿入葛筥、更參進令覽之、卽返給、各於侍所、先書下家司職事、次加名簿等令旨、（五位六位可然之輩、各一兩注之、）次家司職事令旨幷名簿（引表紙懸紙等）等、下所司縫殿允惟宗長賢了、次令散位爲雅書侍所簡幷袋銘、

上銘云　侍所日給（○中略）

職事　從五位下高階朝臣仲行　從五位下藤原朝臣經憲

被仰偁、件人等、宜爲大夫方（○師長）侍所別當者、

久安五年十月十九日　從五位上平朝臣信範（奉○中略）

侍所司縫殿允惟宗長賢（○中略）已上同仰口宣也（○中略）

付簡侍輩　大舍人久貴　民部大夫清種　大炊大夫康守　主殿大夫惟長　刑部丞仲賢　内藏允通能　縫殿允長賢（所司）　大炊允信賢　左衛門尉成賢　文章生重永

已上入道殿恪勤者、被渡獻之、各獻名簿、五位六位所司之外、皆著布衣祗候、侍所司一人著衣冠行事、

保元三年八月十六日癸卯、今夕關白殿（○藤原基實）所充也、每事任保安二年例申行之、政所作法如常、（○中略）侍所充如常、職事著衣冠、皆著大盤座、先有盃酌事、馬介盛業依仰與奪爲上臈之上、保安二年八月盛家朝臣奉行吉例也、　十七日甲辰、今日殿下侍所、自東面渡西藏人所、每事不違、日來侍儀口箭幷袋銘不替、依不號藏人所也、只如元稱侍所也、（○中略）

〔玉海〕文治二年六月十九日乙丑、此日女房政所始、幷分藏人所、侍所等、〇中略晚頭家司參集、〇中略

藏人所所司三人　散位家職今補　少判事基貞本所司　文章生盛侑今補

〔拾芥抄中末〕院司關白家大臣家大略同擬、〇中略　侍所別當職事

〔三中口傳三〕一鋪設裝束事

侍所　障子上以東敷紫端帖六枚、二行對座其間立朱漆臺盤二脚、北庇西遣戸邊通遣長押立朱塗唐櫃一合、其傍立日給簡、置文杖等、火爐北邊敷紫端帖二枚、東西行傍東遣戸間敷同帖一枚、南北行爲所司座、其前置硯筥一合、檜筥入硯北庇幷東西遣戸共懸紺垂布、

〔三中口傳四〕一吉書事

可行吉書事　年始　慶賀　移徙　嫁取

覽下儀　當日年預下家司著衣冠、付封戶解文於年預、家司其解文多載加賀國、或美濃播磨等、其解文書樣、下家司皆存知也、家司著束帶著侍所、披見之後、插杖覽之、主人著冠直衣著客亭披見、畢返給之、家司取之、還著侍所書下書其書樣可成返抄別當官位姓名、

解文端書之、還給下家司、家司成上返抄、家司加判返給畢、

〔中右記〕大治四年十月廿二日丁酉、五宮〇鳥羽皇子本仁親王宣下之日也、　廿三日戊戌、五宮侍始未時許、相具宰相中將、參若宮〇本仁親王御所、侍始也、內大臣以下人々、大略皆參、於西對代南庭、立大盤居饗、加居合子飯、其上居土高器物、四本也、可居三本歟、大臣料也、著饗饌座、初獻頭辨雅兼、瓶子、地下五位、二獻右宰相中將師時、瓶子憲俊居汁物、立箸、少將忠賴取簡先覽別當左兵衞督、次持參御所、兩院御他所、關白殿藤原忠通參給、於渡殿御覽、御直衣、立座上之云々成經書藏人爲賴置簡袋於其前、次清隆朝臣入吉書於筥覽左兵衞督、次覽殿下、是伊與國御封解文云々、加賀美作等國司重服也、仍用伊豫也、次三獻左兵衞督、瓶子通基次令旨文等覽左兵衞督、又覽殿下歟、其後人々退出、次昇居大盤於侍所、侍所著之、〇中略

〔慶應元年都仁志喜　一〕今上(孝明)第一皇子親王御所

職事　勘ケ由小路出雲權介光尙　竹屋左衞門佐光昭　藏人　北小路極﨟左將監俊昌　藤嶋藤藏人助胤

〔續世繼　四伏見の雪の朝〕大殿〔○藤原師實〕のふしみへおはしましたりけるも、すゞろなる所へはおはしますまじきに、雪のふりたりけるつとめて、としつながいたく伏見をふけらかすに、にはかにゆきてみんとて、はりまのかみもろのぶといふ人ばかり御ともにて、にはかにわたらせ給たり、〇中略かゝるほどに、かんだちめ殿上人、藏人所の家司職事御隨身など、さまざまにまゐりこみたりけるに、〇下略

〔中右記〕長承二年七月十三日丙寅、今日院之上卿御方所〔○鳥羽后藤原泰子〕被レ補二家司職事一之間、〇中略

職事　宗成朝臣〔權左中辨〕　顯親朝臣〔侍從〕　憲俊〔少將〕　光家〔侍從〕　俊通　雅國　泰兼

〔山槐記〕治承三年十月七日辛卯、傳聞今日殿中將〔師家〕有二直衣始事一、〇中略被レ仰二下家司職事一、藏人左少辨兼光承レ仰、仰二下之一、〔家司令下二下家司民部録親行、職事令旨下二侍所司正親佑茂榮一、○中略〕

職事　前皇后宮大進源朝臣長經　前皇后宮少進源朝臣仲盛　散位源朝臣貞光　散位高階朝臣仲資　散位高階朝臣業國

十一月廿八日壬午、今日被レ補二關白〔○藤原基房〕家司職事一、〔被レ補二關白家司職事、氏院厩別當等一事〕〇中略

職事　散位從五位下平朝臣信清　散位從五位下高階朝臣仲資　散位從五位下高階朝臣淸定

〔玉海〕文治二年八月六日庚辰、此夜家政所、藏人所、侍所、幷北政所等所充也、〇中略今夜加二補〇中略余〔○藤原兼實〕職事一人〔對馬守親光〕等者也、　五年十一月十五日辛未、此日女子〔○藤原兼實女任子〕敍二三位一、又定二入內雜事一、〇中略

職事　右馬權頭兼親　散位國行　散位仲資　宮內少輔盛經　刑部權大輔宣房

定朝臣奏聞内、下給後下右衛門督、右衛門督書別家司賜類定、藏人所賜道方朝臣、任人等申慶由、〇中略
宮内卿兼左中辨源朝臣道方、右近衛權中將藤原朝臣敎通、左近衛少將藤原兼綱、右件等人可爲藏人所別當、主殿亮藤原定輔、玄蕃助源爲善、少内記藤原隆佐、中宮權大夫　左兵衛少尉藤原邦恒、東宮權大夫　右件等人々可爲侍者、文章生源賴國、文章生藤原章信、蔭子橘家通、蔭孫源行任、右件等人可爲藏人、

〔中右記〕大治四年十月廿二日丁酉、五宮〇鳥羽皇子本仁親王宣下之日也、　廿三日戊戌、未時許、相具宰相五宮侍始中將參若宮御所、侍始也、〇中略
職事　左近權少將藤原忠賴　彈正少弼源師長　左兵衛佐藤原經宗　侍者　文章得業生藤原範兼　藏人　蔭孫高階爲賴爲重男

〔兵範記〕仁平四年八月十八日己亥、今裏書姬宮令蒙親王宣旨給、〇崇子内親王、中略、
職事　右近少將行通朝臣　定房朝臣　實長朝臣　勘解由次官惟方　右兵衛佐實國　隆輔
〇中略
藏人二人　橘以明大學助　藤光範

〔季連宿禰記〕天和二年十二月二日乙亥、立親王宣下之事今日儲君宮〇東山立親王宣下也、〇中略家司以下、後年左官掌紀氏辰注送、仍記之、〇中略
職事　實陰武者小路　具統岩倉　藏人　安倍泰貞倉橋　源宣仲慈光寺　侍者　菅原在隆廣橋

〔章弘宿禰記〕寶永四年四月廿八日庚戌、自奉行頭中將、明日立親王〇中御門宣下散狀寫到來、〇中略
職事　柳原資堯侍從　堀川康慶侍從　藏人　源仲學差次藏人　丹波賴庸新藏人　侍者　清原忠量清藏人

〔輔世卿記〕天保六年九月十八日、今日巳刻、儲君〇孝明立親王宣下也、〇中略
職事　實豐〇風早　國典〇芝山　藏人　大江俊迪　大江俊常

沙汰事也、然而尊闇餘算非幾、此時不被分者、難期將來、仍只早可被置藏人所也云々、仍關白詔之、卽被分置侍藏人所了、被例非最吉、仍京極殿已後、故則不被相分也云々、此事又尤有興云々、

〔續世繼 四白川のわたり〕能通のぬし、宇治殿〇藤原賴通にまゐりて、おまへにめされてまゐるとて、さくもちてまゐらんとて、藏人所のみづしさぐりて、さくもおかれぬみづしかな、衣冠にておまへにまゐるものは、とりてこそまゐることにてあるにとつぶやきければ、殿きかせ給て、かくつねにはぢしめらるゝなどぞおほせられける、

〔古事談 二臣節〕八幡別當清成者、常宇治殿〇藤原賴通ヘマキリケリ、或日參タリケルニ、御料ノ御オロシヲ被出タリケルヲ、藏人所ノ臺盤ノ上ニ置タリケルヲ、清成手ヅカミニツカミ喰テ、酒ノ銚子ニ入タリケルヲ皆飲タリケリ、近來之別當不然歟、

〔古事談 六亭宅諸道〕時棟列宇治殿〇藤原賴通藏人所之日、雅康爲右衞門權佐、來テ問文字、時棟不答、仿ナル範圀朝臣云、時棟課試及第三ヶ度也、今始問文字、極白物也云々、

〔朝野群載 七攝籙家〕藏人所著到 天仁三年二月

一日庚午　別當信濃守　家俊　義弘　業俊　定季　義貴　倫俊　信重

宿　別當信濃守　兵部少輔　保宗　倫俊

二日辛未　別當　式部大輔　式部大夫

宿　別當參河大進　兵部大輔　保宗

以下如此書卅箇日、

〔江家次第 十七〕當代親王宣旨事

勅別當仰下家司職事〇中略 付藏人等　職事 四位五位三人以上 承曆康和三人 定若宮職司事 侍者二人、藏人二人、

〔法成寺攝政記〕寛弘五年十月十七日甲辰、慶賀人々來、戌時若宮〇後一條定所々職司、先啓中宮、次以賴

〔宇治拾遺物語十二〕むかし空也上人申べき事ありて、一條大臣殿にまいりて、藏人所に上てゐたり、

〔中右記〕嘉承元年正月九日壬寅、晩頭從關白殿(藤原忠實)有召、則參入、今日藏人所侍所被相分也、職事四位二人、(清實、重仲、)此外所司等被補、簡銘少內記書之被立大盤、近江守時範沙汰、但簡銘月日、(三月廿五日之定被書付之、)故大殿御時、承保例關白宣旨夜、口今口儲依不尋得彼例、及今日也、凡藏人所攝政家禮也、而前二條殿并故大殿二代關白時、被置藏人所也、依件吉例、此時被置也、

〔宇治拾遺物語五〕これもむかし、大膳亮大夫橘以長といふ藏人の五位ありけり、(中略)左大臣殿(藤原賴長)に、よにしらぬかたき物忌いできにけり、(中略)御物忌ありとこの以長聞て、いそぎまいりて、土戸よりまいらんとするに、舍人二人居て、ひとないれそと候とて、たちむかひたりければ、やうれおれらよ、めされてまいるぞといひければ、これらもさすがに職事にてつねにみれば、力及はでいれつ、まいりて藏人所に居て、なにとなく聲だかにものいひゐたりけるを、左府きかせ給ひて、このものいふはたれぞとゝはせ給ければ、盛兼申やう、以長に候と申ければ、いかに、か計かたき物忌には、夜べよりまいりこもりたるかと尋よと仰ければ、行ておほせの旨をいふに、藏人所は、御所よりちかゝりけるに、くは〳〵と大聲して、憚からず申やう、(下略)

〔兵範記〕保元三年八月十一日戊戌、關白殿(藤原忠通)上表、(中略)本侍所可號藏人所、每事不改本儀、簡名簿唐櫃等如元、別又無侍所、大二條殿(藤原教通)關白之時、申合宇治殿(藤原賴通)依彼仰別被定置侍所云々、其外京極大殿以後、以元侍號藏人所、別又無侍所也、

〔玉海〕治承三年十二月十日癸巳、兵部卿入道信運來、數刻談、多是新博陸(藤原基通)未練之間事欲申也、(中略)又云、關白之後、被各別藏人所侍等事有由緒、卽不分之、一兩年之後、別被置藏人所也、其故大二條關白(藤原教通)官初被問申宇治殿(藤原賴通兄)云、先々卽不置藏人所之由不見、爲之如何、御報云、必則不

文殿

〔拾芥抄 中末 院司〕關白家（大臣家大略同二攝關一、但辨、別當、文殿、藏人所等無レ之、近衞大將同レ之、）　文殿（別當、開闔、）

〔源氏物語 二十二 玉鬘〕中宮のおはしますまちは、かやうのひと（○玉鬘）もすみぬべくのどやかなれど、さてさぶらふ人のつらにや、きゝなさんと覺して、すこしむもれたれど、うしとらのまちの西のたい、ふどの。（。。）にてあるを、ことかたへうつしてとおぼす、

〔河海抄 十 玉鬘〕ふどのにてあるを　文殿、仙院より、執政大臣家にいたるまで在て、文書收らるゝ所也、

〔古事談 六 亭宅諸道〕同（○近衞）比東北院領池田庄解ヲ、朝隆卿執筆之時、執申狀中云、非二啻輕二殿下（○藤原忠通）之御威一、兼又成二梁上之奸濫一ト書タリケルヲ御覽ジテ、此解狀者、非二田舍者之草一、可レ然之學生儒者ナドノ書タルニコソ、尋ヨト被レ仰ケレバ、召二尋庄官等一之處、暫ハ秘藏不レ令レ申、殿下御定也トテ問ケレバ、江外記康貞ト申者ニ觸レ緣誂候トアリケリ、仍被レ召二康貞於文殿一云々、

〔葉黃記〕寬元四年六月四日辛卯、今夜殿下（○藤原實經）關白文殿始也、以二中門南廊一爲二其所一、（敷二設轄具、井三ヶ日臺盤用途等一、一向行二範沙汰一、進レ之、）高雅兼申沙汰、今日不レ被レ仰二開闔事一、先仰二別當（藏人大輔光國）一令レ催レ衆、當日事一向別當奉二行之一、（光國先覽二日時勘文一、在盛朝臣勘二申之一）次仰二衆交名於當座上首一、其後次第之儀如レ例、藏人所侍所雜仕女召二渡之一、衆七人、賴尙、（前大博士大外記大舍人頭）師光、爲景、師弘、（同）師爲、（直講）良季、（明法博士）章行等也、今日賴尙之外皆參、光國可レ爲二別當一事、高雅兼日以二御教書一仰レ之、　五日壬辰、參殿、參院、殿下文殿開闔可レ爲二賴尙一之由、高雅仰二光國一了、明後日告文淸書役事、同仰了、後日仰二開闔一、度々佳例也、今日師光又參二文殿一、

藏人所

〔拾芥抄 中末 院司〕關白家（大臣家大略同二攝關一、但辨、別當、文殿、藏人所等無レ之、近衞大將同レ之、）　藏人所

〔有職問答 一〕一藏人事
（藏人と稱するは、禁中殿上藏人、其外春宮藏人候也、院宮ニハ藏人候ハヌニヤ、攝關家ニハ職事と號シテ、家司ナ申候、其モ藏人とは不レ稱候、四位五位六位、皆有事ニ候、）殿上人にかぎらず、院宮攝關家にも有事にて候、ソレハ其所にて藏人の役を沙汰するをよび候、位は六位にて候、如レ此成官職、院々宮々に有レ之候由、被レ仰出一候畢、此分候哉、

事也、何爲振寺之猛威、可令輕朝之嚴勢哉者、速以今明日內、忩可召進之由所宜如件、堂衆宜承知、
敢不可違失、以下、

年號某月日　　知家事〻〻〻〻

別當〻〻〻

〻〻〻〻〻

〔朝野群載七攝籙家〕補出納

藤井武興

被仰偁、件人宜爲政所出納者、

嘉承二年四月日　　別當官位姓名奉

〔日本紀略二朱雀〕天慶六年四月廿二日己巳、修理進紀保實於貞觀殿內、過去年五月所死之者、上野大守親王出納大春日春連、

○按ズルニ、以下ノ出納ハ其所屬詳ナラズ、今姑ク此ニ附載ス、

〔宇治拾遺物語十〕今はむかし、水の尾の御門〈○淸和〉の御ときに、〈○中略〉伴大納言の出納の家のおさなき子と、舍人が小童といさかひをして、出納のゝしれば、いでてとりさへむとするに、この出納おなじくいでゝ見るによりて、ひきはなちて、わが子をば家に入て、この舍人が子の髮を取てうちふせて、しぬばかりふむ、〈○下略〉

〔兵範記〕久安五年十月十九日丁卯、今日於宇治縣小松殿、有左府若君〈○藤原賴長子師長〉元服事、〈○中略〉十二人道殿〈○藤原忠實〉召信範被仰家司職事下家司等事、奉仰退出、〈○中略〉出納重淸、無仰書、只口宣同下知了、

〔玉海〕文治五年十一月十五日辛未、此日女子〈○藤原兼實女任子〉敍三位、又定入內雜事、〈○中略〉次召宗賴朝臣仰三位方家司職事等、〈○中略〉出納三人

永久五年十月十三日　　案主民部史生藤井
令　主　計　少　允　中　原　　知家事主殿属藤井
別　當　前　阿　波　守　藤　原　朝　臣　　主　稅　属　藤　井
內匠頭兼左大史算博士越後介小槻宿禰在判　　太政官史生紀
文章博士兼大內記越中介藤原朝臣在判
散位藤原朝臣在判
散位藤原朝臣
散位藤原朝臣
散位藤原朝臣在判

〔雜筆要集〕同〇親王宮廳御下文樣第十三
一品親王政所下　大和國竹田御庄官
應早令明急企參洛遂問註友則與依安相論事
右就彼等相論、常致濫吹之由有其聞、不穩便事也、早今明之內企參洛可決是非之由所仰如件、宜承知不可違失、以下、
年號某月某日〻〻〻〻
別當〻〻〻

〔雜筆要集〕同〇關白殿下政所御下文第十七
長者殿下政所下　山階寺東金堂
應令早召進葛下郡中三郎兼家事
右件兼家、依宣旨被召之處、爲東金堂衆等號御油寄人、令隱居于寺中、拘惜而不出進之條、不穩便

令散位中原朝臣
別當前美濃守藤原朝臣
散位源朝臣
伊與守高階朝臣
修理權大夫藤原朝臣
彈正大弼兼讃岐守藤原朝臣

從主計允佐伯
書吏右衞門府生丈部
知家事大膳屬大神
大炊屬笠
右衞門府生清原

嘉保三年十月廿七日

〔朝野群載　七攝籙家〕政所御下文
攝政右大臣〇藤原忠實家政所下　伊勢國稻生社、并栗眞御庄、
可早任年來例、且停止彼此非論、且召進濫行下手人事、〇略文
嘉承二年十二月日

別當式部大輔藤原朝臣
散位高階朝臣
右大辨兼近江守平朝臣
前常陸介高階朝臣
太皇太后宮權亮源朝臣
前淡路守源朝臣

案主紀
大從主計允佐伯
知家事大膳屬大神
左京屬中原
大炊屬笠
左兵衞志宗岡
左衞門府生清原

〔朝野群載　七公卿家〕民部卿〇權大納言正二位藤原宗通家政所下　阿輪田庄
可早任廳宣、打定四至牓示、庄領事
使太政官史生紀爲忠〇略文

正六位上行主稅少允佐伯朝臣貞俊

被仰偁、件人宜爲三位方知家事者、

久安四年十月廿日　別當散位從四位下藤原朝臣顯憲奉

〔兵範記〕久安五年十月十九日丁卯、今日於宇治縣小松殿、有左府若君○藤原頼長子師長元服事、年十二○中略入道殿○藤原忠實召信範被仰家司、職事下家司等事、奉仰退出侍所、○中略

家司　正四位下行大學頭大江朝臣維順　從四位下藤原朝臣顯憲　從四位下藤原朝臣爲實

被仰偁、件人等、宜爲大夫方○師長政所別當者、

久安五年十月十九日　從五位上平朝臣信範奉○中略

右辨官史生從七位上紀朝臣俊光

可爲知家事

正六位上紀朝臣良成

可爲案主

被仰偁、件等人、宜令從大夫方政所事者、

久安〻〻〻〻

御出家以後止政所、仍年月下不注別當也、案主先例二人也、今度依無其仁、且補一人、

家司下家司仰書下給俊光了、

〔朝野群載七攝錄家〕補佐保殿預副讓狀

關白內大臣○藤原師通家符　佐保殿

縣信久　同守貞

右件人等、任親父縣信貞讓狀、各補任預職、宜令勤行二季御祭役者、

原朝臣政業　散位從五位上藤原朝臣敦任　散位從五位上藤原朝臣重方

被レ仰レ補二件等人一、宜レ爲二三位方政所別當一者、

久安四年八月十四日　別當從四位下行尾張守藤原朝臣親隆奉〇中略

正六位上行右衞門志佐伯宿禰義仲　右辨官史生從七位上紀朝臣俊元

已上可レ爲二知家事一

正六位上行大炊少口高階朝臣行則　右辨官史從七位上伴朝臣久兼　右官掌從七位上

紀朝臣重兼

已上可レ爲二案主一

被レ仰レ補二件等人一、宜レ令レ從二三位方政所事一者、

久安四年八月十四日　別當從四位下行尾張守藤原朝臣親隆奉

十月廿日甲戌、亥剋法皇副二手書一、賜二主税允貞俊院廳官申文一曰、所レ請未レ知二理非一、許否有二公意一、卽仰下可レ爲二三位姫君〇藤原賴長養女多子知家事一之由於顯憲朝臣上、〇注略加レ仰下可レ爲二年預一之由上、〇中略

藏人主税少允佐伯貞俊解　申進　申文事

請下殊任二解狀旨一、依二譜代奉公勞一、被上レ擧二補女御殿年預知家事一狀、

右貞俊謹撿二案內一、立太子、立后之時、依二知家事之勞一、被レ任二屬職一者、古今之例也、就中曾祖父佐伯貞義、任二皇后宮屬一、是大宮御立后之始也、祖父義保任二春宮屬一、是御立太子之始也、親父貞仲、補二若宮年預知家事一、是新院御時也、依レ無二立太子之事一、雖レ不レ任二職官一、御讓位之日、奉二行院廳事一、如レ此相繼可二補任一也、爰貞俊雖レ爲二未叅一、夙夜之勤致二忠節一、以二譜代之例一、補二知家事一、立后之剋、盍レ當二其仁一哉、望請任二解狀旨一、被レ擧二補年預知家事一、立后之日、拜二任屬職一者、將レ仰二奉公之不一レ空矣、仍勒二在狀一、以解、

久安四年十月十日　藏人主税少允佐伯貞俊

八月六日庚辰、此夜家政所、藏人所、侍所、幷北政所等所充也、初度年預大藏卿宗頼朝臣奉行兩方政所事、北政所年預基親朝臣、爲勅使參向宇佐宮、仍宗頼可申沙汰也、○中略先余政所、次北政所、此間藏人所、次侍所、別當資季朝臣已下三人就之今夜加補余家司二人、皇后宮大進家實、散位長親、○中略北政所家司五人、資季朝臣、範季朝臣、範光、兼親、國行事也、余職事一人對馬守親光等者也、

〔職原抄後附〕親王執柄大臣家謂之政所

別當諸大夫宿老任之　令重代之侍任之　知家事下家司也　大從同上　少從同上　大書史同上　少書史同上

〔拾芥抄中末院司〕關白家大臣家、大略同攝關、但辨、別當、文殿、藏人所等無之、近衞大將同之、

執事　年預　辨　別當○中略　政所別當、家司、下家司、

〔殿暦〕天仁二年十二月廿一日辛卯、今日有女房始事、補家司五人、皇后宮大進惟信朝臣、中宮權大進重仲朝臣、左中辨爲隆朝臣、已上四位兵部少輔知信、因幡守長隆等也、爲隆朝臣余(藤原忠實)家所仰下之、仰書可爲北政所別當者次家司相率申慶、知信申之次於東三條政所有政所始、有酒饌云々家司五人參著云々、申吉書、近江國御封解文重仲朝臣覽之返給、令成返抄、家司等加判云々、注攝政右大臣家(忠實)北政所之

〔台記別記〕久安四年八月十四日己巳、今日補兩三位家司以下、○中略余召親隆朝臣、仰可補三位○藤原賴長養女多子家司以下之人々、先之書交名、賜之、仍不具仰、親隆退下、○中略以小野清貞、爲三位方政所出納之由仰俊元、清貞、余出納、○中略今夜仰書狀、豫與親隆朝臣所議定也、○中略

仰書樣

從四位下行尾張守藤原朝臣親隆　散位從五位上藤原朝臣敦任　散位從五位下藤原朝臣憲親

被仰偁、件等人、宜爲三位御方○賴長養女多子別當者、

久安四年八月十四日　別當從四位下行尾張守藤原朝臣親隆奉

散位正四位下高階朝臣泰兼　散位從四位下藤原朝臣有成　從四位下行皇太后大進藤

來、申今日不審事等、晩頭家司等參集、先是圖書頭在宣朝臣參入、令勘可造藏人所簡之日時、入筥付近習者覽之、見了返給、其後陰陽師退出、無可入之事故也、北政所始者、兼日問日、當日無成勘文之儀、先例也、次余（○藤原兼實）召宗頼於前、仰北政所家司（昨日密仰了）幷年預（權辨基親朝臣）及侍所別當等（昨日密仰了）次宗頼入令旨二通於筥持來、（一通家司、一通下家司、）余取之披見、了令見女房之後、返授宗頼了、宗頼取之退下、次家司五人列中門外（西上北面）光綱申次之、先申余方（於棟廊南面申之）次申女房方（就寢殿南庇東面妻戸申也）共二拜（豫宗頼朝臣申云、可爲先何御方哉、余仰云、北政所家司也、雖須爲先女房方、女者有三從之禮、猶可爲先夫之上、康和知足院殿內覽家司等、先申大殿、以之思之、可爲先家之長、况全爲攝政之重任哉者、）次家司相引著政所（以中門南廊假爲其所）年預基親朝臣申吉書（近江國御封米百石解文）先以職事傳覽、余見了返給、其後基親自取之、（入宮）就寢殿南庇東面妻戸傳女房覽之、（女房坐南面帳臺前敷疊、）見了返給基親、歸著政所成返抄了、（注攝政右大臣家北政所云々）

令旨書樣

正四位下行太皇太后宮亮兼伊豫守源朝臣季長、大藏卿正四位下藤原朝臣宗頼、從四位下行權右中辨平朝臣基親、正五位下守左京權大夫藤原朝臣光綱、民部少輔從五位下兼行和泉守藤原朝臣長房、

右被仰偁、件等人、宜爲北政所別當者、

文治二年六月十九日　　別當大藏卿正四位下藤原朝臣宗頼奉

正六位上行民部少錄安倍朝臣親行

右可爲知家事

右辨官史生從七位上　季俊

右可爲案主

被仰偁、件等人、宜行北政所事者、

年號月日　署所（同前）

不依叙位前後、依夫之執政前後、大臣之後、執政之前補家司、執政之後始政所也、如然者、京極北政所、(○藤原師實妻)延久五年十二月十九日、被補家司、(于時無位)承保元年六月廿五日叙従三位、同二年十一月始政所、(同年十月、大殿蒙関白詔、)當時攝政室家、元永三年二月廿三日補家司、保安二年十二月十三日始政所、(于時無位、同年二月五日攝政家蒙關白詔、)大治五年正月八日叙従三位之故也、

〔玉海〕仁安二年十二月十日癸卯、今日攝政、(○藤原基房)政所移徙也、(閑院、件所丈十八二町、而中□一町被遣之、八條院□也、)亥刻參儲件所、予終丑始程、攝政被渡、入東門、公卿等降立中門、下官(○藤原兼實)徘徊閑所也、先水火童、次黄牛、次家主、次車、(在憲朝臣、在家主前、反閉、)家主暫不出座、(五葉歟)次被出東對座、(件座西上對屋、家主當間不□□)次下官著座、其後公卿暫不著、仍召光長、(行事也、盛業等爲行事、)公卿各著座、殿上人在廂、(信範以下四人、)次一獻、次二獻、次居冷汁、殿上人座居了、左大辨申上、家主以下候著了、更取汁入飯、食之如形、食了次三獻、次居温汁、次攝政以下又食之、次居菓子、次欲居湯漬、而攝政云、先々及深更之時必無之、可被略也者、公卿等示傳止之了、次置攤紙、(家主料、有先置、)之下官料、(範明)次第置之、人別一積、(置各侍)殿上人中只一積、次撤饗饌、(皆撤之、或撤座上一兩云々、然而無路、仍於皆被撤也、)次經房(殿上人下臈)指笏取紙、經公卿座東、(此間貴長云、若殿上人可經賓子、攝政云、經座間也、)者、經方突膝置圓座、(先是撤饗了之、則先敷圓座、五位諸大夫役也、家主下官之間、傾すぢかへて置之、次立切灯臺、次持參餅菓等、兩度役人如初、)經房作指笏復座、次俊光朝臣取紙參上置之、(不指笏、其儀如初、)此間攝政命云、先々殿上人二人取之、然者今ハ不可寄、仍通能信範不寄也、(余案也、先經房信範等可寄歟、俊光事不可寄歟、)次右大辨實綱卿指笏、乍紙經座中置之、乍指笏右廻復座、次家通指笏進寄置之、(各置圓座上也、)拔笏(不揖右廻、)復座、(大宮左府家、皆如此、)次親範、(同實綱、)次雅頼、(同前、但左廻、)次邦綱、(同雅頼、)次忠親、(同邦綱、)次資長、(同實綱、)次宗家、(家(家字)通、上臈悦同、但左廻、)次實房、(同實綱、)次下官、(不指笏、雖可指、圓座依爲座前、存有憚、仍憚中之體にて置臈下、是非常也、然而憚中者、每度自發歟、仍以今案爲之也、)下官每人打了入筥、(攝政命也、)下官攤之時ハ、次人入之由、或人云、然而攝政自入之由被命、仍所爲之、次攝政打之了、次々撤紙了、次直火、次引出物馬、(下官料、)前驅受取之引出了、則下官退出了、

文治二年六月十九日乙丑、此日女房政所始、幷分職人所侍所等、先有北政所始事、未刻宗頼朝臣參

政所

同致季（三月廿九日、爲二邦親王家勅別當一、）

〔章弘宿禰記〕寶永六年四月七日、親王（○家仁）宣下宣旨、（○中略）

權大納言藤原朝臣致季

右少辨藤原朝臣光榮傳宣、權中納言兼中宮權大夫藤原朝臣經晋宣、奉レ勅件人、宜レ爲二家仁親王家別當一者、

寶永六年四月七日　修理東大寺大佛長官主殿頭兼左大史小槻宿禰章弘（奉）

〔議奏日次案〕享保三年正月廿三日壬申、辰剋親王（○直仁）宣下陣儀也、上卿藤大納言、（○永福）辨兼榮、勅別當源大納言、（○惟通）

〔輔世卿記〕天保六年九月十八日、今日巳剋、儲君（○孝明）立親王宣下也、（○中略）

勅別當　新源大納言（○廣幡基豐、○中略）　侍者　小槻輔世　御監　平清德

〔慶應元年都仁志喜一〕親王御所（今上〔孝明第一皇子〕）

勅別當　正親町大納言實德卿　侍者　細川差次藏人常典

〔節用集　末〕政所（マンドコロ）

〔源氏物語　三十九夕霧〕女ごころにて、しどけなく、よろづのことならひたる宮のうちに、有さまこゝろとゞめて、わづかなるしも人をもいひとゝのへ、この人ひとりのみあつかひをこなふ、かくおぼえぬ、やんごとなきまらうど（○夕霧）のおはするときゝて、もとつとめざりけるけいしなど、うちつけに參りて、まどころなどいふかたにさふらひて、いとなみけり、

〔蜻蛉日記　中〕七月十日にもなりぬれば、よの人のさはぐまゝに、ぼにのこと、としごろは、まどころにものしつるも、はなれやしぬらんと、あはれなる人もかなしうおぼすらんかし、

〔台記別記〕久安四年八月十四日己巳、夫人補二家司一、幷始二政所一事、

（別當ノ宣旨）權大納言兼右近衞大將藤原朝臣定誠

左大辨藤原朝臣宗顯傳宣、關白右大臣藤原朝臣宣、奉勅宜爲今上（○靈元）朝仁親王（○東山）家別當者、

天和二年十二月二日　修理東大寺大佛長官主殿頭兼左大史筭博士小槻宿禰季連（○中略）

一家司以下、後年左官掌紀氏辰注送、仍記之、（○中略）

侍者　菅原左隆（廣橋）　御監　藤原英益（北面右京進遠水）

三年十二月三日庚子、今日當今女一宮（中略）（御名字憲子、御十五才云々、）幷御光明院女一宮（中略）（御名字幸子、卅四才云々、）兩一宮內親王宣下也、（○中略）

權大納言藤原朝臣顯孝

左中辨兼中宮大進藤原朝臣俊方傳宣、權大納言藤原朝臣光雄宣、奉勅、件人宜爲孝子內親王家別當者、

天和三年十二月三日　修理東大寺大佛長官主殿頭兼左大史筭博士小槻宿禰季連（○奉孝子內親王勅別當）

〔章弘宿禰記〕寶永四年三月廿八日辛巳、今日貞宮（○勝子內親王）親王宣下、（○中略）勅別當園大納言基勝卿、

四月廿八日庚戌、自奉行頭中將、明日立親王（○中御門）宣下散狀寫到來、（○中略）

公卿（○中略）德大寺大納言（公全卿、勅別當也、○中略）　侍者　清原忠量（院藏人）　御監　藤原重廣

〔公卿補任東山〕寶永四年（丁亥）

權大納言從二位藤基勝（三月廿八日、爲勝子內親王家勅別當、）

源通躬（五月十八日、爲秋子內親王家勅別當、）

藤公全（四月廿九日、爲儲君（中御門）親王家勅別當、）

申勅別當慶也、此間内大臣以下引參若宮御所大炊殿、著西對代南座、關白殿(○藤原忠通)參給御寢殿、左兵衛督於西中門、以讃岐守清隆朝臣申慶著座、清隆召左兵衛督、被參寢殿、清隆自本此宮年預也、復本座、召清隆朝臣廳別當三人御監仰下、又召少將忠賴、侍所別當、侍者藏人、被仰下、各於中門申慶歟、申時人々退出、　廿三日戊戌、未時許、相具宰相中將、參若宮御所、侍始也、(○中略)

侍者　文章得業生藤原範兼(○中略)　御監　右兵衛尉源光保(○光國男、中略)

廳官十人　國良　成則　秋次　定宗　宗貞　□□　貞□　憲元　時忠　資行

〔兵範記〕仁平四年八月十八日己亥、(裏書)今姫宮令蒙親王宣旨給、(○壽子内親王、中略)

勅別當　侍從大納言成通卿、(○中略)　侍者　藤原爲宗(○女院藏人、中略)　御監　左兵衛尉源光長

〔勘仲記〕弘安二年八月十八日癸巳、今夕立親王儀也、藏人方貫首大丞令奉行給、公卿右大臣殿、内大臣殿已下參陣、職事宣下御名字(繼仁、文章博士在公朝臣撰申云々、)上卿右府召辨信輔仰之、辨仰史、次職事宣下勅別當事、(以春宮大夫藤原朝臣、可爲親王別當由也、)上卿又仰辨、次親族拜内大臣殿一人進弓場、令奏慶給、申次貫首大丞、御拜舞了令退出給、次勅別當猶留立奏慶、

永仁元年十二月十日辛卯、入夜著束帶(用毛車、)參内、立親王(○龜山皇女憙子)定也、職事定房奉行、(○中略)職事仰勅別當、以權中納言藤原朝臣、爲憙子内親王別當、召辨仰之、次上卿□□起座、進弓場有親族拜、申次定房、舞踏如例、一揖之後退出、中御門中納言一人立留、奏勅別當慶、

〔公卿補任(後柏原)〕永正十一年(甲戌)

權大納言正二位藤季經(六十八(中略)三月廿五日、爲清彦親王勅別當、)

〔公卿補任(正親町)〕永祿十一年(戊辰)

權大納言正二位藤惟房(五十六、(中略)十二月十五日、親王宣下上卿、誠仁親王家勅別當、)

〔季連宿禰記〕天和二年十二月二日乙亥、今日儲君宮立親王宣下也、(立親王宣下之事)(○中略)

勅別當　侍者　御監　廳官

〔兵範記〕保元三年正月十五日丙子、今日殿下粥御節供、家司師元勤仕之、右大臣〇藤原基實御節供、家令紀宗頼勤仕之、

〔江家次第十七〕當代親王宣旨事
被仰勅別當納言於大臣、大臣又如始仰下之、或於弓場殿被仰下之、　別當一人留弓場殿拜　次公卿相引參入本宮、　勅別當仰下家司職事、〇中略付藏人等　侍者二人、藏人二人、

〔類聚國史百六十五祥瑞〕延曆十六年六月辛酉、三品朝原內親王獻白雀、御監及家司等、賜物有差、

〔類聚符宣抄七〕從二位行權中納言兼中宮大夫右衛門督藤原朝臣齊信
左中辨源朝臣道方傳宣、左大臣宣、奉勅件人、宜爲今上一條〇敦成親王後一條家別當者、
　寬弘五年十月十六日　左大史小槻宿禰奉親奉

〔權記〕長保四年六月廿日甲申、大藏卿補女一親王家別當云々、勅別當二人例無之云々、

〔法成寺攝政記〕寬弘五年十月十七日甲辰、定若宮職司事慶賀人々來、戌時若宮〇後一條定所々職司、先啓中宮、次以頼定朝臣奏聞內、下給後下右衛門督、右衛門督書別家司、賜頼定、藏人所賜道方朝臣、任人等申慶由、
左近中將源朝臣頼定、中宮亮兼近江守源朝臣高雅、右近權少將源朝臣濟政、右近衛少將源朝臣雅通、內藏權頭藤原朝臣能通、散位藤原朝臣惟風、甲斐守藤原朝臣惟憲、散位藤原朝日濟家、東宮大進藤原朝臣知光、美作守藤原泰通、筑後權守大江朝臣擧周、年號下右衛門督奉　右件人々可爲別當、雅樂亮源登平、右衛門督
中織部正藤原親光、　右件人々可爲御監、

〔中右記〕大治四年十月廿二日丁酉、五宮〇鳥羽皇子本仁親王宣下之日也、〇中略頭辨仰下云、左兵衛督藤原朝臣〇能實可爲親王勅別當、便又被仰頭辨、頭辨於床子下座下知史歟、別當云、可立拜之人々、定被仰下歟、此事殊不被仰下也、只內々被相議也、親王外戚人之可拜故也、爰別當示□□□□起座、藤大納言、別當左兵衛督、立弓場殿申慶也、其路予〇藤原宗忠軒廊東二間經階下、先三人拜舞、次左兵衛督、又

家令志紀縣主貞成、○中略賜姓宿禰、三月己巳朔、右京人中納言從三位藤原朝臣氏宗家令大初位上大癥伊美吉廣勝賜姓宿禰、後漢孝靈皇帝四代孫阿智使主後、與坂上大宿禰同祖也、

〔三代實錄清和七〕貞觀五年十月廿一日庚辰、天皇宴太政大臣○藤原良房於內殿、以賀滿六十之齡、○中略太政大臣家令從五位下菅野朝臣弟門授從五位上、

〔三代實錄清和十二〕貞觀八年正月十三日庚寅、從五位上太政大臣家令兼尾張介菅野朝臣弟門爲大掾、家令如故、

〔三代實錄清和八〕貞觀六年二月廿五日壬午、車駕幸於太政大臣東京染殿第、○良房觀櫻花、○中略是日授太政大臣家扶正六位上日奉部若萅外從五位下、正五位下○正五位下四字、據五年十月紀補、上毛野朝臣滋子從四位下、无位當麻眞人葛子、上毛野朝臣宮子、並從五位下、

〔三代實錄清和十四〕貞觀九年十一月廿日乙卯、太政大臣家少從正六位下日置造久米麻呂賜姓名菅原朝臣業利、

〔三代實錄清和十六〕貞觀十一年二月十六日甲辰、從五位上行太政大臣家令兼近江大掾菅野朝臣弟門爲刑部大輔、

〔三代實錄陽成三十五〕元慶三年五月八日丁酉、授右大臣○藤原基經家令正六位上菅原朝臣永津外從五位下、永津撿挍造粟田山莊、仍有此授也、

〔權記〕正曆四年正月九日戊戌、參內、被定昇殿等事、○中略外從五位下穴太清行内大臣〈藤原道兼〉家令

〔朝野群載七公卿家〕補公卿家令

修理右宮城主典正六位上行右京屬中原朝臣重貞

被右大臣殿仰云、件人宜爲家令者、

永保元年七月日　別當散位惟宗朝臣

卿一人掌略○中補任家令、謂先銓擬申官、然後乃補任也、功臣家傳田略○註本、

〔西宮記臨時一〕諸宣旨

補王臣家令員疑衍員字家司事以名簿送式部省

〔延喜式式部十八〕凡諸家司、雖无位猶聽補、

〔令義解考課四〕凡家令、謂書吏以上總名、卽文學亦本主考、其扶以上及毎年本主、准諸司考法立考、謂以上、及内親王家事、隷宮内省、謂家事者考事、卽宮内省承主旨、定其考第也、考訖申省案記、准考應解者、同諸司法、

〔令義解祿四〕凡在京文武職事、及大宰、壹岐、對馬、皆依官位給祿、略○中家令降一級、謂書吏以上通稱家令、假令從七位官、降爲正八位官之類、其少初位官、更無所降者、以塾五口、准爲降法、計大少初位祿法、以塾五口爲差故也、唯文學不在降限、

〔延喜式太政官十一〕凡庶務申太政官、略○中中務申夏冬時服、及式部補文學家令以下傔仗、簡亦直申、

〔續日本後紀仁明十八〕承和十五年正月甲戌、外從五位下秦忌寸福代爲兼土佐大目、一品葛原親王家令如故、

〔文德實錄七〕齊衡二年八月癸巳、式部卿仲野親王家令正七位下宇自可臣武雄、改姓笠朝臣、　丁酉、中務卿時康親王家令從六位下忍海上連淨永改姓朝野宿禰、

〔三代實錄淸和九〕貞觀六年八月八日壬戌、右京人二品秀良親王家令正六位上宇自加臣吉人賜姓笠朝臣、彥狹嶋命之後也、阿波國名方郡人二品治部卿兼常陸太守賀陽親王家令正六位上安曇部粟麻呂、改部字賜宿禰、粟麻呂自言、安曇百足宿禰之苗裔也、

〔續日本紀聖武十五〕天平十六年十月乙未、左大臣○橘諸兄家令正六位上余義仁授外從五位下、

〔續日本後紀仁明十七〕承和十四年三月丙申朔、肥後國飽田郡人從三位大藏卿平朝臣高棟家令正七位上建部公弟益男女等五人、賜姓長統朝臣、貫附左京三條、

〔三代實錄淸和六〕貞觀四年二月廿三日壬戌、河内國志紀郡人外從五位下行木工助兼右大臣○藤原良相

略朱云、撿按家事、謂具如神祇官祐職掌者、未知而此家司如諸司可宿直何也、穴云、問勾稽失宿直、幷主典讀申、及撿出稽失等事、放上文哉以不、答、宿不同彼例、文於彼家令稱監臨主守、於例不當也、爲不同稱監臨內外諸司主典以上爲監臨之例故也、令說准放神祇之例、亦准爲監臨主守之例、○中略朱云、大書吏勘署文案者、此一端云耳、受事上抄、撿出稽失、讀申公文、具如神祇官史者、○中略朱云、行署文案事、書吏爲耳歟、無史生故何、問家司無直丁情何、若取封戶人充用耳歟何、

〔令義解〕一家令職員 職事一位女亦准此 家令一人、掌知家事、扶一人、大從一人、少從一人、大書吏一人、少書吏一人、

二位 家令一人、從一人、大書吏一人、少書吏一人、

正三位 家令一人書吏二人、

從三位 家令一人、書吏一人、

〔令義解〕一官位 從五位○下階 一品家令 職事一位家令 正六位○上階 二品家令 從六位○上階 一品家扶 三品家令 職事二位家令 正七位○上階 二品家扶 四品家令 從七位○上階 一品家大從 一品文學 三品家扶 職事一位家大從 職事正三位家令 一品家少從 二品家從 二品文學 四品家扶 職事一位家少從 職事從三位家令 ○一品家少從以下下階 正八位○下階 三品家從 三品四品文學 職事二位家從 從八位○上階 四品家從 一品家大書吏 職事一位家大書吏 ○一品家大書吏以下下階 大初位○上階 一品家少書吏 二品家大書吏 職事一品家少書吏 二品家少書吏 ○二品家少書吏下階 少初位○上階 三品四品家書吏 職事二品家書吏 謂、案家令職員令、職事二位、有大少書吏、而於此令不別大少、共居同階、此則家吏品秩卑微、是以不更煩差降也、 職事三位家書吏 ○職事三位家書吏下階

〔令集解〕六家令職員 凡家令者、唯得決笞仕丁、不得決資人、

〔令義解〕一職員 式部省

家令

定文書樣　大饗雜事

行事　彈正大弼朝臣(高階資泰)　伊豫守朝臣(源季長)　宗頼(大藏卿)　前攝津守朝臣(橘以政)　文章博士朝臣(藤實業)　掃部頭朝臣(中原廣季)　光綱朝臣(左京權大夫)　兼親朝臣(中務少輔)　爲季朝臣(前近江守)　家實朝臣(皇后宮大進)　長房朝臣(和泉守兵部少輔)　長親朝臣(散位)　已上皆家司、永久例也、

五年十一月十五日辛未、此日女子(○鳥羽后、藤原璋子、公實女、)敍三位、又定入内雜事、(○中略)

家司　伊豫守季長朝臣　左中辨親雅朝臣　右中辨親經　右衛門權佐長房　甲斐守長兼(○中略)

下家司　知家事右衛門安倍親頼　案主(左衛門府生盛安　官史生久任)

〔安政三年雲上明覽　下〕安倍家　土御門陰陽頭晴雄朝臣　家司　若杉陰陽少允　星合右兵衛

〔令義解　一家令職員〕親王(内親王准此、但文學不在此例、)一品　文學一人(掌執經講授、餘文學准此、)家令一人(掌總知家事、餘家令准此、)扶一人(掌同家令、餘扶准此、)大從一人(掌檢校家事、餘從准此、)少從一人、(掌同大從、)大書吏一人(掌勘署文案、餘書吏准此、)少書吏一人(掌同大書吏、)

二品　文學一人、家令一人、扶一人、從一人、大書吏一人、少書吏一人、

三品　文學一人、家令一人、扶一人、從一人、書吏一人、

四品　文學一人、家令一人、扶一人、從一人、書吏一人、

〔令集解　六家令職員〕穴云、文學之考何人定哉、答令説本主考文學以下書吏以上、但帳内資人有正文也、私案考課令云、凡帳内及資人、毎年本主量其行能功過、立三等考第云々、跡云、家令文學考者本主定、不同學士者、皇太子、令無考人本主等、有考家令之故也、(○中略)私考課令云、凡家令、毎年本主、准諸司考法立考、注云々、考訖申省案記、穴云、家令以下不同在京諸司之例、何者不約文官名帳之例、又不同外官日出上午後下之例、故粗擧一例也、跡云、家令不得同諸司斷決、朱云、家令總知家事一事以上也、但不得行決罰也、若有可決人者、申本主者、未知而犯徒以上罪者不斷罪、直送所司何、(中

十一月廿八日壬午、今日被補關白〈藤原基通〉家司、職事、（被補關白家司職事、氏院政所別當等事、）

家司　正四位下行左近衞權中將兼春宮亮平朝臣重衡　從四位上行左馬權頭平朝臣信基　從四位上行皇太后宮亮兼但馬守平朝臣經正　正五位下行右衞門權佐藤原朝臣親雅　正五位下行大外記兼大炊頭中原朝臣師尚　散位從五位下〈此間文缺〉朝臣賴繼〈侍〉

先是執事家司權右中辨光雅被補之間可尋、又攝籙以前、本家司右大辨重方朝臣、左衞門權光長、宮内權少輔棟範等也、重衡朝臣爲年預被預鹿田庄、光雅朝臣依爲執事被預方上庄幷佐保殿、前關白時、光長預鹿田、兼光預方上佐保殿也、

〔玉海〕壽永元年八月十九日丁巳、此日家〈藤原兼實〉所宛也、加補家司〈左中辨兼光朝臣〉職事〈兼長時、季男也、〉等、抑兼光朝臣者、大將〈兼實子良通〉政所始之時、可補家司之由、故女院有仰、而稱未補執柄〈當時攝政〉家司之〈〇之下、疑脫由字、〉解退、其後補彼家司之後、猶寄事猶〈〇猶字疑衍〉左右解遁、故院深思食奇怪之由、然而天下物騷馳過、知行之兩座可改易之樣、有内議之間、關東北陸爲謀反之地、當時不及其沙汰、然間忽然而遷化、爰去比、兼光付法性寺座主邊謝申此恐、但可補余方家司之由云了、事體雖奇怪、又如此令申上、強不能貽意趣、仍今夜所宛之次所補也、

文治二年八月六日庚辰、此夜家〈藤原兼實〉政所藏人所侍所、幷北政所等所充也、〈〇中略〉今夜加補余家司二人、〈皇后宮大進家實、散位長親、已上共左大辨兼光卿息也、件輔於余頻殘之人也、然而先年兼光補余家司了、職似謝其恐、其後擧中長親、置兄擧弟、無謂之故不聞入、而兩人共可被補之由、切々令申、仍隨宜補兩人了、〉

十月十九日壬辰、宗賴朝臣參上、申明日大饗定事、可入定文之家司事、大略仰了、其中兼親雖補余〈藤原兼實〉家司、猶大將〈兼實子良通〉職事也、仍入侍所行事、退案之先例只以殿下家司職事人定文、全不沙汰新大臣之家司職事也、仍兼親入侍所行事不得心、加之又先日可爲大將家司之由被仰了云々、

廿日癸巳、斯日右大將良通承可任大臣之宣旨、〈〇中略〉今夜補大將家司二人、

彈正大弼高階資泰朝臣　左京權大夫藤光綱　和泉守藤長房　永久三人被補例也、〈〇中略〉

家司　忠隆朝臣(伊豫御後見)　忠政朝臣(右馬頭)　顯盛朝臣　家成朝臣(播磨守)　忠盛朝臣(備前守)　顯能朝臣(美作守)　朝隆(右衞門權佐沙汰人)

〔台記〕久安三年二月五日己亥、補成佐於家司、須先補職事、以爲故尊之、直補家司、　六月五日丁酉、今日右大將實能卿、供養德大寺邊堂、(○中略)今日予、(○內大臣藤原賴長)誦經文、家司親隆加判、女房誦經文、書女弟子藤原氏敬白、是攝籙臣之妻之外、不得補家司之故也、

〔台記別記〕久安四年八月十四日己巳、今日補兩三位(○藤原賴長妻及養女多子)家司以下、(妻三位、唯有家司而已、○中略)入夜著直衣(淺黃指貫)冠出賓筵、(寢殿乾廊南面爲其所)召親隆朝臣仰可補三位(妻)家司之人々(先書之名字交名)賜之、仍不具仰、親隆退下、盛仰書一枚(振紙)於宮進置余前、余見了、親隆取之退下、下余年預下家司俊光、(布袴云々)家司三人列立中門西庭(東上艮面)則憲親隆列、自別所直進、向親隆朝臣相揖、入自中門廊西向戶、進寢殿南廂簾前、申曰、尾張守朝臣、(○藤原親隆)敦任朝臣候、則退下自中門內、立親隆前、向艮仰曰、聞食宜了、則經列後復列、了共再拜、次顯方(余職事)降自堂、向親隆相揖、來申余(其詞如前、但加憲親朝臣)還出、仰聞食由了升堂、(暫立可受拜、早升失也)後家司共再拜、了升堂、

〔山槐記〕治承三年二月十日戊戌、今夜北政所可令參內給、卽可被仰輦車也、秉燭之後、關白殿(松殿藤原基房)乘毛車、少將兼宗在共、(○註略)家司左衞門權佐光長、職事前左馬助季佐、侍所司大學允盛兼行事、戌終刻、輦御車於寢殿南階下、家司六人(主計允親重以下也、撿非違使右衞門府生安部久忠在此內)付轅、　十月七日辛卯、傳聞、今日殿中將(師家)有直衣始事、(○中略)被仰下家司職事、藏人左少辨兼光奉仰、仰下之、(家司民部錄親行、職事令旨下、下家司令旨下侍所司正親佑茂榮)

家司　正五位下行左衞門權佐兼春宮大進藤原朝臣光長　藏人左少辨正五位下藤原朝臣兼光

正五位下行少納言兼行侍從平朝臣信國　正五位下行中宮權大進藤原朝臣光綱　從五位上行宮內少輔兼東宮學士藤原朝臣親經

御ぐになし聞え給にしかば、殿〇道長よろづにおぼしをきてきこえ給しほどに、御心ざしいとごまめやかにおもひきこえ給ふ、けいしなどもみなさだめ、まことしうもてなしきこえ給へば、いとあべいさまにあるべかしうて、すぎさせ給めれば、院の御時こそ、御はらからたちもしりきこえ給はざりしか、このたびはいとめでたくもてなしきこえ給へりけり、

〔紫式部日記上〕宮つかさ、殿〇藤原道長のいへづかさのさるべきかぎり、みな加階す、

〔榮花物語三十鶴の林〕この御堂〇法成寺のことつかうまつりつるおのこどもをなん、いちどのことをせんとおもひ給へつると申させ給へば、いとやすきことなりとて、關白殿〇藤原頼通のかみのいへづかさ因幡の前司ちかたゞをば、よりあきらがかはりの美濃になさせたまふ、しものの家づかさ左衛門尉ためかたをば、使かけさせ給、せんじくださせ給、

〔中右記〕寛治二年正月十九日丁卯、初有行幸院〇白河、大炊殿、〇中略勸賞、〇中略正五位下藤知綱、〇藤原（師實政）

家司

長承二年七月五日戊午、大殿給御消息云、院之上〇藤原泰子鳥羽后來十三日、政所侍所可始之由、陰陽頭家榮朝臣所申也者、予〇藤原宗忠申云、無位之人、政所始先例候歟、先尋例可被始由申畢、尋例之處、四條宮寛子　入内之後、女御宣旨日、敍從四位下、賢子中宮　入太子宮、白河院即位之後、女御宣旨日、敍從四位下、件二人、入内以前、被補家司職事、定知無位時被補也、然者付件例、被補可宜歟、其由申了、　九日壬戌、今朝參大殿御所三條殿、申万事之次、被仰云、來十二日、院之上御方、家司職事可補由有院宣、於職事者、可補由有仰、於家司者、從此方可補者、仍親君達七人許可補者、尤可然由申了、權辨必可補也者、申承了之由、　十三日丙寅、今日院之上御方、被補家司職事、政所侍所被始、右衛門權佐朝隆依院宣沙汰云々、

朝臣

〔職原抄下〕諸大夫者

累代爲執柄家家司職事、不通名家之號、○中略凡公達諸大夫之號、起執柄事也云々、○中略諸大夫者、正補彼家司職事、列家僕之輩之後胤也云々、

〔朝野群載七攝籙家〕家司著到　天仁三年二月日

一日庚午　大藏大輔　主殿頭　因幡守　令廣視　右中辨

二日辛未　主殿頭　右中辨

三日壬申

四日癸酉

五日甲戌　右中辨　左少辨　主殿頭　大藏大輔

以下如此、可書卅箇日、

〔大鏡二左大臣時平〕先坊○保明親王に御息所まいり給ふ事、○中略玄上の宰相のむすめにや、その後朝の使に、敦忠中納言少將にてまゐり給ひける、宮うせ給ひてのち、此中納言にはあひたまへるを、かぎりなくおもひながら、いかゞ見給ひけん、文範の民部卿、はりまのかみにて、殿のけいしにてさぶらはるゝを、われは命みじかきぞうなり、かならず死なんず、其後君は此文範にぞあひ給はんずるとの給ひけるを、○下略

〔榮花物語三樣々の悦〕きさいの宮○一條母后藤原詮子東三條の院におはしませば、正月○永祚元年二日行幸○一條ありいといみじうめでたうて、みやづかさ、殿○詮子父兼家の家司など、加階しよろこびしのゝしる、

〔榮花物語八初花〕まことに花山院かくれさせ給にしかば、一條殿○藤原爲光の四君は、たかつかさ殿にわたり給にしを、とのゝうへ○藤原道長妻の御消息たび〳〵ありて、むかへたてまつり給て、ひめぎみの

右得左京職解偁、(○中略)望請親王及公卿職事三位已上以家司為保長、无品親王以六位別當為保長、(○中略)謹請官裁者、右大臣宣、宜早仰下申明舊章、右京職亦准此、

貞觀四年三月十五日

〔江家次第十七〕當代親王宣旨事

勅別當仰下家司職事、(付藏人等) 家司(四位三人以上) 寛弘廿人、承暦康和三人、

〔今昔物語三十一〕常澄安永於不破關夢見在京妻語第九

今昔、常澄ノ安永ト云フ者有ケリ、此レハ惟孝ノ親王ト申ケル人ノ下家司ニテナム有ケル、

〔榮花物語(八初花)〕わかみや(○後一條、寛弘五年十月十六日立為親王、)の家司、おもと人、別當、職事などさだめさせ給、

〔兵範記〕仁平四年八月十八日己亥、今姬宮令蒙親王宣旨給、(○暲子内親王、中略)

家司 土左守季行朝臣 刑部卿雅敎朝臣(年預) 但馬守長成朝臣 常陸守賴盛 長門守家賴

〔季連宿禰記〕天和二年十二月二日乙亥、今日(立親王宣下之事)儲君宮(○東山)立親王宣下也、(○中略)

家司 篤親朝臣(中山) 雅永朝臣(植松) 基輔朝臣(持明院) 雅豐朝臣(飛鳥井) 韶光朝臣(勘解由小路) 隆盈朝臣(四條) 通躬朝臣(中院) 為綱朝臣(冷泉) 公韶(四辻) 光胤(六條)

〔章弘宿禰記〕寶永四年四月廿八日庚戌、自奉行頭中將、明日立親王(○中御門)宣下散狀寫到來、(○中略)

家司 (山井)兼仍朝臣(修理權大夫) (櫛笥)隆成朝臣(左中將) (河野)公緒朝臣(左中將) (川鰭)實詮朝臣(左中將) (北小路)德光朝臣(中務大輔) (小倉)季永(右少將) (綾小路)俊宗(右少將)

〔輔世卿記〕天保六年九月十八日、今日巳刻、儲君(○孝明)立親王宣下也、(○中略)

家司 能通朝臣(○六角) 公前朝臣(○姉小路) 延房朝臣(○池尻) 言成朝臣(○山科) 定德(○梅小路)

〔(慶應元年)都仁志喜一〕親王御所(今上(孝明)第一皇子)

家司 園右中將基祥朝臣 飛鳥井右中將雅望朝臣 裏辻右少將公愛朝臣 愛宕右少將通致

家司

殿、藏人所、侍所、廐司、隨身所、雜色所等アリ、各〻別當以下ノ職員アリ、而シテ親王家ニハ別ニ勅別當、侍者、御監等ノ職員アリ、近世ニ至リテハ、親王大臣等ニハ、諸大夫、侍、雜掌等ノ職員アリ、之ヲ要スルニ皆家司ナリ、

事業ハ、散位三位以下五位以上ノ家事ヲ知ルモノニシテ、元正天皇ノ養老三年ニ始テ置シ所ナリ、

〔源氏物語若菜三十四〕大納言の朝臣の家。づ。かさのぞむなる、さるかたにものまめやかなるべきことにはあなれど、さすがにいかにぞや、

〔狹衣一上〕明日よりはじむべき御いのりどものことなどのたまはす、さるべき家。づ。か。さ。しきじどもめしあつめて、やんごとなくしるしあるべき人々して、はじめおこなはせたまふべき御いのりのさま、いとこちたげにおぼしをきてのたまはするさま、聞給ひてもなどかうしもおぼすらん、

〔源氏物語賢木十〕したしきけ。い。し。ばかり、ことにいそぐことなげにてあるをみ給にも、〇下略

〔落窪物語五〕中の君の御おとこの左少辨越前守なども、皆此殿のけ。い。し。かけたれば、やがてそれらをぎやうじにさして行はせ給ふ、

〔源氏物語夕顔四〕御ともに人もさふらはざりけり、ふびんなるわざかなとて、むつましきし。も。げ。い。し。にて、どのにもつかうまつるものなりければ、〇下略

〔拾芥抄中末院司〕關白家大臣家大略同二攝關一〇中略　家司、下家司、

〔縣居雜錄一〕家司　家司は諸大夫なり、その外にあるをば下家司といふ、

〔類聚三代格十六〕太政官符

應〻令〻結保督〻察奸猾、及親〻守道橋〻事

之、然而無沙汰、近例也、

〔愚管抄七〕白河院の後、ひしと太上天皇の御心の外に、臣下といふもの、詮にたつ事のなくて、別に近臣とて、白河院には、初は俊明等も候、すゑには顯隆顯頼など云者どもいできて、本體の攝籙の臣を、此下ざまの人のおはしけるに、又かなしうおされて、それはゞかりながら、又昔のすゑはさすがにつよくのこりて、鳥羽後白河の初め、法性寺どの〇藤原忠通までは、ありけりとみゆ、

〔源平盛衰記三〕一院御出家事

高倉院踐祚之後ハ、無諍方、一院〇後白河萬機之政ヲ聞召シカバ、院中ニ近ク召仕ル公卿殿上人以下、北面ノ輩ニ至マデ、程々ニ隨フテ、官位俸祿身ニ餘ル程蒙朝恩タレ共、人ノ心ノ習ナレバ、猶アキ足ズ覺テ、平家ノ一類ノミ、國ヲモ官ヲモ多ク塞ギタル事ヲ目醒シク思テ、此人ノ亡タラバ、其ハアキナン、彼者ガ死タラバ、此官ハアキナメト、心ノ中ニ思ケリ、

〔愚管抄五〕入道〇平清盛福原より武者たちて、にはかにのぼりて、我身も腹巻はづさずなど聞えき、〇中略院〇後白河の近習の輩、散々に國々へやりて、やがて院をばその廿日、〇治承三年十一月鳥羽殿に御幸なして、人ひとりもつけまいらせず、〇下略

家司

家司ハ、イヘヅカサト云ヒ、又ケイシト云フ、親王及ビ攝關大臣等ノ家事ヲ知ルモノヽ總稱ナリ、中古以來別ニ家司ト稱スル者アリテ、上家司、下家司ニ分テリ、

凡家司ハ初メ家令ト云ヒ、大寶令ノ時、有品親王、及ビ職事三位以上ニ文學、家令、家扶、家從、書吏等ノ職員アリ、但内親王及ビ人臣ニハ文學無シ、其後變遷ヲ經テ、親王大臣ニハ政所、文

代二人著奥端座、相對紫端六位判官代同著座、赤端次盃酌一獻、主典代持參盃、居折敷廳官取瓶子、四位別當飮畢、授判官代上﨟、次主典代持參吉書幷硯、廳官進之四位別當以下、次第加判返之、次自上﨟次第起座事訖、

〔皇胤紹運錄〕崇光院――榮仁親王……貞成親王文安四十一廿七、太上天皇尊號、

〔葉黃記〕寬元四年八月廿七日癸丑、院後嵯峨○所宛、近年不被行事也、然而寬治大治建久九年行之、伺御氣色之處、可被行云々、勾勘奉行執筆以下人々無案內、予定嗣○藤原書與次第、了高雅記之、仍續加之、秉燭之間參院、依所宛奉行也、近代强不被行之、然而任寬治大治建久例、今度所被行也、上御門大納言顯定土御門中納言、顯親左大辨宰相、經光、以上院司也、持參盃、居折敷藏人憲說取瓶子、箸下、兼居汁物、次大納言執筆、召藏人仰例文硯事、藏人取硯、居御筥、大間書例文、今度土代等加入之、置左大辨前、次藏人立切燈臺、撤木燈臺居替之左大辨取例文幷土代傳大納言、自座次第取上之、執筆見例文、左大辨氣色之後、摺墨染筆卷返大間書文、氣色則被與奪、書了次第見上之、大納言召藏人仰可進筥之由、即持參之、廳儲之、執筆入所宛文於筥、以大貳惟忠朝臣被奏聞、即被返下執筆、又返給四位院司惟忠朝臣出東中門下主典代畢、此間左大辨召藏人令撤硯等、

大間書樣　御祈願所　別當顯朝朝臣　御服所　別當基具朝臣　仕所　別當惟忠朝臣　別納所　別當隆行朝臣　米所　別當房名朝臣

寬元四年八月廿七日　院司交名廿七字左大辨書入之

例文　御祈願所　別當親經朝臣　御服所　判官代通方　仕所　別當資實朝臣　別納所　別當經仲朝臣　米所　別當隆衡朝臣

建久九年八月八日

建久用寬治五年例文、今度依仰用建久例文、大治二年八月廿二日院所宛之次、押分配、今度同可行

ひあしくて、あやぶみおぼしめすほどの事になむありける、踐祚の時、卽關白をやめて宇治にこもられぬ、弟の二條の敎通の大臣關白せられしが、殊の外に其權もなくおはしき、まして此御代には、院にて政をきかせ給へば、執柄はたゞ職にそなはりたるばかりになりぬ、されどこれより又ふるきすがたは一變するにや侍りけん、執柄世をおこなはれしかど、宣旨官符にてこそ天下の事は施行せられしに、此御時より院宣、廳の御下文をおもくせられしによりて、在位の君又位にそなはり給へるばかりなり、世のすゑになれるすがたなるべきにや、

〔資朝卿記〕文保二年三月十日辛未、新院〇花園今日廳始也、予奉行之、早旦爲亞相殿御使向北山、秉燭之程、參新院、催促人々、西園寺新大納言、實衡春宮大夫、公賢宰相中將、師賢四條中將、隆右著殿上、端座不居膳、無盃酌、(建久寛元正元等例也)予覽吉書於西園寺新大納言、新大納言見了以予奏聞、次返下大納言、大納言又返下予、書端書下廳、次判官代源仲秀、持參御封返抄、(入筥)置西園寺新大納言之前、次持參硯、次第加署、次非參議別當、幷五位六位判官代等、相率著廳屋、(依無其所用御念誦堂)饗廿前居之、四位別當座小文、判官代座紫緣、別當座、(横敷)先光繼朝臣著横敷西端、次予目經顯而堂上著同座東、持笏揖如常、次第著了、次一獻、盃(居折敷)主典代親景役之、瓶子廳官光國、二獻盃主典代、同廳官光久、汁物兼居之箸下、其儀置笏立箸、次三獻盃主典代資景、廳官宣直、次主典代資景覽吉書返抄、廳官淸種持參硯、次第加署、異名也、次覽御封國催牒於予、加署、(草名)次覽諸司二分等交名於予、主典代同、予見了返給之、仰可申執事別當之由、次自下﨟起座、此間執事殘留殿上、廳官以藏人覽件交名、次撤机饗立食床、居饗幷合子飯、主典代以下著座有勸盃、雜仕女役之、如著到云々、予不見之傳聞許也、藏人所幷武者所始等事定、行事下知廳之後、無口入之事、點御所近邊之屋爲其所、饗各廿前、御分國勤之、

〔看聞日記〕文安四年十一月廿七日、廳初儀、

先吉書儀畢、四位別當、幷五位六位判官代等相率著廳屋、四位別當著四方横座、(小文高麗端東面)五位判官

雜載

後院所衆　七條主税少丞則棠　正五位下大石右衛門權大尉藤信蔵　正六位下佐々木大和介明哲　從五位下南大路右衛門權大尉加茂維顯

後院召次　從五位下內藤若狹守藤敍純　正六位下小山右將監同久定　石川右兵衛權大尉源紹儀　內藤隼人佑藤原敍久　奧村左衛門少尉平良弼

後院侍　堀川右衛門大尉大石宣弘　從四位下三上大和守秦景文〇以下署名二十七人略

後院北殿侍　從五位上岡本美作守同清谷　從六位上岡本出羽介加茂清永　藤木左兵衛大尉同直充岡本左馬大允加茂定清

〔續日本後紀五仁明〕承和三年二月壬午、河內國丹比郡荒廢田十三町充皇太后宮。〇淳和后正子內親王後院。

〔續日本後紀六仁明〕承和四年七月辛卯、近江國荒田六十四町、勅充太皇太后。〇嵯峨后橘嘉智子後院。

〔貞信公記〕承平八年〇天慶元年十二月八日、從陽成院召安能仰遣之、忠舒多預院事、而明日可赴任所、殊可改任他官留之者、其無便之由報答、

〔神皇正統記白河〕天下を治めたまふ事十四年、太子〇堀河に讓りて尊號あり、世の政を始めて院中にてしらせ給ふ、後に出家せさせ給ひても、猶其まゝにて御一期はすごさせまし〳〵き、おりゐにて世をしらせ給ふ事、昔はなかりしなり、孝謙脱屣の後にぞ、廢帝〇淳仁は位に居給ばかりと見えたれど、古代の事なればたしかならず、嵯峨清和宇多の天皇も、たゞ讓りてのかせ給ふ、圓融の御時は、やう〳〵しらせ給ふ事もありしにや、院の御前にて、攝政兼家の大臣承て、源時仲の朝臣を參議になされたりとて、小野宮の實資の大臣などは、傾け申されけるとぞ、されば上皇ましませど、主上おさなくおはします時は、ひとへに執柄の政なりき、宇治の大臣〇藤原賴通の世となりて、三代の君の執政にて、五十餘年、權を專らにせらる、先代には關白の後は如在の禮にて有しに、あまりなる程に成にければにや、後三條院、坊の御時より、あしざまに思しめすよし聞えて、御中ら

年末椋之間、廳官爲季相代之、申子細云々、如代々例者、院始事、後院沙汰之、仍後院別當年預之間所奉行也、而予〇藤原定嗣雖非後院別當年預、依仰承引、此事頗不似先例、難默止之間、先內々問答之、

〔吉續記〕文永十年五月廿一日、不出仕、以內藏頭狀到來、令補後院別當給了、可令存知給、恐惶謹言、進了、明後日廿三日可被行廳始、可令存知給、可存知之由遣請文了、昨日被宣下云々、　廿二日、入夜後院別當宣旨、入宣官掌國卿持來、留宣旨返給宮讀之、宣旨案尋官、同讀加之、以內藏頭宣下云々、

右中辨藤原朝臣經長

右大辨藤原朝臣經業傳宣、左大臣宣、奉勅件人宜爲後院別當者、

文永十年五月廿二日　修理東大寺大佛殿長官左大史豐後守小槻宿禰在判

文永十年五月廿二日　宣旨

前右大臣〇藤原通雅　內藏頭藤原賴親　右中辨藤原經長朝臣

件人等宜爲後院別當

前日向守安倍朝臣資俊

宜爲同預

左衞門府生中原季重

宜爲同藏人

〔增鏡八飛鳥川〕內山〇龜には、花山院の大きおとゞ、〇藤原通雅、時爲前右大臣、後院の別當になされて、世中みづからしたゝめさせ給ふ、

〔嘉永七年雲上明覽上〕後院

上北面　松尾日向守　藏人　松室右衞門權大尉　下北面　畑丹波守〇以下二十人略

〔慶應元年都仁志喜二下〕後院廳官　正六位下島田出羽守房直

天德四年七月廿七日、左大史我孫(アヒコ)有抄(スヱ)奉、右中辨菅原文時傳宣、右大臣宣、奉　勅中納言藤原師尹、宜爲冷泉院別當者、〈下二藏人平貞行一〉

〔西宮記臨時二〕後院司事、
〈或書云〉康保四年十二月十九日、左大史淺井清廷奉、左少辨平諧行傳宣、大納言藤原在行宣、奉　勅權大納言藤原伊尹、宜爲冷泉院別當者、

〔小右記〕天元五年六月五日乙丑、以左大將〈○藤原朝光〉爲後院堀河院等別當、以左近中將正清〈○藤原實資〉等、爲堀河院別當、〈本後院別當〉左大將以下參弓場殿、令奏慶、

〔類聚符宣抄七〕後院藏人事

正六位上行主水令史清原眞人清松

參議左大辨源朝臣道方傳宣、左大臣宣、奉　勅後院藏人大膳少屬大秦良信不仕之替、宜補之者、

長和三年十二月廿八日　　左少史上道行忠奉

主水令史清原清松

權左中辨源朝臣經賴傳宣、大納言藤原朝臣齊信宣、奉　勅、件人宜爲後院藏人者、

治安三年九月十日　　左少史大宅恒則奉

〔山槐記〕治承四年二月五日丁亥、〈被仰後院別當事〉頭辨示送云、今日被仰下後院別當畢、帥大納言〈隆季〉大藏卿雅隆朝臣等也者、頭辨先日所補別當也、來廿日可有御讓位、〈○高倉〉依爲執事、此人被仰下歟、帥大納言者、法皇〈○後白河〉執事也、令籠居城南之後、此人猶依堪其器、可仰執事云々、

〔公卿補任安德〕治承五年〈辛丑〉

參議正四位下藤經房　治承三年十二月七日、爲後院別當、〈○中略〉同四年二月廿一日、爲新院別當、

〔葉黃記〕寬元四年正月廿二日壬子、代々院司例、依仰注進了、今朝間、資俊〈後院年預〉聽問答、院中條々事、少

日（○遷御後）大臣奉勅、解諸衞警固、（○註略）又後院別當已下院司、幷觸遷御事致勤營者、（○註略）給祿有差、

〔日本後紀　二十一嵯峨〕弘仁二年七月乙巳、勅、聞平城宮、諸衞官人等、出入任意、不勤宿衞、宜直彼參議加督察焉、　九月丁未、勅、侍平城宮諸衞府官人等、任意不直、已闕宿衞、宜改前勅、即命少將已上、便撿校焉、

〔類聚國史　二十五帝王〕弘仁十四年四月丙午、先太上天皇（○平城）差前大和守從三位藤原朝臣眞夏、令賚可停止平城宮諸司狀、即率官人廿許奉返、

○按ズルニ、平城宮ハ、平城上皇ノ御所ナリ、未ダ院司ノ名稱ナシト雖モ、後院ノ濫觴ト云フベシ、

〔類聚國史　百五十九田地〕仁明天皇承和二年三月癸丑、以備前國御野郡空閑地百町、爲後院勅旨田、

○按ズルニ、後院ノ勅旨田ノ事ハ、政治部墾田篇勅旨田條ニアリ、宜シク參看スベシ、

〔文德實錄　九〕天安元年十月丙子、正四位下因幡權守南淵朝臣永河卒、（○中略）弘仁十四年四月、天皇揖讓之際、敍從四位下、爲內藏頭、有勅爲冷然院別當、

○按ズルニ、冷然院古來多ク冷然院ニ作レルモノハ、傳寫ノ誤ナリ、文館詞林卷四百五十三ノ奧書ニ、校書殿寫、弘仁十四年歲次癸卯二月爲冷然院書トアリテ、印文ニ冷然院印トアルヲ以テ證ト爲スベシ、蓋シ冷然ノ號ハ、莊子逍遙遊ニ、列子御風而行、冷然善也トアルニ本ヅキシナラン、冷然ハ郭象ノ註ニ、輕妙之貌トアリ、

〔年中行事秘抄　正月〕十五日主水司獻御粥事（付女房）

御記云、寬平二年二月卅日丙戌、仰善曰、正月十五日七種粥、三月三日桃花餅、五月五日五色粽、七月七日索麪、十月初亥餅等、俗間行來以爲歲事、自今以後、毎色辨調宜供奉之、于時善爲後院別當、故有此仰、

〔西宮記　臨時二〕後院司事

以公卿及非參議四位五位爲別當　以諸司三分及無官散位爲預宣旨　以諸司二分及無職者爲藏人宣旨　有勸公文寄人等判補　有大粮造院仕丁、

〔西宮記臨時一〕諸宣旨

後院預以上依仰、以名簿下本院、或官宣云々、別當上卿奉勅仰辨、辨仰下宣旨、史書下宣旨云々、

〔西宮記臨時二〕後院司事

以名簿下給、藏人召院司可仰歟、此說頗非也、或上卿以名簿下辨官云々、抑若先例歟、　或上卿奉勅仰預、預書下宣旨、延喜、延長、天慶、天德、　或藏人仰書、天慶　或藏人頭仰預書下宣旨、天慶　或依藏人仰預仰書、天慶　或奉大臣仰預宣旨事、天慶、天曆、　或奉大臣仰別當宣旨事、天曆、天德、

〔拾芥抄中末諸名所〕冷泉院大炊御門南、堀川西、嵯峨天皇御宇、此院累代後院、弘仁亭本名冷然院云々、而依火災改然字爲泉、天曆御記、然者改冷然爲冷泉也、

〔拾芥抄中末宮城〕朱雀院累代後院、或號四條後院、

〔日本紀略七圓融〕天元四年七月七日壬寅、天皇遷御四條後院、太政大臣四條坊門大宮第也、以之爲後院、

〔扶桑略記二十七圓融〕天元四年七月八日癸卯、上內裏棟、天皇自官廳遷○自官廳三字原無、據山城名勝志所引補、御四條後院、

〔拾芥抄中末宮城〕諸司厨町

後院四町五條坊門南、五條北、大宮東、堀川西、　又四町三條南、四條坊門北、大宮西、壬生東、此內一町、號三條殿、

〔榮花物語四見はてぬ夢〕一條のおほきおとゞ○藤原爲光のいゑをば、女院らうせさせ給て、いみじうつくらせ給て、みかど○後一條の後院に覺しめすなるべし、

〔新儀式四臨時〕天皇遷御事

天皇暫避本宮、敬遷御於他、先定其使所、○中略又若可御後院者、十八日修御讀經、行鎭謝事、○中略第四

〔吾妻鏡 六〕文治二年五月廿五日壬寅、前備前守從五位下源朝臣行家 大夫尉爲義十男 治承四年四月九日、補八條院 ○鳥羽皇女暲子內親王 藏人、

〔尊卑分脈 四源氏〕義康━━義清 足利太郎、八條院判官代、

〔吉記〕養和元年十一月廿五日丁酉、今日院號定也、依有相勞事、申剋參內、此間公卿漸以參集、左大臣 ○藤原經宗 相次參著仗座、○中略 予 ○藤原經房 出陣仰左府云、止中宮 ○高倉后平德子 職、可奉稱建禮門院、改進屬爲判官代主典代、○中略 後聞法皇 ○後白河、註略、召通盛朝臣、下給院司交名、通盛朝臣申殿下、次召年預資成、下知之、○中略 院司交名、於院御前左衞門督書之云々、○中略

別當 重服人補別當事 左衞門督平朝臣 時忠、元大夫、重服先例被憚之歟、尤以爲奇、 權中納言藤原朝臣 忠親 右衞門督藤原朝臣 實家、元權大夫、 宰相中將源朝臣 通親、元權亮、 五位別當不甘心事 前越前守平朝臣通盛 元亮 勘解由次官藤原宗賴 元大進五位

判官代 散位藤原光綱 元權大進 出雲守藤原朝定 同 散位藤原尹範 元少進

主典代 右衞門少尉安倍資成 元少屬 右衞門府生同資忠 元權少屬

宗賴補別當事、天治之例云々、彼時四品大進也、全不相似彼例歟、況不帶顯官、院號日補之、何年例哉、頗驚聞者也、

〔公卿補任 龜山〕文永十一年 甲戌

非參議從三位藤茂範 卌九 天福二年九月一日、補北白川院 ○後堀河母藤原陳子 判官代、上皇之後、依例被補云々、

〔公卿補任 仁孝〕天保十二年後正月廿二日、院號定、欣子、號新清和院、別當判官代、主典代等再興、

〔新儀式 四臨時〕後院事

代々多有後院、先點定其院、又定補院司別當二三人、公卿一人、或二人、四位五位一兩補之、 預二人、用三分已上者、或五位在其中、 藏人三人、用二分品者、 或有詔停之、

〔西宮記 臨時五〕一當代後院

〔台記〕久安六年十二月廿四日丙寅、後聞今日、右大臣〈○源雅定〉補美福門院〈○鳥羽后藤原得子〉別當、故三條左大臣〈後房〉爲白川院別當之例云々、後日勘例、故後二條殿〈○藤原師通〉內大臣後、爲院別當之由、見彼御記、

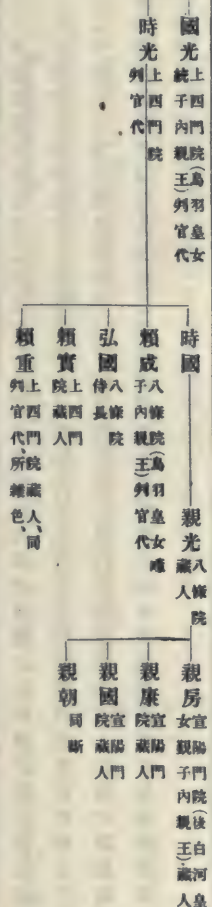
〔爲親記〕應保元年十二月十六日甲寅、今日無品內親王暲子〈鳥羽院姫宮也〉被成母后之儀云々、仍可有院號之由、自去比沙汰出來云々、〈○中略〉今日有其定、內府以下卿相參著仗座、可號八條院之由、各被定申、藏人大進於仗座、仰以左衞門權佐爲親、近江守實淸、〈大宮年預〉可爲判官代、次盛親〈院年預〉可爲主典代之由、內府召大外記師元宣下云々、后宮院號、以大夫爲別當、以進爲判官代、以屬爲主典代之由宣下、今度之儀、何樣可被仰下哉之由、先被問公卿、判官代以下可被宣下、公卿院司、遂可被仰下之旨被定申云々、仍如此、〈○中略〉今日之次第、頗迷可否歟、予下宿所之間、補判官代之由藏人告送、又迷是非、可參賀之由相公殿有返答、仍束帶〈平緒、門部召具、〉先參內、院司事長申旨、付女房奏聞、次參八條殿、

〔源平盛衰記十八〕文覺頼朝勸進謀叛事

文覺ハ、渡邊黨ニ遠藤左近將監盛光ガ一男、上西門院〈○鳥羽皇女〉ノ北面ノ下﨟也、

〔玉海〕治承四年正月廿五日戊寅、午剋頭中將通親朝臣來、〈○中略〉侍中可有闕、皇嘉門院〈○崇德后藤原聖子〉藏人、被擧三人之由承之如何云々、余〈○藤原兼實〉云、未承及、但自一所被擧三人、定僻事歟、各私成其望歟、頃之通親退出了、

〔尊卑分脈源氏一〕淳國

- 國光〈上西門院(鳥羽皇女統子內親王)判官代〉
- 時光〈上西門院判官代〉
  - 時國
    - 親光〈八條院藏人〉
      - 親房〈宣陽門院(後白河皇女覲子內親王)藏人〉
      - 親康〈宣陽門院藏人〉
      - 親國〈宣陽門院藏人〉
      - 親朝〈同斷〉
  - 賴成〈八條院(鳥羽皇女暲子內親王)判官代〉
  - 弘國〈八條院侍長〉
  - 賴實〈上西門院藏人〉
  - 賴重〈上西門院藏人、同判官代、所雜色、〉

右方光謹檢案內、從宮初之時、忘私勵忠、専戴星霜、夙夜奔營、恪勤之節、頗勝傍輩、于茲居院宮藏人史生者、不經幾年遷拜諸司主典、蹤跡寔存、近則御宮初史生竹田利成任內藏屬、日置利正任修理屬、當院之今藏人、大春日理忠任掃部屬、以往之例、不遑毛擧、仍每有其闕、議經上奏、而天聽難通、宿望未遂、獨非後傍輩之愁、兼有失先蹤之歎、望請殊蒙天恩、因准先例年勞恪勤、被拜任件闕、將勵奉公之節、方光誠惶誠恐謹言、

長德四年十月廿二日　　東三條院廳藏人正六位上酒部公方光

〔風雅和歌集 雜十七〕心ち例ならざりける比讀侍ける　郁芳門院媞子內親王(白河皇女)宣旨 ○歌略

〔中右記〕永長元年十二月廿七日、今夕被補藏人、藤原盛輔、(盛實之子也、母經成朝臣女、故郁芳門院藏人一﨟、)

〔大外記師遠記〕天治元年十一月廿四日丁酉、午剋右大臣(藤原家忠)○中略參著仗座、被定申院號事、○中略大臣先召予仰云、停中宮(藤原璋子、鳥羽后)職、爲待賢門院、改進爲判官代、改屬爲主典代、○中略今日被補院司以下、別當、(權大納言源能俊、元大夫、權中納言藤原通季、元大夫、同顯隆、內藏頭藤原家保朝臣、元亮、右近中將忠宗朝臣、元亮、權左少辨平實親、元亮、大學頭藤資先、元亮、)主典代、略三人如本、別當以下、下知以後、於庭中有拜舞事云々、　十二月一日甲辰、是日待賢門院殿上始也、○中略被補藏人、高階通忠、源盛宗、

〔千載和歌集 春上〕百首歌たてまつりけるとき、初春の心をよめる、　待賢門院堀川 ○歌略

〔兵範記〕久安五年十月十日戊午、今日被補女院(藤原得子、美福門院)藏人等、
藏人二人　左近將監源宗清(元院昇殿)　藤原隆信(爲經入道、親忠孫、八歲、)
非藏人　藤原爲宗(爲實二男、侍從大納言擧申云々、)

〔台記別記〕久安六年正月廿二日庚子、御車役諸司二分、下家司等交名事、(諸司二分不足、仍以下家司爲其代、)
主稅少允佐伯久孝　主計少允惟宗貞國　安藝掾惟宗行忠
已上、高陽院(藤原泰子、鳥羽后)廳官、

北面侍所司兼補例　中原宗房(待賢門院(鳥羽后藤原璋子)臨年預、同五位所司、造酒正從五位上、)　同親房(上西門院臨年預、同所司、民部遠江權□從五下、)○中略　中原滿季(宜秋門院(後鳥羽后藤原任子)臨年預、同五位所司、使右衛門大史、)　藤原重任(同院臨年預、同所司、諸司對馬守從五下、)　中原宣季(同院臨年預兼院北面所司使右衛門大夫尉、)

執柄家臨年預例　藤原重繼(宜秋門院臨年預、豐前守從五下、)

神祇官子孫例○中略　卜部仲忠(上西門院臨年預、大和守從五上、神祇權少佑兼光男、)

追捕廷尉例○中略　中原知親(六條院、上西門院年預、于時廷尉、)

〔世俗淺深秘抄下〕一女院拜禮申次、不可進階間、階次間歟、將第二間柱邊歟ニ可跪也、是女院御方申次、以女房可申故也、

〔日本紀略九一條〕正暦二年九月十六日壬子、天皇行幸職曹司、依皇太后宮(○一條母后藤原詮子)御惱也、戊剋皇太后宮落飾爲尼、○中略停皇太后宮職、爲東三條院、年官年爵封戸如元、停進屬、爲判官代主典代、

〔日本紀略十三後一條〕萬壽三年正月十九日丁酉、太皇太后宮(○後一條母后藤原彰子)落飾入道、○中略詔停后號、爲上東門院、止進爲判官代、止屬爲主典代、年官年爵御封御服御楽如故、

〔榮花物語三十一殿上の花見〕かくて長元四年九月廿五日、にようゐん(○上東門院)住吉石清水にまうでさせ給、○下略

〔中古歌仙三十六人傳〕和泉式部　越前守大江雅致女、○中略童名御許丸、上東門院女房、

伊勢大輔　祭主神祇伯大中臣輔親卿女、上東門院女房、

〔除目大成抄八〕所々藏人

東三條院(○圓融后藤原詮子)臨藏人正六位上酒部公方光、誠惶誠恐謹言、

請被殊蒙天恩、因准先例、依年勞恪勤、拜任主計主税屬等闕狀

身勞十三箇年

女院司

小上らふ　大中納言人々の女ども、まいる、又こうぢの名などゆるさる丶也、中らふ　これは日野くわせうじの人、平家の人、又菅家の人などの女參るなり、大かた仙洞は、執柄家の女ぼうの官とかはるべからず、たゞし女官などは内裏とひとしかるべし、

〔長秋記〕大治四年七月六日壬午、自女院有召、本院〇白河御霍亂云々、　七日癸未、御氣色暫減、御音不聞、又不令知人顏、所食糙水許也、女房なつとも爲忠妻いはひを字賀茂女御兩院、資遠大夫尉資盛安藝守等許、候臥内奉助起居、

〔拾芥抄中末院司〕院司

別當　執事　年預　判官代五位、或四位、六位、　殿上人　藏人四人　非藏人　主典代　廳官公文院掌等在之

召次所　仕所　別納所　御服所別當　御厨子所　進物所　文殿　所衆藏人所也　武者所　御隨身所　將曹左右　府生左右　番長左右　近衞　御厩別當　女院同之但武者所御隨身所無之

〔康中抄下〕院司

別當公卿　四位或五位　判官代五位、或四位、六位、　殿上人　藏人四人　非藏人あり　主典代　廳官藏人　公文院掌などあり　廳　召次所　仕所　別納所　御服所　進物所　所衆　武者所　御隨身所　女院も此定、所衆已下はなし、

〔三中口傳三〕一稱屋名事

女院御所、稱御隨身所事不可然、

〔洞院家記十〕御幸始次第

廳年預

御膳所預兼補例〇中略　藤原親忠八條院(鳥羽皇女暲子)廳年預兼進物所預、若狹守正五下、攝殿大夫親信男、〇中略　藤原資兼上西門院(鳥羽皇女統子)廳年預、兼進物所預、御厨子所預、安木守資盛男、

傳仰可差進御隨身之由、

〔修學院御幸書〕修學院御幸之儀〇文政七年九月廿一日

上皇〇光格出御、〇中略御隨身等發前聲、次隆起朝臣、召上﨟御隨身於階下、從階上授御劒下殿、〇中略次御輿出御、〇註略於西中門四脚門等、御隨身等進御前、〇中略次上﨟御隨身爲先下﨟、次御輿、位次上﨟、持御劒、次御輿傍、

〔大江俊矩公私雜日記〕文政七年九月廿一日庚戌、上皇〇光格御幸于修學院離宮也、〇中略

一供奉堂上地下人數、大略如左、〇中略

御隨身十二人　藤原武備　源武理　身人部淸郁　源供永　紀淑亮　源倘文　秦常孝　源爲祥　紀宗愨　大江芳全　藤原眞品　秦常敬

〔西宮記臨時五〕一院宮事

仕丁

上皇脫屣之後、〇中略仕丁有雜役之時召仕、

〔三長記〕建久九年正月廿日戊午、今日被奉太上皇尊號〇後鳥羽詔書、右府參陣、頭中將宣下尊號御隨身、〇註略幷仕丁封戶頓給等事、同宣下云々、

〔經俊卿記〕寬元四年二月十三日癸酉、今日太上天皇尊號〇後嵯峨也、詔書幷頓給仕丁等事可被宣下云云、

女房

〔西宮記臨時五〕一院宮事

上皇脫屣之後、〇中略上﨟女房一人爲宣旨、

〔女房官品〕仙洞

大上らふ　親王攝家大臣家の御娘まいる、或たゞ上﨟とも云、大中納言の女なりとも、大臣をふる家の人の女ならば上らふといふべし、

左將曹秦久員召次長、元前關白府生久清法師男、左　右將曹同兼利元候本府、故賴次男、初被召秦兼友之代、爲久員之上臈者可參之由申之、辭退仍改、是召次長、後日被依兼利運與不運也、　左府生同久則元前關白左番長久清法師男、可爲兼利之代任右將曹之間被召之、　右府生同兼躬元攝政大臣之時、雜色長、

故武延男、改被召、秦賴峯與兼利座次相論之間、被備之、　左番長同賴方元府官人、大炊御門前內大臣雜色長也、賴峯男之被召、兼躬轉府生替、　右番長同久賴

元內大臣官人歟、　近衞下毛野武行元前關白一元故武賴男

秦兼有大府雅武男　同諸峯元內大臣二元賴峯男　同賴澄大府兼利猶子、實久清法師孫、　同則澄元前關白二元武澄男

同延近故武延男

〔葉黃記〕寬元四年三月二日辛卯、御幸○後嵯峨六條殿、○中略

一御隨身　上臈冠　久員出褄押銀薄　紅衣　吹返　兼利柳下隨身紅衣十人○以下略

五年○寶治元年六月一日壬午、秦弘方補番長之後、初參著御隨身所御隨身依重服不參事云々、

寶治二年正月六日乙卯、今日御幸○後嵯峨始也、○中略御隨身右將曹久則以下也、左將曹兼利、左番長久賴重服也、其替不被召也、被引移馬、進

候、基具朝臣勤御劒役、

〔增鏡五內野の雪〕寶治二年十月廿日ごろ、もみぢ御らんじがてら、うぢに御幸○後嵯峨し給、○中略院より

もあるじのおとゞ○藤原兼經に御馬たてまつり給ふ、院の御隨身どものけはひことにて、ほうだう

の前の庭に引いでたれば、ゑもんのすけ親朝ちかつぐ、二人うけとる、

〔高輔朝臣記〕正元元年十二月二日、今夜行太上天皇○後深草尊號詔書事、○註略次御隨身事、御封頓給口

宣下歟、左右府生各一人、於將曹者直被仰下之、不及宣下、建久○後鳥羽除目之時被任之、但件仁不

被召加歟、今日事、不出仕之間雖不見及、以奉行職事頭辨資平朝臣說記之、委猶可尋記、政始日、尊號

御隨身事被宣下、應德○白河嘉例也、

〔章弘宿禰記〕寶永六年六月廿四日、今日卯刻、尊號○東山宣下、○中略尊號宣下次第○中略

職事就軾、仰可差進左右近衞將曹府生番長各二人、近衞各三人之由、退入、次上卿以官人召外記、令

〔中右記〕寛治五年二月八日、院〇白河有調樂、樂所西御隨身所也、

〔續世繼白川の花宴二〕本院〇白河新院〇鳥羽つねにはひとつ御車にてみゆきせさせ給へば、法皇〇白河の御車なれど、さきに御隨身ぐせさせ給へりき、

〔世俗淺深秘抄下〕一上皇隨身、六月十五日奉仕十列事ハ、昔白河院御隨身下毛野近季、私相語傍輩、爲御祈勤之、

〔續世繼小野のみ雪四〕雪おもしろくつもりたるあしたに、〇中略御隨身のまいりたりける、ひとり御ともにて、にはかに御幸有けるに、北山のかたさまに、わたらせ給ければ、その御隨身、ふと思ひよりて、もし小野のきさきの山ずみし給などへやわたらせ給はんずらんと思ひて、かの宮にまうでつかふまつるものにや侍りけん、にはかに衣のびて、みゆきのけさ侍る、そなたさまにわたらせ給、もしその御わたりなどへや、侍らんずらんとつげきこえければ、かの入道のみや、その御ようゐありて、〇中略すでにわたらせ給て、ばしかくしのまに、御車たてさせ給て、〇中略かへらせ給て〇白河のち、〇中略院〇白河より御つかひありて、〇中略みのゝくにとかや御庄の劵たてまつらせ給へりければ、まいりつかうまつるをとこをんな、これかれのぞみけれど、みゆきつげきこえける隨身にあづけたまひけるとぞきゝ侍し、そのとねりの名はのぶさだとかや、〇中略たしかにもきゝ侍ざりき、

〔三長記〕建久九年正月廿日戊午、今日被奉太上皇尊號〇後鳥羽詔書、右府參陣、頭中將宜下尊號御隨身、左右近將曹府生番長各二人、近衛各三人云々、

〔洞院家記〕公光卿記疑陽明記歟御隨身所始事

寛元四年二月十三日記云、〇中略今夜院〇後嵯峨御隨身所始也、左右將曹以下褐衣、垂袴、番長白狩袴、各帶弓箭、候中門郎著所、先撤弓箭、行饗机、其後退出、

御隨身所

皇ノ御事ヲ申ケルニヤ、畏々トゾ人皆舌ヲ振ケル、

〔葉黄記〕寬元五年〇寶治元年正月廿八日壬午、今夜若宮入御式乾門院、依御猶子儀也、〇中略院〇後嵯峨庇御車、公卿九人、〇中院大納言以下院殿上人定平朝臣以下廿人許云々、右少辨候御後、官人盛長、大夫尉召次長秉利供奉、

〔花園院御記〕文保三年〇元應元年正月十四日庚午、今日爲御幸始幸北山第、朕乘御車、〇中略今日供奉人々〇中略召次所　廷躬　久澄

〔継塵記〕文保三年〇元應元年正月十五日辛未、今日法皇〇後宇多御幸龜山殿、被用御輿、公卿春宮大夫、在忠卿〇中略召次所二人云々、

〔大江俊矩公私雜日記〕文政七年九月廿一日庚戌、上皇〇光格御幸于修學院離宮也、〇中略一供奉堂上地下人數、大略如左、〇中略召次六人　藤原彼純　藤原久定　源紹喜　賀茂志顯　源紹儀　藤原彼久

〔拾芥抄〕中末院司　院司

御隨身所　將曹、左右府生、左右番長、左右近衞、

〔名目抄〕院中御隨身ズイシン上臈六人、左右近衞各三人、左右番長、府生、左右人、是兵仗儀也、

〔西宮記〕臨時五一院宮事

上皇脫屣之後、出入無警蹕、依新主宣旨、分左右近衞府物節各五人、爲御隨身、〇中略御佛名院司聞人、御隨身申刻限、〇中略御行乘檳榔車、御車副八人御隨身布衣烏帽帶弓箭、

〔弘安禮節〕僮僕員數事

隨身　太上天皇十四人　將曹二人　府生二人　番長二人以上騎馬　近衞八人步

〔日本紀略〕村上三天曆三年三月三日丙午、此日宣旨云、左右近衞各五人、爲朱雀院御隨身、

〔古今著聞集十馬藝〕承安元年小五月會にて侍けるにや、秦公景、子公正下野敦景、子敦則あはせられたりけるに、公景はまうけ上手、敦景はをひ上手なりければ、案のごとく敦景追てとりくみて、馬場末までとほりにけり、ともに興ありければ、兩人めされにけり、公景はもとより院〇後白河の召次所に候けり、敦景叡感のあまりに、次日召次所に候べきよし、大宮大納言隆季卿奉行にて仰下されけり、公景此事を聞て、院の中門に主典代廳官などが候ける中にて、誠にや敦景、公景に持したりとて、御所へめされ侍るなり、公景に勝たらんものは、いかほどの目にかあふべきといひたりける、いと興ある申事也、

〔古今著聞集十六興言利口〕秦兼任まづしかりける比、たゞ獨從者を持たりけり、後白河院の御時、召次の長になされたりけるに、一門の者共、悅につどひにき、兼任年比のひとり從者をめしいだしければ、いか程の目にあはんずらんと、人々いみじく見けるに、兼任は大力なりけるがはしりたちて、此ひとり從者をふみふせて、もとゞりを切てけり、またしきもの共、いかにとあざみければ、年比たゞ獨めしつかひつるに、ふてごとゞもして、やすからず覺へしかども、勘當してはいかにせんぞとおもひねんじて過侍りぬ、只今こそは日比の腹をばすへ侍らめとて、かくし侍ぞかしとぞいひける、さは去ながら、又年におはするやうなしとて、召次一ばんの所をとらせてけり、

〔源平盛衰記三十八〕重國花方帶院宣西國下向同上洛事返狀事

同〇元曆元年二月十五日ニ、重衡ノ使、平左衞門尉重國、院宣ヲ帶シテ西國へ下向、院〇後白河ヨリハ御壺召次ニ花方ト云者ヲ被副下ケリ、〇中略御壺ノ召次花方ハ、平左衞門尉重國ニ具シテ、院宣ノ副使ニ西國へ下リタリケレバ、平大納言時忠卿、花方ヲ捕テ、以金燒頰ニ波方トゾ燒付タル、其後髻ヲ切、鼻ヲ殺テ、是ハ己ヲスルニハ非ズトテ追放ケリ、無益ノ院宣ノ御使勤テ、身ノカタワヲゾ付ニケル、サテコソ花方ヲバ、異名ニハ波方トモ呼ケレ、時忠卿ノ己ヲスルニ非ズト宣ケルハ、サレバ法

んと心にかけて、用心し侍りけれ共、むなしくてのみ過けるに、〇下略

〔承久記 上〕信濃國ノ住人仁科二郎平盛遠ト云フヲノコアリ、十四十五ノ子ドモ、未元服モセサセズ、シユク願アルニヨリテ熊野へ參リケル折節、一院〇後鳥羽御熊野マウデアリケルニ、道ニテ參アヒヌルニ、誰ゾト御尋アリ、シカ〳〵ト申、キヨゲナルワラハベナレバ、召仕レントテ、西面ニゾナサレケル、

〔葉黄記〕寛元五年〇寶治元年五月九日辛酉、今日新日吉社小五月會也、上皇〇後嵯峨可有臨幸、〇中略有流鏑事、承久以往北面西面輩騎之、天福武士騎之、

〔拾芥抄 中末院司〕院司　召次所

〔世俗淺深秘抄 下〕一召次長如院宮出行之時、供奉之時、御後官人ヨリ猶後也、但上皇辭退隨身以後、召具召次長時、必自御後官人爲先、法皇同之、或隨身雖不辭退、召次長若爲上﨟六人之外、而令供奉車後者、猶可爲先、總雖有後騎人、猶先歟可尋、

〔榮花物語 八初花〕かすがのつかひのせうしやう〇藤原顯道は、中じやうになり給て、ことし〇寛弘二年のまつりのつかひせさせ給、〇中略その日になりぬれば、〇中略花山院の御車は、きんのうるしなどいふやうにぬらせ給へり、あじろの御車を、すべてえもいはずつくらせたまへり、さばかりもすべかりけると見えたり、御ともに大どうしのおほきやかに、としねびたる四十人、中どうし廿人、めしつぎどもは、もとの俗どもつかうまつれり、

〔源氏物語 三十六柏木〕宮〇女三宮は〇中略夜ひと夜、なやみあかさせ給ひて、日さしあがるほどにむまれ〇薫君給ぬ、〇中略五日の夜は、中宮の御かたより、こもちの御まへのもの、女房の中にもしな〳〵に思あてたるきは〳〵、おほやけごとに、いかめしうせさせ給へり、御かゆ、とんじき五十具、所々のきやう、院のしもべ廳のめしつぎどころ、なにかのくまゝでいかめしうせさせ給へり、

居之、出御之後、範賢可參之由雖申之不可然者、慥可退出之由被仰了、四五獻後入御、
上北面(裏書)公卿陪膳事、非御前之儀者、不可叶之由每度所申也、弘安之比有此事、上北面等蒙勅勘云云、凡事儀不可然、縱雖非御前、如此別被召公卿者、雜人可居之乎、事理不可然歟、但如供御所行酒、又於便宜所、公卿使如得選者、又常例也、如此至被召著者不可論御前他所、然而北面者、豈可居之乎、何況棧敷北面院御所咫尺、勿論事歟、範賢荒出、太以不可然事歟、

〔後愚昧記〕應安七年二月二日戊戌、今夜亥剋(吉時戌云々)新院(○後光嚴)御葬禮也、(○中略)
御葬禮御幸(○中略)
上北面　知廣
下北面　豐原奉長(前火)　藤原定重(前火)　源康衡(前火)　藤原信泰(前火)　大江成豐(燒香)　同成能(燒香)

〔大江俊矩公私雜日記〕文政七年九月廿一日庚戌、上皇(○光格)御幸于修學院離宮也、(○中略)
一供奉堂上地下人數、大略如左、(○中略)
上北面(四人)　親重　良武　友直　重禮
下北面(十三人)　親之　保行　氏祥　景文　光邑　重名　弘隆　藤原往益　賀茂共淸　藤原裕益　藤原德盛　藤原憲澄

西面

〔愚管抄(後鳥羽)二〕此御時、北面の上に、西面といふ事始まりて、武士が子どもなど、多く召付られてけり、

〔元亨釋書(願雜)十七〕沙彌西音者、元曆帝(○後鳥羽)之西面也、帝好武召勇士、置宮中西偏備宿衞、西面之名、始於此、

〔宇治拾遺物語(十二)〕後鳥羽院御時、水無瀨殿によるよる山よりからかさほどの物のひかりて、御堂へとび入事侍りけり、西おもて北おもてのものども、めんめんにこれをみあらはして、高名せ

〔吾妻鏡 十〕文治六年〇建久元年十二月一日辛巳、右大將家〇源頼朝御拜賀也、〇中略申一剋御參仙洞〇六條北、西洞院西、路次行列、〇中略
前駈十人　七條院非藏人範清　河內守光輔　皇后宮大進行清　散位成輔　前右馬助朝房
前尾張權守仲國　前下總守邦業　前左馬助成實　內藏權頭國行　前參河守範頼
•範頼　範清外八人、皆院〇後白河北面衆被催遣之、
〔葉黃記〕寬元四年三月二日辛卯、御幸〇後嵯峨六條殿、〇中略
一御後官人下北面也、盛長朝臣、大夫尉時定、宮內大
一下北面　友景朝臣　行範朝臣　信繼　康廣　信時　信茂　爲繼　信連　範景　弘季
八月十三日己亥、下北面所司被加補、左衛門尉藤基景以女房奉書、內々被仰下之、予〇藤原定資以狀仰友景畢、細々事以青侍奉書下知之、如此事、或直仰之、
〔勘仲記〕弘安二年二月三日庚辰、早旦向棧敷、仁和寺宮、於東大寺可有御受戒、今日御下向、兩院〇後深草、龜山、於一條御棧敷御見物、午剋許令渡御棧敷給、予〇藤原兼仲御棧敷向植竹內、於小屋所伺見也、頗嚴重所也、有其興、先本院有御幸、公卿一人、殿上人三四輩騎馬、小時新院御幸、今日御隨身幷北面下臈出居座相論座籍以外有御逆鱗、御棧敷東砌、新院御隨身列居一行、西砌本院召次所久守久家等兩人列居、北面輩五位已下、西砌召次所下可列居之由、再三被仰下歟、以御力者度々被召遣、而終以不隨召一兩、其後雖參被追立云々、還御之時、北面下臈等被追留云々、範經朝臣行邦兩人許供奉、頗珍事也、
〔花園院御記〕正中二年十月七日甲申、午剋御幸竹中殿、予爲方違也、廣義門院同有御幸、終日於棧敷眺望、入夜有一獻事、於北面簾臺、大納言入道〇實兼以下公卿一兩行盃酌之處、上北面不可居肴物之由申之、不可然之由再三有仰、範實逐電、可有勅勘之由被仰、然而猶稱所勞之由在臺所云々、仲成遂

〔平治物語 一〕源氏勢汰事

信頼、○中略急ギ一品御書所へ被參タレ共、上皇○後白河モ御座サズ、マサシク晩迄、御オトナヒノ有ツル物ヲト宣ヘドモ御座サズ、上皇御出ノ時、北面ノ侍平左衛門尉泰頼ヽ、骨有物ナレバ、召テ御寢所ニ置カセ給ヒケルガ、御マチビヲ不違申ケル也、遙ニ延サセ給ヌラント覺ヘシ時、御寢所ヲ三度拜テ出ケル也、

〔源平盛衰記 十八〕文覺高雄勸進附仙洞管絃事

此ニ文覺○中略或時院○後白河御所、法住寺殿ニ參テ御奉加之由言上ス、御遊ノ折節ナルニ依テ、奏者此由ヲ申入レズ、○中略法皇モ御感ノ餘、時々ハ唱歌セサセ御座ケル、御座席也ケル半計ニ、コキ黑染ノ奇(アヤシキ)ニ、思モヨラヌ大法師、調子亂ルヽ大音ニテ、片言ガチナル勸進帳ヲ讀タレバ、只天魔ノ所爲ト淺增クテ、上下萬人、興ヲ醒セリ、コハ何事ゾ、北面ノ者共ハナキカ、急ソクビ突ト仰ナリ、サナキダニモ事ガナ、笛フカジト思ケル北面ノ下薦共、我モ〱ト走向ケル中ニ、平判官資行、左右ナク走懸リケルヲ、文覺勸進帳ヲ取直シテ、拳モ軸モ一ニナレト、把堅メテ、資行ガ烏帽子打落シヤ冑ツキテ、眞仰ニ突倒ス、○中略北面ノ者共狼藉爲鎭、十人許ハシリカヽル處ニ、○中略此法師ノ體、殿上マデモ狂參リ氣也ケレバ、法皇モ御座ヲ立セマシ〱、公卿殿上人モ閑所ニ立忍給ケリ、宮内判官公朝ガ、其時ハ兵衛尉ニテ北面ニ候ケルガ、近ヅキ寄テ誘ケルハ、○下略

〔吾妻鏡 七〕文治三年八月廿七日乙未、下河邊庄司行平爲使節上洛、又重被申京都條々、○中略

一北面人々任廷尉事

此事近年諸人望也、先々不輙事歟、能々撰其仁、可被抽補事、○中略

右條々存公平所令言上也、

文治三年八月廿七日

御後には矢をひてつかまつりけり、後にもみな其例也、

〔尊卑分脈九藤原氏〕公貞──信季（院中下北面、白河院下北面、叙留従五下元始也、）──康季──季範（下北面、従五下左衛門大尉、）
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　└近康（下北面、左衛門大尉、）

〔尊卑分脈十藤原氏〕章俊──爲俊（白河院御寵童、今犬丸是也、童形之時、候北面、初例也、聴直奏、被召夜御殿云々、但非實子、依勅命爲猶子、實者小舍人童也云々、）

〔尊卑分脈十藤原氏〕國仲──盛重（千壽丸、周防國住人、童形之時、候北面、白河院御寵童、元服之後近習、長門守高階經敏家人也、自幼日東大寺別當敏覺法印爲兒童召仕也、南都御幸之時、白川院被及天眼、即被召出之、有寵、）
　　├成景（依父盛重例、童形之時候北面、鳥羽院御寵童、後白川院御代、被召近習、聴奏事云々、）
　　└盛景──信盛（織部公春子、叙留北面石見守、實父隨身織部公春子、依白川院勅定、爲盛景子、院近習無雙寵臣、）

〔源平盛衰記四〕鹿谷酒宴靜憲止御幸事

北面ハ白川院御宇ヨリ被始置、衞府共アマタ在ケリ、爲俊守重、童部ヨリ千壽丸、今犬丸トテ切者ニテ侍ケリ、鳥羽院ノ御時ハ、季範季頼父子共ニ近奉被召仕、傳奏スル折モ有ケリ、去ドモ皆身ノ程ヲ計テコソ振舞ケルニ、此御時ノ北面ノ下臈共ハ、事ノ外ニ過分ニテ、公卿殿上人ヲモ物共セズ無禮義、理ヤ下北面ヨリ上北面ニ移リ、上北面ヨリ殿上ヲユルサルヽ者モ有ケレバ、驕レル心モ有ケル也、

〔尊卑分脈四源氏〕義國──義康（鳥羽院北面）

〔尊卑分脈十藤原氏〕康清──義清（鳥羽院下北面、依道心俄發心出家、所經行、法名圓位、號大寶房、又號西行、）

〔中右記〕長承二年七月十一日甲子、今日權辨依仰初參入院（○鳥羽）〇北面、近代世爲大慶也、

〔台記〕久安四年十一月廿日甲辰、馳詣一院（○鳥羽法皇）〇夜漏數移、官人盡罷、欲奏賀慶、無人以聞、試覓下侍（俗號下北面）僅ニ、重成（近臣）問上既寢否、對以猶寤（上爲人遲寢）即傳勅問所以夜中參來（○下略）

北面

少ヒルミケルヲ、太刀ヲ捨テ得タリオウト懷ク、〇下略

〔百練抄 八高倉〕治承元年三月廿八日、院〇後白河武者所藤原師經加賀國目代、國司様者也、配流備後國、依天台訴也、

〔葉黃記〕寛元四年正月廿九日己未、今日有讓國〇後嵯峨事、〇中略

武者所衆　日來瀧口如元、但上藺三人被渡新帝〇後深草了、

閏四月十八日丙午、參院、傳奏等如例、攝政殿御參、武者所行季名簿、奏覽之後下廳了、廳書下之也、名簿奥ニ書云、別當權大納言源朝臣顯定仰云、可候武者所、同年同月日　主典代資俊奉、　廿六日甲寅、參院、左衞門尉惟宗景長可爲武者所、有官事下知廳畢、無所望之仁之間、于今不被仰之、前々二人也、以武者所故人爲有官也、

〔名目抄 院中〕上北面(シヤウホクメン)諸大夫　下北面(ゲホクメン)五六位、皆諸代侍、

〔故實拾要 十三〕上下北面

是院中ニ伺候ノ侍也、北面ハ詰所ノ名也、上北面下北面トテ兩樣アリ、上北面ハ多分ハ四位ニ進ム、下北面ハ五位六位也、又上北面ノ上ノ字ハ、シヤウト淸テ訓ズ、下北面ノ下ノ字モ、カト淸テ訓ズ、ゲトハ不唱也、

〔職原抄 下〕諸大夫者　候執柄及諸大臣家輩、六位時補侍中、五位已後、參院上北面、剩聽院内昇殿、家家不可勝計、

〔世俗淺深秘抄 上〕一同時〇上皇御幸、候北面童供奉於五位下於六位上也、例也、五位人數多時、召一人供奉也、

〔世俗淺深秘抄 下〕一上皇召具一員參神社時、猶候下北面童令供奉御後、白河院參春日社時、袈裟午丸供奉之、御厩別當之後、四位院司前也、

〔愚管抄 二白河〕此御時、院中に上下の北面をかれて、上は諸大夫、下は衞府允おほく候て、下北面御幸

帶劍、　九月廿四日、太上皇參御鞍馬寺、日之中還御、○中略武者所等皆扈從、
嘉保三年○永長元年二月廿二日癸未、今日於京極殿御堂、有十種供養、○中略上皇○白河幷女院有御幸、○中略
武者所廿人許、布衣、
〔長秋記〕天永四年○永久元年三月十四日、今日依搦夏燒大夫、左衞門尉平忠盛敍從五位下、院武者所宗
友任左兵衞尉、
〔中右記〕永久二年七月廿二日、早旦宗實來云、○中略又仰云、院○白河武者所雜仕女、與左衞門督牛飼童
鬪亂之間、女刃傷也、可沙汰者、○下略

三院日吉社御幸事

〔永昌記〕大治元年正月十三日己卯、曉更本院、○白河新院、○鳥羽女院、參御日吉社、○法皇上皇御同車公卿直衣、殿
上人衣冠、後騎撿非違使武者所濟焉如例、
〔保元物語〕一左大臣殿上洛事附著到事
去ヌル九日○保元元年七月田中殿○崇德ヨリ内裏ヘ御書アリ、御使ハ武者所ノ近衛也、
〔參考保元物語〕一新院御所各門々固附軍評定事
京師本、杉原本、鎌倉本並云、新院○崇德左府○藤原賴長御著背ヲ召、○中略敎長成雅以下上北面、水干袴ニ
腹卷ヲ著ス、武者所來甲冑ヲ帶ス、
〔保元物語〕二白河殿義朝夜討被寄事
白河殿○崇德ニハ、角トモ知召サヾリシカバ、左大臣殿○藤原賴長ノ武者所ノ親久ヲ被召テ、内裏ノ樣
見テ參レト仰ケレバ、親久卽チ馳歸、官軍既ニ寄候ト申モ果子バ、先陣既ニ馳來ル、
〔源平盛衰記〕十八文覺高雄勸進附仙洞管絃事
此ニ文覺、○中略或時院○後白河御所、法住寺殿ニ參テ、御奉加之由言上ス、○中略信濃國住人安藤右馬大
夫右宗、武者所ニテ候ケルガ、走向テ太刀ノミ子ニテ、左ノ肩ヲ頓懸テシタヽカニ打タリケルニ、

所渡御、〇中略、御厩別當三條中納言等供奉云々、

〔大江俊矩記〕文化十五年戊寅〇文政元年

院〇光格司　御厩別當　德大寺大納言實堅卿

〔修學院御幸書〕修學院御幸之儀〇文政七年九月二十一日

御輿〇光格出御、〇中略次後騎御厩別當、次召次六人、二行、次御後官人、次上北面四人、二行、次下北面十二人、二行、〇下略

〔吾妻鏡〕十文治六年〇建久元年十二月一日辛巳、右大將家〇源賴朝御拜賀也、〇中略申一刻、御參仙洞、六條北、西洞院西、路次行列　先居飼四人　二行、退紅手下、縫二之、一人持鎗、　次舍人四人　二行、已上行幸列式一列、今度右府御調進云々、萌黃狩襖、袴、薄色、衣、白練單、村濃、平組括、平禮、　已上院〇後白河御厩舍人　眞澤、金武、

〔名目抄〕院中舍人トネリ　居飼ヰガイ

武者所

〔葉黃記〕寬元四年三月二日辛卯、御幸〇後嵯峨六條殿、〇中略

一雜人裝束交名付　御厩舍人六人　居飼六人　已上可被通用御幸始之被申之、御厩

〔拾芥抄〕中末院司院司　武者所

〔西宮記〕臨時五一院宮事

上皇脫屣之後、〇中略瀧口爲武者所、

〔小右記〕永觀三年〇寬和元年二月十日乙酉、依召參院、〇圓融仰云、武者所十人、可被聽帶弓箭之由可奏聞、弓箭禁制嚴口之間不可隨身、仍所令奏也者、注十人名簿有被奏聞、　十一日丙戌、參內、院御消息被仰云、恐承了、可下給聽武者所弓箭之宣旨、卽可仰左衞門督者、參院奏此由、

〔中右記〕寬治五年閏七月六日癸巳、太上皇〇白河召相撲人、覽布引、〇中略有盃酌三獻、勸盃武者所中、爲衞府者勤之、布衣

院御厩別當五百年ばかり以來西園寺、菊亭、正親町、三條等の家々補來候、○下略

〔源平盛衰記 三十四〕法皇御歎幷木曾縱逸附四十九人止官職事

木曾○源義仲ハ、法住寺殿ノ軍ニ打勝テ、萬事思サマナレバ、今井樋口已下ノ兵共召集テ、○中略國王ニナラントスレバ少キ童○安德也、若ク成事叶マジ、院ニナラントスレバ、老法師○後白河也、今更入道スベキニモ非ズ、攝政コソ、年ノ程モ事ノ樣モ成ヌベキ者ヨ、今ハ攝政殿トイヘ殿原ト云今井四郎ヨニ惡ク思テ、攝政殿ト申進スルハ、大織冠ノ御末、藤原氏ノ人コソスル事ニテ候ヘ、○中略殿ハ源氏ノ最中ニ御座ス、タヤスクモ左樣ノ事宣テ、春日大明神ノ罰蒙リ給フナト云、サテハ何ニカ成ベキト暫ク案ジテ、ヨキ事アリ、院ノ御厩ノ別當ニ成テ、思フサマニ馬取ノランモ所得ナリトテ、押テ別當ニ成テケリ、

〔源平盛衰記 四十五〕源氏等受預附義經任伊豫守事

同○文治元年八月十四日ニ被行除目、○中略大夫判官○源義經ハ、伊豫守ヲ賜ハル上、院御厩ノ別當ニ成テ、京ノ守護ニ候ヘトテ、侍十人付ラレタリ、

〔玉海〕文治元年十二月廿七日丙子、午刻右中辨光長朝臣、持來賴朝卿書札幷折紙等、如夢如幻、依爲珍事、爲後鑒、續加之、○中略　折紙狀云

可有御沙汰事○中略

一院御厩別當　朝方卿、本奉行之職也、可被還補歟、○中略

十二月六日　賴朝在判

〔石淸水臨幸記〕文應元年八月七日壬寅、自今日被始八幡御精進、于時○後深草三條坊門殿、門々立札、神馬左相府獻之、仰御厩案主範景所令齋餇也、

〔章弘宿禰記〕寶永六年六月廿七日、今日新院○東山御幸始也、自假殿御所○近衞殿御寢ノ殿也假殿皇居○近衞殿裏ノ御

主殿所　掃部所　藥殿　御厨子所　進物所　細工所　御厩司

哉、御服所未定之間不審云々、御服所ハ年預モ相兼例モ候歟、付之モ後院別當之中ニ可爲年預之人、今度許令用意之條如何、答今度彌關白被調進可宜歟、

〔葉黃記〕寬元四年五月十八日乙亥、參院、○中略八幡御精進、門々立札、又御湯殿具、別納所進之、○中略御服所進御湯帷、

〔西宮記臨時五〕一院宮事

上皇脫屣之後、○中略主殿所供御湯油、掃部所奉仕鋪設、○中略藥殿供御藥、

〔拾芥抄中末院司〕院司　御厨子所

〔拾芥抄中末院司〕院司　進物所

〔三中口傳三〕一稱屋名事

膳所名事　大内ニハ名御厨子所、又號進物所、於御厨子所號者、大内之外不稱之、院中ニハ號進物所、

〔葉黃記〕寬元四年正月廿九日己未、今日有讓國後嵯峨○事、○中略

進物所預散位紀宗茂、左衞門尉紀久廣、同久景、已上如日來、今明兩日御膳、各相替調之、宗茂二度、久廣久宗各一度、來月以後、各分一旬可勤仕云々、

〔葉黃記〕寬元四年九月廿七日壬午、院後嵯峨○細工所新調御車、御牛飼渡之處、忽被突殺牛了、仍件御牛被弃、

〔名目抄院中〕御厩別當ミマヤノベツタウ四位、西園寺代々補之、當流（洞院）又補之、

〔拾芥抄中末院司〕院司　御厩別當

〔職原抄後附〕院司　御厩別當、牛飼、舍人、車副、居飼

〔野宮問答〕厩別當　預舍人

別納所

上皇脫屣之後、〇中略仕所調節器進、

〔日本紀略〕三村上天曆元年五月三日丁亥、朱雀院定主典代、仕所、御書所別當等、

〔葉黃記〕寬元四年五月十六日癸酉、上乘院僧正勤仕御祈、院〇後嵯峨御祈事、成俊奉行、〇中略布施以下、二品沙汰、月曜法、月曜祭、御所裹筵、任例廳進之、年預仕所

〔拾芥抄〕中末院司　院司　別納所

〔西宮記〕臨時五一院宮事

上皇脫屣之後、〇中略供膳同在位儀、采女供侍別納供御飯、勅旨田地子御菓、御封物

〔葉黃記〕寬元四年正月廿五日乙卯、參內申條々事、〇中略院始事也年預別納所事承定之、仍內々下知、所課可用意之由仰之畢、　閏四月廿七日乙卯、參院、前內府自八幡昨日下向、今日參會、條々事有沙汰、別納所年預景資逝去、面々雖競望、依爲器量之者被補重俊、執事可被下知歟、仍相觸之處、直可下知之由有返答、仍下知廳年預資俊了、或有仰其人、然而自廳可觸其人事歟、　五月十八日乙亥、參院、〇中略八幡御精進、門々立札、又御湯殿具、別納所進之、大文御座二枚同進之、　七月十四日庚午、院有御盆御拜、〇中略

七月十四日御盆供

一別納所

御盆二具　具別廿坏菜十飯十

送文二通

御半帖不入之用曾圓座在差筵　長櫃四合

御服所

〔拾芥抄〕中末院司　院司　御服所別當

〔山槐記〕治承四年二月五日丁亥、帥大納言隆季被示送云、初度御幸〇高倉直衣御裝束、自何所令調進

仕所

本院司〈○中略〉藏人　有盛〈行盛子〉　遠明〈令明子〉　實親〈範家子〉　知信〈信範子〉

非藏人　藤知通〈內藏人〉　高階爲親　源清基　亮爲基　藤爲盛　藤範兼　源盛隆　亮爲賴

藤信重　此中有兼內藏人輩

〔保元物語〕一左大臣殿上洛事附著到事

新院〈○崇德〉ノ御方ヘ參リケル人々ニハ、〈○中略〉平馬助忠正、其子院藏人長盛、〈○下略〉

〔公卿補任〕後深草寶治三年〈己酉○建長元年〉

非參議從三位藤經範〈六十一〉　承元四十一廿五、補新院〈○土御門〉非藏人、

〔公卿補任〕龜山文永十一年〈甲戌〉

非參議從三位藤茂範〈九十〉　貞永元年十一月廿五日、補後堀川院藏人、

〔葉黃記〕寬元四年正月廿九日己未、今日有讓國〈○後嵯峨〉事、〈○中略〉　一紙　高檀紙〈折紙○中略〉　予於御前書之、進御所了、

藏人　菅原長雄　日來非藏人、各可補藏人也、而藤親家、源邦親、菅原長雄、藤親定、源親氏、藤範長、

已上六人、內長雄一人被補畢、他人凡卑尫弱之故也、但親家後日敍爵畢、

〔洞院家記〕九正安三年正月廿一日、〈伊網記〉讓位、〈新院院司被補事〉今夜被補院〈○後伏見〉司等、

院司〈○中略〉　藏人　藤原親方〈藏人彈正忠〉

〔大江俊矩公私雜日記〕文化十五年〈戊寅○文政元年〉

院〈○光格〉司　藏人　松室左兵衛大尉秦重仲　北小路右兵衛權大尉大江俊方

所衆　佐々木大監物彥明　大石杢少允信守　初川右兵衛大尉信賀　佐々木掃部少允源明遠

七條左衛門權少尉源則孝

〔拾芥抄〕中末院司　仕所

〔西宮記〕臨時五一院宮事

車ヲ廳官ナドノ寄シカバ、公卿殿上人庭上ニ下立、御隨身左右ニ列リ、官人番長前後ニ順ヒシニ、〇下略

〔吾妻鏡〕六文治二年七月八日癸未、院〇後白河北面左衞門尉能盛入道、幷院廳官定康所知、武士濫妨事、早可停止之由被仰下之旨、左馬頭消息到來、

〔葉黃記〕寬元四年三月二日辛卯、御幸〇後嵯峨六條殿、〇中略

一御共廳官白襖平禮　景直　康種　有季　景重　是眞　良廣　已上六人也、可爲八人之由雖被仰下、依無領狀也、

〔大江俊矩公私雜日記〕文化十五年戊寅〇文政元年

院〇光格司　廳官　島田主計頭元直朝臣　島田內匠助敏直

〔拾芥抄〕中末院司　藏人四人　非藏人〇中略　所衆藏人所也

〔西宮記〕臨時五一院宮事

上皇脫屣之後、〇中略五位藏人爲侍者、六位藏人爲判官代、不補者藏人如元、

〔洞院家記〕十一申文書樣可在有、或無此字、

院藏人所衆正六位上大江朝臣某誠惶誠恐謹言

請被殊蒙鴻恩、依上日第一勞、拜任刑部少丞諸司八省司在心闕狀、

右某謹考先例、依院中上日之勞、任諸司要望之官者、承前之佳模、當所之故實也、爰某奉公事可載之望請因准前例、拜任件官者、仰有道之化、竭無貳之節、某誠惶誠恐謹言、

年號月日　院藏人所正六位上大江朝臣某

凡款狀書樣、依家之故實、依身之勞効、強不可一准、唯裁一端、餘可准知、

〔中右記〕大治四年七月十五日辛卯、今夕太上法皇〇白河御葬送也、〇中略

〔拾芥抄中末院司〕院司　廳官等公文、院掌在之、

〔職原抄後附〕院廳　官人云廳官

〔洞院家記十一〕御幸始次第

廳官

政官例　大江貞良長承三八五、任右少史、元民部少六、院廳官、　紀清説永暦元五十一、任右少史、元出納、院廳官、　中原盛景安元元九五、任右少史、元民部少六、院廳官、

廷尉例　佐伯義仲康治元正廿七、任右少志、宣、春宮屬、院廳官、主計屬、節　紀盛久承安三八十八、宣左府生、廳官、安元々一九卒、年六十三、院　大江經廣承安三八十八、宣右府生、元案主、官史生、院廳官、　中原重國文治四十十四、任右府生、節宣、公文案主、院廳官也、　大江信成承元元十二十七、任左府生、節宣、元官史生、院廳官、　紀職光建保七正廿二、宣左府生、院廳官、官史生、　中原宣康貞應元正廿九、宣右志、院廳官、後院藏人、　中原爲季嘉禎二三十九、任右府生、節宣、左辨官史、

中原季重　紀國直　紀有直　此外有所見者、可勘入之、

〔洞院家記十一〕御幸始次第

廳年預

御膳所預兼補例　紀久任延久廳年預御厨子所預、河內守、從五上、大炊頭久任男、●紀久範寛治廳年預兼御厨子所預、玄蕃頭、從五上、久任男、○中略　紀久長保元後院廳年預兼御厨子所預、玄蕃頭、久範男、○中略

北面侍所司兼補例○中略　中原宗家後白川院北面所司、同年預、造酒正、大藏大輔、伊豆守、正五下、○中略

追捕廷尉例　源康繼六條院廳年預、[illegible]　中原知親六條院、上西門院年預、于時廷尉、　六條院年預、知親子孫相續補之、

親清永親爲廷尉兼之、

已上就所見粗注之、漏脫定多歟、可勘加之、

〔保元物語三〕新院御遷幸事幷重仁親王御事

二十三日、○保元元年七月　新院○崇德ヲ讚岐國ヘ可奉遷由ヲ奏聞ス、○中略　誠ニ日比ノ御幸ニハ、ヒサシノ

勾勘
廳官

戌剋事始、人々次第著座、六位等(明範、伊經、長雄、)立切燈臺、(移高燈臺)置文臺(折敷)圓座等、經範朝臣獻序、地下殿上公卿次第自下置詩、吉田中納言召翰林令勤講師、翰林召在宗令勤、講師人々不進寄、而依勅定、吉田中納言、刑部卿、予近進候、左大辨又參進、正光、良賴又進候、刑部正光如形詠序、經範召茂範令重詩、夜闌事訖、光國取御會退出了、

〔勘仲記〕弘安七年六月廿八日甲戌、早旦參院、(○後深草)奏事、次參殿下、內覽條々事、次歸參院、住吉神主國平與坐摩神主康重相論神事執行、於文殿遂對決、師顯奉行也、一決遂了、訴論人起座、文殿衆勘決是非、問注記幷勘決狀等、師顯付予、(○藤原兼仲)付宗親朝臣、內々奏聞、御所爲押小路大納言二品第、宗親馳參彼御所、勅答云、文殿衆師宗一人雖申子細、其外一同之上者、於神事者、國平可施行之由、可被仰下之由思食、參殿下、如何樣可候乎之由被申合、於御前讀申問注記勘決狀等、其後被仰下是非、其趣注折紙、付藏部了、國平可施行之由、被仰下之間、即下知社家了、

〔貞永式目抄〕四一勅問文書ノ事、送年月之間、爲訴人有其愁歟、於向後者、二十箇日ノ中、可申所存、永和條々內、延慶二年四月十六日、被下文殿條々ノ內、一可被置庭中幷越訴事、庭中三日、十八日、二十三日、(上巳)一日ノ沙汰不可過三箇條、件日々雜訴沙汰、當番傳奏著文殿可問答事、(○中略)一庭中ノ日、四日、九日、十九日、廿四日、件ノ日、當番傳奏著文殿可尋聞訴人所申、委被糺申沙汰、私曲令露顯者、啻非被改奉行、宜被止出仕、(○下略)

〔增鏡〕(十三秋のみ山)その夏比(○元亨二年)定房の大納言あづまへつかはさる、御門(○後醍醐)にあめのしたの事ゆづり申さんの御消息なるべし、(○中略)かくて大納言ほどなく歸りのぼりぬ、御心のまゝなるべく奏したりとて、院の文殿、議定所にうつされ、評定衆など、せう〳〵かはるもあり、

〔葉黃記〕寶治元年七月十三日甲子、今日被始中宮御產御調度行事、院司勾勘高雅、及晚參仕、

〔名目抄〕(院中)廳官(チヤウグワン)(六位)

一院號以來、直文殿後、儒道後進輩超浴天恩事、

藤原敦宗朝臣　先頻任儒官、次兼東宮學士、　同俊信　先頻遷顯官、次兼東宮學士、

同友實　先直文殿、次補藏人、次補內裏藏人、　同實光　先直文殿、次補藏人、次補內裏藏人、

同宗光　補藏人、

同行盛　先補判官代、次任春宮少進、次補內裏藏人、

同尹通　先聽昇殿上、次補藏人、次補東宮藏人、

右太上皇(○白河)院號之後、去寬治五年四月、以敦基被直文殿、其後寒來暑往、十有四廻、然間儒家後進、文殿淺腐之輩、頻浴玄渙、多昇青雲之中、壯發四五許輩、論年齒宛如父子、積功勞多隔星霜、雖耻掄材之用、不堪積薪之愁、就中院中別當、殿上侍臣、藏人所、武者所、或依座次、或尋恪勤、每有敍位除目之儀、必浴加階拜官之恩、文殿一所、何背傍例乎、敦基已爲第一之籍、尤當最先之仁、漢天雲隔、老鶴之唳雖早、胡城月明、行雁之陣不亂之故也、(○中略)

康和六年正月廿六日　前上野介正四位下藤原朝臣

〔葉黃記〕寬元四年閏四月十九日丁未、參院、(○後嵯峨)去月院月奏等持來、加署返、相加文殿六通也、文殿月奏開闔書進歟、　五年(○寶治元年)三月廿日癸酉、早旦參院、頭辨已下參仕條々、傳奏爲御使、向前相國許、(○中略)次歸宅改著直衣、歸參院、依文殿作文也、勾勘又列文人、仍相伴存應儀、勾勘著衣冠、此作文、去年十月可被行之由有沙汰、而依土御門院御忌月、有猶豫儀延引、寬治承元十月也、不然者任天治例可爲二月歟、而去月自然無沙汰、今月被行之、判官代藏人民部大輔光國奉行、(予與奪也)以弘御所擬文殿爲文場、東二ヶ間爲御所、打簾代懸御簾、其西五ヶ間、(撤中遣戶)對座敷高麗疊爲公卿殿上人座、北廂二ヶ間、敷紫帖爲地下文人座、(此北庇、日來聖近習殿上人座也、)掌燈等如例、爲文殿儀者、若不可懸御簾歟、然而承元即以弘御所爲此所、諸家委記等、撤御簾之由不記之、仍以隨宜、南面御簾等如元卷之、攝政殿參給被候簾中、

廣橋中納言光成卿　高松前宰相公祐卿　橋本宰相中將實久卿

〔禁裏秘抄〕院參衆

當時法皇御所へ參勤之御方を院參衆と云、是は諸家の中より院中へ被召出事なれば、臨時に禁裏御參勤之方へ御立歸りの事もあり、或は交替之事もあり、但院中數多くおはします時は、御參勤もあり、其時によるべし、

院御所には内々外樣近習之差別なく、何れも一統に御參勤あり、

院中御勤番之事、大略禁裏に同じ、御參番人少き故に、總て人數を三つに別て一番二番三番とし替々御參勤なり、院の御所方は一ヶ月に十日なり、毎日之交替御宿番等之事、何れも禁裏に同じ、

〔實豐卿職方聞書〕後花園院御代迄、禁中の小番を勤て、非番の時に、御情(ヤトヒ)にて院の御番を勤めたる也、只今の樣に、誰は院參衆とて、其院の御番も、萬端の御用をも常に相勤て、禁中の小番を不勤事も、曾て以て無之事也、

〔貞享三年新撰公家要覽〕本院御所〇明正院參衆　東坊城前大納言恒長卿

〔天保三年雲上明鑑〕仙洞御所〇光格祗候衆　花山院大納言家厚卿〇以下十九人略

〔名目抄院中〕文殿(フドノ)御治世之時被置之、移記錄所儀一

〔拾芥抄院中末司〕院司　文殿

〔職原抄後附〕院司　文殿雜訴衆寄人職事

〔百寮訓要抄〕文殿　院の御治世の時、諸人の訴訟を決斷せらるゝ所なり、衆開闔以下諸の儒こと に器用をえらばれて補せらるべし、

〔本朝續文粹六奏狀〕前上野介正四位下藤原朝臣敦基誠惶誠恐謹言

請殊蒙天恩、准傍例、依儒學幷奉公勞、被拜任刑部卿彈正大弼、式部權大輔等闕狀、〇中略

評定衆

一出御之後、院傳奏出席、誘二引備後守、讃岐守小御所一取合、廊下南方列座、
一御進覽之御太刀折紙、院傳奏披露、備後守於二中段一御對面、○下略

〔大江俊矩公私雜日記〕寬政九丁巳年
院傳奏　梅小路中納言定福卿　西洞院左兵衞督信庸卿
文政五壬午年
院傳　日野大納言資愛卿　冷泉民部卿爲訓卿

〔所司代袖鑑〕音信贈答事
一院傳奏衆御合力米之儀も、江戶へ伺申渡候、是ハ老中證文ニ不レ及、從二此方一小川藤右衞門方へ證文遣し候、

〔禁裏秘抄〕院評定衆三人

〔吉續記〕文永五年六月一日、仙洞評定一月十度、其人數被レ詰番云々、頭辨權辨相分詰番云々、

〔萬一記〕文保三年正月十三日、仙洞評定始也、○中略
一仙洞評定衆傳奏等可レ被二清撰一事

〔元祿十三年御公家當鑑〕仙洞御所○靈元評定衆
梅小路宰相共方卿　竹內三位惟庸卿　堀川三位康綱卿

〔大江俊矩公私雜日記〕寬政九丁巳年
評定　藤谷右兵衞督爲敦卿　豐岡前宰相尙資卿　平松右衞門督時章卿
文政五壬午年
評定　四辻中納言公說卿　萬里小路右衞門督建房卿　高倉左兵衞督永雅卿

〔天保三年雲上明鑑〕仙洞御所○光格評定衆

唐太宗者、朝披經史、觀成敗於前蹤、晩接賓筵、訪得失於當代、如寬平聖誡者、近喚公卿有識、治訪治術、夕召侍臣、求六經、凝和德常儀如此、今度及得失之議奏皇化之至也、就之傳奏評定衆等先度有黜陟之沙汰、而其後非才非行之輩、相加歟、眞實可被行政道者、傳奏評定衆等事、可有研精沙汰哉、

〔德川禁令考公家一〕禁裏附役人令條

寬永二十癸未年九月朔日令條

條々 ○中略

一諸事、兩人令相談、分別に及がたき儀者、板倉周防守重宗○任差圖、可申付之事により新院之傳奏へも、可申談事、○中略

寬永二十年九月朔日　家光黑印

榊原三郎右衛門どのへ

中根五兵衛どのへ

〔武家嚴制錄一〕一新院御所御條目

條々 ○中略

一御祝日幷拜賀之時、公家衆參上之儀者、新院ゟ傳奏江申屆之、自表可爲退出事、○中略

承應四年正月十一日　御黑印

〔京司秘錄下〕所司代御參內之節御次第書

參院之儀

一備後守、讃岐守、同伴參院、竹間著、傳奏附座、

一院傳奏出會、備後守御口上被申述、院傳奏退入、

一院傳奏言上之後、出席告可有御對面之由、

之諸國守護地頭兵粮米事、早任申請、可有御沙汰之由、被仰下之間、師中納言、〇藤原經房被傳勅於北條殿云云、

〔玉海〕文治元年十二月廿七日丙子、定長爲院御使參上、先是先以參上、是第二度御使也、尋出近習者一人申入、付件傳奏之人申參入之由、〇下略

〔勘仲記〕弘安七年二月八日丁亥、參院奏條々事、傳奏二條前黃門也、　九月五日庚辰、今日仙洞評定、二條前中納言奉行云々、予依勞事不出仕、頭卿奉書到來、神宮事可奉行之由被仰下、申領狀了、藏人方謂執權、稱神宮奉行云々、可謂面目、但勢州訴人競起、短慮愚昧者難堪歟、賀茂社奉行頭卿可請取云々、

正應五年九月五日癸亥、宿侍、奏神宮已下條々事、中御門中納言爲方爲傳奏、

〔萬一記〕文保三年正月十三日、仙洞評定始也、〇中略

一仙洞評定衆、傳奏等可被清撰事、　末代之風、居王官之輩者非王佐之器、以傳奏評定衆、可謂王佐之臣、而不輔政道之仁爲見任、補政道之臣者爲前官、絆之條差、末代之風也、而當時應傳奏評定八座之撰輩、無德行之間、無才庸之譽、或致所望、或爲虛名、爲如末代授王官之義歟、眞實被撰德行之仁被清撰者、如周武之十亂、同志同德佐政道者、盍顯淳素哉、

十四日、參仙洞、直衣評定、依有其催也、頃之人々參集、有出御、先賀茂社造營事、有其沙汰歟、勅定曰、政道事、大綱當時簡要、公事用途等事、可定申者、〇中略予〇藤原宣房申云、政道事、誠者天之道也、〇中略凡任官爲官求人、可抽德行、才庸、譜代、恪勤之由被載之、然而居其官之仁、絕不被抽德行才庸、大略被賞譜代歟、依之無輔佐、如形令行陣公事許也、後嵯峨院以來傳奏評定衆可稱輔佐歟、而近代彼輩、又如任官成、口雖非其器稱譜代、因茲政道追日陵夷者歟、〇中略

傳奏評定衆事

本院司〇中略主典代　大江行重五位　同盛家五位　同盛賢五位　中原季範弾正忠　中原俊弘木工允

〔葉黃記〕寬元四年正月廿九日己未、今日有讓國〇後嵯峨事、〇中略一紙高檀紙折紙〇中略予於御前書之、進御所了、

主典代　中原景資後院別納所年預　安倍資俊

三月十日己亥、被加補主典代資直資職、

〔洞院家記九〕正安三年正月廿一日、伊綱記讓位、〇中略今夜被補院〇後伏見司等、新院院司被補事

院司〇中略主典代　俊茂東市正　資重大藏大輔

廿二日癸亥、是日被加補新院々司、

加補院司〇中略主典代　親景隱岐前司二﨟出納　安倍資景

〔大江俊矩公私雜日記〕文化十五年〇文政元年戊寅

院〇光格司　主典代　富島左近將監源元章　井上右衞門少尉源忠長

〔光臺一覽三〕院傳奏　二人　大中納言　役料有

〔源平盛衰記四十六〕時政實平上洛附吉田經房卿廉直事

吉田中納言經房卿ヲバ、其比ハ勘解由小路中納言ト云キ、廉直ノ姓世ニ顯シ、忠貞ノ譽無隱ケレバ、源二位今度院奏シケルハ、大小事、向後以經房卿可奏聞之由被申タリ、平家時モ大事ヲバ、此卿ニ被申合キ、故太政入道〇平淸盛ノ、法皇ヲ鳥羽殿ニ籠奉リシ後、院傳奏ヲカレシ時ハ、八條中納言長方ト、此大納言ト二人ヲゾ別當ニハ被成ケル、今度源氏ノ世ニ成テモ、角憑マレケルコソ難有ケレ、

〔吾妻鏡五〕文治元年十一月廿六日乙巳、大藏卿泰經朝臣籠居、是義經申下追討宣旨事、依爲彼朝臣傳奏、源二位卿〇源賴朝殊欝申之趣、達叡聞之間、勅定如此云云、　廿九日戊申、北條殿〇時政所被申

〔拾芥抄 中末院司〕院司　主典代

〔西宮記 臨時五〕一院宮事

上皇脱屣之後、〇中略出納爲主典代、

〔職原抄 後附〕院廳

主典代廳官宿老任之、〇中略代字限院中者也

〔洞院家記 十〕御幸始次第

〔日本紀略 三村上〕天暦元年五月三日丁亥、朱雀院定主典代、仕所、御書所別當等、

藏人所出納兼主典代　大江行重寛元年中出納、後補主典代、　安倍資良保元出納、御脱屣後主典代、猶兼出納、　中原清重永暦年中出納、後補廷尉并主典代、又北面、　大江久兼保元出納、高松院主典代、　中原俊職貞永出納、後遷主典代、　中原俊繼寛喜貞永出納、五位、後補主典代、　中原重俊建長出納、則兼院主典代、　中原俊茂嘉元五位出納、則兼主典代、　中原季俊元亨出納、兼後院主典代、　此外五位時、自出納補主典代、大略毎度之例也、

官掌補主典代例　中原盛信　中原國保史筑後守　中原盛繼史大和守子孫、候北面、

廳官轉主典代例　菅野賴經崇德院主典代、元廳官、　紀高氏後深草院主典代同　中原季重龜山院主典代　中原盛久伏見院主典代　中原季俊後宇多院主典代　中原盛種伏見院主典代　近例猶多歟、可勘入之、

儒道者補主典代例　明經道多米國平天元五十月任右少史、元上野大掾、明經道至左大史、敍留、　算道菅野實國寛弘八十二任少外記、元主計允、轉大外記、敍位任算道、

此外猶有其例歟、可勘入之、又儒門胤被抽補例、　清原師俊延久主典代、于時近江掾、後經史博士、賴隆弟、賴佐孫、　同政資同御時、于時明法生、後任木工允、敍同、　中原宗政應德主典代、後外記敍位、博士廣宗猶子、

自主典代補道志例　中原章職嘉祿二四十九、任右志、使宣、元主典代、皇后宮少屬、

神祇官者補例　齋部兼孝延久主典代、明法生、後任太皇太后大屬、神祇大佑、守親孫、同大史弘賴男、

〔中右記〕大治四年七月十五日辛卯、今夕太上法皇〇白河御葬送也、〇中略

主典代

〔兵範記〕仁安三年七月十八日丁丑、院〇後白河廳官守與衣冠来臨、左衛門佐信基被補判官代之由、朝覲行幸在近、忽補院司、過分之大慶也、

〔葉黄記〕寛元四年正月廿九日己未、今日有讓國〇後嵯峨事、〇中略　一紙 高檀紙中折紙〇中略予於御前書之、進御所了、

判官代　顯雅　經俊　藤原重名　源盛持　源仲基　藤原說茂　藤原雅綱　任應德〇白河建久〇後鳥羽之例、五位判官代可爲一人之處、顯雅、經俊、共以競望、仍被仰二人畢、且保元〇後白河之例也、已上五人元藏人也、仍各補拜判官代、

〔洞院家記九〕正安三年正月廿一日、伊綱記讓位、〇中略今夜被補院〇後伏見司等、新院院司被補事

院司〇中略　判官代　光方右少辨年預　藤朝左衛門權佐　藤原季敎藏人右衛門尉　同久藤藏人左衛門尉　源兼廣藏人左近將監　橘以有新藏人季敎以下四人、御在位之時内藏人、

廿二日癸亥、是日被加補新院院司、新院院司加補事

加補院司〇中略　判官代　惟輔藏人兵部少輔　經世藏人兵部大輔　仲高五位藏人　光經勸解由次官　資冬右衛門權佐

〔大江俊矩公私雜日記〕文化七年庚午

院〇後櫻町司〇中略　萬里小路辨建房五位判官代年預　藪大夫實嗣五位判官代　三室戸大膳大夫緋光五位判官代　大江俊矩六位判官代　藤原差次六位判官代　藏人藤原助功

十五年戊寅〇文政元年

院〇光格司〇中略　判官代　年預勸修寺辨經則　日野西勘解由次官光暉　裏松左兵衛權佐恭光　藤嶋極﨟藤原助功　細川差次藏人源常顯

〔日本紀略後一條十三〕寛仁元年八月廿五日庚寅、以前皇太子〇敦明爲小一條院、准太上天皇、賜年爵年官受領吏等、停進屬爲判官代主典代、又以左右近衛各五人爲御隨身、御封等如舊奉充之、

〔名目抄院中〕主典代シユテンダイ廳補之

官に付たる判官代主典代にても候はず、只禁中の判官主典を換して被成官にて候、必院に有事官ニテ候にて候由被仰出候キ、其分候哉、

〔日本紀略村上三〕天暦二年二月五日乙酉、於院〇朱雀定判官代、

〔榮花物語三様々の悦〕正暦二年二月十二日にうせさせ給ひぬ、〇圓融こゝらのとしごろ、なれつかうまつりつるそうぞく、殿上人判官代、なみだをながしまどひたる、いはんかたなし、

〔中右記〕寛治二年正月十九日丁卯、初有行幸、院〇白河大炊殿、中略次勸賞、中略從五位上藤隆時院判官代

八年〇嘉保元年六月二日、裏書今日國明朝臣補院〇白河別當、行實朝臣如元補判官代、本五位時判官代也、友實被聴院昇殿、抑行實朝臣被補四位判官代事、希代之例也、四位判官代、自此始歟、

大治四年七月十五日辛卯、今夕太上法皇〇白河御葬送也、中略本院司中略判官代　忠盛朝臣

資能朝臣　爲重　朝隆　資賢

〔台記〕久安四年五月廿七日甲申、依余〇藤原頼長舉、大舍人助源雅亮補一判官代、

〔兵範記〕久壽二年正月十二日庚申、被補兩院六位判官代等、

一院〇鳥羽藤原光定、年十二藏人頭左中辨光頼二男、故正二位民部卿顯頼孫、母參議正四位下行右大辨朝隆卿女、

美福門院、藤原雅隆、年九正四位下內藏頭兼備中守光隆一男、正二位權中納言清隆孫、母故參議從三位左近衛中將信通女、內女房、

〔保元物語一〕新院被召爲義事附鵜丸事

爲義、中略六人ノ子共相具シテ、白河殿ヘゾ參ケル、新院〇崇德御感ノ餘ニ、近江國伊庭庄、美濃國青柳庄二箇所ヲ給テ、卽判官代ニ補シテ、上北面ニ可候由、能登守家長シテ被仰、鵜丸ト云御劍ヲゾ被下ケル、

をいみじきことに時の人いひさはぐめりしに、その子、この比〇正慶院の執權にて資名といふ、又大納言になりぬ、

〔薩戒記〕應永卅三年四月十二日丙子、日野中納言義資、院(後小松)執權、送使者云、〇下略

〔公卿補任〕後土御門寛正七年丙戌〇文正元年

權大納言從一位藤勝光三十八、院(後花園)執權、

〔大江俊矩公私雜日記〕文化十五年戊寅〇文政元年、

院〇光格司 執權 花山院大納言家厚卿

侍者判官代

〔名目抄〕院中判官代(ハングワンダイ)五位

〔拾芥抄〕中末院司 判官代五位、或四位、六位、

〔西宮記〕臨時五一院宮事

上皇脱屣之後、〇中略五位藏人爲侍者、六位藏人爲判官代、〇中略亭子院〇宇多出家時、侍者、判官代稱番頭、

〔職原抄〕後附院廳

判官代諸大夫任之〇中略 代字限院中者也

〔禁秘御抄〕中藏人事

諸院宮藏人、判官代也、凡補藏人、道有淺深、〇中略

一第四院藏人幷母儀藏人〇中略 第七所々藏人判官代

〔禁秘御抄〕中藏人所雜色

雖爲諸院宮判官代藏人、不可著指貫、只狩袴體也、

〔有職問答〕一一院判官代主典代事代ノ字ハ、院ト宮中トヲ分タンタメ也、

一後宇多院〔略〇中〕

執權　吉田大納言家〔經長〕　吉田大納言家〔定房〕〔中略〕〇

一伏見院〔略〇中〕

執權　二條大納言家〔賴親〕　中御門中納言家〔爲行〕　平中納言家〔經親〕〔中略〕〇

一後伏見院〔略〇中〕

執權　日野大納言家〔俊光〕　二條大納言家〔賴藤〕　日野大納言家〔是補〕　日野大納言家〔資名〕〔中略〕〇

一花園院〔略〇中〕

執權　坊城前中納言家〔定資〕　勸修寺前大納言家〔經顯〕〔中略〕〇

一光嚴院〔略〇中〕

執權　勸修寺前大納言家〔經顯〕〔中略〕〇

一光明院〔略〇中〕

執權　勸修寺前大納言家〔經顯〕　日野前中納言家〔教光〕〔中略〕〇

一後光嚴院〔略〇中〕

執權　日野中納言家〔忠光〕〔中略〕〇

一後圓融院〔略〇中〕

執權　日野大納言家〔資康〕　勸修寺中納言家〔經重〕　日野大納言家〔略〇中〕

一後小松院〔略〇中〕

執權　一位大納言〔重光卿〕　左衛門督〔豐光卿〕　權大納言〔有光卿〕　權中納言〔義資卿〕　權中納言〔盛光卿〕　權中納言〔秀光卿、改二宗秀一、〕〔以上次第不分明〕

〔增鏡十六久米のさら山〕さても日野大納言俊光といひしは、文保のころ、はじめて大納言になりにし

十五年〈戊寅○文政元年〉

院〈○光格〉司　執事　鷹司右大臣政通公〈○中略〉　別當　庭田中納言重能卿　四辻中納言公説卿

坊城頭辨俊明朝臣　　櫛笥少將隆起朝臣　　豐岡右兵衞佐治資朝臣

文政七年十月廿二日辛巳、院〈○光格〉司回覽之切紙、自二一﨟一有二傳達一、翌日令レ返二却柳原家一了、

文政七年十月十五日

有言朝臣

爲二別當一

右院宣

隆光奉

〔名目抄〕院〈○中略〉執權〈シッケン〉〈公卿院司補之、近代事也、〉

〔葉黄記〕寛元四年正月廿九日己未、今日有二讓國事一、〈○後嵯峨〉予〈○藤原定嗣〉補二院司一、可レ奉二行萬事一之由兼有二勅定一使、是可レ謂二執事一歟、然而先例、或他人雖レ爲二執事一、器量之者一人、又奉二執權一、今此儀也、以二不肖身一應二此撰一、雖レ知二家之餘慶一、太以過二涯分一、

〔古今著聞集〕〈十五宿執〉前中納言定嗣卿、和漢の才先祖にもはぢざりければ、寛元四年の脱屣〈○後嵯峨〉のはじめより仙洞の執權を承給て、殊に淸廉のきこえ有ける程に、〈○下略〉

〔洞院家記〕〈九〉一後深草院〈○中略〉

執權　姉小路大納言家〈顯朝〉　吉田中納言家〈經俊〉　平中納言家〈時繼〉　坊門中納言家〈忠世〉

中御門大納言家〈經任〉　中御門中納言家〈爲正〉〈○中略〉

一龜山院〈○中略〉

執權、中御門大納言家〈經任〉　吉田大納言家〈經長〉　二條大納言家〈資□〉〈○中略〉

已、房名可補院(○後嵯峨)年預云々、先可聽昇殿歟之由、粗和談了、可然之由勅定、且就保安顯輔例申入之、(予於御前書之、進御所了、)

廿九日己未、今日有讓國(○後嵯峨)事、(○中略)一紙　高檀紙(折紙)

別當　權大納言藤原朝臣(公相)(御廐別當)　權大納言源朝臣(顯定)(執事)　參議藤原朝臣(○定嗣)　雅家朝臣　顯朝朝臣　房名朝臣(年預)　御廐別當爲執事上臈例、保安(○鳥羽)通季卿爲御廐別當、實行卿爲執事之例也、

〔公卿補任 後深草〕寶治二年(戊申)

非參議從三位藤房名　寛元四正廿九日、補院年預別當、

〔洞院家記 九〕正安三年正月廿一日、(伊綱記)讓位、今夜被補院(○後伏見)司等、(新院院司被補事)

院司　別當　西園寺大納言(公顯)(執事)　藤中納言(光後)　西園寺宰相中將(兼季)　實香朝臣(頭左中將)　定資朝臣(右中辨)

廿二日癸亥、是日被加補新院院司、(新院院司加補事)

加補院司　別當　前右大臣(公衡)　洞院大納言(實一)　土御門源大納言(通重)　太宰權帥(爲方)　花山院中納言(家雅)　左衛門督　別當(頼藤)　花山院三位中將(家定)　雅俊朝臣(右大辨)　定房朝臣(左中辨)

〔看聞日記〕永享四年十二月九日、今夜伊勢奉幣、(御元服由奉幣也)上卿室町殿(足利義教)、(仙洞御元服之時、鹿苑院殿上卿也、其佳例云々、)牛車輦車宣下、弊學院別當院(○後小松)大別當等、被補大別當事者、仙洞(○後小松)未無其沙汰之處、室町殿被所望申、被尋先例之間、崇光院之大別當今出川右大臣(實直公)被補之由、院廳定直注進申、仍其例云々、

〔公卿補任 後土御門〕寛正六年(乙酉)

准三后左大臣從一位源義政　三十一(中略)院(後花園)執事

〔大江俊矩公私雜日記〕文化七年(庚午)

院(○後櫻町)司　執事二條左大臣治孝公　別當六條大納言有庸卿(○中略)　別當正親町右衛門督實光卿　別當庭田宰相中將重能卿　四位別當鷲尾頭中將隆純朝臣　四位別當岩倉中將具集朝臣　四位別當梅小路勘解由次官定肖朝臣

逐年繁榮、

〔中右記〕寬治元年十二月廿四日壬寅、今夜初有院〇白河御佛名、其次被補別當二人、右宰相中將基忠、右少將宗通、
二年正月十九日丁卯、初有行幸、院〇白河大炊殿、〇中略次勸賞　正二位藤家忠院別當　從二位源家賢同　藤公實同　正三位藤基忠同　藤經實同　藤通俊同　江匡房同　藤仲實同　正四位上藤師信同〇中略　從四位下藤宗通院別當　高爲章同

〔愚管抄四〕鳥羽院踐祚の時、御母は實季のむすめなり、東宮大夫公實は外舅にて、攝籙の心ありて、〇中略白河院にせめ申けり、〇中略其時の御うしろみ、さうなき院別當にて俊明〇源大納言ありければ、東帶を正しくとりさうぞきてまゐれりける、〇下略

〔本朝世紀〕康和元年十一月三日辛未、權中納言季仲卿、權左中辨能俊朝臣、補院〇白河別當、
仁平三年五月廿八日丙辰、今日左大臣〇藤原賴長被補院〇鳥羽別當、遣判官代散位平朝臣時忠、於直廬仰之云々、御堂〇藤原道長爲冷泉院、一條院別當、後二條關白〇藤原師通爲白川院別當、皆執政之時被補云云、

〔平家物語二〕西光がきられの事
入道〇平清盛さてそれをば法皇〇後白河えろし召れたるか、えさいにや及び候、えつじの別當なりちか卿の軍兵もよほされ候しにも、院宣とてこそめされしか、〇下略

〔平治物語二〕信賴降參事幷最後事
越後中將成親朝臣ハ、嶋摺ノ直垂ノ上ニ繩付テ、六波羅ノ馬屋ノ前ニ被引居テ御座ケリ、既ニ死罪ニ定タリシヲ、重盛今度ノ勳功ノ賞ニ申替テ預リ給ケル也、此中將、院〇後白河ノ御氣色能人ニテ、院中ノ事被申沙汰ケルガ、重盛出仕ノ度每ニ被芳心ケル故也トナン、

〔業黃記〕寬元四年正月廿五日乙卯、參內、申條々事、院(後嵯峨)始事也　廳年預、如元可爲資俊云々、　廿七日丁

別當
執事
年預

〔職原抄後附〕院廳

大別當(大臣公卿清華之人任之)　執事(名家之人任之)　年預(同前)　判官代(諸大夫任之)　主典代(廳官宿老任之)　官人(云廳官)　代字限院中者也、宮宮者宮司等在之、

〔名目抄院中〕執事(シツジ)別當(ベツタウ)(號大別當、大略大臣之所補也、)　年預(ネンヨ)(公卿及殿上人、依器用仰之、預字、ニヨト可云也、連聲也、)

〔拾芥抄中末院司〕院司　別當　執事　年預

〔西宮記臨時五〕一院宮事

上皇脫屣之後、〇中略公卿外、頭爲別當、〇中略亭子院〇宇多出家時、〇中略以僧綱加院司上爲別當、

〔三代實錄清和二〕貞觀元年四月廿三日戊申、大納言正三位兼行民部卿陸奧出羽按察使安倍朝臣安仁薨、〇中略明年〇承和二年遷刑部大輔、有勅侍奉太上天皇〇嵯峨於嵯峨院、太上天皇甚親任、以安仁爲院別當、事無大小委決於安仁、先是院事擁滯、男女多愁、安仁旬月之間、平理辨行、太上天皇深嘉之、〇中略三年授從四位下、五年拜參議、爲刑部卿、太上天皇語安仁曰、汝宜早掌樞機之職、何久行山院之事、七年爲左大辨、停別當職、其後院中庶事不理、有勅復爲別當、辨官之政拂曉而入、安仁退衙之後、必詣嵯峨、往還之程、原野數里、朝廷恤其繁劇、爲擇簡之職、九年遷大藏卿、

〔三代實錄陽成三十〕元慶元年閏二月十五日丁亥、太上天皇〇淸和宮別當右大辨從四位下藤原朝臣山蔭上奏今上言、〇下略

〔小右記〕寬弘二年二月四日壬午、院〇花山以公誠朝臣、被仰別當判官代藏人昇殿者等事、令奏恐本由、卽仰下公誠朝臣了、

〔尊卑分脈藤原氏十一〕公成――實季(院(白河)別當)――公實(一院(白河)別當)

〔續本朝通鑑三十二堀河〕寬治五年十二月、正二位大納言兼陸奧出羽按察使藤實季逝、歲五十四、(初實季少懲、故昇進稽滯、以上皇外舅、故延久以來、頻歷顯要、以掌樞機、至亞相上首、有任槐之望、然未遂其志、及上皇(白河)踐位、兼院別當、威重權大、至此人皆歎其不壽、其子權中納言公實相次爲院別當、家門)

古事類苑

官位部二十

令制官職十六

院司

院司ハ太上天皇ニ奉事スル官僚ナリ、嵯峨天皇遜位ノ後、嵯峨院ニ御シ、刑部大輔安倍朝臣安仁ヲシテ、院事ヲ掌ラシメ、院別當ト爲スヲ以テ始トス、其後、村上天皇ノ時、朱雀上皇ノ爲ニ、更ニ判官代、主典代、仕所、御隨身等ノ職ヲ置ク、其判官代、主典代ハ、院司ニ限レル稱ニシテ、以テ諸司ニ別テリ、又藏人、召次所、武者所等アリ、凡テ讓位以後ハ藏人ノ五位ヲ以テ侍者ト爲シ、六位ヲ判官代ト爲シ、其餘ノ藏人ヲ院ノ藏人ト爲シ、出納ヲ主典代ト爲シ、瀧口ヲ武者所ト爲ス、又隨身ニハ左右將曹、左右番長、左右近衞等ヲ以テシ、廳官ニハ、公文、院掌等ノ職員アリ、又文殿ハ記錄所ヲ摸シテ、衆、開闔等ノ職員アリ、白河上皇院中ニ政ヲ聽クニ及ビ、上下北面ヲ置キ、諸國ノ武士ヲ以テ之ニ充ツ、後鳥羽上皇ノ時ニハ、北面ノ外ニ西面ヲ置ク、又院傳奏アリ、後白河法皇ノ時ニ始テ置ク所ニシテ、臣下ノ奏請ヲ傳フルコトヲ掌ル、又評定衆アリ、參衆アリ、並ニ院廳ノ政ニ參與スルモノナリ、

女院ニモ亦別當、判官代、主典代等ノ職員アリ、後院ハ原ト太上天皇ノ住マセタマフ宮殿ノ謂ニシテ、初ハ汎ク皇太后、太皇太后等ニモ稱ヘシヲ、後ニハ天皇讓位ノ後ニ住マセタマハン爲ニ、豫メ備フル所ノ宮殿ニノミ云ヘリ、

名稱

〔名目抄院中〕院司（ヰムシ）公卿院司四位院司アリ、大別當已下之總官也、

子ニテ極メタル兵也ケレバ、公モ其道ニ仕ハセ給ヒ、世ニモ被ㇾ恐テ士有ケル、其レガ其ノ時ニ候ケルニ、春宮御弓トヒキメトヲ給ヒテ、彼ノ辰巳ノ檐ニ有ル狐射ヨト仰セ給ケレバ、〇中略即チ狐ノ胸ニ射宛テツ、〇中略宮極ク感ゼサセ給テ、忽ニ主馬ノ御馬ヲ召テ賴光ニ給フ、

〔職原抄下〕春宮坊　被官監署等又撰ㇾ人、〇中略主馬首兼ニ馬助一例、(藤有紀)無官者爲ニ主馬首一例、(藤時職)

〔職原抄下〕主馬署　首一人　佑　令史〇中略　主殿主馬者、重代侍等所ㇾ望補一也、

〔有職問答五〕一主馬判官事

春宮方の官と被ㇾ仰出ㇾ候き、(勿論候)主馬判官と兩官と見え候處に、平家の侍に主馬判官盛久と申仁候(是ハ推量候ニ、侍ニテ使ノ宣旨ヲ蒙タル者ニテ候ハンズルニ、其仁又主馬ノ首ニ任タル間、兼官ノ心ト覺申候、)ける由、世話に申傳候、其分候はゞ、一人して兩官をかねたる號にて候哉、不審に存候、(不ㇾ可ㇾ有候)判官の事は、必使宣旨を蒙たる人を申と覺悟仕候如何、但東宮坊にても、使宣旨事を被ㇾ成候事候哉、然者いかなる事の使にて宣旨を蒙候哉、巨細被ㇾ仰出ㇾ度候、

〔兵範記〕仁安元年十月十日庚辰、有ニ立太子一事、〇高倉　除目〇中略　主馬首平盛國　左衞門尉延尉

〔平治物語二〕待賢門軍附信賴落事

大内へ向フ人々ニハ、大將軍ハ左衞門佐重盛、〇中略　侍ニハ筑後守家貞子息左衞門尉貞能、主馬判官盛國、〇下略

〔玉海〕治承二年十二月十五日甲辰、此日有ニ冊命立太子一事、〇安徳〇中略　坊官除目〇中略　主馬署　首

正六位上平朝臣盛綱(兼)

〔大江俊矩記〕文化六年三月二十四日甲申、立太子節會也、(儲君惠仁親王、仁孝、御歲十、)〇中略　坊官除目〇中略　主馬署(下北面姉小路右衞門大尉)　首　大石弘敬

〔令集解東宮職員六〕朱云、乘馬、謂猶文云也、更無別意者、乘馬者、此亦大司馬分受者、常此司飼養耳、穴云、主馬署飼丁者可飼也、私案調習之事可放馬寮也、

〔令義解官位一〕從六位下〇中　主馬首　少初位下〇中　主馬令史

〔續日本後紀仁明十二〕承和九年七月丙辰、廢皇太子、〇中　恒貞　戊午、主馬首正六位下坂上大宿禰貞繼爲能登權掾、

〔拾芥抄官位唐名中本〕主馬首廐牧令　令史廐牧令史

〔唐六典僕寺二十七〕廐牧署、令一人、從八品下、
漢詹事屬官、有太子廐長丞、後漢太子少傅屬官、有太子廐長一人、秩四百石、主車馬、魏晉因之、齊職儀云、東宮屬官有內廐局外廐局、梁陳因之、後魏有太子廐長、從九品下、隋太子僕寺、統廐牧署令丞、皇朝因之、〇中略
廐牧署令丞、掌車馬閑牧畜之事、

〔延喜式春宮四十三〕凡二月上申、十一月亦同　奉春日祭幣帛、〇中略　主馬署官人令奉御馬二疋、與使共參於社下、
御馬毛付、舍人名簿、前一日進坊、

〔東宮年中行事八月〕十八日こまひきの事
こむ衞づかさ一人、ちよくしとして、ひきわけの御むまをあひぐしてまいる、〇中略　御らんののち、ゑゆめのみまやにつかはす、

〔今昔物語二十五〕春宮大進源賴光朝臣射狐語第六
今昔、三條院ノ天皇ノ春宮ニテ御坐ケル時、東三條ニ御坐ケルニ、寢殿ノ南面ニ春宮行カセ給ヒケルニ、西ノ透渡殿ニ殿上人二三人許候ケリ、而ル間、辰巳ノ方ナル御堂ノ西ノ檐ニ、狐ノ出來テ臥シ丸ビテ臥セリケルニ、源賴光朝臣ノ春宮大進ニ候ケルニ、此レハ多田ノ滿仲入道ノ

主工署

〔令義解 官位一〕從六位 階〇下 主漿首　少初位 階〇下 主漿令史

〔令義解 東宮職員一〕主工署

首一人、掌木土營作、及銅鐵雜作事、令史一人、工部六人、使部六人、直丁一人、駈使丁六十人、

〔令集解 東宮職員六〕主工署 古記云、掌木工司、土工司、鍛冶司一、(一恐誤字)答、銅鐵雜器者、既成器物也、更不雜造也、(中略)穴云、銅鐵雜作、謂器及兵器並釣、爲古令代雜器之字、爲雜作故也、但此司者不取材、然則用木工寮材木耳、

〔令義解 官位一〕從六位 階〇下 主工首　少初位 階〇下 主工令史

〔續日本後紀 十二仁明〕承和九年七月丙辰、廢皇太子、〇恒貞 戊午、主工首正六位上上毛野朝臣貞織爲對馬權守、

主兵署

〔令義解 東宮職員一〕主兵署

首一人、掌兵器儀仗之屬、令史一人、使部六人、直丁一人、

〔令集解 東宮職員六〕穴云、兵器儀仗者、主工署所造耳、非兵庫之兵、但其用不見、然思量非常備耳、其皇太子隨身、威儀兵器儀仗等者、自然兵庫并五衛府備耳、非署之兵器也、朱云、兵器儀仗者、未知何時可用、答用時不見、猶爲非常設耳、而儀仗何用、此亦有用時耳、

〔令義解 官位一〕從六位 階〇下 主兵首　少初位 階〇下 主兵令史

主馬署

〔倭名類聚抄 五官名〕署　職員令云、〇中略 主馬署、美古乃美末乃豆加佐

〇按ズルニ、續日本紀延曆元年閏正月紀ニ、從五位下多治比眞人三上ヲ主馬頭ト爲ストアルハ、馬寮ノ頭ニシテ、東宮坊被管ノ主馬署ノ首ニアラズ、此他日本後紀ニ載セタル主馬頭、主馬權助、及ビ類聚三代格延曆十七年ノ官符中ニ載セタル主馬寮ノ如キ亦然リ、

〔令義解 東宮職員一〕主馬署

首一人、掌供進乘馬鞍具之屬、令史一人、馬部十人、使部十人、直丁一人、

凡東宮鎭魂日、(中略)坊官二人(各一人進暗)行列、主殿署官人二人秉燭相從、

〔東宮年中行事 五月〕この日(○四日)しゆでんしよのくわむ人、こでんおよび所々にしやうぶをふく、

〔東宮年中行事 七月〕おなじき日(○七日)きつかうてんの事

この日のゆふべに、ぎやうじのくら人(中略)にはにひろむしろ三枚をしきて、しゆでんのかみのしもべこれをしく、そのうへにつくゑをたて、まつりの物どもをそなふ、

〔官職秘抄 下〕春宮坊　被官監署等又撰人、(中略)主殿首兼主殿助例(藤忠公)

〔職原抄 下〕主殿署(唐名典設局云々)　首一人　佑　令史(中略)　主殿主馬者、重代侍等所望補也、

〔兵範記〕仁安元年十月十日庚辰、有立太子事、(○高倉)　除目(中略)　主殿首藤原盛家

〔玉海〕治承二年十二月十五日甲辰、此日有冊命立太子事、(○安徳)(中略)　坊官除目(中略)　主殿署首

正六位上惟宗朝臣章資

〔大江俊矩記〕文化六年三月二十四日甲申、立太子節會也、(儲君惠仁親王、仁孝御歲十、)(○中略)　坊官除目(○中略)　主殿署(瀧口甲斐守世繼左衞門少尉)　首　藤原重隣

〔延喜式 四十三 春宮〕凡四月十一日、請騎射節主殿署今良當色料、調布一端、紺布四端二丈、解文申辨官、

〔令義解 一 東宮職員〕主書署

首一人、(掌供進書藥筆硯之屬)令史一人、使部六人、直丁一人、

〔令集解 六 東宮職員〕穴云、醫疾令合藥供御條云、餌藥之日、侍醫先嘗、次內藥正嘗、次中務卿嘗、然後進御、其中宮及東宮准此者、未知主書署何時供進哉、答同共進退也、

〔令義解 一 官位〕從六位下(○階)　主書首　少初位下(○階)　主書令史

〔令義解 一 東宮職員〕主漿署(○漿原作醬、今改、)

首一人、(掌饘粥漿水、及菓子之屬)令史一人、水部十人、使部六人、直丁一人、駈使丁六人、

主書署

主漿署

と候、かみとよむべく候哉、役は何を勤申候哉、巨細被仰出度候、宮内省ノ下主殿司ト同事候、是ハ春宮ノ御方ノトノモリニテ候也、

〔令義解一東宮職員〕主殿署

首一人、掌湯沐、燈燭、洒掃、舖設事、令史一人、殿掃部廿人、使部六人、直丁一人、駈使丁十人、

〔令義解一官位〕從六位下〇下主殿首　少初位下〇下主殿令史

〔續日本後紀十二仁明〕承和九年七月丙辰、廢皇太子、〇恒貞　戊午、主殿首正六位下淡海眞人豐守爲大隅權掾、

〔拾芥抄中本官位唐名〕主殿首典設郎　令史典設令史

〔唐六典二十六左右春坊〕典設局、典設郎四人、從六品下、

南齊有齋居局齋居庫丞一人、梁有齋內局、各置有司、以承其事、陳因之、北齊門下坊有齋司局、有太子齋帥司閣帥各二人、太子齋帥正八品下、隋門下坊領齋帥局、有齋帥四人、正七品下、皇朝因之、龍朔二年、改太子齋帥爲太子典設郎、

典設郎、掌湯沐灑掃鋪陳之事、

〔延喜式四十三春宮〕元日遲明、二日准之、主殿署立火爐於殿庭、

朝賀儀

是日設御次於豐樂院、〇中略主殿署設輦於南階下、舍人六人、相分隨輦前後、東宮駕輦、進一人執翳、主藏佑已上一人執履、若微雨、主殿令史以上一人執大笠、

同日二日〇正月受群官賀儀

當日遲明、左右兵衞各屯門外、主殿署洒掃前殿、

凡正月上卯早旦、〇中略主殿署官人率舍人等舁机、參入自南門、安庭中罷出、坊官率品官舍人等各捧杖、東西相分入立庭中、

主藏監

主殿署

ゑゆせんけむ、ぐぶの人々のれうに、きやうをまうく、

〔官職秘抄下〕春宮坊　被官監署等又撰人、主膳正兼主水正例、藤範倫

〔職原抄下〕主膳監唐名牧署　正一人　佑　令史○中略　主膳者、膳部之家任之歟、但近代不必任之、內膳司、即兼知坊中御膳之故歟、

〔三代實錄十七清和〕貞觀十二年三月廿日壬午、散位從五位上菅原朝臣峯嗣卒、○中略十年○天具為春宮坊主膳正、

〔兵範記〕仁安元年十月十日庚辰、有立太子○高倉事、○中略除目○中略　主膳監中原俊康文章生元侍所司

〔玉海〕治承二年十二月十五日甲辰、此日有冊命立太子○安德事、○中略　坊官除目○中略　主膳監　正六位上藤原朝臣盛光

〔大江俊矩記〕文化六年三月二十四日甲申、立太子節會也、儲君惠仁親王、(仁孝)御歲十、○中略　坊官除目○中略　主膳監　府隨身土山隼人佑　正、源武貞

〔令義解一東宮職員〕主藏監

正一人、掌金玉寶器、錦綾雜綵、氈褥衣服、玩好之屬、佑一人、令史一人、藏部廿人、使部六人、直丁一人、駈使丁二人、

〔令義解一官位〕從六位○上階主藏正　正八位○下階主藏佑　少初位○上階主藏令史

〔續日本後紀十二仁明〕承和九年七月丙辰、廢皇太子○恒貞戊午、主藏正正七位上坂上大宿禰當岑為豐後權掾、

〔倭名類聚抄五官名〕署　職員令云、主殿署美古乃美夜乃止乃毛里乃豆加佐

〔有職問答三〕一主殿官

宮內省の下に其はとのもんと訓候、又是をすてんと點候、兩所差異如何候哉、是に下の字は首（ニテモスユテン兩樣同前讀候ハヾ、トノモリ同事候、）

〔令義解 官位 一〕従六位 上階○主膳正　正八位 下階○主膳佑　少初位 上階○主膳令史

〔續日本後紀 仁明 十二〕承和九年七月丙辰、廢皇太子、○恒貞　戊午、主膳正正六位上丹墀眞人綱足爲薩摩權掾、

〔拾芥抄 中本 官位唐名〕主膳正 典膳郎　佑 典膳丞　令史 典膳令史

〔唐六典 二十六 左右春坊〕典膳局、典膳郎二人、正六品上、

自漢以來、並有太子倉官、北齊門下坊、始別置典膳局、有監丞各二人、監六品下、隋改爲七品下、皇朝因之、龍朔二年、改爲太子典膳郎、○中略

典膳郎、掌進膳嘗食之事、丞爲之貳、毎夕局官、執備更直、

〔令集解 職員 六〕主膳監(中略)大同二年八月十二日官符云、應併省春宮職員事、右被右大臣宣偁、奉勅、分官設職、雖載令條、隨時制宜、非無舊事、今主○書、主○漿、主○兵等署、職務少事、官人多員、宜主書主兵併主殿、主漿併主膳、毎監加置令史一員、上○以又見三代格本條

○按ズルニ、本文諸司併合ノ事ハ、特ニ此條ニノミ載セテ、主書以下三司ノ下ニハ、一々錄セズ、

〔儀式 六〕元日御豐樂院儀

内膳司、預辨供皇帝皇后御饌、主膳監供皇太子饌、

〔延喜式 四十三 春宮〕朝賀儀

是日設御次於豐樂院、○中略 主膳入就內膳、內膳供御膳、主膳隨卽奉膳、諸節幷毎月一日、五日、十一日、十六日、廿一日、廿六日、參入內裏、儀亦如之、其二日東宮拜中宮儀、見中宮式、

凡東宮鎭魂日、所司裝束宮內省同御、戌剋主膳監官人二人、佑已上一人、令史一人、率膳部八人舁御膳高机二脚、

〔東宮年中行事 七月〕おなじき日○七日すせむのかみ、供御せちくをまいらす事、

〔東宮年中行事 十二月〕えものむまの日みくしあげの事

今昔、三條ノ院ノ天皇ノ春宮ニテ御マシケル時ニ、太刀帶ノ陣ニ、常ニ來テ魚賣ル女有ケリ、太刀帶共、此レヲ買セテ食フニ、味ヒノ美カリケレバ、此レヲ役ト持成シテ菜料ニ好ミケリ、

〔山槐記〕治承三年正月十日己巳、今日被仰下帶刀給所等云々、〇中略

帶刀給所　院　上西門院　八條院　中宮　本宮　關白　太政大臣　左大臣　右大臣　内大臣　大夫　權大夫　二位　二位者、中宮母儀也、

大宮（近衛院后、公能公女、）　皇太后宮（法皇后、同居儀久絶、公能公女、）　女御（同前、公教公女、）　齋宮（當今宮、故公重朝臣孫、）　齋院（當今宮、左兵衛督成範孫、）　前齋院（法皇宮、高倉三位腹、）　前齋院（鳥羽院宮、春日殿腹、）

已上不被給之、皇后宮不御坐也、

前太政大臣殿、不令入此例、依前官歟、

〔倭名類聚抄五官名〕監　職員令云、主膳監、（美古乃美夜乃加之波天乃豆加佐）

〔有職問答三〕一主膳監

すせんと訓も候、玄ゆせんとある本（此分候）も候、両說何れ能候哉、役は何事を勤候哉、（内膳ト同、春宮ノ御膳ノコトテ是ハツカサドル也、）

〔令義解一東宮職員〕主膳監

正一人、（掌進食先嘗、及諸飲膳事、）佑一人、令史一人、膳部六十人、使部六人、直丁一人、駈使丁廿人、

〔令集解六東宮職員〕古記云、兼炊司酒司、〇中略穴云、膳司以下諸司雜物年料自大司分納耳、一端見祿令也、私祿令、凡食封者、一品八百戸條云、東宮一年雜用料、絁三百疋、綿五百屯、絲五百絇、布一千端、鍬千口、鐵五百廷者、穴稱見祿令此歟、跡云、飲膳、謂自大司分遣酒菓等也、朱云、進食先嘗、及諸飲膳者、未知件物從何處可來物、又以下諸司之物、又何處可出物何、若東宮一年雜用料有給物、然則此物充用諸雜用何、答諸司物、皆自大司可分受、但一年雜用料所給、此外別所給者未知、而者支度一年用物、一度可受乎、爲當月別一度可受哉何、私心月別受歟、未知而何、

清都

〔拾芥抄中末宮城〕諸司厨町

帶刀町一條南、堀川東、

〔延喜式四十三春宮〕凡帶刀舍人卅人節服、紺襖卅領、黃袍卅領料、紺絁十五疋、黃絁十五疋、帛卅疋、大衣料紺細布十五端、綿百五十屯、並申官受大藏省、

凡二月十日、啓帶刀舍人春夏祿文、人別絹二疋、調布三端、八月十日秋冬祿文、加綿二屯、並用坊物、同月二日春秋料鹽、申官請受、各六石

凡帶刀舍人、步射騎射各十人、亮定手番、訖設饗給祿、步射人別衾一條、長加袷小袖衣一領、騎射半臂汗衫各一領、長加單小掛衣一領、亮若有障、大夫代之、

〔類聚國史八十七刑法〕延曆十二年八月丁卯、是夜內舍人山邊眞人春日、春宮坊帶刀舍人紀朝臣國、共謀殺帶刀舍人佐伯宿禰成人、明日事覺、春日等即逃隱、帝大怒、募求天下、後伊豫國捕之以聞、遣左衞士佐從五位上巨勢朝臣島人格殺、或曰、春日等承皇太子密旨、

〔日本紀略二朱雀〕天慶九年正月廿四日丙辰、內裏召諸衞步射已上、東宮帶刀等、有賭射事、

〔榮花物語十三木綿四手〕八月〇寬仁元年九日、東宮〇後朱雀たゝせ給ひぬ、はじめの東宮をば、小一條院ときこえさす、〇中略宮司帶刀などは、我も〳〵ときをひ給へど、大殿えらびなさせ給つ、よろづあなめでたとみえさせ給ふ、帶刀ども、いとものきよき人のことも、さにもなさせ給、〇中略前春宮の帶刀どもゝ、てにするゐたるたかをそらしたるなどいふ樣に思ふべし、

〔榮花物語二十三駒くらべ〕おなじ月〇萬壽元年九月の十九日、駒くらべせさせ給、〇中略このとの〇藤原賴通のとねりどもかた人して、東宮の帶刀どもあひまじりて、騎射いさせ給、

〔今昔物語三十一〕太刀帶陣賣魚嫗語第卅一

籠取(コトリ)二人　平政業　上日五　夜　平貞俊　上日六十三　夜廿二
籠取腋(コトリワキ)二人　卜部仲道　上日五　夜　源康資　上日八十　夜廿三
三番二人　藤原宗久　上日百五十　夜五十一　藤原光綱　上日七十五　夜廿一
歩射籠取二人　平種遠　上日七十一　夜廿　大江業貞　上日五十二　夜廿一
歩射腋二人　中原家方　上日五十六　夜廿二　紀盛久　上日百五十六　夜六十三
連(ツレ)五人　藤原行家　上日八十一　夜卅　源繁　上日七十五　夜廿九　藤原清能　上日卅一　夜五　平家光　上日十　夜三　藤原清永　上日八　夜廿一

仁安三年三月九日　無署人、書垂也、故實也、

〔山槐記〕治承三年十二月十一日甲午、東宮昇殿藏人帶刀等被仰下事

帶刀　源康資(木島大夫尉康綱子)　紀業兼(同腋民部大夫重宗法師子)　藤原時頼(連右兵衞尉次形子)　藤原時能(轉木島美乃守則清子)　藤原景政(轉同腋宗政子)

解却帶刀三人　能成子　遠業子、信景子

〔尊卑分脈四源氏〕爲義——義賢(帶刀長號帶刀先生)

〔平治物語二〕待賢門軍附信頼落事

角申ハ清和天皇九代後胤、左馬頭義朝嫡子、鎌倉惡源太義平ト申者也、生年十五歲、武藏大藏ノ軍ノ大將トシテ、伯父帶刀先生義賢ヲ討ショリ以來、度々ノ合戰ニ、一度モ不覺ノ名ヲトラズ、〇下略

〔源平盛衰記二十六〕木曾謀叛事

信濃國安曇郡ニ木曾ト云山里アリ、彼所ノ住人ニ木曾冠者義仲ト云ハ、故六條判官爲義ガ孫、帶刀先生義賢ニハ次男也、

〔文化八年東宮御元服記貞〕帶刀　秦武逸　藤原祐清　藤原信賀　藤原重興　紀宗昌　身人部

蔭子正六位上平朝臣兼衡　蔭孫正六位上源朝臣光經

正二位行權中納言兼大夫藤原朝臣兼雅宣、奉、令件等人、宜、爲帶刀長者、

治承三年正月廿三日　正四位下行右近衞權少將兼權亮伊豫權介平朝臣本

蔭子正六位上藤原朝臣能基　正六位上大江朝臣業資　正六位上藤原朝臣親能　正六位上橘朝臣康清　正六位上藤原朝臣景政

蔭孫正六位上源朝臣季景　正六位上源朝臣廣吉　正六位上中原朝臣盛房　正六位上藤原朝臣信實　正六位上惟宗朝臣信家　正六位上藤原朝臣俊政　正六位上宮道朝臣康基　正六位上藤原朝臣忠弘

正二位行權中納言兼大夫藤原朝臣○此間文闕令宜、爲帶刀者、

治承三年正月廿三日　正四位下行右近衞權少將兼權亮伊豫權介平朝臣本

已上依蔭次第書之、座次可在御定云々、

〔朝野群載九功勞〕前坊帶刀正六位上藤原朝臣永守誠惶誠恐謹言

請、特蒙天恩、因准先例、依年勞第一勞、拜任左右兵衞尉中他官替狀、

右永守謹撿案內、康平七年、儲闈之時、早補帶刀、夙夜之勤、等倫獨超、於是坊官除目之日、被勘勞帳之處、藤原爲季、已隔五月之下臈也、謂其次第、勞以當仁、望請天恩、因准先例、依年勞第一勞、被拜任件官、彌勵警營之節、永守誠惶誠恐謹言、

延久三年正月廿日　前坊帶刀正六位上藤原朝臣永守

〔兵範記〕仁安三年三月九日辛未

帶刀上日立坊日以後

長二人　平維長　上日十　夜　源重經　上日廿　夜

之、
此定二通、不依平只任本所次第書之、見保延光房朝臣記云々、
春宮坊試擬帶刀騎射交名　藤原能基　大江業資　藤原信實　源則能　藤原高清　源廣吉
橘康清　藤原俊政
治承三年正月廿三日　正四位下行右近衛權少將兼權亮伊豫權介平朝臣
勅使參議正三位行右近衛權中將兼備中權守藤原朝臣
此定二通、次第如前、但長在上、
春宮坊試擬帶刀步射交名　平兼衡　源光經　中原盛房　藤原親能　宮道康基　惟宗信家
藤原忠弘　藤原景政　源季景
治承三年正月廿三日　正四位下行右近衛權少將兼權亮伊豫權介平朝臣
勅使參議正三位行右近衛權中將兼備中權守藤原朝臣
書畢令屬取勅使署、次取權亮署之後、屬返授大進、大進封之又授屬、屬獻勅使、勅使封上書名上字返、仰騎射步射歷名各一通付勅使奏聞、封人名一通付權亮、啓料五人、能基、業資、信實、康清、俊政、步射光經許射之、騎射等不馳馬、從者打破的過、光經初矢如引落前、乙矢又二三丈許射落、故不射歟、保延夜方、二放二中施武藝之高名云々、他帶刀等雖參入、固辭不射之、依不入手不可射之由申云々、此事不可然歟、每年恒例騎射者、入手之輩許可射、至于今日者、賜試皆悉可射也、然而不射云々、見物車如堵、事了勅使以下退出、〇註略次權亮大進二人著東宮廳、兼居机饗、一獻大屬成擧持參盃、史生取瓶子器、權亮召坊掌、二音坊掌參進立前庭、權□仰之、帶刀召せ先例帶□□仰云云、是又說歟□□□坊掌稱唯退、歸相率帶刀著闕腋垂細纓尾不帶劍、皆悉可列也、而長光經許參上、他人雖參入、扶持之輩、致縱横沙汰、甚進々、仍不致觸云々、參上、權亮仰云、兵仗給へ、先例兵給へト仰云々、是又一說歟、此後上蘂尾懸老懸、帶弓箭劒可列拜也、不觸此事權亮起座、〇註略大進等同起座、此後猶於空所列拜云々、今夜不參宮中、先例或參入申慶、或不然云々、不可申慶歟云々、今日不被始帶刀陣、件屋中宮廳東方獻造云々、堀河院跡、二條西也、于時皇居閑院、來月五日帶刀御覽日可如陣云々、

書様

蔭子正六位上源朝臣義忠

正二位行權大納言兼大夫藤原朝臣公實宣奉、令件人宜爲帶刀長者、

康和五年十月廿一日

從四位上行左近衞權少將兼權亮備前介藤原朝臣實隆奉

蔭子正六位上平朝臣清賢　正六位上橘朝臣頼兼　正六位上平朝臣盛行　正六位上平朝臣貞光　正六位上源朝臣忠時　正六位上藤原朝臣遠仲　正六位上亮橘朝臣宗賢　正六位上藤原朝臣盛通　正六位上源朝臣行政　蔭孫正六位上藤原朝臣則親　正六位上藤原朝臣時清

年月日　同前

正二位行權大納言兼大夫藤原朝臣公實宣奉、令件人等宜爲帶刀者、

依蔭次第書之、下廳令張本陣、以坊掌告廻云々、

〔山槐記〕治承三年正月廿三日壬午、有帶刀試云々、去年十二月十五日、立太子、(安德)今年正月十日、被定給所、後日大進光長來談曰、帶刀十七人名簿、略○註 持參內裏、授權亮光長云々、陰陽頭賀茂在憲朝臣勘申日時、覽大夫、覽之、此後可奏名簿之處、權亮早以奏聞、不覽大夫、光長件名簿可奏、并覽殿下之由示權亮、無承引氣、忽書便被尋申左大臣、使者歸來曰、尤可被奏聞、又可被覽殿下、以藏人被獻殿下、可無便、必可被持參、其後書馬場也者、其後奏聞者、付藏人右少辨光雅奏聞返給、持參關白殿、次被向右近馬場、所存者所見雖不憚、件名簿、權亮可被獻勅使宰相云々、賜大進可書分騎射步射歟、而權亮著馬場之時、不取之賜屬資成、勅使右宰相中將、實守、本儀左宰相中將實□可爲勅使、而去十九日、任中納言、仍改定、權亮維盛朝臣、大進光長、權大進經仲、殿上人右少將資時朝臣、右馬頭定輔、藏人大學助藤親能、文章生高階隆仲、陣頭兵庫頭範保、稱不可列座、請定之由、不著座、仍勤役者、隼人正清定等著座、申剋事始、先一獻、勸盃經仲、瓶子範保、騎射步射歷名、大進光長書

（鋪之、不敷、）庇母屋西壁立間懸斑幔、同北西引軟障、同北第一間敷高麗端帖一枚、其上施東京錦茵、爲勅使座、傍母屋西壁、鋪紫端帖三枚、爲亮進等座、（北上東面母屋）南邊同東庇敷同帖四枚、爲殿上人座、（東上北面）南庇鋪黃端帖、爲陣頭侍者著座、西廂敷屬已下座、座前居各饗饌、（總官等辨備）勅使參議左近中將源顯雅卿率宮司以下、戌剋向馬場、（件相公午上參內、次著馬場、依無人又歸參大內、先參本宮、率參由、予長頭辨、仍以頭辨告參宮也、）權亮實隆朝臣、大進顯隆、權大進仲遠、少進行盛、殿上人、藏人中宮大進爲隆、藏人左少將顯國、右少將家定、顯重、右兵衞佐通季、本宮藏人秦兼、長隆等、同以著座、次一獻、（初盃權大進仲季、瓶子陣頭織部正基紹、）次大進書騎射步射歷名各二通、大夫屬盛言取各一通、置勅使座前、又少屬定親取各一通、置亮座前、又次騎射者五人各揚馬、次勅使以下臨檻、此間坊掌舍人等懸的、（件的本府儲之、先々儲廳云々、）史生安倍宗重執騎射夾名簡、自馬場殿北趍出曾殿前而立、次舍人一人持胡床二脚、趍出並立史生前、次史生召第一者名々後就胡床、（前胡床、信簡、）次依次射之、（每試一人史生起居、）（如初、）騎射射了後、埒西頭立張皮懸的、（本府設之、今度張之張皮者云々、）次史生還入、執步射夾名簡、如初、趍出次第喚之、六人射了、勅使以下復本座、勅使加署於射手交名文各一通、隨身之參內、付職事令奏聞各一通、付權亮、參宮先覽大夫、次奏院云々、次可爲帶刀由被下令旨、次於廳給兵仗、

騎射書樣（依本所次第書之）

春宮坊　試擬帶刀騎射交名　平清實　橘賴兼　藤原盛通　平盛行　平貞光

康和五年十月廿一日　從四位上行左近衞權少將權亮藤原朝臣

勅使參議從三位行左近衞權中將源朝臣

春宮坊　試擬帶刀步射交名　源義忠（長、今日不參、）　源忠時　藤原時清　源行政　橘宗實　藤原則親　藤原遠仲

康和五年十月廿一日　判署同前

同廿一日、可爲帶刀之由被下令旨、

刀舍人等在前行、諸衞亦如常儀、

凡正月十七日射禮節、東宮參豐樂院、步射射手帶刀十人、著末額壓巾、坊進一人、執帶刀歷名札、趍就
左近陣西南頭、西向立奏、〈宸儀不奏、屬唱之、〉其詞曰、御子乃宮乃司劔波岐舍人姓丸、事畢還宮如常、
凡同月〈〇五月〉六日、東宮參入如昨日、騎射射手帶刀十人、著小松揩衣、射五寸的、坊進一人執歷名札、自
左右近衞陣南頭、趍當於殿東南階、西向立奏、
凡帶刀舍人卅人、分配侍衞、

〔文德實錄 九〕天安元年六月壬申、遣勅使於左近衞馬場、合試春宮坊擬帶刀舍人步騎兩射、各定其科、
先是坊司請加增舍人十人、其時服日食、便用職物、許之、故試補焉、

〔三代實錄 十六清和〕貞觀十一年三月廿四日壬午、天皇御射殿、閱試春宮擬帶刀舍人射藝、

〔日本紀略 六醍醐〕安和二年十月八日壬午、東宮帶刀試、

〔日本紀略 十三後一條〕長和五年三月廿三日丁卯、帶刀試、

〔高階仲章記〕康和五年十月十二日戊午、秉燭大夫藤原朝臣〈〇春宮大夫公實〉參內、歸參之後、處々可進帶刀
之由被申、以大進權大進權少進等爲使、　一院〈二人〉　中宮〈一人〉　齋宮〈一人〉　齋院〈一人〉　前齋院〈一人〉　左大
臣〈一人〉　右大臣〈一人〉　大夫〈一人〉　權大夫〈一人〉　本宮〈二人〉　廿一日丁卯、今日帶刀試也、

〔殿曆〕康和五年十月廿一日丁卯、今日東宮御封請印政也、雖然依無上卿延引、東宮帶刀コヽロミ、於
右近馬場有此事、參議宰相中將顯雅參馬場云々、爲制濫行、撿非違使二人參馬場云々、戌剋許、自大
宮退出間、於路通、藏人五位爲隆、帶刀交名持來、早可奏之由仰了、自途中件爲隆參內了、

〔爲房卿記〕康和五年十月廿一日丁卯、帶刀於右近馬場有試、次於本宮廳給兵仗、近衞府給祿疋絹、今
日東宮擬帶刀於右近馬場、有被試射藝之事、自院以頭辨被奏大內、持疑之間已及晡時、亮依遠忌不
出仕、少進行盛爲御裝束行事、參向厩畠馬場、〈以右近馬場、稱厩畠馬場之由、見寛平御記、〉殿門屋母屋庇鋪滿筵、〈天曆儀滿、長曆母屋、〉

〔職原抄下〕春宮坊○中略

帶刀者、撰重代侍補之、自公家被補之也、昔者源平重代武士多補之、長二人、近來一人、先生是也、連廿人、此内木烏左右各一人、三○長以下二十三字以一本補

〔標註職原抄下本〕木烏は假字也、部領の義也、卽先生の次なり、左衞門尉を兼るを左木烏、右衞門尉を兼るを右木烏といふ、その次を脇といふ、卽木烏の側に幷ぶ義、その次を連といふ、卽木烏脇に連る義也、

〔有職問答三〕一帶刀

長とこの下に候、かみにて（勿論候）候哉、長とよみ（常ハ申習候哉）候哉、かみと可讀候哉、

一帶刀陣

右の下に主馬署とあり、（是ハ春宮ノ御馬ヲツカサドル官也、主馬ノ判官モ、此官ニ任ジタル者也、）長のならびに脇、籠取とあり、又列とあり如何、

一帶刀長二人あり、（左衞門尉ヲカヌルヲ左木丁ト云、右衞門尉ヲ兼ルヲ右木丁ト云、）是先生と號す、他人は先生と書共、我は先生共、又長とも不可書也、只姓實名は、他官あれば、其を書べし、（此分候）

此段子細有事共にて（無殊事候）候哉、先生之號、古來沙汰有よし承及候、侍の假名の時、如斯稱する由申（常ニハ如此用也）候如何、又長兩說如何、（常ニハ如此用歟）

〔江家次第十四〕坊官除目

每任人、懸申文勾、申兩官者注任官、轉任他官者注其由、長、木烏、衞府腋、兵衞自餘馬允、二人許文官等、

〔延喜式四十三春宮〕朝賀儀

其日依時剋、傳以下諸侍從内舍人各著朝服參詣共候、東宮駕輦以下出、帶刀舍人服上儀服、被甲脚纏末額列立前後、左右兵衞尉志、各率兵衞陣列門外、立前後、至東廊外降輦、就次著禮冠、若未冠者、則雙童髻、禮服帶劍、又調者著禮服、以坊大夫爲之、若無者他四位侍之、與侍從進引東宮出、次舍人三人、執紫蓋以隨之、亮帶仗率帶

帶刀

〔延喜式四十三春宮〕凡舍人五十人粮受大炊寮、
凡五月廿一日、請舍人百人衣服解文進中務省、十一月廿一日
〔拾芥抄中本官位唐名〕東宮帶刀太子左右內率府率
〔唐六典二十八太子左右衞及諸率府〕太子左右內率府率各一人、正四品上、
隋文帝置左右率副率、領東宮千牛備身侍奉之事、職擬千牛將、其備身有千牛備身八人、掌執千牛刀、備身左右十六人、掌供奉弓箭、備身二十人、掌宿衞侍從、煬帝降內率、爲正五品、皇朝因之加至四品上、龍朔二年、改爲左右奉御率、神龍初復舊、〇中略
左右內率府之職、掌東宮千牛備身侍奉之事、而主其兵仗、總其府事、而副率爲之貳、以千牛執細刀弓箭、以備身宿衞侍從、以主仗守戎服器物、
〔享祿本類聚三代格四〕太政官符
應充帶刀舍人廿人事先例十人今加十人
右被右大臣宣偁、奉勅件帶刀舍人充春宮坊、
大同元年五月廿七日
太政官符
應加充帶刀舍人十人事
右得春宮坊解偁、謹撿案內、件舍人、去寶龜七年、始充十人、至于大同元年、更加十人、今以廿人、分配三陣、陣別六七人、身帶兵仗、夙夜從事、而至有病故、宿衞者寡、非常之警、不可不愼、望請更加件員、以備不虞、但衣食者、不賜官物、以坊家物給之、謹請官裁者、大納言正三位兼行右近衞大將民部卿陸奧出羽按察使安倍朝臣安仁宣、奉勅依請、其考者、前後同共、永預給例、
天安元年五月八日

望請除拜官幷依病不上服解死去等之外、白丁未敍、無故不上者、被補其替者、右大臣宣、奉勅依請、

承和三年正月十五日○又見續日本後紀

太政官符

應外考舍人卅人內、遷任把笏、幷補諸衞府舍人之類、准舊例隨闕遞補替事、

右得春宮坊解偁、撿案內、例補舍人六百人、就中入色四百人、外考白丁、各一百人、唯外考舍人、隨闕補替、歷代行來、誠應有由、而太政官去承和十年四月十九日、下式部省符偁、外考補坊舍人、同舍人遷他色、及依理解却之類、每年卅人、特聽出入者、而今白丁依格不得補替、入色進口必爲心、外考所闕、不被許補、加以遷任遭喪、日月有數、不上病患、相續不絕、因此舍人多闕、駈仕乏人、例用臨時、動致闕怠、望請因循舊例、隨闕補滿、謹請官裁者、左大臣宣、奉勅依請、但依理解却之類、待考解補、

承和十四年二月十四日○又見類聚國史

〔延喜式春宮四十三〕凡坊舍人六百人、帶刀舍人卅人在此中、取蔭子孫及位子、但外散位、帳內職分位分資人一百人、隨闕通補、又取白丁一百人一補、每年卅人內遷任把笏幷諸衞府舍人之類、並隨闕補替、自餘依理解却之輩、待考解補、但白丁舍人未敍之前、無故不上替、聽補白丁、其敍位之後、依病不上、幷遷他色之替、以雜色人補之、幷在六百人內、

〔延喜式式部十八〕凡諸外考者、經一選、然後聽遷中宮職舍人春宮坊舍人、其舍人遭喪者、奪情補之、遷補之後、未經一選、无故及依病不上者、直還本色、

凡中宮春宮舍人、及三色資人等、待考帳放出、

凡補諸宮舍人者、○中略東宮入色四百人、外位一百人、白丁一百人、○中略其外位隨解闕補之、但白丁舍人未敍之前、无故不上之替、聽補白丁、其敍位之後、依病不上、幷遷他色之替、以雜色人補之、

凡中宮春宮白丁舍人、幷三色資人者、以本貫勘籍解文補之、

凡中宮春宮舍人、非有本司許文、不得遷他職、

〔令義解官位一〕從六位〇上階　舍人正　正八位〇下階　舍人佑　少初位〇上階　舍人令史

〔續日本紀仁明十二〕承和九年七月丙辰、廢皇太子、〇恒貞　戊午、舍人正正六位上廣根王爲壹岐權守、

〔儀式六〕上卯日〇正月　進御杖儀

皇太子參入內裏、坊官率舍人四人、(舍人監、預擇定容貌端正者、)舉御杖案隨之、

〔續日本紀仁明十七〕承和十四年七月丙寅、置春宮坊監署六司史生各二員、

〔延喜式十八式部〕凡諸司史生者、〇中略　舍人監、主膳監、主藏監、主殿署、主馬署各二人、〇中略　兵部省春宮坊監署等史生、待本司移補之、

凡諸司使部者、〇中略　舍人監六人、主膳監、主藏監、主殿署、主工署、各四人、主馬署六人、

〇史生及ビ使部ノ事ハ、特ニ此條ニノミ載セテ、以下諸司ニハ一々錄セズ、

〔令義解五軍防〕凡五位以上子孫、年廿一以上、見無役任者、〇註略　每年京國官司勘撿知實、限十二月一日、并身送式部、申太政官撿簡、性識聰敏、儀容可取、充內舍人、(謂二事相須、乃充內舍人也、三位以上子、不在簡限、)以外式部隨狀充大舍人及東宮舍人、(謂中宮舍人、亦准此也、)

〔日本後紀十四平城〕大同元年六月癸巳朔、勅、〇中略　東宮舍人者、依令取蔭子孫及位子、儀容端正、工於書筭者補之、而頃年乖令、兼取白丁、宜改此例、一依令條、　七月壬寅、聽以白丁百人補東宮舍人、永以爲例、

〔日本後紀二十二嵯峨〕弘仁三年十二月癸丑、制、春宮坊舍人六百人、就中入色五百人、白丁一百人也、而入色者、無心仕官、白丁者、唯在一身、是以數年之後、駈使乏人、宜五百內取外位一百人、隨闕補之、

〔享祿本類聚三代格四〕太政官符

應補白丁舍人無故不上之替事

右得春宮坊解偁、舍人監舍人、總六百人、就中入色四百人、外考一百人、白丁一百人、而或進仕之日、競預出身、勘籍之後、還爲逋去、因責不上、放出還本、其入色外考、隨闕補代、唯至白丁、一定之後、依格不補、

平兼衡　源光經已上長　源康資左木鳥　源則能右木鳥　藤原景政右廐木鳥　紀業兼右廐木鳥　藤原忠弘左歩射木鳥　源季景右歩射木鳥　橘康清左三給　藤原俊政右三給　中原盛弘　藤原親能已上今度給官

同高清　源弘吉　宮道康基　惟宗信家　藤原時頼已上不給官

盛房信家者、陣行事也、假如瀧口事、時頼以御乳母給寄瀧口了、

坊官　傅左大臣從一位　大夫予(藤原忠親)正二位、第三中納言、兼雅時忠在上、　權大夫知盛正三位、左衞門督非參議也、　學士光範從四位上文章博士、親經、從五位上宮内權少輔、　大進光長正五位下左衞門權佐　權大進時光正五位下、前藏人自元兼濵左衞門權佐也、　少進去月廿八日補藏人、自立坊始不被任之、　權少進時兼、縫殿助、　大屬成緊、史大夫、　少屬資成、檢非違使左忠也、　權少屬資元、彈正忠、　主殿惟宗兼資　主膳藤原盛光　主馬平盛綱、左衞門尉、

予今度無可望之事、仍不申、

〔新撰姓氏錄左京神別下天神〕榎室連

火明命十七世孫、呉足尼之後也、山猪子連等、仕奉上宮豐聰耳皇太子〈戸○厩〉御杖代、爾時太子巡行山代國、于時古麿家、在山城國久世郡水主村、其門有大榎樹、太子曰、是樹如室、大雨不漏、仍賜榎室連、

〔類聚三代格十二〕太政官符

春宮坊應令隨坊驗事

右太政官、去九月廿三日、下臺并兩職符偁、親王及觀察使已上、六衞府次官已上、特聽養廳、仍太政官給隨身驗、所司加撿挍、然後聽之者、今右大臣宣、奉勅件廳、宜使令隨坊驗、但雖有其驗、於民致妨、隨事勘當、一依先符、

大同三年十一月二日

○

〔令義解一東宮職員〕舍人監

正一人、掌舍人名帳、禮儀、分番事、佑一人、令史一人、舍人六百人、使部十八人、直丁一人、

大夫平朝臣　權大夫藤原朝臣兼雅　亮平朝臣　權亮平朝臣　大進藤原朝臣光長　權大進高階朝臣經仲　少進平朝臣

廳　定所預史生以下事

贊殿　惟宗恒光　中原成弘　考所　高橋盛時　安倍景親　勘公文所　紀良守　上野資時　掃部所　紀守康　同守成　雜器所　菅野永國　大江信弘　大炊所　大江盛元　高橋貞職　絹鏤所　大江忠兼　惟宗恒光　綿布所　中原成弘　高橋盛時　米所　安倍景親　大饗所　紀良守　御季所　上野資時　仕所　紀守康

右所々預史生以下、所定如件、

治承三年正月七日

大夫平朝臣　權大夫藤原朝臣兼雅　亮平朝臣　權亮平朝臣　大進藤原朝臣光長　權大進高階朝臣經仲　少進平朝臣

〔山槐記〕治承四年三月四日丙辰、今夜被行坊官除目云々、御讓位之後、御卽位以前、被賞前坊勞之例也、於攝政直廬被行之、源大納言、定房新大納言、宗家皇太后宮大夫、朝方、清書上卿、右宰相中將、實守右大辨、長方、執筆、新宰相中將、通親、清書、參入云々、

少監物中原盛房帶刀　刑部少輔藤原時光權大進、元前左衛門權佐也、　木工少允藤原親能帶刀　左近將監藤原時經藏人一﨟也　左衛門少尉平兼衛帶刀長、和泉守信兼男、　源康資帶刀左木鳥、河內守康綱男、　右衛門少尉源光經帶刀長、檢非違使光長男也、父子右尉如何、　同則能帶刀右木鳥美濃守則清　安倍資成少尉、檢非違使左忠也、　左兵衛少尉藤原景政帶刀　左腋木鳥　紀業兼帶刀　右腋木鳥　右兵衛少尉源忠弘帶刀　左步射木鳥　同季景帶刀　右步射木鳥　左馬少允橘康清帶刀左三結、民部大夫政清男、　右馬少允藤俊政帶刀右三結

凡立坊時被寄十七人、其後不被加也、

春宮坊〈長暦無春宮坊、嘉保寛仁例令書之、〉　正六位上行中務少丞源朝臣國輔　正六位上守大膳亮高階朝臣仲範　正六位上守修理亮藤原朝臣兼貞　正六位上行圖書助源朝臣隆康　正六位上行縫殿助藤原朝臣懐遠　正六位上行雅樂助藤原朝臣友兼　正六位上行主殿助源朝臣盛兼

正六位上行掃部助橘朝臣盛仲

奉令旨件等人宜爲侍者者

康和五年八月廿七日　正二位行權大納言兼大夫藤原朝臣公實〈奉〉

件文書樣等、予所注進也、

〔本朝世紀〕康和五年八月廿五日壬申、權大納言〈家忠〉參仗座、召予、〈○中略〉不補帶刀以前、有行啓〈○鳥羽〉如何如何、陣頭侍者、啓内舍人等先例可注申者、　廿七日甲戌、春宮大夫下給陣頭侍者夾名二通、即書令旨、各下知了、〈○中略〉戌剋、東宮行啓高松殿、〈○中略〉陣頭侍者、依延久元年例不供奉、

〔文化八年東宮御元服記〈貞〉〕陣頭　堯直　光華　利根　吉利　侍者　藤原重景

〔山槐記〕治承三年正月七日丙寅、今日有東宮〈○安德〉所充云々、傳聞權大夫、〈兼雅、大夫宗盛不參、〉大進光長、權大進經仲著殿上、亮重衡不參、仍作二通、大進出之、〈先例可尋、〉亮參之時、大夫與奪、亮書所々勾當所充文、次亮與奪、大進書所々預所充文也、立坊之後、去年可有此事、而亮不參、仍延引、今日猶不參云々、　書樣

廳　定所々勾當官人事　大饗所　大進藤原朝臣光長　大屬中原成擧　贄殿　少進平時兼　少屬安倍資成　仕所　少進平時兼　少屬安倍資成　勸公文所　絹鍵所　亮平朝臣重衡　大屬中原成擧　綿布所　權大進高階朝臣經仲　權少屬安倍資元　御季所　亮平朝臣重衡　米所　亮平朝臣重衡　少屬安倍資成

右官人所々勾當、所定如件、

治承三年正月七日

〔立坊部類記〕外記日記

寛仁元年九月九日甲辰、今日於右近馬場試東宮(○後朱雀)坊帶刀騎射、勅使參議右大辨朝經朝臣、

春宮坊　正五位下行兵庫頭平朝臣孝明　內匠頭從五位上藤原朝臣經國　左衛門佐從五位上藤原朝臣惟忠　從五位上行右馬權助源朝臣賴職　從五位上行右馬助源朝臣爲弘　刑部少輔從五位下源朝臣相奉　從五位下守縫殿頭藤原朝臣貞利　大監物從五位下藤原至孝　大藏權少輔從五位下源朝臣仲舒　從五位下守中務權少輔平朝臣永盛　奉令旨件等人宜爲陣頭者

寛仁元年九月九日　　正二位行權中納言兼左近衛大將藤原朝臣敎通(本)

春宮坊　正六位上行大膳權亮藤原朝臣親主　正六位上行內匠助橘朝臣俊經　正六位上行圖書權助藤原朝臣有任　正六位上行主殿權助橘朝臣正平　正六位上行掃部助藤原朝臣棟方　正六位上玄蕃助藤原朝臣知通　正六位上行主殿權助平朝臣擧影

〔爲房卿記〕康和五年八月廿七日甲戌、今日春宮大夫參陣、以頭辨被申下頓給料宣旨、(○中略)又陣頭十人、(諸司長官助八人書輔)侍者八人、(八省丞諸司助)以令旨被書下、(以上大夫加署○中略)

又陣頭侍者令旨不經奏聞直給外記、後日江中納言云、不可下外記、直可下廳者、但長脈故豫州記、大夫(賴季)被下外記、延久江中納言記、大夫(能長)被下外記者令難如何、

春宮坊　從五位上行縫殿頭源朝臣隆宗　從五位上行大舍人頭高階朝臣業房　從五位上行大藏少輔藤原朝臣保隆　從五位上行織部正藤原朝臣基綱　從五位上行內藏助源朝臣基親　大監物從五位下橘朝臣説家　從五位下行內藏助藤原朝臣行仲　從五位下行左馬助藤原朝臣兼信　從五位下行右馬權助源朝臣經良　從五位下行左馬權頭藤原朝臣有隆

奉令旨件等人宜爲陣頭者

康和五年八月廿七日　　正二位權大納言兼大夫藤原朝臣公實(本)

雜載

東宮町〈中御門南、一町、堀河西、〉

〔類聚國史〈百七職官〉〕天長七年二月乙卯、山城國水田五段、陸田一段二百歩、賜春宮坊、

承和五年三月丙戌、山城國葛野郡空地一町、賜春宮坊、

〔延喜式〈四十一彈正〉〕凡致敬禮者、〈中略〉○東宮官人拜傅、六位已下拜學士、

〔日本紀略〈淳和〉〕天長元年十月辛丑、皇太子〈仁明〉○謁見後宮、便於仁壽殿東檻下、聊設酒肴、賜坊官已上祿、

〔類聚符宣抄〈四〉〕右大臣宣、今日皇太子可被參入內裏、而啓內舍人二人不足、宜仰中務省假差進其替令奉仕者、

延喜廿一年九月廿五日　大外記伴宿禰久永奉

卽召仰中務省、令差進內舍人藤原令問、坂上恒香二人、

○按ズルニ、啓內舍人ハ、內舍人ニシテ皇太子ニ附隨スル者ヲ云フ、

〔類聚符宣抄〈四〉〕內舍人小野景興

中納言兼春宮大夫藤原保忠卿宣、件人宜令直東宮啓陣者、

延長三年三月廿九日　勘解由次官兼大外記伴宿禰久永奉

內舍人文室宣範

右大臣宣、件人宜爲東宮啓者、

天德二年十一月廿一日　大外記兼周防介御船宿禰傅說奉

同日仰中務少錄凡河內實平了

〔西宮記〈臨時五〉〕東宮行啓

天曆四年十月廿一日、皇太子〈冷泉〉○入桂芳坊、左兵衛左近啓陣前列、啓內舍人陣頭侍從次之、

紫端帖四枚、（厚薄各二枚）綠端卌二枚、（厚薄各十六枚）黃端卌二枚（厚薄各十六枚）料紫帛三丈六尺八寸六分、紫絲一兩二分、綠黃帛各三疋五尺一寸二分、絹六疋四丈七尺一寸、綠絲八兩、黃絲八兩、紫革卌條、（二條各方七寸、十五條各方六寸、十八條各方五寸、三條各方四寸、二條各方三寸、）黃革卌二條、（十六條各方五寸、十六條各方四寸、）調布廿三端三丈八尺、熟麻大廿六斤十三兩、出雲席卌枚、（四枚各廣五尺、卅六枚各廣四尺、）東席卅二枚、葉薦一百十八枚、折薦九十六枚、

右年料、坊官請受供之、

黃端茵二枚、（四位一人五位一人料、）折薦茵廿三枚、（進屬各三人監署官十七人料）並隔三年、申官請受、

〔延喜式十八式部〕凡省內雜色、每年進薪限一千擔、其三百擔、分充春宮坊、

〔類聚符宣抄四〕太政官符民部省（外）

竈杵稻佰參拾壹束壹把漆分壹毫　糯稻漆束貳把　粟捌拾肆束貳把肆分　已上山城國

竈杵稻佰參拾壹束　糯杵稻漆束貳把　已上河內國

竈杵稻佰參拾壹束　糯稻漆束貳把　已上攝津國

右從今年七月廿三日至于十二月、春宮坊御料、依例所定如件者、省宜承知、符到奉行、

右中辨　左少史

天曆四年七月廿八日

〔朝野群載四朝儀〕春宮坊召物

請絹二百疋　調布三百端

右秋季御讀經用途料、以諸國所進率分內、依例所請如件、

康和五年十二月廿日　左大史正六位上兼行大屬紀朝臣盛言

防鴨河使左少辨正五位下兼行右衞門權佐大進播磨介藤原朝臣顯隆

〔拾芥抄中末宮城〕諸司厨町

藏人小大進君かへし、

あるはなくなきはかずそふ世中にあはれいつまであらんとすらん、とぞ、

春宮宣旨

〔延喜式四十三春宮〕凡晦日昏時、神祇官祐以上一人、(必用中臣氏、坊有此氏、聴便用之、)令持神麻候西細殿南、○中略御巫備御贖候宣旨所、宣旨命婦率御巫參入、供訖退出、

〔日本後紀二十嵯峨〕弘仁元年九月己酉、藤原朝臣藥子自殺、藥子、贈太政大臣種繼之女、中納言藤原朝臣繩主之妻也、有三男二女、長女太上天皇○平城爲太子時、以選入宮、其後藥子以東宮宣旨出入臥内、天皇私焉、

〔西宮記臨時五〕東宮行啓

延喜十四年二月八日、東宮○保明參亭子院、駕庇指御車、宣旨候御車、行啓如例、

〔春記〕長暦二年十月十一日甲戌、裏書、

天慶六年正月廿九日、今日故藤原善子朝臣卌九日法事於極樂寺修之、仍仰内藏寮令修御諷誦、遂嚫物調布百端、以右近少將朝成爲使、善子朝臣是左大臣○藤原仲平室也、依爲東宮宣旨、殊有此恩、

雜色

〔延喜式四十三春宮〕凡雜色人百五十人、式兵二省相通與考、

〔爲房卿記〕康和五年八月十七日甲子、今日有策命立太子○鳥羽事、○中略亮顯季朝臣奉令旨、令仰下雜色出納、(延久仰雜色等、名簿兼經平入柳筥參大内、令奏之後仰下、今度自院被申内裏者、)　蔭孫藤原忠兼(前伯耆守隆忠息)　高階遠行(前參河守遠政息)

以上可爲雜色、

用度

〔延喜式四十三春宮〕凡御薪一千三百卅七荷、以得考舍人幷雜色人所進供用、(五百廿一荷主膳監料、八百十六荷主殿署料、)

凡月料紙百八十張、筆四管、墨一廷、請圖書寮、輕幄一具、斑幔十條、(長八條、短二條、)黃幔六條、緋絲十四斤、(輕幄綱料、)

柱一百四枝、(庭幔料五十枝、黃幔料五十四枝、)紺幕廿條、(庭十四條、布六條、)幕桁廿枚、柱卌枝、

右幄幔納主殿署、坊官隨損請換、

女藏人

廿七日甲戌、今夜行啓後、於高松殿有聽始事、○中略史生以下今夜注夾名亮仰下、○中略藏人八人太政官
史顆高　佐伯成則　右辨官史生中原吉行　同有範　民部史生中臣忠倫　太政官人代成親
官文殿菅原行友

〔本朝續文粹奏狀六〕前上野介正四位下藤原朝臣敦基誠惶誠恐謹言
請殊蒙天恩、准傍例、依儒學幷奉公勞、被拜任刑部卿、彈正大弼、式部權大輔等闕狀、○中略
一院號以來直文殿、後儒道後進輩、超浴天恩事、○中略
先聽昇殿上、次補藏人、次補東宮藏人、○中略
同○藤原尹通
康和六年正月廿六日　前上野介正四位下藤原朝臣

〔玉海〕治承二年十二月十五日甲辰、此日有冊命立太子、○安德事、○中略坊官除目、○中略藏人　親宗
子親雅　泰經子隆仲　經房子定經　時盛平家也

〔山槐記〕治承三年二月五日癸巳、今日東宮非藏人二人被仰下、源兼時、前和泉守季長朝臣二男平俊親、兵庫大夫貞俊男
俊親先參爲上臈云々、立坊日無非藏人、今日始被仰下也、　十二月十一日甲午、東宮昇殿藏人帶刀等被仰下事　藏人　藤原邦隆
伊與守隆成子　親宗朝臣子　內藏人親弘除籍替　高階親家主殿頭爲清子　前大藏卿泰經朝臣　隆仲除籍替
四年二月四日丙戌、帥大納言隆季被示送云、○中略東宮藏人二人兼內非藏人、遜位之後、以非藏人可補
藏人、事體參差歟、件二人進渡內、如何、予○藤原忠親答云、於院藏人者、雖不被傳之、何事之有哉、至于東宮
藏人者、一臈時房、立坊日補之、三臈邦隆、四臈親家、又同日補後闕、而時經、邦隆、爲內非藏人、讓位日不
補新帝藏人者、下臈各可超哉、爭有此儀哉、

〔榮花物語見はてぬ夢四〕世の中のあはれにはかなき事を、攝津守爲賴朝臣といふ人、
世中にあらましかばとおもふ人なきがおほくもなりにけるかな、これを聞て、東宮○三條の女

家令

以下云々、(○中略)　坊掌(二人)　花元　光任

〔續日本後紀(七仁明)〕承和五年二月庚寅、春宮(○恒貞)家令永預把笏也、

○按ズルニ、大寶令ニ、親王ニハ家令アレド、皇太子ニハコレナシ、今春宮家令トアルハ、蓋シ權置ナラン、

春宮藏人

〔拾芥抄(官位唐名中本)〕東宮藏人(内坊典直、書閣侍事、)

〔唐六典(二十六左右春坊)〕太子内坊、(○中略)典直四人、正九品下、

隋内坊置丞(○置丞、隋書作丞直、)四人、皇朝改爲典直、(○中略)

凡任典直以儀式

〔職原抄(下)〕春宮坊(○中略)

坊中有藏人非藏人、是坊中之沙汰也、重代諸大夫補之、藏人者勤仕日下﨟事如禁中、仍撰其人也、

〔拾遺和歌集(十六雜春)〕康和二年、春宮藏人になりて、月のうちに民部丞にうつりて、ふたゝびよろこびをのべて、右近命婦がもとにつかはしける、　順

ひく人もなしとおもひしあづさ弓今ぞうれしきもろやこつれば

〔日本紀略(十三後一條)〕寬仁元年八月九日甲戌、皇太子敦明親王請退儲皇、卽日立帝同胞弟敦良親王爲皇太弟、(年九)卽任坊官等、(○中略)又被定春宮藏人、殿上人等、

〔春記〕長久元年九月十日壬戌、今夜宿侍無直廬、仍宿東宮藏人資經宿所、資經退之、

〔爲房卿記〕康和五年八月十七日甲子、今日有策命立太子(○鳥羽)事、(○中略)被仰下殿上人(十人)五藏人、(三人)(○中略)

藏人　玄蕃助高階泰兼(自内被仰、泰仲朝臣男)　越前權藤原長隆(元御在藩之時藏人、顯隆弟、○中略)　亮顯季朝臣奉

令旨、令仰下雜色出納、(○中略)　問者生三善兼仲(自内有御氣色云々)　學生紀親行(辨乳母給)　算生惟宗貞成(自院被補云々)　以上可爲藏人所出納

史生

坊掌

天和三年二月九日

〔輪池叢書 公事〕立坊の式、後光嚴院より十五代中絶にて、天和三年に再興せさせ給ひしぞ、

〔大江俊尙番櫃日記〕寶永五年二月十六日

東宮職〇是日中御門立太子坊官除目

傅 二條右大臣 綱平公 學士 五條資長朝臣 學士 高辻總長朝臣

春宮坊 大夫 近衞左大將 家久卿 權大夫 醍醐大納言 昭尹卿 亮 町尻兼重朝臣 權亮 三條西公福朝臣 大進 甘露寺尙長 權大進 柳原資堯 少進 土御門泰連 權少進 慈光寺源仲學 差次藏人 大屬 從五位下中原職永 少屬 正六位上三善亮兼 權少屬 正六位下宗岡信行〇下略

〔大江俊矩記〕文化六年三月二十四日甲申、立太子節會也、儲君惠仁親王、〔仁孝〕御歲十、〇中略 坊官除目

東宮 傅 一條右大臣 忠良公 學士 桑原大内記爲顯朝臣 東坊城大夫聰長

東宮坊 大夫 鷹司大納言左大將 政熙卿 權大夫 花山院中納言 家厚卿 亮 日野頭右中辨資愛朝臣 權亮 三條西中將實勳朝臣 大進 坊城藏人左少辨俊明 權大進 勸修寺侍從經則 少進 豐岡左馬權頭治資 權少進 北小路新藏人大江俊常 大屬 平田權少外記中原職顯 少屬 出雲左少史小槻秀壽 權少屬 山口右史生紀敬昌〇下略

〔延喜式 十八式部〕凡諸司史生者、〇中略 東宮坊四人、〇中略 修理春宮等官職坊寮司史生、待宣旨補任、

〔爲房卿記〕康和五年八月廿七日甲戌、戌剋東宮〇鳥羽行啓高松殿、其後令請坊印、有廳始事、又補史生五人

以下云々、〇中略 史生太政官史生盛方 同盛貞 同久重 左辨官史生成忠 同有助

〔日本後紀 二十四嵯峨〕弘仁六年三月丁酉、置春宮坊坊掌二員、

〔延喜式 十八式部〕凡内外諸司、〇中略 坊掌〇中略 各二人〇中略 判補之、

〔爲房卿記〕康和五年八月廿七日甲戌、戌剋東宮〇鳥羽行啓高松殿、其後令請坊印、有廳始事、又補史生

今度坊官大夫實夏、權亮公直、權大進時光、三人被渡先坊官、二人不仕、雖非無先規、已及數輩如何、兼綱朝臣、又同坊學士經歷仁也、

二代大夫賴宗公治安三長暦三　能長公治暦三延久三　同權大夫宇治殿三條後一條　師房公後朱雀後冷泉　兼季公太上法皇、後醍醐院、

春宮傅藤原道嗣兼　學士藤原兼綱兼

春宮大夫藤原實夏兼　權大夫藤原實長兼　亮藤原仲房兼　權亮藤原公直兼　大進藤原經方兼

權大進藤原時光兼　少進藤原兼賴兼　權少進藤原範之兼　大屬三善重倫兼　少屬安倍資躬　權少屬安倍資春

〔季連宿禰記〕天和三年二月九日壬午、今日立太子〇東山節會、幷小除目也、〇中略

勅　東宮　傅從二位藤原朝臣兼熙兼

天和三年二月九日〇中略

太政官謹奏

春宮坊　大夫從二位藤原朝臣家熙兼　權大夫正三位藤原朝臣冬基兼

天和三年二月九日〇中略

太政官謹奏

東宮　學士從四位上藤原朝臣韶光兼　學士從五位上菅原朝臣長量兼

春宮坊　亮正四位下藤原朝臣持言兼　權亮正四位下藤原朝臣持房兼　大進正五位上藤原朝臣賴重兼　權大進從五位上藤原朝臣輔長兼　少進從五位上安倍朝臣泰福兼　權少進正六位上安倍朝臣泰貞兼　大屬從五位下小槻宿禰利昭兼　少屬正六位上中原朝臣章成兼

權少屬從六位上宗岡朝臣常辰兼〇中略

五位下藤原朝臣光長兼左衞門權佐　權大進從五位上高階朝臣經仲兼右衞門佐　少進正六位上平朝臣時
兼兼　大屬正六位上中原朝臣成擧兼左大史　少屬正六位上安倍朝臣實成兼檢非違使左衞門尉　少屬正六
位上安倍朝臣資元兼

〔玉海〕治承三年十一月十七日辛未、今日有解官除目等、○中略　除目○中略　東宮大夫藤原忠親

〔勘仲記〕正應二年四月廿五日甲戌、今日今上○伏見　若宮二歲、御母儀故五辻宰相經氏卿女、中納言典侍、　立太子○後伏見　冊命日
也、○中略　主上出御晝御座、御引直衣　關白令着簀子圓座、內大臣殿同令參著圓座給、被行坊官除目、五位藏
人持參硯續紙、大臣書了被奏除目、其後大臣取副除目於笏退、於小板敷召外記給除目、大臣令著仗
座給、左大辨著陣被行淸書事、每事如例、○中略　上卿花山院大納言奉行、
東宮傅藤原兼忠兼　學士藤原信經兼
東宮大夫藤原家教兼　權大夫同冬平鷹司前殿御息、宇治殿御例云々、　亮同隆政兼　權亮同實爲兼　大進
俊光兼　權大進平忠顯兼　少進藤賴定冷泉相公息兼　權少進同惟藤　大屬中原俊員兼　少屬安倍資
久兼　權少屬同資增

〔增鏡十五村時雨〕龜山院の御ながれのたゆべきにはあらずとにや、先坊○邦良の一宮○康仁を太子にた
てまつる、○中略　十一月○元弘元年　八日、坊にさだまり給ふ、○中略　傅に久我右のおとゞ長通、大夫に中院
大納言通顯なり給ふ、

〔公卿補任光明〕建武五年○曆應元年戊寅
右大臣正二位藤道教八月十三日、兼皇太子(崇光)傅、　權大納言正二位藤冬信八月十三日、兼春宮大夫、
權中納言從二位藤實尹八月十三日、兼春宮權大夫、

〔園太曆〕貞和四年十月二十七日、依踐祚○崇光　立坊○後光嚴　同日例、於陣被行之、右大臣參議忠嗣執筆云
云、

〔爲房卿記〕康和五年八月十七日甲子、今日有策命立太子事、〇鳥羽中略除目

東宮　傅正二位藤原朝臣忠實兼正右大臣　學士正五位下藤原朝臣俊信兼正右少辨、右衞門權佐、文章博士、周防介、

春宮坊　大夫正二位藤原朝臣公實兼正大納言　權大夫正二位源朝臣雅俊兼正中納言左衞門督　亮正四位上藤原朝臣顯季兼正修理大夫、美作守、　權亮從四位上藤原朝臣實隆兼正左少將　大進正五位下藤原朝臣顯隆兼正防鴨河使、左少辨、左衞門權佐、播磨介、　權大進從五位上高階朝臣仲季兼正但馬守、右兵衞佐、　少進正六位上藤原朝臣行盛兼正縫殿助、院判官代、　大屬正六位上紀朝臣盛言兼正左大夫　少屬正六位上佐伯朝臣義保兼主計屬、廳執行　正六位上中原朝臣定親故女御侍所司

〔殿暦〕康和五年八月十日丁巳、參內宿侍、東宮傅に可任之由、有御定、余〇右大臣藤原忠實申云、但申御定不可左右進止、察愚意思は非所望、雖然猶可任之由、侍者御定、御使右大辨宗忠、執政人未無此例、頗似無憚、

〔兵範記〕仁安元年十月十日庚辰、有立太子事、〇高倉中略除目

東宮　傅藤原兼實正二位內大臣左近衞大將　學士藤原永範正四位下式部大輔

春宮　大夫平清盛正二位權大納言兵部卿　權大夫藤原邦綱從三位右京大夫　亮平教盛正四位下內藏頭　權亮藤原實守正四位下右近衞中將　大進平知盛正五位下右兵衞佐武藏守　權大進藤原光雅從五位下參河守　權少進平維俊元侍者　大屬藤原康貞修理進　少屬大江景宗民部錄　安倍資成

〔玉海〕治承二年十二月十五日甲辰、此日有冊命立太子事、〇安德中略坊官除目

東宮　傅從一位藤原朝臣經宗兼左大臣　學士從四位上藤原朝臣光範兼文章博士　學士從五位上藤原朝臣親經兼宮內權少輔

東宮坊今日於陣左大臣云、先例多東宮坊春宮職也、而康和度如此、仍可爲後例也云々、　大夫正二位平朝臣宗盛兼大納言右大將　權大夫從二位藤原朝臣兼雅兼中納言　亮正四位下平朝臣重衡兼左馬頭　權亮從四位上平朝臣維盛兼右少將　大進正

〔續日本後紀 四仁明〕承和二年十一月丁亥、春宮坊少屬佐太忌寸道成、兄散位道繼等賜姓滋原宿禰、八多眞人同族也、

〔續日本後紀 十二仁明〕承和九年八月乙丑、是日立皇太子、〇中略、以右大臣從二位源朝臣常爲皇太子傅、左近衛大將如故、參議從四位下安倍朝臣安仁爲春宮大夫、從五位上藤原朝臣諸成爲亮、正五位下小野朝臣篁爲學士、

〔續日本後紀 十七仁明〕承和十四年五月甲戌、從五位下菅原朝臣是善爲東宮〇文德學士、

〔三代實錄 七淸和〕貞觀五年正月五日戊辰、從四位下行內藏頭藤原朝臣興邦卒、〇中略天安之初、遷拜右衛門佐、二年正月、兼筑前守、閏二月、爲春宮〇淸和大進、本官如故、三月轉亮、

〔三代實錄 十六淸和〕貞觀十一年二月己丑朔、天皇臨軒、立貞明親王〇陽成爲皇太子、〇中略是日以大納言正三位藤原朝臣氏宗爲兼春宮傅、文章博士從五位下橘朝臣廣相爲學士、參議民部卿正四位下兼行右衛門督伊豫守南淵朝臣年名爲春宮大夫、刑部少輔從五位下藤原朝臣門宗爲亮、散位從五位下藤原朝臣淸經爲大進、

〔日本紀略 一醍醐〕延喜四年二月十日乙亥、今上第二子崇象親王爲皇太子、於紫宸殿宣制、太子年二、即日任坊官、

〔榮花物語 三さまぐの悅〕かくてみかど〇一條東宮〇三條たゝせ給ぬれば、〇中略閑院の左大將〇藤原朝光は、東宮大夫になしたてまつり給へり、

〔尊卑分脈 五藤原氏〕兼家　道綱大納言、東宮〇後一條傅、號傅大納言、

〔榮花物語 十三木綿四手〕八月〇寬仁元年九日、東宮〇後朱雀たゝせ給ひぬ、〇中略東宮大夫には、大殿の高松のはらの大納言〇藤原頼宗、時權中納言、成給ぬ、權大夫には、法住寺の大臣〇藤原爲光どの、兵衛督公信のきみなり給、東宮傅には、閑院の右のおほゐ殿〇藤原公季成給ぬ、

〔續日本紀三十一光仁〕寶龜二年正月辛巳、立他戸親王爲皇太子、〇中略大納言正三位大中臣朝臣淸麻呂爲兼東宮傅、兵部卿從三位藤原朝臣藏下麻呂爲兼春宮大夫、右中辨從四位下大伴宿禰伯麻呂爲兼亮、勅旨少輔從五位上石上朝臣家成爲兼員外亮、

〔續日本紀三十八桓武〕延曆四年十一月丁巳、詔立安殿親王、〇平城爲皇太子、〇中略大納言中務卿正三位藤原朝臣繼繩爲兼皇太子傅、

〔日本後紀五桓武〕延曆十六年二月乙丑、大納言正三位勳四等紀朝臣古佐美爲兼東宮〇平城傅、式部卿如故、文章博士外從五位下賀陽朝臣豐年爲兼學士、右大辨從四位下藤原朝臣葛野麻呂爲兼春宮大夫、　辛未、從五位下橘朝臣嶋田麻呂爲春宮亮、　三月丁酉、從五位下大伴宿禰大關爲春宮大進、

〔日本後紀十二桓武〕延曆二十三年二月癸亥、春宮權亮從五位下藤原朝臣眞夏爲亮、

〔日本後紀十四平城〕大同元年五月壬午、詔彈正尹某嵯峨定賜皇太弟、宮內卿藤原朝臣園人爲皇太弟傅、林宿禰沙婆爲學士、秋篠朝臣安人爲春宮大夫、

〔日本後紀十七平城〕大同三年十一月辛巳、左兵衞督從四位上巨勢朝臣野足爲兼春宮大夫、近江守如故、

〔日本後紀二十嵯峨〕弘仁元年九月乙卯、大納言正三位藤原朝臣園人爲兼東宮〇淳和傅、

〔日本後紀二十四嵯峨〕弘仁五年九月庚辰、從五位下中科宿禰善雄爲東宮學士、

〔文德實錄七〕齊衡二年正月癸卯、前山城守從五位下藤原朝臣松影卒、〇中略爲人嚴正、鬚眉如畫、起家補內舍人、累遷天長四年爲式部大丞、時東宮〇仁明僚屬、妙選名流、松影風望著聞、選爲春宮少進、

〔續日本後紀一仁明〕天長十年二月丁亥、立恒貞親王爲皇太子、〇中略以參議從四位上文室朝臣秋津爲春宮大夫、左大辨左近衞中將武藏守如故、從五位上藤原朝臣貞守爲亮、讚岐介如故、　三月戊戌、從二位行大納言藤原朝臣三守爲兼皇太子〇恒貞傅、　庚子、從五位下小野朝臣篁、從五位下春澄宿禰善繩、並爲東宮學士、善繩所帶大內記如故云々、

政大臣、左右內大臣、皆兼官に任ず、規模の官也、　學士（太子賓客）　東宮の御師範也、名學の儒者是に任ず、殊重代才學をえらびてなさるヽ事也、

春宮坊

大夫（太子詹事）　是又坊中を管領する職也、可然公卿大納言以上是になる、規模の官也、名家の人などはなるべからず、　權大夫　中納言以上人是に任ず、大夫に同じ、　亮（太子詹事少）　殿上の四位可然人是に任ず、殊器量をえらばるべし、　權亮　殿上四位五位是に任ず　大進（詹事丞）　五位以下是に任ず、名家の人々もなる也、　權大進　おなじ　少進　五位以下是になる也　權少進　おなじ

〔日本書紀 三十持統〕十一年（○文武天皇元年）二月甲午（○二十八日）以直廣壹當麻眞人國見、爲東宮太傅、直廣參路眞人跡見爲春宮大夫、直大肆巨勢朝臣粟持爲亮、

○按ズルニ、本書立太子ノ事ヲ記セズ、然レドモ續日本紀文武天皇ノ條ニ、高天原廣野姬天皇（○持統）十一年立爲皇太子ト見エ、又釋日本紀ニ王子枝別記ヲ引キテ云ク、文武天皇、持統天皇十一年春二月丁卯朔壬午、（十六日也）立爲皇太子トアリ、此ニ據レバ、當麻國見等ガ東宮官ト爲リシハ、文武天皇立太子ノ時ニ在リシ事明ナリ、

〔續日本紀 十四聖武〕天平十三年七月辛亥、正五位下下道朝臣眞備爲東宮（○孝謙）學士、

〔續日本紀 十五聖武〕天平十五年五月癸卯、宴群臣於內裏、皇太子（○孝謙）親儛五節、（○中略）右大臣橘宿禰諸兄宣詔曰、（○中略）皇太子宮乃官人爾冠一階上賜布、此中博士等任賜部留下道朝臣眞備波冠二階上賜比治賜波等久勅天皇大命衆聞食宣、　六月丁酉、從四位下下道朝臣眞備爲春宮大夫、皇太子學士如故、正五位下背奈王福信爲亮、

〔續日本紀 十七聖武〕天平十九年三月丙戌、以從四位下石川朝臣年足爲春宮（○孝謙）大夫、

宮大夫任例、師頼、先坊大夫任例、頼宗、　權大夫　中納言參議任之、散三位例、季宗、自亮轉任例、菅贈大相國、法興院大臣、又誠信、後朱雀院坊御時、先坊權大夫任例、師房、大夫權大夫爲納言例、宇治前太政大臣頼宗、又師房、後冷泉院坊御時、　亮　可補藏人頭者任之、仍殊撰人、參議兼任例、菅贈大相國、惟正、自進轉任例、時光、佐時、中宮權大夫兼任例、忠義公、自同亮任例兼忠、

權亮　用清華人、中納言兼任例、法興院大臣、參議兼任例、誠信、　大進權　名家諸大夫任之、登極之時、多可補五位藏人之故也、其中諸衞佐一人、代々必任之、近衞將兼任例、敏行、伊望、自后宮進遷任例、人望、光房、　少進權　諸大夫、又撰人任之、五位少進三人例、長元九年、於六位進者可補藏人者任之、　屬大少　如諸宮、但殊清撰之、

〔職原抄下〕東宮　東宮春宮是一也、然而傅學士此爲東宮官、大夫以下爲坊官、古來如斯、

傅一人　唐朝太子有太師太傅太保、又有少師少傅少保、本朝只置傅一人、相當雖爲正四位上勅任官也、尤爲重、爲三公之人兼之、大納言兼任雖多先例、中古以來邂逅也、又前官大臣任之、中山前太政大臣頼實公也、非常儀也、　學士二人　諸第儒者、有才德者應其撰、依爲儲君之侍讀也、古今重之、

春宮坊　唐世置詹事府、以統衆務、又置左右春坊、宮中事、一向坊官之所掌也、　大夫一人　執柄息及大臣子孫、爲大中納言人兼之、諸大夫之納言已上無拜任之例、坊中事、大夫管領也、　權大夫一人　同前、但諸大夫納言有兼任之例、猶不爲可也、　亮一人　名家四位、有才人望者任之、坊中事、亮一向所奉行也、

權亮一人　華族中少將兼之　大進一人權三人　名家五位任之、尤可擇其人也、大進奉行宮中諸公事、如禁中職事、仍非器用者不任之、　少進一人權　名家六位任之、或雖五位猶帶之、　屬大少　院主典代官史生等中、爲重代者任之、掌坊中雜務故也、

〔百寮訓要抄〕東宮職　是は東宮御座の時の官、御座なき時は不可有、

傅、太子太傅、皇太子傅、　執柄の大臣是に任ず、東宮を扶佐し奉る職にてあれば、殊に執する也、攝政關白、太

年　月　日

大夫位姓名

亮位姓名

亮　位　姓

奉ㇾ令依ㇾ啓、若不ㇾ依ㇾ啓者、即云ㇾ令處分云々、

右春宮坊啓式、奉ㇾ令後、注ㇾ啓官位姓、

〔有職問答一〕一春宮坊東宮此兩樣事

是に傅大夫二ッ候、上古以來ことなる差別候はず候、東宮職には傅を出し、坊には大夫を出候事にては候へども、何も一にて候、但坊中の事は、一向大夫執權にて候、傅は太子に物をしへ候役にて候、又其行狀について、意見を申職にて候由被ㇾ仰出ㇾ候、其分候哉、

（傅學士ハ東ノ字ヲ用、唐土ニハ、東宮春宮ト分也、或云、傅學士ハ太子御身ノ上計ノ教ヲ司、御成長ノ後ニハ不ㇾ專ㇾ用、且又不ㇾ預ㇾ坊中庶務、其餘ノ坊官ハ、太子御一人ノ御身ニハ不ㇾ預、故ニ後此文字ヲカヘテ、ソノ職事ヲ別ツト也、）

〔有職問答四〕一東宮傅と申候は、東宮官のかみにて候哉、かしづきとよむと（勿論候）申說候、官の時はふとよみ申候哉、（此分候）又役は何事を勤候哉、（東宮ニ何事ヲモ教奉ル官也、太子ノ大傅トテ、異國ニモ尤重クスル官也、我朝又賞翫之職也、）

〔日本紀略醍醐〕延長八年二月十七日、皇太子於ㇾ凝華舍、初讀ㇾ御註孝經、於ㇾ學士藤原朝臣元方、

〔延喜式四十五左右近衞〕凡東宮入朝、學士亮進幷藏人各一人、主藏佑已上一人、帶刀舍人六人、聽ㇾ侍ㇾ陣邊、

〔官職秘抄下〕東宮職

補任

傅　大臣任ㇾ之、或有ㇾ大納言、（○緒嗣、信、氏宗、能有、兼明、道綱、○道綱一本作ㇾ道緒、下同、）有ㇾ中納言例、（能有、道明、）自ㇾ大夫ㇾ轉任例、（道綱、）　學士

儒者中撰ㇾ人任ㇾ之、三度任例、（匡房、）二度任例、（實政、）

春宮坊　大夫　大納言任ㇾ之、中納言任例、（二條前太政大臣、）參議任例、（安仁、貞相、年名、仲平、邦基、延光、）權大夫轉例、（始自ㇾ公季、）諸

東宮諸署、悉隷二傅、後以保傅位尊、不宜親務、武帝咸寧初、用黃門侍郎楊珧爲詹事、掌東宮之任、珧遷爲少傅復省、惠帝元康中、復置、永康中、齊王冏輔政復省、太安中、復置、懷帝又省、江左復置、(中略)後魏太子詹事、置左右二人、其後唯置一人、初第二品下、太和末、降爲第三品、北齊品同魏氏、總東宮內外衆務、(○務原脫、據隋書補、)事無大小皆統之、領家令率更僕三寺左右衞二坊、後周置太子宮正宮尹、隋開皇元年、更置詹事、二年罷之、皇朝復置、龍朔二年、改爲端尹、咸亨元年復舊、天授中、改爲宮尹、神龍元年復舊、

少詹事一人正四品上

皇朝置、龍朔二年、改爲少尹、咸亨元年復舊、天授中、復爲少尹、神龍元年復舊、

太子詹事之職、統東宮三寺十率府之政令、擧其綱紀、而修其職務、少詹事爲之貳、

〔續日本紀十六聖武〕天平十八年九月己巳、正五位上石川朝臣年足爲春宮(○[illegible])員外亮、

〔令義解七公式〕皇太子令旨式(三后亦准此式)

令旨云々

年　月　日

大夫位姓名

亮位姓名

奉令旨如右、令到奉行、

右受令人、宣送春宮坊、春宮坊覆啓訖、留畫日爲案、(謂准勅旨式、亦無印署也、)更寫一通、施行、(謂或送太政官、或下被管諸司、)

啓式(三后亦准此式)

春宮坊啓

某事云々謹啓

〔唐六典太子三師三少二十六〕太子太師一人、太傅一人、太保一人、並從一品下、〇下字恐衍
禮記曰、三王之教太子、入則有保、出則有師、史記秦孝公使商鞅設法、而黥太子師傅、則秦有其職也、漢氏唯置太傅、秩二千石、屬官有太子門大夫庶子洗馬舍人、至後漢太子太傅秩中二千石、掌輔導太子、禮如師、不領官屬、至魏太子太傅爲第三品、漢魏故事、皇太子於二傅執弟子禮、皆爲書不曰令、太傅於太子不稱臣、晉初東宮不置詹事、事由二傅、少傅立草、太傅書異、以爲儲副體尊、遂命諸公居之、而本司位重、或行、或領也、咸寧中、備六傅之職、朗陵公何劭爲太子太師、避景帝諱、改爲師、安豐侯王戎爲太傅、武陵侯楊濟爲太保、其後或置或省、懷帝爲太弟、又備六傅、東晉明帝在儲宮置保傅之位、而無二師、〇中略宋齊梁並不置、後魏北齊置之、正第二品、號東宮三太、後周不置、隋氏置之、正第三品、皇朝因之、而加其秩、太子出則乘輅備儀、
太子三師、以道德輔教太子者也、至於動靜起居言語視聽、皆有以師焉、
太子少師一人、少傅一人、少保一人、並正二品、〇中略
太子三少、掌奉皇太子以觀三師之道德而教諭焉、凡三師三少、官不必備、唯其人、無其人則闕之、
太子賓客四人、正三品、
漢書高祖欲廢太子、呂氏用張良計、致商山四皓以爲賓客、又孝武帝爲太子、立博望苑使通賓客、則其義也、若有宴賜、諸司長官、太子賓客、則皆預焉、
太子賓客、掌侍從規諫、贊相禮儀、而先後焉、
〔唐六典詹事府二十六〕太子詹事府、詹事一人、正三品、
漢書百官表、詹事秦官、掌皇后皇太子家、秩二千石、應劭曰、詹省也、給也、言給事太子、漢東宮屬官、太子門大夫庶子洗馬舍人爲三傅、率更家令丞僕中盾衛率廚厩長丞屬詹事、成帝省詹事、後漢因之、其太子官悉屬少傅、而太傅不領官屬、魏復置詹事、品第三、掌東宮内外衆務、晉初不置詹事、

大夫一人、掌吐納啓令、宮人名帳、考敍、謂坊内諸司、及宮人考敍、其宮人考敍者、坊司按定、更送中務省也、宿直事、亮一人、大進一人、少進二人、大屬一人、少屬二人、使部卅人、直丁三人、

〔令集解 六東宮職員〕古記云、大夫通傳啓春坊政申太子、謂之啓也、他人啓事、兼爲通傳耳、通傳之字、或敎進止也、或請傳也、隨事狀耳、以東宮政事申天皇、謂之奏也、以奏畫應綠納言也、即請返命啓耳、但東宮耳、奏天皇事者、自親對奉耳、〇中略 跡云、宮人、謂此女孺等也、穴云、宮人名帳亦在中務省、其令人等名帳、在三監六署皆是也、〇中略 釋云、宮人名帳考敍、謂東宮之宮人考敍、坊按定送中務敍耳、其考敍者、兼坊内諸司及宮人考敍耳、穴云、考敍、謂宮人考也、考敍猶考也、言合敍之人、亦勘定故耳、其別之考敍、別有文、故司別不別顯也、朱云、考敍宿直、謂宮人幷管諸司之考敍宿直者未知、敍之字意何、答依勘定考第敍位、故加敍字耳、此司不有敍者、問大夫考可誰定、答注上日行事、申送式部省、跡云、宮人、謂女孺等考、坊定申送中務、此女孺名帳、亦在中務也、考敍、謂考言得考、敍位故云敍耳、古記云、考選坊内諸司、考選按定送式部、不得直申太政官、但學士考傅合定、傅大夫等第不定申送耳、傅以下皆約坊文載耳、

〔令義解 一官位〕正四位上 皇太子傅　從四位下 春宮大夫　從五位下 春宮亮　皇太子學士

從六位上 春宮大進　春宮少進　正八位下 正八位下 春宮大屬　從八位上 春宮少屬

〔拾芥抄 中本官位唐名〕東宮傅 太師 太保 唐太子三師　皇太子傅 太子大師　太師正小輔 太子太傅　太師小輔 太子太保各一人 太子大博士

學士 小師崇文館 小傅大學士 小保令號 太子文學 太子賓客 文館大學士

春宮大夫 春宮坊詹事府 太子小尹宮尹 太子小輔 太子小尹 詹事正 穴尹 端尹　亮 小詹事 太子洗馬 詹事小簿　進 詹事正 太子詹事　屬 詹事 錄事

主簿 詹事主簿 太子錄事

〔本朝文粹 八序〕夏日陪員外端尹文亭同賦泉傳萬歲之聲應敎　江以言

〇中略 員外端尹、〇藤原賴通 以左相府〇道長 之家督、定居東閤、引梓材於群英之中、學步北闕、期槐路於累葉之下、

職員 職掌

〔文德實錄 一〕嘉祥三年四月庚午、前春宮職印一枚、獻于內裏、

○按ズルニ、前春宮ハ、文德天皇ナリ、御卽位ノ後ヨリ稱シタルナリ、

〔日本紀略 醍醐〕延喜四年二月廿九日、今日鑄東宮坊印、

〔本朝世紀〕康和五年八月廿七日甲戌、亥刻春宮大屬紀盛定以下參局請取坊御印、件御印、去康和三年二月、自修理職、進納本局、無印盤、屬盛定內々所造送也、不具有憚之故歟、

〔爲房卿記〕康和五年八月廿七日甲戌、戌刻、東宮〇鳥羽行啓高松殿、其後令請坊印、有廳始事、〇中略

請文書樣依先例任長曆例所注進之

春宮坊

　請印一面

右所請如件

　康和五年八月廿七日　　左大史正六位兼行大屬紀盛定

〔令義解 一〕東宮職員令第四 謂太子之所居也

傅一人、掌以道德輔導東宮、

學士二人、掌執經奉說、

〔令集解 六東宮職員〕穴云、考第依令釋爲非屬官、又官位五位以上故也、跡云、傅學士考、注上日功過送式部、但上日坊官日々注置耳、〇中略穴云、道德者、未知與師範儀刑、何有優劣哉、答傅是以道德師範東宮也、然則遂任太政大臣無妨、但上文云、無其人則闕、此文不立其事、然知少有優劣、無止任用耳、

○按ズルニ、傅學士ガ東宮ノ職員ニシテ、春宮坊ノ上ニ在ルハ、猶ホ唐六典ニ、太子三師、三少、賓客ノ、詹事府ノ上ニアルガ如シ、師傅ヲ重ンズルナリ、

〔令義解 一東宮職員〕春宮坊 管監三、署六、

坊印

天德四年九月十一日、御記云、依物忌不御八省、藏人雅材申云、東宮廳有犬死穢、而彼所人入交內裏云々、

〔三代實錄二十三清和〕貞觀十五年二月廿六日辛酉、夜春宮廳院失火、燒一屋、　廿九日甲子、大祓於建禮門前、緣春宮廳院火也、

〔三代實錄十清和〕貞觀七年二月十四日丙寅、請六十僧東宮內殿、限以五日、轉讀大般若經、

〔延喜式四十三春宮〕凡六月一日、十二月一日亦同、內藏寮允屬各一人、納御櫛卅枚於櫛筥、居高案而舁之、入自西門、立於前庭退出、主殿署官人一人率舍人三人、自東細殿南參入、舁案退出、御櫛收藏人所、案返寮、

〔東宮年中行事四月〕一日改御裝束事
所々のてんしやうに、ゐぎだんぎのはむををく、ちかるを春宮の殿上には、彈棊の盤ををかざるなり、

〔拾芥抄中末宮城〕諸院
雅院或御曹司、倍東、宮城內、東前坊、中御門北、匣東、保明、慶頼、御此所、西前坊、中御門北、匣西、

〔文德實錄一〕嘉祥三年三月己亥、仁明皇帝崩於清涼殿、于時皇太子下殿御宜陽殿東庭倚廬、左右大臣率諸卿及少納言左右近衞少將等、獻天子神璽寶劍符節鈴印等、須臾鸞輦車、移御東宮雅院、陣列之儀、一同行幸、但無警蹕、

〔三代實錄三清和〕貞觀元年六月廿三日丁未、是日於東宮雅院始修法、限以十二日、

〔三代實錄七清和〕貞觀五年五月廿二日甲申、天皇御雅院、召見神泉苑御靈會舞童、雅樂寮奏音樂、

〔扶桑略記二十宇多〕寬平二年二月十三日己巳、大臣藤原基經參入言曰、可加小童仲平元服、○中略卽儲座於雅院、爲會飮之處、雅院者、是息所之曹也、

〔續日本紀八元正〕養老三年十二月乙酉、充式部、民部、○中略春宮印各一面、

領腺連等アリ、主膳監ハ、東宮進食ノ時先ヅ嘗ミ、及ビ諸飲膳ノ事ヲ掌リ、主藏監ハ、金玉寶器、錦綵雜綵、及ビ衣服ヲ裁縫シ、翫好ノ物ヲ掌リ、主殿署ハ、湯沐燈燭、灑掃鋪設ヲ掌リ、主書署ハ、書藥筆硏等ヲ供進スルコトヲ掌リ、主漿署ハ饘粥水、及ビ菓子ヲ掌リ、主工署ハ、土木ノ構作、及ビ銅鐵雜作ノ事ヲ掌リ、主兵署ハ、兵器儀仗ノ脇ヲ掌リ、主馬署ハ、乘馬鞍馬等ヲ供進スルヲ掌ル、

名稱

〔倭名類聚抄 五官名〕坊 職員令云、春宮坊、美古乃美夜乃豆加佐

〔朝野群載 六太政官〕諸司訓詞
春宮坊

〔令集解 六東宮職員〕穴云、以東換春、更無異儀也、朱云、春宮坊、謂東宮之內政事所行也、假令如太政官也、古記云、問東宮春宮、其別若爲、答東宮職員之內、官之名春宮坊云耳、

〔官職難儀〕春宮とは、いかゞしたる時申候や、○中略東宮春宮同事なり、さりながらその下司の官につきて差別あり、傅皇太子傅、又は東宮傅と云、學士東宮學士、太子御師範也、紀傳の儒者これになる、此二は必東字を用也、大夫亮進以下は皆春宮の官なり、仍春字を用る、春宮坊と云故に坊官と申也、傅學士、春宮坊のうちにてなければども、春宮の官たるゆへに、おなじく坊官と申也、

廳舍

〔日本後紀 八桓武〕延暦十八年六月庚子、屈僧三百人、沙彌五十人於禁中及東宮朝堂、讀大般若經、

〔延喜式 四十三春宮〕凡二月上申、十一月亦同奉春日祭幣帛、○中略使者更集於坊廳前庭、宮主捧麻解除、訖還前廳、主馬署官人令牽御馬二疋、與使共參於社下、
凡同月四月○中酉、奉賀茂下上松尾三社幣帛、○中略使官更集於坊廳前庭、

〔西宮記 九月〕十一日奉幣

古事類苑

官位部十九

令制官職十五

春宮坊 舍人監 主膳監 主藏監 主殿署 主書署 主漿署 主工署 主兵署 主馬署 併入

春宮坊ハ、皇太子ニ奉事スル官ニシテ、常置官ニアラズ、此司特ニ坊ヲ以テ名トスルハ、唐ノ左右春坊ニ倣フナリ、後世多ク東宮職ト春宮坊トニ區別シ、傅學士ヲ職ニ隷シ、大夫以下ヲ坊ニ屬シタリ、傅ハ道德ヲ以テ東宮ヲ補導スルヲ掌リ、學士ハ經ヲ執リテ奉說スルヲ掌ル、卽チ師傅ノ任ナリ、大夫以下ハ事務ニ從フモノニシテ、大夫ハ啓令卽チ皇太子ノ命令ヲ吐納シ、春宮ノ諸司及ビ宮人ヲ掌ル、亮以下ハ都テ諸省ノ例ノ如シ、春宮ノ官僚ハ、日本書紀持統天皇十一年二月紀ニ、直廣壹當麻眞人國見ヲ東宮大傅ト爲シ、直廣參路眞人跡見ヲ春宮大夫ト爲シ、直大肆巨勢朝臣粟持ヲ亮ト爲スノ文アルヲ以テ始見トス、後世藏人、非藏人等ノ職員アリテ、坊中ノ雜務ニ從ヘリ、

春宮坊ノ被官ニ、舍人、主膳、主藏ノ三監、主殿、主書、主漿、主工、主兵、主馬ノ六署アリ、平城天皇ノ大同二年八月ニ、主書、主兵ノ二署ヲ主藏監ニ併セ、主漿署ヲ主膳監ニ併セタリ、延喜以後舍人、主藏ノ二監、及ビ主工署ハ停廢ニ歸シタリ、舍人監ハ、東宮舍人ノ事ヲ掌ル、舍人ハ蔭子孫、及ビ位子ノ儀容端正ニシテ、書算ニ工ナル者ヲ以テ之ニ充ツ、舍人ノ内ニ帶刀スル者ヲ、帶刀舍人ト云ヒ、又單ニ帶刀トモ云ヘリ、光仁天皇ノ寶龜七年ニ、始メテ十人ヲ置キ、其後累加シテ三十人ト爲ス、長二人アリ、是ヲ先生(センジヤウ)ト云フ、源平ノ武士ヲ以テ之ニ任ズ、先生ノ次ニ部(コ)

官位部三十九

鎌倉職員四

官位部三十六

鎌倉職員一

官位部三十七

鎌倉職員二

官位部三十一

令制官職二十七

國郡檢非違使

官位部二十八

令制官職二十四

官位部二十二

令制官職十八

官位部二十三

官位部二十一

令制官職十七

古事類苑

官位部第二冊目錄

官位部十九

令制官職十五

官位部二十

令制官職十六

神宮司廳藏版

官位部二

古事類苑

古事類苑刊行會